いつか見た夢

B&B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつか見た夢

【Ｎコード】
Ｎ０９１０Ｈ

【作者名】
Ｂ＆ａｍｐ；Ｂ

【あらすじ】
ある日、突然妹が失踪した。その妹のため、兄は裏の世界の住人になることを決意する。謀略と暴力が渦巻く世界に巻き込まれていった兄妹の姿を描いたアクション。ことの発端は、妹の友人にまつわるストーカー事件だった。
※また、過去にあげた回は順次、見やすくしていっています。

プロローグ

大分暖かくなってきたとはいえ、まだ薄着には早い春の日だった。

桜の花が咲き始め、街を彩るようになってきたある春の日――妹が失踪した。

元々俺たち兄妹は、仲が良かった。特に妹はかなり重度のブラコンで、中学に上がる頃には親や周りが心配するくらいだった。どこに行くのでも、何をするにしても、開口一番に「お兄ちゃん」だったからだ。

かくいう俺も、シスコンとまではいかないまでも妹のことは好きだった。やはりお兄ちゃん、お兄ちゃんと懐かれるのは、決して嫌なものではなかったし、年頃になると、よく兄妹喧嘩するような連中には不思議がられたり、羨ましがられていたからかもしれない。

……結局は自分が思っていないだけで、シスコンとは思われていたのかも知れないが。

それでも年頃になれば正常な一男子として……まぁ、いたすことがあったわけで、そういう時は、確かに欝陶しさを感じなくもなかった。

また、家族間の仲も良く、例えそれが些細な事であっても互いが互いを支え合うのは、当たり前の事だった。

そんな俺の妹は、いつだってこの家族の中心であった。　とても可愛らしい顔立ちをしていて、ちょっとしたお嬢様といった雰囲気

があった。成績優秀、運動は可もなく不可もなくと言ったところだ。そうなれば、ブラコンであれ『まぁそのうちは…』となるのが人情のようだった。

それとこれは俺達家族だけが気付いているちょっとした自慢だが、妹は声がとても綺麗だった。透き通るような声でそれでいて、はっきりとした力強く凛としたものを感じさせる。若い娘には珍しい無理なく低音が響く、所謂美声の持ち主であった。その辺りまでは、見知った人でもあまり気にしていなかったであろう。

だが、俺にはこの声こそがこの妹の最大の魅力だと思っていた。なぜなら妹は歌うことが好きで、いつも家事の手伝いをしている時、部屋で音楽を聞いている時や、風呂に入っている時、気分が良い日の朝なんかにその美声を響かせてくれていたからだ。

また、人懐っこい明るい性格であったため近所でも評判で、学校でもやはり話題の中心であったし、親戚一同が集まったときなんかも、やはり必ず妹の話題が出たものだ。

よく二人で街に繰り出した時も、ふと目を離した隙に、ナンパ野郎から声をかけられたり、時には妹の前に群がっていたりするのは日常茶飯事だったのを思い出す。それでいて少し泣き虫で、虫一匹だって殺すこともできない心優しい少女だった。

そんな妹に、俺はほんの少しのやっかみはあったが、どこに出しても自慢の妹だった。そう、自慢の妹だったのだ。

タタタタタタッ

銃の連射音。黒い服を着た男達が、怒声をあげながら銃を撃ってくる。連中のターゲットは俺だ。

それもそのはずで、連中のボスを俺が殺ったからだった。ふん、

全くご苦労なことだ。お前達も、もうすぐにあの世に行くというのに。

俺は森の中に向かって、この日のために準備されていた逃走経路を走り始めた。

後三十秒か……なんとかギリギリで間に合ったな。程なくして、仲間達からの攻撃により、ここにミサイルが飛んでくる事になっているのだ。

「良し。予定通りだ」

後ろは断崖絶壁で下には海。海面までは二十……いや、もしかしたら三十メートルはあるだろうか。いくら訓練してきたとは言え、いざ本番、ましてや夜の海にダイブするのだ。怖くないといえば嘘だ。

それでも、怖じけづいている暇はない。　建物から出てきた黒服の連中が俺を見つけ、再びこちらに銃を撃ってくる。だがもう遅い。味方からのミサイル攻撃が建物を破壊するのだ。

俺は一呼吸おいて海へダイブした。身を投げたその上を、ミサイルが飛んでいき、あたりに轟音が響いた。

「相変わらず、いい手際だったな。時間ぴったりだ」

仲間の一人である男がそう話しかけてきた。

「そうでもないさ。かなりギリギリだったぜ。後ほんの少し遅けりゃあの世行きだった」

「そういいつつ、いつも完璧な仕事をこなしてるんだもんな。すごいぜ、あんたは」

そう言われて、俺は肩をすくめた。

「ま、あんたらのバックアップもあったからできた芸当だ。たいしたことじゃないと思うがな」

「クックッ…あんた、本当に変わりモンだな。そんな風に謙遜する

プロは初めてだ」
「そうか？」
「ああ。俺は職業柄、今まで何人と言わずチームを組んできたが、他の連中ときたら、『黙って運転しろ』と言うか、もしくは、何も喋らないかのどっちかと相場は決まっていたからな。
それか、俺ならできて当たり前、お前に言われるまでもないみたいな態度かだ」
俺はうつむきながら、思わず口元をニヤリと歪ませた。
「ま、どうであろうといいさ。現場の最前線はうまくいったんだ。後は他の連中がうまくやるさ。
さて、悪いがちょいと運転手と話したいことがあるから席を外させてもらうぜ」
「なんだ、あんた、もうあの女に目を付けてたのかい？」
その問いに、再び肩をすくめるだけだった。
俺達は今、船の中にいる。作業船というやつだ。俺は狭い船内を身を細めながら、操舵室へと向かう。
「よぉ、運転には気をつけてくれよ」
操舵室に着くや、意地悪げにこの船の運転手に話し掛ける。
「あら、あなたが船を動かすことに比べれば、大船に乗った気持ちでいても良いと思うけど？」
こっちを見ることなく、女が呆れた風に答える。
「そいつは間違いないな」
クックッと肩で笑いながら、俺も返すが、この女の言っていることは本当だ。以前、作戦中に船を操縦した事があったが、ものの見事に横転してしまったのだ。ただ、あの時は今日のような穏やかな日ではなく、荒れ狂う嵐の日であったが。
その際、その船に同乗していたのがこの女――藤原真紀（ふじわらまき）だった。
こんな陰謀と暴力の渦巻く世界で、その名が必ずしも本名であるとは限らないが、そう名乗るなら、そうなんだろう。
それにしてもあの時は良く助かったものだと思う。なんせ夜の海

に、しかも嵐の中二人して仲良く投げ出されたのだ。今二人で、こうしていることが奇跡のようなものかもしれない、そう思った。

けれど、そう思った瞬間――あの時の、決して忘れてはいけない記憶が、まるで自己主張するかのように、唐突に、記憶の引き出しから鮮明に蘇ってきたのだ。海に投げ出されるなんてことよりも、はるかに大切なことが。

「いや、そうでもないか……」

そうだ。あの時のことに比べれば、そんな事は奇跡でもなんでもない。そうさ、あの時のことに比べれば。

「何？　どうしたの？」

「いや……」

その言葉の後に、なんでもないと言おうとして、言葉を飲み込む。

「……なぁ。　もし、もう二度と会えないかもしれないと思ってた奴に出会ったらどうする？」

「いきなりね。何よ、唐突に」

今まで前を向いていた真紀が、振り向き、俺を見据えた。余程らしくなかったのだろう、女は小さなため息をついて、なかば呆れ気味に口を開いた。

「そうね……その時になってみないと分からないけど、相手によると思うわね。殺したいほど憎い奴なら殺すだろうし……そうじゃない人なら喜ぶんじゃないの？　やっぱり」

少し間をおきながら真紀が応える。この女は徹底したリアリストで、こう言った『もし』だとか『だったら』といった話が嫌いだ。

そんな真紀がこうして答えてくれたことに、少しの驚きと感謝と虚しさが込み上げてきた。

「それにしても、あなたがそんなこと言うなんて珍しいじゃない」

「……何、なんとなく、な」

「なんとなくでそんな話に付き合わせないで」

「くっくっ……悪かった」

やはりこうなったかと、意地悪げに笑いながら謝った。
「しかしあんた、本当に話がいのない女だよな」
少しおどけた口調で喋りながら、真紀の方へ歩み寄る。真紀に密着するくらいの距離まで近づくと、両腕を真紀の背中に回した。そのまま左手を下の方へ動かしていき、そのムッチリとした尻を掴む。
「話がいのない女なのに、こんなことするわけ？」
「それとこれは別問題だろう？」
「あなた……最低だわ」
「そんなの今更気付いたわけでもないだろう？　頭のいい君ならな」
ニヤリと笑って、悪態をつく真紀の唇に口付けた。
本来ならば、このまま突入するところだが真紀が船を操縦しているので、キスだけに留めておいた。
「そろそろ上陸ポイントが近いわ。降りる準備をしておいて」
「名残惜しいところだが……仕方ないか。分かったよ」
「何言ってるの。大体私とあなたは、もうとっくに終わったはずの関係でしょう？」
例えそうであっても、チャンスがあれば手を出してしまいたくなるのが男だ、とは言わないでおいた。操舵室を出て船室に戻り、そろそろ準備しろとさ、とだけ仲間達に告げた。
それにしても今回はあまりにあっけなかった。せいぜい飛び込みの訓練をひたすらにしたことがちょいとばかし、疲れたくらいだ。
はっきり言って、作戦よりも飛び込みの訓練の方が何倍もかかったし、疲れたくらいだ。
護衛の連中も、俺から言わせてもらえば三流もいいとこだった。

最初にやった奴の服を着込んで、グラサンをかけただけで、もう仲間だと思ってやがったんだからな。どうしようもなく、間抜けな奴らだった。

あんなのが日本、果ては世界でも有数の組織の幹部を守ってるだなんて、片腹痛い話だ、全く。

薄暗い部屋に戻った俺は、昨日の作戦のことを思い出しながら、一人酒を飲んでいた。目の前には、何部かの新聞が広がっている。

昨日のことが載っているかどうかを、確認するためだ。もしかしたら、俺は自分が思っている以上に神経質なのかもしれない。

とりあえずざっと見てみたが、それらしい記事は載っていなかった。新聞を見るのは、自分の仕事の不備があったかどうかを見るのには必要なことだ。場合によっては、そこから新しい情報があったりすることもあるかもしれないのだ。

自分が関わったことだけに、その記事の扱いが小さければ小さいほど良く、最良は記事にすらなっていないことが望ましい。

載っていても、それは情報がうまいこと隠蔽されているわけだが、今回はそんな記事すらなかった。

もちろんインターネットを使って、それらしい記事があるかを探すのも忘れてはいけない。そして当然インターネットにも、そのようなページは一切見つけられなかった。

と、そこでさすがに睡魔が俺を襲い始めたのか、どっと疲労感がでてきたようだった。眠りにつく前に、汗だけでも流そうと思い立って、シャワーを浴びることにした。

俺は、グラスに注がれていた綺麗な琥珀色をしたスコッチを、一気に喉へと流し込んだ。喉を突き抜けていく様な熱い刺激が、なんとも心地良い。

シャワーをわずか数分で浴び終えた俺は、先程のスコッチを手に取り、グラスにも注がずに、そのまま口に持って行き直接飲んだ。所謂ラッパ飲みというやつだ。再び俺の体内を、熱いアルコールがかけ巡る。

そのまま、まるで倒れ込むようにして、俺はベッドに入った。意識の失う前に、ベッド脇の小さなテーブルからペンの挟まった手帳を取る。ペンで栞されたページを開き、そこに書かれた名前に、バツ印をつけた。その名前は昨日、俺があの世に送ってやった野郎の名だ。

「残り一人……後一人で終わるよ、沙弥佳……」

その言葉を最後に、俺は意識を手放した。

プロローグ（後書き）

以前、別の場所で書いていた作品ですが、思っている以上に長くなってしまい、途中放棄したものを加筆修正したものです。ここで連載したいと思います。

第1章（前書き）

これより、しばらく過去の話です。

第1章

ふわふわとした、なんとも言えない心地良い感覚。
いつまでも味わっていたい感覚だった。

『……』

……？　なんだろうか。

『……！』

そうか、音だ。音が聞こえる。
だけども、この響きはどこかすごく懐かしく、なんとも言えない切なさを感じさせた。

『…お……ゃん！』

違う。声だ。
その音は、誰かが俺を呼ぶ声だ。
その時俺は、今自分が夢の中にいるのだとなぜか漠然と理解した。
『…お兄ちゃん！』

はっきりとその声が俺の意識の世界に響いた。
俺のことを兄と呼ぶのは、誰か。
まだぼんやりとした意識の中で、俺は記憶の断片から、声の主を引き出す。
そうだ。俺のことを兄と呼ぶのは、この世界でただ一人だ。
それを理解した俺は、爆発したかのように溢れ出した光の奔流に、飲み込まれていった。

「起きて！　起きてよ、お兄ちゃん！」
妹が寝ている体を激しく揺すっている。
「んん……あぁ……すまんが、揺するのやめてくんねぇか？」
「お兄ちゃん！」
俺が起きるやいなや、今度は思いきり抱き着いてきた。
「って、おいおい……朝から勘弁しろよ……」
「え～だってぇ……ん……お兄ちゃんの匂いだぁ」
「全く……ちったぁ兄離れしろよな」
「いや～。んん～……お兄ちゃん」
そういうと俺の胸にさらに自身の顔をこすりつけてきた。
誰もが当たり前に存在する日常。これが俺の日常であり、当たり前の一日の始まりだ。
ならば、次に放つ俺の言葉もまた当たり前になった日常だ。
「おい、さっさと離れやがれ」
「あ……」
まだ寝ぼけ気味に、語気を強めながら強引に妹を引き離す。
するとこいつは、その可愛らしい顔を、歪ませる。まるで、恋人に拒絶されたかのような顔をするのだ。
いつからこんな顔をするようになったかは覚えていないが、えらくこっちが戸惑ったのは覚えている。
「んな顔すんなっていつも言ってるだろ？　さっさと着替えたいんだよ」
毎度思うが、まさか演技なんじゃないかと思ってしまう。　大体、兄である俺にちょいとばかし語気を強められたくらいで、そんな顔をする方がおかしいというものだ。

「ほら、早く出てくれ」
しかし毎朝のことなので、今となってはあまり気にせず、苦笑しながら言う。
「うん……」
妹はさっきまでの歪ませた顔を、今度はしゅんとさせうつむく。
「お兄ちゃん」
「ん？」
今度は、再び可愛さいっぱいの笑顔で、
「おはよう」
朝の挨拶をしてきた。
「ああ、おはよう」
俺が挨拶を返すと、満足げに部屋を出ていった。
これが、俺が部屋を出るまでの日常。これまでずっと続いてきた、代わり映えすることなく続いてきた、儀式のようなものだ。

制服に着替えた俺は、1階のリビングへ降りていく。リビングに降りたところで、母親が出迎えてくれる。
「あら、おはよう。今日はいつもより早いのね」
「ん、おはよう」
時計を見ると、まだ7時を少し過ぎたところだった。いつもなら、7時半を回る前に起きてくるから、確かにいつもより早い。
「まぁ……たまには、早起きもいいかなぁとね」
「ふふっ、というよりも、沙弥佳に早く起こされたから早くなっただけだろ？」
父が笑いながら、コーヒーをすすった。
「く……まぁそうだけどさ」
「何、お兄ちゃん。言っとくけど私が起こさなかったら、いつも遅刻だよ？」
そんなことはない、と言おうとしてやめた。確かにこいつのおかげで、今まで無遅刻でいられているのは、事実だからだ。

「ま、一応感謝しておいてやる」
「お兄ちゃん可愛くな～い」
やかましい！

そんなやりとりをしながら、顔を洗い、テーブルについた。
「「いただきます」」
うむ、今日の飯もうまいな。
「ん？　どうした？」
隣に座っている妹が、俺の顔をやや上目使いに覗き込む。
「あのさ……今日のおかずの味、どうかな？」
「おぉ、いつも通りにうまいぞ。こんな美味いもん食える俺は幸せもんだ」
すると妹は、とたんに顔を赤らめながら、そっか良かった、とだけ言った。
だが妹よ。いつものこととは言え、兄相手にそんな風に顔を赤らめるなよ。
その様子を見て、両親は微笑んだ。
ちなみに、うちは父が元々和食派ということもあり、朝食はよほどのことがない限り、和食である。朝からきちんと魚の塩焼きと、恐らくは昨晩、妹が作っていたと思われる煮物がおかずだ。
これが九鬼（くき）家の朝である。

「ごちそうさま」
「お粗末さま～♪」
俺は、歯を磨きに洗面所に行く。
「あ。そうそう、新しい歯ブラシってもうなかったっけ？」
「何？　もうダメにしちゃったの？」
「なんかすぐダメになっちまうんだよ」
「あんた少し強く磨きすぎなんじゃない？」
「んー……そうなんかな。そういうつもりはないんだが」

母とそんな会話をしていると、妹がやけにそわそわとしているのが目に映った。俺の目には、明らかに挙動不審な態度だった。
「お、後一本あった」
洗面台を探してみたところ、新しい歯ブラシを見つけたので、古い方は捨てることにする。
「あ…！　ダメ！」
突然妹が声を張り上げた。綺麗な声で、発音が淀みないためすごく迫力があった。思いがけず両親も驚いた顔をしている。
「あ？　なんでだ妹よ」
「え？　あ……え、えっと……その……えとね……そ、そう！　その歯ブラシ私のなの！」
「そうなのか？　いや、まとめて買ってあるんだから別に誰のとかってな――」
「私のなの！」
先程よりも、少し顔が別の意味で赤らめさせた妹は、それだけで可愛いなどと思った俺は、身内贔屓しすぎだろうか。
（それにしても、今日はやけに言い張ってくるな）
「はぁ……分かった分かった。そんじゃぁ今日まで古いやつ使う。それでいいだろ」
「ぁ……うん……。……ごめんなさい」
「謝るんなら最初から言うなって。また別の新しいのに代えればいいんだしな。というわけで母さん、新しい歯ブラシ買ってきてもらうと助かる」
「はいはい。今日ちょうど病院の日だから、ついでに買ってくるわ。他にも何か欲しいのある？」
俺は首を横に振った。
母である九鬼遥子（くきようこ）は、いつも気丈にしているが昔から体が弱く、どこの器官が弱いのか詳しくは知らないが、月に1度医者にかかっている。
「さて、私もそろそろ出勤するとするか」

７時４０分を過ぎた頃、父・真太朗（しんたろう）が出勤の準備を始めた。とは言っても持っていく物の確認くらいなものだが。
「はいあなた、お弁当」
「おお、いつもすまんな」
「今日のメインは私が作ったんだよ～。楽しみにしててね、お父さん」
「そうか、楽しみだな。……では、いってくるよ。それと今晩は遅くなるから先に寝てなさい」
「分かったわ。気をつけてね」
「いってらっしゃ～い」
母と妹は、そうやって毎朝父を玄関でお見送りしている。歯を磨き終えた俺は、そんな家族のやりとりを見ながら、仲の良い家族だとしみじみ思った。

玄関で靴紐を結び終えたところで、妹に声をかける。
「おーい。もう行くぞー」
「はーい。ちょっと待っててー」
「早くしろよ」
ったく。いつも俺よりも早く起きているくせに、どうして俺より遅くなるかね。ま、その辺は女の事情ってやつなんかねぇ。
「ごめん、お待たせっ」
２階から勢いよく、駆け降りてきた。……見えるぞ。
「うしっ。んじゃま今日も学生しに行きますか」
「いきましょ～」
「「いってきま～す」」
ハモる。言っておくが、別に合わしたくて合わしているわけではない。毎朝思うことだが、こいつ、わざわざ俺のタイミングに合わせてるんじゃないか、と勘繰ってしまう。

九鬼沙弥佳（くきさやか）――俺の2歳年下で、現在中学3年生。容姿端麗、成績優秀、性格良しの三拍子揃っている。
趣味は、料理と適度な運動、歌を唄うことと読書。
特技は、英語他、外国語の習得、ピアノと美術鑑賞と家事。
好きなもの、お兄ちゃん……。

嫌いなもの、お兄ちゃんを傷つける人と泥棒猫。……泥棒猫？
おかしいことになんだかデジャブがする……。
そんな妹と二人揃って登校する。俺の腕に抱き着き歩くのにも、もはや慣れてしまった。これが恋人ってんなら、なんとも嬉しいところなんだが……。
「なぁ」
「んー？」
「お前さ、高校どこ受けるんだ？」
なかば予想はできるが聞いてみる。
「もちろんお兄ちゃんと同じ金城高校だよー♪」
「……やっぱりそうか……」
「何よお兄ちゃん、私が同じ高校行くの嫌なの？」
こいつは、俺が少しでも否定的だったり曖昧な態度をとると、途端に不機嫌そうになる。事実、喋り方がいつもののんびりした話し方でなくなり、鋭い喋り方になっている。抱き着いた俺の腕に力が込められ、少し痛い。
「おい、手が痛いぞ」
「だって……」
まただ。またこいつは、淋しそうな顔をするのだ。俺は小さくため息をついた。
「別に。ただ、お前なら少なくとも金城より2ランクは……もうちょい頑張れば3ランク上、狙えるだろ」
「だ、だってそんなことしたらお兄ちゃん……」

「あ？　なんだって？」
最後の方は、うまく聞き取れなかった。
「な、なんでもないよ！　とにかく私はもう金城って決めてるんだから！」
「……さいですか」
「そうよ！　それにあそこの制服ってすごく可愛いし！」
「ん、それに関しては否定しない」
そう、うちの高校の女子の制服はこの辺りじゃ、ちょっとしたブランドだったりする。しかも通っている女の子も、割と可愛い子が多かったりと、男としては最高の環境なのだ。
しかし、もしうちに通うようになったら、学校着くまでずっとこうなんだろうな……。
そう考えるとまたため息が出た。いや、沙弥佳に好かれるのは全然構わない。実際見た目は可愛いし、もしこれで妹でなければこの環境は最高だろう。
とうの妹を横目でちらりと見ると、頬を緩ませながら顔を少し赤らめさせていた。どうせ、俺と学校まで腕を組んで登校している妄想でもしてるんだろう。もしそいつが実現したら、また何かと友人連中から色々と聞かれるんだろうな。面倒臭いぜ、全く。

沙弥佳とは、小学生の頃から俺と手を繋いで登校していた。おかげで、俺も沙弥佳もガキ大将のいじめの対象だった。
だけども、俺はそのつど沙弥佳を守った。しかし、それがいけなかったのか、歳を重ねるごとに俺への依存が強くなっていったように思う。
今なら解るが、ガキどものいじめの理由は、対象への嫉妬だとか、対象が可愛いからなのだ。そして、異質と思われるようなやつ――せいぜいこれくらいだ。
それなりに整った顔をしているらしい（妹談）ので、そのやっかみもあったのかもしれない。ただ、両親は互いの良いところだけを、

妹が持っていったと言っていたが。
しかし沙弥佳は、幼稚園に入る前から可愛い容姿をしていたし、学校でも昼休みとなれば俺のクラスに来た。
俺も俺で、恥ずかしいから来るなと言っても、毎日のようにクラスに訪ねてくる沙弥佳を無下にはできなくなった。となると、兄妹でいじめられる要素が揃っているならば、ガキどものそういう対象になってしまうわけで。
ただ俺自身わりと好戦的な性格をしていたし、負けると分かっていても、絶対に逃げなかった。それに、もし逃げたりしたら、沙弥佳にそのとばっちりがいってしまうからだ。
そして物事には絶対はない。いじめる側にとって、いじめられる側が反旗を翻し、自分達の立場が代わるなど考えもしなかったんだろう。
確か俺が小5の時だ。ついに俺もキレたのだ。残念な事にあまり覚えていないが、恐れおののき、逃げ惑ういじめっ子達の背中だけは、はっきりと覚えている。
後には泣きじゃくる妹と、地に平伏しているいじめっ子達……元いじめっ子達と言った方がいいか……という有様だ。
冷静さを取り戻した沙弥佳は、これをきっかけに俺が理想のナイトになってしまったらしい。それからの沙弥佳は、それはそれはバカップルも恥じる超絶ブラコンになっていったのだ。
おかげで中学3年になった今では、周りからの好奇の目なんてなんのその、お構いなしに手を組んでくるようになった。
「ねぇ、お兄ちゃん」
「なんだ？」
「今日暇？　絶対暇だよね」
「おいおい、勝手に決めるなよ」
「なにか用事あるの？」
「……いや、ないけどな」
こいつがこんな風に聞いてきた時は、用事があろうとなかろうと

結局付き合わされるハメになる。もう経験上、分かっていることだ。

だからついつい話のこしを折ってやりたくなる。ささやかな抵抗というやつだ。

「もう！　なら最初っから話、折らないでよ。……それで、学校終わったらちょっと付き合ってほしいんだけど」

「なんだ、買い物か？　買い物なら先週行ったろ？」

「ううん、そうじゃないの。　えっと……あのね――」

今俺は一人で駅のホームにいる。

沙弥佳とは俺が使う駅まで歩き、そこで別れる。いつも駅が見えてくると、淋しそうな顔をするから周りの視線が色々と痛い。

俺は一人改札を抜け、駅のホームへ出る。だが、ここでの注意点がひとつある。それは人込みに紛れ込むこと、だ。

なぜかと言うと……チラリとホームの外をフェンスごしに見やる。視線の先に、沙弥佳が立っているのが見える。

あいつはいつも、俺が電車に乗り込むまでそこにいるのだ。もしかしたら、電車が見えなくなるまで……いるのかもしれないが……。

だが今日は不運なことに、紛れる人垣がなかったため沙弥佳に見つかってしまった。

「お兄ちゃーん！」

その美声が、大きな声で俺を呼ぶ。いつもより人が少ないとはいえ、さすがにこんな公衆の面前で振り向ける勇気は、俺にはない。

沙弥佳はそんな俺のことなど知る由もなく

「お兄ちゃーん！　どうしたのー？　ここだよー！」

先程よりも大きな声で、俺を呼びやがった。

頼む後生だ、妹よ……そこにいるのはいい！　だが大声で俺を呼

ぶな！

そんな俺の気持ちなど察することもなく、まだお兄ちゃん、　お兄ちゃんと言っている沙弥佳。

いい加減、周りも妹に応えてやれよみたいな雰囲気になってきたのが分かる。羞恥に耐えられなくなり、俺は仕方なく少しだけ後ろを振り向き、右手をあげた。

「やっと振り向いてくれたー」

言う沙弥佳の顔は、見る者を引き付けてやまない、最高の笑顔だった。

程なくして来た電車に早々と乗り込み、運よく空いていたシートに座って瞼を閉じて寝たふりをする。そうでもしないと、この羞恥に耐えられそうになかった。

俺は動き出した電車に揺すられながら、せめて直に呼ぶのではなく　携帯にかけてこいと、今日こそ言ってやらねばと心に誓った。

昼休みのチャイムが鳴り、皆一目散に食堂へ向かう。

うちの学校には週に1度、メニュー半額の日があるためだ。今日はその日で、教室には殆ど人が出払っている。　今頃食堂では、いつも以上に人がごった返していることであろう。弁当のある身には関係のない話だが。

さて、今日の弁当は、と。蓋を開けた――瞬間に閉じてしまった。

おいおい、マジかよ。もう一度開けて、中身を確かめてみる。

間違いない。弁当には見事に、そぼろでハートマークが作られ、『兄らぶ』などと書かれているではないか。

妹よ……お前はどれだけ兄を辱めれば気が済むのだ。

「よぉ九鬼ぃ。どうしたん？」

クラスメイト――斑鳩孝晶（いかるがたかあき）が声をかけてきた。こいつはクラスは

当然、学年でも一、二を争うほどのイケメン野郎で、毎月のように女からコクられている奴だ。

こいつはいつも、いてほしくない時に限って俺の前に現れる。

ちっ。なぜいつもタイミング良く……。そう、こっちのタイミングを図っているんじゃないかと思うほどに。

「い、いや、なんでもねえよ？」

さりげなく蓋を閉じる。

「本当か？　ならなんで弁当の蓋閉めたん？」

「見てたのか……お前」

「たまたまだけどな。で、どうしたん？」

「いや……なんて言うかな。ほらよ」

観念して、再度弁当の蓋を開けて見せてやった。

「うおっすっげぇなぁ、これ。『兄らぶ』って……」

斑鳩はクックックと笑う。

「すごいなんてもんじゃねぇ。……最近どんどん手が込んできてる気がすんだよ……」

「相変わらずの超絶ブラコンぶりだな」

「何をどう間違えたらあんな風になるんだか……はぁ」

「くくくく。愛されてんなぁ、お兄ちゃん！」

「やかましい！」

そしてこいつは、俺の妹を知る数少ない人間の一人だ。俺は、そぼろをかきまぜて飯に食らいついた。

一日の終了を知らせるチャイム。生徒たちは思い思いに散って行き、瞬く間に教室から人が消えていった。

俺は妹との約束の時間までしばらくの間、学校で暇をつぶすつもりだった。考えてみると、学校では必要最低限の場所にしか行ったことがないことに気が付いたためだ。

ならば、時間が許す限り校内探険と洒落込もうではないか。特に技術棟には、数える程度しか行ったことがない。

大して何かあるわけでもないのかも知れない。だけども、普段寄り付かない場所というのは、自分にとって非日常な空間になるのだ。

技術棟は4階まであり、普通科以外の科の連中が何やら色々な実験をしたりしている。一応念のために、教室が開いてないか確認しながら、一人探険する。

……全く、しけてやがんな、この学校。1階から4階まで、くまなく見て回ったが、結局どの部屋も閉まっていた。

何かありそうな雰囲気がある部屋も、それでは確認のしようがなかった。それと同時にちゃんと管理がなされていることは分かった。

俺は気付けば、技術棟の屋上への階段の前まで来ていた。携帯で時間を見ると、まだ時間があったのでこのまま屋上に行ってみる。

この学校は丘に立っており、屋上は見晴らしがいい。それに技術棟からなら、普段は技術棟そのものが影になって見えない、遠くのビルなんかも見えるかもしれない。　まぁ、屋上の扉が開いてるかは分からないが。

階段を1番上まで登っては見たものの、案の定、扉には錠がおりていた。しかし扉の窓からは、遥か向こうに街のビルを望むことができた。

「それにしてもここは静かだ……」

一番上の階段に腰を降ろし、一人ごちた。殆ど人が来ないのであろう、良く見れば埃が溜まっており、おまけに蜘蛛の巣までしっかりできていた。

「でも……良い場所だな、ここは」

変に孤独癖のある人間にとって、こういった、どこか陰気臭い場所は、なぜか心安まるのだ。

今度から何かあった時は、ここで暇をつぶすことにしよう。

「誰かいるの？」
突然階段の下から声がした。
階段の途中の踊り場には、いかにも優等生といった風な眼鏡をかけた、知的そうな少女が立っていて、こちらを見上げていた。

第2章

そこにいたのは理知的な雰囲気と、たおやかさを秘めたような少女だった。
「何してるの？」
「あー……」
参ったな。どう答えるべきか……。
そもそも技術棟は、放課後は用事もなしに立ち入ってはいけないところなのだ。
けれど、しどろもどろしていると余計に怪しまれる。ここは開き直って、正直に言うのも手だ。
「まぁ何と言うか……ただの好奇心だ」
「……そう」
少女がふっとした表情を和らげたのに疑問が浮かんだが、すぐに氷解した。この少女も恐らく、同じような理由で来たのだろう。
「あんたもそうなのか？」
「ええ。あなた、いつもここに？」
「いや、今日初めてきた。こんなに静かな場所があるなんて知らなかった」
「そう。なら屋上には行ってないのね」
「屋上？　ここの扉、錠がしてあるぞ？」
俺がそう告げると、少女は唇の端をわずかに上げた。
「……あなたはここに来た初めてのお客さんだからね……屋上、行ってみたいでしょ？」
「行けるのか？」
壁に隠れていて分からなかったが、少女の手には鍵の束が握られていた。
「……なるほどな」

俺は苦笑した。彼女はこの扉の番人というわけだ。
「行く？」
もちろん、と短く答えた。

少女によって開かれた扉の先は、とても学校にいるとは思えなかった。ゲームで例えれば、今からここで何らかのイベントでもありそうな雰囲気だ。
「おぉ、やっぱ外に出ると空が近くに感じるな」
「ふふふ、大袈裟ね。まぁ開放感があるのは確かだけどね」
「ここならいい昼寝ができそうだぞ」
「うん、できるわよ？」
やってるのかよ……。
「ところで……あんたの名前は？」
「こういう時って男の人から名乗るものなんじゃないの？」
人を喰ったような性格してるな、こいつ……。
「悪かった。それもそうだな。俺は九鬼だ」
「え？」
「どうした？」
「いいえ……あなたがあの九鬼君かと思って」
「知ってるのか？」
「ええ、ちょっとした有名人だからね」
有名人？　この俺が？
特別何かやらかした覚えは……そこまで考えて思い付いた。もしや――
「毎朝、可愛い女の子と手を繋ぎながら歩いてるらしいじゃない？」
やっぱりそれか……。
少女の言葉に、俺は心の中で舌打ちした。
「別に、一緒に歩きたくて歩いてるわけじゃない」
「そうなの？　でも結構お似合いのカップルだって聞いてるわ」
「あいつは妹だ」

俺はぶっきらぼうに答えた。
「仲の良い兄妹じゃない」
からからと笑う目の前の少女に、最初に抱いたイメージはもうない。この女はきっと、ああ言えばこう言う……女狐タイプだとにらんだ。
「……」
「あら、もしかして怒った？」
「別に」
そっぽを向いてしまう。
ちっ。これではまるで肯定しているみたいではないか。
「九鬼君って、見た目より子供ね」
「……」
全く、こういう女は苦手だ。
「大体あんた、その話誰から聞いたんだ？」
「別に誰というわけじゃないわよ。あなたが使ってる駅を使ってる友達くらい、いるもの」
「……なるほど」
俺は穴があれば今すぐにでも入りたい気分になった。そんな俺の様子を見て、この女はまたからからと笑った。
全く……最初はちょっと良いと思ったが、とんだひねくれ女だ。
「もういい。俺は行くぞ」
「あらもういいの？　折角こうしてここに来たのに」
「元々ただの暇つぶしに来ただけだからな」
「そう。だったらまた暇な時においでよ、開けたげるから」
「いつになるか分からないのにか？」
「その時はその時よ。そうそう、まだ名前、名乗ってなかったわね。私、真紀。――藤原真紀」
これが俺と真紀との出会いだった。

校舎から出て、部活連中が励んでいる校庭を足早に突っ切る。
校門のところにちょっとした人垣ができていた。その中心に、妹である沙弥佳がいた。あいつはその容姿のおかげで、一人でいると必ず男どもに声をかけられる。
俺が沙弥佳に気付くと同時に、向こうも俺に気付いたようだった。

「あ！　お兄ちゃーん！」
沙弥佳が人垣をすり抜けて、俺のところまでやってきた。
「わざわざ高校まで来たのか」
「うん！　それにその方が時間短縮できるから」
「駅で待ち合わせするつもりだったんなら、ここまで来る方が効率悪いだろ」
だから時間つぶしてたってのに……。
「はぁ……で、あの連中はどうするんだ？」
親指で、校門の前に壁を作っている連中を指す。
「どうもしないよ？」
「……ま、別におまえのせいじゃぁないしな」
こいつからしたら、ただ校門で待っていただけだからな。だが、俺からしてみるとそうもいかない。
男達が、俺を睨むような嫉むような視線を向けてきているからだ。

ま、いつものごとく、ちょいと睨みをきかせれば大丈夫だろう。
ナンパ師ってのは、大体の奴がたいしたことのない奴らばかりだからだ。

「で、朝言ってたコってのが……？」
俺の前に座っている女の子に視線をやった。

「うん、そうなの」
「ふむ」
今俺達は、電車で一駅のところにある喫茶店にいる。その駅の改札を出たところで、沙弥佳の友達という女の子が待っていた。
朝、沙弥佳がどうしてもと聞かなかったのは、この子に会わせるためだったのだ。
「とりあえず紹介するね。同じクラスのあやちゃんだよ」
「ぁ……う……えと、さやちゃんの友達で、渡邉綾子(わたなべあやこ)です」
「大丈夫だよ、あやちゃん。こう見えてお兄ちゃん頼りになるから」
「おい、こう見えてってどういう意味だ。で、綾子ちゃん？　あ、これから綾子ちゃんって呼ばせてもらうぞ」
「あ、はい……」
「わざわざ俺をここに連れてきた理由っての聞かせてくれ」
「……はい」
一言答えるたびに消え入るような小声になっていく。さっき会った藤原真紀とかいう女と違って、ずいぶんと引っ込み思案な女の子のようだ。
「それは私から言うよ」
沙弥佳は、綾子ちゃんの取り巻く状況を話し始めた。
「実はあやちゃんね、今……ストーカーの被害にあってるの」
「ストーカー？」
思わず綾子ちゃんの方を見る。それに気付いた綾子ちゃんは、そっと頷いた。
「そうなの……初めはね、ただなんとなく視線を感じるくらいだったらしいんだけど」
「……」
「そのうち、だんだん身の回りのものがなくなりはじめて」
沙弥佳の話を聞きながら、綾子ちゃんを見ている。
なるほど。よくよく見ると沙弥佳程ではないが、なかなかに可愛らしい顔立ちをしている。もし今のように暗い表情ではなく、明る

い表情で笑っているところを見たら、思わず惚れてしまいそうだ。
「それからはなるべく一人でいないようにしたり、なるべく私物も持ち帰るようにしてたみたいなんたけど」
「効果なし、か？」
同時に二人して頷いた。
「それで、私達に相談したみたいなのね。私達も、それを知ったクラスの男子達も、助けてくれるようになって……」
「ストーカーも止んだのか」
「のはずだったんだけど……」
沙弥佳の表情も沈んだ。
「今度はね、お家の方で色々起こるようになったみたいなの。その……し、下着までなくなったりとか、変な物まで送られてくるようになったりとか、最近は電話まで掛かってくるようになったみたいで……」
沙弥佳は、そこで一旦話を区切って、目の前にある紅茶を一口飲んだ。綾子ちゃんは、黙ったまま俯いている。
俺もコーヒーに口をつけた。一息ついた沙弥佳は再び口を開く。
「そこまではね、そこまではまだ良かったの……ごめん、良くはないよね……」
沙弥佳が綾子ちゃんの方に向かって謝る。
「ううん、大丈夫だから……」
綾子ちゃんは力無く笑う表情を見せるが、引き攣ってあまり笑えていなかった。
「その……周りのね、人達にまで被害が出るようになったんだ……」
「……そいつは、さすがに酷いな」
「最初のうちは、皆、大丈夫大丈夫って言ってたんだけど……」
「大丈夫じゃなくなった？」
沙弥佳も何かを思い出したのだろう、その先は何も言わなかった。
「皆も気味悪がって、だんだんあやちゃんから離れていって……」

なるほど。　クラスの団結すらも崩壊させるとはなかなかやるな、そのストーカーも。
「今じゃ誰も周りにいなくなったってわけか」
「うん……」
「……しかし、そのストーカー野郎もかなり狡猾な奴だな。聞く限りじゃ俺にじゃなくて、警察にいった方が良いんじゃないか？　こっちだけで、手におえるような奴じゃない気がするが」
そこまで言うと、とたんに沙弥佳の態度が急変した。
「行ったわよ！　行ったに決まってるじゃない！」
突然両手でテーブルを叩き、大声で席を立つ。その勢いそのままに、俺に向かって怒りの表情を見せた。
「何度も行ったのに、皆、口揃えて『大丈夫だよ』とか『気のせいじゃない？』ばっかり！　大丈夫じゃないから行ってるのに！」
沙弥佳の突然の変貌ぶりに、俺も綾子ちゃんも目を見開いて驚いた。店内の客や店員が、何ごとかと訝しみながらこちらをみてきた。
「さ、さやちゃん、落ち着いて……」
綾子ちゃんが沙弥佳をなだめる。沙弥佳は、自分が店内の注目を浴びていることに気付き、顔を真っ赤にして座ると、紅茶を一口飲んだ。
「ま、まぁとにかくだ。　綾子ちゃんは今まで通りに、学校以外でもあまり一人にならない方がいいな」
月並みなことしか言えない自分がにくい。
「あ、あの、それでねお兄ちゃん、そこで相談なんだけど……」
唐突に沙弥佳は何か迷ったような顔をしたのち、意を決したような顔をした。
「しばらくの間、うちにあやちゃん泊めてあげたいなって思って……」
「……はぁ？」
「だからあやちゃんをうちに泊めたいの」
こいつは何をいきなり……。

「さ、さやちゃん、やっぱりいいよ……泊まったら、さやちゃん達に迷惑かかっちゃうよ……」
「あやちゃんはちょっと黙ってて」
「あ……ぅ……ごめん」
沙弥佳の有無を言わせぬ迫力に、それきり綾子ちゃんは黙ってしまった。
「……つまり、俺も手ごめにして親父達を説得しろってか？」
「さすがお兄ちゃん。頭いい～♪」
「……はっきり言って俺に説得できるとは思えんが……」
「お願い！　もうお兄ちゃんしか頼る人いないの！」
沙弥佳が頭を下げる。……こいつがこうして俺に頭を下げる時は、にっちもさっちもいかなくなった時だけだ。
「……はぁ。まぁ、俺もそんな話聞かされちゃあどうにかしてやりたいって思うしな……」
「じゃあお兄ちゃん……？」
「言っておくが、あまり期待はするなよ？」
その言葉に、綾子ちゃんも少し明るい表情をしたような気がした。

「うん！　ありがとうお兄ちゃん！」
だからな妹よ……そんな顔は反則だぜ？　「あ、あの」
「ん？　なんだ？」
「さやちゃんのお兄さんは――」
「ああ、すまん。九鬼でいい」
「あ……はい。九鬼……さんはそれでいいんですか？」
「いいも何も、ここまで聞いて放っておけるほど、薄情じゃぁないつもりだぞ」
「うんうん。お兄ちゃんはそう言うとこがカッコイイんだよ～」
沙弥佳は無視だ。
「それに……手がないわけでもないしな」
俺達は店を出て家に向かう。

「お兄ちゃん、これからどうするの？」
「家に帰る」
「え？　……ちょ、ちょっといきなり過ぎない？」
沙弥佳も、まさかいきなりうちに行くことになるとは思わなかったようだ。
「早い方がいいだろ？」
「う、うん。そうだけど……」
「期待はするなとは言ったが、勝算が全くないわけじゃない」
「そう、なの……？」
「ああ。今日は幸いにして、父さんの帰りが遅い。つまり今敵は一人しかいない」
「敵って……」
沙弥佳が思わず苦笑する。
「ようするに、お前がやったのと同じ手を使うということだな」
「なっ……！　私そんな打算してないもん！」
こいつが口調が鋭くせずに怒るときは、図星だった時だ。
「クックックッ……隠さなくていいさ。これでも、十五年もお前の兄貴やってるんだぜ？」
ニヤリと口元を歪ませる。
「むー……」
沙弥佳は頬を膨らませ、唇を尖らせる。そんな二人を見ていた綾子ちゃんは、ようやく緊張が解れたのあろう、あはは、と笑ってみせた。
さて、俺のとった作戦とは単純に、情に訴えた泣き落とし作戦だ。もちろん本当に泣くわけではないが。妹は別にして、だが。
今回ターゲットになる母は、いつも強気に振る舞っているだけに、情に弱い部分があるのだ。まずは母を陥落させ、その状態で父の説得に挑もうというものだ。父は普段ドンと構えてはいるが、その実、母には滅法弱いということは隠していたって分かっている。
だから、母を落とせば、恐らくは父も落とせるはず……と俺は踏

んだのだ。当の妹達は、最初は喜び勇んでいたものの、家が近づくたび口数が減っていった。
俺は沙弥佳の手を握ってやり、大丈夫だ、とだけ言った。

時は5時半を少し回ったところだ。今現在、九鬼家の門の前にいる。
「さて、沙弥佳にはもう一度、母さんに情で訴えてもらって、それを俺がフォローする」
「うん……」
「そんなに気負うな。お前の声ってさ、不思議と心に響くとでも言うのか……なんか、人をその気にさせちまうんだよ」
「うん……」
「だから、さっきみたいにやりゃぁきっとうまくいくと思うんだ。大丈夫だ、お前ならうまくいくさ」
沙弥佳の目を見て、言葉を放った。
「う、うん……私、頑張る！」
「よし！　その意気だ！」
「ごめんね……さやちゃん」
「いいっていいって！　元はといえば私のお節介ってのもあるんだから」
沙弥佳は深呼吸を数度繰り返し、
「良し、行こう」
と、短く言った。

「いやー意外となんとかなるもんだね～」
沙弥佳は先の戦いを終え、軽快に言い放つ。
「本当にありがとうね、さやちゃん……」
綾子ちゃんは感極まって、涙目になっていた。

「気にしない気にしない！　それに……」
チラリと俺の方を視線を向けた。
「お兄ちゃん……ありがとう」
「私からもお礼を……本当にありがとうございます」
二人揃って礼を言う。綾子ちゃんに至っては三つ指をついて、土下座までする始末だ。
「おいおい、綾子ちゃん、そいつはやり過ぎだ。俺はたいしたことはしてないぞ」
そう、俺は全くと言っていい程、たいしたことは何もしていない。結局、妹の情に訴えた、抗議とも非難ともとれる泣き落としは成功した。
俺はただ、こういう時こそ、いつも言っている、無償なき愛ってのを差し延べるべきなんじゃないかと言っただけなのだ。
ただ、それが決定打になったのかもしれない。母である遥子は、敬謙とまでは言わないが、一応クリスチャンなのだ。
「とりあえず、今から家に戻って着替えと、必要最低限のものは持ってきた方がいい」
俺の言葉に二人は頷いた。
「さて、それじゃぁ君の家に行くとしようか」
「え？　お兄ちゃんも行くの？」
「そりゃぁ行かざるをえないだろ。女の子だけじゃな」
「そうだけど……」
「なんだ、不満なのか？」
「そ、そんなんじゃ……」
「だったらいいだろう。それに量があれば荷物持ちになるし、いざって時のボディガードにもなる」
沙弥佳は、たまに変なとこで妙に渋る。それだけは未だ良く分からない。
「それに……まぁ、これは明日以降になるだろうけど、ちょいと確かめたいこともあるしな」

俺の言葉に、二人は頭にクエスチョンマークを浮かばせていた。

第3章

俺達はたった今から綾子ちゃんの家に行くことになった。そこで念のために、電話番号を聞いておく。

「そうだ。綾子ちゃん」

「はい」

「一応念のために君の番号教えてくれ」

「あ、はい」

綾子ちゃんは、バックから携帯を取り出し、俺の携帯と番号をやりとりする。沙弥佳はなぜか、終始それを不機嫌そうな顔で見ていた。

何を考えているんだ、お前は。

綾子ちゃんのうちに行くまでの間、沙弥佳を交え、他愛もない話しをした。

家族構成や、互いの誕生日、学校での出来事、沙弥佳との出会い等々。それこそ些細なことまでだ。

しかし、侮ることなかれ。

こう言った話は、相手との距離を埋めるためには必要だし、こう言った何気ない話の中にこそ、相手の本質の一部を、垣間見ることだってあるのだ。そして、今回のストーカー野郎の情報も、何かしら得られる可能性もある。

ただその間も、なぜだか沙弥佳はどことなくぎこちなかった。

「ここです」

綾子ちゃんの家に到着して俺と沙弥佳は、思わず感嘆のため息を

漏らした。
「うちの二倍……いや、三倍はあるんじゃないか……？」
「あ、あやちゃんち初めて来るけど、こんなに大きかったんだ……」
沙弥佳も驚いて、ぽかんと口を開けている。
言っておくが、うちだってそれなりに良いとこに住んでる。住んでいるはずだが、この家は俺達はやはり小市民であることを思い知らされるほどのものだった。
まず庭が広い。それも半端なく……。テニスとバスケが同時にできる、と言えば、想像してもらえるだろうか。　かも、ここは一等地なのだ。
不況不況とは言われていても、あるとこにゃあるもんだな……。
「で、でだ……確認するが、両親は今いないんだな？」
「はい」
綾子ちゃんは短く返事する。
「お手伝いさんも、今の時間はいません」
「そいつはいい。説明の手間も省けるしな」
「ね、早く行きましょうよ」
「あ、うん」
沙弥佳にうながされ、綾子ちゃんがカードキーを使い、扉を開ける。扉というのは比喩ではなく文字通りだ。
それほど大きい。そして、現代らしくカードキーを使えば、外から開くようになっているらしい。
話によれば、家の中からなら、インターフォンを使って自由にロックを解除できるとのことだ。
そんな、綾子ちゃんの家にお邪魔する。開いた扉をくぐり、広大な庭を突っ切って、家のドアの前にまでくる。
綾子ちゃんは、再びドアを開けるから、と言い、今度は専門の業者に頼まないと作ることができない鍵を取り出し、ドアを開けてくれた。

家に入るなり綾子ちゃんが一人、部屋に向かって行くので沙弥佳も一緒に行かせた。

いくらこんな時でも、女の子の部屋においそれと入って行くのは、少し気が引けたからだ。　とは言え、後で入らねばならないのかもしれないのだが。

二人が二階の部屋に行ったのを見送って、俺は行動を開始した。まずは玄関横の部屋からだ。

今回、俺がわざわざここに来たのも、隠しカメラだとか盗聴器の有無を確認するためだ。盗聴器は専門の道具がないので、簡単に見つかるとは思えないが、カメラなら見つけられるかもしれない。

人様のうちを我が物顔で、あれこれ物色するのはいい気持ちがしないが仕方ない。　最近のストーカーは最悪の場合、カメラを仕掛けていないとも言い切れないからだ。

手早く部屋の中を探索する。次に隣の部屋を、そして一番きな臭い居間を通り抜け、その反対側にある和室へ。

更に、和室を廊下で挟んだ使われていない部屋は、物らしい物は置かれていなかった。一部屋一部屋は広いが、その割に物が少ないように思われた。

お嬢様と言えど、人の子。使うスペース等、限られているのだろう。さて、次はいよいよ居間だ。

ところで、隠しカメラ等といった物の設置場所は、どういう所にするか分かるだろうか。

当然、人目のつかない所だ。だが、狡猾な奴はそうはしない。敢えて、人目のつきそうな場所の近くに置く。

よく人が使う場所、その中にも”目につくからこそ”できてしまうスペースがある。目につくような場所なら、ある訳無いという心理をついている来るのだ。

また、普段目にしないような所。

これは、人目のつかない所と同義だが、隠し場所は実に巧妙になっている。

人は物を探す時、基本的に自分の目線以上場所や、手の届かない場所には滅多と目を向けない。これも人間心理をついた設置場所だ。

今回は、時間も限られているため、あまり悠長に探していられない。だから俺は、この点にだけ絞って探している。

それに俺は、周りの人間を被害に遭わして、人間関係を破壊してしまうような狡猾な奴は、こう言った、人間心理だって当然ついていると踏んだのだ。

なぜ詳しいかって？　そりゃぁ、そういうヤバイ趣味した知り合いがいるからに決まっている。断じて俺は経験者などではない。

後は、相手の立場になって考えること。　これは俺の経験上、全てに当て嵌まって言えることだと思う……いや全ては言い過ぎた。

「家の中で一番怪しい場所の一つだしな……どこからいくか」

まずはスタンダードにテーブルだ。下を覗いてみる。

「無いか……」

次にテレビ、冷蔵庫の上、壁掛け式の時計、そして鏡。隠せそうな場所は、思いつく限り探すがなかった。

「やっぱりカメラは考えすぎたか……？」

その時俺は、ふと天井を見上げた。

「……ん？」

何気なしに見上げた天井に、違和感があるのを感じた。

正確には、偶然目に入った天井から吊り下げられた照明の接合部だ。今までの部屋の照明は、据え付けられた円盤状のものだった。

しかし、この居間の照明だけはかなり丁重な作りで、天井から吊り下げ式になっていた。恐らく本当は、別の照明が取り付けられていたと思われた。

天井から延びる長さと、テーブルとの距離が、照明の明るさに対して下過ぎるからだ。

しかし、以前どんな照明が取り付けられていたかは分からないが、取り替えたのは正解だろう。
この居間の雰囲気に、シンプルだが豪華さを感じるこの照明は、良く合っていた。
だからこそ、気がつかなかったと言っていい。何より家族で住むなら、居間にはもっとも金をかける。
けれど、こうした違和感というのは、そうそう拭い切れるものではない。
「それじゃぁ……悪いが調べさせてもらいますよ」
誰にとも知れず、一人呟いた。
テーブルに上って、接合部に手を伸ばし、照明を外す。かなり重い。
照明を落としそうになって、バランスを崩した。一瞬、ヒヤリとさせられたが、なんとかもちこたえることができた。
「やっぱりな」
俺は思わず口元をニヤリとさせた。接合部には高性能ではないかと思われる、小型カメラが取り付けられていた。
おまけに、ここなら電気の心配いらずで、２４時間監視することができる。これじゃぁ視線も感じるはずだ。となると当然……。
俺は居間から移動し、一階にあるトイレに向かう。
「……当たり前のように取り付けられていたな」
やはりトイレにもあった。それも二カ所もだ。
……綾子ちゃんの名誉のためにも、これ以上は言わない。察してくれ。

ちょうどトイレから出てきた時、沙弥佳と綾子ちゃんが二階から荷物を持って下りて来た。
「お兄ちゃん、何してるの？」
「ん……まぁ、ちょいと宝探しをな」
「宝探し、ですか？」

「え？　え？　なになに？　何が見つかったの？」
とっさに俺はなんと言ったらいいのか分からず、苦笑いしながら肩をすくめた。
「とりあえず、こっちが確認したかったことは終わった。そっちはいいのか？」
「うん。生活用品なんかは、うちの使えばいいしね」
「それじゃ、戻るとするか」
俺達は、綾子ちゃんの家を出て、自宅へ戻ることにする。
門を出た時――俺はやたら強い視線を感じて、思わず周りを見回した。いや、それが視線だったのかなんていうのは分からない。だが、そうとしか思えなかった。
「どうしたの？」
沙弥佳が不思議そうな顔で、尋ねてくる。
「い、いや、なんでもない」
行こう、とだけ告げて、俺達は歩きだす。俺は帰路の途中、先ほどの視線のことを考えていた。

「「いただきます」」
家に帰り着くと、ちょうど夕飯の用意ができたらしく、久しぶりに父なしの夕飯とあいなった。
母と沙弥佳は、綾子ちゃんと話を弾ませている。なんだかんだで、母もまんざらではない様子だ。まぁ、そこは間違いなく母の長所ではあるが。
綾子ちゃんは普段、いつも一人で夕飯を食べていると言っていたので、こうして皆でテーブルを囲むというのが、すごく嬉しそうだ。おまけに家は、うちよりもはるかに広いのだ。当然と言えば当然なのかもしれない。
けれど俺はその会話に加わらず、先程の視線のことを、まだ考え

ていた。もし視線だとしたら恐らくさっきのは、例のストーカー野郎だろう。

俺が今までそんな視線を感じたことなど、一度だってなかった。だとすれば、今回の綾子ちゃんのことを考えたら、そうとしか考えられない。

十中八九、自分の愛する綾子ちゃんに近づいた俺を、目の敵にしたのだ。もしかしたら、明日にでも何か仕掛けてこないとも言い切れない。

奴はこちらを知った。これはほぼ間違いないだろう。だが、こっちは奴の顔や名前、素性等知りはしないのだから。こちらからも早々に手を打つ必要がある。

俺は食事をとりながら、今後のことについて作戦を練り始めた。

食後、沙弥佳はいつになくテンションが高く、綾子ちゃんも夕方に初めて会った時とは、別人かと思えるほどよく笑い、よく喋った。

こっちが本当の綾子ちゃんなのかもしれない。なんにせよ、俺にたいしても、随分と心を開いてくれていると受け取った。これなら気楽に父も説得できそうだ。

日付が変わるか変わらないかという時分に、父は帰ってきた。

最初、居間にいた綾子ちゃんを見て、やや驚いた表情をしてみせた後、沙弥佳がすぐに説明しだした。そして、母がそれを更に強調付け、とんとん拍子に承諾されたのだ。

正直、俺は一言だって喋っていない。こういう時の女同士による団結というのは、何故こうも有無を言わせぬ迫力があるのか。

だが父は、終始冷静に対処していたように思える。父の姿に、ある種の後光が指しているようにすら、俺には見えた。

ともあれ、こうして綾子ちゃんはしばらくの間、うちに厄介になることが決まった。

いつもなら俺の後に風呂に入る沙弥佳だが、今日は綾子ちゃんと共に、俺の前に入った。

風呂と言えば、奇妙なことが一つある。

何故か、俺の下着がたまに失くなるのだ。一度両親に聞いて、「そんなの知らない」で一蹴されたのは、記憶に新しい。

これはミステリーだ。家族という最も小さなコミュニティーにおいて、これをミステリーと言わずして何といおう。

それとも、誰かが盗んだとでも言うのだろうか？　そもそも下着を盗むなんて、男であれ女であれ、とんだ変態だ。ましてや男ものの下着だ。

もしそうであれば、見つけたら取っ捕まえて、懲らしめてやることに決めた。

沙弥佳たちが風呂から上がってきたのを見計らい、俺も風呂に入った。

「……」

美少女と言っていい二人が入った直後の風呂は、なぜかとても甘美な香りがした。

一夜明けた早朝、俺はいつもと違い、やたらと体が重いことに気が付き、目を醒ました。寝ぼけた頭で体ごと横に向けると、沙弥佳が隣で寝ていた。

なんでいるんだ……。
「……おい、沙弥佳。おい起きろ」
沙弥佳に声をかける。
「んう～……もうちょっと……」
何がもうちょっとだ、俺はちょっとだって待ちたくはない。
「おい沙弥佳、さっさと起きろ！」
昨日とは打って変わって、俺が沙弥佳の体を揺すって起こす。
「んぁ……？」
一緒に寝なくなってから、こんな顔は初めて見るが、なんとも情けなく思えるのはどうしてか。
とはいえ、俺がこいつのこんな顔を見るのなんて、いつぶりだろうか。いつも起こしてもらっているだけに、たまにはこういう風に寝顔を見てやるのもいいのかもしれない。
だが今日は、こいつの部屋に綾子ちゃんがいるのだ。がそんなことを考えているうちに、沙弥佳はまた寝始めた。
「だから寝るなって！　いい加減起きろ！」
何が悲しくて、起きぬけに声を荒げねばならないのだ。
「うぅん……ふぁぁ……ぉはよぅ、ぉ兄ちゃん」
「おはよう。そしてさっさと自分の部屋に戻りなさい」
「寒いからいや～……ぉやすみ……痛っ！」
ちょっと本気で叩いてやった。
「お兄ちゃん、痛いよ～……何も叩かなくったって～……」
「おかげで目が醒めたろ？」
「それはそうだけどぉ……」
「大体、なんでお前がここにいる」
「あれ～？　なんでだろ～？」
寝ぼけて入ってきたのか……。俺は朝っぱらからため息一つついて、
「とりあえず部屋に戻れ」
「一緒じゃダメ……？」

「ダメだ」
即答した。

沙弥佳は不満げに部屋を出て行った。
時計の針が、盤上をちょうど半分に分けていた。二度寝しようと思えば、できなくもない時間だ。
「ま、どうせ沙弥佳が起こしにくるだろ」
思いきり他力本願だが、あいつは俺を起こしにくることを至上としているから、問題ない。
決めた後は、早く布団の中でくるまって、あの心地良さに包まれたい。再び布団に寝転がった俺は、慌てて布団をめくりあげた。寝転がった瞬間、足の方が何やら冷たかったからだ。
「なんだこれ？」
オネショか？　馬鹿な。有り得ない。第一、臭いもしないし、水量も少ない。ならば何なのだ、これは……。
俺の足の部分に当たる場所が、なぜか不自然に濡れていたのだ。更に今気付いたことだが、右足のふとももも部分のパジャマも、不自然に湿っていた。
な、何なんだ一体……？　下着のことといい、最近はやたらと変なことばかり起こるような気がする。
「にしても……これ、一体どうなってんだよ」
俺は完全に目が覚めてしまい、二度寝する気が失せてしまった。

眠気が失せた俺は、仕方なく制服に着替え、珍しく朝一番でリビングへ下りた。こうして朝早くに誰もいないリビングにいると、気持ちが浮ついてしまうのは何故だろう。
眠気はないが、習慣というものでコーヒーを飲むために豆を挽く。うちはコーヒーは豆から挽いて、ドリップさせる。
「あら、おはよう。こんな珍しいことが二日も続けて起こるなんて」
コーヒーが出来上がるのを待っていると、母が起きてきた。

「ん、おはよ。今日は本当に早く目が覚めたんだ」
「いつもこれくらいだったらお母さん、我が子の成長を見てるような気がして嬉しいわ～」
「沙弥佳の仕事をとるのは忍びないな」
「お兄ちゃんなんだから、いつまでも妹に甘えてないのよ、もう」
「はいはい」
「はいは一回よ。あ、新聞とってきて」
「はいよ」
リビングを出たところで父も起きてきた。
「おはよう。珍しく沙弥佳よりも早いんじゃないか？」
「おはよう。一年に一度あるかないかのレアな日なんだよ」
夫婦揃ってこうも立て続けに突っ込まれると、か照れ臭い気持ちになってしまった。
俺は玄関を出て、新聞を取りに外へ出た。新聞を取って家に戻ろうとしたその瞬間――視線を感じた。
……まさか――俺は昨日のように、後ろを振り返り周囲を見回した。俺が後ろを振り向くと、それまで感じた視線を感じなくなった。
……今の感じは……間違いない、昨日と同じだ。この粘つくような、こびりつくような、なんとも言えない嫌な視線。
まさか、もううちを突き止めたのか……？　いや、充分有り得ることではないのか？　このストーカー野郎は、昨日、あの後も俺達の後をつけて来たのだ。ただ、その気配を感じさせなかっただけで……。
「ちっ」
俺は舌打ちした。せざるを得なかった。きっとそうなのだ。
野郎は間違いなく俺達の後を尾行し、うちを突き止めた。俺はうかつにも、その間、ひたすらこれから先のことばかり考えていて、まさか尾行のことまでは考えもしなかったのだ。
「ちょっとお兄ちゃん！」

突然ドタドタとすごい勢いで、沙弥佳が二階から下りてきた。
「もう何勝手に起きてるの!?　ベッドにいなかったから心配しちゃったじゃない!」
いかん、口調が鋭い。かなり頭に来てるようだ。
それにしても普通なら、早起きしてる俺を見て手間がかからなくなったと喜ぶべきと思う。
「お兄ちゃんは私が起こすまで、ちゃんと寝てなきゃダメでしょ!」
「いやさ、あのあと寝れなかったからな……それで、ちょいと早起」
「言い訳なんてしないで!　いい!?　お兄ちゃんを起こすのは私の仕事なのっ。だからお兄ちゃんは、私が起こしに来るまで部屋から出ちゃダメなんだから!」
俺にはみなまで言わすつもりはないらしい。
全く、こいつは朝っぱらから元気な奴だ……。つい２０分か３０分くらい前は、あんなに眠そうな顔していた癖に。
「何よ!?」
「い、いや、なんでもないぞ?」
毎度のことだが、なんでお前はこんな時だけ俺の心が読めるんだ……。
「それで?　お兄ちゃんはなんでそんな所にいるの?」
妹は、普段が可愛いだけに怒り心頭の時、本当に怖い。そして後ろには、綾子ちゃんの姿もあった。
「た、単純に新聞とりに来ただけだぜ?」
俺は、家に入り玄関の扉を閉めた。そんな俺の様子に、二人は怪訝な目をしながらリビングへ移動していった。
お父さん、お母さん。俺のことよりも、娘の方をもっとちゃんとさせた方がいいと愚息は思うぜ。
「なぁ、今日ちょっと早く出ねえか?」

朝食の後、俺は沙弥佳と綾子ちゃんに問いかけた。
「なんだ？　お前がそんなこと言い出すなんてどうしたんだ」
父が珍しく、いち早く口を開いた。
「んー……ちょっと、な」
俺はいい淀んだ。まさか例のストーカー野郎が、昨日の今日でうちを突き止めているなんて、とてもじゃぁないが言えるはずもない。

カメラのことも伏せてあったし、何より視線を感じただけで、証拠は何もないのだ。だが沙弥佳は、無意識に何かを感じ取ったようだ。
「私はいいけど……」
と答えたのち、綾子ちゃんは？と目で合図する。
「私も構いません」
「よし。ならそろそろ準備するか」
「それにしても、あのお兄ちゃんが、自発的に学校に行きたがるなんて……」
「……明日は雨かしらね。予報じゃ晴れと言っていたけれど」
そこの親子二人は黙ってろ。前言撤回。やっぱり何も感じ取ってくれていなかった。
妹よ……いつも口をすっぱくして言っているがな、察してくれ。

ただ父だけは、
「あまり無茶はするなよ」
と、こっちの心中を察してくれたようだった。
いつもこういう時、お父さんはすごくカッコ良く見え、男として憧れる。そして、その気遣いに俺は感謝した。

第4章

朝7時半。俺たちはいつもより20分は早く、家を出た。
「沙弥佳」
「うん？」
「今日からしばらく学校への送り迎えは、俺がする。いいな」
「え？　な、なんで？」
沙弥佳は、切れ長な目を大きくし、驚きの表情をして見せた。
そりゃぁ驚くだろうな。今までなら、駅で別れた後に学校に行っていたのだ。それがいきなり、学校まで送り迎えされるとなれば、当然の反応と言えた。
「まぁ……例のストーカー対策、だな」
すでに向こうに、一歩先を譲ってしまっているが、下手なことを言って不安を煽る必要はないだろう。
「ストーカー対策……ですか」
綾子ちゃんが、不安ありげに表情を曇らせた。
「ああ。俺と駅で別れた後、何があるとも限らないからな」
「……分かった。お兄ちゃんがそういうなら従うよ」
いつものこいつなら、お兄ちゃんと一緒だ～なんて言いそうなものだが、さすがに今回ばかりは、手放しに喜ぶことはなかった。
「二人とも、そんな暗い顔すんなよ。折角の美人がもったいないぜ」
二人を元気づけようと、おどけながら普段の俺なら、歯が浮きそうなことを口にした。しかし真に受けたのか、二人とも顔が赤く染まり、揃って俯いてしまった。
だからな妹よ……綾子ちゃんならともかく、お前はそこでツッコミをだな……。
しかしながら、こんな状況でも相変わらず沙弥佳は、俺の腕にし

っかりとしがみついていた。綾子ちゃんは、その様子を最初こそ驚きはしたものの、話しに聞いてた通りなんですね、と笑った。

駅を通り過ぎ、二年前まで歩いていた道を歩く。

「この道歩くんも、久しぶりだな」

「こうやって二人でここ歩いてたんだよね……」

沙弥佳が感慨深げに呟いた。最後にこの道を歩いたのは、確か中学の卒業式だった。在校生は休みだというのに、こいつはわざわざ着いて来たのを思い出した。

「お二人はいつもそうやって登校してらしたんですよね」

「ああ、本当に毎日な。初めのうちはクラスの男子からからかわれてな、大変だったんだ」

俺はその頃のことを思い出し、笑った。

「お兄ちゃん、すごく嫌がってたんだよね～」

「お前な、何、他人事みたいに……」

俺達兄妹の会話を聞きながら、綾子ちゃんは口に手をやってクスクスと笑う。全く、一つ一つの動作が一々お嬢様という雰囲気を醸し出していた。

「お前も、もうちょい、その辺見習おうな」

「え？　見習うって？」

「いーや、なんでもない」

俺は、しがみつかれていない方の肩をすくめた。

「でも……羨ましいなぁ、さやちゃんは」

「羨ましい？」

「はい。私一人っ子だから、そんな風にお兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒に、歩いて見たかったんです」

「ああ、なるほどな。でも、こいつの場合はちょっと欝陶しいけどな」

急に言われると、慣れていても途端に気恥ずかしい気持ちになる。

「なっ……！　ちょっと何それ！　こんな可愛い妹が一緒に歩いて

あげてるって言うのに！」
　一度だって頼んだ覚えなどないのだが……。それに、自分で可愛いなどというものじゃない。
　たとえ自覚があるにしても、だ。
「ま、まぁなんだ。男にも一人になりたい時ってのがあってだな……」
「うふふ。本当に仲良いなぁ」
　その時、朝日に照らされて、綾子ちゃんの見せた笑顔に俺は、心臓を鷲掴みにされたような気持ちになった。

　二人を学校に送り届け、一人駅へと引き返す。校門の前まで沙弥佳は、俺と腕組み続けた。
　しかも、その反対には綾子ちゃんというお嬢様もいたとなれば、俺は、中学生達や、校門にいた教師達の注目の的になった。
　だが、あれは二年前までの日常そのものだった。来年からあれがまた繰り返されるのかと思うと、俺はついため息が出てしまう。

　ホームに立って、いつもよりも遅い電車を待っていた。
　次の電車が、なんとかギリギリで間に合う最後の電車だ。しかもラッシュは過ぎているので、いつもに比べ、人もまばらだ。
　プルルルルル――
『間もなく○×行き普通電車が参ります。白線の内側までお下がりください』
　アナウンスがあった直後、電車がホームに入って来た。
　人が降りていき、電車に乗り込もうとした、その時、またも例の視線を感じた俺は、電車に乗り込まずに、後ろを振り向いて周囲を見回した。
　しかも、前二回よりも強い視線――。

いる。ストーカー野郎がこの近くにいるのだ。
プルルルルルルル――
到着する時よりも長く、発車を知らせる音が鳴り響いている。
プシュー
扉が閉じ、電車は行ってしまったが、今はそれどころではない。
今までなら、俺が周囲を気にしたらすぐに感じなくなった視線は、今回は未だに途切れることがなかったためだ。
（どこだ？　どこにいる？）
この絡み付いてくるような視線を、送ってきやがる奴はどこだ！
ふと、反対のホームに目を移した。大きなガラス張りの壁で、光の反射具合によっては、鏡のようにも見える。
俺のいるホーム側には、駅を出たすぐ横に歩道橋があるが、その歩道橋に、いつもならあるはずのない影が出来ていた。
その影を注視してみる。影は、俺に見られていると気付いたのか、ふっと移動し、ガラス鏡の中から消えた。
（あいつだ！）
一瞬しか見えなかったが、間違いない。
そいつは、黒いウィンドブレーカーとそれに据え付けられたフードをし、下も黒のズボンという出で立ちだった。
俺は、階段を三段四段飛ばしで、駆け降りる。改札をジャンプで飛び越え、駅を出て歩道橋へと走っていく。
後ろから、駅員と思われる人物の声が聞こえるが、今は構っていられない。説教なら後でたっぷりと聞いてやる！
歩道橋の階段を全速力で駆け登り、最上段までのぼりつく。そこから数歩あるき、俺のいたホームの反対側のホーム上に設置された、ガラス張りの壁を見た。
（ここから奴は……俺をあのガラス越しに見ていた）
ガラスを見ながら、奴と同じ行動をとってみる。
（ここで俺を見、そして後ろに引くように動いた……）
当然、後ろには、今しがた自分が上ってきた歩道橋の階段。のホ

ームからここまで、２０秒と経ってない。
（俺の見間違い……か？　それともその時間の間に走り去った……？）
もしそうなら、これだけ見晴らしがよく、開けたロータリーで見落とすはずがない。
（それとも、他にも逃げ道が？）
俺は上ってきた階段を数段下りて、手摺りから身を乗り出し下を覗いた。眼下に、人一人が入れるかどうかという隙間があった。その隙間からは、どうも線路のすぐ脇を数十メートルほどの、隙間道が延びているのが分かる。
（ここだ）
下までは数メートルの高さがある。死にはしないだろうが、気をつけなければ足を挫くかもしれない。
階段の下には、先程の駅員と思われる人物がこちらに向かって走ってきていた。
（迷っている暇はない！）
俺は、手摺りに足をかけ、飛び降りた。　耳に、誰かが叫んだような声が響いた。

飛び下りた場所は、歩道橋の階段横にできた、四方わずか2メートル足らずの小さなスペースだった。飛び下りた衝撃で、足が痺れたが、今はそんなことを気にしている暇はない。
だが、うまく着地できたようで、足も怪我らしい怪我はしていないようだった。俺は、隙間道を身を横にしながら、進んでいく。
どれほど進んだか、背中にあった壁が途切れ、開けた場所に出た。俺はそのまま、真っすぐ進んでいったものの、そこは橋になっており、上に昇れそうにない。
その橋の上では、朝の通勤ラッシュのため、車の往来が激しそうに行き来しており、橋の真下にいる俺には、やけに反響して聞こえた。

そんな俺の視界の脇を、何かがうごめいていた。
それは全身を黒ずくめの奴で、線路を横断し、なんとか上に登れそうな場所を見つけたのだろう、四苦八苦しながらも、必死に上へ登っていたのだ。
（逃がすか！）
線路を横切ろうとした時、あまりの興奮のために俺は、列車が近づいて来ていたことに気付かなかった。
電車は、もう俺のすぐ横にまで来ていたのだ。

ガタンガタンガタ…ン…タタン…タン……
「……さ、さすがに死ぬかと思ったぜ」
真横までにきていた電車から間一髪、後ろに飛びのけることができたため、なんとか助かった。それでも、飛びのいた時に体を打ち付けたようで、その瞬間に痛みが走った。
電車との距離もなるべく開けるように顔を背け、体を仰向けにしてへばり付かせていたために、最悪の自体は避けられたのだ。
俺は危うく死にかけた。列車に轢かれ、人間としての原型を留めないような死に方など、したくはない。
列車が去った後、線路の向こうを見れば、奴が上に登りきり、ご大層にもこっちを見下していた。もしかしたらさっきのもたついた登り方も、ただの演技だったのかもしれない。
黒づくめ野郎は、俺が死ななかったのが悔しかったのか、自身の前にあるガードレールを蹴り、そこから立ち去っていった。
俺も線路を横断し、のろのろと上へのぼって奴がいないか辺りを見回したが、さすがに奴も走り去っていったのだろう、見つけることはできなかった。それに例の視線も、感じることはなかった。
（周りの人間にまで、手を出すような危険な野郎だとは思ってはいたが、　まさかここまでするとはな……）

いつの間にか、俺は怒りで、握りこぶしを作っていた。
少し頭を冷静なろうとした時、恐らくは、さっき電車に轢かれそうになった時になってしまったのだろう、制服が破け、怪我をしていることに気付いた。
冷静になろうとした頭に、また怒りが込み上げてくる。今日は、このまま学校をサボりたい気分になった。

ピリリリリ――
サボろうかと決めた時、携帯が鳴って、画面に見知った名が映し出されていた。斑鳩からだ。
「もしもし？」
『よぉ、おはよーさん。今日はどうしたん？　もしかしてサボり？　九鬼がサボりなんて、こりゃ明日は雨だな』
最近、どこかで聞いたような台詞を吐きながら、斑鳩が電話をかけてきた。
「そういうお前こそ、珍しく文明の機器なんて使っているじゃないか」
そう、斑鳩は携帯は当たり前、デジタルなんてつく物は、まともに使えないのだ。所謂、機械音痴……いや、機械そのものは使えるから、デジタル音痴といったところか。
しかし、相変わらず目ざといくらいのタイミングだな……。
『小町ちゃんがお前のこと、心配してたぜ』
小町ちゃんと言うのは、うちのクラスの担任で、ナイスバディなお姉さんだ。やけにフェロモンたっぷりで、お姉様なんて慕っている女子もいる。あまり興味はないが、いい目の保養にはなってくれている。ちなみに、この斑鳩の憧れの女性らしい。
「そうか。そいつは光栄だな」
『お前、絶対にそんな風に思ってないだろ。……まぁいいか。で、どうすんの学校』
「ああ、どうしようか迷ってる」

『もしサボるんなら、俺も付き合うぜ？』
「んー……どうしようかな」
俺はその時、ズボンのポケットに手を突っ込んだ。その手に、コツン、と硬いものが当たる。
「っと、コイツの存在をすっかり忘れてたぜ」
『あん？　なんだって？』
「いや、こっちの話だ。ところで斑鳩。今日、青山のやつ来てるか？」
『青山ぁ？　来てないけど、あの根暗がどうかしたん？』
「まぁ、ちょいと野暮用がな」
『お前もさぁ、あんなんと付き合うのやめろよ？　いてもいなくてもどうでもいいけど、なんつーかさー、変なことに首突っ込んでそうだし』
斑鳩、お前、その勘を活かした職に就いたら、間違いなく成功するぞ。

斑鳩の言ったことは、当たらずも遠からずだ。青山というのは、うちのクラスにいるちょいとヤバイ趣味をもったやつで、先の隠しカメラの設置場所等、俺に教議してくれたやつだ。
その時は、危ない奴だと半ば右から左に聞いていたが、なんだかんだで、その知識が役立った。
「そうか……すまんが、やっぱ今日はサボることにすんわ」
『お？　じゃぁ俺もサボることにするわ。ナンパにでも行かね？』
「いいのか？　サボったら小町ちゃんに嫌われるぞ。それに、別に遊ぼうと思ってるわけじゃない」
ナンパもそりゃぁしてみたいとは思う。だが、ストーカー野郎に殺されかけたのだ、今はそれどころではない。
『う……そ、それは……』
「というわけで、小町ちゃんには今日は休むと伝えておいてくれ」
『そんなの自分で言えよー』

……無理だから頼んでるってのに。

「良く考えな？　小町ちゃんと話せる機会を与えたいと思って言ったんだぜ、俺は」

『おお！　そういうことだったのか！　さすがは心の友だ！』

これで大丈夫だろう。斑鳩が、変なところで馬鹿で助かった。斑鳩からの電話を切り、次は俺から電話をかけた。

プルルルル、プルルルル、プルルルル――

斑鳩との電話の後、青山に電話してみるが、やつは一向に電話に出る気配がない。

「ちっ。まだ寝ているのか？」

俺は携帯をポケットにしまい、青山の家に行くために、一つ先の駅まで歩くことにした。とてもじゃないが、今、すぐそこの駅に行こうものなら、説教で時間をとられてしまう。

それに、ストーカー野郎を追いかけるためだなんて言ったって、どうせ信じはしないだろう。

目的地である青山の家まで、電車でおよそ四十分。さらにそこから、歩きで十五分ほど。だが今回は、更に一駅あるかなければならない。

一年の時に、一度だけ行ったことがあるだけだが、なんとかなるだろう。全く……ストーカー野郎のおかげで、とんだ出費と時間をくいそうだ。

一駅歩いて、駅の隣にあるコンビニで、消毒液と傷薬と包帯を買う。俺をみる店員の目が、明らかに怪しんでいたのはこの際無視だ。この時間なら、普通電車であれば座ることができるだろうし、怪我の手当もできる。

俺は切符を買い、ホームに出て椅子に座った。やっとこさ一息つ

けそうだ。
　携帯で時間をみると、１０時になろうというところだった。一時限目の休み時間も終わり、二時限目になろうといったところか。
　電車を待つ間、俺は再度、青山に電話した。
　プルルルル、プルルルル、プルルルル、プッ
（今度は繋がったか？）
『……もしもし？』
「青山か？　九鬼だけど、今いいか？」
『……何？』
　相変わらずボソボソと喋って、良く聞き取れない。
「ああ、実はなちょいと面白い物が手に入ったんでな」
『……』
「でな、そいつを今からお前のとこに持って行こうと思うんだが、構わないな？」
　青山の予定がどうあれ、行くのは決定事項として、話を少々無理に進めることにする。
『どんなやつ？』
　いつも間を置いて、聞き取りにくい喋り方をするこいつの声が、いくらか聞き取りやすく、間をおかずに直ぐさま返答した。
　興味のありそうなものならば、予定なんてものは、お構いなしな奴だ。だから俺も、多少強引に話を進めたのだ。
「ああ、カメラだ。小型カメラ。良くは分からないが、多分高性能だと思う」
『隠しカメラ？』
（こいつ、自分の興味のある時だけは、食いつきがいいな）
　俺は思わず苦笑してしまった。
「良く分からないからお前さんに電話してるのさ。お前に、こいつを見せて意見を聞きたいんだ」
『わかったよ』
「今家だよな？　学校に来てないんだし」

『家だよ。とにかく待ってる』
「ああ。それじゃぁ1時間後くらいに行くぜ」
それだけ言うと、どちらからとも知れず電話を切った。電話を切ったと同時に、電車がホームに入ってきた。

青山邸につき、出迎えてくれたのは、意外にも青山の姉だった。たしか以前ここに来た時も、青山の姉貴が出迎えてくれたはずだ。

その時は、休みの日だったからなんとも思わなかったが、今日は平日だ。もしかしたら、大学生なのかもしれない。
そんな青山の姉に、青山の部屋に案内されることになった。俺を先導する形で階段を上っていく青山の姉貴は、まるで男を誘うような足取りで、階段を上がっていく。
思えば前回も、こんな風に案内されたような気がしなくもない。
青山の姉貴は、沙弥佳や綾子ちゃんとは、また違ったタイプの美人だと俺は思った。尻のふちまで、そのラインがしっかりと分かるショートパンツを履き、少し焼けた健康そうな生足は、否応なく俺の本能を刺激した。
「しんちゃん、お友達、来たよ?」
「入って」
案内された部屋の中から、聞き慣れた声がしてきた。どうぞ、と手でジェスチャーされ部屋に入る。
「よぉ、悪いな、突然きちまって」
「……別にいいよ。それより……」
「ああ、これなんだが……」
部屋に入り、開口一番に催促した青山は、心なしか、興奮しているようにも見える。
きっと、興味がありそうなものを提供されたうえ、それが高性能

かもしれない、という期待からだろう。
俺は、ポケットからカメラを取り出した。青山はそれを手に取り、いつになく真剣な表情で調べだした。
俺には素人目でみても、せいぜいこいつが高性能なカメラらしいということしか分からない。
「何かわかりそうか？」
「見ただけじゃなんとも……でも今まで見たことがないタイプだよ」

「初めて見るタイプってことか」
「うん、そうなるね」
「そうか……」
「でもそれだけに、色々調べがいがありそうだけど」
「今から調べられるか？」
「やってみるよ」
そう言うと青山は、デジタルカメラでそのカメラを撮り始めた。
「何してるんだ？」
「……見ての通り、デジカメでカメラを撮ってるんだけど？」
「そんなのは見れば分かるさ。それでどうしようってんだ？」
「うん、僕には分からないから、これを知ってるかもしれない友達に聞いてみるんだ」
「そのためにわざわざ、デジカメで……」
みなまで言わず、俺は口をつぐんだ。青山の友達と言えば、ネットでの友達に決まっているのだ。
青山のやろうとしていることに気付いて、いちいち問いかけることはしなかった。良く類は友を呼ぶとは言ったものだが、それはネットの世界にも当て嵌まるようだ。いや、ネットの世界だから、なのかもしれない。
「しんちゃん入るね？」
その時、青山の姉貴が飲み物と菓子を持って、部屋に入って来た。お盆をテーブルに置き、青山の姉貴は青山に向きかえる。

すると、たった今の今まで仕事人の顔をしていた青山は、途端に表情が曇った。
「何してるの？　しんちゃん」
「……べ、別になんだっていいだろ……」
いつも何を考えているのか分からない、無表情な青山が、明らかに困惑と、恐怖感を滲ませたような顔をして見せた。
「もう。またお姉ちゃんに隠し事？　いつも隠し事はダメって言ってるでしょ？」
青山の姉貴は青山とは対称的に、明らかに場違いな笑顔をして見せていた。
「た、ただ、デジカメでカメラを撮ってるだけだよ……」
おずおずと答える青山に、姉貴はずいっと身をのりだす。その様子はまるで、支配者が奴隷にするそれと同じだった。
「……そう、ならいいけど。分かってると思うけど、もう二度”あんなの”カメラに撮っちゃダメよ？」
「……あ、ぅ……う、うん……わ、分かってるよ……」
俺はこの姉弟に、ただならぬ雰囲気を感じた。なんと言っていいのか分からないが、とても普通の姉と弟の関係には見えなかったからだ。
何か、ただならぬ何か……。まるで……まるで一線を越えてしまっているような……？
そこで俺は思考をストップさせた。馬鹿な。そんな漫画や小説みたいなことが、そうそうあるはずもない。俺はかぶりを振った。
「……ね、ねぇ……もういいだろ……友達が来てるんだ……」
いつものボソボソした喋り方。青山がこんな喋り方なのは、もしかしたら、この姉貴が原因かもしれない。
「……そうね。まあ、しかたないわね」
「……」
姉貴は俺の方を向き、ごめんなさい、ごゆっくり、と言い残し、部屋を出て行った。

「……く、九鬼くん」
「なんだ……？」
「……あ、その、……ご、ごめん……」
俺はただ肩をすくめ、
「気にしてないさ。お前も結構大変みたいだな」
と引き攣りながら笑ってみせた。

第5章

その後は、青山はまたさっきまでのイキイキとした目で、思いつく限りのことを教えてくれた。
全く、学校で普段がこれなら、女の子からも嫌われることもないだろうに。ま、内容は別として、だが。
「……ところで、九鬼くん。制服が破れてるみたいだけど」
俺の服を見て、いまさら青山が尋ねてきた。話に熱中しすぎたのか、顔が少し上気している。
部屋に入って来た時から、やや興奮気味だったのだから、もしかすると服が破れていることにも、気付いていなかったかもしれない。
「ああ、ちょっとな。どうってことはないさ」
俺は、要所要所をぼかしながら説明したが、まさか殺されかけたなどと言えるわけはない。
「ふーん……」
もしかしたら、こいつは勘が鋭いので、何も言わないだけで気付いたかもしれない。
「それならさ、これを持っていくといいよ」
何やら警棒のような物を、青山は差し出した。
「まぁ……電気が流れるようになってるんだ」
「つまり、スタンガンっていうやつか……」
「これなら、いざっていう時、武器になるよね」
「いいのか？」
「いいよ。その代わり……このカメラを僕にくれない？」
「別に構わんぜ。俺には不要なものだしな。何なら後二つ三つやってもいい」
「本当に？」
「ああ、何に使うかは知らんが、別に俺にはどうでもいいものだし

な」

それに、いつまでも部屋に置いておくことはできないだろう。沙弥佳が、しょっちゅう部屋を掃除するためだ。

青山は、そこはかとなく爛々と目を輝かせていた。

「その代わり、なるべく早く調べてほしい。あまり時間があるとは言えないんでな」

「うん、分かった。早ければ明日明後日には、ある程度のことは分かると思うよ」

「明日明後日には、だって？」

「うん……やっぱり今日中の方がいい……？」

俺は首を横に振った。

「いいや。もちろん今日中だって構わないが、明日明後日だなんて、思ってる以上に仕事が早くて助かるぜ」

それは本当だ。まさかそんなに早く、何か分かるかもしれないだなんて、思いもしなかったからだ。

こういうのことは、実際には四、五日で分かっただけでも早いという。ましてや、今までに見たことがないタイプの物であるにも拘わらず、だ。

それに俺はこの青山という小男を、信頼していた。確かに、クラスの連中からしたら、根暗で裏じゃ何をしているのか分からないようなこの男のことを、不気味だとか、危険なやつだとか言っているのは知っている。

もちろん、この俺もかつて、一年前に初めて同じクラスになった時は、そう思った。だが、こいつはただなんとなくつるんで、友達面して、いざという時には何もしてくれないような形だけの友達とは、俺は違うと考えている。

無理なことは無理とはっきり言い、できることはしっかりとやる。自分の分相応というのを、この若さにしてはっきりと自覚し、実践しているのだ。

それに気付いた時、俺はこいつにだけは、ただならぬ敬意を抱い

たものだった。以来、俺の中で青山は、周りがなんと言おうが、気のおけないやつだと思っている。

もちろん、利用してないと言えば嘘になるが、こいつを巻き込みたくないと思っているのも事実だ。

そうこう考えているうちに、青山は先程のデジカメで撮ったデータを、パソコンに取り込みはじめている。カチャカチャとキーボードを叩き始め、何やら画面の向こうの友達とやらと、文字で会話しているようだった。

「そいつがお前の言う、友達か？」

少し意地悪げに言った。しかし、青山はそんなこと気にもかけた様子でもなく、

「うん。もちろん彼以外にもいるけどね」

と、淡々と言った。

俺もブラインドタッチは少しはできるが、青山はそれに加えて、キーを叩くスピードが半端じゃなかった。そして、おもむろにメールソフトを起動させ、先程撮ったデータを相手に送信したのだった。

「……これで良し。後は向こうが調べてくれると思う。他にも何人かにこの画像は、　送るつもりだから、もしかしたら入手経路とかも分かるかも……」

「そんなことまで分かるのか？」

「うん。でも必ずではないけどね」

もし入手経路が分かれば、それを購入したやつが分かるかもしれない。だとすれば、これ以上に幸運なことはない。あのストーカー野郎の面だって、拝めるかもしれないのだ。

「それじゃぁ後は、お前に任すぜ？」

「うん、いいよ。他にも何か調べておくことはある？」

他にも、か……。

「……指紋とかは、どうだろう……？」

さすがに無理があるだろうが、どうせ駄目で元々なのだから、この際、出し惜しみなどせず、正直にいったほうがいい。
「……指紋……さすがにそれは一日、二日では無理だよ」
「一日、二日では無理でも、何日かかければ分かるのか？」
「……多分。でも、それなりにヤバイことになると思うし……」
なるほど。いくらヤバイ知識を持っていても、いざとなるとやはり怖いようだ。それに、自分がやっていることが、犯罪にすら成り兼ねないことも、しっかりとわかっているからなのだろう。まぁ、当たり前なのだろうが。
「分かった。その辺りまではやりたくないなら、やらなくてもいい」

「……ごめん。……でもなるべく善処するよ」
「別に、謝るほどのことじゃぁないさ。とりあえず、何か分かったら連絡してくれ」
「……うん」
最後には、またいつもの青山に戻っていた。

すませるべきことをすました後は、青山の姉貴が持って来た、飲み物や菓子を胃に収めて俺は、早々に青山邸を出た。
その際、青山の顔が、もう帰るの？みたいな顔をしていたのが気掛かりではあったものの、そいつは仕方ないというものだ。
というのも、トイレを借りるために部屋を出ると、なんと、そこには青山の姉貴がいたのだ。直ぐさま俺を見る顔が、先程までのお客さん向けの顔に戻ったが、　明らかに俺を疎ましく見ていたことは、隠しきれていなかった。
そんなものを見てしまうと、さすがに早くここから出たいと思うのは、当たり前のことだ。
まさかとは思うが、部屋を出て行った後、あのまま、あそこにいたんではあるまいな……。想像するだけで、背中に悪寒が走った。
それに……あの姉弟は普通じゃない。いや、正確に言うと姉貴

が普通ではないのだ。
俺は、先程思い浮かんだ、一線を越えているんではないかと、再び思い返してしまった。少なくとも、あれは普通の姉弟のする態度ではない。
そう、姉のくせに、まるで一人の女のように、嫉妬しているみたいだったのだ。ともかく、あの姉貴には近づかない方がいいと、俺の本能が告げていた。

「カメラのことは、とりあえずは青山に任せるとして……」
さて、これからどうするか。気付けば昼はとうに過ぎ、もう3時前になろうとしていた。青山のうちでかなりの時間、過ごしていたようだ。
「ま、腹も減ったし、とりあえず飯にするか」
俺は自販機でお茶を買い、駅に行く途中にあった公園で、遅めの昼食をとった。まぁ……弁当には相変わらずだ。……察してくれると助かる。

『まもなく○○に到着します。お降りのお客様は……』
電車内のアナウンスが、地元に帰ってきたことを告げる。
時間はすでに4時を過ぎており、駅には学校帰りの生徒達が多くいた。朝のことを思い出し、なるべく目立たぬようにしたが、心配はいらないだろう。
これならば、怪しまれることもなく、改札を出ることができそうだ。
それに、もう沙弥佳達も学校が終わっている頃だ。この調子ならば、ちょうど良い時間に学校に着くことができるだろう。
難無く改札を抜け、一路中学校へと足を向ける。途中、妹達の学

校の生徒達が、ちらほら歩いているのを見かけた。もしかしたら、もう校門辺りで待っているかもしれない。
俺は、半ば無意識に歩くスピードが速くなっていた。

「えへへ～♪」
案の定、沙弥佳達は校門のところで待っており、沙弥佳は俺の姿を目視するや、一目散に走って来た。妹は、相変わらず頬を緩ませ、俺の腕にしがみついている。
綾子ちゃんは、それをほほえましく思っているのか、優しい表情を浮かべていた。けれど、俺の破れた制服を見て、怪訝な表情をつくった。
「あ、あの九鬼さん……」
「ん？　なんだ？」
「その制服……どうしたんですか？　朝は破れてなかったですよね？」
「あ、本当だ。なんで破れてるの？　お兄ちゃん」
「んー、まぁたいしたことじゃない。危うく轢かれそうになって、ちょいと転んじまったんだ」
もちろん、嘘はついていない。
「えー！？　だ、大丈夫？　怪我してない！？」
「ちょいとすりむいて、打ち身になった程度だって。騒ぐほどじゃぁない」
これも嘘ではない……出血もするにはしたが、今はもう止まっている。そんなに心配されるほどの怪我ではないはずだ。
「そう……。ならいいけど……」
沙弥佳が上目使いに、心配そうに俺の顔を覗き込んできている。綾子ちゃんも何やら考えているようで、顔をやや俯かせながら、申し訳なさそうにしていた。
「そう心配するなよ。もう痛みもないんだ」
美少女と言っても良い、少女達から心配されるのは、何故だか悪

い気はしなかった。俺は、そんな二人を見て、苦笑せざるをえなかった。

翌日。

昨日から、いつもより早起きし、沙弥佳と綾子ちゃんの二人を、学校まで送ることが日課となった。もちろん、帰りも迎えに行くのもワンセットだが。

しかし、そうすることで綾子ちゃんが、少しでも気が楽になるというのなら、それで構わない。

そのせいか、昨晩、沙弥佳の言っていたところでは、うちに厄介になるようになってからというもの、綾子ちゃんは、少し変わったのだと言う。

俺には、どこがどんな風に変わったのかは分からない。けれども、綾子ちゃんにたいして、俺も父性本能とでも言うのか、庇護欲とでも言うのか、もやもやとしてなんとも言えないが、それらに近い感情が沸き始めているのは間違いない。

あのストーカー野郎にも、たっぷりとお礼を返さないと気が済まなくなった今では、綾子ちゃんといれば、その機会は必ず訪れるはずなのだから、文句などあるわけもない。

「はい、席についてー。HR始めるわよー」

小町ちゃんの声で、HRが始まる。今日は真面目に登校した。とは言っても、昨日が特別だっただけで、いつも真面目に学校には来ている。

……ま、成績がいいというわけでもないんだが。

「今日も特別何かあるわけじゃないから、いつも通りな」

小町ちゃんの口調は、相変わらず、教師とは思えぬサバサバっぷりだ。

「それと、九鬼。あんたは昼休みあたしんとこに来るように」

「……はぁ。はいよ」
「なんだい、そのため息は。大体あたしの仕事場でサボり決め込もうなんざ、１０年早いぞ」
「了解しましたよ、先生」
「ったく……これでもうちょっと成績が良くて可愛いげがあったら……」
……あったらどうしたというのだ。

昼休みになり、小町ちゃんのところに赴くべく職員室へ移動する。斑鳩や、その他数名の男子から、妬みの視線を浴びながら教室を出た。
教室を出たところで、青山が声をかけてきた。
「……九鬼くん」
「ああ、青山か。なんだ、例の件もう何か分かったのか？」
「……うん」
「よし。職員室から戻って来たら、詳しく聞かせてもらおう」
「……分かった」
こいつもこいつで、相変わらず単語一言しか喋らないやつだ。まぁ、欝陶しいのよりはマシだがな。
青山は、フラリと教室の中へと入っていくのを脇目に、職員室へと足をはこんだ。
「……でだ、分かってるのか？　九鬼。お前はもっとしっかりやればなぁ――」
「……はぁ」
小町ちゃんは弁当をつつきながら、かれこれ十数分に渡って、くどくどと説教をたれている。俺は説教を聞き流しながら、小町ちゃんの弁当を見つめていた。
てっきり普段のイメージからか、コンビニ弁当かなんかだと思っていたが、思いの外、手づくりのものであるようで、肉をメインに、それでいて野菜で色とりどりの中身は、女性らしくバランスの良さ

げなものだった。
普段の小町ちゃんは、意外と家庭的な女性なのかもしれない。
（しかし……一体いつになったら終わるんだ）
第一、喋るか食べるか、どっちかにしてくれ。気になってしょうがない。
「だからな、お前はそうなんであって――」
当然のことだが、説教など右から左だ。
この女教師は確かに美人だが、俺から言わせてもらうと、どうにも”女”というのを、いまひとつ感じられない。たとえ、その弁当がいかにも、なものであったとしてもだ。
本人の前では、口が裂けても言えないが、はっきり言って、オッパイキャラ以外の何者でもない。
やはり女というのは、綾子ちゃんみたいな……って、なんで綾子ちゃんがここに出てくるんだ。
「おい！　聞いてるのか、九鬼！」
上の空だったことに気付いたのか、小町ちゃんは更にヒートアップし、説教が終わったのは、予鈴が鳴った直後のことだった。
こうして俺は、昨日に続いて、弁当を時間に食べそこねたのだった。

教室に戻り、青山の姿を探したが、席を外していて見当たらなかった。代わりに、斑鳩達からの質問責めを受けることになるなんざ、全くついてない。

一日の授業が終わり、俺は斑鳩達から声をかけられるが、手でそれを制し、青山のところへと向かう。
「よぉ、昼休みは悪かったな。思いの外、小町ちゃんの説教が長くなったんでな」
「……うん、それはいいよ。予想もしてたしね」

「そうか」
青山は頷いた。
「で、悪いが弁当食わしてもらいながら、話聞かせてくれ」
「……うん、いいよ」
俺はバックから弁当を取り出し、昨日に続いて遅い昼食をとりはじめた。
「で、どこまで分かったんだ？」
「うん。まずあのカメラは、今まで見たことがなかったと言うのは、言ったと思うんだけど」
俺は飯を食らいながら、頷く。
「それであれが、最新のものであることは、予想がついてたんだ。だけど……」
「だけど？」
「なんて言うのかな……どうもあれは、一般に売られている物じゃないみたいなんだ」
「一般に売られてない？」
「うん」
青山は、簡潔だがはっきりと力強く声にした。
「じゃぁあのカメラは、一体どうやって手に入れたと言うんだ？」
「ごめん、それはまだ分からないけど……ただ、かなり特殊なものみたいなんだ」
「どういう風に特殊なんだ？」
「まず、素材からして普通の監視カメラとは違うんだ。
細かいことは省くけど、普通、監視カメラってプラスチックであったり、ちょっと大きい物であれば鉄製の外殻で、カメラそのものを覆ったりするんだけど、あれはカメラそのものが既に、外殻でできているし、鉄やプラスチックというわけでもないんだよ」
「……」
こいつは驚いた。あのカメラは、そんじょそこらじゃ手に入れられない代物だったらしい。

俺はもはや弁当を食べることなど忘れ、青山の話に耳を傾けていた。

「しかも、カメラそのものが、とてつもなく高性能なんだ。それにこれは友達とも話したんだけど、同規模のカメラとしては、間違いなく世界で一番の高性能カメラだと思う」

「……」

自分が思っている以上に、話が突飛すぎて、言葉を失ってしまった。

自分が何気なく手に入れたものが、まさか世界一などという評価を得ようとは、思いもよらない。確かに言われてみると、あれは監視カメラとしてはあまりに小さかった。

手で握っても、すっぽりと包みこめるほどだったのを思い出した。

「おまけに、赤外線カメラモードまでついてて、もはやただの監視カメラの域を越えてるよ」

「……それじゃぁ、入手経路なんてもう分かりそうにない、かな……」

俺は、椅子にうなだれてしまった。そんなご大層なものでは、まず市場に出回っていない。そこからの入手経路なんて、調べようもないではないか。

折角こちら側からの、最大の反撃材料になりかねないものだっただけに、ショックは大きかった。

「いや、まだ諦めるには早いと思う」

「まだ、何かあるのか？」

青山の言葉に、うなだれた頭を上げた。

「うん。あれだけ高性能で市販に売られてないと分かれば、かなり特殊な状況で作られて、かなり特別なルートで流されたものだと思うんだ」

「……なるほど。闇のルートってやつか」

噂には聞いたことがある。合法ではさばけないような代物を、高額でさばき、莫大な利益を生んでいるという話だが、前に本で読ん

だことがある。
その時は、半ば憂き世離れした内容に思えたが、今はそれが実感となって理解できた。最も有名で、最も悪質なのは、言わずと知れた麻薬だ。
しかし、例のカメラがいくら世界でもほとんど出回っていない物だとしても、そいつはいくらか考えすぎな気もした。おまけにそんな代物が、一カ所にいくつも取り付けられていたのだから、なおさらだ。
「……とりあえず、今分かってるのはこれくらい」
「ああ……すまんな、ありがとうよ」
「……いいよ。あんな高性能なカメラが手に入ったんだから、安いよ」
「ま、ことが片付いたら後払いで、後二つばかしやるよ」
その言葉に、青山は歓喜の笑みをこぼした。

青山と別れた後、話に夢中になって食べ忘れていた弁当を、急いで胃袋におさめ、足早に学校を出た。
斑鳩達が、終始俺と青山の話に、聞き耳を立て、まだかまだかと様子を伺っていたが、俺は、連中の遊ぼうと言う誘いを断って教室を出てきたのだ。斑鳩は明らかに不満そうな顔をしていたが。
（しかし……そんなものを、惜し気もなくストーキングの道具に使うなんてな）
青山の話を聞いた俺は、あの野郎のことを頭の中で反芻させていた。だが、これで情報をえることができれば、、ある程度の人物像は絞れてくるかもしれない。
そして、ただ一つだけ確信したことがある。このストーカー野郎は、ただのストーカーではなく、とてつもなくヤバイ奴なのだということだ。

どこで手に入れたか知らないが、普通では手に入らないカメラを、少なくとも3台は用い（恐らくはそれ以上）、対象に近づく者は、容赦なく攻撃し、あげくに対象を孤立させようとしているのだ。

事実、俺も一度は殺されかけたのだ。

だがな、ストーカー野郎。たとえ、お前が最狂のストーカーでもな、あくまでお前はストーカーに過ぎない。

社会不適合者なのだ。俺は、お前を許しはしない。もし、俺の周りの人間を傷つけてみろ、地獄の果てにだって追いかけて、お前をやってやるからな。

覚悟しておけよ……。

俺は一人、厳粛に誓いをたてた。

第6章

あれから一週間が経った。ストーカー野郎は、今のところ不気味なくらいに姿を見せない。

奴の姿を見たのだって、たった一度きりだけだが、例のコールタールのような視線を、ここ数日間、ただの一度も感じなかったためだ。

だがしかし、こういう時こそ油断してはいけないのだ。この数日間は、言うならば嵐の前の静けさと言っても過言ではないはずだ。

計算高い奴のことだから、何か企てる準備をしているに違いないのだ。この一週間は、こちらを油断させ、陥れるための準備と潜伏期間に違いない。

奴にとっての、この期間が後どれほどなのかは分からない。だが俺には、決して油断はないと思うんだな、ストーカー野郎。

「ねぇ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「例のあやちゃんのストーカー……最近何も音沙汰なくなっちゃったけど、諦めたのかな？」

沙弥佳の言葉に、綾子ちゃんもこちらをうかがっている。

「まだなんとも言えないが……俺は諦めてなんかいないと思う」

綾子ちゃんは、もしかしたらと思っていたのだろう、途端にその整った眉を眉間によせた。

「あれだけのことをするような奴だ、多分、そう簡単に諦めることはないはずだ」

時間は遡るが、俺は誓いを立てた翌日、休日ということもあって、青山を引き連れ、綾子ちゃんのうちに再び訪れた。本格的に、家の中にあるであろう、盗聴器や例のカメラを探すためだ。

青山は、俺にはよく分からない道具を使い、盗聴器を探し始めた。一高校生が持つような物ではないと思ったが、口にはしなかった。

沙弥佳と綾子ちゃんは、初めて会った青山に戸惑いはしたが、その内に打ち解けたようだった。沙弥佳も綾子ちゃんも、元々人を外見だけで判断しないため、青山の仕事を興味深げに見ていた。

結果、家の中には、ほぼ一部屋に一つから二つもの盗聴器がしかけられていた。例のカメラも、綾子ちゃんの部屋は言うに及ばず、二階のトイレや洗面所、脱衣所と風呂にあったのだ。

しかも、それらはうまくカムフラージュされ、青山の言うところでは、完全に、新しい物に取り替えられていたのである。

そして、その新しく取り付けられた物に、例の高性能カメラを仕掛けたのだ。全く……あまりの徹底ぶりに、俺はもはや呆れてものも言えない。

当然、綾子ちゃんはそれらが見つかっていく度に、顔面を蒼白とさせていったのは、言うまでもなく、さすがの妹も、最初のように興味津々とはいかなかったようだ。

特に、自分の部屋に仕掛けられていた時には、あまりの気恥ずかしさに、部屋に入ろうとすらしなかった。

けれど、不謹慎な話、俺は別の意味でドキドキしてしまっていた。きっと青山にいたっては、なおのことだろう。

その後、綾子ちゃんの家を出て、再びうちにもどってきた。もちろん、青山も一緒だ。今度はうちを、例の機械を使って探索してもらうためだ。

綾子ちゃんがうちに来てから、そういったものが仕掛けられていないと限らない。　それに、うちは綾子ちゃんの家に比べ、比較的侵入しやすい作りなのだという。

なるほど、ならばうちにもそれがないかどうか、確かめてみたくなったのだ。うちは昼間は、誰もいなくなりがちだ。それを考慮すれば、しておくに越したことはない。

案の定、早速いくつかの盗聴器がしかけられていた。数そのもの

は、綾子ちゃんの家の比ではなかったが、これには俺も沙弥佳も、開いた口が塞がらなかった。

例のカメラも一応探してみはしたが、見つけられなかった。

カメラは、かなり徹底されたカムフラージュが施されていたことを考えると、そう簡単に、取り付けられるものではないと言う。

青山は、一通りの仕事を終えると、俺に機械の使い方を教え、帰っていった。さすがにいくらなんでも、毎週毎週、付き合わせるわけにはいかない。

俺は帰り際に、礼を言い、移動中に青山の姉貴が、なぜか事あるごとに視界に映っていたことを告げると、綾子ちゃんに代わって、今度は青山が顔を青くさせていった。

「……でも、とりあえず今すぐにでも、奴が何か仕掛けてくるとは思えないけどな」

二人を少しでも安心させようと言うが、そんなのは、気休めに過ぎないのは分かっているつもりだ。

二人を学校に送り届け、俺も高校へと向かう。

青山に依頼した件も、まだ全容は掴めていないし、奴も何も仕掛けてこない。自分で動こうにも、頼みの綱である、青山がまだ分からないと言うのなら、八方塞がりというものでどうしようもない。

何かあれば随時、俺に連絡するように言ってあるから、今は焦らない方がいいだろう。

（とにかく、青山の結果待ちだな……）

俺は小さくため息をついた。

放課後、教室から出ようとした時、青山に呼び止められた。

「九鬼くん。ちょっといい？」

「ん？　ああ」

この数日、青山は人が変わったように思う。まず、喋り方が以前のようなボソボソとしたものではなくなっていた。依然、小声ではあるが。

どうも聞くところによれば、彼女ができたということだった。最初は、その話を聞いて羨ましいと思ったりもしたが、相手のことを聞いてゾッとした。

ショートパンツを履いた、溌剌とした年上のお姉さんだった、という話だったからだ。青山の家にいった際に、脳裏をよぎったことが再び、蘇ってきたのだ。

この先、こいつがどういう人生を歩むかは知らないが、決して穏やかなものではないと悟った。

この男の雰囲気が変わったのは、その覚悟の上だからかもしれない。

「……ここじゃちょっと無理そうな内容か？　って、当然か」

青山は頷いた。今、掃除当番達が教室を掃除し始めようとしていたので、俺たちは例の技術棟へと赴いた。

「ね、ねぇ……ここって入っちゃいけないんじゃなかったっけ？」

「まぁ、本当はな。でも、意外に大丈夫みたいだからさ」

俺達は、技術棟の屋上への扉がある場所まできた。それにここなら、気兼ねすることなく話せると思ったからだ。

「例の件のことだろ？　話を」

聞かせてくれ、とまでは言えなかった。

「あなたたち、何してるの？」

突然の声に俺達は驚いて、階下に目をやった。そこにはあの女、藤原真紀があの時と同じくして、そこにいた。

「とりあえず、あのカメラのことだけど……」

あの後、藤原真紀に屋上の扉を開けてもらい、屋上で話を聞くこ

とになった。
「どうも、ある大企業が依頼して作ったもののらしいんだ」
「ＺＯＮＹとかか？」
青山は首を横に振った。
「分からない。それ以上、秘匿になっていては無理だったみたいだから。ただ、作るよう依頼したのは、ある製薬会社なんじゃないかって。でも、あれは逐一監視する目的で作られたのは、間違いないよ」
「製薬会社？　製薬会社がなんだって、そんなものを……まぁいい。いずれ分かるかもしれないしな。
それでその口ぶりからすると、あのカメラ、使ってみたのか？」
青山は、意味ありげな含み笑いをしながら続ける。
「試しにね。はっきり言って、ただの監視カメラのレベルじゃないけどね、あれは」
青山が言うには、昔の劣化したビデオテープから、一気に最新のブルーレイにまで飛躍している程なのだと言う。
「……何か、別の目的があって作られたってことか？」
「それも分からない。でも、友達も同じことを言ってたよ」
「まぁいい。それも気にはなるが、問題はどうしてそんなものを、何台も奴が持ってたかってことだ」
「いくつか推測はできるけどね。そもそも、その依頼した企業の人間だったとか。もしくは、作った企業側の人間だった、とかね」
「……あるいは、元々非合法のものを売りさばく売人、か」
「それもありうるね」
「だが、もし仮に売人だとして、本当に自分の商品なら、売らずにあんなことに使ったりするものかな？」
「どうだろ？　でも、九鬼くんの言うストーカーなら、ないとも言えないかも」
確かにそうだ。奴は、邪魔になった俺を殺そうとしたのだ。利益うんぬんなんてものは、どうでもいいかもしれない。

もちろん、それは推測の一つに過ぎない。奴が、ただの客の可能性だってある。

「奴が客の可能性もあるよな？」

「もちろん、ないとは言えないね。今だったら所謂、株長者っていう人種もいるしね」

「なるほど。株で稼いだ金で、趣味の悪いことにつぎ込んでいるわけだ。そいつが本当なら、全く、金使いのいいこったな」

「それに、あれがいくら市場に出回っていないと言っても、企業が全くの無償で作っただなんて考えられないよ。

企業間にしろ、なんにしろ、かなり法外の値段がすると思うんだ。一台だけならまだしも、個人で何台も所有するには、相当なお金が必要なのは間違いないよ」

青山のいうことは、ごもっともだ。

青山が黙り込んで、再び口を開きかけたとき、先程まで素知らぬ風に、俺達から少し離れた場所にいた真紀が、口を挟んできた。

「それはどうかしらね」

「なんだ？　……部外者が口挟むもんじゃぁないぞ」

「そうね。でも考えが纏まらない時こそ、第三者の意見も取り入れるべきじゃない？」

「あんた、話、聞いてたのか」

「別に聞きたくて聞いてたわけじゃないわよ。たまたま耳に入ってきていただけ」

青山は、どうもこの女が苦手のようで、態度にそれが出ていた。もちろん俺だって、あまり好きではない。外見が悪くないだけに、妙に癇に障るのだ。

「……そうかい。で？　その第三者の意見ってのを聞かせてくれよ」

「あら、聞く気になったの？」

「あんたが言い始めたんだろ。さっさと言いなよ」

「もう、せっかちね。まぁいいわ。あなたたち新聞は読む？」

「一体なんの話だ。俺はそんなこと、これっぽっちも聞いてないぞ」
「いいから。新聞は読む？」
「ちっ……読むけど、それがどうした」
青山も、続いてそれに肯定する。
「新聞って、いかに早く、いかに正確に情報を伝えるかというのが、役割よね」
真紀は、俺と青山の顔を交互に確認して、話を続ける。
「でもね、その情報がもし、必ずしも本当でなかったら？　起こった事柄が本当でも、その内容が歪められていたら？　……そう考えたことはない？」
一体何が言いたいのだ、この女は……。
「誰かに意図的に、情報操作されてると言いたいのか？」
「まぁ、そうなるかしらね」
真紀は、俺の目を見据えながら言った。
「……ない……とは言えないと思う」
「おいおい。青山はこんな女の言っていることを、信じると言うのか？」
「もちろん、全て信じているわけじゃないけど、例えば、内容をぼかしたりなんかはあるかも」
「内容をぼかすだって……？」
「うん。こういった情報操作なら、現代に限らず、昔から行われてることだしね。
歴史だってそうだよね？　実際には違っていても、その時代の権力者によって、良いように歪められてる部分って結構あるからね」
「た、確かにそれはそうだが……」
かと言って、それを今当たり前のように言われても、俄かに信じがたい。
「それで君は……それが今回のことと何かが関係してると？」
青山が、遠慮しがちに真紀に問い掛ける。

「つまり、入手方法よ。必ずしも売人だとか、客とは限らないでしょ？」
「なんだそれは？　だとしたら後は盗っ人くらいしか考えつかないぞ」
「ちゃんと分かっているじゃない」
真紀は、薄く笑いを浮かべた。その仕種は、とても自分と同世代とは思えないほどの妖艶さを醸し出していて、俺は思わず生唾を飲み込んだ。
「お、おいおい、だとしても、どうやって盗み出すってんだ。第一、それと新聞の話がどう繋がってるってんだ？」
真紀に感じてしまったことを、悟られないよう、つい、語気を強めてしまう。
「さあ？　それは調べないと分からないわよ。あくまで他にもやり方があるんじゃないって話でしょ」
……全く、本当にこの女とはやりづらい。しかし青山は、手を顎にあて、何か考えているようだ。
「一般にはで手に入れられない……盗っ人……情報の隠蔽……」
……なんなんだ、一体。青山は深く考え出すと、人の呼びかけにも反応しなくなる癖があったようだった。俺が何度も呼びかけても、反応しなかったからだ。
しばらく一人考えていた青山が、ふいに俺に話しかけてきた。
「九鬼くん。綾子ちゃんがストーカーされるようになったのって、いつ頃から？」
「俺も詳しくは知らないな。それと何か関係があるのか？」
「ちょっと思い付いたことがあるから、調べてみようと思って。帰ったら綾子ちゃんに聞いてみてくれないかな？」
「……何がなんだかわからんが、聞いておいてみよう」
「ありがとう、大体でいいから。とりあえず、分かったら連絡してほしい」
「分かった」

真紀は何か勘づいているのか、ほくそ笑んでおり、青山は青山で、何を考えてるのかさっぱりだった。
俺一人だけ理解していないのは、なぜこんなにまで、疎外感を感じるのだろう……。

青山と屋上で解散した俺は、荷物を取りに一旦教室へ戻ると、時刻はすでに十六時を大きく回っていた。これでは、中学校に着く頃には十七時を過ぎそうだ。随分と青山達と話し込んでいたらしい。
携帯を取り出し、沙弥佳に電話する。何度目かのコール音が鳴った後、沙弥佳の美声で、電話でおなじみの喋り文句が聞こえた。
「もしもし、沙弥佳？　悪い。今からそっちに行くから、もうしばらく待っててくれ」
『もう、お兄ちゃん遅いよー』
「悪かったって。そん代わり、帰りにうまいもん奢ってやっから」
『本当！？　だったらキシマイ堂のパフェがいいな～』
「よりによってあそこのかよ……あそこ美味いけど、高いんだよな……」
『でもお兄ちゃん、おいしいの奢ってくれるって言ったよね？』
「い、いや、そうじゃなくて、別にあそこのじゃぁなくても良くないかって意味だ」
『私と綾子ちゃんは、キシマイ堂のパフェが食べたいのです』
「綾子ちゃんもって……絶対口からでまかせだろ、それ……。単純におまえが食べたいだけだろ？」
『それはどうかな～？　はい』
一拍おいて、今度は綾子ちゃんの声が、流れて来た。
『ぁ、もしもし。あ、あの……わ、私もキシマイ堂のパフェ、食べたいです……』
なんということだ。君もか、綾子ちゃん……。

『へっへっへ～。２対１だね～お兄ちゃん！』
いや、きっと沙弥佳は最初から、これを機に、俺に何か奢らせようとしていたのかもしれない。
「くっ……後で覚えてろよ」
俺は妙な敗北感を覚えながら、電話を切った。

現在、１８時になろうというところだ。家とは反対方向の電車に乗り、俺達は今、キシマイ堂というカフェにいる。
この店は、カップル達の間で有名な店で、ある特定のカップルがここで、ある特定はの物を頼むと、既成事実を作ることができると、専らの噂らしいのだが、何の既成事実であるかは、俺は知らない。
まぁきっと、良くあるジンクスというやつなんだろう。
しかし、この店に入った時、なんとあの青山の姉貴と顔を合わすことになろうとは、思わなかった。どうやら、ここでアルバイトしているようだったが、それにしても驚いた。
しかも接客の際、ありがとう、あなたのおかげです、なんて意味深なことを言われたら、なおさらだ。
本能が、深く追及するなと告げていたので、何も言わないでおいたが、それはきっと、青山の最近の態度とも、何か関係があるに違いないと確信した。
「えへへ～いただきま～す♪」
「あの、九鬼さん、いただきます」
「どうぞ。いただいちゃってくれ」
二人は、特大パフェを二人で食べるつもりらしい。はっきり言って、俺には例え二人でだとしても食べ切れる自信はない。まぁ、それくらい大きい。　まさに書いて字のごとく、特大である。
それにしてもこの二人が一緒にいると、どんなことも絵になってしまうのが不思議だ。目の前の美少女二人は、そんなのどこ吹く風

と言わんばかりであったが……。
とはいえ、これで聞きにくいことも、聞きやすくなると言うものだ。
「なぁ、綾子ちゃん。ちょいと聞きたいことがあるんだが」
「はい？」
綾子ちゃんは、その食べる手を止め、体ごとこちらに向けた。当然のように一旦スプーンを置いて口を拭いている様は、とても優雅で一分の隙もない。
「綾子ちゃん、ストーカーされているように気付いたのって、いつくらいか覚えてるか？」
「え？　……そうですね。三、四ヶ月程前からでしょうか……」
「四ヶ月前か……。すまん、ちょっと電話してくる。すぐに戻るよ」

「はーい。いってらっしゃーい」
……妹よ。お前はもう少し、綾子ちゃんを見習ってくれ。
俺は、携帯を取り出しながら店内から出る。三回目のコールの途中、青山が電話に出た。
『……もしもし』
「よぉ。今綾子ちゃんに聞いてみたんだが、ストーカーに気付いたのは四ヶ月くらい前からららしい」
『四ヶ月前か……』
「なぁ、お前さん、さっきもそんなだったが、一体何を考えてるんだ？」
『うん、ちょっとね。まだ確信できていないし、なんとも言えないけど、ストーカー正体が掴めるかも』
「ストーカーされてるのに気付いた時期が、それに必要だってのか？」
『うん。正確には、その期間前後に、ニュースで何か起こってないか調べたくて。
それに今回の事件は、結構根が深いような気がしてね……』

正直、そいつは考えすぎなんじゃないかと思うが、口にはしなかった。

「分かった。後、何か聞いておかなくちゃならないことはあるか？」

『今のところ、特にはないよ。結果はすぐに分かると思うから、明日にでも学校で』

「分かった。相変わらず、仕事が早くて助かる」

むしろ、早すぎのような気もするが、それは本当だ。そもそも、いくら正体を掴めるかもしれないと言えど、この程度のことで、本当にそこまでのことができるのか、あまり期待はしていない。

「それじゃぁ何か分かったら、明日詳しく聞かせてくれ」

『うん、そのつもり。それじゃあまた明日』

俺は電話を切って、店内に戻って行った。

電話での青山とのやり取りは、わずかに三、四分にすぎないはずだったが、あの特大のパフェは、すでに残り半分もなくなっていた。

女は、甘いものは別腹というが、全くその通りだと、つくづく思いさせられた。

「よぉ青山。調べついたか？」

翌日の放課後、俺は青山を昨日のように技術棟の屋上に呼び出した。不本意ながら、藤原真紀も一緒だ。

「うん。やっぱり持つべきは友だね。かなり面白いことがわかったよ」

青山が、持つべきは友だなんて言うと、笑えてしまうのはなぜだろう。

「ふむ。どんなことが分かった？」

「まず、もう五ヶ月近く前の話なんだけど、K県Y市でトラックによる交通事故があったんだ。単独事故みたいなんだけど」

「単独事故？」

「もちろん、事故そのものは決して珍しいものではないんだけど……中身がね」
「なんだったんだ？」
「うん。……当時の記事には、トラックが運んでいたのは、デジタル機器としか書かれていなかったんだけど……。調べてもらったら、どうも、これがただのデジタル機器ではなくて……」
「あのカメラだって言うのか？」
つい力んでしまい、凄んでしまった。青山は、ややためらいがちに頷いた。
「確証はないよ。でも、最新のカメラのような物だったことは間違いないみたい。それもかなり小型のね。話を聞く限り、そうとしか考えられないんだよ」
青山は続ける。
「そして、その事故がただの事故なら、あまり気にもならなかったんだけど、そのトラックの運転手が、謎の失踪をとげてるっていうのに引っ掛かったんだ」
「行方不明？」
「おかしいでしょ？　テレビでは話題にすらしていなかったようだし、当時の記事も、扱いがすごく小さかったみたいなんだ。事故ってだけで、少なくとも、その日のニュースくらいにはなるはずなのに」
言われてみれば、確かにそうだ。　ほとんど話題にすら上がらなかったのは、おかしい。
「確かにおかしな話だな。普通、運転手が行方知れずときたら、ワイドショーのいいネタになるはずだしな」
「ワイドショーどころか、翌日のトップニュースだってありうるよ」
青山の言葉に、俺は頷いた。
なぜかその時、漠然と俺に不安がよぎった。ストーカー野郎とのこともあり、この事故と今回のこと、見えない部分で繋がっている

ような気がしてならなかったからだ。
「それにね、事故の対応も凄く不審なんだよ」
「どういうことだ？」
「普通、事故があれば、必ず警察が来るよね？」
「ああ。昔、自転車に乗ってるときに原付きにぶつけられたことがあったが、その時にだって来たな」
「そう、よほど小さなものじゃない限り、たいていの場合、警察は来るものなんだけど、この時は、警察の前に別の人達が来て対応したらしいんだ」
「別の人達だと？　なんなんだ、その別の人間ってのは」
「残念だけど、そこまでは……。ただ、トラックの荷台にあったものと、運転手を探してたのは、間違いないみたい。
その人達が帰って後に、警察が来たみたいなんだけど、どうもその人達が警察に連絡させなかったみたいなんだ」
それは珍妙な話ではないか。まるで警察が来る前に、撤収しなければならない理由でもあったというのか？
「その事故のあった近辺に住んでる人達に、友達がわざわざ聞いてくれたみたいでね、この辺の話は、信憑性を持っていいと思う。
おまけに、そのトラック、タイヤが破裂したみたいになってたって話だよ」
「なるほどな。でもな青山。そいつと今回のストーカーとどう結び付くというんだ？　まるで、その事故の当事者が今回のストーカーとでも言っているみたいだ」
「……実はね、九鬼くんからもらったカメラから、指紋が出てきたんだ。信じられないかもしれないけど……」
「おいおい、まさか本当に、指紋まで特定したのか？」
「あ……ま、まずかったかな、やっぱり」
「いや、そんなことはないぞ。ただ、あまり乗り気じゃぁなかったろう？　だからな……」
そう、まさかこの青山が、そこまでのことをしてくれるとは思わ

なかったのだ。
「……で、データベースにアクセスしてみたんだけど」
なんと、この男は身の危険を省みず、データベースにアクセスしたらしい。こいつは想像以上のハッキング能力があるようだ。
だが、そんなものにアクセスすれば、指紋はおろか、その人間の学歴・職歴、趣味や性格、場合によっては、遺伝情報すら得られることだってあるのだという。
「何かひっかかったのか？」
「……うん」
青山が、妙な間をおいて肯定するが、何かが納得いかないといった風だ。
「……その、はっきり言うと……その指紋の人物はすでに、死んでる……みたいなんだ」
「……なんだって？」
多分、この時の俺は、間抜けな顔をしていたことだろう。青山が口にしたことは、それほどに予想だにしなかったことだった。
その男の名は、蒲生義則（がもうよしのり）というらしい。
「おいおい、まさかお前は幽霊がストーカーしているとでも言いたいのか？」
「まさか。僕は幽霊は信じているけど、それとこれは全く別と思ってるよ」
だとしたら、最近やつが現れないのももしや死んだからなのか？
しかし、こうも都合良くこのストーカー野郎が死ぬだろうか。
死亡時期がいつかにもよるが、俺は淡い期待を抱きざるをえない。
「そいつが死んだのは、いつか分かるか？」
「もちろん。すでに、1年以上前に死んでるよ」
もしやとは思ったが、やはり違ったようだ。だが、この蒲生という男が何かしら関わったと思われる代物が、こんな犯罪に使われていたのだ、こいつは、色々と調べてみる価値はあると言えるだろう。

「……確か、指紋というのは三〜四年なら、残ると聞いたことがある。そいつが最後に触ったのが1年前だとしたら、あのカメラに何か関わった可能性はないかな？」

「ないとも言えないね。でも結局は、なんの打開にもならないかもしれないけど……」

「……そうだな、お前の言う通りだ」

結局は、直にあの野郎を捕まえないとなんの意味もないのか。するとここで、今まで黙っていた真紀が口を開いた。

「……あなたたち、さっきからすごく面白いこと言っているけど、単純にその人が関わった人を調べれば良いと思わないの？」

「「あ……」」

俺と青山は興奮で、そんな単純なことにも気付かないほど、冷静ではなかったようだ。

第6章（後書き）

アクションというより、今現在ちょっとミステリーっぽいかもしれません（たいしたものでもないですけども…）。

第7章

結局、あの後作戦会議は終わり、俺達はお開きとなった。青山が例の彼女とデートの約束があるらしく、帰らなくてはいけなくなったからだ。

青山が去った後、真紀が、人って見かけによらないのね、と言ったのがなぜか印象的だった。続けてあの女狐は、あろうことか俺をデートに誘ってきたが、丁重にお断りしておいた。

いくら恋人が欲しい年頃だと言っても、俺にだって多少は選ぶ権利があるというものだ。

ともあれ、今探るべきことは、カメラに付着していた指紋の持ち主である、蒲生という人物の人間関係や仕事、とにかくあらゆる情報が必要だ。

すでにストーカー野郎が、俺達の周りをうろつかなくなって丸一週間以上。その間に、盗聴機なんてものを仕掛けては来たが、目立った行動は起こしていない。そろそろ何かしてきてもおかしくないはずだ。とにかく一刻も早く、何かしら奴に結びつきそうな情報が欲しい。

今にして思えば、一度奴と対峙したときに、是が非でも追いかけておくべきだったかもしれない。何もかも手遅れになってしまっては、何の意味もないのだ。

手札が何もない今、焦っても仕方ないとは言え、どうしても焦りが出てしまう。とにかく今は、青山に任せるしかない。

俺は俺で、自分が今できることをするべきだと、自分に言い聞かせた。

『……！』

『さや……待ってろ、いま……！』

なんだ？

今俺は、夢を見ている。それは自分でも、はっきりと分かる。

『……いちゃん……ごめ……』

あれは沙弥佳だろうか。　何か言っているようだが、うまく聞き取れない。

なんだ、何と言っている？

『お兄……私……ゃんのこと……』

直後に何かが爆発したようで、その爆風によって巻き上げられた砂や埃に遮られ、最後の方は何を言っているのかは分からなかった。

なんだ？　今なんと言った？

――次に俺の目の前で爆発が起こり、轟音が鳴り響いた。

「……ってぇ……」

俺はいつもと違う目覚めの感覚に、目を醒ました。体を起こし、周りを見回す。

「……おれの部屋……だよな」

目を醒ますと、自分が今ベッドではなく、床にいることに気がついた。どうやらベッドから落ちて、体をぶつけたらしい。頭はどこも痛みを感じなかったので、頭はぶつけなかったようだ。

のそのそと、再びベッドに潜り込み、枕元にある時計を見ると、６時半を過ぎたところだった。

「後十分か十五分もしたら沙弥佳が起こしにくるな……」

まだ覚醒しきっていない頭で、ぼんやりと天井を見ながら呟いた。

（沙弥佳か……）

俺は、さっき見た夢を思い出だしていた。

さっきの夢はなんだったのだろう。まるで、壊れかけたテープのように、音が途切れ途切れになっているような感覚。

そもそも夢の中なのだから、音があったわけではないが、音を実感しているかのようだった。背景がどんなものだったかは、覚えていない。夢の中なのだから、背景があったのかも怪しいが。

ただ、そこには俺と沙弥佳が何かに巻き込まれ、とても危険な状況であったということだ。

そして、沙弥佳が最後に言おうとした言葉……。

カチャ

突然、部屋のドアが開けられる音がし、思考が停止する。沙弥佳が入ってきたのだ。

「お兄ちゃ～ん……って、まだ寝てるよね」

なぜかその時、俺は寝たふりをしてしまった。別にそんなことをする必要などなかっはずなのだが。

（何をしているんだ、俺は）

「えへへ～お兄ちゃんの寝顔だぁ……やっぱり可愛いな」

沙弥佳がすぐ横に来て、俺の頬を指で軽く撫でる。

「お兄ちゃんのこんな顔見れるのも、私だけの特権だもん……」

何か、いつもと違う感じがした。そもそも、この時間に自分から目が覚めるということ自体ないのだから、妹が朝、俺の部屋に来て起こす前のことなど、知る由もなかったのだが。

「ねぇ。お兄ちゃんは知らないと思うけど……今、お兄ちゃんって学校の女の子の間じゃ有名なんだよ？」

女の子に限らず、そりゃぁそうだろうな。学校まで両手に花なのだ。おまけにその二人は美少女で中学生、俺は高校生だ。

「いつもね、クラスの女の子達から紹介してって言われてるんだよ……普段、私と話したこともないような子だって……。

お兄ちゃんのこと何も知らない癖に……お兄ちゃんの外見だけで、中身なんて全然見ていないような薄汚い子達になんか、紹介できるわけないのに」

本当、馬鹿だよねと付け加えた。

……なんなんだろう、この感じは。妹のいつもと全く違う声のトーンに、俺は戸惑いを禁じえなかった。

「あやちゃん……あやちゃんは、本当に私の友達だったから紹介しただけなのに、調子に乗って私にも私にもだなんて……」

沙弥佳は、寝ている俺の体にしな垂れかかってくる。今ここで起きた方が良かったのかもしれないが、タイミングを逃してしまった。

「でもね。最近……お兄ちゃん、私のこと見てくれる時間、すごく減った」

つい今しがた、起きるタイミングを逃したせいもあるだろう、今すぐに起き、そんなことはないと言いたかったが、理性がそれを拒んだ。

「……お兄ちゃん、最近あやちゃんのことばかり見てるよね……ねぇ、なんで？　それに……私が話しかけてもどこか上の空で、いつも何か考えてる……それがすごくつらいよぅ……」

まるで俺が起きていることを悟っているかのように話す沙弥佳の手に、俺の肩が掴まれ、力がこめられていく。

「ねぇ……もっと私のことも見てよ……あやちゃんばかりじゃイヤだよ……。それにお兄ちゃん、他にも別の女の子の匂いがするよ……学校でお兄ちゃんに近づく泥棒猫がいるの？」

その独白であるはずの問い掛けに、俺はドキリとしてしまった。

その際、体が一瞬揺れてしまい、俺の身体にしなだれていた沙弥佳も驚いて、身を起こしたようだった。

「お兄ちゃん……？」

起きていることがバレたかもしれない。　仕方ない、起きたふりをしてやり過ごすしかないか……。

「ん……重いぞ」
「あ……」
まだ完全に身を離していなかった沙弥佳は、俺から離れていった。その目尻に、少し涙を滲ませながら。
自分でも分かっていたのか、急いでそれを拭いさる。
「えへへっおはよ、お兄ちゃん」
「ん……おはよ、沙弥佳。……目、どうした？」
自分自身でもヘドが出るほどの白々しい嘘だ。だが、気付いていたと思わせてはいけない。
「え！　あ……な、なんでもないよ！　ちょっと目にゴミが入っちゃって！」
「ん……そうか。とりあえず出てってくれ、着替えるから」
いつもならば、この台詞の後は哀しそうな顔をするはずなのに、今日は笑顔だった。それが余計に痛々しく見える。
「うん、先に下行ってるから」
沙弥佳は、笑顔のまま部屋を出ていった。
……くそっ、せめて、おはようくらい言えなかったのか、俺は。
俺はなんともやりきれない思いになったまま、制服に着替えた。

「面白いことが分かったよ、九鬼くん」
放課後、青山が珍しく興奮気味に話しかけてきた。　俺達は、また例によって技術棟の屋上に来ている。
藤原真紀は、待ってましたと言わんばかりに扉の前にいた。聞けば、なんとなくよと短く、愛想もなく答えた。
まぁ、この女に愛想なんていうのがあったとしても、それはそれであまりいい気持ちにならないだろうが。
「まず、蒲生義則についてだけど、製薬会社の営業マンだったみたいだね」

「製薬会社の営業マン……サラリーマンか。それにその製薬会社って、まさか……」

青山はその問いに頷いて、肯定した。

「それもかなりやり手だったみたいだよ。しかも、その蒲生義則の勤めてた会社がK県のY市にあるんだ」

「Y市？　確か例の事故があった場所だな」

「そう。蒲生義則は、やり手だった分、周りとは良い人間関係を築けてなかったみたい」

「まぁ、よくある話だな」

俺は頷きながら、先を促した。

「いや……ちょっと違うかな？　蒲生義則はむしろ、その仕事ぶりが嫌われる要因だった感じかな」

「グレーゾーン商法ってやつか……でも、人によっちゃぁ稼げてるんなら、それでいいって奴もいたんじゃないか？」

「うん……いなかったことはなかったと思うよ」

「いなかったことはなかった？　何か含みのある言い方だな」

「……蒲生義則に肯定的だった人は、何人も死んでるみたいだから」

「死んでる……？」

こいつはいよいよきな臭くなってきた。指紋の人物は死に、それに関わり（しかもその人物に肯定的な人間）を持った連中も仲良くあの世行きとなれば、さすがの俺でも怪しいと思うし、興味もわくというものだ。

「それもかなり不自然な、ね。ある人は列車との事故で、またある人は車との正面衝突で……他にも水難事故だとか。

とにかく事故が起こりそうもない状態で起こってるんだ。水難事故に至っては、別に嵐でもなかったのに転覆してる」

俺は言葉も発さずに、青山の説明を聞いていた。ただのストーカー事件から、とてつもない事件に遭遇してしまったものだ。

「最も不審だったのは、今井という人なんだけど……殺されてる…

…みたい」
「殺人……？」
「それも首がこう、ね……」
青山は、自分の首を切ったようなジェスチャーをしてみせる。つまり、それは首から上がなくなったということか……。
「……それでお前は、他の人間がどうなったかも調べたというわけか」
「うん。詳しい話は長くなるからやめるけど、この人物は、かなり蒲生義則に懇意していたみたいで、蒲生義則の勤めていた会社の営業記録にも、何度も今井といい人物と会っていたことが分かるよ。
それに……他の皆も、事故に見せかけて殺されたんじゃないかと僕は思うんだ。物的証拠はないみたいだけど、いくつかの状況証拠があったようで、なのに事故として発表されたって感じだからね」
青山は興奮し、一気にまくしたてたが、一旦深呼吸して気持ちを鎮めている。
「しかも、それらの事件は全て蒲生義則の死亡後にあったってこと。まるで蒲生義則の亡霊がやったみたいにね」
「製薬会社の営業マンが、何故カメラを持ってたか……ってことも疑問だな」
「きっと蒲生義則も死んだ……ううん、多分、蒲生義則も殺されたんじゃないかと思うんだけど、理由はあのカメラにあるんじゃないかと思う。それで……」
青山がまたも珍しく、こちらを上目使いに窺ってくる。多分、こいつのこんな仕草は、そういう趣味の女にはたまらなく感じさせそうだなどと、どうでも良いことを考えてしまった。
「なんだ？」
「……そのさ、行ってみない？」
「どこにだ？」
肝心の主語が抜けていて、さっぱりだった。
「だから……蒲生義則の家にだよ」

きっとこの時、俺の目は点になっていることだろう。

さて、青山の提案で俺達は、蒲生の家に来ることになったわけだが。

「紹介するよ、九鬼くん。僕の友達の徳川さんと織田さん」

青山に提案された翌日が祝日で休みとあって、蒲生の家に赴くべく駅で待っていると、そこに青山が二人の男を連れてきた。

徳川と呼ばれた男は、俺よりも少なくともは十センチは高く、百九十センチ近くあるだろうか。けれど、身長はあるがひょろひょろで、まさに骨と皮だけと言った感じだ。

もう一方の織田と呼ばれた方は、身長こそ俺が勝るが、かなりがっちりとした体格をしており、まるでラグビーの選手を思わせる。髪型も流行りの短髪モヒカンで、顔から受ける印象はどこか聡明さを佇ませていて、爽やか好青年といった感じだ。

実際に織田は、紹介された後、自ら握手をもとめ手を差し出してきたほどだ。

「で、こっちが今回の依頼主の九鬼くんです」

青山が二人に俺を紹介する。

「九鬼です。今日はよろしく」

「話は聞いてるよ。何やら危なげなことに首、突っ込んでるみたいだね」

織田は印象通り、爽やかとした口調で話しかけてきた。顔もなかなかの美男子といってもいいかもしれない。

「いや、突っ込んだというより、巻き込まれた、が正しいかな？」

「九鬼くん。この二人が今回の主な情報提供者なんだ。二人ともこういうヤバ気な話は好きだから、今日は一緒に行動することになったけど、構わないよね？」

「構わないも何も、もう連れて来てるだろ。それに、助かりますよ」

俺は二人を見て、軽く礼をした。そう青山達は、織田の運転する４ＷＤで俺の待つ駅まで来たのである。
「いや～気にしなくていいよ。僕らも片足半分突っ込んでるしねぇ」
片足ではなく、さらにその半分というのは、突っ込んだ方がいいのだろうか。　徳川の話し方は、所謂オタクっぽい話し方だ。
人は見かけによらないと言うが、この二人の場合はそのまま当て嵌まっているようで、それに青山を加えたトリオは、なるほど、なかなか世の中うまい具合に出来ているようだ。
挨拶もそこそこに、早速、織田の車に乗り込み移動を始めた。
「君からの話を聞いたとき、また、ただのストーカー事件だと思ったんだけどね」
織田が、初対面の時以上の爽やかさと、興奮気味な口調で喋る。見た目だけではやはり人は判断できなかった。この男もやはり、青山と同じ人種なのだと痛感した。
しかも、この男は、”また”と言った。つまり、過去にも何かしらこういう事件に何度か関わってきたのだろう。
「何やらきな臭い方向に行ってるし、俺のジャーナリストとしての魂がこう、なんかね！」
俺は、愛想笑いを浮かべながら、延々とこの男の話を聞いていた。まぁ……言わずもながら、いつものごとく右から左だが。
俺達今は、Ｋ県Ｋ市にあるという、蒲生が生前住んでいた家に、織田の所有している車で向かっているところだ。首都高速を使って、目的地まで1時間半ほどのドライブということになる。
その間、織田という男のどうでも良い話を延々と聞かされた。ぱっと見は女の子受けしそうなものだが、これでは駄目だろう。横を見ると、青山も少し引いてしまっていた。
けれど、一つだけ彼の言っていたことで、頭の片隅に残っている

ことがあった。それは俺の名前のことで、自分のことから発展した話だったからかもしれない。

「へぇ、九に鬼で九鬼かぁ。カッコイイじゃないか。

それに知ってるかい？　九というのは、すごく強いとか、最上といった意味が含まれていることがある。　空想上の生き物で、九尾の狐というのがいるんだが、これも非常に強いといった意味があると言われてたりするんだ。古今東西なぜか九というのには、同じような意味で表されることが多い。

南米アンデスの神話にも、ビラコチャと呼ばれる創造神が、やはり屈強な戦士の神を九人引き連れていたっていう話もあるんだよ。同じ神話でエジプトの神話でも、やっぱり初期の九柱神が、最も偉大な神であるとされているしね」

このくだりだけはなぜか覚えていた。それ以外は、全く覚えていない。

そんな話を聞いているうちに、目的の場所である蒲生の家に着いた。蒲生の家は、古ぼけた二階建ての一軒家だった。家族がいたわけでもないのに、一人こんな家に住んでいたのか。

聞けば元々、蒲生の親が購入したもので、その両親を失ってからも、ずっとここに住んでいたらしい。

主を1年も前に失った家は、雑草が鬱蒼としげっていて、まるで主人以外の人間を拒んでいるかのようでもあった。

しかし俺は、この家になぜか漠然とした違和感を覚えた。主であった蒲生が死に、すでに1年は経っているはずなのに、この家はどこかしら活気のようなものを感じたのだ。

矛盾しているだろうが、とにかくそう感じざるをえないのだ。この家は、もういない主人を未だ待ち続けているような、不思議な佇まいを感じさせた。

織田が門に手をかけ、敷地へと入っていく。俺達もそれにならって、敷地内へと足を運ばせる。

「ここからは、なるべく話さないようにしよう。静かにしないと、

近所に声なんかあっという間だ」
俺達は頷いた。ここは閑静な住宅街で、場合によっては足音だって響く。ましてや、今はもう誰もいない家に侵入を試みようとしているのだ。
それを分かっていたのだろう、織田は少し離れた場所に車を止め、歩いていこう、と言ったのである。
「まずどうします？」
徳川が織田に、小声で問いかける。
「ま、ここはひとまずは普通に正面からいきましょう」
織田が、呼び鈴を鳴らす。電気を使わない古いタイプの呼び鈴だったため、家の中で音はあまり反響しない。もう一度鳴らしてみたが、やはり反応はなかった
「こういう古いタイプの家なら、裏に勝手口があるはずだが……」
織田は、俺達にそこにいろとジェスチャーし、足音を偲ばせながら裏へと廻っていった。青山と徳川は、そわそわと落ち着かなさそうだ。
人に見つからないかと不安になっているのであろう、キョロキョロと周りを何度も伺っている。はっきり言って、その姿は、まんま挙動不審者そのものだ。徳川に至っては身長が高い分、余計にそれが際立っている。
しかし、1年は空き家のはずなのに、とてもそんな風には感じられない。ぱっと見は確かに空き家なのに、なぜこうも違和感を覚えるのか……自分でもうまく説明できないでいた。
ここには蒲生の親の代から住んでいたらしく、息子である蒲生が死んでからは、もう誰も住んでいないはずなのだ。
その時、裏手に回った織田が首だけ見せて、こちらに来るように促した。青山と徳川に裏に回るよう伝え、なるべく音を立てないよう、注意しながら移動する。
裏庭はちょうど北側を向いていて、一層じめじめとした雰囲気があった。

「それじゃ徳川さん、お願いします」
織田に促され、徳川がリュックサックから針金を取り出し、おもむろに勝手口の鍵穴へと差し込む。
徳川のピッキングテクニックはかなりのもので、素人の俺ですら、ほれぼれするほどのあざやかさで、思わず感嘆の声がでた。
「初めてみるけど、すごいですね……」
隣にいる青山も、随分と食い入るように、それを見ている。
「はは、ありがとう。僕の数少ない特技なんだ」
徳川は照れながら、頭をかいた。直後に、カチャリと小さな音を立てて、鍵が開いたようだった。
「開きましたね。相変わらず、徳川さんのピッキングテクニックはさすがです」
織田は、過去に見たことがあったようだが、それでも感心しているということは、やはり相当の腕前なのだろう。
「それじゃ中に入りましょう」
敷地に入っていったとき同様、織田が先陣を切って、家屋へと入っていく。続いて俺も中へ入ると、先ほど覚えた違和感が、より一層強くなる。一足先に入った織田も、その違和感に感づいたようで話しかけてきた。
「なぁ……この家、なんか変だよな」
「……ええ、まだ生活感を感じますね」
遅れて入ってきた、青山と徳川もやはり同じことを思ったようだ。そう、おかしなことについ最近まで人が住んでいたかのような、感覚があるのだ。
「い、一応靴脱いだ方がいいかな……？」
徳川が馬鹿みたいなことを言うだしたが、無視した。
「とりあえず、一階と二階とに二手に分かれようか」
「その方がいいでしょうね。あまり時間があるとも限らないですし」
「良し。じゃあ僕と徳川さん、君と青山君に別れようか」

「わかりました。俺達は二階を見てきます」
俺の言葉に、織田と徳川は首を縦にふった。

俺と青山は台所を出て、階段を上り二階へと上がる。階段はギシギシと音を軋ませていて、実はかなり老朽化しており、崩れたりしないだろうかと心配になる。
けれど、それがやはりここが無人であると告げているような気さえした。見れば、埃がかなりの量わ積もっているのが分かり、杞憂だとわかったというのもある。
二階はわずか6畳ほどの部屋が、二部屋とドアが閉まっているため、広さは分からないが、計三部屋あった。
外から見た限りでは、ドアの閉まっている部屋が1番広そうに思う。青山には、手前の部屋を探すよう指差す。
「じゃぁ、お前はこの部屋な。俺は隣を調べる」
青山は頷くものの、どこか頼りなさげだ。もしかしたら、不法侵入で捕まったりしないかなど等と考えているのかも知れない。
「そうビクビクするなって。簡単に調べるだけでいいんだ、時間はかからんさ」
「う、うん」
そう言って青山は、目の前の部屋へと入っていき、俺もその隣の部屋へと移動する。
俺の入った部屋には、古ぼけた箪笥とさらに年季の入った、小さな机が置いてあった。蒲生はずっとこの家で育ち、両親が死に、さらに自分が死ぬまでこの家で暮らしていたという。
この古ぼけた家具はもしかしたら、両親が使っていたものかもしれない。俺は箪笥を開き、何か入っていないか見てみたが何も入っていなかった。
次に机も見てみたが、やはり何もない。押し入れの中も覗いては見たが、同様だった。
(もしかしたら、ここもガキどものたまり場かなんかだったりして

な）

昔やんちゃをしていた頃、沙弥佳を連れて空き家に入ったことがあったが、そこは見事に不良を気取った連中のたまり場だった。

当時は何に使ったのか分からない、ひしゃげたような小さなゴムの袋や、女物の下着、タバコの吸い殻など、まさしく絵に書いたようなたまり場だったのを思い出した。

その時の沙弥佳は、おどおどとしながらも必死に俺の後ろを着いて来ていたのだ。先ほどの青山の表情は、その時の沙弥佳と同じで、ついそんなことを思いだして俺は一人苦笑する。

「この様子じゃぁ何かあるとも思えないが……」

部屋を出て、ドアの閉まった部屋を調べるため、ドアの前まできた時、なぜか俺は強烈な何かを感じとった。

（なんだ……？　……何か変だ）

本来ならば、ここは無人であるはずなので、いちいち警戒などする必要など全くないはずだった。

けれど、俺は咄嗟に警戒心をつのらせ、なるべく音を立てずにゆっくりと、ドアのノブへと手をかけて、やはりゆっくりとした動作でノブを回していく。本能が、何か危険だと警鐘をならしていた。

ゆっくり、ゆっくりとドアを開けた、その向こうに――奴がいた。

戦慄した。俺はこのうえなく戦慄した。

なぜ奴がここに？　どうして？　鍵は？　どうやって中に？

俺は完全に混乱していた。奴があの時と全く同じ格好をして、俺の目の前に立っているのだ。

そんな俺を前に、奴は一歩踏み出す。俺は全く動けない。この時にはすでに、次にすべき行動は決まっていたはずなのに、身体はそれに反し、全く動いてくれなかったのだ。

人は目前の恐怖に対峙した時、動けなくなると聞いたことがあったが、まさにその通りであった。蛇を目の前にした蛙と言ってもいい。とにかく、逃げなければならないのに体が動いてくれない。

それは、死への恐怖だ。

奴は俺を殺そうとしたのだ、今回だってきっと……いや、間違いなく殺そうとするだろう。

（こ、殺されるのか？　俺は今ここで死んでしまうのか？）

俺の何メートルか後ろでは、青山がまだ部屋を調べている。声を出せば、助けてくれるかもしれないし、声を聞いて下の連中だって来てくれるかもしれない。だが、たとえそうしたとしても、助けが間に合うのか？

俺は、また一歩ゆっくりと近づいてくる奴の黒の手袋をはめた左手に、刃の部分を黒く塗り、薄暗い背景に紛らわせているナイフが掴まれているのに気が付いた。

身体はどうしようもなく動かないというのに、五感だけははっきりとしていた。

うるさいくらいに高鳴り、早鐘を打つ心臓の鼓動音。肌にまとわりつく、微妙に流れている淀んだ空気。舌はカラカラに渇いているのも分かる。

まずい……。まずい……！

奴は冗談抜きで俺を殺そうとしている。奴の持つ黒くギラつくナイフが、俺の理解を超え、直感としてその殺意を感じとる。　以前、こいつに殺されかかった時と比べ、今回は明確な殺意が手に取るように分かって、以前とは比べようもなく死への恐怖があった。

一歩一歩、スローモーションのような動きで俺に近づいてくる。いや、もしかしたら、脳内でアドレナリンなどが分泌され、そんな風に見えるだけかもしれない。

そんな、どうでもいいことばかりが頭を巡り、肝心の身体の方は一向に言うことをきかない。

逃げなければ！逃げなければ！逃げなければ！逃げなければ！逃

げなければ！逃げなければ！逃げなければ！逃げなければ！逃げなければ！逃げなければ！

頭の中で何度も何度も反芻させるも、この身体はなおも動いてくれない。

「あ……」

ようやく動かせたと思えば、でてきたのは自分でも情けないと思えるような声だった。

しかしその時には、奴はもう俺の前に来ており、そのナイフを高々と振り上げる。

「うおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

その瞬間、俺の中でカチリと音を立てて、何かが解放された。

第8章（前書き）

流血シーンありです。

第8章

俺は今何故叫んでいるのか分からない。だが叫ばなければ、どうしようもできなかったような気がした。

振り下ろされてきたナイフは、相変わらずスローモーションで、俺の目前に迫っていた。

その瞬間、今の今まで指先一つ動かせなかった身体は途端に動き始め、相手の動きはスローモーションなのに、こちらの動きだけはやたら滑らかに動いて、右手で奴の左手の手首を、間一髪で掴む。

「!?」

奴は、一瞬だけ驚いたようで動きが止まったものの、直ぐさま右足で蹴り飛ばしてきた。

「ぐっ!?」

俺の腹に思いきり奴の膝がめり込み、廊下に背中から飛ばされてしまう。

「がっ……」

盛大に倒れたため、受け身もとることができずに、背中を打ち付けてしまった。

「かはっ……はっ、はっ……」

呼吸がうまくできない。そんなことはお構いなしに、なおも奴は倒れた俺に向かってくる。

その時、青山が何事かと顔を出したのが視界に映る。

「馬鹿……早く逃げ」

倒れた俺に向かってきた奴のために、呻くように搾り出した声は、全て紡がれず、次の行動へと移していた。

精一杯の抵抗として、倒れたまま蹴りを放つ。攻撃のためというより、ただのめくらましに過ぎない。

いとも簡単に防がれてしまうが、今は少しでも逃げるための時間

稼ぎが必要だ。
「ぁ……九鬼くん……これは一体？」
青山は、もはやどうしていいか分からないといった風で、ただ茫然と出てきた部屋の前に立っている。
下からドタドタと音を立てて、織田と徳川の二人が駆け上がってきた。
「どうした！？」
さすがの奴も、これだけの人間がいるとは思わなかったのだろう、俺への注意がそれた。
（今だ！）
このチャンスを逃さず、俺は素早く起き上がり、力の限り体当たりする。もちろん、左手に持っているナイフは使わせない。
体当たりしたまま、ドアのふちにこの野郎の背中をぶち当てる。
「ぐ……！？」
奴が低く呻き声をあげた。さすがのこいつも多少はダメージはあるはずだ。
この頃には、俺の頭は妙に落ち着いていて、周りの一挙一動が手にとるように感じられる。
「九鬼君！」
誰かが叫ぶ。その声が、一瞬俺の脳裏に、織田が移動中に語っていたことを蘇らせた。
『九というのは、すごく強いとか、最上といった意味が含まれていることがある。』
（そうだ、やらなくてはやられるんだ！　戸惑うな！　一度ならずとも今も殺されかけたんだ！）
自分の中のもう一人の自分が叫んでいる。
右手で、ナイフを持った奴の左手首を掴んだまま、左手を思いきり握りしめ、渾身の力で奴の脇腹に叩き込んだ。
「うぐっ」
奴は再び呻き声をあげるが、お構いなしに再度脇腹に拳を叩き込

む。
　しかし、奴も黙ってはいなかった。　ら空きになっている俺の胴体に、再び膝蹴りを食らわしてきたのだ。
「げっ！？」
　こちらの体勢が悪かったのだろう、奴の膝は、俺の鳩尾に入ったのだ。瞬間、息が止まった。
（まずい……今のは、まずい）
　俺は、ズルリとその場に膝をついてしまった。
　このまま、こいつに殺されてしまうのか？　こんなところで俺の人生は、終わってしまうのか……。
　くそっ……終ってたまるか……こんなところで死んでしまってなるものかっ！
　どれほどの時間が経ったかは分からない。
　おそらくはほんの二秒か三秒がせいぜいいうところだろうが、奴は何もしてこない。
　なぜだと顔をあげると、奴は俺を見下ろしておらず、青山達三人の方へと向いていた。
　そして、三人ともその手には警棒のようなものが握られていた。それはいつぞやに、青山が俺に渡してくれた物だ。
　しかし、三人はこの全身黒ずくめのこいつに対し、明らかに怯えている様子だった。
　けれど、俺には巡り巡ってきたチャンスだった。
（喰らえっ！）
　俺は、今度は右の拳で奴の膸を殴る。
「がぁっ！？」
　さすがの奴にも、この不意打ちはかなりのものだったらしい。ただ、それでもナイフは手から落とすことはなかった。
　立ち上がりざまに、そのまま奴の股間に頭突きを食らわした。
　普段なら、そんな攻撃はしたいとも思わないが、今はそんなことを言っている場合ではない。

「これで少しの間は時間が……ぐあっ！？」

三人に逃げようと言おうとした瞬間、俺の右腕になんとも言えない、鋭くも熱い痛みが走った。

見れば、奴がそのナイフで俺の右腕を切り付けたのだ。

ナイフは相当鋭いのか、裂けた服の隙間から見える上腕部分の肉に線が入っていた。その不自然に入った線から、少し間をおいてプツプツと赤い液体が流れでてきた。

「ぅぐっ……あぁっ……！？」

……なんと言う痛みだ。今まで味わったことのない痛みだった。

もちろん、怪我なんてのはこの十数年しか生きていない人生の中でも、数え切れないほどしてきた。

しかし、この痛みは今までのものと比べものにならないほど、形容しがたい痛みだった。

今までの事故による怪我と違い、これは人為的なものだ。ただそれだけの差なのに、こんなにも違いがあるのか。

この様子を見ていた青山達は、もはや完全に竦み上がって逃げることすらできないでいた。

傷は相当深いのか、傷口からはとめどなく血の雫が滴り落ちて、廊下に小さな池を作っていった。

あまりのことに、俺は傷口を押さえることすら忘れていた。

「……殺す」

ふいに声が聞こえた。低く、くぐもった声でたった一言、呟くように。

「なん、だと……？」

俺は少しだけ驚いた。　まさかこの野郎が、喋るなんざ思いもしなかったからだ。

「……邪魔するなら……邪魔する奴らは全員殺す！」

俺は先ほどよりも足がすくんでしまった。

それほど奴の言い放った言葉には、強烈な怨嗟が込められていた。

だが、奴は俺に攻撃を加える事なく、唐突に苦しみだした。
「うっ、ぐぅっ……あぐ……うぐあぁっ……」
突然苦しみだした奴は一歩二歩と後退し、頭を押さえながら片膝をついた。
「な、なんだってんだ……」
「ぐ、ぐぉおおおっ……」
突然の事態に、俺も他の三人も呆気に取られていたが奴は立ち上がり、俺に向かって走り込んできた。
「ぐぅぅ、どけぇっ！」
不覚にも体当たりを食らわされ、またもそのまま床に突き飛ばされてしまった。
しかし、奴はそんな俺など見向きもせずに、階段まで行き、勢いそのままに階段を駆け降りていった。
そして、ガチャガチャとドアの開ける音が聞こえ、外に出て行ったことが窺えた。
三人もあまりの勢いで走り込んできた奴に、恐怖の色をみせていたが一階に降りていった奴を見送ると、へなへなと、下半身から力が抜けてしまったようだった。
徳川にいたっては、呼吸することすら忘れていたようで、床に腰付けてからというもの、呼吸困難の患者のような、荒い呼吸を何度も繰り返していた。
「あ……い、今のがもしかして……？」
織田が、やっとのことで喋る。
「ええ……この家に入った時感じた違和感は、きっとあいつがいたからでしょうね」
事実、さっきまでの違和感がまるでなくなり、この家は再びただの空き家になってしまったかのようだ。
俺がそう返したものの、織田はそれ以上のことは言わなかった。
いや、言いたくとも、まだ混乱した頭では言うことがままならないのだろう。
先程、俺が奴と出会った瞬間も同じようなものだったのだ。それ

も仕方ないと言えた。
「とにかく今は……くっ」
必死だったためか、最初に痛みを感じて以来あまり感じていなかった腕の痛みが、安心して緊張の糸が切れてしまったところで、急激な熱さと痛みを訴えだしたのだ。
当たり前のことだが、まだ血は流れていて、俺はドクドクと流れ出ている、熱い血の脈動を感じていた。
それを見た青山が、顔を引き攣らせながらも、心配そうに駆け寄ってきた。
「く、九鬼くん、大丈夫？」
普通に生活していれば、あまりお目にかかることもない出血量に、半ば青ざめた顔をしている。
もちろん当の本人ですら、こんな大量の血が流れ出ているところなど、見たことはない。ましてや自分の血なのだ。
「ああ、大丈夫だ……と思いたいがな。とにかく今は止血しないと……」
「そ、そうだね。何か血を拭いたりできそうなもの……」
ついさっきまでへたれ込んでいた織田が、俺のところまで歩み寄り、自身のTシャツを脱いで、腕に巻きつけていく。
その表情は青山に比べると、いくらか落ち着いているように見えた。
「こ、これだけの騒ぎがあったんだ、近所の人が警察を呼んだかもしれない。すまないが、今はこいつで我慢してくれ」
確かに、今ここでは応急手当ての道具もなさそうだ。
「すみません。お借りします」
「何、気にしなくていいよ」
織田は、少しバツの悪そうな表情で、鼻の頭をかく。武器を携帯しながらも、何もできなかった自分を責めているのかもしれない。
「とりあえず、これでよし。……だけどここを出る前に、一度、この部屋を調べてみないと」

織田の言葉に、俺は頷いた。元々俺はこの部屋を探索するつもりだったのだ。

「そうですね。奴がこの部屋にいたのは、何かしら用があったからのはずだし……」

俺達は、急いで部屋の中を調べる。そう、何故奴がここにいたのかは、謎だ。だが、ここに何かしらの目的があって、訪れていたのは間違いないはずなのだ。そのおかげで俺はまたしても殺されかけたのだが。

全員で手分けして6坪ほどの部屋を調べていく。この部屋には、比較的多く物が置いてあり、二つも三つも机や椅子、クローゼットなどがある。

ここに置いてあるいくつかは、俺や青山が調べた部屋に置いてあったものかもしれない。

先ほど調べた部屋は、畳がしかれた和風の部屋だったが、明らかに物が置かれていた跡がくっきりと残っていたからだ。

「うーん、特にここにも何かあるわけじゃなさそうだな」

「ですねぇ……さっきの人が持ち去ったのかもしれませんし」

織田の呟きに徳川が相槌をうつ。俺も全くの同感で、何かあったとしても奴が持ち去ってしまっているに違いない。

「あれ？　ねぇ九鬼くん、それ何？」

青山が俺の足元を指さし、尋ねてきた。正確には、足元近くに落ちている物をだ。指差した方を見ると、そこには小瓶が転がっていて、俺はそれを拾い上げた。

「何か粉のような物が入っているな。いや、量から考えると入っていた、か」

小瓶の中には、微量の白い粉が入っていた。よくよく見ると、小さいが固形のものもある。俺は瓶の蓋を開け、そっと匂いを嗅いでみた。

「……特に匂いは感じないな。味は……」

「やめた方がいい」

俺の行動を見ていた織田が制止する。
「無臭でも、無味な毒物だってある。それに、劇薬の大半は無味なものの方が多いと聞く」
そこまで言われると、さすがに口にするのは躊躇った。
「徳川さん、そいつを調べられないですか？」
織田が、徳川に問いかける。
「うん、やってみよう。ごめん、借りるよ」
小瓶を徳川に手渡し、お願いしますと頭をたれた。徳川に小瓶を渡し、俺が調べようとしていたアンティークと思われるテーブルから、一枚の紙が音も無く床に落ちた。
「……これは」
やや古ぼけ始めていたその紙を拾い上げ、それに印刷された文字を読む。
「取引先一覧……？」
そこには、おそらく蒲生が生前に仕事上必要であったろう、取引先企業の名がずらりと並んでいた。青山達も寄って来て、紙を覗く。
「ふーむ。何かヒントに……なるかもね。見てみなよ、この名前」
織田が、ある企業名を指差した横に、確かにどこかで聞いた覚えのある名前があった。
今井克利（いまいかつとし）。最近、どこかで聞いたことがあったはずだったが、思い出せない。
俺が記憶の引き出しを漁っている時、青山が何かに気付いたようだった。
「あれ？　確かこの名前って……」
「気付いたみたいだね。そう、この名は首を切られて殺された人物だ」
織田に指摘され、やっと思い出すことができた。つい昨日言われたことだったのに、忘れていたとは……。
「やはり、あいつがこの人物を殺したんだろうか……」

「どうだろう？　早計に決め付けるのは早いけど、可能性は高いかもしれないね。

まぁ、とりあえずここを出よう。まだ十分も経っていないけど、そろそろ時間的に限界だと思うから」

織田に促されて、俺達は早々と蒲生宅……いや、元蒲生宅を出た。もちろん、出る時は裏からではなく、普通に玄関から出た。

奴がここを開けて出ていったためだ。とはいえ、鍵は乱暴に扱われたため、壊れかけていたが。

俺達は、来た時と同じく喋らず、あまり音をたてないよう足早に車のある場所へ向かった。

移動する車中で、俺は相変わらず先の出来事について考えていた。

織田はああは言っていたが、俺は今井という人物や他の関係者を亡き者にしたのは、間違いなく奴だとなぜかこの時、強く思っていた。そう思わざるをえないのだ。

物的証拠ではないが、奴がナイフで攻撃してきたのはその何よりの証拠ではないのか？

わざわざ、もう一年も前に死んでしまった蒲生の家に来ていたのだってそうだ。不思議と傷の痛みによって、俺の頭はクリアになっていく。

確たる証拠なんてものは何もなく、ただ何かあるかもしれないと言う理由だけで訪れた蒲生の家に、奴が現れた（正確には、最初からいたのだが）のも、奴が蒲生や今井と何らかの関係があったから、そうではないのか？

奴は、この二人の人物と不可解な死を遂げた人達とも、何かしら関係がある人物であることは間違いないはずだ。とにかく、この紙に名のある人物達を徹底的に調べねばならないのは、もはや避けては通れない。そして、これらの人物達と交差する人間こそ、奴なのだと直感で理解した。

奴に切られたおかげで巻かなくてはならなくなった織田のTシャ

ツは、すでに元の色が分からないほどに変色しており、血に飢えよってべったりと凝固しているが、流れ出た血は、今はなんとか小康状態だ。

痛みはまだ鋭いものの、思ったより傷は浅いのかもしれない。

車中で俺は、傷の手当てをしながら先程から同じことばかり考えていた。しかし、どうにもそれらが上手いこと、一つにまとまらない。

背後の事実関係を解き明かすまでは、この靄に包まれている今回の事件は、全体を見ることは出来ない。

俺はため息を一つつき、今は焦っても仕方ないと自分に言い聞かせた。

あれほど出ていた腕からの出血は、今は動かさなければ出ることはなくなった。

簡単な応急手当をするべく、高速のサービスエリアへ入る。べったりと張り付き、渇き固まった血を四苦八苦しながら洗い流し、買ってきた包帯や傷薬などで手当すると、やっと一息つけた。

手当てをしてくれた織田は、意外なほど手当てが上手く、安心して任すことができたというのもある。今はフリーのライターをしている彼だが、それ以前は、病院で働いていたのだという。

手当てを終えた俺と織田は、服を買うべく、サービスエリア内にあるショップへと入った。俺は服を選びながら、沙弥佳や家族へなんて言い訳するべきか、頭を悩ませながら、またため息をついた。

「ただいま」

「おかえりっお兄ちゃん！」

沙弥佳は、相変わらず俺が一人で出かけ、帰ってきた時には犬みたいに飛んでくる。

抱き着いてきた沙弥佳が、犬になったところを想像してしまい、かぶりをふった。
「俺にそんな趣味はないぞ」
「え？　何が？」
沙弥佳が胸にうずめていた顔をあげながら聞いてきた。
「いいや、なんでもない」
俺は苦笑しながら、リビングへと歩きだした。沙弥佳はありがたいことに、怪我した右腕ではなく左腕にしがみついていた。
「おかえりなさい。九鬼さん」
「ああ、ただいま」
俺が帰ってくる今の今まで沙弥佳とささやかなティータイムであったようで、ティーカップをテーブルに置いて、綾子ちゃんが挨拶をしてきた。もちろん、家に入った時からすでに、匂いでそれには気付いていたが。
「見たとこティータイムだったみたいだな。俺にもいいか？」
「はい。準備しますから、ちょっと待っていて下さいね」
「あ、私も手伝うよー」
俺は、リビングのソファーにゆっくりと腰を下ろした。別にしたくて動作をゆっくりにしたわけではないが、無意識のうちに、傷をかばっての行動だった。右腕上腕部分を中心に、包帯が巻かれているということもあるかもしれない。
二人は、リビングに置いてあるガラス戸から、新しいティーカップと受け皿を出し、新たにお茶受けも取り出していく。
前にも思ったが、この二人は何をやっていても絵になるな。そう、まるでとても仲の良い姉妹のようにも見える。
身長こそ沙弥佳の方がわずかに、二、三センチほど高いのだが、姉のような綾子ちゃんに、妹のような沙弥佳。そんな二人を見ていると、なんでか、とてもほほえましい気分になってくる。
「なぁに、お兄ちゃん。私たちそんなにおかしい？」
俺は、気持ちがすぐ表情となって出てくるタイプらしい。

「いや、なんでもないさ。それよりも今日の茶はなんだ？　普段飲んでいるのとは違うな」
指摘されたのが恥ずかしくて、話をそらした。気付かなくていい時に限って、こいつは気付いてくれる。
「あのね、今日のはトルコティーだよ。それも少し値の張るお茶っ葉らしいの」
「らしい？　誰かから貰ったのか？」
「そうなんです。以前父がトルコに行った時、わざわざ買ってきてくれたんですよ」
「それでちょうど前のお茶っ葉が切れたから、今回使ってみようってことになったの。それに結構美味しいよ。お兄ちゃん好みかも」
「俺好みの茶か。トルコティーは初めてだからな、それはちょいと楽しみだ」
どうも俺と沙弥佳が、初めて綾子ちゃんの家に行った時に、こいつを持ってきたらしい。
全く、自分が大変な状況に陥ったというのに、女の子は図太い神経があるのやらないのやら……。

「ふぅ……なるほど、こいつは確かに美味いな」
「うふふっ、でしょう？」
「喜んで頂けてなによりです」
二人は自分達の気に入ったものが、俺も気に入ったことにご満悦といった顔をしている。
実際、その茶葉の出す味は俺好みのもので、舌にわずかに渋みを残しながらも、かすかにシナモンを思わせるような香りが上品だ。
ここで一息ついたところで、沙弥佳が聞いてきた。
「ところでお兄ちゃん。その服どうしたの？」
「え？　あ、ああ、この服はちょっと気に入ったんで買ったんだ。それに安かったしな」
半分嘘、半分本当だ。いつもならこんな派手な色使いの服は買わ

ないが、仕方ない。
　最近の高速のサービスエリアでは、ちょっとした買い物ができたり、ちょっとした観光スポットになっていたりと、目まぐるしく様変わりしてきている。この服もそういったサービスエリアで買ったものだ。
　色使いは派手だが、なるべく俺に似合ったものを見繕ってきたつもりではあるが。
　朝と着ているものが違えば、誰だって気になるものだが、特に怪しまれはしないはずだ。それに今日は、友達と街に繰り出して遊んでくるという、尤もらしい理由をつけて出ていったのだ。そういう意味でも、良いカムフラージュになったはずだ。
　まさか、前の服が切られてしまって、もう着ることができないとは言えるわけはない。
「ふーん。ちょっといつもの服とは違うけど、悪くないと思うよ」
「そ、そうか……俺もいつもの服とは違うからどうかと思っちゃいたんだが」
　ギリギリ合格ラインのようだった。沙弥佳は俺の着る服一つとっても、あれやこれやとうるさいので、ホッとした。
　しかし、そのおかげか知らないが、周りからはそれなりにオシャレだという評価をもらったこともある。
　だというのに、沙弥佳は何かが気に入らないのか、少し不機嫌そうな態度で続けた。
「それで、朝着て行った服はどうしたの？」
「ああ、帰りに友達のとこに寄ってな、そいつのとこに忘れてきちまった。気付いた時にはもう家の前だ」
　こいつは変なところでやたらと鋭いので、何かあった時は、いつもこうして言い訳を考えなければならない。それに季節はすでに、長袖を必要としている時期なので、怪我を隠せるのは助かった。
　沙弥佳は一応は納得したようだったものの、やはりどこか不機嫌なままであった。とはいえ、俺としてもいつまでも沙弥佳のご機嫌

取りに付き合うつもりはない。
「ところで今日の晩飯はなんなんだ？」
「今日は、おば様の希望もあってビーフストロガノフですよ」
「お、中々豪勢だな。綾子ちゃんが作るのか？」
「はい。とはいっても、さやちゃんと共同作業ですけど」
「そうか。俺もビーフストロガノフは好物だからな、楽しみにしてるぜ」
「はい、楽しみにしていて下さいね」
こうして綾子ちゃんと何気ない会話をしていると、ふと昨日の朝のことが思い出されてきた。
何気なく沙弥佳の方を見れば、頭をたれているおかげで前髪が顔を隠し、表情を読み取ることができなかった。
ただ、その両手は力いっぱいに握られ、小刻みに震えていた。

「どう？　お兄ちゃん。初めて作ってみたけど……」
「おお、こいつはイケるぞ。母さんも顔負けの美味さだな」
「ふふ。九鬼さんってお世辞が上手ですね」
いや、本気で言ってるんだがな……。
「ふん、だったらあんたにはもう二度とご飯は作ってあげないわよ」
母はそんなことをぼやいていたが、俺はそんなことなど、なんのそのだ。それに、母が作る料理がまずいと言っているわけではない。それよりも娘とその友人の方が、料理の腕がいいというだけの話だ。
なにより特筆すべきなのは、まだ十五という若さで、主婦歴十八年の母と同格以上ということであろう。
あの後、料理ができる寸前のタイミングで、両親が帰ってきた。
うちの両親は、齢四十をとうに過ぎているのにも関わらず、休日となれば二人仲睦まじく、どこかへでかけている。
綾子ちゃんいわく、うちの両親は理想の夫婦像なのだと言ってい

た。まぁ、仲が悪く、夫婦間が冷え切ってしまうよりは、遥かにいいのは間違いないが。

父さんは相変わらず会話に参加せず、一人黙々と食べているが、これは美味いという時のサインだ。

そんな父は、最初に二口三口食べた後、

「これなら、店を出しても問題なさそうだな」

と、たった一言だけだった。

第9章（前書き）

今回分までが以前までに書いていたものです。　残酷なシーンあり。

第9章

食後、部屋に戻って今日起こったことを思い返していると、ノックの音の後に沙弥佳が顔を覗かせた。
「お兄ちゃん、お風呂いいよ」
「ん、ああ。ありがとうよ」
普段は、部屋に戻るとすぐ部屋着に着替えるのだが、今日は幸い着替えるのを忘れ、帰ってきた時のままの恰好だ。自分が怪我をしていることは、悟られたくない。
「……どうした？」
いつもであれば短いやり取りの後、沙弥佳はすぐに部屋へと戻って行くが、今日は違った。
「……」
沙弥佳は伏せ目がちにこちらをチラチラと視線を向けてきていたが、意を決したのか、ゆっくりと話し始めた。
「あ、あのさ……お兄ちゃん。……お兄ちゃんって今……その……好きな……人、いる？」
「……は？」
「だ、だから！　今好きな人いるのかって聞いてるの！」
「どならんでも、ちゃんと聞こえるぞ」
「むー……それで好きな人、いるの？　いないの？」
「というかな、何が悲しくて妹に自分の想い人の有無を言わないとならんのだ？」
「いいから！」
「うわっ……分かった、分かったから近くで喚かないでくれ」
沙弥佳は、わざわざ俺のところまで歩み寄り、大声を出した。全く、そんなことしなくとも、聞こえるというのに……。
「んー……まぁ……なんというか……いると言えばいるし、いない

と言えばいない、かな？」
「なにそれ!?　正直に言ってよ！」
「だから、近くで喚くなって。それにこいつは間違いなく本心だぞ。正直、自分でもよく分からん」
「嘘！　本当はいるんでしょ！　嘘なんてつかなくったって分かってるんだから！」
「あのなぁ……なんでわざわざ嘘つかないといけないんだ？　第一、俺に好きな人がいたとしてだぞ、そいつがおまえに何か関係あるってのか？」
「え……？　だ、だって……。と、とにかく！　それっているってことでしょ!?」
「だから分かんねぇって。それに好意は持てても、恋人にしたいとかってのは、また別問題だろ」
全く……そもそも、何故こんなことにわざわざ熱くならにゃぁならんのだ。
「やっぱりいるんだ……お兄ちゃんって昔から、図星つかれるとすぐはぐらかそうとするもんね」
喚かなくなった途端、今度はなんだ。沙弥佳は、その綺麗な顔を悲壮感に歪ませ、やや俯き加減に話し始めた。
「……最近、お兄ちゃんすごく変だよ。何かに追われてるみたいだよ……ねぇ、何か私に隠してない？」
その言葉にドキリとしてしまった。確かに隠しているが、かといって言えるわけでもない。ましてや、ストーカー野郎と格闘しただなんて言おうものなら、卒倒しかねない。
そうはならずとも、綾子ちゃんの耳に入るのも時間の問題だ。綾子ちゃんは、ただでさえ俺に気を遣っているきらいがある。
できるものなら、そんな風には思ってもらいたくはないのだが、それが無理ならば、少なくとも余計な心配までかけさせたくない。
「沙弥佳……あのな、本当に俺は特別好きな人はいないんだ。それに何も隠しちゃいない」

「本当に……？　ならなんで最近、あやちゃんのことばかり見てるの……？」
「な、なんだって？」
「お兄ちゃん、あやちゃんがうちに来てから、あやちゃんのことばかり見てるよね？」
「そんなことは……」
「そんなことあるよ……私がどんなに抱き着いても、どんなにお兄ちゃんのこと想っていても……お兄ちゃん、必ずあやちゃんのこと探してるもの……今まではそんなことなかったのに」
何も言うことができなかった。　言われて初めて気付いたと言った方がいいのだろう。
確かに俺は、いつしか綾子ちゃんのことばかり見ているようになっていたのかもしれない。綾子ちゃんは綺麗な顔立ちをしているし、沙弥佳がそう思うのも無理はないかもしれない。
あの朝の独白では、ただのブラコンが増長された程度にしか思わなかったが、今は違った。あの時と違い、そこに何か強烈な意味が込められているように感じる。
「沙弥佳……」
「ねぇ……取られたくないよ……。私、お兄ちゃんを誰にも取られたくないよ……それがたとえあやちゃんでも」
沙弥佳はそう言って、俺を抱きしめてきた。抱きしめる左手が、ちょうど怪我をした部分を強く掴む。痛みに思わず顔をしかめた。
痛みには大分慣れ始めていただけに、この不意打ちには、かなりの痛みをもたらした。
「お兄ちゃん……私ね、最近夢を見るの」
「夢……？」
「うん。すごく変な夢……私が何かに巻き込まれて、お兄ちゃんが私を助けようとするの」
「……」
不思議なことにその夢は、いつかに俺も見たことがあったような

気がした。
「もう、どうしようもないくらいの状況でね……最後に私がお兄ちゃんに何か言おうとするの。何かとても大切なことを言おうとしてるんだけど、いつもそこで目が覚めちゃうんだ。
……だからね、最近すごく不安になるの……誰かに取られるんじゃないかとか、そうじゃなくて、どこか遠くに行っちゃうんじゃないかって……」
なるほど。近頃の沙弥佳の態度はそういうことだったのか……。心配させまいとしていた行動が、沙弥佳には逆に心配させていたとは。
俺は沙弥佳をなだめるように、なるべく優しくその長く、綺麗な髪をすいた。
「沙弥佳……大丈夫だ。俺はどこにも行かないよ」
「……本当？　私から離れて行っちゃいやだよ……？」
「俺が嘘ついたことあるか？」
沙弥佳は胸に顔をうずめながら、ゆっくりと首を振った。
「俺は沙弥佳の兄貴で、沙弥佳は俺の妹だ。何があろうと絶対に離れることはないんだ」
左腕を沙弥佳の背中へとまわし、抱きしめた。この時、ふいに沙弥佳のことが愛おしく感じたのだ。
「……妹のままじゃ……だよ？」
最後の呟きは、俺の耳には届くことはなかった。

しばらくの間抱きしめあっていたが、沙弥佳の方からゆっくりと離れていった。
「ごめんね、お兄ちゃん……わがままなことばかり言って……」
「いや……」
沙弥佳は少し寂しそうな笑顔を見せながら、部屋を出て行った。
妹が出ていこうとした時、なぜだか引き止めようとして手を伸ばそうとしたが、何かがそれを阻んだ。引き止めてどうしようってい

うんだ？　これ以上、お互い何を言うわけでもない。引き止めたって、沙弥佳を勘違いさせるだけだ。

俺はかぶりをふった。……勘違いだって？　なにをだ？　今一瞬、考えてはいけないことが脳裏に浮かんだからだ。

「……頭、冷やさないとな」

沙弥佳に掴まれていた右腕の怪我が、ズキズキと今更痛みを自己主張し始め、また血が滲み出していた。

翌朝、いつものごとく沙弥佳に起こされ、のんびりと休日の朝を過ごしていた。

（昨日のうちに蒲生の家に行っておいて良かったな）

右腕を軽くさすりながら、今日という休日に感謝した。というのも、昨夜は傷の痛みで全身が熱くなり、まともに寝ることができなかったからだ。

普段なら7、8時間は寝るのに、たった1時間かそこらしか眠れなかった。おかげで今もまだ少し眠いのだが、耐え切れなくなったら後で昼寝でもすれば良いだろう。

もっとも、蒲生の家に行くことさえなければ、怪我だってすることもなかったし、寝不足にもならなかったのもしれないのだが。

ピンポーン

インターホンの電子的な音が部屋の中に響く。

「誰か来たみたいだな」

「私が出るよ」

そういって沙弥佳は席を立ち、玄関へと出て行った。俺は沙弥佳の声のトーンがいつも通りだったことに、やけに安堵している自分にはっとした。沙弥佳が単にそう見せないよう、演技をしていないとも言い切れなかったが。

結局昨晩は、風呂に入っていた時も、あがった後も、沙弥佳のこ

とばかりで全く頭を冷やすことができなかった。眠れなかったこともあって、ベッドの中でも考えっぱなしだったのだ。

「あやちゃーん、あやちゃん宛てみたいだよー」

「私に？　誰からだろう？」

玄関から沙弥佳の声が、綾子ちゃんを呼んだ。彼女も沙弥佳にならって席を立ち、玄関へと向かっていく。ふと、この時、妙な胸騒ぎを覚えた。

……この嫌な感覚は……そうだ、例のストーカー野郎と対峙した時のような……。そもそも、綾子ちゃん宛てに届け物？　それはおかしくないか？

綾子ちゃんがうちに来ていること知っているのは、いつも来ているという、家政婦さん一人だけのはずだし、届け物があれば、まずうちに連絡をするように、強く言ってあるはずなのに……。

なにか嫌な予感がする。

「綾子ちゃん、待っ――」

振り向いて綾子ちゃんを制止しようとしたが、すでに時遅く、彼女が包みを開けてしまった後だった。

次の瞬間、つんざくような悲鳴があがった。

「いやぁぁあああああああ！！？？」

驚きのあまり、立ちすくんでしまう。普段の綾子ちゃんからは、想像もつかないほどの悲鳴をあげ、恐怖に顔を歪めている。

隣にいた沙弥佳も、悲鳴こそあげていないが、完全に血の気が引いてしまっている。

「どうしたっ！？」

二人に駆け寄りながらも、自分も動悸が激しくなっているのが分かった。

ふいに悲鳴が止み、綾子ちゃんはまだ包みにつつまれた箱を手から落し、気を失ったのだろう、その場で倒れようとしていた。

「危ないっ！」

すんでのところで、俺と沙弥佳が倒れかけた綾子ちゃんを抱きと

める。
「危なかった……中に何が入って――」
箱に目を向けるとそこには、有り得ないことに、犬と猫の目と視線が交差した。当然、うちには犬も猫も飼ってはいない。
わけがわからなかった。箱の中には、犬と猫の首がご丁寧にも寄り添い、目をしっかりと開けてこちらを見ていたのだ。
「うっ……」
首だけなのに、まるで愛嬌を振り撒かんがごとく開けられた目は、実に滑稽であり、それ以上の狂気をはらんでいた。
急激に込み上げてくる吐き気をこらえ、箱に蓋を被せた。
「ぁ……ぁ……わ、私、ドア開けたら、だ、誰もいなくて、あやちゃんにってあったから……だから……」
沙弥佳も、あまりのことにパニックになってしまっていて、支離滅裂なことを口にしている。
「いい。分かってる、分かってる沙弥佳。お前は何も悪くない。決して悪くないよ」
俺はそう言って、沙弥佳を抱き寄せた。
綾子ちゃんを抱き抱えたままのため、つらい体勢だが、そんなことは構っていられない。
「あ……あぁ……う、うぅぅ……うあああぁぁぁっ」
抱きしめられて緊張の糸が切れたのだろう、沙弥佳は嗚咽を漏らしながら、泣き始めた。
「大丈夫、大丈夫だ。お前は悪くないよ」
啜り泣く沙弥佳を優しく抱きながら、何度もあやすように語りかけた。
俺は不思議と、自分が冷静になっていくのを感じながらも、同時に、自分の不甲斐なさと奴への怒りが沸き上がり、はらわたが煮え繰り返るような気持ちになっていった。
しばらくして、落ち着いた沙弥佳と二人で、倒れた綾子ちゃんを

ソファーに寝かせた。
沙弥佳にもしばらく休むよう言い聞かせ、俺は中身を供養し、箱を処分するため外に出た。
（……まさか、昨日の今日で揺さぶってくるとはな）
しかし、かといって、こんなものを届けてくるとは思わなかった。　いや、綾子ちゃんに届いたという時点で、もっと早くに気付くべきだったのだ。
もっと、直接的なことをしてくると思っていただけに、かなり精神的にくるものがあった。死んでしまっている毛むくじゃらの動物を、直に触るわけにもいかず、ゴム手袋をしてなるべく目が合わないよう閉じてやり、掘った穴にそっと埋めてやる。
（まさか、こいつのために一週間以上も？）
いや、さすがにそれはないだろう。即座に考えを否定した。こんなことのために、わざわざ一週間以上も何もしてこなかったとは思えない。
それに……昨日、あいつと対峙したからこそ分かることもあるのだ。あのナイフ捌き、相手の急所への的確な攻撃……そんな奴が、犬猫のためにそんなにまで時間を割くとは考えがたい。今ならば、あいつの蹴りやナイフも、全て計算して攻撃してきたように思える。
昨日のことにいたっては謎だらけだ。蒲生の家になぜ奴がいたのか。もちろん、なにか目的があったからに決まっている。では、どんな目的が？
急に苦しみだしたことにも、何か関係があるんじゃぁないのか？
一度考え出すと、全てが疑わしく思えてくるのだ。
そして何より……綾子ちゃんだ。俺は昨日の一件以来、あの野郎がとてもただのストーカーとは思えなくなった。もちろん、奴がただのイカレた奴であれば、それはそれで良かったのかもしれない。
今もその可能性がないわけではない。だが奴の行動には、不可解な点が多すぎる。それでいて、その行動一つ一つにはどこか、理性めいたものも感じるのだ。先の奴との格闘のことなどは、まさにそ

うだ。
何か別の目的があって、綾子ちゃんにもその手が及んだのか？
綾子ちゃんは視線を感じるようになってから、しばらくすると、そのうちに私物がなくなるようになっていったという。
綾子ちゃんの家に大量に隠されていた、本来の用途を遥かに越えた機能をもっている隠しカメラは、明らかに綾子ちゃんを狙っているからこその行動のはずだ。
なのに、昨日……いや、明らかにそれ以前にも、そうとは思えない行動に出ている。そして奴が言った、あの言葉。
『邪魔する奴は……殺す』
あの言葉は、とてもただのストーカーをしている奴のものとは思えなかった。
「……駄目だな。全く分からん」
供養を終え、家の中に戻ってきた時、沙弥佳に声をかけられた。
「何が分からないの？」
「ん？　いや……ちょっとな。それより、もういいのか？」
先ほどに比べて、大分落ち着いているようだったが、やはりどこか、本調子ではなさそうだった。けれどつい三、四十分ほど前のことなのだからそれも仕方ない。
「うん……全然大丈夫というわけじゃないけど……。それに――」
靴を脱いで玄関をあがった俺に、沙弥佳は腕を絡めてきた。
「……お兄ちゃんと一緒じゃないと不安になっちゃうもん」
「そうか……」
俺は苦笑いを浮かべていった。沙弥佳はその腕に力をこめ、今にも泣きそうな顔になっていた。もしかしたら本当は、さっきから不安で押し潰されそうだったのかもしれない。
思えば沙弥佳はいつも元気に振る舞っており、涙を流したのだって、いじめにあっていた小学生の頃以来だ。
「沙弥佳」
「……？」

「約束する。必ずこのストーカー野郎を取っ捕まえて、警察に突き出してやるって」
「お兄ちゃん……」
「お前を泣かす奴は容赦しない。……だから安心してくれ」
俺は沙弥佳の目を見据え、はっきりと宣言した。

「すー……すー……」
沙弥佳は今ソファーで寝息をたてている。少しは気が楽になって、落ち着いて眠ることができているようだ。綾子ちゃんはまだ気を失ったままだが。
何がともあれ、俺が二人の送り迎えなどをするようになって、目立った動きがなかったが、今になって（恐らく昨日のことがあったからだろう）動いてきたのだ。奴も色々とやきもきしていた、というのもあるだろう。
だが、そいつのおかげで沙弥佳にまで被害が及ぶようになった今、俺も悠長に構えてはいられない。次に出会った時が、お互いに最後になるかもしれない。いや、最後にしなければならないのだ。
奴にどんな目的があるのかは知らないが、そいつのために関係なかったはずの俺すら、ためらうことなく殺そうとしてきた。この先、沙弥佳にだってその被害が及ばないとは言い切れないのだ。
それに、沙弥佳（きっと綾子ちゃんも）は動物が好きで、ペットを飼いたいとしょっちゅう口にしていた。なのに、その最も身近にいる犬猫を殺してみせ、ご丁寧にもそれをプレゼントしてきたのだ。きっとそれは、沙弥佳にも綾子ちゃんにも、心に傷をおわせることになるだろう。
こう考えただけで、自分の中で再び沸々と怒りの炎が燃え上がってきていた。
俺はソファーに腰かけ、昨晩リビングに置き忘れていた携帯で、

青山に電話する。本来なら、部屋に戻ってかけた方がいいのだろうが、今眠っている二人を置いて離れることは躊躇われたのだ。
沙弥佳に眠るまではそばにいてほしいと、お願いされたこともある。
プルルルルル、プルルルルル
『もしもし』
「青山か？　悪いな、突然」
短いコール音の後、最近、特に聞き慣れた声が聞こえてきた。その声は、以前のようなボソボソとしたものではなくなっている。
『別にいいけど……何かあった？』
「ああ。ついさっきなんだが……奴がちょいと仕掛けてきた」
『そう……』
相変わらず、こいつは鋭くていちいち説明しなくて助かる。察してくれたのか、青山は何も追究してこなかった。
「すまないが、例の件どうなった？」
『急だね。明日学校でいうつもりだったんだけど。さすがに薬の成分までは、まだ分かってないよ』
「ということは、それ以外は？」
『うん、全員じゃないけどね。こういうの趣味にしてると、本当に情報集まるの早いからね』
いつも思うが、そういう情報源はどこから来ているのだろうか？
本当に不思議だ。まぁ、情報が早く手に入るのであれば、そんな些細なことは、どうでもいいと言えばどうでもいいのだが。
『まず例のリストに載っている人達だけど、皆死んでしまっているわけではないみたいだよ』
「本当か？　なら、こっちから奴と接触できる可能性はあるな」
『昨日の人物が、もしこのリストの人達を……亡き者にするためなら、後チャンスは三回だね』
「つまり後三人か……蒲生との接点は？」
『この死んでしまった人達は、どうも裏では非合法の物を取り扱う、

割りと有名な売人だったみたい。例のカメラもそうだね。
だから、まだ生きてる人達も、多分……』
「蒲生はこの連中から買い付けて、商品を売り捌いてたってとこかな？」
『多分そうじゃないかな？　そう考えれば、この人達に関わった人が昨日の人物ってことになるね』
「となれば、買い手……ってことになるのかな。だとしたら、途方もない話だぞ……？」
『うーん、そこが問題なんだよね……買い手なんて一人一人調べるなんてて、とてもじゃないよ。あ、だとしたら、これはどういうことなんだろ？』
「何かあったのか？」
青山は、突然何かに気付いたようだった。
『ちょっとね。今井って人が殺された話はしたよね？
この人、確かに売り手でもあったんだけど、どうも、このリストに載っている人達からかなり色々と買ってたみたいだから』
「例の首切りの被害者か。売り手であるにも関わらず、買い手でもあったってわけか。もしもこの人物が生きていたなら、限りなく怪しくもなるんだがな……」
『後ね、蒲生義則なんだけど、死んだことになっているけど、どうにもその死亡状況が分からないんだ。以前から調べてはいたんだけど、一向に出てこないんだよ』
「なんでだ？　そういったことは普通、調書なりなんなりに記録が残るんじゃないのか？
前にデータベースにアクセスしたんだったら、分かるんじゃないのか？」
『……のはずなんだけどね。ただ死亡とだけしか残されてないんだ。
初めは、なんとも思わなかったけど、よくよく考えてみると、この人物だけ死亡状況が書かれてないのは、おかしいと思うんだ。他の人達は、割と事細かに書かれているのに』

……全く、本当にこの蒲生という男は、謎かけが好きなようだ。
俺は自分でも馬鹿馬鹿しいとは思いながら、自嘲気味に問い掛けてみた。
「……なぁ、死んだことになっている奴が実は生きてるなんて話はないかな？」
『……うーん……どうだろ？　どんなことも有り得ないとも言い切れないけど……。　でも、それなら姿をくらますために、わざわざ死んだことにしたりする理由が必要だったのかな？』
「死んでおかないといけない理由、か……。考えもつかないな、俺には」
『僕もだよ』
とにかく、後の三人とやらに接触してみた方がいいだろう。問題はどうやって会うかだが……。
「それはそうと、残りの三人と会うことはできないかな？」
『え？　さ、さすがに危険じゃない？』
昨日のことを思いだしたのだろう、受話器ごしに声が震えたのが分かる。もちろん、俺だって不安じゃないわけではないが、弱気なことを言ってはいられない。
「いい加減、このストーカーとの一件を終わらせたいんだ。おちおち熟睡だってできないしな。
それに今のは、とてもデータベースにアクセスするような奴の台詞とは思えないな」
俺はニヤリと薄笑いを浮かべながら、皮肉めいて言ってみた。データベースにハッキングするというのは、とても危険なことだ。それを若干十七歳にしてやってしまったというのだから、その度胸とハッキングの才能は、相当のものだろう。
『……分かった。僕も早く開放されたいしね。今、色々と検索にかけて……っと？』
「どうした？　何か引っ掛かったのか？」
『今も検索かけていたんだけど……ちょっと気になることがね』

「是非教えてほしいね、その気になることってのをさ」
『うん……その前に確認しておきたいんだけど、綾子ちゃんの姓って渡辺だったよね？』
「綾子ちゃんの姓？　それと気になることってのと関係あるのか？」
『……かもしれない』
青山は、短く紡いだ。この男は頭がいいせいもあるが、たまに要領のえないことを言う。だが結局、それは必要になるから言っているということは、俺には分かっている。
「渡邉だな、渡邉綾子だ。渡邉の邉は古い方の字を使うらしい」
『あれ……やっぱ違うのかな』
「なぁ、いい加減教えてくれ。どういうことなんだ？」
『ごめんごめん。リストにさ、渡辺政志（わたなべまさし）って名前があるんだけどね……。
もしかしてって思ったんだけど、字が違うね。こっちは昔の渡邉ではなくて、新しい字の方になっているから』
「渡辺政志？　……つまり青山は、その男が綾子ちゃんの親族だってことがいいたいのか？」
『分からないけど……それは綾子ちゃんに聞いてしみるかないね』
青山のいうことは確かに一理ある。つまり、この話が本当にそうであれば、奴が綾子ちゃんを狙った理由は綾子ちゃん本人ではなく、その親族……恐らくは、家に仕掛けられていた類いのことを考慮して、ターゲットは父親である可能性が高くなる。
「だとしても、まだ疑問は残るな。こいつがただのストーカーじゃないってのは分かったが、綾子ちゃんだけならまだしも、その周りの人間にまで被害に遭わしてるってのは、どう説明する？
これは明らかに綾子ちゃん単体を狙っての行動としか思えないし、目的がはっきりしないんだがな。すでに人殺しをしているような奴の行動にしては、子供じみてる気がするんだけどな。
だってそうだろ？　もし父親が真の目的で、被害を周りに及ぼそうってんなら、綾子ちゃんや家族だけで十分だろう？」

『うーん……確かにそれはそうだね。僕も昨日のことで、あの人物がおそらく、今井克利という人を殺した、張本人なんじゃないかと思うようになったけど、そんな人間のわりにちょっと行動が変だね』
「だろ？　とはいえ……はぁ……まぁ、とりあえず、さっきの渡辺という男に関しては、綾子ちゃんに聞いてみよう。まだ百パーセント、親族であると決まったわけじゃぁないしな」
『分かった。また何かあったら、いつでも連絡してよ』
「ああ、いつもすまないな。事が済んだら、何か奢るぜ。回らない寿司でもどうだ？」
『うん、楽しみにしてるよ。それじゃあね』
一高校生に、そんな法外な値段の代物を奢れなどしないが、冗談だと分かっていて言ったのだろう。
「ああ、また明日な」
俺はそのまま携帯を折りたたみ、ズボンのポケットにしまいこんだ。長い時間話していたためか、口の中がやけに渇いている。
何か冷たい飲み物を、と立ち上がり様にソファーで寝ている二人に目をやると、二人ともすでに起きていて、こちらを見上げていた。

第１０章

「お兄ちゃん……今の話……どういうことなの？」
沙弥佳が、不安とも怒りともとれる表情で俺に話しかけてきた。
綾子ちゃんも、さすがにただ事ではないと察したようで、すまなさそうに目を伏せている。
「ど、どうもこうもないさ。例のストーカーの話をしてただけだ……」
「お兄ちゃん、やっぱり私に隠し事してたんだね……」
「べ、別に隠し事ってもんでも……」
「ねぇ、私たちの事そんなに信用できない？　いつも一人で先走って……それに」
沙弥佳は一度、間をおいて
「腕……怪我してるよね？」
図星をさされて、思わず切り付けられた右腕を押さえてしまった。
しまったと思ったときには、もう後の祭りだった。
「私が気付いてないとでも思った？　言ったよね……私、いつもお兄ちゃんのこと思ってるって。
ずっとお兄ちゃんのこと見てたんだから、何かあればすぐ分かるんだよ？」
「……あ、あの、私もなんとなく変だなって思ってました」
おずおずと、綾子ちゃんもそれに賛同する。
「な……」
俺は開いた口が塞がらなかった。隠せていると思っていたのは、自分一人だったわけなのだから。
以前に、斑鳩が女は勘が鋭くて参る、なんて言っていたのを思い出したが、全くもってその通りだ。
「……だから、私達にも教えてほしいよ。お兄ちゃんが怪我したこ

とと、このストーカーのこと、何か関係があるんでしょ？
そうでもないと納得できないよ……お兄ちゃん、最近ずっと変だったんだから」
「私も知りたいです。……九鬼さんが電話で私の父の名を言われた時、私が関係してることは、なんとなく察せました。
それに……」
一旦言葉をおいて、綾子ちゃんは、俺と沙弥佳の二人を交互に見やり、細い体を少し震わせながらもはっきりとした口調で、確かな意思を秘めた眼差しを向ける。
「私はもう逃げたくないんです。九鬼さんの怪我がもし、私をストーキングしている人のためにできたものだったら、なおのことです……私のせいでもあるんですから」
俺はため息を一つついて、視線を二人から外す。このまま押し黙っていることは、もはや無理だろう。
全く……さっきは、あんなことになっていたと言うのに、女というのは男が思っている以上に強いもののようだ。
俺は今起こっている事を話すことに、あまり乗り気ではなかったが、二人の迫力に負け、観念して綾子ちゃんが来てからの出来事や、ストーカーを追っていて分かったことを洗いざらい話すことにした。相手がただのストーカーではないことを知ると、さすがに青ざめた顔をしていたが。
それと当然ながら、奴と格闘したことだけは伏せておいた。
「ま……所々まだ抜けてるところもあるが、分かってるのはざっとこんなもんだな」
「それでそのリストに、私の父の名前があったんですね？」
「ああ。だから綾子ちゃんに確認してみるって話になったんだ」
「わかりました。父の字は……」
綾子ちゃんは、電話の横に置いてあるメモ帳とペンを取り、自身の父の名を書いていく。
彼女の字体は、今時の子とは思えないほど綺麗な字で、やはり育

ちが違うのだなと、思わせる。
「……こうです」
書き終えた綾子ちゃんが、俺達に見やすいようメモ用紙を見せた。
『渡邉政志』
「わたなべまさし……？」
俺の代わりに、沙弥佳が読み上げた。ただの同姓同名であるが、字が違う。渦中の人物ではないのか……。
「……やっぱり違うのか？」
なんとも言えない落胆があったが、思えば『まさし』という読み方は分かっていても、何と言う字を書くのかまでは聞いていない。俺はまだ、可能性を捨て切れなかった。
「あ……そう言えば」
綾子ちゃんは、何か思い出したように話し出した。
「父は婿養子としてうちに来たと母が言っていたんですけど、改姓前も改姓後もほとんど変わらないと言ってました」
「どういう意味だ？」
「ただ単に、字が変わっただけだと……」
「それって……お兄ちゃん？」
綾子ちゃんの言いたいことが分かった。
「ああ。つまり、以前は『渡辺』という字だった……ってことだろうな。そうなんだろ？」
俺は綾子ちゃんからペンを取り、紙に書いた。綾子ちゃんは力強く頷く。やはり、あのリストに書かれていたのは、間違いではなかったわけだ。
それと同時に彼女の父親と蒲生は、綾子ちゃんが生まれる前からの知り合いだった可能性もありそうだ。
普通、ビジネスパートナーのことをフルネームで書くのに、間違った字のままにするだろうか。
例のリストが手書きであれば、面倒に思って、わざと簡単な方の字にすることもあるかもしれないが、あれはパソコンで書かれたも

のだった。
　単純に字の打ち間違いというのも考えられるが、昔からの付き合いだったからこそ、そのままにされたと考える方が自然のような気がする。
　ましてや、蒲生はやり手の営業マンだったという話だし、そのようなミスをするとも考えにくい。おまけに、あのリストが蒲生の家にあったことを考えても、蒲生が作ったリストに違いないはずだからだ。
　ともかく、これであのリストに載った人物の一人と接触できるかもしれない。
「奴の行動には、色々と分からないことがあるが、まずは一度、君の親父さんに会えないかな？　親父さんの関わった人の中に、奴がいると思うんだ」
「はい。私もそれは是非話を聞いてみたいですから」
「……もちろん、その時はお前も一緒だから、そんな顔するな」
　思い切り不機嫌そうに、ジト目で俺達のやりとりを聞いていた沙弥佳に、苦笑いを浮かべる。
　きっと、また俺が一人で先走ろうとするのが嫌なのだ。あるいは、綾子ちゃんと仲よさ気に話しているからか？
　けれど沙弥佳は、その言葉を聞くや否や、ぱっと花が咲いたように笑顔を見せた。こりゃまた昨日の今日だが、だんだん態度が露骨になってきたな……。
　沙弥佳の様子に俺は、また小さくため息をついた。

　綾子ちゃんは親父さんに連絡をとるため、数分置きに何度も電話をかけてみはしたが、親父さんは一向に電話に出る気配がなかった。
「おかしいですね……いつもなら、これだけコールしたら出るんですけど……」
　綾子ちゃんは再度リダイヤルするが、反応は変わらない。
「ね、ねぇ、大丈夫だよね、お兄ちゃん？」

これだけコールしても出ないとなると、先程の話を聞いた後では、さすがに沙弥佳も心配するだろう。当然ながら、俺にも嫌な予感がよぎる。

綾子ちゃんの表情も、同様に曇っている。何かあったのかもしれない。俺達になんとも嫌な雰囲気が漂い始めていた。

「綾子ちゃん、親父さんの会社の方はどうだ?」

「……すみません、知らないんです。携帯にかけてくれた方が繋がるからと……」

「そうか……」

くそ、向こうと接触できないんじゃ意味がない。そりゃぁ、ただ接触を試みるだけはらば、渡辺政志にこだわる必要はないが、もし本当に綾子ちゃんの親父さんに何かあれば、そいつはいささか後味の悪いものになる。

たとえどうあろうと、綾子ちゃんにとっては、ただ一人の父親なのだ。

「会社の名前はわかるか?」

「渡辺産業株式会社……だったと思います」

「よし。今から行けないかな?」

「でも……今日お休みじゃない?」

「そうか、今日は休日だったっけか……くそっ、どうしたもんか……」

俺達は何も思い浮かばず、ただただ沈黙するしかなかった。その間も、俺達を包み込む嫌な空気は、なおも淀み積もっていく。

「……やっぱり、もし遭遇した時に捕まえるしかないのかな?」

雰囲気に堪えられなくなったのか、沙弥佳が沈黙を破って小さく呟く。

「……かな。正直、俺にはこれ以上何も思い浮かばんぜ」

自分のできることなんざ、たかがしれている。けれど、だからこそこんなにも、もどかしい。

「なら……」

「ん？」
「なら、囮作戦というのはどうですか？」
多分この台詞が、綾子ちゃんに関して一番驚かされた瞬間だろう。
まさか、この子がこんなことを口にするなんて思いもよらなかった。

さて、綾子ちゃんの提案で囮作戦を決行することになったわけだが。
断っておくが、決して最初から賛同していたわけではない。否、今だって心から賛同しているわけではないのだが、あの後もいい案はないかと模索はしてみたものの、結局は綾子ちゃんの提案したもの以上の案が出なかったのだ。
青山の情報を待ち、裏をとってからという案もあるにはあった。しかし、綾子ちゃんの親父さんの安否が確認できない今、悠長なことをいってられないのも事実だ。
「囮とは言っても、並大抵のことじゃぁできないと思うぞ？」
「はい、分かっているつもりです……。でも、今は一刻を争う時だから」
俺はこの時、ふと類は友を呼ぶという諺を思い出した。沙弥佳と変なところで似通っているのだから、親友になったのも頷けるというものだ。
「だけどお兄ちゃん。囮って言っても、具体的にどうするつもりなの？」
「それが問題だな。俺だってそんなことしたこともないから、どうすりゃぁいいのか見当もつかん」
そう、どうすればいいのか分からないのだから、俺はこの案には乗り気にはなれなかったのだ。
「妥当なことを言えば、綾子ちゃんを一人にして行動するってとこなんだろうが……」

「でもそれじゃあ……」

沙弥佳の言葉に頷く。こいつが心配するのも無理はない。そんなことをすれば、冗談抜きに命の保証はできないかもしれないのだ。相手は目的のためなら、関係があろうとなかろうと人を殺すことすら厭わない、危険人物なのだから。

それに俺自身、その道のプロというわけではないのだから、綾子ちゃんを尾行しながら守れるなんて言い切れない。

「……俺も一緒の方がいいだろうな。それで効果があるかは分からないが」

囮作戦を決行するにしても、やはりこればかりは譲歩できない。それと囮作戦は明日からやるということにもだ。

情けないかもしれないが、まだこの腕の傷も回復仕切っていないうえ、万が一、父親が連絡してくるかもしれないという、可能性と期待も少ないながらもあるからだ。

ただでさえ危険な目にあっていたというのに、綾子ちゃんにこれ以上の危険に晒すわけにはいかない。その旨を伝えると、綾子ちゃんも無言で承諾してくれた。

けれど、その態度から察するに、この子は本気で自分で囮になる気のようだ。全く下手すりゃ、そんじょそこらの男なんか比較にならないほど、肝っ玉がすわっているようだ、綾子ちゃんは。

俺としても奴がどういう目的であれ、これ以上奴に付き合うつもりはない。今の綾子ちゃんを見て、奴が現れようが現れまいが、この作戦をやってみようという気になってきたのだ。

「お兄ちゃん、あんまり無茶はしないでね……」

「ああ、もちろんだ」

かくして、作戦は決行されることとなった。

翌日、休みが明けた本日月曜から作戦を決行することにする。

作戦なんて言っても大それたものでもないのかもしれないが、とにかく綾子ちゃんがやると言った以上、俺も腹をくくって付き合うつもりだ。

ちなみに結局のところ、綾子ちゃんの親父さんとは連絡がつかなかった。何度連絡をしても繋がらなかったので、それは予想できたことではある。

ついでに、会社の電話番号をネットで調べて電話してみたものの、予想通り会社は休みで、留守番に繋がるだけだった。

綾子ちゃんも母親や親類、手当たり次第電話してみたが、結果はやはりどれも同じだった。

とりあえず、朝はいつも通りに日課となった、二人を学校まで送ることからだ。

途中、俺はいつか青山からもらった警棒を、念のために綾子ちゃんに渡した。沙弥佳と綾子ちゃんは驚きながら、なぜこんな物を持っているのか不思議がっていたが、青山から貰ったと告げると納得したようだった。

簡単に操作の説明をし、電気が流れることを知ると、新しい玩具を手に入れた子供のようにはしゃいでいた。

「お兄ちゃん」

腕の怪我を気遣ってか、左腕にしがみつきながら、沙弥佳が聞いてきた。

「ん？」

「ごめんね……私がお兄ちゃんに話を持ちかけなかったら、怪我なんてすることもなかったのに……」

「ああ、そのことなら気にするな。俺だってこんなことになるなんて分からなかったんだしな。

そもそも、あの時点でそんなこと誰も分かりっこないんだ、誰のせいでもないだろ？」

「うん……でも」

「でももへちまもないぞ。それに……もしかしたら、昨日のことだって俺が下手に首突っ込まなけりゃぁ、あんなことは起こらなかったかもしれないんだしな。その点、俺の方が悪かったと思ってる」
「あ、あれは別にお兄ちゃんのせいってわけじゃ……」
「だったらこうなったのも、お前のせいじゃぁない。気にしすぎなんだ、お前は」
「……うん」
「……ま、それでも気になるってんなら、事が片付いたら、何か豪勢なもんでも作ってくれよ。ついでに青山も呼んでな。
俺としても、そっちの方がよっぽど頑張れた気になれるしな」
クックッと肩で笑いながら、沙弥佳を窘める。俺にそう言われ、いくらか元気な表情を見せたが、それでもいつものものとは比べられるものではなかった。
そんな会話をしているうちに、二人の学校に着いた。相変わらず目立っているが、さすがにもう一週間以上も続けていると、この状況にも慣れてきた。全く、慣れというのは怖いものだ。
「それじゃぁな。帰りは昨日、言ったとおりにな」
「あ、うん。それとお兄ちゃん、これ」
沙弥佳は鞄から、包みにつつまれている弁当箱を取り出し、手渡した。
「っとと、忘れてたな。危うく昼飯なしになるとこだったぜ」
おどけながら、差し出された弁当を鞄に入れる。
「今日のおかずは、あやちゃんも一緒に作ったんだよ」
「そうなのか？　今日は初の合作弁当か」
「ふふ、楽しみにしていてくださいね」
綾子ちゃんが、相変わらずの上品な仕種で笑う。沙弥佳もいつも以上に、にこやかにしている。そこには先ほどの沈んだものは感じられず、それはそれ、これはこれとはっきりと、線引きできているのだと思った。まさに新しい発見と言えよう。
しかし俺は、嬉しくなった半面、前のようにまた何かとんでもな

いことをしているんじゃないかと勘繰ってしまった。
「ああ、二人の息の合い具合は一昨日で実証済みだしな。楽しみにしてるよ」
そう言って俺はもと来た道を戻り、駅へと向かう。その後ろ姿を、絡み付くような視線を送ってくる人物に気付くことなく――。

小町ちゃんの授業が終わり、昼休み。青山と共に、もはや当たり前となった技術棟の屋上へと向かう。
施錠された扉の前には、やはり藤原真紀の姿があり、またいつものごとく扉の錠を開けてもらった。毎度のことだが、なぜこの女はいつもいつもこうも都合良くここにいるのか、いずれ問いただしてみたい。
まぁ、鍵を持ってるくらいだから、日常的にここに来ているのかもしれない。
「怪我の具合はどう？」
屋上に出ると、青山が聞いてきた。
「痛みはもう大分なくなった。とりあえず激しい運動さえしなければ大丈夫だと思う」
「そう……良かったよ、思ってる以上じゃなくて」
俺はそれに苦笑で応えた。あれだけの出血があれば、そう思われるのも無理はない。自分自身、そう思ったのだから。
「あら、あなた怪我したの？」
「ああ、ちょっとな。でもたいした怪我じゃない」
「そう。……気をつけてよね」
「？　ああ」
俺は弁当箱を開き、いつもより気合いの入った感のするおかずに心躍ろかせながら、青山に昨日のことを話していた。
「……やっぱり、渡辺政志は綾子ちゃんのお父さんだったんだね」

「ああ、まさにお前さんの予想通りだった。だけど残念ながら、昨日ずっと連絡が取れないままだったよ」
青山も、やけに気合いの入った弁当を頬張りながら、相槌を打っている。
藤原真紀は少し離れたところのフェンスに寄り掛かりながら、普通棟からは見えないように座り、一人黙々と弁当を食べているがあの女狐のことだ、しっかりとこっちの話を聞いていることだろう。
「やはり、ストーカーは綾子ちゃんの親父となんらかの関係があって、成り行きで綾子ちゃんが狙われたと考えるのが自然だよな」
「だね。確かに九鬼くん話じゃそうとしか思えないけど……」
「だよな……まだ疑問に思うこともあるんだが。ま、どっちみちストーカーは現行犯逮捕だ。凶器も持っているんだから、一発で逮捕だろ」
「でも、また一昨日みたいに怪我しちゃうかもしれないよ……？」
「……かもな」
お互い言葉にはしないが、次は怪我だけではすまないかもしれないとも感じていた。
おとといの、蒲生の家でのことが思い出される。
あのまま奴と絡んでいたら間違いなく、殺されていただろう。奴は人を傷つけることに、全く戸惑いを見せなかった。急に苦しみだしたおかげで命拾いできたのだ。
今にして考えてみれば、そんな奴を相手によくもあんな行動ができたもんだと思う。あの時は必死だったため、とにかくどうにかして、あの場を切り抜けようと、たったそれだけの考えであんな行動とったのだ。運が良かったのだろう。
「こっちも分かったことがあるよ。例の薬と思われるやつだけど」
「あの小瓶に入っていたやつか」
「うん。あれ、どうも危険な薬だったみたいだね。人体に使うには、かなり危険が伴うみたいなんだよ」
「素人判断だけど、薬ってのは、大概危険が伴うものなんじゃぁな

いのか？」
「もちろん、それはそうだけど……。でも徳川さんが言うには、あれはそれらを遥かに上回る危険なものだって。
しかも一種の興奮剤みたいなものも入っているみたいで、摂取するとそれらが瞬く間に全身に回るらしい。
徳川さんの言ってることは、専門的すぎて分からなかった部分もあったんだけど、脳になんらかの刺激を与えることで、身体や精神そのものにも影響を与及ぼすもののようなんだ」
「いわゆるドーピング剤みたいなものか？」
「それの強化版みたいなものかも。ついでにある種、麻薬みたいな効果つきの」
顔がわずかに引き攣ったのを覚えながら、青山に肩をすくませてみせた。
「つまり常習性があるってことか？　だとしたら確かに危険だな」
「徳川さんも全て分かっていたわけではなかったみたいだけど、そう考えていいと思う」
「やはり……蒲生が製薬会社で働いてたってのと、家にそれがあったことを考えると、その薬は蒲生のいた会社が作ったもの……そうと考えていいよな」
「間違いないんじゃないかな？　僕もそう思ってるよ。薬の成分はまだ完全に分かっているわけじゃないけど、そんな物を個人で作れるとは思わないよ」
俺も、それには同意だった。
だが青山には悪いが、はっきり言うと、もはや細かい薬の成分まではどうでも良かった。薬の成分一つで、奴の正体が分かるわけでもないだろう。そいつが奴に繋がる決定的なものになるというのなら、話は別だが。
とりあえず、今は人体には使ってはいけない物だということだけ分かっていれば、それだけで十分だ。
そんなことに思いを巡らせながら、これからのことを考えている

と予鈴が鳴った。　案外時間が経っていたらしい。
「これ、あなたにあげるわ」
教室に戻るのが面倒くさいと思いつつ、ゆっくりと腰を上げた時、藤原真紀に声をかけられた。
「なんだ、これ？」
「お守りみたいな物よ。あなたの怪我と今回の話、何か関係ありそうだもの」
なんと真紀が差し出したのは、刃渡り１０センチほどのナイフだった。そしてにらんだ通り、やはりこちらの話を聞いていた。
「お守りって……むしろ、武器じゃぁないのか？　これは。第一、こいつはどう考えても銃刀法違反だろう？」
「別にそんなの、バレなければ構わないでしょう？」
こいつ……いとも平然と言ってのけやがった。
しかし体の方は正直で、つい最近この刃物で怪我したばかりだろうか、無意識のうちに身構える。
「何かあった時は使いなさい。いいわね？」
真紀は、強引に俺のズボンのポケットにナイフを押し込んだ。俺はされるがまま、真紀の行動にも口をつぐんだ。この女とは短い付き合いだが、どうせ断ったって、結果は変わらないだろうと判断したためだ。
「まあ、せいぜいありがたく使わせて貰うよ」
嫌味たっぷりに礼を言って、校舎の中へと戻って行った。

「おーい、九鬼ぃ」
帰りのＨＲが終わり、沙弥佳達の待つ中学校へと向かおうとした時、斑鳩のやつが声をかけてきた。こいつのことだ、どうせ大した用事ではないだろう。
「なんだ？　斑鳩」

「最近、九鬼って付き合い悪くね？　久々に俺らと遊びに行こうぜ」
やはり、そんなことだろうと思った。だが、俺としてもすでに先約がある。一々、斑鳩達の言う遊びとやらには付き合う気にはなれなかった。
どうせ遊びなんて言っても、ただのナンパに過ぎないのは、目に見えているのだ。今はそんなことをやっている暇はない。
「悪いな斑鳩。今日はすでに先約があるから、遠慮しておく」
「何々？　もしかして九鬼にも彼女できたん？」
「さあな」
全く。こいつの頭の中には、色恋沙汰のことしかないのだろうか？
別に色恋沙汰が悪いわけではないが、この斑鳩という男の時折覗かせる、いかにも軽薄そうな浮いた話題は、いつまで経っても慣れず、はっきり言って鬱陶しさすら感じ始めている。
それに斑鳩の周りの連中は気付いているのか知らないが、この男は引き立て役として連中を利用しているに違いないのだ。もしかしたら、取り巻き連中も斑鳩を利用しているのかもしれないが。
「とにかくお前達に付き合える時間はないんでな、悪いが帰らせてもらうぞ」
「またかよぉ～」
取り巻きの連中からのヤジは無視して、教室を出る瞬間、ふいに窓ガラスにうつった斑鳩は、いかにも面白くなさげな、それでいて、明らかに人を見下した表情を見せていた。
（これがこいつの本性なんだろうな）
そんなことを思いながら、下駄箱へと下りて行った。

足早に駅に行くと、ちょうど電車がホームに入ってくるところだった。昨日のうちに簡単な打ち合わせをしておいたので、今から向かう場所には綾子ちゃんしかいないはずだ。
決して、人目のつかない場所には近づかないよう言い、待ち合わせ場所には、駅隣のコンビニの中にいるよう指示しておいた。今日

は様子見ということもあり、沙弥佳は先に家に帰らせ、俺と綾子ちゃんの二人で行動する。

沙弥佳のやつは、まさか自分が先に帰れどと言われるとは思わなかったようで、最近お得意の不機嫌な表情をしてみせたが、事が事なだけに、しぶしぶながらも納得したようだった。

囮だというのに、いつものように行動していたら意味はない。まして、俺が一緒にいるというのが果たして本当に囮なのか、というのもまた疑問ではあるが、これればかりは仕方なかった。

俺は流れていく景色を眺めながら、これからどうするべきかを考えはじめていた。

第11章

目的の駅に着くと、俺は階段を二段飛ばしで上り、改札を抜ける。
待ち合わせにしたコンビニは、やはり学校帰りの高校生や中学生であふれていた。綾子ちゃんは、雑誌を立ち読みしていたが、俺の姿を見つけると雑誌を棚に戻し、店内から出てきた。
「すまないな、待ったか？」
「いえ。私もつい十分ほど前に来たばかりですから。それに、ここまではさやちゃんと一緒でしたので」
「そうか、それは良かった。本当は何かあったりしないか、少し心配だったんだ」
聞けば沙弥佳は、駅まで一緒に来た後、他の友達と帰ったのだという。
「それじゃぁ行くとしようか」
「はい」
綾子ちゃんは笑顔で頷いた。その笑顔は、心なしかいつもより楽しそうに見えた。

「これからどうしましょうか？」
繁華街へと続く、アーケードを歩きながら、綾子ちゃんが聞いてきた。
「ああ、なるべく自然にした方がいいだろうからな。君は行きたいところとかないか？」
「え？　わ、私は特にないです……」
俺の問いかけに、綾子ちゃんは普段に比べ、不思議なほど聞き取りにくいほどの小声になってしまった。

「ないのか？　普段と同じようにしないと折角の囮作戦も台なしになっちまうぞ？　それに、今まで学校が終わったら直帰だったんだ、ちょっとくらいなら、遊んでも構わないぞ。むしろその方が自然じゃないか？」

「え、あ、あの、えと……そ、それなら　く、九鬼さんはどこか行きたい場所はないですか？」

綾子ちゃんは妙に落ち着かない態度で、珍しく声を荒げて反問してきた。しかもなぜか、耳まで顔が真っ赤になっている。特におかしいことも言っていないはずなんだがな。

「俺か？　んー……特にないな」

「あ……そ、そうですか……」

今度は、がっくりと肩を落とし、うなだれた。なんだか……いつもの綾子ちゃんと違うのは気のせいだろうか。

「綾子ちゃん、大丈夫か？　なんだったら、今日はやめておくか？」

「えっ！？　だ、駄目です！　わ、私、ちゃんとやるって決めたんですから！」

「そ、そうか。でも調子が悪くなったら、すぐに言うんだぞ？」

「は、はい。で、でもご心配には及びません！　私は大丈夫ですから！」

今日の綾子ちゃんは、態度がころころ変わって、まるで沙弥佳になったみたいだ。けれども、朝はそんな風に見えなかったし、囮になるということに緊張しているのかもしれない。だとすれば仕方のないことだ。

俺自身もやはり緊張しているのだから、当たり前だ。俺はそう察して、これ以上は追及はしなかった。

結局お互い遠慮しあって、何をするでもなくブラブラとアーケードを歩いた。一人なら、ふらりとそこらの本屋やＣＤショップにでも入るところだが。

まぁ、それでもいいかもしれない。何もすることなく、ただ二人

ほっつき歩いていたんでは、逆に不自然だ。
「なぁ」
「は、はい？」
「確か、クラシックとかジャズが好きって言ってたよな？」
「はい。父の影響もあるんでしょうけど……結構好きですよ」
「そうだったな。じゃぁちょいとＣＤ屋に行ってみないか？　クラシックはともかく、ジャズには興味があるしな」
俺は初めて会った時に、趣味の話なんかを聞いていて、そういったジャンルの音楽を聴くといっていたのを思い出したのだ。
俺はロックやポップスだとか、レゲエ、ファンクあたりしか聴かないから、あまりその辺の音楽は分からないのであまり気にとめなかったが、これを機に、新しいジャンルを開拓するのもいいかもしれない。
「分かりました。行きましょう」
会話らしい会話もすることなく歩いていた俺達だったが、ようやく自然にできそうな場所に行けそうだ。

アーケード街のＣＤ店に入ると俺達は、早速ジャズのコーナーへ行った。
高校生や中学生と言えば、まず流行りもののジャンルのコーナーへ行くものなのか、二十代半ばくらいと思われる店員は、そんなもの見向きもせずにジャズコーナーへ行く俺達に、奇異の視線を向けたようだったが、それも一瞬だった。
「どんなものが聞いてみたいですか？」
「どんなものって言われても、どう答えりゃいいのか分からないな」
俺は苦笑しながら肩をすくめた。
「ジャズと一言でいっても、割りとジャンルがあるんですよ」
「へぇ、そうなのか？　じゃぁ……良くオシャレな感じの喫茶店とかで流れてるようなやつは？　落ち着いた静かな感じの」
「うーん……クールジャズのこと、でしょうか？」

「クールジャズっていうのか。試しにどんなのか聞いてみたいな。何か有名なのはないか？」
「有名なものですか……ああ、それでしたら、あれなんかいいかも」
綾子ちゃんはそう言うと、お目当てのＣＤを探し始めた。
俺には何がなんだか分からないので、ただついていくだけだったが、ある一画に来た時、綾子ちゃんはお目当てのものを見つけ、そのケースを俺に差し出した。
「これなんか気に入ると思いますよ」
「『ＳＯＭＥＴＨＩＮ'　ＥＬＳＥ』？　へぇ、マイルス・デイヴィスか」
「マイルス、ご存知なんですか？」
「ああ、名前だけだけどな。名前はかなり知られてるだろ？　キング・オブ・ジャズってね」
「なるほど。そうかもしれませんね。それにジャズ好きに、彼を知らない人はいないですから」
俺は頷いた。本当に名前だけだが知ってはいる。後はせいぜいトランペッターだということくらいだ。
「このアルバムの一曲目の『枯れ葉』は、九鬼さんなら、絶対に気に入ると思います」
「枯れ葉か……確か、元々はシャンソンだったな。マイルスもやっていたんだな」
「というよりも、マイルスがジャズに定着させたという方が、より正確だと思いますよ」
「へぇ、そうなのか。じゃぁこいつは綾子ちゃん的に何点評価？」
少し意地悪げに聞いてみた。けれど、綾子ちゃんはその言葉を待ってましたと言わんばかりの顔で
「もちろん、百点満点ですよ」
と自信たっぷりに、はにかんだ笑顔を見せ、俺の心臓は、また唐突に鷲掴みにされたのだった。

しばらくの間、綾子ちゃんのジャズ談議は続き、その様子は普段からは想像もできないほど饒舌だった。

CDを買い終え、店を出た後もそれは続き、ジャズの成り立ちから、シーンの立役者になった希代のミュージシャン達、演奏方法やリズムだとか、とにかくマシンガントークなのだ。

俺が一を言えば、綾子ちゃんは十を言う……それはまさに、ジャズマニアに相応しいものだった。俺もジャズというものに興味がなかったわけではないので、綾子ちゃんの話は参考にはなったが。

けれど、お互い気をよくしたのか、CDショップに入る前と後では、まるで別人のようだった。

アーケード街の店の中に入っては、服やアクセサリーを見てまわる。綾子ちゃんがこれかわいいと言えば、俺がこういうのはどうだと返し、あんなに緊張していたのが、馬鹿らしいと思えるほどだ。

しかし、ふと見たショーウインドーに、黒のジャケットを見た時、すっかり本来の目的を忘れていたのに気付き、我にかえった。

(何をやってるんだ、俺は)

今日は行動一日目ということもあって、様子見とは言ったが、今回の作戦の目的まで失っては、全て無駄になってしまう。

そりゃぁ自然に……とは言いはしたが、根本的なことを忘れてしまっては駄目だ。意味がない。俺はそう自分に言い聞かせ、あらためて気を引き締めなおした。

「あの……九鬼さん、大丈夫ですか?」

突然喋らなくなった俺に、綾子ちゃんが下から顔を覗き込んできた。その仕草に、なぜかドキリとさせられる。

「え? ああ、ちょっと考えごとをな。ところで綾子ちゃん。悪いが」

「あ! あれ! あれ見てください」

言いかけた言葉を遮って、綾子ちゃんは道の先にある、巨大なイルミネーションツリーを指差した。

大分冷えてくるようになったと思えば、すでに十一月も半ばを過

ぎ、そろそろ気の早いクリスマスツリーが街を彩るようになってきたのだ。

「そうか、もうそんな時期なんだな……」

今年も後六、七週間ほどで終わると思うと、なんだか感慨深い気持ちにさせられる。来週にはきっと、早くもクリスマスソングが、街のいたるところで流れるようになるのだろう。

「ねぇ九鬼さん、行ってみましょう！」

「あ、お、おい」

綾子ちゃんは急に俺の左手を手に取って、ツリーの方へと走りだした。

「そんなに慌てなくたって、ツリーは逃げないぞ」　俺はやや呆れながら、引っ張られるがままにされていた。かくいう俺もまんざらではないのかもしれない。

それに、こちらの怪我を気遣っているのか、しきりに右腕上腕部分を気にしていたのは見間違いではあるまい。

ツリーの前に来ると、その大きさが良く分かる。何せ、そこらの二階、三階建ての建物と同じか、それ以上の高さがあるのだ。

ツリーの周りには、すでに人だかりができていて、いまかいまかと何かを待っている様子だ。ツリーの方も、装飾は完全にすまされており、もしかすると今日、今これから点灯するのかもしれない。

イルミネーションなんざ、時期が来ればいくらでも見れるが、点灯式というのには立ち会ったことがない。そういう意味では、あまりお目にかかれないことに立ち会うことができるのだから、貴重といえば貴重だ。

横目で綾子ちゃんを見ると、やはり点灯する瞬間を期待しているようだった。業者が準備を終えたのか、一旦ツリーから離れる。

どれほどの時間が流れたかはわからないが、ツリーに一斉に明かりがともった。ツリーの大きさもだが、その装飾もかなりのもので、明かりがつくとよりその存在が際立ってみえる。

「わあ……すごく綺麗」

うっとりとした表情を見せて、綾子ちゃんが呟いた。たしかにツリーも綺麗だが、ツリーからの光に照らされた綾子ちゃんの方が……って、何を考えているんだ、俺は。

唐突に浮かんできたことを振り払うように、再び初心に戻って、例のストーカー野郎がいないか辺りを見回す。しかし、ざっと見たところ、それらしい人物は見当たらなかった。

しばらくの間、人ごみにまぎれて二人ツリーを見上げていたが、ひとり、またひとりとできていた人だかりも散っていく。

「そろそろいこうか」

「ぁ……はい」

一瞬だけ寂しげな顔をみせた綾子ちゃんは、すぐにまたさきほどまでの明るい笑顔になって、歩きだした。

「さて……これからどうする？　今日はもうあまり収穫はないかもしれないぞ」

「あ、そ、そうかもしれませんね」

この態度から察するに、やはりというか何と言うか、綾子ちゃんは完全に目的を忘れていたようだった。まぁ、俺もあまり人のことをいえた義理ではないのだが。

「何か食べていくか？」

「え？　でも、もう時間も時間ですし、今食べるとお夕飯に響きませんか？」

「いや、聞いてみただけだ。せっかくだしなと思ってね」

ほんの少しだけ照れ笑いをしてみせ、肩をすくめる。

「まぁ、特に希望がないのなら、今日はもう帰ろうか」

「あ、はい……」

綾子ちゃんは自分で正論をいったものの、それが受託されたことに、わずかに眉を寄せた。それを見た俺は、内心で苦笑いし、ため息をつく。

「それなら、あそこはどうだ？」

「あそこ？」
頷きながら、俺の中に浮かんできたのは、キシマイ堂だった。ここからなら、あそこは近いし、帰り道からはやや外れるが、その辺のことはさし当たり、問題ないだろう。
綾子ちゃんも、俺が提案した場所に賛成したようで、嬉しそうな顔で頷いた。

キシマイ堂は、アーケード街からやや外れた場所にあるが、ここだけ盛り上がった小さな丘に立っているため、かなり目立つ。
裏手は、オープンテラスになっており、今はいないが、暖かい時期になると、こぞって人気のある場所となる。
それでも、マホガニーがふんだんに使われている店内は、それだけでもとても雰囲気のある、人気スポットなのだ。
俺達が店に入ると、いったん客もひけた後のようで、いつもは満員御礼の店内も、チラホラと空席がある。
いつもこれくらいなら、男の俺でももうちょっと気楽に入れるというものだが、それも今のうちで、後三十分とたたないうちに、仕事帰りのＯＬや、カップル達でまたごった返しになるだろう。
「何がほしい？　あ、前の特大のは勘弁な」
あれは俺の経済状況にかなりの大ダメージになるから却下だ。
「え、えっと……あの、実は私、この前が初めてだったので、よく分からないのですが……」
こいつは驚いた。てっきり何度か足をはこんでいるものとばかり思っていたからだ。だが、これで前回のは、やはり沙弥佳のやつが口合わせさせていたことが分かった。帰ったら仕置きだな、全く。
俺は思わず苦笑いをし、口を歪ませる。
「あの、どうしました？」
「ん？　ああ、いや、なんでもない」

クックックと肩で笑う俺に、綾子ちゃんは何事かと疑問をぶつけてきたが、俺はそんなのお構いなしに、メニューを選び、バニラのアイスクリームを注文することにした。

アーケードでの失敗を忘れないよう、店内、外、入ってくる客、くまなく目を光らせるが、それらしい奴はここでも見受けられない。

店員が注文した品をはこんで、おなじみの台詞を言い残し、立ち去っていく。

綾子ちゃんはレアチーズケーキを頼み、目を輝かせていた。聞けば、大の好物なのだという。

「それでは、いただきますね、九鬼さん」

「ああ」

軽く手を合わせて、目の前にはこばれたアイスをスプーンですくう。

「んー、いつ頼んでもうまいな。綾子ちゃんはどうだ?」

「はい、とっても美味しいです!」

満面の笑みで、フォークをケーキにさしている。こうしていると普段、大人びて見えても、やはり歳相応なのだと思える。

この光景を見ているだけで、なぜだか、こちらも満たされた気になるのだ。

「あ、あの……」

「ん? なんだ」

綾子ちゃんは、食べていた手を止め、急に顔を赤らめさせている。つい、今の今まで普通にしていたのに、どうしたのだろう。

「あ、あの九鬼さん。よ、良かったら、これ、ひ、一口ど、どうですか?」

「お、交換か。いいな。じゃぁ一口もらおうかな」

そういって、俺はアイスを皿ごと綾子ちゃんの前に持っていく。

「先にどうぞ」

俺の行動に綾子ちゃんは、急に慌てはじめ、しどろもどろしていたが、落ち着いて深呼吸をし、なんとフォークでアイスを食べよう

としていた。
「おいおい、綾子ちゃん。アイスはスプーンを使って食べるものだぞ」
「え！？　で、でもそれじゃっ、か、間接……」
「間接？」
今日の綾子ちゃんは、本当にどうしたのか。突然あわてふためいたり、謎の言葉を言ったりと、まるで綾子ちゃんの中に、沙弥佳が乗り移ったのではないか、と馬鹿馬鹿しい気すらおきてくるほどだ。
「そこまで驚くことじゃぁないだろ。それともフォークで食べるのが当たり前ってのなら、止めないが……」
やれやれ。今日の綾子ちゃんには、驚かされることばかりだな。
綾子ちゃんの態度に、俺は笑みをこぼした。
「そ、それじゃあいただきますね」
「おう」
綾子ちゃんは神妙な顔で再び深呼吸しているが、アイスひとつ食べるのになぜそこまで硬くなるのか、いまいち理解できない。
意を決して、俺の使っていたスプーンを持ち、アイスをすくってその綺麗な口元へと運んでいく。
目を細めながら、小さな口に運ばれていくその仕種はなぜだか、どうにもエロチックに見え、俺の男の部分が反応してしまう。
（な、何考えてるんだ、俺は）
かぶりを振って、沸き上がってきたものを鎮めようとするが、一度沸き上がったものは、なかなか鎮めることができない。
しかも、考えないようにすればするほど意識してしまい、とてもじゃないが今この場に立つことができないほどになった。
そんな俺を尻目に、綾子ちゃんはアイスを咀嚼し、飲み込む。
「うん、これもすごく美味しいですね。私もこっちにすれば良かったかなぁ」
「そ、そうか。喜んでもらえてなによりだ」
「それじゃあ次は私の番ですね」

綾子ちゃんはアイスの皿を俺の前に戻し、おもむろにフォークをとる。

「あ、ああ、一口もらうよ」

てっきり、フォークを渡すために取ったと思ったのだが、そうではなかった。綾子ちゃんは、フォークをケーキにさし、一口分すくい取ると、左手を添えながら、俺の顔の前まで持ってきたのだ。

「あ、綾子ちゃん……こ、こいつは」

「あ、あーんしてください」

あろうことか、食べさせようとしていたらしい。

さすがに、これは恥ずかしかった。意図せず口が開いてしまい、綾子ちゃんはそれを肯定と受け止めたのか、口の中に持っていこうとするが、俺は顔を背けた。

驚いて、口が開いたにすぎないからだ。しかし、綾子ちゃんはめげずにまだ目の前から、手を下げようとしない。

以前、やはりこの店で同じ光景を目にしたことがあったが、そのときの男は、やけに恥ずかしがっていたのが思い出されるが、今ならその男の気持ちが分かるというものだ。

こいつは想像以上に恥ずかしい。けれど、ここで拒否するのもまたまずいだろう。

食べさせようとかかげられた手は、わずかに震え、綾子ちゃんもまた恥ずかしさからか、顔が耳まで真っ赤になっているからだ。おまけに、その目にはうっすらと、涙が浮かんでいるではないか。

（これで拒否したら本気で泣きだしそうだ……）

「全く……仕方ないな」

今度は俺が意を決して、口を開けた。綾子ちゃんは、次こそ肯定ととらえ、俺にケーキを食べさせる。

うまいにはうまいのだろうが、気恥ずかしさのせいで、いまいち味がわからない。

「おいしい……ですか？」

おずおずと聞いてくる綾子ちゃんは、不安げな表情をしている。

その顔は、毎朝見る、あの顔と全くのおなじものだった。
「あ、ああ。今度はこいつを頼んでみるとするよ」
そう答えると、綾子ちゃんは満面の笑みで、それにこたえた。

「ありがとうございました」
会計をすまし、店員の声を背に外に出ると、辺りはもう完全に夜になっていた。
店にいたのは、三十分かそこらだった。もう少しくらいゆっくりしても良かったが、時間も時間だったため、出ることにしたのだ。
いや、羞恥に堪えられなくなって、といった方がいいのかもしれない。
俺にケーキを食べさせた綾子ちゃんは、その後も、それならばと何度も俺に食べさせようとしたのだ。……実際、俺も差し出されたものは食べてしまったのだが。一口俺に食べさせては、自分が。一口食べさせては自分が、といった具合だ。
しかも、俺の頼んだアイスも食べさせようとしたのだが、さすがにそれは断っておいた。もうまともにアイスの味などしなかったが。
けれど、綾子ちゃんがあんなことをするような子だとは思いもよらなかった。俺の綾子ちゃんへのイメージは、どちらかと言うと、少しクールにしていて、そういったものにはもっとドライだとばかり思っていたのだ。
今日のことで、俺は綾子ちゃんへの評価を変えなければなるまい。おかげで先ほどの余韻のせいか、まだ身体が熱かった。

帰り道、今日起こった出来事を二人語らいながら歩いていた。ジャズのこと、大きなツリーの点灯式のこと、先ほどのキシマイ堂でのこと。さっきから、もう何度も話していることなのに、また同じことをひたすら、飽きもせず話していた。
綾子ちゃんは、あれから絶えず微笑んでいたが、まだ頬が赤く染まっている。全く、おかげで恥ずかしい目にあった。けれども、そ

のことで腹を立てる気にはなれなかった。
　不思議なもので、たしかに恥ずかしくはあったが、ああいうのも悪くないと思っている自分がいるのだ。そんな考えをぼんやりと巡らせているうちに、家まで数十メートルのところまできていた。
「あの九鬼さん」
「どうした？」
「今日は本当にすみませんでした……囮になるだなんて言って、結局……」
　綾子ちゃんは、心底後悔しているような顔をしている。
「ああ、そのことなら気にしなさんな。実をいうと、俺も途中まで完全に頭から吹っ飛んでたんだ」
　なんだかんだで俺自身、かなり満喫してしまっていたのだ。だから、それはお互い様というものだ。
「それに最近、色々あって気も滅入っていたしな。いい気分転換になったよ。ありがとうな」
「そんな御礼をいわれるようなことなんて私……」
「まぁ、いいじゃぁないか。確かに目的を忘れてしまったが、今日一日何もなかったんだし、たった一日かそこらで、奴がうまいこと出て来るという保証もなかったんだ。これで良しとしようぜ」
　それに、と一拍おいて綾子ちゃんの目を見据えながら、また口を開いた。
「俺も結構まんざらでもなかったんだ。君と楽しめて良かったよ」
「……え？」
「……い、いや、だから君と楽しめたって」
　いいかけて、言葉をつぐんでしまった。綾子ちゃんが、目に涙をためていたのだ。次の瞬間、瞬きをすると同時に、その涙が流れていく。
「え？　お、おい、綾子ちゃん、ど、どうしたんだ、大丈夫か？」
　予想だにしなかった自体に、さすがに驚いた。しかし、それは仕方のない話だろう。泣かすつもりなどなかったのに、なぜかは知ら

ないが、いきなり泣かれてしまったのだ。
「ぁ、ごめんなさい。いきなり泣いてしまって……」
「そ、それは構わないが……」
綾子ちゃんは必死に涙を拭きながら謝ったが、俺は何て言っていいのか、さっぱり分からない。
「……うれしかったんです」
「うれしい？」
「だって九鬼さんが……そんなこと言ってくれるなんて思いもしなかったから」
「お、俺、そんな変なこと言ったかな……？」
「変じゃないですけど……とにかくうれしかったんです。私のために迷惑がかかってばかりで……なのに」
綾子ちゃんの目からは、また涙があふれようとしていた。
「あ、ま、まぁそういうのはあまり気にすることじゃぁないと思う。半ば俺が首つっこんでいっただけの話だしさ」
くそっ、もっと気の利いたことを言えないのか、俺は。
「さやちゃんも同じこと言ってくれましたけど、やっぱり……」
「綾子ちゃん」
俺は話している言葉をさえぎって、彼女の肩に手をおいた。
「沙弥佳にも言ったが……君と初めて会ったあの時点では、こんなことになるだなんて誰もわからなかったことなんだ。
そいつは筋違いってやつだよ。だから君が気にするようなことじゃぁないんだ」
「九鬼さん……」
「首つっこんだ以上、俺も無関係じゃぁない。何かしらの責任ってものがあるんだよ。ならそれはきちんと果たさなきゃな。
だから、怪我のことも何もかも含めて、それは俺の責任であって、君のせいじゃぁないんだ」
「……もう九鬼さんって、本当……」
あふれかけた涙を拭い、綾子ちゃんは笑いながら何かいいかけた

ようだったが、それ以上いうことはなかった。
とその時、綾子ちゃんの後ろのほうから、車がそのヘッドライトで俺たちを照らし、脇を通り過ぎていった。通りすぎ様に運転手は、クラクションを鳴らして冷やかしていき、俺はあわてて肩から手をはなした。
「あっと……す、すまん」
「ぁ……いえ……」
「と、とにかくそういうことだから、気にしないでくれ。半ば俺もやりたくてやってるんだからさ」
綾子ちゃんは何も答えずに、ただ黙って俺を見つめていた。
ばつが悪くなり、なんとも言えない空気になってしまって、俺は話をそらした。
「そ、そろそろ家に戻ろう。沙弥佳も心配しているかもしれないからな」
その場にいたたまれなくなったためか、早口でそう促し、背を向けて歩きだそうとした時だった。
「なっ……」
背中に誰かが抱き着いてきたのだ。もちろん、今そんなことができる人間は一人しかいない。
「あ、綾子ちゃん？」
「……お願い」
「……」
「お願いですから、今だけはこうさせてください……今だけでいいですから」
綾子ちゃんは額を背中に当て、手には俺の制服が握られている。
今綾子ちゃんは、どんな表情をしてどんなことを思っているのか、俺からは窺い知ることはできない。
おまけに俺は俺で、心臓が場違いと思えるほど早鐘を打っており、とても自分のものとは思えなかった。
しかし脳みそはそれとは裏腹に、こんなとき斑鳩ならどうするだ

ろうか、などとぼんやり考えていた。

第１１章（後書き）

楽しみにしていただいている方には申し訳ないのですが、次回分より更新頻度が落ちると思われます。週２回くらいのペースでアップしていきたいと思っていますので、どうかご了承ください。

第12章

暗闇に紛れ、何かがうごめいている。『それ』がのろのろとした動きで、動き始めたためだ。『それ』は手探りで辺りを何か探しているようだった。

「はぁ……はぁ……ぐっぁぁ」

『それ』は荒い息をしながら、時折苦しげに呻き、そしてまたのろい動作で何かを探しだす。もう数十分も前から行っている行動だった。

しかし、ついに『それ』は目当てのものを見つけたのか、何かを勢いよく掴んだ。その動きは、とても今まで鈍い動作しかできないのではないかと思わせたものの動きとは思えない。

「はっ、はっ、はっ、はっ……うぅっ……そ、そんな……」

やっとの思いで見つけることができたのだろう、『それ』が人間らしい言葉を言うことができたのは、たった一言、それだけだった。荒かった呼吸は、さらに勢いを増して、もはや呼吸困難のようにも思える。

『それ』は、どこか絶望感にとらわれながら、必死で掴んだ何かを手から落とし、そのままピクリとも動かなくなった。

暗闇の中聞こえてくるのは、時計のように正確に刻まれている、荒い呼吸だけだった。

「な、なぁ……」

「……」

「な、なんとか言えよ……」
沙弥佳はそっぽを向いて、俺の言葉を無視していた。もちろん聞こえていないわけではないだろう。というのも、先程から切れ長の目がさらに細くなって、射抜くような視線を、時折向けてくるからだ。
「ふん」
けれど、何か言ったかと思えばこれだ。
(全く、俺が何をしたと言うんだ)
とは思うものの、心当たりがないわけではない。いや、ほぼ間違いなく、ここ数日間の『囮作戦』のことだ。
ストーカー野郎をおびき出すために、三日前から始めたことだが、未だ戦果はあがっていない。おかげでそれは事実上、綾子ちゃんとのデートのようなものになってしまっている。
落ち合う前、内心ではこれはデートではないと言い聞かせているつもりだったが、いざ落ち合うと、つい先ほどまで考えていたことが、頭から消え去ってしまうのだ。
そのためか、沙弥佳は日に日に不機嫌な態度を示すようになり、ついぞ昨日の夜からこんな状態になってしまった。
綾子ちゃんには、割と普通に接していることから、腹を立てているのは俺にだけだと思われるが、なんだってこんなになったのか、不思議でたまらない。
可愛さあまって憎さ百倍なんて言葉があるが、まさにこんな状態のことを言うのだろうか。いや、だとしたら最終的に刺されてしまいそうだが。
そう考えてみれば、うすら寒くなるような話だ。惚れに惚れ抜いて嫉妬に狂ってしまい、最後には愛した男を殺す。しかもその対象が実の兄だなんて、とてもじゃぁないが、笑い話にだってならない。
男としては、そんな終わり方も悪くないかもしれないだろう。だがしかし、そいつが血の繋がった妹となると話は別だ。
(いくらブラコンでも、さすがにそこまではないか……少々行き過

ぎな感もするが）

とはいえど、怒ってはいるものの心底、顔も見たくないほどというわけでもないだろう。事実、登校中の今も当たり前のように、しっかりと腕にしがみついているからだ。

まぁ、しがみついていながら、こちらから話し掛けても一切話してこないことが、逆にプレッシャーになっているとも言えるのだが。

連日の俺に対しての不機嫌さのおかげで、今日の朝は久々に寝坊したのだ。いや、こんな寝坊をしたのは、少なくともこの五、六年は全くと言っていいほど記憶にない。

そう、今朝は沙弥佳が俺を起こしに来るようになって、初めて起こしに来なかった。目が覚めると、すでに8時近くで、朝食もパン一枚と惨めなものだった。

母がそんな俺達に、いや、沙弥佳に何かあったと気付いたのは自明のことと言える。

「最近、沙弥佳の機嫌悪いみたいだけど、あんた何かしたの？」

さすがは母さんで、妹の不機嫌さに俺が絡んでいるというのにも、簡単に見抜いていた。けれど、それ以上は何も言うことはなく、俺は黙って肩をすくめるだけだった。

しかしそんな妹は、それでいながらも自分達の登校の時間になると、しきりと早く早くと催促してきたのだ。そんな俺に、綾子ちゃんはすまなさそうな視線を向けてきていたが、気にするなと目で合図した。

駅が見えてきたとき、どうしようか迷った。今妹を振り払い、駅に行けば遅刻することはない。

たが、このまま二人を学校に送るという、日課をこなさないわけにもいかない。普通であれば、迷うことなく前者をとるが、今のこの状況では、それは難しいように思えた。

一つに今前者をとれば、間違いなく妹との亀裂がさらに大きくなるだろうということ。

二つ目は、俺がいなくなった後、二人にあのストーカー野郎が何

かしかけてこないとも言い切れないこと。
そして三つ目……それは、俺が綾子ちゃんから離れたくないと思っているからだ。なぜかは分からない。だけども、理屈ではない何かが、そうさせているようにも感じる。
……更に今四つ目ができた。沙弥佳の腕に力がわずかにこめられ、俺を離さないようにしたからだ。
昨日からもう何度目かもわからないため息をついて、駅を尻目に中学校へ向かう。駅を通り過ぎて、ようやく腕の力が抜け、いつもの力加減に戻ったのがわかった。

二人を学校に送り届けた後、遅刻が確定しているため、のんびりとした歩調で来た道を戻る。
これは俺だけではないだろうが、人というのはどうして、遅刻しそうな時は急ごうとするのに、遅刻が確定してしまうと、逆にゆっくりになるのだろうか。
そんなどうでもいいことを考えていると、後ろから声をかけられた。
「九鬼さん！」
呼ばれて振り向けば、校舎の中へ入っていったはずの綾子ちゃんが息を切らし、走ってきた。
「よぉ、どうしたんだ」
「はぁはぁ……あの、これ」
そういって差し出したのは、弁当箱の包みだった。確かにいつもなら沙弥佳が渡してくれる弁当を、今日は受け取っていない。
「わざわざ走ってまで届けにきてくれたのか」
「だ、だって、そうしないとお昼ご飯なしになっちゃうでしょう？」
息をととのえながら喋る綾子ちゃんから、弁当の包みを受け取る。
「それと、さやちゃんのこと……あまり怒らないであげてくださいね……私がこんなこと言うのも、おこがましいかもしれないけど、今日のお弁当のおかず、さやちゃん一人で作ったので……」

「そうか……。なに、そんなに気にしてないさ。それにあいつも本当は分かってるはずなんだ。きっとヤキモチやいてるだけだよ。まぁ、兄貴にするような態度じゃぁないかもしれないがな」

笑いながら肩をすくめ、渡された弁当の包みを鞄の中に入れる。

「……ごめんなさい。私のために……」

「いいさ。前にも言ったろう？　俺は自分でやりたくてやっているんだ。それは君が気にすることじゃぁないし、あいつが腹立てるのも筋違いって奴だよ。

さぁ、それよりも早く教室に戻った方がいい。せっかく間に合ったのに遅刻になる」

「あ……はい」

まだ何かいいたげな綾子ちゃんに、学校に戻るよう言い聞かせて、駅に向かう。一度、背を向けるも、再度向き直り綾子ちゃんを呼んだ。

「綾子ちゃん！」

彼女も学校に戻ろうと俺に背を向け、走り出そうとしていた時、綾子ちゃんは呼び止められ、再び俺と対面する形になった。

「弁当ありがとうな。それと沙弥佳にもそう伝えておいてくれ！」

綾子ちゃんは、微笑みながら軽く会釈し、次は振り返ることなく学校の中へと入っていった。

「ま、本当は自分で言った方がいいんだろうがな……」

誰に言うでもなく、俺は一人呟いた。

「全くお前というやつはまた連絡もなしに……」

昼休み。俺は小町ちゃんにまたも呼び出され、説教をくらっていた。

前のときも思ったが、なぜこうも俺だけ呼び出されなければならないのだろう。俺よりもサボっている奴はいるし、成績もやばい奴

だっているはずだろうに。小町ちゃんは、前のように自分で作ったと思われる弁当をつついている。

しかし、今回は呼び出されることは想定していたため、職員室にくる前にあらかじめ、作戦を練っておいたのだ。作戦通りならそろそろのはずだが……。

ピリリリリ――

突然携帯の着信音が鳴り始め、小町ちゃんは驚いて、説教がやんだ。俺は鳴っている携帯の着信画面を確認し、電話にでる。

「あ……ちょいとすみません。ん、ああ、ちょっとな……いや、そういうわけじゃぁないんだが……ああ、わかった」

通話を終え、携帯を折りたたんでポケットに放り込む。

「先生すみません。ちょっと家族が来てるので行かないといけないんですが」

「むぅ……」

小町ちゃんは明らかに不満げだが、しぶしぶ了承した。俺としても、学生にとってささやかな昼休みという時間を、説教なんざにとられたくはない。

「それでは失礼します」

そう言って、早々に職員室を後にし、教室へと急ぐ。

もちろん家族が来ているなど嘘だ。電話してきたのは戦友・青山で、教室を出てくる前に、十五分したら家族を装って電話してくれと頼んでおいたのだ。

別に急ぐ必要もないのだが、足が早く早くと急かしているかのように、つい歩くスピードがあがる。

教室に向かう途中、藤原真紀と出会った。あの女は友人達と雑談しながら、どこかに向かっている様子だった。

無視しても良かったが、見知らぬ仲でもないのに無視するというのも、なんだか味気ない。挨拶くらいはしても良いだろう。

「よう」

「あ……こんにちわ。先輩」
先輩――その言葉に、思わず一瞬だが顔をしかめた。
（まさか、後輩だったのか……）
思わぬ発見だった。最初からため口で話してきたこの女は、実は後輩だったのだ。てっきり、同級生とばかり思っていた。
「何かご用ですか？」
「え？　いや何、用ってほどじゃぁない。ただの挨拶だけだ」
女狐だとは思っていたが、まさに言葉の通り、猫かぶっているこの女の態度に思わず笑いが込み上げてきたのだ。そんな俺をいぶかしみながら、一瞬だけ素のこいつが見えた。
「ご用がなければ行きますね」
「くくっああ、じゃぁな」
まだ完全に猫かぶりができていないようだな。だが、素の状態を知っているだけに、ちゃんとできるにはできるんだな、と妙なところで感心した。
友人達が、真紀にあれこれ何か聞いていたが、きっとあの人だれ？だとか、そんなことでも聞いているんだろう。
どうでもいいことなのだが、あんなやつでも友人がいるということに、やけに安堵している自分がいた。
足早と去っていく真紀たちを見送り、俺も教室へと戻っていった。

教室へ戻り席につくと、また斑鳩らに小町ちゃんのことを聞かれ、うんざりしながらおもむろに鞄から弁当を取り出した。
連中の質問責めは無視して、今日こそはちゃんとしようと、放課後のことを思案し始めた。
連中は、質問しても無視している俺に呆れたのか、はたまた腹をたてたのか、面白くないといった風に散っていく。けれど斑鳩だけは、なぜか俺から離れようとせず、にやけた顔でこちらを見ている。
「どうした？　お前もやつらと一緒に他のところへ行ったらどうだ」
「いや～九鬼ってさぁ、ほんと一匹狼って感じだよな～って思って

さ」
「なんだ、いきなり？」
「いんや、別に～？」
なんなんだ、一体。いくらイケメンといえ、男に見つめられながら食べる飯などうまくない。
沙弥佳が不機嫌でありながらも作ってくれた弁当を、見つめられたくない一心でかきこんでいく。
別になんていいながら、にやにやと人の顔を眺めているやつが、本当にそう思っているはずがない。
「何があったんだ？」
ぶっきらぼうに尋ねてみる。こいつのことだから、もしかしたら何か話したくて、うずうずしているのかもしれない。
「なんもないよ～」
「だったらいちいち見つめてくるな。気持ち悪いぜ」
そう言うとこの男は、突然笑いだし、意味深なことを言い出した。
「いや～見つめるな、ねぇ」
「何がいいたいんだ。さっさと話せよ」
斑鳩の態度に、イライラしながら聞いてやる。これ以上はぐらかすつもりなら、こいつとの縁などこっちから切ってやる。
「ん～まぁ、おれのことっていうか、おまえのことかなぁ」
「俺の？」
なんと、こいつが意外なことを言い出した。てっきり、何か聞いてほしいと思っていたのに、俺に関してのことだったらしい。
しかし、俺が何かしでかした覚えなどないが……待てよ、まさか。
「昨日さ～見ちゃったんだよねぇ、おまえと女の子が街歩いてるとこ」
斑鳩は、相変わらずにやにやした視線を向けながら続けた。
「いや～前から付き合い悪かったけど、最近、前にもまして付き合い悪くなって、もしかして、なんて思ってたけどさ、まさか本当にそうとは思わなかったよ」

こいつが言っているのは、間違いなく綾子ちゃんのことだろう。
まさか、こいつに見られていたとは思わなかった。斑鳩の話を聞いて、俺は内心で舌打ちした。
思えば昨日歩いた繁華街は、こいつにとっての狩場みたいなもので、見られていたとしてもおかしくはないのだ。自分の浅はかさに、また舌打ちしてしまいたくなる。
「でもまさか、あ～んな可愛い子と一緒だったっていうのは、さすがに予想外だったけどね～」
「ふん、別にいいだろ。人が誰と歩いていようと、お前には関係のない話だろう」
「んー、そうなんだけどさ。ただ、一匹気どってる九鬼が、どうやってあんな可愛い子と知りあえたのかは、気になるんだよねぇ」
いちいち癪にさわる男だ。俺と綾子ちゃんの出会いをわざわざ教えてやる必要もないが、言わずにあれこれ言われるのも、また癪にさわる。……欝陶しいが、仕方ない。
「別に。単純に妹に紹介されただけだ」
「沙弥佳ちゃんに？　へ～やっぱ、類は友を呼ぶってやつなのかな」
これはまことに遺憾だが、同意せざるをえない。
ただ、そうなると俺が妹やその友人を、この男と同じ色めがねで見てしまうことになり、なんとも自己嫌悪に陥ってしまう。
家族のひいき目なしに見ても美人の妹と、やはり綺麗で人目をひく容姿である、その友人。容姿良さと内面の性格が共通しているということに関しては、間違いなくこの諺があてはまるだろう。
「なるほど、沙弥佳ちゃんにねぇ……」
目の前の男は、しきりに同じ台詞を口にしている。なるほど。まだ一年半ほどの付き合いだが、こいつの考えが読めた。
「お前、妹にそんなに会いたいのか？」
「お、さすが親友。いい勘してるね」
「親友ではないだろ。会うのはかまわんが決定権は俺にではなく、むこうだぞ」

「ええ！　頼むよ親友ー！」
「今言ったはずだが、俺は親友になった覚えはない。第一お前は、小町ちゃんを狙ってるんじゃぁなかったのか？」
「それはそうなんだけどさぁ……ほら、沙弥佳ちゃんってすごく可愛いじゃん？」
　否定はしないが、言葉にはしない。
「はぁ……とりあえず聞くだけ聞いてやるが、多分無理だと思うぞ」
「マジで！？　さっすが親友！　じゃあ早速今日お願いね！」
「よりによって今日かよ……」
　小声でいったつもりだったが、どうやらこの男の耳には聞こえていたらしい。
「なんなん？　もしかして喧嘩中かなんか？」
「相変わらず変なとこだけは、目ざとい奴だな」
　皮肉たっぷりの態度で言ったつもりだが、斑鳩はまるで堪えた様子はない。
（やっぱ、馬鹿は馬鹿か）
　そんな斑鳩の様子を見て、ため息をついた。
「おいおい、九鬼。ため息なんてついてっと幸せ逃げちゃうぞ」
　俺は盛大にため息をして見せた。

（くそっ、なんだってこんなことに……）
　時は下って放課後。俺は自分の失態に毒ついた。
　俺と斑鳩はここ数日間、待ち合わせにしている駅のコンビニに向かうため、電車に乗っている。斑鳩が妹に会いたいといってきたので、律儀にも、メールで沙弥佳にその旨を伝えると、なんと二つ返事で了承するではないか。

俺はてっきり、断るものとばかりと思っていたのだ。以前、沙弥佳が斑鳩が会ったとき、沙弥佳は斑鳩のことをこきおろしていたからだ。

俺は想定外のことに、ア然としてしまい、見間違いなんじゃないかと何度もメールを見返したほどだ。

しきりに返事はまだかと聞いてくる斑鳩に、イライラさせながらも、どうこの自体を回避するか真剣に頭を悩ませたのだ。

嘘をついて無理だといおうとするにはしたが、結局、俺の動揺した態度が斑鳩に、ＯＫであることを告げてしまったのだった。

沙弥佳も沙弥佳で、なんだっていきなりＯＫしたんだ。前はあんなに俺の方がカッコイイだとか、斑鳩のようなタイプは嫌いだと、自分で言っていたではないか。

釈然としない沙弥佳の態度に、ひどく困惑したまま、電車はいつもの駅に着いた。

斑鳩は俺とは裏腹に、いつもより機嫌が良さそうだった。面だけを見れば斑鳩は、間違いなく美男子の部類になるであろう。

おまけに今のこいつは機嫌が良いため、どこか子供のような愛嬌もあり、さきほどから、道行く自分と同世代の女の子達が、しきりと斑鳩の顔をうかがっているのだ。

そして俺は、明らかにこいつの引き立て役になっているんだろうが……。

「んで九鬼ぃ、これからどうするん？」

「待ち合わせ場所に行く」

機嫌の良いこいつに話し掛けられるたび、俺は反比例して、機嫌が悪くなる一方だ。そのせいか、正直いつものコンビニに向かう足が、やたら重く感じる。

できればなんらかの都合で、沙弥佳は来られなくなってほしい…

…そんな考えすら沸き上がってくる。しかし現実は無情で、そんな俺の甘い考えなど、到底受け入れられるわけはなかった。

「おい、斑鳩」
「んー？」
「あくまで選択権は妹にあるんだからな。お前にじゃぁないんだ。それだけは履き違えるんじゃぁないぞ」
「くくくっ。そんなに妹が心配か？」
「ああ。おおいに心配だね。お前みたいなのには特に」
「信用ねえなぁ。大丈夫大丈夫。そこんとこは問題ないからさ」
そんなことをいう奴が、一番信用ならない。いつも思うが、こいつの言葉には全く信用性と言われるものがないのだ。
常にどこかで本音を隠しているとでもいうのか、はぐらかしているとでもいうのか、こいつと話していると、いつもこちらも本音で話してはいけないと本能が告げるのだ。
そのため、こいつと話すといつも嫌悪感が先立ってしまう。

今日は珍しく、俺の方が早く待ち合わせ場所に着いたようだ。斑鳩は落ち着きなく、隣でそわそわとしている。俺達はコンビニに入ることなく、店の前で二人を待つ。学校帰りの学生でごった返している店内には、あまり入りたくはない。
そんな俺の気持ちを天は察してくれたのか、程なくして、沙弥佳と綾子ちゃんの二人が連れだって来た。
「よう。今日は珍しく逆になったな」
「いつも女の子を待たせるなんて最低」
開口一番、沙弥佳は鋭い視線を向けて毒つく。さすがに顔の筋肉が引き攣った。……やれやれ。こいつは思っている以上にご機嫌ななめのようだ。

斑鳩は、そんな俺と沙弥佳など見向きもせず、綾子ちゃんの方に興味津々といった風だ。
「へー君が綾子ちゃん？　すごく綺麗だね。君みたいな子が彼女なんて、九鬼もすみにおけないね」
「「なっ」」
「付き合ってないぞ！」
「付き合ってません！」
思わず綾子ちゃんとかぶってしまう。斑鳩の言葉を否定しようとするが、それがまた肯定してしまったように見えるのか、斑鳩はまたにやにやとした表情をした。
（こいつはこいつでいきなり何を言うんだ）
綾子ちゃんは、そう言われただけでもう茹蛸のごとく、顔を真っ赤にしている。
「え、えと……」
「あ～ごめん。おれ斑鳩孝晶っていうんだ。九鬼とは大の親友」
「ぁ、はい……」「あれ……？」
斑鳩は自己紹介した後、思いきり綾子ちゃんを口説こうとする気があるんじゃぁないかと、疑ってしまうほどの愛嬌を振り撒いたが、しかし綾子ちゃんは、人見知りのする性格をしているのでそういうのは逆効果なのだ。俺は内心ほくそ笑んだ。
「綾子ちゃん。この男のことは気にしないで、空気とでも思えばいい」
「ちょ！　九鬼ぃ、それひどくねぇ！？」
「知ったことか。それに俺とお前は親友なんかじゃぁない。何度も言わせるなよ」
綾子ちゃんは俺に話しかけられて、ようやく普段通りに振る舞おうとした。
「ぁ、わ、私、渡邉綾子といいます」
丁寧にお辞儀までしている様は、よほど緊張しているのかもしれない。俺はそんな綾子ちゃんのことが、ついおかしくなり苦笑する。

しかし、それは一瞬だけだった。視界にチラリと妹の姿が入ったのだが、まるでゴミでも見るかのような目で、俺を睨んでいたからだ。

切れ長の目がより鋭くなり、たとえるなら、ダイヤで作られた切れ味の良いナイフのような目だった。

普段が普段なだけに、いよいよこいつは本気で笑えなくなってきた。ここまで機嫌を悪くしている沙弥佳は見たことがない。俺はいたたまれなくなって、皆をうながし、歩きだした。

まぁ、今の沙弥佳にはなんの効果もえられなかったのは言うまでもないが。

第１３章

沙弥佳と斑鳩、綾子ちゃんと俺という組み合わせで、アーケード街を歩く。俺と綾子ちゃんは沙弥佳達の前を歩いているため、俺は沙弥佳の視線を背中に一手に受けていた。

斑鳩は、そんな妹を口説こうと必死のようだが、当の本人は何も耳に入っていなさそうだ。

「九鬼さん」

「ん？」

「ごめんなさい。こうなったの私のせいですよね……」

「またそれか。気にしすぎだぜ、君は。そもそも絶対断るとたかくくってた俺が一番問題なんだ。気にすることじゃぁない。

それに今回のことで、少しは他の男に関心もってもらいたいって気持ちは、確かにあるんだ。いつまでも、兄貴一筋ってわけにもな」

綾子ちゃんは眉をひそめ、少し困ったように笑う。これは彼女の苦笑の仕方なんだと、最近気付いた。それだけではない。最近はことあるごとに、この子の色々な仕種と意味にも気付くようになった。

礼儀正しくしている時はすごく緊張していたり、饒舌になる時は相手に心を開いているし、何より大胆な行動をとる時が、本当の彼女なのだと思うようになったのだ。

（まるでもう一人妹ができたみたいなんだよな……妹とも少し違うかもしれないが）

彼女のそんなことが分かることができたのも、ストーカーをおびき出すという、囮作戦だったというのがなんとも皮肉な話だが。

しかし、その代償とも言うべきが、今日の今この時間というわけだ。まぁ、これも妹のためだと思って、甘んじて受けようではないか。

ぶらぶらと目的もなく（一応はあるのだが、ないも同然）、俺達はアーケード街を練り歩く。

最初は斑鳩のことを無視していた沙弥佳だったが、少しずつ打ち解けてきたようだ。……俺への態度は相変わらずだが。

しかし幸か不幸か、斑鳩がいてくれたおかげで、例の視線を浴び続けることはなくなって、救われたのは確かだった。

「あ……ここ、新しくオープンしたんですね」

綾子ちゃんが、つい昨日まで近日オープンになっていたアクセサリーの店が、オープンしているのに気付いた。

「本当だな。どうする、入ってみるか？」

綾子ちゃんと後ろの二人に聞いてみたが、沙弥佳と斑鳩はすでに、店内に入ろうとしていた。

「やれやれ……じゃぁ俺達も入るか」

「はい」

二人を追って、俺達も店の中へ入る。店内は床が白いタイルで張られ、壁はガラスや鏡で覆われている。

アクセサリーの店とはいうものの、ちょっとした帽子やインナー、パンツにジャケットといった物も売られている。香水なんかも置いてあり、アクセサリーを主体とした総合的なファッション店と言ったところだろうか。

まぁ、総合的なファッション店なんか今時珍しいものでもないが、アクセサリーを全面に押し出している店は、そう多くはない。

つい数日前に、どういった店ができるのか楽しみだなんて、綾子ちゃんと話していたのが思い出される。

「うわっ、これとか沙弥佳達ちゃんに似合うんじゃない？」

「そうですか？」

「うん、似合うと思うよ～。ちょっと付けてみなよ」

「……そうですね、付けてみようかな」

沙弥佳は少し考えた後、斑鳩に差し出されたネックレスを受け取り、さっそく首周りに付けていた。

「ちっ……斑鳩の奴」
思っていたことが、ついついそのまま口に出てしまったようで、綾子ちゃんはそんな俺を見上げて、どう声をかけていいのか分からないっいった顔をしている。
「……すまん。何を腹たててるんだかな」
聞かれていたことへの、照れ隠しにおどけた口調で、綾子ちゃんに謝った。
「いえ、別に謝るようなことじゃないですけど……やっぱり妹さんが、他の男の人と仲良くしているのは嫌なものですか？」
「おいおい、綾子ちゃん。別に嫌とかではなくてだな、単に斑鳩のような奴と沙弥佳じゃぁ、不釣り合いだと思ってだな」
「ふふっ。心配されてるんですね。隠さなくてもいいですよ」
「う……」
俺がこの数日で綾子ちゃんのことが理解できてきたように、彼女もまた俺のことが解るようになってきたらしい。かといっても、ここは素直に頷けないのだが。
「でも、さやちゃんとあの斑鳩さん、結構似合ってると思いますよ。絵に描いた、美男美女という感じです」
「綾子ちゃんは、あの斑鳩のことをあまり知らないから無理はないだろうけどな、奴は希代の女ったらしなんだよ。
そんな奴と妹が似合うわけがない。外見だけで判断したら、痛い目を見ちまうぜ」
きっと何も知らない人が聞けば、モテない奴のひがみとでもとられそうな台詞だ。自分で言っておいて言うのもなんだが。
しかし、俺が言ったのは本当だ。そもそも奴には、別に本命がいるのだ。そんな奴を、妹の交際相手になぞ認められるわけがあろうはずがない。
「……あはは、もう九鬼さんったら」
「な、なんだ、突然」
「だって、まるで娘の結婚に反対するお父さんみたいなんですもん」

「な、なんだって？」
しかし、改めて考えてみると確かにそうだった。
（くそっ、いつから俺はこんな奴になっちまったんだ）
綾子ちゃんに指摘され、自己嫌悪してしまう。まるで、俺が斑鳩に嫉妬しているみたいではないか。
そんなことあってはならないはずなのに、斑鳩と、その斑鳩と楽しく話している沙弥佳を見ると、どうしようもなく自分の腹の底から、なにやらドロドロとしたものが込み上げてくるのだった。
「九鬼さん」
「……ん、あ、ああ」
そういって綾子ちゃんは、ある商品を指差した。
「指輪か。そいつがどうかしたのか？」
「これ、プレゼントするっていうのはどうですか？」
「え？　プレゼントって、君にか？」「えぇっ！？　そ、そんな違いますよ！　わ、私にじゃなくてさやちゃんにですよぅ！」
「沙弥佳に？　……ああ、つまり仲直りの印にってことか」
顔を赤くしつつも、綾子ちゃんはよく気付いてくれましたと言わんばかりの笑顔になって頷いた。
「いいアイディアだが……初めての他人へのプレゼントが妹ってのは、なんともな……おまけに、指輪ときたもんだ」
「もう。何言ってるんですか。こういうのに初めてだとか関係ないですよ！」
「……そんなもんか？」
「そんなもんです！」
顔が昂揚のために赤くなっている綾子ちゃんは、本気に言っているんだろう。それにこの目は、まさしく何かを決意した時のあの目だったのだ。こうなると、この子は、沙弥佳同様に梃子でも動かなくなるほど頑固になるのだ。
仕方ない……そう思い値札を見ると、その値段に心臓が縮まる思いだった。

¥１３８００（税別）

……こいつを買えって言うのか、綾子ちゃんは。いや、買えなくはない。けれど、バイトもまともにしていない高校生には、あまりに高い値段だ。

財布を取り出し、中を覗くと二万と五千ちょっと。しかしこれはこの数ヶ月かけて、少ない小遣いからちょっとずつ貯めたもので、今ここで使ってしまうわけには……。

そんなことに思いを巡らせている間にも、綾子ちゃんは俺に買ってあげてと目で訴えてくる。

どうしたものか……そう思案していた時、カウンターにオープンセールで全商品２０％オフの文字が飛び込んできた。ということは……。

俺は頭の中で計算し、値段を弾き出す。ふと、自分がすでにこの指輪を買おうとしていることに気付き、苦笑した。

（まぁ……いいか）

「……仕方ない。今回は君とこ店のオープンに免じて、買うとしようか」

観念してそういうと途端に綾子ちゃんは、あの最高の笑顔を披露してくれた。

（全く、そんな顔されたらこっちの意思なんざ、有って無いようなものだな）

俺は指輪を取り、カウンターへと持って行った。

店を出た時、閃いたことがあったため三人に少し待つように言い、再び店内に戻る。指輪を買った時、次回来店時に使えるクーポン券なるものを貰ったからだ。

先ほど店の中を見て回った時に、少しばかり値は張るが、良いと思えるものがあったからだ。まぁ、言われて買った指輪ほどの値は

しなかったが。
クーポン券を使って目的の物を買い、すぐに店を出る。沙弥佳と斑鳩は俺のことなど待つことなく、向かいの店の前であれこれ物色していた。
それでも綾子ちゃんは律儀に、店の前で俺が出てくるのを待っていてくれた。こういう気遣いがまた、男として嬉しいのだ。
（まだまだだな、妹よ）

それから、再び四人でアーケードをまわった。
沙弥佳の様子を見ていると、だんだんと笑顔も見せるようになっていて、大分落ち着いてきているように思える。だがそれは、俺ではなく斑鳩への態度であるから、兄である俺としてはなんとも複雑な気分だ。
やはり、まだ俺に対しては気持ちは変わっていないのかもしれない。斑鳩と別れた途端に、不機嫌な態度をとられてもかなわない。ここはひとつ、そう思っておいた方がいいだろう。
「なあ、九鬼ぃ」
「なんだ？」
「ちょっと喫茶店にでもよってかねぇ？」
「今からか？」
「そそ。せっかくのダブルデートなんだし」
こいつの中では、もはや完璧に沙弥佳を口説いたあとのことまでシミュレーションしているのだろう。
「何がせっかくだ。強引に頼んだようなやつが……まぁいい。どうする？」
俺は隣に立つ綾子ちゃんに、尋ねる。
「私は構いませんけど……」
「おまえはどうだ？」
「……いいけど」
ほぼ一日ぶりに、沙弥佳は俺に口をきいた。けれど、そんな些細

なことでも嬉しくなる自分がまた悲しくもある。
だってそうだろう。これではまるで思春期の娘にいちいちお伺いをたてる、ダメな父親みたいではないか。
「……じゃぁそこの店にするか」
俺はすぐ目の前にある喫茶店を指差しながら、三人に聞いた。
「んーいいね。そこにしようか？　さやかちゃん」
沙弥佳に馴れ馴れしく話しかける斑鳩に、いちいち腹を立てるのはおかしいのだろうが、それは無理というものだ。しかし、選択権は妹にあると言った手前、その当人がそれを許容してしまった以上、俺にとやかく言う権利はない。
けれどかと言って、気に入らないと思う俺に、誰が文句をつける奴などいようか。そんなことを考えながら、自分が指差した喫茶店に入っていった。
ウェイトレスに案内され、四人が座れるボックス席に移動し、外と同じ、沙弥佳と斑鳩、綾子ちゃんと俺でそれぞれ相席になって座る。
それぞれ頼むものを決めて、ウェイトレスを呼び注文すると、そのままウェイトレスは立ち去っていった。
喫茶店に入っても斑鳩のやつは、相変わらず沙弥佳を口説こうと頑張っていて、当の沙弥佳も最初の時ほどの嫌悪はしておらず、斑鳩のいう冗談にも時折、笑顔をのぞかせていた。
そんな中、俺の隣に座った綾子ちゃんが小声で話しかけてきた。
「九鬼さん。さっきの指輪……」
「あ、ああ」
そう、俺が斑鳩の提案にのって喫茶店に入ったのは、買った指輪を沙弥佳に渡せる口実になるかもしれないと思ったからなのだ。
けれど、いざ渡そうとなるとなぜこうも緊張するのだろうか。いつものように、ぶっきらぼうに振る舞い、ほらよなんて言って渡せばいいのだ。単純に、ただそれだけでいいはずなのだが、どうにも渡すことができないでいた。

どうやって渡せばいいのか思案しているうちに、先ほどのウェイトレスが注文の品を、持ってきた。
「それでは、ごゆっくりどうぞ」
この店は、よほど従業員に教育が行き届いているようで、丁寧にお辞儀をして立ち去っていった。
楽しそうに話している沙弥佳・斑鳩ペアに対し、俺と綾子ちゃんはほとんど喋ることはなかった。いや、正確には俺がいつ行動にでるかを、綾子ちゃんが固唾をのんで見守っている、というのが本当だろう。
もちろん、俺にだって早く渡して仲直りできるものならしたいところだが、斑鳩のトークにまんざらでもない様子の沙弥佳にはどうしても話しかけづらく、そのタイミングをつかめないでいたのだ。
（俺はこんなに臆病なやつだったのか？）
たかだか妹一人の機嫌をとるために、薦められたとは言え、わざわざ買った指輪だったがなんだかそれも馬鹿らしく思える。
「それで九鬼ってば小町ちゃんに呼び出されてたんだぜ～？」
「そうなんですか？　やっぱりお兄ちゃんは家でも学校でもダメダメですね」
斑鳩はにやつきながら、沙弥佳は相変わらずの鋭い視線でこちらにむけてきた。いつもならそんなの無視するところだが、今日は件の二人からの視線は、やけに腹立だしく感じさせたのだ。
すぐさまその雰囲気を察したのか、勘の鋭い綾子ちゃんは、きょときょとと目がせわしく動かした。
俺はそんな綾子ちゃんを見て、自分の感情を落ち着かせようとする。ここで爆発するのはいい。だが、それではせっかく綾子ちゃんがお膳立てしてくれたのに、無意味になってしまう。
斑鳩のことなどどうでもいいが、沙弥佳との亀裂がさらに大きくなるのだけは、なるべく避けたい。どうすればいい……いい加減怒りのボルテージが頂点に達しようとしたその時、手がたまたまポケットに当たった。

その感触はさっき買ったアクセサリーであり、それは沙弥佳に買った指輪とは別に、綾子ちゃんにと再度、入店し買ったものだ。初めてのプレゼントが妹というのは、なんとも色気のない話で、それならばと買ったのだ。

綾子ちゃんは、最近自分の髪が伸び過ぎてきていることを憂いていたのを思い出し、シンプルだがやや凝ったデザインの髪留めを買ったのだ。妹の前哨戦としてはちょうど良い。

「そ、そうだ綾子ちゃん」

俺はなんとか二人を無視して、綾子ちゃんに話しかけた。

「え？　は、はい」

彼女は、いきなり自分に話しかけられるとは思っていなかったようで、やけに驚いてしまったようだった。

「実はさっきの店で、君にと思って買ったものがあるんだ」

「私にですか？」

「ああ。前に髪が欝陶しいと言ってたろ？　それでちょうど良いかと思ってね」

制服の内側にある胸ポケットから、包みを取り出して、綾子ちゃんに渡す。

「あ、で、でも……」

「いいから貰ってくれ。俺がプレゼントしたくてプレゼントしてるんだ。それに……」

横目で一瞬だけ沙弥佳の方を見やって、合図する。綾子ちゃんは勘の良い子だから、なんとなくだが察してくれたのかも知れない。

「……わかりました。それでしたら……。開けても良いですか？」

「ああ、もちろんだよ」

包みを受け取り、綾子ちゃんは包みに封をしているシールをはがし、中から髪留めをとりだした。

「わぁ……髪留めですか？」

「おっ。結構いいデザインじゃん？」

「……」

俺達のやり取りを見ていた沙弥佳達も含め、三者三様の反応をみせた。
「あ、あの早速つけて見てもいいですか？」
「ああ」
綾子ちゃんは興奮気味に、その髪留めを前髪につけた。
「お」
「……」
俺と斑鳩は、思わず息を飲んだ。
似合っている。もちろん綾子ちゃんに似合うようにと買った物だったが、かなり似合っていた。
俺から見て、左から前髪を右の脇の方まで留め、余った両脇の髪を垂らした綾子ちゃんは、より大人な雰囲気が引き出され、それでいて、少女らしい雰囲気が絶妙な具合に、互いを引き立たせていたからだ。
おまけに、彼女の知的さもより際立ったような印象も受ける。
女というのは、その本人に似合えば、たったアイテム一つで一気にその良さを引き出すというが、まさにその通りだった。
あれだけ沙弥佳にご執心だった斑鳩でさえ、綾子ちゃんに見とれている。元々沙弥佳と比べても、中々の美人だったけども、いまひとつだった綾子ちゃんだが、これなら沙弥佳に見劣りすることはないだろう。
ここまでの成果があげられるなんて、思いもよらないことなので、今の自分には高い買い物であったはずのものも、途端に安い買い物のように思えてくる。いや、むしろ出来過ぎて怖いほどだ。
その様子を見ていた沙弥佳を横目で見ると、切れ長の目をこれでもかと言わんばかりに見開いていた。
そこに先ほどまでの、鋭すぎる目をしていた様子は一切伺えない。
そのあまりの変貌ぶりに、逆にこちらが心配してしまうほどだ。
「……さ、沙弥佳？」
俺の声に反応したのか、その美貌をこれもまた今まで見たことが

ない程に歪ませ、テーブルを両手で思いきりたたき付けながら、勢い良く立ち上がった。

その大きな音に俺達はおろか、周りの客や従業員も驚き、一瞬にして店内がしずまる。店内に流れるＢＧＭが、滑稽だ。

「……さ、さやちゃん？」

「あ、あれ～どうしたの？　さやかちゃん」

突然のことに、店の誰もがこちらに視線を集めている。しかし、またひそひそと話始めたが、その話題は言うまでもないだろう。

「……ごめん。私、もう帰るね」

「お、おい、沙弥――」

「お兄ちゃんは黙っててよっ！！」

俯いたまま、大声を張り上げる沙弥佳に、俺達は思わず肩をビクリと震わせた。

大声というよりも、絶叫に近かったかもしれない。綾子ちゃんは、全身を震わせて半ば泣く寸前だ。

「……お兄ちゃんなんて、お兄ちゃんなんて……」

うわごとのように呟いている沙弥佳の手はぶるぶると震え、力の限り握られているのか、もはや鬱血し始めている。

これは普通の状態ではない。そう判断し、今日はもう帰るべきだと声をかけようとした時、ふっとその手から力が抜けた。

見上げた沙弥佳の顔は、まるで生気というものが抜けたかのように蒼白とし、目には意思というものを感じさせない。

いや、顔だけでなく身体全体から、生気が抜けてしまったように見える。生きていながら死んでいく人の顔とでも言うのだろうか。

これは非常に精巧に作られた、沙弥佳の人形にも見えなくもない。そう感じさせるほど、今の沙弥佳は普通の状態ではなかった。

「ぁ……さ、沙弥佳……」

沙弥佳はそう呼ばれると、ふらふらと歩きはじめ、おぼつかない足どりで店の外へ出て行った。

俺は、いや俺達は縫い付けられたように、その場から動けなかっ

た。何もかもが予想を超えることだった。頭が混乱していた。
ついさっきまで、俺に対して親の仇でも見るかのような目で見、口も聞かず、かと思えば斑鳩とは親しげに話していた。
そんな俺は、綾子ちゃんにプレゼントを渡して、その後には、仲直りの印として沙弥佳にもプレゼントを……そのつもりが、どうだ。何故こうなったんだ。
「く、九鬼。追わないと」
「え？　あ、ああ、そうだな。追わないとまずい。とにかく今はここを出よう」
そういって立ち上がった時、斑鳩が伝票を取り、自分の顔の横でピラピラと合図した。この男は、こういう時でも融通を利かして、おごりなり貸しなりにすらするつもりはないようだった。
俺はぶっきらぼうに千円札を二枚出し、テーブルにたたき付けた。
「払っておいてくれ。行こう」
綾子ちゃんに顎を使ってジェスチャーし、店を出た。綾子ちゃんも、無言でついてくる。
「くそ、一体何がどうなったって言うんだ」
毒つきながら辺りを見回したが、すでに沙弥佳の姿はなかった。
携帯を取り出し、履歴から沙弥佳の番号へとかけるが、繋がらない。
「駄目だ。出ない」
その時、店の中から会計をすませた斑鳩が出てきた。
「斑鳩。お前にも手伝ってもらうぞ」
「ん～仕方ないねぇ。そんじゃぁあっち見てくるから、九鬼たちはそっちな」
「ああ。見つかったらすぐに連絡してくれ」
「了解了解」
こいつのあまりの軽さに、殴り付けてやりたくなったが、今はそんなことをしている暇はない。
「しっかり頼むぞ」

そう言い残し、妹を探すべく移動を開始する。
「一体どこに行ったんだ？」
沙弥佳の行き先など全く見当もつかないし、つくわけもない。しかし、黙って何もしないわけにもいかない。
俺は、いきなり出鼻をくじかれたような気分になった。まだ頭にどこか靄がかかっているような気がする。まだ混乱しているのだろう。
「綾子ちゃん、君ならどこか沙弥佳が行きそうな場所分かるか？」
「いえ……」
「だよな……」
そもそも、あいつは放課後は真っすぐ家に帰ってくるので、あまり遊ぶということをしない。行くにしても、いつも俺と一緒に行きたがったからだ。
しかし、いくら行き先不明でも、探さないわけにはいかない。ここ数日の精神不安定な沙弥佳を、放ってはおけるはずもない。
俺は、再び携帯を取り出して、沙弥佳の番号にかけた。しかし、やはり反応は先ほどと変わらない。
こうなったら手当たり次第、人に聞いてまわるしかなさそうだ。
「仕方ないが、人に聞きまわってみるしかなさそうだな」
「……あの」
「どうした？」
「やっぱり、私の」
「そいつは違う。何度も言ったはずだ。あいつだって分かってるはずだ。それにこんなことになるなんて誰も分かりはしなかった」
語気を強めながら、早口にまくしたてた。確かに物事を自分と結び付け、あれこれと考えるのは綾子ちゃんの美点だろうが、そういつまでもネガティブでいてもらっても、こちらとしても困る。
またいらぬ心配をかけてしまうし、こちらもまた心配になってしまう。
「こうなってしまったのならそれは仕方のない話だろう？　だった

ら今度はそいつに対して精一杯努力しなくちゃぁな。
だから、いちいち気に病む必要なんてないんだ。別に誰も君を咎めはしない」
左手を綾子ちゃんの肩におき、目を見ながら語る。その目から少しばかり、不安げな雰囲気が抜け、今度は目尻に透明なものがたまり始めていた。
「……九鬼さんの目って不思議」
「あ？　目がどうしたって？」
「九鬼さんの目ってとても不思議です……だって、こっちも思わず本気になっちゃう」
「そ、そういうものか？　特別意識したことないからわからんが……」
なにやらいきなり変なことを言われると、つい照れてしまう。前までなら、そんなことはなかったはずなのだが。
泣きそうになった綾子ちゃんは、その目を拭いて、今度は力強い目と口調でいった。
「すみません、いつも弱音ばっかりで……。でも、もう大丈夫です。さやちゃんを探しに行きましょう」
「ああ」
綾子ちゃんの力強い言動に、俺も力強く頷いた。

第１３章（後書き）

思ってる以上に長くなってしまいました。　予定では今回で、ストーカー編は終わる予定だったのですが……。

第14章

地道に人に聞きながら俺と綾子ちゃんは、沙弥佳の行方を追うものの全く手懸かりらしい情報はえられないでいた。
綾子ちゃんには、俺が人に聞いている間に携帯で沙弥佳に電話してもらっている。俺からのコールには出ずとも、綾子ちゃんになら出るかもしれないとの判断からだ。
けれど、綾子ちゃんからの電話にも出ることはなかったが。
「あれは……さっきの店か」
ふと視界に、さきほどのアクセサリーの店が入ってきた。
「ここに入ったかは分からないが、とりあえず聞くだけは聞いてみよう」
綾子ちゃんは頷きながら、また携帯で沙弥佳に連絡をとり始める。
「すみません。ちょっとお聞きしたいんですが」
俺が声をかけたのは、ついさっき俺に接客してくれた店員だった。オープン初日から一日に三度も来た俺に、向こうもまた来たなという顔をしたのは見逃さなかった。
「ここで女の子を見かけませんでした？　こういう子なんですが」
携帯で沙弥佳の写真を見せると、店員は少し考えたあと、何かを思い出したようだった。
「ああ、この子。つい何分か前に来てましたよ。やけに人目のつく子でしたから、覚えてますよ」
「それでどっちに行ったか分かりますか！？」
「え、ええとそこまでは……」
「どうかされましたか？」
俺の剣幕に気圧されたのか、その店員は言葉を詰まらせながら言った。しかし、そんな俺たちの異変に気付いて、別の店員が話しかけてきた。もしかしたら、ここの店長なのかもしれない。

「あ……実はこのお客さんが」
その店員が手短に、後からやってきた店員に話す。
「ああ、この子でしたら、あちらの方に行かれましたよ。フラフラとしてて、危なっかしい感じで、ただごとでなさそう」
「どうもありがとう！」
店員の言葉を言い終わる前に、俺は店を飛び出すと、今度は信じられないことが起きていた。ついさっきまで店の目の前にいたはずの綾子ちゃんが、いなくなっていたのだ。
「な……？」
店の中にいたのはほんの二分もないだろう。いや、もっと短く、一分ちょっとだったかもしれない。何にしても決して長い時間ではない。
「あ、綾子ちゃん！」
人目もはばからず、大声で綾子ちゃんを呼ぶがそれらしい反応はなく、周りにいた通行人達がこちらに視線を向けるだけだった。
「ど、どういうことだ」
なるべく冷静になるよう心掛けてきた俺だが、こいつはいよいよ焦ってきた。綾子ちゃんの性格からして、何も言わずいなくなることはないはずだ。
それに、いなくならなければいけない理由など、そうあるはずもない。事実さっきまでは、店の前できちんと待っていてくれたのだ。それがいきなり神隠しにでもあったように、突然姿を消すなんてありうるはずがない。
綾子ちゃんの容姿も中々のものだから、ナンパ野郎についていったとも考えられなくはないが、さっきと同じ理由でないだろう。
とすれば考えられることはただ一つ……あまり考えたくないことだが、例のストーカー野郎に連れ去られた、という可能性だ。
大声で呼んだにも関わらず、未だ姿を見せる気配がない。それがまた、最後に思い付いてしまった可能性への疑惑を募らせていく。
（落ち着け……落ち着くんだ……そう落ち着け）

俺は心の中で冷静になるよう自分を言い聞かせ、一度深く深呼吸する。綾子ちゃんがいなくなったにしても、ほんの数十秒ほどのはずだ。連れ去られたにしろ何にしろ、これだけの人込みの中、人ひとりを運んで行ったというわけではないだろう。

それではあまりに目立ち過ぎるし、あの野郎のように全身黒ずくめであれば、ここでは逆に目立つ。もしかしたら黒ずくめでない可能性もあるが、どちらにしろ無理だろう。

そうなると、綾子ちゃんの意思でここを離れたと考えるのが妥当だと思われるが……だとすれば、俺を待っているにも関わらず、何も告げずにいなくなるのは、どう考えても不自然だ。

（まさか、本当に神隠しにでもあったって言うのか）

馬鹿馬鹿しい考えにかぶりを振って、店の前に置かれてある商品を見ている客に聞いてみることとした。

「すみません。今ここに女の子がいたのを見かけませんでした？」

「え？」

突然聞かれた女性客は、なんのことかさっぱりという顔をしていたが、なにやら忙しげにしていた男が近くにいた女の子を、連れていったと言ったのだ。

しかし、お互い顔見知りだったのか、不自然なところはなかったという。おまけに彼女は、その二人の顔や姿は見ておらず、ただ声だけでそう判断しただけなのだとも言った。

だが、その二人のうちの女の子が綾子ちゃんである可能性は高い。手掛かりらしい手掛かりがない今、その情報に頼るしかないとも言える。

女性に礼をいい、指差した方へ足早に向かう。当然、携帯で綾子ちゃんへの連絡をするべく手に取ると、着信メロディがけたたましく鳴りだした。

『ごめんなさい九鬼さん！』

「綾子ちゃんか！？」

電話をとると、叫ぶような綾子ちゃんの声が聞こえてきたのだ。

呼吸が荒く、走りながら電話をしてきたように思える。
『私今駅の方に向かってます！』
「どうした？　何があったんだ！」
『その……ス、ストーカーに』
俺が懸念した通り、やはり綾子ちゃんはストーカー野郎と接触してしまったのだ。
「分かった。今どこだ？」
『今……そう川、川沿いの道にいます！』
「川沿いの……いつも学校へ行く時の……線路挟んだ反対側だな？」
『はい。……九鬼さん、本当にごめんなさい……』
目に見えないのでわからないが、綾子ちゃんは涙声になっているようにも聞こえなくもない。「こうなった以上は仕方ない。とにかく駅まで無事でいてくれ、いいな？　俺もすぐに行くから！」
『ぁ……ま、待ってください！』
「どうした？」
『お願いですから……電話は切らないで……』
「ああ、分かった」
それだけ言うと、俺はすぐさま走り出した。ほんの数メートル走ると、視界の脇に小さな道があった。商店と商品の間に挟まれていて、街灯も全くない。
こんな短時間で駅そばの河に行くのであれば、人の往来の多い商店街のメインストリートより、こういった小道の方が短縮できるだろう。もしかしたら、あのストーカー野郎も、この道を使って接触をはかったのかもしれない。
俺はその薄暗い小道へと入って行き、全速力で走る。
「綾子ちゃん」
『はい……』
「そのストーカーって、君の知り合いか？」
しばしの沈黙があった。実際にはたいした時間ではなかったかもしれない。何せ、自分が大急ぎで走っているのだから、興奮で時間

の感覚が多少なり狂っているはずだからだ。
『……はい』
「そうか……」
もしかしたら、俺がなんで知り合いがストーカーだったと言うのが分かったのか、考えたのかも知れない。俺はその辺りを簡単に説明してやった。こうすれば、少しは気が楽になるはずだ。
ストーカーに追われているのだから、気が気ではないはずなのだから、こうして電話を切らないでと言ってきたのだ。
あっという間に商店街を抜け、まだ完全に日が沈んでいないというのに、裏道にはすでに人通りはほとんどない。せいぜい老人が一人か二人、歩いていたにすぎない。
綾子ちゃんは、自分が今に至った経緯をとぎれとぎれに走りながら、話してくれた。彼女は俺を店の外で待っていた時に、奴から声をかけられたのだと言う。
不審にも思ったそうだが、九鬼沙弥佳という少女が君と会いたがっていると告げられ、ついて行くことにしたらしい。
しかし、俺を待っている手前、しばらく待ってほしいと言ったが、お兄さんとは会いたくないそうだと聞き、仕方なかったのだとも。
それでいて顔見知りであれば、確かに気を許してしまうというものかもしれない。なおかつ、今綾子ちゃんは自責の念でいっぱいであったろうから、まさに連れ去るにはうってつけだったというわけだ。
しかし、不審に思う気持ちは払拭できず、繰り返し繰り返し沙弥佳がどこにいるかを尋ねたが、奴は答えることがなく、いよいよ自分が罠にハマったことに気付いたのだという。
それでもし逃げたのだとしたら、きっとこのちょっとした迷路のような小道のあるここらで、逃走することができたのだろう。いや、まだ逃走中というのがただしいか。
「……分かった。駅まで後5分とかからない。それまで頑張るんだ。もしかすると途中で落ち合えるかもしれない」

『九鬼さん……ありがとう……』
「……なーに、気にするな。きっとこいつも俺がやりたくてやってるんだ」
綾子ちゃんを元気づけるように、おどけた口調で喋ったつもりだが、走りながらだとうまく喋れない。
「よし、そろそろ川が見えてきた。もうちょっとだ」
『え？　じゃぁ……』
綾子ちゃんの言葉が紡がれることはなく、受話器の向こうで大きな音がする。ガチャン、という何かが落ちたような音だった。
なんだ？　だが、なにかとても嫌な予感がする。
「綾子ちゃん？　もしもし綾子ちゃん！　どうしたんだ！」
走りながらのためか、舌を噛みそうになりながらも綾子ちゃんと叫ぶが、応答はなかった。
（川沿いの道……ここであっているよな？）
駅に向かうと言っていたのだから、この道であっているはずだが、まだ綾子ちゃんらしい人影は見当たらない。
十一月も下旬なのだから、日が沈むのも大分早い。もう街灯が点いている時間帯ではあるが、街灯そのものが少ないためだろう、この辺りはいくら商店街の裏の地区といえど、薄気味悪いほど人通りがない。
ところどころで川の流れる音はあるものの、流れが滞留しているのか、あまり流れているような気がしない。それがまた、この辺りの寂漠とした雰囲気をさらに増長させている。
どれほど走ったか、道の向こう短いで悲鳴のようなものが聞こえた。俺の中になんとも嫌な、あのコールタールのような粘つく感覚が蘇る。
（まさか――綾子ちゃん！）
どれくらい離れているのか分からない。このような場所では、いまいち距離感がつかめない。水が音を吸収してしまうからだ。おまけに民家が壁となり、余計に分かりにくいのだ。

もしかしたら、短い悲鳴だったことから、あまり大きな声でなかった可能性もある。
（なんにしろ急がないと！）
もう呼びかけても、綾子ちゃんは応答しない。
「無事でいてくれよ、綾子ちゃん！」
俺はさらにアクセルを全開にして、坂になっている道を走り抜けた。

ここ最近、何かあるごとに後手後手にまわっていた俺だったが、今回ばかりは神様もちょっとは気の利いたことをしたようだ。
坂道を上まで登りきるとそこから先は緩やかな下り道になっていて、その中腹あたりに綾子ちゃんはいた。
そしてもう一人……奴だ。
綾子ちゃんは恐怖のためにその端麗な顔を歪め、腰を抜かしてしまったのか、その場にへたり込んでいた。
だが、逆にそれが幸いしてか、ストーカー野郎も連れ去るには往生しているようだ。
「綾子ちゃん！！」
かつて俺自身、こんなにまで大きな声を出したことがあったろうか。自分自身でそんなことを思ってしまうくらいの大声だった。
二人とも俺の声に驚いて、こちらを向いた。
足が擦り切れて、なくなってしまうんじゃないかというほど全力で、下りの坂道を駆け抜ける。だが俺の中の何かは、まだだ、まだだ、まだ遅いと頭蓋の中でうるさく叫んでいる。
（やかましい！　そんなの分かってる！）
奴まで、もうほんの僅かの距離だ。俺は右の拳を握りしめ、走りながらそのまま殴る体勢へと変える。恐らく、このまま勢いを殺さずに殴り付ければ、向こうへのダメージもかなりのものになるだろ

う。

しかしそれと同時に、俺も勢いだけで突っ込めば、ただではすまないかもしれない。冷静に考えれば、その辺りはもっと加減できたはずなのだろうが、今の俺にはそれはできない相談だった。

奴が俺の目の前にくる。そのままのスピードで握りしめた拳を、こいつの顔面めがけ、殴り抜ける。

俺のスピードまかせのストレートに、奴はわずかに宙を舞い、そのまま後方へと飛ばされた。

俺自身も前のめりに倒れ込むが、無意識のうちにうまいこと受け身をとることができたようで、倒れた時の衝撃こそあったが、あまり痛みを感じなかった。

俺は、よろめきながら立ち上がり、吹っ飛ばされたやつを見下ろした。

当たった瞬間はそうでもないが、遅れて痛みがわいてきた。しかも殴った拳と、こいつに切り付けられた上腕部の両方がだ。

忌ま忌ましい気分になるが、間一髪のところで間に合ったのだから、それは良しとすべきだろう。

「はぁ、はぁ……大丈夫、か？」

商店街から休む事なく走り続けたため、呼吸が荒く、うまく喋れない。

「ぇ、あ……九鬼、さん？」

綾子ちゃんはまだ混乱した様子で、俺と吹っ飛んだまま倒れている奴を、交互に見ていた。今起こったことを、まだ整理できていないのだろう。無理もない話ではあるが。

その間に、呼吸を整えるために深呼吸する。荒い呼吸が元に戻るまで、何度もだ。

俺が呼吸を戻している間に、綾子ちゃんも状況を整理できたようで、ついさっきまでの混乱した様子は見られなくなった。

「あ……九鬼さん」

「ああ……すまなかったな。まさかこうなるなんて思いもしなかっ

た」

まだへたり込んでいる綾子ちゃんに歩み寄って、立たせようと手を差し延べる。ばつの悪い顔になって、鼻の頭を軽くかいた。

そんな中、へたり込んでしまって力無く投げ出された綾子ちゃんの白く、美しいラインを持ったふとももや脚が、なんともいえない。

さらに制服のスカートが、中の下着を見えそうで見えないよう、ギリギリのところで隠しているのもまたエロチシズムを掻き立てる。

（綾子ちゃん、結構な美脚なんだな）

こんな状況下で、そんなことをぼんやりと考えてしまったことにまたも自己嫌悪してしまうが、まぁいいだろう。

「九鬼さん……九鬼さん……九鬼さっ」

俺の手によって立たされた綾子ちゃんは、安堵からか泣きはじめてしまった。俺は、嗚咽をもらす綾子ちゃんを抱きしめてやり、背中を撫でた。

やはり、いくら気丈に振る舞っていたにしろ、こんなことになれば怖くなって当然だ。俺にしても、過去に電車に轢かれそうになったり、ナイフで切り付けられたことがなければ、こんなにまでうまく身体が動いたとは思えない。　いや、それらですら無意識のうちだったのだから、次はないかもしれない。

しばらくの間抱きしめていた綾子ちゃんを、俺は引き離す。奴が呻き声をあげながら、動き出したのが見えたからだ。

「ぁ……九鬼さん」

綾子ちゃんは、まだ涙が止まっていなかったようで、啜り泣きながら、俺を見上げてきた。できるなら俺もまだ抱きしめていてあげたいが、奴が動き出した今、そう悠長なことはしていられない。

俺が視線を自分の後ろにの方へと向けたことに、何かを察したのだろう、綾子ちゃんはその細い身体をビクリと震わせた。ゆっくり動き出しはじめた奴に、ツカツカと足音を立てて近付いていく。

だが、ここで油断はできない。前はそのおかげで、ナイフを切り付けられたのだから。俺はこの野郎の後ろにまわってフードを掴ん

だ。
「さて……やっと捕まえたぜ」
奴は掴まれたことで、必死にもがいて逃げようとするが、俺はそんな野郎に右足で容赦なく脇腹を蹴った。
「うげぁっ！」
この野郎は、情けない呻き声をあげながら、痛みにのたうちまわるが、後ろを掴まれているせいで、それも満足にできない。
「よう、どうしたんだ。お得意のナイフを出してこないのかい？」
「な、ナイフってなんのこと……がはぁっ」
言い終わる前に、今度は右の膝でこの男の鳩尾に叩き込む。
「がはっ……かはっ……た、助けて……」
「おいおい、何寝ぼけたことを言ってるんだ、お前さん。つい何日か前に、俺の右腕を切ってくれただろうが」
「お、俺、そんなことしてないよ……うぐっ」
俺がフードを思いきり引っ張ったことで、ジャケットの襟元がこの男の喉元に、に引っ掛かったようだった。
「嘘をつくな！　お前が蒲生の家で切り付けたんだろうが！　忘れたとは言わせないぞ！」
そのまま、力まかせにフードを引っ張り、この野郎を引き倒した。
「あっぐぁう」
「どうした？　あの時はもっと、こっちを楽しませてくれたじゃぁないか」
倒れた男の手に、靴で踏み付ける。
「ぐう……俺が何したって言うんだよぉ……俺はあんたになんか何もしてないよ」
「まだ言うかっ」
この野郎の顔面を膝で蹴ろうとも思ったが、やめた。今こいつは俺には何もしていないと言った。
もはや目の前の男は、痛みと恐怖で全身を震わせているのは明白だ。一度ならず二度も殺そうとした奴にしては、あまりに情けない

上、それすらも記憶にないのだと言う。
もちろん、この男が殴られ、何も知らない奴を演じていないとも言い切れない。つまり、今俺を油断させようとしているわけだ。だが、どうにも腑に落ちない。この男からは、例の殺気だった嫌な感覚が、全くといっていいほど感じられない。
それに、以前蒲生の家で遭遇した時は、こんなにまで何もできない奴ではなかった。今こうしているあいだにも、ナイフなりなんなりで攻撃を加えて来ているはずだ。
「……おい、あんた」
「な、なんだよぉ……」
「今、俺には何もしていないと言ったな。どういうことだ？」
「そ、そのまんまの意味だよっ。俺はあんたには何もしたことはないよっ」
「じゃぁ蒲生の家でのことは？　それと例のカメラのこともだ」
例のカメラと言う言葉に、男が一瞬だが体を震わせたのを、俺は見逃さなかった。
「もしかして、なにかしら偶然にもたまたまストーカーしている奴と、なんの関係もない人を勘違いしたのかと思ったが……どうも、そうでもなかったみたいだな。今あんた、例のカメラってとこに反応しただろう？」
今度は間違いなく動揺し始めているのが、よくわかった。その顔にも、何か後ろめたいことをしているというのが、明白に表れている。
「ビンゴ、みたいだな。
……さあ、しゃべってもらうぞ、洗いざらい全てな。さもないと、すぐさま警察行きだぜ」
警察という単語にも、この男はひどく反応し、のろのろと俺を見上げた。きっと生きた心地がしてないに違いない。
もしかしたら、今回以外にも何かやっていて、それらも暴露されてしまわないか、心配しているのかもしれない。まぁ、真相に近づ

けるのなら、この男がどうだろうと知ったことではないが。
「言っておくが、あんたが喋ろうと喋らまいと、警察に突き出すだけの口実はあるんだ。……喋ればもしかしたら、気まぐれで今回は見逃してやらなくもないぜ？　さぁ、まずはあんたの名前からだ」
俺の言葉に藁をも掴む気持ちだったのだろう、男が顔を引き攣らせながら、のろのろとゆっくり語りだした。
「……お、俺は北条猛（ほうじょうたけし）。神に誓って言うよ……本当にあんたには直接なにかしたことはないよ」
「つまり、何らかの形で俺にも何かしたってことだな？」
北条はかすかに頷いた。
「ある程度は予想できるが、例のカメラをうちや綾子ちゃんちに仕掛けたのは、あんたか？」
それにも北条は頷く。
「では、蒲生という男については？」
「さ、さっきもあんたその名を言ってたけど、俺は本当に知らないんだ。信じてくれよ！」
「信じる信じないは、話が終わってからだ。まだ聞きたいことはあるんだ」
「うぅ……わ、分かったよ」
「九鬼さん……」
綾子ちゃんに軽く目で合図し、また質問を続けた。
「蒲生を知らないと言ったが、ならばどうやってあのカメラを手に入れたんだ？　ついでに言うと、盗聴機も仕掛けていたな。あれもあんたか？」
「あ、ああ、そうだよ……元々盗聴器を先に仕掛けていたんだ。その後にカメラを……」
そうか。つまり盗聴器だけでは声や音しか分からない。だからカメラも仕掛けてみる気になったのだろう。
「盗聴器については分かった。カメラも綾子ちゃんを監視するためか？」

俺はなぜかこの時、妙に語気が荒かった。綾子ちゃんを盗聴し、監視していると聞いただけで、頭蓋の奥に火花が散ったように、怒りの炎が舞い上がってくるのを感じたからだ。

そのため、まだ踏み付けられたままの北条の手に、力が加えられたのだ。

「あくっ……お願いだ、それ以上踏み付けないで……」

この男の忌ま忌ましい態度に、舌打ちしながらも怒りの感情を押さえ付けながら、続きを促した。

「た、確かに音だけじゃ満足できなくなってカメラを取り付けたのは間違いないよ。でも、元々は依頼されて取り付けたんだよ！」

北条は苦痛に呻きながら、早口にまくし立てた。

「つまり、あのカメラは元々別の人間が所有してたってことだな？目的は綾子ちゃんの父親だろう！」

「ぐあぁっ！　お願いだ、本当に痛いんだ。やめてくれ……」

「やめてほしいのなら、ちゃんと答えるんだ。いいな？」

「分かった、分かったから！　そうだよ！　あれは譲り受けたものだ」

「誰からなんだ！」

「し、知らない……あっぐあっぁう！　ほ、本当だ、本当に知らないんだよ！　ある日突然俺の前に現れて、これをある場所に取り付けてほしいと言われただけなんだ！　父親を監視してほしいと頼まれただけなんだよ！」

「つまり、全く面識はないということなのか？」

「な、ないよ！　しかも真っ黒のジャケットとフードを付けてたから分からなかった！　はぁはぁ……た、ただ」

「ただ、なんだ？」

「些細なことでも、必ず連絡するようにと……言われた。お、俺は最初、てっきり父親というのは口実で、この子が目的と思った」

そう言って北条は、チラリと綾子ちゃんの　方を見る。綾子ちゃんは、一瞬だが身体を恐怖に震わせた。それがまた俺を苛立たせる。

「薄汚い目で綾子ちゃんを見るんじゃぁないぜ。
それでその男に、情報を流していたというわけか？」
再び、苦痛に喘ぎながら頷いた。
「なるほど、大体のことは分かった」
俺のその言葉に、北条は助かったと思ったことだろう。だが俺はそれとは裏腹に、この男をどうしようもなく痛め付けてやりたくて、仕方がなかった。
「最後に聞くがあんた、綾子ちゃんとどんな関係だ？　あんたと綾子ちゃんは、全くの顔も知らない赤の他人というわけではないだろ？
それにだ。あんた、なんで今日になってこんなことしたんだ？
そいつは聞いておかないと、夜も眠れそうにない」
「お、俺は……」
北条は、再びチラチラと綾子ちゃんの方を見る。
「この方は……父の会社で、お付き合いのある方なんです」
北条の代わりに、綾子ちゃんが答えた。おまけに会社付き合いのある人間ときたもんだ。
「なるほど……綾子ちゃんの親父さんは社長だからな。色んな人が会いに来るもんな」
つまり北条は、仕事のため綾子ちゃんの親父に会った時、同時に綾子ちゃんとも知り合いになったのだろう。
いくら綾子ちゃんが沙弥佳のためであろうと、ただ顔を知っているだけの人間に、素直について行ったとは思えない。ある程度の、挨拶と簡単な会話をする程度の仲ではあったのだろう。
そして、気付けば綾子ちゃんに恋心を抱いたが、社長令嬢である綾子ちゃんには、自分の気持ちは届かない……それがいつしか、歪んだ形の愛情へと変わっていったというわけだ。
全く、泣かせる話じゃないか。そうまでして、他の人間のものになるくらいなら、ということなのだろうか。
美人薄幸だなんて言葉があるが、まさにその通りだ。先人たちも、よくぞまぁ言ったもんだ。

俺はそういう世界にいないから分からないが社長令嬢ともなると、色々な場所について行かないといけないのかも知れないな。いや、ただの社長令嬢ではない。美人の、だ。

まだ幼さはあるが、同年代とは比べられない程の洗練された仕草、言葉遣い、どれをとっても比較にならない。

その娘の美貌を、父親も間違いなく利用したのだろうが……地位のある人間の娘となれば、そういう話は確かに良く聞くが、まさか、こんなところでそれをお目にかかれるとは思いもしなかった。

「最後に聞くが、あんたが連絡しているという奴のことだが、どうすれば連絡がとれる？」

「わ、分からない……」

「おいおい、連絡先くらい分かるだろう。嘘つくなよ」

「う、嘘じゃない本当なんだ！　いつも連絡は向こうからしてくるし番号もいつも公衆電話からだったり転送サービスからばかりで、こっちからは連絡のとりようがないんだよ！　だ、だけど」

「なんだ」

「今日は、あいつが初めて会った時以来、俺の前に現れて、今日何かが起こるから、タイミング良くことを起こせと……」

引っ掛かる言い方だった。何かが起こるから、だと？　一体どういうことだ。

「こうも言ってたよ……邪魔する奴がいるからそいつも殺すって……それで……」

なんだ……とてつもなく嫌な予感がよぎる。

「それで……なんだ」

自分の声とは思えないほど低く、腹の底から、いや、地の底から響くような声が出た。北条は、そんな俺の声に身体を縮こませながら、震える声で続けた。

「邪魔する奴は……その周りの人間も殺す、と……そうして示すべきだと」

今、こいつはなんと言った？　周りの人間も殺す、だと……？

綾子ちゃんもその意味を理解したのか、仮面を貼付けたように、顔の筋肉一つとっても微動だにしない。

「ふざけるなっ！」

この上ないほどの大声をあげていた。

つまるところ、奴はみせしめとして沙弥佳を殺してみせると言うのだ。ふざけるのも大概にしろ。そんなこと許されるはずがない。

俺の中から、マグマのような奔流が爆発しそうだった。

「おい……お前は俺達が店の中に入っていったのも見ていたな？」

「あ、ああ……だから、あ、あんたの妹が出て行った時、チャンスだと思ったんだ」

「なら、妹が店を出た後どっちに行ったか分かるな？」

北条は、俺自身が驚くほど低く、冷静な声に、逆に身を震わせながら首を縦に振る。人間というのは、怒りが大きければ大きいほど逆に、冷静になっていくものなのだろうか。こんなことをぼんやりと考えてしまう程にだ。

実際に奴と出会った時、きっと自分でもどうしようもない程の怒りをぶつけることになるのは、間違いようもないことだろう。

こんなにまで自分の意思で、人間を傷付けたいと思ったのは、生まれて初めてだ。

第15章

「……綾子ちゃん。この男のことどうする？　君のストーカーはこいつだ。俺個人の考えとしては、警察に突き出した方がいいと思うが」

「ん……」

綾子ちゃんの渋い表情から察するに、警察に突き出した方がいいとは思っているのだろうが、顔見知りであるがゆえ、男を突き出すのにも、またためらわれるといったところだろうか。俺なら間違いなく突き出すところだがな……。

「……綾子ちゃん。君がもうそこまでしたくないというのなら、それはそれで構わない。実際、君の問題だしな。俺にああだこうだ言う権利はないんだから。だが、このまま無罪放免というわけにはいかない」

俺はため息をつき、一つの提案をした。

「おい、あんた北条とか言ったな」

「ひっ……あ、ああ」

「綾子ちゃんはこんな性格だから、もうこれ以上、ことを大きくしたいとは思ってない。つまりだ、警察には突き出さない」

北条は、まるで全ての罪が赦されたかのような顔と、驚きの表情をないまぜにしながら俺を見上げた。しかし、そう物事、ただでは問屋はおろさないものだ。

「これからあんたにも妹を探すのを手伝ってもらう。あんたの言い分がどうあれ、関係ないはずの妹が危険にさらされたんだからな。これはお願いじゃぁない。命令だ。いいな」

有無をいわせぬ口調で、北条に命令した。北条も力なく頷き、警察に突き出されるかもしれないという、最悪の結末だけは回避されたため、安堵の表情をしている。

どっちみちこの男にはもう従うしかないので、命令もなにもない

のだが。とはいえ、はっきりと主従関係というものを分からせておく必要はある。

「良し。……綾子ちゃん。勝手に話を進めてしまって悪いが、これでいいな？」

「はい……私としては、もうあんなことをしないなら、それだけで……。

それよりも九鬼さんこそ、これで良かったんですか？」

その問いかけに、俺は肩をすくめながら言った。

「一応、依頼主の君がそういうんであれば、そいつに従うさ。もっとも、君が心変わりして、今からでも警察に突き出すというなら、話は別だがな」

俺の言葉に北条は、ビクリと大きく肩を一瞬上下させ、綾子ちゃんを脅えるような眼差しを向けた。その様子を見ると、こんな男がストーカーをしていたとはまるで思えない。

意外と事細かいことが気になる質なのか、まだいくつか聞きたいことも思い浮かびはしたが、今はそんなことを気にする暇はない。

「さぁ、立ちなよ北条さんよ。早速手伝ってもらおう」

「あ、ああ、わかってるよ」

俺達は大急ぎで商店街へと戻った。綾子ちゃんには、家に帰っているようにと言いはしたが、自分も一緒になって探すと言ってきかなかった。

俺としては、綾子ちゃんのストーカーと、俺が対峙した奴が別であったことにある意味で感謝した。

俺が追っていた奴の危険性は、どう考えたって北条とは比べられない。奴には危険を通り越して、異常にすら感じたほどだった。

また、商店街に戻る時に聞いた際、例の動物を殺してプレゼントして来たのは奴だという話だった。北条はただ単に、朝起きたら家

の前に置かれていたものを指示通りに、俺達の家に置いていっただけだという。

その話を聞いた綾子ちゃんは、あの時のことを思い出したのか、顔を伏せた。この時ばかりは俺も、自分のうかつさに軽く舌打ちしたが。

とにかく、そんな奴とこの男が別だったというのは驚きもしたが、それ以上に納得した気持ちの方が勝っていた。

綾子ちゃんの方は差し当たり危険はなくなった。だが、それは同時に、まだ奴に肉体的にも精神的にも傷付けられるかもしれない、という危険性もはらんでいた。だからこそ、その危険性が少ないであろう家に戻ってほしかったのだ。

とはいえ、ついてきてしまったものは仕方ない。こうなったら、綾子ちゃんにも最後まで、付き合ってもらうつもりだった。

それに綾子ちゃん自身、自分の身の回りから起こったことが、こんなにまでなってしまった、という負い目もあるだろうし、ことを最後まで見届けたいという気持ちもあるに違いない。

もし俺が綾子ちゃんの立場であれば、間違いなくそう思うことだろう。

「で、あんたはここで俺達が出てくるのを待っていたんだな？」

俺の言葉に北条は、不承不承に頷いた。俺達三人は今、つい３０分ほど前まで入っていた喫茶店の斜め向かいの小道にる。

なるほど。ここは暗く、小道というより、それぞれの店の建物を建てたら、隙間ができましたと言わんばかりのものだが、アーケードの照明に照らされ、人々の動きや流れなんかは、よく見渡せる。ここなら、監視するために隠れることもたやすい。

おまけにアーケード街の照明が、暗いこの場所とアーケードをうまいこと区切ってしまっている。全身黒い服で覆われたこの男には、さぞかし、いいカムフラージュになっていたことだろう。

「妹が出ていった後、あいつが例のアクセサリーの店に行ったまでは分かってる。俺が知りたいのはその後だ」

「あ、あの子はその店を出たあと、その脇の道へ入っていったんだ。俺もその後を追ったから間違いないよ」
「良し。案内するんだ」
半ば脅し口調になりながら、北条を先頭に沙弥佳が入っていったという脇道へと入った。そこはさっきの隙間道のような場所だったが、いくらかは幅も広い。
しかしそれでも、普通ならこんなところをまだ年端もいかない女の子が、一人でうろつくというのは躊躇ってしまうだろう。
いや、あの時の沙弥佳は普通の状態ではなかった。そんなことなど気にしなかったかもしれない。あるいは、こんな場所だからこそ入っていったとも考えられなくもない。
沙弥佳の行動について考えているうちに、先頭を行く北条が立ち止まった。
「どうしたんだ？」
「俺はここまでしか追わなかったから、ここから先は分からないんだ……」
そこは四方を雑居ビルに囲まれた、ちょっとした空間になっていた。そろそろ日が完全に落ちようとする時間で、見上げれば空は茜色に染まっている。
だというのに、この空間はすでに日が差し込むスペースなどなく、空までの吹き抜けがなければ完全な闇になっていただろう。当然ながら、今だって夜といっても差し支えないほどの闇に覆われてはいるが。
「おい。本当にここに来たんだろうな……？」
自分でも再び声が低くなったのがわかる。
「ほ、本当だ！　助けてくれるってのに嘘はつかないよ！　そ、それにここに来た途端ここに突っ立って動かなくなったんだ」
「だとしても、なんだってこんなとこに……」
「……九鬼さん」
綾子ちゃんが俺に呼びかけながら、横の壁を指差す。いや、壁で

はなく、わずか五十センチほどの隙間だった。今歩いて来た隙間道も一メートルにも満たなかっただろうが、そこは本当に狭かった。
「……行ってみるしかないか。と、その前に」
俺は携帯を取り出して、斑鳩に連絡する。短いコール音の後、間延びした聞き慣れた声が出た。
『もしも～し。もしかして、さやかちゃん見つかった？』
「いや、残念ながらまだだ」
俺は簡単に事情を説明した。どうやら、斑鳩もまだ探してくれていたらしい。てっきり、もう探すことなどやめて、新しく女の尻でも追っかけているとも思ったが、それは言わないでおく。せめてもの感謝の気持ちのつもりだ。
『んーオッケ～。そんじゃ俺は南の方から探してけばいいんだね？』
「ああ、また何かあったら連絡する」
『了解』
「もう何十分も前だが、沙弥佳のあの状態から考えれば、もしかしたらまだその辺にいないとも限らないからな」
携帯を折りたたみながら、心配そうな眼差しを向けてくる綾子ちゃんに、肩をすくめながら言った。
「お兄ちゃんが綾子ちゃんにプレゼント……」
沙弥佳はポツリと、誰にも聞き取れないほどの小さな声で呟いた。もう何度目かも分からない呟きだ。
自分の最愛の兄が、やはり自分の最も親しい友人に贈り物をする……。本来なら、祝ってあげるべきだと言うのは分かっていた。
前に沙弥佳は兄に言った。たとえ綾子にも、自身の兄を取られたくないと。

だがやはり、常識的にみてそれは無理であり、ただの束縛にすぎないとも彼女は理解していた。

親友である綾子がうちに居候することが決まった時、最初は大切な友人を守れるかもという嬉しさがあった。また兄も、それをかって出てくれた。沙弥佳は、最愛の兄と無二の親友とともに生活できるということに、無上の喜びを感じたのだ。

しかもその友人は日増しに、沈んでいた表情に、渇いた大地が潤い、豊潤な大地へと変わっていくが如く、明るさを取り戻していったのだ。

友人としてそれも嬉しかった。また、あの綺麗で、明るくて元気な綾子とすごせると思うと、沙弥佳は嬉しさのあまり我を忘れかけたことすらあった。

しかし、ある時から兄に一つの変化があった。今までは何をやるにしても、自分のことを放っておくことのなかった兄が、自分よりも友人を中心に物事を据えるようになったのだ。

兄のことならなんだって知っているはずの自分。そんな兄が親友に、今だかつて見せたことのない態度と表情をしていたことに、どうしようもない嫉妬の感情が沸き上がってくるのに、沙弥佳は戸惑った。

と同時に、そんな嫉妬はしてはいけないという、理性による叱責もあった。おまけに、兄は何かに巻き込まれたのか、制服が破れていたり、似合わない服を着ていたと思えば、腕を怪我していたりと、ただ事ではない様子だ。

それは怪我をする前から勘づいてはいた。沙弥佳に隠れて何かをしていることに気付いたからだ。

兄が自分が怪我をしてまで首を突っ込む理由は、綾子の様子と同様、綾子に気があるからではないか、そんな風に思えて仕方なかった。

綾子も綾子で前のように明るさを取り戻してからというもの、どこかそれ以前のものと違うような印象を沙弥佳はうけた。それもそ

のはずで、綾子はきっと兄に好意をよせるようになったに違いない、そうとしか思えなかったのだ。

事実、実際にカマをかけてみれば、やはりそうだった。

兄が親友を見る眼。あんな眼をした兄は、今まで見たことがなかった。

親友が兄に向ける眼差し。あれもどう考えたって、ただ頼れる人を尊敬するだけのものではない。

沙弥佳は後悔した。こんなことになるなら、友人と兄を会わせるべきではなかった、と。けれど、その友人を見捨てることも彼女にはできなかった。

それでも、自分の意思がどうあれ、兄と親友が恋仲になるのも、もはや時間の問題であるように思われた。

そう思っていた矢先だったのだ。兄が綾子と囮作戦などと称して、事実上のデートをするようになったのは。

だから沙弥佳は抗議した。友人にはストーカーからも解放されて、幸せになってほしい。できるものなら、いずれは結婚だってするだろうから、親友として一人の女として幸せになってほしいと思う。

けれど、兄だけは駄目だった。兄とだけはやめてほしかった。しかし、兄はただの作戦であり、一緒に沙弥佳がいては意味がないとまで言い放ったのだ。

そこまで言われては、もはや何も言うことができなかった。兄が言ったことは正論だったからだ。

しぶしぶ認め、その日の放課後は一人家路につきながら、兄と親友の仲が進展しませんようにと、何度も祈った。信じてもいない神に、祈りさえした。

だが結果は無情だった。家に戻ってきた二人は、これまでと明らかに違っていた。

具体的にどこがというわけではなかったが、二人の纏う空気が、もはや恋人のそれだった。

そういったことに鈍感な両親すら気付いたことで、それは自分の

中に築いてきた兄の理想像を、根本的に瓦解させるほどのものであり、それからというもの、自分が兄へどう接していいのか分からなくなってしまったのだ。

たとえ喧嘩しても、今までなら兄から謝ってくれた。けれど今回は事情が違う。

どう接すればいいのか分からないまま、悶々としていき、それがまた兄に、素っ気ない態度をぶつけてしまう。

だからこそ、沙弥佳は今日久しぶりに兄と遊べると思って、大して好きでもない男と一緒とはいえ了承したのだ。

また、この気持ちとは裏腹に想いは屈折していき、兄に少しでも嫉妬させようと、斑鳩という男の自分への下心さえ利用した。だというのに最愛の兄は、これ幸いにと綾子にプレゼントしてみせたのだ。

そんな中、気付けば商店街も外れ、繁華街へと続く途中にある公園に来ていた。沙弥佳はどうやってここまで来たのか、全く記憶にない。

兄が、綾子に髪留めを渡したところまでは覚えている。その後、どうやって店を出てここまで来たかは覚えがなかった。ひたすら先ほどの光景が、頭の中でリフレインされるのだ。

「そういえば、携帯鳴ってたな……」

沙弥佳は公園の椅子に座り、ぼんやりとした手つきでバッグから携帯を取り出した。

「……お兄ちゃんから」

携帯のディスプレイには、５０件を超える着信があったと表示されている。しかし、それに紛れて綾子と斑鳩の文字もあった。

斑鳩はどうでもよかった。しかし今の沙弥佳には、『あやちゃん』と書かれた文字が無性に気に入らなかった。

無二の親友……でも、お兄ちゃんをかすめ取っていった泥棒猫……。沙弥佳はそんなことを呟いている。

「……ひどいよ、あやちゃん……なんで私のお兄ちゃんとるの……あやちゃんなんて……」

彼女は、それ以上先は言葉にすることはなかった。言ってしまえば、綾子との、そして兄との関係が終わってしまいそうで。

「お兄ちゃんもお兄ちゃんだよ……なんで私の目の前であんなこと……」

沙弥佳の脳裏に、兄が綾子にプレゼントする光景が再び浮かび上がる。

綾子は驚きながらも頬を染め、嬉しさに顔をほころばせている。兄もやはり同様に顔が赤くなり、渡した髪留めが綾子に付けられると、その姿に釘付けになっていた。

そんな光景が、もう何度も浮かんでは消え、また浮かんでは消えていった。そして、ふと冷静になると目尻に涙がたまっていく……はた目には、まるで失恋したかのようにしか見えない。

そもそも兄と綾子は、まだ知り合って一月も経っていないはずではないか。なんでそんな二人がもうあんな仲になっているのか。

沙弥佳にはそれが理解できなかった。綾子にしてもそうだ。沙弥佳の気持ちを知っていながら、なんであんなことをするのか……。

もう今の沙弥佳に、二人を信じることはできそうもなかった。そう考えただけで、先ほど言おうとしたが言わなかった言葉をいいたくて堪らなくなった。

「……お兄ちゃんも……あやちゃんも……私を裏切るんなら……いなくなればいい」

言ってしまった。誰もいない公園で呟いた独白。だが、沙弥佳には何か、決定的な何かが失われたような気がしてならなかった。

「なら、俺がそいつらを消してやろうか」

後ろから響いてきた声に、沙弥佳は驚いて後ろを振り向いた。そこには、これからの時間には完全に紛れてしまいそうに、全身を黒く覆いつくした男が立っていた。

背丈は兄と同じくらいだろうか。ジャケットのフードを被ってい

るため、顔は見えない。
「なぁ……なんだったら俺がその二人を消してやるぜ」
男は再度、問いかけてきた。
「あ、あなた、誰！？」
「……別に誰だっていいだろう？　ただ望むなら今あんたが呟いた二人……始末してやってもいい……」
「なっ……し、始末って……」
「……言葉の通りだ。この世から消す……要するに殺すってことだ」
「……」
沙弥佳は混乱していたが、無理もない。いきなり人殺しの請負人を名乗り出されたら、誰だってそうだろう。
しかも、自分でも消え入るような小声と思う呟きを、この男はどうやって聞いたというのだろう。
「そ、そんなの冗談に決まってるでしょっ！？」
「……そうか。かなり本気のようにも思えたがな。……あんたとはうまく手を組めそうだったんだが」
「ど、どういうこと？」
「……今言ったろう？　その二人……特に兄貴の方が少々邪魔になってきてね」
「お、お兄ちゃんが……？」
「……そうだ。だから始末してやろうと思っていたんだが……あんたの手を借りればうまくいくと思ったのさ」
男の声は決して大きいものではないが、妙に響き、まるで沙弥佳の精神に響いてくるようでもあった。
「お兄ちゃんを殺すだなんて……そんなの許されるわけないじゃないの！？」
「……別にあんたに許してもらう必要はない。……それにな」
男はそこで一旦言葉を区切った。フードの中で、顔がわずかに横を向いた。いや、向いたように見えた。
沙弥佳はそれにならい、視線をむけると、その先には兄と親友の

二人、それに顔も知らない誰かがいたのだった。

俺達は隙間道を通って、アーケード街の裏に出た。そこはやや、寂れた感のする裏手通りになっていて、長年この街に住んでいるが、初めて来る場所であった。

バーや何やらいかがわしげな店が、所狭しと並んでいる。

「この街にも、こんな場所があったんだな……」

独り言で呟いた台詞だったが、北条は俺の機嫌を伺うようにいった。

「……お、俺が奴と初めて会ったのもここだったんだ」

なるほど。この手の奴が好きそうな場所だな、と思った。歌舞伎町や、昔行った福岡の中洲という街の極小規模といったところだ。

なぜかは分からないが俺は、不思議とこの手の雰囲気の街が結構好きだ。

たとえやましいことが行われていようと、そんなの知ったことではないと言う、そんな素っ気なさのある場所は、とても好感がもてる。

逆に言えば、人を選ぶ……というより、どんな人種も来ればしっかりと受け入れてくれそうな、そんな雰囲気が好きなのかもしれない。

早歩きでチラリと後ろを見ると、綾子ちゃんは物珍しげに、それと同時に少し怯えたような目で周りを見ていた。そんな俺達を尻目に、北条は続けた。

「ここではたまに非合法のものの売買がされていることがあるんだ……」

「それであのカメラを手に入れたってわけか」

北条は頷く。
確かにやりやすいかもしれない。あの商店街の裏に、こんな場所があったこと自体初めて知ったし、ある意味では、それがいい具合にカムフラージュしているわけだ。
さりげなく書かれている番地を見ると、あの商店街の隣町ということになるらしい。つまり、カムフラージュしたといより、カムフラージュされていると言った方が正しいのかも知れない。
その時、けたたましく俺の携帯が鳴った。見なくてもわかる。斑鳩からだろう。なにかあったのかもしれない。
「もしもし」
『よぉ九鬼ぃ。目撃情報ゲットだぜぇ』
「本当か!?」
『おお、ほんとも本当。アーケードを南に抜けてったらしい。それもつい三、四分くらい前』
「三、四分前か……だったらまだ繁華街までには行ってないか……」
『俺の記憶が正しければ、公園があったはずだよ。それも結構大きな公園が』
「そこにいると思うか……?」
『んーなんとも。ただ行ってみる価値はあるかもね』
「そうか……すまないな、斑鳩」
『いいよ~こういういかにも青春!ってのも結構好きだし』
青春か……いかにも斑鳩らしい考え方だ。俺は思わず苦笑した。斑鳩がくれた情報に感謝しながら、もうこの男のことを許してしまっていたからだ。
さっきまであんなに斑鳩のことを気に入らなく思っていたのに、俺という人間は全くもって、ひょうきんなものだ。
「九鬼さん?」
「ああ……もしかしたら、沙弥佳が見つかるかもしれない」
俺の言葉に、綾子ちゃんは歓喜のため息をもらした。綾子ちゃんのそんな姿にも、また自分が自分じゃないような錯覚に捕われた。

最近は本当に綾子ちゃんの何気ない態度が、こんなにも俺を落ち着かせない気分にさせられる。
「つい三、四分前にアーケードを抜けて繁華街の方へ行ったらしい。途中にある公園あたりで捕まえられるかもしれない」
綾子ちゃんは大きく頷いた。
頼む沙弥佳、無事でいてくれよ。

俺達はアーケードを南に抜けて、繁華街途中にある公園に着いた。ここはかなり大きな公園で、とてもじゃないが三人や四人で探せるようなものではない。
しかし、今それを憂いているわけにもいかない。何か手掛かりになるようなものでもあれば……。
「おい北条さんよ。あんたこの公園詳しいか？」
「そ、そうでもないが……たまに来ることはある」
「そうか。だったらこの公園、噴水はあるか？」
「ふ、噴水？　あ、あるにはあるが……」
「よし。ならそこに連れて行くんだ」
わかった、と北条は短く答え、俺達三人はそこに向かって走り出した。沙弥佳は昔、だだっ広いところで迷子になったりすると、必ず人が集まりそうな広場や噴水のある場所にいた。俺はもしかしたら、そこにいるかもしれないと思い、噴水と言ったのだ。
「あそこだ」
走りながら北条が指差すと、その先には確かに噴水があった。あたりにはもう俺達以外の人影はざっと見る限りいない。そして……見覚えのある二人の姿とともに。
その光景を見た時、自分の中で時が止まったような錯覚を起こした。いや、違う。俺以外の、全ての時間が止まったように感じたのだ。
そこには斑鳩の助言の通りに、見馴れた妹の姿とあの危険な全身黒づくめ野郎の二人がいたのだ。まだギリギリのところで間に合っ

たようだったが、奴との接触は危険窮まりないのには間違いない。
あたりはもう日が落ちて、茜色だった空も西の方だけが、まだかろうじて太陽の残光が見える。しかし、日の届かなくなったこの場所には、すでに闇に侵食され始めていた。
あの野郎の姿も闇に紛れ始めており、この位置からではうっすらとしか見えないでいた。
「あ、あぁ、く、九鬼さん……」
綾子ちゃんも奴と出会ってしまった沙弥佳に、遅かったとでも思ったのか、その声色には悲壮感が滲んでいる。
確かに奴と妹が出会ってしまったのは、俺としてもショックだ。だというのに、俺の中にはもう一つの感情が巻き起こっていた。それは、奴と出会えたことへの歓喜の感情だった。
あってはいけないものなのかもしれない。だが自分とその周りの時間が、徐々に緩慢なスピードで動き出していくのと同時に、その感情は俺を包み込んでいった。
（ここで奴との決着を付ける……いや、付けなければいけない）
俺の理性は、そう言い聞かせながら、歓喜というあってはならない感情を正当化しはじめていた。
けれど、やはり身体は正直だった。数日前、奴に切り付けられた腕の傷がズキズキと痛み始めたのだ。いや、もしかしたらこの傷の痛みすら、奴との邂逅に歓喜しているのだろうか。
まぁいい。どっちみち、奴には落とし前というのをつけさせないといけない。そうしないと、俺としても気が気じゃないのだ。
俺のそんな考えが雰囲気に出ていたのだろう、綾子ちゃんは身じろぎした。
俺は少しだけ笑って、綾子ちゃんには下がっているように言い、ゆっくり沙弥佳達の方へ歩み寄っていった。綾子ちゃんは、俺のすぐ後ろに奴から見えないように下がる。
しかし当然というべきなのだろうが、後数メートルというところまで来て、奴は瞬時に沙弥佳の背後にまで移動し両手を後ろ手に組

ませ、逆手に持ったナイフをその白い首のところで止めた。
「動くなっ！　……動いたら、どうなるか分かるな？」
「くっ……」
後ほんの数メートルなのだ。たった三、四メートルかそこらしか離れていない。後一秒、奴が油断してくれたら一気に詰め寄れるのだが……。
俺のズボンのポケットには、やはり数日前に真紀からもらったナイフがある。人を切り付けようなんざ、そうそうやれるものではないだろうが、今の俺ならためらう事なく奴を切れるような気がする。
いや、しなくてはならないのだ。一瞬の躊躇いが、間違いなく勝負の分かれ目になるだろう。素人の俺ですら分かることだ。
それに、沙弥佳を傷付けることだって有り得るかもしれないのだ。もちろん、それはあってはならないが。
「……あんたともあろう奴が、わざわざ人質を取るなんてな。見損なっちまうぜ」
「……ふん。どうとでも言うがいい。邪魔する奴は、皆始末してやる」
「……お、お兄ちゃん」
俺とこの男のやりとりを聞いて、沙弥佳は顔面が蒼白としている。
「沙弥佳、安心しろ。必ずおまえを助けるから」
この場には、不釣り合いな笑顔で沙弥佳に応える。暗くなってきたため分かりにくかったが、よくよく見ると沙弥佳は、小刻みに震えていたのだ。
そして、蒼白にしているだけではなく、その顔を歪ませて恐怖の色を浮かばせている。
「……助けるだと？　冗談もほどほどにしておけよ。おまえは今日、ここで死ぬんだよ」
奴の言葉に嘘はないだろう。事実、二度も殺されかけたのだから。三度目の正直という言葉があるように、今度こそ確実に殺すつもりであろう。

だが、俺とて簡単に死ぬつもりはない。二度あることは三度あるとも言うではないか。

「……確かに不利だろうけどな、物事に絶対というのはないってのが、俺の信条でね。それに、あんたに一つ聞きたいことがある」

「……ほう。この状況でいい度胸だ」

「あんたが蒲生や今井、それにその二人に関わった連中を殺したのか？」

その問いかけに、しばしの沈黙があった。だが、奴はその重い口を開いた。

「……そうだ。だが、それがお前になんの関係がある？　もとよりお前はそれに首を突っ込まなければ、死ぬこともなかった」

「やっぱりあんたがやったのか……。確かにそうだが、俺としてもそういうわけにもいかなくなったんでね。

それであんたは、なんでそいつらを殺したんだ？　おまけに今井という奴に至っちゃ、首をバッサリといったそうじゃぁないか」

「……ふん。そんな奴、知らないね」

「なに？　どういう意味だ」

「……言葉通りの意味だ。それより、もう前みたいなことがそうそうあるはずもないだろうが、そろそろあの世に行く時間だ」

「……残念だがな、俺は妹を助けると言ったんだ。言った以上は、俺は絶対にやる男なんだよ。つまりだ。あんたを殺してでも、妹は助けるということだ」

「くっくっくっく……」

「……何がおかしい？」

「おかしいに決まってるさ。……妹、妹と、そんなに妹が大事か？」

「当たり前だろうが！」

奴の癪に障るような笑いに、俺はだんだんと怒りを感じ始めていた。だが奴はなにがおかしいのか、そんな俺のことなどお構いなしにまだ笑い続けている。

これを機に素早く手をポケットに突っ込もうとしたが、奴のナイ

フは、沙弥佳の首元から一ミリだって、全く離れようとしない。
（やはり、こいつはただものじゃぁない）
改めてそう思った。こいつの立ち居振る舞いは、北条のそれとは比べものにならない。
「くっくっく……そうか、だとしたらそれは残念だったな」
「どういう意味だっ」
「くくく。お前の妹は、お前などいなくなればいいと言っていたぞ」
「なっ……」
「う、嘘！　私そんなこと言ってない！」
「嘘は良くないな。言っていたではないか」
「さ、沙弥佳」
「……」
沙弥佳は俺からの視線に、顔を背けた。……本当なのか……？
もちろん、態度がそれが真実であると物語っている。１５年も一緒に暮らしていたからこそ、分かってしまうのだ。なんだかんだで、あいつと最も長く時間を共有していたのだから。
「くっくっくっく……ショックのあまり何も言えんか」
「……だ、だとしても……だとしても、俺はお前から沙弥佳を助けるということに変わりはない！」
「……お、お兄ちゃん」
「……麗しき兄妹愛とでもいうのかな。全く……ヘドが出る」
「なんだと……？」
「……もういい。こうなったら、おまえの前に妹から先に血祭りにあげてやろう。どうせ、殺すつもりだったのだからな」
「よ、よせっ！　お前の目的は俺なんだろう！　だったらまず俺からだろうが！」
「いいや。お前の妹を殺せば、お前のその生意気な態度も少しは変わるかもしれんからな。
それに安心していいぞ。どのみち、お前を殺すというのは決定事項だからな」

くそっ。話を長引かせて機会を窺うつもりだったのに、逆に窮地に立たされちまったのか……。

「言うことはもうないか？　では、お前も恨むならあの男の妹として生まれたことを恨むんだな」

その時だった。今まで俺の後ろにいたはずの綾子ちゃんが、奴に向かって何かを投げたのだ。

俺や沙弥佳、あの野郎すら呆気に取られた行動だった。投げたものは、沙弥佳を抱きかかえていた奴の右腕に当たった。

「ぐっ！」

すると奴は、ほんのわずかな時間だったが、痺れたように動かなくなったのだ。俺はこの機を逃さず奴に飛び掛かり、沙弥佳を押さえ付けていた腕を掴んだ。

「妹を放してもらうぜ」

渾身の力で、奴の腕を沙弥佳から引きはがしていく。綾子ちゃんの不意打ちに動けなかった奴だが、徐々にその手に力が戻り始めていた。

「沙弥佳……今のうちに逃げるんだ」

「お、お兄……」

「早くしろぉ」

「う、うん」

沙弥佳はその手で、奴の腕を振りほどき脱出する。

これでいい……そう思った時だった。俺の腹に、何かが侵入してきた。

「な……？」

わけが分からず下をむくと、奴が左手に持っていた、あの切れ味の鋭いナイフが腹に刺さっていたのだ。

再び頭が混乱した。なんの冗談なんだ？　これは。奴のナイフが俺の腹に……？

「ぁ……」

俺は小さな呻き声を出して、惨めに何度も奴の顔と自分の腹を見

返した。
奴の顔はそのフードに遮られて、うまく見ることができない。
見ればブレザーの下のシャツに、じわじわと赤い血が染み広がり始めていた。
徐々に力が抜けていく。だんだんと膝が震えだし、立つことも難しくなってきていた。
(せめて飛びつく前にナイフくらい出すべきだった)
ぼんやりとそんな考えが頭をよぎる。
そういえば、綾子ちゃんが投げたのはなんだったんだろう。徐々に薄れ行く意識の中、奴の足元に転がっているものを見つけた。
それは、いつぞやに俺が青山から貰った、警棒状のスタンガンだった。
(だ、だめだ……もう……せ、せめてこいつの顔だけでも……)
奴に倒れ込むように、精一杯の力で腕を動かす。奴のフードに手が届いた時、ついに俺はがくりと地に膝をつかせる。
「あ、綾子ちゃん……さや……か……」
逃げろとまで言えなかった。腹を襲う灼熱の熱さと痛みで、もう何もできそうになかった。
せめて一撃だけでいいから奴に……俺の意識はそこで途絶えたのだった。

第１５章（後書き）

これにてストーカー編終了です。　思った以上に長くなってしまいましたが、もちろんまだ話は続きます。

第１６章（前書き）

これより新章開始です。

第16章

女は男が話しだすの待っていた。

男は一人で座るには幅のあるソファーに、ずっしりと腰を据えている。女に背を向け、女は少し離れて男の腰掛けたソファーの背を眺めるという形だ。

男の頭は、白に混じってわずかに黒い髪が、口の周りにも髪と同じような具合の髭が蓄えられ、見苦しくない程度にしっかりと処理されている。

背丈は190センチ近くはあるだろうか、日本人としてはかなりの高い身長の持ち主で、体格もかなりしっかりとしており、服の上からでも、筋肉に覆われているであろうことが判る。

上下お揃いのシルクと思わせる白い服を着込み、その手には、いかにも高級そうなワイングラスがあった。グラスの中には当然、濃紅な液体が注がれている。

また、やはり鼻も日本人離れして、コーカソイドのようにも見えなくもない。印象としては、どこかの国の貴族のような雰囲気を持った初老の紳士といったところだ。

その男がふいに、その中の液体をグラスごとくるくると回し、部屋の中に注がれている外からの光に、透き通らすように傾けた。

一口だけワインを口に含み、よく味わうようにしてから飲み下す。

「……で、どうなったと？」

男の声は、とても威厳にみちたもので、明らかに人の上に立つべき者のものだった。

「はい。裏切り者にはしかるべき罰を」

「……そうかね。君にしては思ったよりもかかったんではないかな？」

「向こうも訓練されたプロフェッショナルです。そう簡単には……」

「……ふっ、そうだったな……ただのゴロツやキチンピラをやるの

とはわけが違うものな。すまなかったね」
「いえ……私の方こそですぎたことを言いました」
「まぁ、いい。なんにせよ、拾ってやった恩を忘れ、裏切るなど許されることではない。相応の報いを受けたのならそれでいい」
女は男に、わずかに頭を垂れた。
「……それで？」
「それで、とは？」
「報告を聞いた限り、君は現場の民間人を使ったそうだな。その人物のことだよ」
「はっ。訓練された人間相手になかなかのものではないかと。……少なくとも二度の対決があったと思われますが、共にナイフによる肉体的損傷があったとも思われます。
にも関わらず、立ち向かっていったのは、驚嘆に値するかと」
女が言い終え、しばしの沈黙の後に男がまたワインを一口含む。
それを飲み下し、やっと口を開いた。
「……君にそこまで言わせるとは、その人物も中々ではないか。……格闘技でもやっているのかな、その人物は」
「いえ、経歴を見る限り今まで一度たりとも、そのようなことをしたという記録はありませんでした」
「……才能、か」
「おそらく」
「……訓練された者を、全くの訓練経験のない者が二度も退けるというのは、容易……いや、ただごとではすまされない。
それほどに、その人物の生存本能は逸脱しているということなのだろう。ましてや、肉体的損傷をもたらした相手に、だ」
男はワインを一口含み、またもしっかりと味わうようにしてから飲み下した。
「……それで、どうするつもりかね、その人物は」
「……」
「……ふふ。愚問だったかな」

男は、軽く肩をすくめた。
「処遇は君の好きなようにしたまえ。優秀な人材というのは、多すぎて悪いというものではない」
女は一度、今度はしっかりと腰から頭を下げた。
「ところで……君も一杯どうだね？」
そういって男は首を後ろに控えた女の方へ向け、ワイングラスを軽く振ってみせた。
「……いえ、まだ成人していませんので」
「……ふっ。君は変なところで堅いな」
「申し訳ありません……」
「何、気にすることではない。この国の法律では二十歳になるまでは酒はいかんとなっているからな。一応、だがね……。君が後数年して成人した暁には、ぜひこのロマネコンティを開けさせてもらおう。君と同じ年に生まれた物だ」
「ありがとうございます、ミスター・ベーア。その折りには是非」
「……ああ、私もその時を楽しみにしているよ――真紀」
「……では」
そういって女――藤原真紀は、部屋を出ていった。

なんだ……誰かが俺を呼んでいる。

『……ちゃん』

ああ……。

とても懐かしい声が聞こえる。

『…に…ゃん！　お兄ちゃん！』

だんだんとはっきり分かるほど、その声は大きくなり、俺の前に迫ってくるようにも聞こえた。

『お兄ちゃん！　しっかりしてよっお兄ちゃんっ！』

そんなに怒鳴らなくったって聞こえてるぜ、沙弥佳。

なんだってそんなに必死なんだ……。

『あぁ……いや……だ、駄目！　目を覚ましてよぉっ！』

どうしたってんだ。

俺はちゃんと起きてるぞ。

『いやぁっお兄ちゃん！』

その沙弥佳の声を最後に、俺の意識は暗い闇の中へと落ちていった。

傷のズキズキとした痛みで俺の意識は覚醒した。

（ここは……）

一拍おいて軽いため息をついた。考えるまでもない……俺の住んでいる部屋だ。

いや、住んでいるというにはおこがましい。ただ、いるだけ……

それが正しい。

この部屋には、一人で寝るには大きすぎるダブルのベッドに、少し離れたところに設置された四人がけのソファー。それに、それぞれに対になっているかのように置かれたテーブル……それと本棚と酒類が入ったサイドボードのみだ。

それでいて広さは、9坪か10坪はあるだろう。とても広いと思う。だと言うのに、そんな部屋の広さにそぐわない家具の無さだと言える。

だが、俺にはこれでいい。他にも一応キッチンや風呂なんかもついているが、風呂以外はあまり使っていない。

おおよそ、一人でいつくには寒々しいほどの使用環境だろう。宝の持ち腐れ……とも言えなくもないかもしれないが。

安物のデジタル時計を見ると、すでに朝といわず昼といってもいい時間になろうとしていた。

(思ったよりも寝ていたみたいだな)

上体を起こし背伸びをすると、ズキンと腹に痛みが走った。

「っ……」

そういえば目を覚ましたのだって、この傷の痛みのおかげだったのを思い出した。

「ちっ……こいつに起こされるなんざ、最悪の目覚めだぜ」

顔を洗おうとベッドを這い出して、洗面所へ行く。蛇口をひねり、水を両手に溜めると冷たさのあまり、こうするだけで眠気なぞ吹っ飛びそうなものだが、ためらいなく顔を洗う。

同じ動作を何度かこなし、今度は反対側に蛇口をひねって水を止めた。

「……」

鏡の前に俺の顔がうつる。昔はそうでもなかったように思うが、切れ長な目になっているような気がする。

顎は細めで、眉は少しつり上がっている。そして左頬の下、左顎の横といってもいいのだろうが、縦に傷が入っていた。額の右側にも顎ほどくっきりとはしていないが、うっすらと傷跡が浮かんでい

る。

数秒ほど鏡の中の俺を眺めていたが、横にかかっているタオルで濡れた顔を拭いて、部屋へと戻った。

まだ腹の傷が自己主張している。そのことに忌ま忌ましい気分になりながら、サイドボードの中からスコッチの瓶を取り出し、ショットグラスに注ぐ。

ドボドボとグラスに注がれていく様は、風情もなにもあったものではないが、気にする事なく並々と、いっぱいになるまで入れた。

瓶をサイドボードに戻し何気なく窓際まで行くと、外は雨だった。

「雨か……どうりで腹の傷が疼くわけだ」

グラスの中の琥珀色をした液体をぐっと流し込む。この熱い感覚がなんとも心地良い。

「……ふう」

窓からは、どんよりとした雨雲に隠されて、いつもなら遠くに見える高層ビル群は見えなかった。

下の道に目をやれば、傘をさした人々がどこに向かっているのか、足早に行き交っている。中には走りながら、傘をさしていない者もいる。あまり雨足は強くないのだ。

ここから見る限りでも、決して雨はつよそうにはみえない。

「……だから、あんな夢見ちまったのかな」

右手で腹にある傷をさすり、左手のグラスを手の中で遊ばせながら、さっきまで見ていた夢を思い出す。

それは、俺がまだ人並みの幸せというのを甘受していた頃の夢だった。夢の舞台は、俺がまだ高校生というガキだった。家族がいて、気のおけない友人がいる。そいつらとたまには馬鹿をやるのだ。ま、それはごく稀にだったが。

……そして、沙弥佳だ。沙弥佳と過ごしたあの頃までは、本当に幸せだったのだと、お世辞ぬきにそう思えるのだ。

そんな中起こった、綾子ちゃんのストーカー事件……夢はその頃のでき事を、やたらリアルに再現していたように思う。

「だからこいつが疼いたのかな……おまけに雨の日ときたもんだしな」

一人つぶやきながら、ぐいっとスコッチを流し込む。

「とんだ安物だな、こいつは……」

よくよく見れば遠くには、すでに桜の木に淡いピンクの色が見え始めている。

（もうそんな時期か……）

世間的に見れば冬の寒い季節は終わり、新しい季節の訪れを喜ぶべきなのだろう。昔は好きだったが、今はこの一年において、最も嫌いな時期だ。

五……いや、これでもう六度目の春を迎えることになったが、年々この時期が嫌いになっていっている。

そう、沙弥佳を失って以来、俺は何にも増して、この桜の季節が嫌いだった。

嫌な気分になった俺は、窓からはなれ、一人でいるには無駄に広い部屋をよこぎって、ソファーに座った。目の前のテーブルの上には、この部屋のなかでデジタル時計をのぞいた、唯一の近代機器といえるノートパソコンが置いてある。

大して使うことなどないが、あの女狐にいわれて購入したものだ。あの女狐とは藤原真紀のことで、あの女のおかげで良くも悪くも、今の自分がこうしていることになる。

俺がもうどうしようもなくなっていた時、この業界に誘ったのだ。それは、いつかのデートに誘った時のように軽いものだった。

しばらくの間、ぼんやりとソファーに腰掛けたまま正面にある窓から見える、どんよりした雨雲を見つめていた。今はまだ大丈夫だが、この空の様子では、後一時間としないうちに雨足が強まりそうだ。

俺は、まだグラスに半分ほど残っている安物のスコッチを、一気に飲み込んだ。どうせなら、このまま安酒をあおったまま、ベッドに潜りこみたい気分だが、面倒なことに夕方には外出しなければな

らないため、それはできそうもない。

（つまらない）

また今夜も仕事があるのだ。それも大した仕事ではない。ゴロツキ相手の用心棒だ。おまけに、たった一日限りの。

そんなのは、本来なら俺が請け負うような仕事ではないが、どうしてもと頭を何度も下げられ、いつもの数倍の額をひっさげてみると、さらにその三倍の額を言ってきたので、のってやったのだ。

裏じゃかなりの大物で、もちろん名前だって聞いたことはあるが、俺には関係のない話だ。金をつまれたから用心棒を引き受けたにすぎないし、一応前金も半分だが、すでにいただいている。

もし途中失敗して、対象が死んだとしてもとりあえず報酬は手に入っているのだから、残りが手に入らなくなったら、なったらだ。とはいっても、いくら仕事が面倒とはいえど、手を抜くつもりはさらさらないが。

なんでも、すでに自分のところのボディガードが、何人もやられているからだという話だった。

俺から言わせてもらえば、ただ単に、そのボディガードたちが情けないだけとしか思えないのだが、どうにも違うらしい。相手はかなり腕のたつスイーパーで、まさしく命からがら、逃げ出すことができたという。

なんにしても、一度引き受けたものに、後からあれこれ言うつもりはない。いつものようにやれば、きっと大丈夫だろう。根拠など全くないが、俺はそうやってこの数年間、この危険な職業をこなしてきたのだ。

何もせず、ひたすらに部屋の中で暇を持て余していたが、気付けばもう午後三時を回っている。

そろそろ寝座（ねぐら）を出るとしよう。思えば、寝起きだというのに酒を飲んだだけで、まともに食事をとっていない。少し早く出て、どこかで食事にした方がいいだろう。

仕事の前に何も食べないというのは、どんな職であれ、あまり良いことではない。

そう思い立つと行動は早い。まだ寝巻姿のままだった状態から、わずか数十秒で着替える。革ジャンにとスラックス、インナーは適当にVネックのタンクトップという出で立ちだ。

まだ三月になったばかりで肌寒いだろうが、どうせ大部分の時間は建物の中のはずだから、これくらいの軽装でも構わないだろう。

小雨の降る中、アパートを出た。部屋から見ただけでは分からなかったが、思ったよりも雨足が強い。傘なんてものはないので大股で歩き、地下鉄へと向かう。

雨のせいもあるだろうが、案の定、三月上旬の空気は肌寒く、またそれが俺の機嫌を損ねさせる。あの女が言うには、それでも今年は比較的春の訪れは早いのだと言っていたが。

その時、後ろから車のクラクションを鳴らす音が聞こえ、俺のすぐ横に停車した。赤いスポーツカーだ。俺はあまり車の種類はに詳しくないからよくわからないが、かなり高級なものだろう。俺の横に停まったということは俺の知り合いのはずだが、知りうるかぎり、こんな派手な車に乗っているのは一人しかいない。

「こんな雨の日に、傘もなしに歩き？　なんだったら乗っていきなさいよ。送っていくわ」

「やけに都合良く出会うもんだな。昔から思っていたが、あんた、俺のストーカーなんじゃぁないだろうな？」

薄ら笑いを浮かべながら、運転席の窓を開けて顔をのぞかせた”あの女”、藤原真紀にいった。

「仕方ないじゃない。あなたの家と私の家、近いんだから」

「本気にするなよ」

笑いながら、ガードレールをまたいでドアを開け、助手席へと座る。

「ゆっくり出してくれよ」

「わかってるわ」
そういうと真紀は、いきなりアクセル全開で急発進したのだった。
「おい！　ゆっくりって言ったろう！」
「あら、私にとってはゆっくりよ？」
ちっ。相変わらず、この女は……。
「……降ろせ」
「……」
「おい、聞いてるのか」
「聞こえてるわ」
「だったら降ろせよ。やっぱり地下鉄でいく」
「無理よ。もう走り出したんだから」
この女……。このままだと、飯も食いそこねそうだ。
「……そうかい。おまえがその気なら、こっちにも考えがある」
俺は、制限時速を遥かにオーバーして走る車の助手席のドアを開けた。
「！　何してるの！？　早く閉めなさい！」
「いやだね。それよりもさっさと速度を落とした方がいいんじゃないのか？」
真紀は珍しく驚き、目を大きく見開いた。見たとこ、この車はまだ新車のようだし、あまりひどい扱いは受けていない。だから、その車をいきなり傷付けられるのは、さすがにこの女とて嫌だろう。当然、そう踏んだからやったのだが。
「……あなた、嫌な性格になったわ」
「ああ、全くさ。誰かさんのおかげでね」
真紀は仕方なく速度を落とした。それでもまだ十分速いと言えるが、これくらいなら許してやってもいいだろう。俺はドアを閉め、ため息をつく。
「……で？　大方予想はできるが、なんで、あんたがわざわざ俺のところにきたんだ？」
「今夜のあなたの仕事、キャンセルしてほしいの」

「なんだと？　おいおい、ふざけるなよ。そんなことできるわけないだろう」
「いいから」
「いいわけあるかよ、もう前金も貰ってるんだ。別に対象が守ったうえで死んだとなれば話は別だが、今はそういうわけにはいかない。第一、なんだってキャンセルしなくちゃぁならないんだ。そのわけをまず教えてくれ」
真紀は前を向いたまま、何も言わず黙ったままだった。
「……大体あなたね、簡単に安請け合いなんてしないでほしいわね」
「安請け合いだって？　どこがだ。この話以上にうまい話なんざそうそうないぜ」
「それが安請け合いだといってるのよ。今回のこと、どういうことか分かってるの？」
「分かってるさ。どこだかのボスを今夜一日しっかり護衛すること。そいつに近づく奴は、容赦なくあの世行きにしろってな」
俺の言葉をきいて真紀は、呆れたかえったように大きくため息をついて、視線を俺にむけた。
「全くわかってないじゃない。自分達のところの用心棒がもう何人もやられてるのよ？　その意味がわからないわけではないでしょう」
「それほど危険なやつが相手だっていいたいんだろ。そんなの百も承知だ。だから引き受けたんだしな。それに……」
「……それに、なに？」
「……いや、なんでもない。ところで、用件はそれだけか？　だったらそろそろ降ろしてくれないか。飯、食いそこなっちまう」
俺がもう仕事を降りないと悟ったのだろう、真紀はため息をついて、話題を変えた。
「あなたが、まともに食事してないことくらいわかってるわ。私も今日は、昼はまだなの。どう？　私の奢りでいいわ」
「やれやれ。あんたの顔見ながら食う飯なんざ、どんな美味いものもまずくなっちまいそうだな」

真紀は薄くルージュをひいた唇を妖艶にゆがめ、交渉成立ね、とつぶやいた。

真紀と遅い昼食を終え、今回の仕事場となる場所から少し離れたところで車を停めさせた。

「本当にここでいいの？　遠慮なんてしなくてもいいのよ」

「別に遠慮なんかしてないさ。それにちょいと野暮用があってね…」

…そいつは大変な女嫌いなんだ」

「……あなたにそんな趣味があったなんて知らなかったわ」

「じゃあな」

「……気をつけなさいよ」

その言葉には、この女にしては珍しく、どこか不安げな含みがあった。俺はそれに応えることなく、車を降りた。

確かに、指定の場所まで送ってもらうのも悪くはなかった。外は雨なのだ。

しかし、そんな場所に女に送ってもらうなんざ、示しがつかない。ましてや、今回は別に組織の人間というわけではないのだ。

ではなぜかと言うと、今回のために武器を調達するためだ。俺の所属している組織は、その気になればこの国の極道や警察が束になったって、足元に及ばないほどの兵力があり、武器の支給だってされているが、どうにもそれらを使う気になれないのだ。

確かに、構成員の一人ではあるだろうが、俺は組織なんぞのために、魂まで売り渡したりなどしない。その気になれば、こんな組織などいつだって抜け出すこともできるし、したっていいとも思っている。

この組織に入る際、殺し屋になるための訓練を受けた。正確には受けざるをえなかったのだが、その時に、骨の髄まで組織への忠誠心とやらまで叩き込まれたのだ。

だが、俺にはそんなものは必要ない。その時に教官が言っていたのだ。不必要なものは、たとえそれが感情であれなんであれ捨てろ、と。

だから俺は、真っ先にその忠誠心とやらを捨てた。もともと組織の繁栄だとか、ひいては国家の安定をはかるためだとか言われたが、そんなものは興味のかけらもなかったし、くだらないと思ったものだった。

そいつが俺に何をもたらすというのだ。はっきり言おう。俺にとって、組織だとか国家だとかいうものは傲慢で、唾棄すべきものだと思っている。そんなものがあるから、この世は未だ戦争なんてものをやっているのだから。

それでいながら世界平和だなんだと言っているのだから、どうしようもない。聖人ぶるつもりなんてさらさらないが、そう思っているのは間違いない。

何より、俺は必要だったからこの世界に飛び込んだのだ。だから、俺を邪魔しようとする奴は、何者であろうと容赦はしない。

たとえ、それが一国のトップであれ、王公貴族であれ、聖人君子やキリストであったとしてもだ。邪魔するのなら、そいつの頭に鉛玉をぶち込むのだ。

殺せるものなら、神殺しだって平然とやってのけるだろう。もっとも、そんな存在がいるとしたらの話だが。

そんなわけで、俺は組織から支給されたものは、なるべく使わないようにしている。もちろん、使えるものは使うが、あくまでどうしようもなく必要になったらであり、そうでもなければ、別のルートで流れている物を使うのが、俺の主義なのだ。

それに、どういうわけか組織が支給するものは、俺にはいまひとつなじまないというのもある。なじまない物を使うのは、あまりいいこととは言えるはずがない。

真紀の車から降りて俺は、雨が降りしきる中、雑居ビル群の隙間道を歩いている。その小汚い道を二度三度、左に右に折れ曲がり、

目的の場所に着いた。
そこは看板も何もないため、一見ただのビルの裏口程度にしか見えないが、ここが俺が使っている武器商人の店だ。
店のドアを強めに3回ノックする。一拍おいた後に軽く2回。これが、客だという合図になるらしい。面倒とは思うが、こんな平和な国でこんな商売をするのだから、奴にも色々と事情があるのだろう。
ひっそりと静まりかえっていたドアの向こうから、カチャンという音が響き、ドアが開かれる。
中から出て来たのは、いかにも小狡そうな顔つきをした小男だった。歳は４０くらいのようにも見えるが、５０くらいにも見える。男は本当に背が小さかった。おそらく１４０センチくらいだろう。下から無遠慮に、なめるように視線をぶつけてくる。
この男がこの店の主人で、下の名は知らないが、名を最上（もがみ）と言った。
「よう。以前頼んでおいたもの、受け取りにきたぜ」
最上は相変わらずの無愛想ぶりで、軽く周囲を確認すると、入ってくるよう促した。
何を考えているのかよく分からない男ではあるが、取り扱っている商品の豊富さや、時には情報も売るという中々の商売上手な奴だ。
最上は中に入るなり、俺をおいて、さっさと店の奥へと行ってしまった。まぁ、特別することもないし、むやみやたらに男の後を追いたいとも思わないので、かまわないのだが。
それにしても、ここはいつ来ても汚い場所だ。あまり広くもない中に、ごちゃごちゃと何に使うか分からないような物がたくさん置いてある。
そんなガラクタ同然にしか見えないものに混じって、モデルガンよろしく旧ソ連製のライフルや、イスラエル製と思わしき銃もある。
しかし見事に埃をかぶっていて、もはやただの骨董品にしか見えない。いや、商品としてしっかり埃くらいははらわれているぶん、

骨董品屋のものの方が、いくらもましだろう。
そんなことを考えているうちに、最上が奥から出てきて、やはり無愛想に頼んでおいた品が入った包みを手渡す。
「……まいど」
本当に聞き取るのに苦労しそうなほどの小声だった。
「……調整はもうしてある。予備のマガジンは三つだ」
「いつもすまないな。あんたの調整ぶりにはいつも驚かされるよ。俺以上に俺の手を知ってるみたいに、しっくりくるんだ」
そんな俺の褒め言葉にも、この男はピクリともせず、それじゃ、と無愛想に言っただけであった。
奥の部屋で何をしているのかは知らないが、さっさと帰れと示唆しているのだろう。包みに入った残りの金を取り出すと、最上はひったくるようにそれを受け取った。
「じゃぁな。また何かあった時は頼む」
男は挨拶などどこ吹く風で、振り向きもせずさっさと奥へと消えていった。
外に出てドアを閉めると、やはり来た時のようにカチャリと音がして、鍵がかかったのだと思われる。
「さて、と……」
指定の場所までは、ここから歩いて１０分ほどだ。
入り組んだビルの谷間であるためか、あまり雨は降り込んでこない。店の中にいたのはわずかに四、五分のことなので、突然に雨がやんだとは思えない。
来た道は戻らず、来た道の続きを歩くように、入り組んだビルの隙間を何度も曲がりながら、大きな道の脇へと出た。尾行などないが、一応念のためだ。俺としても、自分が使っている商人に迷惑がかかるのはいただけない。
別に、あの無愛想な男のことを心配しているわけではない。この国では、なかなかあいった武器商人というのはいないので、もしヘマをして廃業にまで追い込んでしまったら、新しい商人を見つけ

るのに苦労するからだ。
個人経営であんないかがわしい仕事をしているやつは、横のつながりは少ないから、同業を知っていても客を取られないように、教えたくないだろう。
思った通り、やはり雨が徐々にだが強くなりはじめていた。
これから起こることなど知るよしもなく俺は、目的の場所へと向かって歩いていく。
気付けば、腹の疼痛は消えていた。それがまるで、これからのことを予期しているかのようでもあった。

第17章

雨の降る中、指定されていた建物の中に入ると、慇懃な顔つきをした連中が数人いた。当然入ってきた俺に、鋭い視線をむけてきた。連中はみな、黒いスーツに身をつつみ、耳にはイヤモニターを付けていて、その滲み出る雰囲気を隠せないでいた。

ロビーの中心あたりに来たとき、そのうちの一人がこちらに歩みよって来る。おそらく、このフロアないしはこの建物全体のスーツ連中のリーダーだろう。身長は百八十センチある俺の背丈より五センチは大きい。

「本日は何用でございましょう？」

「ああ、あんたのとこのボスに頼まれてきた用心棒だよ」

男はこちらをつま先から頭のてっぺんまで、疑うような目で見つめたあと、背を向けた。

「どうぞ、こちらです」

男はそういって俺をボスのところに案内するため、エレベーターに乗った。男に続いてエレベーターに乗る。

他の者たちは、俺がエレベーターの扉によって姿が消えるまで凝視していたが、やはり三流は三流といったところだろう。真に一流というのは、こちらに注意は向けながらも、決して他のところから気をそらし続けたりしないものだからだ。

得体が知れないとはいえ、いつまでも睨みを利かせているようでは、たいしたものではないだろう。やはり今回の仕事は、簡単にすませることができそうな気になってくる。

この分だと、今までの死んだ用心棒たちも俺がにらんだ通り、そうやれるような連中ではなかったということだろう。もちろん、だからと言って件の殺し屋を、舐めてかかるというわけではないが。

エレベーターは２１と表示された最上階へと着いた。エレベーターを降り、赤い絨毯が敷かれた廊下を、ボスが待っているであろう

部屋まで男の案内で歩く。
「ここです」
突き当たりの部屋の前でとまった男が、首を横にして言い、ドアをノックした。
「ボス、先生がお着きになりました」
俺はつい苦笑してしまった。俺よりも１５は確実に年上だというのに、先生だなんて言われると、妙にむず痒く感じる。
「入れ」
「……どうぞ、先生」
ドアの向こうから、低い老人の声が聞こえ、男は俺が中に入れるようドアを開けた。
部屋の中は、これはまた随分と派手な印象を与えるものだった。密猟で捕獲したのだろう、禁止されているはずの虎の毛皮の絨毯や、金の装飾が施された家具やシャンデリアがちりばめられている。
こういう、けばけばしいほどの派手な印象を与えるものは、あまり好きになれない。本当に骨の髄まで成り金趣味をもったものならば、こんな無駄に豪奢なものは好まないというが、そうかもしれない。これではただの、強欲なオヤジ趣味となんら変わらない。
どんなものや事柄においてもそうだが、”本物”というやつほど、さりげなさというものを心得ているものなのだ。
「おお、来てくれたかっ！　あんたの噂は聞いてるぜ。今まで、何度も生還困難な仕事も熟したってな」
目の前に現れたのは、完全に頭が禿げ上がった老人で、太って似合わない、これはまた部屋に負けず劣らずの派手なスーツを着ている。
九十年代の初めごろにバブルがはじけて以来、最近はこの手のタイプの成り金はあまり見かけなくなったが、この老人はまさにその典型だろう。
「そいつは、少々尾ひれが付いてるけどな。
それでもう一度、きっちりと仕事の内容を確認させてもらうが今

夜一日、あんたをきっちり護衛する……間違いないな？」
「ああ、間違いねぇ。怪しい奴は片っ端なら始末してくれていい。で……あんたのことはなんと呼べばいい？」
「クキでいい」
「クキか、分かった。仕事はこれよりたった今からだ。何か分からないことがあれば、後ろの佐竹（さたけ）に聞いてくれ」
佐竹と呼ばれた男は俺を案内したやつで、この老人の側近なのだろう。老人にうながされ、佐竹は腰からきっちりと曲げて一礼する。そして、やはり下の連中のリーダーであった。
「では先生、こちらへ」
そういって佐竹は、俺を部屋から出そうとした。
「おいおい、護衛ってのはきちっと対象から離れないもんだぜ」
「……ボスはお休みになられる際には、たとえボディガードであっても、部屋の外に出すことが通例ですので」
「悪いな、クキ。そういうことなんでな、頼んだぜ」
なんとも驚いた。まさか、いきなり昼寝のために部屋を追い出されることになるなんざ。内心呆れながら、俺は黙って肩をすくめ、部屋を出た。
佐竹も一緒に出て扉をしめた後、部屋の前に立った。
「……驚かれたでしょう？」
「ああ、まぁな。だが、あれでよくもまぁこの世界のボスとしてやってこれたもんだ」
佐竹は、苦笑しながら続けた。
「お気持ちはわかります。しかし、だからこそ生き残れたとも言えるかもしれません」
「違いない」
男に笑いながら、賛同した。
確かにあの老人の行動には驚いたが、まさにこの世界で生き残ってこれただけのものは感じさせた。
「寝るとはいいましても、三十分もあれば起き出しますので」

「そうかい。ところで……佐竹、さんだったかな。あんた、俺にまでいちいち敬語を使う必要はないぜ」
「そういうわけにはいきません。先生はボディガードですが、同時に大事なお客様でもありますので」
聞けば、元々この佐竹という男は、執事になるための訓練を受け、実際に執事として働いていたのだそうだ。しかし、前の雇い主は人使いが荒かったあげく、唐突にクビを言い渡されたという。
そして、なんの因果か、あの老人に雇われてこの世界に入ったのだという。
「ボスは確かにあんな風体はしていますが、仕えるようになって早十年、とても下の者に気を遣ってらっしゃるのです」
「なるほどな。以前の主人が主人なだけに、あんたも信頼しているということか」
「……私の場合は、信頼ではなく、忠誠といったほうが正しいのでしょうが」
「どっちだっていいさ。いい主従関係が築けているのには違いないんだろう」
そういうと、佐竹は唇の端をゆがめた。
「……先生は変わった方でいらっしゃる。ボディガード……いや殺し屋の方というのは、常に冷静沈着でいる方か、あまり素行の良くない者が多くて困るのですが……なんといいましょうか、どちらかと言えばこの世界にいらっしゃるのが、不思議なほど似つかわしくないとでも言うのでしょうか」
「そうかい」
苦笑しながら、部屋の反対側の壁におかれた椅子に座る。
確かに佐竹の言う通り、素地というのはなかなか隠せるものではないだろう。俺だってあんな事件さえなければ、今頃はスーツを着るなりなんなりして、必死に上司に頭を下げていただろう。
それに、こんな世界に浸かっているからといって、無駄にアウトローぶる必要性もない。アウトローになるのは、殺そうとしてくる

連中に、鉛玉をぶち込む時だけでいい。
「だが、そういうあんただってこの業界には似つかわしくないんじゃぁないのかい？　確かに体格や顔つきこそ厳ついが、あんたは根っからの執事って感じだ」
佐竹は少しだけ驚いたようで、目を大きくさせて、すぐに元の表情に戻った。
「そうですか……私は執事、ですか」
「話や行動を見聞きする限り、そう思えるさ」
なんだろう。今、佐竹は妙な含みのある言い方をした。もしかすると、言葉ではああは言っているが、あの老人に不満を感じているのかもしれない。
「……ふふ、やはり先生は変わった方でいらっしゃいますな」
声を殺して笑う佐竹に、なんのことだかと肩をすくめてみせ、俺は本題に入った。
「ところで、例のスイーパーのことなんだが、どういう奴なのか分かるかい？　俺としては、あのボスがやろうとしている取引より、そっちの方が気になるんだ」
それまで饒舌だった男は、途端に口をつぐんだ。
「……はっきりと申しますと、私自身、今まで何人もの凄腕と言われる者たちを見て参りましたが……あのような者は見たことがない」
「今まで何人もの同業をやってきたのであれば、そうだろうな。俺が知りたいのは、そいつの手口さ。銃か？　ナイフか？　それとも素手なのか？　同業者といえど、ある程度のパターンがあるはずだ」
「……至近距離からの狙撃ないしは、ナイフによるものではなかったかと思いますが」
「至近距離、か……ありがとうよ。もう一つ確認しておきたいんだが、警備の方はどうなってる？」
「はい、鼠一匹たりとも入ることはできません。先生が入って来た、あの正面玄関以外からは入ることは不可能でしょう」
「となると、そいつが今回の取引相手になりすましているという可

能性は？」

「ございません。今回の取引相手の方も、幾度となく命を狙われておりますし、お互い今回のために何度も顔を合わせておいでです」

「ならば、取引を行うのはどこでやるんだ？」

「この部屋で行います」

「そうか……」

さて、どうしたものか……。

まず殺害方法だが、至近距離からの攻撃が多いとのことだから、おそらく今回も至近距離からくるだろう。先ほど部屋に入ったとき思ったが、部屋には窓が一切なかった。となれば狙撃の心配はない。まぁ、ミサイルでも飛ばされようものなら、どうすることもできないが。

とりあえず、今夜限りの護衛なのだから、今夜の取引を阻止するためだと見て間違いないはずだ。この部屋で取引が行われるのであれば、あの老人が部屋から出る必要はない。

そうなると、最も警戒しなければならないのは、今夜現れるであろう、その取引相手だ。

何度も顔を合わせているという話だが、そいつが最初から替え玉である可能性もないも言い切れない。佐竹の話を聞くかぎりでは、その殺し屋本人を直接見たことがあるけではないようだ。

まぁ、それも当然だろう。もし、そいつを見ているのであれば、こうしてこの男と話すことができているはずがないのだ。基本だが、一度この建物をきちんと見ておいたほうが良さそうだ。

鼠一匹入れないと言っていたが、それほどの凄腕なら、難無く突破してしまうということも有り得る。

別に下の連中をあなどっているわけではないが、どうにも嫌な予感がする。経験上、こういう時の予感というのは信じた方がいい。

杞憂であれば、それはそれで構わないが、何かあった後では全てが遅いのだ。

佐竹との会話の後、俺は建物の中を見て歩いた。
全ての階に黒服の連中は待機していて、まさにファミリー総動員といったところだ。
五階より上、二十階まではほとんど同じような構造になっていて、見てまわるのは簡単に済んだ。一階は当然ロビーがあり、その他、裏には事務室があり、ロビーからは見えないような作りになっている。
そして、ロビーは四階まで吹き抜けになっており、二階から四階までがやはり同じ構造になっていた。
あの佐竹という男の指示なのかは分からないが、どの階も絶妙な位置に人員が配備されていた。
もしあの男によるものであれば、俺達のような人間のことを、なかなか分かっているじゃないか。
執事の訓練を受けたと言っていたが、もしかしたらそれとは別に、そういった方面の訓練も受けた可能性もある。とはいえ、それで百パーセントの命の保証があるわけではないが、侵入はかなり難しいだろう。
見たところ各階には、五人から多い階には十人近い人員が配備されていた。それでいて、相手はたった一人しかいないのだ。これではさすがに件の暗殺者も、一筋縄にはいかないだろう。
けれど、いざ現場に立ってみると分かるが、ボス自らの取引とはいえ、これほどの重々しい警戒がなされることはあまりない。
内容になど大して興味もないが、ここまでの人員を動員するということは、相当な商談がされるということだろう。
そのせいなのか、どうにも嫌な予感を払拭できないでいる。何か、この重々しい雰囲気に混じって、別の思惑が見え隠れしているような気がしてならないのだ。
俺は、老人が座っている豪奢な作りの椅子の横の壁に寄りかかり

ながら、例の暗殺者のことを考えていた。
反対の壁に置かれた年季のいった大きな振り子時計を見ると、時刻はすでに午後9時を回ろうとしていた。
「……分かった。今行く」
佐竹が、下にいる者からの連絡を受けたのだろう、イヤモニターに手をあてながらそう口にする。
「ボス、お客様がもう少しでお着きになるそうです。私は下に参ります」
「おう、丁重にな」
「先生、くれぐれもお願いします」
佐竹は俺にそう言い残し、一礼して部屋を出ていった。
「……クキ。おめえの目から見て、あの男、どう思う？」
「突然だな。まぁ……よくできた執事って感じですかね」
「ぐはははは。執事か！　そいつはちげえねぇ」
突然話しかけてきた老人は何が面白いのか大声で笑いながら、自らのふとももを叩く。
「はははは……まぁ、なんだ。俺がいいたいのはそういうことじゃねぇんだ。あいつが元執事ってのは聞いたか？」
「ええ。なんでもクビにされたとか」
「……クビか。確かに、そいつは間違いはないかもしれねぇ。だがな、そいつにはちょいとばかし事情ってのがある。……奴の前の主人は死んじまったんだよ。それこそ今回のことみたく、殺し屋に頭をぶち抜かれてたって話だ……。
精一杯仕えていたはずが、突然のクビってんで奴もそんときゃあ憤慨したそうだ。だが、自分が解雇を言い渡された直後、そいつが殺されたと知ったらしい。
……きっとそいつも何か悟ったんだろうさ。巻き込むまいとした、最期の優しさってやつだ」
「……」
「奴はな、その時の経験から、同じような過ちはもう二度と犯さぬ

よう、その筋の訓練を一通りこなしたのさ。
全く、あいつのその根性にゃあ、こっちも頭が下がる思いさ」
なるほど、これで分かった。各階に人員がうまく機能しやすいよう配置したのは、やはり佐竹だったのだ。
「へっ、俺も何言ってんだかな、初めて会ったはずの奴に……。すまねえな、クキ。今言ったことは忘れてくれて構わねぇ。」
「いえ……」
老人がやや躊躇いがちに何かを言おうとしたとき、扉をノックする音が聞こえた。きっと佐竹が、今回の取引相手を連れて来たのだろう。俺も少し聞きたいことがあったが、今は無理そうだ。
「ボス、お客様をお連れしました」
「おう、はいれ」
扉が開かれて、俺が入ってきた時のように、まず佐竹が現れ、その後ろに今回の取引相手らしい男が入ってきた。それとやはり、襲撃を想定してか護衛が三人。
「こいつは遠いところからわざわざすまねぇな！」
老人に迎えられ、相手も同じように挨拶と握手を交わしながら、老人にソファーのところまで導かれていく。相手はこの老人よりは若く、まだ５０代といったところだろう。
だが、二人並んでいるところを見ていると、どちらもあまり歳の差というのを感じない。この老人が若いのか、はたまた相手の中年が老いて見えるのか、俺にはいまひとつ判断に困るところではあったが。
「先生」
佐竹が俺を呼ぶ。丁寧に手を使い、外へとジェスチャーしているのだろう。俺は佐竹の方へ歩み寄り、小声で話しかけた。
「いいのか？　これじゃぁ護衛の意味があまりないぜ」
「ここは今のところは大丈夫でしょう。問題はビルに侵入してくる者ですから」
「そいつは確かにそうだが……」

「クキ、外してくれて構わねぇ。お前はこいつらを疑ってるかもしれねぇが、大丈夫だ」
雇い主にそこまで言われちゃ仕方ない。
「……分かった」
俺は小さくため息をつきながら、部屋を出た。佐竹は、あくまで執事を努めるためか、部屋から出ようとしなかった。扉を閉め、先ほど腰掛けた椅子に座る。
「やれやれ、この調子じゃぁ今夜はなにもないかもな」
手持ち無沙汰になってしまったためか、酒を飲みたくなったが、ないものは仕方ない。
部屋の中では、世間には公表できないような内容の話が進められているのだろう。
そういったことまで考慮した作りになっているのか、廊下には全く音が洩れてこない。
「やれやれ、話相手もいないんじゃぁ寝ちまいそうだな」
呟く自分の声が、えらく響いて聞こえるような気がした。廊下は不気味なくらいに静まっており、ふと、この建物には俺以外の人間は、誰もいないのではないかと錯覚してしまうほどだ。
（いや……やけに静かすぎる）
確かあのボスが寝るといって部屋を出た時には、少なくとも廊下の先にあるエレベーターの前には三、四人の黒服がいたはずだ。だというのに、今、廊下には俺一人しかいないのだ。
おかしい。何か、とても嫌な感じだ。
それに……なぜか俺には今ほど部屋を出る際の佐竹の行動に、何か引っ掛かったのだ。
一度沸き起こった疑念というのは、容易には振り払えない。俺の中に沸き起こったある一つの疑念。
それは、暗殺者が外からではなく、内部の人間によるものではないか、ということだ。馬鹿げていることかもしれないが、なぜかそんな気がしてならない。

もしそうなら、暗殺者は――。

そう思い立つと、いてもたってもいられなくなる。念には念をいれて、一度確認をしておいた方がいいだろう。自分の疑念を晴らすためだけでも、十分な証明にはなるはずだ。

俺は椅子から立ち上がり、ノックせずに扉を開けた。そんな俺の視界に、あってはならないはずの光景が飛び込んできたのだ。

「これは……」

そう、部屋の中はたった数分前とはまるで別世界だった。

老人との取引にきたという他の組織の統領と思わしき中年をはじめ、その護衛三人もろとも、ただの肉塊へと変わっていたのだ。

護衛三人のうち二人は、心臓を一突きにされていた。恐らくナイフによるものだろう、血が大量に噴き出していた。

一人は、口と喉から血を吐き出すように、扉の反対側の壁に、もたれ掛かっているかのように倒れていた。喉笛を、頸骨とともに潰されたのだ。

護衛三人が死んでいるのだから、当然そのボスも死んでいた。首が変な方向に曲がっているのが見てとれる。

そして、俺が守らなければならないはずであった老人にも、喉にナイフが突き立てられていた。護衛二人をやったのに使われたナイフかもしれない。

その四人をやったのは、当然、一人の男だ。俺が部屋を出てから、この死体に変わった奴ら以外には、奴しかいなかった。

「……こいつは驚いたぜ。まさか、あんたが暗殺者とはな。

いや、やはりと言うべきかな。なんとなくだが、そんな感じはしたんだ。だから、こうして入って来たんだがな」

俺は部屋に入ると同時に、銃を構えていた。

「……ほう、これはまた意外なほど早く勘づかれたか……。おまけに私が暗殺者というのにも気付いてたとはな」

執事という仮面をとった佐竹は、まさに殺し屋というに相応しい顔つきになっていた。というよりもこっちが本当の奴なのだろうか

ら、特別驚くことではない。
「ああ。今考えりゃぁ、あんたの発言には思わせぶりなものもあったしな。さっきまでこの階に配置されてた連中もいなかったのも、どうにも胡散臭く感じさせたんでね」
「ふふふ、どうやら先生は、やはり今までの連中とは違う人だ。こうなった以上は、生きていてもらっていては困る」
「けっ、ぬかせ。どうせ、はじめから俺は殺すつもりだったんだろうが」
佐竹は唇を歪め、こっちに向かって駆け出す。
「うっ」
いち早くそれに気付き、反射的に体が反応していた。横に飛びのきながら、二発連射する。
「く……」
二発とも奴を掠めただけで、直撃はしなかった。こっちにも、その手応えがなかったのは分かっていた。
「ちっ……大人しくしていれば、苦しませずに殺してやれたものを」
「……そうかい。たが、そいつは余計なお世話って奴だぜ。こちらとしても、あんたをこのままにしておくわけにはいかない」
「ぬかせっ小僧！」
そういって疾走してくる佐竹は、凄まじい勢いで迫ってくる。
やっと体勢を整えたばかりの俺は、銃を撃つ暇もなく、再び横に飛びのくだけで精一杯だった。
（まずいぜ、このままじゃ……）
俺もそれなりに体術には自信があるつもりだが、佐竹のそれはこちらを確実に上回っている。おまけに、奴はその得意の体術を使って、一仕事終えたばかりのはずなのに、である。
そう考えている間にも、奴は突進してくる。体勢から見て、蹴りだ。
一瞬でそう判断した俺は、タイミングを合わせながら一歩後ろに身を引いた。

「!?」

奴にとって間違いなく、必殺の蹴りだったはずだろうが、蹴りは俺の服を掠っただけで、直撃はしなかった。

それにもし、蹴りが直撃していたら、ほぼ間違いなく死んでいただろう。革ジャンの襟元に、綺麗な線が入っていたからだ。奴は俺の喉のあたりを正確に狙ってきていたのだ。

「……。私の蹴りを避けるとは、なかなかやるな」

「あんたほどじゃぁないが、これでもそれなりには体術の心得ってのがあるんでね」

とはいえ避けるのが精一杯で、銃など撃つ暇もない。

呼吸が荒い。何度も床を転げ回ったせいで、余計な体力が奪われているためだ。俺に一瞬たりとも銃を構えさせる暇を与えず、絶えず攻撃をしかけてくるため、銃を撃つことなど、できるはずもない。

とにかく、数秒でもいいから時間がほしい。この時、もっと体術の訓練をしておくべきだったと、遅まきながら後悔した。

「……そんなことより、一つ気になることがあるんだがな……」

こちらのことなどお構いなしに突っ込もうとしている奴を制止させるため、疑問に思ったことを口にした。

「聞きたいことだと?」

かかった。こいつはかなり用意周到な奴だとふんで、駄目で元々で言ってみたが、うまいことといったようだ。れで、こちらの体勢も整えることができるはずだ。

「ああ……あんた、さっきボスを信頼しているだかなんとか言っていたな。あれは嘘だったのか?」

「……」

「俺なりに推理してみて、状況証拠だけで判断するに、あんたが怪しいと睨んでは見たが……結果としては正しかったがな。

どうしてもその辺だけは理解できなくてね。要するに動機ってやつだ。なぜなんだ?」

「……くくく。本当に先生、あなたはそんじょそこらの殺し屋とは違ったようだ。私と闘いながらそんなことを考えていたとは」
「そりゃどうも。で、どうなんだ」
「いいでしょう。罠と分かっている上で、あえて、あえてあなたの口車に乗って、お話しいたしましょう」
佐竹はわざとらしく執事としての丁寧な喋り方で、その過去を語り始めた。
「先ほど言ったように、私はね、他の主人に仕えていたのですよ……。その方は少々、いやかなりのわがままでね。いつもいつも、無理難題を押し付けられたものでしたよ……。
私もまだ若く、裏ではその方の陰口をよく叩いていたものでした。まぁ、若い時期にはありがちだが、無駄にプライドというのがあったのでね。今考えてみれば、どうしようもなく未熟ですが……。
だがね、その方は本当はただの淋しがり屋だったのですよ……。生れつき体も弱かったためか、親兄妹からも見捨てられ、ただの道具としか見られてはいなかったのです。……そう、ただの道具としてしかね」
佐竹は心なしか、辛そうにしたような気がする。もしかしたら、この男にとって前の主人こそが真の主人だったのかもしれない。
「それこそ……誕生日には、プレゼントも何もいらないから両親と会いたい、と言うほどに想っていたにもかかわらず、ね。しかし、彼女は……」
そこで佐竹は語るのを止めた。
彼女……つまり、前の主人は女の子だったわけだ。
「……ふ、もういいでしょう先生。私はここを片付けなければならない。そのためにも、早くあなたを始末しないといけない」
「読めたぜ。この連中を殺した罪を、俺に被せるためだろう。ついでにあんたがこの組織を乗っ取るってわけだ」
「……乗っ取る？　組織を？　私が？　……ははは、先生も面白いことを言う。私はこんな組織など、なんの興味もない」

「ならなんでこの連中を殺したんだ！　それこそあんたにゃ……」
言いかけて、俺は言葉に詰まった。もしかして、この男は……。
「あんた、もしかして……」
「……言ったはずです。もういいでしょう先生。これ以上はあなたには関係ない。あなたはこの世界に生きている人間としては、珍しい人間だ。いうなら所謂、”いい人”という人なんでしょう。
こんな形で巡り会わなければ、良い関係が築けたかもしれない。
実際、私としてもあなたをこの手で殺めなければならないというのは、大変心苦しいのですよ」
「だったら今からでも遅くない。俺を殺すのはやめておくんだ。俺をやったら、それこそ、あんたは一生追われることになるんだ。
それに巻き込んでおいて、関係ないってのはどうかと思うがな」
「くくっ、それこそ、どうでも良いことですよ、私にはね。さぁ、そろそろ死んでいただきますよ、先生」
「……そいつはどうかな。この距離なら、俺はあんたという的を外さない。さっきは咄嗟だったから外れちまったけどな、
あんたが色々と話してくれたおかげで、冷静に引き金を引けるというものさ。つまり、五分と五分だ」
「ふん。いくら私の蹴りを避けたとは言え、あまりなことは言わない方がいい」
「そうかい。だったら試すしかないな」
その俺の台詞を最後に、俺達を気の遠くなるような静寂が包み込んだ。
お互いプロだ。これが最後になるということは、はっきりと理解している。
どちらも動かない。動いた瞬間、それが行動を起こす合図だ。
さぁ来いよ、佐竹。あんたが迫りくる瞬間に、俺は必ず引き金を引いてみせる。それも三連弾だ。俺もただではすまないかもしれないが、三発のうち一発は、必ずあんたの急所に当ててやろう。
確実にどちらかが死んでしまうという状況なはずなのに、俺は自

分でも恐ろしく思えるほど、冷静になっているのが分かる。
（集中している）
緊張しなさすぎず、緊張しすぎずと言える、最高の状態だ。恐らく向こうもそうだろう。こう言う時は、後は自分の技術を信じるだけだ。
わずかな躊躇いが、確実に死へと直結しているのだ。
更に集中力が高まっている。
わずかな空気の流れや、本来なら聞こえるはずのないような、小さな音まで聞こえだしたのだ。
どうやら、それは向こうも同じだったようで、佐竹はぐっと一度腰を低くした。ほんの一秒の何分の一かの時間のはずだが、やたら長くも感じた。
（来る）
先に動いたのは佐竹だった。集中しているため、先ほどは黒い大きな弾丸のようにしか見えないほどの速さだったはずなのに、今度ははっきりと疾走している姿が確認できる。
だが、俺はまだ引き金を引くことはなかった。
もっと引き寄せてから、最高の一発をぶち込んでやるためだ。
さっきと同じように一歩後ろに引きつつ、奴の急所に、最高の感覚でピタリと照準を合わせる。
（今だ！）
俺は立て続けに、トリガーを三回引いた。あまりに速いため、銃声は一発にしか聞こえなかっただろう。
だというのに、佐竹はまだ突進をやめていなかった。
「なっ！？」
まずい。このままでは、奴の蹴りの餌食になってしまう。俺はたった大きく一歩分しか下がっていなかったのだ。元々弾丸の着弾による衝撃で、倒れるはずだと見込んでいたのだ。見込違いもいいところだ。
向こうの勢いを考えれば、今から再度攻撃するのでは遅すぎる。

駄目だ……。

俺はもう駄目だと終わりを悟って、強く目をつぶった――。

第18章

目をつぶって、奴の蹴りが当たる瞬間を待った。だが、蹴りはいつまでたっても当たることはない。

目を開けると、佐竹は前のめりに倒れようとしているところだった。やはり、俺の反撃はちゃんと急所へ当たっていたのだ。

気合いで蹴りを放とうとしたが、結果として、こっちの攻撃が奴の必殺の蹴りを放たせるには至らせなかったのだ。

「ぅ……」

奴の腹からはとめどなく血が流れ、白のシャツを赤に染めていっている。蹴りを放つのだから、その攻撃の原点となる腹を狙ったのだが、うまいこといったようだ。

気付けば、脇が冷や汗のため濡れていた。ここまで死の危険を感じたのは久しぶりだ。佐竹は、まさに強敵というに相応しいだろう。

こちらの集中力が最高の状態でなければ、俺の銃の技術がなければ……それらがほんの少しでも足りていなければ……恐らく倒れていたのは俺の方であっただろう。それほどの使い手なのだ、この佐竹という男は。

だが、その油断が俺に隙を生んだ。

佐竹はまだ完全に倒れきっておらず、蹴りを放ってきたのだ。驚くべき集中力と精神力の持ち主というべきだろう。

しかし、その蹴りは先ほどまでの殺人脚とまではいかず、簡単に避けることができた。

「よせ佐竹。あんたはもう助からない。後一時間といわずに死ぬんだ。最後まで苦しむような闘いはよすんだ」

そう、佐竹の目にはまだ、闘争心というものが全く失われていなかったのだ。

「ぐ……そ、そうかも、ぐふ……しれませんな……だ、だが、死ぬ

にしてもこんな場所で死ぬわけには……」

腹からはとめどなく血が流れているため、床の絨毯に滴っていっている。赤の絨毯は、その血を吸収して赤黒く変色していた。

奴が倒れかけていた時にポケットから取り出していたのか、腹を押さえている反対の手には、黒いマッチ箱ほどのものを持っていた。

「……そう、私の……死に場所はこんな……ところでは、ない……」

途切れがちに喋る佐竹は、その小箱のようなものの中心あたりを押した。

一瞬早くそれに気付いた俺は、中年の死体が座っているソファーの陰に飛び込むように隠れた。

その瞬間、轟音が部屋中に響く。部屋の壁が吹っ飛んだのだ。

その爆風によって飛ばされたコンクリートの破片が、部屋のあちこちに飛んで当たる音がする。

それらに混じって、シャンデリアやガラスが割れた音も大きく響いた。視界を大量の埃が舞い、周囲を曇らせている。

しかしそれ以上に、耳に爆発による残響があるせいで周りの音が聞こえない。これほどの至近距離で爆発音を聞いては、当然と言えるが。

「くそっ……それより奴は」

ようやく視界がひらけるようになると、思っている以上に部屋は破壊されていた。これで下にいる連中もさすがに気付くだろう。

辺りを見回すと、爆発した壁は人が立ったまますっぽり収まるほどの、大きな穴ができていた。向かいには、摩天楼の棟がいくつも見え、夜の街を彩っている。

壁に寄り掛かっているように倒れていた死体は、爆発によってできた大穴より下に落ちていったのか、見当たらない。他の死体も、コンクリートの破片によって、ずたずたになっている。

そんな惨状であるにも関わらず、佐竹はまだ生きていたのだ。何がなんでも生きようとする、執念はもはら驚嘆の域を越え、感動すら覚える。

銃弾にも倒れず、爆風にも吹っ飛ばされず、それは神懸かっているかのようだ。のろのろと這いつくばって、穴の方へと移動していたのだ。

その姿は、何がこの男をそういたらしめているのか逆に興味が沸いたほどだ。

「佐竹」

「く……わ、私はまだ……ここで死ぬわけには……」

壁までついた佐竹は、ひどく緩慢な動きで立ち上がろうとしている。その顔には、もはや生気というのを感じさせない。死相というものだ。

数分前とは別人のように見え、幾度も見てきたから分かる。もう数分もあれば命尽きるだろう。放っておいても結果は変わらなかっただろうが、たった今起こった爆発は、更にこの男の死期を早めたのだ。

「……分からないぜ。一体何があんたをそこまで掻き立てるんだ……」

「ふふ……ぐっ。……た、単純な、ことですよ……私は、あ、あの子のもとに行きたいだけ……」

あの子。きっと前に仕えていたという女の子のことだろう。佐竹は必死の形相で、壁の穴までよろめきながら行き、何か言いかけた時だった。

俺は、瞬時にそれに気付き、扉のほうに再び床を転げ回る形で飛び込んだ。

その直後、佐竹は膝から倒れた。そう、一瞬向かいのビルに人影らしきものが見えたからだ。

一瞬だけだったが、ライフルを構えていたように見えたために、またも転げ回ることになった。

その一瞬の判断に助けられ、素早く扉の陰に隠れることができた。

廊下の先からは、エレベーターから走りながらこちらに向かってくる、黒服の連中がようやく爆音を聞いて駆け付けてきたのだ。

「ど、どうしたんだ！？」
「やめろ――」
来るなと言う前に、先頭の男はこめかみあたりを撃ち抜かれ、走って来た勢いそのままに俺の前に倒れた。
後続の男達は、何が起こったのか理解できていないようで、唖然としたまま、扉の前に突っ立ったままだ。
「おい、扉の前に立つな！」
俺の言葉に反応できたのは、一番後ろにいた奴だけで、二人目の男は隠れようとする前に再び発射された銃弾によって、ぶち倒された。
「くそっ、何者なんだ！」
わけが分からない。佐竹はスパイだったにしても、この組織と取引に応じた組織、そして俺。それとは全く違う、第三の組織に雇われたスナイパーだろうか。
銃をつかって反撃しようにも、こったはただの拳銃、あっちは狙撃銃だ。向かいのビルの屋上にいることは分かってはいるが、その前に撃ち抜かれて終わりだろう。
「おい、下にいる連中に言って、向かいのビルの屋上に向かうように言え！」
「な、なんだって？」
俺は、なんとか隠れることができた黒服の男の足元に一発うち、早くしろと叫ぶ。
男は銃を撃ち込まれたショックで、恐怖の表情を顔に貼付けながら、イヤモニターを使って指示を出した。
どこの誰かは知らないが、これで大丈夫だろう。それに恐らくスナイパーは俺ではなく、佐竹を狙ったのだろう。もし俺を狙っていたのであれば、最初から俺を狙っているはずだし、わざわざこんなビルにいる時に狙う必要はないはずだ。
しかし、それでもまだ理解できない。佐竹を狙ったにしても、何故無駄に二発も撃ったかだ。仕事が片付いたのなら、その一発だけで十分なはずだ。

佐竹のように、ターゲットが二人いるところを狙って、俺も道連れにしようとしたのだろうか。もちろん、考えられなくはない。だが、だとしても解せないことだ。狙撃をしたのなら、さっさと逃げ出さなければすぐに捕まってしまう危険もあるはずだろうに。

まぁいい。分からないものを、無理に今考える必要はない。俺はやっとのことで一息つけた気分になり、大きく深呼吸したのだった。

雨は夜になり更に激しさを増していた。風も吹き出すようになったために、もはや嵐といっても差し支えないほどだ。

俺はそんな中、傘もささずに歩いていた。革ジャンの隙間から水が滴り、不快な気持ちになり背中を丸めながらだ。

（今日は災難だった）

無心に歩いていたが、そんなことが頭に浮かんだ。用心棒の仕事を引き受けながら、失敗したのだ。しかも、その暗殺者の正体は長年、主人に仕えていた側近兼執事の男だったのだ。

おまけに俺はそいつの罪を被らされ、始末されるところだった。だが、これは思うに復讐だったのだろう。

まだ調べてみないとなんとも言えないが、佐竹という男は、自分が仕えていた男ともう一人を同時に始末するためだったのだ。事実、中々二人同時にやるというのは難しい。どっちかをやったら次、なんてのはそうそうやれるものではない。

立て続けに自分の主人が殺されたような人間を、もう一人の奴だってそうそう雇うはずはないだろう。俺は、ジャンパーのポケットに手を突っ込みながら、その中のものを手でいじくっていた。

これは、佐竹が大切にしていたと思われるロケットで、中にはまだ若い頃の佐竹と高校生くらいの少女の二人の写真があった。

これは、あの狙撃のあとに騒乱が一先ず落ち着いた時に、そっと佐竹の死体を調べたらでてきた物だ。写真の少女は、栗色のセミロ

ングの髪と、やはり同じ色をの瞳を持っていて、どことなく病的なものが伺えた。体が弱かったと言っていたから、そのせいだろう。

それと同時に、少女はどこかはかなげで、それでいて満ち足りた微笑をたたえていた。佐竹も、冷酷な殺人鬼になる前だったのだろう、その顔にはとても同一人物とは思えない、穏やかな表情をしていた。

写真のこの男と少女は、ただの信頼しあった従者と主人ではなく、互いに好き合っているようにも見えた。

佐竹は、最後に“彼女”といった。それまでは、あの方と呼んでいたのに、その随分な変わりようにどこか違和感を感じたのだ。

だが、相思相愛……いや、もしかしたら佐竹だけが少女のことを好いていた可能性もあるかもしれないが、だからこそ、あの老人のことをあんなにいとも簡単に始末したというのにも、頷けるというものだ。

だが、そうするとあの老人も、もしかしてそんな佐竹のことを分かっていて雇ったということも考えられなくはない。老人は、佐竹のことを心から信頼するようにしていたのだろうが、結局は佐竹の復讐心を、解放させるまでにはいたらなかったのだ。

まぁ、いい。どれもまだ推測の域を出ないのだ。はっきりと分かるまでは、あれこれ考えすぎるのも良くない。

最終的に佐竹をやったのは、なんとも不粋なスナイパーだったが、どのみち俺が放った銃弾によって、奴は死んでいただろう。だからなのかどうかは分からないが、俺はなぜか、佐竹のことをこのまま放っておくことができないでいる。

スナイパーにやられたからか、奴の純粋な何かにあてられたのか、それともただの同情なのかは分からない。だが、一つだけはっきりしていることがある。

それは佐竹を始末したスナイパーのことだ。この野郎は、このままにしておくことはできない。

きっとあのままであれば、元々の標的でなかっと思われる俺も、

佐竹とともに地獄にたたき落とすつもりだっただろう。事実、あの老人の組織連中を二人も道連れにしたのだ。俺を放っておくはずがない。

もちろん、その二人を始末したことには、いまひとつ納得がいっているわけではないが、現時点ではそのように考えておいた方がいいだろう。この世の中の道理が通らない業界で生き残っていくには、何事も最悪の事態を想定して動いた方がいい。

まぁ、俺のいる組織も、末端の人間とは言え、巻き込まれそうになったのだ。多少なりとも事実の確認程度には動くはずだ。そうすれば、佐竹の過去やなんかも、もっと詳しく判るだろう。そして今晩、襲撃した、あのスナイパーもだ。

まぁ、このまま任せっきりということにするつもりはない。別に、組織の情報網を甘く見ているわけではないし、全く動かないわけでもないと分かってはいるのだが、性分なのか、こういうのは自分からも動くべきだと思っているからだ。

とりあえず、組織に知れ渡るのも時間の問題だが、一応は連絡を入れておくのが良い。言わなかったら、あの女がまた口うるさく、あれこれ言ってくるに決まっているのだ。そうなる前に自己申告しておこう。

どのみち、いろいろと皮肉を言ってくるのだろうが、時間が遅くなると更にそれが激しくなるので、今しておくに越したことはない。あの女は昔から口うるさく言う癖に、あれこれと、こちらの世話も焼きたがる欝陶しい女なのだ。

開口一番に、皮肉を言われるのが予想できた俺は、ため息をつきながら携帯を取り出した。

時刻を見ると、すでに真夜中の1時半を過ぎようとしているところだった。

今日はまだ平日ということもあって、夜の都会は随分と閑散としたものだった。もちろん雨のせいもあるだろう。

俺は少し離れてはいるが歓楽街の一画にかまえた、ビルの地下にあるクラブにきた。『サバカ・コシュカ』と書かれたドアを開けて、中へと入る。ちなみにロシア語で、犬と猫という意味らしいが、全く意味はないらしい。

ここは臑（すね）に傷を持つ、または持っていたような輩が頻繁に出入りしている場所で、クラブとは名ばかりの薄汚いバーだ。

だが、俺もやはりそういう人種だからなのか、こういう場所の方が落ち着けるので、好きなのだ。もちろん、この世界に入る前からこういう場所は、なぜかいつも心惹かれるものがあったのだが。

店内は、中世ヨーロッパの酒場を意識していて、音楽も所謂流行りものというのは、一切流さないというのにも好感がもてた。

泥臭いブルーズや、即興オンリーのバップ、どこの国の民謡ともしれない騒がしいもの……それらを、やはり人種や国籍関係なしに、楽器に覚えがある連中が生演奏するのだ。

たった一人でやる奴もいれば、その時その時で初めて知り合ったような連中同士で、即興バンドを結成してやる奴もいる。そのため、ひどい演奏をするのも珍しくないが、そんな後先分からないような即興性が、俺を含めたここにいる連中を、興奮の坩堝に誘っていくのだ。

もう真夜中だと言うのに、ごった返して、帰る気配すら見せない連中の間をすりぬけながらカウンターへと行き、俺は無愛想にグラスをみがいている店主に話しかけた。

「いよぉ、久しぶりだな」

「なんだお前、久しぶりに顔見せたな。てっきり死んだものかと思ってたぞ」

いきなりご挨拶なことを言ってきたは、流暢な日本語を喋るロシア人で、この店の主人だ。

祖国に愛想を尽かし、かつては外人部隊で数多の中東紛争、湾岸

戦争やアフリカにまで行っていたという奴だ。血で血を洗う世界に嫌気がさし、日本がバブルに沸いている頃にきて以来、ここに店を出したのだという。

二十歳の頃にはすでに戦場に行っていたという話だから、年齢は少なくとも５０代も半ばを過ぎているだろう。

「で、今日はなににするんだ？」

「そうだな……じゃぁ、久しぶりに来たからな、アードベックにしようか」

「アードベックか、分かった」

そういって店主は、棚の上の方に置いてある瓶をとり、計りなどせずやや大きめのショットグラスにドボドボと注いだ。

ここでアードベックと言えば、十七年と決まっているのか、他にも種類があるにもかかわらず、それを出すのだ。俺としては、その奥にある三十年のアードベックの方が気になっているのだが、ここから見たところまだヴァージンのようで、何か思い入れでもあるのか、開けるつもりはないらしい。

目の前に豪快に置かれたグラスの中には、一杯としてはかなり多い量があった。普通は大体三十ミリリットルがワンショットの目安と言われているが、これは明らかにその一・五倍以上は注がれてある。そんなサービス精神旺盛でいて、日本のバーやクラブでよく見る価格よりも、遥かに安いのもまた好感を持てるのだ。

いわく、サービスはないがな、とのことだった。俺としても別に過剰なサービスなどいらないので、これで十分なのだ。

「しかし、お前は相変わらずスコッチが好きだな。たまには他の酒類のウイスキーも飲んでみる気はないのか？」

「あんたの奢りでなら飲んでやってもいいぜ？」

「アホぬかせ。うちはギリギリでやってるんだ。呑んだくれ共に奢るだなんて、そんな金をドブに捨てるような真似できるかよ」

「くっくっく、違いないな。でも、だからこそ良心的な常連がこうやっていい酒頼んでるんだから、いいじゃぁないか」

だったら、最初からきちんと計れとは言わない。これがこの親父のスタイルだからだ。

「良心的だって？　だったらもっと頻繁に足を運ぶんだな」

「気が向いたら来るさ」

肩で笑いながら、相槌をうった。この日本では、おおよそサービス業には向いていないこの店主を、俺は気に入っていた。たまに気のむいた時に話す、兵士時代の話はいつ聞いても面白かったからだ。

だが、俺は自分からは聞かせてくれとは言わない。向こうから話し掛けてくるから、面白いのだ。普通であれば、自分の方からあれこれ話かけるような奴は、うざいだなんだと、つまらないことをいう連中が多いのが日本人という人種らしいが、俺は逆だ。

ひたすら自慢話はごめん被るが、人の経験話というのだけは別で、それに付随していれば、自慢話すらも面白いものなのだ。

今の時代、それすらも文句をたれる奴が多いように思う。しかし、今日は来た目的があるので、話し掛けられるのは、遠慮しておこう。

「ところで話は変わるが、ガスの奴はいるか？」

「なんだ、情報が欲しいのか？」

「ああ、ちょっとな」

「濡れてるから分からなかったが、さては今日なんかあったな？お前はたまに、硝煙の匂いを染み付かせたまま来るからな」

苦笑しながら肩をすくめ、それよりどうなんだと促す。

「いや、今日はまだ来てないな。珍しい日もあるものでな。もし来たら、言伝おいてやるが？」

「いや、いい。そこまで緊急ってほどじゃぁない」

ガスというのは、この街一番の情報屋を自称している奴で、その情報収集の早さとその正確さは、俺みたいな奴は当然、同業者からも一目おかれている奴だ。

だが、いくら街一番でも、そいつ一人だけを頼りっぱなしというわけにもいくまい。

「まぁいい。だったら一人優秀なのがいるぜ？　最近売りだし中の

奴なんだが、こいつがなかなかできる奴でな」
店主は、俺の了承などお構いなしに、その男を呼んだ。
「ニーロ、ニーロはどこだっ」
店主は、やかましい店内すらも黙らせるような馬鹿でかい声で、ニーロと呼ばれる男の名を叫ぶ。
「そんなでかい声ださなくったって聞こえる」
そうして話しかけてきた男が、俺の隣に現れた。どうも、この男がニーロと呼ばれているやつらしい。名前だけで地中海あたりのラテン系をイメージしたが、全く違った。
どう見ても膚の浅黒い、東南アジア系な顔をしている。また、この親父同様澱みなく、流暢な日本語だ。この男もまた、日本での暮らしが長いのかもしれない。
「おお、ニーロ、そんなところにいやがったか。お前に客だ」
「まだ客になるなんて決まった覚えも、言った覚えもないんだがな」
呆れたように小さなため息をつきながら、両名を見た。
「安心しな、こいつの料金システムは、結構良心的だ。客が納得するまでは金を貰わないんだとよ」
「そうなのか？」
こいつは珍しいと思い、ニーロの方を見やる。
「ああ。おれは基本的に調査料と情報料の両方、まとめて一括払いしか受け付けてないんだ」
ニーロの言葉に頷きながら、アードベックに口をつけた。癖のある、それでいてどこか甘さの余韻を残す、ドライな味が喉を焼いていく。
特別話すことなどなく、黙ってスコッチを口に含んでいくが、その様子を店主の親父とニーロは、まだかとまだかと、じっと俺が話し出すのを待っているようだった。
俺は根負けし、話してやることにした。
ニーロは黙って話を聞き、俺が話終えると分かった、と一言だけ言い残して、即座に隣から離れていった。

「大丈夫さ、あの男は。俺も二回ほど奴から情報を買ったが、腕は保証する」
「なんだ、女房の浮気調査でも依頼したのか？」
「けっ、あいつが浮気できるようなタマかよ」
毒づく店主は、悔し紛れにため息をついた。この店主の女房は、小柄な力士さながらの容姿をしているのだ。
俺はこの親父を言い負かしてやったと、笑いが止まらなかった。

午前五時になろうとする頃、俺は寝座に戻った。幸運にも雨は小康状態ではあったがタクシーを拾い、戻ってきたのだ。
革ジャンを脱ぎ捨てるかのように放り投げ、熱めのシャワーを浴びた。熱い湯が冷えた身体を温めていく。
シャワーを浴び終えた俺は、サイドボードから相も変わらずスコッチを取り出して、思いきり喉から胃へと流し込む。
ベッドに戻る前に、キッチンの横に投げた革ジャンからロケットを取り出した。酒は、ベッド脇の小さなテーブルに置き、倒れ込むようにベッドに沈み込む。
この殺風景な部屋には不釣り合いなほどの高級なベッドは、疲れた身体をやさしくだきとめてくれる。
寝転びながら、ロケットの中を開いた。佐竹と名も知らぬ少女が微笑みかける。別に笑いたくもないのに、写真の二人につられて唇を歪めた。
「……あんたは、この子のところに行きたかったのか？」
もういるはずのない人間に、話し掛けるように呟いた。もしかしたら、そうだったのかもしれない。
こんな世界に身を置いていると感覚が麻痺してくるが、自分の死に場所くらいは、自分で選びたいと思うものだ。人を殺すからこそ、その最期の安住の想いはなかなか手に入れられないのだ。それが分

かっているから、あんなに必死だったのかもしれない。
ふと俺は思い立ち、ベッドから起きて、脇のテーブルの引き出しを開けた。中には、一枚の写真を納めた写真立てがある。この写真を見るのは、随分と久しぶりのように思う。そう、この写真は俺が一番幸福だったと思う頃の写真だ。
写真には、俺と沙弥佳の二人が写っている。日付は、今からちょうど六年前の三月だ。
当時、俺が通っていた金城高校の制服に身を包んだ妹と、休日だったというのに、妹にせがまれて仕方なく制服に着替えて撮ったのだ。
確か中学の卒業式の翌日で、沙弥佳は出来たばかりの制服に着替えて、記念になんて言って、目を輝かせていたのを思い出す。
写真の中の俺はぶっきらぼうにしていて、全く笑えていない。思えば、俺は笑うのが下手なような気がする。この写真を撮った時も、全く笑えず、何回も取り直したことがありありと思い出される。
対照的に、沙弥佳は俺の左腕にしっかりと腕を絡ませて、この上ないほどの笑顔だ。
「妹じゃなけりゃぁ、惚れちまいそうだよ……本当に」
結局、何度も駄目だしされるうちに、俺の方がイライラしてきたため、この写真で手打ちになったのだった。
俺は写真を見ながら、少しだが笑ってみた。きっと、この写真の自分のように、下手くそな笑い顔になっていることだろう。
この写真を見ると、いつも胸が締め付けられるのだ。いつも必ず後悔の念に苛まれてしまうのだ。確か、この写真を撮って数日と経っていなかった。沙弥佳が失踪したのは……。
気付けば、写真を持つ手は震えだしていて、写真立てがミシリと歪むほど力強く握っていた。動悸が激しく、呼吸も荒い。
俺は、嫌な物に蓋をするような気持ちで写真立てを引き出しの中に戻し、乱暴に引き出しを戻した。
（こんな気持ちにさせたのも、このロケットのせいだ）

半ば八つ当たりではあるが、そうでも思わないとつらかった。もしかすると、俺が佐竹のことを放っておけないのは、嫉妬しているからかもしれない。

ロケットの中にいる二人は、幸せそうに笑っている。なのに、俺はぶっきらぼうにしていて、全然笑えていなかった。幸せそうにしているのは沙弥佳だけだ。

そのことが俺にはどうしようもなく、悔しくて仕方がなかった。

第19章

翌朝、俺は不快な音で目を覚ました。
わずかな物音でも起きるように訓練されているため、不機嫌な態度そのままにその音の発生源を探した。
その音は、携帯の着信音だった。いつも携帯は革ジャンの中に入れっぱなしにしているため、部屋の中にはない。
革ジャンは大概、洗面所かキッチンあたりに置いている。置いたというわけでもなく、ただ放り出されているだけだが。
のろのろと不快な音を出し続けている携帯を求め、革ジャンを探す。確か、昨晩は帰ってきたと同時にシャワーを浴びたはずだから、洗面所だろう。
洗面所に行くと革ジャンはあり、携帯が音を鳴らし続けている。
俺は携帯をポケットから取り出し、手ぶらで話せるようにインターホンモードにして、電話に出た。
「なんだ?」
『なんだとはご挨拶じゃない。折角モーニングコールしてあげたのに』
電話の主は真紀だった。大方昨晩の件だろう。
「俺はあんたにモーニングコールを頼んだ覚えはないけどな」
『あらそう? じゃぁ、昨日の件の責任と不始末は、全部あなたでしたと上に報告しておくわ』
「なんだ、まだしていなかったのか? あんたにしちゃぁ随分と遅い対応だな」
『あなたね……あなたのおかげでこっちは散々だったのよ? それを……』
「すまんすまん。それでなんだって?」
また話が長くなりそうだったので、本題に入らせる。
『……はぁ、まぁいいわ。残念ながら狙撃手については分かってな

いわ。ただ、事実上、今回の件についての調査はもう終わり』
「終わりだと？　どういうことだ。こっちは死にそうになったってのに」
顔を洗い終えた俺は、真紀の意外な言葉に驚いた。昨日のことだと言うのに、もう調査は終わりだというのだ。調査がおざなりすぎることは、考えるまでもない。
『元はと言えば、あなたが安請け合いするからよ。それと、狙撃手は別にあなたを狙ったわけではないわ』
「そんなのは分かってる。だが、巻き込まれたんだ。そんなのは調査なんて言わないぜ。あの場にいた俺ですらそう思ったんだから」
『あら、分かっていたの。だったら、なんで昨晩わざわざ連絡してきたの？　おかげで、折角の睡眠時間が削られちゃったわ』
どうせ、言わなかったら言わなかったらで後からブーたれるのに、よくもぬけぬけとそんなことが言えたものだ。
「つまり、俺は死ななかったから、それでいいということか？　せめてスナイパーのことくらい、調査する気になってほしいもんだがな」
『いいじゃない。死ななかったんなら、それで』
この女……。事実ではあるが、この女には肯定することはできない。
なんにしても、始めからこんな組織に期待した俺が馬鹿だったのだ。
「……分かった。用件はそれだけだな？」
『仕事の話はね』
仕事の話は、だと？　つまり、プライベートの話はあるということか。
「聞くだけ聞いてやる」
『そう。なら、まだ朝はまだでしょう？　今からどう？』
「断る」
俺は、即答して電話を切った。

再び目が覚めた時には、すでに昼を過ぎていた。真紀からのありがたいモーニングコールの後、再度ベッドに潜り込んだのだ。

まだ少し寝足りない気分ではあるが、疲れは大分取れた。

しかし、仕事がある時は面倒だと思うのに、なかったらなかったらで、どうしてこうも仕事をしたいと思うのだろうか。こうもやる気が起こらない日も珍しい。全くの手持ち無沙汰なのだ。

ニーロが何かしらネタを掴んでいるかもしれないから、サバカ・コシュカに行きたいところだが、まだ店が開くには早い。

いつだったか、真紀に趣味の一つくらい見つけたらなんて言われたことがあったが、確かに趣味なんてものがあれば、こういう日には良い暇潰しができるだろうが、趣味なんてのをそっちのけで生きるのに必死だった人間に、そんなことを言われても、困るというものだ。

サバカ・コシュカの親父が言う通り、俺は仕事がなければ、ただの呑んだくれなのだ。

「……酒でも飲むか」

結局、俺の趣味はこれしかないということにちょいとばかし自己嫌悪しながらも、サイドボードからスコッチを取り出した。

寝起きにウイスキーを飲むと、いつも以上にきつく感じるのだが、それがまた堪らなく、眠気を吹き飛ばしてくれる。もう慣れた刺激ではあるが、いつも、この喉を突き抜けていく快感が堪らない。

「そういえば……」

俺は思い出したように本棚に向かい、前に買った本を二、三冊、適当にみつくろってソファーに座る。もちろん、スコッチも忘れていない。

自分にもちゃんと趣味があるじゃないかと、ただの呑んだくれではないことに、少し安堵しながら俺はページをめくっていった。

午後三時を過ぎた頃、腹の虫が何か食わせろと鳴いたので、読書もそこそこに寝座を出た。

恰好は昨日とあまり変わらないが、別に気にすることはない。明日をも知れないような人間が、いちいちファッションなんてものを気にするようでは、それこそ命取りになりかねないのだ。

男と女は違う。別にファッションが悪いとは言わないが、俺には必要ない。まさに、それがよく出ていることだと思う。

俺一人しか住んでいないアパートを出ると、空は昨日と打って変わってよく晴れており、青空が広がっていた。昨晩の嵐のような雨が、まるで嘘のようだ。

今日こそは地下鉄へと向かい、街の方へ繰り出そう。昨晩久しぶりにサバカ・コシュカに行ったから、今日はジュリオの店にでも行ってみるとしよう。

ジュリオというのは、これまた街一番とうたうイタリアンレストランを経営している奴で、事実、美味いものを出している。

イタリア人は自分の街以外ではピッツァは食わないというが、俺もそうで、奴の店以外ではイタリアンなど殆ど食べることはない。

改札を抜け、階段を下りるとちょうど電車が来ていたので、飛び乗った。車内は比較的空いていたが、ガラガラというわけでもなかった。

そろそろ学生たちが帰る時間帯のようで、学生服に身を包んだ奴らが、ちらほらといるのが伺える。きっと将来の自分のために勉強しているのだろう、電車の中でも参考書なんかを開いていた。

座ることもできたが、目的の駅までは三駅なので、このまま立ったままやり過ごすとしよう。彼らが将来、どんな人間になるのかは知らないがこの国を支えていく連中だ。まぁ、せいぜい頑張ればいいさ。

駅に着くと俺は足早に電車を降り、一段飛ばしで階段を上っていく。駅からジュリオの店までは歩いて大体十分くらいだ。

ジュリオはイタリア人で、何年か前まで別のイタリアンレストランで料理長をしていたのだが、小遣い稼ぎにアコギなものに手を出したため、ヤクザに海に沈められようとしていたところを偶然、やはりその調査に当たっていた俺が助けてやったのだ。

元々はうちの組織の傘下にあったヤクザ組だったが、何を思ってか反旗を翻したのだ。そのヤクザ達は、もう誰も生きてはいないが、少なからずそれに関わったジュリオは、もう二度と手を出さないと誓わせた上で命を助けてやったため、無駄に俺に忠義心があるようで、店での飲み食いは全てタダだ。

二度も命を救ってくれた人間からは、金は受け取れないのだと言う。おまけに、ジュリオが店を出した時、俺がその資金をいくらか出したというのもある。

別にこちらから、タダにしろなどと強要したわけでもないが、向こうがそういってくれているのであれば、その好意はありがたく受けておくべきだろう。

「よう、久しぶりだなジュリオ。元気にしてたか？」

店に着くと、真っ先に厨房の方へ行き、中のジュリオに声をかけた。厨房は、店に入ればどこからでも見える作りになっている。

ランチタイムも一段落し、後片付けの真っ最中というところだった。

「おークキさーん、久しぶりね！　元気にしてたよ。クキさんはどう？」

店内のどこにいようが響いてしまうような、陽気だが馬鹿でかい声で挨拶を返してきた。

店内にいるスタッフや客が、何事かと驚いたような顔で俺達を注目するが、この青年はそんなのお構いなしのようだ。

「相変わらず元気そうだな。俺は見ての通りだ。悪いが、今日も飯を食わせてもらいにきたぜ」

「いいよいいよー。クキさーんは超ビップ待遇よ。ノーマネーオンリーだよ」

俺は、ジュリオの相変わらずおかしな日本語に苦笑しながら、席についた。店内は、ジュリオがイタリア人なのだから当然なのだろうが、イタリアのインテリアで統一されていて小洒落た感じだ。

店の前にはオープンテラスがあり大きな木が二本もあるために、いい具合に木陰に隠れてしまうのだが、これがまた、これからの時期にはいいだろう。

天井も高く、白い椋（ぶな）の木で作られた丸見えの骨組みが、より開放感と爽やかさを強調している。

「マルゲリータとグラッパだ」

「了解よ。クキさーんはグラッパは食前ね」

「ああ、頼む」

「おい、マルゲリータスペシャルだっ」

ジュリオは、イタリア語で職人に向かって叫んだ。俺がピッツアを頼むと、なぜか必ずスペシャルになるのは意味が分からないが……。

まぁ、普通のものより二回りは大きいのだから、スペシャルというのはそれ自体問題ないし、それを好意として受け取っている。相手の好意は素直に受け取っておくのも、俺の流儀だからだ。

「そうそう昨日の夜、ビルが爆破されたらしいよ、知ってる？」

「……ああ、らしいな」

その当事者としてはあまり触れてほしくないところだが、あくまで話題を提供してくれただけなのだから、全く悪気はないはずだ。

そんな投げやりな俺の言い方を察してか、ジュリオはそれ以上は何も言おうとはしなかった。もしかしたら、俺が昨晩のことに関わったことまで気付いたのかもしれない。俺が殺し屋であることは知っているのだから、そうとも考えられる。

まぁ、なんにしろ、これ以上突っ込んでくるわけではないから、それはそれで嬉しいことではあるが。

「ところで、最近学生が増えたか？」

店に入った時客層を一瞬で見分け、そう判断したのだ。

「そうね、結構増えたかもね。女の子は別として、男の子は多分女の子目当てだよ」
「女の子？」
そうよと言いながら、ジュリオは本来なら食後酒として出されるグラッパを出してきた。
このグラッパはアルコール度数は三十～六十パーセントとばらつきのあるもので、ブランデーの一種だ。ウイスキー好きの俺としては、やはりウイスキーといきたいところだが、ないものは仕方ない。
だが、ブランデーというのも決して嫌いではなく、この強さの酒が堪らなく心地良くさせてくれる。
「そうね。前までは、たまにお客さんとして来てたけど、ここ四、五ヶ月はうちで働いてるよ」
「学生なのかい？　その子は」
「そうだよ。いいとこのお嬢さんみたいな感じだね。なに、クキさん興味ある？」
「ま、とりあえずどんな容姿しているのかは気になるな」
「容姿にうるさいクキさんでも、納得だよ」
「別に容姿ばかりにこだわってるわけじゃぁないぜ、俺は」
苦笑しながら、肩をすくめる。だが確かに俺は、女の子の容姿の評価は厳しいかもしれない。
何年と言わず沙弥佳とともに過ごしていたから、それに見慣れてしまい、そうなったとしても仕方ないではないか。
「さっき終わったから、もう少ししたら来るよ。わたしとしても、超ビップのクキさーんを紹介しとかないとね」
「そうかい。だったら、せいぜい楽しみにしてるさ」
グラッパを飲みながら、適当に受け流す。全く、確かに俺はムラムラすれば娼婦を買うことだってあるし、ナンパだってする。だから格段、女に困っているわけではない。
明日をも知れない俺にとっては、特定の恋人などいりはしないのだ。ただ女と寝て、その時その時で良い夢が見られれば、それ以上

のものは望みはしない。
二口目のグラッパを飲み干したとき、店内の客たちの空気が変わったのが分かった。正確には男たちの雰囲気だ。
この反応は見なくても分かる。件の彼女だろう。そして、こんな反応を示す程だから、その容姿もなかなかのものなのだろうということも予想できる。
「来たよ、クキさん」
「ああ、分かってる」
ジュリオに言われ、少し面倒臭く感じながら、相槌をうった。
「九鬼……さん？」
その声を聞いた時、眉をひそめた。聞き覚えのある声だったのだ。
俺は、その声の主の方に振り向いてその人物を見たとき、思いがけず言葉を失った。そこには、思ってもいない人物が立っていたのだ。
「……君は……綾子、ちゃん……か？」
思わず席を立った。そうだ、忘れもしない。そこに立っていたのは紛れも無く、あの綾子ちゃんだったのだ。
けれど、それは俺の知っている綾子ちゃんとは違った。当然だ。最後に会ったのは、確かもう四年は前ではなかったろうか。
俺がこの血みどろの世界に入る前、確かこの子はわざわざ俺を訪ねて来たのだ。
その頃の俺は、生きていることすらどうでも良かったので、随分荒んでいたものだった。そんな俺を、この子は健気にも何度も通って励ましてくれていたのだ。今思うと、ありがたくも後ろめたい気分にもなる。
目の前に現れた綾子ちゃんは、その頃の面影を残しつつも、確実に少女から大人の雰囲気を漂わせた女へと変わっていた。
女は一年二年もあれば変わってしまうというが、その通りだと思う。今の綾子ちゃんを見れば、それが嫌と言うほど良く分かる。
あの頃の綾子ちゃんは髪をショートにし、セミロングの長さまで

伸ばしたら、またショートというサイクルを繰り返していたため、今とは大分ギャップがあった。

髪を纏めているため分からないが、恐らくロングヘアーになっているのではないだろうか。それに、全体的にうっすらと上品な栗色をしている。

メイクも施され、それは人目を奪わないで仕方ないほどだ。彼女目当てに男達が群がるのも頷けるというものだ。

だが当の俺はというと、あの頃のギャップと、もう会うこともないと思っていたという想いがないまぜになり、むしろ混乱していた。

「……よ、よう、久しぶりだな」

なんとか絞り出した言葉だったが、俺は今も昔も、思いもかけない場面には弱いようだった。

「九鬼さん……本当に九鬼さん、なんですね？」

「……まぁ、君の知り合いに、他の九鬼さんがいなけりゃぁそうだと思うぜ」　俺は照れ隠しに皮肉っぽく言い、綾子ちゃんから視線を反らして鼻の頭を掻いた。

「……そんなふうに皮肉っぽく言うの……間違いなく九鬼さんだ」

その瞳は潤んでいて、またいつかの綾子ちゃんを思い出させる。

俺はこの時、やっとこの子が本当に綾子ちゃんなのだと思えることができた。

周囲の目など気にもせず、綾子ちゃんは小走りに抱き着いてきた。

「お、おい」

「……やっと……やっと逢えた。……やっと九鬼さんに」

そういいながら綾子ちゃんは、顔を俺の胸に押し付けながら、静かに涙を流したのだった。

地下鉄を降りて、サバカ・コシュカへ向かう。ニーロという情報屋に会うためだ。

目抜き通りを横切り、いかにも歓楽街という雰囲気の一画から、やや外れた場所にあるサバカ・コシュカの扉を開けるとそこは、すでに呑んだくれたちでごった返していた。すでにできあがっている者もちらほら見受けることができる。

開店は十七時からなので、まだ一時間も経っていないはずなのだが、連中は店が開くのを列でもなして待っていたのだろうか。それとも、実際には言われている時間よりも早い時間に店を開けているだけかもしれない。

今日は確か金曜日のはずで、人が多くなるのは（ここは曜日など関係なく多いが）当然で、外も今夜はどこかで飲み明かそうと、サラリーマンやＯＬ、学生なんかもたくさん歩いていた。

そのせいか、ここも今日は心なしか人が多いように思う。そんな店の中をすり抜けながら、カウンターの椅子に腰掛けた。

「よう、今日も来てやったぜ」

「なんだ珍しいこともあるもんだな、おまえが続けて来るなんて」

「バランタインの１７年だ。ところで、ニーロはいるか？」

親父の嫌味など無視して聞いた。この親父のことだから、昨晩、言い負かされたことなど気にも留めていないだろう。まぁ、そんなところも、この親父を気に入った要因でもあるのだが。

「ああ、来てるぞ。ニーロっ、来たぞ」

昨晩のように馬鹿でかい声でニーロを呼ぶ。

「よう、ニーロ。何か分かったかい？」

「ああ、分かった。あんたの言う佐竹という人物は、すでに昨晩あったビル爆破に巻き込まれて死んだよ」

「それは知ってる。そいつの過去が知りたいんだ」

当事者だったのだから、そんなことは知っている。それに死因も爆破に巻き込まれたのではなく、狙撃による銃殺だ。

まぁ、うちの組織かあのファミリーかは知らないが、情報はきっ

ちり隠蔽してくれていたようだ。
とは言え、昨日の爆破事件は思っていた以上に大きな話題になっていたようで、新聞やニュースのトップを飾っていて、ついに日本でもテロか？なんて見出しばかりだった。まぁ、そう思わすことができるのなら、それでいい。
昨日も、俺がその辺に関わっていたことは伏せておいた。情報屋にわざわざ、ネタを無償で提供などする気はない。
「佐竹は、二十年前に高校卒業と同時に上京。ある訓練学校に入ったらしい。残念ながらその学校は、すでになくなってる。きっとバブルの崩壊と同時に、経営困難になったんだろう。ただでさえ人が多く入っていたわけではなかったようだから」
ニーロはゆっくりと、佐竹の過去を喋りだした。
「彼は、その学校の訓練をかなり優秀な成績を残して卒業。その後、今井重工一族の末娘の少女の屋敷に就職している」
「今井だって？」
ニーロの口から思いがけない言葉が出てきて、俺は驚きのあまり目を見開いて、声を荒げてしまった。
「あ、ああ」
突然のことに、ニーロはおろか親父までグラスを磨いていた手を止め、俺の方を見ていた。
今井……俺はこの名を忘れることはない。
七年ほど……いや、六年半前に俺を、綾子ちゃんを、そして沙弥佳を巻き込むきっかけを作った事件の関係者の名だ。
「……それで」
俺は低い声で、ニーロに先を続けさせる。ニーロは、そんな俺の豹変した空気に驚きと畏怖するような視線を一瞬だけ向け、逸らした。
「そ、その娘はかなりのわがままで、誰にも懐くことはなかったそうだが、佐竹にだけは随分と懐いていたという話だ。
だがある時、ちょうど十ニ年程前に唐突に解雇されたらしい。そ

れも、主人である少女直々に。そればかりは当時の関係者の間でも、謎だったらしい。

その直後、館は何者かによって襲撃されて、少女は命を落としている。元々身体が丈夫ではなかったという話もあったが」

俺はニーロの話を聞きながら、拳を力いっぱいに握っていた。掌が鬱血して、紫になっている。俺が知りたいのはここからだ。

それにしても佐竹が仕えていた主人がまさか、あの今井とは思わなかった。蒲生の家で見つけたリストに今井重工の名前は、確かに載っていて、いまだ忘れることはできない。いや、今後も忘れることはないだろう。

それもそれで気になるところではあるが。

「どうやってかは知らないが、佐竹はその襲撃した奴らのことを調べあげたらしい。その間は、姿をくらましていたようだが。

そして、再び表舞台に姿を表した佐竹は……」

「殺し屋になっていた、というわけか」

ニーロの言葉を受け取って、繋げた。目の前の男は、ゆっくり頷く。

「それも、凄腕のね。佐竹はどこから嗅ぎ付けたのか、あるヤクザの用心棒兼執事をするようになった。その組は昨日起こった、爆破事件のあったビルに拠を構えていた。

どうも、組長の命を助けたからという話だったが、裏がありそうだな。多分、組に入るために一芝居うったのかもしれない。たまたまにしろ、とにかく佐竹はこうやって標的の側にいることができるようになった。それが九年前だ」

俺は頷きながら、そっと出されていたスコッチを胃のなかに流し込む。

佐竹は、その信頼を得るためにそこまでの期間、従者を務めていたのだ。もちろん、その間に襲ってきた殺し屋たちを退けながら。時には雇い、最後にはその殺し屋たちを自らの手に掛けたのだろう。

もちろん、佐竹はもう一人の奴の二人が一堂に会することも、計

算してのことであったのは間違いないだろう。きっと殺されていった連中も、まさか雇い主に倒されるなど、思いもしなかっただろうが。

そんな俺を見ながら、ニーロは続けた。

「……これはまだ未確認の情報だが、昨日の爆破は実は、この佐竹を狙ったものではないかと思うんだ」

そう俺が最も知りたいのはそこだ。何故、奴は狙われなくてはならなかったのか。

ニーロの話からも奴の動機ははっきりしているが、それだけは分からない。それが分かれば必然的に、あのスナイパーも判るのではないかと俺は考えていた。

「佐竹が解雇されて、姿を消したといったろ？　その時、彼はとある集団に組していたらしい」

「とある集団？」

「ああ。聞くところによるとかなり危険な集団らしい。なんでも、全員が殺し屋だけで構成されているんだとか」

「組織の連中全員がか」

「組織……と言える規模ではないそうだ。小数精鋭で構成された集まり……といった方が正確だと思う。恐らくその集団の訓練を受け、彼は殺し屋になったんだ」

何者なんだ？　この業界に何年もいるのだから、そんな連中がいるのならとうの昔に、俺の耳にも入ってきていてもおかしくないはずだ。

一匹狼のやつなら聞いたことはある。だが、組織に属さない殺し屋集団など、聞いたことがない。

もしかしたら、フリーのエージェント達の寄せ集めなのだろうか……いや、だとしたら、わざわざ佐竹を訓練するはずもない。訓練するということは、それなりの意思統合がなされているはずだ。

それにだ。俺の耳に入ってこないようなそんな集団が、本当に存在しているのだろうか。それも、最近結成されたのならいざ知らず、

佐竹が行方をくらました十二年前頃には、その連中は確実に存在していたことになる。その頃に結成されたとも考えられなくもないが。

つまり佐竹は、その連中を裏切ったからあの老人のもとについたというのはどうだろう。復讐の対象の側にいることができるし、その集団の追撃から逃れることもできる。これなら佐竹が狙われている理由にも納得がいく。

「なるほど、知りたいことは大体分かった。もう一つ聞きたいが、佐竹と前の主人だったという少女についてだ。

本当に、ただの主従関係だけだったんだろうか」

「肉体関係があったかどうかということか？」

ニーロの露骨な表現に、苦笑しながら肩をすくめた。

「どうだろうな。そもそもクビにしたという時点で、そんな気自体あったとは、思えないが……」

「むしろ、そういう関係だったからとは思わないか？」

「……うん、考えられなくはない、が……」

「まぁ、いいさ。ご苦労さん。報酬だ」

財布から一万円札を五、六枚抜き、ニーロの胸ポケットに無理矢理つめこんだ。

「これで足りるな？」

ニーロは薄笑いを浮かべて、右手を差し出してきた。俺はそれに応え、ついでにギネスをおごってやった。昨日会った時、ギネスを飲んでいたからだ。

親父の言った通り、この膚の浅黒い青年はうまいこと知りたいことを調べ出してくれた。それくらいはしてやってもいいだろう。

「何かあったら、その時はまた頼むぜ」

青年の肩を軽く叩き、俺は残りのバランタインを一気に飲み込む。むせ返りそうな灼熱の液体が、咽と食道を焼いていく。

「親父、また来るぜ」

そういって俺は、千円札を二枚カウンターに置いて席を外す。

「おいおい、珍しいこともあるもんだな。おまえが一杯だけ、それ

もこんな早い時間に帰るなんて」
「今日はあくまで情報を買うためだからな。それに、ちょいと調べたいことができた」
「なんなら、ガスを使ったらどうだ。今日は来てるぜ」
「いいや、よしておくよ。後は自分でもできることだからな」
言うだけ言うと、さっさとこの薄汚いたまり場を後にした。ドアを閉めようとした時、呑んだくれ達による演奏が始まったのだった。

寝座に戻った俺は、久しぶりにノートパソコンを起動させた。真紀に設定やらなんやらは小難しいことは任せてあったので、ネットもできる。
ネットの検索エンジンで、今井重工と検索すると、ただちに検索結果が表示される。俺は、佐竹が仕えていたという少女の事件を知りたくなったのだ。
それに十年以上前の話である上、佐竹の口から聞いた時は気付かなかったが、この話は記憶にあった。
資産家の娘が狙われたということで、当時、随分と話題になっていたはずだ。自分のところは資産家でもないから大丈夫だなんて思ったことが、まだ記憶に残っている。
検索すると、驚くほど簡単に目的の記事を見ることができた。当時１８歳の資産家令嬢襲撃事件。見出しにはそう書かれている。少女の写真を見た時、この少女が紛れも無く、佐竹が付き従っていたという少女であることが判った。
実行犯は二人、五十代と四十歳くらいの男だったということだ。もちろん、その二人が昨晩殺されたあの二人だということは、即座に理解できた。
少女の葬式が執り行われた寺の住所をきっちりと暗記し、今度は昨晩、俺を雇ったヤクザ連中のことを調べてみた。

某巨大掲示板には、昨晩の爆破事件のことに関して、無駄にスレッドが立っている。これなら、当時、あの老人達が関わった事件のことも多少分かるかもしれない。

しばらくの間、無言であることないこと書かれている掲示板を読み飛ばしていると、当時の事件のことと関係がありそうと思われる、記事を書いたレスを見つけた。

どうもそれによると、連中はあの事件の後から急激に勢力を拡大していったらしい。その当時は死んだ、ボスと呼ばれていた組長は、まだ組長という地位にいたわけでもないらしい。

この事件後、一躍出世街道まっしぐらだったであろう老人は、やはり九年前に今の地位についたということだった。

また、もう一人の方は物流会社を運営していたようで、主に海外から仕入れていたらしいが中には、かなりいかがわしい物もあったそうだ。

嘘か本当かはわからないが、人身売買の温床にもなっていたのでは、なんてレスもあった。

もしそれが本当だったとすれば、あの二人は地獄に堕ちて当然なので、悲しむ必要などこれっぽっちもない。そしてやはり、会社の創設はあの事件後だった。

これではっきりした。佐竹は、間違いなく復讐するために老人に近づいた。二人がうまいこと接触する機会をうかがいながら。

そのためには、殺し屋を雇って殺させようとし、そのつど暗殺者から老人を護ったことだろう。自身の信頼を得、安心させるために。

佐竹からしてみれば、まさに苦行とも言うべき9年間だったろう。だが、ついに昨日それを遂げたのだ。だというのに、奴は殺された。奴が最期に呟くように言った、行くべき場所というのがどこかは、今となっては知りようもないが、このロケットは、少女の墓に納めてやるべきだろう。

死に場所を求めた奴のことだから、多分そこらの墓になら納得もするだろう。

俺はネットを閉じ、ノートパソコンの電源も落とした。
まだ寝るには早過ぎるとも言える時間だが、もう寝てしまおう。
今日は思いもかけないことに遭遇しすぎだ。
今井克利と少女の関係も多少なりとも気にはなるが、もう過去のことだ。俺はまだ着たままだった革ジャンを脱ぎ飛ばし、ベッドに身を投げだした。手には佐竹のロケットを持ったままだ。
ロケットを開き、佐竹と少女の二人を眺めながら、俺は全く別のことを考えていた。綾子ちゃんのことだ。
四年ぶりにあった彼女は、随分印象が変わっていた。四年も経っているのだから、当然といえば当然だが。
久しぶりに見た彼女は、一瞬誰か分からなかった。記憶の中の彼女とのギャップに、とてつもない違和感を覚えたためだ。
だが、彼女が胸に飛び込んできた時、いつか背中に抱き着かれた時を思い出したのだ。そうなると、せき止められていた感情が一気に押し寄せ、彼女を抱きしめずにはいられなくなった。
俺達は人目も憚らず抱きしめあっていたが、ジュリオの咳ばらいでようやく我に返ったのだ。まぁ、奴はニヤついていたが。
まだ食事をしていなかったため、ぎこちなくも綾子ちゃんを食事に誘ったのだが、これがいけなかった。
この四年間何していたかなど話そうと思ったのに、実際にはたどたどしく、会話らしい会話など全くなかった。まるで、初めて逢った時のようであった。
もしくは人によっては、話すことなどなくなって新鮮みがなくなり、別れる寸前のような恋人のようにも見えたかもしれない。俺としても、綾子ちゃんとはなんとも後味の悪い別れ方をしていたため、バツの悪いことこの上なかったのだ。
結局、いてもたってもいられなくなった俺は、約束があるからと席を立った。綾子ちゃんは駅まで行くなら自分も行くと言っていたが、どうにもそれは俺ができそうもなく、外せない仕事だからと嘘

をつきタクシーを拾って、一駅先の地下鉄の駅まで行ったのだ。
別れ際、綾子ちゃんは自分の連絡先を教え、寂しそうな笑顔を見せて俺を見送ってくれた。明日、空いてる時間でいいから連絡してほしいと言い残して。
だが、今更どの面さげて連絡すればいいというのだろう。今の俺と彼女は、あまりに生きる世界が違いすぎる。彼女は大学生で、明るい未来が約束されていることだろう。俺とは違うのだ。
そう考えると、とても連絡などする気にはなれない。俺と関われば、この先何が起こるか分からない。そんなことは、許されない。だからこそ俺は、四年前ひっそりと彼女の前から消えたのだから。
「くそっ……」
誰もいない部屋の中、一人毒ついてロケットを閉じた。最近良く見る過去の夢が、俺と彼女を引き合わせたのだろうか。
夢というのは、過去のあったことが出てきた場合、願望の具現化を望む時なのだと以前聞いたことがあったが、それはつまり、あの事件さえなければ……ということなのか？
……まぁ、いい。今日はなにもしていないのに、やけに疲れた。綾子ちゃんには悪いが、連絡しないというのも手だ。
そうだ、明日のことは明日考えればいいだろう。もうなにも考えずに寝てしまおう。
今日はもう、なにも考えたくはない……。

第２０章

今朝は最近にしては珍しく、夢を見ることなく目が覚めた。心なしか気分も良く、久しぶりに爽快な目覚めと言っていいだろう。

昨晩はいつもより早く寝たからなのか、酒もほとんど飲まなかったからなのか、それとも、過去の夢をみなかったからなのかは判断しかねるが。

そして目が覚めたその時から、昨日悩んでいたはずの綾子ちゃんへの電話も、しないと決めていた。綾子ちゃんには気の毒だろうが、どうにも連絡したいと思うことができない。

昨日のは、幻か何かであったのだと言い聞かせることにしたのだ。その方が互いに後々悩む必要はないはずだ。俺なんかではなく、彼女にはもっとふさわしい奴がいるはずなのだ。

チクリと胸が痛んだが、かぶりを振った。もう決めたのだ。もし綾子ちゃんのことを大切にしたかったのなら、そもそもがこんな世界に入る必要はなかったのだ。

そう決めてしまうと後は楽なもので、胸のつっかえが取れたように気が軽くなり、何故悩んでいたのか馬鹿らしく思えるほどだ。

今ならあの女狐に文句を言われようとも、なんとも思わないかもしれない。俺は着替えずにそのままだった服を脱ぎ、熱めのシャワーを浴びることにした。

一日着たままの服で寝ると、なぜこうも不快に思えるのだろう。もちろん、寝汗のせいなのだが、今日はよほど気分が良いようで、そんなことすら考える余裕があるようだ。

シャワーを浴びていると、肌に張り付くように渇いた汗が、洗い落とされていくのが分かる。頭も洗い終わると、本当に生き返ったみたいだ。

俺は身体を拭いたバスタオルを腰に巻き、そのままソファーへと

腰掛けた。窓の向こうは昨日に引き続き、天気が良いようで青空が見える。

いつもなら寝起きに酒をあおるところだが、気分が良いとそんな気にすらならないようで、サイドボードには目もくれなかった。

せっかくだから今日は散歩がてら、例の少女の墓に行ってみるとしよう。気軽に散歩なんて言えるような場所にはないが、遠出するには最高の日だし、こんな日に彼女の墓に入れるのであれば、佐竹もまた少しは喜ぶかもしれない。

早速行動に移すべく、素早く着替えて寝座を出た。当然、銃の携帯は忘れない。

しかし、こんな時間に寝座を出てどこかへ向かうというのは、久しぶりだ。朝早いということもあり、サラリーマンやＯＬ、学生達がそこらかしこに各々の行くべき場所に向かって歩いている。

澄まし顔の者。よほど会社や学校に行くのが嫌なのか、げんなりとした顔をしている者。生きる目的すら見つからず、ただなんとなく日々を過ごしていそうな顔をしている者。何が楽しいのか、ニヤけ顔の者もいる。

久しぶりに朝の人込みに紛れるというのも、悪くないかもしれない。やはり、世界はきっちりと回っているのだと再認識できる。

そして、かつては自分もそうだったという、懐かしい思いも同時に沸き起こった。それでも俺はそんな気持ちも含めて、今はそれがとても新鮮な気持ちでいっぱいだった。

目的の場所に向かうため、地下鉄を乗り継いだ。周りには高校を卒業し、つかの間の休暇を満喫しているのか、初々しさを醸し出した少年や少女とも言えない男女が多くいた。

そんな連中を見ていると、また記憶の彼方に意識が飛ばされてしまいそうだ。自嘲気味に唇を歪め、軽くかぶりを振ってため息をついた。

どうしてか、あのくらいの男女のカップルを見ると、実は兄妹な

んじゃないかと錯覚してしまう。
仕方のないことだが、どうも俺はあの頃に捕われ続けているようだ。
妹は失踪した……判っているのはたったこれだけだ。いや、周りにいた連中は、もう死んだと思っているのかもしれない。
だが、俺にはどうしても沙弥佳が死んだとは思えない。事実、未だ失踪扱いのままではないか。〇・一パーセントの確率もないとしても、零ではない。
なら、それを諦める道理がどこにある。まだ百パーセント死んだというわけではない。いや、俺がこの目で沙弥佳の死を確認したわけではない限り、諦めることはしない。妹は死んではいないかもしれないではないか。
この世界に入って分かったが、表社会にいたのでは、この世界のことは全ては分からないということだ。
断片的なことは分かっても、やはり詳細を知ることはほとんどないのだ。この世界に飛び込むきっかけも、元はと言えば、表社会にいたのでは分からない情報が分かるかもしれないからという、全くの希望的観測からだった。
妹の失踪が、ただの金目的の誘拐ではないとも言われたし、ストーカーによるものでもないとも言われた。俺達は四六時中とはいかないが、ずっと一緒にいたのだから、少なくともストーカーによるものではないことは分かったのだ。
もし、ストーカー野郎が拉致したのであれば、その前になんらかのアクションがあるはずなので、それには何かしら気付けたはずだ。
親父達も手を尽くしたが、結局八方塞がりで、もしかしたら某国に拉致されたんでは？なんて憶測も出された。
そんな時、真紀にこの世界にスカウトされたというわけだ。こっちの世界になら、分かり得ない情報もあるかもしれないわよ、と囁かれて。
もちろんその殆どが、俺の目的には全くと言っていいほど関係の

ないものばかりだったが。
しかし、首を突っ込んでしまった以上それらを熟さないと、自分の仕事に障害が出るから仕方なくやってきた。
真っ先に組織への忠誠心というのを棄てた俺だから、組織は信用していない。だから殺し屋という職を利用して、俺なりに人脈を増やしていったのだ。だが、未だそれらしい情報は入ってこない。
以前、ガスという情報屋を使って拉致や誘拐に詳しい人間たちを探らせ、当たっては見たものの、そんなのは日常茶飯事で、しらみ潰しにやっていくしかないという。あまりに妹の失踪時の情報が、少な過ぎるということだった。
だが、一つだけ……はっきり言って、ただの推測と可能性の問題だが、プロによるものだということは信じていいはずだ。
まず、手際が良すぎることがあげられる。計画的な犯行であることは間違いないはずなのだ。
もう一つは裏の世界とは言え、人探しのプロ達にすら、なんらネタを掴ませないということ。それも何年もだ。
そうなると、さすがに死んだのではとも思えるが、この目で死んだところを見ていない限り、俺は絶対に信じない。信じてなるものか……。
その時だった。
「お兄ちゃん！」
一瞬、俺にかけられたと思った言葉に、思わず驚いて振り向いた。いつの間にか、俺のやや後ろ横には一組の男女がいたのだ。
察するに兄妹のようだが、どことなく背丈恰好が似ている。双子なのかもしれない。
「わっ……うるさいなぁ、そんな耳元で叫ぶなよ……。大体電車の中なんだから静かにしろって」
「お兄ちゃんがぼーっとして、あたしの言ってること聞いてないからでしょっ」
「だからってなぁ……」

「言い訳無用だよっ。きゃっ」
電車が加速したため、女の子はバランスを崩してよろめき、俺の肩にぶつかる。
「あぁ、言わんこっちゃない。あの、妹がすみませんでした」
「あっ……ご、ごめんなさい」
兄妹は謝罪の言葉を述べながら、頭を垂れた。しかし俺の顔を見た途端、顔が引き攣ったのがわかった。
別に怒ったわけでもないのに、二人は何度か過剰に頭を下げ念入りに謝罪すると、そそくさと場所を移動していった。
（……まぁ、この顔じゃぁ仕方のない話か）
兄妹を横目で見送り、小さくため息をついた。昔からたまに顔付きが怖いと言われることがあったが、今みたいな反応は初めてだ。
この数年はそんな風に思われたくなくて、意識的にそこういったものを避けていたためか、すっかり忘れていた。意識的にやっていたものが、気付けば忘れるくらいに当たり前になっていることがある。
思えばこんな朝の時間帯に、不特定多数が同時に使う公共の乗り物を使った時点で、こんなことは予想できそうなものだが、今日は気分が良かったせいか、そんなことも頭から吹っ飛んでいたようだ。
俺はタクシーで行けば良かったと思いながら、目的の駅に着いたため電車を降りたのだった。

記憶していた住所の寺に足を踏み入れた。境内は随分と古く、あまり補修工事などは行われていないようだ。まぁ、補修がなされているかどうかで、坊主の質が分かるものでもないが。
それにしても、墓場というのはなぜこうも、陰湿な雰囲気を漂わせているのだろう。寺が寺なだけに、夜は“そんな雰囲気”に早変わりしそうだ。

おまけに、それを助長するように古い墓が多く、苔が土台の石にびっしりと覆われているのも少なくない。この寺の墓達は、すでに参る人も死んでしまっているのかもしれない。

いくつか墓を覗き込んでみると、墓に入ったことを示すような銘が刻まれていない。墓に入るのを銘に刻むという行為は、大々的に広まったのは明治維新以降のことで、それでも金を持った連中だけだ。

庶民にもそれが根付くようになったのは、記憶が正しければ関東大震災からだったと思う。

そうでもしないと、墓に入った者の時期が分からなかったり、場合によっては無名菩薩になってしまうのも多いからだと記憶している。

明治以前は、死者には忌名（いみな）と呼ばれるものが与えられ、それを記したものを墓として刻んでいたらしい。

しかし……全く、こんなところに本当に当時資産家だった少女の墓などあるのだろうか。だが当時の記事には、ここで葬儀が行われ、納骨されたらしいので間違いはないはずだ。

尤も、墓荒らしにあっていなければの話だが。まぁ、大丈夫だろう。この日本で、わざわざ墓荒らしなどする奴はいまい。いくら令嬢だったとは言え、その墓に金銀財宝を入れたりもしないだろう。

そんな古い墓場だが、少女の眠る墓にはある程度の目星はつく。十二年前なのだから、苔がびっしりなんてことはないはずだ。

それに、もう少女にどういう想いを抱いていたかは知るよしもないが、少なくとも佐竹は命日にはここに来ていた可能性は高い。となると……。

「あれかな」

俺は一人呟き、この寺の墓場には似つかわしくない、比較的新しい墓を見つけた。

その墓石の前に来ると、思っているほど新しく感じなかったが、いかんせん、周りの墓が古ぼけ過ぎて、目新しく感じるのだ。

いやしかし、たかだか十二年かそこらでこんなにまで古く感じさ

せるものなのだろうか……。
俺の祖父さんが死んだ時、ひい祖父さんの代からの墓を昔見たことがあったが、まだそっちの方がこの墓よりも新しく感じたほどだ。参ってくれる人がいないと、こんなにまで物は荒んでいくということなのかもしれない。
墓石の後ろを見ると、今井夏姫（いまいなつき）享年１８才と、銘が掘られている。どうやら間違いないようだ。
ロケットをポケットから取り出して中を開いた。相変わらず、中の二人は穏やかな微笑みを浮かべている。
ほんのわずかな時間、二人を見つめた後、納骨されている部分の石を動かして、ロケットはそのままにして納めた。石を戻したところで、別に客がきたようだった。
「おや？　今井さんのところに参るなんて、彼女とはお知り合いで？」
声をかけられたため、横目でチラリと相手を見ると、どうもこの寺の住職と思わしき人物のようだ。歳はもう７０は過ぎているだろう。
「いえ……直接の知り合いというわけでは……」
「うむ。彼女ももう亡くなって十二年になるからね。全く、あの事件は本当に悲惨だった」
住職（俺はそう決めた）は遠い目になり、当時を思い出しているようだった。
「……どんな人だったんだ？」
「ふむ、夏姫さんのことかね。彼女とは特別仲が良かったわけではないからの」
「そうですか」
「まぁ、人づてには良く聞いたがのう」
「人づて？　そいつは佐竹という名前じゃぁなかったか？」
「おお、おお、そうじゃそうじゃ。佐竹という名前じゃった。ほぼ毎月、命日の２３日は来ておったよ」

「毎月……余程、大切な人だったんでしょうね」
「うむ、そうじゃったんじゃろうの。なんでも、一度は結婚も考えたそうじゃからのう」
「結婚だって？」
こいつは驚いた。まさか、結婚まで考えているほどの仲だったとは。
「じゃけど、なんとも酷い話での？　夏姫さんには、元々一緒にならないといけない相手がおったそうでのう。所謂許婚じゃな。
佐竹という男は、それを破棄させてでも一緒になろうとしたらしいんじゃが……」
「その結婚相手というのは、誰か分かりますか？」
「残念ながら名前まではもう覚えとらん。じゃが、確か一昨日あったビル爆発事件あるじゃろ？　あのビルの社長の息子じゃったな」
住職の言葉にまた驚いた。つまり、あの老人の子供ということか。
「しかし、その子供も死んどるんじゃよ。これまた、何者かに襲撃されての……」
「九年前……ですか？」
「おお、良く知っておるのう、お若いの」
「まぁ、ちょいと心当たりがね」
九年前といえば、あの老人が組のトップに立った時だ。そして、その襲撃者を撃退したのが佐竹だったというわけだ。
ニーロは確か、一芝居うっていたかもしれないと言っていた。証拠なぞないが、間違いないだろう。息子を殺させ、自分がそこに颯爽と現れる。そして、その襲撃者を返り討ちにして、あの老人に取り入った佐竹の姿が思い浮かぶ。
住職の話からだと、当時の状況がいまひとつ正確に掴めないので分からないが、もしかしたら、その襲撃者というのも佐竹で、秘密裏にあの老人の息子とやらを、始末しているかもしれない。
「じゃが……あまり死人の悪口は言うものではないが、この息子というのがどうしようもないドラ息子でな。元々夏姫さんとの結婚も、

このドラ息子が無理矢理に婚約させたという話じゃったし……無理矢理というよりも、半ば脅しじゃったそうじゃ。

社長である親父さんも知っておったのかもしれんのう」

「脅し……」

「この息子が亡くなってから、かなり悪どいこともやっておったと聞いての、まぁ、何と言うか……やはり、自業自得、因果応報というものなんじゃなぁと思ったものじゃよ」

住職は、わしもまだまだじゃなと苦笑いを浮かべた。それにつられて、俺も苦笑いで返した。

そのドラ息子もあんたがやったのかは知らんが、全く、目的を達成できたあんたには頭が下がる思いだぜ、佐竹さんよ。

「ところで、お若いの。墓参りに来たということは何かしらご縁のある方か？」

「まぁ、そのようなものです」

「そうかそうか。佐竹とやらは元気にしておるかいのう？」

「……ええ」

「ほっほっほ、それは良かったわい。あの男は、妙にほっとけんでな」

住職は良かった良かったと、手を叩きながら笑った。もう死んでいるのだが、わざわざ言う必要もないかもしれない。

「すみませんが、俺はこれで」

「もう行かれるかね。年寄りのざれ言に付き合ってくれてもうて、すまなんだのう。佐竹にもまた来るよう伝えておくれ」

「……はい」

住職の顔を見ずに、俺は今井夏姫の墓に目をやって寺を後にした。

俺が尾行されていることに気付いたのは、寺を後にしてしばらくしてのことだった。

人数は二人だ。後ろ数メートルのところをゆっくりになったり速くなったりと歩いているが、間違いない。もう一人は、車道の反対側にほぼ平行して歩いている。俺とあまり変わらない年頃の奴だった。

だが、実際には後二人か三人、後こそ尾けてはいないがいるはずだ。スイッチポイントで、その尾行要員とチェンジするのだ。常に同じ人間に尾行させていては、俺のような人間にはすぐに気付かれる。

何者かは知らないが、最悪の状況を考えてそう思った方がいい。あえて今日は、あまり歩かない大通りを歩き、連中の動向を探りながら撒けそうな場所を探す。

こんな都会ではやはりデパートなんかが常套手段ではあるが、最も効率がいい。

スイッチポイントに来たのか、後ろの男が交代したようだった。その瞬間を見計らい、横の大手デパートへ入った。

後ろの奴は追ってくるだろうが、平行して歩いていた奴はこれで撒ける確率は高い。

案の定、後ろにいた奴は大急ぎで店舗の中に入ってきたが、もう一人はまだの様子だ。

エレベーターのボタンを押して、降りてくるのを待つ。後ろの奴をあえて待ち、エレベーターに乗り込む。

尾行者は、エレベーター乗り場には来なかったものの、不釣り合いな化粧品売り場なんかの商品を覗き込んでいた。

六階を示すボタンを押すと、上へ動き出した。尾行者はきっとその階に大急ぎで向かうことだろう。

だが、意味もなく六階を押したわけではない。六階には、もう一つのエレベーターが停まっていたのが分かったからだ。

六階に着くと、反対にあるエレベーターに乗り込んで、今度は地下行きのボタンを押した。

エレベーターはすぐさま下に降りていき、一階を通り過ぎて地下

に着いた。
もう一人が一階にいた可能性もあり、その場合は実力行使で、尾行の目的とどこの組織に所属しているのかを吐かせるつもりだったが、なんとも拍子抜けだ。
このデパートは、地下よりそのまま地下街に繋がっていて、難無く人込みに紛れることができた。
これで、尾行者を撒くことができたはずだ。尾行されている時に感じるような感覚もない。
さて、俺を尾行なんてしようとする連中は何者なのか、考えてみる必要がある。まず、一昨日の夜に雇った連中はどうだろうか。
連中のボスが殺されたことによって、怒りの矛先が俺に向いたというのは考えられなくもない。だが、元より殺したのは俺ではなく、同じ組織にいた側近だったわけで、おまけに時を同じくして、そいつは殺された。
親父を護れなかったと噛み付いてくる奴もいたが、組織の連中も狙撃により始末されている以上、わざわざ俺を尾行してまで報復しようとするのは、いまいち説得力に欠ける。
それに連中が尾行なんていう、ちゃんとした訓練を受けていたとは思えない。
素人に睨みを利かせると同様に、俺のことまで見ていたような奴らに、あそこまで組織だったことはできそうもないだろう。
尾行していた奴らも、そんな雰囲気はなかった。俺に撒かれはしたが、明らかにその手の訓練をした人間の行動だった。よって、あのヤクザものの仕業ではないだろう。
ならば、組織に組していながら、あまり組織そのものに依存していない俺に、ついに組織が反逆者としての烙印を押したというのは？
いや、だったら最初から尾行をつけるのは、理屈に合わない。多分、そうなる前に何かしらアクションがあるはずだ。真紀が来るなり、もっと直接的なことをだ。
尾行するということは、単純に対象の行動と目的を知るための諜

報活動の一環なので、組織がそんな面倒なことをするとは、とてもではないが思えない。

まぁ、一昨日の件で要注意人物という、なんともありがたいレッテルを貼ったということもないかもしれない。

一昨日の夜に佐竹を撃ち、傴僂（せむし）の棒だった二人を撃ち殺した奴らの仲間なら、どうか。

……いや、これはあまりに全体が不鮮明すぎて分からない。あの場にいた俺を、あのヤクザ連中の仲間と思って付け狙っているというわけだ。

だが、それも納得のいかない話で、元々佐竹やあの連中を狙っていたとして、その護衛に別口で雇われた俺のことを、調べていないとは思えない。ターゲットを始末した後、別に俺を始末する必要性はそこまでないはずだ。

関係者は全員始末するという完璧主義者で、殊勝な心がけを持っているなら別だが。

最後は、やはり警察だ。この手の訓練だって受けている奴もいるだろうし、俺を一昨日の事件の重要参考人とみて、尾行した。

これならつじつまが合う。ついに俺も表世界の番人のリストに載ったというわけだ。俺を売ろうとする連中なら、あのヤクザ連中を含めいくらでもいるのだから、リスト入りするのだって、有り得る話だ。

……やれやれ。今日は年に何度あるかもわからない気分の良い日だというのに、台なしにしてくれる。

まぁ、いいさ。警察だろうがなんだろうが、俺を捕らえようというのなら、容赦はしない。捕まえられるものなら、捕まえてみるがいい。

俺はまた一悶着ありそうな予感に、ため息をついた。

午後になり、俺は郊外にあるアジトにきた。
組織のやつから連絡があったためだ。今日は一日、のんびりしようと思っていた矢先にこれだ。
「よう、九鬼」
「なんだ、あんたも呼び出されたのか」
「まあな。そう言う君こそ、一昨日、あんな事件に巻き込まれたのに大変そうだな」
「まぁ、仕事というなら仕方ないさ。そっちこそ、ヨーロッパでの諜報活動は、随分だったそうじゃぁないか、田神（たがみ）」
アジトに着いた俺を出迎えたのは、やはり組織の工作員である田神だった。
歳は俺よりも一つか二つ上だと思われる田神という男は、知り得る限り、最高のエージェントだ。とても不思議な男で、あまり人を信用しない俺が、一目見てこの男のことを信用させたのだ。
素性が全く知れない男で、下の名すら知らず、前に真紀にもそれとなく聞いたことがあったが、真紀も知らないということだった。それゆえ用心深くなっていた俺ですら、気付けば気を許していたのだ。
そう、過去に何をやっていたのか自分からは頑なに話そうとしないので、全く素性が知れないというのを、それがまた強調させていたのだ。
だが、一度気を許せばどうでも良くなり、聞かないようにした。組織としても、使えるならなんでもござれだから雇ったのだろう。
「ああ、終わってつい二、三日前に戻って来たばかりでね。そしたら、君の話が飛び込んできた」
田神は顔を少しだけしかめるようにして、笑った。その顔は、どことなく優男のようにも見えなくもない。
だが、何年この世界でやってきたかは知らないが、やはりその顔にはしっかりと生き抜いてきた証として、うっすらと傷が入っている。

まともに生きていたら、モデルかなんかで生計が立てられたかもしれないような、端正な顔立ちをしている。
「あんたがここにいるってことは、今回はかなりのものか」
「買い被り過ぎだ。まぁ、いつも以上に危険になるかもしれないな」
「そうか……まぁ、せいぜいあんたの腕と運に便乗させてもらうさ」
俺は笑いながら肩をすくめた。過去、何度かこの男と組み、困難と言われた仕事を熟してたことがあったが、この男と組むと不思議なほど安心感があるのだ。
保証などあるわけでもないのに、絶対に大丈夫だという気になるのだ。だから、今回もきっとうまくいくと俺は踏んでいる。
「来たわね」
部屋の奥から、真紀が現れた。この女は俺よりも若いながら、現場を指揮するチーフのポストについている。
まぁ、実際この世界では年齢による優劣など全くないと言っていい。もちろん、経験による差ができるのは当たり前なので、そこで多少は年齢でチーフが選ばれることはある。
真紀はそういう意味において、逸脱しているのだろう。圧倒的な能力があるからと言っても、それが指揮官として、能力が必ずしも高いとは言えないのは、どこの世界でも同じだ。
プライベートならこの女の指示になど従うつもりはないが、仕事となれば話は別だ。
まぁ、チーフとは言え、軍隊そのものを扱うようなものではないので、いざ作戦が始まればよほどのことがない限り、チーフの死がチームの死に繋がるわけでもない。あくまでまとめ役であり、作戦の立案者であることに過ぎないのだ。
つまり、最終的にはチームの誰かがしっかりと仕事をこなし、生き残りさえすればいいわけだ。小数精鋭であれば、なおのことだ。
それはさておき、今回の任務はある企業への潜入・目標物の奪取だ。この世界に入って驚かされたのは、一般の企業であるはずが、実際にはそれを隠れみのにして悪どいことをやってる連中が、なん

とも多いことだ。
　もちろん、下請けの会社はそんなことに加担しているとは知らず、クライアントの指示を仰いでいるわけだが。まぁ、経済とはそうやって成り立っているのだから、それに関して文句は言わない。
　だが、知らずとは言えそれに関わった以上は、場合によっては命を落とすことになったとしても、それもまた然りだ。
　……もちろん、こちらの邪魔さえしなければ、こちらとしてもむやみやたらに始末するわけではないが。
「今回の目標はＡ県Ｎ市にあるのだけど、情報では、向こうも私設警備隊を常時配置しているとのこと。
　警備隊とは名ばかりで、実際には、軍隊と言ってもいい。かなり訓練された者たちで構成されているらしいわ」
「決行は？」
　田神が聞く。俺もそれに軽く頷きながら、真紀を見た。
「明後日の２４００時よ。２４００時に、目標のビルは一旦システムが切り替わるわ」
「切り替わる？　夜は私設隊のお出ましというアナログになっちまうのか？」
「そう。厳密にはその地下のシステムが、ビルと今回の目標を護衛することになるの」
「なるほど。私設隊はそいつのお守りってわけか」
　真紀は目で肯定しながら、説明を続けた。
「もう一つ。まだ未確認情報だけど、同じ時に別の暗殺者が来るかもしれない。もちろん同じ物を狙ってね。
　渡せる物ではないので、遭遇した場合は即座にこれを排除すること。いいわね？」
「基本的には、いつもと変わらないということだな」
「Ｎ市でのアジトはここ。明後日の昼すぎまでには集合。以上よ」
　そういって真紀は、アジトの場所が書かれた紙を俺と田神に渡した。見ると、ターゲットとなるビルに程近いホテルの一室のようだ

った。
田神は、受け取るだけ受け取ると内容を一瞥し、その紙をすぐにライターを使って燃やした。
この男は異常なほど記憶力が良く、一度暗記してしまうとほとんど忘れないのだという。なんとも羨ましい話だが、その正確さには俺も驚嘆したほどだ。もしやこいつの頭の中は、コンピュータなんじゃないかと思って聞いてみたことがあったが、ただ肩をすくめて笑うだけだった。
田神いわく、本来人間に備わっている能力なので、別にたいしたことではないという話だったが、この男は自分ができるため、皆もできるはずなのだと言っているようにしか、俺には聞こえなかった。
そんな能力を含め、得体の知れない男なのだ。
それを見ながら真紀は、では解散と短く告げたのだった。

第21章

今俺が向かっているのは、都市の郊外にある住宅街だった。
アジトを出たときに、車で来ていた田神は俺を送ると言ってくれたが、辞退しておいた。普段なら、ありがたくその好意に甘えるところだが、今日はなぜかそういう気分にはなれなかったのだ。
今日の俺は、本当にどうかしているのかもしれない。朝はあんなに気分が良かったはずなのに。
目的の場所から1キロほど離れたところでタクシーを乗り捨て、そこからは歩いていった。
（ここはいつ来ても変わらない……）
目の前には、かつて俺が通っていた中学校があり、グラウンドでは野球部とサッカー部が練習しているところだ。
この中から、いずれはプロの選手として活躍するような者が出るだろうか、そんなことを考えていると、サッカー部で指揮をとっていた教師と思われる男が、こちらによって来ていた。
「九鬼……おまえ、九鬼じゃないかっ」
突然呼ばれて眉をひそめると、その人物は中学校の時に俺の担任だった。
「先生……か。久しぶり」
「ああ、ああ、本当に久しぶりだな。今日はどうしたんだ？」
「ああ、卒業以来だな。まさか、まだここで教鞭とっているとは思わなかったよ。
まぁ、ここに来た意味はないよ。ただ、なんとなくってやつかな」
「こういう時は、お世辞でも俺に会いに来たっていうもんだぞ、九鬼」
八年ぶりに会うというのに、この教師は説教してきたがその顔には、懐かしの生徒が訪ねてくれたことに綻ばせている。

「いつだったか、誰かにも同じようなことを言われた気がするよ。やっぱり、まだサッカー部の顧問、していたんだな」
　くっくっくと肩で笑った。この先生は全く変わってない。それが妙にくすぐったくもあり、嬉しくも感じたのだ。
「ああ、今年のやつらは良い選手が揃ってるからな。もしかしたら全国だって夢じゃない」
「ほう、俺たちの頃とは大違いだな。俺たちの頃は、この地区じゃぁ最弱だったと思ったが」
「まあ、俺もあの頃はまだ顧問として、まだまだだったということもあったしな……というか、良くそんなの覚えてるな」
「まぁな。確か最後の夏、一勝もできなかったんだよな。関係のない俺だって覚えてるさ」
　ニヤリと笑いながら、担任を射抜く。
「古傷をえぐってくるのは相変わらずだな、おまえは。……しかし、おまえ今どこに住んでるんだ？　もしかしてまだこの近くか？」
「街の方に住んでる。戻って来たのは一年くらい前だ」
「そうか……おまえも、あの頃は大変だっただろうからな……あ、すまん。失言だったな……」
「いいや、構わないさ。事実だしね。ま、本当のところは思い出の地巡り、みたいなものかな」
「なんだったら、上がっていくか？　まだ、おまえ達が世話になった時の先生方もいるぞ？」
　バツの悪いような顔をして、俺は首を振った。ここに来たのだって偶然に過ぎないし、ただ単に目的地の通り道だっただけなのだ。
「そうか、分かった。……だが、九鬼。もうおまえとは直接関係があるわけではないが、なにもかもしょい込むものじゃないぞ。
　何年経とうが、おまえは俺の教え子だ。何かあった時は俺を頼れ。おまえは昔からなんでも一人で突っ走るんだから」
「ああ、分かってるよ先生。それより、そろそろ行った方がいいんじゃぁないか？　後輩達がこっち見てんぜ」

「おっと。どうする？　もう行くか」
「ああ、時間も限られているからな」
「そうか……分かった。じゃあ、おまえも気をつけてな」
「ああ。先生も全国行ってくれよ」
そういって俺はこの場を離れた。担任は、俺が見えなくなるまで見送ってくれていた。

少し小高い丘の上を線路沿いに道がのびている。かつては、この道を三年間行き来していたのだ。
最後の一年は、沙弥佳とともに歩いたのを思い出す。丘を降りきると、今度は駅のロータリーへと続いていくのだ。
ここでは、良く沙弥佳が駅が近づくにつれ、寂しげな表情をしていたのが思い出される。
そして駅を過ぎると、道はかつて住んでいた家へと続く。
色々な話をしながら、登下校していたのだ。内容は他愛もないものばかりで、その日何があっただとか、明日はあれがあるだとか、今日の夕飯はなんだとか……。この数年間、沙弥佳とそんな話をしていたことすら忘れていた。
思いに耽っているうちに、いつの間にか家の前についていた。敷地に入る前、やや遠目にかつての我が家を見据えた。
現在は、うちの遠い親戚がこの家の管理人になっているため、鍵やなんかはまだそのままのはずだ。門には錠が下りていたが、俺は気にせず門を乗り越えた。
管理人が変わってはいても元は自分の家であり、名義もまだ親父のままになっているはずだ。
「鍵も変えられてなけりゃぁいいんだが……」
ポケットから鍵を取り出して、鍵穴に差し込んだ。そのまま捻るとカチャリと音をたて、鍵が開いたのが分かる。
約四年ぶりに我が家のドアを開くと、むわっと埃っぽい臭いが鼻孔をつく。俺は構わず中に入り、ドアを閉めた。

引越しに伴い、中には一切物は置かれていない。靴を脱いであがろうとしたが、その埃のためにそれはためらわれたので、そのままあがった。その足でリビング……かつての居間へ足を向けた。埃の上をそのまま踏み締めているため、足跡がうっすらと出来ている。

かつてのリビングに入って、何もない部屋の真ん中まで行き、部屋の中をぐるりと見渡す。家具が何も置かれていない我が家は、とても我が家とは思えず、何の感慨も沸かなかった。

俺は何も考えずに二階へと向かう。途中、階段の踊り場の壁に、カッターで切ったような傷が目に入った。かつてガキの頃に、俺がいたずらをして切ったものだ。しゃがみ込んで、それを懐かしむようにその切れ目に触れた。

確かこいつを作った時、後で親にこっぴどく怒られて、それを見ていた沙弥佳がなぜだか泣き出してしまったのだ。

（懐かしい）

もう一度、その切れ目をさすって二階へとあがった。まず手前にあるのが、俺の部屋だった。ノブを廻してドアを開ける。どうやら二階は、一階ほど埃はたまっていないようだ。

部屋の中には一階同様なにもない。中に入ることはせずに、そのまま隣の部屋の前に移動した。

隣の部屋の前にきてノブを掴みはしたが、廻すのに少しためらった。部屋の主はもういないのだから、ためらう必要などないのに、おかしな話だ。

思い切って、ドアを開ける。やはり同様にほとんど何も置かれてはいない。だが、一つだけ置かれているものがあった。

沙弥佳が使っていた机……これただ一つだけが置かれていた。もう使う者がいないのだから、置いておく必要はないのだが、俺がどうしても置いておきたいと親父に懇願して、そのままになっているのだ。

その机とワンセットで置かれている椅子。俺はその椅子のところまで行き、埃が溜まっていることなど、お構いなしに座った。

机に触れていると、やはり記憶の中から沙弥佳のことが奔流となって次々に思い出されてくる。

この机を買ってもらって喜んでいたこと。

この机に座って勉強していた姿。

分からないことがあった時、わざわざ俺をここに呼んで勉強の面倒を見させたこと。

時には、俺の部屋に来て教えを乞いにきたこともあったな。

この机で一緒に互いの宿題をしていた時、手を上げた拍子に沙弥佳の目の付近に当たって、泣かせてしまったこともあった。

勉強に疲れたのか、机に伏せたまま寝ていたこともあった。

そんな忘れていた些細なことが次から次へと記憶の彼方から甦ってくる。そうこうしているうちに、大分日が傾き始めていた。

部屋の中を行ったり来たり、椅子から立ったり座ったりを繰り返していたのだ。多分、二時間かそこらはいたのだと思う。

思えば、まともに食事をとっておらず、腹も空かしていたのだ。

明後日までまだ時間はあるが、やっておけることがあれば、やっておくべきだろう。時間など、あっという間なのだから。

「……じゃぁ、また来れたら来る」

俺は目を細めながら誰もいない部屋を一瞥し、一人ごちた。

一日明け、明日のための準備をした。

尤も今回の作戦は海外というわけでもない。持っていくのは代えの下着や服くらいなので、ほとんどないのだ。

武器も数日前に手に入れた拳銃があるし、今回は組織からの支給品もある。今回ばかりはあまり支給品を使わない主義の俺も、使わざるをえないだろう。

真紀は明日の午後までには来いと言ってはいたが、できれば今日の夜には出た方がいい。作戦とは言え敵の本拠に乗り込もうとする

のに、悠長なことはしたくはない。何があるか分からないのだ。
いつものように昼近くまで寝ていた俺だったが、起きてからはすぐに出発の準備に取り掛かったのだ。
さて、持っていく物はたいしてないのだから、出発するとしよう。俺は、N市までは久しぶりに車で行くことにした。高速を使えば、ものの数時間で着くはずだ。それまで適当なところで時間を潰すとしよう。
最低限の所持品を詰めたサックを持って、部屋を出た。まぁ、暇潰しといってもやることなどほとんどない。やはり、酒しか俺には思い浮かばなかった。
またあの女狐にあれこれ言われそうなのが釈然としないが、まぁ、いい。まだ早い時間だが、サバカ・コシュカに行ってみよう。夕方からのはずだが、もう開いているかもしれない。
なぜあんなに早くから人がたくさんになるのかも、なんとなくだが気にはなる。どうでも良いことなのだが気になることというのは、まさに暇潰しには持ってこいだろう。
開いていなくても瑣末な問題だし、場合によってはジュリオの店に……と行きたいところではあったが、これからしばらくは、あそこには行けなくなったのをすっかり忘れていた。
地下鉄から降りて、サバカ・コシュカに向かう。昼下がりの時間も過ぎて、そろそろ店支度を始めている頃かもしれない。
その時、携帯の着信音が鳴った。
誰だ。俺はどことなく不機嫌になりながら、電話を取り出して液晶に表示されている文字に目をやった。
「……？」
手の中で鳴り続けている携帯を見ながら、俺は考えた。表示されている番号は全く知らない番号だった。０８０から始まる番号なので、携帯であることは間違いないようだが……。
一体誰だろう……。昨日尾行されていたことを思いだし、取るべきか取らざるべきか思案していたところ、着信がおさまった。

俺はここ数日、色々とあったせいでより慎重になっているみたいだ。いかんせんこの番号の主に心当たりがありすぎるのだ。

そういう時は出ない方がいい。知らぬが仏という諺があるように、知らずに物事が過ぎていれば仕方なかったと思えるだろう。

まぁ、そうでなくなればなくなればだ。もし、俺の知り合いであればまたかけ直してくるだろう。

そう思い、俺は番号にかけ直すことはなかった。仕事ならあの女から連絡がくるし、もし別の奴からにしろ、出なければ面倒に巻き込まれることもないだろう。俺なりの防衛策というやつだ。

気を取り直し、サバカ・コシュカへと歩みを早めた俺は、またとんでもないものと遭遇した。あのたまり場の前に、店主のロシア人とジュリオとともに綾子ちゃんがいたのだ。

……なぜ君がここにいるんだ。

「あ……」

俺を見た綾子ちゃんは、嬉しそうに顔を綻ばせて頬を紅潮させていた。

「……どういうことだ」

「いきなりご挨拶だな、クキ。こんな美人を待たせてるなんて、おまえも隅におけないな」

親父がニヤリと唇を歪めながら、冗談を言ってきた。

「おークキさーん、あやこさーんがお待ちかねよ」

「……別に待っててくれなんて言った覚えはないがな」

「なんでぇなんでぇ、クキ。せっかくこんな美人がおまえを待ってたってのに、そいつは酷いと思うぜ」

「そんなことより、なんで綾子ちゃんをここに連れて来たんだ？」

不機嫌そうに口調を尖らせて、ジュリオに詰問した。大方、昨日俺が連絡しなかったために、綾子ちゃんがジュリオに問い詰めたんだろう。元々、この店を俺に紹介したのも外ならぬジュリオだったのだ。

そうだと分かってはいても、問い詰めずにはいられなかった。

「クキさーん怒らないでよ。仕方なかったのよ、不可能力よ」
……ちっ、それをいうなら不可抗力だ。内心毒づくようにツッコミを入れて、綾子ちゃんに詰め寄った。
俺には、この子の考えていることが判らない。もちろん、彼女が俺を想ってくれているのは分かる。
だが、そうだとしても迂闊に綾子ちゃんに連絡をとるのはまずい。そう判断したからこそ連絡しなかったのだ。それが分からないほど、この子は馬鹿ではないはずだ。もう俺の出した答えが分かっているはずだろう？
「……なんできた」
顔を紅潮させている綾子ちゃんとは逆に、俺の気持ちは冷ややかになっていくばかりだ。
それを感じとったのだろう、綾子ちゃんはわずかではあったが怯えたような顔をしてみせながら、しどろもどろに言う。
「……え、えと……き、昨日連絡待っていたんですけどなかったから、それで……」
「それでジュリオに頼んで、ここを教えてもらったってわけだ」
「はい……」
俺の呆れているとも怒っているとも取れる問答に、綾子ちゃんは申し訳なさそうな表情になっていった。
さすがに親父やジュリオも、俺のそんな態度に悪気を感じているようだった。あるいは、なぜこんなにまで怒るのか分からずに、困惑しているといったところのようだ。
俺がここまでの態度を見せるとは思わなかったんだろう。
「あ、あの、ごめんなさい……突然来てしまって……」
「……まぁ、いい。来てしまったものは仕方ない……」
「……九鬼さん、あの本当に」
「いい。昔も言ったろう、そう何度も謝らなくていい」
ぶっきらぼうに言い放ち、彼女から視線を外した。
だが当然というべきなのだろうが、綾子ちゃんの表情が元に戻る

ことはなかった。
（くそっ、苛立ってやがる）
「ま、まぁ、なんだ。一度中に入れよ」
この空気に耐え兼ねた親父は、俺達を店の中に招き入れた。
直あまり中に入りたいとは思わなかったが、なんとなくそれに従ってしまった自分に、内心で舌打ちする。
「……」
「……」
綾子ちゃんと俺は親父に勧められ、店の端にあるボックス席に座った。相対するような状態で座ったため、互いの些細な変化などが良く分かる。
しかし、何を話せばいいか分からない俺はなんとなく不機嫌そうに、開店準備をしている親父を遠目に観察していた。
ジュリオも手持ち無沙汰なこともあって、親父を手伝っている。いや、きっと俺達二人のことが気になっているのだろう。
綾子ちゃんも同じようなものなんだろう、落ち着きなくそわそわと俺の顔を一瞥しては俯き、一瞥しては俯くという行為を繰り返している。時折、何かを話そうと口を開きかけるが、次の瞬間にはその可愛らしい口を閉じた。
しかし、どれほどそうしていただろうか。綾子ちゃんは、意を決して話しかけてきた。
「あの、九鬼さん……」
「なんだ」
「……怒ってますよね。……本当は、分かっていたんです……きっと連絡してこなかったのは、そういうことなんだって」
「だったらなぜ来たんだ。俺が連絡しなかったことが分かるというなら、その意味も判るだろう？　だったら」
「だって！」
綾子ちゃんは俺の言葉を遮り、唐突に声を荒げた。
そのまま綾子ちゃんは一旦言葉を止め、一拍おいてからまた口を

開いた。俺の目をしっかりと見据えて。
「だって、九鬼さんに逢いたかったんだもの。ずっと、ずっと探してた……。
九鬼さんがいなくなって、九鬼さんが行きそうな場所、九鬼さんを見かけたって聞いた時にはそこまで行ってやっぱり探して。でもやっぱりダメで……探偵さんまで雇ったんですよ？
もし探偵さんが駄目だったら諦めようって思ってた。でも、結局見つからなくて……。だからもう諦めるしかないって言い聞かせてた！」
綾子ちゃんは一気にまくし立て、気付けば席を立っていた。
「だけど……だけどやっぱり無理だった！　諦めるなんて無理だったの！　寝ても覚めても、いつも考えるのは九鬼さんのことばかり。もう、自分がどうかしちゃったんじゃないかって思うくらいにっ。苦しくて……哀しくて……辛いから他の男の人を好きになろうともしたっ。
……でもね、無理だったの……どうしても九鬼さんと比べてしまうんです。その人と九鬼さんの差を、違いを探してしまうんです。自分でも分かってますよ？　そんなのおかしいって。全く違う人を比べるなんていけないことだって。でも、でも……」
「綾子ちゃん……」
大きく見開かれた目には、涙が浮かんでいる。それを見た俺は、何も言えずにただ彼女を見つめているだけだった。
「だから……だから一昨日九鬼さんと再会できて本当に嬉しかったの……」
「……」
くそっ、こういう時なんて言えばいい……言葉なんていらないのか？　抱きしめてやればいいのか？
分からない。俺はどうすればいいんだ。
俺は君の好意を一度ならず、二度も無下にしたような男なんだぞ。なんでそんなことが言えるんだ……。

思えば俺は、今まで一度だってこんな感情をぶつけられたことがない。せいぜい、どうしようもない殺意くらいだ。

そのうちに綾子ちゃんは席に座った。しかし、涙をにじませたその目だけはしっかりと俺に向けられている。俺はその視線に耐え切れず、顔を背け誰もいなくなっていたフロアを見た。親父もジュリオも奥に引っ込んでいるのだろう。

だが、いつまでもそうしているわけにもいかずに、綾子ちゃんの方に向き直った。ふと、その視界にどこか見覚えのある物が映ったのだ。

「……綾子ちゃん、それは……」

「え？」

俺の見たもの……それは、綾子ちゃんの前髪を留めるためにつけられていた髪留めだった。そのデザインに見覚えがあったのだ。

「……その髪留め……。まだ持っていたのか」

「ぁ……はい」

綾子ちゃんは指摘され、手でその髪留めにそっと触れた。今まで全く忘れていた。そのせいか、そんなものが髪に留められていたことなど、気にも留めなかったのだ。

（なんで君はそんな顔ができるんだ）

綾子ちゃんはどことなく懐かしそうに、嬉しそうに髪留めに触れていた。

「……俺の……俺の中では君との関係は、もうとっくの昔に終わっていたものだと思っていたんだがな」

「そう、ですか……」

髪留めを見せれば、自分の想いに気付いてくれると思ったのだろうか。そんなの、再会した時から分かってるのに……。

俺の言葉を聞いた綾子ちゃんは、哀しみの表情を浮かばせ顔を俯かせる。頼むからそんな顔をしないでくれ。今更君とやり直したいだなんて言えるわけがないんだ。

それに……俺は、君のその純粋な想いには応えられないんだ。俺

達はあの時、あの事件のせいでもう戻れなくなってしまったんだ。
だから、頼むから、そんなにまで俺を引きずらないでくれ。
くそっ。なんで、なんで君はまた俺の前に現れたんだ……君の、俺を想う気持ちがそうさせたのか？
第一、俺は君を幸せにできるような奴じゃないんだ。俺と一緒にいれば、君はもうこの暗い世界からは抜け出せないんだ。
「……迷惑、ですか？」
「……」
何を迷ってる。迷惑だと言え。そうすれば、彼女も諦めるだろう。
「……私じゃ九鬼さんの心の隙間を埋められませんか？」
「……」
そうだ。言うんだ。君なんかには無理だと。そうすれば、きっと彼女も、もう俺に縛られることもないはずだ。
綾子ちゃんはふいに席を立って俺の横までくると、その手でこちらの右手を掴んだ。俺は驚いて彼女の顔を見る。
そこにあったのは、慈愛の女神のように優しくも哀しい微笑みを称えた綾子ちゃんがいた。
「迷ってるんですか？」
「……お、俺は……」
言うんだ。迷惑だと。君に心の隙間を埋められるわけがないと。何を迷うことがある。何をためらう必要がある。はっきりと拒絶してしまえばいい。それだけで、彼女との想いが断ち切れるはずだろう。
俺は君の側にはいれない訳があるんだ。俺といれば君は必ず傷つくことになるんだ。
だから、俺に優しくなんてするな。君が余計に辛くなるだけなんだ。
「……あ、綾子ちゃん……俺は」
拒絶の言葉を告げようとしたその時、頭がふわりと何かに包まれた。包まれた瞬間、とても優しい匂いが鼻孔をくすぐる。

頭だけじゃない。綾子ちゃんによって身体全体が少し傾くように、抱き込まれていたのだ。

「……九鬼さん、無理なんてしないで……。ずっと見てたんですから……そんな顔しないで」

そんな顔？　俺はそんなに酷い顔をしているのだろうか。この優しさに包まれていると、ずっとこのままでいたくなる。

綾子ちゃんの優しさが、匂いが、感触が、体温が、全てが俺に注がれているということがわかるのだ。

いっそ、このままでも良いんじゃないかと思えてきて仕方ないのだ。

抱きしめてくれている綾子ちゃんを、俺も抱きしめようと手を綾子ちゃんの後ろに廻そうとした時、頭蓋の中でもう一人の俺が、俺達の目的を忘れたのかと叱咤した。

「……っ！」

背中に廻そうとした手を、勢いよく綾子ちゃんの体を掴んで引きはがした。その勢いのまま、俺は席を立つ。

言え。言うんだ。そうすれば、もう悩まなくたっていいじゃないか。

「……あ、綾子ちゃん。俺は……」

綾子ちゃんの顔を見るのが辛くて、俺は顔を横に背けながら言った。

「……君が俺の心の隙間を埋めるだって？　笑わせるぜ、自惚れないでくれ。

四年も経っているのに、未だに俺のことが忘れられない？　そういうのやめてほしいね。鬱陶しいだけだし、その髪留めにしたって、俺を感傷に浸らせるための演技なんだろう？　分かりやすすぎだ。

もう君は、俺にとっちゃぁ過去の人なんだよ。そんな人間が今更でてきて、ごちゃごちゃとわけのわからんことを言われたって、迷惑この上ない」

気付けば俺は、綾子ちゃんの顔を見ながら喋っていた。綾子ちゃ

んは何を言われているのか分からないといった顔をしている。
だが俺の口からは、依然として思ってもいないことが次から次へと出て来る。
「いいか、綾子ちゃん。この際はっきり言わせてもらうがな、俺は元から君のことなんざ、なんとも思っちゃぁいないんだ。それを君が勝手に勘違いしちまっただけにすぎない。
確かに君のことは嫌いじゃぁなかったぜ？　だが、それはあくまで妹の友人としてだ。
君がストーカーに遭っていた時も、沙弥佳に頼まれて手伝ったにすぎないし、勘違いした君は、あの後も図々しくも家に泊まりに来てたよな。まぁ、君は一人っ子で、おまけに家には両親もほとんど寄り付かなかったわけで勘違いを起こしたのも仕方ないとは思うがな。
だが、そんな勘違いした気持ちをいまだ引きずって、今度は君がそんなストーカーじみたことをやるだなんて、世話ないぜ」
さきほどまでと打って変わって、綾子ちゃんはみるみるうちに顔面を蒼白させている。ぶるぶると震えだし、泣きそうな顔になっていた。
俺は、なぜかとても冷静にそれらを見ていた。きっと、顔も感情なんてものは感じさせないほどの冷静さを見せていることだろう。
「ぁ……わ、私、そんなつもりじゃ」
「じゃぁ、どんなつもりだったんだ？　相手が迷惑だって思ってるんだ、こいつは十分なストーカー行為と見なすこともできるんだ。
君は以前も俺が放っておいてくれと言ったのに、家にずかずかと入りこんで俺を慰めようとしていたよな。あれ、本当に嫌だったんだがな？
この女どうしようもない奴だな、なんて思ったものさ。で、また君はそんなことをやらかそうとしているわけだ。まぁ、あの時は俺も誰かそばにいてほしいと思ったし、仕方ないといえばそうなのだろうが。

しかし、たかだか妹の友人ってだけでそんなことをやられた日にゃぁ、こっちもうんざりするぜ」

もう綾子ちゃんは涙を流して泣いていた。それでも、まだ信じられないと、目を大きく開かせている。

「君は昔も良く泣いていたよな。だが、泣きたいのはこっちだ。……全く、もう付き纏うのはやめてくれ。俺はもう君のことなんて、なんとも思っちゃぁいないんだしな。いいな？」

俺は言うだけ言うとサックを掴んで綾子ちゃんの横をすり抜け、店を出ようとした。

「ま、待ってください！」

後ろから声がかけられる。そこには、なんとも言えない必死さが感じられる。

「……まだ、何か言いたいことがあるのか？」

俺は心底、うんざりしたような態度で振り向いた。綾子ちゃんが叫んだことで、奥にいた親父とジュリオが顔を覗かせた。

綾子ちゃんはその涙を見せまいと、両手を使って何度も拭っている。

「……う、嘘ですよね……？　今言ったこと……。私のことを思って、心にもないことを言ったんですよね……？

ううん、絶対そう。あの優しい九鬼さんがそんなこと言うはずないもの」

チクリと胸の奥が痛む。

（変わっていないな。そんな風に、芯が強いところは）

内心、そんなことに懐かしみながらも嬉しかった。やはりこの子は分かってくれている。だからこそ、こっちの世界に引き込んではいけない。

「君は俺のこの態度が、そんな風に見えるのか？」

努めて冷静に、他の殺し屋と対峙する時のような態度で、綾子ちゃんをみた。

こんな俺を見たことがないはずの綾子ちゃんは、さすがにたじろ

いでいる。
「で、でも、さっきは……」
「あれは君がどうしようもない女だったから、うんざりしていただけだ。勘違いするなよ」
「そんな……」
「まぁ、今度こそ本当に会うこともないだろうが、もし見かけたとしても話しかけてこないでくれ」
俺は今度こそ店を出た。
……きっと彼女は泣いているだろう。それとも、泣くことすらできずに、茫然としているだろうか……。あれだけ、悲しく辛そうに泣いていたのだ。これでもう俺に近づくこともないだろう。
俺なりの迫真の演技というやつだ。君は、俺なんかにいつまでも縛られていてはいけないんだ……。
「……この世界から足を洗った後は、演技の世界にでも入ってみるのもいいかもな」
一人馬鹿なことを呟きながら、俺は明日の仕事のためにN市に行くことにした。
言い訳だというのは分かっている。とにかく、俺は一刻も早くこの場から離れたかった。

第２２章（前書き）

死体の描写あり。

第２２章

テレビの上に置かれたデジタル時計を見ると、ちょうど十七時になろうとしているところだった。

俺は今、Ａ県Ｎ市内のホテルにいる。そのホテルのスイートで、何も考えるでもなくぼんやりとテレビを眺めていた。

『三月×日の夕方のニュースです。今日、午後二時頃――』

抑揚のない完璧なアクセントで、ニュースキャスターが今日起こった出来事を読み上げている。

それによれば、Ｍ県Ｓ市で一家心中があったらしい。この昨今、別に何があろうと特別驚くようなことなどない。だというのに、この手の事件はなぜだかやたらと興味をひきたてる。やはり、自身が家族離散というのを体験したからだろうか。

寝座（ねぐら）にテレビはおいていないので、最近起こっているような事件など知りようもないが、毎日のようにどこかで事件があるのだ。

こんな世界に身を置くと分かるが、とんでもない世の中だ。暴力の世界であれば人の死なんてものはいくらもあるからいいが、そうでもない表社会でもそれが起こるのだ。この世の中のモラルというのは、本当に地に堕ちたものだと思う。

まぁ、ユダヤ人が考え出した聖典にすら殺人はあるのだから、それが現代にあったにしても不思議はないのだろうが。

そんなことをぼんやりと考えていると、ドアが開かれて真紀と田神の二人が部屋に入ってきた。

「よう、偵察ご苦労さん。どうだった？」

四人掛けの高級そうなソファーに腰かけたまま、頭だけ後ろに傾けて二人に声をかけた。

「ああ、昼間に内部に忍び込むのは至難の業だな。二十四時ジャストのビル内のシステムが一斉に切り替わる瞬間を狙うしかなさそう

だ」
「まさに情報通りというわけだ」
「しかも、その前から警備隊が駐在することになるわ。さらに、システム内に入るにはカードが必要になる」
「これを通過するには、一人一人のＩＤカードが必要らしい。突入する人数分必要ということになるな」
「ま、実際に突入するのは俺と田神、あんただけなんだろう。だったら二人分なんてわけないさ」
「そのことだけどね、私も一緒に行くことになるわ」
「あんたもか？」
真紀がゆっくりと頷く。
この女が作戦本部におらずに行くということは、内部には色々と面倒な機械がありそうだな。真紀は、元々システムを使って情報の操作をするのが本業なのだ。
どうやら内部は、それぞれの区画できっちりとシステムが分けられているようだ。
「そこでＩＤは各自別行動で手に入れるしかない。最初の扉に行くまでの侵入経路は下水道と非常用通路の二カ所だ。
後は正面突破だが、これでは警備隊の恰好の餌食になる。よって、二手に別れて行動しよう」
「下水道に人員が配備されているとは考えられないが……」
「ああ。だから下水道から侵入する者には、ＩＤは突入直前に手に入れてもらうことになる」
「要するに、扉の前に配置されている奴から奪えということだな？」
真紀と田神が同時に頷いた。
「なら、俺が下水道から行こう」
「あら、あなたが率先してそんなことというなんて珍しいじゃない」
「特に意味はないさ。あんた達はもう非常用の方は熟知してるだろう？　それに真紀、あんたは仮にも女だ。わざわざ女をそんなとこにやるのもどうかと思ったまでさ」

「あなたが私を女扱いするなんて、どういう風のふきまわし？　言っておくけど、おだてたって何もないわよ」
「言ったろう？　特に意味はないってな。気にしすぎだ。第一、俺だってあんたをそんな風に見たおぼえはない」
全く、なんでこの女はいちいち一言多いのだろう。ため息をつきながらチラリと田神を見ると、奴は何がおかしいのかニヤニヤと薄笑いを浮かべている。
「おい田神、何がおかしいんだ」
「いいや、何もないさ」
肩をすくめながら笑っているような奴が、何も思っていないはずはない。しかし、今はそれに付き合うつもりなど毛頭ない。
「で、ＩＤ入手して合流した後は？」
俺はぶっきらぼうに言い、続きを促した。
「ＩＤを使ってビルの施設内に侵入。後は分かっているでしょう？　一番の問題は、入るまでよ。まぁ、あなた達なら大丈夫でしょうけど。
とにかく、目標のフロアである地下５階までは、フロアのシステムをひとつひとつ確実に潰していくしかない。そのためにも、私が必要なのよ、分かった？」
「警備隊をいかにかい潜っていくか、ということだな？　後はあんたがシステムダウンさせている間の護衛……といったところか」
二人はまた一緒になって頷いた。思えば、この二人は妙に息が合っている気がする。阿吽の呼吸とでもいうのだろうか。
「後は準備だけはしっかりしてちょうだいね」
「ところで……ターゲットはなんなんだ？　なんだって良いが、気になるぜ」
俺の問いに真紀は一言、マウスよとだけ答えた。

すでに日は傾いて、外は夕暮れから夜へと変貌しようとしていた。俺は、窓のそばに寄って外を眺めている。

三月もそろそろ中旬に差し掛かっているが、まだ日はわずかに夜の方が支配率が高い。後一月もすれば、多くの人が春を謳歌するのだろう。その頃には、俺が嫌いな桜も今が盛りと咲き誇っているわけだ。

だが今年は例年に比べ、平均日中温度が三度も四度も高いと真紀が言っていた。そのためか、二月はあまり寒いと思えなかったし、春の訪れも早いというわけだが、それだけ俺がイライラとさせられるのも早くなったと言うことでもある。

幸い、この窓からは桜の木は見えないし、見えてもまだ色づいて見えるほど花は咲いていない。

「考えごとか？」

背中越しに声がかけられた。田神だ。首を横にやり、目だけ田神に向けた。

「まぁな……。あんたこそ、もう真紀との逢瀬はいいのか？」

真紀と田神は、何か仕事があったらしく部屋を出ていたが、田神は用が済んだようだ。

「おいおい、俺は彼女とは何もないさ。ただ目的が同じで良く組むことはあるがね」

「目的、か」

俺はそれだけ言うと、黙り込んで窓の外に視線を移した。

「どうしたんだ？　一昨日もそうだったが、君らしくない」

「いや……」

「九鬼、何を悩んでいるかは知らないが、今は作戦前だ。私情だけは持ち込まないでくれよ？」

「分かってるさ……」

しかし、田神はその場を離れようとはしなかった。

そう、この男はなんと言うのだろうか……待てる男とでも言うのか。そんな奴なのだ。俺としてもこんなもやもやとした気持ちを抱

えたまま、作戦に参加するわけにもいかない。
「最近……最近、良く過去の夢を見るんだ」
「夢？」
「ああ。俺がこの世界に入る前のな。……いや、結果としては、この世界に入るきっかけと言っていいのかもしれないな。
おまけにご丁寧にも、過去に起こったことをそのまま、時間も順を追ってさ。自分でも情けないと思っちゃいるんだ、たかが夢にな。
昨日一昨日は見なかったが、そのうち一番辛い出来事も夢に出てくるんじゃぁないかと思うと、気が気じゃぁなくなるんだ。その夢のせいかどうかは知らないが……」
ここまで喋った俺は話を区切った。これ以上はよそう。夢という不確かなものに悩んだあげくに、過去、自分が気にしていた子の話をするなんて、どこの三流小説だ。
「それから」
「……いや、なんでもない。とにかく、そいつのせいで妙に浮足だってるのさ。
全く……見たくないものをまた見なきゃいけないってのは、どういう気持ちになるんだろうな。予想もできはするが、それ以外の感情が沸き起こったりするのだろうか、とね。
この数日間、そんなことばかり考えてたのさ」
俺は苦笑しながら肩をすくめてみせた。田神は笑うでもなく、真剣な顔をしたままだ。
「……君とは初めて会った時から、妙に親近感というのを感じていたが、よくわかるよ。
俺も同じようなことを体験したことがある。いや、今だそう思ったりもするし、夢にも見ることがあるんだ」
「あんたが？」
「おいおい。そりゃ俺だって人間だ、そういうこともあるよ。
……とても大切な人を失った……いまだに夢に出てくる。辛そうな、今にも泣いてしまいそうな表情……必死に俺を求める声……な

にもかもが、いまだに脳裏に焼き付いているんだ。
忘れたくても忘れられない。ふと忘れていた時に夢に出てきては、また俺を苦しめる」
半ば独白のように、田神は自身の過去を語った。
元々は、少し特殊な血筋の生まれであったこと。
将来を有望されながら育ったこと。
渇望し、それでも結ばれることのなかった恋人がいたこと。
何をやらかしたかは分からなかったが、禁忌を犯したために、一族を追われることになったこと。
そのために、ありとあらゆる場所も時間も関係なしに、旅をしなければならなくなったこと……きっと、これがこの男のいう目的なのだろうが。
それがどういうわけか、こんな組織にいるのだ。まぁ、この男のことだから、組織に忠誠など誓ってはいないだろうし、必要だったから身を置いたにすぎないのだろう。
初めて会った時から、なぜかそんなことが漠然と理解できていたように思う。顔をあわせるたびに、田神は俺と同じ人種なのだと思ったものだ。
そして……とても懐いてくれていた、歳の離れた妹がいたこと。
この話を聞いた時、とても他人事とは思えなかったのだ。
田神に妹がいたということに、今まで以上の親近感を感じた俺は、もしかしたら妹のために一族を追われることになったのでは、などと勝手にそう思ってしまった。
というのも、田神が妹のくだりを話した時、妙に懐かしむように話していたからだ。それが何を物語っているかは知らないが、そう感じたのだ。
本人がこれ以上は言わなかったので言及することはなかったが、事実はどうあれ、俺が田神に感じていた一端を知ることができたのは、妙にむず痒くありながら嬉しくもあったのだ。
「そうか。……まさか、あんたに妹がいたとはな」

「別に兄弟姉妹がいたって不思議じゃないだろ？　……まぁ、近年は一人っ子というのも珍しくはないが」
田神は笑いながらかぶりを振った。
「まぁ、そうなんだがな……なんていうのかな。……俺にもさ、いたんだよ。妹ってのがな」
「九鬼にもいたのか」
「ああ……ちょうど六年ほど前の話さ。行方をくらましたんだよ。だがな、いなくなったというだけで、まだ死んでいないはずなんだ。一年二年もする頃には、周りの連中はもう死んだなんて思うようになったらしいがな。
だけど冗談じゃない。あいつは絶対に死んでなんかいない！」
俺は思わず語気を荒げていた。
親父もお袋も、まだ沙弥佳は死んでいないと信じていたが、その手掛かりが全くつかめないでいるとなると信じたくても、信じられなくなっていくのは仕方なかったのだろう。
俺もそう思ってしまいそうにもなった。だが、家族がそれを信じないなど、あまりに沙弥佳が不憫すぎるではないか。
だから、俺は誘われるままにこんな血みどろの世界に入ったのだ。
それを強く思い出すと同時に、チラリとそのために捨てた綾子ちゃんのことが浮かんだ。一瞬、顔をしかめ、頭の中からそれを振り払う。
「そうか……君は妹のためにこの世界に入ったのか」
「……そうさ。笑えるだろう？　女々しいと思うだろう？　だが俺には……俺にとっては、どうあろうとたった一人の妹なんだ」
「別に笑いもしないし、女々しいとも思わないさ。君は本当に妹のことが大切なんだな……」
「ああ……俺はあいつを見つけだし、救い出してやること……今となっては、これだけが生きる意味なんだ。支えなんだ」
「……」
田神はなにも言わず、ただゆっくりと頷いただけだった。

「……すまないな。妙に熱くなっちまったよ。こんだけ言っておいてなんだが、手掛かりなんざ何もないし生死の是非にしたって、俺が勝手にそう思っているだけにすぎないしな……」

「だが……信じていないと縁というのは切れてしまうものだ。こんなこと言うのも何だが、君の妹は幸せ者じゃないか。こんなにまで想われているんだから。

普通なら、泣き寝入りでひたすらに待ち続けることしかしないし、できないよ」

「……」

そうか……分かった。この田神を妙に信頼してしまっている理由。妹の沙弥佳と同じなのだ。あいつにも、妙にその気にさせられる声があった。この男もやはりそうなのだ。妙なところで二人の共通点を見出だした俺は、つい唇を歪めて笑った。

信じ続けているのも辛いが、信じるのをやめてしまうよりはいい。それは諦めだ。いつか必ず見つけ出してやるからな、沙弥佳……。

「この国は、かつては言霊（ことだま）の国だったという。強く言い放つ言葉や、信じ、思い続けているものには力が宿ると信じられていたんだ。

笑うものもいるだろうが俺は、決して馬鹿にできたものではないと思う。事実、人は自分が思い続けていることを馬鹿にされたりすると、つい語気が荒くなる。そうすると、馬鹿にした方が思わず悪いことを言ったと畏縮するものだ。

また、絶対にこうなってやるんだと大声で叫び、それを糧に生きるうちに、本当にそうなってしまうことがある。なりたいものになるというやつだな。これも言霊の一種と言えるだろう」

「つまりは何が言いたいんだ……？」

「妹のための人生……それも悪くないだろうということさ。

君はそのために行動を起こし、妹は生きていると信じ、思い続けている。それは、いつしか現実へと結実していくものだ。その思いが本当であればあるほどね。辛いだろうが、必ずそれは叶うと思う」

言霊だって？　何を言い出すかと思えば……。だが俺は、なぜか

そいつを信じてみても良い気がしていた。
今まで、誰にも打ち明けたことのないことを、素直に受け入れてくれたということもあるからかもしれない。
考えてみれば、綾子ちゃんが良い例ではないか。彼女は、ずっと俺を想って行動し、思い続けてくれていた。だからこそ、また俺達は再会したんじゃないのか……そう考えてしまいたくなったのだ。
運命というものをあまり信じたくない俺としては、まだその方が説明されていて、納得がいく。だったら、俺もまだ信じていくに値するはずだ。
俺は決意を新たに、軽く頷いていた。
「ふっ……少しは気持ちも軽くなったようだな」
「ああ、まぁな。……そういうオカルトめいたことはあまり信用できないが、今はそれを信じてみてもいいような気がしてるんだ」
「そうか……」
俺の言葉に田神は、軽く苦笑してみせ、肩を叩いた。
「だったら、今のうちに食事にでも行っておこう。腹が減っては戦はできぬってね。生きるためにも、今夜の作戦をきっちりとこなさないとな」
俺はそうだな、と短く答えて、外に出ていった。

辺りは完全に闇と化し、目標のビルも電気はほとんどついていない。ついていても、それはただの消し忘れだったりか何かだろう。
ホテルのスイートからは、雲が下りてきているのが分かったので、そろそろ雨が降ってきてもおかしくない。
三月の雨が降りしきるのが終われば、待ちに待った春の到来というわけだ。俺は思わず苦笑し、作戦に集中するように徹する。もう作戦は始まっているのだ。
二十四時まで、後二十分もない。急いだ方がいいかもしれない。

俺は指定されていた下水道まで急ぐ。

「ここか」

そこは、ホテルが管理している簡易処理場だ。

あの真紀がただビルに近いという理由で、このホテルを用意していたとは思わなかったが、作戦を聞かされた時には、そういうことだったのかと納得したのだった。

それでも、処理しきれないものはそのまま、下水へと流されるというシステムだ。その下水とビルの下水が繋がっているわけだ。

夜にこんなところを訪れる奴などいないし、ここもこの時間帯は人がほとんどいない。せいぜい管理室か何かに詰め寄っている程度だろう。

俺は下水道へと繋がっているという、下水口まで急ぐ。

目的の下水口はすぐに見つかった。この簡易処理場はホテルの地下に作られているのだから、この下水口も、ほとんどそのまま下水道へと繋がっているのだ。監視カメラのようなものはついていないそうだから、気にする必要もなくここまで来れた。

俺は大きく広がった下水口に降りて行き、汚水の流れる脇の道を足早に移動していく。しばらく行くと、下水特有の嫌な臭いが漂って来た。思わず手で鼻と口を覆った。

（ひどい臭いだ……）

簡易処理場ではほとんど臭わなかったので気にしなかったが、これは相当なものだ。

呼吸するたびに、そんな腐臭のする空気を一緒に吸い込んでいると考えると軽く吐き気を催してしまう。

下水道処理の仕事は、最もやりたくない仕事の一つだと聞いたことがあったが、そいつがよく分かった。こんなところにいるくらいなら、ホームレスの集団と一緒にいた方が、はるかにましだ。

そう、天国と地獄との差があると言っていい。

さらに進むと、その臭いはさらにきつくなる。手で呼吸器官を覆っているにも関わらずだ。おまけに、処理施設からしばらくは頼り

なさげではあったが電灯が点いていた。その電灯が不意に途切れた。T字路にきたのだ。

俺はライトを取り出して点灯させる。ここからは、光りなどほとんどない場所を進まなければならない。確か、ここを上流に向かって行けばいいはずだ。記憶を頼りに、上流へ向かって歩き出した。

壁に手をつくと心なしかヌルリとした感触があった。思わず手を引いて指同士を何度か擦ってみる。やはり、何かヌルヌルとした感触がある。舌打ちしたくなるが、我慢して歩を進めた。

もう壁には触らずに進むしかない。こんなことなら、自分から下水道を行くなどと言うべきではなかった。田神ならきっとそんな嫌な顔一つ見せずに、引き受けたかもしれない。

しかし、今となっては後の祭だ。自分の迂闊さを呪いながら、俺は進み続けた。

闇の中を慎重に順序よく道を進んでいき、最後のT字を曲がった時だった。

光に照らされてはいるが全体がよく見えずにいるため、何かは分からなかったが、前方に何かが転がっていたのだ。

記憶が正しければ、この辺りはもう例のビルの真下にあたるため、多少の警戒心があった俺は不審に思い、慎重に進んでそれに近づいた。

近くによってみると、それがなんであるかよく分かった。

「死体だ……」

そう、もの言わぬただの肉塊と変わり果てた人間だったのだ。周囲を警戒しながら、簡単に死体を調べてみたが、身分を証明するようなものが見当たらない。

上を見るとやはり、そこが目的の場所に通じている昇降口であることが分かった。死体は落ちた衝撃で、所々変な風に折れ曲がっていたからだ。

しかし、すぐにこの死体の死因が絞殺であることが分かった。首

にくっきりとそれを示す痕がある。殺された後ここに放り込まれたのだろう。犯人は当然、真紀が言っていた未確認の暗殺者ということになる。

俺は調べるだけ調べると、梯子をつたって上へとのぼりはじめた。きっとあの死体は、銃の装備などがあったことからして、私設警備隊の奴だろう。暗殺者もしっかりと前情報は仕入れているらしい。

一番上まで昇りつめ、閉まっている蓋を開ける。あまり力など込めなくとも、すんなりと開けることができた。

例の暗殺者が、先に行ってくれたおかげだろう。だが、そのせいで俺は他の奴からＩＤを奪わないといけなくなった。

下に転がっている奴は、すぐ近くにいた奴なんだろう。目的のシステム内に入るための扉は、ここから割りと近い。その間に、どれだけの奴らがいるか分からない。一人もいないとも考えられる。

そもそも、向こう人数がきっちりとこっちより多ければ、わざわざ二手に別れて行動する必要はないのだ。

まぁ、いいだろう。扉まで誰もいなかったらいなかったらだ。その時に考えればいい。とにかく、今は真紀と田神の二人と合流することが先決だ。俺はなるべく音を立てないように蓋を閉めた。

ここはどうも、ビルの浄水施設らしい。通りで下水道と繋がっているわけだ。

目的地までは、なるべく銃は使わない方がいいのでナイフを使う。俺は直接手をかけないといけないような絞殺はあまり好きではない。どうにも、あの絞めている感覚が嫌で仕方ないのだ。

だから、ナイフを使うことにする。これならちょっとした飛び道具にもなるし、もちろん護身にもなる。咄嗟の時には、一番使いやすいのだ。

銃のように音も出ないのだから、同じように咄嗟の場合でも、全く状況が変わる。それに、まさしく殺し屋という感じも好きなのだ。

施設内をシステムへの扉に向かって移動していくと、ここでもまた警備隊の死体が転がっていた。俺はすぐさまその死体を調べてＩ

Dを抜いた。これで大丈夫だ。
俺は自分が考えていた以上に、簡単にＩＤが手に入ったことに肩透かしをくらった気分になったが、余計なことをしたくない身としては、先の奴には感謝すべきだろう。

結局、あの後にも二、三人の死体があったが、おかげで何もせずに扉の前までこれた。すでに二人は来ており、俺を待っていたようだ。
「遅いわよ」
「おいおい、なんとかギリギリだろう。それより、あんたが言ってた暗殺者のことだが」
「君の方にもやはりいたのか」
「てことは、あんた達の方にもその痕跡があったわけか」
二人は頷いた。これで相手は複数いることがはっきりした。最初の死体を見てからここまで移動してくる間、うすうす二人の方にも暗殺者がいたのではないかと考えていたのだ。
「一応ＩＤは手に入れておいたが、必要なかったかもな」
「いや、それとこれは全くの別問題だ。ここを通るには、必要不可欠だ」
「そうか。それより、そろそろ二十四時だ。一斉にシステムが切り変わるんだろう？　行こうぜ」
二人を促して、扉の前までくる。話に聞くより、随分と頑丈そうな扉だ。戦車の砲撃にもびくともしなさそうだ。
そして、なぜ一人一人ＩＤが必要なのかもはっきりした。この扉の向こうはすでに施設の中になるわけだが、どうも、同時に複数の人間が行き来できないように、一人が通過すると素早く扉が閉まるようになっているらしい。
真紀が通過したのを見て、田神も同じように扉の中へと入っていった。続いて俺もＩＤを使って扉を開ける。
システムに感心しながら扉をくぐると、勢いよく扉が閉まった。

その勢いを見て、もし挟まれでもしたら終わりだな、なんてことを思ってしまった。

扉を抜けて二人に追い付くと、思いもかけない光景が目に入ってきた。

「こいつは……おい、一体どうなってるんだ」

「私たちにも分からないわ。来た時には、すでにこうなっていたんだもの」

そこはすでに死の臭いが充満していた。やはり、警備隊の連中だ。ナイフを喉に突き刺したまま、仰向けに倒れているもの。頸動脈を掻き切られたため、大量の血を流しているもの。

また別の死体は、右眼を撃ち抜かれ絶命している。肝臓をえぐられたのか、腹から異様なほど濁った血を流しているものもあった。

その手には銃が握られてはいるが、発砲した様子はない。一瞬の襲撃だったのだろう、それに反応できたのはたった一人だけで、他の三人は、銃を構える時間すら与えられなかったようだ。扉に来るまでもそうだったが、実に鮮やかな奇襲と言っていいだろう。

侵入者は二人かそれ以上だと思われるが、相当な訓練を受けていることは一目瞭然だ。

まぁ、いい。ともあれ、いつまでもここにいるわけにもいかない。

「そろそろ先に進もうぜ。先の侵入者がこちらの手間を省いてくれてるんだ、少しは楽に考えよう」

「今死体を調べてみたが、まだ温かかった。あまり生きている時の体温との差はない。恐らくは侵入はほんの数分前だろう」

田神の診断に頷いて、真紀がフロアを進み出した。田神と俺もそれに続く。

この階では銃を構える必要もなく、俺達は進んだ。進む先々で、さっきと同じように死体が何体もあった。

施設内が騒がしくないことから分かるが、きっちりとサイレンサーをつけて発砲している。もしサイレンサーをつけていなければ、もっと死体がぐちゃぐちゃになるはずだ。

しかも皆、侵入者に対して銃を構えたような形跡が見られないのだ。どいつも気配を察することなく殺されているようだ。ここまで完璧な仕事をこなす奴など、ほとんどお目にかかれない。

逆に言えば対峙した時に、そいつらにうまく対処しきれるとは限らないわけだ。できればそんな連中とはやり合いたくないが、そうもいかないだろう。

こうして同じ日、同じ場所に侵入している者同士、狙いも同じと考えるのは当然だ。やり合うのは、避けられない。

それと死体を見て気付いたが、恐らく侵入者の人数は三人だろう。よほど自分に自信があるのか、ここまでナイフとサイレンサー付きの銃による殺害方法しか選択されていないからだ。

そして、スムーズに事が運ぶように、システム要員といった具合の三人組みだ。俺達と同じ組み合わせといっていい。

「……田神。気付いたか？」

俺は声をひそめながら声をかけた。

「ああ、恐らく実行犯は二人だ。銃とナイフによる攻撃しか受けていない。しかも、かなり訓練されたコンビネーション方法だ」

やはり田神は気付いていた。

「それと、二人とも殺人狂的なものを感じさせるな。特に銃を持っている方だ。皆、眼を撃ち抜かれている」

俺は頷いた。

そうなのだ。銃に撃たれている死体は皆、眼しか撃たれていないのだ。狙撃の腕が相当いいのはそのことからも分かるが、全て眼というのはいささか不自然だ。

狙うにしても、まだ額や後頭部といった箇所の方がはるかに狙いやすいはずだ。それなのに、皆一様に眼だけが撃ち抜かれている。

振り向いた瞬間を狙って撃ったのだろうというのも分かるが、どうにも腑に落ちなかった。これほどの腕があるなら、わざわざ振り向かせて撃つなど正気の沙汰じゃない。

だが、今の田神の説明を聞いて納得した。

“殺人狂”……。人は皆、自分が好きなことや興味のあることに関しては飲み込みも早く、覚えることに貪欲だ。この侵入者達には、それを強く感じた。

人を殺すことを趣味にする……考えるだけで、ぞっとさせる話だ。俺だって今までいくらも人を殺してはきたが、それを愉しいだなんて思ったことは、未だかつて、一度だってない。

だというのに……全く、今回の敵は相当質が悪そうだ。田神と組んでいることが、唯一の救いかもしれない。

「ここだわ」

先導していた真紀が立ち止まり、すぐ脇の部屋の中に入った。どうやら、ここがこの階を管理しているシステム管理室らしい。

真紀に続いて俺達も入っていった。予想できたことたが、ここにも死体が二体あった。それらには目もくれず、真紀はシステムにログインし始めていた。

俺には何をやっているのかさっぱりだったが、これでこの階のシステムはダウンするらしい。

田神は真紀の行動を脇から覗いていたが、何をやっているのか分からない俺としては、見る必要もなくなんとなく入口に立って、見張りをしていた。恐らくは、もう誰もこのフロアにはいないようにも思われるが、とりあえずだ。

「解除できたわ」

真紀が短く言って、席を立った。下のフロアに行く通路は、この部屋を出てすぐ横にあった。

本来なら、ここで操作して扉の開閉がされているのだろうが、システムを落としたことで、手動で開くというわけだ。

「良し、行こう」

短く言い、今度は俺が先頭を行くことになった。

手動で開くようになって、扉に手をかける。そっと力を込めると、思った以上に簡単に扉は開いた。扉は、見かけ以上に軽かったのだ。

そうして、下り坂になっている通路を地下二階へと下りていく。

やはり、所々に警備隊の死体があった。
それにしても、潜入からあまり時間は経っていないはずなのに、妙に連中が先行しているような気がする。
やはり俺達のように完全に分業化されており、侵入者も三人なのではないのか？　そんな考えが頭をよぎる。だが、やはりそう感じとっていたのは俺だけではなく、真紀も田神もそう思っているようだった。
「……やはりな。侵入者がやけに先行していると思わないか？」
「ああ……実は俺もたった今そう考えていたところだ」
「奇遇ね、私もよ。まぁ、私がそう感じるくらいだから、あなたたちは当然か」
「もしや、相手は二人ではなく三人いるんじゃぁないのか？」
俺は先ほどから考えていた自分の考えを言ってみた。超がつくほどの一流の殺し屋二人に、やはり超がつくほどの一流情報員……考えられなくはない。
「三人か……有り得ない話じゃないな。だが、だとすればかなり厄介だな」
「ああ。細部に渡って、完璧なまでの連携プレイだぜ、こいつは」
「待って、ここよ」
そういって真紀が立ち止まり、また部屋の中へと入っていく。この階の管理室だ。
しばらく待つと、鈍く何かが落ちていくような音が聞こえた。システムダウンにより、解錠された音だろう。先程と同じように、通路を走りながら下りて行く。
「この様子では連中、全滅するんじゃぁあるまいな」
「……たった二人、いや三人か？　によってか……ぞっとしない話しだな」
そんな調子で、俺達は地下三階から地下四階へ、地下四階から地下五階へと下りていったのだった。

第２３章

地下五階へたどり着いた俺達は、今までとは勝手が違うことに気がついた。

「……今のは？」

聞き間違えるはずはない。銃声だ。連続する銃声は、サブマシンガンによるものだろう。ここに来て、ようやく連中も上で起こっている異常事態に気付いたのだ。

「ほとんど武器を使わずにこれたのは、先の連中のおかげではあるが、ここからはそうも行かなくなったな」

真紀と田神が頷くと同時に、けたたましく非常を知らせる音が鳴り響いた。俺達はようやく、本格的に銃を構えながら慎重に、かつ素早く進んでいく。

通路をT字になった場所で、早速、警備隊の死体が出迎える。やはり眼を撃ち抜かれている。

「連中、目的の場所に向かって行ってるんだよな？」

けたたましい音のため、大声で真紀に問い掛ける。

「ええ！　ここからしばらくは路地はないから走って行きましょう！」

その声に俺も田神に目配せして、走りだす。田神をやや先頭に、真紀が、そして最後尾を俺がという形だ。あまり広いとは言えない通路に、警備隊の死体が転がっているため、いまいち走りにくいが仕方ない。

異常を知らせる音に混じって、やはり前方でかすかに銃声が聞こえる。

警備隊の連中も、侵入者の予想外の強さに驚いて援軍を呼んでいるだろうが、それも叶わぬことだ。大部分の奴らが、すでに地獄に堕ちているのだから。

「この通路をこのまま行った突き当たりを左よ！」
真紀が走りながら叫ぶ。
「分かった！」
田神はそれに応え、前方に銃を構え発砲した。通路の先に警備隊がいたからだ。弾は見事に連中の一人に当たり、ぶち倒された。
きっと、俺達を応援と勘違いしたのだろう、突然のことに警備隊の連中は泡を食っている様子だ。退路などほとんどない状態では、連中に勝ち目はないと言っていい。俺も構わず、銃を立て続けに連射する。
俺達を仲間ではないと気付いて、こっちに銃を向けたが、その内の二人が瞬間横にぶち倒される。
俺達から見て左の通路にも、凶悪な侵入者がいるのだ。もう、警備隊の奴らは残り４人だけとなっている。
俺は先の侵入者がやったように、三発立て続けに連射して、二人を倒す。田神はそんなことなど気にせず確実に当てるために、一人に的をしぼって撃っている。
それと同時に、最後のもう一人が左側からの銃撃によって倒れたのだった。俺達は一気に通路の突き当たり手前の壁まで走り寄り、身をひそめた。
田神が身を低くし、そっと顔を出す。
そこに連中の銃が撃ったと思われる、乾いた音が聞こえた。瞬間に田神は身を隠したため当たることはなかったが、頬が赤くなっていた。
「大丈夫か」
「ああ。それよりも、連中は君の読み通り三人だった。実質的な攻撃手はやはり二人だ」
たった一瞬、顔を覗かせただけでそれらを把握したこの男は、やはりさすがだ。
「真紀。目的の場所はあの向こうにあるんだな？」
「ええ。あの向こうに、全体を管理しているシステムサーバーがあ

るの。そして、隣に今回のターゲットがあるわ」
「良し。だったら連中にドアを開けさせるとしよう。それを俺達が奪取する方向で行った方がいいな」
俺と真紀はそれに賛同し、一拍おいて銃を構えた。
「田神、援護してくれ。俺が行く」
「分かった」
田神は俺に合わせるために一度深呼吸し、身を乗り出して発砲する。
すかさず俺は田神の横から走り抜け、連中に向かって発砲しながら駆けていく。
奴らが身を隠している間になんとか通路の端にまでよると、開かれたドアの中に向かって数発撃つ。その間に真紀と田神が駆けてきた。
ドアの横に隠れながら、一瞬だけ顔を覗かせて中を見た。確かに、連中は田神の言う通りに三人だった。
一人が、広い部屋の中央付近にあるコンピュータを使って、何やら操作していた。
中は机や他のコンピュータなどが置かれていて、やろうと思えば十分中で戦えるだけの広さと物がある。
田神に目配せすると、意を汲み取って頷いた。
「今度は俺が先に行こう。頼む」
「ああ」
俺は中にやはり数発ぶち込むと、田神は身を低くしながら中へと駆け込んで行く。
「あんたも先に行くんだ」
真紀に叫んで、先に行くよう促す。
「分かったわ」
田神も真紀が先にくることを察したようで、援護する。
「今だ、行け！」
その言葉を合図に、真紀もなだれ込んで行った。

真紀が行ったのを見送ると、俺も連射しながら一気に中へと飛び込む。

その時俺の耳には、いまだ鳴り続けている非常音に紛れて、かすかに電気が落ちていくような音が聞こえた。

奴らがシステムダウンさせるのに成功したらしい。だが、逆に言えば恰好の反撃のチャンスと言える。

ここぞと言わんばかりに身を乗り出して、反撃に出ようとした時、心臓が縮み上がる思いがした。

なんと奴らはこの瞬間を狙って、俺が這い出てくるのを待っていたのだ。

俺が飛び込んだ先がまずかったようで、田神や真紀とは少し離れた前方部分だったのだ。

まずい……。そう思ったのは一瞬だ。次の瞬間、後方から銃声が聞こえ、連中の一人に当たったのだ。

さすがに奴らも一旦身を隠さざるを得なくなり、俺もそのすきに机の陰に隠れる。

危なかった……恐らく撃ったのは田神だろうが、やつもこの瞬間を狙っていたのだ。

やつが俺と同じように、同じ時を狙っていなければ、今頃はきっと外の警備隊達のように、ぶち倒されていただろう。田神の冷静な判断のおかげで、俺は命拾いしたのだ。

さて、ここからどうするか……。一旦攻撃が止むと、互いが互いの息遣いすらも聞こえてくるような錯覚に陥ることがある。

今がまさにそうで、たった今あったように、またこっちが這い出てくるところを狙っているんじゃあるまいなと、疑心暗鬼になってしまう。

その時、後方から何かがコロコロと転がってきて、俺の足に当たった。振り向くと、それはつるつるのボールペンで、机の下から転がってきたようだった。

このボールペンには見覚えがあった。確か真紀が使っていたもの

だ。

俺は机の下を覗く。すると向こうもこっちを覗いていたようで、真紀があっちへ行けとジェスチャーしていた。つまり一カ所にではなく、全く違う方向からの挟み撃ちにしようというわけだ。

きっと考えたのは田神だろう。あの男は、こういう時でも常に頭が回転しているようなやつだ。

いい加減に、このけたたましく鳴っている音をどうにかしてほしくなってきたが、この音のせいもあって、二人はボールペンをやったのだろう。

俺は首を縦に振って、その場から素早く匍匐前進し、部屋の端に来た。連中がいる場所は階段が二段あり、俺達のいた場所よりもやや高くなっていたため、下手に進むとこっちがやられかねない。

体勢を戻してどうするか決めかねていた時、視界の脇に田神と真紀が銃を構えたのが見える。

それならばと身を乗り出し、連中のいた場所のすぐ横からぶち込んでやろうと、トリガーに指をかけながら、一気にコンピュータの横から銃口を向けた。

しかし、連中はすでにその場にはいなかった。

一瞬、怪訝な顔でしかめたが、理由が分かった。このコンピュータの後ろには階段があり、そのまま隣のターゲットのある部屋に通じていたのだ。

しかも下に行くには、このコンピュータの後ろの階段一つしかないのだ。先ほど一人は田神の弾に当たって負傷しているため、血が転々と床に落ち、それが下へと続いていた。

「ちっ！」

攻撃してこなくなっと思えば、こういうことだったとは。もっと早く行動しておけば、一人くらいは地獄にたたき落とせただろう。

田神達も、俺の様子に何か感じたようで、足早にこちらに反対側から駆け寄ってきた。

「やっこさん、もう下に行っちまったみたいだぜ。どうする？　追

うか？」
「追った方がいいだろうな。連中がターゲットを盗むまではいいが、その後は、我々が奪取しないといけない」
俺は田神の言葉に頷いたものの、真紀は何やら考えていたようで、頷くことはなかった。おもむろに、奴らがさっきまで使っていたコンピュータをログインさせ、この施設内の見取り図なんぞを引き出していた。
「どうしたんだ？　先に行こうぜ」
真紀に話しかけはしたが、真紀はちょっと待ってと言ったまま、また黙って画面とにらめっこしている。
「……分かったわ。作戦変更よ。私と田神はこのまま奴らを追うわ。あなたは、ここを引き返して地下三階まで戻って」
「どういうことだ？」
「これを見て」
そういって真紀は、画面を指さした。そこには、やはり先程呼び出した施設内の見取り図だ。
指さしたところには、ターゲットがある部屋に通じている、一本の通気孔があった。
「こんなもの、作戦前に見た見取り図にはなかったぜ？」
俺はわけが分からないといった口調で、真紀に問う。
「ええ、なかったわ。これは最新の見取り図……ぬかったわ、本当に」
真紀が珍しく悔しそうに唇を噛んだ。奴らがもしかしたら、それを使って逃げるかもしれないというのを言いたいわけか。
「……まぁ、仕方ない。じゃぁ俺は三階まで戻るとしよう」
そうなると、一刻の猶予も許されない。俺は踵を返し、全力疾走で元来た道を戻って、地下三階まで上っていった。

全力疾走で三階まで戻ってきた俺は息を切らし、通ってきた管理室に設置されている、通気孔の前に前まで歩みよった。

五階に残してきた真紀と田神は大丈夫だろうか。うまく時間稼ぎできていればいいが。

俺は一息つく間もなく、通気孔の……いや、大きさからして通気管と言った方がいいだろうか。俺はその通気管の蓋をこじ開けようと、隙間に指を入れて渾身の力をこめて引っ張った。

予想通り、元々脱出用に作られたわけではないから、かなりの固さだ。

「っく……」

力をこめているために呻き声がもれ、服に隠れていて見えなかった肌が見える。その肌に、血管がこれでもかと浮きだっている。だが、それでも蓋は開く気配はない。

俺は指と手にさらに力をこめる。肩が、二の腕が、掌の筋肉さえも怒張しているのが分かる。その時にようやくミシミシという金属が歪むような音が聞こえた。けれど、まだまだだ。

あまりの力のために、指がちぎれ飛ぶのではないかと思われた時、ついに蓋がバキンと盛大な音を立てて外れた。

俺はその反動のため、後ろに吹っ飛んでいた。尻餅をつきながら、気付けば汗も滲んでいたこともようやく分かったのだ。

（こんな固いもんを取り付けやがって……）

忌ま忌ましい気分になった俺は、舌打ちしながら管の中に身を乗り入れる。ここから五階までは、ざっと七、八メートルほど下といったところだろうか。もっとあるかもしれない。

耳を澄まして下の様子を窺うが、音は聞こえない。下から空気が舞い上げられているのか、風の吹くような音が聞こえるだけだ。

俺は数回、深呼吸をする。意を決して、中に足から入れた。やや斜めになっているとは言え、ほぼ垂直になっている通気管をいくのは、さすがに躊躇する。

だが、そんなことも言っていられない。この下では、田神と真紀

が必死に食い止めてくれているはずなのだ。せいぜい、頭だけはぶつけないようにしよう。

俺は再度深呼吸して、通気管の中を落ちていった。滑り落ちていくのは僅か、ほんの数瞬であるはずなのだろうが、俺にはやたら長くも感じた。

通気管の中は、当然真っ暗で、何も見えなかった。おまけに狭い。下手に動けば、体をあちこちぶつけるだろう。

そう思った次の瞬間、踵に衝撃が走り、俺は白い光の世界に飛び込んでいた。

俺の突然の乱入に、例の三人は驚いて俺の方に振り返っていた。俺はすかさず、銃を構えて二発立て続けに連射した。速さのあまり、銃声は一発にしか聞こえなかっただろう。

一発は、残念ながら宙をかすめていくだけだったが、もう一発は、情報員と思われる奴の胸元に当たった。そのまま、俺は柱の陰まで駆ける。

（これでまずは一人）

そっと入口の方を見ると、こちら側はまだなんとか大丈夫のようだ。だが、まだ厄介な奴が残っていた。

銃を得意としている方が無傷だったのだ。先ほど田神に撃たれた方も、なんとかやれているようで、まだこちらが完全に有利になった訳ではなさそうだ。

あれほどのことをやってのけた連中なので、油断は禁物だ。

入口に田神と真紀、後ろには俺という完全な挟み撃ちの状態でありながら、どうにも奴らに不利にさせているという印象が持てない。奴らは、まだ何かしてくるのではないかと、妙な節操感を感じずにはいられないのだ。

再度、柱から身を乗り出して連中の方を見やる。するとなんと、さっき俺に撃たれた奴はまだ息があり、手の中に黒っぽい、楕円のような金属球が握られていたのだ。

まさか……。

俺は田神達に向かって叫んだ。きっと奴は、入口の方にいる田神達にそれを投げるに決まっている。

「逃げろ！　手榴弾だ！」

その瞬間、俺が隠れている柱が鋭い音とともに欠けた。まだ無傷な奴がこちらに発砲したのだ。

倒された奴は、自分が長くないことを悟り、仲間の退路と同時に入口を塞いでいる田神たちを一掃するつもりで持ち出したんだろう。

それを別の仲間の手によって、入口に向かって投げられる。それがやけにスローモーションに見えた。それでも俺は、一瞬早く柱の陰に隠れることができた。

その直後、爆音が部屋中に鳴り響いた。ほとんど密閉されている部屋の中での爆発のために、やけに音が反響している。

なんとか耳も塞ぐこともできたため、さほど残響もなかったが、田神達は大丈夫だろうか。俺は柱の陰から出て辺りを確認すると、入口には田神達はおらず、侵入者の二人がその入口に向かって走り出したところであった。

「待て！」

ここで連中を逃がすわけにはいかない。俺は夢中になって銃口を二人に向ける。

やはり立て続けに三発連射し、一人に二発、もう一人に一発当たった。二人は、走り出した勢いそのままに、床に倒れる。

手応えはあった。確実に二発当たった方は致命傷だろう。問題はもう一人の方だ。銃口をしっかりと向け、警戒しながら二人に近づいていく。

向かう途中、最初に倒した情報員と思わしき奴の横を通る時、横目でチラリと見やった。間違いなく死んでいる。顔からはすでに血の気が失せており、死人になっていることが分かった。

いつの間にか、非常事態を知らせるためのブザーの音は止まっていた。そのせいもあり、やけに静かだ。

ゴクリ……。唾を飲み込む音が、やけに大きく聞こえる。
俺は、自分達を苦しめた連中の面を拝もうとしてしゃがみ込み、潜入する時などに用いられるマスクを剥がした。
「こいつは……」
マスクを剥がした俺は、驚きのあまり声を出していた。
俺の最後の射撃三発のうち、二発を受けた奴は間違いなく致命傷で、その顔にはすでに生気というものが感じられなかった。だが、俺が驚いたのはそうではなかった。
「まだ……ガキじゃぁねぇか」
そう、そいつはまだ年端もいかない子供だったのだ。まだ高校生くらいか……いや、そう見えるだけで、実際にはもういくつか上かもしれない。なんにしても、俺よりは確実に若いだろう。
こんな奴が、好んで人を殺していたというのか……。後方に死体となっている最初にやった奴は、明らかに俺よりも年上の奴で、何も思わなかったが、今回ばかりはさすがに勝手が違った。
その時、ぶち倒されたはずのもう一人が呻き声をあげながら、動き出していた。
しぶとい奴だ……。俺は舌打ちしながら、銃口をもう一人の死にぞこないに向ける。
こいつもこの死んだ奴のように、まだ若い奴なのだろうか……そんな考えを持ってしまうのは、殺し屋として失格なのだろうが、俺にはどうにも引き金を引いて、とどめを刺すことをためらわれたのだ。
「う……くっ……」
「……おい、意識があるんだろう。今、お前に銃口を向けている。このまま弾をぶち込まれたくなかったら、大人しくするんだ」
入口をチラリと見ると、田神と真紀がのろのろと顔を覗かせていた。あの二人はなんともなかったようだ。田神に至っては、すでに立ち上がっている。
「さて、あんたの面も拝ませてもらうぜ」

銃口は、いつでも確実にそいつの頭をぶち抜けるように構え、ゆっくりと歩みよった。

マスクに手をかけて、徐々に剥がしていく。すると、マスクの下から端正な顔立ちをした女が姿を現したのだ。

「お前……女、だったのか」

「くっ……あ、あたしに触るな……」

呻き声混じりに、必死に強がって見せている女の声は、その顔に負けずと美声の持ち主だ。この女も先ほどの奴と同様にまだ若く、せいぜい、二十歳そこそこといったところだろう。

俺に組み敷かれてもなお、抵抗しようとする心構えは立派だが、いつまでもそうさせるわけにはいかない。俺は組み敷いた腕を、力をこめてねじあげた。女は、その美しい声で一際大きな呻き声をあげる。

俺はその女の声と苦しむ顔に、なぜか妙なエロスを感じて、顔をしかめた。女が暴れたことで、俺と田神に受けた弾によりできた傷から、血が滲みだして床を赤く汚していく。

「子猫ちゃんよ。これ以上手荒な真似はしたかないんでな、大人しくしてくれよ」

田神と真紀が俺達に歩み寄ってくる。見たところ、怪我らしい怪我もしていないようだ。真紀は、ターゲットをこの女が担いでいたサックから取り出す。

ここで初めて、ターゲットがデータであることを俺は理解した。まぁ、真紀がわざわざ出向くくらいなのだから、うすうす感づいてはいたが。

それよりも田神だ。この男は、組み敷かれた女を見て、何か信じられないといった風な顔をしたまま、動かずにいるのだ。

「おい、田神。どうしたんだ。早くこの女を担げるように縛り上げてくれ」

「え？　あ、ああ、そうだな……」

そういって田神は、常備している拘束具を女の腕に取り付けた。

「後は、ここの爆破で任務完了よ」
真紀は持ってきていたサックから、爆弾を取り出し、部屋の中央にあるコンピューターにとり付けた。それを見届けると、俺達は駆け出した。
女を俺が担ごうとしたが、田神によって止められた。自分が担ぐということなのだろう。
「早く」
真紀はすでに入口に移動しており、俺達に声をかける。
何も持っていくものがない俺が先頭に立って走り、それぞれの階の管理室に真紀は爆弾をしかけていった。やはり、連中三人の手によって警備隊は全滅しており、あれだけけたたましく鳴っていた非常事態を知らせるブザーも、なんの意味もなく鳴っていただけだったようだ。
おかげで帰りにお荷物が増えた今となっては、感謝すべきことではあるが。
最初のフロアに来た俺達は、素早く一人一人順番に、相変わらず勢いよく開閉する扉をくぐって出ていく。
最後になった俺は、もう誰も生きていないこの施設の中を振り向き、口笛を吹いて一瞥した後、扉をくぐり抜けた。
扉が閉まった直後、真紀はその手に持っていた起爆装置のボタンを押したのだった。

仕事が終わった翌日、普段ならすぐにでも寝座に戻る俺だが、なんの気まぐれかN市に留まっていた。
捕らえた女は田神がなんとかすると言い、真紀もデータを本部に送るために戻ると言う。

俺はもう自分の仕事が終わったので、せっかくのN市見学をしたいなどと尤もらしい言い訳をして、別行動することにしたのだ。

いや、本当は分かっているのだ。向こうに戻るというのは、またいつもの日常に戻るということだ。俺はどうにもそれが嫌だった。戻れば、また考えたくないようなことを考えてしまうだろう。

そうすると、とても戻りたいなどと思うわけがない。むしろ、しばらくこの街に住んでみるのもまた良いかもしれない。

なんのしがらみもなく、俺を誰も知らない街で生きると言うのも悪くないかもしれない……そんな考えが、今朝脳裏を過ぎったのだ。

実際には無理だろうが、せめてそういう気分にくらいは浸りたいと思うのだ。だから、俺は送っていくという真紀の申し出を断ってここに留まった。

この街に何かあるわけでもないだろうが、ちょっとした現実逃避には持ってこいだ。

俺は誰もいなくなったホテルのスイートをそのまま貸し切り、優雅に朝から酒をあおっていた。

きっとこの光景を見たら、真紀も田神も呆れてため息をつくことだろう。最近になって、酒ばかりをあおる奴というのはどんな人間であれ、どうしようもない奴なのだと気付いた。だが俺は俺、他は他なのだから、いちいち気にしていては、気が持たない。

そんなことをぼんやりと考えていたが、酒ばかりあおって何もしないというのは、せっかくここに留まった意味がない。

いくら呑んだくれとは言え、一応は市内見学と言ったのだから、少しくらいはそれらしいことでもして回るとしよう。まぁ、気付けば相変わらず昼などとうの昔に過ぎていたが。

ホテルを出ると、今日はずいぶんと暖かかった。いつもの革ジャンもいらないかもしれないと思われたが、この際だから着ておくことにする。

地下鉄に乗って行く気もない水族館などに行ったり、そこに隣接

された外国の雰囲気を漂わせるテーマパークに行ったりと、自分でも何がしたいのかさっぱり分からない。

結局、俺は突き付けられた事実から逃げたいだけなのだろう。やることもなく、そこをぼんやりと歩いていた。

するとそこで教会の鐘が鳴った。見れば、結婚式だったようで、白のウエディングドレスを来た花嫁が花婿とともに出てきたところだった。大勢の友人や、親戚、家族たちに祝福されながら。それを見ていた周りの客も皆して拍手を送っている。

そして花嫁は、本当に嬉しそうにしながらそれに応えていた。花婿も、それを誇りにするようにした顔をしている。

俺は、それをどこか遠い世界の出来事のような目で見ていた。俺もこんな世界に入らなければ、いずれはあんな風になっていたのだろうか。

自嘲しながら笑い、俺は二人の新しい夫婦に口笛を吹いてやった。俺からのせめてもの祝福のつもりだった。

結局何をしていてもいつもと変わらず、考えたくもないのに考え事をしていた俺は、日が落ちて夜の貌を見せ始めた街に戻り、呑んだくれ共が集う酒場を求めて廻った。

やっとのことでそれらしい場所を見つけ、中へと入っていく。サバカ・コシュカのように、いかにもという雰囲気ではないが、ここも悪くない。

中の様子は、まさに外国から移住してきたような奴らが、所狭しと肩を寄せ合うように酒を飲み交わしていた。

いわゆるイングリッシュパブのような店で、周りのことなど気にする風でもなく、勝手気ままに各々の時間を過ごしている。

店内もかなりの広さで、席が百二十、三十は確実にあるだろう。大型の液晶テレビが数台とりつけられ、サッカー中継が映し出され

ている。俺はその中をゆっくりとした足取りで、カウンターにまで行く。

「いらっしゃい。初めて見る顔だね」

多分この店の店主だろう、５０歳前後と思われるこの店にはどちらかと言えば不釣り合いな、優男が声をかけてきた。

「ああ、旅行でね」

「そうかい。楽しんでる？」

「まぁ、ぼちぼちだな」

苦笑しながら軽く肩をすくめた。店主もそれに釣られて、笑った。

「何にしましょう？」

「ジョニー・ウォーカーはあるかい？」

「おや？　珍しいチョイスだね。どれにしようか」

「グリーンラベルがあれば、そいつを」

「分かった、グリーンラベルね」

そういって店主は棚からジョニー・ウォーカーの瓶を取り出す。俺はその間に、革ジャンのポケットから財布を出し、二千円取り出した。さすがにこれだけあれば足りるだろう。

「二千円からで。九百円のお釣りね」

釣りを受け取り酒が出て来るのを待っていた時、急に店内が沸いた。何事かと思えば、サッカーの試合で贔屓のチームがゴールしたらしい。

サッカーになど興味のない俺だから、どうでもいいがこういう雰囲気だ。久しぶりにナンパをするのも悪くない。

しかし、それとなく店内を見回し、物色したものの、残念なことに俺のお眼鏡にかなうような者はいなかった。せっかく人が久しぶりにその気になったというのに、あんまりだ。

俺はため息をつきながら、仕方なしにサッカー中継を眺めた。また店内が活気に溢れ出し、先ほどと同じように、だんだんとざわめきが消えていく。

テレビの中の選手が、華麗にディフェンスを二人三人と抜き、ボ

ールを蹴った。キーパーの頭上をすれすれに、ネットを揺らす。途端に店内は、またも歓喜の嵐が沸いた。

しばらくの間眺めていると、前半終了を告げるホイッスルが鳴る。店内の客達も、それに合わせてまた各々の時間に戻っていく。それと同時に今しがたのゴールや選手の論評に華を咲かせ始めた。

その時、突然画面が切り替わり、キャスターが現れる。周りの幾人かの客は、明らかに不機嫌そうな態度で悪態をついたが、キャスターの喋り出したことに、俺は耳を疑わざるを得なかった。

『サッカー中継の時間ですが、ここで臨時ニュースです。今日午後5時半頃、民自党幹部の真田氏がA県N市のホテルで、他殺体で発見されました』

このニュースには、さすがに呑んだくれ共も、耳を傾けざるをえないだろう。テロップには、『民自党幹部・真田氏暗殺か？』と出ている。

「悪いが、音量を上げてくれ」

店主に言い付けると、店主もまんざらではないようで音を四つか五つ上げ、店内にキャスターの声が響く。

『今日午後5時半頃、A県N市内のホテルで民自党幹部、真田博之（さなだひろゆき）さんの遺体が発見されました。

真田さんは、今日午後六時に開かれる予定だった幹部会に出席するためホテルを出ようとした時、何者かによって殺害されたものと見られ、警察は犯人の行方を追っているとのことです。それでは、中継の――』

そこまで聞いた俺は、スコッチを一気に飲み干して考えた。確かに、真田博之は政界の大物だ。大胆不敵な言動と行動で、五十代という若さで、すでに時期首相候補の一人とすら言われていたはずだ。

だが何故だ？　いきなり暗殺されなければならないようなことがあったからだろうが、その理由がいまひとつ分からない。これは直感だが、もしや昨晩の俺達の仕事が絡んでいるのではないだろうか。

自分が直接関わったということもある上に、昨日の今日なのだ。

しかも、暗殺なんて言葉が公共の電波になぞ、そうそう乗るわけがない。

暗殺は間違いないだろうし、それを実行したのも間違いなくその手のプロだろう。これもまた直感だが、昨日の暗殺者三人の仲間がやったのではないか、そんな気がしてならなかったのだ。

こいつは一度調べてみておいた方がいいかもしれない。そう思い立つと、俺はグラスをカウンターに置いて、店を後にした。

第２４章

俺は今、Ｎ市の繁華街から外れたところにあるクラブにいた。

『マスカレイド』と書かれた看板が掲げられたドアを通りすぎると、ドアマンに仮面を渡され、これをつけるように言われた。これを外すのは、店を出る時と合意した相手といる時だけらしい。要するに、ナンパなんてのは店公認であるわけだ。

口元だけは出すという白い仮面は、さながらオペラ座の怪人の主人公・ファントムの仮面のようだ。

中に入るとなるほど、様々な仮面を付けた男女が大勢おり、まさに仮面舞踏会のようにも見える。顔が分からないためか、普段消極的なやつでも積極的になれるという趣向なのだろう。

フロアに着くと、すぐさま給仕の恰好をしたボーイが御召し物は何にいたしましょうなどと聞いてきた。当然、給仕達も仮面をつけており、皆一様に髪をオールバックにしている。

随分と本格的な作りに思わず苦笑が漏れたが、ハイランドパークをとだけ答えると、ボーイは畏まってすぐに前から消えた。

俺がこの店にきた理由は一つだ。ここには、この街でも有名な情報屋がいるらしいからだ。前にいた店を出た俺は、携帯で真紀と田神に連絡をとってみたのだが、繋がらずじまいだった。

仕方なく、街以外にも人脈があると言っていたガスのことを思い出し、奴からＮ市に優秀な情報屋はいないかと尋ねたのだ。そんなことにまで金を引き出そうとした、ガスの商売気には呆れるばかりだったが、それが情報屋というものなのだから仕方ない。

ともかく、このマスカレイドという店に林という男がいるから、そいつに聞いてみるといいと言ってきた。そんなわけで、俺は今ここにいるのだ。

「お待たせいたしました」
声からさっきの給仕だろう。琥珀色をした液体の入ったショットグラスを差し出してきた。それに応えグラスを受け取ると、給仕は腰から曲げて一礼し、去っていった。
こうも皆が仮面を付けていると、誰が誰だか分からないが、林という男はすぐに分かる奇抜な仮面をしているとガスは言っていたが……。
俺は辺りをさりげなく見渡すと、明らかに場違いと言っていいような仮面をつけた奴が目に入った。それを数秒の間凝視していると、向こうもこっちに気付いたのか、こっちにやって来た。
そいつは仮面は仮面だが囚人がつけるような、顔だけでなく頭をすっぽりと覆い、首で施錠した鉄仮面つけていたのである。その異常さは、この非日常さを売りにしているこの空間においても、人目を奪わずにいられないだろう。
「……あんた、おれに何か用かい？」
鉄仮面をつけた男が、その仮面のためくぐもった声で話しかけてきた。
「あんた、林か？」
俺が問いかけると、男の雰囲気が一瞬変わったのが分かった。
「こっちだ」
鉄仮面の男は指で着いてこいとジェスチャーし、俺はそれに着いていく。フロアの端に来ると、男は振り返った。
「あんた、なんで俺があんたに用があると分かったんだ？」
「単純さ。長年の勘……とでもいうのかな。ここではこうして仮面をしないといけない分、そういったものが磨かれたんだろう」
声の調子から考えて、この林という男は四十は確実に過ぎているだろう。
「なるほどな。まぁ、いい。俺の知り合いにあんたを紹介されて来たんだが……ガスという奴だ。そいつがN市じゃぁ、あんただと言われた」

「ガス……ああ、やつか。やつは元々この街で情報屋をやってたのさ。やつがこの街にいた時は、おれか奴かで情報屋として、腕を競い合ったものだ。

……それで？　俺からどんな情報を買いたい？」

「あんた、さっきニュースを見たか？」

「ニュース？　……ああ、例の政治家暗殺の話か」

「ああ。そいつに関していくつか情報が欲しい。金ははずむ。なんでもいいから教えてくれ」

「分かった。まず、真田がなぜ殺されなければならなかったのかだが、真田は結構強気な発言や行動力で周囲を驚かしていたんだが、これには裏がある。あの男は、最初から政治家になろうとしていたわけではなく、日船工業という会社の人間だったらしくてね」

「日船工業？」

聞いたことがある。確か、日本はもとより世界を股にかけて展開している、造船とその販売をやっている会社ではなかったろうか。

「ああ。今はもういないが、真田の父親は元がそこの大株主だったらしい。ようするに、そのコネで就職したんだろうな。

そのせいもあって、奴は瞬く間に出世していった。三十代にして早くも幹部にまで昇りつめたんだが、何を思ったのか、突然政治家になることを決心したらしい。だが、それと前後して、奴の周りには奇妙なくらいに金廻りが良くなっている」

「幹部にまでなったんだったら、当然なんじゃぁないのか？」

「いや、幹部になる前から金を湯水のように使っていたという話なんだが、その頃からは、その数倍も使うようになっている。

しかも、その使用目的が不明ときた。その不透明な金が、政治家になるための資金に使われたことは考えるまでもないだろうが、問題はその額だ。

あまりに巨額すぎる金が動いているんだよ」

「巨額と言われても、賄賂に使われる金の相場が分からないから、なんともいえないがな」

林は頷くような仕種を見せる。

「普通は、総理大臣になるためであっても、数億……場合によりけりだが、二億から三億だと言われている。

だが、奴はそれを四倍も五倍も凌ぐ金を使って、政治家になろうとしたらしい。十数億だぞ？　明らかにおかしい。国会議員になるにしたって、そこまでの金は必要ないはずだ」

言われてみればそうだ。それに、いくら会社の幹部になっていたにしろ、それほどまでの金を持っているだけならまだしも、惜し気もなく使う、使えるというのはどう考えてもおかしな話だ。

「現在は、もう日船とは手が切れているという話だが、今日行われるはずだった幹部会には、ゲストとして日船の社長が招かれていた。結局言っているだけなんだろう。

真田になぜあれほどまでの金を使えたかは別として、奴は日船が政界に送り込んだ、エージェントなんじゃないかなんて話もあるくらいだ。まぁ会社ぐるみでやったかは、あくまで推測にすぎないがね。

奴は日船の幹部になる前もなった後も、よくある金持ちのドラ息子ぶりで、あの手この手で業界の他会社を吸収していっている。まぁ、それだけでもすでに、殺される理由としては十分すぎるくらいだな」

ドラ息子か……つい最近にも、どこかで聞いた言葉だ。大体二世というのは、どうしようもない奴が大半なので、今更どうこう言うつもりもないが。

「とまぁ、ここまでは情報屋やその筋の連中なら皆が知っていることだ。あんたが知りたいのはここから先なんだろう？」

「ああ。さっきも言ったが、金ははずむ。教えてくれ」

仮面に遮られて分からないが、交渉成立と言わんばかりに言葉に弾みがついたように感じる。

「真田が日船の幹部になり、その直後から政治家になろうとした経緯は、今ひとつはっきりしないんだが、奴はどういうわけか、今ま

では付き合うことがなかったような業種の連中と付き合うようになっている。

まぁ、政界人になろうとしている奴が、そんなことをやるのは別に珍しい話じゃないがね。だがそれでも全て納得できない。ある程度は、元いたフィールドに近しい連中に挨拶回りして根回しするのが、普通なんだ。

だというのに、何を思ったのか真田は、いきなり製薬会社との癒着に精を出すようになっていることだ」

「製薬会社だと？」

また製薬会社か……この製薬会社の話は、佐竹や六年前のストーカー事件の時にも出てきた。こう何度も出てきては、同一の会社かどうかは分からないが、一度それを含め背後関係を探っておいた方が良さそうだ。

「ああ。なぜ製薬会社と繋がりを持ちたがるようになったのかは知らない。しかも、そこにどんなやり取りがあったのかも、謎ときたもんだ。

だが、その癒着に成功したのかどうかは別にして、それを境に真田は多くの大企業を、地回りしていることだ。その中には、昨晩地下倉庫で火災が発生したTビルを所有している企業なんかもあるんだ」

俺は内心ほくそ笑んだ。しかし、これで真田と俺の昨日の仕事が関係あったことは、証明されたようなものだ。

「真田は、特にこのTビルには固執していたらしいんだが、それもそのはずで、Tビル建設の際に最も尽力したのが、真田という。それもあって、真田はTビルの企業に対して、絶大な権力を持っていた。

あそこでは、何かが行われているという話もあるが、それは分からない。だが、それが間違いなく奴の命令であることは否めない。恐らく、昨日の火災もそれが関係しているはずだ。

例えば、その中で行われていることを阻止させるためだとか、そ

んなことだ」
　長年培われた林の勘は、なかなかに鋭いようだ。事実、似たようなものではある。
「まぁ、それがそうだとしてだ。なぜ真田が殺されなくてはならなかったんだ？　別に可哀相とかそういう意味じゃぁないぜ。
　政治家なんぞ、千人だろうが一万人殺されたってどうでもいいが、昨日のビルの事故が奴の暗殺に繋がる理由が分からない」
「ああ、そのことなんだが……これは真田だけの話ではなくなるんだが、奴は責任を逃れようとしたから、なんだそうだ」
「責任逃れ？　政治家、いや政治屋なら、そんなのは別に当たり前だろう」
「いや、そうじゃない。政治家同士の責任のなすりつけ合いというわけではない。どうもそれ以外からの、らしい」
「それ以外？」
　林が頷くような動作をする。仮面など外せばいいのに、よほど顔を知られたくないのだろうか。
「真田が日船の幹部になった時、大企業をどさ回りしたと言ったろう。これが面白い話でね、これらの企業の幹部などの上層部や株主は、ある秘密クラブの会員らしいという話だ」
「秘密クラブ、だと？」
「ああ。残念ながらこのクラブは、N市はないから良く分からない。だが、真田はその秘密クラブと関わりを持つ連中と、月に一度、必ず会っていたという話がある。かなり厳重に管理されていて、おれみたいな個人ではそれ以上の情報は得られそうにないな。
　だがその会員権は、権力者なら喉から手が出るほど欲しいものだと聞いたよ。どこまでが本当なのか分からんが、秘密クラブというよりも、秘密結社といったものに近いとも聞いたことがあるな」
「秘密結社か……手痛い失態を犯したから殺された、そういうことかな」
　この二十一世紀の世の中で、秘密結社などと言われても、いまひ

とつ実感がわかない。俺は、途端に馬鹿馬鹿しい気分になった。
「信じられないかもしれないが、どうもそれが殺された理由らしいと情報通のあいだじゃ、目下の噂だ。
となると、昨日のビルの火災は、ただの事故ではない可能性がある。奴があのビルで、一体何をさせていたのか……これが分かるだけでも、また変わってくるんだがな」
それがデータであるとは口にはせず、俺はニヤリと笑って見せた。
「ありがとうよ。こいつで――」
財布を取り出して、林に福沢諭吉が印刷された紙幣を数枚渡そうとした時だった。人込みの中に紛れてかすかに、かすかにだが硝煙の臭いがしたのだ。俺のように臭いの訓練もされ、なおかつかぎなれた臭いだからこそ気付けたと言っていい。
だが周りにはいくらも人がおり、とてもではないが誰がこの臭いをさせているのかまでは、判別できない。おまけに硝煙の臭いと同時に、香水の香りがした。いや硝煙の臭いを消すために、香水をつけたと言った方が正しいかもしれない。
だとすれば、女なのだろうか。しかし最近では、男でも香水をつける者も珍しくない。
俺は、林に一万円札を4、5枚強引に渡し、その場を移動した。硝煙の臭いを染み付かせているやつを探すためだ。こういう時に限って、周りの連中もあちらこちらに好きに動いている。仕方ないが、止まれと叫びたい気持ちになる。
（どこだ？）
さりげなくすれ違う人の匂いをかぎ分けながら、入口の方へと進んでいく。一向に匂いの主は見つからない。
可能性は低いが、俺が硝煙の臭いと勘違いしたというのは？　ないだろう。香水の下から漂ってきた臭い……あれをかぎ間違えるなど、万に一つもない。
その時、ふと、フロアから入口に上がっていくための階段を一人の女が上っているのが見えた。それだけならあまり気にすることも

なかっただろうが、その女の動きに俺は注目したのだ。
優雅に、しなやかに、ゆっくりとした足取りで階段を上っているが、それとは別に、明らかに普通の動きとは違うものを感じた。そう、格闘技を会得している人間の足取りに似ているのだ。もちろん、素人が格闘技をやっているという可能性もあるが、
この空間において、その姿（後ろ姿だけだが）から察するに、男達が放っておかなさそうな女であるだろう。だというのに、一人で店を出ようとしているのだ。
ここがつまらないから、という理由も考えられなくはない。それでも、今日の夕方にあったN市での暗殺事件。硝煙の臭い。まだ夜はこれからであるはずなのに、帰ろうとしている格闘技をにおわせる女。こうもいくつもの条件が、一度に重なるだろうか。
追う価値は十分あるだろう。もし違ったとしても、それはそれで女を口説く口実にもなるかもしれない。
俺は女を追うことに決めた。それに、いい加減このマスクにも飽きてきた。俺にはこの店は肌に合わない。どうにも仮面の下に、胡散臭さも隠されていそうな雰囲気は好きになれそうにない。
人の波をかきわけて階段を上る。女はすでに、一足先に店を出たようだ。店を出る際に、マスクを、と言われ、マスクを顔から外してドアマンに押し付けた。
ビルの地下にあるため、階段を上がって地上に出る。
（女は……）
二、三十メートル先でタクシーに乗ろうとしているところだった。俺もタクシーを停め、自動でドアが開かれたと同時に乗り込む。
「あのタクシーを追ってくれないか」
そういって、財布から一万円札を二、三枚つかんで、運転手に投げるように渡した。運転手は下卑た笑みを浮かべると、車を急発進させる。
女を乗せたタクシーは、目抜き通りを南に走っていく。運転手は、目標のタクシーを見失うことなく、一つ横の車線を走っている。

大きな十字路にくる時は、必ず一台間に車を挟んで同じ車線に入っていく。車線を蛇行している感じだ。だが、女を乗せたタクシーは曲がる気配なく真っすぐと南へ向かっている。

もう繁華街も通りすぎ、そろそろ街のベッドタウンに差し掛かろうとしている。そこで、タクシーはゆっくりと速度を落とし始めた。

「このまま次の曲がり角を曲がって、停めてくれ」

俺の指示に従って、運転手は女を乗せたタクシーが停まったすぐ先の曲がり角を曲がって車を停めた。俺は運転手に一万円をさらに追加して払うと、早々にタクシーを乗り捨てた。

小走りに女が降りた辺りまで行き、周囲を見回す。そこは昔ながらの古い住宅街になっていて、耐震基準に満たされていないような、木造住宅も少なくない。例の女は、この辺りに住んでいるのだろうか。

俺は、所狭しと並ぶ木造住宅街に入っていく。ほとんど時間差はないはずなので、方向さえ間違えていなければ見つけられるはずだ。それに、比較的規則正しく造られているこの住宅群は、人を追うのに格段難しさは感じられない。

女はヒールを履いてその足音を響かせていたことを考えると、近くに行けば姿が分からなくとも、見つけることができるかもしれないのだ。

住宅群の一画に入ってさほど時間は経っていないが、ヒール特有の音が近くで聞こえた。辺りはすでに完全な闇に覆われていて、人気が全く感じられない。すでに日付も変わろうとする時間なので、当たり前と言えば当たり前だろうが。

そのために、ヒールの音なんかは割りと響きやすいのだ。それを頼りに俺は、ヒールの音を規則的に響かせて歩いている、女の方へと近づいていく。

……いた。女は角を曲がったところで、その前方わずか十数メートルのところを歩いていた。俺は気配を悟られぬよう、足音を偲ばせながら後を追う。

そこから、いくらも歩いたろうか。もうこの古い木造住宅群も終わろうとした時、女はある一画で曲がった。その際、肩にかけられたバッグの中に手を突っ込んで、手探りで何かを探していたのが見えた。家が近いのかもしれない。

俺は女が曲がって姿を消した直後に、足早にその角まで行く。もちろん、足音は消したままだ。

角まで来て、こっそりと女を盗み見ようとした顔を出した時、俺の背後から何かが這い出てきた気配を感じた。

「っ！」

俺は後頭部に鈍い衝撃をうけ、その場に膝をついた。呻き声すら出ることはなかった。訓練されたからなのか本能からなのか分からなかったが、俺は瞬間的に俺を襲った奴を見てやろうと、横目でそいつを見た。そいつの手首には、髑髏のリングを付けた腕輪がされている。

徐々に薄れ行く意識の中、そいつの顔を見ようとした時、前方からふわりと甘く、優しげな香りが漂ってきた。女が戻ってきていたのだ……やはり女はプロなんだと思った。

そのどこか高貴な香りを最後に、俺は意識を失った。

「ぅ……」

頭に鈍い痛みを感じながら、俺は目を覚ました。やけに眩しい。うなだれていた頭を力なくも、ゆっくりと起こしていく。

窓からはすでに日が傾きかけていて沈もうとしている、強烈な茜色をした太陽が目に入った。

ここはどこなんだ……そんなことを考えて手を動かそうとすると、手が固定されていることに気が付いた。ぼんやりとしていた意識が

一気に覚醒する。

そうだ。俺は確か女を追っていた時に、後ろから何者かに……多分手首のアクセサリーから、男であったと思われるが、そいつによって捕らえられたのだろう。

とんだ失態だ。当然女もそいつの仲間であり、プロであるだろうから、俺の尾行にも気がついていた。そこで俺を捕らえるため、仲間である男になんらかのアクションを起こさせたのだ。

クラブを出た時にはそんなそぶりは見せなかったので、タクシーに乗っている間に連絡したのだろう。

俺はそんなことはつゆ知らず、まんまとそいつが待ち受けていた罠に引っ掛かってしまったのだ。しかも、周囲に気を配っていたにも関わらずにこの様だ。男もプロであることは、まず間違いない。

それにしても、西日が眩しい。すでに日が傾いているということは、捕らえられてから、少なくとも十五時間から十七時間は経っているだろう。もしかしたら、一日以上経過している可能性もなくはない。だがこの頭の鈍痛から、そこまでは経っていないように思われた。

それにしてもここはどこなんだ……。俺は痛みを堪えながら、周囲を見回した。まず、自分が背もたれのある椅子に、後ろ手に縛りつけられていることが分かった。

また捕らえられていたのは、どうもあの古い木造住宅群の中の一つであるように思えた。窓から隣の古ぼけて、人が住んでいるかも分からないような、あの木造住宅が目に入ったからだ。

部屋の中は、なぜ椅子があるのか分からないほど、古く本当に人が住めるのか怪しぶまれるほどだ。床は典型的な、古い木造住宅にありがちな畳で、日焼けして本来の色を失っている。壁も所々日々が入っていて、地震が来たら本当に倒壊してもおかしくなさそうだ。

きっと奴らのアジトなんだろう。昨日この住宅街に入った時、やけに静かだったのは、寝静まっているからではなく、単純にもう人が、ここら一帯には住んでいないからだったからなのかもしれない。

（せめてカーテンくらいしろ）
眩しい西日に照らされながら、そんなことを考えたりしていると、後ろに人がきた気配を感じた。
「ようやくお目覚めか？」
野太く、低い声が聞こえた。きっと例の髑髏野郎だろう。頭を掴まれて、顔を上げさせられる。髑髏野郎は、細い一重瞼とおちょぼ口の奴だった。
歳は俺と同じか、少し下といったところだろうか。ヒップホップを意識したかのような服装とアクセサリーを付けている。もちろん、例の髑髏付きの腕輪もだ。
頭も見事なまでに非常に短髪にしておいて、どこかのステージにでも立っていそうな雰囲気だ。
随分と素人じみた奴だというのが第一印象だったが、こいつもとりあえずは訓練されているはずなので、まだ下手は打つべきではない。もちろん、このツケは必ずおまえの命で支払ってもらうがな。
俺は何も言わず、ただ黙っていた。冷静に、相手の感情を逆なでするように。
だが、髑髏野郎もやはり黙ったままだった。
その時、もう一人俺が縛られている真後ろに人の気配を感じた。いつからそこにいたのか、分からなかった。もしかしたら、始めからいたのかもしれない……そう思えるほど、気配を感じさせない。
単純に考えて、例の女であることが分かるが、だとしたら、相当な奴であることが窺い知れるというもので、この髑髏のヒップホッパーなんかよりも、はるかに質が悪そうだ。
俺が何を考えているのか悟ったのか、髑髏野郎は強引に俺の髪を引っ張り、意識を自分に向けさせる。
「……なんだ？」
あえて、低い声を出して挑発してやった。髑髏野郎は、自分がまるで相手にされていないことが分かると、すぐさま顔に血を昇らせはじめ、右手で俺の腹を殴る。

「ぐっ！」

続いて、左手がやはり腹叩き込まれる。また右手が、次はまた左手だ。また右手、また左……幾度かそれは続いて、ふいにそれが止んだ。

髑髏野郎は息を切らしながら、俺を睨みつけている。さすがに一発目二発目は辛かったが、慣れると腹に力をいれて、なんとかやり過ごしたのだ。

また、この髑髏野郎はこの業界に入って、まだ日が浅いと思われた。恰好もそうだが、立ち居振る舞いや行動がどこか素人じみている。ずぶの素人相手ならだませるにしても、俺や田神といった、何年もこの業界で生きてきた人間の目はごまかせない。

この業界では、こういう奴が真っ先に早死にするということを、後できっちりと教えてやるつもりだ。俺はつとめて冷静に、溢れんばかりの殺意を隠しながら言った。

「……その髑髏」

「なんだ……？」

「くっくっ……いいや、なんでもないぜ」

「この野郎！」

顔を思い切り殴られる。口の中で塩の味がする。殴られたために、口の中が切れて血がでてきたのだろう。

俺は血の混ざった唾液を吐き捨て、髑髏野郎を見据えながら言った。

「何、その髑髏がださくてね。今時そんなの流行らないぜ。おまけに、なんなんだその恰好は。もしかしてお前さん、ヒップホップ歌手にでもなったつもりか？」

思い切り見下した態度で言ってやった。ゴミでも見るかのような言い草でだ。

「それにお前、ちゃんと毎日鏡見てるか？　良くそんな似合わない恰好ができるな。俺なら死んだって、そんなダサい恰好しないぜ。いや、死んでもしたくないってのが正しいかな」

嘲笑しながら、髑髏野郎に向かって血の混ざった唾を飛ばす。髑髏野郎は、一瞬何を吐き付けられたのか分からなかったようで、間抜けな面を曝して吐き付けられた部分を見た。

みるみるうちに顔中が真っ赤になっていき、こめかみは言うによばず、額や目の下、鼻筋にすら血管が浮き出てきたのだ。

「どうした？　顔が真っ赤になってるぜ。それとも、ここでタコ踊りでも披露してくれるのかな。その頭にタコの物真似はお似合いだ」

もうそろそろ釣れそうだ。そうだ、もっと怒れ。俺がぶち倒れるくらいに殴り掛かってこい。俺はこのタコ野郎を怒らせて、ぶち倒させることにしていた。

連中は気付いていないが、椅子の足にくくりつけられていた脚は、縄が緩くなっていたようで抜けそうなのだ。片脚だけではあるが、自由になったらタコ野郎が唖然としている間に、股間を蹴り潰してやるつもりでいたのだ。

同じ業界の一先輩として、俺がこの業界の厳しさというのを教えてやる。さぁ、そのためにも、もっと怒り狂うんだ。

真後ろにいるはずの女が何も言わず、何もするでないのが気になるところだが、仲間がやられたら、さすがになんらかのアクションを起こす可能性が高いだろうが、まぁ、そうなったらそうなったらだ。

その時、後ろから携帯の鳴る音が聞こえ、女が出たようだった。そのせいで、殴りかかりそうだったタコ野郎も冷静になったのか、殴りかかってくるのを止めた。

くそ、変なところで冷静になれる奴だ。

「……残念だけど、時間切れ。そいつを眠らせる」

別の仲間からの連絡だったのか、携帯を切った女はそんなことを言ってきたのだ。

「ちっ、いいところだったのにな！　おまえ、運が良かったな。だが、次はないと思えよ！」

タコ野郎が吐き捨てるように、睨み付けながら言う。だが、タコ

野郎のことなんざ今はどうでも良かった。
俺は思案した。今の女の声が、どこかで聞き覚えのある声だったのだ。なんとか振り向いて女を見ようとした時、例の香水の匂いを漂わせながら、女が俺の顔に何かを吹き付けた。
「うっ」
「ふふっ、もうしばらく寝ていなさい」
「くっ、お前たちは一体……」
何者なんだと言おうとしたが、急激に眠くなって言葉が続かなかった。かなり強い即効性の睡眠ガスのようだ。この業界にいる女なら、必須アイテムと言っていいものだ。
おまけに吹き付けられたため、目に薬液が入ってしまい、うまく目を開けることができない。また眠らされる不甲斐なさと、連中の良いようにされることに憤りを覚えながら、俺は意識が沈んでいくのを感じた。
次は、どこで目が覚めることになるのか知れたものではないが、とりあえず今はまだ死ぬことはないようだ。
俺は、もうどうにでもなれと思ったのを最後に、再び意識を失った――。

第２５章

……まただ。
またいつもの夢だ。
最近は見ていなかったからか、随分と久しぶりのような気がする。
……ああ、だが俺は、またあの夢の続きを見ないといけないのか。
ふわふわと浮遊感のある、現実味を感じさせないこの感覚。

『……』

……なんだって？　良く聞き取れない。

『……ゃん』

ああ、分かってる。
見たくはないのに、俺はまたそっちへ行くんだな。

『お兄……ん！』

分かってるさ。
今そっちに行くから、そんなに怒鳴るなよ……沙弥佳。

『……お兄ちゃん！　目を開けてっ』

そうだな、おまえの顔を見れるのなら、それでもいいかもしれない。
そう思った俺は、光の奔流に身を任そうとした。
だが突如、俺の意識は別の力によって反対方向へと引っ張られて

いく。

『ああっ、お兄ちゃん！　駄目！　そっちに行かないでっ』

くそ、なんだって言うんだ。

突如として沸き起こった別の力に、俺は成す術もなく、引っ張られ続ける。

『お兄……』

だんだんと声は遠ざかって行き、もう沙弥佳の声は聞こえなくなっていった。

すまない沙弥佳……。でも、必ずまたおまえに……。

どこかで風の吹くような音が聞こえる。その音のため、ゆっくりと意識が覚醒していく。俺はぼんやりとしながら、うっすらと目を開けた。

その頃には、他の器官ははっきりと目が覚めている。早く頭もしっかりと動かせるようにするんだ。頭蓋の中でもう一人の俺が叫ぶ。

（ああ、分かってるさ……）

俺はまだ重い頭を無理矢理に起こし、周囲を見回す。

（どこなんだ、ここは）

そこは見たところ、ここがどこかの廃工場か何かではないかと思われた。俺はそんなところに、ただ一人放り出されていたのだ。

しかも、今が夜なのか昼なのかも分からない。ここには窓がないのだ。そのために、中はかなり暗い。夜目がきくため、なんとか辺

りに何があるのか分かったものの、やはりつらいものだ。
頭を片手で抱えながらのろのろと立ち上がり、もう一度ちゃんと周囲を確認する。間違いない。ここは廃棄された工場内の一画のようだ。
前に目覚めた時は古びた家屋の中で、今度は廃工場か……。全く随分と殊勝なことをしてくれる連中だ。
どこか怪我はしていないかと自分の身体を触るが、特にそれらしいものはなかった。本当に、ただここに放り出されていただけのようだ。
また、服の中やポケットを探ると、持っていたはずの拳銃や携帯は取り去られていた。取り去られたのがあの家屋の中でなのか、ここでなのかは分からなかったが。
俺は、ここに運び出されるまでの経緯を、整理してみた。確かあの女が、タコ野郎以外からの連絡で携帯を取った（と思われる）ところは覚えている。
その直後にあの女が、俺に睡眠ガスなんぞを吹き付けて眠らせた。これも間違いなく覚えている。問題はここからだ。
まず、ここはどこなんだ。そして、なぜこんな所に放り出されたのか。連中の本当のアジトなのだろうか。
だとしたら、なぜ拘束が解かれているのか。俺が逃げ出しても構わないということなのか？　俺を殺すつもりなら例の家屋で殺していただろうし、それでは最初から、俺をわざわざ連れて来た意味がない。
となると、ここで今すぐ死ぬというわけでもないだろう。ここがどこの廃工場なのかだとか、連中のアジトなのかは別として、俺になんらかのアクションを起こさせるためと見ていいだろう。
つまり、ここには何かしらの罠が仕掛けられていると考えるべきだ。連中の意図は分からないが、それは念頭に入れておいた方が良さそうだ。
とにかく、今はこの陰気臭い廃工場から出ることが先決だ。そう

決めると、俺は早速行動を開始した。一切の丸腰なのが随分と頼りないが、取り上げられてしまっているものは仕方ないだろう。

俺が放り出されていた場所は、どうも工場の二階か三階あたりだったようだ。二階か三階あたりというのは、正確にここが何階か分からないということだ。

俺のいた広間のような場所を抜けると、そこに階段があったからだ。もしかしたら、四階やそれ以上の可能性もある。まぁ、いくら工場とはいえ、あまり階数があるわけでもあるまい。

当然の選択として、俺は下に行く階段を選んだ。誰も好き好んでこんな寂れた場所を階上に行くやつなど、いはしないだろう。たとえ、それが俺のような孤独癖を持つような人間だとしても、だ。

だが、階段は注意した方がいい。ここは何が待ち受けているか、一切分からない所なのだ。階段というのは、最も闘うのに難しい場所の一つで、スペースが極端に限られているうえ、おまけに挟み打ちにも遭いやすく、逃げ道の確保も難しいためだ。幸い、今はそんな気配はないが、連中が暗闇に潜んでいないとも言い切れない。細心の注意が必要だ。

周りに気をつけながら階段を下りていくと、いともあっさりと階下にたどり着くことができた。また、この階が一階のようでも思われた。いたる所が壊れてしまっており、かなり損壊が激しいがそのために上の階にはなかった窓があり、うっすらと外の様子が分かったからだった。

上とは明らかに作りが違うので、そう見ていいだろうが、こうも簡単に、このままここを抜け出ることがいまひとつ納得できなくもある。もちろん何もないならないで、それは歓迎すべきなのだが、どうにも嫌な感覚が俺に纏わり付いてくる。

経験上、こんな時は自分の直感というのを信じた方がいいと思っているので、ここを抜けるまでは油断しない方がいいだろう。

そして、いくらか進んだ時、前方に破壊された窓から洩れる月明かりに照らされて、一人の人間が立っているのが見えた。俺は怪訝

に思いながら、最大限に警戒心を強め、歩むスピードを落とした。
そして、そいつから十数メートルほど離れたところまで近寄っていった。さすがにそれ以上は危険だ。相手が何をしてくるか分からないし、かといって離れすぎていても、こちらとしても何もしようがない。俺は情けないことに、丸腰なのだ。
だが、こんな奴が現れたということは、ルートとしては正解だったというわけだ。いうなら、こいつが罠と見ていい。
俺の前に突如として現れたそいつは、身長は百六十センチ台半ばといったところだろう。全体的に線の細さを感じさせる体躯は、どことなく女であることを思わせる。
当然だが、たとえ女だとしても油断はしないし、手を抜くつもりもない。そんなことをしてはこちらが危ういのだ。女だと油断し、あの世に行った奴らを何人も俺は見てきた。生き残りを賭けた闘争に、性差など微塵も関係ないのだ。
また、月明かりに照らされているそいつは、頭のてっぺんからつま先まで全身を黒で覆って、暗闇でもしっかりと相手が分かるように、スコープを付けている。その手にもナイフが握られているのが、うっすらとだが確認できる。
俺がそいつに対峙する形で歩みをとめると、そいつは一本のナイフを俺に投げた。ナイフが地面を滑り、渇いた金属音が響いて、目の前で止まった。こいつを使えということなんだろう。
俺は、そいつから目を逸らさずに、ゆっくりとナイフを拾った。ここからでは把握できないが、奴と同様のものである気がする。なんにしても丸腰であった身としては、ようやくありつけた獲物なのだから、贅沢なことは言えない。
ナイフを逆手に持って、軽く構える。常に相手がどうきても良いように、深く構えすぎず、無防備を晒さない程度にだ。
それを合図と受け取ったのか、そいつは軽くステップするような足取りで、一気に距離をつめてきた。
（速い！）

そう思った次の瞬間には、目前にまでナイフが迫っていた。

「くっ」

初撃をギリギリでかわす。前髪がハラリと落ちていく感覚がある。

だが、俺も負けずにはいられない。そいつの腹めがけ、蹴りを繰り出した。腕と脚でうまくガードされたものの、すでに次の攻撃に移っていた。

ナイフを、そいつの頭に切り付けようとしたのだ。だがそいつも読んでいたのか、あっさりとかわされる。

互いに初撃をかわされたため、一旦身を後ろに引く。

じりじりと間を保ちながら、牽制しあう。その場をゆっくりと動きながら、いつの間にか進んでいた方向に背を向けていた。

一瞬このまま踵を返して逃げようという気になるが、無駄だろう。間合いを一瞬で詰め寄ったこいつ相手では、後ろからザクリとやられておしまいだ。

そう考えたのが、いけなかった。奴は、またも一瞬で俺との間合いを詰めてきた。

だが、今度は俺もただではすまさせない。俺も一歩前に踏み込む。対象が後ろや横に行くというのは想定できても、前に出るというのはなかなかできることではない。

いうなれば、チキンレースの要領かもしれない。互いにぶつかるかもしれないという恐怖感から、ハンドル操作を誤って転倒するというのを狙うのだ。

俺はそいつのナイフの軌道を読みながら、手でそいつの手首を掴む。それと同時に、ナイフを使ってスコープをはじき落とした。

「っ！」

思わぬ攻撃に、奴は一瞬だが冷静さを欠いたようだ。

今だ！

掴んだ手首には、思いきり力をこめて握り、そのままナイフをそいつの首めがけて振り下ろす。

これで勝負は決まる。そう思った時だった。

突然、後ろから銃声が聞こえた。
しまった……その銃声が、誰を標的にして放たれたものなのか、考えるまでもない。
次の瞬間、俺は目の前の奴に蹴り飛ばされて、情けなくも、受け身をとることなく倒された。
いや、力を入れたくても入れられないのだ。だんだんと俺の身体を、灼熱の痛みが支配していく。撃たれたのだ。
だが、そんなことを考えてももう遅い。あれほど暗闇には気をつけるべきだと言い聞かせたのに、この様だ。
暗いために分かりにくいが、辺りに不自然に黒い雫のような跡が見える。きっと俺の血だろう。
腹……いや、背中か。あまりの熱さと痛みで、どこを撃たれたのかすらよく分からない。とにかく、ドロリと血が溢れ出ていっている感覚だけが分かった。
まずい……今、ここで意識を失ったら……その思いだけが俺を支え、なんとか立ち上がろうとする。
だが、身体は全く言うことを聞いてくれない。もはや下半身には、つゆのほども力がなかったのだ。
そんな俺を見下しながら、さっきまで俺とやり合った奴と撃った不粋な不届きな奴……それに他にも数人、どこから現れたのか、俺の周りに集まってきていたのだ。
その中に夜目がきくとは言え、はっきりと分からないが、あのタコ野郎と思わしき奴の姿もあった。
「……殺すんだったら……今……殺しておけ。……さもないと……俺が……おまえ……らを……かな……ら……」
その言葉を最後に、俺は地面にぶち倒れる。それでも、せめて奴の……俺とやり合った奴の顔だけは見てやろうと、顔をあげていた。
スコープを飛ばされた奴は、フードもとりはらわれており、目元と同時に髪もはだけ出されていた。
もう、意識が混濁している俺には、はっきりとその顔までは分か

らなかったが、それがやはり女であったということだけは、理解することができた――。

……なんだ？　音が聞こえる。複数の男女の笑い声だ。誰かが笑いをとっているのだろう。

リアルだが、どこか無機質に聞こえるのは、きっとそれがテレビからの流されているからだ。

「う……」

まだ目は開けなかったが、身体を動かそうとすると、ひどく背中が痛かった。

……そうか。確か俺は撃たれた後、意識が……そこまで考えると、即座に意識が回復した。

そうだ。俺はあろうことか、一対一の闘いの最中に背中を撃たれるという、なんとも笑えないことになっていたはずだ。

「ん？　どうやらお目覚めかな」

俺の意識がはっきりしたのを誰かが悟ったらしく、誰かがそれを告げている。ゆっくりと目を開ける。どうも、俺はベッドに寝かされているらしい。軽く手足が動かせたことから、拘束されているわけではないようだ。

「……ここは、どこだ」

ベッドの脇からやや離れたところに立っている男を、半ば睨みつけるように問う。

「いきなりだな。あんたを助けたのは俺だっていうのに」

「そんなの知ったことじゃぁない。元々お前たちが撃たなければ、こんなことにはならなかったんだ」

怒気をこめながら、俺は喚きたてる。

「……ま、確かに違いないな。だが、放っておいたら、あんたは間違いなく死んでたのも事実だけどな」

顎髭をたくわえた男は、笑いながら皮肉を言ってきた。命を救ってくれたのだから、敵ではないのかもしれないが、素性が知れない以上は信用するわけにもいかない。

まだ敵ではないと決まったわけでもないのだ。はっきりと正体が分かるまでは、敵と思っておいた方がいい。

「それより、ここはどこなんだ？　さっきの廃工場というわけではなさそうだが」

「ああ……さっき、ではないよ。もうあんたが担ぎ込まれて来てから、四日経ってる」

「……なん、だと？」

俺は耳を疑った。あの廃工場で撃たれてから、すでに四日も経っているだと？　あまりに現実感がないため、信じることができない。

「ふふ、信じられないって顔してるな。ま、当然といえば当然か。誰も好き好んで四日も寝たりしないしな」

どことなく、人を小ばかにしたような男の喋り方は、それが真実であることを告げている。どうやら、四日経っているという事実を受け入れるしかなさそうだ。

「で、ここがどこかというと、俺の経営してる病院だ。ちなみに、あんたがいたという廃工場は、俺達の訓練場の一つでね。N市に一番近かったから選ばれただけだ」

「訓練場……」

「そうだ。ま、ようするに、あんたは俺達に試されたというわけさ」

「試すだと？　一体なんの話をしてるんだ」

俺は男の喋り方に、苛々しながら乱暴に聞き返した。

「おいおい、落ち着けよ。別に俺達と言っても、俺が決めたことじゃないし、そもそも俺はあんたなんて知らないんだ」

「どうもあんたとは話が噛み合わないようだな。俺の何を試したっていうんだ」

苛々を募らせながら、目の前の男に噛み付くようにいう。

「俺もいまいち話が噛み合わんな。あんたは、俺達の仲間になるん

だろう？」
「なんの話だ。俺はあんた達の仲間になりたいだなんて思ったことは、一度だってない！
だいたい、あんた達は一体何者なんだ？　あの暗殺技術といい、ためらうことなく人を撃てることといい、あんた達がそこらのチンピラじゃぁないことは分かってるんだ」
喚き立てている俺を、男は驚いたような顔で見ている。
「ふむ、おかしいな。あんたはうちへの入団希望者だという話だったんだが……どこで話が食い違ったのかな」
男はしばらく考え込んでいたが、再び何もなかったように話し出した。
「まぁ、いいか。あんたが入団希望者なのかそうじゃないかは別として、一応は説明しておくべきだな」
一人で勝手に頷きながら、男は俺が置かれた状況を話し出す。
「その前に、まず自己紹介からだな。毛利貞治（もうりさだはる）だ。さっきも言ったが、ここで医者をやってる。
そのまま仲間たちからもドクターと言われてる。あんたもそう呼んでくれ」
「分かったぜ、毛利。それでさっさとどういうことか説明してくれ」
毛利は一瞬唖然とし、わずかに苛立ちの顔を見せたが、すぐに元のどこか食えない態度をした表情に戻った。
「ま、俺が知っているのは大したことではない。あくまで、新たに一人メンバーが加わるだろうというのを聞いただけだからな。
それが伝えられたのが五日ほど前の話だ。なんでも、何やら自分達を追っている奴がいるって話だったな」
「そいつがまさに、俺だったというわけか」
「ま、そうなるな。それでうちのトップ二人は、最近減ってしまった人員を確保するため、あんたを試したというわけだな……。それが、あの廃工場での出来事というわけだ。
とは言っても、俺はその場にいなかったからなんとも言えないん

だが」
「……入団試験というわけか」
「平たく言えばそうだな。だが、俺がさっきも言ったように、てっきり入団希望者と聞かされていたんでな、妙に話が食い違うはずだな」
毛利は肩で笑いながら、タバコを手にとって火をつけた。
「で、その入団試験とやらには、俺は合格したのか？」
「立ち会った連中全員……いや、約一名渋ってたのがいたな。ま、文句なしの合格だそうだ。
まさか、うちの中でも、三本の指に入る奴を寸前まで追い詰めたってな。聞いた時、さすがに耳を疑っちまったよ」
「追い詰めたどころか、勝負は決まってたぜ。その試験中にあろうことか、背中に銃をぶっ放した奴がいる。それがなければ、確実に殺してたさ」
「あいつのスピード……かなりのものだったろう？　それをたったの二回で完全に見切ったって聞いた時は、ぶっ飛んだ。
そりゃ、満場一致にもなるわな」
そうか……ただ者ではないとは分かってはいたが、そこまでの手練（てだれ）とは思わなかった。
まぁ、いい。それよりも、毛利の話を聞いているうちに、俺はある話を思い出していた。
「……最近、ある筋から謎の暗殺集団があると聞いたことがあったが、もしかして、あんた達のことだったのか？」
「……誰から聞いたかは知らんが、多分そうじゃないか？　暗殺集団が、そういくつもあるわけではないしな」
「そうか。……だったら、あんた、佐竹という男を知っているか？
多分、あんた達と関わりがあったと思うんだが」
「……なんであんたが佐竹を知っている？」
「……まぁ、いろいろとあったのさ。その様子だと知っているみたいだな」

毛利はどこか悲しげな目になった。半ばカマをかけたのだが、見事に当たったようだった。

「佐竹とはな、十二年ほどの付き合いになる。あいつのことを知っているとなると、執事をしていたってのも知っているな？」

俺は軽く頷いた。

「今井重工の末娘のところでだろう」

「そうだ。彼女はな、襲撃された後も実は生きていたんだ。

佐竹が彼女に解雇された話も聞いてると思うが、それを不審に思った佐竹は、屋敷に戻ったらしい。そこで彼女を見つけたんだそうだ、死にかけだったがな。

それであいつは当時開業医になってまだ日の浅い、俺のところに駆け込んできた。彼女を救ってくれってな」

一旦話を区切って、毛利は指に挟まれているタバコを口に含み、肺に思いきり紫煙を吸い込んで吐き出した。

「結果は、ご存知の通りだ。医者としては、あまりいうべきではないんだろうが、彼女はすでに手の施しようがなかったんだ。全身、何箇所も弾が食い込んでいてな……。

はっきり言って、あれでよくもまぁ屋敷からここまでの間、生きていられたものだと、逆に驚かされたほどだったよ。

……戦場で兵士達を何人も診てきたが、あそこまで酷いものは、あまりお目にかかったことはないな」

「あんた、軍医だったのか」

「ああ。日本の病院内の、腐った派閥争いに嫌気がさしてね。

それでも医者そのものをやめようとは思わなかった。だったらと、戦場に行ったのさ……連中はゲリラだったんだが、戦闘技術はそこで習った。全く、皮肉なものだよ……医者である以上、戦場だろうとなんだろうと、傷ついた人間を治療するために現地に赴いたというのに、闘うための訓練を受けたんだからな」

自嘲気味に笑いながら、再度タバコを口に含んで、その煙りを盛大に吐き出した。

「ま、おかげで日本でやってるより、はるかに技術は身についたがな。……と、脇道にそれたな。

とにかく、それが俺と佐竹の出会いだ。死んだ少女の顔を見たときのあいつは……いや、よそう。もう本人も死んでしまったんだしな」

「……それで、あんたが佐竹を紹介して訓練したのか？」

「本人がどうしてもと言ったんだから、仕方がない。俺は医者という立場から、どこを攻撃すれば即座に相手を動けなくなるか、そんなことを教えただけだ。ま、元々佐竹自身、そっち方面の才能もあったんだろう」

毛利はどことなく優しげな目になって、佐竹のことを語っていた。俺と田神がそうであるように、毛利と佐竹は、親友だったのかもしれない。歳が近いというのもあったろう。

仕方のなかったこととは言え、どことなくバツの悪い気分になった。それに話から推測するに、どうも俺が佐竹と一戦交えたことは知られていないようだ。

無駄にあれやこれやと言って、掻き乱さない方がいいだろう。そう判断した俺は、そのことは話さないでおいた。いずれ知られることになるかもしれないが、その時はその時だ。

だが、となると、佐竹を撃った奴は誰なのか……それは依然として謎のままだ。まさか、同じ集団の仲間同士が殺すわけもないだろう。

どこか別の組織に恨みを買われたために、依頼されたフリーの殺し屋という線が強くはなるが……。俺にはそれでもなお、あのスハイパーの行動にどこか納得できずにいた。

「ま、俺が知っているのはこれくらいだ。確かに俺達は殺しの集団だが、特別組織だっているわけでもないんだ。個々の理由のために徒党を組んでいるにすぎないのさ。とは言っても、まとめ役はいるけどな。

後はわりと、自由気ままに殺しなりなんなりとしている奴らばか

りだ。現に、俺はこうして医者をやっているからな。ま、殺し屋たちのコミュニティと言った方が近いかもしれん」

「コミュニティ……」

「ああ、そうだ。だから、連中にとって誰が何をやっているかなんてのは、別の誰かは知らないってのも、ある話だ。もちろん後で、大体知られるんだがな。

だから、俺があんたが入団希望者だと言われて、そう思い込んでいたとして不思議な話じゃない。伝言ゲームみたいに、どこかで話が食い違っていったりするものなのさ。

ま、あまりその辺は気にしないことだ。例えそうだとしても、基本的に我関せずな連中ばかりだからな」

「そうか……だが、もう一つ言っておくが、俺はこんなコミュニティに入りたくて入ったわけでもないし、コミュニティの一員になったつもりもない」

「ふむ。……その辺は、トップと話をつけてくれ。俺にはなにも言えんよ。あくまで、担ぎ込まれたあんたを治療するまでが、こっちの仕事だったからな。だが、この集団に席を置いておくのも、悪いこととは思わないがね、俺は。

さっきも言ったように、このコミュニティには様々な奴がいる。俺のように医者をやってる奴もいれば、職業一徹で殺ししかしない奴。中にはモデルをやりながら、このコミュニティに参加している奴もいるって話だ。

ようするに、あんたが何者かは知らんが、決して悪い条件はないってことだ。一組織にいたんでは、手に入らない情報が転がり込むこともある。コミュニティ同士なのに、互いに知らずに殺し合うなんてのも、もしかしたらあるかもな。逆にいえば、後腐れがないとも言えるかもしれん。

だから、あんたはせっかくのコミュニティへの参加する権利をもらったんだ、そいつを無下にすることはないんじゃないか？」

俺は黙ったまま毛利の話を聞いていた。

確かにこの男のいう通りだ。組織にいはしたがあの連中は俺の知りたい、欲している情報なぞ、これっぽっちも提供しない。だとすれば、さらにこの世界の奥へと行くべきなのかもしれない。

今までは人身売買などの方面は、知りたくてもなかなか手は出せなかった。雇った情報屋連中が皆残らず死体になったからだ。

人身売買……日本のような先進国家ではそれを行うというのは、バイヤーにしろ顧客にしろ、諸刃の剣なのだ。そのため、たいていは発展途上国なんかで行われる。だが、当然ながら、日本でもそれを秘密裏に行っている奴らはいるのだ。

日本などの先進国家では、発展途上国で買い付け、それを自身の国に持ち帰るのだ。当然、金と権力がものを言うが、それを持つ連中からしてみれば、奴隷のパスポートやなんかは簡単に手に入ってしまう。

それにだ。俺の組織にだってその権力を傘に、それを行っている奴だっていないとも言い切れない。

この集団は、規模がどれほどのものかは知らないが、色々と知りたいものが出て来るかもしれない。どうせ殺し屋という職に就いているなら、スパイになってしまうというのもいいだろう。現在も似たり寄ったりではあるが。

別に組織なぞ、いずれはおさらばする気でいたのだ。今は様子を見ながら、有益であるならこっちに完全にくら替えすればいい。

「腹は決まったという顔だな」

毛利が俺を見ながら、ニヤリとしていた。そんな毛利の態度に舌打ちしながら、聞いてみた。

「このコミュニティには、色々な人種がいるのか？」

「ああ、表向きは至極真っ当な奴らから、いかがわしさ全開の奴まで、な。

ただ、基本的には個々の目的だけで動いているから、どんな連中がいるのかまでは分からんよ。ま、その中でも医者というカテゴリーにいる奴はほとんどいないようだがな。……というか聞いたこと

がないな。だから俺を、皆ドクターだなんて呼んでいるんだろうが。
つまり、専門職に就いている奴というのは、ほぼ、このコミュニティ内では独占市場になってるんだ。とにかくだ。そのおかげでコミュニティに入ると、自然とある程度は、色々な噂が流れ始めるからな。
元々は、そいつが属す世界の裏情報だから、信憑性は高い。どうだ？　あんたみたいな人間には、魅力的だろう？」
「……そうだな。だが、まだ入ると完全に決めたわけではないぜ。まぁ、それでも利用価値はありそうだ」
「ふふ、そんなもんでいいさ。いきなり、仲間になれなんて言われても、大体の奴はそんなものだろうしな」
「もう一つ聞いておきたいんだが、さっきメンバーの補充がどうとか言っていたよな？　この集団の連中は、皆殺しの技術を持っているんだろう？
だったら、わざわざ俺みたいな奴を入れる理由はないんじゃぁないのか？　そこら辺は気になるぜ」
俺にそう聞かれ毛利は、腕を組みながらたくわえた顎髭に片手を伸ばした。
「ふむ、なかなかの洞察力だね。あんたの言う通り、確かに皆、何かしらそういった技術を持ってはいるが、大半は護身程度の者も少なくないはずだ。もちろん一人二人に囲まれたとしても、死ぬことはほとんどないだろうし、返り討ちが関の山だな。
だが当然ながら、我がコミュニティでも己の技術では、どうにもできないことがあるんだ。そんな時にはそう言った、“濡れ事”の専門家がコミュニティにはいて、その連中が動くことになるんだ。対組織の時なんかが、まさにそうさ」
濡れ事というのは女との情事ではなく、この業界においての業界用語で、ようするに諜報活動や破壊工作といった作戦上、人を殺すことも厭わないことをさす。
毛利の話を聞いて、俺はもう一週間近く前になる、Ｔビルでのこ

とを思い出していた。確証など全くないが、あの時ビルの地下施設に潜入したのは、この男の言う専門家の一人ではないのか、と。

となると、この集団には確かに老若男女、様々な人種がいるのだろう。そして、いつかニーロの言っていた暗殺者集団というのも、この濡れ事専門の連中のことなのだと、俺は理解した。

「っと、悪いがそろそろ診療の時間なんで、行かないとな。とりあえず、他の連中にもあんたが目を覚ましたことは伝えておこう。その内、誰か見舞いに来るかもしれんぞ。

それと、まだ無理できるような体じゃないから、無理はするな」

「ああ、分かってるさ……」

そう言って毛利は、俺の横から動いてドアへと向かった。

「……待ってくれ。最後にもう一つだけ聞きたいことがある」

「なんだ？」

顎髭の男は、ドアの取っ手に手をつけたまま、こちらに振り向いた。

「……俺を撃った奴ともう一人、女のことだが、そいつらのこと知っているかい？」

「……ああ、まぁな。あんたを撃った男の方は、この専門家達のリーダーで、コミュニティ内でも発言力を持っている奴だ。

コミュニティ内において、権力なんてのは存在しないが、あえて言うなら、この男は間違いなく三本の指に入る……まさにトップ・スリーといっていい存在だ。

もう一人はここ数年で、コミュニティでもずば抜けた暗殺能力をもって、ナンバー・ワンの殺し屋の称号を欲しいがままにした女だ。どちらも仲間内じゃ有名だ。

ま、女の方は、何を考えているのか俺達仲間内にも、理解できないことがあるがな」

「名前はわかるか？」

「男の方は、武田という。女の方は……」

「なんだ？」

「いや、マリア、というらしい」
「らしい？」
「ああ。他にも色々と通り名があるんだ。その仕事ぶりから、ヴァルキリーだとかイシュタルとも呼ばれたりすることがある。ああ、後アルテミスだなんて呼んでいた奴もいたな。俺が知らないだけで、他にもあるかもしれない。それ以外に俺は知らない。
元々、武田の紹介で入ったことになったと聞いたくらいだな」
「そうか……。引き止めて、すまなかったな」
「なに、いいさ。とにかく、今はゆっくり養生することだ。診療が終わったらまた来る。ではな」
毛利は今度こそドアを開け、自分の仕事場へと消えていった。誰もいなくなり、俺は緊張していた肢体からどっと力を抜いた。
全く、予想もしない方向に話が進んでいる。まさか、こんなにも早く連中と接触することができりなんて思わなかった。そしてあの女が、ニーロから聞いた暗殺者集団の一人だなんていうのも、マスカレイドにいた時からは想像もしなかったことだ。
不思議と俺には撃った奴よりも、もう一人のあの女の方が気になっていた。あのクラブにいた女と、四日前に俺とやりあった奴は、間違いなく同一人物だ。なぜだか、俺はそう思ったのだ。
そして、あの女と俺は、どこか深い部分で関係しているんではないかという、漠然とした思いが沸き起こったのだ。

第２６章

スーツ姿の男達がせわしく動き回り、入れ代わり立ち代わり部屋を出入りしている。入ってきた男は大声で新たに入って来た情報を読み上げ、また出ていった。時には新たに指示を受けて出ていく者もいた。

そんな光景がここ二、三十分続いている。

「おい、里見ぃっ！　何してるっ早く来い！」

喧騒にまみれた部屋の中で一際響く怒声に、里見（さとみ）と呼ばれた女はビクリと身体を震わせた。その怒声には、いつまで経っても慣れることがない。なんでいつもそんなに苛々としているのか、彼女には理解できないでいた。

里見は書類を素早く持って、上司の後を追った。

「遅いぞっ」

「す、すみません。南部さん」

「ったく、おまえはいつまで経っても鈍臭いやつだな。もっとキビキビとしろ」

「は、はい」

南部（なんぶ）と呼ばれた男は、里見の直属の上司であり、歳の離れた先輩でもある。二人は警視庁に勤める刑事だった。

つい四日前にA県のN市で、政界の大物である真田博之が暗殺されるというショッキングなニュースは、瞬く間に全国に広がり政界を混乱させた。

そして今夜は霞ヶ関で、新たに政治家が殺されたという情報が入ってきたのだ。今回は前の真田ほどの大物ではないが、ここ数年で急激に勢力を拡げつつある、若手議員だった。

今から二人は車に乗って、その現場に行くことになったのだ。当然ながら、運転するのは里見と呼ばれる女だ。今回事件があったの

は、近い場所なのであまり時間はかからない。
車に乗り込んで、サイレンを鳴らす。甲高い音が辺りに響いて、緊急事態が発生したことを告げる。車道を走る車は、二人を乗せて走る車を行かせるために避けていく。
里見は初めてそれを体験した時は、思わず感嘆の声をあげそうになったほどだ。もちろん、常に行動する上司の手前、それはおくびにもしなかったが。
今日はもう夕方の、それも残業もなく一日を終えたような者達は、そろそろ帰り始める時間のために、道路が混み始める時間だ。
数分もすると、殺されたという議員の死体がある現場に着いた。まだ日のある時間に起こった事件というだけに、現場の周りには野次馬やマスコミが、足場のないほどに密集している。
二人は近くに車をおくと、その人込みを掻き分けて現場へと急ぐ。
「おい邪魔だっ、向こうへ行けっ。どくんだ、どけと言ってるだろうっ」
南部が怒声をあげながら進み、里見がそのすぐ後ろを着いていくという形だ。なんとか群集を抜けて、テープのバリケードをくぐる。青いビニールシートで、死体のある場所は囲まれているため、議員そのものは周りには見えないだろう。
その中に二人の刑事が入ると、すでに南部と同世代の刑事と、その上司と思われる定年間近の刑事の二人がいた。
「おう、南部と里見ちゃんか。遅いぞ」
「悪いな、畠さん。ライフルでドタマぶち抜かれたって？」
「ああ、それも綺麗に眉間撃ち抜かれてるよ、仏さん」
畠（はた）と呼ばれた定年間近の刑事は、南部のストレートな物言いに気にした風もなく、世間話でもするかのように返した。
身長は大柄な里見よりも、十センチ以上も畠は小さい。申し訳程度に髪があるだけで、すでに頭は完全に禿げ上がっており、背も曲がって来ているが、その鋭い眼光は未だ衰える気配はなく、初めて見た時、里見は足がすくんだ程だった。

畠の、男性としても小柄な体躯にベージュのコートというのは、まさに、ドラマか何かで見る中年刑事といった風貌だ。

「話によれば、今から女に逢いに行く予定だったらしい」

「ま、政治家にゃよくある話だな」

南部の応答に、もう一人のまだ比較的若い刑事が肩をすくめた。それでも、歳の方は南部と同世代と言うのだから、四十は過ぎているはずだ。

畠や南部に比べるとどことなく優男風にも見える男は、佐々木（ささき）という。高級感を感じさせるスーツを着込み、立ち居振る舞いも、いかにもインテリと言った風だが、やはりその眼には二人同様に鋭さがあった。

K大卒で、キャリア組であるにも関わらず、未だ現場に留まっている変わり者でもある。里見には、少し変わり者が多いというK大出身と聞いて、思わず納得したものだった。

南部はおもむろにしゃがみ込む、すでに被せられているシートを剥がして死体を拝んだ。里見もそれに釣られて手を合わせる。

その後に南部と二人で眉間を撃ち抜かれ、もの言わぬ死体となった若手議員を見た。政治家ということもあり、目立たないがかなり高級な作りを感じさせるスーツを着ていた。きっと十万や二十万では買えないだろう。

見たところ、死体には数十万入ったキャッシュとカード、後は会員制と思われるクラブの会員カードが数枚だけだった。

「……かなり腕のいい奴だな、ぶち抜いた奴は」

南部が小声でポロリとこぼした。それに佐々木が応える。

「事件発生当時は無風だったらしいが、ここまで綺麗に眉間を撃ち抜くには、かなりの訓練が必要だ。非公開になっているが、先日起きたN市の真田の暗殺事件と、同じ銃が使われている可能性が高い。向こうの仏さんの状態も、やはり綺麗に眉間だったそうだ」

「同一犯……ですか？」

里見は思わず声にした。

「断定はできないな。同じ銃を使った別人の可能性も否定できないからね。ただ、その方向で見た方が良いとは思う」
佐々木はインテリらしい、可能性が高いというだけで必ずではないという物言いで、里見を混乱させる。
「ま、とにかく同一犯の犯行という線でいった方がいいのは間違いないだろうが、佐々木」
「ええ、まぁ」
畠に言われて、佐々木は少しバツが悪そうに肯定する。
「今、他のもんが関係者に聞き込んでる。一旦それを待つとしようか」
畠に言われると、いつもはあんなに怖い物なしであるはずの南部も、大人しいものだった。
里見は死体にシート被せ、これからしばらくは、またあまり眠れない日々が続くだろうという予感に、小さくため息をついた。

俺がようやく外を歩き回れるようになったのは、毛利の病院で目が覚めて二日後のことだった。
本当なら、目が覚めたその日のうちに抜け出すつもりでいたのだが、四日もベッドに寝たきりでいたためか、足が鈍ってしまって歩くのに苦労したのだ。まだ筋肉が萎えたわけではなかったが、動くに苦労するのはいただけないので、せめて後一日はリハビリを兼ねて厄介になるつもりだったのだ。
だが次の日、医者として毛利がまだ完全に治っていないというのを理由に猛烈に反対し止めたため、さらにまた一日病院にいるはめになった。
だが、毛利の言い草にはひっかかるものがあった。まるで命令か

何かで、俺を引き止めようとしているように感じたからだ。何かある……俺の本能がそれを告げていたため、タイミングを見計らって病院を抜け出したのだ。

それがつい昨日の夜の話だ。毛利の病院がどこにあったかは知らないが、街をうろつく内にここが俺の住む街から離れてはいるが、なんとか帰れそうな場所であることがわかったのだ。

携帯も銃も、おまけに財布もないまま抜け出さなくてはならない状況だったのだから、なんとも幸運なことではあった。もちろん、毛利の病院から抜け出す際に、いくらかの金をくすねてきたので、贅沢さえしなければ、なんとかなるはずだった。

くすねた金で簡単に身なりを整え、やっと一心地つけた。しかし、毛利はなぜあんなにも俺をあそこに留まらせようとしたのか、それだけは依然として、俺の中でひっかかってはいたが。

まぁ、いい。どんな理由であれ、いつまでも病院なんぞに縛られているわけにもいかない。まだ傷の痛みはあるし、足もどこか鈍く感じるが、動いて回るには十分なほどには回復した。

それに、毛利の言っていたコミュニティとやらの実態も気になるし、不粋にも後ろから俺を撃った武田とかいう奴のこともだ。

そして……あの女。あの女のことだけが、やたらと俺の脳裏をちらつくのだ。理由など自分でもわからない。だが、どうしてもあの女のことだけは、知っておかないと俺の気がしれない。

病院を抜け出した後に、もっと毛利からいろいろと情報を聞き出しておくんだったと後悔したが、そのために抜け出したところに戻るなど、そんな情けないことなどしたくはない。

よって、いつも通りに俺は俺のやり方でつついてみることにしたのだ。コミュニティを利用することは大いに賛成できるが、かと言って馴れ合うつもりもない。

とすれば、やはり自分のやり方でやった方がしっくりとくるし、コミュニティを使うのは、無条件で奴らの傘下に下ってしまったような気がして、どうにも気に食わなかった。

それともう一つ。俺がコミュニティのネットワークを使えば、武田とマリアとか言う女を調べているというのがすぐに広まってしまう、といった可能性が高い。コミュニティとは言っても、連中は殺し屋のコミュニティなのだ。

それを嗅ぎ回っているとなれば、自分の身が危険にさらされないという保証などない。できればそんなことにはなりたくない。そう考えれば、俺の取るべき選択もおのずと見えてくるというものだ。

そんなわけで、俺は丸一日近くかけて寝座（ねぐら）に戻ってきたのだ。寝座に戻った俺は、すぐさまベッドにもぐり込んだ。このベッドに身を横たえると、なんとも言えない安心感が俺を包んだ。

たかだか、一週間以上留守にしていただけだと言うのに、もっと長らく離れていたようにも思える。

俺の家はここではなく、ただの寝座としか思っていなかったはずなのに、なんだかんだで、ここが自分の家なんだと感じている自分に、思わず苦笑しながら目を閉じた。とにかく今は寝ることだ。明日からはまた忙しくなるだろう。

沙弥佳に繋がるかもしれない情報を持っているかもしれない奴が、もしかしたらあのコミュニティにいないとも限らない。なんせ、皆がなんらかの殺しの技術を持った連中ばかりなのだ。沙弥佳を繋ぐ手掛かりくらいは得られるかもしれない。

そのためにも、別口から調べられそうなことは調べておくべきだろう。目を閉じたまま、明日以降やることを考えながら、睡魔が襲ってくるのを感じた。

俺は、それに抗うことなく身をまかせていった。

翌朝、まだ朝霧が街を包む頃、俺は目が覚めた。また例の夢を見るかとも思ったが、そんなこともなく泥のように寝ていたようだ。

だというのに、あの夢を見なかったら見なかったらで、心のどこ

かで残念に思っている自分がいるのだ。
安物のデジタル時計を見ると、まだ午前七時になったところだ。昨晩は、正確に何時に帰って来たかは覚えていないが、間違いなく午後十時は過ぎていなかったはずなので、少なくみても九時間は寝ていたことになる。だが、個人的には七時間から九時間という睡眠時間はちょうど良く、寝起きでも頭がすっきりとしていた。
洗面所に行き、顔を洗う。当たり前であるはずのことなのに、この場でこんなことをしているのが、どうにも懐かしく感じてしまう。けれど、そう感じさせるほどに佐竹の事件から始まり、この約二週間は気を張り詰めっぱなしだった。こんなのは俺の殺し屋人生の中においても、そうそうあるものではない。
しかも仕事だけならまだしも、思いもかけない再開があったり、思いもかけない出来事との繋がりなど、そんなことが立て続けに起きれば、懐かしむような気持ちになるというものだ。
俺は鏡に映った自分の顔をながめながら、それでもお前は生きている、と短く言った。

昨晩は帰って来てそのまま寝てしまったので、俺はシャワーを浴びた。頭から足の指まで、久しぶりに全身をくまなく洗う。
考えてみれば、病院にいた時も湯浴みをした覚えがなかった。熱めにした湯が身体を流れ落ちていくのが心地良い。同時に、武田とかいう野郎に撃たれた銃創に滲みた。
ふと、シャワーを浴びながらあることを思い出していた。ベッドにいた四日間に、なんとも言えない不思議な体験をしたような気がするのだ。
気がするというのは、俺自身が夢うつつで、そのことが夢だったのか本当にあったことなのか、分からずにいたからだ。
被弾したことにより、全身が全く別の何かになったかのように熱く、絶え間無く汗が流れ出ていた俺に、誰かが献身的に身体を拭き、さすれば冷水で、身体の熱を少しでも和らげようとしてくれていた

のが、ぼんやりとではあるが記憶にあるのだ。
それは夢の中にいるように、とても浮遊感をもっていたうえに、断片的なためにいまいち実感がなかった。そのため毛利には聞かなかったが、それが夢だったのではないかと思えて仕方なかった。それほどあやふやなものだったからだ。
万に一つもないとは思うが、もしそれがあったことだとして、それが毛利だったとすれば、なんとも恥ずかしい話なので、聞けなかったというのもある。
しかし夢か現実か分からない、そんなあやふやな中でも柔らかな指がどこか懐かしむような、切なさも感じさせる動きで、俺の身体に何度も触れていた記憶はあった。
あれがとてもではないが、毛利であるはずがない。だが、確信が持てないために何も聞かなかったのだ。
しかし、あれは一体なんだったのだろう。あの身体をなぞるように優しく触れる感覚は、女のもののはずだ。しばらくの間、シャワーの噴出口から流れ落ちてくる湯を見つめながら考えていたが、かぶりを振って湯を止めた。
まぁ、いい。分からないことをいつまでも引きずっているわけにもいかない。こういう時は、いつものように夢だったのだと決めるように俺はしているので、今回もそう思うことにしたのだ。
もし真相が分かれば、その時にそうだったのだとくら替えすればいいだけの話だ。

身体の水滴をバスタオルで拭きながら、部屋に戻った俺は、この一週間ほどのあいだ、真紀と連絡をとっていないことに気付いた。N市にいる時に一度連絡してみたが、繋がらなかったのを思い出したのだ。
それに、あの作戦の後に捕獲した女のことも気になる。多分あの女は、毛利が言っていた最近減った人員の一人なんではなかろうか？　そんな漠然とした考えが浮かんだというのもある。

しかし、ここにきて俺は携帯をとられていたことを思い出したのだ。ため息をつきながら、後で公衆電話に行くことにした。幸いにして俺は暗記だけは得意で、殺し屋になるための訓練をうけた際、それが完全に開花したように思う。

サイドボードの中にあるウイスキーの瓶が、俺を誘ってくるがそれを無視して、服を着た。

朝食もついでにどこかでとるとしよう。そう決め込むと、簡単に身なりを整えて、いつまで経っても他の人間が住み着かないアパートを出た。

時間はもう八時になるところだったが、あまり人がいないように思った。とりあえず適当に喫茶店に入るとしよう。俺は適当な店を見繕って入った。最近は公衆電話を置いていない店も少なくないから、そういう店を選んだのだ。

店に入るなり、まず電話を使わせてくれと言い、真紀に連絡する。短いコール音の後に、真紀が出た。

『もしもし?』

多分、携帯の液晶に公衆電話からという表示を見て、怪訝に思ったのだろう、その声はどこか不審げなものが含まれている。

そんな真紀の様子が想像でき、俺は思わず唇を歪ませた。

「よう、元気にしてたか?」

『あなたっ……今まで何してたのっ? ずっと連絡とれなくて心配してたのよ!』

受話器の向こうで、真紀が声を高くして喚いた。そんな真紀の反応に、俺は少し驚いた。きっと、皮肉を言ってくるものとばかり思っていたのだ。

「ああ、ちょっと面倒ごとに巻き込まれたんでな。おかげで携帯をなくしちまったんだ。ま、そいつは別にいいんだが、ちょいと聞きたいことがある」

『別にいいってあなた……はぁ。あなたっていつもそう。なんで、そんなに面倒ごとに首を突っ込みたがるの? そんなの自己責任じ

ゃない』

「別に俺は首突っ込みたくて突っ込んでいるわけじゃぁない。向こうから俺にトラブルをけしかけてくるだけだ。それより話の続きだ」

また小言を言われそうな雰囲気だったので、早々に話を切り上げさせて本題に入った。

「あんた、田神の居所を知らないか？　ちょいとやつに用がある」

『もう勝手ね、あなた。そうやって聞きたくないことは、いつも話を切り上げさせようとする。少しは私の身にもなって頂戴』

「だったら、さっさと俺をクビにすればいい。そうすれば、君の肩の荷も降りるというものだ。それで、やつの居所を知ってるか？」

『……知っているけど、それが何よ』

真紀は何を言っても動じない俺に、憤り半分諦め半分といった口調で言う。

「ああ、やつに聞きたいことがあるんでな」

『だったら、私を通せばいいわ。わざわざあなたが連絡をとる必要はないんじゃない？』

「まぁ、それもそうなんだが、デリケートな話なんでね。俺が直接やつと会って話をしたいんだ」

数秒の間、真紀は黙っていたが、深いため息とともに喋りだした。

『私も正確に田神の居場所を知っているわけではないわ。彼は仕事のたびに住む場所を変えるから』

そうなのだ、田神はちょくちょく寝座を変えるため、どうにも直に捕まえられない。おまけに、寝座を変えなかったと思えば、今度は連絡が取れなくなっていたりするのだ。

今回も、真紀に連絡を入れる前に田神の携帯に連絡をしてみたところ、見事に解約されていた。おかげで、真紀にわざわざ連絡しなければならないという結果になったのだ。まぁ、それを嘆くこともないのだが。

俺が真紀と田神ができているのでは？なんて思った理由が、そこにある。真紀は、そんな田神の連絡先だけはいつも把握していたか

らだ。田神は否定していたが、やはりそんな疑念が浮かばざるをえないのだ。

『とりあえず彼の連絡先を教えておくわ。つい二、三日前には繋がっていたから、問題はないはずよ』

そういって真紀は、田神の連絡先を教えてくれた。

「そうか、分かった。すまないな」

『謝るくらいなら、最初から手間をかけさせないで』

そんな真紀の言い草に思わず苦笑し、短く礼を言った。普段なら、この女に礼など言う俺ではないが、たまには良いだろう。

『……べ、別にあなたにお礼を言われるようなことは言ってないわよ』

どうも、今日の真紀は感情の突起が激しいようだ。怒ったり、突然照れたようになったりと忙しそうだ。

もう何年もこの女と付き合っているおかげで分かったが、真紀は突然、感情をあらわにすることがある。初めてそれを見た時、不覚にもドキリとしてしまったものだった。

この女も、もうちょっと素直になれば、もっと男達にも言い寄られるだろうに。

「それじゃぁな。朝から突然電話して悪かった」

『え？　ちょっと』

「なんだ？」

『……ごめんなさい、なんでもないわ。田神に何を聞きたいか知らないけど、厄介ごとには首を突っ込まないようになさい』

「……善処するさ」

唇をニヤリと歪ませながら、電話を切った。続いて、今しがた真紀から聞き出した田上の連絡先に電話したのだった。

喫茶店で朝食をとった後、地下鉄を乗り継いでＪＲに乗った。

田神が指定した駅まで、快速を使っても一時間以上はかかる。今までの寝座は、もっと中心の方にあったはずだが、今度はえらく辺鄙な場所に居着いたものだ。

まぁ、あの男のことだから、何かしら理由があってそんなところに移り住んだのだろう。

朝もいい時間な上、中心の反対方向ということもあってか、車内は随分すいている。ラッシュが過ぎれば、こんなものだろうが。

移動中、俺は今日やるべきことを再度整理していた。まず、今向かっている田神に会い、Tビルの地下で捕らえた女と会うことだ。一つ確認したいことがあるのだ。

次に、失った銃を手に入れなければならない。ついでに、携帯も調達しておいた方がいいかもしれない。

そして、あの女。今なお、俺の中で引っ掛かっていた。なぜこうも、あの女にこだわっているのか自分自身理解できないが、とにかく、あの女とは一度会わなくてはいけない気がするのだ。

それに真田暗殺の件も、後ろ髪を引かれる。この辺はおいおいということになるかもしれないが、やれるところはやっておくべきだ。

そんなことを考えているうちに、あっという間に指定された駅についた。電車を降りて、足早に改札を抜ける。中心から見れば、どことなく古臭い感のする町だが、昔住んでいた場所を彷彿とさせるような町並みだ。

駅の隣には、大きな桜の木が数本あり、淡いピンク色に染めつつあった。考えてみれば、ここ数日間は二週間前と比べ気温が高く、とても過ごしやすくなったと思う。

それに伴い、桜の木の存在感は、日に日に増していっているのだ。俺としては、益々気が重くなるような話だが、仕方ない。桜の木に罪があるわけではないのだ。

駅近くに位置するアーケード街を抜け、少し込み入った一画に入る。そこは、何十年も前に建てられたような家並みが続く。ものによっては、戦後直後の復興の際に建てられたのでは、と思えるよう

な家も少なくない。
そんな中、これはまた古ぼけた三階建てのビルが見えた。あの古ビルが、田神によって指定された場所であった。ビルの前に来た時これが古ビルなどではなく、もはや廃棄されたビルなんではないかと思えたほどだ。
そう思えるほどこの建物は老朽化しており、今の今まで取り壊されることなく、ここにあったことの方が不思議なほどだったのだ。
怪訝には思ったが、指定された住所や建物の特徴は、間違いなくここであるので、ためらうことなく建物の中に入った。まず一階を覗いてみると、埃だらけで何も置かれていない。軽く肩をすくめ、二階へと上った。
二階には、以前ここにテナントが入っていたことを窺わせる荷が、いくつか置いてあった。それが何なのかは分からなかったが。
そして三階に着いた途端、人間が暮らしているというのを匂わせる空間にきた。間違いなく田神はここに住んでいる。苦笑しながら、俺は歩を進めてドアをノックした。
程なくして、赤色をした鉄製のドアが開かれる。たかだか一週間ぶりの再会だと言うのに、やけに久しぶりに会うような気がしてならない。
「よう、なんだか久しぶりだな」
ドアを開けた田神に、俺は気さくに声をかけた。
「久しぶりというほど、長く会わなかったわけではないだろう？」
苦笑しながら田神は、部屋の中に招き入れた。だが、中は住居というよりやはりテナントといった風だ。そんな空間に無理矢理、家具やらが置かれており、そのために、なんとも言えない不自然さが滲み出ている。
それでも家具はきちんと機能的に置かれており、たかだか数秒の移動にも無駄がないような配置になっていた。それがこの田神という男の人間性なのだ。ずぼらの俺とは似ても似つかないが、なんでこんなにも気が合うのか、おかしな話だ。

「それにしても、どうしたんだ？　急にこっちに来たいだなんて、珍しいじゃないか」
「ああ、ちょっと面倒ごとに巻き込まれちまってな。それで、あんた前に捕獲した女まだかこってるんだろう？」
　俺がそういうと、田神は少しばかし顔を強張らせた。あまり感情を必要以上に出さない田神としては、珍しい反応だ。
「……」
「そんなに警戒しないでくれ。別にあんたがあの女をかこっていようと、俺には興味のないことなんだ。それよりも、女に確かめたいことがあるんだ。で、どうなんだ？」
「……いるよ」
　少し間をおいて、田神はこっちだと短く告げた。あの女に関して、田神はよほど触れてほしくないらしい。田神の案内で、部屋の奥へと行く。
「あ、田神っ。　……誰？」
　部屋の奥にいくと、女が俺を田神と勘違いしたようで、一瞬嬉しそうに顔を綻ばせ、違うと分かった途端に険しい表情になった。
　しかし俺には、この女の豹変ぶりに驚いていた。地下施設での彼女は、まさに手負いの虎といった感じだった。だというのになんなんだ、この落差は。
　この一週間、田神と彼女のあいだに何があったのか、興味が沸いてしまった。まぁ、それは今は置いておこう。まずは聞いておかなくてはならないことがある。
「一週間ぶりだな。俺のこと、覚えてるか？」
「……誰だ」
　女は険しい表情はそのままに、ぶっきらぼうに再度尋ねてきた。この様子では、本当に俺のことは覚えていなさそうだ。
「……君を捕らえた奴だと言えば分かるかな？」
　少し間をおいて、女は何か思い出したような顔をした後、親の仇でも見るかのような表情を見せた。

「おまえっ！」
俺が誰かわかると、女は俺に飛び掛かろうとしたが、田神に止められた。
「放せっ、田神！」
「落ち着くんだ、エリナ！」
そうか、彼女はエリナという名なのか。必死に飛び掛かろうとしている、エリナと呼ばれた女とそれを押さえている田神を、俺は冷静な目で見ていた。
田神の必死な抵抗により、エリナという女はようやく鎮まった。
「まぁ、俺を許せとまでは言わない。あんたにちょいと聞きたいことがあるんだ」
「うるさい！　おまえなんか私の仲間が必ず殺しにくるぞっ」
「残念ながら、俺がその連中の仲間だと言ったらどうする？」
「えっ？」
俺の言葉に女は暴れてさせていた体を止めて、俺の顔を見た。
「だから、俺が君の仲間だということさ。まぁ、まだ入りたてだがな」
実際には、この女のいう仲間とやらと仲間なのか分からず、それを確かめに来たのだが、カマをかけてみることにしよう。
「う、嘘だっ！　おまえなんかが私たちの仲間だなんてっ」
「残念なことにそうなのさ。きちっと試験も受けたしな。もう、後は分かるだろう？」
「う、嘘……本、当……なの？」
「ああ。だから君は不本意かもしれないが、俺は君と同じということになる。おまけに武田って奴のお墨付きだ」
最後はやや装飾したものだが、これでこの女がどうでるか……。
しかし、俺にはこのエリナという女が語る仲間というのが、例のコミュニティだという確信があった。
「た、たけちゃんが……」
一瞬唖然とした。たけちゃんだと？　それが武田の愛称だという

のか。だとすれば、なんとも可愛いらしいニックネームではないか。
「ぁ……わ、笑うなっ！」
顔に出ていたのか、女は顔を少し赤くしながら吠えた。だが、むくれっ面になって怒っている姿は、あまり迫力を感じない。俺はそれがまたおかしく、笑ってしまった。
「お、おまえ私をなめてるのかっ」
そうやって必死に取り繕おうとしている女は、手負いの虎というより小生意気な子猫といった感じかもしれない。俺は、なぜ田神がこの女を未だかこっているのか、納得できた。確かにこんな奴なら、一人くらいいてもいいかもしれない。

ひとしきり笑った俺は、今度こそ真面目に女に向き直った。カマをかけてみたところ、見事にひっかかってくれたのだ。
「……さて、そいつに俺はどうしてか合格を貰ったんでね。で、その武田ってのは、一体どんな奴なんだ？」
「……それを知ってどうするんだ」
「別に。ただ、いきなり合格だなんだと言われても、なんのことだかさっぱりなのさ。向こうは俺のことをそれなりに知っていたようだが、こっちは全く知らないんだ。フェアじゃぁないだろう？」
そう言われ、女は黙ったまま俯いたが、顔を上げて見下したような口調で話し出した。
「ふん、おまえなんかどうせ、たけちゃんにやられるんだから言ってやるよ。あの人は、私達の統率者なんだよ。頭も良くて、カッコイイし。おまえなんか足元にも及ばないんだよ」
「それは知ってる。俺が聞きたいのはそういうことじゃない。……単刀直入に言おうか。どこに行けば会える？」
「え？　……」
「どうした……？」
「……ない」
「なんだ？」

「だから、知らないって言ってるの！」
女は再び顔を赤くしながら喚いた。聞けば、会ったことがあるのは数回だけらしく、指示を出すのもいつも向こうからで、さらに作戦の指示を出す時も、連絡員をよこすのが通例なのだと言う。
直に顔を見せる時は、余程大きく重要な作戦の時だけであるらしい。また、誰かの入団試験の際にも、必ず立ち会うのだとも言った。俺の時は、銃弾を受けるという洗礼があったわけだが。
そしてもう一つ、重要なことを教えてくれた。新参者は、その力量を知るためなのか、入ってすぐに行われる作戦には必ず投入するという。その際にも、顔を合わせる機会はあるはずなのだそうだ。
だとすれば、奴との対面は決して遠いものではないだろう。武田には必ず、俺からの報復を受けてもらうつもりだ。俺は殺そうとした奴には、必ず地獄にたたき落とすことを信条にしているので、どういう理由であれ、それを覆すつもりはない。
「まぁ、いい。それじゃぁもう一人の方だ」
「もう一人？」
「ああ。女なんだが……確か、マリアだとか呼ばれている……」
「ああ、あの女か。たけちゃんの腰ぎんちゃくだ。ちょっと顔が良いからってくっついて回って……」
どうやらこの女は、マリアとかいう女のことが気に入らないようだ。随分と刺のある口調で、武田を語るときとはえらい違いだ。
「つまり武田と会うことができれば、マリアとかいう女とも会えるんだな？」
「だろうさ。それにあの女は、元々たけちゃんが連れて来たやつなんだよ。おまえなんかどうなったっていいけど、一つ忠告しておくよ。
あの女には関わらない方がいい」
「どういうことだ」
「あいつ、マリアと呼ばれてるけど私に言わせればブラッディ・バートリーの方が正しいと思うけどね」

「ブラッディ・バートリー？」

血まみれバートリーという意味か。ヴァルキリーだとか言われているとも聞いたが、これはまた、随分な言われようだ。

結局あのマリアとかいう女に関して、エリナからはそれ以上たいしたことは聞き出すことは出来なかった。毛利からあの二人は有名だと言われていたので、もっと有益な情報が聞き出せると思っていただけに、落胆は確かにあった。

だが、どうもここ数年間起こっている各国の要人暗殺事件は、かなり件数をこの女が関わっているという。そうなると、これでほぼ間違いなく、何日か前に起きた真田暗殺もこのマリアという女の仕業と見ていいだろう。

これは真田殺しの件について、まだ色々と調べてみる価値がありそうだ。元々そのつもりではあったが、これは思わぬ収穫になりそうだ。

先程から一言も喋っていない田神を一瞥し、エリナという女の前から移動した。田神は、俺がさっきから何を言っているのか分からないといった顔をしていた。

この男になら、俺が巻き込まれた今回の騒動を話してもいいだろう。拷問にかけられても、口を割ることはないような奴なのだ。

俺は田神に、今回のことを包み隠さず時間を追って、なるべく分かりやすいように話していった。

第27章

一週間ほど前の作戦の時に捕らえた、エリナと呼ばれる女から話を聞いた俺は、それに併せて今自分の身に起きていること、俺が考え思ったことを田神に話した。エリナのことを留意してか、なるべく離れたところでだ。

田神は終始無言のまま、時折頷きながら俺の話を聞いていた。その間に見た夢の話だけはしなかったが。

一通り話終えると、目を瞑りながらなにかを考えているようだった。俺は何も言わず、何か言い始めるのを待っていた。すると田神は、考えごとがまとまったのか、目を開けて口を開いた。

「……君の話を聞く限り、その人物は相当に訓練されていることは間違いないだろう。それと、フィクサーの存在だな」

「フィクサー？」

「要するに、後ろ盾……協力者といったところか。要人を暗殺して廻るくらいだから、そこには色々と利権が絡んでいることだろう。となると、そういった人間が立ち回られるのは、厄介なはずだ」

「だがな、連中は個人の集まりにすぎないと言ってたんだぜ？　それと利権がどういう風に絡むってんだ？」

「それは分からないが……その武田という男だが、かなり臭いな。多分、個々の目的とかいうのを良い体裁にして、何かしら癒着している可能性がある。

まぁ、それがその男の目的というのもありうるが……とにかく、断言はできないが、そのコミュニティを裏で牛耳っている人物がいる可能性だけは、頭に入れておいた方がいい。

そもそも、対組織ということそのものが、有り得ないと思わないか？　わざわざ、そんなことをしなくとも、その関係者首脳だけの暗殺でこと足りるというのに」

田神の言葉に、俺は押し黙った。確かにそうだ。わざわざ、そんなものを組織する必要もない。癒着したいのであれば、俺達のいる組織なんかにそれを依頼すればいいはずだ。

それだけで自身の手を汚さずに、利権を手にすることができる。これではまるで、一級品の私設軍隊を作っているようなものだ。

やはり、田神に話しておいて良かったかもしれない。俺だけでは、そこまで見抜いたり考えたりはできなかっただろうから。

「……うまくやれよ、九鬼。これはある意味で、組織へのスパイ行為になりかねない。かと言って、そういったコミュニティの中でも、君は動きにくい部分もあるだろうから」

「ああ。そいつは百も承知さ。場合によっちゃぁどちらからも手を引くことすら考えてる。あんたと同じでね」

田神を見ながら、ニヤリとしてみせた。

「……九鬼、俺は……」

「いいさ。別に俺はあんたを売ったりはしない。でも、あんたはいずれはこの組織を裏切る。それはなんとなく気付いてたんだ。

あの女のことをなぜ匿おうとするのかは分からないが、俺とあんたは似た者同士なのさ……だからかもな」

「そうか……すまないな」

「気にすることはない。こんなこというのもなんだが、俺は元々、組織だなんだというのは、好きじゃぁないんだ。そんなことのために命を張れるわけがないからな。

もし組織だとか国家のために命を張れというのなら、俺は間違いなくとんずらするさ。

あんたは表面にこそ出さないが、そこらへんは俺と同じだと思ってる。目的が何かは知らないが、お互いそのために、組織を利用してるに過ぎないだろう？

それに、組織だ国家だとか言う奴らほど、実際にはどうしようもない連中ばかりだ。そんな腐って、生きてる価値もないような奴らに、同志ってのを売る気にはなれないさ。神なんざ信じちゃぁいな

いが、それだけは誓って信じてもらっていい」「九鬼……」
どことなくバツの悪そうな笑いをみせる田神に、俺は肩をすくめてみせた。
「それよりもあのじゃじゃ馬だが、どうやって手なずけなんだ？ありゃぁ、あんたにだけは心開いてますって感じだ」
「別に格段難しいことをしたわけじゃない。……まぁ、餌付け……とでも言うのか」
「餌付け？」
思ってもいない言葉に、俺は顔をしかめた。元はといえば、敵ともいうべき女をたかだか一週間かそこらで心開かせ、その上手なずけたというこの男の調教師としての手腕は、相当のものだと思う。
どこかはぐらかすような田神の態度に俺は、これ以上何も言うことはしなかった。だが相変わらず顔に出ていたのか、俺の顔を見るなり、
「……やっと見つけたのさ。自分の目的の一つがね」
と答えただけだった。この男も相変わらず、どこまでが本気なのか分からない口調なため、俺は軽く頷くことしかできない。

そろそろ次の場所に行くべきだと思い、俺は暇しようと田神に声をかけた。軽く頷くだけの田神だったが、何か思い出したようで、引き止めた。
「九鬼。少し待ってくれ」
そういって田神は、どことなく古ぼけた木箱をもってきた。その様子を見ながら、俺はどうしたのかとぼんやりと考えていた。
「これを君にやるよ」
木箱の中から取り出してきたのは、アンティークと思われるネックレスだった。
「おいおい、俺は男だぜ。こんなもの、とても身につける気にはならないし、俺には似合わない」
そうは言ったものの、そのネックレスのデザインはシンプルで、

わりあい俺好みのものではあった。しかし、明らかに女物のそれは、いくら好みと言えども、身につける気にはなれない。

おまけに、とても豪華なのだ。中央付近には、小さめのピンポン玉くらいの宝石が三つ列んでいるからだ。

左から赤いルビー、真ん中に青いサファイアが、そして右端には緑のエメラルドがついている。だが、エメラルドだけは他の二つよりも、心なしか小さかった。

とりつけられたその配列も、首につけた際にはつけた者の、左に寄ってしまうようになっているらしい。そして、その三つの宝石から離れて、装着者の右側になるように据え付けられたダイヤ……大きさこそ三つには及ばないが、それでも今まで見たことのない大きさのダイヤだ。

価値がいくらくらいになるかは分からないが、こんな物を身につけて歩いた日には、間違いなく誘拐されてしまうだろう。

それほどまでに、そのネックレスは高価そうに見える。

「まぁ、身につけろとまでは言わないさ。ただ、こいつにはちょっとした“まじない”がある。持っている人間の願いを、三つまで叶えてくれるらしい」

「おいおい……田神、それ本気で言ってるのか？」

女子供じゃあるまいし、そんなことを信じることなどできようはずもない。田神は肩をすくめながら、苦笑した。

「別に信じろだとか、売り付けようってわけじゃない。げんかつぎとても思えば良いんじゃないかな。

それともし願いが叶うと、宝石が一つ輝きを失うらしい。その真偽を確かめてみるだけでも持っている価値はあるし、場合によってはこれを売るという手もあるさ」

そう言いながら、田神は俺にネックレスを渡してきた。確かに持っていても、決して悪いものではない。今後何かあった時に、そいつを渡して命拾いすることもあるかもしれない。

「分かったぜ、田神。こいつはありがたく貰い受けておこう。だが、

後で返せって言うのはなしだぜ？」
「もちろんさ。だが、肌身離さず持っているんだ。そうしないと、効果は発揮されないから」
「せいぜいセレブ気分を満喫させてもらうさ。しかし、こんなのどこで手に入れたんだ？　こういうのはあまり興味なさそうなのに」
俺の素朴な疑問に、田神はニヤリとするだけで、答えることはなかった。
俺はそのネックレスを、ジャケットの左胸の内ポケットにしまいこんだ。貰えるものは貰っておくのもまた、俺の流儀だ。
「それじゃぁまた、会えたらな。あの女にもよろしく言っといてくれ」
「ああ。
……そうそう、一つ言い忘れていたが、君も気をつけた方が良い。最近、警察の動きが慌ただしい」
「警察？」
俺の問いに頷き、田神はリモコンを探しあてテレビを点けた。ちょうど昼時のワイドショーの時間だったようで、キャスターやタレントがさもそうであるかのように、早口に何かをまくしたてていた。
「どうも昨日の夕方、また一人議員が殺されたらしい。先日の真田暗殺のせいもあるようだが、この数日の間、いたるところで、警察官が外を歩いているのを見かける。
俺達を、二人や三人の警官が取り押さえられるわけがないとは思うが、用心はした方がいい」
その時、いつの間にか部屋の奥から出てきていたエリナが、テレビを見て、たった一言呟いた。
「……あの女だ」
あの女……。聞かずとも分かる。マリアとかいう女のことだろう。
テレビでは、たった一発の銃弾によって撃ち抜かれたと、誰かが口にしていた。

田神の寝座を離れたのは、昼も下った頃だった。
ＪＲの快速で戻ろうとも思ったが、駅に到着した普通電車に乗り込んだ。急ぐこともないのだ。ゆっくり行ってもいいだろう。
電車の中で俺は、いかにして武田と接触できるかを考えていた。エリナの話では、次の作戦には俺を投入するはずだということで、その時までに先伸ばししようとも思った。
だが、田神の考えを聞いてからは、やはり一度この男のことを洗ってみた方が良いという気になったのだ。田神はこの男が臭いと言っていた。
俺としても元から田神を信用すると決めているだけに、こんな正体を隠しているような輩と、簡単に手を組めるはずがない。訳の分からぬうちに勝手に先兵として使われるなど、俺は許さない。
俺という人間は、自分の意思だけで動くのだ。決して駒ではない。所属している組織だって、ただ利用しているにすぎないのだ。
ふと俺はここにきて、一つの結論に達した。もう組織も俺には必要ない、ということだ。
この業界のノウハウとやらも、嫌というほど学ばせてもらったし、自分なりのコネクションとその作り方も分かった。ましてや、俺は組織とは別口で勝手に営業して回った人間だ。そのつど真紀に小言を言われたが、もう良いだろう。
もう組織など脱走する頃合いなのだ。後はどうやってそれを実行するかだ。電車に揺られながら、俺はいかに組織を抜けるか、考えを練っていった。

結局、上手く組織を抜ける算段は考えつかないまま、鈍行は終点に着いた。俺はそこから地下鉄に乗り換え、いつもの武器商人・最上の店へと足を向けた。
最寄りの駅を降りて最上の店に向かう途中、何台ものパトカーが

サイレンを鳴らしながら走り去っていく。昨日の今日で、また議員でも殺されたのだろうか。政治家が何人殺されようが知ったことではないが、こうも警察が動いていると、どうにもやりにくくなる。別に怖い訳ではないが、裏世界の住人といえど、やはり警察は厄介なのだ。

こういった大きな事件が起こると、必ずと言っていいほど裏世界と表世界を結ぶ情報屋に、情報の買い付けにくるのだ。そのため、必然的に住人達の動きは緩慢になり、俺のようにあれこれと動いているような奴は目立ってくる。

もちろん、もし邪魔するなら容赦はしないが、できるなら自分の仕事をスムーズにするためにも、避けたいところなのだ。

まぁ、まだ今のところそれらしい動きもないので、幸運と言えば幸運であると言える。

いつも行く道とは反対から薄汚い路地を曲がって、ビル群の隙間道へと入った。とりあえず尾行はない。以前なんの目的かは知らないが、尾行した連中がいたのを思い出し、前後左右には気を配りながら来たのだ。

また幾度か角を折れ曲がりながら、最上の店の前に出た。いつもの客の合図となるノックをする。

……おかしい。しばらく待ってみたものの、反応がない。いつもなら二十秒か三十秒待った後、ロックが解除される音が聞こえるはずなのだが……。トイレにでも入ってるのだろうか。それとも外出中というのも有り得るが……。

念のためもう一度合図のノックをしたものの、やはり出て来る気配がない。さすがにおかしい……そう思い俺はドアノブを掴んで回した。

ドアが小さく軋んだような音を立てながら開く。ドアに鍵がされていないというのは、あの親父に限って有り得ない。これは何かあったと見て間違いない。

俺はゆっくりと中へ入った。薄汚い店の中は、怖いほど静まりか

えっていて、人の気配というのを感じられない。
以前来た時には置いてあった、骨董品すらまだ良い待遇を受けていると思われた銃は、ことごとく姿を消していた。
あれらの銃は、俺がここに通うようになる以前からあったものなので、それらが失くなっているというのは、どうにも異常だ。
一応売り物だったらしいので、売れたという可能性もなくはないが、今現在の状況においてそれは、あまり有り得る可能性ではない。
用心深く店の中を進みながら、奥まで来た。これより先は、最上の親父しか入ってはいけない領域で、俺は立ち入ったことがない。今はそんなことを気にしてはいられないので、堂々と入っていった。
壁一面に、古今東西の古書がジャンルごとにまとめられて、本棚に置かれていた。本棚は、天井にまで届くほど高く、まさに本の壁……いや、本の城塞といった感じだ。
その本の壁の通路を真っ直ぐ進むと、突き当たりに出た。その突き当たりを右に行くと七畳か八畳ほどのスペースがあった。
そこが最上の親父の生活空間であり、商売の本拠と言ってもい空間なのだろう。
だがその空間の真ん中には、すでにうつぶせに倒れ、物言わぬ死体となった親父の姿があった。
「親父……」
目を細めながら、呟いた。店に入った時から半ば予想はしていたが、思った通りだったのだ。
この親父とは決して仲が良かったわけでもなかったし、陰気でどこかいけ好かない奴ではあった。こんな仕事でもしていなければ、まず関わりたいとは思わなかっただろう。
だが、もう何年も付き合いがあるため、やはりどこか寂しくも感じたのだ。
とはいえ親父がこうなってしまった以上、俺もやることを済まして、早くここから出なければならない。
悪いな、親父……心の中で謝りながら、手早く死体を調べる。

死因は額を一発で撃ち抜かれていることからも、疑いようもなく銃殺だ。出血量と後頭部が破壊されていないことから、サイレンサーがつけられていたことも間違いないだろう。

死体は、特に何か手掛かりになるようなものは身につけていなかった。しかし死体のそばには、カードの束が不自然に落ちているのが目に入る。どうやら、それらはキャッシュカードや名刺、どこだかの居酒屋のポイントカードだったりと様々だが、その中に、明らかにこの親父の持ち物の中ではきな臭いカードがあった。

金色の大きな鳥が描かれた赤いカードは、どこかの秘密クラブの会員カードのようだ。

俺はそれを拾って、書かれている文字を見てみた。

鳳凰館……会員番号Ｎｏ．１４７９……。書いてあるのはたったそれだけで、後は一切何も書かれてはいなかった。当然、裏面にも何も書かれていなかった。

俺はそのカードをポケットにいれ、部屋の中を物色しながら状況を推理してみることにした。

状態から考えると、死を目前に控えた人間が、どこか別の場所に行くための算段をしていたところ、突如として謎の殺し屋によって頭を撃ち抜かれた。だから、こんなにもカードがぶちまけられている……そう考えてもいいのではないだろうか。

机には、二つ折の携帯電話が無造作に置かれてはいるが、開かれているのがそれを裏付けていると思う。

だが、そうなるとどこに連絡しようとしたのか……これが問題になる。当然最も怪しいのは、この赤い鳳凰と思われる鳥がプリントされたカードに書かれた、鳳凰館とかいうところだろう。

秘密クラブという場所は、会員証さえ掲示すれば入れるところもあれば、電話で予約を入れなければならないところもある。昔、仕事でロンドンに行った時、まさにそんな場所に潜入したことがあったので、この日本の大都会にそれがないとは言えない。

俺はその携帯もポケットに突っ込み、銃がないか探した。すると

机の中に、一丁の銃が隠されているのを見つけた。手にとってみると、それはワルサーＰ８８という銃だった。

ワルサーといえばＰ３８シリーズが有名で、俺がガキの時分に憧れたジェームズ・ボンドや、あのルパン三世が愛用しているものだ。

このＰ８８は、そんなワルサー社が脱Ｐ３８を目指して開発されたもので、マガジンは１５発と旧シリーズの倍の総弾数だ。

また、値段が高かったのか生産は打ち切られており、そういった意味ではこういったヴィンテージが好きな者にとっては、垂涎ものモデルだったと記憶している。そんなモデルの銃を持っている親父にも驚いたが、あえてＰ３８ではないのが、あの偏屈親父らしいと言えばらしい。

すでに弾は実装されていて、迷う事なくそれをジャケットの内側に銃をつり下げた。残りの弾も当然頂いていく。

親父としては、あまり使いたくなくて持っていたのかもしれないが、道具というのは使って初めて意味をなすものなのだ。机の中や、ショーウインドーに飾っておくものではない。

部屋を後にしようとした時、俺は後ろを振り向いて短く口笛を吹いた。せめてもの別れの挨拶だった。

店を出る際もう必要もないのだが、つい、いつもの癖で周囲に気をやりながら出て行った。まぁ、この界隈を出るのをなるべく見られたくないという気持ちはあるから、そちらに気をつける意味でも、その方がいいのだ。

さて、思いも寄らぬ形ではあるが、銃と携帯は親父から手に入れた。問題は、例のカードに書かれた鳳凰館とかいうところだ。

そもそも、あの親父がなぜ殺されねばならなかったのか、そこは考えなければならないだろう。個人営の武器商人として、やはり同業者との衝突があったのだろうか。

ここ数年、世界的に大不況に見舞われているが、その波は、この裏世界にも少なからず影響を与えているのだ。そのために独自の開

拓を広げているような、あの親父の類の武器商人は、逆恨みというされてしまい、結果、雇われたプロによって亡き者にされたというのはある。

だがこの推論には、問題が二つある。まず第一に、あの親父が逆恨みを買うほどに儲けていたのか、ということだ。

それは有り得ないだろう。確かにそこそこに金回りが良かったようだが、そんなにまで稼いでいたという話は聞かない。

そもそも売れる、稼げるというのはどんな業界や世界であっても、業界人には必ず知れ渡るのだ。この国には、あまり武器商人がいないことを考えれば、その世界で有名になるのは必然だ。

と同時に、金を湯水のように使うほど、あの親父が羽振りが良かったというなら、そんな噂もあっという間に有名になるものだ。だがそんな話がないのなら、同業者からの恨みを買ったという線は、いまいち信憑性に欠ける。

そして第二に、仮に恨みを買ったとして、そんな個人営の弱小武器商人をわざわざプロを雇ってまで始末しなくてはならなかったのか、ということ。

これは何年もこの業界にいる俺からしてみれば、かなり違和感を覚える話で、そんな可能性は最も低いといえるのだ。

武器商人達にしてみても、一応ルールというのが存在しており、それを冒してはならないという決まりごとはあるのだ。親父がそれを冒したというのもなくはないだろうが、そんなことに俺達プロはわざわざ介入しない。当人同士で解決できることだし、そんな小物をやったところで、こっちのメリットなぞたかが知れている。

この世界に少なくとも二十年はいると思われるあの親父が、そんなことをしたというのは考えられない。

よって恨みの線による殺害はないと見ていいかもしれない。まぁ、恨みは恨みでもソッチ方面の恨みはあるかもしれない。

痴情のもつれというやつだ。まぁ、この男は女に興味はないので、男である可能性が高いが。

その男を女が好きになり、逆上して親父を殺しにきたというのは？　……馬鹿馬鹿しい。女を一切近寄らせないこの親父に限って、自分の穴蔵を教えるはずもない。

相手の男が実は殺し屋で、別の奴を好きになったから親父が疎ましく思うようになった……まだ、こっちの方が現実的だ。

とはいえ、それらに証拠があるわけでもない。仮にもしそうだとして、わざわざ殺すというのも少し考えにくい。いくら殺し屋といえど、仕事でもない限り、簡単に人を殺すことなど滅多とあるものではない。

そう考えながら、俺は親父のところで見つけた赤いカードをポケットの中で握った。死体はまだわずかに体温が残っていたので、殺されてから一時間と経っていないはずだ。まるで、俺があの店に行くことを知っていて、先回りしたと言わんばかりだ。

そもそも一週間以上も前の話だが、俺を尾行していた奴らがいた。俺のことを狙っている人物がいるかもしれないのだ。そんな俺が、行こうとした場所でこの有様だ。俺が関わっていないとも限らない。

それを確認するだけでも、それなりに探ってみる価値はあるだろう。それにこういう時には不思議と、思わぬ形で思わぬ収穫があったりするものだ。

まぁ、そんなものを期待するわけでもないが、とりあえずここに書かれた店に乗り込もうという意思は固まった。

「おークキさーん！　元気してた？」

店に入るとジュリオは、相変わらず馬鹿でかい声で俺に話しかけてきた。親父の店からジュリオの店までは歩くには遠いが、行けなくもないというほどの距離にある。おかげでジャケットを着込んだ体は、わずかにだが、じんわりと汗が滲んでいるようだ。

ここ数日は急激に気温が上がっている。いつまでも冬の装備のま

まの方がおかしいのだ。ジュリオの店に入る前に、綾子ちゃんがいないか客やスタッフを見ていたが、時間が時間なのか姿は見受けられなかった。

もちろん、中に引っ込んでいるという可能性も考えたが、ジュリオに聞いてもしいたら、すぐさま退散すればいいと思ったのだ。

「ああ、見ての通りだ。ところで……彼女はいるか？」

綾子ちゃんと言わないあたり、自分でも無駄に意識しすぎな気がしないでもない。だが、そんなジュリオも彼女と聞いてすぐに綾子ちゃんだと気付いたようだった。

「おーアヤコさーんは今日休みよ」

「そうか。じゃぁいつもので頼むぜ」

「了解よ。おい、マルゲリータスペシャルだっ」

適当に席について、俺はジュリオと世間話に花を咲かせた。内容は本当にどうでも良いことばかりだったが、この男のどこかノーテンキさは、いつも殺伐とした俺を楽しませてくれる。

そんな調子で食事をし終えた俺は、やはり気になっていたことを聞いてみることにした。

「ところでジュリオ、最近何か変わったことはないか？」

「最近？　んー……特になかったね。でもなんで？」

「ああ、いや……なんとなく気になっただけだ、気にしないでくれ」

ここは異常なし、か。楽観もできないが一先ずは大丈夫だろう。

「……それでだジュリオ、あんた鳳凰館という名前を聞いたことないか？」

「鳳凰館？」

「ああ、ちょっとした秘密クラブらしい。噂を聞いて興味が沸いたんだ」

俺が今日ここに赴いたのは、それを聞くためだった。ジュリオは、前の店で料理長を勤めていた裏でアコギなものに手を染めていた頃、そういった斡旋屋もしていたことがあったのだ。

思い当たることがあるのか、ジュリオはいつもの陽気な馬鹿でか

い声ではなく、本当にそれを仕事にしていたからこそ知っている、どこか危なげな表情と、俺にしか聞こえないような小声になって言った。

「鳳凰館ね……知らなくは、ないけどね」

「知ってるのか」

「知ってクキさんはどうするの？　ここはクキさんみたいな人でも、あまり寄り付かない方が良いよ」

「ご忠告痛み入るね。だが、そういうわけにもいかんのさ。仕事に妥協はできないだろう？」

仕事と聞いて、ジュリオの顔が曇った。ジュリオは、俺の職業を知っている数少ない人間だ。まぁ、仕事というのは嘘だが、あながち間違っているわけでもない。

いい淀んでいたジュリオだったが、俺にそこまで言われ、仕方なくといった感じで口を開いた。

「……鳳凰館というのは、知る人ぞ知る秘密クラブなんだ。この国にはあまりないけど、私の国やヨーロッパの大都市には、そういったものが少なくないよ。

でも、この鳳凰館はかなり危険だよ。そこにいる皆、クキさんみたいに訓練されたやつらばかり。

しかも誰かの紹介なしでは一歩だって、入ることができないよ」

「所謂会員証が必要というわけか」

俺の呟きにジュリオは頷いた。

「なら、こいつでどうかな」

そう言って、俺はポケットから赤いカードを取り出した。

「クキさん、それ……」

イタリア人らしいアーモンド型の大きな瞳を、さらに大きく見開いてジュリオは驚いた。

「何かの拍子で手に入れちまったんでな。だが、住所も電話番号も書かれちゃぁいない。おかげで宝の持ち腐れというやつさ」

苦笑しながら肩をすくめ、カードをジュリオに見せた。

「う、うん、一度だけ本物を見たことあるけど、間違いない……本物だよ。どうやって……」
「言ったろ？　ただの偶然さ……ま、そのおかげで仕事にも絡んじまったんだが。それで、元々は俺のものじゃぁないが、入るのにこれだけで大丈夫だろうか？」
「所有者の名前を言うだけと聞いたことがあるから、問題はないと思うけど……」
その後、ジュリオはその他鳳凰館にまつわるいくつかのエピソードを聞かせ、最後にここの住所を教えてくれた。
「ありがとうよ、ジュリオ。……それと、今日俺がここに来たことは、彼女には秘密にしておいてくれ」
自分でも女々しいと思ったが、まぁ、いいだろう。関わってほしくはないが、彼女の幸せを願っているのは本当だ。
「了解、もちろんよ。クキさんこそ気をつけて」
「ああ、またな」
店の外に出ると、すでに日が傾いていた。俺はジュリオに教えてもらった場所を頭に叩き込み、歩きながら何度も頭の中で復唱していた。

暇を潰す意味もあって、地下鉄は使わずに歩きでサバカ・コシュカへと向かう。ジュリオの店からは歩きだと早くとも三、四十分はかかってしまうが、考えるにはちょうど良い。
俺は普段あまり歩かない目抜き通りを歩き、目的の場所へと向かう。当然、尾行対策だ。こういうところでなら、いくらでも紛れることのできる人込みや、撒くこともできそうな建物がたくさんある。
さて、今日はガスの奴はちゃんと店にいるだろうか。奴はたいていはサバカ・コシュカに入り浸っているが、たまにいない時がある。まぁ、いない日は仕事なのだろうが俺が使いたい時には、いつも間が悪いようで店にいないのだ。
とは言え、今は新しくニーロという情報屋も得たので、必ずしも

ガスに頼る必要もないのかもしれないが。
その時、信号で立ち止まっていた俺の横に、その向こうから走って来ていた女が躓いて転んだ。
「おい、大丈夫か」
「え、ええ、大丈夫です。すみません」
別に放っておいても良かったのだが、自分の真横で転ばれたというのに、何もしないというのも何かおかしな気もしたので、転んだ女に手を差し延べた。
謝りながら手を差し延ばそうとした女が顔をあげた時、その顔に明らかに驚きの表情になったのが分かった。だが驚いたといっても、顔の筋肉をを引き攣らせるほどのものではなかった。大体の女は、この顔にある傷を見ただけで、視線をそらすのだ。まぁ、今となってはあまり気にならなくなったが。
「ほら、どうした、掴まれよ」
そういって俺は女の中途半端に延ばされた手を掴み、引き起こした。
「あ、あの、どうもすみませんでした」
「いいさ。にしても走って転ぶなんざ、よほど急ぎだったようだな」
「あ、はい。ちょっと事件が、あっ」
女はしまったという顔をしてみせたが、後の祭りというものだ。
「事件……あんた刑事なのか？　……ああ、通りでな」
俺は刑事かもしれない女をざっと見てみた。その黒髪はショートに切り揃えてあり、どちらかと言うと男っぽい印象を受ける。
かなり大柄で、日本人女性というには及ばず、外国の女にだって負けない身長だ。おそらく百七十台半ばくらいはありそうだ。その体格の良さが、誰もが着込んでいるような濃紺のスーツの上からでも分かる。
そして、あまり化粧をしていないことが、より男っぽさを強調していた。見たところ俺より二歳ばかし上だろうか。つまり、二十代も半ば後半だというのに、化粧をほとんど施していないというのは、

よほどハードな生活を送って化粧する時間もないのか、そういうのがあまり意味のないような仕事環境のどちらかだろう。
ごくごく最低限のことにだが気を遣ってはいるようなので、決して女を捨てているわけでもなさそうだが。
まぁ、どちらにしろ俺の好みの範囲から程遠いのは間違いない。
「え……？　な、なんで」
「いや、なに、気にしないでくれ。言われてみれば確かにそんな感じはするなと思っただけだ。それにスーツ着たお巡りなんて、いないと思ってな。刑事でもない限りな」
「は、はぁ」
「それより、現場に向かうんだろう？　早く行った方がいいんじゃぁないのか」
「あ、そうだった！　失礼します！」
丁寧にお辞儀して、女刑事は俺が来た道を走っていった。刑事と名乗ったわけではないが、俺はそう決めた。
走り去っていった女刑事を横目で一度し、転んだ場所を見遣ると、そこに転げた拍子にそうなったのか、携帯電話が落ちていた。
俺はため息をついてそれを拾った。二つ折りの携帯で、開いてみたが買ったままという印象そのままのディスプレイだった。携帯を閉じた俺は、信号が青になった横断歩道を渡って、もう近いサバカ・コシュカへと急いだ。

第２８章（前書き）

レイプシーンあり。　苦手な方はご留意ください。

第２８章

サバカ・コシュカはちょうど開店したばかりだったようで、店内はほとんど人はいなかった。

しかし、ものの３０分もすると瞬く間に店内は人であふれ、満員御礼の状態となっていた。それに紛れ、ガスの方が俺を見つけたようで、こっちに来たのだ。

ガスは、ラテン系と東洋人の顔を、足して二で割ったような顔立ちをしている。日本人の中にも、外国人かと思わせるような顔立ちをした奴らはいるので、そんな連中に紛れたら、日本人だと言っても、全く違和感がないだろう。ヒョロリとした体躯で、身長も１７０を少し越えるくらいだ。

俺は秘密裏に存在する暗殺者の集団を知らないかと聞いたところ、存在は知っているようだったが、詳しくは知らないという。

俺はその集団のリーダーと思わしき人物の名を教え、そいつを調べるよう依頼した。ついでにそいつについている女のこともだ。

もちろん、俺の本命はどちらかと言えば、そっちの女の方だがそれを言う必要はないだろう。ガスのことだから、いちいち理由を話さなくても、知りたいこと以上のことを調べてくれるのだ。

それと、これはついでに過ぎないが、真田の暗殺事件に関することもだ。真田がどんな事業に手を出していたのか、それはまだ気になっていた。おそらく、それこそが最終的に、自分の命を落とすことになったことに繋がるはずに違いない。俺はそうにらんでいた。

それだけ言うとガスは、分かったと短くいい、持っていたビールを一杯だけ飲んで店を出ていったのだった。仕事も早い奴だが、仕事に向かうのもまた早い。自分の生活がかかっているのだから、当然かもしれないが。

そんな俺は用件を済ませると、酒など一口も口にせず店を出て、

ジュリオに言われた住所に向かうべく夜の街を歩いていた。
目的の鳳凰館は、繁華街から外れた場所にある。サバカ・コシュカも外れた場所にあるので、ちょうど街を挟んで反対側になる。今いる場所から歩いて行けば、３０分かそこらといったところだろう。
なるべく穏便に行きたいところだが、場合によっては一暴れしないといけなくなるかもしれない。
そう考えると、歩いていけばちょうど良いウォーミングアップになるだろう。何事にも、多少の準備というのは必要だ。
繁華街を抜けると、小汚く、ごみごみとした街の一角には、何人も娼婦が立っていて、道行くサラリーマンや学生なんかを、その色香にかけようと躍起だっている光景が飛び込んできた。この時間帯なら、最初の獲物を見つけるには頃合いと言っていいだろうから、女達も必死とは言わず、どこか余裕がある。
信号に引っ掛かった俺を、一人の娼婦が淫靡な足取りで近づいてきた。まだ若い。歳の頃はまだ二十歳そこそこといったところだろうか。
だが、そのけばけばしすぎる化粧は、どこかアンバランスさを感じ、もしかしたらもっと若いかもしれない。
あまり知られていないが、最近の日本でも、十六、七でありながら娼婦をしている女だっているのだ。そのほとんどが、何かしら家庭の事情であることが大半だそうだが、それだけでもないようにも思える。
この娘も、どことなくそんな完全な娼婦になりきれていない雰囲気を漂わせている。客の中には、そんなまだ娼婦として初々しさのある者を、好んで選ぶような男もいると聞く。
もしかしたらこの娘も、そんな男がいるということを知っているから、俺に声をかけてきたのかと邪推してしまった。
「ねぇ、お兄さん。暇だったら私とどう？」
「悪いな。今からちょいと用事があるんだ。それがなければ遊ぶのも良かったんだが」

「え～安くするからさ、遊ぼうよ。ねぇ」
普通なら仕事だと告げれば、離れていくところなのだが、そうしないところがまだ分かっていなさそうな感じだ。
「そういうわけにもいかないんだ。悪いが他を当たってくれ」
苦笑しながらも、突き放すようにして言った。さすがの娘も、これには残念そうにしながら一歩引いた。
「なら……仕事が終わった後なら……？」
随分と食らいついてくる娘だ。娼婦といえ、ここまで食らいついてくるのは珍しい。
「いつになるか分からないぜ」
「いいよ、いつでも。あたしはお兄さんと寝たいの」
娘のきっぱりとした物言いに、思わず唖然とした。海外なんかではこういうタイプも数が多いわけではないが、確かにいる。毎日でも娼婦街に足を運んでいれば、出会うことはよくある。
だがこの日本では、ほとんどお目にかかるようなタイプではない。普通の男なら、そんな娘の態度に敬遠したくなるかもしれないが、俺は逆に興味が沸いた。
ここは一つ、試してみるとしようか。
「そんなに俺と寝てみたいのか？　別に俺なんかじゃぁなくても、君なら他の男とだって寝れるだろうし、金もとれるだろう」
「……そうだけど、時には娼婦だって、損得感情抜きで男と寝てみたいって思うものよ」
娘は瞳を潤ませながら、しなしなと身体に絡んできた。やれやれ、歳や経験はどうあれ、娼婦は娼婦ということか。
「……分かった。ただ、今日に仕事が終わるとも限らない。本当にいつになってもいいのか？」
俺の言葉に気を良くしたようで、娘は娼婦としてではなく、一人の少女として笑ったように俺には見えた。
「いいよ。その代わり、連絡して。番号教えるから」
こいつは本当に珍しい。たかだか娼婦がそんなことをするなど聞

いたことがない。これはもしかすると、本気かもしれない。まだ鵜呑みにはできないが、とりあえず俺も遊んでみてもいいという気になってきた。

「あ、ごめんなさい。何か書くもの持ってない？」

「悪いが持ってない。だけど安心しなよ。暗記は得意なんだ」

「本当に？　なら番号言うよ？」

自信ありげに俺は頷くと、娘は自分の番号を言った。その番号を二度三度復唱し、再び頷いた。

「良し、ちゃんと暗記したぜ。仕事が終わったら連絡するとしよう」

「本当に？　忘れちゃ嫌よ」

「ああ、約束する。なんだったら今日の仕事は、君に賭けてもいい」

「分かった。それなら、今日は私のために頑張ってね……？」

娘は潤ませた瞳を、上目使いに見上げてきた。その仕種に俺は、商売だと分かっているにも関わらず愚息を反応させてしまった。

娘と別れ、次こそは寄り道せずに鳳凰館へと向かった。鳳凰館のある地区は、繁華街と商業ビル街とのわずかな間に立ち並ぶ、知る人ぞ知るといった雰囲気を漂わせた一画だった。

住所を調べ、鳳凰館を探すとすぐに見つかった。背の高いクリーム色をした壁は、五、六メートルはあるだろうか。その上には、先の尖った柵が何本も突き刺さっており、壁の外観は西洋の貴族の屋敷を思わせる。

屋敷は、そんな壁に四方を完全に囲まれていて、壁の向こうを窺い知ることはできない。ざっと四方を廻ってはみたが、門はたった一つだけのようだ。そこらへんがいかにも秘密クラブという雰囲気だ。

高い壁に合わせて、やはりかなり大きな鉄製の柵門をくぐり、屋敷の扉に向かう。外庭にはコンクリートではなく、しっかりと砂利

が敷き詰められた手の込みようが、まさに欧州庭園というに相応しいだろう。

安物のジャケットを着込んだ俺は、この中にいては、どう見ても浮いてしまっているだろうが、気にしないでおこう。

砂利を踏み締めて扉の前の階段に来た。階段の横には黒服を着た門番が二人いて、いかにもこれ以上は通さないという雰囲気を醸しだしている。その内の一人が、俺の方に来て言った。

「当館の会員証のご提示をお願いいたします」

随分とずんぐりとした奴で、せっかくの黒服もあまり着こなせていないが、その下には分厚い筋肉が隠されているのだろう。このことからも、なんとなくここは何かありそうなことを匂わせる。

まぁ、それだけのことで断言はできない。秘密クラブでもなんでもない、普通のクラブにだって、そういった門番をきちんとつけているところもある。

「こいつでいいかな」

そう言って俺は赤いカードを差し出した。

「では、お預かりいたします。少々お待ち下さいますよう、お願いいたします」

門番の黒服は、指紋を付けないよう、きちんと白の手袋をはめてカードを受け取って、もう一人の方へ持って行った。

もう一人の黒服は、何やら機械を持っていて、その機械にカードを通している。時間にしてわずか二、三十秒ほどだったが、何やらイヤホンを手で当て、中の人間とやりとりしている。

（まさか、バレたか？）

一瞬そう思ったものの、カードを受け取った奴が、ご案内いたしますと言ったので、内心でほっと安堵した。

カードを俺に渡して、先導する形で階段を上る。黒服が扉を開けると、中には更にもう一人の黒服を着込んだ中年、いや、どちらかと言えば、初老といった感じのする奴が立っていた。

雰囲気としては、まさに執事というに相応しいが、佐竹の件もあ

ってか、俺はどうにも警戒してしまった。まぁ、相手にはあまりこういうところには慣れてないので、緊張してる程度にしか思わないだろう。

「これよりは私めがご案内させていただきます」

そう言われてその初老の執事により、屋敷の中を案内されることになった。館内は一見、普通の秘密クラブという感じがしたが、まぁ、普通がどうかなのかは俺も良く分からない。行ったことがあるのは、ヨーロッパでの仕事でほんの二、三回だけだ。

ビリヤードやダーツといったプレイルームは当然、図書室なんかもあった。図書室には今となっては絶版になってしまい、入手困難なものばかりが集められているはずなので、俺としては後ろ髪の引かれるところではある。

他にも、時には一流料理人の手によって振る舞われるのであろう、晩餐会が開けるような広さのある食堂もあるし、バーやカジノルームも完備されている。しかもそれらは全て、入念に趣向がこらしてあり、最高の贅をこしらえてあった。

どの場所にも、数人の会員達が好きに各々の時間を過ごしている。中には、どこかで見たことがあるような顔の奴までいた。

そして時折、慇懃（いんぎん）な顔付きの黒服達を見かけた。確かにジュリオの言った通り、何かしら訓練を受けた奴らだというのは、どうも間違いなさそうだ。

俺を今からどこに連れて行こうとしているのかは知らないが、この初老の執事もまた、今でこそ客相手の気取った営業的な態度だが、慇懃そうな雰囲気を隠しきれていない。きっと客のいなくなった時には、執事という仮面の下に隠された、本当の貌を見せるに違いない。

執事は、俺を廊下の突き当たりの角にまで連れてきた。そこはどうやら大きなエレベーターのようだ。初老の執事がボタンを押すと、すぐに扉が開いた。まるで、俺のためだけに用意されていたかのようにも思えた。

執事が先に乗り込み、続いて俺がエレベーターに乗る。だが執事は乗ったまま、方向転換することなくそのままだ。これもよくある乗ったまま、進行方向に扉があるタイプなんだろう。要するに、扉が二つ互いに面を向けて存在しているのだ。

俺が乗り込んだのを察し、執事はボタンを押したようだ。扉が閉まり、下に降りていく感覚があった。あまり速く動かないことから、大体地下三階くらいの深さだろう。

下に着いてエレベーターを降りると、そこは上とは丸っきり別世界だった。いやこちらが本当のところ、重要な施設なんだろう。

そこは、変態趣味を持った連中のためにだけに用意された空間だった。けれど、あまり大きな声では言えないがこういった場所には、一度来てみたかったというのが本音だ。

ＳＭプレイのための部屋から、様々なフェチシズムを持ったやつのために用意された部屋もあった。案内書きがされているだけで、それぞれの部屋の中がどうなっているのか、人がいるのか分からないが、きっと中の部屋では、そういったプレイが行われているのだろう。

そんな地下のフロアを執事に連れられてまっすぐ行き、突き当たりを右のドアを開けて入るよう促された。

「どうぞ」

無言で中に入ると、そこは部屋ではなく階段だった。先は真っ暗で、さらに下へと続いているようだ。

俺が入ると執事も入ってドアを閉める。また先導しながら、目的の所まで連れていくつもりなのだ。

やれやれ、一体何が出てくるというのだろう。もしかしたら、すでに正体は最上ではないことがバレていて、そんなことを知らない俺を、拷問室にでも連れていっているのだろうか。

もちろん、それが分かればこの初老の執事の命は、次の瞬間絶命しているだろうが。

「暗いので、足元にはご注意を願います」

そう行って執事は先導しながら階段を降り始めた。手にはどこから調達したのか、いつの間にか火のついた蝋燭の刺さった、蝋燭台を持っている。

二十段かそこらの階段を降りると、さらにまっすぐと進んだ。造りは中世ヨーロッパの城の地下施設というにふさわしい。

一つあたり数十キロはありそうな石を、隙間なく積んでいるのだ。もちろん、床や天井もだ。そんな壁に気持ち照らす程度に、蝋燭の火がいくつか等間隔で設置され灯っている。

そして、ようやく目的の場所に着いたようだった。入口にドアはつけられておらず、ただ暗幕だけが垂れ下げられている。

その暗幕を、執事がやはり俺を先に通すよう脇からそっと開けた。中は先程の石畳の通路の方がまだ明るく、さらに暗くなっていた。

そんな空間の中心には、どうやら何かパフォーマンスが行われるような、円形状の空間があり、その周りに暗幕で仕切られ、一人一人が分かりにくいように観覧席が設置されていた。

その一つに案内され、席に着くように言われた。どうやら銃を抜く必要はなさそうだ。

だが、上着を脱ぐように言われた時には、さすがに躊躇した。ジャケットの下には、最上の親父のところで手に入れたワルサーが吊られているのだ。

けれども、ここまで来て上着を脱がないというのもおかしな話だし、これだけ暗ければ、なんとか見えないように上着を渡すこともできるだろう。

俺はそう思って席に着く前に、吊り下げられた銃がなるべく見えないようにして、上着を脱いだ。

はっきり言って、夜目のきく俺ですらぱっと見、銃が吊り下げられているのが分かりにくい。それほど暗いのだから、多分大丈夫だろうというのもあった。

上着を受け取り、執事は気色の悪い囁き声で話しかけてきた。

「間もなくショーが始まります。お飲みものはいかがいたしましょ

う？」
「ウイスキーだ。バランタインの３０年」
「かしこまりました」
そんな短いやり取りの後、執事はテーブルの横にある上着かけに、受け取ったジャケットをかけ音もたてず消えたが、またいくらもしないうちにすぐ戻ってきた。
俺の座った椅子の横にある小さなテーブルに、スコッチの瓶とショットグラスを置いた。
「お召しあがりはショーの後になります。ごゆっくりお楽しみください」
「かまわない」
執事は丁寧にお辞儀し、やっと俺の周りから消えた。ショーだと？　良く言うぜ。この雰囲気は、もう考えるまでもない。間違いなく女の拷問を行うに決まっているのだ。
ヨーロッパにいた時もそうだった。全くそんなものを楽しみ、評論しようなんざ、連中は皆地獄に堕ちてもいい。
別に善人きどるつもりもないが、女を責めるのはベッドの上だけだと決めている俺には、どうしようもなく腹立たしく感じる。
仮に女がボロボロになるくらいの被虐願望があるのなら、それでも良い。個人の主義や思想にまで、つべこべ言うつもりもない。需要と供給が、うまいことバランスよく存在しているなら、文句などつけようのないことだ。
だが、今から行われるのは間違いなく、そんな主義や思想なんていうのは一切ない、ただ己の加虐心を満たすためだけのものだ。責められるのは、そんなことをされたいとも思ってすらいない、普通の女なのだ。
俺はそれが分かっているだけに、胸糞悪い気分でスコッチをドボドボとグラスに入れ、一気に胸の奥に流し込んだ。体の奥から一気に熱くなる。良い酒で、おまけに久しぶりのウイスキーだと言うのに、どうにもまずい。

こんなにまずい酒は久しぶりだ。舌打ちしながらもう一杯、グラスにいっぱいまで注ぎ、また一気に呑んだ。

グラスをテーブルに置いた時、中心の円形状のステージを照らすように、いくつもの照明が照らされた。逆光で、周囲の客席は完全に闇に溶け込んだことだろう。

そんな中、ステージの奥からプロレスラーのような大男と、それに連れられて、一組の幼い男女が現れた。

大男の方は、身長は百八十を少し超える俺より、さらに十センチ以上はでかい奴だ。レザーのマスクに頭をすっぽりと被せて、頭全体が目と鼻、口元だけが露出し、後は完全にマスクに収まっている。下はマスクと同じような薄いレザーのパンツ一枚と、やはり同じような素材でできたブーツを履いている。

体全体に気色が悪いくらいに発達した筋肉は、日焼けしているからか浅黒く、まるでラグビーボールでも貼付けているかのようだ。こういう奴は、脳みそまで筋肉でできていそうで、嫌悪感が先立つ。

そんな大男に対し、幼い二人の男女は大男と違って膚は純粋に浅黒く、おそらくは東南アジアあたりから売られてきたのだろう。二人はまだ五才から七才くらいのように見えるが、とにかくまだ十才には達していない。

そんな幼い少年と少女の首には、金属の首輪が嵌められていて、その首輪から垂れている鎖が大男の手によって握られていた。

二人は、これからその身にふりかかる運命など知らされていないはずで、不安そうに、その大きな両目をきょときょととさせ、体を強張らせている。

幼い少女は、おそらく少年よりも一、二才下で、その不安から少年にしっかりとしがみつくようにして、寄り添っていた。

（まさか、この二人……）

俺の脳裏に、あまり考えたくない単語が沸き起こって、かすめていった。そうであってほしくないという願いはきっと、もはやそうなのだと、肯定された雰囲気から滲み出たものなのかもしれない。

そんな三人に遅れて、三人が出てきた場所とは違う場所から、一人の男が出てきた。

美男子と言っても良い容姿をしており、日本人のはずだが、どことなくエルビス・プレスリーに似ている。高そうな白いスーツを着込み、その甘いマスクは世の女達が放っておかなさそうだ。

だが明らかに、ねちっこい蛇を思わせるような男からは、慇懃な雰囲気が滲んでいる。その男が、まるでステージに立った詩人か何かのような口ぶりと態度で、高らかに宣言した。

「お集まりいただきました皆様方、ただいまから、この時間を持ちまして、本日のメインショー、幼き兄妹による、はかなくも美しい、悲愛の終末の始まりにございます！」

俺は舌打ちした。やはりその通りだったのだ。

あの幼い二人の、特に少女の少年への寄り添おうとする様は、そんな雰囲気があったのだ。また、一目見た時から二人がどことなく似ている気がしたのも、そういうことだったからなのだ。

キザ男が言い終えると、周りを囲む仕切られた観覧席からは、いくつもの拍手が響き渡り、キザ男はそれに酔いしれるように深く頭を下げた。

頭を上げ、手でショーの主役となる二人の幼い兄妹の方を向けた。まるで、次の歌手にステージを明け渡すかのような仕種だ。

大男に握られた鎖を引かれ、二人は小さく呻いた。そして大男は、ステージに用意されていた台から、一本の注射器を取り出した。

何をするつもりなんだ……もちろん、それをあの二人に打つつもりだというのは分かっている。問題は、その効果だ。その注射器の中に入っている薬液が、一体どんな効果をもたらすのかは、推し知れない。

話を聞くところ、こういった残虐なショーでは、被害者に感覚がより敏感になるよう、薬を打つと聞いたことがあった。あれも、それらの効果をもたらすようなものなのだろうか。

幼い兄妹は、その注射器を持って近づいてくる大男に恐怖し、身

を震わせていた。まず大男は、少年の身ぐるみを剥ぎ取った。
ボロ切れ同然の下には、下着など一切つけておらず、まだ小さく、無毛の男性器があらわになった。それを見た幾人かの観客が、呻くように嗤った。それには明らかに、嘲謔の色が含まれている。
それをうけて幼い少年は、前を隠そうと必死になったが、大男に鎖を引かれてそれもできそうになかった。
一手に二本の鎖を持っているため、同時に妹の方の鎖も引かれることになり、妹が苦しむように呻いた。
それも仕方ないだろう。鎖の長さは、二人ともほとんど差はないのに、妹の方が身長が兄に比べて十センチ以上は小さいのだ。妹の様子を見た兄は、抵抗する気を失ったようだった。
……全く、胸糞悪くなる光景だ。あの大男は無言で、自分の言うことを聞かなければ妹が苦しむぞというのを、兄に暗示しているのだ。
単純に暴力を振るわない辺りが、なおのこと質(たち)が悪く、無言のプレッシャーをあの幼い兄妹に与えている。
それに気を良くしたのか、大男は鎖を持った手で、少し乱暴に少年の小さな男性器を掴み、持っている注射器をそこに打ったのだ。
幼い兄の口から、まるで女の子のような悲鳴があがった。それも当然だろう、まだ二次成徴すら始まっていない少年なのだ。
さすがにこの光景には、こっちの愚息も縮み上がりそうだ。気付けば俺は、顔を引き攣らせていた。
その悲鳴がふいに止んだ。大男が針を抜いたのだ。少年は、うなだれるように膝から力が抜けて、倒れそうになる。
それを大男が支えた。別に優しさからではないだろう。これからの本番のためにだ。
見れば、注射器の中に入っていた薬液は完全に無くなっていて、少年の体内に注入されたことを物語っている。
妹は恐怖しながらも、心配そうに兄の肩に手を触れようとしていた。きっと、二人はとても仲の良い兄妹なのだろう。

もし、こんなところに売り飛ばされなければ、きっと互いに妹思いの兄と、兄思いの妹として仲良く暮らせたことだろう。

そんな二人に、俺は一瞬だが沙弥佳のことがフラッシュバックした。もし、あそこにいるのが俺と沙弥佳だったら……そんなことを考えたのだ。

俺はかぶりを振った。考えたくもない。だと言うのに、どうしてもあの二人に自分と沙弥佳を当て嵌めて考えてしまう。

それを払拭するため、俺はテーブルに置かれたスコッチの瓶に口を付け、グイッと喉の奥に液体を流し込んだ。

熱さを伴った流動体が胃に落ちていき、俺は少しだが落ち着くことができた。

再びステージのほうに目をやると、次の段階へと以降していた。うなだれていたはずの少年が、顔を上げて目を大きく開き、血走らせている。

大男はいつの間にか鎖を手放して、下卑た笑いを浮かべながら、少年の耳元で何かを囁いていた。

妹は兄に起こった異変に戸惑いながらも、大丈夫かと近寄ろうとした。だが、兄の股間に目をやった時、歩み出そうとした足を止めた。

俺の位置からもはっきりと分かった。小さな男性器が、はち切れんばかりに勃起していたのだ。

少年は肩で呼吸しており、とても普通の状態ではない。男性器がビクンビクンと脈打ち、先からはすでに先走った液体が出ていた。

あの歳でカウパー液など出るものなのだろうか。残念ながら、そこまで正確な性知識のない俺には分かりようもないことだが、きっと先ほどの薬液の効果なんだろう。いや、そうに決まっている。

そんな状態の幼い少年は、さらに幼い少女に一歩近寄ろうとした。少女はそんな兄にビクリと身体を震わせ、後ずさる。

また一歩妹に近づく兄。それに合わせて後ずさる妹。その感覚はだんだんと短くなり、ついには少年は獣のような声をあげて、自身

の妹に飛び掛かり、幼い肢体を押し倒した。
少女が押し倒した兄に何か叫んでいる。英語であったため、俺でも聞き取れた。二人は、フィリピンの出身なのかもしれない。あの国は確か、フィリピン語と英語のニカ国語が共用語になっていたはずだ。
そんなフィリピンでは、未だに人身売買が社会問題になっていて、世界でも有数の人身売買市場ができている。
日本人も一時は客としてこれに荷担しており、フィリピンの市場にとって、最も身近で最も金の落とし方も良いというので、随分世話になっているはずだ。
バブルに湧いた日本の国際的な注目度の上昇によることもあり、日本ではそれらに関して最上級の刑罰が与えられるようになったため、日本への輸出は減ったが現在では日本ではなく、中国やインドといった国がそれに代わって台頭してきている。
だが、それでも日本への輸出そのものが完全になくなったわけでもなく、それはさらに巧妙になり、さらに下に潜っていったに過ぎず、依然として問題は解決していない。
あの国は、中国なんかと同じでとても貧富の差が大きく、裕福な層の資産は、国全体の八割りとも九割りとも言われている。
近年では中流層も増え始めているそうだが、当然ながらそれは都市部だけで、地方なんかではちょっとしたことで転落し、明日の生活費のために仕方なしにバイヤーに子供を売るという、負の習慣がまだまだ根付いているのだ。
英語を喋るのも、都市部での人間が多いと聞くので、あの二人は元はそんな拡がりつつある、中流層の出身だったのだろう。だがやはり転落してしまい、売られてしまったに違いない。
きっと仲の良い兄妹であったのだろうが、今回ばかりはそれが仇になったのかもしれない。
それでも、一人別々にされてしまうよりは、まだいくらかマシだろう。あの歳で一人にされてしまうなど、なおのこと辛くなるはず

だ。

まだセックスなんて言う概念も知らない年頃だろうが、幼い兄はどうすれば股間の熱くたぎるものを解放できるのか、知っているようだった。いや、それはもはや本能と言ってもいい。

きっと大男が今しがた耳元で囁いたのも、それを増長させるようなことを言ったのだ。本能はマスターベーションよりも、セックスを優先させるというのを本で読んだことがあるが、まさにその通りの光景だった。

それに二人は、まだ自慰というものは知らないはずなので、当然の結果と言えるかもしれない。

さらに、こんな胸糞悪いことを考えた出した奴も、それを知っているから、兄に獣の本能を呼び起こさせたのだ。

そして幼いがゆえに、自身の鎮め方を知らない兄は獣になってしまい、目の前に与えられた牝を犯す、ということだ。

しかも今回、その牝というのはさらに幼い、実の妹だと言うのだ。悪趣味にもほどがある。

少女の心からの叫びが、ホール全体に響き渡る。それでも幼い妹の悲痛な叫びは、最も信頼しているはずの兄には届かない。

兄はそのたぎる勃起を、妹の濡れてもいない股ぐらに容赦なく突っ込もうとし失敗していたものの、ついにそれを成し得ようとした。

「いやあっ！　やめてぇっお兄ちゃん！　ひっギッッッ！？」

無理矢理突っ込まれた妹は、あまりの痛みのためか、絶叫すら途中で止めてしまった。きっと彼女には今自分がどうなってしまったのか、そんなことも考えることすらできていないだろう。

男の俺には破瓜の痛みは知りようもないが、信頼していただろう兄に、容赦なく打ち込まれるという無惨さだけは理解できるつもりだ。

兄である少年は、自身を妹の奥まで突っ込み、唐突の前後運動を開始した。すると、一度は止んだ妹の絶叫が再びあがった。

「ぎゃあああああああああッッッッッ！！！」

妹の絶叫は、子供故の幼く甲高い声のためにより惨たらしく、こっちが耳を塞ぎたくなるほどだ。

当然、妹のそこからは破瓜によって血が流れだし、それが余計に惨めさと痛々しさを強調する。

だと言うのに、周りの客達は賞賛の拍手と、嘲笑の声をあげた。それも大声でだ。

一体全体、何がおかしいというのだ。俺にはとてもじゃないが、正視できるようなものではなかった。先ほどのように、また沙弥佳のことがフラッシュバックしたからだ。

あそこで沙弥佳が犯されている……。そして犯しているのが兄である俺……そんな考えたくもない想像が生まれてくるのだ。

腹の底から、どうしようもない怒りの感情が沸き、今すぐここにいる連中を皆殺しにしてやりたい衝動を押さえるのに必死だった。

その間にも、兄による正気の沙汰ではない妹へのレイプは行われていて、絶えず絶叫が続いている。

それと同時に、ゲスな奴らの嘲笑もだ。きっとこの空間にいる人間で、正気を保っているのは俺だけだろう。

いつしか兄も、獣のような呻き声を出しながら妹の中を蹂躙していた。そして、その動きが早くなり、ついには唸り声をあげ、尻を震わせながら妹の中に放出したのだ。

……いや、放出はできなかっただろう。まだ精通すらしていない幼い少年なのだ。射精など起こりうるはずもない。

せめて射精ができれば、その粘液のために少しはその動きやすくなるだろうし、なにより妹も痛みが軽減されたろうに……。あの二人を買った連中は、きっとそれも分かっていたに違いない。

兄に妹をレイプさせる……。それはつまり、あの幼い兄には強姦と同時に近親相姦という罪まで犯させ、妹には兄に強姦され、おまけにやはり近親相姦をしてしまったと言う、心の傷を負わすことになるのだ。

こんなにまで酷いことがあるだろうか。こんな光景は、殺し屋と

いう職についている俺ですら嫌悪してしまう光景だ。
殺し屋とは言っても、誰彼構わず殺しまくるわけでもない。あくまでそこにはちゃんと論理というのがあるのだ。
だが、目の前の光景にそれはない。あるとすれば、蹂躙する者とされる者……ただ、それだけだ。しかも、兄である少年は薬で狂わされたとはいえ、その両方でもあるのだ。
そんな光景が、どれほど続いただろうか。いい加減、大男が二人を引きはがした。少年はその間に何度も絶頂を繰り返していたはずだが、股間のそれは、若さとは無関係に未だ勃起していた。
妹の少女はすでに声すらあげておらず、ただ生気を失ったような瞳をし、その瞳は、遠目からでも分かるほど涙を溢れさせていた。
だが、これだけで二人の悪夢が終わったわけではなかったのだった……。

第２９章（前書き）

前回に引き続き、レイプシーンあり。苦手な方はご留意ください。

第２９章

大男に薬を投与され、狂ったように妹を犯した少年は、大男によって妹から引きはがされステージに置かれた、小さな台に乱暴にうつぶせにされた。まだ薬の効果が切れていないようで、その股間には痛そうに屹立と勃起している。

うつぶせにされた少年に、今度は大男が被さり、レザーのパンツから己のペニスを出した。すでに、はち切れんばかりになっているそれは、少年のものとは比べものにならないほど大きい。あんな大きさのものは、たとえ成人した女だってきついだろう。

そしてあの大男は、自分の勃起を少年の小さなすぼまりに持っていき、一気に突き刺したのだ。

「ぁがあああああああああぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

さっきの妹に代わって、今度は少年の口から絶叫がほとばしる。

薬を投与され前後不覚になっているとは言え、あまりに酷い仕打ちだった。だが大男は、そんなことなどお構いなしに腰を動かしている。少年は絶叫しながら、すでに白目を剥いていた。

幸いだったのは、いくらもしないうちに大男が絶頂を迎えたことだろう。妹に比べその時間は、おそらく数分の一ほどの時間だ。もちろん、ここにいるゲス共は、やはり嘲謔に満ちた声で笑い、拍手を送っていた。

俺はもう二人をさっさと引き上げさせろとしか思えないが、こういった場所でそれだけで終わるはずがない。

大男は、少年の肛門から勃起を抜いた。光に照らされ、少年の血や精液によって竿がぬらぬらと光って見える。

その大きさもさることながら、粘液に濡れたそれはグロテスクで、俺は軽い吐き気を一瞬覚えたほどだ。

少年は気を失ったのか、事切れたかのように指一本すら動かして

いない。顔が伏せられているため表情は見えないが、きっと、妹である少女のように涙で濡らしていることだろう。

そんな少年には目もくれず、大男は、次は妹の方に歩み寄り、短く切られた髪を掴んで起こした。少女はわずかに呻き声をあげたに過ぎないが、大男に掴まれたからか、その声には恐怖の色を感じさせる。

大男は少女をステージの奥に連れていき、磔けにする。もう考えないでもわかる。鞭打ちだ。

ヨーロッパの秘密クラブに潜入した時も、こんなことがあった。中世の処刑人のような恰好をした奴が、鞭を手に取り何度も打ち付けるのだ。それはたとえ皮膚が裂け、血が出たとしても終わることがない。終わりは、処刑人の気分次第なのだ。

間違いなく今からそれが行われるのだ。大男は、長く黒い革製の鞭を手に取ると、そのしなりの良さを確かめるために一度、大きく床を打ち付けた。

ビシッというなんともしなりの良さを感じさせる音を響かせ、大男が少女から離れる。絶好の距離を作るためだ。

少女は、鞭が床打つ音に完全に意識が戻ったようで、その顔に恐怖を滲ませていた。せめて、意識がどこかに飛んでいる状態なら、まだ運が良かっただろう。ここに来て意識が戻るなんて、不幸以外のなにものでもない。

次の瞬間、再び少女の悲鳴があがる。最初の一振りで、幼い少女の柔肌は裂けた。血がうっすらと流れ出しているのが分かった。

続いてもう一度大男が少女に向かって鞭を打つ。再び悲鳴があがる。

そうやって大男は、何度も何度も少女の幼い肢体に鞭を浴びせる。額、頬、肩、胸、腕、腹、両方のふとももも……。それらの部位からは例外なく紫に変色した痣や血が流れていて、おまけに少女は、足を広げられるようにして磔けられているため、股間が軽く広げられているのだ。

それは、あんな惨たらしい破爪の後では、辛いだろう。もう少女は泣くことすら忘れ、鞭打たれる度に、ひたすら悲鳴をあげ続けていた。

青紫に変色してしまった肌に、鞭によりできたいくつもの傷ができ、血が流れ出している裸体に満足したのか、大男はようやく鞭打つのをやめた。

磔けられた少女は、力なくうなだれている。大男は、磔にされた少女の拘束を解いて、気を失っている兄の前に引き連れた。少女の足取りはもはや、ゾンビか何かのようにフラフラとして、まともに歩けなさそうだった。

兄と違ったのは、うつぶせではなく仰向けになって倒されたことだった。一度は射精し、萎えかけていた大男のペニスだったが、再びガチガチになっていて、天を仰いでいる。

少年のものとは比べられないほどの太さと長さのあるそれを見ても、少女は全く反応しない。しかし、大男はそんなことは気にもせず、少女の股を開き、一気に貫いたのだ。

一拍おいて、またも少女の悲鳴があがった。それと同時に、ゲス共の拍手と嘲笑まじりの声もだ。

少女の腕と同じくらいか、もしくはそれよりも太いかもしれない大男のペニスに貫かれたのだ。少女のそこは、破爪とは違う血で濡れていく。

大男の兄を犯している時以上の腰使いに、少女は身もだえすらすることができずに、身体を強張らせている。

その時、悲鳴をあげ続けている少女の声に気付いたのか、少年が意識を取り戻しつつあるのが分かった。おそらく少女を犯しているのに夢中で、大男は気付いていないだろう。そしてそれに釘づけになっている客達もだ。

絶頂が近いのだろう、大男が気色の悪い呻き声をあげながら上を向いた。さらに少女の顔が歪む。顔の筋肉を使いすぎて、その顔のまま、もう動かなくなるのではないかと思えるほどだ。

そんな妹の無惨な姿を、幼い兄は目を大きくして見ていた。きっと、何が起こっているのか分かっていないのだ。

数秒の間それらを凝視していた少年は、途端に泣きそうな顔をした。それもそうだろう、自身の妹が犯されているというのに、何も思わない兄など、およそいようはずもない。仲が良いのであれば、なおさらだ。

大男に犯された痛みのため、まだ立ち上がることができないのか、少年は呻き声を出しながら妹に手を延ばそうとした。その時になって、ようやく大男が少年の意識が戻ったのに気付いたようだった。ついさっき少年の中に出したばかりだというのに、早速、少女の中に出そうとしているのか、口元が歪んだ。

それからいくらもしないうちに、ついに大男は絶頂し、少女の膣の中に己の精液を放出したのだった。

だが破瓜に加え、少女には人外とも言えるほどの大きさのペニスに貫かれ、裂けてしまったそこは、その精液の熱さが、さらに痛みを与えるにすぎなかったようだ。

破瓜の時のような、一際大きな絶叫でついに意識を失ったようだった。そして、それを見ていた兄も、いつしかその目に涙を浮かべて、絶望感にうちひしがれている。

セックスやレイプといった知識や概念はなくとも、それらを本能で理解したのだろう。もしかしたから、妹にとんでもないことをしてしまったと苛んでいるのかもしれない。

何にしても、こうして二人の幼い兄妹は、近親相姦を犯し、一生それを背負っていかなくてはならなくなったのだ。

そんな、そこらの犬の糞にも劣るような最悪の結末で、ショーという名の拷問は幕を下ろした。

他の客が引けた後も、俺はそこから動くことはなかった。どうに

も体の中で怒りの炎がおさまり切らず、動きたくなかったのだ。
きっと今動いたら、あの変態大男やキザ野郎は当然、執事や黒服達を皆殺しにせずにはいられないからだ。
そいつにはまだ早い。ここに潜った意味がなくなってしまう。そのため、俺はここで気を落ち着かせようと、一人いるのだ。
幸か不幸か、あの執事が持ってきたスコッチのおかげで、なんとか気が紛れているため、これなら後しばらくもすれば、行動を起こせるほどには気を鎮めることができるだろう。
俺は、瓶に口をつけながら考えていた。先ほどの兄妹は、間違いなく身売りされてここへ来た。だとすれば、ここのどこかに必ず“商品”としてここに連れてこられた、二人の伝票か何かがあるはずだ。
ここを経営している奴が、別の場所で取引しショーのためだけに連れてきたにしろ、何かしら、それを示す痕跡があるはず……俺はそう考えていたのだ。
（やはり、銃を手に入れておいて正解だった）
ふいにそう思った。できれば一暴れせずに済ませたかったが、もうそいつは無理というものだ。これから起こるであろう血の報復に、俺は歓喜せざるを得なかった。
だが……それは、俺のどうしようもない考えと都合であって、あの兄妹の都合ではない。俺が勝手に、あの二人の代わりになって復讐するわけにもいかない。
確かめなければならないだろう。きっとあの二人では、何もできないかもしれない。だが、もし奴らにほんの少しでも牙を剥こうものなら、君達兄妹に代わって、俺は奴らを、一人残らず地獄に叩き落とすことをここに誓おう。
君らには、それをするだけの権利というのが与えられているはずなんだ。君らにだって、連中をいたぶる権利はあるはずなんだ。
何かをひたすら祈るだけは、全く意味のない行為だ。祈る神すら君らを見捨てたのだから。

神など存在していないと思っているが、奴らに一生分の責め苦を味わわせる地獄はあってもいいはずだ。俺はそう考えている。よって、もしその意志が少しでもあるなら、俺はそれを盟約として受け取ろう。

だから俺は、君らに確かめなくてはいけない。復讐の意志があるのか、それともないのか……。

絶望にうちひしがれているだけでは、何も解決しないんだ。だから君らに問おう。

それを改めて頭に刻み込み、俺は椅子を立った。

ジャケットを羽織り、観覧席をステージに向かって降りていく。ステージに降りて、キザ野郎が出てきた方へ向かう。

観覧席からは見えなかったが、そこには、ステージ裏へと進む道があった。そこへ入っていくと短い階段があり、さらに下に行かなくてはならないようだった。ためらいなく階段を降り、奥へ進む。

数メートルほど進むと、先がT字になっているのが分かった。

（さて、どちらに行くか……）

そう思いながらT字にきた時、左の方でかすかに物音が聞こえた。そうなると、もう迷うことなどなく、俺は左の道へと進んだ。

そこを真っ直ぐ行くと、先ほどの物音に混じって、悲鳴のような声が聞こえてきた。その声は甲高く、悲鳴の主は子供のようだ。その悲鳴は進むたびに大きく聞こえるようになり、ついぞその声が途切れてしまった。

「……ちっ、もう終わりか」

通路が終わった先に部屋があり、そこから今までは聞こえなかった、低い男の声が聞こえた。その中をそっと覗きこむと、一人の大男が背をこちらに向けたまま、何やらしているようだった。

「……ぁ、ぁぁ、ぁあ、あああああああ！」

その時、俺からは見えない位置にもう一人いたようで、子供の声で泣き叫ぶような、怒りの遠吠えともつかない声をあげた。

推測するに、さっきの幼い兄妹だろうか。だとすれば、あの大男は二人に折檻した、さっきの大男ということになる。俺は無意識のうちに、ジャケットの中に吊されているワルサーのグリップを握っていた。

（待て、待つんだ。まだ早い……）

そう自分に言い聞かせ、グリップから手を放した。

「くっくっくっくっ。そう叫ぶなよ、後でお前もきちんと可愛がってやるからな」　もう一人に向かって、大男は下卑た声で喋りかけた。その姿は間違いなく、さっきの大男だ。そう言うと大男は、下卑た顔でこちらに向かって歩き出した。

俺はとっさに物陰に隠れた。俺には気付くことなく、大男はその横をのしのしという擬音でも付けたくなるような足取りで、俺の来た方へ去っていく。

もちろん後を追うつもりだが、その前にあの兄妹の様子が気になった俺は、物陰から出て部屋へと入っていった。

部屋に入った俺は、その中の様子を見て驚いた。なんと、そこには何人もの子供達が、檻の中に閉じ込められているではないか。

先ほどの兄妹のように、膚の浅黒い東南アジア系は当然として、完全に黒い膚をした黒人系の者いれば、中東方面の出身と思われる者、ラテン系、ゲルマン系、北欧系……さらには、中国人と思われる見慣れた膚の色をした者もいる。

そして、奥には隅で倒れ込んでいて、生死は判別できないが、日本人と思われる者もいたのだ。

しかも、それぞれには必ず男女のペアで檻に入れられているのを見ると、やはり兄妹なのだろうか……。俺は下唇を噛んでいた。まさかこんな悍（おぞ）ましい光景を見ることになるなんざ、思いもしなかった。

大男に入れ代わりで入ってきた俺に、子供達は怯えた表情をして、震えている。さっきの兄妹はショーの後、さらにあの大男から責めを受けたようで、先ほどより痣がひどくなっている。

たった今、その責めを受けていたのは、どうやら妹の方だったようだ。目を開いてはいるものの、意識が混濁しているようで、俺が視界に入っているはずなのに、まるで見えていないかのようだった。

もしかしたら、目を開けたまま失神しているかもしれない。兄の方も、目を見開いたまま涙を流し、瞬き一つしようとしない。

（……泣くな、泣くんじゃない。君が妹を護れなかった気持ちは分かる。だが、まだ終わりじゃない。君は復讐するんだ！）

俺は無言で幼い兄に語りかけ、顔を伏せた。

改めて部屋の中を見回した。とても不衛生な中で、まともに寝るスペースも与えられず、窓すらない。まともに食事を与えてもらっていないのだろう、肋骨が浮かんでいる者も少なくない。

中には、ちゃんとした衣装に、十分な食事を与えれば、瞬く間に人目を引きそうな者もいた。それとは逆に、もはや子供というより、幽鬼のようになっている者もいる。

くそっ、なんて胸糞悪い場所なんだ……。俺は後悔していた。仕事のためなどと思わず、あのショーの時に、連中を一人残らず皆殺しにしておけば良かった。

こんなのを見せられて落ち着いていられるほど、俺は冷静な人間ではない。それでも、復讐する権利は俺にではなく君達にある。そう簡単に、連中に鉛玉をぶち込むわけにもいかない。

だが……だが、君らと同じ兄妹として生まれた俺だ。もし誰か一人でも、反抗の意志を示したなら、俺が奴らを裁く。

さっきの兄妹だけではない。君ら全員だ。君ら全員の復讐なんだ。だから、それまではしばらく待っているんだ。また必ずここへ来る。

部屋に入ってきたのに何もしない俺に、子供達は怯えながらも、どこか怪訝な表情をして見せた。

とにかく、いつまでもここにいるわけにもいかない。子供達を一瞥し、俺は頷いた。

「必ず……必ずだ」

そう言って、俺は部屋を出た。

部屋を出た俺は、急ぎ足であの大男の後を追うと、すぐに先ほどのT字のところにきた。ここにきて今更ステージの方に行く意味はない。

無視して、さっきとは反対に右側の通路を行く。例のキザ野郎も、おそらくここから来たのだろう。どのみち奴には、人身売買のリストやら何やらを吐いてもらうつもりだが、何よりそんな連中を痛めつけてやれるとなると、どうしてか、思わず唇が歪んでしまう。

こちら側の通路も、やはりT字の左通路と同じ造りで、真っ直ぐ行った先が、やはり部屋になっていた。

よもや、またも奴隷部屋なんてことはないだろうか……そうは思ったものの、今度はそうではなかったようだ。だが、代わりに面白いものを見つけた。

「ふん。連中、奴隷市の他にも武器の売買もしてたのかな」

そう、そこは武器庫だったのである。この平和ボケした国で、なんだってこんなに武器が必要なのかというほど置いてある。

何挺もの拳銃、数としては同じくらいある機関銃に手榴弾、ライフルもあったし、ロケットランチャーまである。まるで、戦争でもおっ始めたいがために置かれているかのように見える。

この武器庫の向こうには、さらに部屋があるようだ。俺は簡単に武器庫の中を物色し、持てそうなものを持っていくことにした。機関銃や手榴弾なんかは、十分に役に立つだろう。

だが、機関銃は目立ちすぎる。そこで俺は、とりあえず手榴弾を三つ四つばかしジャケットのポケットに突っ込んだ。

残りの手榴弾は、適当にあった袋に全部入れた。見つかりにくそうな場所に、その袋を隠しておく。後は拳銃をもう一丁持っていくことにした。これ以上は、持って行っても邪魔になってしまうだけだろう。

その拳銃をジャケットの下、右側の脇に吊るした。予備のマガジンも持って、準備万全だ。俺は軽く頷くと、武器庫を後にした。い

よいよ、奴らにものをいわせてやる。
武器庫を抜けた先は、どうも連中の詰め所か何かのような部屋だった。食べかけの料理や酒、コーヒーも飲みかけでおいてある。タバコの吸い殻は、いくつも山を作ってあった。その他、雑誌や新聞といったものも投げ出されていた。
空気清浄器が備え付けてあり、一応は今も動いているようだったが、それも全く意味はない。それほどまでに空気は淀み、タバコのヤニ臭さが染み付いている。壁も本来なら白かったのだろうが、黄ばんで本来の色など見るかげもない。
俺はそんな部屋の中を、売買リストがないか探した。こんなこと言うのもなんだが、決して子供達のためではない。もちろん連中は、一人残らず地獄へ落とすべきだと言うのは言うまでもない。
だが、まだその復讐者ともいうべき子供達は、それをしようと行動しない。理屈ではないのだろうが、やはり、自分でやるべきことに横槍を入れるのは良くないことだ。
それにもしかしたら、その売買リストに沙弥佳に繋がる何かが見つかる可能性だってあるのだ。そのために今こうして、それらがないか探しているわけだ。
ざっと部屋の中を探して回ったが、それらしいものはなかった。まぁ、詰め所のような部屋にそんな重要なものがあるはずはないか。
その時、下卑た笑い声をあげながら、部屋に向かってくる奴らの足音が聞こえた。足音と声から察するに、人数は二人だ。
俺は咄嗟に物陰に隠れ、今しがた手に入れた拳銃を抜いて、サイレンサーを素早く取り付けた。
「ははは。それでその女ったらよ」
部屋に入ってドアを閉めた瞬間、下卑た笑いを浮かべた奴の一人の側頭部に弾丸をぶち込んだ。
何か言いかけながら、そいつは床に倒れ、もう一人には立て続けに両方のふとももに一発ずつぶち込む。
「げあっ！？」

情けない声をあげながら倒れたそいつに、銃口を向けながら近づいていく。
「なっ、なっ、」
あまりの突然なことに、そいつは何が起こったのか、まだ理解できていないようだった。
「いいか、これから俺の質問に三秒以内に答えるんだ。無駄なあがきはするな、時間の無駄だ」
俺は低い声でそう脅しつけ、そいつを椅子に無理矢理座らせる。よくよく見ると、そいつは例のずんぐりとした門番だった。
「お、おまえはっ……なんでこんな所にぎゃあっ！？」
男が悲鳴をあげる。そいつが混乱した頭で質問しようとしたため、俺はそいつの小指を掴み、へし折ってやったのだ。
「おまえに質問する権利はない。俺のいうことにだけ素直に喋ればいい。分かったな？」
「ひ、ひどい……指が……があっ！？」
今度はその隣にある薬指を掴んでぶち折る。その手に、鈍い音と感触があった。
「聞こえなかったか？　おまえには、俺が質問して答える以外に、口を開く権利はない。それ以外を喋れば、こういうことになる」
そいつを、ゴミでも見るかのように見下ろしながら言う。男は涙を浮かべ、必死に何度も頷いている。
「良し、では質問だ。まず、この館のオーナーは誰だ」
「……だ、伊達聡一郎様……」
伊達聡一郎……どこだかで聞いたことがあるような名だ。まぁいい。知っていれば後で思い出すこともあるだろう。それにしても、様付けだなんて、随分と下への教育が行き届いているようだ。
「どんな奴なんだ」
「……か、かなり格好良い人だ……。どこだかのロックスターに似ている……」
ロックスター……もしや、さっきのプレスリーに似た奴だろうか。

「そいつは白いタキシードを着込んだ奴か」
「……そうだ」
そいつは足を撃たれたうえ、指の骨を二本もぶち折られたためか、荒い呼吸をしながら答えている。
まだあの子供達と約束したわけでもないのに、すでに一人地獄に突き落としてしまったが、この男にはそれが達成されるまでは、きちんと生きていてもらわないといけない。
「では次の質問だ。お前たちはもう何年もあんな商売を続けているのか？」
「……あ、ああ。ここができた最初の時から」
「ここができたのはいつなんだ」
「ろ、六年前……」
「六年前……」
男の答えに、俺は引っ掛かった。沙弥佳が行方をくらましたのも六年前だ。だが、ただそれだけで偶然とも言えなくもない。まだまだ探りをいれる必要がありそうだ。
「ここに、商品として買い入れた子供達のリストがあるはずだ。それはどこだ」
「し、知らん……」
「そうか」　短く言った俺は、直ぐさま男の指をへし折った。今度は中指だ。
「っ！？？」
男はもはや叫び声すらあげずに、目を大きく見開いて、顔を引き攣らせている。
「もう一度聞くぜ？　リストはどこだ」
「はっ、はっ、はっ……聡一郎、様しか……知らないんだっ……本当だっ」
痛みに顔を歪ませた男は、へし折られていく指を見ながら、息も絶え絶えに言葉を絞り出した。
「聡一郎の部屋はどこにある」

手短に吐かせようと、人差し指に手を延ばそうとした。それを見た男は反射的に怯え、早口にまくし立てた。
「ち、地下一階だっ、一番大きな扉だからすぐ分かるよっ」
「良し。それと次にここに誰か降りてくるのはいつ位だ」
「さ、三、四十分後……くらいだと思う……」
それを聞いた俺は、部屋の中にあった何に使うかは知らないがロープを取り出し、男の手足を縛った。次にテープで口を塞ぎ、声を出せないようにする。それも何重にも巻き付けてだ。
ことを終え、俺は早速部屋を出て地下一階に向かった。ここに来る時エレベーターに乗ったが、どうやらここは地下二階になるらしい。部屋を出ると、数メートル先に階段があるのが分かった。
どうも上へ行く階段のようだ。音は立てないようにしながら、小走りに階段へ行き、誰もいないことを確認して一目散に上へと昇った。
昇りついた目の前に扉があった。扉を開け、周りの様子を見る。廊下の先を3人の黒服が見えた。そいつらが見えなくなると、そこをすぐに移動し、目的の部屋を探す。
目的の部屋と思われる扉は、わりとあっさり見つかった。今までの扉と違い、観音開きの二つ扉になっていたからだ。扉はやはり特別製を意識してか、壁が凹んでくり抜かれ、身を隠すにはちょうど良さそうな、三十センチほどのくぼみがあった。
そこに身を隠して扉に耳をあてる。しばらくの間、耳をあてていたが中から音は聞こえない。サイレンサー付きの拳銃を手に、豪華そうな取っ手を掴んで扉を開けた。
予想通り、中は誰もいなかった。素早く身を滑り込ませ、静かに扉を閉める。
「さて、どこからいくか……」
やはり、まずは大統領でも気取っているのか、大きな黒塗りされた机からだろう。物が隠されているとすれば、最も怪しい。
俺は大股で机まで行き、それの一番上の引き出しを引いた。その

中には大きさの割りに、ほとんど物は入っていなかった。
引き出しを戻し、その下の引き出しを開けた時、俺の見たかったものらしいものが見つかった。それを手に取って中を見てみる。
まとめてファイルされたリストには、“今月の仕入れ”と簡潔に書かれている。
……間違いない。これが商品となる子供達の仕入れリストだ。名前、性別、年齢、出身国、健康状態、いつ仕入れたかなどかなり事細かに書かれ、それにその子供の写真が添えられている。
中には、さっき奴隷部屋で見た子供もいた。そう、先の拷問ショーに出演させられた兄妹だ。兄の方は八才で、妹が六才だとここには書かれている。
（俺達と同じ年齢差か）
ざっと見てみたが、リストに示された子供達は、皆、血の繋がった兄妹であることが判明した。もちろん、すでに実物を見ているので、予想していたことだ。だが、中には姉弟もいるようだ。まぁ、なんにしても幼い子供達に近親相姦を犯させようという魂胆は、手にとるように分かる。
だが、これには肝心な仕入先が書かれていなかった。俺はそのファイルを手に、部屋の中を探してまわった。
その時、扉の向こうで話し声が聞こえた。声の主は、間違いなくあのキザ野郎だ。
（まずい！）
俺は隠れることのできそうな場所を探した。だが、隠れられそうな場所などありはしなかった。
俺は銃を手に、扉の脇に背をつけた。こうなっては、なりふり構ってなどいられない。入って来た瞬間に、連中をやるしかない。
だが、例のキザ野郎だけは殺してはいけない。奴には、喋ってもらわないといけないことが山ほどあるのだ。
息を殺していると、思ってもみないことが起こった。いつまで経っても部屋に奴が入ってこないので、侵入がバレたのかと思ったの

だが、どうも違ったらしい。
ボソボソとうまく聞き取れないが、分かった、すぐに行く、という言葉の後に、部屋を離れて行ったのが気配で分かった。もう扉の前に誰もいないことが分かると、深くため息がでた。
再度、部屋の中を、仕入先が書かれたものがないか確かめてみたものの、やはり見つからなかった。
俺は舌打ちした。仕入れリストがあれば、肝心の仕入先が分かると踏んでいただけに、少なからず落胆があった。まぁいい。これを元手に調べることもできるだろう。
そう思い俺は、そのファイルを服の中に仕舞いこんだ。それにこれは場合によっては、あの子供達の役に立つかもしれない。
再び扉を開け、廊下に人がいないか確認する。案の定、廊下には誰もいない。
来た時と同じように、小走りに来た道を戻る。だがその時、後ろの方で、何やら慌ただしく黒服達が喚きたて始めた。
上で何があったのだろうか。一瞬、見つかったかとも思ったが、違うようだ。
しかし、こっちとしては都合がいい。今は、誰もこっちへ来る気配がないのだから当然だ。
下へ通じる扉を開け、俺は下へと降りていく。例の詰め所のような部屋に来た瞬間、俺は一瞬何かに気付き、床を転げ、振り向き様に銃を撃った。
サイレンサー付きのため、パシュッという控えめな音がする。一体何なんだと見てみれば、俺がここで絞り上げておいた奴だった。きつく拘束しておいたはずなのに、抜け出していたのだ。
縄抜けの技術でもあったというのだろうか。
なんにしても、そいつの心臓あたりをぶち抜いたようで、すでに絶命している。拘束していた椅子を見ると、その下に、明らかに切られた跡のあるロープが落ちていた。
しかも、手と足を縛っていた両方のロープに、その跡があった。

つまり、誰かがここに来て、この男の拘束を解いたということになる。

となると、さっきの黒服達の騒ぎようは……俺は忌ま忌ましげに舌打ちし、部屋を飛び出した。

隣の武器庫で、隠しておいた手榴弾の詰まった袋を引っ張りだした。武器庫を見る限り、銃などはそのままになっている。

これはもしかしたら、俺以外の第三者が潜り込んだと見ていいかもしれない。袋を担いで、薄暗く二、三メートル先もまともに見えない通路を、例のステージの方から漏れる、わずかな光を頼りに突き進む。そこがステージに通じているT字路なんだろう。

そのT字に向かうにつれ、再び悲鳴が聞こえた。俺は悪い胸騒ぎを覚えながら、そこへと向かう。

壁を背に、そっとステージを見ると、例の大男がまたも幼い兄妹を責めていた。今度は、さっきのフィリピン出身の兄妹とは別の兄妹だった。肌が透き通るように白く、髪も金髪だ。

白人、それもおそらくは北欧辺りの出身だろうか。俺は思い出したように、先ほど伊達の部屋でくすねたファイルを取り出し、ステージから漏れる光だけでは分かりにくいかもしれないが、夜目のきく俺はかろうじて、ファイルの字を読むことができた。

すると、やはりあの二人は北欧の出身で、出荷国フィンランドなどと書かれている。俺は下唇を噛みながら、その光景を一瞥し、ファイルを担いでいる袋の中に突っ込んだ。

その時だった。ほんの三、四メートルほどのところに、一人の子供が立っていたのだ。怪訝に思って眉をひそめたが、なんとそれはさっきステージで責められていた、あの幼い少年だった。

薄暗いはずの通路であるはずなのに、やけに瞳がくっきりと見えた。その瞳は暗がりの中でも、大きく見開かれ、まるでガラス玉のようにも感じる。そこには生気というものは感じられない。

少年は、おそらくは人形でもまだマシな歩き方をするはずだと思わせる足取りで、ふらりふらりとステージの方へ歩んでいく。

ホールでは突然現れた少年に、ざわめきを起こしたようだった。
だが俺には、なんとなくだが予想できなくもない光景ではあった。
もしかしたら、彼は自らの復讐のために現れたのかもしれない。
だとすれば、妹の方は……そこまで考えた時、少年に向かって大男が怒声をあげ、俺はステージの方を見た。
ゆっくりと少年に近寄る大男は、きっとこれから起こるかもしれないことなど、想像すらしないだろう。
（……いいぞ。それでいい。君は当然の権利を主張するんだ。奴に、ものいわせてやれ）
少年に俺の願いが通じたかは分からないが、大男が指の先まで筋肉なんではないかと思わせる手を、少年に延ばした時、それは起こった。
「ぐあぁっ！？」
大男の情けない声があがり、ホールにいる客共からはざわざわと、戸惑いの色が含まれたざわめきが起こる。
そう、延ばされた大男の手に、膚の浅黒い幼い少年は、思いきり噛み付いてやったのだ。それも力の限り、渾身の力をもってだ。
大男は反対の手で、少年を思いきり殴り付けた。腰から力のいったパンチだ。少年は数メートルも飛ばされ、壁に激突する。
殴られた瞬間、何かが潰れるような嫌な音が聞こえた。血も飛び散り、それが致命傷を与えたということは、考えるまでもない。
だが俺は、ついにスイッチが入った音が聞こえた。待ちに待った音だ。いつも自分が極限まで怒り、どうしようもなくなった時にのみ起こりうる、頭蓋の中でカチリとスイッチの入ったような音が。
感情は怒りに奮え血は湧き、肉は歓喜に震え躍るのだ。だというのに、それとは別に氷点下にまで下がってしまったかのように、ひどく冷静にもなるのだ。
俺は拳銃を抜き、大男のふとももに狙いを定める。
無駄に発達した筋肉の塊は、照準を合わせるには、俺にとっては目をつぶってでもできるほどだ。

引き金を引き、パシュンという音の後に、大男が倒れる。ホールに響いていたざわめきが、一瞬にして消え、今度は静寂が訪れた。

きっと、なぜ大男が倒れたのか、連中は理解できていないに違いない。もしかしたら、何かの余興とすら思っているかもしれない。

俺は軽く舌なめずりしながら、ホールの方へと歩みだした。

少年との契約は交わされたのだ。俺は、ここにいる奴らを君の待つ、地獄の道連れにするための死神になろう。

少年への盟約を誓って、俺はホールに威風堂々と躍り出た。

第３０章

ステージで予想もしない出来事が立て続けに起き、客共は再びざわめきだした。俺はそんな中で、一人冷静にステージ中央に立ち、全体を見渡した。

なるほど。ショーのために照らされたライトのため、観覧席はやはり見事に逆光で見えなくなっている。

だが訓練された俺の目には、なんとか奴らの輪郭をみることが分かる。これなら、たとえ良くは見えなくとも、気配で撃つことができる。

「貴様ぁ……こんなことをして、ただで済むと思うなよ」

大男がマスクの下から俺を睨みつけながら、馬鹿なことを言う。

ただで済む？　たしかにそうだ。自分でもそう思う。これからお前をなぶり殺しにできるのだから、ただで済ますはずがない。

俺はそんな大男を尻目に、嘲りを含んだため息をついた。まだ、自分の未来が分かってもいないのだ。

そんな態度をとる俺に、大男はなおも腹立たしく何か喚いている。もちろん、そんなことなど耳に入ってきているわけもない。無言で大男の肩に銃口を向ける。

喚き立てていた奴も、さすがに押し黙った。それを合図に引き金を引く。立て続けに反対側の肩にもだ。

この場にいる誰もが、俺の行動に注目しているのが分かる。一瞬の静寂があった後、悲鳴があがった。それらは当然客共のものだが、予想外にも女の声が多かった。男と同伴しているのだろう。

客席を見ようとして、ステージの目の前にいる客と目が合った。六十代くらいの奴だったが、俺と目が合った途端に顔を恐怖に歪め、一目散に逃げようと席を立った。

だが次の瞬間、その親父は床にぶち倒れる。俺の指が動いた奴めがけ、反射的に引き金を引いたのだ。

これにはさすがにまだ状況を掴みきれていなかった客共も、自分をとりまく状況を理解できたようだ。

パニック状態に陥った連中に一発一発正確に、逆光で暗く、見えにくい客席に弾丸をぶち込んでいく。もちろん弾数も正確に数えながら、弾切れになりそうになったら、マガジンを取り出して準備しておくことも忘れない。

連中は恐慌状態に陥っているため、我先にと観覧席から立って動くので、動いた瞬間がよく分かるのだ。

俺はそれに向かって、引き金を引けばいい。目さえ慣れれば、夜目がきくためにそれを察知できる。

一分と経たずに客達は動かなくなった。皆地獄に落としてやったのだ。それを無感動に見て振り返る。今度は例の大男だ。

こいつはただではすまさない。こいつにはしばしの間、苦しんで死んでもらうことにしよう。六年前にここができた頃からこんなことをしていたのなら、こいつのおかげで今まで、何百何千という犠牲者が出てきたに違いない。

その犠牲者達の何千何万分の一の苦しみも与えずに死なせるなど、死んでいった者達に申し訳が立たないというものだ。

ステージには、何がなんだか分からないという顔をした幼い兄妹が、俺のことを見ていた。そんな兄妹を尻目に、俺は台に置かれた鞭を手に取った。まずはこいつで、それを味わってもらうとしようか。

前のショーでこの大男がやったように、俺も鞭のしなりを確かめるように、床に打ち付ける。乾いた、小気味良い音が響く。

大男もそれを察知したのだろう、マスクに顔が覆われていても目と口元には、明らかに引き攣ったものが見える。さぁ、覚悟するがいい。

俺は腕を振り上げ、しなりを利かせながら振り下ろした。大男の苦悶の声が漏れる。もちろん、一回で終わるはずもなく、二度三度と立て続けに、うずくまる大男めがけ打ち付けていく。その度に大

男は、辛そうに苦悶の声をあげる。
だが、いくら辛いと言えどこの程度でやめるはずもない。この大男は少女に、何十回、下手したら百数十回と打ちつけていたのだ。こんな程度でやめていては、彼女に申し訳が立とうはずがない。
そのうちに、大男の皮膚が裂けて血が流れ出した。気付けば俺も随分と息があがっている。サディストでもない俺にとって、これ以上は息をあげてまでしたい行為でもない。だが、まだこれだけで済ましたいと思ってもいない。
どうしようかと、ふいに台の方を見ると、ナイフがあった。俺の時にはなかったが、今回はナイフをショーに使うつもりだったらしい。
まだ幼く、北欧人特有の肌白さというのは、ナイフを使って膚を裂けば、赤い血の色は映えるかもしれない。きっと、そんなことなんだろう。
ならば俺はこいつを使って、鞭なんか比じゃない痛みをこの野郎に与えてやる。
俺はやっとのことで鞭打ちから解放され、荒い呼吸をしている大男の喉元をつかんで、気管を絞めながら引きずる。先ほど、あの膚の浅黒い兄妹を犯した台にまで大男を引きずってくると、右手を台につかせた。
いや、つかせたというより、叩きつけたという方が正確だろう。こんな野郎に、慈悲など必要もあるはずないのだから。
台におかれた手の平に、俺は容赦なくナイフを突き立てた。
「っっあああああああああ!?」
大男の低いながらも、妙に甲高い叫びが響いた。ナイフは完全に手の平を貫通し、下の台に突き刺さったのだ。血が流れだし、台から滴っていく。
痛みのために、ぶるぶると手が震えている。左手で、突き立てられた右手を押さえようとするが、俺はその手を掴んで台の上に叩きつけた。
更なる責め苦に、大男は再び苦悶の呻き声を漏らす。だ

が幼い少女は、貴様以上の責め苦を味わされたのだ。
今度は奴の頭を掴み、台に何度もぶつけていく。これには、さすがに堪えたようで、途中から呻き声すらあげなくなった。
（つまらないな。どうした、もっと抵抗しろよ）
あまりに呆気なさ過ぎる大男に、俺はそう思う。
いや、この手の奴というのは、実際にはこんなものなのかもしれない。いざ自分が責められる立場になると何もできず、ただそれを過ぎるのを待つだけ……それで少しは彼らの気持ちも分かるというものだろう。
大男は俺に対して、完全に畏怖しているようだった。マスクから覗かせる目は、明らかに恐怖を滲ませている。
もう俺はなりふり構わずただ痛めつけているにすぎず、面倒にも感じ出していたのだ。こんなとこにきて俺はお人よしなのか、もう十分だという気持ちになったのである。
俺はようやく、この大男に対して口を聞いた。
「……さて、お前にはいくつか聞きたいことがある。まず、あの子供達を一体どこから手に入れたんだ」
「うぅ、し、知らねぇ」
唐突に現れて、唐突に痛めつけられたことに、恐怖とともに混乱もしているようだが、簡単には口を割るわけでもなさそうだ。
俺はそうか、と一言だけ言い、突き刺さったナイフをさらに深く突き刺そうと、えぐった。大男の口から、またもや苦悶の呻き声が漏れた。
「おまえが喋らないというのなら、もうここで終わりにしてやろう。いいか？　こいつは脅しじゃない。最後通告だ。いいな」
「ひっぐっ、あぁ、かっ」
「頭が悪そうだからもう一度聞こう、分かりやすく説明してな。どういうルートを使って子供達を買ったんだ」
突き刺さったナイフを、ぐりぐりと動かすようにしながら問い詰める。正直に言うと、こんな奴がそれを知っているとはあまり思え

ないが、やることはやっておくべきだ。
「がっ、かっ、ぐう……オ、オーナーしか知らないんだ。俺は知らない、本当だっ」
「ならそのオーナーは、伊達は今どこにいるんだ」
「し、知らん。き、きっと自宅に戻ってるはずだっ」
「自宅……。伊達の自宅はどこにある？」
「そ、聡一郎様の自宅は……」
大男が一瞬言い淀み、その先を言おうとしたその時だった。
「いたぞっ」
「！？」
暗闇になっている観覧席から、男の怒声が聞こえた。俺の位置からは暗闇に紛れ、敵の姿が判断できない。おまけに俺はショーライトのために、敵からは丸見えなのだ。
そう思った次の瞬間には、連中は銃をぶっ放してきたのだ。
「ちっ！」
舌打ちしながら、床に身を投げ出す。
「ぎゃっ！？」
大男が短い悲鳴をあげた。きっと連中の撃った弾丸に当たったのだろう。奴の息の根は俺が止めるつもりだったことを考えれば、とんでもない横槍を入れられた気分だが仕方ない。
どの道、連中を一人たりとも生かしておくつもりはない。暗闇から一瞬だけ見えた、銃口から発射された弾の火の粉を頼りに、そこめがけ反撃する。
さきの大男のように、男達の短い悲鳴が聞こえる。弾を五発撃ち終えたところで、連中の気配がなくなる。とりあえず第一陣は殲滅できたようだ。
大男は、流れ玉を心臓に受けたようで、即死だったようだ。こんな簡単に死なせるつもりがなかっただけに残念でならないが、死んでしまったのだから仕方ない。いずれにしろ、こいつが死んだのは自業自得なのだ。

俺は直ぐさま、子供達のところに走り寄る。
「大丈夫か」
日本語が通じるかは分からないが、安否だけは確認しておく。幸い、銃撃戦が始まってすぐに隅で伏せていたようで、怪我らしい怪我はしていないようだ。
しかし、やはりあの膚の浅黒い幼い少年は、すでに息をしていなかった。俺は目を細め、俺と同じ兄としての責務を果たそうとした君に誓って、必ずや君と妹の復讐をしてやると改めて約束した。

奴隷部屋から閉じ込められていた子供達を、檻から出す。弱っているが、なんとかなるはずだ。
いや、自力でなんとかできなければ、その先にあるのは死だけだ。体力が衰えて痩せ細り、体重のない彼らと言えど、さすがの俺も何人も担いで行くわけにもいかない。
始め、再び入って来た俺に子供達は恐怖の表情を見せはしたが、鍵で檻を開けてやると、怪訝そうにしながらも出てきた。例の膚の浅黒い妹は兄同様、やはりすでに息をしていなかった。それと、檻の隅に横たわっていた日本人かと思われた少年少女も、同様に息をしていなかった。俺は三人の遺体を担ぎ、ホールに横たえてやる。
君達を地上にあげてやれないのが心残りだが、せめて同じ仲間同士、そして血の繋がった兄妹と一緒にいたいだろう……。
二組の兄妹に、それぞれ手を繋がせるようにした俺は、ほんの数秒の間だけ黙祷した。君らと何百の先輩たちの待つ地獄に、奴らを必ず送ってやるからな。もうしばらく待っていてくれ……。
檻から出した子供達も雰囲気を悟ったのか、表情を曇らせる。
「良し、行くぞ」
短く言い、子供達を先導しながら武器庫へとたどり着く。
武器庫にたどり着いた俺は、今度はマシンガンと予備のマガジンを持ち出し、すぐにそこを後にした。子供達は何も言わずに、俺の後を着いてくる。一応は、俺のことを味方だと思ってくれているよ

うだ。正直に言えば、ただの成り行きでしかないが、これも何かの縁だろう。

階段をあがり、地下一階にまで来た。再びその廊下を真っ直ぐ進み、十字路になっているところまできた。壁を背にし、子供達に俺と同じようにするようにジェスチャーした。そっと左右を確認する。地上にあがるための階段の前に、黒服の連中が五、六人たむろし、何か叫んでいる。

俺は子供達に耳を塞ぐようジェスチャーする。そして、袋の中から手榴弾を取り出し、安全ピンを抜いた。

ヒューズが切れる前にわずかな時間だけ待ち、連中に向かって投げた。

爆音が響く。黒服達のいた辺りに、いくつもの肉片が飛び散っている。

そんな中、子供達を行かせなければならないのは少々酷というものだが、生き残るために、今は我慢してもらおう。

「良し、今だ」

行くぞとジェスチャーし、子供達を立ち上がらせる。俺に勢い良く子供達が続いてくるが、黒服達だったものを見ると、さすがにその足が止まった。

無理もないだろう。こんなものは普通に考えて、お目にかかれるものでもないし、ましてや子供だ。手榴弾ではなく、マシンガンにしておくべきだったかとも思ったが、もはや後の祭りだ。

今はもう、そんな悠長なことも言っていられない。

「早くするんだっ」

語気を強めながら、子供達に進むよう促す。俺のすぐ後ろにいた子供達の手をとって、強引に進ませる。ともすれば、皆進もうとするはずだ。

辛いだろうが、今は一刻も早くここから脱出することが先決なのだ。皆一様に表情を強張らせながら、歩を進める。

「早く先に進むんだ」

歩を進めると言っても、決して速いペースとは言えず、おどおどとした遅いペースであるため、つい命令口調になる。

その時、危惧していたことが起こった。子供らの後ろから、黒服達が四人こちらに向かってきたのだ。

「早く階段へ行けっ！」

最後尾の子供達を強引に掴んで走らせる。それと同時に、肩に下げていたマシンガンを奴らに向かって撃った。フルオートにしてあるため、すぐさま何発もの弾丸が発射される。

これにより二人を倒すことができたが、二人はとっさに物陰に隠れてしまった。俺は断続的に撃ちながら、後退していく。

階段では子供達がこちらを伺っていた。

「何してるっ、早く行けっ」

日本語を理解できるのかは分からないが、俺の言ったことが伝わったようで、階段を昇っていった。

ポケットの中に予備の手榴弾があったのを思い出し、それを取り出す。

階段に着いたところで犬歯に安全ピンをひっかけて抜き、隠れた二人に向かって投げた。俺は一目散に階段を駆け上がる。

後ろで爆発音が響いた。連中のところまでは距離があったため、おそらく届かなかっただろうが、逃げるための時間稼ぎにはなるはずだ。

その階段の上の方には、子供達が俺を待っていたようだ。再び俺が先頭に行き、子供達を誘導する。

ポケットからもう一つ手榴弾を取り出し、ピンを抜く。それを階段の下に投げいれた。子供達の頭上を、黒い楕円形の金属球が弧を描きながら階下へと落ちていく。

、篭った爆音と同時に階段の一部や、その周辺の壁が吹き飛んだようで、崩れるような音がした。これで後ろからの追っ手は気にしないでいいだろう。

だが、今度は前方に奴らが出張っていて、すでに陣をしいていた

のだ。子供達に階段に伏せているようジェスチャーし、俺もまた階段に伏せた。

マシンガンをフルオートでバラまき、その間に片手でポケットにある最後の手榴弾を取り出した。

ピンを抜き、わずかな間ヒューズが切れるのを待って、陣をしく連中に投げた。こちらに投げ返す暇を与えないためだ。

俺はさらに袋からもう一つ手榴弾を取り、ピンを抜いた。直後に前方で爆発が起こる。

爆発により、巻き上げられた埃などのために視界がぼやけているが、関係なくそいつを投げた。

男の小さな悲鳴が聞こえた瞬間、再び爆音が響く。多分、これで第二陣は殲滅できたはずだ。

階段で伏せていた子供達に、先に進むよう叫ぶ。巻き上げられた埃なんかが、徐々におさまり始め、視界が明瞭になってきた。前方を見ると、予想通り連中は無惨な肉片に変わっている。

立ち上がって小走りに、連中が陣取っていた手前の角にまできた。屋敷の構造上、ここを抜けさえすれば、後は玄関まではすぐだ。

壁を背にホールの方を見ると、連中はホールの中央にいて、すでに砦をなしていた。子供達も俺の後ろに着いて、ことの成り行きを見守っている。

一瞬だけ顔を覗かせただけだったが、連中の一斉掃射により、反撃もままならない。こういう時、武器庫にあったロケットランチャーを持ってきておくべきだったと、わずかばかり後悔した。

手榴弾があるうえ、さらに言うとかさばるので持ってこなかったのだ。せっかく武器庫にあったのに、惜しいことをした。

あれの威力を持ってすれば、奴らの陣取っている意味などないも同然なのだ。ここからでは、手榴弾も奴らを全滅させるには到らないはずだ。

袋の中にある手榴弾の数を手短に数えた。後残り四発。……なんとかなりそうだ。　問題はこの狭い通路から、これを投げ飛ばせる

かだ。野球選手のようにこいつを投げれば、もちろん最初の一発だけでも、かなりのダメージを与えられるだろう。

だが、その前に今のような一斉掃射を浴びて、オダブツになるだろう。かといって、ピンを抜いて転がすように投げたとしても、奴らのところまで届くか怪しい。奴らとの距離は、そんな微妙な距離なのだ。

そんなことを考えていたところ、再び連中の掃射が始まった。何十発もの銃弾を浴びて、徐々に壁が崩れだしている。このままでは、隠れる場所が削り取られていってしまう。

（ちっ、なんて脆い壁なんだ）

内心毒づきながら、俺は深呼吸する。こうなっては、覚悟を決めるしかないだろう。どの道俺には、持久戦などできるわけでもない。

手榴弾は四発。後は、マシンガンが一梃と拳銃が二丁。これらがなくなれば、俺の敗北なのだ。

まぁいい。いつまでもこんなところにいるわけにもいかない。ここを抜ければ後は玄関までは目と鼻の先だ。というよりも、連中の後ろが玄関になっているのだ。

俺はかぶりを振った。あれこれと先のことを考えていてもしょうがない話だ。後のことはその時考えればいいだろう。今までもそうだったではないか。

「いいか、おまえたちはここから絶対に動くんじゃぁないぜ」

子供らに動かないようジェスチャーした。腹をくくった俺は、手榴弾のピンを抜き、素早く転がすように投げた。たいしたダメージにはならないはずなので、早速二発目を用意する。

直後に轟音が鳴り響き、爆風によって通路の壁がえぐれた。

すでに用意の出来た俺は、まだ埃や細かくなって粉のようになったコンクリートの破片が巻き上げられている場所めがけて、ピンが抜かれている手榴弾を全力で投げた。

一拍おき、手榴弾が破裂する。爆発する瞬間、男達の悲惨な悲鳴が聞こえた。

俺はそれを成功の合図とみなし、左手にマシンガン、右手に拳銃を持ち特攻をかけた。

こうなれば、後は己の経験と技術を信じるのみだ。立て続けに起こった二度の爆発で、連中も混乱しているはずだ。このチャンスを逃すなどありえない。

視界はまだ明瞭ではないが、何人かはすでに肉塊に変わっているのは分かった。

それと同時に、飛び散ったコンクリートの細かい破片や埃のため、咳込むようにしている者も数人いる。物陰からむせるように出てきた奴に、鉛玉をぶち込む。

さすがに銃声で、俺が特攻をかけたのに気付いた者もいたようで、咳込みながらも反撃してきた。

俺は撃つために頭を出した瞬間、そいつに向かって撃つ。

しかし、そのために連中が混乱から立ち直りだしたのも事実で、巻き上げられていたた埃なんかも収まりを見え始めている。

俺は特攻前にポケットにしまい込んだ手榴弾を取り出して、やはり奴らに向かって投げた。それも今度は、陰に隠れているその後ろに向かってだ。

それにいち早く気付いた者は、そこから逃げようと物陰から飛び出すが、俺はそいつらに向け、正確に引き金を引いていく。

ついにヒューズが切れて爆発が起こる。それに三人ほど巻き込まれ、吹っ飛んでいく。

ざっと数えると、すでに十人近い奴らが死体に変わっている。後はいるにしても、二人か三人というところだろう。

案の定、撃ってくる奴らは二人だけのようで、何かこっちに向かって叫ぶように喚き立てている。

俺はあえて反撃せず、身を乗り出した。危険だが早く外に出るためにも、こいつらを片付けようと思ったのだ。

二人は反撃してこない俺に、再度身を乗り出し銃を向けた。それを俺が待っているとも知らずに。

一人目は簡単に頭をぶち抜けたようで、撃つ間もなく床に倒れた。
最後の一人は再び物陰に隠れたが、お互いに、どちらかが死なない限り生き残ることはできないということは、理解しているはずだ。
もしかしたら、まだ屋敷のどこかに黒服の奴がいて、その援軍を待っているとも考えられる。
だが、これほどの時間があったにも関わらず、そんな連中が一向に姿を見せないとなると、その可能性は限りなく低いと思われるが、こちらに時間がないのは事実なので、ここは難しいが、アレをやるとしよう。アレ……そう、跳弾というやつだ。
俺は足音を立てずにゆっくりとそこを移動し、跳弾になりえそうな場所まで移動する。
奴が隠れている場所は、跳弾をしやすそうになっているため、後はこちらが跳ね返りやすそうな場所にまで移動すればいい。そしてそのポイントも、ほんの僅か数メートルの場所だ。
俺はそこに移動し、狙いを定めた。
「じゃぁな」
短く別れの言葉をつぶやいた俺は、引き金を引く。
発射された弾丸はうまいこと跳ね返ってくれたようで、銃が床に落ちた音が聞こえた。遅れて、ドサリと人が倒れ込むような鈍い音もだ。
跳弾なるものは、実戦では初めて使ったが、初めてのわりにはうまくいった。俺はニヤリと唇を歪め、子供達のところに戻った。
銃声が聞こえなくなって逆に不安になっていたのか、子供達は俺が戻ってくると安堵の表情をしてみせた。
俺は、それに思わず苦笑しながら、行くぜ、とだけ短く告げた。

玄関の扉を開けると、俺は絶句した。なんとそこには、制服姿の警官や機動隊が群れをなしていたのだ。
俺はただちに扉を閉めた。ざっと見たところ、三、四十人は確実にいた。なんということだ……後少しだったというのに。

もしや、俺と同時に潜入したと思われる奴が通報したのだろうか。それとも別の奴が……。いや、この際誰でもいいか。一つだけ言えるのは、俺が犯人であり、テロリストか何かだと確実に思われているという事実だ。

子供達も、そんな雰囲気を感じ取ったのか、不安そうに俺を見つめてきていた。

「犯人に告ぐ。武装解除し、今すぐにそこから出て来るんだ。そして子供達を解放するんだ」

待て。その言い草は、まるで俺が子供達を餌に、ここの連中を脅迫していたみたいではないか。

冗談じゃない。俺はそんなことなどした覚えはない。第一、俺が何をしたというのだ。なんの罪もない子供らをいたぶり、揚句の果てにはボロクズのように死にいたらしめる……そんな連中から、成り行きだったとは言え、子供達を救い感謝こそされど、こんな風に犯罪者扱いされるようなことは、今回に至っては全くと言っていいほどしていないはずだ。

ここの連中は、皆地獄に堕ちて当たり前の奴らばかりなのだ。

「犯人に再度告ぐ。武装を解除し、すみやかに子供達を解放するんだ」

どことなく苛立ちを感じさせるような口調で、刑事が拡声器を使って叫んだ。

やかましい。人の気も知らないでよくそんなことが言えるものだ。思えば、警察というのはいつもそうだ。六年前、沙弥佳の時だってそうだった。こっちの気も知らず、適当に言いたいことだけ言って、ほとんど役に立たなかった。

それでいながら、人を疑い、そうと決めればたいして調べもせずに事件を終わらせようとする。後はこちらが何を言っても、終わったんだの一点張りだ。

そして今回も通報があり、それをそのままに受け取ったのだろう。子供達の心からの叫びも聞かずして。

そんな子供達を無視し、知ろうともせず、ただ俺をテロリストか何かのように扱おうとするこの連中も、地獄に堕ちていいはずだ。

いや、この屋敷にいた連中と同罪として扱うべきだろう。ここにいた奴らと同じで、人の金で生活しておきながら、でかい顔をする。片や罪のない子供の命を餌に、片や人々の稼いだ金で生計を立てているのに、そういった人間に感謝の字もありはしないのだ。それどころか、立場は違えど、何もできない人を蹂躙するという点で言えば、全くの同罪ではないか。

決めた。俺は外にいる連中を、この屋敷にいた奴ら同様、地獄に叩き落とすことにした。

とは言え……マシンガン一梃に拳銃二丁、それに最後の一個になってしまった手榴弾だけでは、どうにも心もとない。連中は、しっかりと防弾チョッキや防弾ガラスを用いた装備を持っているのだ。あまりにこちらが不利だ。

手榴弾一つでうまいことといけば、七、八人は葬れるだろうが、その後には待っているのは投獄か、正当防衛を盾にした銃殺だ。ここにきて、やはりロケットランチャーがないのは実に口惜しい……。

その時だった。欧州庭園に陣取っていた警察たちが急に慌ただしくなり、何発かの銃声が聞こえたのだ。

外の様子がおかしいと思った俺は、そっとドアを開けて外を窺った。なんと一つしかない扉をぶち破り、大型トラックがこちらに向かって突っ込んでくるではないか。

砂利を弾き、玄関前に陣取る警官隊やパトカーを吹っ飛ばし、玄関の前で急停止した。

「荷台に早く乗れっ」

「田神っ」

トラックを運転していたのは田神だった。その荷台にはエリナが乗っていて、早く乗るように叫んでいる。

「あれに乗り込むんだっ」

トラックを指差し、子供達を走らせる。

大急ぎで子供らを荷台に乗せながら、俺は警官達にマシンガンをバラまく。
この攻撃で幾人かがぶち倒れる。運が良ければ死んでいないだろう。
それと同時に、俺も荷台に転げ込みながら叫ぶ。
「出すんだっ」
田神はすぐにアクセルを踏み、急発進させる。
最後に、残り一つとなった手榴弾を連中に向かって投げる。それを見て、連中は何がなんだか分からないという顔をしていた。
その連中の顔を最後に、荷台の扉が閉められる。そして、最後の金属球は豪快な音を立てて、爆発したのだった。

第３１章（前書き）

性描写あり。

第３１章

女の鼻にかかったような甘い声に、俺はニタニタと薄笑いを浮かべていた。もう何時間も前から続いている行為だ。

「ああ、いいわ……もっと」

その声に応えるように、俺は深くえぐるように女の中を責め立てる。

すると女は背を弓なりにのけ反らせ、脚を腰に絡ませてきた。またも絶頂が近づいているのかもしれない。

この女に限らず、女は気持ち良くなると体をやたらに密着してくるように思う。もちろん、そうさせているのはこっちなのだから、男として嬉しい反応と言える。

しかし、こちらはまだ一度もイッていないというのに、この女はすでに何度かの絶頂を迎えているのだ。

だと言うのに、まだ物足りなさげに『もっと』だなんて、なんとも欲深な女だ。けれど、かくいう俺もこんな女が結構好きだったりするので、お互い様というべきなのだろうが。

女の嬌声が一段と甲高くなり、一際大きく濁ったような声で鳴いた。

それを機に、ようやく俺にも絶頂の波が押し寄せ、女の中にたっぷりと白濁液を注ぎ込むのだった。

「あむ……ふぁ……ちう……ふぅん」

ちゅぽんといういやらしい音を立てて、女は俺のペニスから口を離した。

しっかりと後始末までしてくれるなんて思いもしなかったので、思わずそのまま女の口の中に出してやろうかとも思ったが、やめておいた。そんなことをしては、理性に歯止めが効かなくなりそうだ

からだ。
その気になれば、一日だろうが二日だろうが女と爛れたように裸で抱き合い、求めることだってできるが、そんなことをしては、この女にも迷惑がかかるだろう。仮にも商売女なのだ。
「はあ……こんなに気持ち良かったのって初めてかも」
「そうかい」
女の言葉に俺は唇をニヤリとさせた。以外と若い商売女というのは、セックスによる絶頂は体験したことがない女が多く、なぜだかそういう女は、自分色に染めてみたいという欲望を強く抱かせる。そして気付けば、その女にどっぷりと漬かってしまうというわけだ。
けれど、どんなにそういう経験が少なかろうと、商売女は商売女と割り切るのが、互いに良い関係というのを築いていけるのだ。だから、俺としても金を払わない分、今回はいつまでも拘束させるわけにもいかないというわけだ。
「でも驚いちゃったわ。今日はもう、電話はしてこないと思ってたのに」
「いつでも良いと言ったのは君の方だ」
苦笑しながら女にいった。
「ま、そうなんだけど。でもお兄さんなら私、ずっとタダでも良いよ？」
「嬉しい申し入れだが、そういうわけにもいかないだろう。今回は別としても、俺と寝た分、君は損するんだぜ？」
「うーん、そうなんだけどねぇ。なんかお兄さんからは、お金いらないって感じなのよね」
「君は本当に変わってるな。普通なら、いらないなんて言って、なんだかんだで後で請求してきたりする女も珍しくないってのに」
「ふーんだ。私、そこまでがめついてませんから」
そう言いながら、女は頬を膨らませながら横を向いた。そんな仕種に、俺はドキリとさせられた。一瞬だが、沙弥佳とダブって見えたのだ。

俺は目をこすって、彼女を見た。

（一体俺は何を考えていたんだ）

きっと、沙弥佳も変に意地を張ったり図星をさされた時なんかに、良く頬を膨らませていたのを思い出したからだろう。昨晩の、あの幼い兄妹に、俺と沙弥佳を重ねて見てしまったからだろうか。

……馬鹿馬鹿しい。ただの錯覚に決まっているのだ。「……どうしたの？」

「ん？　ああ、いや……ちょいと懐かしいことを思い出したんでな」

そう言って俺は、女とのピロートークもそこそこにベッドを出た。さすがに互いの粘液にまみれたままでは気分も良くない。

それに一仕事終えたままで女と会ったため、血や硝煙の臭いが染み付いたままなので、シャワーを浴びることにしたのだ。女はそんな俺を嫌な顔ひとつせず、抱き着いてきたが。

とはいえ服を脱げば、血や硝煙の臭いなど、ほとんど気にはならなくなるはずではある。

シャワーを浴び終えて部屋に戻ってくると、扇情的に脚を投げ出したまま、女はすでに眠りに落ちていた。その姿に再び情欲をかきたてられたが、それをこらえてシーツをかけてやった。

俺は女の部屋のサイドボードにあるブランデーを取り、グラスに注いだ。そのブランデーを、グッと一息に流し込む。焼けるような熱さとぶどう特有の薫りを喉に感じながら、軽いため息をつく。

一気に呑むと、これをやらずにはいられない。しかし、それもまた強い酒の楽しみでもある。

もう一杯だけグラスに注いで、俺はベッドに戻った。壁にかかった時計を見ると、すでに午前五時を過ぎている。

「勝利の美酒、か」

一人ごちながら、一口酒をなめた。ほのかな甘味と口中に広がる薫りを楽しむ。片手にグラス、片手で横で寝る女の髪をすいて、昨晩のことを思い返した。

猛スピードで走っているためか、ガタゴトとトラックの荷台にいる俺達は揺らされていた。
子供達はいきなりトラックに乗せられたことで、一度は緩みかけていた安堵の表情を、再び強張らせている。
「そう怖がる必要はない。俺達は君達を殺したり、売りさばこうってわけじゃぁないからな」
日本語が通じているのかは別として、子供達に声をかけた。無言で見つめる子供達に、俺は立ち上がって肩をすくめ、運転席の方へと移動した。
運転席から荷台を覗けるように設けられた小窓を、軽く叩く。
「本当に助かったぜ、田神」
「なに、気にするな。実は、以前からあの鳳凰館には目をつけていてね。俺が雇ったスパイを潜り込ませていたのさ」
窓を開けて田神に礼を言うと、そんな返答があった。
「スパイだって？」
「ああ。本来なら自分でやるところだったんだが、どうにもできない理由ってのがあったんでね。それでそいつを雇って、監視させていたんだ」
「そうだったのか。……あんたが雇ったというのは、もしかして初老の爺さんか」
「その通りだ。よく分かったな」
「消去法ってやつさ。手当たり次第連中を地獄に叩き落としてやったが、あの執事の爺さんだけはやった覚えがないんでね」
しかし、これで謎は解ける。思えば、あの門番だった奴を縛っておいたのに、それを切って解いた奴がいた。スパイが潜入したのではなく、始めから潜入していたというわけだ。一応は仲間の形をとっていたから、助けたといったところだろうか。
「それで、あんたがあそこを目につけていたってのは、伊達のこと

か」

「そうだ。奴にはかなり黒い噂があってね。俺自身の目的のために、少なかれ絡んできたんだ。だから奴を調べあげる必要があった」

「そうだったのか。ま、それはそうと、あんたは嫌がるかもしれないが、俺もそいつに便乗させてもらうとしようか。奴には、是非とも聞かなくてはならないことがあるんでね」

それに田神は無言だった。

なぜか田神はやたらと、自分の仕事に人が介入するのを嫌がる。それが始めから組んで行う仕事であれば文句はないようだが、大抵の場合、それを良しとしない。どんなことであれ、自分の仕事に他人を巻き込むことが嫌なのだという。

だから、きっと俺がそれに関わるというのを、嫌がっているのだ。

「……安心しなよ。もし奴があんたの獲物だと言うなら横取りはしないさ。

俺としては、妹のためにも放っておくわけにはいかないだけなんだ。もしかしたら、奴がそいつに関わったかもしれない可能性があるんだよ」

「……分かった」

間をおいて、田神は了承した。小窓からは田神の顔は見えないので、どんな顔をしているのか分からないが、きっと無表情な顔をしているんだろう。

「で、これからどうする？　あんたがこいつで突っ込んできてくれたおかげで、脱出は楽だったが、子供達はどうするつもりなんだ？」

「おいおい、まさかその辺を考えなしに連れ出してきたのか、九鬼」

「そのまさか、さ。かなり感情的になってたんだろうな……。だが、見捨てるわけにもいかなかったのも事実でね。それにな、予定としてはなんとかなると思っていたのさ、屋敷の外に出てしまえばってな。

ところが、警官達に囲まれてるだなんて、思いもよらなかったことなんだ。まぁ、それが、あんたの雇った奴の仕業なのか、はたま

た、連中の仕業だったのかは分からんが」
「……実を言うと、鳳凰館のすぐ近くに待機していたんだ。というのも、今夜今までデータにない奴が来るという情報が入ってね。
それに、最近は警察の動きが慌ただしい。だから、警官が送り込まれたんじゃないかと言われたんだが、さっきのこともあって、スパイからその人物の特徴を聞いたら君の特徴と一致するだろう？それで、逐一突入する機会を窺っていたというわけさ」
「なるほどな。……しかし、この俺が警官と間違われるだなんてな。まぁ、もし本当に警官であれば、大切な資料や証拠品が奪われてしまうからな。ということは、このトラックは偶然ということか」
「いや、このトラックは間違いなく子供達の搬送用だ。彼の情報から、子供らは助けてやるべきだと思っていたんでね」
「だとすると、行くあてがあるのか？」
俺の位置からは見にくく、分かりにくかったが俺の問いに、田神は黙って頷いたようだった。
「なら、そこらはあんたに任すとするよ。実を言うと、まだ野暮用があるんでな。だが、子供らをどこに連れて行くのかは聞いておこう」
「知り合いに、身寄りのない子供を受け入れている児童施設をやっている人物がいる。その彼らのところに預けるつもりだ。
……もちろん、児童施設を隠れみのにしているってわけでもない。そこらへんは安心していい」
俺の雰囲気を悟ってか、田神は付け加えるようにそう言った。相変わらず、変なところで勘の鋭いやつだ。
「分かった。それじゃぁ、適当なところで降ろしてくれ」
「ああ」
それから程なくして、田神は俺をトラックから降ろすべく、トラックを停止させたのだった。

何台もの車が行き来し、それに紛れて遠くで電車の音が聞こえる。そんな都会の喧騒を目覚ましがわりに、俺は目を覚ました。

いつもとは違う目覚めに、俺は意識を一瞬で覚醒させる。目だけで部屋の様子を見た。

（そうか。ここは女の……）

そうだった。昨晩は田神たちと別れ、日付が変わろうかという頃に女に連絡し、部屋を訪れたのだった。

女はレイミと名乗った。本名かどうかは知らないが、そう名乗ったのだからそうなんだろう。部屋に着くやいなや、レイミは俺を求めてきた。そんな女に、俺も応えないわけにはいかない。

なだれ込むように部屋に入った俺達は、すぐさま行為に突入した。こうなった時、男女のあいだに言葉などいらない。本能の赴くままに互いを求め合うだけだ。

人は良く、セックスに愛だなんだと口にするが、この情欲を前にする時、それだってくだらないものになる。セックスするのに、愛とやらで互いを結びつけるなど、あってはならないことだろう。

女からしてみれば、そんなことは口実にすぎない。もっと純粋に男を求めたっていいはずだ。男はそうなのに、女がダメなどと誰が決めつけたのだ。

同時に、男はもっと寛容になるべきだろう。情欲にまみれた女を、ゴミでも見るかのような目で見る。処女信仰なんか、それを最も表していると思う。

確かに処女が良いとは思うが、そんなことなど別にどうでもいいことだ。処女だとかそうじゃないだとかにこだわる奴ほど中身を見れず、外面だけを見ている証拠だ。

全く、くだらない話だ。それでいながら、形はどうあれ、女を蹂躙し、支配したいと思っているのだから。事実、自身の恋人が過去

にレイプされたと知るやいなや、手の平を返したようになる男がざらにいるではないか。

そんなことを考えていると、部屋の奥からレイミと名乗った女が出てきた。営業用の濃い化粧を落とし、素顔に戻った女は、とても愛らしい顔をしていた。

それとともに、娘がまだ二十歳も過ぎていないというのも分かった。多分十七か十八といったところだろう。女というよりも、少女と言っていい。

その少女は、デニムのパンツにクリーム色をしたニットのセーターという普段着に戻っていて、その手にはコーヒーの入ったカップを持っている。

「あら、起きた?」

「ああ。すまないが俺にもそいつをくれないか」

「わかった」

短くいって、レイミは踵を返して再び奥へと消える。それを見送り壁の時計を見ると、時刻は十一時になろうというところで、六時間かそこら寝ていたようだ。

ほどなくして、新たにカップをもって俺の前まで持ってきてくれた。

「砂糖は入れてないから。その代わりミルクたっぷりよ」

俺は頷きながら短く礼を告げて、コーヒーをすすった。カップから口をはなし、小さく息をつく。

美味い。こんなに俺の口に合うコーヒーを飲むのは、随分久しぶりだ。思えば朝に、落ち着いて美味いコーヒーを飲むなんて、一体どれくらいぶりだろう。もしかしすると、沙弥佳と暮らしていた時が最後ではなかったか。そんな気がする。

一時は、沙弥佳とすごした日々を思い出すのがつらくて、その頃とはまるで考えもつかないような、退廃的な生活をしていたことがある。今もそう大差ないと言えば大差ないが。

その時期に、朝にコーヒーを飲むなんて習慣がなくなり、歳を重

ねるにつれ、起きぬけの一杯がビールになり、それがウイスキーへと変化していった。そしてそんな朝も、いつしか朝すらもまともに起きなくなっていったのだった。

起きるのは、仕事がない限り午後の二時か三時で、寝起きにはまずウイスキー……少なくともここ一年以上は、そんな生活を送っていた。

「どうかしたの？」

レイミがきょとんとした顔で聞いてきた。

「いや、ちょいと昔を思い出しただけだ。久しぶりに、美味いコーヒーを飲んだということもあるかもしれない」

「おいしいでしょう、これ。モカっていうの。結構高いんだから」

そうなのかと相槌をうちながら、またコーヒーをすする。確か、モカは沙弥佳もよく飲んでいなかっただろうか。

「それに、ちゃんと豆から挽いてるんだから」

そう言いながら、レイミは少し誇らしげに笑う。そのえくぼが、彼女にはよく似合っていた。

コーヒーを飲んで、まだ裸のままだった俺は服を着た。このまま今日一日くらいは、のんびりと過ごしたい気持ちになるが、そういうわけにもいかない。今晩は田神とともに、伊達聡一郎の家に乗り込むつもりなのだ。

人身売買の記録を見つけることができれば、沙弥佳との接点に繋がるかもしれないのだ。もちろん、沙弥佳が身売りされたかは分からない。だが、万に一つでも可能性があるかもしれないのなら、やはり調べておくべきだろう。

なにより、伊達はあの子供達への約束もある。そんな奴を、みすみす見逃すはずもない。それに、ガスからも情報を買わなければならないので、悠長にもしていられない。

「仕事のことでも考えてるの？」

「ん？　ああ、まぁな」

レイミは少し考えるように、言葉にした。
「そう……。ねぇ、さっきあなたが眠っている時に見たけど、ジャケットの下にあったのって……」
「ああ、あれか。本物だ」
「やっぱり……。あなたってどんな仕事してるの？」
「何してるように見える？」
「やっぱり無難に、ヤクザか何か、かな？」
レイミの答えに、思わず笑った。けれど、それが当たり前と言えば当たり前かもしれない。
「なるほど、ヤクザか。もしそうであれば、まだ楽だっただろうな」
笑いながら言う俺に、レイミは少し拗ねたように聞き返してきた。
「何よ、そこまで笑わなくったって良いじゃない」
「ああ、そうだな、すまん」
それでもまだ笑う俺に、彼女はそれでなんなの、と聞いてきた。
「……もし、殺し屋だといって、君は信じるか？」
「え？　んー……どうかなぁ。でも、あなたがそう言うならそう、なのかな？」
「こいつはまた、やけに他人本意な答えだ」
軽く肩をすくめながらいった。
「でも……もし、あなたが殺し屋だって言うんなら、私からも依頼しちゃおっかな……」
レイミはどこか、ものうげな表情になってつぶやいた。
「何かあるのか？」
「あ……ごめん。今の冗談だから、本気にしないでよね、私の殺し屋さん」
重くなりそうな雰囲気を吹き飛ばすかのように、軽い口ぶりで言った少女に、俺はなんとも言えないものを感じ取った。
「レイミ」
そう言って俺は立ち上がり、彼女を抱き寄せた。少し驚くような顔をしたレイミに、キスをする。

手に持たれたカップを脇のテーブルに置き、俺達はそのままの体勢でベッドに倒れ込む。互いの舌を、軟体動物かのように絡め合いながら、レイミのデニムパンツのボタンを外した。
「はぁっ……もうっ、またするの？」
「嫌か？」
唇をはなし問い掛けてきたレイミに、問い返した。
「もう。今回は有料なんだから」
拗ねたような口調だが、顔はすでに上気しはじめている。俺はニヤリと笑い、それに口づけで応えたのだった。

午後十六時半もすぎ、学校帰りの学生や営業を終えてオフィスに戻ろうとしているサラリーマンで多い電車に、俺は揺られていた。学生服を着た学生達の会話によれば、明日から春休みなのだという。全く、羨ましい限りだ。
サラリーマン達も幾人かがノートパソコンを広げ、何やら操作している。そんな中俺は何が悲しいのか、警視庁に向かっていた。
レイミとの行為の後で、聞き慣れない携帯の着信が聞こえてきたのだ。最初はレイミの携帯かと思ったが、どうも違うらしい。そこで俺は、自分の携帯がなくなったので、仕方なしに最上の親父の携帯を借りてきていたのを思い出した。
だがその携帯は、音を鳴らしてはおらず怪訝に思ったところ、刑事かと思われる女のものを拾っていたのを思い出したのだ。その携帯に違いないと、俺はジャケットからその携帯を取り出したことで、なお大きく鳴るように聞こえる電話に出た。
「もしもし？」
『あ、あの、その携帯なんですが』
「あんた、昨日の女刑事さんか」
『えっと……』

「声で分からないか？　昨日、俺の横で盛大にこけたろう。あんたに手を差し延べたのを覚えてないか？」
『あ！　そ、その節は本当にありがとうございました。その時に携帯落としていたんですね……』
「ああ。昨日は色々と野暮用があったんでね、拾っていたのをすっかり忘れてたよ。こちらこそ、すまなかったな」
『いえ！　そもそも、落とした私が悪いので！』
「そうか。それでこいつは、どうすればいい？　今、あんたどこにいる？」
『えと、それなら……』
そんな会話がなされた後、仕方なく俺は、警視庁なんぞに向かっているというわけだ。
電車内のアナウンスで、警視庁の最寄り駅に着いたことが知らされる。
しかし、あろうことか、殺し屋という職に就いている俺が、まさか警察の本拠地に行くことになるなんて思いもよらなかった。ましてやここ数日のあいだ、政治屋どもの暗殺で随分と殺気だっていそうなこの時期にだ。
別に連中が怖いわけはないが、邪魔にならないとは言い切れない。それを考慮すれば、あまり喜ばしいこととは言えないだろう。
かといって、どうすればいいなどと聞いてしまった手前、びくつくのもおかしな話だ。まぁ、せいぜい二度とお目にかからないよう、祈るまでだ。

警視庁に着くと、その庁舎の前に昨日の女刑事が立っていた。向こうもこちらに気付いたようで、小走りでこっちにやってきた。
「ほら、これだろ」
「はい、これです。本当にすみません……昨日はとても急いでいたので」
「別にいいさ。きっとこいつも何かの縁なのかもな。それよりこの

ご時世、携帯なしなんて不便だったろう？」
「はい。今朝気付いてちょっと慌ててしまったので……それで、その、中身見ましたか？」
「いいや、見ちゃないさ。それくらいは弁えてるつもりだ」
本当は、一度だけ開けてみたのだが、わざわざ言う必要もないだろう。
「そ、それで、あ、あの、もしよろしければ……」
女は小声で何かを言おうとしているが、それを察した俺は、女の言葉を遮るようにいった。「さて、それじゃぁ俺は行くぜ。今度からは気をつけなよ」
「え？　あ、ま、待って」
「すまないが、俺はこれから仕事なんでね」
「あ、そ、そう、ですか……」
「ああ。じゃぁな」
嘘ではない。田神との約束の時間を考えれば、今からサバカ・コシュカに行くべきだ。おそらく、ガスのやつが何か仕入れているはずだからだ。それに今から一旦寝座に戻って、金を補充しておかなくてはならない。ガスの情報料は高いのだ。
まだ何か言いたげな女刑事に背を向け、再び駅へと戻っていく。きっと礼でも、とでも言うつもりだったんだろうが、俺としては、とてもではないが警察の人間とよろしくしたいと思わない。
もし美人が相手ならまだ考える余地は少なからずはあったかもしれない。だがたとえそうだとしても、さすがにこちらにデメリットがありすぎる。女の情念というのを、俺は侮るつもりはない。つい最近、それがあったばかりなのだ。
それになぜかは分からないが、あの女には関わるなと本能が告げているのだ。基本的に本能に忠実な俺だから、それに従うが、その反面、なんであんな女に、という疑問が沸き起こったのも事実だった。
そんな風に感じた本能に、もしや錆び付いたのか、という可能性

も考えたがそれはないだろう。“人間は外見だけで判断してはならない”それは、俺がこの世界で生きていく上で、したたかに学んだことだ。

だから、あの女もきっと何かあるに違いない、俺はそう決めたのだ。犯罪者と法の番人。相いれるわけがない。仮に互いに惚れ合ったとして、きっとこんな世界から足を洗えというに決まっている。誰も好き好んで、殺し屋なんかと一緒にはなりたくないはずだ。

それに、俺がこの世界に入った目的が達成されないままでは、たとえ足を洗ってほしいと言われても、そいつは無理な相談だ。

そんなことをするくらいなら、そんな女とはさっさと別れるに限る。人の人生の目的を奪うのであれば、俺はどんな理由であれ、それを排除するつもりだ。そうでもなければ、俺は自身の歩んで来た道を、全て否定することになってしまう。

そうだ、再度思い出せ、俺がこんな血みどろの世界に身を投じた理由を。俺は妹を、沙弥佳を救うためなら、なんだってすると誓ったはずではないか。そして、それと同時に、沙弥佳を、そして俺達家族を崩壊させた連中には、その命で償わせると誓ったではないか。

最近、ただ漠然と殺しの世界でそれを行ってきただけに過ぎなかったように思う。

もう一度、俺は初心に戻るべきだと自分に何度も言い聞かせた。

寝座に戻った俺は、ベッドの下に隠してある金を一束とり、強引に財布に突っ込んだ。その足で急ぐようにアパートを出て、近くを通ったタクシーを捕まえ、サバカ・コシュカの近くでタクシーを乗り捨てる。

時刻はすでに午後十九時になろうとしている。サバカ・コシュカに着いて中に入ると、いつもは足の踏み場もないくらいに人がごった返しているはず店内は、珍しく八割くらいの入りだった。

「よう、親父」
「おお、お前か。ほれ、あそこでガスの野郎が待ってやがるぞ」
「そうか。今日は軽目にしておこう。ギネスをくれ」
「なんだ、スコッチ主義のお前が……天変地異の前触れか？」
「くっくっ。単純にこれから仕事があるだけさ。まぁ、スコッチ一杯くらいどうってことはないんだが、まぁ、たまにはな」
「そうか……こんなこと言っても気休めにもならないかも知れんが……死ぬなよ」
「ご忠告どうも。俺だって死にたかないさ」
「……。ほれ、ギネスだ」
出されたギネスを受け取りながら、金を出した。
「釣りはチップとして受け取っておいてくれ」
親父は肩をすくめただけで何も言わず、黙ってそれを受け取った。
「それじゃぁな」
そう言って俺はガスのところへ行く。さて、奴は一体どんなネタを仕入れてきたかな。
「よう、ガス」
「やあ、クキ。早速、仕入れてきたネタを聞きたいかい？」
「ああ、そのためにわざわざここに来たんだぜ？　聞かせてくれ」
「分かった。どっちから聞きたい？」
そう言ってガスは、俺に選ばせようとする。つまりは、両方とも調べることができたということか。
ついでにいうと、そうすることで小出しに小出しにしながら、料金を吊り上げようという作戦なのである。まぁ、それが情報屋という奴なのだから、仕方ないと言えば仕方ない。もちろん、あまりにこちらの足元を見ているようなら、一度痛い目を見てもらうことになるが。
「じゃぁ真田の方から聞くとしようか」
「分かった、真田からだな。まず、真田の死因だが……」
「待て。真田の死因は言わなくても大体分かる。脳天に一発だった

んだろう。奴が死ななくてはならなかった、それそのものの理由が知りたい」

こうやって情報屋というのは、無駄に話して料金を巻き上げようとするので、油断ならないのだ。

「そうか。……先週起こったN市のTビルにおける爆破事件の真相はどうだ?」

「Tビルで行われていたという、実験だか何かのことか」

「……その口ぶりだと、内容までは詳しくは知らないようだな」

「分かった。なら、まずそれを教えてもらおうか」

ガスはわずかに口元を歪ませて、得意げに話し出した。

「……それにはまず、真田が大学時代に何を学んでいたかも話そうか。奴は今でこそ、いや、もう死んでいるから関係ないか。

もうあんたも知っているかも知れないが、奴は昔はかなりのドラ息子で、両親の金を盾にやりたい放題だったんだが、何を思ったのか経済学には進まず、なんでか量子力学なんてのを専攻していたんだそうだ」

「量子力学だと?」

少しばかり驚いた。N市で林という情報屋から買い入れた話で、てっきり先入観があったのだが経済学だとか、政治学あたりを専攻しているものとばかり思っていた。

口ぶりから察するに、ガスもそう思っていたようだ。しかもアマながらも真田は、量子学のレポートを今だに発表していたのだと言う。

大物政治家による論文というのであれば、少しは注目されてもおかしくない話だが、全く聞いたことはない。

「もう十日くらい前になるが、N市で起こったTビルの火災事件を覚えているな? あそこでは、真田の発表した論文を研究するための施設があったらしい。うさん臭いとも思ったが、調べていくうちにどうも本当であることが分かったよ」

そうか……だから、真紀はそのデータを盗み、あそこを爆発させたわけか。

「で、一体どんな実験をしていたんだ？」
俺は当然の疑問を口にしたつもりだが、ガスは渋い顔になり、いうのを少しためらっているかのようだった。
「どうした？　早く聞かせてくれ」
「ああ……その話を知った時は、なんとも酔狂な奴だと思ったよ。真田は、世界と世界をつなげるという実験を繰り返していたらしい」
「世界と世界をつなげる……？」
「ああ。俺はさほど学があるわけではないから、よくは分からない。要約すれば、違う世界と違う世界を繋ぐ、ということらしい」
俺はガスの言葉に唖然とした。違う世界同士を繋げるだと？　確かに酔狂な話だ。そんなことが可能だというのか。
確か量子の世界では、全く異なる時間軸を持った世界があるというのは聞いたことがある。平行世界とかいう奴だ。
ガスがそんな俺に頷きながら話を続ける。
「だが、それがうまくいっていたというわけでもないらしい。当然と言えば当然だが。
問題は、真田はその実験の成果を完全に独占していたということだ。奴は自身が所属している組織に報告しなければならないという義務があったようで、それを長いこと無視していたようだ」
「……その組織とやらは、まさか秘密結社か何かか」
「よく分かったな、その通りだ。だが残念ながら、それは調べようにも高度なブロックがされていて、調べられなかったよ。
一つだけ言えるのは、鳥をシンボルにしたマークがあったことくらいだ」
「鳥だと……？　おい、それはもしかしてこんな感じのマークじゃぁなかったか？」
ガスの話にピンときた俺は、ジャケットの中から昨日潜入した鳳凰館の会員証を出してみせた。
「ああ、少し違うが、これに割りと似ていたな」
ガスは、そうカードをしげしげと見ながら言った。しかし、こい

つはきな臭くなってきた。
真田が結社にいたというのは、以前ガスに紹介してもらった林も言っていた。だが、それが鳳凰館と同じ、鳳凰のマークを使っているとなると、さすがに疑わしく思えるのは必然だろう。もしかしたら、今夜乗り込むことになっている伊達と真田は、繋がりがあったのかもしれない。
思えば、確かに林もその連中を裏切ったから殺されたんではないかと言っていたのが思い出される。おまけに、その結社連中のことは、ブロックされて調べがつかないときた。
まぁ、その辺りは伊達を締め上げついでに聞くとしよう。
「真田に関してはこんなところだ。さて、お次は武田と名乗る人物のことだが、この人物、どうも武田という名前自体が偽名らしい。本名は分からずじまいだったが、まあ、その辺はいいだろう。とにかく、とても奇妙な人物であることには変わりない」
「どんな風に奇妙なんだ？」
俺の問いかけに、ガスは頷く。
「どうにもな、経歴らしい経歴が一切出てこないんだ。おまけに年齢不詳だしね。そこで、こいつを見てほしい」
ガスはポケットから、プリントアウトされた一枚の写真を出した。
「まさか、こいつが武田なのか？」
ガスはそれにも再度首を縦に振り、口を開いた。
「ああ。これは、湾岸戦争の時に撮られた写真だ。そしてもう一枚」
そういって、新たにさし出された一枚の写真。そこには、やはり湾岸戦争時代に撮られたというものと同じ顔が写っていた。
鋭そうな目に、やや掘りが深目の鼻筋は、日本人のようにも、どことなくラテン系のようにも見える顔立ちをしている。男の俺から見ても、なかなかにととのった顔だ。
所謂、日本の若い女が好きそうな、中性的ではかなさをもったような美男子ではなく、絵に描いたような、男の理想をいくようなタイプの美男子だ。

一枚目の写真は戦争時というのもあり、髭を蓄えていて、なんとなくチェ・ゲバラのようにも見えなくもない。
「二枚目の写真がどうかしたのか？」
「二枚目の写真は、つい最近撮られたものなんだ」
「なに？」
つい最近だと？　どう見たって、二枚目とも同時期に撮られたものにしか見えない。髭があるかないかの差はあれど、とてもじゃないが、二十年も経っているようには見えない。
確かに、十年前とほとんど変わらずいる人間もいなくはないが、それでも、ここまで全く年齢を感じさせない人間がいるだろうか。はっきり言って、俄かに信じがたい。
髭ありの一枚目と、最近撮られたという二枚目の撮られた時期が反対であれば、まだ納得もいくものだ。
「あんたも信じられないようだな。もちろん、俺が嘘を言っているわけではないのは、分かってくれると思う」
俺は二枚の写真を見比べながら、ただ頷くばかりだった。
「一枚目の写真は、外人部隊で小隊を率いていた時のものだ。だが、そんな経歴があるにも関わらず、出生や出身がどこかなんてものが、一切分からなかったんだ。なんとも奇妙な話だろう」
「確かに……だが、データベースなんかなら、こいつのことが少しは分かるんじゃぁないのか？」
「残念ながら、そのデータベースにすらカスリもしなかったよ。写真と照らし合わせてみたにもかかわらずね。当然、今どこにいるかなんてのは、以っての外だ。
だが、断片的にだが、いくつか分かったことはある。この武田という男は、政財界に顔が利くということ。二枚目の写真はそれこそ、さっきの真田が生前行うはずだった、幹部会とやらに出席しているところのものだ。
もしかしたら、真田の死にも何かしら関わった可能性もあるな」
真田が殺された日、真田はＮ市で開かれるという幹部会に出るは

ずだったという話は確かに聞いた。この男が同じ日にN市にいたとなると、やはりかなり黒い人物ということになる。

「また、いくつかの宗教団体や学者との繋がりもあるようだな。政財界においてもそうだが、国内外関係なしに、世界中に何かしらコネクションをもっているらしい、ということまでしか、分からなかった」

「そうか……」

ガスは間違いなく一流の情報屋だ。そんな奴ですら分からなかったとなると、後は誰に頼んでも結果は変わらないだろう。

「それと、もう一人の女の方もだったな。マリアと呼ばれているらしいが、この人物な経歴も謎だな。三、四年くらい前から突如、武田の周りにいるようになったらしい。顔写真を撮れるほど表だった行動はしていない。

また、武田と縁のあると思われる人間にも当たってはみたんだが、みな一様にそんな女は見たことがないとのことだ。あんたの言っていた集団筋にかなり近い人間に聞いたにも関わらず、だ。

おまけにそれ以上探れば、命の保障はないとまで言われては、俺にはもうどうしようもないよ」

「要するに、何も分からなかったということか」

俺は無意識に低い声を出していた。ガスは思わずびくつき、取り繕おうとあれこれ言い訳していたが、俺の耳には一切入ってこなかった。ギネスを一気に飲み干し、テーブルに叩きつけた。何か言っていたガスは、喋るのをやめて沈黙する。

「とりあえず、この写真はもらっていくぜ」

そう言って、二枚の写真をポケットにしまいこんだ。

「あ、ああ、別に構わない……それで」

急に俺の態度が変わったのに怖じけづいたのか、下手に出ているガスに、財布から一万円札を二枚ばかし取って握らせた。

「今回の報酬はこれだけだ。俺の知りたいことの半分しか分からなかったんだからな」

「あ、ああ、そうだな。仕方ない、仕方ないさ……」

俺は、本当に知りたかったはずのマリアとかいう女の情報が何も得られなかったことに、苛立ちを感じながら席を立った。ガスが悪いわけでもないのだが、こうもこっちの思い通りにいかないとなると、さすがに腹立たしい気持ちになるのは当然だ。

とにかく、今から田神と合流しなければならない。いつまでも、呑んだくれているわけにはいかない。伊達聡一郎が真田や武田という二人の人物に、何かしら関わっている可能性が出てきた今、こっちを締め上げる方が、確実に知りたいことにありつけそうだ。

そう思案しながら、俺は呑んだくれ共の間をすりぬけるようにして店を出た。

第３２章

車の中には田神とエリナ、そして俺の三人がいた。なんで女がいるんだと田神に聞いたところ、着いてくると聞かなかったのだという。やつも随分とエリナの尻に敷かれているようだ。

「家に、伊達はいるだろうか」

ふと、そんな疑問を口にした。

「今はいないはずだ。伊達は毎週、この時間に必ず家を出ている。多少誤差はあるが、後二時間ほどで帰宅するはずだ」

相変わらずの情報収集能力だ。俺ならその場その場で特攻をかけるタイプなので、最低限のことしか調べずに、乗り込んでいただろう。

「何をしてるんだろう」

「商談、だそうだよ」

「商談……」

十中八九、人身売買の件だろう。奴の商売がわれた今、スポンサーや何かに平謝りにでも行っているのかと邪推してしまう。

その原因を作ったのはこの俺なわけだが、ざまあみろという気持ち以外、何も思わない。それどころか、これでもまだまだ足りないくらいだ。

奴にはもっともっと苦しんでもらわないといけない。そのため田神には、殺すのであれば子供たちのためにも、なるべく苦しませてから死なせるよう、釘を刺してある。

田神は苦笑しながら、善処しようとだけ告げたのが、つい十分ほど前のことだ。

「ところで、あんたに話しておきたいことがあるんだが、少し聞いてくれ」

俺は先ほどガスから仕入れたネタを、田神に話すことにした。とにかく小難しいことは、田神に話すに限る。

田神は車を運転しながら、俺の話に耳を傾けてくれた。助手席に座るエリナも、珍しく黙っている。
「つまり、空間歪曲などが本当にありうるか、ということだな」
「ああ。話くらいは俺も知っているが、それが本当にできるのか、となると話は別だぜ。
それどころか場合によっちゃぁ、一国のトップにだってなりうる可能性のあった奴が、本気でそんなことを考え、実験までしていたなんて、俄かに信じがたいんだ」
「……理論上は確かに可能だ。だが、それを行うには、あまりに危険すぎるのは間違いない。普通なら、それに立ち会うのだって危険だろうな」
「だが俺達は、それを行ったかもしれない場所に立ち入っている。エリナも含めてな」
田神がそれに頷く。
「まだあるぜ。そうなると俺やあんた、それに真紀が組織の命令であそこに行かされた理由には納得はいくんだ。
だが、となるとだ。こいつは、いよいよそうなんだという、現実味を帯びてくるということになる。それと同時に、うちの組織も何かしらそういったことを知っていたんじゃぁないかってことだ。
それに実験自体も、実はある程度は成功ないしは、それに近いところまでいっていたんじゃぁないか、そう考えてしまいたくもなるぜ。
だってそうだろう？　そうでもないと、俺達みたいな人間がわざわざあんなところに派遣されることなんて、まずないはずだ」
田神に向かって、俺の考えを一気にまくし立てた。やつは無言で俺の話を聞いている。
「今も言った通り、空間歪曲というのは確かに理論的には可能なんだ。あくまで理論上ではあるが、理論が可能ということは、決して間違っているわけではない、ということだ。
俺は、真田の実験は色々と危険が孕んでいるのも間違いはないが、

それを補強していけば、可能のような気はするよ」
「こんな突拍子もない話を、あんたは信じるっていうのか？」
「……現実にそれを見たわけではないからまだなんとも言えないが、一九八〇年代にアメリカでもやはり量子力学などを取り入れた実験が、すでに行われているんだよ。
結果は言わずもながらだが、これらの実験が、さらにこれらの学問に飛躍的に、そして新しく定義を投げかけるようになり、発展させる結果になったという事実はある」
「現時点では不可能でも、いずれは可能になるかもしれない……そういうことなのか？」
「ないとは言えない。物事に絶対というのは、ほとんどと言ってないからな」
「そいつはそうだが……」
それでも俺には、いまひとつ納得いかなかった。
量子力学は、科学の世界にこの上ないほど、劇的な新しい考えをもたらした学問だ。それを否定するつもりはない。田神の言うように、かつてアメリカなんかで、それにまつわるような実験があったというのなら、それも間違いない事実なのだろう。だとしても、やはり鵜呑みできないというものだ。
それに、もし量子力学で求められたものが現実のものになったとしよう。人間にはさぞかしバラ色の世界になるかもしれない。
所謂、パラレルワールドとかいう世界を体験できるわけなのだから、知的好奇心が疼かないといえば嘘になる。
だが、それは非常に危険なことであるとされている。平行世界においての自分と、出会ってしまうかもしれないというやつだ。
そんなことをしたら、互いの世界がとんでもないことになるのではないか、と言われているらしい。全く違う世界の自分と出会うのは、世界に時間軸に多大な影響を与えるとかで、よくタイムスリップする話なんかで描かれている未来の自分と過去の自分が出会うのが危険だというのは、これが起きてしまうからだと聞いた。

それに、別の世界同士を繋げるということは、すなわち空間そのものを捩曲げるということに外ならない。そんなことが可能であれば、それこそ歴史そのものが変わってしまうだろう。

空間を捩曲げ、場合によっては向こうの世界を侵略することも可能なのだ。もちろんその逆も然りだが。

だがこれらの理論というのは、あくまで理論であって、現実的ではないというのが学者たちの総意でもあったはずだ。

しかし田神のいうように、これから未来のある時点で、それが可能にならないとも限らない。ほんの百数十年前の人間だって、まさか人類が鉄の塊で世界の空を縦横無尽に飛び回るなど、誰が予想しえただろうか。

現代の人類が世界の空を飛び回っているということを、その時代の人々に言っても、決して信じてはもらえないだろう。いや現在ですら、六十年代のコンピュータよりも、今や小学生や中学生だって使うことのできる、家庭のパソコンの方が遥かに、想像もつかないほどに高性能なのだ。

現在からすれば、そんなポンコツと言っても差し支えない時代のコンピュータによって、人類は鉄と金属の塊を、宇宙にまで飛ばして見せたのだ。

もちろん、これらにだって元よりちゃんとした科学的な理論が何十年以上も前からあって、それらを実践し、幾度となく実験とを繰り返して応用することでなしえたことなのだ。

そう考えれば理論があるのだから、空間を捩曲げたり、タイムワープなんていうのも、決しておかしな話ではないのかもしれないが……。そうは言い聞かせようにも、やはり無理な話ではないのかという思いが先立ってしまう。それを成功しえた者は、間違いなく、その名を歴史に刻むことだろう。

そして応用次第では、世界中の航空産業は軒並み衰退していくことだろう。誰だって、大洋や大陸を横断するのに何十時間もかけるより、空間を捩曲げて瞬時に移動したほうがはるかに時間の短縮に

なるのだ。
いや、時間という概念すらも必要なくなる。誰もがあの時こうしておけば……という思いは持っているものだ。それを正すことも可能だろう。いや、正してはならないのか……もう、俺には理解不能だ。
だが最後に一つ。核兵器なんかよりも、はるかに厄介なものにすらなりうることだってあるということも、間違いないだろう。世界に絶望した誰かが、歴史を変えてしまうかもしれない……そんな危険があるわけだ。
まぁいい。これ以上は、専門家でもない俺には、考えるだけ無駄なことだろう。その専門家達すら、デリケートに扱うべき理論なのだから。
「いまいち納得のいかないという顔だな」
「……ああ。どうにも、現代科学でそこまでのことができるのか、という疑問があってね」
「ま、君の言い分も分からなくはないが、今いったように、絶対とは言い切れない。それだけを心に留めておきさえすれば、いいんじゃないかな」
田神は笑うように言った。そんな俺は、ただ黙って肩をすくめただけだった。

伊達の家の前に来たとき、一旦そのまま通りすぎ、少し離れたところに車を停めた。さすがに家のど真ん前に、車を停めるわけにはいかない。
奴の家に乗り込むのは当初の予定通り、田神と俺だ。エリナは渋ったが、何かあった時のために、車を運転してもらうことにした。その方が、逃げる際にもスムーズにいって楽だ。
エリナは田神に気をつけてね、と心底心配そうに送り出した。全

く、一体どうやってこのじゃじゃ馬を乗りこなしたのか、田神は、本当に不思議なやつだ。

予定では、後一時間足らずで伊達は家に帰ってくるという。死神が待っているのも知らず、呑気にしている奴の姿を思い浮かばせると、ついつい冷酷な笑みを浮かべてしまう。俺は奴を許すつもりはないのだ。

「さて、どうやって中に入る？　今時の金持ちが、セキュリティ対策を何もしていないというのは、いささか考えにくいぜ」

「大丈夫だ。奴の家に入るにはパスが必要だが、それはきちんと用意してある」

さすが、用意周到なやつだ。多分俺なら、そんなことなど思いもせずに、いざという時になって、四苦八苦しただろう。

敷地内に入ろうとした時、不審者が入ってきたのを知らせるライトが点灯した。だが、俺も田神もそんなことは気にせず、塀をよじ登って敷地に入った。どうせ奴は今、この家の中にはいないのだ。

庭は金持ちらしく、ご丁寧にも白い砂利がきっちりと敷き詰められている。このことからも、あの鳳凰館のデザインは、伊達の趣味であることが窺えるというものだ。

玄関に来るとその脇に、暗証番号ないしは、カードキーによって開錠されるようになっている類のものがついていた。

田神は躊躇せず、八桁の暗証番号を入力していく。聞けばハッキングして情報を盗み出したらしいが、今の世の中、パソコンとネットが繋がっていさえすれば、本当になんでも情報として知ることができるのだなと思った。

「よし、開いたぞ」

田神の言葉を待たずして、俺はすでにドアに手をやっていた。しかし、ドアを開けたとたんに玄関にライトが点いたため、はばからず警戒してしまった。

「……伊達の奴は、独身なんだよな？」

「ああ。このライトも入口にあったものと同じで、熱を持って動くものに反応してライトが点くようになっているんだろう」
「なるほどな。今時、ちょっとくらい金をかければ、そんなことくらいすぐにできるみたいだな」
田神は黙ったまま、苦笑した。
「ともかくだ。奴が帰宅するまで後一時間もない。手早く探すとしよう」
「ああ」
俺は田神に向かって、力強く頷いてみせた。
やはり一番に探すべきは、伊達の書斎だろう。ここ以上に、仕事上の大切なものをしまうのにふさわしい場所はない。
それにしても独り身だというのに、無駄に広い家だ。一部屋は少なく見積もっても五、六坪はあるだろうか。そんな部屋が一階だけで、四つも五つもあるのだ。おまけに、二階もあるわけだから、俺からしてみると、もはや豪邸と言って差し支えないほどだ。
けれど、俺ならこんな家に一人で住みたいなどと思わない。確かに部屋は広い方がいいに越したことはないにしても、やはり、ほどほどにというのを忘れてはいけないと考えている。
「書斎を探したほうがいいな。二階か？」
「ああ。こっちだ」
まるで家主かのように、この家の構造を知っているようだ。だが、おかげでこちらとしても、それだけでも楽になる。
靴は脱がず、そのままあがった。こんな時にまでわざわざ靴を脱ぐなどありえない。それに幸い、下はフローリングになっているおかげで、足跡のつく心配もなさそうだ。こちらの靴底も乾き切っているし、目に見えるような汚れらしい汚れもついていない。
そんな俺達は田神を先頭に、二階の伊達の部屋へと行く。それにしても、本当に広い家だ。いつだったか、綾子ちゃんの家にお邪魔した時を思い出す。
しかし、この家はその彼女の家よりもさらに一回りは広いだろう。

独り身なのに、こんなに広い家に住む必要なんてあるのだろうか。
しかも田神の話によれば、家政婦を雇っているというわけでもないのに、異様なまでに整理整頓されているのを見ると、かなり神経質なやつという印象を受ける。
いや、ある面では俺と似ているかもしれない。というのも、あまり物が置かれていないという点だ。ただ俺の場合は、余分な物を極限まで削っていったに過ぎない。いつ死ぬかも分からない人間には、余分としか思えない物ばかりだったからだ。
「ここだ」
初めて来る場所だというのに、よくぞ言い当てることができるものだ。そんな考えが顔に出ていたのか、田神は微笑をたたえながら言った。
「単純だ。例のスパイに張り込ませただけさ」
田神がニヤリと笑う。全く、その手際の良さに、俺はほとほと感心してしまった。
部屋の中は、下の部屋同様に五、六坪ほどの広さがあり、部屋に入ってまず目に飛び込んできたのは、鳳凰館でも見た、どっしりとした黒い大きな机だ。触ってみると、表面はつるつるしており、何度も丁寧に漆が重ね塗られていることが分かった。
そして、部屋の両脇に大きな本棚が置かれていて、中には当然のようにビッシリと本が積まれている。中を覗いてみると、これはまた俺好みな本が何冊かあった。思わずそれらを手にとってみたくなるが、時間があるわけでもないので、ぐっと我慢した。
絨毯も群青色の高価そうなものが敷かれている。この手の色はちょっとした汚れや埃がつくだけで、非常に目立つため取り扱いが難しいのだが、そういったものは一切見受けられない。むしろ、俺達によって靴底の汚れでくっきりと足跡が残ってしまったほどだ。
伊達の部屋に入った俺達は、手分けして互いの目的のものを探した。とは言っても、いとも簡単にそれらは見つけることができたので、大して時間は取られなかった。机の引き出しに、俺の知りたか

ったものがあったのだ。そう、鳳凰館では見つけることのできなかった、売買リストだ。

これが見つかったということは、あの秘密クラブのために、顧客になっていたと見て間違いない。丁寧にファイルされたそれは何冊にも小分けされており、中を見ると去年の十月から今年の三月、つまり今月分までのものしかファイルされていなかった。

引き出しの中からファイルをすべて取り出し、ざっと流し読んでいく。

それらを見て分かったのは、その月その月によってテーマがあるようで、そのテーマごとに仕入れていることだった。

今月……つまり、昨日見たあの残虐なショーのテーマは、兄妹による近親相姦を犯させるというもののようだった。先月分は、少女同士による絡みをテーマにしていたようだ。

さらに去年の五月分には、姉と弟ばかりがリストされていて、姉弟による近親相姦がテーマであったと推測される。ようするに姉と弟という立場こそ違え、行う内容は昨日のものと、さほど変わらないということだろう。

全く、そんなことを考えつくなんざ、伊達を今すぐにでも地獄に叩き落としてやりたくなる。

そんな具合に、テーマ分けされたそれらを胸糞悪い気分で見ていったところ、あるところで手をとめた。驚きのあまり、息をすることすら忘れ、そのファイルに釘付けになったのである。

一瞬、我が目を疑った。だが、間違いない……間違うはずがない。そのファイルの日付は、六年前の六月になっている。

「……見つけた」

立ち上がってやっとのことで絞り出されたのは、たった一言、それだけだった。俺は、そのページから目がはなせずにいられない。ずっと捜し求めていたのだ。六年前のあの日から、ずっとだ。

「どうした？」

いきなり立ち上がり、瞬きもせずに手に持ったファイルを凝視し

ている俺に、田神が話しかけてくる。
「やっと……やっと見つけたんだ、田神」
視線を向けず、呟くように言った。田神は、俺からファイルをとり、一瞥したようだった。
「……この娘が、君の妹か」
小さく頷く。そのファイルには、俺が求めてやまない沙弥佳の写真が添えられいた。
俺の持っている写真と比べ、痩せこけてはいるが、間違いなかった。他人の空似というわけではない。そこに書かれているデータも、そうだと告げている。
気付けば俺は、小さく小刻みに震えていた。きっと興奮のためだろう。そのため、硬く握られた手は痛く、口の中は鉄と塩が混じったような味がした。
「九鬼」
田神が話しかけてくる。答えずに、田神の方に視線をやった。
「落ち着け。そろそろ奴が帰ってくる時間だ」
「大丈夫だ、俺は落ち着いてる。この上ないほどにな」
「ならいいが……」
何か言いかけた田神は唐突に、ズボンのポケットに入れてあった携帯を取り出した。マナーモードにしてあるのだろう。ただ低く、震え続けている音が聞こえる。
その音が五回目で途切れた。田神はそれを再びポケットにしまい、俺のほうを見た。
「ようやくおいでなすったか……」
低い声で呟いた。
「ああ。今のはエリナからの連絡だ。後、ものの二分もあれば、ここにくるだろう」
俺は黙って頷いた。いよいよ、奴と対面できるわけだ。動かぬ証拠を掴んだ限り、奴には全てを吐いてもらおう。
自分でも分かるくらいに、俺の熱は下がっていく。いつもそうな

のだ。自分が抑え切れなくなるくらいに憤怒すると、なんでかそれが、逆に冷めていく。驚くほど冷静になっていき、そして気付けば今のように、絶対零度のように気持ちが凍りつくのだ。

……伊達聡一郎、お前の命運は今夜限りだと思うがいい。

俺達の目の前には、布で口を塞がれ、後ろ手に縛られた男がいた。この家の主である伊達聡一郎だ。

部屋に戻った伊達は、部屋の入口に隠れていた俺に組み敷かれ、田神によって椅子にくくりつけられたのだ。

帰ってきた途端、いきなりこんな風に扱われたためか、こいつは完全に気が動転しているようだった。

だが、これでもかなり抑えた方だ。今の俺なら、すぐにでも両方の眼球をえぐり出し、内臓を引きずり出すことだって、躊躇うことなくすることだろう。

しかし今回は一応は、田神の仕切りなのでぐっと我慢したのだ。まだ何も喋ってもいないのに殺せるはずがない。

「むうう、うー、うー」

猿ぐつわにされた口で、伊達は何か叫ぶように呻き声をあげている。田神が、すっと伊達の前にでた。その手には今までどこに隠し持っていたのか、黒塗りのナイフがあった。正しく暗殺仕様のものだ。

「さて……伊達聡一郎、おまえには俺達にいくつか喋ってもらうとしようか。嫌とは言わせないぞ。それと沈黙することも許されない。その場合、こんな風な罰を受けてもらうことになる」

田神はそういうと、ナイフで伊達の高級であるだろう白い服を、切り裂いていった。

シャツの下から、贅肉があまりついていない、なかなかに引き締まった腹筋が覗いた。

「こんな風にな」
次の瞬間、その腹にナイフを押し当て、下に動かしていった。伊達はその美貌を、この上ないほどに引き攣らせ、くぐもった叫び声をあげた。
実際には包丁かなんかで、すっぱりと指を切った時にできるような深さの切り傷だ。
しかし、てっきり服だけを切るようなものにすますのかと思いきや、一度相手を油断させて切るなんて、なかなかやるではないか。
見た目ほど激痛ではないはずだが、この男には大層効いたようだ。
「叫んだ場合も同じだ。その時は耳を削ぎ落とす。……いいな」
伊達は引き攣らせた顔のまま、何度も頷いて見せた。
（……面白くない）
できるなら、もっと泣き叫んで抵抗すればいいのに、こいつは完全に畏縮してしまっている。
それだけ田神の効果は絶大であったわけであり、尋問官としてはなかなかのものだといってもいいだろう。だが、俺としてはあまりにあっさりとしすぎて、肩透かしをくらった気分だった。
やはりこいつも、いざという時には、何もできない奴だった。そんな奴が人を売り買いしているのだ。俺はまた、ふつふつと怒り炎が燃え上がってきたのだ。
「よし、では質問をはじめよう。……頼む」
目で合図してきたのを俺は無言で頷き、伊達の猿ぐつわを解いてやった。伊達は、大袈裟とも言えるような仕種で、ヒューヒューと何度も大きく呼吸した。
さて、田神の尋問官としての腕は、なかなかのものだと言うのはすでに半ば分かってはいるが、お手並み拝見といこうか。俺の気を少しでも下げる意味でも、その方がいい。
「さて、伊達聡一郎。お前は七年か八年ほど前までは、一介のサラリーマンだったはずだな。そんなお前がなぜ唐突ともいっていい、高級秘密クラブを作ることができたか聞かせてもらおうか」

一瞬迷いを見せた伊達だが、田神のチラつかせたナイフに、がっくりとうなだれるようにしゃべり出した。
「わ、私は雇われたんだ、山本と名乗る男に。も、もちろん最初こそ私だって戸惑った。私に経営なんてできるわけはないと。だが、彼は言ったんだ……必ず繁盛させてやるから、と。だから」
「誘いに乗ったわけだな」
伊達が首を縦に振った。
「その繁盛させてやる方法というのが、人身売買だったってのか？」
俺はつい口を挟んだ。伊達はなぜそれを、と言わんばかりの顔になって言った。
「そ、そうだ。だが、わ、私だってそんなことをやるだなんて思わなかったんだ。本当だっ」
「だが、お前はそれに乗った。過程はどうあれ、結果はけして許されるようなことではないはずだな？」
「う……」
田神の射抜くような視線と言葉に、奴も言葉を失った。こいつのこの様子では、人身売買というのを分かっていながら、それに手をつけたようだ。ほぼ間違いないだろう。
「次に山本という人物のことを聞こうか。どういう人物なんだ」
「わ、私も詳しくは知らない。ただ……」
「ただ、なんだ」
「話によれば、かなりの地位に就いた男らしい。現政権すら、彼の傀儡に過ぎないとすら言われてる……そう聞いた」
「そんな人物が、何もない一介のサラリーマンを雇ったというのか。にわかに信じ難い話だな」
俺は冷ややかな目で言った。田神もそれに同意するように首を振る。
「だが、この男の言葉を信じないわけにもいかないな。現に、あんないかがわしい秘密クラブをやっていたわけだしね。
それに見方としては、何も持っていなかったからこそ選ばれた、

そうとも見ることができる」

「なるほど。そいつは確かにありえない話じゃぁないな」

そうだ。権力者は、自分の都合のために何もない弱者を利用するというのは、日本に限らず、世界中どこにいってもある話だ。

それどころか、いつの時代にだってある。俺からしたらそんな連中も、俺や田神のような同業者達に、眉間を撃ち抜かれて当然のようなものなのだ。

つまるところ権力者暗殺というのは、自業自得なのだ。権力を得るというのは、己の魂と引き換えといってもいいかもしれない。

それでも人殺しなんて、という奴は、この世を甘く見ているとしかいいようがない。その連中の死のおかげで、今のこの世界があるのだから。そう考えれば、権力者というのはすごいのかもしれないが。

とは言え、権力を持つというのは、それに比例してその義務も大きくなっていく。だというのに、それは私のせいじゃないと、政治家ども責任を他になすりつけようとする。それでいて連中は、自身の権力にだけはしがみつこうとする。そんな奴を殺して何が悪いというのだ。

連中はただ権力を欲して、暴利を貪るだけの寄生虫に過ぎない。後は口でなんとでも言えばいいわけだから、時には世間から同情されることもあるだろう。だが、それだけだ。本当は誰しも、権力者を好いているはずがない。

そして、その山本という人物もまた然りだ。当然その権力の一部を手にし、あまつさえ、なんの関係もない子供らを死に至らしめたこの男も同罪だ。

しかし、連中も今の時代は、どの国においても小粒ばかりになったのは否めない。それとも、そんなことばかり考えているから小粒になったのか。

そして、消しても消してもそんな連中が沸いてくるわけだから、そう考えると、俺にとって殺し屋という職業は、さしずめ害虫駆除

業者といったところだろうか。
「他には」
「ク、クラブでの収益の三割は彼のもとにいくようになってる。ま、また、左翼の広域暴力団なんかも事実上、彼の支配下にあると言っても過言じゃない……」
「山本の居場所は」
「し、知らない……ほ、本当だ。いつも彼の使者と会うだけで、会ったのもほんの数える程度なんだ」
伊達の惨めなほどすがるような言いように、それが嘘ではないということが分かる。
「ならば、その使いとはどこに行けば会える」
「それも知らないんだっ、私は毎週同じ日に、指定されている場所に行って指示を受けるだけなんだっ。うっう……なんだって私がこんな目に……」
「その人物の名は」
「ま、松平……」
その時、今の今まで冷静にしていた田神の顔にわずかに曇ったように見えた。
「下は」
「由伸だっ。松平由伸（まつだいらよしのぶ）だっ」
「松平由伸……」
「知っているのか？」
松平という名に、心当たりがあるのか、田神はしきりに何か考えているようで、いたたまれなくなった俺は、田神に聞いてた。
「ああ……。昔、ちょっとな。だが、これで松平には会わざるをえなくなった。思っている以上の大物が釣れるかもしれない」
俺はそうかと短く答え、肩をすくめた。あまり過去にこだわらなさそうな男だが、やはり昔、色々と苦労してきたのだろう。
「さて、これでお前への尋問が終わったわけではない。お前は真田博之という男と、武田と名乗る男と関係があるはずだ。その

二人について知っていることを、洗いざらい喋ってもらおう」
まさか真田と武田の名を出されるとは思わなかったのか、伊達は驚いたような表情になった。
真田に関しては、やはり先ほどガスから仕入れたネタと、なんら変わりはしなかった。だが、一つだけ確信したことがあった。
奴はどうも、例の実験を本気で取り組んでおり、ある程度成功にまで漕ぎつけていたらしいということだ。信じられないことではあるが、本当のことらしい。
それを聞いた田神は、少しだが苦い顔になっていた。よほど実験の内容を気にしているのだろうか。
「武田という男に関しては、私たちの間でもよく分からないんだ。何年か前、松平から紹介された。話によれば、山本様からの命令でしか動かない、特別な人物ということくらいだ……」
「では……」
田神が俺に目配せする。無言で頷いて、持っていたファイルを渡した。
「お前は日本での人身売買市場において、かなりの発言力を持っているな。この資料がそれを物語っているが……どこで、それを行っている」
「そ、それは……」
「言うんだ。そもないと……」
先ほどと同じように、田神ははだけている伊達の胸にナイフを当て、すっとナイフを引いた。
猿ぐつわをしていないため、部屋中に悲鳴が響く。抵抗する意志を完全に失っているためか、先ほどに比べ、ガクガクと体が震えだしていた。
「さて、次はさっき言ったように、耳を削ぎ落とすとしよう」
田神はつとめて冷静に、淡々と言いながら伊達の右耳を引っ張って、ナイフを当てた。
「ヒッ！　ま、待ってくれっ、言う！　言うからやめてくれ！」

「ならさっさと言うんだ。こっちだってお前の相手などしている時間はないんだ」
「み、港区にある倉庫街……いつも、そこで取引してる……月に2回か3回、船で……」
「九鬼。このファイルに、それを示すようなものが書かれているはずだ。見てくれ」
田神からファイルを受け取って、それらしいものがないか探してみる。
その間にも、田神による尋問は続いた。
「そしてお前は鳳凰館のオーナーとして、働くようになったんだな。だが、そのファイルの数を見ると、どう考えてもクラブにいた少年少女たちの数と合わないな。他の子供たちはどうしたんだ」
「さ、真田の弟子になる馬飼という議員によって買われることがほとんどだった……う、馬飼はつい何日か前に何者かによって殺された……。
あいつは真田の命令で、人体実験を行うための実験体欲しさに、子供たちを買っていってたんだよ。実験は、量子理論によるものだけではなく、新薬のための臨床実験も行ってたんだ……」
「新薬の臨床実験……」
伊達の言ったことに、つい復唱してしまう。
そういったことが、この世のどこかで行われているということくらいは知っている。だが、実際に見聞きするのとはわけが違う。
そのために、わざわざ海外から人間を輸入したというのか、その馬飼……いや、真田は。そして、この男もそれに荷担したわけか。
「その新薬の実験はどんなものだったんだ」
「私も詳しくは知らない……ほ、本当だっ、何も知らされてないんだっ。……た、ただ、Y市にある製薬会社にそれらを回していたということだけしか知らないんだ……」
「Y市、だと」
「心当たりがあるのか、九鬼」

「……ああ、少しな」

なんということだろう。Y市の製薬会社といえば、即座に蒲生義則のことが思い出される。あの時のことが、まさか今に繋がっているとでも言うのか。

思えば、最近ちょくちょく製薬会社と聞くことがあった。一度探りを入れてみるべきだとは思いはしたものの、それどころではなくなって、そのままだった。

けれどこうなってくると、本格的に探りを入れる必要がでてきた。だが、それよりも先に、今ここで聞いておかなくてはならないことがある。この六年の間、捜しに捜してようやくつかめたのだ。

俺は、なるべく冷静を心がけながら聞いた。

「おい、伊達。お前さんに一つ聞きたいことがある。この少女についてだ」

妹のことを少女なんて他人事みたく言うのに、少しばかりためらいがあったが、この男に妹と告げるのは、なんでか癪だった。

ファイルから沙弥佳のページを探しだし、伊達に見せる。

「お前はこの少女のことを知っているはずだな？　六年前だ。覚えてるはずだ。一体どうしたのか、聞かせてもらうぜ」

「お、覚えてない、そんな昔のことなんて……」

伊達の言いように、なるべく冷静さを保ったつもりだったがもはや無理だった。

「……そうか」

次の瞬間、俺はこの男の顔面に下半身から力の入った拳を、思いきり叩き込んでいた――。

第３３章

ズキズキとまだ拳が痛む。すでに二十分ほど拳をさすりながら俺は、無言で流れていく夜の街をぼんやりと眺めていた。

「落ち着いたか？」

「……ああ。まぁ少しはな」

「そうか……」

そんなやり取りをしながら、エリナの運転する車の中で俺は一人、後部座席に座っている。トランクには、縛った伊達を放りこんである。怒りにまかせて奴を殴ってしまい、気を失わせてしまったのだ。

田神に止められなければ、そのまま殴り殺しにしていたかもしれない。それほど、我を失っていたのだ。

その頃には、すでに伊達は気を失っていた。多分、顎先にイイのがいってしまったのだろう。そうそう殴られたくらいで、人間は気を失ったりはしないものだ。戦意や敵意といったものを喪失させることで、生存を優先させようとする本能が働くためだ。

だからこそ、俺達のような人間は拷問なんかの訓練も受けさせられる。俺はその訓練の過程で、骨折させられたりもしたが決して根はあげなかった。まぁ、そのおかげで鬼教官共からは、最高の評価を得たわけだが。

だが、その戦意や敵意というのを失ってしまった状態で、拷問などを受けてしまうとその痛みたるや、何倍も強く感じてしまう。

いくら素人といえ、これは人間という生物に備わっているものなので、プロだとか素人だとかはあまり関係ない。もしかしたら、その防衛本能のために気を失わせたのかもしれないが。

まぁいい。田神は後で自白剤も使用して、さらに聞き出すつもりなのだという。俺としても、まだ聞きだせるものがあるのならその方がいいとも思う。今の俺が尋問官をやろうものなら、聞き出せる

ものも聞きだせぬまま、確実に伊達を死なせてしまうだろう。
どのみちそのつもりなのだから手間は省けるにしても、やはりそうもいかないのだ。よって、ここは田神に任した方がいい。尋問官としての腕前も披露してもらったのだから、そこに文句などつけようもない。
「ところで、君はこれからどうするつもりだ？」
「ひとまず、このファイルに書かれている場所に行ってみるさ。何かしら、得られるものがあるかもしれないしな」
「ならば今から行くとしようか。それと例の製薬会社の件は、俺が調べておこう。先のTビルのこともあるからな」
「ああ、頼む」
田神は頷きながら、また黙った。どんな目的があるのか、俺には想像もつかないが、そのために頭を動かし始めたのだろう。
俺は外から入ってくる光に照らされながら、ファイルを拡げた。そこにある、痩せた少女が写った一枚の写真をじっと眺める。
とにかく、ここに書いてあるところに行かなくてはならない。アルファベットと数字で書かれたそれは、俺には暗号か何かと思ったが田神がいうには、商品の仕入れ伝票か何かではないか、という話だった。
なるほど。となると、そこに行きさえすれば、それらもなんとか掴めるかもしれないわけだ。
気を失う前に伊達が口走った場所に、俺は早く行きたくてたまらなかった。

伊達の家から、途中、首都高速を使うこと約一時間半。ようやく、伊達の言っていた場所に訪れることができた。
さすがに今回ばかりはエリナの奴も、一緒に行くとうるさかった。まぁ、この女もプロなので、そこらへんは気にする必要もないだろ

う。

時刻はすでに二十三時を回っているためか、倉庫街は薄気味悪いほど静まりかえっている。海岸線に沿って、遠くにはやはり、倉庫街と思しき影が後ろの街からの光により、うっすらと分かった。

小説や何かではよくこういった場面が描かれているが、気持ちは分からなくもない。それほど、“何かをする”というのには、うってつけな場所だ。

「N番地の倉庫か……ここはLだから、もう少し先だな」

車の中から番地を確認しながら、目的の倉庫へ進み、N番地のブロックに着いた。

「ここだ」

車を倉庫の間に停めて外に出た。この倉庫街は埠頭になるため、海からの風が吹く風にのって、潮の香りが鼻をつく。

俺達は、倉庫裏手のドアから中に侵入した。中は当然真っ暗で、光などないに等しかった。

その時、唐突に光があらわれた。田神がペンライトをつけたのだ。全く、用意のいい男だ。

「君にも渡しておこう」

そういって、ポケットから一本のペンライトを俺に渡してきた。もし二手に別れるにしても、エリナは田神に着いていくからだろう。俺は黙ってそれを受け取りながらいった。

「さて、どこから調べるべきかな。この倉庫内の全てを調べるにしたって無理があるぜ」

「いや、そこまでの必要はないはずだ。ファイルを見せてくれ」

田神は渡されたファイルを、何か考えながら見ている。そして何か思い付いたのか、一度軽く頷いて、ファイルを渡してきた。

「何か分かったのか？」

「ああ。確証はないが、多分間違いないはずだ」　そんなことをいって、田神は所狭しと荷が置かれた倉庫内を歩き始めた。俺とエリナは何がなんだか分からず、黙ってやつの後を着いていく。

田神は歩いては止まり、また歩いては止まるということを繰り返しながら、俺達を先導する。一体、何を考えているのか全く分からない。だが、止まった時に時折、周囲を確認しているようなそぶりを見せた。

「……多分これだ」

「なぁ、田神。一体どうしたって言うんだ」

「なに、少し見てれば分かる」

すると何を思ったのか、田神は目の前にあるコンテナを叩いた。いや、まるでノックするかのような仕種だ。まさか中は……。

エリナも同様に気付いたのか、緊張したようにゴクリと唾を飲み込んだようだった。

何も反応しなかったコンテナに、田神が今度は強めに叩いた。一拍おいて、中からコツンコツンという控えめな音がもれてくる。中に人が入っているのだ、間違いない。

田神はコンテナの周囲をグルリと廻り、いった。

「中には間違いなく人がいる。だが、鍵が必要だな。かなり頑丈に施錠されているから、今の俺達の装備では破れないだろう」

「あんた、よく気付いたな」

「ヨーロッパにいた時に、少しね」

田神は苦笑しながら、行こうと告げ、また歩きだしはじめた。

「倉庫のどこかに解錠するための鍵があるはずだから、それを探す。それと九鬼。君は今から、トラックを一台用意してくれ。このコンテナを運び出せるような、大きいのがいい」

「分かった」

それに力強く頷き、俺はトラックを探すべく倉庫の外に出た。

トラックを求めて倉庫街をうろついていると、三人の男達がたむろしているのが見えた。恰好から、ただの作業員のようだ。どうも連中は、互いに愚痴を吐き出しあっているようだった。

俺は、いくつものコンテナが置かれた場所に身をひそめながら、

連中の言葉に耳をかたむける。
「にしても、いきなり過ぎるよな。今日の作業も終わったってのに、また呼び出すなんてよ」
「こんなことになるって分かってたら、さっさと帰っておくべきでしたよ、ほんと」
「まぁそう言うな、ヤス。特別手当が出るってんだ、こいつを逃す手はない」
現場の親方らしい五十くらいの中年に、ヤスと呼ばれた、まだ二十代後半と思わしき若者が相槌を打っている。それと親方よりも年季のいった、おそらくはもう定年間近の人物が、若者を窘めていた。
「それより伊達さん、まだなんすかねぇ……三月とはいっても、夜の海はまだ冷える」
しめた。あのヤスとかいう若者のぼやきのおかげで、うまいこと事が運ぶかもしれない。連中は、幸運にも伊達を待っていたのだ。しかも、奴と顔見知りときた。あの老人ではないが、この手を逃してはならない。
場合によっては、トラックもそのまま丸ごと手に入れられることができそうだ。しかも、あの三人には悪いが、伊達が今日この場に現れることはない。伊達は今この倉庫街にはいるが、手足を縛られて車のトランクの中なのだ。いや、もう今後二度と、連中の前に姿を現すことはないのだ。
俺は携帯を手にし、田神に連絡をとった。

「肩透かしな気分って、こういうことをいうのかな」
トラックを運転する田神の横で、エリナがぼやくように言った。
「おいおい、君は何を望んでいたんだ」
「全くだぜ」
この女、何を言い出すかと思えば……。せっかく人が穏便に済ま

す方法を思い付いたと言うのに。
「おまえはそんなにドンパチしたかったのか？」
「そのために今日、行動してたんでしょ？」
さも当たり前かのようにいう女に、俺も田神も、心底呆れたようにため息をついた。この女の戦闘力は並外れたものであることは知っているつもりだが、この言いようはまさに戦闘狂と言っても過言ではない。全く、物騒なことこの上ない。
そんな俺達の後ろの座席には、縛られ、いまだ気を失っている伊達が放り出されている。さらにトラックの荷台には、先ほど倉庫で見つけた子供達を乗せたコンテナだ。
俺たちは今、昨日のように、再び田神と親交という人物のとこれに赴くべく、首都高速を移動中だった。
思わぬ幸運に、俺は作業員の三人に伊達からの使者だと嘘をつき、倉庫にあったコンテナをトラックに移した。コンテナの中は、俺が作業員たちとやり取りしている間に、確認したらしい。田神らしい手際の良さと言えるだろう。
おかげで、トラックを調達でき田神たちのところに戻ってきた時には、何事もなかったかのようだった。そのトラックに、伊達を乗せなくてはならなかったのが癪だが仕方ない。
「それはそうと九鬼」
「なんだ？」
「エリナ、あれを」
エリナが黙ったまま、俺にある資料を渡してきた。
「これは？」
そういいながら俺は、その資料に目をやった。そこに書かれていたのは、奴隷たちの出荷先だと田神はいう。その中に、どこかで見たことがあるような伝票コードが目に入る。
それを記憶の中から引っ張り出す。
つい最近、見たことがあるはずだ……。確か……。
その時、俺は伊達の家から出してきた、あのファイルを取り出し、

沙弥佳のページを開いた。そう、その伝票コードは、沙弥佳のページに記載されていたものと同じだったのだ。

「こいつは……」

「倉庫の事務室に、過去十年分の出荷先が記録されたものがあった。それはその一部だが、もしやと思ったんだ。それに見てみろ」

田神が伝票コードの隣の欄を見るよう促すと、そこにはどこかで聞き覚えのある製薬会社の名があった。

「これは……つまり、ここに沙弥佳が連れていかれた、そういうことか」

「ああ。それに、その島津製薬はY市にある製薬会社だ」

「まさか……こいつが、伊達の言っていた製薬会社なのか？」

「まだ確証はないが、そう思ってほぼ間違いないだろう。製薬会社などそういくつもあるわけでもないからな」

確かにそうだ。六年半前に起こった、俺にとっても沙弥佳にとっても、忌まわしいあの事件とも繋がりがあったかもしれない、島津製薬。もしここに、沙弥佳が連れ去られたのなら、俺にとってはまさしく因縁といってもいいだろう。

「九鬼。まさか、またすぐに特攻をかけようだなんて思っていないだろうな？」

「……まさか」

本当はそのつもりだったが、それはよせといわんばかりの田神の言葉に、お茶を濁した。

だが、もはや避けては通れなくなったのだ。いつまでも、のんびりとしていられないのも事実なのだ。ここにたどり着くまでに、実に六年もかかってしまったのだ。悠長に構えていられるはずもないではないか。

沙弥佳は、今どこで、何をしているのか……それればかりが気になるのだ。それとも……。

最悪なことが浮かんだ俺は、かぶりを振った。それだけはあってはならない。それだけは何がなんでも否定したことであり、否定し

なければならないことだ。それは詰まるところ、俺が生きてきた全てを否定することにほかならない。

「とりあえず、この島津製薬とかいうのの調べはあんたに任そう。頼むぜ」

「ああ、任せてくれ。ツテに製薬会社に勤めているものがいる。業界全体に顔のきく男だから、調べは早くつくと思う」

「分かった」

田神の言葉に、俺は一縷の希望をかけて、力強く頷いたのだった。

俺が寝座に戻ってきたのは、すでに空が明るみだしてからだった。新聞配達をしている者たちとすれ違いながら、ようやく、ここに戻ってきたのだ。体が鈍ってしまって妙につらく感じていた。

それもそのはずで、一日のうちに、車で何時間も移動してはまた移動、それを繰り返していたのだから、当然と言える。もちろん、それに見合った情報も手に入れることができたのだから、それ自体はなんとも思わない。

けれど、それはそうにしたって体が疲れてしまっているのは変えようもない事実で、俺は寝座に戻ると、すぐさまベッドに入ったのだ。入るというよりも、倒れ込んだというのが正しいが。

ともあれ、遅くとも今日の夕方までには、田神が島津製薬のことを調べあげてくるはずなので、それまではしっかりと睡眠をとっておくべきだろう。全くの寝ずでは、いい仕事もできるはずもないのだ。

俺は潜り込んだベッドの上で、衣服を脱ぎ捨て下着だけになった。ベッドのスプリングの軋んだ音が、妙に心地良く聞こえる。

それに体をあずけながら、意識が沈みこむ前に、先ほどの出来事を思い返す。そう、伊達聡一郎の最期を……。

昨日と同じく、とはいっても、俺には初めて来る場所だが、子供らを預けるために俺達がやってきたのは、話に聞いていた児童施設だった。

「昨日、鳳凰館から連れ出した子供たちはここに預けた。いったと思うが、ここの館長は信頼できる人物だから安心していい」

「やあ、田神君」

田神の説明を聞いていた時、施設からこれはまた大柄な男が出てきた。縦も横も文字通りの大男だ。その身長は間違いなく、百九十センチに達しているだろう。横も、それに負けないくらい残念な体型になってしまっついる。

しかし、そんな体型とは裏腹に、なんとも温和そうな人柄をしているというのが分かった。というのも、あのエリナすら打ち解けていて、俺には絶対見せない顔をして微笑んでいるのだ。まぁ、初対面が初対面なだけに、それは無理もないことではあるが。

「やあ、エリナちゃんも。で……君は初めまして、かな？」

「ああ、そうなるな。九鬼だ」

「ああ、ああ、君が九鬼君かぁ。話には聞いてるよ」

俺は知らないのに、向こうは知っていたらしい。そういう挨拶をされると、こちらとしても対応に困る。

「ははは、意外と照れ屋なんだな。っと、自己紹介がまだだったな。僕はここを経営している小林という者だ。よろしく」

差し出された手に、一瞬だが躊躇した。なぜかは分からない。だが、なぜだか手を取るのを躊躇ったのだ。

「ああ、こちらこそ」

向こうは他意はないだろうし、こちらが勝手にそう思ったにすぎないのだから、俺は構わず手を握り返した。

「……うん。君はとても熱いものを持ってるんだねぇ。田神君と同じだ」

「……？」
「ああ、いや、こっちの話だ。すまないね」
突然変なことを言われ、怪訝な顔をした俺に、小林という男は謝りながらも、しきりと頷いていた。
なんなんだ、一体……。
「九鬼、気にする必要はない。彼はいつもああなんだ。気にするだけ損さ」
「なんだい、その言い草はー。
……とまぁ、それはさておき、トラックの荷台のコンテナが例の？」
俺と田神が同時に頷く。小林はそうかとだけいった後、コンテナを開けさせた。中には様々な人種の子供達が入れられている。さすがの俺も、この光景には息をのんだ。というのも、乗せられていた子供は、鳳凰館で見た時よりも数が多かったのだ。
おそらくはこのうちの半分ほどが、鳳凰館に、残りの半分が島津製薬に送られるのだ。そしてその末路は、どちらに送られても、変わることはないのだろう。
「……人間というのは、全く……」
小林のつぶやきをよそに、中にいた子供らは一様に、怯えた表情を俺達に向けている。きっとそんな仕種が、昨日の大男や客達の加虐心をそそらせるのだろう。俺には全く理解できないし、したいとも思わないが。
「さぁ、おいで。大丈夫だ、恐がる必要はないよ」
小林は、開けられたコンテナに近づき、つとめて優しく、語りかけるように子供らにいった。その様はまるで、どこだかの聖人君子のようにも見える。
最初こそ戸惑いと困惑の色を見せていた子供達ではあったが、小林の自分達の態度を和らげようとするその態度と行動に、困惑げにではあるが次第と態度を軟化させはじめたのだ。

この児童施設に来て、わずか一時間足らずでここに送られてきた子供達は、たどたどしいながらも、互いにコミュニケーションをとり始めていた。

全く、田神といい、この小林といい、俺にはとても真似できるような芸当ではない。俺は、小林やその子供たちの様子に感心していたところ、小林が近寄っきた。

「昨日連れられてきた子供も、元はといえば、君が救い出したんだってね。田神君から聞いているよ」

「なに、ただの成り行きさ。田神と違って、俺はそこまでお人よしじゃぁないんでね」

「ははは。そんなこと言っていても、なんだかんだで十五人を超える子供を助け出したんだ。君は自分で思っている以上に、お人よしだと思うよ。

助けたいと思ってはいても、いざそれを目の前にした時、どうしようもなくなるなんてのは良くあるだろ？　ましてや、そんな中で君は子供たちを助けた。君は子供を助けるようなお人よしで、そして、それを実行できる力を持った人間だ」

「ご高説どうも。だけどな小林さん、あんたが田神からなんて聞いたかは知らないが、俺はれっきとした人殺しなんだぜ？　そんな人間が、あんたのいうような“お人よし”とはいえないと思うぜ。丸っきり、そこには程遠い人種なんだ」

確かに俺はお人よしな気(け)があるのは否定しない。しかし、それはあくまで、こんな暴力の世界においての話であって、決して一般的にいうお人よしとは、言い難いだろう。そんな人間が、人殺しなんざするはずがない。

「……うん、まぁ確かに、君や田神君が殺人者であることは否定しないよ。殺人というのが、とてもいけないことだとも思う。でもね、僕は君らが尊くも見えるんだよ」

「俺や田神がか？」

小林が静かに頷く。その視線を俺から外すことなく。

「……九鬼君、僕は昔ね、それこそ九鬼君くらいの歳の頃に、フランスの外人部隊にいたんだよ。……一年のほとんどを、アフリカで過ごしたこともあったっけ」

意外だった。この小林という人物は、縦も横もでかいが、とても包容力のある優男といった風貌だ。そんな人間が、かつてはフランスの外人部隊という、ある意味でそこら傭兵の方がまだ良い待遇を受けているといわれるフランス軍の底辺に所属していたなど、想像もつかなかったことだ。

「外人部隊は、確か所属した部隊によっては、ただの特攻同然の扱いも受けることがあると聞いたことがあるが」

「幸い、僕はそんなことにはならなかったけどね。そんな中、僕が部隊にいた時、最後に派遣されたのは混乱の中東だった。

戦中は報道規制がされるから、あまり知られないけど本当にひどかったよ。子供の浮浪者が毎日、何人も増加していってたんだ。

だからかな。それで、このあまりに戦争とはいえない戦争を生き残ったら、部隊をやめて、こういうことをやろうって決めたんだ」

「……そうだったのか」

「ああ。毎日、お金のやりくりに悩まされはするけど、それでも彼らを放ってしまういるよりはマシと思ったんだ。

それに戦争なんてのは、たとえどんな大義名分があろうとも、大人達のエゴに過ぎないからね。哀しむのはいつも女子供ばかりだ。本当にどうしようもないよ。

だから君が連れてきた子供たちも、状況は違えど大人達のエゴで売られた子達なんだから、似たようなものだろ？

いうなら、彼らは皆孤独なんだ。兄弟がいたとしても、やはり親というのは必要なんだよ。彼らの寂しいと思う時、それを埋められるのは、どうしたって親しかいないんだから。

そして君もだ、九鬼君」

「俺が？」

「ああ、そうさ。君自身が孤独であり、本当は誰かを頼りたいのに

頼れない、それが破壊的な衝動をうみ、時にはとてつもない寂しさを感じたり……違うかい？」

俺は何も言えなかった。確かにこの男のいっていることは一理ある。だとしても、それを簡単に肯定するわけにもいかない。まして、俺が孤独感に苛まされているかのような物言いにだ。

「でも、だからなのかも知れないな。君は誰よりも子供達の気持ちを理解できる。だから、優しくできるんだろうな」

小林は、なんとかコミュニケーションを図ろうとする子供達を見ながら、一人呟くようにいった。俺が優しいだって？　とてもじゃないが、そんな風には思えない。言うほど子供達の気持ちが理解できるわけでもないはずだ。

だというのに、この小林のいう、“優しい”という言葉がやけに引っ掛かった。ただ成り行きで助けただけで、それ以上でも以下でもないはずのことに、妙な疑念を感じたのだ。

「生なことを言ってすまなかったね。でも、君のそんなところ、きっと分かる人には分かるはずだよ」

俺は何も言うことなく、苦笑まじりに肩をすくめ首を捻った。

「あの……」

小林とそんなやり取りをしていると、後ろから話しかけられた。声の感じからまだとても若い。子供だろう。

振り向くと、そこには昨日あのステージで責めを受けていた兄妹がいた。

「昨日はどうもありがとう、おじちゃん」

兄妹はぺこりと頭を下げながら礼を言ってきたのだ。妹の方は、一歩後ろに引いて兄の陰に隠れてはいたが、それでも、きっちりと兄にならって頭を下げていた。

（日本語を喋れたのか）

そんなことを思いながら、別にいいさとだけ言い、最後に一つ付け加えておいた。

「それと、おじちゃんじゃぁなくて、お兄さんだ。次からは気をつ

けるように」
　兄妹はどう反応していいのか分からなかったようだったが、俺が肩をすくめて、さぁもう行くんだと笑いながら言うと、最期にもう一度頭を下げて、子供達の輪に戻って行った。
「だから言ったろう？　分かる人には分かるものなんだよ」
　小林が微笑みながら、つぶやいた。

　目の前には意識が混濁して、うつろな目をし顔の腫れ上がった男がいる。伊達聡一郎だ。
　どこにしまいこんでいたのか知らないが、田神が自白剤を持ってきて投与したのだ。そのため伊達は、数分前からこの状態だ。こんなことになるのをまるで予想していたみたいに、用意のいい奴だ。
「伊達、最後の質問だ、もう一度聞くぜ。この少女についてだ。お前は知っているはずだな」
　田神に代わって、今度は俺が伊達に詰問した。先ほどとは打って変わり、不思議と落ち着いた気分だ。
「うぁあ……この、少女……？」
「そうだ。島津製薬の誰に売り飛ばしたんだ？　見たところ、島津製薬の誰かまでは書かれていない。だが、誰に売ったかくらいは覚えているはずだろう」
　最後には再び語気を荒げたが、まだ冷静そのものだ。今の俺なら、先ほどの田神のようにいい仕事ができるだろう。
「うぅ……その少女は……島津製薬の……松下、という女に……売った……すごく美人……分かる……」
「松下……下の名は」
「薫……」
「松下薫（まつしたかおる）……そいつに売ったんだな」
　伊達が力なく頷いた。喋るのに必死だったため、顔色は喋りだす

前と比べかなり血色が悪くなっている。自白剤は何度も使うと、最悪死にいたらしめるものなので、当然と言えば当然なのだ。

「その女とお前の関係は」

「うあ……？」

「松下とお前の関係だっ」

「松下は……松平の紹介で、知り合った……験体を横流し、する、代わりに……」

「横流しする代わりに？　なんだ」

「うちが、クラブの……スポンサーに、……なってやると……」

「それだけか。お前と女の関係はそれだけか」

「うぁああ……つ、月に一度、必ず会ってる……今月は、明後日」

「どこで会うんだ」

「……K駅、近くにある……シティ、ホテル……」

そこまで言った伊達は、がくりとうなだれ、意識を失ってしまったようだった。

「これで良いだろう」

「じゃぁな、伊達。俺はおまえを、はじめから許すつもりなんざなかったんだ」

誰もいない港で、気を失った伊達にいった。最後に聞きたいことを聞き出した俺達は、証拠隠滅のために港まで再び来たのだ。あとは運転席に縛り付け、後は海に沈めるだけだ。

気を失っている時に死なせてやるのが、せめてもの慈悲と言っていいだろう。正直、自白剤を投与した時から、俺の中ではこいつの生死など、どうでも良くなってしまっていた。

おまけに伊達は、自白剤の量を間違えたのかやけにぐったりとして、死ぬ間際かのように思えたのだ。いくらなんでも、一度の投与であんな風にはならない。そのためいっそのこと、今、楽にしてやろうということになったのだ。

それに子供達に誓ったのだ。伊達も必ず地獄に落とすと。その誓

いを破らないわけにはいない。俺には俺のルールがあるのだ。それでもこういう時、自分が徹底したサディストでないことがいつも悔やまれる。

まぁいい。本来であれば復讐すべきは俺でなく、あの子供達だ。こいつを地獄に落としてからの処遇は、地獄に落とされた子供達の決めることなので、俺がとやかく言うべきではないだろう。

気を失った伊達にトラックのアクセルを踏ませ、俺達はすぐさまトラックから飛び降りた。転げ回りながら海に向かって走るトラックを見つめる。

トラックは一直線に海へ向かっている。アクセルと同時に、ハンドルも固定しておいたので、蛇行することはないはずだ。

俺達が見つめる中トラックは、宙を飛ぶかのように、風をきる音のした直後、水にぶつかって大きく弾けるような音を立てながら海へと落ちていった。

何トンものトラックが海に沈んでいくのは凄まじく、さながら映画のワンシーンのようだ。

そして、これが伊達聡一郎の最期だった。

第３４章

高速で移り変わっていく景色を、どこふく風といったふうに眺めながら俺は今、田神らとともにK市に向かっていた。

伊達は今日の夕方に、駅に近いホテルで松下薫という女と会うことになっているからだ。正確には会うことになっていた、といった方がいいだろう。伊達はすでにこの世にはいないのだ。

「とりあえず、昨日一日で俺ができうる限りで知ることができた、島津製薬の情報だ」

茶色い大きな封筒に入れられた資料を渡され、俺はその中身を取り出した。それと、松下薫と思わしき人物の写真も入っている。

「この女が、松下薫か？」

「ああ」

写真に写っていたのは、髪をボブカットにして妖艶さを醸し出した女だった。日本人のはずだが、あまり日本人らしく見えない。まさしく、妙齢な女だ。

写真を見た俺は、思わず下半身を反応させてしまい、気を鎮めながら資料を見た。

「島津製薬は、一八八九年に開業医として島津菊乃介が始めた会社で、医者としての腕もなかなかのものと評判だったという話だ。

現在の雛型となったのは、その菊乃介の孫、新次郎の代になってからしい。新次郎は医者としては父や祖父にこそ劣ったが、経営者としてはかなりの手腕を持っていたようで、一代で大病院に成長させている。

当時、最新鋭の技術や多くの医師を抱えたようだが二次大戦の際に、一度は没落しているんだ。けれど新次郎は、その知識と時代を読む力に長けていたため、薬を処方することで新しく立て直した。それが現在まで続く島津製薬だ。

今は、その孫の宗弘が経営者となって、運営されている」

田神は車を運転しているためか、こちらには一切目をやることなく、淡々と語った。
「ま、そこらはよく聞く話だな。で、連中がやっているのはどんなことなんだ？」
「あまり良くない噂ばかりだったな。今まで島津の薬を使うことも度々あったが、正直、もう二度と使う気にはならないな」
「あんたがそう言うってことは、よほどみたいだな」
田神はゆっくりと、首を縦に振った。
「もう分かっていることだろうが、彼らが人体実験を繰り返しているその理由だが……」
田神はそこで言い淀んだ。
「その理由は？　なんなんだ」
「ああ、不死の薬を作るため……なんだそうだ」
「不死の薬だって？」
田神の口から出た予想外の言葉に、俺は声を裏返してしまった。不死だなんて、一体どういうことなんだ……そんなのとてもではないが信じられるわけがない。この二十一世紀の世の中で、そんなことを本気で実践しようとしているというのか。
これが雑談であれば、冗談に受け取るところだが、田神がまさか今そんなことを言うはずがない。つまり、連中が行っていることは、大なり小なりそれに近い、もしくは本当にそいつを研究をしているということなのか……。
全く、一昨日といい、今日といい、とんでもない与太話ばかり飛び出てくる。成り行きとはいえ首を突っ込んでいる俺が、とても馬鹿らしく思えてくる話ばかりだ。
「なぁ、あんたはその話、信じるのか……？　一昨日も同じ台詞を吐いたな」
「……なんとも言えないな。不死なんてものにはお目にかかったことがないし、仮に出会ったにしても、それを確かめる手立てもない」
「全くその通りだ。しかし、あんたがガセネタ掴まされたとも思え

ないからな……まぁいい。そいつは松下薫に直接聞くとしよう。
それよりも問題は、松下がきちんと時間に来るかってことだな。伊達の失態は、連中から見限られたとも言い切れない。真田の時みたく、連中が私設の軍隊を持っているかもしれないぜ。
その場合、下手したらすでに伊達のことを嗅ぎ付けて警戒して、今日現れない可能性があるぜ」
「いや、俺は現れると思う。伊達は鳳凰館のことがあった次の日にも、仕事をこなしていた。だから、きっと今日も来るはずだ。問題は彼女がうまいこと喋ってくれるかどうかだが……」
「ま、そこらは適当になんとかしよう。こんなことは別に今に始まったことじゃぁないしな」
「相変わらず向こう見ずなやつだな、君は」
田神が半ば呆れながら笑った。自分でもそう思わなくもないが、そういう性分なのだから仕方ないではないか。
「なに、俺に任せてくれ。女の相手は割と慣れてるんだ。特にこういう女はな」
「そうか。なら、今回は君のお手並み拝見といこうかな」
俺は何も言わず、ただニヤリとしただけだった。

K駅にほど近いシティホテルを前に、小さなビルの陰に俺達はいた。
「あんたが言ったように、部屋は松下の名義ですでに一室予約されている。後は、女よりも先に行っておく……それから先はなるようになると思う」
「……今回は君がやるといったのだし、島津製薬の件は君のヤマだ。好きにすればいいさ」
腹をくくったのか、田神はどこか悟ったような口ぶりだった。本来なら自分が行くべきとでも思っているのかもしれない。

「ああ、そうさせてもらう。大丈夫とは思うが、何かあった時は頼むぜ」

俺は車を離れ、一人ホテルへと向かった。生前伊達が指定していたホテルは、シティホテルというだけあって、かなり豪奢な作りになっていた。

階数は前に泊まったN市のホテルに比べると少なく、ランクも幾段か落ちると思われるが、俺からしたらそんなのは大したことではない。

ホテルの正面玄関から堂々と入ってロビーを突っ切り、フロントまでいった。

「今日予約した、松下の連れだが」

「はい。松下薫様のお連れ様ございますね。いつもご利用ありがとうございます。すでに、松下様はお見えになっておいでです」

「わかった。部屋はどこだい？」

「は……いつものスイートでございますが」

「ああ、いや気にしないでくれ。最近ちょっと疲れていてね」

「そうでございますか。でしたら、案内の者をお呼びいたしましょう」

「そうだな、頼む」

かしこまりましたと告げたフロントマンは、ちょうどロビーにいたボーイを呼んだ。彼に案内させるようだ。

「お荷物の方はよろしいですか？」

「ああ、もう部屋の方に連れがいるんだ」

適当に相槌を打ち、やや軽薄そうなボーイに受け答えしながら、スイートルームへと案内される。

格段、怪しいと思われるようなことはないはすだ。今日の服はいつもと比べ、シックなシャツとスーツだ。フロントの人間も、いくらほぼ毎月予約している常連客であっても、正確に顔までは覚えていまい。田神の話によれば、一月ごとに伊達と松下、交互に予約していたらしいので大丈夫だろう。まぁ、仮に覚えがあったにしても、

たいした問題ではない。
とはいえ、さすがに、顔の傷だけはうまくエリナの手で化粧を施してもらいはしたが。
エレベーターを降り、ホテル上階のスイートに着いた。ボーイはそのすぐ前の扉を叩いて声をかけた。
「松下様、お連れ様がお見えになりました」
しばらくすると、部屋のチェーンと鍵の開く音が聞こえた。
「では、私はこれで失礼したします」
行儀よく一礼し、ボーイは去って行った。それと同時に扉が開かれ、中から松下薫が顔を出した。俺は素早く部屋に押し入り、女は唖然として何が何だか分からないといった顔だ。
もちろん、すぐさま扉は閉め鍵とチェーンを掛けた。この昨今こんなものを付けなくとも、カードキー式になっているが。
続けざまに、女の口を塞ごうとするがその前に女が言葉を発っした。
「あなた誰なの？　聡一郎さんはどうしたの？」
俺は少しばかり驚いた。見知らぬ男が押し入ってきたのだから、叫んだりもするかと思ったのだ。
「あんた伊達の話、知らないのか？」
「なに、聡一郎さんに何かあったの？」
どうやら、伊達と定期的に会っているというのは本当のようだ。口ぶりから推測するに、いちいち連絡をとる必要もない仲なのだろう。
「伊達は一昨日の夜死んだぜ。殺されたんだ」
前置きもなく淡々と事実を述べると、女はその大きな瞳をさらに大きくし、絶句した。それもそうだろう。今日という日を、きっと心待ちにしていたのだろうから。この女の態度から、そう見ていいだろう。
「ああ……嘘……そんな、聡一郎さんが……嘘……」
嘘はついていない。事実、俺と田神で奴を地獄に送ってやったの

だ。そうされてもおかしくないことを、あの男はしていたのだ。当然と言えることだ。

「死に際に今晩、あんたとここで会うということになっているのを聞いてね。それで推参したというわけさ」

「ああ……聡一郎、さん……」

松下薫は、みるみるその瞳に涙がたまっていき美しい頬から顎へ、そして床へぽろぽろと流れていった。そしてガクリとその場に膝をついたのだった。

うっすらとシャワーの音が漏れてくる。松下薫が入浴しているためだ。

結局、松下は号泣こそしなかったものの、しばらくの間、声を殺すように嗚咽をもらしながら泣き続け、つい数分前にようやく泣き止んだところだ。泣き止んだ彼女は、シャワーを浴びたいと一言だけ告げ、部屋を出ていった。

まさか、あんなにまで泣かれるとは思わなかった俺は、やや躊躇いがちに軽く頷いただけだった。写真や伊達からの話だけで、つい、ただのビジネスライクな関係で、ことに及んでいたのかと思っていたがそうではなかったらしい。

勝手な先入観から、あの藤原真紀のような女狐タイプの女とばかり思っていたのだ。だから、今回役をかって出たと言うのに、とんだ誤算だった。

（さて、どうしたものか）

俺はベッドに腰掛けながら、この後のことを考えていた。多分、松下は俺のことを敵とは思ってはいまい。だからといって、味方だとも思っていないだろう。

とにかく、島津製薬でどんな実験を行っているのか、そしてその実験のために伊達が行っていた人身売買でえられた子供達が、どうなってしまったのか。半ば予想がついてしまうのに自己嫌悪してしまうが、まだ百パーセントそうだと決まったわけではない。何万分

の一、何億分の一の可能性しかなくとも、俺はそれに賭けるしかないのだ。

その時、聞こえていたシャワーの音がふいに途絶えた。隣の部屋にバスルームから漏れた湯気が見える。

しばらくすると、松下が白いバスタオル一枚でやってきた。黒いボブカットの髪は水滴で濡れ、その美しい顔に張り付いている。そして、彼女の身体に巻かれたバスタオルは、まるでそのラインを強調するかのようだ。

俺よりは確実に年上のはずだが、年齢など無意味に感じさせるしなやかな脚は、思わず男の本能を奮わせる。今すぐにでも、この女を抱きたいという衝動に駆られるが、今はまだ駄目だ。まだ早い。

松下は、その脚を見せ付けるように、俺の隣にやってきて、腰掛けた。その重みのためにベッドが軋む。

「……それで？　わざわざ今日ここに来たというのは、別にあの人の死を伝えにきたわけではないんでしょ？」

「ああ、まぁな。あんたにちょいと聞きたいのさ、島津製薬で行っている実験てのがさ」

「別に？　他の製薬会社と同じように、ただ薬を作って売っているだけよ」

「そのために人体実験を行っているわけか」

「人体実験だなんて……人聞きが悪いことというのね。臨床実験なんてどこも同じよ」

「そのために、わざわざ海外から輸入してきた奴隷達を使うのか？　そいつは少々おかしな話だな。普通だったら、そこらの人間に金を払ってモニターになってもらえばいい。

だと言うのにあんたら島津製薬は、少なくとも六年前から、伊達聡一郎から奴隷として買った人間を使ってまで臨床実験を繰り返している。さすがに、ただの新薬作りとは思えないね。

それにあんた、伊達に言ったらしいじゃぁないか。島津が鳳凰館のバックスポンサーになるってな」

女は先ほどとまではいかないが、驚きの顔をした。そのまま、少しの間だけ何かを考えていたようだった。

「……そう。まさか、そこまで調べがついていたなんてね、思いもしなかった」

「今の時代、便利なモノがあるのさ。ま、これでも随分と時間がかかっちまったんだがな。さぁ、もうこれ以上は無駄なんだから、洗いざらい喋ってもらうぜ」

松下は呆れたのか諦めたのか、どちらともいえない渋るような顔をしながら語り出した。

「……私もいつからそんなことをし始めたのかは知らない」

その瞳を窓の外に向け、女は目を細めた。

「あなた、もう随分前のことだけど、今井重工のお嬢さまが襲われた事件を知ってる？」

「ああ、十二年前の話だろう。それがどうした」

意外だった。確かに知っている。つい最近、それも二週間かそこら前に見た記憶がある。だが、今この場でその話題が出されたことに、ひどく違和感を覚えた。

「今井の屋敷がなぜ襲撃されたのかって話」

「そいつは俺が聞いてることに関係してるってのか？」

「さあ、どうでしょう？」

女は流れるような視線を俺に向けた。その流し目に思わずドキリとした。それを見た俺は、突如として沸き起こった性欲にそのまま身を任せてしまいそうになるが、今はまだ駄目だ。

ぐっと自制しながら、俺は肩をすくめた。そういわれては、黙って聞くしかない。

「今井の家は実をいうと当時、島津の大株主だったのよ。それと、もう一つ。今井の末娘が病気だったこと。この二つがあったから、あの事件は起こった。

今井は島津製薬に出資し、島津は今井の末娘の病気のために薬を……それが両者の間でなされた契約だったの。だけど、それは突如

として破綻した。
　その理由は分からないわ。結果、島津は娘さんに薬を与えず、今井は島津への出資を取りやめた。互いにビジネスであるはずなのに、それをお互い簡単に受託したの。これに関して、いまだ諸説言われてるくらいにね」
　確かにビジネスであれば、そんな簡単に互いの契約を破棄したりするものではない。考えてられるのは、やはり今井の娘に関してだろう。その薬の開発やなんかが芳しくないために、今井側から手を切った、これは十分考慮できるところだ。
　しかし、この考えには一つだけ欠点がある。当時、その屋敷の側近として働いていたあの男、殺し屋だった佐竹がいっていたことだ。今井の娘は家族から見放されていたと。
　あの男の口ぶりに嘘はなかった。そうなると、もっと別の可能性を考えるべきなのかもしれない。
「それで」
「これは推測も入っているから、絶対とは言わない。けど、一番可能性があるわ。おそらく新薬のために、今井のお嬢さんは、身体をますます悪くしていった。
　それを知って今井は、島津との契約を破棄したのよ。今井は、その時すでに島津をこえる大金持ちだし、わざわざ手を結び続ける必要はない。もとより、そのために手を組んだのなら、それは十分にあると思うわ」
「名探偵さんにはお手上げだ、といいたいとこだがな、残念なことにその推理には一つ大きな穴があるぜ。今井は娘のことなんて、なんとも思っていなかったそうだ。彼女は、親兄弟から見限られていたらしい」
「……そう。ちょっと自信あったんだけどな」
　かなり自信を持っていたのか、苦笑う彼女は、明らかに落胆の色が見てとれた。
「まぁ、いい。それで、そいつがどう話に繋がるんだ？」

「今話したように、今井側から手を切るよう持ちかけたのは間違いないと思うの。そうでなきゃ、屋敷を襲うなんてしないもの。
屋敷が襲われたその日、幸か不幸か、今井本人が不在の時だった。本当ならその日、屋敷に今井自身が訪れる予定だったそうよ」
「……だが、今井は屋敷には現れなかった」
松下の言葉をひきとり俺がいうと、女がそれに首を縦にして振った。
確か佐竹は、襲撃の少し前に解雇されたのだといっていた。そして、隔離されていた少女の屋敷に訪れるはずだった今井……。
しかし、少女は家族から見限られていたというから、もしかすると今井自身、屋敷が襲撃されるということをあらかじめ知っていたかもしれない。
だとすれば、少女は父の手によって生き餌にされたということだ。佐竹はそのことに気付いていたのだろうか。今となっては、後の祭りではあるが。
「いくら見限られていたにしろ、彼女の死は今井にとって、大層なスキャンダルになった。それと同時に無言の警告にもなったのね、次はお前だっていうね。
けど、それでも今井は島津の言いなりにはならなかった。そんな状態が何年か続いて、ある日、今井は姿を消していたの。次期当主になるはずだった息子とともにね」
女はそこで一旦ベッドを離れ、サイドボードに置いてあるバーボンを取り出してきた。
「あなたもどう?」
「ターキーか。そうだな、俺ももらおう。ストレートだ」
松下はロックグラスに氷を放り込み、バーボンを注いだ。続いて、同じ形のグラスにとくとくと、うまそうにバーボンを注ぐ。
「はい」
「ああ、ありがとうよ」
「ふふ、ありがとうだなんて。あなたみたいな人って、礼なんて言

わないものと思ってたわ」
ただの癖のようなもので、そう教わって育てられたのだけの話だ。女の言葉を受け流しながら、俺はバーボンウイスキーの液体を口に流し込む。
ターキーは五十パーセントを超えるアルコール度数のわりに、マイルドな口あたりが特徴のウイスキーだ。スコッチに慣れてしまうと、やや物足りなさを感じなくもないが、久しぶりに呑むとやはり美味いものだ。
女もそっとグラスに口づけながら、琥珀色をした液体を飲んでいる。その姿は実に蠱惑的で、せっかく押さえ込んだ性欲が、またずくずくと理性の壁を破って顔をのぞかせる。
その口からグラスを離すと、カランと氷が心地よい音を響かせた。
「それで、どこまで話したかしら」
「息子ととんずらしたんだろう？　そこからだ」
「そうだったわね。だけど、それから一年ほどして今井は死んだらしいという話を聞いたわ。私も詳しくは知らないけどね。だけどそれに前後して、島津製薬からある物が盗まれるようになっていたの」
この話は聞き覚えがあった。確か、あのストーカー事件の時に青山から聞いた話だ。盗まれたのは確か……。
「……カメラ。デジタル機器……」
記憶をたよりに、俺はそうつぶやいていた。それで間違いはなかったはずだ。松下はなぜそれをと言わんばかりの顔になり、肩をすくめた。
「あなたこそ素晴らしい探偵だわ。そう、島津の研究所から盗まれたのには、場違いとも言える高精度のカメラなんかもあったわ。それ以外にも新薬なんかもね。
いえ、島津にとっては、その新薬が盗み出されることのほうが、はるかに由々しき事態だった」
「その薬ってのは、どんなものだったんだ？」

不死の薬を作るという、正気の沙汰とは思えない話をすでに聞いていた俺は、確認程度に聞き返した。

だが、松下の口から出てきたのは、それとは違い、全く予想だにしないことだった。

「……人間を進化させるため」

「進化？」

俺は声が少し裏返っていた。当然だ。人間の進化という単語が語られるなど、思いもしないことだ。

「そして、人間を不死の存在にするというのが最終目標だとも聞いたわ。いえ、逆かもしれない」

「おいおい、あんた、まさかそんな眉つばな話を信じてるんじゃぁあるまいな」

「見損なわないで。確かに不老だったら良いと思うことはあるわよ。だって当然でしょ？　女なんだから。

でもね、だからと言ってそんなこと信じられるわけないわ。自分を知っている人が老いては死んでいくのに、それを横目に、一人だけ生きながらえていくなんて、考えたくもないわよ。

でも……そんな実験を本気になって続けている島津は、もはや、狂気にとりつかれているとしか私には思えないのも事実」

松下は、自分の雇い主を随分ときつくいっている。まともな思考をもった人間なら、それが当然だろう。

「クックック、あんたも存外、大変みたいだな」

「お給料が良くなければ、さっさと辞めてるわよ」

そうか。だからこの女は伊達にとり入ろうとしたのかもしれない。しかし、気付けば伊達のことを本気になってしまったのだろう。伊達をやったのが自分であるというのを明かさなかったのは、やはり正解だった。

「だが、その狂気に取り込まれた人間は、伊達から何人もの人間を買って、実験していたんだろう」

俺がそういうと、松下は黙った。どうもこの女は印象ほど、凝り

固まった人間ではないようだ。この女の爪の垢を煎じて、あの女狐に飲ませてやりたいと俺は思えたほどだ。

「……それを否定したいけど、できないのが痛いわね。しかも、それでお給料貰っている訳だしね……」

「それで実験の方はどうなったんだ？」

「当然失敗に決まってるわ。でも、それとは別に、様々な新薬ができたのも否定できないの。今、島津製薬から市販されている薬は、どれもがその実験からの副産物にすぎないわ。もちろん、市販できないものもあるわ」

「その市販できないような薬ってのは、どんなものなんだ」

「人間の感覚をとても鋭敏にして、集中力を増大させるという効果があるらしい。何年か前だったか、それが一応の完成ということで合意がなされたらしいけど、副作用がいくつもあってとてもではないけど、そんなものを完成品だなんて言えない代物だった」

「……その副作用ってのは、唐突に頭がいたくなったりしないか？　それと麻薬のような常習性と同時にだ」

「……あなた、やっぱり探偵になるべきじゃない？　ううん、本当は探偵なの？　その通りよ」

そうか……六年半前、奴の明らかな異常さは、その薬が原因だったのだ。そうに違いない。

だとすれば、奴も実験体にされた被害者だったというわけか。

「その薬は、肉体に劇的な変化をもたらすかもしれないらしくて、それが今なお研究中といったところね。

……だけどそこまでに、あなたの言う通り、何百、いいえ何千かもしれないわ。人間を使って実験しているのよ、島津は。そして、それらも全て今井重工とのコネクションがあったからなのよ。それと、今井の持っていた株や事業の一部の買収もね。

以来、島津製薬は市場を拡大し続けているわけ」

「なるほどな、こいつは面白い話が聞けたよ。で、あんたはずっと今のポストにいたいのか？　いや、島津の下で働いていたいのか？」

「……残念ながら、私には辞められないわけがあるの。でも、それができるのなら、すぐにだって辞めたいわ」
「なんなんだ、その理由ってのは」
「……単純よ。母がね、とても重い難病にかかっているの。治せなくはないけど、それには数千万のお金が必要なのよ。それを、会社に肩代わりさせているというわけなの」
「なるほどな。……もしかしたら、俺、いや俺達がなんとかできるかもしれない」
「え？」
俺の言葉に、今度は松下が素っ頓狂な声をあげた。
「な、何いっているの。そんなの無理よ」
「いいや、決して無理な話じゃぁないぜ。ようするに、連中に金の話なんざできないくらいに混乱させてやればいいのさ。後は、あんたはその隙にとんずらすればいい」
俺の出した提案に、松下はえらく困惑しているようだが、俺は見逃さなかった。その顔には、そんな可能性があるというなら、それに賭けてみたいという思惑が滲み出ているのを。
「まぁいい。あんたが乗り気であろうとなかろうと、俺には島津とはどうしても決着を付けなくちゃぁならない因縁があるんでね。もし、あんたがその気になれば、多少なりとも、それを手伝ってやってもいいってだけの話だ。ま、ついでだと思えばいい」
「……少し時間をくれない？」
「ああ、構わない。だが、あまり時間があるわけではないから、早めにな。
それと、こいつは俺の個人的に聞きたいことなんだが、いいか？」
そう、俺にとってはこっちの方が重要なのだ。サックの中から、伊達の家で手に入れたファイルを取り出して、松下に見せる。沙弥佳のページを開いて、指差した。
「この少女のことだ。あんた、何か知らないか？」
松下は俺からファイルを受け取り、しげしげとページに添付され

た妹の写真を見た。
「……ごめんなさい、分からないわ。でもこれを見る限り、六年前に島津の研究所に連れて行かれたのは間違いないと思うわ」
「そうか……」
そう簡単にはいかないか。あまり期待はしていなかったが、どこかで期待していたのだろう、やはり少なからず落胆があった。
「でも」
「でも、なんだ？」
「島津の研究所に行けば、何かしら記録があるはずよ。連れてこられた人達は、行動が逐一記録されることになっているから。だから、きっとこの子のことも何か分かるはずよ」
松下ははっきりとした口調でいった。もちろん、島津製薬にはもとより行くつもりではあったが、スムースに行くというならそれに越したことはない。そして、連中が何も知らず呆けているうちに、大暴れしてやるつもりなのだ。
松下にはいえないが、伊達を地獄に落としたのだから、島津の連中を地獄に落とさない道理はないというものだ。ましてや連中は、不死だとか人間の進化だとか、狂気の沙汰としか思えないことに取り組み、何百何千という人間を殺したのだ。
だというのに、連中を地獄に落とさないというのでは、沽券に関わる問題だ。奴らは、間違いなく沙弥佳を実験動物のように扱ったのだ。そんな連中を許しておけるわけがない。
カラン、という氷がグラスの内側をたたいた音がした。その音にはっとし、音の発生源の方をみやると、松下がひどく扇情的な眼差しで俺を見ていた。
ルージュがひかれ、わずかに開かれた唇の内側で、舌がちろちろと別の生物かのように動いているのが分かる。俺としても、いい加減限界にきている。そろそろ理性を取っ払い、その下にある性欲の塊をぶつけてもいいだろう。目の前には、バスタオル一枚でいる一匹の牝がいるのだ。もう我慢することもない。

俺はバーボンを一息に呑み、グラスを柔らかそうな絨毯の上に投げる。その勢いのまま、女の肩に手をやった。

「時間をちょうだいっていったけど、いいわ、あなたに賭けてみたい。その代わり、お願い。私をこの不安から解放して。今だけ……今だけでいいから」

これより先、言葉はいらなかった。語りかける言葉など、たとえどんな愛の言葉であっても陳腐でしかない。

女の身体を引き寄せ、その唇に口付ける。舌が俺の口内に割って入り、それに俺も舌で応える。舌の絡み合いに女は興奮し、鼻息が荒い。

グラスはそばのテーブルに置き、俺の背中や頭に手を廻してくる。

「お願い……何もかも、今は忘れさせて」

強引に女をベッドに寝かせた。身体に巻かれたバスタオルがはだけ、その長い脚がより強調される。

すでに湿り気を帯びた女の股間に手をやり、さらにその高ぶりを解放させてやる。

女は頬を桜色に染め、乳首を立たせていく。その様子を、俺はニヤリと唇を歪ませながら、濡れそぼってきたそこに顔をもっていった。

部屋の中は、裸になった男女の荒い息と、ベッドが軋む音。それに混じって女の嬌声だけがあった。

第35章

『助けて、お兄ちゃん……』

まるでどこか別の世界の出来事かのように、俺は呆けながらそいつを見つめていた。

沙弥佳が一人苦しんでいる姿だ。分かっている。これはただのイメージに過ぎない。

『なんで助けに来てくれないの？　いつも助けに来てくれたじゃない……助けに来てよ。助けに来てくれないと私……』

ひどく濁った目で、まるで誰かを睨むように沙弥佳は虚空を見つめている。

沙弥佳……おまえはなんでそんなにまで……いや、なんでそんな恰好をしてるんだ。

沙弥佳は服を着ていない。一糸纏わぬ姿のまま呪詛のような譫言を繰り返し、俺への助けを求めている沙弥佳の姿だけがあった。

けれど、その姿がだんだん遠ざかっていく。

いつもなら、抵抗の一つもするところだが、あの姿の沙弥佳にはどうにも身体が動こうとしない。

そして、こう締め括られるのだ。

『……お兄ちゃん、私を裏切るの……』

ひどく重く、のしかかってくるような感触のある言葉で締め括られるのだ。

違う、俺はおまえを――――

不快な気分で目を覚ました。大して暑くもないのに、えらく汗をかいている。原因は分かっているのだ、あの夢を見たから……そのためだ。

年に一度見るか見ないかの夢だが、あの糞みたいな夢から覚めると、いつもこうなのだ。

ひどい気分になっている俺は、ため息混じりにベッドから這いでた。シャワーを浴びるためだ。あの夢の後にとる行動も、もはや習慣になったといってもいいかもしれない。

あの夢の中の沙弥佳は、俺を怨みに怨んで呪うかのようだった。いつだったか、そういう夢を見るのは、自分の中の罪悪感が、その対象に対してそう感じさせているためだと聞いたことがあったが、本当だろうか。

だとすれば、沙弥佳と……沙弥佳が本当に生きていて、沙弥佳と出会うことがあれば、そんな気持ちもなくなるのだろうか。シャワーを浴びながら、そんなことをぼんやりと考えていた。

ピリリリリリ――

携帯の鳴る音が、締め切ったバスルームの中にまで聞こえてきた。最上の親父から拝借してきた携帯だ。昨日帰ってきてから、ジャケットの中にそのままになったままだった。音が聞こえるということは、キッチンあたりに置いてあるのだろう。

俺はけだるい気分でシャワーを終え、バスタオルで頭を拭きながら、バスルームを出た。当然、携帯はまだ鳴っている。

キッチンに投げ出されたスーツから携帯を取り出し、いつぞやのように手ぶらにして出た。

「もしもし」
『九鬼か？　田神だ』
「ああ。作戦は今晩かな」
『そういうことになる。十六時に指定の場所で落ち合おう』
「分かった。田神……すまないな、手伝ってもらって」
『なんだ、君らしくないな。それに気にすることはない、成り行きだ。今回の件、まんざら自分と無関係というわけでもない』
そう言うのは、田神の謙遜なのかどうかまでは分からないが、この男に手伝ってもらえるのは、俺には百人力といってもいい。
「そうか……なら、こっちも遠慮なくいくとするよ」
『九鬼、何かあったのか？』
怪訝な様子で田神が聞いてくる。相変わらず勘の鋭いやつだ。
「いいや、特にないさ。あまり熟睡できなくてね」
『ならいいんだが……。とにかく、十六時だ』
「ああ、後でな」
どちらからとも言わず、電話を切った。
本当なら一昨日の夜、松下薫との情事の後に研究所に乗り込む気だった。しかし、それを田神に伝えたところ、止められたのだ。いや、今にして思えばそれが当たり前だろう。俺は妹が絡むと、どうも後先考えられなくなっていけない。
それに今、自分の装備を考えれば当然だ。拳銃が二丁に、マシンガンが一梃。これだけでは、あまりに無謀だろう。
作戦を遂行する時であるなら構わないが、俺は最終的に、研究所そのものを粉々にしてやるつもりなのだ。そうするつもりなら、とてもではないが、こんな装備では無理なのだ。
最上の親父が生きていればなんとかなったかもしれないが、もう死んでしまった今、そのコネクションもなくなってしまった。そこで田神が、自分の知り合いに話をつけてみよう、ということになったのである。全く、あの男には本当に頭が下がる思いだ。
となると、田神も行くということになり、同時にエリナも行くこ

とになるわけだ。
向こうに着いてから必要になることは、松下に一任してある。しかし、それにはどうしても一日はかかるということもあって、今日まで暴れるのはお預けということになったわけだ。
携帯のディスプレイは、今が十一時になったことを告げている。時間までまだ余裕はあるが、かと言って寝るわけにもいかない。
何もすることがないといっても、なにかしらできることがないだろうか。気持ちが高ぶっているせいか、やけに行動を起こしたくてたまらないといった感じだ。こういう日のコンディションは悪くない。むしろ、歓迎すべきコンディションと言えるだろう。
だが、ある程度のガス抜きをしておかなければ、本番で危うくなる。経験上、そうしたほうが良いと知っている俺だから、今回もそうした方がいいのだ。
とはいえ、どうしたものか……。しばらく考えはしたものの、良いアイディアは浮かんでこない。俺はため息をついた。仕方ない、適当に街に繰り出してみるとしよう。何か発見があるだろう。そうすれば、何か良いアイディアも浮かぶかもしれない。
そうと決まれば即行動だ。さっきの夢のせいもあるからか、無性に体を動かしたい気分だ。
俺は服を着て、颯爽と外へ出た。いつものジャケットを羽織って、適当にぶらぶらすることに決めたのだ。何か思い浮かべば、その時に行動を起こせばいい。こういう時は、どこか適当に何かネタの掴めそうな場所に行くとしよう。それにそういう時の方が、思わぬ収穫があったりするものだ。
適当に街中を歩いていたとき、後ろから声をかけられた。振り向けば、そこにはあの売春婦であるレイミが、私服姿で立っていたのだ。レイミは左右を確認して、小走りにやってくる。
「誰かと思えば、お兄さんじゃない」
「よう。今日はどうしたんだ？」

隣にきたレイミは、俺の腕に自身の腕を絡ませてきた。
「まだ時間じゃないもの。それに、学校も行ってないしね」
「やっぱり、君は学生だったのか」
「元学生、かな？　辞めちゃったから」
「そうなのか」
となると、二十歳前後といったところなのだろうが、以前も思ったようにいくらか若く見える。
「で、今日はどうしたんだ？」
「な～んにも。やることなくて、暇してたとこ。お兄さんは？」
「俺も同じもんだ。後数時間は暇してる」
「そう。だったら食事にでも行きましょうよ。私、まだなの」
「そうだな、それもいい」
「それじゃあ決まりね。私、美味しいお店知っているから、連れてったげる」
そういってレイミは、俺の手を引いていく。俺は抵抗もせず、なすがままにされていた。何日か前に会った時もそうだったが、結構強引な娘だ。まぁ、そんなところがなかなかに好感がもてるところなのだが。

俺は今躊躇っていた。こんなことがあるのだろうか。もちろん、そんなことがないなんてことは必ずしもではないだろう。しかし、こうも偶然が重なるものなのか。もしかしたら、レイミは回し者だったんじゃあるまいな、そんな風にすら邪推してしまう。
「まさか、よりによってここか……」
「あれ、もしかして、ここ知ってた？　うー残念だなー」
「いや、そいつはいいんだが、ここはちょっとな……」
レイミが連れてきた店は、あろうことか、ジュリオの店だった。タクシーに乗って、どことなく見知った風景だと思った矢先、レイミに促され降りた場所がジュリオの店の裏だったのだ。
他意はないはずだが、生きている世界が違うためか勘繰ってしま

う。そんなこと考えすぎだというのは、分かってはいてもだ。
「ここの店長さん、すごく面白いよね。私、すごく好きなんだぁ」
そんなことを言うレイミに、俺はただ、そうかとしか言えなかった。
（何事もなければいいが）
しかし、そんな俺の願いは聞き届けられることはなかった。思い戸惑っている俺に、レイミが早く入ろうと言って急かせる。
「あ～ここが、先輩の働いてるお店なんだー。結構いい雰囲気～」
「ふふ、でしょう？　だから私も働いてみたくなったんだ」
店に入ろうとした時、反対側から四人の女子大生と思われるのグループがやってきた。そして、その中に俺の見知った顔……忘れたくても忘れられない顔があった。
「じゃあ、早速……」
彼女達が入ろうとした時、その人物と目が合った。そのグループの中でも、一際目立つ容姿をした彼女と。
目があった俺達は、互いに歩く足が止まった。
「……綾子ちゃん」
「……」
呟く俺に、彼女は微動だにしない。その顔には驚きと、戸惑いの色が見てとれる。かくいう俺も、きっと似たようなものだろう。
手を引っ張っているレイミも、店に入ろうとしていた彼女の取り巻き達も、そんな俺達につられて動きを止める。
「あれークキさーんじゃない！　ちゃんと戻って」
店の中から俺を見たのだろう、出てきたジュリオがただならぬ雰囲気を悟ったのか、台詞も途中で俺達を見た。
なんとも落ち着かない雰囲気の中に、俺はいた。ジュリオの計らいで、少し離れた場所にそれぞれテーブルを宛がわれたが、どう見たって、彼女も俺も意識しているのが分かる。いや、意識しないほうがおかしいというもので、取り巻きの連中も、明らかに俺と彼女

の関係に興味津々といったところだろう。
　まして、向こうはそういうのに敏感なお年頃だ。そして俺の目の前で、明らかに先ほどまでと比べ、ご機嫌ななめなレイミもだ。
　グループの方は、きっと綾子ちゃんにあれやこれやと聞いているかもしれないが、俺達はつい何十分か前とは比べられないほど、冷え冷えとした雰囲気になっている。
「……ふーん、あんな娘が好みだったんだ」
“あんな”という部分を強調しながら、レイミが言う。しかも、わざわざ人に聞こえるような大きな声でだ。
「そういうわけじゃぁない」
「じゃあ、どういうわけ？」
「なんだっていいだろう。昔馴染みなだけだ」
　あまり勘繰られたくない俺は、強制的にこの話題を終わらせようとするが、レイミはそうとはしなかった。
「本当にただの昔馴染みなだけ？　私には全然そんな風には見えなかったけど」
　お次は語尾を強調した。かなりお冠らしいが、大体、この女は何を怒っているんだ。俺と恋人同士というのならまだ分かるが、別にそういうわけでもない。そもそも、今の俺は特定の恋人などは、いりはしないのだ。
「そんな風に見えなくとも、そうなんだよ」
「……そうやって無理に言う時って、大体嘘なんだよね」
「大体はそうかもしれんが、そうじゃない時だってあるだろう」
「……そうかもね」
　レイミはそういいつつも、明らかに信じていない。やれやれ、女ってのはなんだってこうなんだ……。俺はため息をついて、何か別の話題を考えようとした時だった。
「……なによ」
　俺は何も言ってない。そう口を開きかけたとき、背後から声がした。

「あの……」
振り向かなくても分かる。綾子ちゃんだ。
「……」
「……なに？　さっさと用件言ったら？」
「えと……その」
「言うこともないのにわざわざ来たの？　昔馴染みだかなんだか知らないけど、昔の男が自分じゃない女と話してるのが気に入らないから、わざわざ咎めにきたの？　それともヨリ戻したいとか？」
レイミはさらに刺々しい口調で綾子ちゃんを罵倒し、まくし立てる。
「お、おい」
「お兄さんは黙っててよ。私はその女に言ってるの。ねぇ、綾子先輩？」
綾子先輩？　その単語に俺は綾子ちゃんの方を振り向いた。綾子ちゃんは、明らかにバツの悪そうな顔をしている。
「君らは……知り合いだったのか」
「そうよ？　同じ学校で同じ学部の、先輩と後輩。ね、先輩」
「……ええ、そうね。北条さん」
レイミの言っていることは間違いではないにしても、敵にしているかのようなその口ぶりには、疑問を持たざるを得ない。それに北条……この名前は、どこかで聞き覚えのある名前だった。一体どこでだったか……。
俺は記憶の中から北条という名前を引きずり出そうとするが、一向に出てくる気配はない。
「でも、驚きだな。先輩がお兄さんと知り合いだったなんて。ていうか、先輩って男嫌いなんでしょ？」
「なんでそう思うの？」
「だって、今まで男とほとんど付き合ったことなかったじゃん。あんなに何人にも言い寄られてるのにさー」
「それは……」

なるほど。やはり綾子ちゃんは大学でもモテているらしい。まぁ、当然といえば当然だろう。俺がこんな身分でなければ、間違いなく口説いてしまいたくなるに決まっている。

そもそも俺達は……いや、よそう。そんなのは、もう過去のことだ。過去がどうあれ、綾子ちゃんのことはN市に行く前日に終わったことではないか。いまさらそれを掘り起こすこともない。

何か言いかけながら、綾子ちゃんは俺の方を一瞥する。

「あ、あなたには関係ないでしょう？」

「そうだね、このことには関係ない。でも、人のものに手を出そうとする人には、きちんと釘うっておかないと、さ」

「え……人のものって、九鬼さんと……？」

「そうよ、付き合ってるの。だから今更、先輩に出てきてほしくないんですよ」

「おい、勝手に話を進めるな」

「私、気分悪くなっちゃった。もう行きましょ？」

レイミが席を立ち、俺の手をとって店を出るよう促した。つられて俺も席を立ったものの、足は動こうとしない。

「ま、待って」

「まだ何か？　先輩」

「……」

レイミに睨まれた綾子ちゃんは、一度は顔を伏せたものの、胸に置かれた手をにぎりしめ、顔をあげた。

「……少し、話がしたいんです」

「私は別に話なんてありませんけど」

「おい、レイミ。さっきからなんなんだ、その言い草は」

さすがにいたたまれなくなった俺は、つい綾子ちゃんに助け舟を出してしまった。庇護するように俺が少し強く言ったためか、レイミは俺にもその睨むような視線を向けてきたが、どこか諦めたように、好きにすればとだけ言った。

それを聞いた綾子ちゃんも、どことなく安堵したようだった。終

わりにするはずが、俺は何をしてるんだ……。
「……その本当に、お二人はお付き合いなさってるんですか？」
「だから今言ったでしょ！　私とこの人は付き合ってるの！」
一度は黙ったレイミが、今まで以上に語気を強めてまくし立てる。
しかし、綾子ちゃんはもはやそんなことなど気にしていないのか、悠然たる態度ではっきりと口にした。
「北条さんには聞いてません。私は九鬼さんに聞いてるんです」
その台詞を聞いたレイミは、瞳を大きくし、わなわなと全身を震わせ始めた次の瞬間、手を振り上げた。
「放してよっ！　この女、どこまで私をっ」
振り上げられた手を、俺は咄嗟に掴んだ。レイミは、俺と綾子ちゃんを睨みながらわめき立てた。
「本当のことです。あなたに聞いたわけではありません」
おいおい勘弁してくれ。今、その台詞は売り言葉に買い言葉だ……。
そういえば、綾子ちゃんは昔も一度そうだと決めると、それを貫くタイプの子だったな。昔から何も変わっちゃいないんだな、君は……。それがどうしようもなく嬉しく感じるが、今はそんな感傷に浸っているわけにはいかない。
「レイミっ、落ち着け」
今にも綾子ちゃんに殴り掛かりそうな勢いのレイミを、押さえ付けながらいった。
「綾子ちゃん、君は話をしたいんだろう。君も冷静になれ」
そうは言うものの、二人は一向に睨み合うのをやめない。いや、一方的に睨んでいるのはレイミだけで、一方の綾子ちゃんは、それを鼻にもかけずにレイミを眺めているといったところだろうか。
しかし、レイミにはそれがまた気に食わないのだろう、火に油を注ぐような形になるのだ。
興奮しているレイミを窘める。その内に、レイミも少しは落ち着きを見せ始めた。

「……それで、付き合っているか、だったな」
「はい」
参ったな、こういう時はなんて言やぁいいんだ……。ストレートに本当のことを言うか、それともレイミに合わせた方がいいのか。俺個人としては、綾子ちゃんもレイミも巻き込みたくはないので、本当のことを言って両成敗ということにしたいところだが。
少しの間考えてみたものの、それ以上に良い案が浮かばなかった俺は、小さくため息をついて、レイミと綾子ちゃんを見た。気付けば、俺達以外誰も喋っておらず、誰もがこちらに注目ないし、聞き耳を立てているようだった。
「俺は……俺は、別にレイミと付き合っているわけじゃない」
綾子ちゃんの目を見ながら、はっきりといった。それを聞いた両者の反応は、面白いほど極端だった。片やホッとするように微笑み、片やみるみるうちに、怒るような泣いてしまいそうな顔になる。
レイミとしては嘘でも良いから、肯定してもらいたかったのだろうが、そういうわけにもいかない。
「というよりも、俺は最初から誰とも付き合うつもりはないんだ。誰ともな」
俺は二人を交互に見て言った。しばしの間、俺達に沈黙がおりたが、その沈黙を破ったのはレイミだった。
「なによそれ……」
「……」
「ほんの四、五日前に抱いてくれたの……あれ、嘘だったの……」
「あれは」
そう言いかけた時、今度は綾子ちゃんが口を開いた。
「どういうことですか……？」
「どういうことも何もそういうことよ。この人と私は寝たの。もしかして、そんなことも分からないくらいウブだなんて言わないわよね」
先ほどとはうって代わり、綾子ちゃんが驚愕した表情でレイミを

見ている。レイミはと言えば、まるで勝ち誇っているような表情をしていただ。

「そ、それも嘘なんですよね……？」

綾子ちゃんが驚愕したその表情のまま、俺へと視線を向けてくる。だが、これぱかりは嘘とは言えない。俺は良かれと思って本当のことを言ったまでだったが、今更レイミと寝たことだけ嘘でしたと言えるはずもない。ましてや、本人の目の前でだ。

「……」

俺は苦い顔をしながら伏せた。綾子ちゃんは、それが真実であると悟ったのだろう、一転、泣き出してしまいそうになっていた。

「これで分かったでしょうっ、付き合ってなくても私達はもう繋がりあってるのよっ。今更先輩が出てくる幕なんてないのよっ」

喚くのを通り越し、すでにがなり立てるかのようにレイミは綾子ちゃんを罵倒していく。

「もういい。やめろ」

がなり立てていくうちに、だんだんと綾子ちゃんの方へと近付き始めていたレイミを引き離す。綾子ちゃんは何も言わず、瞳に涙をためながらも流すのだけは堪え、俺を上目使いに見ていた。

それを察したレイミはまたもうるさく喚く。

「……このっ……あんた何様だ！　人の男に色目使うなっ。あんたこそ売女じゃないかっ」

「もうやめろと言ってるだろう！」

怒声をあげてレイミを黙らせる。この二人に何があったのかは知らないが、とにかくさっさとここを出た方がいい。それに、これ以上綾子ちゃんを傷つけるのは嫌だった。

「何よ！　あなたまでこの売女の味方する――っ！？」

渇いた音が響いた。手が少しだけ熱いような気がする。俺がレイミの頬を張ったのだ。とは言っても手加減したつもりなので、そこまで痛みはないはずだ。

「……ぁ」

「……」

レイミは今の今まで喚きちらしていたのが嘘かのように静まり、張られた左頬を手で押さえながら小さく呻いた。綾子ちゃんも、まさか俺が手をあげるとは思わなかったのか、びっくりしている。

だが、綾子ちゃんを売女と呼ばれて嫌な気持ちしかしなかった俺は、仕方なく彼女の頬を張ったのだった。

「……もうやめろと言ったろう」

「……」

「あ……なんで……」

呆けたように、なぜ自分がといいたそうだった。しかし状況が整理できたのか、途端に嫉妬まじりの形相へと変化していき、わなわなと身体をわななかせる。

「……あなたまで……なんだ」

レイミは聞き取るのも難しいくらいの小さな声でつぶやいた。

「あなたまでその女の味方、するんだ……なんで？　なんで皆……なんで皆そうなのっ。なんで皆その女のことばかり！　なんでよっなんでいつも私だけなのっ！」

今度は俺が動揺する番だった。レイミが突然泣きだしたのだ。いや、その言葉からは、ただ泣くのではなく、まさしく号泣だった。心からの絶叫と言った方がいいのだろうか。

レイミは心底哀しげな表情で俺を見た。何かいいたげにしていたが、下唇を噛み、言葉を飲み込んだ。

「……レイミ」

「触るなっ」

その拒絶の一言の後、レイミは大股で店から出て行き、瞬く間に視界から消えた。確かに頬を張ったのは悪かったとは思うが、別にそれは拒絶の意味だったわけではない。俺はあくまで、あの罵ることをやめてほしかっただけだ。だと言うのにそれがまさか、こんなことになるなんて思いもしなかった。

「……あの九鬼さん」

「ん……」

全く、バツの悪いことこの上ない。本当ならば、俺はすぐにでもレイミの後を追えば良かったのかもしれない。しかし、そのタイミングを逃がしてしまった。

それに、もう綾子ちゃんとも会うつもりはなかったはずなのに、なぜか今ここを離れるのは躊躇われたのだ。なんの因果か、こうしてまた会ってしまった。綾子ちゃんにはもう関わるのはよそう、そう決めたはずなのにだ。

「とりあえず一旦外に出よう。今更だが、目立っていけない」

綾子ちゃんがそれに頷き、二人して店の外に出た。

「……すまなかったな、まさかあんなことになるなんて思わなかった」

「いえ……私がお二人に話しかけたのも悪かったと思ってますから……。こちらこそ、すみませんでした」

だったら、とは言わなかった。あの日も、こちらの独りよがりと言っていい後味の悪い別れ方をしたのだ。仕方のない話だ。

むしろ、俺は綾子ちゃんに罵られたって文句の言えない立場だ。にも関わらず、俺は相変わらず君を哀しませてばかりだ。

「謝らないでくれ。俺は君にそんなこと言われるような立場じゃぁない」

（本当なら、こっちが謝らないといけないはずなんだ）

申し訳ないと思いつつも、なんで口に出せないのか不思議だ。エゴからか？　それとも、取るに足らないプライドからなのか？　そんなことを考えているうちに、綾子ちゃんが先に口を開いた。

「……北条さん」

「ああ」

「北条さんと……その……寝た、んですか？」

「……ああ」

なんて答えようか迷いはしたが、今更下手に言い訳などしようも

ないだろう。俺は素直に肯定した。
「レイミは本当に君の後輩なのか？」
「はい……。北条玲美さん、あの子は私と同じ大学で一つ下なんです。初めて会ったのは二年前、大学内のサークル募集の時だったなぁ」
綾子ちゃんは過去を懐かしむように、ゆっくりと語り始めた。
「最初はね、すごく素直でいい子だったんですよ？　人懐っこくて皆に慕われて……私とは大違いだったなぁ」
「そうだったのか」
イメージとは少し違うが、分かる気がする。付き合いがたった数日という、短い俺でも、レイミの人懐っこさは認めるところだ。
そもそも、今にして思えばあの性格もそうだが、明らかになりきれていない、娼婦として作っている態度、そしてその素地には、教養の良さが見え隠れしているように思えるのだ。
「特に私とは仲良くて、いつも先輩先輩って慕ってくれて。良く遊びにも行ったっけ……。でも」
綾子ちゃんはそこで一度区切った。楽しい出来事も、ある日突然どうしようもなく悲しい思い出に変わってしまうことがある。
「去年の夏休みの少し前くらいだったかな。あの子、突然学校に来なくなったんです。今までは、一日だって休んだことなかったのに。毎日話してたのに、本当に突然だった。それから一日も学校に来ることなく夏休みになって。さすがに心配であの子の家に行ったんです。でも、その家にもいる様子がなかった……。休みの間、時間がある限り家に行ったけど、相変わらずで……。
そうしているうちに、休みも終わりに近づいたある日、空き家になっちゃってたんですよ。もう訳が分からなくなっちゃって。
私、九鬼さんみたいに行動力ないから、それ以上は何もできなかった」
「当然、電話にもでなかったんだろう」
辛そうに綾子ちゃんは頷いた。この子は今も自虐的なところも変

わっていないようだ。
「学校が始まってからも、当然来ることはなかったんです。それどころか、学校辞めてたんですよ。もうびっくりしちゃって……。
頭が真っ白になっちゃって……またあの時みたいに、自分の好きな人がいなくなっちゃったのって思ったら私……」
あの時みたいに……その言葉を聞いてはっとした。そうだった。まるで他人事のように聞いていたが、俺も綾子ちゃんの前から消えた人間の一人だった。そして、沙弥佳もまたその一人だ。
「……ねぇ九鬼さん。北条って名前、聞き覚えないですか？」
「え？　ああ、君の口からその名前が出てきた時、どこかで聞いた記憶があると思ったんだが、いかんせん思い出せなかったよ」
「……昔、ストーカーをしていた……彼ですよ。あの北条さんの妹さんなんです、レイミちゃんは」
「あの時の、か……」
そうか、思い出した。俺と綾子ちゃんが知り合うきっかけになったあの事件。あの時の犯人の一人が、確かに北条という名だった。
「そうか。レイミはあの男の妹だったのか……」
「ええ。私もそれを知った時は驚きました。けれど、その時はもうあの子は消えた後だった……。私と北条さんの関係を知ったから、だから私のことを嫌いになっちゃって、いなくなったのかとか、もうそんな考えばかり……。
だけど違った。違ったんです。あの子がいなくなってしまった理由……それは私と北条さんとのことじゃなかった」
目を閉じて、ひとつひとつゆっくりと言葉を紡いでいく。
「北条さんが当時されていたお仕事のプロジェクトに、父が出資していたのですけど、そのプロジェクトが失敗してしまったんです。
怒りに怒った父は、北条さんと一方的に手を切り、最終的に圧力すらかけるようになったと聞きました」
「親父さんにかけあってみなかったのか？」
そう問うと、綾子ちゃんは首を振った。

「聞く耳持たないって、ああいうことを言うんだなって思ったくらいですよ。子供が口だしするようなことじゃないの一点張り」
「執念で知ることができたわけだ」
綾子ちゃんはそれにも首を振った。
「違うんです。レイミちゃんが学校を辞めたのを知って二ヶ月くらいした時、それこそ半年位前に偶然あの子と会ったんです。その時には、もう今みたいな恰好で……私が知っている彼女とは別人みたいになってて、最初、誰か分からなかったくらい。
でも、恰好もそうでしたけど、人が変わったみたいに罵られちゃって……」
「そうか、レイミの口からその話を聞いたのか……」
「そうです」
綾子ちゃんはその時のことを思い出したのか、苦渋に満ちた目をして虚空へ向けた。
「辛かった……でも、あの子はもっと辛かったはずなんです。……北条さんが亡くなったから」
「あの男が？」
綾子ちゃんをストーキングしていた男は、すでにこの世にいないらしい。あの男に関して、あまりいい思い出のない俺としては、死んだからといってどうという問題でもないが、死んでいるとは思わなかった。
「自殺として処理されたらしいんですが、あの子、お兄ちゃんが自殺なんて絶対するわけないって。あんたの父親が殺したんだって。
それで私自身……あまりしたくなかったけど、父の近辺を」
「洗ってみたのか」
「……はい。そしたら、父のやってきたことがたくさん出てきて……最初は信じられなかった。父がそんなことしていたなんて……。
でもそれと同時に、父は人に恨まれて当然なんだって思えたりもして……だけど私、どうすればいいか分からなくなったんです……。
だから、私、少しでも父から距離を置きたくなって、一人暮らし

してみたりとか当然、アルバイトもしないとって思ったんです。もちろん、そんなことしたって、今まで父が人にしてきたことの罪滅ぼしになるわけじゃないと思ってます。北条さんに対しても、レイミちゃんに対しても」

「……過去はもう変えられない。だけど、君は気付いてからは、少しでも自立しようと頑張ろうとしたんだろう？　なら良いことじゃぁないか」

「でも……」

「第一、君自身が北条を死においやったわけじゃぁないだろ？　君の親父さんがどんな悪どいことをしていたのかは分からないが、一つだけ俺がこの二十数年で学んだことがある。金持ちになるってことは、大なり小なり汚いことをしないと駄目なのさ。まぁ、かといってやってきたことが帳消しになるわけでもないがな。

親父さんは恨まれて当然だとしても、そいつが君を恨む理由だなんて、俺は違うと思うぜ。少なくとも、君は親父さんに代わって、虐げられてきた人達にすまないと思ってるんだろう？　だったら、その気持ちだけで十分じゃぁないのか？

レイミも、多分心のどこかでそいつは分かってるはずさ。しかし、肉親の死ってのは、どうしてもそんな気持ちを曇らせるからな。

一度は仲良くしていたんだろう。だったら、大丈夫さ。そのうちに、君を許そうという気持ちも芽生えるはずだ。

それにな、人を憎み続けるというのは、思いの外疲れることだからな。感情というのは、正のものであれ負のものであれ、保ち続けることは、ほぼ不可能に近い。

まぁ、好きでい続けることの方は、憎み続けることよりはまだしも楽なことで、可能なことなんだろうけどな」

最後の方は、綾子ちゃんに言うのでもなく、自分に言い聞かせているようにも思えた。しかし、いったことに間違いはない。人を思い続けるというのは、どんな感情であれ難しいものだ。

綾子ちゃんとレイミには、まだまだ冷却期間が必要だろうが、生

き続けている限り、前のように仲良くとまではいかなくとも、また話せる日が来るだろう。人間関係なんて、ちょっとしたことでこじれも、修復もできるものなのだ。

そんな俺の話を真面目に聞いてくれていた綾子ちゃんが、不意に微笑んだ。

「……ふふ、そういうところ、全然変わってないですね。お人よし……って言うのかな」

「……そうでもないさ」

本当にお人よしなら、人殺しなんてするはずがないだろう。以前、誰かに対しても思ったような気がするが。

「九鬼さん」

「ん？」

「ありがとうございます。九鬼さんに聞いてもらえて、少し気が楽になりました」

「そうか……ま、本当にただ聞いただけだが、それくらいならお安い御用だ」

「それに……また九鬼さんとこんなに話せるなんて、思いもしなかった。

レイミちゃんのことがあって以来、なんで私の周りからはいつも大切な人がいなくなるんだろうって思ってたんです、ずっと。

レイミちゃんも、お母さんも、さやちゃんも……皆、ある日突然いなくなっちゃって……それと」

ちらりと上目使いにこちらに視線を向ける。

「九鬼さんも……。だけど、九鬼さんとレイミちゃんは、またこうして会うことができたんです。だから九鬼さんの言葉、信じてみます。

今はまだ無理でもいずれはまた、レイミちゃんと他愛もないお喋りができるようになる日がくるのを信じます」

「……そうか」

俺は、君のそういうところに惚れたんだったっけな……。綾子ち

ゃんの話を聞きながら、ぼんやりと昔のことを思い出した。
田神が想いの力とは、実現させるための力だと言っていたが、そうかもしれない。少なくとも、今の綾子ちゃんを見ていると、なんとなくだが、そんな風に思えてしまう。
「あ……」
「どうした？」
「いえ……九鬼さん、やっと笑ってくれたなっと思って」
「笑う？」
「はい。今、確かに笑ってましたよ？　……本当、昔に戻ったみたいに」
笑ったつもりなどなかったが、つい笑みがこぼれていたらしい。やれやれ、俺は感情を隠すことができないと言うのは、本当のことらしい。
ぶっきらぼうにそんなはずはないと強がってはみせたが、昔のよしみだ。多分こちらのことなど、お見通しだろう。
「ねぇ、九鬼さん」
「なん――！？」
綾子ちゃんは俺がそっぽを向いたのを機に、そっと口づけしてきたのだ。俺の唇に、綾子ちゃんの唇の柔らかい感触とともに、綾子ちゃんから漂う甘い香りが俺の脳髄を刺激する。突然のことに、俺はそれ以上考えることができないでいた。
「……ん」
「……」
突然の口づけは、やはり突然に終わりを迎えた。見れば、綾子ちゃんは顔を朱く染め、目を合わせないように言った。
「……この前、あんなこと言われてショックでしたけど……私、まだ諦めたつもり、ないですから」
そういうと、深くお辞儀して小走りに店の中に戻っていった。
俺はそんな綾子ちゃんを、阿呆のようにただ見送ることしかできなかった。

第３６章

「……まだ諦めたつもりないですから、か」
「どうした、九鬼」
「ああ、いや、なんでもないさ」
今流行りのハマーに乗り込んで移動すること、すでに一時間半以上がたっている。このペースなら、後二十分といったところだろう。
俺はあらかじめ指定された場所に、十分ほど前には着いていたが、すでに用意は整っていたようで、いつでも出発できる状態になっていた。さすが田神だ。
出発の前に打ち合わせをし、研究所内の見取り図を頭に叩き込んで、ようやくアジトを出たのが十六時半を回る少し前だった。向こうでは、田神について松下も同行するはずになる。田神に松下がつくことになるのは良いことだと思うし、俺に松下がつくというわけにもいかないので当然のことだ。
それと装備もだ。車の中にはロケットランチャー含め、アサルトライフルやサブマシンガンといった武器が積み込まれていたのだ。これは、かなりの重装備といってもいい。もちろん、手榴弾なんかもある。
正直なところ、一日二日でここまでものが揃うとは思わなかった。普通であれば、一人でこれだけのものを取り揃えるには、よほど強力なコネクションがあるか、もしくは事前にこうなることを予想していたかのどちらかだ。
田神なら、後者の可能性もないとも言い難いが、田神がゆえに、前者であるかもしれない。
まぁ、いい。最上の親父が死んでしまった以上、これほどまでの得物を調達してきたことにたいして無理に詮索はしまい。どのみち使うとなれば、そんなことなどどうでも良くなるのだ。
そんなことより、俺としては田神がハマーなんぞをセレクトした

理由の方が不思議なくらいだ。ハマーは元々軍用車だったというから、装備の持ち運びと、もし途中で銃撃戦になった場合を想定すれば、これならちょっとやそっとでは機能を停止されないという点を考慮してのセレクトのはずだ。

機能を重視する田神の性格上、デザインで選ぶことなどまずないので、そう考えてまず間違いない。むしろ、もしデザインで選んだんであれば、そちらのほうがセンスを疑うというものだ。

それにこれは偏見かもしれないが、田神がハマーというイメージが、どうにも湧かないのだ。

「そろそろ、松下薫との待ち合わせ場所だ」

万一に備えて松下との待ち合わせ場所には、松下の母が入院している病院に程近い、空き地を指定しておいたらしい。確かにそこであれば人目もあまりないだろうし、現在は、いたるところに監視カメラがあったりするので、空き地であればその心配はない。相変わらず田神らしい、合理的な指定場所だ。

そろそろだと言う田神の言葉通り、その空き地はすぐだった。お粗末な木の囲いだけがされた場所に、ポツンと一人佇む女がいる。松下薫だ。

俺達がハマーで来ることを知っていたのか、松下はすぐにそこから移動し、空き地脇に停めたハマーに近付いてきた。

「すごいわ、時間ぴったりね」

「早く乗ってくれ」

「ええ」

田神に促されながら、松下は車に乗り込んだ。ハマーを停止させ、また動き出すまでわずかに二十秒と経っていないだろう。

「あなたの言う通りにしてきたわ」

「良し。研究所までの道案内は頼む」

「分かったわ。ここから地道で三十分くらいよ」

松下の指示で研究所へと車を出す。それをぼんやりと聞き流しつつ、この後のことを考えようとしていた。そうでもしないと、昼間

のことばかり考えてしまうからだった。
無理に頭から昼間のことを隅におしやり、今夜もまた一暴れしてやろうと渇いた唇を舐めた。

その研究所は小さな山の中にあった。松下を乗せてすぐに県道を外れ、だんだんと田舎らしい風景へと変わっていった。そのまま道を十分も行くと、小さな山の山道へと入っていったのだ。
松下の話では、この山そのものが島津の土地だという。確かに、そうやってまとめて買い占めておいた方が、色々と融通がきくのだから当然ではある。つまり、この山道も、島津が研究所に行くためだけに作らせたものということになる。
その山道をひたすら行くと、お世辞に広いとは言えない道がさらに狭くなっていき、ハマーでは横の剥き出しになっている岩に、ぶつかってしまいそうになるほどだった。
研究所に入る少し手前で車を停め、田神と松下が運転を代わる。そして俺、田神、エリナの三人は、荷台の方へ移った。話によれば、研究施設に入るためにはどうも、門番付きのゲートをくぐらないといけないということだった。
そんなのお構いなしに、少しばかり痛め付けてやればいいと言ってはみたが、一時間ごとに番頭が交代するため、それは無理だった。そんなわけで、仕方なしに狭い荷台に、大人三人でうずくまっているというわけだ。おまけに武器と一緒なのだから、狭いことこの上ない。
「もうゲートに着くわ」
「なるべく自然にするんだ」
「ええ、任せて」
すると、すぐに車のスピードが落ちていくのが分かった。おそらく、もう目の前なんだろう。

「ご苦労様」
「どうも松下さん。今日はハマーなんですか？　確か、以前来られた時はスカイラインでしたよね？」
松下が窓を降ろし、門番の男に声をかけた。門番の男はどこか軽薄そうな声で、まだ若い男であることが分かった。
「ええ。実はこれ、彼氏に買ってもらったのよ」
「ああ、確か実業家の方でしたっけ。いやぁすごいなぁ」
「ふふ、それじゃあお願いね」
「あ、はい。どうぞ」
門番の男がそう言うと、鈍く低い音を立てながら門が開いていっているようだった。一拍おいて、また車が動き出す。それでも俺達は、しばらくの間微動だにしなかった。
「もう大丈夫よ」
松下のその声を合図に、俺達はシートをはがした。ゲートを抜けるまで、黒っぽいシートを上に被せてあったのだ。
俺は器用に、荷台から後部座席へと移動した。目の前に、一面真っ白な壁をライトアップした建物が飛び込んできた。
「これが研究所か……」
「そう。島津の製品は全て、ここで研究されたものが世に出るってわけ」
どことなく自嘲気味に松下は言った。本人も辞めたいと言っていたのだから、思うところがあるのだろう。
それにしても……ここがあの研究所か。失踪した沙弥佳が連れてこられた場所。まさに俺にとっては、因縁ともいうべき場所……。ここさえなければ……そんな様々な思いが高速で過ぎっていく。
そんな研究所は、俺が想像していたよりもずっと大きく、もっと暗そうな雰囲気を想像していたが、とんでもなかった。
取り扱っている物が物だけに、施設そのものも新しいものだった。おまけに、ライトアップされているその様はまるで、新設されたど

こかの大学か何かみたいだ。
「良し。では手筈通りに」
荷台から田神が声をかけた。頷きながら松下は、研究所をぐるりと迂回し、研究所の裏側にあたる場所に駐車した。地下に侵入する、俺とエリナのためにこの場所が選ばれたのだ。そして、その間田神と松下が、上の研究施設で潜入工作を行う算段になっていた。
本来なら、俺が松下と組むべきなのだろうが、松下が言うには、自分の権限では地下施設にはいけないとのことだったので、仕方なくこの組合わせになったのだ。
おまけに田神も田神で、何やら知りたいことがあるそうで、その方が良いと言ったのだ。それだったら、もう何も言うことはない。それに俺もこういうやり方が合っているので、それはそれで構わなかった。
「準備よし。では行くとしようか」
「田神、気をつけてね」
「ああ。君もな、エリナ」
そう言って準備を整えた田神と松下は二人、研究所の中へと入っていった。
「よし、俺達もさっさと準備して行くとするぜ」
「うん」
エリナの相槌に、ほんの少しだけ驚いた俺は思わず準備する手をとめて、エリナの方を見た。
「……何よ」
「いや、まさかおまえさんに相槌される日が来るとは思わなかっただけだ」
「ちょっと、それどういう意味よ」
「そのままの意味さ。おまえ、俺のこと嫌いだろう？　だからな」
「べ、別に嫌いってわけじゃ……そりゃ、気に入らないとは思ってるけどさ」
こいつはまたえらく殊勝な態度だ。考えてみればこの何日もの間、

田神と合わせて何度となく顔を合わせてはいるが、あまり攻撃的な態度ではなかった。ただ無視していただけだと思っていたが、何かあったのだろうか。

まぁいい。仕事で組むことになった以上、そこに私情でチームを乱すわけにもいかない。これは鉄則だ。そのせいで自分の命を落としていった奴もいるのだ。

「そうか。まぁ、短期間とは言え、頼むぜ、相棒」

「あんたなんかに言われなくても分かってるわよ」

相変わらずツンケンした態度だが、こうして意志の疎通ができるようになったのだから、良しとすべきだろう。

準備の整った俺達は、田神達に一足遅れて研究所に入った。とは言っても向かうのは地下だ。

あえて人気（ひとけ）のない場所に車を停めた理由も、侵入するための空気ダクトの根幹がある空調室がすぐ近くにあるためだ。

根幹のある場所だけに、地下に直接通じている空気ダクトが存在してはいるが、残念なことに、ほぼ垂直になっているため、そこに降りることは不可能だ。あらかじめ、専用の降車機かなにかでも用意されていれば可能ではあっただろうが、ないものは仕方ない。

よって、そこには黒いクッションを下ろし、その上に銃火器を下ろすという作戦だ。正規の作戦でない以上、用意にも限界がある。

俺とエリナは、空調室から松下の権限でも入ることができないという地下施設のエントランスへ行き、そこからエレベーター、という手順で地下に降りることになっている。

後は最低限の装備だけで進み、最後には地下に下ろしておいた武器を使って、地下施設もろとも、研究所を粉みじんにしてやるというのが俺の今回の作戦だ。

俺達は必要なものを担ぎ、空調室の入口まで来た。念のため、鍵

が開いていないかノブを回してみるが、やはり鍵がかかっていた。
「ま、当然か」
だが、ピッキングの訓練も受けた俺には、あまり意味のないことだ。
ピッキング用の道具を取り出し、鍵穴に差し込む。訓練時代やその昔見たピッキング技術を駆使しながら、鍵を開けた。
「よし」
カチャリという鍵が開く音がし、開錠される。すかさず中へと侵入し、地下に繋がっているダクトまで進む。
「ここだ」
そう言って、道具を使ってビスで留められたダクトの蓋を開けた。下を覗いてみたが、当然何も見えない。ただ暗闇が下に向かって、ひたすらに続いているだけだった。まるで奈落の底に通じているようにも思えなくもない。
「まずはクッションを落とそう」
クッションを落とすべく、クッションに空気を入れる。これは最新式のもので、ボタン一つですぐに空気が送り込まれるため、ものの数秒とかからず膨らむ。そいつを何個かダクトの中に落とした。当然ながら音は聞こえない。
続いてシートに包(くる)んだ武器を落とした。サーッという音とともにダクトの中を滑り落ちていった。その音が聞こえなくなったのを確認し、俺達も移動を開始する。
確かエントランスに通じているダクトは、地下ダクトから、ほんの二、三メートル離れた場所にあったはずだ。となると……。
「あれかな」
エリナがそれに指差した。
「ああ。間違いないだろうな」
そう言って、そのダクトの蓋を開ける。
「君が先に行くんだ」
「……何か変なこと」

「さっさと行けっ」
検討違いもいいところなことを言おうとしたエリナの言葉を遮り、小さく叫んだ。別にそんな下心などありもしない。ダクトの幅は、先ほどの地下に繋がっているものと比べ、少し狭くなっているのだ。
こういう時は、細身である女を先に行かせた方がつっかえ難い。ただそれだけだ。エリナは割りと美人だが、俺は誰彼構わず発情するようなやつではない。ましてや、今は作戦中なのだ。
俺の態度を悟ったのか軽く頷いて、エリナはダクトの中へと入っていった。それを見届けると、今度は俺の番だ。
中はやはりというか、かなり狭い。その中を、口にはペンライトをくわえて、なんとか手と脚を使って這いながら進んでいく。
エリナは俺に比べて細身であるためか、比較的スムーズに進めているようだ。俺はといえば、エリナより体が大きい分、動かせるスペースがないために進むのが遅く、先行するエリナに追い付こうとすると、余分な力が入ってしまって肘や膝が、壁に当たって痛い。最近、こういう貧乏くじばかり引いているような気がしてならない……。
しばらく行くと、少しばかり急な下り坂になった。ここからはさらに慎重にいかなくてはならなかった。
それでもエリナは、器用に坂になっているために生み出される推進力をうまいこと使って、先ほどよりも早いペースで進み始めた。
俺も負けじと、それを見よう見真似でしてみると、全身に力が入りすぎているためか、エリナ以上の速さになってしまって危うく蹴られるところだった。なんとか踏ん張りをつけ、ところギリギリで当たるのを阻止したが、やはり俺は自分のペースで、ゆっくり進んだ方が良さそうだ。
そんな坂もどれほど進んだだろうか。いい加減息苦しくなり、苛々もしてきたところ、先行していたエリナが水平な場所にきたのか、スルリと目の前から消えていった。水平になって少し行くと、目的の出口がある。どうやら、終着地点が近いようだ。

ようやく狭いダクトから抜け出すと、今度は無駄に広いエントランスに降り立った。しかも、広間全体が白い壁になっていて、まさしく研究所という無機質さを表していた。

俺達が降り立った地点後方に、入口があった。本来であれば、あそこからこのエントランスに入ってこないとならないだろう。

「あそこがエレベーターだ」

頷くエリナを背にし、小走りにエレベーターに向かってスイッチを押す。周りを警戒しながら、エレベーターが来るのを待つ。時間にして十数秒といったところだろうが、こういう時、なぜだか不思議と長く感じる。

殆ど音もなくエレベーターは到着し、やはり音もなく扉が開いた。エリナに先に乗るよう首を振り、続いて俺も乗りこむ。ボタンを押すと、すぐに無音で扉が閉まり、下へと動き出した。

エレベーターの中で、ようやく俺達は得物を手にした。俺は最上の親父のところで手に入れたワルサーを、エリナは意外にも、投げナイフだった。

「わたしはこう見えても、ナイフが得意だからね。銃を使うのも好きだけど」

「そうか。ま、銃だと響くからな」

そう言いながら、俺はサイレンサーを銃口に取り付ける。

このワルサー88は旧シリーズと違い、汎用のサイレンサーを取り付けることができるのが一つの魅力だ。旧シリーズでは、専用ないし汎用性の低いものでないと取り付けは難しかったが、こいつはそれを必要としないので、その点、わりと使い勝手は良い。

そんなことをしているうちにエレベーターは下に到着し、やはり無音で扉が開かれた。

先ほどこの地下施設に武器を落とした時や、エレベーターの降りるスピードから判断すると、ここはかなり深いところにあるようだ。少なくとも、地下五十メートルはあるだろう。

そうなると、先に落としておいた武器が少し心配になったが、クッションもあるのだ、おそらく大丈夫だろう。

エレベーターを降りると、さっきの無機質なエントランスと比べ、無機質さに紛れて、確かに生き物の気配をかすかに感じた。きっと研究に携わっている人間や、実験に使われてしまう人間や動物、さらに目の前にある、場違いなジャングルを思わせる、緑林のためだ。

とは言っても、壁は相変わらずシミ一つない、真っ白なままだ。ここから見ても、いくつか部屋があるのが分かるが、それらには、一切窓が取り付けられていない。それがまた、ここは実はダミーか何かじゃないのかと思わせてしまう。それほどこの空間は、不気味なほどに無機質なのだ。

「ここからどうするの？」

エリナが問いかけてくる。エレベーターを降りてからは確か……。

「こっちだ」

記憶の中にぶち込んだ見取り図を引き出しながら、目的の部屋へ走りだす。

松下の話では連れてこられた人間は、データ管理されているということだったので、連れてきた人間を収容するための部屋がある。

あの見取り図に、それらしい部屋が書かれていたので、まずはそこに行ってみることにしたのだ。

「……こんな場所で、今まで何人も実験台にしてきたのか」

エリナが呟くようにいう。全く同感だった。施設全体を覆う、なんとも言えない無機質な感じが、実験に使われた人間達がいたことすらもないことにしているかのようだ。

その中に、少なくとも俺の妹もいたわけだから、向かう足が自然と速くなってしまう。

もしかしたらここで、俺は知らない方が良かった事実にぶちあたるかもしれない。

もしかしたら次のヒントが与えられ、新たなる紹介状が届けられるかもしれない。

つまるところ、ここが終着地になりうる可能性すらあるわけだ。
そう考えると、背筋を嫌な感覚が襲う。あってはならない可能性。
それでいて、頭のどこかで冷静にそう見ている自分がいるのが分かる。そんな自分を追い払うように、俺は軽くかぶりを振った。

無駄にだだっ広い施設を、走ること数分。ようやく目的の部屋と思われる場所に着いた。
「ここだ」
カードキーか何かが据え付けられていた場合どうしようか思いもしたが、幸いに鍵といえるようなものはつけられていなかった。ノブに手をやり、一気に捻ってドアを開ける。
中は相変わらず白い部屋だったが、真正面には大きなガラスが張られている。蛍光灯のおかげでガラスに光が反射しているため、それがガラスだと分かったのだ。
そのために、一瞬ようやく窓のお出ましかと思ったが、どことなく期待を裏切られたような気分になった。ガラスの向こうは、やはりシミ一つない、真っ白な壁だったのだ。ここまで白一色だと、頭がどうかなってしまいそうだ。
俺は中に入って、そっとそのガラスの壁へ近寄った。
「うっ……」
ガラスの壁の向こう。そこはおおよそ考えもしなかったことが行われていたのだ。
「どうした？」
「……」
俺は無言でエリナを制止しようとしたが、好奇心の強いこの女はそんなことお構いなしに近寄り、驚愕した。
「なっ……こ、こんな……ひどい」
俺も気付けば下唇を強く噛んでいた。それほどまでに、強烈な光景だった。
そこで繰り広げられていたのは、人体実験という名の、処刑だっ

た。

合計六つのブロックに仕切られたフロアは、それぞれのブロックに猛獣であったり、わけの分からない機械であったりはするが入れられており、その中に年端もいかない子供達が入れられているのだ。

ある者は虎に食い破られ、またある者は、機械から発射された銃弾によってズタボロの肉塊へと変えられる。

俺やエリナのように訓練されている者ですら、勝ち目は限りなく低いというのに、まだ少年少女というべき子供が、敵うはずもない。

「なんだっていうんだ、これは……」

常軌を逸している。こんなのが、新薬の実験とやらに関係しているというのか。だとしたら、一体なんのためだ？　こいつが、不死だとかそんなことに必要なことだと？　とてもじゃないが、そんなこと信じられるわけがない。もちろん、不死の研究というのも、眉つばと思っているが。

「……ねえ、なんなの、これ」

エリナの問いに、俺は首を振るだけだった。当然だ。俺にだって分かるはずがない。

六つのブロック全てで、死体ができると猛獣は捕えられ、殺人機械は動きを停止させる。

なんの意味があってこんなことをしているのかは知らないが、ただの嗜虐趣味を満たすためとしか思えない。

こんなのを見ていられなかった。胸糞悪くて仕方がない。俺は部屋の中へ向き直り、今見たことを頭から振り払うかのように、部屋の中を物色し始めた。部屋は広さの割りに物がなく、探すのには手間どることはなさそうだ。

俺が部屋の中を動き回りはじめると、エリナもようやくガラスの向こうから視線を戻したようだった。

「ねえ……」

「なんだ？」

「あんたって結局、何を探しにここにきたの？」

「別になんだっていいだろう。君には……」
関係ない、そう言いかけてやめた。確かにこの女は関係ないが、こうやって付き合っているのだ。目的くらいは教えてやってもいいだろう。
「……簡単なことさ。人探しだ」
「人探し？」
「ああ。もう六年も前になるけどな。以来、ずっと探してる。殺し屋になったのも、その方が色々と好都合だと思ったんでな」
「……そうだったのか。その人がもしかしたらここに……？」
「もしかしたらではなく、ここに連れてこられたんだよ。で、それに関する資料があるはずだから、こうしてるってわけさ。……ちっ、この部屋じゃぁなかったか。おい、次の部屋に行くぜ」
舌打ちしながら、次の部屋に行くよう女を促した。
「あ、うん」
手早くドアを開けながらも、音は立てないようにする。とは言っても、ドアは摩擦による音さえも出ることはなく、無用な気遣いだったかもしれない。
俺達は、再び真白い廊下を小走りに次の部屋へと向かった。記憶の中の見取り図を頭の中で広げてみると、怪しそうな部屋はこの階を一つ下ってまっすぐ、一番端の部屋だ。
俺は逸る気持ちを抑えながら、階段を降りていった。

結局のところ、俺が探していたものは下の階の部屋にあった。今となっては後の祭りだが、初めからここに来ておけば、さっきのような光景は見ずにすんだかもしれない。
そんなことを考えながら、俺は沙弥佳が連れてこられたと思われる、六年前の夏頃に録られたデータ類を、手当たり次第探していた。
「ねえ、人探しっていったけど……その人のこと、大切？」
俺が何も言わず、黙々とファイルされた資料に目をやっているのを見兼ねたのか、エリナが話しかけてきた。

「そりゃぁな。そのためだけに俺は、こんな薄汚れた世界に飛び込んだんだ。そんな理由でもなきゃ、誰だってこんな世界に足、突っ込まないだろ？　ましてや、今日明日、いつ死んでもおかしくない世界だ」

「そうだけど……そっか。大切な人なんだ。それってもしかして彼女？」

「はっ、言うと思ったぜ。まぁ、男が単身この世界に飛び込むんだから、そう思われるのも当然かもな」

「なに、違うの？」

「ああ、残念ながらな。

ところでおまえにはいないのか？　そういう大切な人間というのは」

「……よく分からない」

「分からない？　恋人に限らずいるもんだろう、心から気の許せるような友人だとか、家族だとかさ。いないのか？」

「……私、昔の記憶がないから」

記憶がない？　つまり、記憶喪失者ということか。

聞けばエリナは、十六歳より以前の記憶がないのだという。気付けば、血に濡れたナイフを片手に一人、道なき道をさ迷っていたらしい。

そのため、家族や友人といった人達の記憶はおろか、自分の名すら覚えておらず、そんな状態で街に出たエリナは、結果として警察に保護された。

持っていたナイフからは、エリナ以外の指紋は検出されず、その時に着ていた服と、そのナイフに付着していた複数の人間の血がそれぞれと一致したため、彼女は保護という名目で、重要参考人として警察に厄介になった。

警察は彼女にどんな経緯で人を殺したのか、もっぱらそのようなことばかり言ってきたという。自分が誰かも分からない状態で、そんなことなど分かるはずがないのは当然であるはずだ。

警察は口にはしなかったらしいが、エリナが記憶を失っているということを、ほとんど信用していなかったということだろう。
警察というのは一度疑いをかけ、そうだと思い込んだら、是が比でもそれを相手に強制させようとする節がある。その辺りは人にもよるだろうが、エリナを担当した刑事は少なくとも、エリナが犯人であり、嘘をついていると判断したわけだ。
「で、そんな時に私を救ってくれたのが」
「武田というわけか」
「そう。……どうやって私の疑いを晴らしてくれたのかは知らないけどね、教えてくれなかったから。
で、とにかく私はそのまま、たけちゃんに着いていくことにしたの」
「殺しの技術も武田から教わったのか？」
「そうよ。教え方も上手だったし、私のことも本当に理解してくれた。だからかな。この人のために私も早く上達しなきゃって、そう思って訓練に訓練を重ねて……ようやく私も一人前として認めてもらえるかなって思ってたのにあの女」
最後の、“あの女”という部分にだけ、やたらと感情をこめていった。
「あの女……確か、おまえは“ブラッディ・バートリー”とか呼んでいたな。そいつのことか」
「……そう。あの女と私は、ほぼ同時にたけちゃんのもとで訓練されてたらしいけど、たけちゃんの横にいるのを許されたのは、あの女の方だった。
……たけちゃんは、私のこと本当に理解してくれていたし、気遣ってもくれた。だけど……あの女を見る目は、私とは全く違ってた。私はそれが……」
気付けばエリナは頬を紅潮させ、嫉妬にまみれた女の顔をしていた。何時間か前に見た、レイミと同じ貌だ。それに気付いたのか、エリナは我を取り戻したようだった。

「って、なんでこんな話、あんたにしなくちゃいけないのよっ！」
「……こんなこと言うのもなんだが、それで良かったんじゃぁないのか？　おかげで田神と知り合うことができたんだしな」
　ニヤリと含み笑いをうかべると、途端にエリナの顔が焦りの表情に変わる。
「なっ、なんでそこで田神の名前が出てくるのよっ！」
「なんだおまえ、自覚なかったのか」
「だ、だからなんの話をしてるのよっ」
「くっくっく、俺はてっきりそうとばかり思ってたんだがな。まぁいい。田神も満更じゃぁなさそうだしな」
「あ、あんたねぇっ」
　そう言ってしかめっ面で顔を赤く染めているエリナを見ると、どことなくだが沙弥佳のことを思い出させてくれる。
　そういえば、沙弥佳もこんな風にからかわれたりして怒ると、よく顔を赤くして頬を膨らませていたな……。昔のことに思いを馳せていたからかどうかは分からないが、沙弥佳と思われるファイルが飛び込んできた。
「こいつだ」
　思わず声に出た。しかし、あまり嬉しいという気にはならない。もしかしたら、ここに書いてあることが最悪の結末を迎えるかもしれないのだ。
『二〇××年六月××日、新たに送られてきた十五歳の日本人の少女、九鬼沙弥佳を、これより、Ｄ－８号と呼ぶことにする。』
　そんな書き出しで始まったファイルに、苛立ちを覚えながらも先を読み続けた。
『××年七月×日、Ｄ－８号の適正検査を行う。まだ結果は出ていないものの、今までの同年代の子供達と比べ、身体面は良好。』
　適正検査？　つまり、例の実験の適正検査ということだろうか。
『××年八月××日、検査結果。Ｄ－８号は同年代と比べ、すべての面で基準値を上回っていた。しかし、精神的に虚弱な面あり。』

『××年九月××日、D‐8号の訓練開始。驚くべきことに、通常数カ月かかる訓練項目全ての合格ラインを、たった一度でクリア。今後数カ月間は、段階的に精度を上げるべくD‐8号の訓練を継続。』

『××年十一月××日、これまででは考えられないほどのスピードで精度を上げてきたD‐8号に、精神的な疲労が見られる。原因不明。』

『××年十二月×日、D‐8号の精神的な疲労が、ついにピークに達する。とうに限界にきていたはずだがD‐8号には、強靭な精神力が備わっているようで、回復次第、次の段階へと以降すべき。』

ファイルには名前を奪われ、わけの分からない実験のモルモットにされている沙弥佳の様が、ぎっしりと書き込まれている。専門用語が多すぎて俺には分からないが、一つだけいえるのは、沙弥佳がその訓練とやらのせいで、精神を病んでいったということだ。

やはり、この研究所にいる連中は、皆殺しにしてやろう。前までは、ここを破壊してしまいさえすれば、それで良いとも思ったが気が変わった。奴らは一人残らず地獄に送ってやる。

たとえ女だろうが、この時はまだ研究所にいなかった奴だろうが同罪だ。どうせ生き残ったら、また狂ったような研究を繰り返すに決まっているのだ。だったら、今ここで全員を地獄に送ってやる方が、生贄にされた者や、これから死んでいくかもしれない者達のためにもなるだろう。

今回ばかりは、俺にも復讐する権利が与えられたのだ。俺は容赦しない。たとえ命乞いしようとも、笑顔で引き金を引いてやる。

ファイルがパキパキと音を立てて握り潰されはじめたので、慌てて手を放した。気付かぬうちに、ファイルを強く握りこんでいたのだ。

そんな様子の俺を、エリナがひどく困惑したような眼差しをしている。

「……大丈夫、か？」

「ああ……」

少しばかり、怒りのボルテージが上がり過ぎていたかもしれない。掌にうっすらと汗がにじみ出している。気を鎮めるため、俺は二度三度軽く深呼吸をし、再度ファイルに目をやった。

とにかくその後、沙弥佳は意識を取り戻し再びモルモットにされたようだった。そして、それには“ＮＥＡＢ－２”と呼ばれる、新薬を投与されるということだったらしい。

得体の知れない薬を、沙弥佳は一月に一度か二度、投与されていた。効果は良好で、これまでにあった副作用が出ていないとも書かれている。

また、それまでＤ－８号としか呼ばれていなかった沙弥佳に、新たに別の呼称が付けられた。

『ＥＶＥ』

イヴ……。確か旧約聖書に出てくる、ユダヤ人が考え出した最初の女だ。

全く日本人というのは、自分がユダヤ教やキリスト教の信徒でもないのに、むやみやたらとこんな名前を付けるのが好きだ。

俺から言わせれば、そんな名などナンセンスもいいところだ。第一、こんな呼称を付けられて喜ぶ奴はまずいないだろうし、その家族からしても、ただただ腹立だしいだけだ。

『××年三月×日、とんでもないことが起きてしまった。絶対にあってはならないことだ……。ＥＶＥが施設を脱走した。これから私達はどうすれば……いや、それよりも彼女は今危険な状態なのだ。非常にまずい……』

それを最後に、ファイルの記録はなくなっていた。最後の言葉は、観察者の心の内であるようだったが、これを見る限りでは沙弥佳は、幸運にもここから逃げ出すことができたらしい。だが、その行き先は不明だ。

「……クソ、ここからが一番知りたいことだってのに」

その時だった。

ビービービー
そんな音が鳴り出した。
「こいつは？」
俺達が何かヘマをやらかしたのか？　いや、そんなことはないはずだ。警備員らしい人員も配備されていなかったし、もしやらかしていたとしたら、とっくの昔に警報が鳴っていたはずだ。
「田神たち、かな？」
エリナも同じことを思っていたのか、そんなことを聞いてきた。
「……かもしれない。だが、あいつに限ってそんなことがあるとは、俄かに信じがたいがな」
「うん……」
「とにかく、武器を回収しに行こう」
俺は手にしたファイルと、それと共に置かれていた、沙弥佳に関する映像資料等も収めたと思われるＤＶＤ‐ＲＯＭを、袋の中に全てぶち込んだ。
もしこのデータがハズレだとしても、この記録をファイルしたと思われる、『坂上』と書かれた人物を締め上げてやればいい。
とにかく今は、武器の回収と一刻も早く田神達と合流した方がいい。
「良し、行くぜ」
そう言って部屋の外に出た時、異変に気付いた。
「まずい、走れっ！」
エリナもそれに気付き、すぐさま走り出した。
理由は分からないが、シェルターが降り始めていたのだ。
俺達はとにかく走った。
幸い、すぐそばに階段があったので、助かった……と思ったのが間違いだった。すでに上の階はシェルターが降りていたのだ。
まだけたたましく警報は鳴り続けているが、一体何が起こっているのかさっぱりだ。
「クソ！　一体なんだっていうんだっ」

シェルターを両手でたたき付け、叫んだ。
俺達を閉じ込めるためか？　実は、俺達が侵入しているのがバレていたのかもしれない。
有り得ない話ではない。思えば、ここからはかつて、あの高性能のカメラが盗まれている可能性があったのを思い出した。
あれほどの高性能のものなら、侵入者に気付かれないように、廊下なり部屋なりに取り付けられていた可能性は否定できない。
他にも細かい疑問がないわけではないが、こういう時は、最悪を考慮して動いた方がいいに決まっている。
しかし、上の階もやはりシェルターが降りていて、移動のしようがない。俺達は完全に閉じ込められたのだ。
「どうする？　私たち完全に閉じ込められたみたいだけど……」
「ちっ……ああ、そうみたいだな」
俺はシェルターを睨みつけながら、階段に座り込んだ。
このクソッタレなシェルターは、どう考えても俺一人で持ち上げられるようなものではない。しかも表面はツルツルとしていて、とてもではないが俺やエリナ二人でどうにか出来るようなものでもない。
何か、破壊できそうな物でもあれば……。
「……そうだ。ロケットランチャーがあったはずだ」
そう思い立ち、俺は立ち上がる。
通気ダクトは、さっきいた階のすぐ下の階……ようするに、あの処刑場の端にあるはずだ。階段を降りればすぐだが、問題は、そこにシェルターが降りているかもしれないということだ。
まぁいい。ともかく動けるうちに行動はしておかなくてはならない。
「エリナ。確か下に武器を落とした通気ダクトがある。そこへ行ってみよう」
「でも、シェルターが降りてないか？」
「……かもしれんが、とにかく行ってみるだけ行ってみよう。可能

性に賭けれるうちは、賭けておいた方がいい」
「ん……分かった」
エリナもいつまでもこんな所にいたくはないはずだ。彼女は力強く頷く。
互いに頷きあい、俺達は階段を下へと降りていく。
そして、俺達はそこで悟った。何故警報が鳴り、シェルターが降りたのか。
階段を下りきると、まず脇にガラス窓がついているのが分かった。そこから例の処刑場のようなフロアが見える。
俺達は息を飲んだ。そこには、見る者全てを釘付けにしてしまうほど、訳の分からない物体がいたのだ。
いや、物体ではない。動き回っていることから、それが何らかの生命体であることが分かる。
分かりはするが、それが一体なんであるかは理解できなかった。
だが、それでも一つだけ言えることがある。それは、あれが自然界で生み出されたものでないということだ。
「……ば、化け物」
かすれるような小さな声で、エリナが言った。
そう、あれはそれ以外に、呼びようがないものだったのだ。

第３７章（前書き）

残酷な描写あり。

第37章

研究所内を、ひどく騒がしい音が鳴り響いている。
己の目的のために田神は、島津製薬の女である松下薫とともに研究所内を歩いていた。そんな矢先のことだった。
施設内の至るところに設置された赤いランプが光り、異常事態であることを告げている。
「なんだ、これは」
「私にも分からないわっ。こんなこと初めてだから」
音が反響しあっているため、必要以上に音が大きく響いているように聞こえる。そのため、二人は大声を出した。
九鬼とエリナに何かあったのだろうか……。田神はそんなことを考えてみるが、あの二人がヘマをやらかしたとは考えにくい。
九鬼はあれでいて危機管理能力が優れているうえ、本人は過小評価しているだろうが、なかなかに統率力を持った男だ。おそらく、なんだかんだいいながらもエリナとは上手くいっているはずだ。とすれば、何かヘマをしたというのは信憑性にかける。
それに田神は、どちらかといえばこの異様な緊張感は、何か別のことによるもののような気がしてならないでいた。大方済ませるべきことを済ませた今、早く九鬼達と合流した方がいいだろう。
また、田神は至る場所に爆薬を仕掛けていた。田神自身としては、必要以上のことはしないつもりではあるが、今回の作戦は、九鬼の仕切りということもあって、用意しておいたのだ。
しかし、この施設で正視できないような実験が行われているかもしれないことを考えれば、これで正解だったような気もした。
そう思い、田神達が下へと繋がるフロアへ降りようとした時、反対側から研究所の人間と思われる、白衣を来た集団が現れた。
「主任、これはどういうことなのです？」
そういって松下が、その集団の前にいる白髪混じりの男に駆け寄

る。
「おお、松下君か。どうもこうもない。実験体が暴れ出しているらしい」
「らしい？」
「ああ、詳しいことは私もよく分からん。今から下に行かねば。それよりも、何かあるとも言えない。松下君は、ここから出たまえ」
主任と呼ばれる男に、松下は体の良い締め出しを食らったが、田神にはチャンスだった。
「そういうわけにもいきませんね、主任殿」
「君は？」
「本部の人間、といえば分かりますか？」
嘘もいいところだが、田神は戸惑いなく言い切った。すると、主任と呼ばれた男以下、彼の後ろにいる研究員たちも表情を曇らせる。
「……まだ、次の中間発表まではしばらく時間があったはずだが」
「確かに……しかし、主任。我々としても、いつまでもそれを待っているわけにもいかない理由というのができたのですよ。そして今回の件、きっちりと見定めさせて頂きましょう」
田神はどこか高飛車なもの言いで、まるで本当に本部からの使者であるかのように振る舞った。そんな田神を見た研究員達や松下は、思わず息を飲む。
「……好きにするといい」
そんな一流の役者か何かのような田神に、苦渋の決断とでもいうように、主任が一言そういった。そんな主任を見て田神は、内心でほくそ笑んだのだった。
俺は目の前の光景を理解できずにいた。一体なんだというのだ、

あれは。

俺達の目の前にあるガラス窓の向こうに、異様な生物が見えた。全身を真っ黒に覆われ、体の一部が光に反射して黒光りしている。その部分はまるで、合金素材か何かのプロテクターを身につけているようにも見える。

だが、それは間違いなく、そいつが身につけているのではなく、そいつの躯の一部だ。

そいつはたとえるなら、あのキングコングのようにも見えなくもない。そう、そいつはどことなく、ゴリラのように見えるのだ。

よくよく見てみると全身を覆う黒は、毛皮をまとっているようだった。躯は、全身瘤だらけと言えるほど筋肉が発達している。一つ一つの筋肉部分に、バスケットボールを幾重にも貼付けているかのようで、その中に、何か別のものでも飼ってそうだ。

そんな発達しすぎた筋肉は、見るものの鳥肌を立たせてしまうことは必須だ。そしてプロテクターのように見えた部分は、実は、ゴリラのような胸板部分だったのだ。

しかし、どの部分に至っても、それは俺が知っているゴリラのものとは思えない。似てはいても、明らかに別ものだ。いえば、ゴリラの突然変異か何かとでもいうのだろうか。

なにより、体躯の大きさがあまりにも違いすぎる。通常、マウンテンゴリラであっても、立った状態でせいぜい一八〇センチか一九〇センチがいいところで、二メートルに達することはほとんどないというが、あれは、どう見たってその倍くらいはある。

顔も、もはやゴリラのものではなかった。目は爛れたかのように、本来あるべき場所についておらず、こめかみ部分にあるのだ。

鼻は歪み、左の頬についている。口はと言えば、なんと顎の部分と思われる場所についているのだ。それも、一口で人間一人、丸々飲み込むこともできそうなほど、大きい。

おまけに手足もおかしく、右手の指が六本で左手の指が四本だった。指の本数もそうだが、長さも違った。左腕より右腕の方が長い。

いや、左腕は腕というよりも脚と言った方が適当だろう。二の腕は明らかに本来ゴリラのふとももものそれだ。

足の指に至っては、ちゃんと五本ついているかと思えば、手の指かのように長く、踵には手の親指のような指が一本、後ろ側を向いてくっついている。

どこをどう見たって、突然変異……いや、奇形だった。だとしても、こうも大きさが変わるものだろうか。

エリナはそのグロテスクさに、口を押さえていた。もちろん、俺だって似たような気分だ。

そんなグロテスクな怪物が、突如として咆哮をあげた。密閉された空間からでも、こちら側にその低く、今まで聞いたことのない、声が響いてくる。

「……一体、あいつはなんなんだ」

ようやく出た言葉がそんな言葉だった。それほど、動転していたのだ。

俺はかぶりを振って深呼吸する。おそらくこのシェルターは、あいつを閉じ込めておくためのものだろう。だが今はそのシェルターゆえ、俺達も閉じ込められてしまったのだ。しかも、武器を落とした通気ダクトは、このシェルターを越えた向こうにあるのだ。

このシェルターさえどうにかできれば……そう思った時だった。怪物が、窓から見ている俺達に気付いたのだ。

「！」

俺達を見た物は、その躯を使い、こちらに孟突進してきたのだ。それに一瞬早く気付いた俺達は、窓から素早く離れた。

何トンもあるようなトラックが、鈍く生々しくぶつかるような音がした。怪物がガラス窓にぶち当たったのだ。

だが、その怪物のタックルにもガラスは耐えたのである。よほど、強力な耐久性が備えてあるらしい。

そんなことはお構いなしに、怪物は何度も何度もガラスにタックルをしかけているが、ガラスは一向に破壊される気配はない。ヒビ

すら入っていないのだ。
「……これなら、一先ずは安心か」　そうは呟いたものの、はっきり言ってどうしようもなかった。このクソッタレなシェルターをどうにかしようと思ってはいても、俺達には1ミリだって持ち上げられない。
　この際、あの怪物の力に頼り、ガラスをぶち破ってもらうという案もあるが、それだと、あいつとやり合わなくてはならなくなるのだ。しかしそうでもしないと、武器のあるダクトへは行けない。
　昔の人間が、虎穴に入らずんば虎子を得ず、なんて言葉を遺しているが、まさしくその通りというわけだ。まぁ、そもそも、怪物にこの強化ガラスを破れるかも分からないのだが。
　クソ、本当にどうすればいいんだ……。俺は壁に寄り掛かり、そのまま床へと座り込んだ。どうしようもなくお手上げなのだ。
「……ね、ねぇ」
「なんだ」
　それでもなんとかしようと脳みそを捻ってみるが、やはり何も出てこない。そんな俺に、エリナがいった。
　顔を上げて彼女の方を見ると、彼女は俺の方ではなく、ガラスの方へと目を向けている。
「このガラス、大丈夫よね……？」
「大丈夫だろう。奴のタックルにも破壊されなかったんだ。何回やっても同じだろうよ」
「……だといいんだけど」
　それでも何か納得いかず、不安げなエリナの表情に、今度は俺が問い掛けた。
「どうしたんだ？」
「……ううん、やっぱり気のせいかもしれない」
　一人納得しようとするエリナに、俺は妙な感覚を覚えた。いや、本能がそうさせたといっていいかもしれない。立ち上がってガラスを凝視してみると、心なしか歪んでいるように見えたのだ。

「こいつは……」
ガラスを手で触れてみる。なんとなくだが、歪んできているようにも思える。エリナが不安にしていたのは、そういうことだった。
「ねぇ、そのガラス、大丈夫だよね？」
エリナがそう言ったのと同時に、小さくピシッという音がした。本当に小さく、聞き取るのも苦労するほどの音だ。
俺達の間に緊張が走り、沈黙がおりた。
「……なんだ、今のは」
ガラスの向こうでは、相変わらず怪物がガラスにタックルをかけてきている。その怪物と一瞬だが、目が合った。なんとなくだが、やつが笑ったような気がしたのだ。
「まさか、だよな」
ピシッ
今度は、はっきりと聞こえた。その音は言うまでもなく、目前のガラスからだ。
「おい、まさか本当に……」
そのまさかだった。怪物がさらに体当たりした場所が、ついにへこみ始め、亀裂が入ったのである。
（まずいぜ、こいつは）
体長四メートルはあろうかという怪物ではあるが、少し無理をすれば窓から出てこれるかもしれない。
俺とエリナは武器に手をやりながら、じりじりと後退していく。奴がこっちへ来たら、俺達にはほとんど勝ち目はないだろう。通路の幅は、奴が立ち塞がったらその脇をすり抜けて行くのも困難なほど、わずかにしかないのだ。
かといって、俺達の拳銃やナイフではとてもじゃないが、太刀打ちできそうもない。もちろん、やってみないと分からないが、可能性は低そうなのだ。
となれば、俺の狙うべき場所はただ一カ所のみだ。
「エリナ」

「分かってる」
目配せした俺に、エリナも強く頷いた。彼女も分かっているのだ。そこを狙うしか俺達に助かる道はない。
そう、顔だ。いや、もっと厳密に言えば、口の中か目だ。そこを狙えばなんとかなるかもしれない。
そして、それでダメージになれば、ぶち破ってくれた窓から入って、ダクトの中の武器を回収する。あのダクトの中には、手榴弾やロケットランチャーなんかがほうり込まれているのだ。
「来るならきやがれ」
渇いた唇を舐めながら呟く。それと、ワルサーからサイレンサーも取り外しておくのも忘れない。こうなった以上、サイレンサーなど意味はない。銃の威力も削られるのだ。
階段のところまで来たところで、ついにメキャメキャという音とともに、強化ガラスが破られた。それをまるで解放された喜びでも表しているのか、奴は再び咆哮した。
廊下に、やつの絶叫ともとれる声が響く。こっちの耳の鼓膜が破れてしまいそうだ。
破られた窓からずるりと這い出てきた奴に、照準をピタリと合わせる。
「エリナ、君はやつの目を狙えっ。俺は口の中を狙う」
「分かったっ」
さぁ、もう一度声をあげるがいい。エテ公のできそこないめ。
「お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝」
低く、うねるような声。奴が吠えた瞬間だ。
喰らえっ！
立て続けに三回トリガーを弾く。あまりの速さに音は一発にしか聞こえない。
「う〝がぁあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」
俺の弾は全弾奴の口の中に命中した。それも一カ所だけでなく、微妙に当てる場所を変えてだ。

奴が怯んだすきに、今度はエリナが得意のナイフをもって奴の目めがけ、投げる。
ナイフは二本とも奴の目に当たり、ぶち倒れる。廊下に更なる絶叫が響く。
「よし、今だっ」
怪物が這い出てきた窓に向かって走りだした。
とにかく、シェルターの向こうに出ることさえできれば、なんとかなるはずだ。今はそれにかけるしかないのだ。
だが甘かった。
怪物は早くも起き上がろうとしていたのだ。
俺はさらに三連弾の応攻に出た。躯に当たったはずだが、丸っきり効果がないようだ。
それどころか当たった銃弾は、金属が落ちる小さな音とともに、床に転がったのである。
「エリナっ、君が先に行って武器を持ってこいっ。ここは俺が食い止める！」
言うが早いかエリナは、ぶち破られた窓から飛び込んでいった。
そんな僅かな隙に、怪物はすでに起き上がり、俺の方を向いていた。目がこめかみについているので、果たしてそれが本当に俺の方を向いているのか、という疑問があったが。
だが、そんなことよりも信じられないことが起こりはじめた。
俺がをぶち当てた弾丸跡の部分が、グロテスクに蠢動しているのだ。そして次の瞬間、その部分がもこもこと盛り上がり、ついには勢いよく真っ二つに割れた。
真っ二つになった間から出てきたのは、思わず顔を背けたくなるようなグロテスクなものだった。
（目……目、なのか？　あれは）
そう、銃痕から目玉が現れたのだ。おまけに、しっかりと瞬きし、くりくりと目玉が動いているのも分かる。それも三ヶ所全てからだ。
その目玉が、ピタリと俺を見据える。恐らく、この光景に俺は顔

を引き攣らせていたことだろう。
当たり前だ。誰もまさか傷痕から目玉が出てくるなんて思うはずがない。それに、その目玉はきっちりと本来の機能を果たしていそうなのだ。
今までに、いや、これからも見ることはないであろう怪物の能力を目の当たりにし、自分でもどうしようもないほどの恐怖と嫌悪感が、俺をつつむ。
脇や背中にはべったりと汗が滲んで、シャツを肌に張り付かせている。
俺は叫び声をあげながら、無我夢中でトリガーを立て続けに三回弾く。狙うのは当然、そのグロテスクな眼球だ。
あんなものに見つめられるなんて、堪ったものではない。
それでも怪物は、俺が狙う場所が分かっていたのか、それらの部分を護るように手で防いだ。
弾の一発は、そのつややかなプロテクターを付けたような手に当たり、チュインという音とともに、あらぬ方へ飛んでいった。
やはりプロテクターのような部分はプロテクターとしての役割を持っていたのだ。
一発は怪物の肩に当たり、やはり先ほどと同じように、もこもこと蠢動し始めている。もう一発は、きちんとその目玉に当たってくれたようだが、やはり早くも、蠢動が始まったのである。
（くそっ、これじゃぁ意味がない）
かといって今の俺に、これ以上の反撃の手段がないのも事実だ。
俺は仕方なく奴のその、グロテスクな顔面目掛けトリガーを弾く。今度は残った全弾を使ってだ。
それでも奴は、またも狙ってくる場所が分かっていたのか、顔面をその手でもって防ぐ。
その手のプロテクターによって、ほとんどの弾が弾(はじ)かれる。奴も学習してきているのだ。
それでも二発だけはなんとかその頭部に当たったものの、結果は

同じだった。また、あらぬ場所に眼球ができただけだ。
俺は直ぐさま、新たにマガジンを取り出して装弾する。
「九鬼っ、よけろ！」
「！」
背後からした声に、俺は咄嗟に横に飛びのいた。
直後、ボシュッという音の後に爆音が響いた。エリナがロケットランチャーを使ったのだ。
怪物は唸り声とも苦悶の声ともつかぬ声で、炎に包まれた頭部をかかえている。
「もう一発だっ」
エリナは構えて、もう一発怪物にお見舞いしてやる。その直撃を受け、奴はついに床にぶち倒れた。
倒れた怪物はしばらくの間、ピクピクと手足と思われるそれを痙攣させていたが、それもやがて止まった。
俺を恐怖に陥れた怪物も、やはりロケット弾には敵わなかったというわけだ。

つかの間の安堵に浸ったあと、俺は破られた窓をくぐって、処刑場のフロアへと歩み出た。そこはやはり惨たらしいもので、まるで戦場か何かのような有様だった。
しかし、先ほど俺が見た時とはずいぶん様子が違った。まず、六つに区切られたはずのブロックがなくなっていた。これは床を見ればすぐに理由が分かった。
床に、仕切りのようなものが埋め込まれていたのだ。仕切りの色が違うため、辺り一帯が真っ白だと目立つ。多分、どこかにあるボタン一つで、床の仕切りが出て来るようになっているのだろう。
それと、子供達の遺骸も片付けられたのか、すでにない。まぁ、これに関してはなくて良かったかもしれない。
その変わり、数人の白衣を着た研究員と思われる連中の死体だ。ある者は手足をちぎられ、またある者は首を引き伸ばされたのか、

首と胴がなはれて、頸骨と背骨だけがそれらを繋ぎとめているものもあった。ある者は両手足が握り潰されてミンチになっている。

他にも背骨からぶち折られ、後頭部が踵に当たっているもの。踏み付けられたのか、圧死しているものもある。

そんな中、最も悲惨な死に様を晒しているのは、窪んだ壁にめり込むかのようにして縫い付けてある死体だ。いやそれはもう、張り付いていると言った方がいいかもしれない。内臓や骨の判断がつかないほど粉々になり、ただ人間らしきものがそこに張り付いている、そんな状態なのだ。

そんな悲惨な状態で、グロテスクなものを見るのが嫌で目を背けたくなるが、決して連中の死そのものには同情などしない。連中は死んで当然のようなことをしてきているのだ。

ここにぶちまけられた連中の中には、妹の実験とやらに直接関わった奴だっているかもしれないのだ。どっちにしろ、地獄にたたき落とすと決めた連中なのだ、弾を消費しなかったとでも思えばいい。

俺はそんな死体を脇目に、通気ダクトから落とされた武器を拾い、身につけた。一時は訳の分からない怪物の登場で、どうなるかと思ったが、過ぎてみればなんてことはない。

連中を始末しながら、坂上と名乗る男を見つけ出して締め上げ、研究所を破壊する。この目的は、なんら変わらないのだ。

「……改めて見ると、すごい惨状だな」

「ああ。だが、こんな惨状を見ても驚かなくなったのは不思議なもんだ。まぁ、日常的に死体を見慣れているせいだろうがな。

ま、少しは驚きはあるが正直な話、さっきの怪物を見たせいか、なんとも思わないってのもある」

エリナには言わないが、銃痕から目玉が出てきたなんて話、信じないかもしれない。それともの言わず、動かなくなった死体。どっちが自然か言うまでもないだろう。

あれを見た俺でさえ、夢だったんじゃないかと思ったほどなのだ。

「ともかく、ここを出よう。あの怪物が連れてこられた出口がある

はずだ」
そういいながら、俺は爆薬を仕掛けた。これで後一時間で、ここは吹き飛ぶことになる。
また、それとは別に手動用の起爆スイッチもあるため、一時間と言わず爆破させることもできる。
「セット完了だ。なにもしなくても一時間後に爆破する」
俺とエリナが武器を担いで頷き合い、フロアを立ち退こうとした時だった。
つい今の今まで下りていたシェルターが、突然上へと動き出したのだ。
「なんだ」
すると、シェルターの向こうから駆けてくる足音が聞こえてきた。
「ちっ、連中もようやくおいでなすったようだ。走るぞ」
こっちが怪物を倒した後になって、ようやく事態を嗅ぎ付けた連中が来たのだ。全く、ヒーローというのはいつも遅れてくる。
俺達は走って反対側の開いた出口の方へ走る。一難去ってまた一難だ。
連中がフロアに到着した瞬間を狙って、アサルトライフルで奴らを狙い撃つ。向こうの廊下で倒れている怪物を目の当たりにし、そこに目がいっている隙をついたのだ。
初撃でまず二人がぶち倒れる。
そこでようやく、連中は侵入者がいたということに気付いたようだ。連中が壁に隠れようとした際に、また一人をぶち倒す。
「ゆっくり後退しよう」
俺が援護しながらエリナがそれに応え、一歩二歩と後退していく。
彼女が横の部屋の前に着いたとき、俺も移動を開始した。今度はエリナが俺を援護する。
一旦あえて銃撃を止め、相手が顔を覗かせた瞬間に、そこを撃つ
エリナの技術に感心しながら、俺もドアの横にまできた。
記憶によれば、このドアの向こうにも上に上がる階段があったは

ずなのだ。
俺はエリナに合図し、ドアの向こうに行くよう指示する。
ドアを開け、エリナが入ったのを見計らい、俺は手榴弾を取り出し、安全ピンを抜く。
続けざまにそれを投げ、ドアへと入った。ドアを閉め、エリナを追おうと足を踏み出した時、ドアの向こうで炸裂した音が聞こえた。

俺達が入った部屋は、またも人知を超えた場所だった。先に入ったエリナは、その美貌を凍りつかせている。もちろん、俺とて似たようなものだ。
そこは数多の動物が檻に閉じ込められていた。だが、それらの動物はあまりに俺達の知っている動物とは掛け離れている。
まるでさっきの怪物みたいなのだ。先ほど上の階にいる時に見た、虎と思われる動物もいるが、近くで見てみるとそれは、普通の虎ではないことが分かった。
まずが目が一つしかない。そして、手足もやはりあの怪物と同じで、どこか不自然で、筋肉はしなやかと言うよりも、全身にボールを張り付けているみたいに見える。
時折、その筋肉の下を何かが這っているように、不自然な動きを見せているのだ。そう、まるで、蛇か何かが這っているようだった。
しかしそれは、ここに繋がれている全ての動物に言えることで、とても自然に生まれてきたものとは思えない。
別の檻には熊と思われるのもいるが、なぜか頭が二つくっついていた。その姿は、どいつもこいつも奇形ばかりなのだ。
「……こいつらはさっきの怪物と同じような奴ら、なのか……？」
「わかるわけないよ、そんなの」
当然だ。だが、聞かずにはいられなかったのだ。
「どうやったらこんなのが生まれるんだ」
呻くように口にした。姿形もそうだが、皆、顔が俺達の知っているそれではないのだ。

しかも、その檻にはどうも電気が流れているみたいだった。その檻の鉄格子から、パチンという音が聞こえるためだ。

奴らは睨みつけるかのように俺達を見てくるが、檻に電気が流れている間は何をしても無駄だというのを知っているのか、ただ唸り声をあげるだけだった。

きっとさっきの怪物は、研究員が何かのミスでこの檻の電気を流すのをストップさせたか何かで、逃げ出したのだろう。それに、こいつらも仮にも生物のはずなので、餌を与えられなくなれば、いずれは死ぬだろう。

俺はここに爆弾を仕掛けるつもりだったが、躊躇った。どうせ死ぬなら、こちらの危険を犯すような真似はすまい。もし奴らが、爆弾で死ななかったら?という疑念が浮かんだからだ。

とはいえ、爆発による焔の熱は、千度近くにはなる。部屋の状態によっては、それ以上になることだってあるのだ。事実、火事なんかが起こった時、よく鉄や燃えにくいはずの石の表面が、あまりの高熱で、焼け溶けてしまうことがある。

この爆弾もそうで、大量の火を発生させるため、この部屋のような密閉された空間では、軽く七百度は超えてしまうだろう。息ができなければ、連中も生きようがないはずだ。

迷ったが、やはり俺は爆弾を仕掛けることにした。このままにしておいて餓死させるのもいいが、それよりも一息に死なせてやった方が、こいつらも楽かもしれない。生きていたって、結局は同じ運命だろうからだ。

この連中と、意思疎通ができればいいのだろうが、俺にはそんな能力などない。爆弾をセットし、俺達は部屋の奥へと進んだ。

次の部屋は今までの白を基調とした部屋と違い、これぞ実験室と言わんばかりの部屋だった。部屋にはいくつかのモニターが置かれ、実験のための台が二つ置かれている。

また、そのうちの一つは手足を動かせないよう固定するための枷が台に取り付けられている。つまり、この実験台に乗せられるのは

人間、ということだろう。
「……くそ、嫌な想像しちまった」
俺は気に入らない奴らは地獄に叩き落とすことを信条にしてはいるが、格段サディストというわけではない。そうであっても、この台に乗せられた人間の運命をなんとなくだが、想像してしまったのだ。
「あの変な生き物達も、ここで何かされたのかな、やっぱり」
「ああ、きっとそうだ。それに混じって人間もそうされたんだろうよ」
そう言うと、エリナは苦い顔をした。まぁ、当然と言えば当然だ。この女も間違いなく俺と同じ、希代の殺人機械ではあるが、サディストであるわけではない。少々行き過ぎな感がしなくもないが。
ここにも爆弾を設置しようとした時だった。何気なくモニターの脇に置かれた収納ボックスに目がいったのだ。意味などない。本当に偶然だった。
それを開けて見ると、中にいくつかのデータを収めたディスクが入っていた。それを手に取り、ケースの表面を見た。ケースには、『ＥＶＥ細胞による実験データ』と書かれていた。ＥＶＥとは沙弥佳に付けられた、腹立だしい呼称だ。しかし、なぜそいつで実験するというのだ？
興味をもった俺は、そいつを何枚か取り出してサックの中に放り込んだ。中にどんなデータが入っているのか分からないが、映像であれなんであれ、沙弥佳の細胞から発生したという実験とやらは、なぜだか見ておいた方が良いと直感したからだ。
他にもまだないかと気になり探してみたが、特にはありそうになかった。まぁいい。成果としては十分だろう。後は坂上と名乗る奴を見つけることだ。
奴を締め上げれば、知りたいことも知ることができるだろう。
ようやく地下施設から抜け出すための通路に出ると、今度はさっ

きの奇形な生物達と違い、生身の人間と出会った。いや出会ったというより、見てしまったといった方が正しい。

そこはさっきの実験室のような部屋と、長い廊下で繋ぎ部屋になっているようだが、三日四日前に見た伊達聡一郎が経営する、鳳凰館の奴隷部屋を彷彿とさせるような造りになった部屋だった。

だが、まだ鳳凰館にいた彼らの方が、いくらかマシと思えるほど、酷いものだったのだ。

一人一人が仕切りのある部屋に入れられており、皆一様に死んだ魚のような目をしている。その瞳からは意識があるのかないのか。もしくは死んでいるのかいないのか。それすらも分からないほどだ。

いや、明らかに数人がすでに息絶えているのが分かる。まさに、奴隷牧場とでもいうのだろうか。それでいて、廊下は鳳凰館と違って白く、未来の囚人用独房といった光景だ。

そんな独房が、廊下に沿って両側にずらり並び、廊下の向こう側までずっと続いている。おまけに、入れられた子供達は皆死人も同然な状態なのだ。

「……行こう」

「え……？　ねぇ、助けてあげないの？」

「……ああ」

「ああって……あんた、この前は助けてあげてたじゃない。助けてあげよう？」

「……なら、君一人でやれ。俺はごめんだ。第一、鍵はどこにあるんだ。助けたとしてもこれだけの人数、とてもじゃぁないが搬送もできない。外にはトラックもなかったようだし、連れてきたってどうしようもない。

そもそも、皆俺達がいるってのに、振り向きもしないじゃぁないか。施設を何度も往復できるほど時間の余裕もないだろう？　仮に連れ出すことができたにしたって、爆破の音でいずれは近隣の人間に気付かれるだろうよ。爆発は焔が上がるからな。ついでに厄介な連中も来るんだ。

そんな中でとてもじゃぁないが、搬送用トラックを待ってるなんてことはできないだろ」

それだけまくし立てると、エリナは何も言わなかった。もちろん、できるなら繋がれた子供達を助けてやりたい気持ちはある。しかし、現実的に無理なのだ。

しかも、この研究所に後どれだけいるか知らないが、武装した連中も存在しているわけだから、そいつらも相手にしなきゃならないとなると、導き出される答えは当然といえるはずなのだ。

この女はわりと、感情的な部分が強いようなのでそれは仕方ないとは思うが、そのために命を落とすなんざ、真っ平ごめんだ。少なくとも妹がまだ死んだと決まったわけじゃない今、まだ生きなくてはならないのだ。

「エリナ、君の気持ちは分かる。だが、仕方のないことだとは分かっているだろう？

俺達にできることなんざたかが知れてるんだ。いくら助けたくったって、必ずしも毎回それができるわけじゃない」

「……」

エリナは黙って俯いたまま、一言も喋ろうとはしなかった。もしかしたら反論したいのかもしれないが、それはただの感情論であり、意味がないというのは分かっているのだろう。

「さぁ、行こう」

「……あんたは先に行って」

「おい」

「いいから！」

強く言うエリナは、すぐに追い付くからと一言告げて、俺に走っていけと付け足した。本来ならそんなことは認められないが、まぁいいだろう。

「……早く来いよ」

そう告げて、俺は走って一気に廊下の端にまで来た。ドアに入り閉めた途端、銃声が響いた。それから少しだけ時間おいてはまた、

銃声が鈍く響き渡る。
「……それも優しさかもしれないな」
誰に言うわけでもない小さな声で、俺は呟いた。

第３８章（前書き）

残酷なシーンあり。

第３８章

戻って来たエリナとともに、俺は再び上を目指して進んでいた。
途中、武装した奴らを二人でカバーしあいながらの行軍だ。たまに出てくる奴らだが、俺はどうも不思議な感覚を覚えていた。というのも、連中は確かに武装はしているものの、どこか素人臭さがあるのだ。
そこで俺は、通りすぎ様に今しがたぶち倒した奴を簡単に調べてみたのだ。すると、この妙な違和感が分かった。驚くべきことに連中は、正規に訓練された者ではなく研究員だったのだ。
「通りでおかしいと思ったぜ」
もちろん、武装していることから考えて、ある程度の訓練を受けてはいるのだろう。
だがそうであったにしても、必ずしもプロフェッショナルになれるわけではない。この連中が訓練を受けたと言っても、所詮は付け焼き刃程度だろう。皆マニュアル通りで、プロらしい意志のあるような動きはない。
それに装備もサブマシンガンとアサルトライフルでは、精度も威力も違う。
連中の正体が分かったことで、俺はどうしようもなく嬉しさが込み上げてきた。だって、そうではないか。皆殺しにする絶対的な口実ができたのだから。
だがそれと同時に、もしかしたら倒してきた奴の中に、坂上なる人物がいたかもしれないと思うと、少しばかしの後悔もある。
「行こう」
それをエリナに悟られぬよう立ち上がり、また上階に向かって歩を進めた。
ようやくエントランスへ続くエレベーターの前まで来た。すると

そこで、思わぬ人物達と遭遇したのだ。田神と松下だった。それと白髪混じりで、白衣を着た男とその部下と思われる研究員達も一緒だ。

ちょうどエレベーターから降りてきたところを鉢合わせしたのようで、一瞬、両者とも何があったのか分からないようだったが俺は、素早くライフルからワルサーに持ち替えて、容赦なく引き金を引いた。

その時俺は、先頭を行く白髪混じりの男は殺さない方がいいと直感した。なぜかは分からないが、とにかく、そう直感したのだ。

俺の素早い対応に連中は、一人も銃を抜くことなく廊下に薙ぎ倒されていく。

最後の一人となった白髪まじりの男は、必死になって銃を持とうとするがそれを背後から田神が押さえる。

俺は足早にそんな田神達のところに歩み寄った。

「奇遇だな。予定じゃぁ俺達が上に上がるところだったんだが」

「き、君、これはどういうことなんだ！？　ま、松下君っ」

「黙れ。俺は今気が立ってる。俺の気分次第でいつでも引き金を引けるんだ」

俺は白髪混じりの男に銃口を向けながら脅した。

「つまりはこういうことですよ、主任殿」

「さぁ、降りてきたところ悪いが、上に行こう。後三十分ほどでここは吹き飛ぶぜ」

そう言うとまた男が何かわめき立てたが、その顔に銃で叩きつけてやると、すぐに押し黙った。

それを見て、田神と二人で男を引きずってエレベーターに乗せた。エリナと松下も一緒だ。当然、エレベーターに乗る前に、エントランスにも爆弾を仕掛けておくのを忘れない。

「さぁ、あんたに喋ってもらおうか。どうやらここの責任者でもあるようだからな」

エレベーターが上に上がり始めても、男は黙ったままだ。

きっと少しでも先伸ばしにして、なんとかやり過ごそうということなんだろう。この手のタイプは、意外と小狡い奴が多い。

「だんまりか」

俺はワルサーを構え、男の二の腕に一発撃ちこむ。

「ぎゃあっ！？」

「今回はこれだけに留めてやったが、次はこうもいかないぜ」

「ひっ、ひっ、ひっ」

男は恐怖と痛みのあまり、断続的に悲鳴のような痛みを堪えるような、そんな声をもらしている。

ふん、自業自得だ。今はまだ殺されなかっただけありがたいと思うんだな。

「まずは、あんたの名前から聞かせてもらおうか」

再び銃口を男に向けると、男は血で濡れた白衣の上から傷口を押さえながら、小さく口にした。

「さ、坂上……」

本当に消え入る小さい声だったが、間違いなくそう言った。どうやら俺は最近にしては珍しく、当たりを引いていたらしい。

一階にまであがってきた俺達は、誰も使っていない部屋に坂上を座らせ尋問を開始した。「さて坂上さんよ。俺は、どうしてもあんたに聞かなきゃならないことがある。あんた、九鬼沙弥佳という名前を知っているはずだな。まず、沙弥佳がどこに行ったのか喋ってもらう」

「く、九鬼沙弥佳だと？　ＥＶＥの……ことか」

沙弥佳がそんな呼称で呼ばれることに、内心苛々とさせられるが今はそんなことで時間をとるわけにもいかない。

「そうだ。五年前、ここから脱走したそうじゃぁないか。本当に行方を知らないのか」

銃をちらつかせながら坂上に問い掛ける。

「あ、ああ……彼女は今までの最高の研究成果だ……いや、だった。

もちろん脱走後、必死の捜索にも関わらず見つけられなかった。
……ど、どこに行ったかは本当に分からないんだ」
「なるほど、では次の質問だ。彼女に投与したという薬だ。あれはなんなんだ」
「あれは……」
坂上の喉がゴクリと動く。
「あれは、遺伝子に強く作用するものだ……もう何年も昔、前身となったプロジェクトの、実験の被験者から取られた受精卵をサンプルにしたんだ……。その遺伝子を元に開発されたのが、ＮＥＡＢ‐２と呼ばれる新薬だ」
そう言って男は顔を伏せる。俺は銃口をもってして、坂上の頭を上げさせる。続きを促しているのだ。
「うっ……ＮＥＡＢ‐２は、そのサンプリングされた者と同種の者にしか作用しないもので、それで私たちは」
「子供を使って実験したというわけか」
「そ、そうだ……だが、理論は間違っていないはずなんだ。だから……」
「御託はいい。続けな」
「ううう……分かったから銃を下ろしてくれ」
呻くように懇願する坂上に、俺はなおも銃口を押し付ける。
「うぅ……何十何百というパターンが考えられたが、その結果、健康な体を持った人間でなければ駄目だということになった。
そこで伊達聡一郎という男に頼んで、連れて来てもらったのが九鬼沙弥佳という少女だ……彼女はサンプルを取った人間と同じで、日本人ということもあったんだ……。
……そのために、彼女には徹底した訓練をほどこした。死の危険を察知するよう訓練され、より活動的になった遺伝子にならば、ＮＥＡＢ‐２の効果も発揮できるかもしれなかったからだ……」
そうか……それで、訓練なんかさせたのか。きっと適正検査というのも、遺伝子の適正検査といった方がいいのかもしれない。

「それが功を奏したのか、元々適正があったからなのか今となっては唯一の成功例なので分からないが、投与された後も副作用が全く見られなかった……」
「ＮＥＡＢ‐２の副作用ってのは、一体なんなんだ」
「くっ……あれが引き起こしたのは、遺伝子の異常で……き、奇形に変化してしまうことだったんだ」
「奇形……」
俺とエリナは思わず顔を見合わせた。きっと、さっき地下で見たあの奇形の怪物達は、ＮＥＡＢ‐２の投与によるものだったのだ。
「続けるんだ」
そんな危険なものを妹に与えたというのか、この男は。そのためについ言葉に怒気がこもり、押し付ける銃口にも力が入る。
「ぐうっ……それでも、ＥＶＥも完璧ではなかった……投与から三週間ほどした時、体に変調をきたしたからだ……。
そこで我々は、ＮＥＡＢ‐２を再度投与した。それが治まったんだ……以来ＥＶＥには三週間に一度、あれを投与することになったんだ。それを段階的に上げていき、その都度、彼女からは体毛や皮膚といったものをサンプリングしていった……。
そしてそれが、次の新しい段階へのステップになろうとした時に、ＥＶＥは脱走した……」
「それで危険な状態だと書き残していたんだな。だとしたらあの地下にいた奇形の怪物は、その成れの果てというわけか」
再び銃を額に押し付けながら問う。
「うっ……ち、違う。あれは」
坂上がそれを否定し、何か言おうとしたが、それは田神に遮られた。
「九鬼、もういいだろう。今はこれ以上、ここで尋問するわけにもいかないだろう。もう時間がない」
坂上は何か大切なことを言おうとしたように思われるが、田神の言う通りだ。

気付けば、爆破の時間まで後十分を切っているというところだった。

「仕方がないが、まぁいい。坂上、あんたにはまだまだ喋ってもらわないといけないことが山ほどある。大人しく着いてきてもらうぜ。ま、嫌でも連れて行くがな」

田神がロープを取り出し、坂上の手を縛っていく。伊達の時にも思ったが、随分と手慣れているようだ。

「さぁ立ちな」

二人で坂上を立たせ、部屋を出る。

ここは地上の一階部分だが、施設自体が山の上に建っているため窓からは、遠くに街の明かりが小さいながらも見渡すことができる。つい二十分か三十分ほど前まで、窓があっても外の景色が見えないという、どこか居心地の悪い息苦しさを感じていただけに、まさに娑婆に出たという気分で気持ちがいい。

研究員兼兵隊だった連中も、あっけなかったが片付けてやったし、沙弥佳の安否が分かったわけではないが少なくとも、まだ死んだと決まったわけでもない。薬による効果が心配ではあるがそれを作り、知る人物をこうして確保することもできたのだ。成果は上々と言っていい。

田神もそれに関するデータらしきものを回収しているようだし、後はアジトに戻ったら吐かせればいい。残りは、この忌ま忌ましい研究所を破壊してやるだけだ。

俺達が足早に車に戻った時だった。

後方より、身の毛もよだつような咆哮が聞こえてきたのだ。

その声に俺は後ろを振り返る。

「まさか……」

「……まだ死んでなかったっていうの？」

「いや、確かに……頭がぐちゃぐちゃになったはずだ」

「どうしたんだ、二人とも」

エリナとのやり取りを聞いた田神が、怪訝な調子で聞いてくる。

「……くっくっくっ。そうか、まだ生きていたか、ゴメルよ。おまえがそう簡単に死ぬはずがないものな」
突然笑い出した坂上に、俺は黙るよう殴りつけたが、こいつはますますその笑いを大きくしていく。
「とにかく車に乗るんだっ」
坂上を荷台に放り込み、俺達も素早く車に乗り込む。
「出すんだ」
言うが早いか、田神は即座にアクセルを踏んでハマーを急発進させる。
後三分足らずで最初に仕掛けた爆弾が爆破するはずだが、俺は待てなかった。
処刑場フロアで倒したはずのあの怪物が、上の施設にまでやってきていたのだ。
「皆、耳を塞ぐんだ」
次の瞬間、俺は起爆スイッチを押した。
上と地下に仕掛けた爆弾が一斉に爆発する。
轟音を立て、爆破による衝撃で建物が破壊される。その一発の火力は、ロケットランチャーなど比較にならない。
本来ならゲートをくぐった時に爆破させる予定だった。そのために爆風がハマーを巻き込み、ハンドルがとられた。
車はそのまま木に衝突してなぎ倒し、向きを変えて横転する。
中の俺達もその衝撃に耐えられず、横転に合わせて身体をあちこちぶつける。中にいながら、金属が地面のアスファルトに擦れる嫌な音がしている。
横転してしまったままで、ハマーはその動きを止める。
頭をぶつけたためだろう、鋭い外からの痛みと頭の中を揺さぶられたような鈍痛が同時に襲ってくる。
「うっ……」
目が回る。頭が下になっているから、その時に打ったのかもしれない。

俺はゆっくりと目を開け、状況を確認する。ぬるりと額から血が流れてきていた。
手足も動かせるようなので、頚椎などに損傷はないようだ。
「お、おい、大丈夫か」
俺は直前に庇った松下に言ったつもりだったが、言い得て、田神達がそれに反応した。
「あ、ああ……こっちは大丈夫だ……」
「私も……」
「……君も大丈夫か？」
「ああ……なんとかな。おい松下、大丈夫か」
「ええ……私もなんとか……」
少し目を回しているが、ここからは目立った外傷もなさそうだ。
俺がクッションになったのだから、当然と言えば当然だが。
「そうか……。だったらどいてくれないか、このままじゃぁ外に出られない」
松下を横にどかせ、俺はそのまま足を使ってドアを蹴り開ける。
重力がかかっているため、いつも以上にドアが重い。
方向転換し、シートにうまいこと足をかけ、俺は外に出た。
車の横っ面に乗りながら、松下に手を差し延べる。田神達もうまく外へ脱出できたようだ。
辺りを見回すと、粉のように散ってしまったコンクリートや土埃が巻き上げられて砂埃が舞っている。おまけに、所々に火の粉も飛んでいるのが見えた。
火がどこかで燃えているようで、パチパチと何かを燃やしている音も聞こえる。さながら、爆撃を受けたような有様だ。
俺は車から下りて、荷台に放り込んだ坂上を出すべく荷台のドアを開けた。
「出るんだ」
この男もやはりどこか体をぶつけたのか、痛みに苦悶の表情を見せている。だが俺は、そんなことお構いなしに男の体を掴み、外に

投げ出した。坂上は辛そうに呻きながら地面に倒れる。
まだ爆心地となった辺りは靄になっていて、どうなっているのかよく見えない。
「奴は……奴は死んだだろうか」
そう呟いてはみたが、それに誰も言い返すことはなかった。
「さっき一瞬しか見えなかったが……あれは一体なんだったんだ？巨大なゴリラか何かのように見えたが……」
俺はゆっくりと、ただただ首を振るだけだった。当然だが、俺にだって奴のことを知っているわけではない。仕事の成り行きで、偶然出会ったに過ぎないのだ。
「……俺にもよく分からないさ。分からないが決して、あれが自然に生まれたものでないことだけは間違いないことだ。それと、その男の実験によって生み出されたということ以外は、全く謎さ。……今のでくたばってくれれば良いんだがな」
確かに、ロケットランチャーで死ななかったのには驚いたが今度は大丈夫のような気がする。
何せ、数千トンものコンクリートや鉄骨の下敷きになったのだ。これで死んでいないはずがない。俺はそう決め、肩をすくめた。
しかし、そんな俺とは裏腹に、坂上がひどく高い人の神経を逆なでするような笑い声をあげた。
「……くっくっくっく。くたばる？　奴がか。くっくくくくくあははははははは、奴は、ゴメルはこれくらいのことでは死なんよ」
「どういうことだ」
ますます大きくなっていく高笑いをする坂上に、俺は喚いた。
「くききききき、その通りの意味さ。奴が、ゴメルがそう簡単に死ぬわけがないのだよぉ。
確かに、確かに奴以外の下の奇形生物は死んだかもしれん。だが、ゴメルは違う。ゴメルは特別だ」
大しておかしくもないはずなのに、何がおかしいのか坂上はマッドサイエンティストよろしく、奇怪な声で嬉々として語っている。

「いいか。よぉく聞け、愚か者ども。ゴメルはな、あのＥＶＥに続く最高傑作なのだ。奴にはＥＶＥの細胞から取られて作られた、新しい遺伝子を組み込むことで生み出された新型。言うならこの世で唯一無二の、最強生命体なのだ。これしきのことで死ぬものかっ。もはや奴にはこんな研究所という檻など不要。この世に解き放たれた奴を、もう誰も止めることはでき――」

誰も止めることはできない。坂上がそう言いかけて突然地面にぶち倒れた。

「！？」

松下を庇いながら、地面に伏せる。

気付かなかったが門の方から、一台のジープがこっちに向かってきていたのだ。

「なんだっ」

わけが分からない俺は叫んだ。

「俺にも分からない。とにかく荷台にある武器を」

「そうしようっ」

横目で見ると、坂上がもう息をしていないのが一目瞭然だ。

頭を後頭部から向かって額を撃ち抜かれたからだ。額には、赤ん坊の握り拳程度の大きさの穴がぽっかりと開き、そこから血と脳漿（のうしょう）が流れ出ている。周辺にはそれが飛び散っていて、俺の足元にまで飛んできていた。

一気に車まで詰め寄り武器を手にすると、その脇をジープが止まった。ジープには三人が乗っている。運転手とその助手席に一人、後ろにもう一人だ。

三人とも黒いマスクと黒い服に統一されていて、明らかにその世界の住人であることがうかがえる。助手席の奴は席に立っていることから、坂上を撃ったのはこいつだろう。

遠目には分からなかったが近くで見ると、思った以上に小柄な体躯をしている。女かもしれない。

くそ。それにしても、なんなんだ一体。こいつらは何者なんだ。

「あーあ、派手にやっちゃったねぇ」
ジープを運転している奴がいった。マスクをしているが声の感じから男で、二十代くらいだろうか。
「行くぞ」
「了解」
後ろに乗っている男が運転手の男に言い、ジープを降りた。続いて二人が車から降りる。
「情報が本当なら、まだギリギリで間に合うはずだ。急ぐぞ」
そう言って、運転手の男ともう一人に言う。
二人に比べ小柄な体躯をした奴が、ほんの少しの間だけ俺に視線を向けてきた。
いや、その目元も防弾用のバイザーをしているため、本当に俺に視線を向けているのかは分からない。バイザーは分厚いため、真正面から見ないと本当に目を向けているのか分かりにくいのだ。おまけに、辺りはすでに夜になろうとしている。だが、なんとなくだがそんな感じがしたのだ。
「……もしかして」
エリナが呟く。知り合いなのだろうか。
「待ってっ」
彼女は武器を担ぎ、爆発で吹き飛んだ施設のあった所に向かう彼等に叫んだ。その制止にリーダーらしい男が、振り向く。
「……おまえは、エリナ、か？　生きていたのか」
「そうだっ。これは一体どういうことなんだよ」
「それはこっちの台詞だ。あのTビルの作戦以来どうしていたのだ」
そう言い、男が俺達を一瞥し軽く頷く。
「まあいい。おまえが生きているというのは、ある程度は予想はしていたからな。
だが、おまえのことは後回しだ。今は作戦中なんでな」
「何をする気だ」
突然の乱入者に、今度は俺が叫んだ。エリナと知り合いのようだ

が、こっちは訳が分からないのだ。
「単純だ。負の遺産を完全に消滅させるだけだ」
「負の遺産？」
「そうだ。さあ、もういいだろう。我々の邪魔をしないでもらおう」
それだけ言って男は研究所跡に向かう。
邪魔をするなだと？　けっ、抜かせ。もう研究所は破壊し尽くされたのだ。遺産も何もない。
だが連中はそんな俺の思惑とは裏腹に、まだ埃や何やらが舞っている爆心地に向かって、ライフルを構えながら慎重に歩を進めている。
「九鬼」
連中の行動を眺めていた俺に、田神が近くまで寄ってきた。
「後は彼等に任せて、俺達も逃げる準備をしよう」
「逃げる？」
「ああ、何だか分からないが、とてつもなく嫌な予感がしてならない。なるべく早いうちに逃げた方が良い気がする」
「……やはり、あの怪物……ゴメルとかいうのが生きてると思ってるか？」
「なんとも言えないが、絶対に死んでいないとは言い切れない。それにこれほどまでの爆発があったんだ。いくら半径数キロに民家がなくとも、多分住民達も気付くだろう」
「……確かにそれもそうだ。奴らに任せて退散した方がいいかもな。それに……」
チラリと口惜しむように、坂上の死体に目をやった。一番の情報源になるはずであった奴が死んだ以上、俺にとってはまたも、手探りの状態になってしまったのだ。
「そんな顔をしなくても良い。まだ手がかりがないわけじゃないさ」
「そうかな。奴が一番何かを知っている奴だったんだぜ？　そいつがくたばったんなら……」
「いや、そうでもない。エリナと彼等三人は顔見知りのようだから

な」
田神がエリナと乱入者三人を交互に見て、ニヤリとした。
「……そうか。あの三人が研究所の何らかの情報を知ってここに来たなら、知り合いであるエリナのルートからそれを探ることもできる、あんたはそう言いたいんだな？」
「そうだ。それに、君が持ち出してきたデータ、そいつも中を見てみないと分からないんだ。まだ、終わったわけじゃない」
田神が俺の肩に手をやりながら言う。全くその通りだ。また時間はロスするかもしれないが、まだ全てが閉ざされたわけではない。
「ったく、俺としたことが少々気が動転していたようだぜ」
「その調子だ、九鬼。さぁ、そうと決まれば今すぐにもここから離脱しよう」
「ああ」
頷いて、まだ倒れている松下に手を差し延べた時だ。
爆破して瓦礫の山となった研究所跡から、唸り声が響いたのだ。
俺達がそれに振り向くと同時に、瓦礫の下からゴメルとかいう、あの怪物が姿を現した。
同時に先程の三人も、奴に向かってライフルを連射する。
「があ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」
自分の上に嵩張っていた瓦礫を掴み、俺達に向かって投げてきた。
「避けろっ！」
再び、咄嗟に松下を庇いながら脇に飛び込む。
直後、横転したハマーにそれがぶつかり、鈍くも甲高い音がして砕けた。
なんとか避けることはできたようで、怪物の方を見る。
奴は全身に傷を負って所々血を流してはいるが、まるでダメージを受けた様子がない。
それどころか、どこか嬉々としているようにすら見える。
「……あの火力と何千トンの瓦礫ですら、あの程度か」
田神がぽつりと言う。

同感だった。坂上の言った通り、奴の生命力は並大抵のものではない。

それだけではなかった。最初瓦礫から現れた時は錯覚かとも思ったが、そうではない。

「で、でかく、なっている……？」

そう、奴は先程よりも一回りも二回りも巨大になっているのだ。顔も同じで地下で見た時と比べ、その奇怪具合が更に進んでいる。もう目がどこにあって、鼻がどこにあるのか判別しようがない程なのだ。それどころか、元々目のあった場所に新たに口ができ、異様なまでに長い舌が出て唾液を垂らしている。

顎か首の辺りに広がっていた大きな口は、下唇から下が縦に裂けているが、そこから歯が両脇から生えている。言うならば、T字の口ができているような状態なのだ。

まともにあの怪物を見たのは初めてである田神や松下は、信じられないというような顔をしている。

松下に至っては、現実離れしすぎな光景を前に、可笑しくもないはずなのに笑っている。

田神も驚きはしたようだが、直ぐさま現実に戻ったような顔になった。さすが俺が認めた男だ。

さすがにそんな怪物……いや、もはや完全に化け物というべき奴を前に、ジープの三人も驚きを隠しきれていないのが分かる。

そうだろう。まだ今よりはマシだった地下の最初の状態ですら、信じられるようなものではなかったのだ。

俺を含め、この場を完全に支配した化け物を前に、最初に動き出したのは以外にもあの小柄な体躯の奴だった。

それもとんでもなく速いスピードだ。

「あいつはっ！」

そいつは咆哮をあげる化け物の横へ回り、ライフルを連射した。

その音で残りの二人も即座に反応し、ライフルを連射しだした。

三方からの攻撃で、さすがの化け物も咆哮をやめ、その身を防ご

うとしている。
あのアサルトライフルの弾であれば、あの化け物にも多少めくらましにはなるようだ。だがそれでもあの化け物を殺すことはできないだろう。
俺はそんな光景を前にしながら、視線の先にあの小柄な体躯の奴をとらえていた。あの俊敏な動き……間違いない。奴は、あの廃工場で出会ったあの女に違いない。ということは、三人は例のコミュニティの……。
少なくとも敵ではないことが分かったが、そうだとしても油断はできない。もしかしたら、奴らの言う作戦の中に俺を始末する、というのも含まれているかもしれない。
思えば、ドクターとか呼ばれている奴の医院をこっそりと抜けてきて以来なのだ。とは言え、奴らがあの化け物を倒せたら、という条件があるが。
「良し。今のうちに」
車の方を振り向くと、頑丈が売りであるハマーがすでに走ることができなくなっていることに気がついた。
化け物が投げた瓦礫は確かに砕けていたが、太い針金がそのガソリンタンクに深く突き刺さっていたのだ。
「なんてこった」
くそ、まさかあの時の変な音がただ砕けるだけでなく、タンクに突き刺さった音だったとは。
「九鬼。あれを頂こう」
田神が親指でジープを指し、俺もそれに賛同した。
だが俺達が乗り込もうとしても、エリナは動こうとはせず、じっとあの化け物と三人の方を見ている。
「エリナ」
田神が叫ぶ。しかし、それでもなお彼女は動こうとはしない。
「……私、行く」
短く答えた彼女は持っているライフルを肩にかけ、化け物の方へ

と走っていく。
「エリナッ」
田神もライフルを持ってエリナの後を追いかける。
田神としては早くここを離れたいのだろうが、あの女がここから離れないというなら、ここを離れることはないだろう。
当然ながら俺も早くあの化け物から離れたいところだが、田神を放っておくわけにもいかない。強く舌打ちし、乗りかけたジープのボンネットを両手で叩き付け、ハマーの方へ走る。
「あんたも手伝ってくれ」
ハマーの中から武器を取り出すため、松下を呼び付ける。松下はようやく現実に戻ってきたのか、慌てるように走ってきた。
「俺が武器を取り出すから、あんたはそれの脇に置いてくれ」
タンクから漏れているガソリンを顎で示しながら言う。松下は、ただ頷くしかできない。
俺がハマーに戻ったのも、仕方なくあの連中を手助けしないといけなくなったからだ。
確か、ロケットランチャーがもう一挺あったはずなので、そいつを使うとしよう。その直撃を受けて死ななかったような化け物相手に、同じ手が効くかという疑問はあるが、やってみるしかないだろう。
それに直撃とは言っても、あの頑丈な表面にはあまり意味がなかったのだろう。奴はただ気を失っていただけなのだ。
それでも、あの馬鹿でかい口の中であればどうだ。決して勝算がないわけでもない。
「良し、仕方ないが俺もいってくるぜ。あんたはなるべくここから離れるなよ。間違っても俺達の方へは来るな」
「え、ええ。あなたも気をつけてね……」
「ああ。もし俺達がやられるようなことがあれば、あんたはあのジープですぐに逃げろ」　それだけ告げ、俺もあの化け物に向かって行った。

俺が皆のところに駆け付けた時には、すでに戦局は変わっていた。
ゴメルとかいう化け物は、全身に数え切れない程の目玉をつけていたのだ。しかもだ。その目玉が、ギョロギョロと動いている。なんとも悍ましい光景だ。
さらにライフルの一斉掃射によってできた傷口がやはりもこもこと蠢いている。また目玉ができるのだ。
あまり見たくないが、できた目玉にぶち当たった弾のせいで、そこにもまた新しい目玉ができている。
昔、俺がガキの時分に本で見た、全身目玉だらけの妖怪・百目玉を彷彿とさせる。
「野郎……ますます大きくなってやがる」
そんな化け物を前に、ジープの運転手の奴が悪態をついた。少しのあいだ目を離している内に、こいつはまた大きくなっているのだ。
そんな悪態を意識したのか、化け物は突進をかけるようにその運転手の方へと向かっていく。
「ヒィッ！？」
それに一瞬早く気付いたリーダーの男と田神は、後ろに飛びのく。
逃げようとしたが、化け物の大きな腕に運転手が捕まる。
「う、うわぁ！　た、助けて」
「くっ！」
助けようとエリナがライフルを掃射するも、無駄だった。
「うわあああああっ、嫌だ嫌だ！　だ、誰か助けてくれー！　ひっ、ぎゃあああああ」
「うっ……」
思わず口を押さえそうになる。俺の位置からでは、T字の口が男を丸呑みにしようとしている様がよく見えるためだ。
そして丸呑みにした瞬間、その口が咀嚼し始めたのだ。

大口の間からは大量の鮮血が溢れ、漏れていく血が本当に喰われているのだと認識させられる。
「ぎいっ！　うぎゃあああっ」
その断末魔の悲鳴が唐突に止む。
小柄な体躯をした奴が、運転手だった男の喉元を撃ったのだ。生きたまま喰われてしまうよりは、はるかにマシ、そう判断したんだろう。俺とて、あんな死に方など絶対にごめんだ。
咀嚼し終えると、全身の目玉をありとあらゆる方向へギョロつかせ、T字に裂けている口を歪ませるようにニヤつかせた。
実際にそうであったかは分からないが、ニヤつかせたように見えたのだ。
そんな奴が一点に視線を集めたのは俺だった。化け物がその巨体を前進させながら俺の方へ迫ってくる。
「よりによって俺かっ。田神、俺が引き付けるからこいつで奴の口の中を狙うんだっ」
素早くロケットランチャーを田神に渡し、ライフルを構える。
「九鬼、気をつけろっ」
「ああ！　あんたこそしっかりと頼むぜ」
それを合図に、ライフルをフルオートにして連射する。
だが、そんなものは一時凌ぎにしかならない。奴は目を潰されようとも、なおも俺に歩みを止めない。
「早く口を開けっ。皆、奴の頭を狙うんだっ」
頭に集中砲火を浴びれば、口を開くはず。そう睨んだ俺は皆に指示を出したが、そうなると、今度はその歩みが速くなった。
これでは、奴の頭を狙ってもあまり意味がないような気がしてきた。考えてみれば奴の頭には、すでに頭の持つ機能そのものが欠如しているようにも思えるのだ。
だとしたら一か八か、最後の手段に出るしかない。
「田神、口の中をしっかりと狙ってくれよ」
「九鬼っ」

他の三人に援護されながら、化け物に向かって特攻をかけた。
さぁ、俺を捕まえてみろ。だが、その時がおまえの最期だ。
唸り声をあげながら、奴は俺を捕まえようとする。
間近で見るとその大きさは異常なまでに肥大していて、背丈はすでに五メートルどころか六メートルはゆうに超えているだろう。
おまけに近くに来て分かったが、腐った卵と生ゴミが合わさったような異臭を放っている。
「さぁ、どうした。物を投げたり突進をかけることしかできないのかっ」
奴の足元で大声で叫びながら挑発する。
この化け物に人語を理解できるほどの脳みそがあるかは知らないが、挑発されていると言うことだけは理解できたらしい。
「ぐる〝ぁ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」
挑発されたのが頭にきたのか、化け物は唸り声から絶叫へと変わったような声をあげた。
今だ！
心の中で念じたのが通じたのか、次の瞬間化け物の口が火を噴いた。田神がロケット弾をぶち込んだのだ。
奴の口から大量の血や焼けた肉片が飛び散るが、それでもなお、化け物は倒れない。
「田神、もう一発だっ」
ロケット弾が放たれた音の直後に俺は飛びのき、再び化け物の口の中でそれが炸裂した。
今度は完璧に頭部がその衝撃で裂け、T字の口から上がめちゃくちゃになったのだ。
それにともない、周辺には奴の焦げ付いた肉片が飛び散る。
今の今まで唸り声を出していた化け物が沈黙する。ついに奴を倒すことができたのだ。それを象徴するように、膝が地に付き、巨大な何かが潰れるような音をさせながら倒れた。
その一番近くにいた俺は、奴の血や肉片を浴びながらも、それを

じっと見ていた。　これでもう大丈夫だろう。そう思うと緊張の糸が切れ、一気に虚脱感が全身を覆った。

「……終わったのか、今度こそ」

辺りに静寂が降りている中、呟いた。これでまだ生きていたら、坂上の言う通り間違いなく世界最強の生命体だろう。

だが、その最強生命体もやはり、近代兵器には敵わなかったのだ。

俺はその場に、どさりと座り込んだ。

今と地下との二回に渡って化け物と対峙したが、どんなことも過ぎてしまえばどうということはない。そうは分かっていても、感慨に耽ってしまう。それほどまでに、この化け物は俺にとっては規格外の存在だったのだ。

ジャリ、という音を立てながら田神が側に寄ってきた。

「やったな」

「ああ。ようやくさ」

「さぁ、のんびりはしていられない。今すぐここから逃げなければ」

そうだった。今から逃げなくてはいけない。しかし、そうは分かってはいても体がうまく動いてくれない。いや、動かせはするが、どこか自分の身体ではないような感覚がするのだ。

「すまん、手を貸してくれないか」

「ああ、構わない」

田神に引き立てられ、俺達は車のところへ向かおうとした。その視線の先に、リーダーの男とエリナが何か言い合っている。きっとTビルの一件以来何をしていたかなどのことだろう。

時折、こちらに指を差し向けたりしていることから、そうらしいということが分かった。もしかすると移動の足がなくなった俺達に、頼み込んでくれているのかもしれない。

まぁいい。個人的には、今何も考えたくないところだ。後は全て成り行きに任せよう。そんなことを思っていると、また一人俺に近づいて来た。あの小柄な奴だ。

「……よう、また会ったな。あんた、あの廃工場の時の女だろう？」

女と思われるそいつは、無言で俺を見つめている。いや、見つめているかもしれないというのが正しいだろう。バイザーごしで、目だけよく見えないのだ。

「……」

何か言いかけようとしたのか、たじろぐような動作を見せたそいつは、結局何も言わず、俺から離れていった。

「知り合いか？」

「……ああ、ちょいとな。ほら、前に言ったろう。あのコミュニティの奴さ。そして、エリナのお仲間でもあるわけだな」

「なるほど」

安堵感で俺は気付かなかったが、あの廃工場での女がこちらに突然ライフルを向けた。

「！　やはり俺を始末するためかっ」

「どけえっ！」

今まで一言も喋らなかったそいつが叫んだ。

「！？」

田神と同時に後ろを振り向くと、なんとあの化け物が立ち上がり始めていたのだ。例の女が俺達の方に向かってライフルの引金を引く。

一瞬早くそれに気付いた俺達は伏せ、同時に仰向けになりながらライフルを連射した。

「どういうことなんだっ、死んだんじゃなかったのかっ」

「どうやら、違ったようだ」

「くそっ、あれは本当に生き物なのかっ」

エリナとリーダーの男が援護しながら俺と田神の二人を抱き寄せて立ち上がらせる。

カチン

そんな音がして、銃の発射が止まる。

「ちっ、弾切れかっ。あんた予備のマガジンないか」

リーダーの男が予備のマガジンを渡し、それを素早く装弾する。

「まずいぜ、こっちにはもうロケットランチャーなんてもうないぜ。あんた達の方はどうだっ」
リーダーの男に叫ぶ。
「ジープに一梃あるっ」
「ならそいつを持ってくるんだっ」
男が頷きながら後退していく。
だが仮に持ってきたにしても、本当に効果があるのかは分からない。奴は口の中からずたずたにされたにも関わらず、こうしてまた動き出しているのだ。
「田神。あんたの言う通り、確かに悪い予感ってのが当たったようだな」
「できれば外れてほしかったがな」
無駄口を叩きながらも、これからどうすればいいのか、本気で考えた。
俺としては、さっきの案以上の良い案が浮かんでこない。こういう時は田神が適任だが、その田神も良い案は浮かんでないようだ。
「どうする。ロケットランチャーで死なないとなると、もう俺達にできそうなことはないぜっ」
「……君は地下でも奴と出会ったんだったな」
「ああっ。エリナがロケットランチャーで吹っ飛ばしたんだが、結果はご覧の通りだっ」
「その時はどうやった？　頭を狙ったのかっ」
「そうだが、体内ではなく表面だけが焼けたに過ぎなかったらしいっ」
「そうか。なら、奴の体内から破壊してやればどうだろう」
「そいつは今しがた無駄だってことが分かったろうっ」
ライフルを連射しながら、叫び合う。
奴は復活はしたものの、まだ完全に回復したわけではなく、動きも鈍い。
「いいや、さっきのは単純に口の中だけだった。それに、脳を完全

に破壊したわけでもない」
「脳だって？　どういうことだっ」
「あらゆる生命の再生能力というのは、脳からの電気信号だ。科学的には赤血球の働きだといわれて皆勘違いしているようだが、それらは本来、無意識に脳が送る電気信号があるから行われているんだ」
「つまり、脳みそさえ完全に破壊できたら、奴もくたばるといえことかっ」
「そのはずだ。坂上は、あくまであの化け物のことを生命体だと言っていた。だったら、脳を破壊すればいいはずだ」
「なるほど、確かに今までは脳みそを吹き飛ばしたわけじゃぁなかった。次は脳を破壊すればいいわけだ」
「ただし、問題が一つ。奴の脳がどこにあるかだ」
「頭じゃぁないのかっ」
「いや、見てみろ。頭部はめちゃくちゃになっているのに動いている。俺が思うに、奴の脳はもはや頭にはないような気がしてならない」
「だとすると、胴体……か」
「おそらく」
もし本当にそうだとしたら、それはそれで問題がある。ロケットランチャーでは、その脳みそを破壊できそうにないということだ。となると……。
「……炸裂弾を飲ますしかない、か」
「多分それが一番可能性が高いだろう」
やれやれ、結局はそれをやるしかないのか……。
俺は舌打ちし、ライフルを撃ち続ける。
「よし、こいつで今度こそ最期だ」
いつの間にか戻ってきたリーダーの男が、ロケットランチャーを構える。
「待て、そいつだけじゃぁ意味が」
制止の言葉をいいきる前に、ボシュッという音とともにロケット

弾が飛んで行き、化け物に当たって炸裂する。
だが、先ほどよりも効果が薄い。
よく見れば奴は、その体表面にさらに厚いプロテクターを身に纏っているかのように、分厚くなっているのだ。
さっきから撃っているライフルも、今の奴にはあまり効いていない。むしろ、所々で完全に弾き返している。
「……どんどん成長してるんだ」
そう、またも躯全体が脈動し、さらに躯が発達しようとしているのだ。
「九鬼、俺が行く。援護してくれ」
「待ちな。俺に考えがある」
俺はポケットから手榴弾を出して見せた。
「今の今まで気付かなかったが、こいつがあったのを忘れていた。俺がなんとかしてみる。念のため、あんたも二発持っとくんだ。俺が何かあった後のためにもなっ」
「九鬼っ」
早口でまくし立てながら田神の制止を無視し、奴に向かって走りだした。するとその横を、あの女がついてきたのだ。
「あんた……ちっ、どうなっても知らんぜ」
とにかく、まだ完全に復活していない今のうちに破壊しなければならない。このアイディアで駄目なら、もう手だてがない。本当に最後なのだ。
「ぐがあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」
化け物の咆哮とともに、奴の手が女に伸びる。
「あっ」
そんな女らしい悲鳴をあげて、奴に女が捕まった。
「くっ」
俺はライフルで奴の口の中を撃つ。
すると奴は、かすかに呻くような唸り声を出した。至近距離からであれば、わずかながらライフルも効果があったようだ。

「がる〝ぁ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」
化け物は握った女を俺に向かって投げ付ける。
「ぐっ！」
幸か不幸か、女の体は俺に直撃し、その勢いのまま俺まで真後ろに吹っ飛ばされた。
女を受け止めたままのため、ドシンと地面に背中を打ち付ける。
「かはっ」
肺から空気が漏れ、うまく呼吸ができない。おまけに女が俺にのしかかっているのだ。
「くっ、か、」
落ち着け、冷静になるんだ。今まで何度もあったことじゃないか……そう自分に言い聞かせながら呼吸を整える。
「お、おい、大丈夫か」
「げほっげほっ、あ、ああ、なんとか……うっ」
初めてまともに女の声を聞いた俺は、綺麗な声だな、なんて一瞬思ったが今は、そんなことに浸っているわけにもいかない。
「どこか打ったか」
いや、もしかしたらそうではなく体の中かもしれない。
あの化け物の巨大な手に胴体を掴まれたのだ。骨が軋んで、ヒビが入っていないとも言い切れない。
「とにかくどいてくれ。奴がこっちに来るっ」
「……」
そう言って、なんとか女を抱き起こした。
その時、女からマスクが落ちた。女の長く黒い髪が重力によってバサリと落ち、どこかで嗅いだことのある香りがした。
女はやはり体が痛むようで、顔を伏せて手に膝をついている。
「あんたはここにいろ。俺がなんとかする」
その間にも化け物は俺達に迫ってきていた。
先ほど与えたダメージも大分回復してしまっている。それと同時に、その姿はさらに奇形へと変化し始めているのだ。

あの腐ったような異臭も、先ほどよりも強くなっているような気がする。
「うっ！？」
腕が伸びている……？　化け物のただでさえおかしかった腕の長さが、ありえないほど長くなっていた。
T字の口からは、ダラダラと唾液が流れ出ているし、なんというか理性というのを全く感じさせなくなっているのだ。
地下で出会った時はまだそこに理性のようなものも感じたが、今はそのような印象を全く受けない。
「正真正銘、化け物になっちまったってわけか……」
化け物はその長大になった腕を振り回し、俺達を捕まえようとした。
「どけっ！　ぐあ！！」
俺は膝に手をついている女を突き飛ばし、ライフルを構えたが遅かった。
リーチが変わってしまっていて、距離感がうまくつかめない。俺は奴に捕まえられてしまった。
「ぐっ、げほっ、ぐあぁぁぁ」
ミシミシと、全身の骨が軋んでいる音が聞こえる。
ライフルが同時に手の中に握られているため、ライフルの角が筋肉に突き刺さるような痛みもあった。
こいつは軽くつかんでいるつもりなのかもしれないがこっちは肺や心臓、他の内臓が潰されそうだ。
この化け物は、俺を舐めるように全身の目玉を俺に向けている。その一つ一つが細めているのは、俺を嘲笑しているかのようだ。
（まずい、このままじゃぁ……）
こいつはほんの少しだが、握る手に力を込めた。だが俺には、それだけで想像もつかないような激痛だ。
ついにボキボキともメキメキともつかない鈍い音を立てて、肋骨が折れた。

「ぐはぁっ！？」

口からは大量の血が吐き出され、まともに息をするのも辛い。顔が高熱がでたかのように熱く、視界がなぜか赤く見える。

圧迫されすぎたために、顔の毛細血管が切れ始めたのだ。

（だ、駄目だ……もう……）

意識が遠退きかける。いっそのこと、このまま意識が遠退いたら、楽かもしれない。そんなことすら考えた。

「九鬼ぃっ！」

遠くで誰かが、俺を呼んでいるような気がする。

駄目だ……もう誰かも分からない。俺はここで死ぬのか……。それも仕方ないかもしれない。こんな化け物相手にたかが人間一人、どうこうできるようなものではない。

意識がブラックアウトし始める。ここで意識を失えば確実に俺は死ぬだろう。そうは思っても、もう指一つ動くような気がしない。

（お兄ちゃん！）

あ……？　なんだって……？　今、誰かが……沙弥佳の声がしたような気がした。それとも、これが走馬灯というやつだろうか。

（お兄ちゃん、死んじゃ駄目っ！）

沙弥佳なのか……おまえはまだどこかで生きているのか……。最期にもう一度だけおまえに逢いたかった……。

（目を醒まして、お兄ちゃん！）

ああ……分かった……今起きるよ……今……。

どこかで獣の遠吠えのような、低く唸るような、そんな鳴き声が聞こえた。

獣……？　こんな場所に化け物以外にそんな獣がいるのだろうか。

そう思った時、その答が解けた。

俺だった。獣の声と思ったのは、俺の絶叫する声だったのだ。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」

そうだ。こんな所でまだ死ねない。死ねるわけがない。

まだ終わっていないのだ。俺は沙弥佳に見つけだすために今まで生きてきたんだ。こんな場所で死んでたまるか！

俺は、がむしゃらに手の中から逃れようとするが、やはりどうかできるようなものではなかった。奴が今度こそ、その腕を異臭の放つ口に持っていこうとする。俺を喰う気なのだ。

（やめろっ、やめるんだっ）

せっかくの手榴弾も、先ほど女と吹き飛ばされた時に落としてしまったらしく、なくなってしまっていた。

絶体絶命だ。

奴がまた俺に力を加えて圧迫する。今度は新たに折れた肋骨が、肺に突き刺さったのか、折れる音ともにグシャリという音もした。

口からはなおも吐血が続いている。

（お兄ちゃんっ！）

俺はなぜかとても近くにその声を聞いたような気がした。

それとともに、手に何かが当たった。

左手だけが奴の手からは逃れていたため、その左手に何かを持たされたのだ。

俺はその感覚に、そいつが手榴弾であることをぼんやりと理解した。

もう力尽きかけているが、懸命にそれを口に持っていく。その動作だけで、吐血が激しくなる。

もう俺には、こいつの安全ピンを抜くことで精一杯だろう。

ピンを犬歯に引っかけ、震えながらほんのわずかに腕に力を入れて、そのまま腕を下ろした。同時に、ピンがかすかな金属音を出しながら抜ける。

（こいつが……最後の一手だぜ、バケモン……）

強烈な異臭が鼻をつく。

眼下には大きな口をさらに大きく開けて、俺を飲み込もうとしている。

だらりと力抜けた手の中から、楕円をした金属球が落ちていった。

一拍おいて、突然俺は化け物の手の中から解放された。瓦礫の上に投げ出され、全身を強くうった。しかし、あまり痛みを感じない。解放されたのは、きっと俺を飲み込もうとしたのに、変な物を飲み込んだからだろう。

直後、何かけたたましく怪鳥か何かが呻くような鳴き声が一瞬した後に、ボンという音が聞こえた。

うっすらと開いた目に、それがなんであったのか見ることができた。

化け物の大きなT字の口より上が、見事になくなっていて、あんなに頑丈だった横っ腹も破裂していた。

胸のプロテクターのような部分はそのままだが、右腕もなくなっている。

ここからは見えないが、背中は完全に吹き飛んでいるかもしれない。

「ざ、ざまぁみろ……」

血を吐きながらそれだけいうと、俺は徐々に意識が遠退き始めた。もしあれでも駄目なら、もう諦めるしかない。

意識が徐々に遠くなっていく俺は、もしかしたら、もう二度目が覚めることはないかもしれない。全身がとてつもなく熱く、身体の中では血管が破れて、身体の中に流れ出しているのがなぜか分かる。

（せめて、もう一度だけ……一目でいい。あいつに……沙弥佳に……）

その願いが俺にげんかくを見せたのか、意識が失くなる直前、俺は望んでやまない妹の顔を見た。それも、あの廃工場で出会った女にその面影を見たのだ。

なんでここにいるのか。なんでそんな黒い服を着ているのか。

流れるような黒い髪。人目を引き付けてやまない美貌。その顔はあの日からただの一日だって忘れたことがない、沙弥佳の顔。明らかに沙弥佳だとわかるのに、それはやけに大人びた印象を受けた。

いや、それよりも……なんで……なんで、おまえがそんな恰好を

して俺の目の前にいるんだ。
おまえは沙弥佳なのか。本当に俺の妹の沙弥佳なのか……。それとも、ただの夢かなにかなのか……。
もう動かすことのできない手を、その女に向かって差し延べようとする。
「……さ、沙……弥……」
妹の顔をした女を前に、俺の意識はブラックアウトしていった――。

第３８章（後書き）

今回で現代編は終わりです。

次回より新章が始まります。気になられた方もいると思いますが、あの後どうなったかなども分かるかと。

第３９章（前書き）

今回より、また新章が始まります。

第３９章

『……』

なんだろう。このふわふわとした感覚。

『……ちゃ……！』

これはたまに見るあの夢か。

いつも曖昧で、いつも誰かが俺を呼んでいる夢。

『目を……お兄……』

そんな夢の中であっても、誰かが俺を呼んでいるみたいだ。誰かが呼んでいるなら、そこに行かないと。

『お願い！　目を開けてぇ！』

俺の意識の中で急速に、現実味を帯びた声が響き渡る。妹の……沙弥佳の声だ。沙弥佳が呼んでいる。

俺の意識は、その悲痛さに満ちた声に導かれるように、どこかに吸い込まれていった。

なんだ、今のは……夢か？

ここのところ、やけに変な夢を見るような気がするが、また見て

いたようだ。
「お兄ちゃん！」
耳元で沙弥佳の声がする。
「う……」
手を動かして、体を起き上がらせようとしたが、腹部を鋭く強烈な痛みが襲う。そうだ、俺は確か……。
「お兄ちゃんっ。良かった」
今にも泣きそうな沙弥佳の表情と声に、わずかに安堵感がにじんだ。
「ちっ」
少し離れたところで舌打ちする声が聞こえる。
そうだ。頭がぼんやりしていて忘れていたが、俺は確か奴に刺されたんだった。どうやらその激痛により、少しのあいだ気を失っていたようだ。
「わずかに急所がズレていたようだな。運の良い奴だ」
勝手なことをいいやがる。ストーカー野郎はやれやれといったジェスチャーをしてみせる。
「ひどいっ！　こんな……こんな、刺すなんて」
「くっくっくっ。大層な言いようだな。言ったろう？　そいつは殺すとね。それをするのに、刺すのを躊躇う必要はないさ」
「だ、だからって……」
「良い……沙弥佳。どいてるんだ……」
「お兄ちゃん、立っちゃ駄目っ」
無理に起き上がろうとする俺に、沙弥佳が抱きかかえようとする。
「……気が動転してたみたいで、うまく身体が動かせなかっただけだ。大丈夫さ」
「ふん、減らず口を」
強がっては見せるが実際のところ、かなり厳しい状態だ。
くそ、このままじゃ……。
「さ、沙弥佳。奴は今俺を狙ってる。おまえは今のうちに逃げろ」

「そんな……お兄ちゃんを置いていけないよっ」
沙弥佳が悲痛な面持ちで訴えるが、ここは四の五のいっている状況ではない。奴は本気だ。今のは本当に運が良かったに過ぎない。
「いいから行けっ、足手まといだっ」
奴を睨みつけながら、まだやれるんだというのを意志表示して見せた。
「お兄ちゃん……」
「大丈夫だ。俺がなんとかするから、おまえは早く行け」
そう言って体を支えてくれていた沙弥佳を突き放す。
激痛を堪えながら、ゆっくりと立ち上がった。
「……よう、俺はまだ死んじゃいないぞ」
「ふん。あのまま気を失っていれば、もしかしたら死なずにすんだかもしれないものを」
「……そういうわけにもいかないんだよ。……沙弥佳、行け。綾子ちゃん、君もだ」
「で、でも」
「いいから行けっ！」
沙弥佳と綾子ちゃんは、心配そうな顔をしながらもゆっくりと後退し始めた。
「……人、呼んでくるからっ」
そういって二人は走って行った。
これでいい……あまり情けない姿は見せられない。
「くっくくく。その強がる精神、嫌いではないがな。だが、お前は一体何者なんだ？　普通であれば、一緒に逃げようとするところだろう」
「……あんたと、決着つけなきゃならない、からな」
嘘だ。
実のところ、すでに立ち上がって威勢を張るのが精一杯で、走ることなどできもしないだろう。
気付けば足腰が震えていて、このままだと歩くことすらままなら

ないかもしれない。
　一歩奴に近付こうと踏み締めようとするだけで、とんでもない激痛が走る。しかも、足から力が抜けそうにすらなった。正直な話、誰かに助けてもらわないと、こいつからは逃れられないのは間違いない。
「まあ、いい。運よく急所を外したようだが、今度はそういうわけにもいかん。俺の邪魔をした報い、受けるがいい」
「くっ……」
　辺りはもう限りなく夜になっている。街路灯に明かりが灯り、奴の持つナイフにその光が反射している。
「人が来たら色々と厄介だし、それにお前もすでに、立っているのがやっとというところのようだしな」
　そこにはどこか俺を見下し、嘲りが含まれているように聞こえた。元々俺と奴では、どうにもならないと言う風にだ。
　しかし、それはごもっともな話で、今までまともに部活だなんだとしたことのない俺は、そこそこに運動はできはしても、鍛えるということをしたことがないのだ。素人目で見ても、奴は何かしら訓練されたような動きをしていると思われる。そんな奴とでは、最初から勝ち目はなかったんだろう。
　体格もほとんど同じであれば、その差はとんでもなく大きい。きっと蒲生の家での出来事は、偶然だったに過ぎないのだろう。ビギナーズラックというやつだ。
　いや、それでもあの時奴が最後に突然苦しむようなことがなければ、俺はやはり今回みたいなことになっていたのかもしれない。どのみち、勝ち目などほとんどなかったのだ。
（だが、そうだとしても逃げるわけにはいかない）
　そう、逃げるわけにはいかないのだ。敵わないにしたって、一矢報いてやるのだ。素人にだって少しはやれるんだというのを、この野郎に教えてやる。
　だから、絶対に逃げるわけにはいかないのだ。

「……死ね」
次の瞬間、男が一気に距離を詰めてきた。その手のナイフが俺の喉元にせまる。
不思議な感覚だった。あの蒲生の家の時のように、スローモーションに見える。見える気がするのだ。
これなら……。
腹部に力を込め、腰を低くした。その反動をつけたまま奴の顔めがけ、拳を振り上げる。
これが俺にとっての最後の策だ。
「!?」
奴のナイフは空振り、俺の拳が柔らかいようで固いものを撲る。
「がっ?!」
そんな呻き声とともに、奴に最後の一撃を食らわしてやった。
野郎は予期せぬカウンターに足元をふらつかせる。当たったのは顎の辺りだったのだ。
だが俺にとっても、渾身の一撃といっていいカウンターは無理に動いた代償として、刺された腹から血があふれ、更なる痛みをもたらした。
無理して立たせていた足にも、もう身体を支えるだけの力がないようで、がくがくと大きく震えだし、ついには膝がくずれて地をついた。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、」
おかしな呼吸が口から漏れ、意識が朦朧とする。
全身から嫌な汗が引っ切りなしに噴出し、白いシャツを肌に張り付かせている感覚がある。
なにより白いシャツは赤に染まって、ブレザーにまでその赤が染み込んできているのが分かった。
今のカウンターで駄目なら、俺にはもう何もできそうにない。そんな俺の願いが叶ったのか、足をふらつかせた奴の手と片足がついに地をついた。

先程の手の感触は、やはり顎に当たった感触だった。奴は何度となく立ち上がろうとしてはいるが、その都度下半身がふらつき、まともに立ち上がることができないでいる。

「ふっ、うっ……」

吐息とも呻き声ともつかない声を漏らし、がくがくと足腰が震えている。

俺の最後の策は、見事に成功していたのだ。

（でも……もう、駄目だ）

未だ血が流れる腹部の激痛を堪え、気迫だけで立ち上がり、更にそんな身体の叫びを無視した代償は俺にも大きかった。

すでに俺の周りには血だまりができている。暗闇の中でもわかるほど制服も色が変色し、元の色が判別できないほどだ。

痛みに耐え切れず、傷口を押さえはするがまるで効果などなく、血がとめどなく流れているのが感触としてあった。

（くそ……もうここまでか……）

それでも、沙弥佳と綾子ちゃんを無事逃がすことはできた。

それで、もう十分ではないのか？

そう思って地面にぶち倒れそうになった時だった。誰かに倒れ込みそうになった身体を抱き支えられたようだった。

のろのろと顔を上げると、最近見慣れた生意気な女の顔があった。

「おまえは……」

「あなたは死なせないわ。救急車を呼んだから安心なさい」

「そうか……」

俺を抱き支えたのは、あの藤原真紀だった。

真紀は俺には目もくれず、あの野郎の方にだけ目をやっていた。

奴を見るその目は、俺が今まで見たことがないものであり、どこか冷たい印象を与えるものだった。

（だが、なんであんたがこんな所にいるんだ……）

だんだんと全身が弛緩し、痛みに混じりながらどこか心地良さのようなものを感じながら、俺は目を閉じた。

なんだ……？　体がとても重い。
いつもと違う意識の覚醒は、堆積してぬかるんだ、ヘドロのように纏わり付く感覚だった。
そんな気持ちの悪さを覚えながら、だんだんと清浄な水の世界へと浮かんでいく……たとえるならこんな感覚の目覚めだった。
目を薄く開ければ、真上には真っ白な天井。それと、ふわりと風がそよいでいた。
「……」
どれほどそうしていたかは分からないが、ただぼんやりと呆けたように天井を見つめていた。
「……どこだ、ここは」
のろのろと首を動かして、自分のおかれた状況を考えてみた。多分、ここは病院だ。天井よりもさらに際だった白いシーツは、それを物語っている。おまけに自分には今まで着たこともない、入院患者か何かが着ているようなパジャマを着けていた。
つまり俺は今、病院のベッドに寝かされているということだ。それに見たところ、今部屋には俺一人で、他にベッドにないことから、ここが個室であることも理解できた。
しかし、問題はなんでそんな所で寝ているのか、それだけが分からない。俺は確か……。
カチャ
そんな控えめな音とともに、一人の女が入ってきた。
「……」
お互いに目と目が合い、動きが止まる。いや、俺は首を動かした先で、たまたまドアが開いたのを見ただけであって、単に女の方の

動きだけが止まっただけだ。恰好から見て、この病院の看護師だろう。

「あ……」

看護師は俺を見て、みるみるうちにその瞳を大きくさせていった。

「あ……えと、せ、先生呼んできますね。……先生っ」

それだけ告げると彼女はドアを閉め、慌ただしく出ていった。

「……なんなんだ、一体」

まるで珍獣かなにかでも見たような反応だ。

しばらくすると勢いよくドアが開き、沙弥佳が入って来た。心なしか顔が赤く、息が荒いようだ。

「お、お兄ちゃん」

「……よう」

挨拶に手を挙げようとした時、それが遮られる。

「って、うわっ！　なんなん――」

「お兄ちゃんのバカッ！」

突然、入ってきた勢いのまま沙弥佳が抱き着いてきて喚いた。鋭く、はっきりとした声は怒っている証拠だ。

「バカバカッ、バカッお兄ちゃんのバカッ！」

胸元に顔をうずめて何度もバカと連発しながら、次第にその声は小さくなり、嗚咽が混じり始めた。肩が小さく震えている。

「なんであんなことしたの……もう、どうにかなりそうだったんだよ……辛かったんだよ……」

「沙弥佳……」

「ううう……ずっと……ずっと心配してたんだよ、お兄ちゃん。このままもう二度と目を覚まさないんじゃないかって……ずっと……そう考えたら私、私……

でも良かった……良かったよぉ……お兄ちゃんが死なないでくれて、本当に良かったよぅ……」

「沙弥佳……」

抱き着いてきた妹の頭を抱こうとした時、腹部に痛みが走った。

「うっ」
抱きしめてやろうと身体を捩ろうとしたのだ。
「あ、いかんよ君、まだ無理をしては。傷口が開いてしまう」
身体を動かそうとした時、その脇から白衣を着た白髪混じりの男が制止する。その出で立ちと言葉遣いから、この男が医者だろう。
「この方があなたの担当のお医者さまよ。手術もして下さったのよ」
母の九鬼遥子が沙弥佳の後ろから顔を覗かせた。自然に振る舞ってはいるが、どことなくやつれているような気がする。その瞳は少し潤んでいて、沙弥佳同様に今にも泣き出しそうになっている。
「母さん……？」
「なあに？」
どうして泣いてるんだ、そう聞こうとしたが止めた。なぜかは分からないが、そう思ったのだ。
しかし俺には、なぜ二人が泣いているのかさっぱりだった。そして、なんで病院にいるのかも。
「……なぁ、俺はなんで病院のベッドで寝てるんだ？」
「え？」
俺の言葉に、沙弥佳は胸にうずめていた顔を上げた。母さんと二人、驚きの顔で俺を見た。
「な、なんだよ」
「……お兄ちゃん、覚えてないの？」
「覚えてない？」
どういうことだ。
そうこうしているうちに、医者の男が眉間に眉を寄せながら言った。
「ふむ。どうやら一時的な記憶の混乱が見られるね。……単刀直入に言おう。君は自分が刺されてしまったのは覚えているかね？」
「俺が？」
言われてみれば、先ほどから腹が痛い。しかし、あれこれと俺がここに運ばれるまでの経緯を聞いているうちに、だんだんと記憶が

蘇ってきたのだ。
「……そうだ。そうだった。確かに俺は刺された後、沙弥佳と綾子ちゃんを逃がそうと……」
さらに記憶が甦ってくる。あいつに刺されて気がどうにかなりそうな中、心配する二人をどうにか逃がしたんだった。その後、あいつにカウンターを食らわして、それで……。
「……真紀」
「え？」
「そうだ、あの時俺を助けたのは多分、真紀だ」
思い出した。あの女に助けられた俺は、確かに助けを呼んだという真紀の言葉を聞いた。その言葉に安心して、気を失ったのだ。
「俺がここに運ばれた時、もう一人女がいなかったか？」
はっきりと記憶を思い出した俺は、沙弥佳に聞いた。沙弥佳はそんな俺の態度に困惑しながらも、首を振ったのだった。
「私が駆け付けた時には、お兄ちゃん一人だけが倒れてたんだよ。それにあの人も、誰もいなかったよ」
「誰もいなかった」
だとしたら、俺が見たのは夢まぼろしだったっていうのか……。俺はかぶりを振った。ありえない。確かにあの時は朦朧として、前後不覚になっていた部分はあるかもしれない。だとしても、あの女が現れたのが夢やまぼろしであったはずがない。
「救急車を呼んだのはおまえか？」
「うん。呼んだんだけどすぐに来ちゃって……なんか早過ぎるかなって思ったりもしたけど。それとお巡りさんも連れてきたんだよ」
「そうか」
なら、やはり藤原真紀が現れ、救急車を呼んでいたというのは本当かもしれない。いや、本当にあったことなのだ。
しかし、沙弥佳が人を連れてきた時にはすでに、あの女は奴とともにそこから消えていたわけか。
あの女狐には前々から得体が知れないと思っていたが、その疑念

がますます強まった。女一人が大の男一人を連れ去ったというのは、にわかに信じがたい。それが引きずったにしろ、なんにしろだ。

あの女には仲間がいたのだろうか。ありえない話じゃない。得体の知れない女に、一人や二人仲間がいないとは言い切れない。

「お兄ちゃん？」

「あ、ああ、すまん」

「ふむ、この調子だと記憶が戻ったようだね。今からいくつか質問するから、答えてね」

「はい」

そういわれて俺は頷いた。

医者の質問に答えた俺は、疲れたというのを理由に医者を追い出した。もちろん、そんなのはただのこじつけで、実際には寝疲れこそあれど、大して疲れてなどいない。本当は、沙弥佳や母さんと、しばらくの間一緒にゆっくりしたかっただけだ。

二人の話を聞くと、病院に運び込まれたときには大量の血が流れていて、かなりの出血量だったらしい。このままだと失血死しかねない、即座にそう判断され手術になったのだそうだ。

言われてみれば、そうなってもおかしくない状況であった。気を失う前に見た、あの血だまりは自分でもやばいと直感したほどだったのだから。

「でも、本当に心配したのよ。沙弥佳から連絡があったと思ったら、あなたが刺されただなんて……。

はじめ、何を言われたのか分からなかったんだから……あまり心配かけさせないで」

母は嬉しさと哀しみの両方を兼ねたような顔で、俺の頭をゆっくりと何度もなでた。

「……ああ、本当にごめん」

本気で心配してくれる母に、心の中でもう一度だけ謝った。

「お母さん、お兄ちゃんがここに運ばれてから、何日もまともに寝

てないんだよ？」
「何日も？　おい、俺は一体どれだけ寝てたんだ？」
「六日間だよ。今日で七日目、かな」
「七日って……一週間もか……」
開いた口が塞がらないとはまさにこんなことをいうのだろう。いくら意識を失っていたといっても、自分が一週間もベッドの上にいたなんて、信じられなかった。
しかし、納得もいった。身体を動かそうにもあまり力が入らない上、動かすと筋肉が鈍った痛みのような、疼痛があるのだ。人間、日常的に使う筋肉を一週間も使わないだけで、ここまで鈍るものなのか。
「お父さんもあなたのこと心配してたのよ。ここに運び込まれた日なんて、仕事を早退してまで飛んできたんだから」
「そうだったのか……」
俺は鈍った筋肉に力を入れて、照れ臭そうに鼻の頭をかいた。しかし、普段からの癖すらも力を入れないといけないだなんて、なんだか自分の身体が自分の身体ではないみたいだ。
それに普段、家にいる時はそうは思わないが、ここが病院だというだけでこうも家族みんなに心配されると、妙に気恥ずかしく感じるのはなぜだろう。もちろん、そんなことを気にする必要などないし、おまけにここは個室だ。しかし、なぜかそう思ってしまう。
そんな気持ちを払拭するように、上半身だけ起き上がらせようとした。
「うっ」
「お兄ちゃん、無理しちゃ駄目だよっ」
「ああ、分かってる。だけど、ずっと寝たきりってのもすごく疲れるんだ。手伝ってくれないか」
妹と母が二人して抱き起こしてくれた。一週間も寝たきりだったからか、上半身を抱き起こされるだけで随分と気持ちが良い。
それにともない、腹の傷が痛みはしたものの、全身に新鮮な血液

がめぐっていくような感覚は、やはり心地が良かった。
「沙弥佳。おまえこそ、何もなかったか？」
「うん。でも今はお兄ちゃんの方が心配だよ……。だけど、心配してくれてありがとう」
「いいさ。俺はおまえの兄貴だからな」
沙弥佳の髪を優しくすいてやる。こいつはこうやって髪を撫でるようにすいてもらうのが好きだからだ。
「ほんと仲良いわね、あんた達は。でも、沙弥佳のいったことは本当よ。今は妹より、自分の体を心配しなさい」
俺と妹を見ながら、母が苦笑する。
「ああ」
その後も他愛もない話をしているうちに、母が一旦家に帰るということになり、部屋から出て行った。
「……なあ」
「ん、なぁに？」
俺は先ほどから気になっていたことを聞いてみようと思ったものの、どうしてかためらった。また、あの時みたいになるのでは、そんな気持ちがあったからだ。
一週間前のあの日、綾子ちゃんと斑鳩とまじえて街を歩いた、あの日。沙弥佳が唐突におかしくなった理由を知りたかった。なんで、急にあんな態度をとったのか。あの時はそれどころではなかったためなんとも思わなかったが、落ち着いた今、そのことが気になっていた。
沙弥佳は、俺が喋りだすのをじっと待っている。気にはなるが、聞いた方がいいのか聞かない方がいいのか……。聞こうとして変に時間が経つと、不思議と聞かない方が良いような気になってくる。
「ああ、いや。なんでもない」
「ええっ、何それ。すごく気になるよ」
「いや、たいしたことじゃぁないんだ。だから聞くまでもないなと思ってな」

「むー。お兄ちゃん。そうやってはぐらかそうとする時ってたいてい何かある時だよ？」

どことなく非難するような目をしながら、本当に何もないのかと聞いてきた。少しの間、そうやってにらめっこしているうちに、俺はため息をついた。

「……全く、俺の負けだ。本当にたいしたことじゃない。綾子ちゃんはどうしたのかって思っただけだ」

「綾子ちゃん？」

「ああ。今家にいるのか？」

「ううん。あやちゃんね、もうお家に戻っちゃったよ。……この一週間、お兄ちゃんもいないし、あやちゃんもお家に戻ったから、なんかね、すごく家が広く感じるんだよ。自分の家なのに、自分の家じゃないって感じがして……違和感があるんだよ」

沙弥佳はベッドの脇に腰を降ろしながら、窓の外を眺めた。

つい一週間前までは五人で暮らしていたのに、いきなり三人で暮らすというのは確かに一抹の寂しさというのはあるだろう。しかも俺はといえば、意識不明の重体ときた。そう感じるのもなおさらかもしれない。

「でもやっと安心した。お兄ちゃん、ずっと目を覚まさないし、寝てるはずなのに死んでるみたいだったんだから……」

「……すまん。心配かけたな」

「本当だよ。もう二度とあんなことしないでよ？」

「善処する」

苦笑しながら、外の景色を見ている沙弥佳の長い髪に手をかけた。

今まで考えもしなかったが、こいつの髪は綺麗だななどと思ってしまった。いや、口に出そうになったところを思い戸惑ったのだ。そんな台詞、とてもじゃないが妹にいうような台詞ではないだろう。少なくとも、俺がいう言葉ではない。

けれど口にはしなくても、つい触ってしまいたくなるのは間違いないので、俺は時間の許す限り、その髪を撫でていた。

俺が目を覚ましてから、丸っと三週間以上が経っていた。リハビリをしながらそろそろ退院してもいいはずだと思い始めていた矢先、ようやく退院できることになったのだ。

気付けばすでに、暦は十二月も半ばに差し掛かり、後二週間足らずでクリスマスになろうとしているところだ。

「お世話になりました」

担当になった医者と看護士に頭を下げて、俺は沙弥佳と二人で病院を出た。

元気にはなったが、リハビリやなんやらで、合わせて都合、一ヶ月以上も入院していたということになる。

丸々筋肉を使わない生活を一週間も強いられたため、両足の筋肉が萎えてしまい、そのリハビリに十日、さらにそこまでいくのに、傷の経過を見るということで、二週間もベッドに縫い付けられていたのだ。

もちろんその間に、家族は当然として、綾子ちゃんや青山、その他にもクラスの連中もこぞって、毎日病室に押しかけてきたため、あまり退屈することはなかったのは救いだった。

入院生活は暇を持て余すと聞いていたので、その点は本当に助かった。とはいっても、数人は明らかに沙弥佳や綾子ちゃん目当てで来ていた奴もいたのが、腹ただしくはあったが。

「お兄ちゃん、こっちこっち」

退院に寄り添って、わざわざ俺を迎えにきた沙弥佳がいった。

「おい、あんまり引っ張るなよ。まだ傷が痛むんだ」

「あ、ごめん」

「全く……。それにしても、ようやく外に出られたって感じで気分がいいな」

「そうだよね。この一ヶ月間、私も気分が落ち込んでいたから、こ

っちも気分がいいよ」
「やれやれ。おまえは本当にどうしようもなくブラコンだな。普通、そこまで落ち込むようなやつっていないんじゃぁないのか」
「何、お兄ちゃん。人がどれだけ心配したと思ってるのよ？　それに私はブ、ブラコンじゃないよ」
「おい、それ本気でいってるのか？」
「当然だよ！」
「おまえでブラコンじゃぁないっていうのなら、世の中の姉や妹は、皆兄弟同士で愛し合ってない限りはブラコンじゃぁないってことだな」
「なっ……」
沙弥佳は途端に顔を赤らめて、そっぽを向いた。やれやれ、本当どうしようもない奴だ。きっと卑猥な想像でもしたんだろうか。全く、そんな風にされると、ついついこっちまでからかいたくなるではないか。
俺はニヤリと口元を歪め、妹の態度にあれやこれやと突っ込んで、からかってみせた。
とは言いつつも、こうして心配されるというのは、決して満更でもないのも確かだ。
「あんた達、こっちよ」
母が病院の敷地の外で、車とともに待機していた。それと、綾子ちゃんもだ。
「よう」
「九鬼さん、おかえりなさい」
あの日、俺がプレゼントした髪留めを付け、綾子ちゃんは微笑んでいた。それにどことなくむず痒く感じて、鼻の頭をかく。
「ああ、ただいま」
まだ普通に歩くには傷が痛むため、松葉杖を借りて車に乗り込んだ。
車の中では最近何があったかなど、世間話に華を咲かせつつ、俺

は流れていく景色を眺めていると、一瞬だが変なものを見た気がした。

（今のはっ）

俺は後ろを振り返ってみたものの、それが人ごみに紛れてしまったためか、見つけることはできなかった。

「九鬼さん？　どうかしましたか？」

「え？　あ、いや、今……見なかったか？」

クエスチョンマークを頭に浮かばせながら、綾子ちゃんはつられて後ろを振り返るが、すぐに前になおった。

「どうしたの？」

「あ、ああ、いや……多分見間違いだろう。最近、リハビリでちょっと疲れていたし」

そういって、沙弥佳の頭に手をやった。沙弥佳は綾子ちゃんと顔を合わせ、首をかしげていた。

（そうだ、きっと見間違いだろう。まさか奴なわけがない）

自分に言い聞かせはするが、今ひとつ腑に落ちなかった。俺が見かけたのは、あの野郎の姿だった。全身黒づくめで、フードをかぶったその出で立ち。こうして助かったので忘れていたが、奴がどうなったのかは分からずじまいだったのだ。

奴は一体どうしてしまったのか。これぱかりはやはり不安が残る。沙弥佳や綾子ちゃんが無事でいることが、何にもまして、何もないという証拠なのだろうが、奴がどうなっているかは、きちんとした形で知っておいた方が良い気がしてならなかった。

今まで、ストーカー被害がほとんどないというのを理由にしていた警察も、人的被害が出たとなるとようやく、その重い腰をあげた。

俺が意識を取り戻した翌日には、早速刑事がやってきた。今回の事件を担当することになった刑事は、南部とか言う刑事で、三十代後半の叩き上げといった風な雰囲気を持った男だった。

あれこれと質問してきた南部刑事は、三、四十分もすると、また何かありましたら、と言い残して署の方に引き返していった。その

際に、あの野郎のことを聞いてみたが、首を横に振るだけだった。
一応、その男を傷害や殺人未遂などの容疑とあわせて、指名手配はするかもしれないとは言ってはいたが、それから丸きり音沙汰がないことを考えると、それも本当だったか怪しいものだ。
まぁ元々、綾子ちゃんの親父さんに関係があるというだけで、それ以外の関係は一切分からなかった奴だ。そうなると警察にだって、一朝一夕というわけにもいかないだろう。もとより大した期待もしていたわけでもないが。
なんにしても、そのせいかは分からないが先ほどの黒づくめが、ただの目の錯覚であることを祈りたい気にはなる。俺も当然、こんなことはもう二度とごめんだ。だというのに、なぜこんなに後ろ髪を引かれるのか……全く、俺の悪癖だ。
さっきの黒づくめはきっと、見間違いだろうと俺は思い込むことにした。逮捕の期待はしていなくとも、抑止力にはなるだろう。
それにもう一人、どうしても会わなくてはならない人間がいる。そいつには会って確かめておかなくてはならないことがある。藤原真紀……あの、どこか得体の知れない女。
あの場に確かに居合わせた女。とにかく真紀には聞きたいことがいくらもあるのだ。
あの女狐がどこまで真実を語るかは分からないが、とにかく聞いておかなくては、こっちも気持ち悪いままだ。俺は学校に行ったら、真っ先に真紀に会おうと決めた。

第４０章

朝、いつものように沙弥佳に起こされた俺は、ようやく家に帰ってきたというのを実感した。

たかだか一ヶ月そこらだが、もっと長く家から離れていたようにも思えるのが不思議だ。同時に、入院生活がいかに自分にとって、非日常であったかがよく分かるというものだ。

それでも些細な変化はある。通学途中、駅まで妹と行き、いつもならそこで別れるところだが、今日は松葉杖ということもあり、沙弥佳がわざわざ駅の改札までついてきた。

もちろん、そんなのはさすがに恥ずかしくて断った。しかし、怪我人は言うこと聞く、の一点張りで仕方なく改札までということになったのだ。はっきり言って、そのまま放っておいたら学校まで着いてきそうな気すらしたほどだ。

第一、今は駅の利便性向上のため、怪我人や障害者用にきっちりとエレベーターが設置されているのだから、気にしすぎなのだ。そう諭すと、沙弥佳のやつはブーたれていたが。

それに松葉杖をついていると、満員電車の中であっても席を譲ってくれたりといたせりつくせりだったのは、少しばかし気分が良かった。そんなことを思い出しながら、俺は教室に着いた。

「おおっ、九鬼じゃん！」

「本当だ、久しぶりだな」

「九鬼くーん、元気だったー？」

教室に着いたとたん、クラスメイト達が口々に挨拶してきた。その大半が、入院中にわざわざ見舞いに来てくれた連中なので、久しぶりというわけではないがこうして学校で会うとなると、確かに久しぶりだ。

席につくと、皆が集まってくる。

「なんか刺されたって聞いて、もうすっごい驚いちゃったんだけどさ」
「ほんとほんと。もしかして、痴情のもつれってやつー？」
「だったらまだ救われたけど、残念ながらそんな色恋沙汰じゃぁないな」
俺は、半ばクラスメイト達のマシンガントークにため息混じりに苦笑した。
自分でいうのもなんだが、嫉妬で刺されるほど、俺を好いている女の子がいるとは思えない。まぁ、いるとしたら、それはそれで光栄なことだ。
「よっ九鬼、久しぶり～」
「斑鳩か。久しぶりだな」
人垣を掻き分けるように斑鳩がやってきた。こいつとは本当に久しぶりだ。何せ入院中、一度だって俺のところに来なかった。もちろん、そのことを薄情だなんだと言うつもりもさらさらない。見舞いにくることが必ずしも深い情というわけでもない。
クラスメイトと話すのは、確かにいい暇つぶしにはなったが、話すことしかない分、それはそれで体力がいることに気付いたのだ。そんなことを知ってか知らずか、この男は一度も見舞いにくることはなかった。まぁ、それがこの男にとっての気遣いかどうかは、分かりかねるところではあるが。
「思ったよりも元気そうじゃん？」
「ああ、おかげさんでな。それよりも、あの時は助かった。ありがとうよ」
「あ～別に気にしなくてもいいよ。おれとお前の仲じゃん？」
「親友ではないけどな」
俺は口をニヤリとさせ、先読んで言った。
「うわっ、前も思ったけど、マジひどくねぇ？」
「知ったことか」

苦笑混じりに斑鳩をあしらったところで、チャイムが鳴った。この音も久しぶりだ。チャイムが鳴り終わる前にドアが開き、小町ちゃんが入ってきた。

「おまえたち、席に着け」

それとともに、俺の周りのクラスメイト達も自分の席へと戻っていった。教壇についた小町ちゃんと俺の目が合った。

「お、九鬼じゃないか。やっと学校に来れたんだな。久しぶりだなー」

「ども」

なんとなく気恥ずかしさもあって、頭だけで会釈した。

「うむ、ようやくこれで私のクラスも全員揃ったわけだな。それにしても、おまえは良いタイミングで入院したな。今回学年で期末テスト受けなかったのは、九鬼くらいなものだったんだぞ」

「ああ、言われて見ればそんなのもありましたっけ」

「そんなものっておまえなぁ……」

それから、久しぶりの登校だというのに、朝っぱらから小町ちゃんの小言が始まった。やれやれ、相変わらずだな。そんな風に思ったことが顔に出たのか、小町ちゃんは後で職員室に来るよう言い付け、ホームルームを終えた教室から出ていった。

毎度思うが、なんで俺ばかりがいつも呼び出されなければならないんだ……。そもそも、こっちはテストなことなんか、そんなこと程度で片付けられるほどの状態だったのだ。不公平なことに俺は小さくため息をつきながら、今日、藤原真紀と会えるかを考えていた。

昼休みというお世辞に長いとは言えない休み時間が半分ほど過ぎたころ、俺はようやく小町ちゃんの小言から解放された。

要は追試も終わったため、俺のテストは今までの期待点という形で成績に反映されるということ、俺が入院した理由が理由のため、

警察への協力やその状況の説明を言わされたのだ。
そのあたりは、入院中に一通り説明はしたので改める必要もないと思ったが、呼び出されたのだから仕方ないことだ。
「失礼します」
軽く頭を下げて職員室を出たところ、ばったり真紀と出くわした。
今日はいつかと違って一人のようだった。
「あら、久しぶりじゃない」
「よう。良かった、実はあんたに話があったんだが、いいか」
「今は無理よ」
そう言って職員室を指差した。俺は頷いた。
「分かった。放課後いつものところで良いか？」
「いいわ。それじゃあね」
真紀は俺のなりなど気にした風でもなく、さっさと職員室へと入っていった。相変わらず無愛想なやつだ。
「それより、今は飯だ」
俺は歩きにくい松葉杖をつきながら、大急ぎで教室へと戻っていった。

帰りのホームルームも終わり、松葉杖をつきながら技術棟へと向かう。それにともなって、青山も一緒だ。この男には随分と世話になったし、別に問題はないだろう。
「すまなかったな。呼び止めて」
「ううん、別に良いよ。実際気になってたしね」
気になっていたというのは、朝のことだろうか。それが本当だとしたら、わざわざ俺や周りに気を遣う必要もないだろうが、これが青山のスタンスなのだから、あれこれ言うつもりもない。
「でも、皆も言っていたけど、本当に驚いたよ。まさか刺されただなんてさ」

バツが悪くなって苦笑した。青山は、得てしてなったわけではないが半ば引き込む形になったわけで、一応は概要を知っている。その中で、気をつけた方が良いと警告してくれていたのだから、こうなることは予想していたんだろうが。だとしてもまさか、こんなことになるとまでは思わなかったのだろう。

いや、もしかしたら俺が死ぬ可能性も考えていたとしても不思議じゃない。事実、俺自身がそう思ったのだ。

「すまん、心配かけたな」

「それはいいけど。でも結局、例の人はどうなったの？」

「そこんとこなんだが、実際のところ、俺にも良く分からないんだよな。気付いたら病院のベッドで一週間も寝てたってんだから」

「そう。だとしたら、今からどうして屋上に？」

「それを知っているかも知れない奴に会うためさ。

……おまえには色々と世話になった手前、言っておこうと思ってな。実は刺されて気を失う瞬間、そいつに助けられたと思うんだ」

青山は少しの間考えたような仕種を見せた後、おもむろに言った。

「ねぇ、それってもしかして……」

「ああ。あの女狐のことだ」

なんであの場にいたのか。気を失う前にあの女は助けは呼んでいるというのも、まるで奴とのことを見ていたみたいだ。

考えすぎな気はしないでもない。しかし沙弥佳は、救急車が来るのが早いというようなことも言っていた。それは間違いないことだろう。

だから、あの女がもし俺と奴のことを見ていたとしたら、それはつじつまの合う話なのだ。

「来たわね」

気付けばすでに屋上への扉の前だった。真紀は俺達よりも早く着いていたようで、手の中で鍵の束を遊ばせている。

「どう？　久しぶりの屋上は」

「ああ、悪くない」

壁にゆっくりと松葉杖を外し、寄り掛かった。これだけでも大分楽になる。
「それで？　話って何？」
「……もう言わなくても分かっているんじゃあないのか？」
「公園でのこと？」
「ああ。あんた、なんであんなに都合良くあそこにいたんだ？　根拠なんざないが、あんたとあの男、もしかして知り合いか何かだったんじゃないのか？」
「そんなわけないわよ。残念だけど知り合いではないわ」
「……本当か？」
俺は疑いの眼差しで真紀を見据えた。真紀はそんなものには全く動じる様子もなく、相変わらずどこか人を食ったような態度で、微笑をたたえていた。
「私の何を疑っているのかは知らないけど、私はたまたまあそこにいただけよ。あの辺り、家が近いから」
「つまり、あんたは散歩をしていたところ、俺とあの男の格闘しているところに出くわした、こういいたいわけか」
「まあ、そんなところね。あなたが私の散歩コースにいたことの方が驚いたわよ。おまけにあんな状態でね」
真紀は手を口元にやりながら、クスリと笑う。
「で、やばそうになった時、あんたがあらかじめ救急車を呼んだというわけか」
「ま、そういうことになるわね」
人を小ばかにしたような笑いは消え、真剣そのもので俺を見た。そんな顔をされると自信がなくなる。悔しいが、この女狐は、俺よりもはるかにポーカーフェイスがうまい。
しかし、そうだと分かっていても、俺が間違っているみたいに思えて仕方ない。根拠はなくても、俺にはこの女狐が何か隠しているように思えるのだ。それが何かは分からないが、とにかくそう感じるのだ。

何か、何かこの女を切り崩せそうなものは……。
「……なぁ、あんた、今あの男とは知り合いではないと言ったな。知り合いではなくても、あの男のこと自体は知っていたのか」
「……なんでそう思うの？」
「……俺が助けだされた時、あの場には俺一人しかいなかったと聞いた。あの男とあんたは、もうすでにいなかったらしいな。だとしたらだ、俺が気を失ってどれくらいの時間があったのかは知らないが、あまり長くはないはずだ。たかだか、数分だろう。つまり、あんたがあの男を連れて行ったとしか思えないんだ。それも、お仲間が二人か三人いたんじゃぁないのか？」
そうまくし立てると、真紀は少しだけ驚いたような顔をしたのち、ふっと鼻で笑った。
「想像力豊かね。確かにそう思えたって仕方のない状況かもしれないけど、違うわよ。私は一人だったし彼は私が出て来てから、すぐに逃げちゃったんだから」
「逃げた？」
「ええ。それも一目散にという感じにね。私があなたを介抱しても良かったんだけど、あなたには可愛い妹さんがいたみたいだから」
真紀は、その光景をつい今しがた見たかのように、目を細めて笑った。
「なるほどな。だがあんた、今ので墓穴掘ったな」
「……どういうことよ」
俺がそう言うと、それまで人を小ばかにしていた態度が一変し、鋭い、訝しむような目つきになった。
「あんたは今、あの男が逃げたと言ったな。それも俺が気を失ってからすぐにとね」
「だったらなに？」
「あの野郎は顎にカウンターをもろに喰らって、立ち上がることすらままならなかったんだ。だというのに、一目散に逃げるだなんてことはできないはずだ。

それにだ。人一人殺そうとした奴だ。いや、すでに殺人鬼なんだ、奴は。奴に逃げる体力があったってのなら、目撃者であるあんたを殺さないはずがない。

だからあんたが言ったことは、どうにも信じられるわけがないんだよ」

真紀は俺の言ったことを黙って聞いていた。目はどこか、しまったという風に細めて、あらぬ方向を見ている。

いや、どちらかと言うとむしろ図星で、内心舌打ちしていると言った感じだろうか。

先ほどから青山は、俺と真紀のやり取りを見て黙っている。真紀がどう切り返すのか見守っているのだ。

「……ふーん。まさか、そんな他愛もないことで、そこまで分かっちゃったなんて、正直言って驚いたわ」

「つまり否定しないんだな？」

そっぽを見ていた真紀が、また人をおちょくるような顔になって言った。態度から察するに、正解だったらしい。

「まあ、そこまで言われたらわざわざ否定する気もないわね。確かに、私はあなたの言うとおり、あの男を知っていたわ。それも、最初からね」

いや、それどころか、この女の纏う雰囲気そのものが変わった。まるで、あの男に向けられた時のような雰囲気だ。

「最初からってのは、どこからだ」

「最初からは最初からよ。あなたがあの男と出会う以前から。あの男はもう二年も前からマークされてたのよ。だけどその居場所は、全くといって分からなかったの。それが今年になってようやく、この近辺に潜伏していることが分かった」

「……あんた、一体何者なんだ」

俺の疑問に、青山も頷いている。

二年も前から一人の人間をマークしているなんて、普通じゃない。映画やドラマかなんかの世界の出来事としか思えない。まして、こ

の女はまだ高校生のはずだ。
しかし、この話が本当だとしたら、はっきり言って、その年齢すらも怪しいものだ。
「私が誰かって？　残念だけど、それは教えられないわ。世の中、知らない方が良いということだってあるし。
……ただ、普通の高校生ではないことは確かだけどね」
「……あの男は危険人物だったのか？」
「そりゃね。はっきり言ってあなた、相当運が良かったと思うわよ、彼と対決して生き残っただなんて。おまけに初めてのことだったんでしょ、あんなことがあったの」
「いや、以前にも一度襲われたことがあった。ほら、俺が怪我した時があったろう？　あの時にな。
それにしても、そんな危険な奴だったのか……」
「あの時で二度目だったの？」
真紀が珍しく驚いたようで、やや裏返ったような声をあげた。
「なんだよ、別に格闘したくて格闘したんじゃぁないんだ。成り行きでそうなっただけだ」
「あなた……今まで武術の経験は？」
「そんなのあれば、あんなことにはならなかったと思わないか」
「……そう。そうよね」
真紀は口に手をやりながら、何か考えている。なんだっていうんだ、全く。
「まぁいい。あんたのことはこの際いいさ。だが、あの男のことは気になるんだ。教えてくれないか」
「知ってどうするの？　もうあなたには関係のないことなのに」
「おいおい、俺はあの男に一度ならず二度も殺されかけたんだぞ？　そいつを知る権利はあるはずだと思わないか。それとも、そんなことも知らない方がいいっていうのか？」
「あなたって見かけによらず、好奇心旺盛ね。まあ、いいわ。そこまで言うのなら教えてあげる。そっちの彼にもね」

そう言って真紀は、その食えない顔に微笑を作って青山の方を向いた。青山は思わず体を震わせて、ただ体を硬直させるだけだった。
「彼……彼の名前は、今井克利と言うの」
「今井克利だって？」
俺と青山は、思わず顔を見合わせた。当然だ。今井克利と言えば確か、首を切られて……。
「今井は死んでるはずだ」
「ええ、そうね。でもそれはあくまで表向きの話よ」
「どういうことなんだ」
俺は興奮して、真紀の肩を掴んだ。しかし、そのために腹の傷に痛みが走る。
「っつ……」
「あまり興奮しないほうがいいわ。あなた、まだ病み上がりなんでしょ。それに焦らなくても、きちんと説明してあげるから」
真紀は掴まれた肩にある俺の手をゆっくりと外していう。
「今言ったように彼、今井克利は生きていたのよ。世間的に死んだということになってね」
「世間的に」
まるで人が人としての権利を奪われたかのような物言いに、青山が呟いた。もちろん俺も、青山が言わなければ呟いていただろう。
「そう。彼はね、世間的に死ぬことで、第二の人生を手に入れたのよ。自分をこんな目にあわせた人達に、復讐するために」
「復讐……そう言えば、蒲生の家であいつと会った時、邪魔するなら殺すと言っていたが、あれはそういうことだったのか」
「そう言えば、そんなことを言っていたね」
「ああ」
「彼は、自分の復讐すべき対象が、実は自分の取り巻く人間達であったことに気付いたのよ。
きっと彼にとってそれはよほどのことだったんでしょう。だってその人達は皆、顔見知りだったんだもの。でも復讐しなければなら

ない、よほどの理由があったのよ、きっとね。
結局、半ば途中でそれは頓挫してしまったわけだけど」
「……その中に、綾子ちゃんの親父さんや蒲生もいたということか」
蒲生の家であの男、今井が見せたあの感情は、まさに烈火のごとく凄まじいものを感じた。邪魔するなら殺す、今井が俺にあそこまで忠告したのには、逆に言えば、黙って自分の進むべき道に行かせてくれと言う風にもとれる。
そう考えると、なんともやり切れない気持ちにはなるが。
「一ついいかな？」
「なに？」
「君は世間的に今井克利という人間は死んだと言ったけど、気になってることがあるんだ。蒲生という人のことなんだけど」
「蒲生義則のこと？」
青山の気にしているのは、多分、蒲生が本当に死んだかどうかということだろう。予想していたかのように切り返した真紀は、ゆっくりと語り出した。
「蒲生義則は間違いなく死んでるわ。今井克利がその手で殺したのよ。その死体の首を切ってね。
世間的に死んでいることになっている今井は、そうすることで新たに、蒲生という人間の戸籍を手に入れたの。いえ実際には、別に蒲生でないといけなかったわけではないでしょうけど。たまたま、蒲生がそれに選ばれただけに過ぎないわ」
「ちょっと待て。死んだ人間の戸籍なんて手に入れたって、意味のないことだろ」
「そうね。だから彼は、蒲生から戸籍を買ったのよ。それも何億というお金を条件にね。大金を得て羽振りの良くなった蒲生は、随分と嫌われたようだけど。
正確には、戸籍を手に入れた時までは蒲生は死んでいたわけではなかった。その後に、戸籍上で蒲生は死亡したということに書き換えられたのよ。蒲生はそんなことも知らず、暢気に毎日過ごしてい

たみたいだけど。
　それから数カ月して、蒲生本人は今井の手で殺された。つまり、首を切られて殺されていたのは、本当は蒲生義則だったのよ。すでに死んだことになっている今井は、そこで初めて自分が世間的、肉体的にも死んだことになった。
　そして、蒲生という人間も、今井という人間が死ぬ前には死んだことになっているんだから、今井本人にとって復讐すべき相手達は、さぞ恐怖したでしょうね」
「だが、そんなことできるのか？　戸籍については分からなくもない。実際にそういうこともあると聞いたことがある。とは言っても、それが日本でも行われてたってのには驚きだ。
　なにより本当に生きてる人間を死なすことができただなんての方が、はるかに信じられない話だぞ」
「ええ、普通であれば無理よ。だけど、今井はここでも賄賂を使ったそうよ。ある官僚にね」
「……金の力は偉大だな」
　ため息混じりに皮肉めいて言った。日本という国は、他の先進国に比べてそういったのには厳しいはずだが、やはり日本は日本か。
「まあ、その官僚ももうこの世にいないけどね」
「つまり、今井の手にかかったということか……」
「そういうこと」
　今井はかつてのビジネスパートナーである蒲生から戸籍を買い取った。それも何億という大金でだ。
　蒲生は独り身だった。世間的には蒲生でありながら記録では死んだことになり、すでに死んでいるということになっている、今井という人間の公式な死体として、首なし死体となった。後は、蒲生の前に死んだということになっていた今井本人の記録を提出し、見事、宙ぶらりんになることができたのだ。
　官僚というエリート組を買収しておけば、ＤＮＡ鑑定なんかもなんなく切り抜けられる。そして最後には、それに手を貸した官僚を

殺してしまえば良い。今井の計画はそういうことだったのだ。
それに真紀の話によると蒲生は、ある事業の責任を負わされて金銭的に苦しい状況だったらすい。首をくくるしかなくなった状況になったとき、何億という金が手に入るとしたら、戸籍なんて売ってやったっていいと思っても、なんの不思議もない。
こうして考えてみると、なぜ奴がその手に掛けたと思われる連中が皆、うまいこと事故に見せかけて殺されていたかというのにも、納得がいく。
しかし、いつだったか青山に言ったことが当たらずも遠からずだったとは思いもしなかった。
「じゃあもう一つ。君は前、僕らに情報が改ざんされている可能性というのを示唆したことがあったよね？　その後調べてみたけど、あのトラック事故のことなんだけど、あれも今井克利が起こしたことなの？」
「ええ、そうよ。ただ、本当に彼が盗み出したかったのは、高性能なカメラなんかじゃないわ。あれはたまたまよ」
真紀は、腕を組んでその時のことを語る。
「私も詳しくは分からないけど、彼が盗み出したのはもっと重要なものだった。ある実験のサンプルで、あのカメラは彼が盗み出そうとした実験のサンプルを、しっかりと記録するためだったそうよ。だからあのトラックには、それと一緒にあんな場違いにもカメラがあっただけどしょう」
そうか。だから製薬会社とカメラがいまいち結び付かないと思えたわけだ。どんな実験をしていたかは知らないが、結果として巻き込まれた身としては、はた迷惑な話だ。
「ざっとこんなところね、私が知っていることは。とりあえず、他に何か聞きたいことがあれば答えられる範囲で答えるわ」
「今井が復讐しないといけなくなったっていう動機はなんなんだ？」
「残念だけど、そこまでは知らない」
「そうか。だったらあの男が何か、持病のようなものを持ち合わせ

ていたかどうか知らないか？」
「持病？　今井が？」
「ああ」
俺の言ったことがそんなに変だったのかどうか知らないが、真紀は眉をひそめて俺を見た。
「そんなの初耳。どういうこと？」
今までの、なんでも知ってますといったような態度が変わって、明らかに自分の知らない情報をどうしてとでも言った態度になった。この調子では本当に知らなさそうだ。
「ああ、いや、なんでもない。やっぱあれは俺の勘違いだったのかもしれない。あんたが知らないなら、そうであるはずがないな」
「何それ。私だって彼の全てを知っているわけではないわよ」
「まぁ、そうだろうが本当に大したことじゃぁないさ。すまなかったな、変なこと聞いて」
「なんなの、そんな風に言われたら気になるじゃないの」
「まぁ、いいじゃないか。それと最後にもう一つだけいいか」
「……ごまかしてるんじゃないでしょうね？」
「ごまかしてなんかない。それよりも、今井はあれからどうなったんだ？　警察は目下、見つけられてないようだが結局のところ、あんた達がどうにかしたんだろう？　どうなったんだよ」
そういうと真紀は一転して、目が鋭くなった。聞いてどうするのとでも言わんばかりの目だ。
「……さっきも言ったけど、知らない方が良いということもあるわ。まあ、それでも一つだけ教えておいてあげるわ。彼とあなたが会うことは、もう二度とない」
真紀は俺に、これ以上は何も言わせるつもりもないのか、強くそう告げた。
「あなたはきっと悪い夢でも見ていたのよ。そう思っておきなさい」
真紀はそれだけで口をつぐんだ。多分この件に関して、もう何も言うつもりはないのだろう。俺は真紀の説明に納得しつつも、まだ

何か心の中でひっかかっているような気がしてならなかった。

あれ以上、何も言う気のないやつを問い詰めても意味はないと思った俺は、真紀を解放して一人屋上にいた。青山もすでに帰っている。多分、例の彼女とやらのもとに行ったのだろう。いや、彼女というよりも姉貴なのか……。

一人でここにいる理由もないが、何となくここにいたい気分だった。十二月の空はどんよりと曇っていて、雨にでもなりそうだ。昼までは晴れていたのに、空も人の心と同じで気まぐれだ。

しかし、今井克利という人間は、どんな理由だったかは知らないが、何かのために殺人鬼になってまで復讐をしたと真紀は言った。俺は、たまたまその渦中に飛び込んだ羽虫のようなものだったのだろう、今井にとっては。

今更ながら、あの男の目的を知りたいという気になってしまった。いや、今だからこそだ。もちろん、そんなの知ったところで何の意味もないのは分かっている。それでも、なぜか今井克利という人間の生き方に俺は、なにか、やたらと興味が引かれるのだ。

真紀はその理由までは知らないと言っていたので、もはやどうしようもないというのも分かってはいるつもりだ。それでも、もし俺が関わることがなかったら、と思ってしまうのだ。そんなのが意味はないとしてもだ。

（考えるだけ無駄か……もう帰ろう）

俺は小さくため息をついて、壁に立て掛けてある松葉杖をとった。

校庭へ横切り校門を出たところで、思わぬ人物達が待っていた。沙弥佳と綾子ちゃんだ。しかも珍しく人だかりもできていない。

「なんだおまえ、こんなところで何してるんだ？」

「むー何それ、ひどいよ。可愛い妹が寒い中、こうして待っててあげてたのにっ」

「別に頼んだ覚えは」

みなを言い終える前に沙弥佳は、俺の肩からバッグを取った。やれやれ、なんだっておまえはそんなに……。
「何？　ちゃんと持ってあげるんだから、感謝してよね、お兄ちゃん」
「全く、おまえってやつはいつもそう勝手に……」
と言いつつも、それに従ってしまう俺も俺なのか。
兄妹のやり取りを見ていた綾子ちゃんは、クスクスと忍び笑いをもらしている。
「しかし、なんだっていきなり学校にまで来たんだ？　別にそこまでしなくたっていいのに」
「そんなの当然じゃない、お兄ちゃんが心配だったのっ」
「心配って……どう考えたって、心配されるような謂れはないと思うんだが」
「……お兄ちゃん。それ、本気で言ってる？」
「ああ？　そりゃぁそうだろう」
沙弥佳は盛大にため息をつき、何やらぶつぶつと独り言を呟いた。なんだっていうんだ……。
「ふふふ。さやちゃんは九鬼さんのことが、すごく心配でたまらないんですよ。もちろん、私もそうでしたけど……さやちゃんは、特にですよ？
九鬼さんが病院に運ばれてからというもの、学校にいる時以外、ほとんど付きっきりだったんですから。それに学校にいてもずっと上の空で、ため息ばかりでしたし」
「あ、あやちゃん！　それ言っちゃ駄目だって言ったのにっ」
「……そうだったのか」
思い返してみれば目が覚めてからというもの、こいつはそんなそぶりなんて全く見せなかったので、気にしたことすらなかったがこいつのブラコンぶりを考えれば、それもありえない話ではない。
「でも本当だもんね、さやちゃん」
「うう……」

言い返すことができないでいるのを見れば、図星のようだ。顔もほんのりと赤くなっている。

俺は松葉杖から手を外して、沙弥佳の頭を撫でてやった。

「あ……」

「ありがとうな、沙弥佳」

「う、うん」

体勢も辛いので長くは撫でてやれないが、満足したのか満面の笑みを浮かべている。

「さぁ、遅くなっちまったが、帰るとしよう」

それを合図に俺達駅へ向かって歩きだした。

いつもより倍近い時間をかけて、ようやく家に辿り着いた。その頃にはすでに日は完全に落ちて、夜になっていた。

綾子ちゃんがうちに来るので、家は大丈夫なのか聞いてみたところ、今日は家に泊まるのだと言う。もちろん、俺は大歓迎だ。

気付けば綾子ちゃんが家にいるのが当たり前になっていたのか、退院して家に戻った時、綾子ちゃんが自宅に戻って行ったのは、なんだか妙に寂しく感じたものだった。

本来、綾子ちゃんはあくまで事件が解決するまでの間だけ厄介になるという話だったので、そうであるのが当然なのだ。しかし、そうとは分かっていても気持ちは裏腹に、すでに綾子ちゃんを家族か何かのように認めていたのは否めない。いや、家族とは少し違うような気もする。

けれどそれは、沙弥佳や両親も同じだったようで、いつでも来たら良いということになったのだ。

綾子ちゃんの置かれた状況を考えれば、お人よしな両親が追い返そうだなんて思うはずもないだろう。綾子ちゃんも綾子ちゃんで、一度家族の暖かみというのを味わうと、簡単に離れたくなくなるの

も当然という話だ。ましてや、彼女には家族がいるのにまるで家族として、それが機能していない環境なのだ。

おまけに彼女の親父さんは、結局今井の手にかけられていたわけでもなく、単純に海外に行っていただけだった。だとしても、実の娘が大変な目にあっていたことを、全く知っていた様子もなかったそうだ。そのことが多分、俺達をそういう気にさせたのだ。

ともあれ、こうして週に一度だけでもこうして綾子ちゃんと一緒にいられるというのは、俺としても喜ばしいことだ。

「お兄ちゃん？」

「ん？　どうした？」

「どうしたって言うか、お兄ちゃんこそぼうっとしてどうしたの？」

「ああ、いや。ちょいと考え事をな」

「お兄ちゃんってさ、昔から良く考え事するよね」

「そんなことないだろ」

「そうかな？　だって今みたいにぼうっとしてる時って、いつも考え事してるよね」

そう突っ込まれて思い返せば、確かにそうかもしれない。だが、癖みたいなものなのだ、仕方ないではないか。

「別にいいだろ、そんなこと」

「うん、そうだけどさ。ただ……」

「ただ？」

「お兄ちゃんがあんなことになってから、また何かあるんじゃないかって思っちゃうんだもん」

顔を俯かせ気味に、沙弥佳は目を逸らした。しかしそれに同感だったのか、綾子ちゃんも母も各々納得している。

母は俺が意識不明の時、まともに寝ていなかったというし、綾子ちゃんもやはり何かしら責任を感じているかもしれない。そういう子だからだ、綾子ちゃんは。俺がまた考え事をしていると、また何か変なことに首を突っ込んだりしていないか心配なのだ。

俺が目を覚ました日、夜になって両親に包み隠さず病院に運ばれ

るまでの経緯を話したのだ。オブラートに話したつもりだったが、やはりというか当然ながら、顔面を蒼白とさせ母には最終的に泣かれてしまった。

そのせいもあってか、いつもはあれやこれやと気にしない母も今は本気で心配しているようだ。

「いや、学校のことを思い出してただけだ。入院してる間に期末が終わってたから、そのことで小町ちゃんと話したんだ。だからだよ」

肩をすくめて、小町ちゃんに言われたことを伝えた。今までの期待点で成績が出ることなど話すと、どことなく雰囲気が和んだ。心配されすぎるのも、色々と苦労しそうだ。

そんな中、父抜きの夕飯をすませリビングでくつろいでいたところ、沙弥佳が一つの提案をしてきた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「明日なんだけど、何か予定とかある？」

「明日？　全くの白紙だな」

「そっか。だったらさ、久しぶりにお出かけしない？」

やけに上機嫌だ。何かねだってるのだろうか。

「あ、もちろん、あやちゃんも一緒だからさ。駄目かな？」

「綾子ちゃんもか。まぁ、行ってもいいがこの様だから、そんなに歩き廻れないけどそれでもいいのか？」

「うん全然良いよ！　じゃあ明日十時出発ねっ」

「ああ、分かった」

了承すると、上機嫌だった沙弥佳はさらに綻ばせながら、二階へと戻っていった。出かけるとは言っても、おそらくウインドウショッピングくらいなものだろうが、まぁいいだろう。

一ヶ月もの入院で暇を持て余していた身としては、それだけでも十分な刺激は得られるはずだし、最後に沙弥佳と出かけたのは、斑鳩たちと一緒だったあの日を除けば、二ヶ月近く前だ。

それ以前は月に一度か二度、一緒に出かけていたことを考えれば

随分と久しぶりではある。俺がこのなりなので向こうもさほど、あっちこっちと行くこともないだろう。

久しぶりの休日というのを満喫できそうな予感に、俺も心なしか気持ちが浮足だっているのを感じた。

第41章

おかしい。どういうわけか体がとても重く、擦りつけられているような感覚がする。いや、体を締め付けられているような感覚に近い。同時に、布が擦れるような耳障りな音もしていた。

「ん、お兄ちゃ……」

どことなく鼻にかかったような声が聞こえた。もちろん、俺をそう呼ぶのは一人しかいない。

「……沙弥佳か？」

「えっ？　あ、ちょっ、ちょっと待って！」

「良いから早くどいてくれ。重い……」

うっすらと目を開けようとすると、沙弥佳によって目を塞がれた。

「うっ……何するんだ」

「ご、ごめん、少しの間だけ目、つむっててっ」

「あー……分かった」

焦ったように早口になった沙弥佳に、適当な相槌をうった。寝起きのためか、なんでだと聞き返すのも面倒だ。いっそこのまま、二度寝したい気分になる。

沙弥佳はその隙に、そそくさと服が擦れるような音とともに、何かをしているようだ。

「ご、ごめんね。もう良いよ」

沙弥佳のやつが何を焦っているのか知らないが、俺はこの心地良さに負けて、寝てしまいそうになっていた。

「……」

「お兄ちゃん？」

返事をするのも煩わしく、俺の意識はすでに半ば夢の中だった。

今日は土曜日ということもあって、駅にはそこらかしこに若者であふれていた。当然、その中に自分も含まれているが。
「あー、電車行ったばかりか」
ホームに表示されている時間を見ると、前の電車が行ってからほんの一、二分しか経っていない。まぁ、後ものの五分もすれば来るので、さほどのことではない。それよりも……。
「なぁ、おまえ、いつまでブーたれてる気だ？」
「私ブーたれてなんかないもん」
それを世間はそう呼ぶんだがな。
「ちゃんと起きたんだから、もう良いじゃぁないか。たかだか五分や十分遅れたくらい」
「ふんっ」
沙弥佳は口を尖らせながら、そっぽを向いた。
「それに私、そのことで怒ってるわけじゃないから」
結局、怒ってるのかよ。
俺はため息一つ、そばにある備え付けの椅子に腰を下ろした。松葉杖に寄り掛かる続けるのも、決して楽ではない。朝、何をしていたのかは知らないが、沙弥佳に目をつむっていてほしいと言われた俺は、それをいいことにそのまま二度寝してしまったのだ。
沙弥佳の機嫌が悪いのはてっきりそのことが原因と思ったのだが、違ったようだった。そもそも俺の部屋で、一体何をしてたんだ、おまえは。
「じゃぁ、何がそんなに気に入らないんだ」
「そ、それはお兄ちゃんが朝、き、急に目を……」
「俺が朝、なんだって？」
最後の方は、ゴニョゴニョと何を言っているのか分からなかった。
綾子ちゃんも俺と同じだったようで、首をかしげている。
「と、とにかくお兄ちゃんのせいなんだからね」
「はぁ？　なんだそりゃあ。……おまえ、最近なんか変じゃぁない

か？」
「変じゃないよ」
そう言う奴はたいてい、どこかおかしいものだが……。
「あー、もしかしておまえ……」
なるほど。もしかすると、それが一番ありえそうだ。
「あの日か」
「……なっ！？　お、お兄ちゃんの馬鹿っ！」
一瞬何を言われたのか分からないといったような顔になった沙弥佳は、みるみるうちに顔を赤くし、声をあらげた。つまり態度から察するに、俺の予想は当たっているのだろう。もし辛いなら無理はしなくてもいい、そう言うと、なおのこと喚きだしたのだった。

行きの電車の中、沙弥佳は思いの外ご立腹だったようで、目的の駅に着いてからもしばらくの間、口を聞いてくれなかった。もちろん、あんなのは半ば冗談みたいなもので本気にしてほしくないところだが、今の沙弥佳には何を言っても無駄だろう。
俺は、何があんなに沙弥佳をご機嫌ななめにしたのか分からなかったので綾子ちゃんに聞いてみたところ、今回ばかりは綾子ちゃんもただただ苦笑するだけだった。
「本当、デリカシーがないんだから」
そんなことをつぶやきながら、俺のことを見ている沙弥佳に肩をすくめて見せた。
まぁ、沙弥佳が変に機嫌が悪くなることは今に始まったわけではないので、あまり気にしないでおこう。どのみち、今日も夕方になる頃には、機嫌も良くなっているはずだ。そう、こんなのは毎度のことなのだ。
「ところで今日はこれからどうするんだ？　言っておくが、俺はなんも計画はしてないぞ」
「今日は私たちからのお礼を兼ねてるので、あまり気にしないでくださいね」

「お礼？」
「はい。その……あの人のことで」
綾子ちゃんが言うあの人とは、北条のことだろう。綾子ちゃんは、北条と名乗る男にストーカー行為を受けていた。礼というのはそれに対してだとは思うが、沙弥佳からの礼となると一体なんだろう。特別これといったことをした覚えはないが。
「深く考えないでください。私たちがやりたくてやるんですから」
「ああ。まぁ、そこまで言うのであれば、気にしないようにするよ」
「はい、気にしないでください」
綾子ちゃんにしては珍しく、茶目っ気たっぷりの言い方と笑顔だ。こんな顔もできるんだな、君は……。
とたんに顔が熱くなるのを感じた俺は、それを悟られぬよう、そっぽを向いて鼻をかいた。背けた先に、沙弥佳が俺を見ている。その顔は何か言いたげだがすぐに目を泳がせて、結局はうつむいてしまった。
「おい、沙」
「ね、お兄ちゃん。お腹すかない？」
俺が言うが早いか、沙弥佳はすぐに頭を上げて聞いてきた。
「え、あ、まぁ、少し……」
あまり朝は食べていないので、確かに腹が減っていないわけではないが、なんだか不自然な切り返しだ。
「じゃあさ、ここの近くに、結構美味しいって評判のお店があるから行ってみようよ」
「さやちゃん。それって」
「そうそう。あやちゃんも一度行ってみたいって言ってたよね」
「うん。九鬼さん、どうですか？」
「ああ、俺は構わんぜ。どうせ今日は君らの仕切りだしな」
「じゃあ決まり。早速行こう」
そうと決まると沙弥佳は、はしゃぐように先頭を陣取って行った。綾子ちゃんは俺を気遣いながらも、ゆっくりと沙弥佳の後をついて

行っている。
　同じ十五歳でもこうしてみると、沙弥佳は随分と子供じみて思える。いや、単に綾子ちゃんが大人じみて見えるだけかもしれないが。
「おい沙弥佳。少し落ち着けよ」
「落ち着いてるよ」
　落ち着いてる奴が、そんなにそそくさと進んで行くはずもないが、まぁいい。それだけ楽しみにしているという裏返しなのだ。
　松葉杖をつきながら休日で人通りのある道をゆっくりと進む。普段ならこれだけ人が多いと、自分の思うように道を歩けないため、ついジグザグに人と人の間を蛇行しながら進んでいくが、今日はそういうわけにもいかない。むしろ、このゆっくりとした流れのほうが、今の俺にはちょうど良くもある。
「んと、確かこの辺りのはずなんだけど」
「次の角を曲がったところじゃなかった？」
「あ、そうだったっけ」
　二人して俺を連れて行こうとしているのを見ると、とてま微笑ましい。というよりも、いつかも思ったが絵になっている。
「あった。ここだよ、ここ。お兄ちゃん早く」
「やれやれ、早くったってな」
「仕方ないですよ。さやちゃん、すごく張り切ってるみたいですから」
　一人ぼやいていたところ、いつの間にか沙弥佳と一緒にいた綾子ちゃんが、俺の隣についていた。いつものように、微笑をその顔に浮かべながら。
「ああ、どうもそうみたいだな。ま、仕方ないのかもしれないけどな。久しぶりに出かけるから」
「そう、でしょうか」
「ん？」
「いえ……それより、あと少しですから急ぎましょう」
「ああ」

大股に松葉杖をついて、俺は歩を進めた。

店内はまだ昼前ということもあって、かなり空いていた。それでも後三十分か一時間もする頃には大勢の客で溢れることだろう。まぁ、店に入るのが楽であるにこしたことはない。

すでに沙弥佳が一足先に中に入って、席を確保してくれていた。店内も、なかなかに俺好みの落ち着いた雰囲気の店だ。それを強調するように、ＢＧＭにはジャズが流れている。どちらかと言うとランチタイムに来るよりも、ディナーの時間に来る方があっているとは思うが、まぁそこは置いておくとしよう。

「お、この曲は」

メニューに目を通していたら、そこに最近聞き馴染んだメロディーが流れてきた。それは以前、綾子ちゃんに勧められて買った、ＣＤの中に収められていた曲だ。

教えてくれた綾子ちゃんは当然それに気付いて、こちらを見てきた。俺もそれに答えるように、ニヤリとして見せる。

「え、何。お兄ちゃん、この曲知ってるの？」

「ああ。最近、ジャズなんてのを聞いてみるようになってな。それでそのＣＤの中に、今流れてる曲が入ってるんだ」

「へぇ。でも、お兄ちゃんがジャズなんて、ちょっと信じられないけど」

「おい、そりゃどういうこった」

「そのままの意味だよ。だってお兄ちゃん、今までロックだけだったじゃん」

「ロックだけってわけじゃぁないけどな。まぁ、確かにジャズは聞いたことはなかったが、前々から興味はあったんだよ」

俺がそう説明すれば、沙弥佳はどこか疑わしげに、綾子ちゃんは口元に手をやって、それぞれ笑っている。

「まぁ、いいさ。とにかく今はなかなかに気に入ったジャンルであることには変わりないしな。それよりもメニューを決めよう」

まだ何か言ってきそう沙弥佳に、もうその話は終わりと言わんばかりにメニューを手渡した。

一時間ほどして食事を終えた俺達は、人が増えてごった返しになった店内から逆流して店を出た。ここは人気店だったようで、店の外には数組の客達が席が空くのを待っている。

「後もう少し来るのが遅かったら、店の外で待たなきゃならないところだったかもな」

「うん、そうだったかも」

こんななりで寒い中、外にいるのは少々酷かもしれないと思うと、運が良かった。

それに、まだ朝食をとってたかだか三、四時間だと言うのに、思ったよりも腹は減っていたのか、運ばれたランチメニューを瞬く間に平らげてしまった。しかも、それを見た沙弥佳が、自分の分を少しばかりすそ分けするというほどだった。がっつきすぎるみたいだと思ったので、怪我していると腹が減るみたいだと、適当に言い訳しておいた。

「腹も満たされたところで、次はどうするんだ?」

「次はねぇ、ここから少し歩いたところなんだけど」

「そうか。ならそこに行ってみよう」

「あ、でも電車で行った方がいいかな」

「どこなんだ?」

「一駅しか離れてないけど……」

「だったら歩こう。こんなでもゆっくり行けば、そう大した距離じゃぁないだろ」

「そうだけど……いいの?」

そう言われても俺は、ただ肩をすくめるだけだ。そこまで気を遣う必要はないのだ。気を遣ってもらうのは嬉しいが、電車だと、乗り降りや階段なんかが逆に面倒くさい。沙弥佳と綾子ちゃんもそれを悟ったのか、それ以上は何も言うことはなかった。

昼時ということもあってか、通りにはさらに人が溢れていて、俺達は、その通りから少し外れた道を歩いた。表通りと比べ、はるかに人が少ない。人通りのある道を行くよりも、こちらの方が賢明と言えよう。

ただ年頃の女の子であれば、表通りの華やかな道を歩いてみたくなるものだろうが、この二人はそんなことなど気にしないのか、即座に裏道へと入っていったのだ。単に俺への気遣いなのかもしれないが、俺としては気楽なのは間違いない。

「やっぱり休日は人が多いな。寒いのに皆元気だ」

「クリスマスが近いからね。皆気分が盛り上がってきてるんだよ」

「ああ、そういえばもうそんな時期か。一年ってのは、あっという間だな」

やはり一ヶ月の入院というのは少なからず、季節感というのを狂わせてしまっているらしい。つまるところ、もう今年も後、三週間かそこらしかない。

まぁ、クリスマスの予定なんざ全くない。あるのは去年までと同じく、家族と過ごすことになるのだろう。けれど、今年はもしかしたら例年とは違って、少し変化があるかもしれない。というのも、綾子ちゃんがいるからだ。

今年のクリスマスは週末にぶち当たっているため、綾子ちゃんがまた泊まりに来るかもしれないのだ。そう考えてみると、決して悪くはない話だ。いくらそういう世俗的なものに頓着しないとはいえ、彼女も全く何も思わないはずはない。

「お兄ちゃん？」

「なんだ？」

「何考えてるの？」

俺が何か考えていたのが分かったらしく、単刀直入に問うてきた。本当のことなので何も言い返さず、苦笑しながらつぶやいた。

「いや、もうすぐクリスマスだなと思ってな」

「そうだよね、もう後二週間だもん」

「ああ。ところで、綾子ちゃんは何か予定あるか？」
「クリスマスのですか？」
「そうだ。何もないなら、良ければうちにきなよ。幸い、今年は週末だし、泊まって行けば良いよ」
「え、でも……良いんですか？」
「俺は全然構わないさ。両親もそれにいちいち文句は言わないだろうし。どうだ」
「は、はい、それは嬉しいですけど」
綾子ちゃんは俺と沙弥佳を交互に見やりながら言う。
「お二人やご両親が良いというなら、お邪魔させていただきますけど……」
綾子ちゃんは俺にというより、沙弥佳に気を遣っているかのようで、やたらと沙弥佳のほうを気にしている。
「うん、私は別に良いよ……あやちゃんなら」
「決まりだな。楽しみにしてるよ」
「……はい」
顔をほのかに染めて、綾子ちゃんは頷いた。そんな男心をぐっと掴むような態度をとられると、思わずくらりときてしまうのでやめてくれ、綾子ちゃん。

そんなことに華を咲かせているうちに、次の場所に着いていた。
「ここは植物園か」
「うん。ここだったらあまり人もたくさんいないだろうし、落ち着けるかなって」
「そうか。まぁ、あまり人込みは好きじゃぁないしな。それにこういう所は、一度入ってみたいとは思ってたし、ちょうど良い」
「良かったね、さやちゃん」
「えへへ」
沙弥佳は綾子ちゃんに褒められ、満面の笑みをこぼす。きっと、今日のことは昨日のうちに綿密に計画していたのだろう。いや、も

しかするともっと前からかもしれない。まぁ、なんにしてもこっちも悪い気はしない。

「しかし、植物園なんて初めて来るな」

「私も植物園は初めてですね」

「そうなの？　私はこれで二度目だよ」

券を買い、中に入ると、湿気のある空間に入ったのが肌で感じとることができる。外の冬の乾燥した寒さに対して、この空間は植物による、独特な匂いと暖かさがあるのだ。

これは人工的な空調による暖かさと違って、もっと穏やかな、自然な暖かさだ。どうしても空調だけの暖かさだと、無駄に暑く感じたり、逆に温度が足りなくて寒く感じることがあるが、ここはそれらをうまくカバーし合うことができているのだろう。そのため、この空間においてはとても居心地が良い。

「お兄ちゃんってさ、意外とこういうところ好きでしょ？」

「ああ。なんていうのか、落ち着くからな。しかしこんな街中に、こんな植物園があるなんて知らなかったな」

「そうですね、私も知りませんでした」

そんな俺と綾子ちゃんに、沙弥佳は得意げになりながら笑った。

俺は所謂、孤独癖を持った人間だ。そういう人間にとってこういう場所は、とても居心地が良いのだ。

「ここは、この辺りの屋内型の植物園じゃ最大級の広さあるらしいから、わりとたくさんの種類の植物があるみたいなの。どんなのがあるのか楽しみだね」

俺達はまず建物の一階フロアにあるランの花のコーナーへ出た。

ここでは一年中、各国の様々なランの花が見れるのだと沙弥佳は説明する。フロアにはランの花特有の匂いが充満していて、まさに植物園に来たという気になってくる。

「本当にたくさん種類があるみたいだな」

「でしょ？　今あるだけで百種類以上あるみたいだよ。でも、これでもまだ少ない方らしいから」

「百でも少ないなんて、多い時はどれくらいになるんだ？」
「倍以上になるって聞いたから、二百とか二百五十種以上になるんじゃないかな？」
「すごいな。それもこんな、限られたスペースで」
そんな話をしながら、俺達は進んでいく。
それにしても、ここは本当にすごい。こんな街中にあるのだから、もっとこじんまりしていて、数もあまり多くないと思ったのに、中に入ってみると意外なほど、その種類も多かったのだ。
ランとは一言でいっても色々なものがあって、中には人の背丈にもなるような物もあれば、逆にほんの数センチくらいの高さしかないものもある。まさにピンからキリだ。
「次はなんだ」
「バラみたいですね」
「バラってのは五月くらいじゃなかったか？」
「一般的にはそれくらいに咲くものが多いですが、十一月にも花をつけるものも結構多いですよ。それに私は十一月頃に咲くバラは、個性的なものが多いのでどちらかと言えば、この時期に咲くバラの方が好きですね」
「なるほど。言われてみると、確かに俺が知っているバラとは一味違いそうなのが多そうだ」
綾子ちゃんが言ったように、これがバラなのかと思ってしまうような花の形をしたものが少なくない。
「それとこの時期のバラは、よく香水なんかに使われるものも多いから、匂いも変わったのが多いんだよ」
「そうなのか」
俺は沙弥佳の説明に頷きながら、相槌をうった。バラは香水の原料として使われるようになって、非常に歴史があるのだという。古くは、古代ギリシャや古代ローマの頃にまで及ぶらしい。
それだけでなく、原種自体はそれよりもさらに古い時代、つまりエジプト文明の頃にすら、それに近いものが香水の原料になってい

たというのだから驚きだ。
　そうやって歴史を重ねていくうえで、いくつものバラが作られていき、ルネッサンスに入る頃にはバラの品種改良をするための、専門家ともいうべき職人もでてきたというのだからわからないものだ。
　そうすることで新しく品種を作りだし、または新しいベースの香りを使って発展してきたのだから、数が増えていったのは当然といえば当然だ。
　いや、発展というのとは違う。作る上で技術的に発展した部分もあるだろうが、香水というのはあくまで香りなんであって、そこに発展というのは全く関係のない話だ。言うならば、芸術みたいなものだ。影響は受けても、それそのものが発展したものとは言い難い。
　前に作られたものが、それ以降に作られたものに劣っているというわけでもなく、また新たに改良を加えたものが、必ずしもそれ以前のものより優れているわけではない。
　バラのフロアも最後になろうという頃、一本のバラに目がいった。不思議な色をしたバラで、ここにあるバラはもとより、俺が知りうる全てのバラとは、明らかに違うものだった。
「青い……青いバラだ」
　そのバラを見た時、思わず呟いていた。正確には、青というほどの青さはないが、うっすらと青みがかっているのだ。
「本当だ、すごい。でも青いバラなんて造られてたんだ……」
　俺のつぶやきに反応した沙弥佳が、その青いバラに寄っていく。
「ブルーローズなんて……」
　つぶやく綾子ちゃんとともに、沙弥佳と同じようにバラに近寄った。青いバラというのはバラ職人達にとって、永遠の夢であり、悲願だと聞いたことがある。今日のバラの種類ほとんどは、その過程で生み出されてきたもので、同時にバラ職人たちの手によって、品種改良されてきたものであるらしい。今日のような青いバラを作るための品種改良が、正確にいつ頃から行われ始めたのかは分かっていないという。

紀元前の中東ではすでに、王公貴族たちの間で香水は使われていたというが、そのための花の授粉技術の研究が行われていたという記録もあるそうだ。一説には、青いバラの品種改良が行われ始めたのは、その頃からではないかとも囁かれているらしい。

ただ沙弥佳と綾子ちゃんの説明によれば、現在のバラ職人が誕生したのは少なくとも、香水作りがとりわけ盛んになった十七世紀頃から、バラが人気の香水の原料として使われるようになってからで、それだけを専門とする人々が誕生してからだという。

そう考えると、すでに三百年も四百年も、もしかすると二千数百年以上も前から職人達の夢であり続けているブルーローズがこうして目の前にあるのは、なんだか不思議な気分だ。

青いとは言っても、目の前のバラはまだ青みが少なく、近くで見てみるとどことなく紫がかっているようにも見える色だが、。その色は本当に淡い。バラの木の札を見てみると、半世紀以上も改良されてようやくこの色になったと書かれている。

やはり青いバラはこれからも、まだまだ職人たちにとっての夢であり続けるのだろう。人々に、幸福を運ぶものであるという青いバラを造ることができたら、それだけで造った人物は一躍、時の人になるに違いない。

なんせ、未だ世界中のバラ職人たちが挑み続けてなお達成されないのだ。そんなものが造られた日には、ノーベル賞ものだ。

それでも、ようやくなんとか青みがかったバラができただけでも、何百年以上の歴史の中で画期的なことであることは変わらない。

俺は、淡く紫がかった色の青いバラを前に、人の歴史なんてものを感慨深く感じていた。

植物園を出るとすでに外は暗く、時刻も午後四時半になろうとしているところだった。確か植物園に入ったのが一時を少し過ぎた頃

だったので、概算して三時間半ほどいたことになる。
十二月も半ばになると、日が落ちるのもよりいっそう早くなり、午後四時半頃には沈んでしまう。つまり、今太陽は地平線の向こうに沈もうとしているのだ。
「はあ、結構長くいちゃったね」
「だな。それに中と外じゃぁ、温度差が半端じゃないな」
「ほんとう。日が出てるうちは良かったけど、なんか一気に寒くなっちゃったね」
「ああ。だけど、動いていればあったまるからな」
「九鬼さん、大丈夫ですか？　中でもほとんど休まなかったようですけど……」
「大丈夫だ。それに植物園の中だけど、思ったよりも疲れなかったよ。不思議とね」
俺がそう言って歩き出した時だった。
「あれ～？　九鬼じゃん」
俺達の後ろから声をかけられた。このどこか間延びするような声は確認しなくても分かる。うちのクラスのイケメン野郎、斑鳩だ。
くそ、こいつはいつも嫌なタイミングで現れやがる。しかも、なんだって今なんだ。
「よ～九鬼ぃ、女の子二人も伴ってデート？」
「斑鳩か。こんなところで何してるんだ？」
ため息をつきながら振り向いた。
「開口一番ご挨拶だね。別に何もしてないよ、今は」
「つまり、今から何かするつもりってことか」
斑鳩は俺のラフな恰好と違い、まさに女の子受けを狙った恰好をしている。その服はどちらかと言えば、着る人を選ぶようなもので、普通であれば敬遠されそうなものだがこの男は、それを見事に着こなしていた。斑鳩が天性のプレイボーイというのを、実に見事に表現できている。
それに十アルファとベータの男が付き添っていた。歳も俺や斑鳩

と変わらなさそうだ。もしかしたら二人は、斑鳩の中学時代の友達なのかもしれない。その二人も、斑鳩同様になかなかの着こなしだ。

「んー、まぁ、気が向いたら、かな？」

「そうか。ところで何か用か？　俺達、これから行くところがあるんだが」

俺は二人をかばうような形で、すっと一歩前へ出た。

「そんなに邪険にしないでよ、九鬼。たださ、もし良ければ俺らも交ぜてくれない？」

「なに？」

相変わらずこいつはストレートに言ってくる奴だ。普段なら、それはこいつの良いところと捉えるところだが、いかんせん、今のこいつには用心深くなってしまう。

「お兄ちゃん……」

沙弥佳がどことなく不安げに寄りそってくる。考えるまでもなく、沙弥佳は斑鳩みたいなタイプは嫌いだし、綾子ちゃんも、かなりの苦手意識を持っている。綾子ちゃんに至っては斑鳩の横の二人に、完全に畏縮してしまっていた。

どうするか……斑鳩には前の件もあって、悪い意味で貸しを作ってしまったように思えてならない。気の良いやつだったら、そんなの気にするなの一言で済ましてくれるところだが、こいつにはそれは通用しない。それどころか、おそらくそんな気の良さそうなことなど、思ってもいないだろう。

「悪いな、斑鳩。今日は俺にとっちゃぁスペシャルデイってやつでね、楽しみにしてたんだ。今回は一緒というわけにはいかないんだ」

「スペシャルデイ？　そっか、それは残念だな」

「すまないな。また今度にしてくれ」

今度と言わず、できれば次がないことに越したことはない。

そんな、これ以上相手をしたくないのと、できるだけ沙弥佳達から離したいという気持ちが焦りを生んだのか、それを敏感に感じとった斑鳩は、俺を呼び止めた。

「まぁ待てって。実はさ、俺たち再来週パーティーやるんだ。ほら再来週、クリスマスじゃん？　それに沙弥佳ちゃんと綾子ちゃんも呼んでほしいんだ」
「クリスマスパーティーか？」
「そうそう。あ、もちろん九鬼も同伴でオッケー。それに」
そこでわざと区切った斑鳩は、チラリと綾子ちゃんの方を見て、俺の方へと近づいて小声で言った。
「おまえだって綾子ちゃんと一緒にいたいだろ？」
「なっ」
「ま、そういうことなんで頼むわ。二人とも良い？　良いよね？　大丈夫だよ、当日はちゃんと迎えに行くからさ」
沙弥佳と綾子ちゃんに向かって、有無を言わせないかのような態度をとったのち、斑鳩たちは去っていく。
「お、おい！　俺はまだ行くとは言ってないぞっ」
「じゃあね～」
ヒラヒラと手を振って、斑鳩たちは人込みに紛れて消えていった。
「九鬼さん……」
「……何がパーティーだ。人の予定も聞かないで」
なんだっていうんだ、斑鳩の奴。一体何を考えてるんだ。一方的に斑鳩に言いくるめられたような気分になり、むしゃくしゃする。
「お兄ちゃん。あんまり気にしないで。ね？　私たち返事してないし、それに行く気もないから」
沙弥佳が宥めながら、俺の手を軽く掴む。綾子ちゃんも沙弥佳に同意しているようで、二度三度頷いている。
「……ああ、そうだな。そうだった」
そうだ。別にあの男が勝手に言っただけで、二人を連れていくだなんて言ってない。奴に一方的に言われただけだ。なのになんで俺はこんなにイラツいてるんだ。
そんな俺を、沙弥佳たちは不安げに見つめている。ため息を一つついて、小さくかぶりを振った。

「すまなかったな。どうも最近の俺は、頭に血が上りやすくなってるみたいだ」
おどけて見せながら、肩をすくめる。なぜ自分が苛立ったのか、その理由がなんであるかは分からないが明後日学校に行った時にちゃんと断りを入れればいいだけだ。そう心に決め、俺は二人を促した。
「うん、大分経過も良いみたいだね。まだ走ったりはできないけど、ゆっくり歩くのなら、もう松葉杖はいらないだろう」
「本当ですか？　ようやくだな」
「いやいや、大分早い方だよ。若いというのもあるがかなり早い。君の回復力には、こちらが驚かされるよ」
医者にそう言われながら、俺は松葉杖なしで歩いてみせた。まだどことなく本調子でないのが分かるが、それでも杖なしで歩けるというのがこんなにも素晴らしいものとは思わなかった。
今俺は週に一度、経過を見るための病院に通うことを義務付けられている。先々週退院し、今回二回目の検診で、早くも松葉杖がとれた。後は心置きなく自由に走れるようになることができれば完璧だ。
「念のため、もう一週間分の痛み止めを出しておこう。ズキズキという痛みが続く時にだけ飲みなさい。いいね？」
俺の担当だった医者に会釈し、診察室を出た。
「あ、お兄ちゃん、どうだったって……松葉杖とれたんだ」
待合室で待っていた沙弥佳が声をかけてくる。全く、病院くらい一人でも行けるのに、わざわざ着いてきたのだ。
「ああ。経過はかなり良好らしい。走ったりしなければ大丈夫だそ

うだ。念のため痛み止めが出るみたいだけどな」
「そっかぁ。だけど案外早かったね、とれるの」
「医者も回復力の高さに驚いたんだとよ。まぁ、遅いよりは早いに越したことはないけどな」
「でも良かったよ。クリスマスまでは松葉杖のままだろうなって思ってたから」
「実を言うと俺もだ」
ニヤリと唇の端を吊り上げて、病院を出た。最近は医者の薬をもらうのに、医者に渡された処方箋を持って薬局に行かないと、薬を処方してもらえない仕組みになっているらしい。まともに病気をしたことがなく、医者にかかったことがない俺としては、ちょっとしたトリビアだ。
薬局で処方された薬を手に、俺と沙弥佳は帰路につく。
「それでお兄ちゃん。あの人、斑鳩さんだっけ。どうなったの？」
「さぁな。とにかく俺は奴のやるパーティーなんぞに行く気はないし、おまえたちも行く気はないんだろ？　だったら行かないと言うだけだよ。ま、最悪、当日になるかもしれんがな」
沙弥佳が唐突に聞いてきた。当然の疑問だろう。俺、沙弥佳、綾子ちゃんで街に繰り出したところ、斑鳩と会った時のことを言っているのだ。それが今から十日ほど前のことだ。
しかし断ろうとしたのに、斑鳩はなぜだか翌週から学校に姿を現していない。どうしたのかと連絡を取ってみたものの、一向に繋がる気配がなく、斑鳩の取り巻き連中にも聞いても、やはり同じ状態だという。
頭の痛い話だが、連絡をとろうにもとれないので、仕方なく小町ちゃんに住所を聞いて奴の家に行ってみたのだ。
奴はアパートで一人暮しをしているようで、呼び鈴を鳴らしても出ることはなかった。運良く隣の住人に出くわしたので斑鳩はどうしているのか聞いてみたが、ここ数日の間、帰ったような気配がなかったという。

結局、それ以上は手の打ちようもなくなり、ドタキャンになるが当日にでも無理だと言おうと思っていたのだ。

とは言っても、斑鳩が一方的に約束を取り付けようとしただけなので、元より行く気もないのだが。

しかし、もう一月半以上前のことだが、今井の件もあってか、こうして人一人が連絡を取れずにいなくなるというのは、あまり良い気持ちがしない。たとえそれが斑鳩のような奴であってもだ。

俺は漠然とした不快感を感じながらも、後二日と迫ったクリスマスイヴに、期待を胸に膨らませていた。

第４２章

今年は土日にクリスマスがぶち当たったこともあり、二十三日の休みと合わせて三連休となっていた。けれど学生にとっては、そんなのはあまり意味はなく、前日の二十二日で学校が終わったため、晴れて冬休みになるのだ。

そんな冬休み二日目にあたる十二月二十四日、クリスマスイヴにあたる今日は、きっと街を彩るイルミネーションの中を恋人達が自分達が主役と言わんばかりに闊歩し、溢れているのだろう。

そんな中俺は携帯を片手に、先ほどから何度もコールしていた。相手は斑鳩だ。奴がやるとか言っていたパーティーは、多分今日のはずだ。結局、今日にいたってもなんの連絡もないので、こちらから再三コールしているというわけだ。

「ちっ、出やがらない。一体何してるんだ、奴は」

自分で言っておきながら、誰とも連絡をとらないとはどういうことなんだ。俺は悪態をつきながら携帯をしまった。しかも俺は今、沙弥佳たちに連れられて食料の買い出しに来ていて、二人がいない間にこうして電話していたのだ。

まぁいい。奴が連絡してこないならこっちも無視してやればいい。そもそも、断り一つ入れるのに、なんで俺が奴のアパートにまで行ったりしないといけなかったのか。よくよく考えてみれば馬鹿な話だ。

決めた。俺は奴の誘いには絶対に乗らない。もしうちに来たとしても、門前払いにしてやる。

そうだ、最初からそうすれば良かったのだ。斑鳩にいちいちお伺いをたてるなんてことは馬鹿のやることだったのだ。

俺はもう斑鳩のことは馬鹿馬鹿しいことだと思い、今晩のささやかな晩餐と、綾子ちゃんと過ごせるかもしれないという期待に思い

を馳せていたところ、沙弥佳たちが戻ってきた。
「お兄ちゃん、これ持って」
沙弥佳が買い物袋を差し出してきた。なかなかに多い量だ。
「なんだ、ずいぶん買ったんだな」
「まぁね～。五人だから結構な量になると思うし、それに今日だけの分ってわけじゃないから」
本来ならばこの日は、母が買い物に行き、それに沙弥佳がついていくというのが恒例だ。けれど、今日に限って父が午前中だけ、仕事があると言って出勤していった。そして午後になると今度は母が出て行ったのだ。ようするに、両親にとっては久しぶりのデートというわけだ。夜は帰ってくるから、買い物はお願いと言い残して。
結果、こうして俺は沙弥佳たちの買い出しに付き合わされている。綾子ちゃんも嫌な顔一つせず、それについてきてくれた。家からこのデパートまでは、歩いて二十分くらいなので、三人で行けばたいした距離でもない。
「それじゃぁ、帰るとしますか」
「うん」
外に出てみれば、すでに太陽は西の方に沈みかかっている。時刻は、まだ午後四時を少し回ったところだが、今くらいの時期から二、三週間は、一年において最も日が短い時期だ。
「さすがにこの時間になると、晴れていても寒いな」
「そうですね。少し風も出てきましたし」
北西から吹く風が俺達の頬を撫でていき、余計に寒く感じられる。俺はその風に背筋を震わせ、首に巻き付けてあるマフラーを口の辺りにまで上げた。
「もしかしたら雪、降るかな」
「雪が降る時は、その数時間前はとんでもなく寒く感じるからな。これくらいなら降ることはないだろ」
「むー、お兄ちゃん、夢がないよ」
「夢も何もないだろう」

肩をすくめながら、足早に帰路につく。綾子ちゃんの言う通り、風がでてきたため、急激に寒くなる。今年は例年と比べ暖冬だと聞いたが、そのせいもあってか、ちょっと寒くなるといつもより寒く感じて仕方ない。

「ところで九鬼さん。斑鳩さん、あれからどうしたんですか？　まだ何も連絡がないんですよね？」

「ああ。全くと言っていいほど連絡がつかない。まさしく音信不通ってやつだ」

「そうですか。でも、どうしちゃったんでしょう？」

「一応、やつの部屋に行ってみたんだが、隣の住人が言うには、ずっと家に帰ってないらしい。あいつの企画した催し事に付き合うつもりはないが、断りすら入れさせないってのにはムカつくけどな。

というよりも、小町ちゃん……うちの担任が実家にも連絡してみたらしいが、実家に帰っているわけでもないらしいからな。一体どうしてるのか、俺にもさっぱりだよ」

「わざわざ部屋にまで行ったの？」

「ああ。あいつ、アパートで一人暮らししてるらしい。まぁ、あいつが今まで弁当持ってきてるのを見たことがなかったから、それはそれで納得だ」

「ふーん。そっかぁ、一人暮らししてるんだ」

沙弥佳は何を思い付いたのか、しきりにうんうんと頷いている。

「なんだ沙弥佳。一人暮らしに興味あるのか？」

「ううん。今はあんまりないけど、あの人が一人暮らししてるのかって思ってさ。偏見かもしれないけど、どちらかと言うとさ、親と暮らしてるんだけど夜まで遊んでそうなイメージがあって、一人暮らしなんて想像できなくてさ」

なるほど。それもごもっともな話ではある。

奴のアパートに行くまでは、俺も漠然とだがそれに近いイメージを持っていたのは同じで、奴の一人暮らしというのは、想像がつかなかったのは事実だ。

「しかし考えてみれば、ああいった人間だからこそ、一人で暮らしているとも言えなくもないな」
「そうだけどねぇ」
そんな話をしているうちに、もう家の目と鼻の先にまでついていた。
「ただいま」
誰もいない家の中にそう言って、玄関にあがった。いつも不思議に思うのだが人が家から誰もいなくなると、なんでこうも、寒々しく感じるのだろう。たかだか、ほんの二時間ばかし家を空けていただけだというのに。
「少し休憩してからはじめよっか」
「そうだね。だったら、五時くらいからにしよう」
「うん」
二人はそう言いながら、台所へ食材の入った袋を持って行く。当然ながら、俺も持っていた分は持って行くが。
「あ、お兄ちゃんはしばらく休んでていいよ。特にすることもないと思うから」
「ん、分かった。じゃぁ、そうさせてもらうわ」
二人を残し、俺はさっさと二階に上がっていった。一息つきながらベッドに腰をおろす。
「ふう……どうしたもんかな」
つぶやきながら、マフラーと着ていたダウンジャケットを脱いで放り出し、そのままベッドに寝転がる。もう斑鳩のことは気にしないと決めたはずなのに、綾子ちゃんに言われて、また頭の中をそのことがちらつきだしている。
しかしそれとは別に、何か他のことを忘れているような気がしてならない。それがなんだったか忘れるほど、斑鳩のことが頭を過ぎるのだ。
「んー……何、忘れてたっけな、俺」
何か忘れているのは確かで、必死にそれを思い出そうとするもの

の、それは出てこない。そう簡単に出てくるのなら、誰も苦労はしないというものだ。

そうやってしばらくの間、うねりながら考えているうちに気付けば眠りに落ちかけていた。

くそ、昨日はたっぷり寝たはずなのに眠い。沙弥佳からすることがないと言われて部屋にきてはみたが、何もすることがなければそれはそれで暇を持て余すことになり、退屈だ。

確か眠気覚ましには、コーヒーが良いらしい。そう思い立つと俺はベッドから立ち上がり、下に降りていった。

階段を下りていると、コーヒーの匂いが漂ってきた。二人が煎れたのだろうが、ちょうど良い。

「コーヒー煎れたのか」

「あ、お兄ちゃん。ちょうど良かった。今から呼びに行こうとしてたんだよ」

「そうか。実を言うと、俺もコーヒーでも飲もうと思ってたところだ」

綾子ちゃんが手際良くサイドボードからカップを三つ取り出して、テーブルに置いた。直ぐさま沙弥佳がそのカップに煎れたてのコーヒーを注ぐ。その動作は見ていて、本当に息が合っている。阿吽の呼吸というやつだ。

沙弥佳が出したお茶受けに手をとりながら、席についた。

「砂糖は？」

「いらない。その代わりミルク、多めに」

綾子ちゃんがその通りにいれてくれたカップを、微笑みながら差し出してくれた。

「ありがとな」

「いいえ」

一口それを含むと、濃さの中に、コクとほのかに酸味のある味が広がる。

「いつもと味が違うか、これ」

「あ、気付いた？　豆は変わってないよ。豆の挽きかたを少し変えてみたの。いつもと違う感じがするでしょ？」
「ああ。いつものも美味いが、こっちの方が好みかもしれない」
また一口飲んで、一息いれる。俺が思うにコーヒーや紅茶というのは、その吐き出される息までが味わいなのだと思う。
「じゃあ、私たちもいただこうか」
「うん」
二人が席につき、談笑を始める。話題はたいしたものでもなく、さっきのデパートでの買い物のことだったり、これからする料理の話であったり、両親がいつ帰ってくるかなどだ。そのうちに今日がイヴであり、今日までに何を買ったかという話になった時だった。
「……あ」
二人の話を聞いていて、ようやく思い出すことができた。俺がひっかかっていたことが。
「沙弥佳」
「なぁに？」
「晩飯、何時くらいになる？」
「なにお兄ちゃん、お腹減ってるの？」
「いや、そうでもないけど。それで何時くらいになりそうだ」
確かにいきなりそんなことを聞かれたら、誰だってそう思ったにしても、不思議はないだろう。
「うーん、今が五時十分前だから……七時か七時半くらい、かな」
「七時半か……。悪いが、今から一、二時間ほど出かけてくる」
「え？　今から？」
「ああ。ちょいと急用を思い出した。今日中になんとかしておきたいんだ」
俺は立ち上がって、残ったコーヒーを一気に飲み干した。窓の外は、完全に闇夜と化している。
「飯の時間までには戻る」
「あ、うん」

リビングを出て、先ほど脱いだ出かけ用の服を取りに、一段とばしで階段をあがる。
「あぶねぇ。忘れてたぜ、完全に」
俺が忘れていたのは二人に贈るプレゼントというやつだ。今年ばかりは普段、人に物を贈ったことのない俺も、プレゼントを買うようにしようと前に決めていたことだった。
沙弥佳のやつは、毎年忘れることなくプレゼントを渡してくるので、多分、今年の分ももう買っているだろう。もしかすると、先ほどの買い物で買ったかもしれない。おまけに、今年は綾子ちゃんもいるので、絶対に忘れるはずはない。
俺も毎年貰うだけではどことなく気分が良くないと思っていて、いつも来年こそはと思いながらも、やはりその時になると、つい忘れてしまっていたものだった。そのため次の日には、一日だけ沙弥佳の言うことを聞く、というのが恒例だった。
しかし、今年は綾子ちゃんがいる手前、そういうわけにもいかない。なんだかんだで綾子ちゃんには、他人様でありながら家事やなんやらを手伝わせているうえ、週明けには弁当まで作ってもらっているという有様だった。
いや、手伝わせているというよりも、半ばメイドに近い扱いだったかもしれない。なんせ、この家に長年住んでいる俺よりも物がどこに置いてあるかなど、しっかりと把握しているのだ。
そうなってくると、こんな日に何もなしというのは、さすがに男の沽券にかかわるというものである。
つい先ほど脱いだばかりのマフラーとダウンジャケットを着込み、ついでにニット帽をかぶった俺は、玄関へと下りていく。下の廊下には、沙弥佳と綾子ちゃんが見送ってくれるためか待っていた。
「別にリビングから出なくても良かったのに」
「うん、まぁ、そうなんだけど……。でも、どこに行くの？」
「ま、野暮用ってやつだ」
素直にプレゼントを買いに、なんて言えるわけがなかった。別に

言ったとしても、そのことを気にするような二人ではないだろうが、それでもプライドがそれを許そうとしない。
「うん……。気をつけて行ってきてね」
「おいおい、なんて顔してるんだ。たかだか何時間か家空けるだけだってのに」
わけが分からず沙弥佳は、寂しげな顔をしていた。もしかすると、こいつは食事まで俺に居てほしかったのか？　毎年そうだったことを考えれば、それもありえないことではないが、だからと言って今行かないわけにもいかない。俺はその沙弥佳の頭に手を乗せ、軽く撫でてやった。
「携帯は持っていくから、何かあったら連絡してな」
「うん。じゃあ、いってらっしゃい」
「九鬼さん、いってらっしゃい」
「ああ、いってくる」
二人に見送られて、俺は先ほどよりも風が出ている、冬の外に出ていった。

電車を降りて、商店街の方へと向かった。さすがにイヴということもあり、カップルの数が半端じゃない。右を見ても左を見てもどこを向いてもカップル、そんな状態だ。今日はいわゆるクリスマスセールということもあって、それも大いに関係しているだろう。
さて、そんな中俺は、一人悠々と人込みの中を闊歩しながら、二人へのプレゼントをどうするか考えていた。喜ばれそうでいて、かつオシャレな物が良いと思うが、そうなるとどういった物になるだろう。
「あれ、九鬼くん？」
考え事をしながら歩いていたところ、横の店の中から思わぬ人物が出てきた。青山だ。

「よう、青山じゃないか」
「こんなところでどうしたの……って、あ、松葉杖とれたんだ」
「ああ、おかげさまでな。つい二日前にとれたばかりなんだ。リハビリも兼ねて、こうして歩いてるところだよ」
「へぇ。思ったよりも早かったね」
沙弥佳と同じことを言われ、俺は苦笑しながら黙って肩をすくめた。
「そんなことより、おまえこそどうしたんだ、こんなところで」
「うん。まあ、恋人がいない同士、姉ちゃんと出かけてたんだ。それでね」
遠回しに言う青山に、それは俗にいうデートだろと言おうとしたが、やめた。前々からそんな節を見せていた姉弟だ。それも有り得ない話ではない。いや、青山というよりも、青山の姉貴がという方が正確だろう。
そう察した俺は、素直に頷いておいた。
「それで九鬼くんこそ、今日は一人なの？」
「ああ。ちょいと買い物に出てきただけだ」
「そう。でも意外かな？　妹さんや友達の女の子と一緒じゃないなんて」
「おいおい、そりゃぁどういう意味だ」
青山の、まるで学校以外では四六時中一緒にいるかのような台詞に、思わず突っ込んでしまった。斑鳩もそうだったが、そういう風に見えるのだろうか。だとしたら心外だ。
とは言え、うちには結局その二人がいることを思い返せば、当たらずとも遠からずではあるが……。
「まぁ、なんていうか……二人にプレゼントでもと思ってな」
その時青山の後ろから、青山の姉貴が出てきた。よく見ればこの店は喫茶店で、今しがた、彼女が会計していたのだろう。
「あれ？　あなたは」
「どうも。お久しぶりで」

確か沙弥佳と綾子ちゃんと一緒に、キシマイ堂で会った以来だ。
彼女は、いつぞやに青山の家で見せたような態度ではなく、かと言って、キシマイ堂で会った時のようでもなく、何か余裕を持っているように見えた。まるで青山が突如、雰囲気が変わった時のようなものを感じたのだ。
外出しているからかなのか、はたまた最近はずっとなのかは分からないが、随分と大人びた恰好をしている。
「確か、しんちゃんのお友達の」
「僕のクラスの友達で、九鬼くんだよ」
「九鬼です」
青山に紹介されて、軽く会釈する。たとえ雰囲気が変わっていても、俺は彼女にはあまり関わらない方が良いと思っているので、そろそろ退散すべきだ。
「じゃぁ青山、俺はそろそろ行くよ。時間がそんなにあるわけでもないから」
「あ、うん。そういえば、もうプレゼントは決まったの？」
「いや、正直な話、こんなところにまで来といて、まだ何も決めてないんだ」
「そう。だったらこれ、持って行くと良いよ」
そう言って青山は、この地区の商店街でならどの店でも使えるという割引券を出した。期限は明日までになっている。
「いいのか？」
「うん。どうせ、今日はもうこれから帰るつもりだったし、明日は多分出かけないから」
「そうか。だったら有り難く使わせて貰うよ」
青山に感謝し、その割引チケットを受け取る。この男は、本当に良いやつだ。学校でもこんなら、隠れた人気者になってもおかしくないはずだと思うのは、きっと俺だけではないだろう。
「それじゃぁ、またな」
「うん、またね」

二人に手をあげて、早々に立ち去る。大丈夫とは思ったが、またいつかのように、嫉妬に染まった彼女の視線をぶつけられたくはない。

「さて、どうするか」

誰にも聞こえないような、小さな声でつぶやいた。

正直なところ、これは俺だけではないだろうが男であれば、クリスマスだからと言って、女の子が言うほど特別はしゃぐようなものではないと感じていると思う。この日主役なのはあくまでクリスマスであって、あとはせいぜい、この日が誕生日の人間くらいだ。

その点、沙弥佳や綾子ちゃんは男にとって、とてもやり過ごしやすいタイプだと思う。男にとってクリスマスプレゼントなんてのはあまり意味のあるものではなく、今日一日くらいは、ただ恋人とのんびり過ごせればそれで良い、と考えている奴は多いだろう。もちろん俺もそうだ。

しかし、そうは分かっていても、時にそればかりでもいけないと思ってしまうのが、男の不思議なところだ。まぁたまにはな、こう思ってしまうのだ。今の俺がまさにそうであるわけだが。

とにかく、今は二人に何を贈れば良いかだが、ここは無難に服にでもしようと思う。今しがた青山の姉貴をヒントにしたのだが、前二回会った時と比べ、雰囲気が随分と変わっているのを見て、それで悪くないと思ったのである。

そうなると俺は、若い女の子向けの店を適当に見繕って入っていった。中は外と比べて、熱いくらいに暖房が効いている。

「いらっしゃいませー」

さすがに普段、こういった店に入らない身からすると、少々恥ずかしい。しかも、男一人でなのだ。

「どういった物をお探しですか？」

店に入ったは良いものの、どういうのを買えばいいのか決めかねていた俺に、店員の女の子が話かけてきた。

「あ、いや……実はまだどういうのってのは決めてないんだ」

その上で、どんなのが流行っていて、どんなのが人気なのか聞き出していく。というのも、はっきり言って沙弥佳も綾子ちゃんも、あまり流行り云々といった物より、少しばかり外し気味な物の方が、二人は似合うと俺は踏んでいる。

あの二人は整った造形をしているので、むしろ、普通であれば着るのを少しためらうような物の方が良い。

「だとしたら、こんな感じのも合うか」

手に取ったのは、少し淡いピンク色をしたニットだった。けれど、良く見れば白や薄い橙色も混じった斑模様になっている。ぱっと見ても、ただのピンクにしか見えないようでいて、そうじゃないというのが着る人を選びそうだが、これなら間違いなく、沙弥佳には着こなすことができそうな色合いだ。

この手の色をしたニットを、あまり着こなせる若い子はあまりいない。ましてや、まだ十五なのだ。それともう一枚。そのニットとは別に、線を強調するタイプのパンツを一枚だ。当然ながら、これなら先ほどのニットとも合う。

取りあえず沙弥佳にはこれで十分だ。次は綾子ちゃんのものだが、綾子ちゃんは沙弥佳と違って暖色より、寒色の方が似合うはずだ。

もう一度店内の服を手にしながら、俺は薄紫に、どこか水色のような柄をしたアウターを見つけた。ややシックな感じだが、十代の少女から二十代の大人へと向かい始めた今だからこそ、それを強調させるようなアイテムかもしれない。

他にも候補はあったが、これなら色合いも綾子ちゃんには合うだろうし、どこか愛嬌も感じさせるものなら、彼女には十分だ。

「えと、じゃぁこの二つと、このアウターを。それと、商店街の割引券って使えます？」

「はい、使えますよ。それではこの三点ですね。こちらへどうぞ」

店員に連れられて、レジまで服を持っていく。正直、手痛い出費だが、年末にはお年玉という十代までしかない特権がある。この際、ここは奮発しておくのもいい。それに今はクリスマスセールであり、

さらに青山からもらったチケットで普通に買うより、安く済むならまだマシなのだから。

「ありがとうございましたー」

そんな店員の声に見送られながら、二人分のクリスマス用袋に入った服を片手に、足早に来た道を戻る。携帯の時計で時間を見れば、すでに午後六時半を回ってしまっている。思ったよりも長く店にいたようだ。

まだまだカップルや、片手にプレゼントを持った人の往来が激しい中、俺はその流れに逆流するかのように足早に駅へと向かった。

そんな商店街の店から三十分もする頃、俺は地元の駅の改札を出て、家への道を歩いているところだった。ここから家までは、もういくばくも無い。後十分もあれば暖かい家の中だ。

すると、俺の背後から車のヘッドライトの光が射し、俺と周りの壁を照らす。それだけでなく、かなりの猛スピードのようだ。

風を切ってこちらに迫っているのが音で分かり、俺はつい後ろを振り返る。

ライトの光りが眩しく、良く分からないが、キュルキュルという音ともに、さらにもう一台がその後ろから追走している。

俺は咄嗟に壁側に身を寄せる。

その横を一台が一向にスピードを殺さずに走り抜け、直ぐさま後ろを走っていた車が過ぎ去る。

二台とも閑静な住宅街を走る車とは思えないスピードで、わずかに間をおいてすごい風が巻き上がった。

もう夜のため良く見えないが、二台とも黒っぽい感じの色をしているようだ。

「……なんだったんだ、今のは」

呆然としながら俺は呟いた。

さながら映画のワンシーンのようで、後ろの車が前の車に対して、追いかけて何かしようとしているみたいに見えた。

まさか、こんな場所でレースでもしていたというのか。街の公道をコースに見立て、レースしている輩がいると聞いたことがある。そういった類いだろうか。

だとしても、こんな住宅街でするはずはない。道幅があるような場所の方が連中には好都合だろうし、わざわざ事故に繋がりやすい場所でそんなことはやらない。

そんなことをいちいち気にする必要はないが、人のことなど考えずに、ああいうことをする連中は好きになれない。あんな連中は、いずれ自分が痛い目を見ればいいのだ。もちろん、それで自分が死ぬことになろうが、馬鹿な奴だと言われておしまいだろう。

俺はため息をついて、またゆっくりと歩き出した。

家にたどり着くと、車庫に車があるのが分かった。両親が帰ってきているのだ。

「ただいま」

家に入ると外とは比べられないほど温かく、一気に顔が火照ってしまう。

「あ、おかえりー」

俺の声に反応してか、沙弥佳がすぐに玄関までやってきた。相変わらず犬みたいなやつだ。

玄関に上がった俺に、いつものように沙弥佳が腕に抱き着いてくる。

「おう、出迎えご苦労。父さんたちも帰ってきてるみたいだな」

「うん、帰ってきてるよ。それと後少しでご飯だから」

「分かった。部屋に戻ったらすぐ行く」

部屋に戻り、再度マフラーとジャケットを脱ぎ、ハンガーにかけておく。二人へのプレゼントは食事の後に渡せるよう、下に持って行くとしよう。

ジャケットの中にある携帯をポケットから取り出すと、着信があったようで、それを知らせるライトが点滅していた。

「誰だ？」
携帯を開いて履歴を確認してみたが、見知らぬ番号で不審に思った俺は、そのままにしておいた。着信時間は十分ちょっと前だ。その時間の俺は、駅から家に向かう途中だった。
俺は携帯を閉じて、ベッドにそれを放り投げる。かけてきた人間が誰かは知らないが、こういうのはこっちからかけるような真似はしない方がいいだろう。変なのに引っ掛かりでもしたら面倒だし、もし知人であれば、また後からかけてくるはずだ。
部屋を出た時には、すでに携帯のことなど頭から消え、袋を持ったまま下へと下りていったのだった。

「おかえりなさい。どこ行ってたの？」
「ただいま。そっちこそ、おかえり。まぁ、大した用事じゃぁないよ」
ダイニングキッチンに行くと、母が出迎えた。食事の用意をしている最中だったようで、食器を取り出しているところだった。
「九鬼さん、おかえりなさい」
「ああ、ただいま」
そのまま台所の流しで手を洗う。洗剤で手を洗ってしまうと、肌が荒れるらしいが、そういうのはあまり気にしない。
「もうお兄ちゃん。手洗うなら、ちゃんと洗面所に行きなよ」
それを見兼ねた沙弥佳が、横でお小言を言っているが無視した。俺の態度に呆れてか、ため息をついて、さっさと母の手伝いに離れていく。
「何も、洗剤で洗わなくってもいいんじゃないですか？」
綾子ちゃんが忍び笑いをしながら、食器に出来上がった料理を盛りつけている。盛りつけているのはサラダのようだが、色とりどりで、見るものの食欲をそそらせる。
「いつも思うが、君は盛りつけるのが上手いな」「そうですか？いつもしているうちに慣れちゃっただけだと思います」

そうか。綾子ちゃんは、最近こそちょくちょくうちに来ているからあまり考えてなかったが、元々、ほとんど一人暮らしに近い環境で育ったと言っても過言ではないのだ。

「あ、九鬼さん。もう盛りつけるだけなので、席についていて良いですよ。それと、これをお願いします」

「ああ」

つい今しがた盛りつけられたサラダを持って、テーブルまで運ぶ。盛られた野菜はみずみずしく、これに沙弥佳が作った特製のドレッシングをかければ、きっと美味いことだろう。

「父さんたち、今日どこ行ってたんだ？」

「ん。まぁ、色々とな」

父さんの横の席につきながら聞いてみると、そんな答えが返ってきた。色々と言われても、なんのことだかさっぱりだ。

「あんた、子供が大人の事情を詮索するものじゃないわよ？」

「大人の事情？」

母がふふんと鼻を鳴らして、料理をテーブルに並べていく。

「まぁ、そういうことだ」

父も珍しく、何かはぐらかすように苦笑しながら話を切り上げた。なんなんだ、一体……子供にできないような話なのか？　ふと脳裏にその事情というのに、あまり考えたくないことが浮かんでしまった。

いやいや、だとしたら、二人で出かける時は毎回ということになる。しかし、今日はなぜか母だけが呼び出され、母は当然のように出ていったのはどういうことか。それを暗示しているのではないか……。

俺はため息をついた。よそう、こんな考えを巡らせるのは。そうだとしても、それをしてはいけないというわけでもないのだ。

ただ一つ。もし本当にそうだとしたら、この歳で今更下に弟なり妹なりができるのだけは勘弁してもらいたい、ということだけだ。

「なに、今度は黙り込んじゃって」

「いや、なんでもない」
肩をすくめて、首を振った。母はそんな俺に、変な子ねなんて言いながらテーブルに、今焼き上がったばかりのローストチキンの皿を置いて、席についた。
「美味そうだな」
「でしょ？　今日のはかなり自信作なんだよー。隠し味は、あやちゃんが付けたんだけどね」
「本当。美味しそうね、これ。綾子ちゃんも沙弥佳も、将来は良いお嫁さんになれるわよ」
「ふふふ、そうですか？」
「もちろんよ。主婦歴十八年の私が言うんだから、間違いないわ。男の子っていうのは、こういうのをそつなく熟しちゃうような女の子には、なんだかんだで弱いからねぇ」
そう言って母は父を見る。父は必ずしもそれだけではないぞなんて言ってるが、どうも図星のようだった。男というのは若いうちはそうでなくとも、ある程度歳をとれば、そういった安定というのを求めるものなのかもしれない。
「ふふ。それでは、頂きましょうか」
「いただきます」
最後に、沙弥佳と綾子ちゃんの二人が席についたのを見計らい、父がシャンパンを開けた。それをそれぞれのグラスに注いで、俺達は聖夜の晩餐に舌を唸らせていった。

沙弥佳と綾子ちゃん、二人の作った料理を腹一杯に満たし、俺をおおいに満足した。二人の料理は一言で言えば、うまかった。
うまかったと言うのは、味もさることながら、見た目や美味くするための、細やかな技術なんかも含んだ意味である。
「おにーいちゃん」

「なんだ？」
椅子に座ったままゆっくりしていると、沙弥佳が笑顔で迫ってきた。
「はい、これ」
「ん、おお。いつも悪いな」
そう言えば、毎年食事の後には必ずプレゼントを渡すのが、こいつの習慣だった。しかしいつもと違い、今年のは随分と小ぶりだ。おまけに縦に長く、何か箱が包まれているようだった。
「開けてみていいか？」
「どうぞ」
紙をとっぱらうと、案の定、中から黒っぽい蓋をした箱があらわれた。その蓋を開けてみると、中には腕時計が入っていたのだ。
「こいつは……」
「えへへ。今年はね、私とあやちゃんの二人で一つなんだけど……その代わり、奮発しちゃった」
「以前、時計をしてみるのも良いとおっしゃってましたよね？　それで二人で相談して、今回はこういう形にしたんですが……」
「そうか……いや、こいつは予想を超えた代物で、嬉しいぜ」
二人の説明を聞きながら、俺は早速その腕時計をつけてみることにした。
確かにストーカー野郎をおびき出すというのを目的に、綾子ちゃんと出かけていた時にそんな話をした記憶があった。まさか、何気なく言ったことを覚えていてくれるとは、思ってもいなくて驚いた。
「なんか……すごく大人になったような気分だな」
というのも、どちらかと言えば、高校生が身につけるような物ではなく、もう少し年上の男がつけているようなデザインなのだ。
身につけてみると、これが思ったよりも恥ずかしいような、照れ臭いような気になる。しかしそうは思っても、やはり嬉しさが先立つのは当然で、左手につけた時計の盤面を、意味もなく何度も見てしまった。

「気に入った？」
俺の様子を見た沙弥佳が尋ねてくる。もちろん、気に入ったに決まっている。
「ああ……最高だよ。ありがとうな、二人とも」
こういうのには疎いので良くは分からないが、きっとそれなりに、値段のいくものだったのではないだろうか。
いくら今の時期、安く買えるとは言っても、中学生の小遣いでは相当の出費になったろう。たとえそれが、二人で出しあったものだとしてもだ。
二人の気持ちに感謝しながら俺は、さっき買ってきたばかりの服を取り出した。こんな良い物をくれた二人に何もないというのは、さすがに申し訳ない。きちっと買いに行って正解だった。
「これ、俺からも二人にプレゼントだ」
「本当に？　お兄ちゃん、初めてだよね？　プレゼントくれるの」
そんな風に言われると、何も言い返せないが事実ではある。
「まぁ、毎年もらってるのに、何もないってのはな」
「開けてみてもいいですか？」
「ああ」
二人は早速、袋から服を取り出した。気に入ってもらえればいいんだがな。
「わあ。可愛い」
「本当。私のもすごく可愛いよ」
取り出した服の肩の部分を広げ、それぞれの肩に合わせている。反応は上々で、贈った俺としても嬉しくなってしまう。
「もしかして、さっき出かけたのって」
「まぁ、そういうことだ」
照れ隠しに鼻をかきながら、そっぽを向いた。やはり、こういうのに慣れてないせいか、気恥ずかしい。
「九鬼さん。本当にありがとう」
「お兄ちゃん、ありがとう」

嬉しそうに礼を言われて、俺はただ肩をすくめてみせることしかできなかった。まぁいい。二人は、明日にでも早速それを着てみようなんて言っているので、俺は満足だし、しっかりと吟味した甲斐もあるものだ。

俺も二人がくれた腕時計を、無意識に触れながら微笑んでいた。

第43章

寒い……。

この日、俺は寒さに起こされた。就寝のときには部屋の暖房は止めているので、この時期は朝目覚めると、とても寒い。

いつも枕元に置いてある時計を見れば、まだ午前六時を回ったばかりだった。この時間は、まだ外は真っ暗だ。

凍てついている部屋の中に息を吐き出すと、うっすらと白くなっているような気がする。季節はすでに冬になっているわけだが、今日はどうも本格的な寒さになっているようだ。まだ冬は始まったばかりだが今日は、この冬一番の寒さであるのは間違いないだろう。

それでも外では早くも鳥が鳴き始めているのが聞こえ、おまえも早く起きろといった具合に、催促しているようにも聞こえる。

いつもなら、こんなに寒いと再び寝てしまいたくなるが今朝は何を思ったか、布団からのそのそと這い出て、カーテンを引いた。寒さのためか、遠くに街のビルの赤いライトがはっきりと見えている。

少しのあいだそうやって、まだ眠りについて人の気配を感じさせない住宅の棟を、瞼の重い目で見ていたが寒さに負けて、再び布団の中にもぐり込んだ。ついさっきまで入っていて残った、自分の体温の温かさに気持ち良さを感じながら、沙弥佳が起こしにくるのを待つことにしたのだ。

布団を自分の体に巻き付け、ただ何も考えることなくぼんやりとしていると、カチャリという小さな音を立てて、部屋のドアが開いた。こんな時間に部屋に訪れるのは、沙弥佳以外にいない。

「……」

沙弥佳は足音はさることながら、息をも殺しているのか、ゆっくりとこっちに移動してきていた。

「あーあ、こんなに包(くる)まっちゃって」

俺を起こさないように小さな声で、囁くように言った。
「おにーちゃーん」
一拍置いて、俺が起きていないのを確かめると、ギシリとスプリングを軋ませた音とともに、俺の横にきた。多分ベッドに手を置いて、上半身から俺を覗きこむようにしているのだろう。なんとなくだが、顔の上に沙弥佳がいるような気配を感じる。それと沙弥佳が入ってくるまでなかった、女の子特有の匂いがすぐそこに感じられたからだった。
「ん……」
かすかに沙弥佳の喉を鳴らす声が聞こえた時、俺は目を開けた。
「……よぅ」
「え！　あ、え、その」
目の前にいる沙弥佳は暗がりの中で、俺の声が突然したのに驚いたようで、身を大きく震わせた。薄ぐらい中でも、それだけは良く分かった。
あたふたとし始めて、何か言い訳をしようとしているのがその影の動きでわかる。俺が起きていることは予想外だったのか、まともに声にすらなっていない。
「どうした、こんな朝早く」
気付いていたとはいえ、起きていたと言うのはなんとなく可哀相なので、この際伏せておこう。
「え、えっと、その、あはは……な、なんか寝ぼけてたみたい。っていうよりもお兄ちゃん、もしかして起きてたの？」
自分でも心苦しい言い訳と思ったのか、それをごまかすように聞いてきた。内心で苦笑しながら俺は、包まっていた布団を開けてやった。
「仕方のないやつだな。また一緒に寝たいって言いたいんだろ。……ほら早く来いよ、こっちも寒い」
「い、いやいいよ、き、気にしなくて」
俺が自分から入れてやろうとすると、いつもこいつは遠慮する。

不思議なやつだ。
「……本当にいいのか？」
やや寝ぼけ気味に言うと、沙弥佳はどうしようか迷ったみたいだったが結局は、布団にもぐり込んできたのだった。
「全く、おまえってやつはいつまで経っても子供な」
「うう、私、子供じゃないもん」
「子供じゃないんだったら、ちゃんと自分の部屋で寝るもんだ」
そう言いつつも、こうして甘えさせている俺も俺なんだろうなとぼんやり思う。こうやってこいつを甘えさせてやれるのも、今だけだろう。こいつも来年には高校生になり、多くの奴から告白なりなんなりを受けることになるだろうし、そうなると必然的に付き合うことになるような男も出てくるだろう。こんな風にしてやれるのも、その時がくるまでなのだ。
そう思えば今くらいは、わがままを聞いてやろうという気になった。沙弥佳はそんな考えに気付いたかのように、俺の身体に腕を回して、ぎゅっと抱きしめてくる。
「……ね、お兄ちゃん」
「んー……？」
「あの時のことなんだけど……ほんとにごめんね……」
「あの時？」
「うん」
唐突にあの時と言われても、なんのことを指しているのか分からない。
何のことか分からない俺に、沙弥佳は布団の中で、俺のパジャマの上着の中に手を差し入れてきた。その手は何かを探るような手つきで、ゆっくりと今井に刺された腹の傷あたりに触れた。その部分を探り当てると、何度も傷跡を優しくさすってくる。
「……これのことだよ？」
「ああ、そのことか」
今まで顔を首あたりに当て、うつむくようにしていた沙弥佳は頭

をあげ、俺を見つめてきているように感じた。
「これ、私のせいだもんね……。あのとき私が皆から離れなければ、お兄ちゃん、怪我なんてしなかったかもしれないんだもんね」
「いいさ。別に気にもしてないし、もう終わったことだ。第一、あの時は自分がどうなるかなんて、あんまり考えてなかったしな」
「うん……」
「でもなんで今頃そんなこと言うんだ？」
「だって、ずっと言えなかったんだもん……。言いたくてもお兄ちゃん、入院とかリハビリとかでそれどころじゃなかったでしょ。私もなんていうのかな、タイミングが悪いっていうか」
「……そうか」
俺も沙弥佳の肩から後頭部の方へ、腕を回した。丹念に手入れしているのであろうその髪は、絹のようとでも表現できるような、なめらかな手触りだ。
「俺こそ、すまなかったな……」
「え……？」
「奴……あのストーカーを追ってる間、おまえにはすごく心配かけてたんだろ？　その時は心配かけたくなくてやってた行動が、実はおまえと綾子ちゃんを心配させてたなんて思ってもなかったんだ。それにな、途中から薄々ああなっちまうんじゃぁないかって言うのはあったんだよ。それでも突っ込んじまった俺に非があるさ。たまたまそこに、おまえという人間がいたに過ぎないって俺は思ってる。だから、別に沙弥佳が謝るようなことじゃぁないんだ」
「お兄ちゃん……」
傷跡をなでるように触っていた沙弥佳の手が、背中の方に回され、パジャマごしではなく、直に背中を抱きしめられる。背中に触れている手が、とても暖かい。そして妹とはいえ、女の子に直に触れられると、なぜだかとても心地良く感じる。
「それと……」
そう口にしながら言い淀む。今なら俺が気になっていたことも聞

けるような気がしたが、聞かない方がいいような気もやはりしていたからだ。なんであの時、おまえはあんなに取り乱したのか。それを聞きたくてしょうがなかった。

「それと？」

「……ああいや、やっぱなんでもない」

「なによそれ。そういうのって、聞かれた方はすごく気になるんだから」

聞いてみてもいいだろうか。あんな態度をとった沙弥佳は、今まで見たことがなかったのだ。俺は少しだけ考えたが、意を決してゆっくりと口にする。「あの喫茶店のこと、なんだけど」

「喫茶店？」

「ああ。俺とおまえと綾子ちゃん、それに斑鳩の四人で出かけて、俺が奴に刺されちまった日のことだよ。

あの日、なんでおまえが皆の前であんな態度をとったのか……ずっと気になっててな」

その時のことを思い出したのか沙弥佳は、今まで俺に向けていたであろう目を泳がせ、何か考えているようだった。明らかに動揺しているのが分かる。まさか、そのことを聞かれるとは思いもよらなかったんだろう。

「えっと……あ、あの時のこと、だよね」

「そうだ。ずっと心に引っ掛かってたんだ。……ああいや、もし言いたくないなら無理に言わなくてもいい。ただ、なんとなく気になってただけだしな」

「う、うん……」

沙弥佳はどうしようといった困惑した雰囲気をさせながら、何か言おうとしてはやめるという動作を何度か繰り返していた。しかし結局その口を閉ざし、俺の胸に顔をうずめた。

「……あのね、言っても怒らない？」

「ん。ああ、分かった。怒らない」

「本当に本当？」

「本当に本当だ」
胸にその顔をうずめたまま、沙弥佳は何度もそう確認したあと、少しあいだ、間があった。
「……あのね、嫌だったの」
「嫌？」
「うん……その、お兄ちゃんがね、誰か別の女の子にすごく優しくしてるのが、すごく嫌だったの」
「他の女の子って……綾子ちゃんにか」
沙弥佳はそれには答えず、ただ背中に回していた手に、少しだけ力を加えた。
「……そうか」
「そんなのダメだって分かってるつもりだったけど、なんかね、あの時はそれが抑えられなくて……」
普通だったら何言ってるんだですんだのかもしれないが、俺は沙弥佳に対して、不思議と驚きも怒りも呆れも、なんの感情も沸くことはなかった。ただ、触れている髪を軽くすいてやること、それだけだった。
「……囮作戦とか言って、お兄ちゃんと綾子ちゃんが二人になることになった時ね、自分でも驚くくらい嫌な気持ちになったの……自分の中にこんな嫌な感情があったのって。でもそんなの嫌だったし、嘘だって思いたかったけど……お兄ちゃん達が帰ってきて、なんか今までと違う雰囲気になってて……私、もうどうしていいか分からなくなっちゃったの……」
沙弥佳の話す声が、次第に弱々しく震え始めていた。それで謎は解けた。あの数日あいだ、登校時にも俺の腕にしがみつきながらもあんな態度だったのは、相反した感情がそのまま表現されていたということだろう。
「あの時はね、お兄ちゃんに綾子ちゃん紹介しなきゃ良かったなって……本気で思ったんだよ？」
「そうだったのか……。でも、沙弥佳はその時でも綾子ちゃんには

普通に接してたろ？」
「ううん。本当はね、お兄ちゃんにそれ以上、馴れ馴れしくしないでって言いたくなったこともあるよ。だけど、あやちゃん見てたらやっぱりそんなの言っちゃ駄目だって思ったの。だから、せめて表面だけでも普通にした方がいいのかなって思ったから……。
でもあやちゃん、多分……ううん。きっと気付いてたと思う。私があやちゃんに対して、どう思ってたか……きっと。あやちゃん、すごく勘が良いから……」
どうしてとは聞かない。沙弥佳は生粋のブラコンなのだから、そんな風にヤキモチを妬いていたとしても、決して不思議はない。
ただ、そこまで想われていたのは少し意外だった。ましてや綾子ちゃんに対しても、そこまで思っていたなんてのは。
「もしかして、綾子ちゃんがうちに来た時からずっとなのか」
額を胸に当てながら、二度三度首を振った。
「その時はまさか、自分がそんなこと思うようになるなんて、思いもしなかったんだよ。いつくらいからは分からないんだけど、あやちゃんがうちに来てからなのは間違いない、かな……。だんだんと自分の中で、もやもやとしたものが溜まっていって……。
だから、お兄ちゃんがあやちゃんに髪留めをあげた時、それが一気に爆発しちゃった感じだったんだと思う」
沙弥佳のいっているのは、四人で入った喫茶店での出来事だ。話を聞いたうえで考えれば、沙弥佳の行動にも合点がいくもので、その結果沙弥佳は、あんな行動に出てしまったんだろう。
「……だったら、俺の責任かもしれないな」
沙弥佳のとった行動の原因は、あの時先に綾子ちゃんに渡したことだった。と同時に俺があの日買ったまま、渡しそこねていたものがあったのを思い出した。
「ううん。一人で勝手に嫉妬してた私が馬鹿なだけだよ……だって私はお兄ちゃんの妹で……」
「なあ……」

「え、な、なに？」
「……俺はあの数日間、沙弥佳が不機嫌だと知って、それをどうすればいいのか悩んでたんだ」
「うん……」
「でだ、おまえに何かプレゼントしてみたら良いんじゃないかって、そう思ったんだ。だけど……ほら、家族に、というよりも、人にプレゼントなんかしたことないから、どうやって渡せば良いか分からなかったんだ。それこそ、タイミングってのがな。人前で家族に物贈るなんて、こっ恥ずかしかったしな。
で、練習の意味も込めて、綾子ちゃんに先に渡そうと思ったわけさ」
「うん……」
「まぁ、何て言うのか……ちょいと良いか」
そう言って俺は布団から出て、机の中にしまったはずのそれを取り出した。沙弥佳は上半身だけを起こし、両手をベッドについてスプリングを軋ませる。
「ほらこれだ。……本当だったらあの日、あの後にでもおまえにも渡すはずだったんだけど、随分遅くなっちまったな」
「お兄ちゃん……」
「すまなかった」
謝りながら、あの日見つけた指輪を渡した。もう一月半以上も前のものだが、沙弥佳はそれを受け取って包みを開ける。
「これ……」
包みの中から現れた箱を開け、中にあった指輪を見てその目が大きく開かれたのがわかった。気付けば、沙弥佳のそんな表情が分かるほど、だんだんと空が明るんできていた。
「人生初の指輪がまさか、妹に贈ることになるなんて思いもしなかったぜ、全く」
肩で笑いながらベッドに腰かける。
「どれ、貸してみ」

俺は沙弥佳から箱をとって、中に収まっている指輪を外した。
「えっと……こういう時はどの指にはめるんだっけか」
「特別な意味がないならどの指でもいいけど、そうじゃない時は左手の薬指だよ」
沙弥佳が左手を差し出しながら言う。俺はその薬指に、指輪をはめてやった。相手は妹だというのに、なんだか変な気分だ。
「ありがとう、お兄ちゃん。……これ、一生大事にするね」
「一生だなんて大袈裟だな。そのうちおまえにも大事なやつができたら、そうでもなくなるかもしれないぜ？」
くつくつと笑いながら茶化す。本当はそんな風に言ってもらえるなんて思わず、嬉しさの照れ隠しに過ぎない。
寒さに起こされた時にはまだ夜だった外も、東の空から太陽が一日の始まりを告げるべく昇ってきている。その陽が部屋の中に入ってきていて、俺達を照らしだしていた。
沙弥佳は嬉しそうに目を細めながら、その指輪のはまった左手を何度もかざしてみせた。
その頬に、かすかな赤みを帯びていることに俺は気付かずに、窓から見える一気に明るんでいっている空を眺めながら、沙弥佳の長い髪に触れていた。

昨晩から急激に気温が下がったこともあり、クリスマス本番である今日は、昨日までの朝に比べてさらに寒い。しかも、まだ誰も起きていない朝というのは、さらに寒く感じるのだからなおさらだろう。
俺は一階に下り、床暖房のスイッチをいれてソファーに座った。父も、今日は日曜ということもあってまだ寝ているため、母も揃って寝ているのだろう。
休日にまで、朝から飯を作ってくれなんて要求するほど子供でも

ないので、寝かせておこう。俺はすでに着替えはすませ、顔も洗って眠気も飛んでいったところだ。
「お兄ちゃん、コーヒー飲む？」
「ああ、いれてくれ」
俺と一緒になって下りてきている沙弥佳も、すでに着替え終えている。もちろん、昨日あげたニットをインナーとして着ていた。
「それ、早速着てみたんだな」
やや派手な色使いのニットを指差して言う。その胸には細いネックレスが吊り下げられている。
「うん。着てみちゃった。どうかな、ここまでピンクなのは初めて着るけど、似合ってる？」
「ああ。やっぱ、おまえなら似合ってると思ったが、予想通りだったな」
「ありがと。お兄ちゃん、将来はファッションコーディネーターなんか向いてるかもよ」
冗談めかしてそんなことを言った沙弥佳に、俺は苦笑しながらかぶりを振った。そんな他愛もない話をしているうちに、綾子ちゃんが下りてきた。
「お二人とも、おはようございます」
「おはよう」
「おはよう、あやちゃん。あやちゃんもコーヒー飲むよね？」
「うん、ありがとうさやちゃん。あ、それ着たんだ。似合ってるよ」
「えへへ。ありがと、あやちゃん」
綾子ちゃんはそのニットの品評をしながら、帰る時はアウターを着て帰るなんて話を沙弥佳としている。過去のこととはいえ沙弥佳も沙弥佳で、綾子ちゃんに鬱屈とした感情を抱いたとはとても思えないほど、いつも通りだった。
「九鬼さん、どうぞ」
「すまん、ありがとう」
カップに注がれたコーヒーを綾子ちゃんに手渡され、そいつを一

口飲んだ。朝、こうしてコーヒーを飲むと、なぜだか気分が落ち着くのは不思議だ。中に含まれている成分のおかげだと言うのは分かってはいるのだが。

そのままリビングのテーブルに無造作に置かれたテレビのリモコンに手をのばし、スイッチを押した。

テレビはちょうど良くニュースをやっていて、俺はコーヒーを飲みながら画面を眺めていた。

『次のニュースです。昨夜午後七時半頃、東京都N市で二台の車が暴走行為を働き、うち一台が道を外して転落するという事故がありました』

「あれ、ここって確かお兄ちゃんの学校近くらへんじゃない？」

「ああ。どうも高台の道から落ちたらしい」

画面に映し出されている場所は、学校のほど近い国道だ。元々あった道や鉄道の上に道路がしかれているため、道が橋のようになって続いているのだ。しかし画面には、その脇のガードレールを突き破り、一台の黒い車が下の道に落ちていた。どう考えても、時速八十キロや九十キロなんかでは、ガードレールを突き破っていくことはない。通常ガードレールというのは、普通車であれば時速八十キロくらいまでなら突き破っていかないように設計、設置されていると聞いたことがある。

つまりこの車は、百キロでも生易しいようなスピードを出していたとしても、なんら不思議はないスピードで走行していたということになる。

「あれ、この車……」

転落した車に、どことなくだか心当たりがあった。昨日の夜、俺が商店街から帰ってくる際に、家の近くを猛スピードで通り過ぎた車に似ているような気がしたのだ。

まるで追い、追われるように走り去って行った二台の黒っぽい車。そのイメージと、画面に映っている事故の状況が結びつく。

「まさか、な」

俺は小さくかぶりを振って、思い浮かべたことを否定した。仮にそうだとしても、そんなのは自業自得だ。何が楽しくてあんなことをしていたのかは知らないが、こうなたっておかしくないのは運転していた奴が一番良く分かっていたはずなのだ。そいつに同情なんてできるはずがない。

めちゃめちゃになってしまった車体は、中の人間も助からなかっただろうと、容易に想像できる。

『また、車体には銃弾によるものみられる傷があり、警察は暴力団同士の抗争によるものである可能性があると見て――』

キャスターは淡々とニュースを読み上げているが、その近場に住む人間にしてみたら、とんでもない話だ。俺個人の考えとしては、周りの人間にさえ被害が及ばなければヤクザ同士、好きにやってくれですむ話だ。

しかし、そのために周りの関係のない人間に被害が及ぶかもしれないとなると、とたんに話は違ってくる。連中にだって、罪を償わせる必要はあるはずなのだ。

画面は変わって、天気予報のものになった。

『次は全国の天気です』

天気予報士が今日、雪が降るほどは寒くならないと伝えている。

「あーあ、今年も雪降らないのかぁ」

予報を聞いていた沙弥佳がぼやく。綾子ちゃんも、少し残念そうに表情を崩している。

「なんだ、雪が降ってほしいのか？」

「そりゃそうだよ。ホワイトクリスマスなんて、すごくロマンチックじゃない」

「ま、確かにそうだが」

適当に肯定しておいたが実際のところは、日本でホワイトクリスマスになるのは、せいぜい東北より上の地域くらいなものだ。その東北地方にしたって、必ずしも毎年雪が降って積もるというわけでもない。事実上、毎年のようにホワイトクリスマスを体験できる都

市は、北海道の都市くらいだ。その土地の人々にとっては、また嫌な時期がきたと愚痴りたくなるかもしれないが。

実はクリスマスの前後数日間は、気候の変化をもたらす季節風の問題もあって、一時的にだが少しだけ寒気が和らぐようになっているらしい。だからほとんど雪が積もることがない。せいぜい、ちらつく程度だ。

「あら、あんた達もう起きてたの？」

テレビを眺めていた俺の後ろから、母の遥子の声がした。母が起きたということは、そのうち父も起きてくることだろう。

「あ、お母さん。おはよ」

「おはようございます」

「おはよう。朝ご飯の準備するわね」

「いいよ。私もう準備始めてるから、作っちゃうよ。トーストで良いよね？」

沙弥佳はコンロの前に立って、卵を割ろうとしていた。今日の朝食は珍しく、和食でないようだ。

「たまにはそれもいいわね。……あら、なに沙弥佳。あなた、指輪なんてしてるの？」

「あ、うん……」

母の言葉に綾子ちゃんも気付いたようで、俺に視線をやった。その指輪に見覚えがあるからだろう。

「なぁに、お兄ちゃんからもらったの？　それ」

「うん。昨日ね」

沙弥佳も満面の笑みで、頷いている。本当はついさっきだが、まぁいいだろう。昨日まではなかったものなのだから、同じようなものだ。

「しかも左の薬指……恋人ごっこも今のうちだけか」

小声で呟くように言う母の心中に、何を思ったのかは俺には分からない。けれど、それに対して沙弥佳は、どこか困惑したような顔を、少しの間だけ見せたのだった。

目まぐるしく季節のイベントが移り変わっていき、すでにクリスマスから一週間が経って正月になっていた。

「あけましておめでとうございます」

「ああ、あけましておめでとう」

「あけましておめでとー」

元旦の昼過ぎに、綾子ちゃんがうちを訪ねてきたのだ。年末ということもあり、綾子ちゃんの親父さんが久しぶりに家に帰ってきたというので、昨日の大晦日とその前日は自分の家で過ごすということになったためだ。その親父さんは、明後日にも早速ヨーロッパで仕事があるため、早々に出かけていったという。

娘があんな目にあったというのに、よくもあんなに淡々としていられるものだと怒りを通り過ぎ、もはや呆れてしまった。

「九鬼さん、この振り袖どうですか？」

「良く似合ってるじゃぁないか。いつもと違った雰囲気があって良いと思う」

「むー……私も今年は振り袖にすれば良かったかな」

振り袖の綾子ちゃんに対し、沙弥佳は普段通りに洋服だった。こいつは正月でも毎年洋服で、俺の記憶が正しければ最後に和服なんてものを着たのは、七五三の時が最後だったはずだ。

「あら綾子ちゃん、あけましておめでとう」

「あけましておめでとうございます。おじ様、おば様」

「あけましておめでとう」

届いた年賀状を読んでいた父も、綾子ちゃんに挨拶して軽く雑談を交わす。この様はもはや、綾子ちゃんがうちの新しい家族になっているようにも思える。いや、そう思ったのは別に今が初めてとい

うわけでもなく、常々そう思ってしまうこともあるほどに彼女はうちに馴染んでいるということだ。
事実、綾子ちゃん自身もだだっ広い家にいるよりも、うちにいる方が落ち着くと言うし、母の遥子も、いっそのことうちの養子になる?だなどと言う始末だ。
「あやちゃん。もう初詣行った? 私達今から行くんだけど、行ってないなら一緒に行こうよ」
「うん、そうだね。お邪魔じゃないなら一緒に行くよ」
そんなわけで俺達は、家族総出で初詣に行くことになったのだった。

「すごい人だな」
車で二十分とかからない場所にある神社に着いた俺達は、人の流れに身を任せながら境内に向かって歩いていた。
「本当だね。でも、初詣でこんなに人の多いところに来たの初めてだから、ちょっと楽しいかも」
「私も、こんなに人が多い日に来るのは初めてです」
「そうなのか?」
俺だってこんな人込みの中、初詣に行くのは初めてなので、必然的に沙弥佳もそうなのは分かるが、綾子ちゃんも体験したことがないというのには、少し意外だった。それが偏見であることは否めないが。
「ええ。父の仕事の影響もあって、初詣に行くのは毎年、二日か三日だったので……。だから元旦に来るのは初めてなので、実を言うと、私も少し楽しみだったんですよ」
綾子ちゃんの話を聞きながら、境内に入る。ちなみに両親はといえば、子供たちのことなどお構いなしに、完全に自分達の世界に入ってしまっている。

「あ、破魔矢ある。ついでにおみくじも引こうよ」
「おいおい、まず先にお参りが先だろ。一応、それがメインなんだしな」
「そうだったっけ。じゃあ後で引こうね、お兄ちゃんも」
「分かった分かった。後でな」
沙弥佳の頭に手をやりながら、相槌をうった。綾子ちゃんも同じだったようで、いつものように忍び笑いをしている。
「あんた達、先に参って来なさいよ。お母さんたち、ここで待ってるから」
二人の世界に入っていた両親が、俺達に振り返って先に行くよう促してきた。その間にまだ二人でいたいと思ってるのだろう。
「分かった。別にここで待ってなくてもいいぞ。携帯もあるし、好きに見てきたら？」
「あら、いいの？」
明け透けもなく母は喜ぶように言う。やれやれ。この二人は夫婦だが、未だ恋人気分全開のようだ。まぁ、別にそれは今に始まったことではないが。
「いいさ。どうぞごゆっくり。俺達は俺達で適当にやるからさ」
「そうそう。私たちは私たちで適当にやるよー」
「子供たちもああ言ってることだし、私たちもそうしようか、遥子」
「そうね。じゃあ、とりあえず一時間後にここで」
そう言うだけ言うと、二人はさっさと人込みの中に溶け込んでいった。
「あんなのが女の子には理想なのか」
意地悪げに綾子ちゃんに言った。以前、あの親達が理想の夫婦像だと言っていたからだ。綾子ちゃんはただ、畏まるように笑うだけでなにもいうことはなかった。
「ま、とりあえず、先にすることしてからにしよう。あの二人に付き合ってたら、日が暮れちまいそうだ」
二人を促して本殿の方へ進むが、さすがに人が多くて思うように

進めない。この人込みでは、気長に進むしかない。
「ところで、綾子ちゃんは高校はどこに行くつもりなんだ？」
「はい。実は、私もさやちゃんと同じ金城にしようと思ってます」
「そうなのか？　君ならもっと上行けそうな気がするけどな」
自分で言うのもなんだが、前にもどこかで言ったような台詞だ。
綾子ちゃんははにかむような笑いをしながら、そうでもないですよと漏らす。
「私はさやちゃんほど、成績が良いわけじゃありませんから。頑張らないと厳しいと思います」
意外だった。沙弥佳の成績が良いのは知っていたが、綾子ちゃんは頑張らないといけないというのは少し驚いた。
「九鬼さん、今信じられないって思ってるでしょう？」
「え？　あ、いや、そうでもないが……」
「ふふ、そう言っても顔に出てますよ」
指摘されてしまい、つい鼻の頭をかきながら目を泳がせてしまった。
「こんなこと言うのもなんですが、私、試験前なんかには、さやちゃんから良く勉強見てもらったりしてるんです。
だから、さやちゃんが同じ金城に行くって知った時、嬉しくもあったけど、驚いたりもしましたよ」
「だろうな」
綾子ちゃんの言う通りだった。最初、妹の口から金城にくるなんて聞いた時は、もっと上を目指せなんて言ったりもしたのだ。
「それに実を言うと、さやちゃんから九鬼さんのことも聞いてたので、ちょっと親近感というか、憧れみたいなものもあったなぁ」
「憧れって……俺にか？」
綾子ちゃんは無言で俺の問いかけに頷いた。
「だって、あんなに可愛い制服着てる学校に、憧れない女の子なんていないと思いますよ？　だから九鬼さんが男の子であっても、金城に通ってるのがすごく羨ましかったんだと思います」

「なるほど」
ただ正直な話、俺は金城ではなく、別の高校に通いたかったとは言わない方が良いのだろうか。
俺の場合は、金城なんてここらじゃ有名だなんて知りもしなかったし、中学の時の担任に、俺には厳しいかもしれない高校より、おまえならちょっと頑張れば入れそうな金城にしたらどうだと言われたから、そうしたに過ぎない。事実、本当に行きたかった方は、倍率も相当なものだったと記憶している。
「何にしても、もしかしたら今年の春からは、君と沙弥佳が後輩になるということか」
「まだ分かりませんけど、もしかしたら」
クスリと笑った綾子ちゃんに、俺ははにかむように笑いながら、肩をすくめるだけだった。

ようやく一年最初の参拝をすませた俺達は、人込みから離れ、甘酒を振る舞っているテントのあるところへ行った。
「ちょっ、お兄ちゃん。お酒なんて駄目だよ」
「無礼講無礼講。すみません、三つお願いします」
「はいよ」
威勢の良い声をあげたおじさんから、紙コップに入った甘酒を三つ受け取った。
「わ、私たちも飲むの？」
「ああ、今日くらいいいだろ？　ほら、綾子ちゃんも」
「あ、はい、いただきます」「あやちゃんまで」
「ごめんね、さやちゃん」
ペロリと舌を出して謝る綾子ちゃんだが、その顔は明らかに裏腹なものだった。
「おまえは変なところで堅いからな。俺は甘酒なんて、小学生の頃から飲んでるぞ」
「ええ？　そんなに前から？」

「そうだぞ。知らなかったのか？」
テントから離れ、驚いている沙弥佳にニヤリとしながら、一気に甘酒を半分ほど飲んだ。こうすると、なんとなくだが大人になったような気になるのが不思議だ。
綾子ちゃんも一口二口と、少しずつ口に含みながら飲んでいる。
「ほら、おまえも飲んでみろって。結構いけるぞ」
「むー……お兄ちゃんもあやちゃんも意地悪だ」
甘酒と俺達をにらめっこしていた沙弥佳も、しかめっつらしながらも一口飲んだのだった。綾子ちゃんの、おいしいよという後押しもあったからかもしれない。
「んー……んー？」
想像していたよりも大したものではないと気付いたのか、しかめっつらしていた顔も和らいでいった。
「……やっぱりお酒だよ、これ」
「そりゃな。甘“酒”だしな」
そう言いつつ、沙弥佳はまた一口と甘酒を口に含む。
「お酒で、良く分からないけど……悪くない、かも」
「だろう？　結構美味いぜ、これは」
「ふーん」
相槌を打ちながら、ちびちびと飲んでいる様子を見れば、思ってる以上に気に入ったのかもしれない。
「ふう……もう一杯もらってくるかな」
「ええ？　お兄ちゃん、もう飲んだの？」
「ああ。悪いが、少しここにいてくれ」
二人を残し、甘酒を振る舞っている場所に戻ろうとした、その時だった。
「あいつは……」
人込みの向こうに、見慣れた横顔を見つけたのだ。先月のいつだったかに、人を呼んでおきながら、結局は音信不通になって行方をくらましていた、あの斑鳩孝晶だ。

「あいつ……何してるんだ？」

およそ三週間ぶりに見る顔だが、その顔はいつになく険しい。というよりも、斑鳩があんな顔をするのかと思ったほど、初めて見る表情だった。あの男には、チャラチャラとしていつも女の尻を追いかけているというイメージしかない。それだけに、とても違和感のある表情だ。

斑鳩は俺に気付くことなく、本殿の裏の方へと姿を消した。俺は人込みを掻き分けながら、姿を消した斑鳩の後を追う。別に奴の後など追う必要もないのだが、勝手に足が動いていた。

本殿の裏側の道は表の境内と同じ砂利道になっているが、人気がほとんどないせいもあってか、砂利の量が表側に比べて多い。そんな場所を進むと当然ジャリジャリと音がなる。俺は無意識のうちに、なるべく音を鳴らさぬよう猫立ちのようになりながら進んでいた。

少し行くといたるところに木々が立ち並び、どことなく、きちんと整備された林か何かのように見える場所に出た。そのすぐ先に駐車場があった。何台もの車やバイク、自転車などが置いてあり、きっと関係者たちのものだろう。

ここにきても斑鳩の姿はなかった。途中、別の角を曲がったのだろうか。いや、多分それはない。角を曲がるにしたって、その先はまた表境内に戻るだけだし、わざわざ裏側にくる意味が分からない。それ以外には、全くと言っていいほど曲がり角らしいものはなかった。つまり、奴はこっちの方へ出てきているはずなのだ。

「どこに行ったんだ」

誰もいない駐車場をくるりと見渡し、小さく呟いた。俺以外に人の気配を感じさせない駐車場と周りの林の雰囲気もあってか、俺は冷静になっていった。

なんだって俺はこんな行動に出たんだ。別に斑鳩のことなど、放っておけば良いはずなのだ。勢いまかせに奴を追ってきた俺だが、とたんに馬鹿らしくなって、ため息をついた。

（戻ろう。二人も待ってる）

そう思って踵を返した時、林の向こうに何か動くものがあった。俺はもしかしてという思いもあって、人の手の入った林に足を踏み入れその場所に向かう。

向かった先は大型の車も通れそうな幅がある道になっているようで、ちょっとした散策なんかができそうな場所になっていた。

（いた）

その少し先に斑鳩がいるのを見つけた。しかし斑鳩は、不自然に道に停まっている車の後部座席にいて、中の人物と何かを喋っているようだった。それを見た俺は、とっさに横にある大木の陰に隠れていた。

何を喋っているのかは全く分からないが、その表情は俺の知っている人物なのかと疑ってしまうほど険しい。おまけに、今奴が乗っている車には、なんとなくだが見覚えがあった。

そう、イヴの夜に猛スピードで俺の脇を通り過ぎていった車に、似ている気がしたのだ。同時に、翌日ニュースでやっていた黒い車の転落事故……。これらが頭の中で結び付いてしまってどうしようもなかった。

一度考えついてしまうと、次から次にあれやこれやと疑問がわいてくる。この数週間、行方をくらましていた斑鳩が、なぜこんな場所にいるのか。何をしに、ここに来たのか。あの車との関係は？

そして、あの車の連中は一体なんなのか。そんな疑問の連鎖が頭の中を渦巻いて、俺はひどく混乱していった。

第４４章

新しい年になって、早くも二ヶ月近くが過ぎ暦はすでに二月も終ろうという今は、その最後の週末になっていた。元旦に初詣のために訪れた神社で、音信不通だった斑鳩を見つけてから、俺はどこか不安な日々を送っていた。

不安とは言っても、別に何かに怯えているというわけではなく、ふとした時に、妙な違和感を覚えていたのだ。それが何であるか、それは全く分からない。とにかく、何かが違うような気がしてならなかった。

綾子ちゃんは、週末になると泊まりがけでうちに来るのはもはや恒例だし、その間にも何か特別なことがあったわけでもない。沙弥佳の紹介で綾子ちゃんと知り合ったのが去年の十月後半だったが、瞬く間に四ヶ月以上が過ぎたということになる。

この四ヶ月は俺にとっても劇的で、数えてみればまだ四ヶ月、というほど色々とあったのだ。そのせいもあってか、無駄に敏感になってしまっているのかもしれない。

そんな中沙弥佳と綾子ちゃんは年が明けてからというもの、週末には俺を連れだって、近くの図書館やカフェなんかに立ち寄り受験勉強をしている。それも毎週だ。

わざわざ俺を駆り出す必要などないと思ったのだが、言うが早いか沙弥佳がいうには、高校生なんだから中学生の勉強くらいみてよ、とのことだった。ついでに、春からは後輩になるんだから、と付け加えて。

そんなこともあって、授業が早あがりとなった金曜の午後、久しぶりに訪れたキシマイ堂で俺達は揃って勉強していた。

「お兄ちゃん」

「ん？　どうした」

「ここなんだけど」
「ああ、ここはな……」
こんな具合に俺が沙弥佳に教えつつ、沙弥佳が綾子ちゃんに勉強を教えてやっていた。もちろん、俺は綾子ちゃんのものも見るわけだから、二人の勉強を見てやっていることになる。
まぁ、そんな俺も来月の初めに控えている、試験勉強に精を出している。昨年の学期末テストは受けていないので、今回のテストである程度の点を取らないと、散々なことになりかねない。赤点を取ろうものなら、春休みは返上しないといけないのだ。
「んっ……はあ。なぁ、少し休憩しないか？」
携帯で時間を見ると、すでに午後の六時になっていた。ここに来たのが二時くらいだったから、四時間近くいたことになる。さすがに、椅子に座りっぱなしで勉強というのも疲れてくる。俺はぐっと背伸びしながら、二人にそんな提案をした。
「ん、そうだね。あれ、もう六時なんだ。早いなー」
まず沙弥佳がシャーペンを置き、それから少し遅れて綾子ちゃんもシャーペンを置いて、背伸びした。
「どうだ、はかどったか？」
沙弥佳と違って、受験に不安のある綾子ちゃんに聞いた。彼女には、俺が二年前に実際に使ったものや、去年の問題に出されたものを独自に集め、それを手渡してあるのだ。二年前のであれば、出題されるものもある程度は似てくるだろうと踏んでだ。
「はい。前まで良く分からなかったものも、これのおかげで随分理解できるようになりました。ありがとうございます」
「そんなに畏まらなくたっていいよ。言うなら、お古みたいなものだしな。それより、何か注文しよう」
テーブル脇のメニューを取って、二人に渡した。
「あやちゃん、どうする？」
「どうしようかな……さやちゃんは決めた？」
「うん。良かったらさ、前のと同じのにしない？」

沙弥佳のやつが、またとんでもないことを口にした。こいつは人を財布か何かと勘違いしてるんじゃないだろうか。
「で、でも」
綾子ちゃんはそんな俺の都合を察してか、こちらを窺うように視線をやった。
「あ、大丈夫大丈夫。二人でじゃなくて三人でって意味だよ」
「三人で一つの物を食うってのか？」
「そう。だったら安上がりになるでしょ？」
「まぁそうだが」
結局、そんな調子で沙弥佳に言いくるめられながら、前にも頼んだ特大パフェを頼むことになってしまった。
そんなこんなで、運ばれてきた特大パフェに舌鼓をうちながら、楽しげに雑談をしている沙弥佳達を眺めながら、俺はついでに頼んだコーヒーを飲んでは、ぼんやりと他のことを考えていた。
考えているのはやはり、元旦に会った斑鳩のことだった。俺がようやく退院できた良く週末、斑鳩と街中で出会い、やつが企画したと言うパーティーに参加させられそうになった。しかし、その日を最後に忽然と姿を消した斑鳩は、元旦の参拝客のごった返した神社に姿を現したのだ。
そこまではまだ良い。疑問は色々とあったが問題はその後だった。
木の陰に隠れた俺は、車の中で何か喋っている斑鳩らを注視した。何か喋っている斑鳩はえらく興奮しているようで、運転席に座っている人物にまくし立てている。
俺の場所からは影になっていて、運転席にる人物が男なのか女なのか、それすらも分からない。
どれほどそうしていたか分からないが、そのうちに、斑鳩は何か吐き捨てるように何かを言って、車から降りた。興奮のため、その

顔は紅潮している。力任せに叩きつけるように閉められたドアは、奴の感情をあらわにしていた。

斑鳩はそのまま車を後にして、こっちの方へ向かって歩き出した。黒塗りの車の方も、斑鳩の態度が気に入らなかったのか、乱暴に急発進して去っていった。

まだ距離はあるが、こちらの方へ歩いてきた斑鳩にどうすれば良いか分からずにいた俺は、そっと大木の根元に身をかがめて、息を殺した。

幸いにも、根元は非常に太く盛り上がっているため、身をかがめながらでも移動することはできそうだ。近くに斑鳩の歩く足音が聞こえ身を強張らせたが、その足音は徐々に遠ざかっていった。

俺はため息をついて、肩から力を抜いた。それでもしばらくはそのまま動かないでいたが、ようやく身を起こして衣服についた土を払い落とす。

「……それにしても、今のはなんだったんだろう」

つぶやきながら駐車場の方へ戻る。しかし、そこで不覚にも林を迂回してきた斑鳩と鉢合わせてしまったのである。

「斑鳩」

「あれ～九鬼じゃん？　どうしたん、こんなとこで」

その顔には先ほどまでの険しいものは一切感じられない。

「こんなとこでって、おまえ……そういうおまえこそ今までどうしてたんだ」

語気を強めて問い詰める。斑鳩はほんの一瞬だけ怪訝な表情をして見せたが、すぐにいつもの飄々としたものになった。というより、何のことか分からないと言ったような顔だったようにも思える。

「ああ、学校のこと？」

「それもあるが、わざわざおまえの家にまで行ったのに、帰った感じもしなかったしどうしてたんだ」

「ん、ああ、まぁ色々？　っていうか、おれんちまで行ったんだ？」

「色々って……おまえな」

「まあなんだっていいじゃん。そんなことより九鬼こそ、なんでこんなとこにいんの？」

はぐらかすように話題を変えた斑鳩は、よほど何をしていたか言いたくないようだ。

「別に。ただの初詣だ」

ぶっきらぼうに言い捨て、はぐらかすなと言おうとする前に、斑鳩が口を開いた。

「初詣か～。そいや、そんな時期だっけ。そうそう、前は悪かったよ。パーティーやるとか言っておきながら流れちゃってさ」

「それは良い。第一、俺も妹達も行くつもりなんて、さらさらなかったからな。だから俺がおまえに断りをいれようとしたら、次の週から来なくなったからわざわざおまえのアパートに行っただけの話だ」

「なるほどね、そういうことか。悪かったよ。実はさ、九鬼たちと会った次の日からちょっと旅行に行ってたんだよ、知り合い達と」

「学校にも言わずに、何週間もか」

どこまで本気か良く分からない答えに、俺もつい勘ぐってしまう。斑鳩はそうだよと一言だけ告げ歩きだした。

「おい、待てよ」

「うるさいな。今から人と待ち合わせしてるんだ。時間がないんだからほっとけよ」

そう言って斑鳩はこちらの制止を振りほどき、さっさと駐車場を離れていった。

人と会うだって？　嘘つくなよ。おまえはたった今誰かと会ってたじゃないか。それとも、まだ誰かと会うつもりなのか。俺は去っていく斑鳩の背中を見つめながら、知らず知らずのうちに舌打ちしていた。

新学期になって斑鳩はようやく学校にやって来たが、その雰囲気は今までと違うものだった。もちろん、あのプレイボーイぶりは相

変わらずで、やはり彼女が欲しくて群がっているような連中や、女子達にも人気があるのも相変わらずだった。それどころかむしろ、女の子には去年までよりも更にモテていたように思える。今まで斑鳩に興味のなかったような子すら、やつにうつつを抜かしているのを見たからだ。

だがそれでも、何かが違っていた。そういうのとは明らかに違う何かが。そいつがなんであるか、俺は分からない。ただ、明らかにどこかが違っている、そうとしか言いようがないのだ。それにはさすが年長者である小町ちゃんも気付いたようで、俺にわざわざ何かあったのか聞いてきたほどだ。

当然ながら俺にも分からないと答えておいた。多分俺に聞いてきたのは去年、斑鳩のアパートに行くから住所を教えてくれと、いったためだろう。

「……」

暗くなった窓の外を流れていく人や車を眺めながら、そんなことを思い返しているうちにぼうっとしていしまい、いつの間にか沙弥佳が隣に座っていることに気付かなかった。

「ふっ」

「うわっ！」

沙弥佳が突然俺の耳に息を吹きかけてきて、思わず身を震わせてびっくりしてしまった。ついついうわずった声も出てしまう。

「何するんだっ、おまえは」

耳を手で押さえながら声をあげた。驚きのあまり、声が大きい。沙弥佳はそんな俺などお構いなしに、頬を少し膨らませるようにしていていた。眉を寄せて上目使いにした目は、明らかに機嫌をそこなっている。

「お兄ちゃん、さっきから何度も呼んでるでしょっ」

「え？　あ、ああ、そうだったのか。すまん。それでなんだ？」

「もう！　そろそろ帰ろうかって言ってるの」

沙弥佳が時計を指し示しながら言う。盤面を見れば、もう七時に

なろうというところだった。
「なんだ、もうこんな時間か。そうだな、そろそろ帰った方が良さそうだ」
「もう……だからさっきから呼んでたのに」
ぶつぶつと一人文句を言っている沙弥佳を一瞥し、テーブルに視線を移す。三人でという話で頼んだはずの特大パフェは結局、俺の口には一口も収まることなく綺麗に平らげられていた。

暗い夜道を、右から綾子ちゃん、俺、沙弥佳という順に横に並んで帰路についていた。
つい一ヶ月ちょっと前までは考えられなかった構図だ。というのもそれ以前はと言えば、沙弥佳が俺の腕を組み、その沙弥佳の横に綾子ちゃんが歩くというのが常で、二人の間を俺が歩くなんてことはなかった。こんなのも思い返してみると、初めてのことであった。それだけ沙弥佳も、綾子ちゃんにだけは心を開いているということなのだろう。
沙弥佳はこう見えて意外なほど対人関係には臆病で、特に、男に言い寄られたりするのがあまり好きではない。けれどその容姿のせいもあって、随分とその辺りは苦労してそうだ。
そんな沙弥佳に変化が見られたのが、去年のクリスマスあたりを境にしてからだった。あの頃を境に、今までは綾子ちゃんといえど俺の横には歩かせないようにしていた沙弥佳も、それを許容するようになっていたのだ。
沙弥佳の涙ぐましい努力と心情を変えてしまう何かが、あの頃にあったはずだと思うが、それがなんであるかは、いまひとつ分からない。というよりも、どこか浮かれているような気がする。心当たりがあるとすれば、せいぜいクリスマスにプレゼントをやったくらいだ。
「ところでお兄ちゃんさぁ、さっき何考えてたの？」
「何が？」

「キシマイ堂で何か考えこんでたでしょ？　お兄ちゃん、すぐ自分の世界に入っちゃうから分かるよ。で、何考えてたの？」
前にも同じようなことを言われた覚えがあるので、今更反論する気はなくなっていた。
「たいしたことじゃぁないんだが、ちょっとな」
「当ててみようか。それって斑鳩さんのことでしょう？」
沙弥佳は悪戯っ子のような顔で、得意げに言い当てて見せた。
「シャーロック・ホームズもびっくりだ」
俺は少しだけ驚き、肩をすくめながらおどけた。いくら顔に出やすいかもしれないにしたって、何を考えていたかまではそうそう分かるものでもない。
「ふっふっふ、そうだろうそうだろうワトソン君」
沙弥佳の珍しく気を利かせた物言いと口調、綾子ちゃんも笑っていた。
「で、なんで俺が斑鳩のこと考えてたのか分かったんだ？」
当然の疑問だ。それにまさか妹の口から、斑鳩の名前が出るとは思わなかったというのもある。
「うん、半ばあてずっぽうだったけどね。実はさ、昨日斑鳩さんと会ったんだ」
「昨日？　どこで？」
沙弥佳と斑鳩が？　どういうことだ。
話によれば、街中でばったり斑鳩のやつと鉢合わせたのだという。それも両手に花の状態でだ。その際に俺とのことを口走っていたらしく、それでなんとなくそう思ったらしい。全く、根拠なんてないのに、そういうのにやたらと敏感な女の勘というのには、ほとほと恐れ入った。
「斑鳩のやつ、何か言っていたか？」
「ううん。なんか良く分からないこと言ってたよ。意味深ってやつなんだろうけど、全然分からなかった」
昨日のことを思い出したのか、綾子ちゃんも二度三度と頷いてい

る。
「そうか」
俺もそれ以上は追及することなく頷き、一言短くそえた。

週が明けた翌週、学校で珍しい組み合わせと出会った。藤原真紀と斑鳩だ。
「よう。こいつはまたえらく珍しい組み合わせだな」
二人を見かけた俺は、冷やかしついでの挨拶をした。
「よっ九鬼。もしかして真紀ちゃんと知り合い？」
「まぁな。そういうおまえは真紀をナンパか？」
「そそ。っていうか真紀だなんて、二人ってそういう関係？　だとしたら止めといた方がいいかな」
相も変わらず下世話なやつだ。だが俺はこの女は気に入らない。そんな女と関係など持てるはずがない。
「まさか。この女と、おまえの考えているような関係であるはずがない。ナンパするんだったら好きにすりゃぁいい。俺は止めない」
「なに、随分な言い草だねぇ」
ケラケラと笑っている斑鳩と対象的に、真紀はいつもと全く変わらない無表情だ。おまけに久しぶりに会ったというのに、挨拶の一つもなしだ。
「言っておくけど、私はこの人のことなんてなんとも思わないわよ」
顎で斑鳩に向かって示しながら言う。無表情と思ったが、声にはどことなく不機嫌さが滲んでいるように思えた。
「そうか。ま、選択権はあんたにあるしな。あんたの好きにすればいいさ」
俺は言うだけ言うと、さっさと二人から離れた。別に俺はあの二人がどんな関係であろうと、これからそんな関係になろうとどうでも良いことだ。まぁ、あの女狐が斑鳩を選ぶことはないだろう。

そう考えてみると、真紀の好みのタイプはどんな奴なのだろうかとふと思う。それこそ下世話なことかもしれないが。

「九鬼は今日もお姫様二人のところに行くんだな～」

「何、あなた好きな子ができたの？」

斑鳩の何気ない一言に、真紀がこれまた珍しく食いついてきた。

「そうだよ。こいつ一匹気取ってるわりに、意外とヤリ手なんだよ。すごい可愛い子捕まえたんだよな？」

ニヤリとしながら俺に聞いてきた。こいつ、まさかさっきの冷やかしの応酬を……。

ありえないことじゃない。この斑鳩という男はそういう人間なのだ。こいつのやること成すことには、何かあると薄々考えてはいたが、これからはもっと気をつけるべきだと改めて再認識させてもらった。

「ふん、別にいいだろう、そんなことは。それに一人は妹だ」

「くくくく、そう怒るなよ」

全く、なんだというんだ。俺は舌打ちしながら足早に二人の前から消えた。その背中に、真紀の視線が射抜いているのに気付くことはなかった。

校門を出たところで、綾子ちゃんが一人で待っていた。最近は学校が終わってから勉強会をやるというので、良くこうして二人して学校前で待っていてくれているのだ。

「待たせたな。沙弥佳は？」

「先生と少し話があるみたいです。待ってようとも思ったんですけど、先に帰っていいよと言われたので今日は私だけです」

「なるほど。しかし先生と話ってなんなんだろう」

「多分、進路のことじゃないかな」

すこし曇ったような顔で綾子ちゃんは言った。

「さやちゃん、先生からもっと上の学校に行くべきだってずっと言われてるんです。今週までは変更もギリギリで間に合うそうなので

多分、それで……」
　そういうことか。確かに教師としてはその方が良いと判断するのは当然だろう。しかし、そんなのにまで一々口出しするのは間違いではないのか。本人が一番行きたいという所に送り出してやることが、本当の教師ではないのだろうか。まぁ、かく言う俺自身、沙弥佳にもっと上に行けと進言したこともあったわけだが。
「沙弥佳はどこに行けと言われたんだろう？」
「N校って話も聞いたことがありますけど……どうなんでしょう？」
「N校って……マジか」
　N校と言えば、全国トップクラスの進学校だ。ちなみに関西のN校とは違って、共学の公立校だ。
　それにしても、あいつの成績が良いのは知っていたが、まさかそこまでのレベルとは初耳だった。我が妹ながらとんでもない奴だ。
「詳しくは私も知りませんけど、そういう噂が流れたことがあったのは本当です」
「そうか……」
　しかし、妹がもし本当にそのレベルだとしたら、それはそれで兄としての威厳が……。いや、そんなことを気にするようなやつでないことは俺が一番良く知っていることであるが、そうとは分かっていても不思議な嫉妬のような気持ちを覚える。
　なんにしても、このことは多分両親も知っているはずだ。父さんや母さんはどう思っているのだろう。俺の知らないところで、そういう話をしていたのだろうか。それはそれで構わないが、家族だというのに何も知らされていないというのは関係ないとしても、それはそれでなかなかに寂しいものだ。
「九鬼さん？」
「ん……？」
「あ、いえ、なんでもないです」
「おいおい、気になるぜ」
　笑いながら綾子ちゃんに続きを促した。綾子ちゃんは勘の良い子

だから、何か俺の気持ちを悟ったとも考えられる。
「はい……あの、さやちゃんはきっと、九鬼さんのことを考えて何も言わなかったんだと思います。もしそういうこと言ったら、絶対に上に行けって言われるのが分かってたからだと思うんです。だから」
俺は苦笑いを浮かべながら、綾子ちゃんの言葉を遮るように頭に手をやった。
「大丈夫だ、分かってるよ」
その通りだろう。実際に俺はそんな話をせずとも、それを促したのだ。あいつとしては、余計に話にくくなったことだろう。本当に話すつもりがあったのならの話だが。
これは自惚れかもしれないが、要するにあいつはまだ俺から離れたいとは思っていないわけだ。他に何かやりたいと思えることができた時、必然的に俺からも離れていくことだろう。
「っと、すまん。つい癖で」
慌てて綾子ちゃんの頭から手をのけた。相手は沙弥佳ではなく綾子ちゃんだというのを、すっかり忘れてしまっていた。
「いえ……九鬼さんにそうされると、なんか気持ちが良いってさやちゃんが言ってましたけど、本当かも」
「そうなのか？」
はにかむような顔で笑いながら、綾子ちゃんは頷いた。今までにない新しい表情だった。彼女のそんな新しい部分を見つけるだけでこっちもまた嬉しい気分になるのはどうしてなんだろう。
「な、なぁ。これから少し遊ばないか？」
「ええ？　今から、ですか？」
「ああ。勉強勉強ばっかりじゃぁ息もつまるだろ？　息抜きも必要だと思うんだが、どうかな」
「で、でもさやちゃんが帰ってきたら……」
「なに、ほんの一時間かそこらだ。それに、今日は家に帰るんだろ？　だったら沙弥佳に気を遣う必要もない」

少し考えた綾子ちゃんは、一時間だけならというのを条件に、申し出を受けてくれた。
「良し、それじゃぁ早速行こう」
「あっ」
俺は綾子ちゃんの手を引き、駅に向かった。
綾子ちゃんは小さく呻くような声を漏らしながらも、その手に力をこめて俺の手を握り返してくれたのだった。

電車に乗って降り立ったのは、繁華街にほど近い一画にある公園にいた。ここは一ブロック隣にある神社の祭り事のため、それを狙って、屋台などの露店商が軒を連ねているのだ。この催しは毎月、月末に行われており、何年か前までは毎月沙弥佳と二人で訪れていた。
沙弥佳をのけ者にするつもりがあるわけではないが、たまには良いだろう。それに、俺だって健全な一男子なのだから、女の子とこういうのに来てみたいという気持ちもある。
「わあ、平日でもこんな風に屋台が出ることってあるんですね」
「そりゃぁそうさ。祭り事に平日も休日も関係ないと思うぜ。まぁ、休日にした方が人が多く集まるのは間違いないだろうけど」
綾子ちゃんは屋台といえば夏、というイメージがあるらしく、あまりこういったものとは縁がなかったらしい。今まで親の都合に付き合わされていて、人並みに催し事を楽しんだことのない彼女にとっては、これだけでもかなり新鮮なのだろう。
今日の屋台はやはり食べ歩きができそうになっているように、様々な食べ物を売っている屋台が多かった。この屋台の列は、一ブロック先の神社の境内の手前まで続いているのだ。
小学生の頃は、毎月この日が来るのが楽しみで仕方なかったものだった。この日のために、母の仕事を俺と沙弥佳二人で手伝い、小

遣いを貰っていたのが懐かしい。
「あれ、なんだろう」
綾子ちゃんが指し示した先に、何かが焼けて煙りがもくもくとあがっている。
「ああ、串焼きだな、あれは」
「串焼き？」
目を輝かせながら綾子ちゃんは、俺の串焼きの説明を聞いていた。
「串焼きなんて、俺も随分と久しぶりだな。一本買うか。
すみません、二本お願いします」
屋台の前で止まり、店の親父に頼む。親父は気前良く、すぐに肉の塊が刺さったものを二本、目前の炭火の上に置いた。置かれた瞬間、ジュウジュウという美味そうに肉が焼ける音がでた。親父は、肉汁が滴っていく肉の塊に、特製のタレを刷毛を使って塗り、裏返しにする。
「はい、二本で八百円ね。毎度あり」
金を渡し、串焼きを受け取った。焼けた肉が美味そうな匂いを発している。
「ほら」
綾子ちゃんに手渡して、俺は早速一口で一個目の塊をほお張る。
久しぶりに食べるせいか、とても美味く感じる。
「さあ、遠慮しないで食べてみなよ、うまいぞ」
「ありがとうございます。それじゃ」
控え目におちょぼ口で肉に噛み付いたのを見て、つい笑ってしまった。
「違うな綾子ちゃん。こういうのは上品にじゃぁなくて、こう、思いきってかぶりつくんだ」
俺は大口を開けて肉にかぶりついた。そのまま串をスライドして串から肉を外し、そのまま肉を口の中へと転がした。
それを見ていた綾子ちゃんは、恥ずかしさからどうしようかと迷っていたが、彼女なりに口を大きく開け、かぶりついた。

「そうそう、そんな感じだ」
俺はニヤリとしながら、また一個肉をほお張った。綾子ちゃんもそれを見て笑みをこぼしている。
「どうだった、初めての串焼きは」
食べ終え、また神社の方へと人が流れていく中それにしたがって歩きながら感想を求めると、おいしかったですと満面の笑みを浮かべた。それを見ればこっちも満足だ。
「そうか、良かったよ。それに、あそこのは普通のよりは少し肉が大きめだったな」
「へぇ、そうなんですか。でも確かに私には一個が大きかったです」
「ああ、君には確かに大きかったかもな」
「……そういえば」
「ん？」
ゆっくり神社に向かって歩きながらとめどなく話しているうちに、話題は沙弥佳のことへ移っていった。どうもあいつは、新学期になってからというもの、やたらと注目を浴びるようになったのだと言う。元々注目を浴びやすいやつではあったが、最近は特にそれが顕著らしい。
「でも確かにさやちゃん、少し変わったような気がします」
「かもな。それは俺もなんとなくだが、そう思うよ。なんていうのかな、浮ついてるような感じだ」
「そうなんですよね。最近すごく元気だし、かと思えば上の空だったり……情緒が激しいんですよ、さやちゃん。
でも、それすら人目を惹きつけてるような感じなんです。……私が思うに、そんな風になった原因って」
その時、摩擦によっておこった金属がこすれるような大きな音と同時に、ゴムが思い切り擦れたような音の後に金属やガラスが割れる耳をつんざく音が辺りに響いた。同時に何人もの叫び声もあがる。俺も綾子ちゃんも、周りの人々も言葉を失い、何事かとその音のした方へ目を向けた。

「大変だっ、車が突っ込んできたっ」
誰かが事故が起こったというのを大声で叫んでいる。
「事故？」
視線の先には徐々に人だかりが出来始めており、そこで事故が起こったのだと分かった。
事故が起こったのはほんの目と鼻の先で、距離にして二十メートルと離れていない。
「きゃあああああああああっ！」
「！？」
やじ馬の一人がさらに大声で叫び、それがまた一人二人と伝染していき、それはまるで阿鼻叫喚だ。
「ど、どうしたんでしょう？」
今の叫び声で何があったのか分からずにいたようだった綾子ちゃんも、不安げな顔で聞いてきた。
「……俺にも分からない」
その間にも、事故現場にいる人々からは悲痛ともとれるような声が響いている。
「……行ってみよう」
「えっ？」
好奇心に負けた俺は事故現場に行こうとすると、綾子ちゃんは俺の裾を握って、行こうとするのを制止しようとするような行動をとっていた。
「綾子ちゃん……？」
「あ、あのっ行くのは、止した方が……」
やや蒼白とさせた顔をしながら、止めようとしているが、どうも好奇心を刺激された俺は現場が気になって仕方なかった。
「すぐに戻ってくるから少し待っててくれないか。どうにも好奇心が疼いて仕方ないんだ」
心の中で制止してくれた綾子ちゃんに謝りながら、俺は事故現場に向かって行った。

事故により車が横倒しになっていて、路面にタイヤがスリップしたのを伺わせる跡が、くっきりと残っている。

事故が起こる直前に甲高い摩擦音が聞こえたが、その跡がそうであったことを思わせる。

フロントと運転席横の窓ガラスは完全に割れてしまって、辺りに細かく散っている。

幸いにも露店には突っ込まなかったようだが、それらの破片は近くの屋台に散ってしまっているようで、軽い怪我人が出ているようだ。

そんな中、俺が目を引いたのが車の姿形だった。

「この車……」

元旦に初詣の際に訪れた神社で見た、斑鳩が乗った車に似ているのだ。

形そのものは見るかげを失いスクラップになってしまっているが、黒っぽくやや大きめの空間をした普通車は、あの時の車だと思わざるをえないほど酷似している。

俺は人だかりを掻き分けて、やめとけばいいものを、中に乗っている人物を確かめようとした。

騒然となったこの現場においても、それが分かる辺りはさらに酷い状況になっていたからだ。

「うっ……」

なぜこんなにまで人が叫んでいるのか、なんとか人だかりを掻き分けた先、それを理解した。

開けた先には、一人の中年の男と思わしき人物が死んでいる光景が飛び込んできたからだった。

その人物が死んでいるというのは素人でも一目瞭然で、瞳は真っすぐにこちらを正面を向いているのに、事故っていることには、全く気付いていないかのような顔をしているのだ。

それと額の真ん中に開いた穴が、なんとも不自然さを窺わせ、なによりも後頭部が、真っ赤なジャムに濃紅なトマトケチャップか何

かを混ぜたようなものが、べっとりとついているように一瞬錯覚したほど、ぽっかりと無くなってしまっていた。

この光景を見た人の一部は、そのグロテスクな光景に吐き気を催したようで、その場で戻してしまっている者もいる。さすがにじっと見ていると気持ち悪い気分になってきたため、その場を離れた。

騒然としていた現場に何台かのパトカーが来て、徐々に場が落ち着きだしていた。俺はパトカーが来たのを見届けると、綾子ちゃんを連れて公園を出た。もう縁日なんて楽しむような雰囲気ではない。

綾子ちゃんの制止を聞かずして事故現場に行き、そこから戻った俺を見た彼女はやや心配そうにしていた。ふと窓ガラスに写った自分の顔を見て、その理由が分かったのだ。

(顔面蒼白ってこんなことをいうんだな)

ぼんやりと自分を見ながらそんなことを思っていると、綾子ちゃんが自販機で買ってきたココアを差し出してきた。礼を言いながらそれを受け取り、一気に喉に流し込んだ。きっと、ココアやコーヒーといったものには高ぶった気持ちを鎮める効果があるということなので、ココアを選んだんだろう。一気に飲むと、その液体の熱さで火傷しそうになるが構うことはない。

「すまん、少し落ち着いた」

「いえ。大丈夫ですか?」

綾子ちゃんの問いに、肩をすくめながら苦笑するしかなかった。当たり前だ。事故の状況など見たがらなかった彼女に、どうして後頭部がなくなっているから、などと言えるだろう。そんなこと言えるわけがない。

「行こう」

自販機横の空き缶入れに缶を投げ入れ、駅に向かって歩き出した。一応時間も一時間だけだと言ったことだし、頃合いだろう。こんなこと言うのもなんだが、一時間なんて守るつもりもなかったのだが、奇しくもその通りになってしまったのだ。

これは別に俺のせいというわけでもないが、誘った手前、なんだか悪いことをしたような気になったというのもある。
「あの九鬼さん。あまり気を落とさないで」
「ん、ああ、大丈夫だ」
やはり顔に出ていたのか、綾子ちゃんがそんなことを言った。俺が単純なのか彼女が鋭いのか、それとも両方なのは分からないが、こんな風に察してくれて気遣ってくれると嬉しいものだ。

帰りの電車の中、揺られながら先ほどの事故現場のことを掻き消すように綾子ちゃんと話していた。
しかし、それももう終わりだ。綾子ちゃんの降りる駅が近づいてきたのだ。車内のアナウンスもそれを知らせ、スピードも落ちはじめ、駅に到着した。
「それじゃぁ、またな」
「はい。あの……も、もし良かったらまた誘ってくださいね。それでは」
途中から早口になり、顔も赤くなっている彼女は、お辞儀して足早に電車を降りていった。
ドアが閉まって動き出す電車をホームで見守っていた綾子ちゃんは、いつか見た輝いているような笑顔を浮かべていた。

いつもよりも遅れた帰宅途中、地元の駅の帰り道でも俺は、さっきの車のことが頭から離れないでいた。あの車、ほぼ間違いなく神社で見た車だ。あの時斑鳩と会っていたのは、さっき死んでしまっていたあの人物なのだろうか。
第一、死に方が普通じゃない。明らかに事故で死んだわけでないことが素人にも分かったし、後頭部の状態が本か何かで知った、銃によるものであるような気がしてならなかった。もし銃によるもの

だとしたら、走行中に狙撃されたことになるし、そんなことをやらないといけないような理由があったというのか？

そこで、去年のクリスマスに起こったという、暴力団による抗争なんかのためだったのなら、というのは？　確かあの事件にも、銃が使われていたとか言っていたのが思い出される。

もし、もし仮りにだ。それらが正しいとしたら、それに関わっていたかもしれない斑鳩は一体何者なんだ。どことなく変わった雰囲気。唐突に姿を消した三週間。何か、そしてその斑鳩に何かしたら関係があったかもしれない、黒塗りの車に乗った人物……。

一度考え始めると、どうにもそれらのことに首を突っ込みたがるのは、俺の性分なのだろうか。気付けばすでに家の前でそんなことを考えていた俺は、かぶりを振って家の中へ入った。帰ったことを告げても反応がなく、誰もいないのかと思われたが沙弥佳の靴があるので、妹だけは家に帰っているようだった。

「やれやれ、反応がないから寝てるか音楽でも聞いてるのかと思えば……」

階段をあがって自室へ戻ると、俺のベッドの上で俯せになって沙弥佳が寝ていた。この季節にも関わらずスカートをはいていて、そのスラリとした脚がめくれたスカートから投げ出されている。

（こいつ、思ってたよりも脚が長いんだな……）

スカートに隠れて下着は見えないが、あとほんの一、ニセンチ動かすだけで見えそうな際どいもので、ふとももと尻のラインはしっかりと見えている。それがやけに扇情的だった。

俺はどういうわけか、その様子をいつしかベッドの脇に立って、じっと見つめていた。手を恐る恐る、ゆっくりと沙弥佳の右足にやった。指先を軽く触れる程度のものだが、起きてしまわないかと妙な緊張感があった。

起きる様子のないのを見て俺は、大胆にふとももに触れた。指先で軽く触れるようなものではなく、その肉をしっかりと掴む。きめ細かい、張りがある柔肌が、手に吸い付いてくる。ゴクリと生唾を

飲んで、そのまま手をゆっくりと足のつけ根の方へと動かしていく。
指先がスカートにかかった時、さすがにこれ以上はまずいと思いとどまって、手を止めはしたものの、こんなことをしてもまだ起きそうにない沙弥佳を見ると、後少しくらいならと再び手を動かしはじめた。
指先をスカートの中に入れると、すぐに下着に触れたのが分かった。手はふとももから完全に尻に触れている。
再び生唾を飲む音が聞こえ、さらにその奥へと手を進めた。尻の表面は、とてもすべすべしていて気持ちが良い。
（何をしているんだ、俺は……）
俺は何を思ったのか左手で、沙弥佳の左足のつけ根あたりをまさぐった。
（このままスカートと下着を取っ払うのか……）
左手でスカートの裾をめくると、下着とその布地に隠れきれていない尻が現れる。下着はピンク色をした、尻を半分ほど隠すタイプのもので、尻の肉が半分ほどはみ出ている。いや、はみ出ているというよりも、そのサイズが小さめなのか。なんにしても、下着はもっと可愛い子供らしいものかと思っていたので、その予想が大きく外れたのは意外だった。
というよりも、つい一ヶ月くらい前までは、こんなタイプの下着を穿いていなかったような気がする。洗濯物として干されているのも、見たことがない。妹が最近、よく人から注目されるようになったと綾子ちゃんが言っていたが、これもその顕れなのだろうか。
（もしかして、誰か好きな奴ができたのか？）
ありえなくもない話だ。恋した女の子が下着の趣味まで変わるというのは良く聞く話だし、最近の沙弥佳の態度から考えれば、それは十分に考えられる。
ここは普通であれば、兄として良かったじゃないかですみそうなものだが、不思議と妹にこんな、今までに穿くことのなかったタイプの下着を穿かせるまでに変えた奴のことが、無性に気に入らなく

なった。
サイズが少し小さいため、ピッチリと尻に張り付くようになっていて、割れ目までくっきりと浮き出ている。いつしか部屋に荒い息使いが聞こえはじめていたが、俺は気にすることなく尻の割れ目に食い込んでしまっている下着の上から、その部分に触れた。
（ここが沙弥佳の……）
もっとガキの頃、一緒に風呂に入っていた頃には妹のそこを見たことはあったが、風呂に入らなくなってからというもの、こうして見たのは初めてだ。
食い入るようにその部分を見ていると、目前に下着ごしに沙弥佳の秘部が迫っていた。顔を近づけすぎていたのだ。それでも俺は、その食い込んでしまって浮き出た筋を、何度もなぞるように往復せた。その秘部から沙弥佳の体温を感じる。
直に尻を掴んでいた右手を、さらに割れ目に向かって動かそうとした時だった。
「ただいまー」
「！」
突然、玄関のドアが開かれる音とともに母の遥子が帰ってきた。我にかえった俺は、急いで沙弥佳の下半身から手をどけて、スカートを戻す。
「あんた達、いないのー？」
下から俺達を呼ぶ声が聞こえる。
「お、おかえり」
平静を装いながら下に降りていった。母の手には病院の薬がぶら下がっていて、病院に行っていたのが分かる。
「何、ちゃんといるんじゃない」
「ああ。俺も、つい十分かそこら前に帰ってきたばっかだから」
「そうなの。沙弥佳は？」
「相変わらず俺の部屋で寝てた」
肩をすくめながらそんなやり取りをしているうちに、沙弥佳が降

りてきた。
「ぁ、お兄ちゃん、お母さんおかえり」
「ただいま」
今しがたまで寝ていたのが分かるような雰囲気で、俺がしていたことには気付いていない様子だ。沙弥佳の様子を見た俺は、小さく安堵のため息をついた。
（あんなのがバレちまったらおしまいだ）
母と何か話している沙弥佳を見ながら、俺はなんであんな行動をとったのか自分でも分からずに、ただただ、妹が気付かなかったことに安堵していたのだった。

第４５章

最近の俺はおかしかった。なぜか。理由は二つあった。

一つは、綾子ちゃんと二人で訪れた縁日での事故現場で見た、生々しい死体だ。あの死に様は未だ消え去ることなく、俺の脳裏に焼き付いている。もう一つはその同じ日に、妹である沙弥佳の体に触れてしまってからだ。

触れたというのも、ただの家族へのコミュニケーションとしてのボディタッチではない。女の体というのを意識してしまったうえでのボディタッチだった。いや、ボディタッチという生易しいものではなく、完全に劣情というのを抱いてしまっていた。今まで、妹にほんの少しでも劣情というのを感じることなどありえないと考えていただけに、妙な息苦しさを覚えていたのだ。

当の沙弥佳本人はそんなこと知りもせず（当たり前ではあるが）、相変わらず俺にべったりだった。俺にしがみついてくる沙弥佳に、あの柔肌の感覚を思い出し、つい、そっけない態度をとってしうことがあった。そのつど、沙弥佳はなんで？というようなきょとんとした顔をしていたが、俺がすまんと謝ればそれを気にすることなく、またがっしりとしがみついてくる、そんなことが度々起こるようになっていたのだ。

俺が無駄に意識しすぎだというのは分かっているつもりなのだが、意識しないようにすると、逆に意識してしまうもののようで、普通にしようと思えば思うほど、ぎくしゃくとした態度になってしまう。きっとあんなことをしてしまったのは、あの縁日の光景のせいで頭がどうかしていたに違いない。そう思うようにしているが、残念ながら、そう思えていないのが現実だった。

そんな風に数日過ごしているうちに三月になり、あっという間に最上級生は卒業していった。俺達在校生は、やけに静かでもの寂し

く感じるようになった学校で、学年末テストを受けた。それが終わったのがつい一昨日のことだ。

しかし俺の周辺、沙弥佳と綾子ちゃんにとってはここからが本番で、明日行われる入試に向けて、追い込み中といった状態だった。まぁ、沙弥佳は相変わらずマイペースに、時折、綺麗な歌声を響かせながらではあるが。

問題は綾子ちゃんで、彼女はやや切羽詰まったような雰囲気で明日に臨もうといった感じだ。人間、あまり気負い過ぎてしまうと、逆に結果が出ないということもあると思い、今日は総仕上げとしてテスト形式のものにして、気を落ち着かせることにしたのだ。俺としても綾子ちゃんがいると、沙弥佳に対して抱いた感情も打ち消せるというもので、一緒にいると気分が落ち着いた。

「はい、終了」

時計を見ながら時間を計っていた俺は、時間になったのを見計らい、宣言した。

「はぁ、緊張した」

「あやちゃん、どうだった？」

そんなことを言い合う二人を尻目に、俺は二人の解答を答合わせする。問題は俺が過去に経験した問題と、参考書などからの二種類を組み合わせたものだ。

「……うし、終わり。うん。沙弥佳も綾子ちゃんもこれなら問題なさそうだ。綾子ちゃんも十分、合格ラインに届いてると思う」

「本当ですか？」

「ああ。あえて難しい問題を作ってみたが、これなら大丈夫だと思うな。良く頑張ったな」

「はい……あの、わざわざここまで付き合ってくれて、ありがとうございます」

丁寧に頭を下げ、礼を言われるのにも慣れてきた。ちょっと前までの俺だったら、いつまでも他人行儀はやめてくれと言いそうなものだが、今ではこれも綾子ちゃんの個性だと捉えている。

「沙弥佳はムカつくくらいに言うことなしだ」
「ムカつくくらいって何よ」
「気にするなよ、言葉のあやってやつだ。とにかく、これで明日への準備は万全だと思う」
テーブル脇に置いたコーヒーの入ったカップに口をつけ、一口すすった。これで俺もできうる限りのことはやった。後は二人、特に綾子ちゃん次第だろう。これればかりは、俺にも誰にもなんとかできるものではない。
「しかし、もう明日か。季節が過ぎるのは早いな」
暗くなった窓の外を見ながら、ぽつりとつぶやいた。何気なくつぶやいたつもりだったが、目の前の美少女二人は、それに食いついてきて相槌を打っている。
「ところで綾子ちゃんは、今日泊まっていくのか？」
「はい。一応そのつもりで来たつもりです。なんていうか……変に緊張しちゃうと、なぜか寝坊してしまいそうになるので」
たまに見せる、ペロリと一瞬舌を覗かせる仕種が実に可愛らしい。
「そうか。まぁ何かあったとしても、最悪、起こしにくるだろうから問題はないと思うけどな、そこらへんは。
それと、今晩は二人のためにカツにすると母さんが言ってたよ」
「そういえば、お兄ちゃんの入試の前の日も確かカツ丼作ってたよね、お母さん」
「言われてみればそうだったな」
二年前の入試前日の夕食は、確かにカツ丼だった。うちに限らず、受験に勝つという意味で、そんな験担ぎをする家庭もあることだろう。それが効いたかは分からないが、結果としては合格して現在にいたるわけだ。
「ま、やれることはやったんだ。心配しなくても、二人なら必ず合格するさ」
俺は二人の目を見つめ、確かな手応えを感じながらそう言った。

翌朝、何やら慌ただしい気配を感じて目が覚めた。時間は七時半を過ぎたところだ。いつもならもう起きている時間だが、今日は妹達の入試のため、学校は休みなのでこうしてのんびりすることができる。

それもあって昨晩は沙弥佳に、今朝は起こしに来なくて良いと伝えたのだが、なんで？と妙な剣幕で言い返されてしまった。理由を言うと、渋々ながらも了承してくれた。

下では主役二人と両親が何か言っているようだが、寝ぼけているのと部屋が閉め切っていることもあって、何を言っているかまでは聞こえてこない。しかし大方、忘れ物はないかとでも言っているのだろう。それに父も、いつも通りに出勤の時間だ。

その喋っている声が聞こえなくなり、俺は二度寝しようとしたところ、カチャリという控えめな音を立ててドアが開いた。

「お兄ちゃん、いってくるね」

俺を起こさないような小さな声で言う沙弥佳に、俺はどことなく嬉しい気持ちになった。なんだかんだで、朝に沙弥佳が起こしにこないと、変な違和感があったからかもしれない。

少しの間だけそのまま寝ている俺を見ていたようだが、下からの声でドアを閉めて、下へと降りていった。

「……」

俺は枕元に置いてある携帯を手探りで掴み、メール作成フォルダを開いた。寝ぼけ気味ではあるが、なんとか文字を打っていく。

『頑張れよ』

一言だけだが、これで十分だ。それを送信し、俺は再び眠りに落ちていった。

「さみぃ……」

三月に入ったからといって格段気温が上がるものでもなく、まだまだ真冬の装備でいつもの通学路を歩いていた。今日は特に寒く、卒業式のあった日の方がまだ暖かかったほどだ。こういう日には、家でのんびりと火燵（こたつ）なんかに入って暖かくしているのがベストだと考えているが、今日は夕方から雨が降るらしく、朝から急激に気温が低くなっているのだ。おまけに明日まで雨が続くようで、明日はもっと寒くなりそうだ。

まぁ、この雨が過ぎれば気温が上がりはじめ、本格的に暖かくなっていくわけだが、そんな中俺は休日だというのに何が悲しいのか学校へ行くことになっていた。傘を忘れていった二人のために、傘を持って行くというためだ。

昼になるかならないかという時間まで寝ていた俺に、いい加減起きなさいと母さんにたたき起こされたのだ。その後に夕方から雨が降るというのを聞かされ、こういうことになった次第だ。

しかし、確かに空はどんよりと曇っていて、今にも雨が降りそうになっている。こういう時、車があれば楽なのだろうがそんなものはないし、なにより免許もない。まぁ、一度だけ中学時代に悪友の連れに促されて、所謂、無免許運転というのはしたことがあるので、なんとかなりそうなものではあるが。

そんなことをぼんやりと考えながら歩いていると、あっという間に学校に着いた。校門の横には、金城高校入学試験会場という文字が書かれた張り紙が貼られている。確か、二年前にもこんな感じのものが貼られていたような気がする。

それを一瞥し校門をくぐると、ちょうど校舎から生徒達が出てきた。時間もすでに夕方なので、試験も終わったのだろう。みんな初々しく、中学生であることは一目瞭然だ。中には引率の教師らしき人物もいて、まさにこれから帰ろうとしているところなのだ。

「おや、九鬼じゃないか。どうしたんだ？」

生徒達が出てきている中、それを指示しようとして担任の小町ち

ゃんも一緒に出てきたところに出くわす。
「どうも。単純に傘を持ってきただけですよ、妹たちに」
「妹？　ああ、もしかして、あの九鬼って言うのは」
「多分、そうじゃぁないですかね。この姓は珍しいし、ここ受けに来てますし」
「そうかそうか、やっぱりそうだったのか。出身の中学も同じだし、もしかしてとは思ったんだが。
それにしても、おまえの妹なんだ、あれ」
いきなり人の妹をあれ呼ばわりされて、むっとしたが、それはおくびにも出さず、どういう意味か聞き返した。
「いや、おまえにすごく可愛い妹がいるというのは聞いたことがあったんだがな、実物を見てみると、とんでもなく美人で思わず息飲んじゃったぞ、私は。
化粧もしてないようだったし……将来は、色々と苦労するかもしれんなぁ、あれだけ美人だと」
俺の基準から言っても、小町ちゃんはなかなかに美人だと思うが、その小町ちゃんをしてそう言わしめるとは、よほどらしい。確かに俺もそうは思っていたが、もう何年も一緒にいるとそれに慣れてしまい、あまりそんな風には思えなくなってしまうが……そういうものらしい。
「それともう一人、同じ中学の子でこれまた美人な子がいたよ。あの二人がうちに来たら、華やかになりそうだな。良かったな、九鬼」
多分、綾子ちゃんのことだろうというのが予想できる。その二人が俺と関係あるというのを知ったら、本当に周りの連中が欝陶しくなりそうなのが、現実味を帯びてきそうだ。
「先生達の間でもいきなり注目株だったからな。今日もそれで随分と立って……と、噂をすれば」
小町ちゃんが視線を向けた先の階段から、二人が降りてきたのが見えた。
「あ、お兄ちゃん」

俺が声をかける前に向こうが気付いたようで、こちらに寄ってきた。もちろん綾子ちゃんも一緒だ。
「よう。どうだった？」
「うん、大丈夫だったと思うよ。昨日やった問題の方が難しいくらいだったよ」
「私はなんとか、ですかね」
沙弥佳は自信満々だ。綾子ちゃんは控えめに言っているが、その顔から察すると、なかなかの出来だったようだ。
「それより、お兄ちゃん。なんで学校にいるの？」
「ん、ああ、ほら」
そう言って傘を見せると二人はきょとんとした顔をして、突然笑い出した。
「お兄ちゃん、私たち、ちゃんと傘持ってきてるよ。折りたたみの」
「なんだそりゃぁ。母さんのやつ、おまえたちが忘れて行ったって言ってたぞ」
くそ、なんてことだ。要するに俺は、母さんに嵌められたのだ。
しかし、なんだってそんなことを……。
「まぁいいか、折角来てくれたんだから、一緒に帰ろうよ」
「さ、さやちゃん。先生が」
綾子ちゃんが指し示した先に、沙弥佳たちの引率の教師がこちらを見ていた。引率なので駅までは送ろうということなんだろう。
「ま、とりあえず先生のところに行ってこいよ。俺はここで待ってるから」
「うん、待っててね。それじゃあ失礼します」
「失礼いたします」
沙弥佳と綾子ちゃんは小町ちゃんに対して、深々と頭を下げて引率教師のもとへ行った。
「なんだ九鬼、例のもう一人の子とも知り合いだったのか？」
「ああ。ちょっとな」
苦笑しながら肩をすくめた。やれやれ、小町ちゃんくらいにはそ

れらしいことを言っておくのも良いかもしれない。彼女との関係は俺が入院するきっかけにもなっているのだ。ほのめかしておくくらいはしておくとしよう。

小町ちゃんに綾子ちゃんと知り合った経緯を簡単に話し、奇しくも俺が入院するきっかけになったことを話すと、小町ちゃんはいきなりニヤニヤとした顔になっていった。

「なんなんだ」

「別にー？　九鬼もなかなかやるじゃんか」

全く斑鳩といい、小町ちゃんといい、なんでこんなに下世話なんだ。俺はため息をついて、試験が終わって緊張感のなくなった生徒たちを見た。彼らのどれくらいが今年の春から俺の後輩になるかは知らないが、それに対していまいち実感がわかずにいた。

「春からの可愛い後輩が気になるか？」

「いや。ただ、どれくらいの奴がうちに来るのか思っただけですよ」

「今年は例年よりも倍率が高かったからな。結構落とさないとならなさそうだよ」

「そうか」

それを聞いても沙弥佳は当然として、綾子ちゃんも落ちるなんてことはないような気がした。なんだかんだで二人とも、やる時はやるタイプなのだ。

「ふふ。あの二人だけは大丈夫とでも言いたげな顔だな」

「こんなこと言える立場じゃぁないが、大丈夫な気がするんだ」

小町ちゃんはただ肩をすくめるだけで何も言わなかった。

「さて、二人が来たみたいだから俺は帰るよ」

引率の教師と話終えて、二人が小走りにやって来た。顔を見る限り、話がついたんだろう。

「それじゃあ、また明日な。ちゃんと学校こいよ」

「ああ」

相槌を打って、小走りにやってきた二人を連れて、校門へ足を向けた。案の定、二人とも教師からの許可も出たらしく、笑顔だ。

校門を出て駅に向かう途中、いくらもしないうちに雨が降ってきた。それもかなりの大降りで、傘をさしていても足は膝のあたりまで飛沫が飛んで、瞬く間に濡れはじめていた。
「どうする、駅まで少し走るか？」
「私はいいけど、あやちゃん？」
「駅まで少しですし、走りましょう」
頷くままに小走りで駅まで走った。駅まではたいした距離ではない。せいぜい走って三、四分だ。だというのに俺達が駅に着く頃には、強く降り出していた雨がさらに強くなり、土砂降りの本降りになっていた。デニムのジーンズも膝のすぐ下までびしょ濡れだ。とはいえ、ここまで土砂降りになるということであれば、走って正解だったと言える。
「はー、すごい雨」
「全くだ。これだけ土砂降りだと電車も少し遅れるかもしれないな。この線はちょっとした雨でも、すぐ遅れるからな」
舌の根も渇かぬうちに、電車の到着が遅れるというアナウンスがホームに響く。
「やれやれ、言ってるそばからこれだ」
俺はうんざりするように、ホームに備え付けてある椅子に腰をおろした。
「あ、そういえばお兄ちゃん」
「どうした」
「うん……今朝はありがとう」
「今朝？　……俺、何かしたっけか？　朝はずっと寝てたが……」
沙弥佳は制服のポケットから携帯を取り出し、何やら操作している。
「これだよ」
「ああ、これか」
見せられたのは、俺が寝ぼけたままで送ったメールだった。時間

は七時三十九分と表示されている。その時間は確か、沙弥佳達が家を出た直後だったような気がする。

「うん。お兄ちゃん、もしかしてあの時起きてた？」

「半分寝てたけどな。なんとなく、おまえの声が聞こえたということくらいしか覚えてないな。それですぐ携帯触ってた記憶も、おぼろげにしか覚えてない」

「そっか……。でも、これのおかげですごく頑張れたよ」

「こんなもんでそれだけ頑張れるなんて、おまえは随分安上がりだな」

おちょくるように言うと、すぐにむくれるようにする妹を笑いながら電車が来るのを待っていたところ、いつの間にか、二人の後ろに黒のスーツを着込んで、お揃いの色をしたサングラスをかけた男が立っていた。

「……？」

怪訝に思ってその人物を見ると、こちらに歩みよってきた。

「九鬼さん、ですね」

突然、後ろから声がしたのに驚いた沙弥佳と綾子ちゃんは、直ぐさま後ろを振り向いて黒スーツの人物を見た。

「あ……はい。そうですけど……」

沙弥佳は、突然かけられた声に驚きと困惑を感じさせるような声で言った。

明らかに堅気でない雰囲気の男に、俺は立ち上がって、沙弥佳と綾子ちゃんを後ろに下がるよう手を引いた。

「いえ、私が用があるのはお兄さんの方です」

「俺に？」

抑揚のない声で黒スーツの人物が言う。サングラスではどこを見てるのか分からないためか、妙な緊張感を感じる。おまけに、この人物の身長は百八十センチ近くある俺よりも、さらに七、八センチは高い。

「あんた、一体何者だ？」

「単刀直入に申しますと、あなたをスカウトしに、でございます」
「スカウト？」
なんのことかさっぱりな俺は、思わず素っ頓狂な声をあげていた。
当然だ。スカウトだって？　一体なんの？　そんな疑問は尽きることがない。
「もしかして芸能界か何かのか？　だったら、そんなもんには興味ないぜ、俺は。
もしそうなら、俺よりもこの二人の方がはるかにそっち向きとは思うがな」
もちろん、二人を芸能界なんぞにスカウトさせるつもりもない。
得体の知れない人物を前に俺は睨むように言うが、黒スーツはそんな俺に鼻で笑いながら言った。
「まさか。そのようなことでスカウトには参りません。あなたをスカウトするのは、私の上司からの期待を見込まれてのことです」
男は俺からの睨みなど全く鼻にもかけず、そんなことを言った。
そもそもなんのスカウトなのか分からない。
「そうかい。第一、なんのスカウトなんだよ。芸能界でもないんだったら、俺をスカウトするような理由なんて、これっぽっちも思い浮かばないぜ」
「そう警戒なさらぬよう。あなたは選ばれたのですよ、その身体能力の高さを買われたのです。それをもって、我が機関に貢献していただきたいのですよ」
身体能力の高さ？　俺の体育の成績でも知っていると言うのか。
確かにそれなりに運動はできるが、そうだとしても、俺よりも運動神経の良いやつはいるはずだ。スカウトするなら俺ではなく、そういう連中に声をかければ良いはずだ。わざわざ俺に声をかける理由としては、いまひとつ足りない。
「そうかい。だけどな、そんな理由、いまどき小学生だってうさん臭いと思うぜ。俺より運動できるやつは、他にもいるんだからな。
それよりあんた、今機関とか言ったけど、そいつは一体なんなん

だ」

「それは来て頂ければご説明いたしますので……大人しくついてきて頂けませんか」

男はそれまでの対外用のものから一変し、途端に有無を言わせぬような危険な雰囲気に変わった。それを感じ取ったのは俺だけでなく、後ろにいる沙弥佳達にも伝わったようで、二人は怯えるように俺の服を掴んできた。

「お兄ちゃん、この人、なんなの」

男が無言で一歩踏み出す。スカウトだかなんだか知らないが、俺をどこかに連れて行こうということらしい。それも無理矢理にだ。

「おい、あんた。俺を無理矢理にでもどこかに連れていこうって魂胆なんだろうが、いいのか？　こんな人目のある場所で、そんなことできるとでも思ってるのかい？」

ここが駅であるのを忘れていたのか、男はその雰囲気に一瞬だが、戸惑いのようなものを見せた。今だ。

「逃げるぞ！」

振り向き様に、後ろにいる二人の手を取って走り出した。

「あっ」

驚くような声をあげたのがどっちなのか、俺には分からなかった。とにかく二人の手を引いて、自動改札も無視して駅の外へ出た。土砂降りの雨の中、俺達三人は傘もささずに走る。走りながら後ろを振り向くと、男がようやく改札を出てきたところだった。

男もまさか、突然俺が逃げるとは思わなかったのか呆気にとられたようで、俺達を追うその足は鈍い。

「く、九鬼さん。どこに行くんですかっ」

土砂降りの雨のため、大声で綾子ちゃんが叫ぶ。

「学校だ。事情を話して匿ってもらおうっ」

駅に向かった時と違って傘をさしていないため、雨水が服の隙間から服の中へと流れていき、瞬く間に服が濡れていく。。

「お、お兄、ちゃん。少し、待ってっ」

「後少しだ、頑張れ」
視界の先に校門が見える。まだちらほらと傘をさした受験生達がいるのが分かった。駅から全力疾走し、ここまではせいぜい一分分とかかっていないだろう。
俺達はそのスピードを落とすことなく校門に入った。校舎には先ほどとほとんど同じ場所に、担任の小町ちゃんがいるのを見つけた。小町ちゃんならなんとかしてくれるかもしれない。
「小町ちゃんっ」
思わず叫んだ俺に、受験生や引率の教師たちが注目してきた。それもそうだろう。こんな土砂降りの中、傘もささずに全力疾走で校門になだれ込んで来たのだ。それだけでも目立つというのに、叫ぶとなればなおさらだ。
「九鬼か、おまえ一体どうした？　そんなに息を切らして……それに傘もささずに」
全力疾走して舞い戻ってきた俺達に、小町ちゃんは困惑したように校舎から出てきた。
俺達は雨に打たれたまま雨よけに入ることも忘れ、両手を膝について肩で息をした。小町ちゃんの問いかけにも、ぜいぜいという呼吸以外、何も言うことができない。
「はぁはぁ、はぁはぁ……変な、奴が……」
やっとのことで絞り出した声も息が絶え絶えで、それ以上はなかなかな言えずにいた。
「まぁいい。ずぶ濡れだから、とにかく職員室にこい。話はそこで聞こう」
小町ちゃんに促されて校舎の中へ入ろうとしながら、チラリと校門の方へ目をやった。さすがの男も、ここまでは来ていない。
それにしても何者だったんだろう。知り合いでないことははっきりしているが、もしかしたら、ヤクザか何かだろうか。そんな連中と知り合わなくてはならなかったような出来事も全く記憶にないし、見当もつかない。

しかし、俺はこの時忘れていた。最近までよく感じていた、漠然とした不安を。仮に忘れていないにしても、それが一体なんであるのか、分からないままであったことだろう。

小町ちゃんに言われてやってきた職員室には、今日あった入試の事後処理のため、教師達がせわしく行ったりきたりしていた。

俺達はずぶ濡れになった服を乾かすため、職員室脇にある教師達の憩いの場所と思われる革張りのソファーに座り、昔ながらのストーブを前に暖をとっていた。

「それにしてもさっきの人、一体なんだったんだろう？」

沙弥佳が、小町ちゃんの入れてくれたココアのカップを両手で持ちながら、ぽつりと言った。

「さぁな。俺にもよく分からん」

「でも、九鬼さんのことをスカウトしに来たって言ってましたよね？」

綾子ちゃんに相槌を打ちながら、俺ももらったココアを一くち口にふくむ。

二人とも学校指定のジャージを着込んでいる。俺も教室までジャージを取りに行き、三人揃ってジャージ姿になっていた。

小町ちゃんには駅でのことを一部始終、全て話し、念のため家に連絡を入れてもらった。俺達からも連絡してみたが繋がらず、学校からの連絡であれば、こちらから説明する手間も省けると思ったからだ。

「九鬼。一応、こっちからも連絡を入れておいたが繋がらなかったよ。もし帰るまでに連絡がこなかったら、私がおまえ達を家まで送るつもりだが、それでいいな？」

「ああ、ありがとう小町ちゃん」

「こら。先生と呼べ、先生と。ま、事情は分かったから、しばらくはここでゆっくりするといい。そっちの二人もな」

「ぁ、すみません。お忙しいのに……」

沙弥佳と綾子ちゃんは二人して立ち上がり、頭を下げた。
「何、いいさ。にしても、二人とも良くできた子だな。特に君は、九鬼と本当に血が繋がってるのかい？」
「どういう意味だ、それは。正真正銘、俺の妹だぞ」
「ふふ。まぁ、愚兄にして賢妹……よくあることじゃないか」
「……」
そりゃ、俺は沙弥佳よりも成績が良いわけではない。正直な話、俺が沙弥佳の同じ歳の成績を比べたら、本当に同じ血筋なのかと目もあてられないものかもしれないが、そんなに酷くはないと思う。単純に、沙弥佳の方が良すぎるだけなのだ。
「くっくっ。不満そうな顔だな。別に成績だけのことを言ってるわけじゃないぞ？」
俺はため息をつきながら、雨が降りしきる外へ視線をうつした。急激に気温が下がって、暖房がないところは室内でも肌寒い。沙弥佳と綾子ちゃんは早速小町ちゃんと意気投合したのか、雑談を始めている。
俺は窓に叩きつけるように降っている雨を見ながら、先ほどの黒スーツの男は去年起こったことと、何か関係があるのではという考えに思いを巡らせていた。
思えば、真紀の正体だって良く分からない。あの女は絶対に口を割りそうにないので、問い詰めたって時間の無駄だろう。
俺は真紀とあの黒スーツの人物と、何か関係があるのではと考えてみた。今井の件にしたって、真紀は今井のことを知っていたし、二度と会うこともないとも言っていた。とてもじゃないが、普通の女子高生が言うような台詞ではない。あの女とさっきの黒スーツ。何かしら関係があるような気がしてならない。
それに合わせて、斑鳩のことも気になる。そう考え出すと、学校で斑鳩と真紀が一緒にいたのも、いや、元々関係があったんじゃないのか？　そう考えてしまっても仕方ないのではないのか、と次々に疑念は膨らんでいく。

証拠はないし、勝手な思い込みということもあるかもしれないが、一度、真紀を含めて探りを入れてみた方が良い気がする。
沙弥佳と小町ちゃんが、再度うちに連絡をいれているのを横目に、俺は窓の外を見つめながら再びココアを一口すすった。

午後六時半。俺達は今、小町ちゃんの軽に乗って家の近くにまで送ってもらったところだった。
「本当にここでいいのか？」
「ああ。その角を曲がったら真っすぐだし、ここらは一度入ると一方通行になるから、車は色々と面倒になると思うからな」
「そうか、分かった。すぐとはいえ、気をつけるんだぞ？」
「そうしますよ。それじゃぁ、また明日」
「先生。本当にありがとうございました」
「ありがとうございました」
俺につられて、沙弥佳と綾子ちゃんも礼を言い、車を降りた。雨は一時に比べたら小康状態だが、まだ強く降っている。
「それではな」
ドアを閉める前にそう言い残し、小町ちゃんは車を出していった。
「面白い人だったね、お兄ちゃんの担任の先生」
「それは認めるが、色々と苦労もあるけどな」
「クラスの担任に先生になるんだったら、ああいう風な人がいいなぁ」
「綾子ちゃん。外面で惑わされない方がいいぞ。小町ちゃんはああ見えて、姐御肌のように見せかけた、ただの人使いが荒いだけの教師だぞ？」
去って行った小町ちゃんの話題で盛り上がりながら、角を曲がった。この角を曲がれば、家まで真っ直ぐなのだ。
「あれ？　うちの前に車、止まってる？」

「そう、みたいだね。でも、さやちゃんちのじゃないね。お客さんかな？」

角を曲がって視界の先、うちの家の前と思われる場所に一台の車が停まっているのが見えた。俺達は先ほどのこともあって、怪訝に思いながらもその車の方へと歩いていく。

「やっぱりうちの前に停まっている……」

車は新車同然かのように綺麗にされていて、当然中には誰もいなかった。俺は念のため、携帯を取り出して母と連絡をとってみた。電話の呼び出し音が聞こえるが、学校にいた時と同じで、出る気配は一向にない。そもそも、こんなにコールしているにも関わらず、母が出ないというのは今までになかったことだ。

（まさか……）

嫌な考えが頭をよぎる。去年あった、今井の件で何度も体験した、あの嫌な感覚だ。

「母さんはなんで出ないんだ」

悪態をつきながら足早に門を踏み越え、玄関のドア横にある呼び鈴を押そうとしてやめた。

「お兄ちゃん？」

先ほどのこともあって、沙弥佳達も不安げだ。

俺は人差し指を口にあて、静かにするようジェスチャーする。そっとドアの取っ手に手をやり、音を立てないように少しだけ開ける。鍵はかかっていなかった。

「開いてる……」

家に反応がないのに鍵だけは開いている。母さんが鍵を閉め忘れて出掛けた？　いや、少なくとも俺の記憶の限りでそんなことは、ただの一度だってない。

その隙間から家の中をそっと覗く。玄関には見知らぬ黒い靴が一足あり、廊下の先にあるリビングから何やら音がしているのが聞こえる。

一旦ドアを閉め、沙弥佳達の方を振り向いて言った。

「誰かは知らないが、中に誰かいる。表に停まってる車の人物かもしれないが、母さんと連絡が取れない今は、強盗の可能性もある。念のため、おまえたちはここで待ってるんだ」

「ご、強盗って……もしそうだったら、警察に言った方がいいんじゃない？」

「待ってられるかよ。それに母さんが電話に出ないのは、もしかしたら強盗のせいということも考えられるんだ。

そんな時のためにも、おまえたちはここにいるんだ。もちろん、俺の考えすぎであるに越したことはないが、何かあったら時は、警察を呼ぶなりしてくれ」

「で、でもお兄ちゃん……」

「いいな」

有無をいわせぬよう、二人の目を見てはっきりと言った。

「う、うん……」

「心配するなって。ここ数カ月色々あって、俺がナーバスになりすぎてるだけかもしれないんだ。ま、念には念をってやつだ」

肩をすくめ、俺は再び音を立てないようにドアを開けて、身をすべらせるように中に入った。

リビングと廊下を遮る曇りガラスのついたドアは完全に閉じられておらず、中からは誰かの話し声がまだ聞こえている。

「……で……す」

騒がしい物音が聞こえないことから、多分強盗の類ではなさそうだ。かといって母と連絡が取れない今、最悪の事態を想像してしまうため、まだ安心はできない。

俺は息を殺し、足音も立てぬように廊下を進んだ。床はフローリングになっているため、靴下のすべる感覚がうまい具合に、歩く音を消してくれている。俺は一度深呼吸をして、わずかに隙間の開いたドアを一気に開けた。

「あら、あんたいつの間に帰ったの？」

突然勢いよく開いたドアに驚くような顔をしながら、母の遥子が

俺を見た。
「……母さん、いたのか」
そんな母を見てほっとしたのもつかの間で、リビングには先ほど駅で出会った、あの男がいたのだ。
「おまえはっ」
不敵に笑う男を前に、俺はつい声を荒げた。家の前にあった車は、間違いなくこの男が乗ってきたものだ。だが、その男がどうしたって、ここで母と話をしていたんだ。こいつの目的はなんなんだ。
「ここで何してるんだ。あんた、一体何者だっ」
俺のそんな様子に母は、怪訝にして見せながら俺を窘めるように言った。
「こら。お客様に向かってなんて口聞いてるの」
「奥様、どうぞお気になさらず」
男はそう言って、座っていたソファーから立ち上がる。
「先ほどは失礼をしましたね。私としても、まさかあそこまで警戒されてしまうとは思いもしなかったもので」
男が駅のことを詫びながら、オールバックにした頭を下げた。そこには駅で会った時とは違い、人を威圧するような雰囲気や態度は一切感じられない。まさしくスカウトマンという風だ。
「そんなことはどうでも良い。なんであんたがうちにいるんだっ」
うっすらと、不敵に笑う男に俺は、さっき以上に声を大きくして怒鳴る。
「ちょっとどうしたのよ。いきなり帰ってきたと思ったら、何そんなに興奮してるの？　それと沙弥佳と綾子ちゃんはどうしたの。一緒だったんでしょ？」
事情が飲み込めていない母は、目くじらを立てながらそんなことを聞いてくるが、俺は構わず目の前の男を睨みつけた。母はそんな俺の様子と態度に、客だと思っている男に平謝りしている。
依然として正体が知れない男に対し、俺は柔和な態度など取れるはずもない。というのも、駅で一瞬だけ見せたあの雰囲気。あれは

間違いなく、あの今井と同じ類のものだった。その体験から、この男は普通じゃない、そう直感したのだ。

そしてスカウトなどと称し、こうしてうちにまで上がり込んでいるのは、どうにも好きになれない対応だ。もちろん、母がなんともなかったのは安心したのは事実だ。きっと出掛けていて着信に気付かなかったのだろうし、良く見れば、家の電話にも留守録があったことを示すランプが点滅している。間違いなく、俺達が電話したものだろう。

帰ってきた母がそれに気付いたのか、そうでないかまでは分からないが、それを聞く前にちょうどこの男が現れた。多分そんなとこだと思う。

だとしても同時に、これは神経質になりすぎているのかも知れないが、まるで今、人質を取られているかのようにも思えるのだ。もしこの男が本当に今井と同類だとしたら、この仮説は決して考えすぎとは思えない。

「そうそう申し遅れました。私、黒田（くろだ）と申します。以後お見知りおきを」

黒田と名乗った男は、腰から折って、丁寧に頭を下げたのだった。

第４６章

今日のように寒い日は、空気が乾燥しているためにいつもなら晴れていれば遠くにうっすらとビルの赤い灯りが見えるが、生憎の雨のため、今日は何も見えない。夜の暗闇にまぎれ、雲が下りてきているためだ。

いつだったか綾子ちゃんと一緒に買ったジャズのＣＤを聞きながら、ぼんやりと夕方のことを考えていた。あの黒田とかいう男のことだ。

黒田は俺を、自身の所属する機関にスカウトするべく、わざわざうちにまで来たらしい。それは間違いない。問題はここからだ。あの男が言うには、自分は公的機関に秘密裏に作られた組織の人間だというのだ。公安のようなもの、だと言っていたが、ようなものとは要するに、公安そのものではないということだ。

奴の話は、肝心な名称などはぼかして話していたため、その話す内容と事実は、かなり違うものと考えて良いはずだ。しかし、人を守ることに繋がる仕事であり、君のような人材が欲しいとは言っていた。これは本当かもしれない。

だがそれは本当だとしても、たかだか高校生である俺をなぜ選んだのかは気になって黒田に聞いてみたが、いわく、俺には常人にはない、特別な才能があるのだという。それが何かまではいうことはなかったがどれだけ勉強し知識を蓄えても、どんなに体を鍛えたとしても、常人には培われることはない素質、とだけ答えていた。それと、高校生だとかそんなことは一切関係がないとも。

ずいぶんな謎掛けだとは思うが、黒田はそれ以上は何も答えることはなかった。それに奴の行動には、スカウトしにきたというわりにどんな仕事なのかも全てぼかされて、一体何をしに来たのかも良く分からない。ただ、まるでいう通りにしなければ、母さんをどう

にかするとでも言わんばかりの状況を作りだしたのにも、また疑問が残る。

一言でいうと、奴はなんとも不気味だということだ。俺が学校から小町ちゃんに送ってもらっている間に、一応母さんにもその概要を話したようだが、秘密裏に作られた機関ゆえ、式な名称などはやはり伝えられないとのことだった。

これが人づてに聞いた話なら、なんとも眉つばな話にも思えるが、どうにも奴の話すそこには、真実味が感じられて仕方がない。

コンコン

そのとき、ドアをノックし間いれず沙弥佳が入ってきた。こいつは俺に何かしら変化があると、必ず部屋にやってくる。もはや慣例と言って、差し支えない。

「よう、どうした」

「ん、特に何かあるってわけじゃないんだけど」

「そうか」

「うん」

短いやり取りの後、俺達の間に沈黙がおりた。沙弥佳からしてみれば、本当は何かあるはずなのだ。間違いなく夕方の黒田のことであるのは、聞くまでもない。

沙弥佳と綾子ちゃんには、黒田との間で話されたことはいっていない。こんなことを言ってもどうしようもないし、俺にしたって、うかつにそれを信じるほど馬鹿ではない。たとえ、それが真実であるかもしれないにしてもだ。

「あー……なんだ。入試、受かってるといいな」

沈黙に堪えられなかった俺は、流れているCDのボリュームを少しだけ絞りながら言った。沙弥佳は一言頷きながら、ベッドに腰かける。

「……おまえ、夕方のこと気にしてるんだろう？」

「……うん」

こいつは俺のことはとにかくなんでも知っておきたい性分だ。し

かも家に来ていたのがまさか、あのスーツの男とは思わなかっただろう。もちろん、俺もそうだったが。それだけに、俺と黒田の間で交わされた話が気になって仕方ないのだ。

結局あの後、ほんの十分か十五分そこらで黒田は帰っていった。その間も、沙弥佳と綾子ちゃんは玄関の外だったのだ。家の中から黒田が出てきた時には、もしかすると恐怖を感じたかもしれないし、何事もなかったことに逆に不審に思ったかもしれない。

「実は俺にもよく分かってないからさ、あんまり気にするなよ。まぁ、あの黒田って男が俺をどこだかの機関に入れたいってのは、本当だったみたいだけどな。それ以上は特に話してないぞ」

「うん……」

……まずったな。いつもなら、ここからあれこれと聞いてくるのに、俺への受け答えもたった一言とは。

俺は小さくため息をついて、ベッドに腰かけた沙弥佳の隣に座った。二人分の体重によって軋んだスプリングのせいで、沙弥佳もそれに合わせてわずかに上下に揺れた。

「……おまえのことだから、何かと心配してくれてるんだろうが、俺は大丈夫だ。別にやつの口車にも乗せられることもないしな」

「うん」

顔をやや下から覗き込むようにして言った俺に、沙弥佳は切れ長の目を横に流すように見た。

その仕種は俺が知りうる限り、初めて見せるもので、今までの沙弥佳のどんな表情でも、仕種でもなかった。そんな初めて見せた表情に、俺は思わず息を飲む。こんなのを見せられたら、どんなに屈強な男でも一瞬で堕ちてしまうような、そんな表情だった。

「お兄ちゃんさ、前に話した私が見た夢のこと、覚えてる？」

「夢？」

「そう。お兄ちゃんがあやちゃんのストーカーを追っかけてた時に私が見た、夢の話」

沙弥佳は表情を崩さず、目も瞬き一つせずに俺を見つめた。突然

の振りに少し考えたみたが、確かにそんなこともあったのを思い出した。俺が青山たちと共に蒲生の家に行った日、意図せず今井と鉢合わせて格闘した日のことだ。帰った夜に、俺に抱き着きながら、最近見るという夢の話を沙弥佳はしていたはずだ。

「そんなこともあったな。確か、俺とおまえが何かに巻き込まれて……って夢だったか。でも、そいつがどうしたんだ？」

「最近ね、またあの夢みたいなのを良く見るんだ……」

「みたいなの？」

「うん。自分でも良く分からないんだけど、夢の中ではなんでかそれがあの時に見た夢の世界と同じだって分かってるんだ……。でね、昨日の夜にまたその夢を見ちゃったんだ……」

「……そうか」

瞬きもせずに、切れ長の目でそんなことを表情一つ変えずにいう沙弥佳に対し、俺はたった一言、それだけしか言えなかった。そんな風に見つめられたままだと、そうなっても仕方ないのかもしれないが、沙弥佳の有無をも言わせない雰囲気は、こちらの思考をも停止させてしまうようだった。

「……これは昨日見た夢じゃなくて、別の日に見た夢の中で出てきたものなんだけど、今日会ったあの黒いスーツの人がね、私のその夢の中に出てきたの。夢はすごく断片的だし、最初は見間違いかとも思ったんだけど、あの人の行動とか雰囲気とかが、そうじゃないって……夢に出てきた人だって。だからか分からないけど、あの人とお兄ちゃんは、関わっちゃ駄目だって、そんな風に思ったんだ。

その夢の中では、あの人に連れられてお兄ちゃんは、どこかすごく遠くに行っちゃうの。どんなとこかは分からなかったけど……とにかくお兄ちゃんとあの人は、絶対に関わったら駄目なんだって……そう思っちゃったの」

最後の方は半ば悲痛さすら感じさせ、何かを訴えているかのように聞こえた。俺が遠くに行くだって？　あの男と関わることで？　まさか。そんなこと、あるはずがない。俺はあんな男と付き合うな

んざ、毛頭ないのだ。
「大丈夫だよ。前もいったろ？　俺はおまえとは離れないって。そりゃぁ、いつまでおまえと一緒にいられるかは分からないが、それでも俺とおまえが、真に離れることはないんだ。
第一、そいつは夢の話だろう？　そんなのに振り回されるなんて、ちょっと、らしくないんじゃぁないのか。いつもだったら、笑い飛ばすような話だ」
沙弥佳はこの時、やけに不安そうな表情をしていて、今にも泣き出しそうな顔になっていた。
「お、おい、沙弥」
全てを言い終える前に、身体に沙弥佳の腕が廻された。
「――っ」
そのまま俺は、沙弥佳によってベッドの上に倒される。されるがままだった俺は、一瞬何が起こったのか分からなかったものの、それでいながら頭のどこかでは冷静だった。
それにしても、沙弥佳がこんなことをするなんて一体どうしたというんだろう。そんな疑問が浮かびはしたが、今はそれを言うべき時ではない。今はこいつの好きなようにさせてやろう。
こういう時は、いつものようにそっと頭に手をやるというのが、俺達の暗黙の了解だったからだ。
「……」
今日の入試のために髪を切った沙弥佳だったが、それでもまだ十分に長いといえるその髪を、いつものようにゆっくりと梳いてやる。こいつはこうされると、気持ちが良いと綾子ちゃんに話していたのもあって、俺はこうしてやるのが一番だと思ったというのもあった。
「……ごめんなさい」
「ん？　なんだ、いきなり謝って」
「違うの……本当はそうじゃないの」
「今こうしてることがか」
沙弥佳は俺の上で、首を振った。

「なら、俺がどこかに行くとかって話か？」
それにも首を振った。
「違うの。その話は本当だよ……」
「なら、何に謝ったんだ？」
当然の疑問を口にすると途端に口をつぐんだようで、代わりに俺を抱く手に力がこもる。
「夢の話は本当なんだけど、それじゃないの、私が本当に嫌だったのは……不安だったのはそうじゃないの。
……お兄ちゃんと私がね」
そう言っていったん言葉を区切った。俺も次の言葉を待ちながら、部屋の天井を見た。
「……お兄ちゃんと私がね、こ、殺し合っちゃう夢だったの。何年後か分からないけど、大人になっててね、お互い銃を突き付け合ってて……」
「俺とおまえが？」
思いもしない言葉に、天井を見つめていた目を沙弥佳の方へやった。胸に顔を埋めながら、沙弥佳は小さく頷いた。
「なんでだ？」
今度はそのままで、小さく首を振った。
「分からないよ、私にも……。でも今日あの人が現れてから、昨日見た夢が、もしかしたら本当になるんじゃないかって、すごく不安で……。
だって、私、夢の中のことなのに、持った銃の感触とか重さとか、目を覚ました時に覚えてたの。だってそんなのおかしいよ。私、今まで銃なんて、ううん、モデルガンだって持ったことないのに。
それ以外にも、その時の夢の中の光景がすごくリアリティがあって、お兄ちゃんが苦しそうな顔をしてた……。なのに私は、最後にこう言うの。『さよなら、私の兄だった人』って……。そんなの有り得ないよ。私がお兄ちゃんにそんなこというなんて。
ねぇ、私とお兄ちゃんはちゃんと血は繋がってるよね？　他人だ

ったわけじゃないよね？　なんであんな夢……」
　いつの間にか沙弥佳は息を荒くし、興奮していた。そのうえ、鼻をすする音も聞こえた。きっと、感極まって泣いてしまったのだろう。
「あの人が現れた時、もしかしてあの夢も本当になるかもしれないって考えたら私……」
　沙弥佳は普段、少なくとも俺の前ではいつも笑っているので、忘れてしまいがちだが、ちょっとしたことで良く泣くやつだったと思い出した。言葉にしてしまうと断片的になってしまうものでも、たとえそれが夢だとしてもそこにリアリティがあると、それは言葉では、その時感じたことの十パーセントだって伝えられないものだ。それがショックの大きいものであればあるほどだ。当然、それは良い意味でも、悪い意味でも。
　こんな風にするというのは、よほどその夢にうなされたなりしたのかもしれない。もしかしたら綾子ちゃんに聞いた、最近沙弥佳が学校で上の空だという理由も、本当はここにあるのかもしれない。
「……なぁ。最近、沙弥佳がよく上の空でいるって話を聞いたけど、もしかしてそれが原因なのか？」
　ただじっと、時折鼻をすすらせている沙弥佳が喋りだすのを、何も言わずに待った。
「……それ」
「ああ」
「その話、あやちゃんから聞いたんだね」
「ま、な」
　そっかと短く言い、沙弥佳は俺の上から頭をあげて、身体に巻き付けていた腕を離した。そして、やはり涙を流していたのか、俺からはなるべく見せないように目元を何度も拭いた。それからしばらくの間、何も言わずに何度も上を見たり、下を見たりした後で、ようやくぽつりと呟いた。
「ね、お兄ちゃん」

「ああ」
「お兄ちゃんってさ、あやちゃんのこと好きでしょ？」
「はぁっ！？　な、何言い出すんだ、突然っ」
何を言うかと思えば、こいつはいきなり何を言い出すんだ。思わず俺は声を大きくしてしまっていた。くそ、これでは肯定しているみたいだ。
「べ、別に俺は綾子ちゃんのことは……」
「あは、お兄ちゃん。それ、そうだって言ってるのと同じ反応だよ」
小憎らしい顔をして見せながら、沙弥佳はふふんと鼻をならすかのように笑う。一体なんなんだ、こいつは。つい、今の今まで俺に抱き着いて泣いてたかと思えば、今度はわけの分からないことを言い出して人を混乱させようとするなんて。
「やかましい。大体、そういうおまえこそどうなんだ。こいつも綾子ちゃんから聞いたことだが、最近、おまえは学校で注目の的らしいじゃないか」
「うん、らしいね」
「らしいっておまえ、随分と他人事だな。沙弥佳なら彼氏の一人や二人、簡単にできるんじゃぁないのか」
「そうだとしても、全然興味ないよ。どれだけ注目されたって私、そんな気ないもの。それじゃ意味ないでしょ？」
「……ま、それもそうか」
確かにその通りだ。周りがどれだけ変わったと囃し立てようが、本人にそれを意識してやろうという意思がなければ、結局のところ、色恋沙汰というのは意味がない。まぁ、その恋愛というのをまともにしたことがない俺がこんなことを言っても、あまり説得力がないかもしれないが。
「沙弥佳に春が来るのはいつかねぇ」
苦笑まじりにおどけてみると、急に今までの明るく振る舞った雰囲気から一転、突然顔を赤らめながら、俺を見据えた。
「……私さ、周りが変わったっていうのが本当だとして、その理由、

なんとなく分かるっていうか、知ってるかもしれないんだよ」
「そうなのか？」
「うん。私ね、好きな人、いるんだ」
どこか訴えかけるような眼差しで、沙弥佳はそういった。まるでその対象が俺であるかのように。
しかし、俺はすぐにその考えを打ち消した。まさか、そんなことはいくらなんでも有り得ないだろう。第一、沙弥佳はまだそれが誰かいっているわけでもない。
「……そうなのか？」
「うん。ね、誰か気になる？」
直前にまで見せていた真顔から一転、また猫か何かを思わせるような顔で、沙弥佳が体を再び擦り寄せてきた。
「……別に。まぁ、おまえがそう思ったんなら、いいんじゃぁないか？　だが、そいつが斑鳩みたいなタイプなら、俺は絶対に許さないけどな」
言った後で、あっと小さく呻いた。何をいってるんだ俺は。別にとか言っておきながらそれでは、気にしてるみたいだ。
「あはは、お兄ちゃんなら言うと思ったよ。でも大丈夫。人柄とか性格は目に狂いはないはずだから」
「なら良いんだがな。この際だから、そいつがどんな奴なのか聞いておこうか」
自信ありげに言った沙弥佳に、俺も聞き返した。もう十何年も兄妹をしているのだ、いまさら言ったことを撤回したとしても、どうせ本心は見抜かれているだろう。だったら、そいつがどんな奴なのか探っておいて損はないはずだ。
「あはっ、やっぱり気になってるんだ」
「やかましい。それでどうなんだ」
再び、先ほどまでの猫を思わせるような顔をした沙弥佳は、そいつのことを思いだしながら、語り始めた。
「その人の全体的なイメージはねぇ、ずばりお兄ちゃん、かな。雰

囲気がすごく良く似てるんだぁ」
「俺に？」
どんな奴かと思えば、まさか俺のようなタイプだって？　正直、こいつはあまり笑えない。まさかよりによって、俺のような奴を選ぶなんて、こいつは何を考えてるんだ。
「身長もね、お兄ちゃんと同じくらいあるんだ。体重はちょっと分かんないけど、体格もすごく良く似てるし、多分同じくらい。だから最初、お兄ちゃんと思っちゃったくらいだよ。それに話し方とか、どことなく仕種も似てるんだよ」
「そいつ、同級生か？」
「ううん。お兄ちゃんと同じ高校生だよ。それも春から三年生になるの」
「どこの学校に通ってるんだ、そいつは。そこまで俺と共通点があると、逆に興味もっちまうな。一度会ってみたいもんだ」
「……そのうち、会えると思うよ」
でも、と付け足し、会わない方が良いのかもしれないねとも言った。どういう意味だ、それは。
「ま、そいつが本当に俺と似たようなやつだとして、もしも中身まで俺と同じだったら、衝突は避けられなさそうだがな」
くつくつと笑い、そいつのことを皮肉った。片や妹として、片や恋人として一人の人間に慕情をもった人間同士、上手くいく時もあるだろうが、時にそれがゆえに間違いなく衝突してしまうだろう。それがお互い自分に似たり寄ったりの人間であれば、嫌でも見たくない自分の嫌な部分も見ることになるのだ。それは間違いなく起こる。間違いなくだ。
「ま、つまるところ、おまえにも春が来たかも知れないってところなんだな」
「だけどね、その人も好きな人がいるかもしれないの」
「なんだ、だったら話は簡単だ」
「どういうこと？」

「単純な話さ。おまえがそいつを奪い取れば良い。好きな奴がいるかもしれないってことは、まだ付き合ってるわけじゃぁないんだろう？　だったら、まだまだチャンスはあるぜ」

沙弥佳は一瞬曇ったような顔になり、少し戸惑いがちな声で言った。

「……いいのかな、本当にそんなことして。だって、その人には私のことを好きではいても、あくまで友達っていうか、妹的存在でしかなさそうなんだよ。

勝ち目なんて、あるかな……その人には明らかに本命の子がいて、その子もその人のことが好きみたいだし」

「なんだそいつ、両想いなのか。だったらとっとと付き合っていればっと、失言だな」

奪い取れなんて言っておきながら、それを真っ向から否定するようなことを言うのは、さすがに憚れられる。

「ま、そいつがまだ付き合っちゃいないんだったら、十分、おまえにもその権利はあるってもんさ。やるだけやってみろよ。そいつが俺に本当に似た奴であるなら、俺もアドバイスくらいはしてやるからさ」

そういい終えたあと、ふと俺達と綾子ちゃん、それに斑鳩と遊んだ日のことを思い出した。あの時はなぜだか、斑鳩が沙弥佳に対して口説こうとしているのを見て、なんとも嫌な気分になったものだった。不思議と今回はそんな気分にならなかったのだ。

まだそいつとは顔を見たこともなければ、名前すら知らないからかもしれない。もしくは、まだ俺がそいつに対し、なんの感情も持っていないからかもしれない。やはりあの時に抱いた感情は、斑鳩が沙弥佳を口説こうなどということへの、ただの嫌悪感からくるものだったのだろう。

しかし、とも思う。だとしたらあの時、俺が沙弥佳の体に触ってしまったときのことは、どう説明するべきだろうか。あの時に見た、沙弥佳の身につけていた下着はようするに、そいつへの恋心が原因

なわけだ。いつもいつも、お兄ちゃんと慕う沙弥佳に、あんな風に心境の変化をもたらせたそいつへの嫉妬……とでもいうのか、あれはどう説明すればいいのか……。

ため息をついて冷静になる。馬鹿馬鹿しい。そんなのはきっと気の迷いに決まっている。事実、今はそんなことなどなんとも思っていないし、気付けば、この数日間に変に沙弥佳を意識していたはずなのに、今はこれと言って、意識すらしていないではないか。やはり俺が変に意識しすぎていただけなのだ。そうであるはずだ。

「……うん、分かった。お兄ちゃんがそういってくれるなら……そういうなら、私、頑張ってみるよ。たとえそれで失うものがあったとしても」

そう告げた沙弥佳の小さく囁くような声。そこには今までにないほどの、決意のようなものを感じさせる言葉だった。

沙弥佳と綾子ちゃん二人の高校入試の日から、早いもので十日も過ぎようとしていた。今日はその合格発表の日で、明日には中学の卒業式ということになる。毎年のことなのだろうが、教師達は師走よりも師走な状態だろう。

そんな中、自分の受け持ったクラスの生徒達の卒業というのは、彼らにとっても肩の荷がおりる節目ともいうべき日だと思う。

沙弥佳は、合格発表の今日、いつになくそわそわとしていた。それもそうだろう。二人にとって、人生の節目の一つにもなるのだ。

「朝っぱらから、そんなに緊張するなよ」

今日は卒業式前、最後の登校であるが、そんなこともあって緊張した面持ちの沙弥佳に俺は、苦笑しながら声をかけた。綾子ちゃんなら分かるが、受験の日はあんなに自信満々だったというのに、沙

弥佳までそんなに緊張することはないと思う。
「気楽なお兄ちゃんは黙ってて。それより早く学校行かないと」
「おっと、そうだったな。それじゃぁ、帰ってきたら結果、教えてくれな」
結果がどうあれ、明日の卒業式が終われば二人は春休みだ。俺はまだ来週までは学校がある。今は目先のことでいっぱいいっぱいの沙弥佳だが、来週には俺と登校できないということに、あれやこれやとブーたれるに決まっているのだ。
ちなみに合否は今日、学校で担任から伝えられるのだそうだ。
「ほらほら、あんた達。早く行かないと遅刻するわよ」
「ん、ああ。それじゃぁ、いってくるよ」
「いってきまーす」
「はい、いってらっしゃい。あんたも綾子ちゃんも、きちんと受かってるといいわね」
母にいつものように見送られ、俺達は家を出る。しばらく行くと珍しいこともあるもので、沙弥佳のやつがいつもなら腕にしがみついてくるのに、しがみついてこないことに気が付いた。歩くペースもいつもより遅く、俯くように歩いていた。俺は小さくため息をつき、歩幅を沙弥佳に合わせた。
「やれやれ、おまえって奴は……」
沙弥佳の前に、いつもしがみつかれている右腕をそっとやった。
「ぁ、お兄ちゃん」
「ったく。おまえは気を張りすぎだ。もちっと楽にいけよ。おまえは俺の中学時代よりも、はるかに成績がいいんだ。大丈夫だ。おまえ……沙弥佳なら必ず受かってるさ」
「お兄ちゃん」
俯かせていた顔をあげ、安堵ともとれる表情をしてみせた後、いつものような、大好きというのを表現しているものと違い、控えめながらに、そっと腕を絡めてきた。
たかだか受験一つでこんなにまでこいつがしょげてしまうなんて、

不思議な気持ちにはなるが、だからこそ何も言わずいつものようにしてやるのが良いと俺は感じた。
「ありがとう……お兄ちゃん」
「いいさ」
特に急ぐこともなく、いつもより少しだけ歩くスピードを緩めながら、いつもの道を俺達は歩いていった。

綾子ちゃんの一件以来、久しぶりに中学校まで沙弥佳を学校まで送り届けた。中学生活最後の平常日というのもあって、俺はご褒美という気持ちでそうしたのだ。とはいっても午前中で学校は終わるそうだが。
沙弥佳には、綾子ちゃんによろしくいうように言づておいて、俺は足早に駅へと向かった。中学校が見えなくなったところで俺は角を曲がる。本来なら必要のないことだが、送り届けている時にそこに見知った奴の姿があったためだった。
「こんな朝っぱらからご苦労なこったな」
そいつを見るやいなや、俺は吐き捨てるように言った。
「おはようございます」
そう言って丁寧に腰から曲げて頭を下げたのは、あの黒服を着た黒田だった。この男は最近ことあるごとに俺の近辺に出没するようになり、俺以外には分からないような場所にひっそりと佇んでいるのだ。
俺も俺で、なかばストーカーにでもされているような気分になりながらも、結局は黒田のいそうな場所を特定してしまっているのだが。
「悪いがあんたのいる機関とやらには、入るつもりはない。さっさと消えてくれ」
黒田は下げていた頭を上げ、口元をわずかに吊り上げて言った。

「ふっ。でしたら、わざわざ私のところに来る必要などないでしょう。こうして来るということは、あなたにもそのような意思がおありということなのでは？」
「そっちの都合の良いように解釈しないでくれよ。俺はそんなこと思っちゃいない。あの日から外に出るたびに、あんたを見かけるようになって以来、いい加減鬱陶しくなっただけだ。
　このまま、これ以上俺に付き纏うってんなら、こっちもしかるべき処置をとらせてもらう」
「しかるべき処置とは警察に行く、といったことでしょうか」
「さぁな」
　黒田の問いを受け流しながら、俺は踵を返した。
「おや、どこに行かれるのです」
「見りゃぁ分かるだろ、学校だ。とりあえず、忠告はしておいたからな」
「では私からも一つ。あなたはどのみち、私に着いてきていただくてはならない時が来る、ということだけ伝えておきましょう」
　俺は眉をひそめ、顔だけ黒田の方を向いた。奴の顔には、まるでこれから起こることを予見しているかのような、気に入らない微笑が浮かんでいた。

　もう授業も今日と明日、あとは来週の何日かで今年度も全ての行程が終わる。そしてその今日の授業も、さっき終わった。そんな俺は今、青山の家に来ていた。
「これがその例の人？」
「ああ」
　青山がパソコンの画面を指差しながら聞いてくる。その先には、例の人と呼ばれた男、黒田の姿があった。これは今朝、沙弥佳を学校に送り届けたあと、黒田と会ったときのものだ。

そう、俺は二、三日前に青山に頼んで、綾子ちゃんの事件の時に手に入れた、あのカメラをバッグに目立たぬように取り付けておいたのだ。きちんと撮れるか不安はあったが、画面に映し出されている映像を見るかぎり、成功だったようだ。

「こいつでなんとか、この人物がどんな奴なのか調べてみてほしいんだ」

「うん。ここまではっきりと映ってるなら、大丈夫だよ。問題はどこに所属しているかなんだけど……」

「時間、かかりそうか？」

指を顎にやって考え込んでいる青山に、小さな声で聞いた。

「うーん、さすがに情報がこれだけじゃ、一日二日では無理だよ。おまけにサングラスまでかけてるしね。でも、それでも決して分からないわけではないから、九鬼くんにいったことが本当なら、時間はかかるけど、なにか分かるはずだよ」

「そうか。まぁ、格段急いでるってわけでもないし、気長に頼む」

「うん。でも、また何か事件に首突っ込んでるの？」

冗談めかした口調で、青山はマウスを使って画面を操作している。その操作スピードもあってのことだろうが、俺には何をやっているのか、さっぱり分からなかった。

「事件、てなわけでもないぜ。それと別に首を突っ込んでるわけでもな。

たださ、何があってもいいように何かしら対策はしておくものだろ？　今回は他の誰でもない、俺が被害者なのだ。なにか直接的な被害を被ったわけではないが、それに対して対抗手段をこうじておくというのは、決してやぶさかなことではない。もし何もなければ、それはそれで良い。

しかし万が一、家族や綾子ちゃんに迷惑がかかるかもしれない可能性も視野にいれておくと、やはり予め、手を打てるだけは手を打っておいた方が良いに決まっているのだ。

「あ、そうだ」
「どうした？」
突然、青山は何かを思い出したようで、座ったまま俺を見上げた。
「うん、ほら、蒲生義則の家に行ったときに、九鬼くんが見つけた小瓶に入っていた粉のこと」
「ああ、あれのことか」
俺はそんなこともあったなと思いながら、相槌を打った。個人的には、すでにあの事件は終わったものだと考えている。だから、もうどうでも良くなっていて、言われるまですっかり忘れていた。
「前々から言おうとしてたんだけど、九鬼くんがああなっちゃって、僕もすっかり忘れてたんだけど、あの薬の効果が」
「青山」
話が長くなりそうだと感じた俺は、青山の言葉を遮った。
「あの事件はもう終わったんだ。いまさら、そんなことを蒸し返さなくてもいい。多分だが、あの薬を今井のやつは服用していたってのは、ほぼ間違いないだろう。蒲生だった可能性もあるけどな。とにかく、もう終わったんだ、それでいいさ」
「う、うん」
少しまくし立てるように言って、青山からの話を終わらせた。俺とて、あの時の刺傷事件のことをいつまで引きずっていたくはないのだ。それに大まかな効能の話は一度聞いているし、それ以上はもう必要のないことのはずだ。
俺はいつしか、刺された右の腹を押さえていた。あの事件から四ヶ月しか経っていない。どこかズキズキと疼くような感覚が、時折するのだ。そういう時は限って、奴の話題になったときだ。
勘の良い青山のことだ。俺が思ったことにも気付いただろう。事実、このことにはもう触れることはなかった。

家に帰ると、沙弥佳がいつものように玄関に出迎えてくれた。いつ見ても、その様は犬みたいだ。しかし今日は、いつにも増して笑顔で、実に晴れやかだった。

「おかえり！」

「やけに嬉しそうだな。もしかして、受かってたか？」

「うん！　私もあやちゃんも両方だよ！」

「お、やっぱり綾子ちゃんも受かってたか」

朝とは打って変わって元気にしている沙弥佳に、俺も不思議と嬉しくなった。やはりこいつはこうでないといけない。

受かった時のことを今起こったことかのように喋る妹に相槌を打ちながら、俺は自室に戻って荷物をベッドに放り投げる。部屋に戻ると、随分と物が整理されていることに気が付いた。もちろん、そんなことをするのは沙弥佳以外にこの家にはいない。

（やれやれ。嬉しさあまってってやつかな）

苦笑しながら小さくため息をついて俺は、制服から私服へと着替えた。下に降りる前に携帯を制服から取り出して、綾子ちゃんに電話をかける。数回のコールのあとに、聞き慣れた声が出た。

『はい、もしもし』

「よう綾子ちゃん。今いいか？」

『はい。全然大丈夫です』

「まぁ、単刀直入にいうとだな、あれだ。沙弥佳から聞いたよ、合格したんだって？　これで四月からは晴れて先輩後輩の仲だな」

『あ……ありがとうございます。九鬼さんのおかげです、ほんとに』

「いや、結局は君の実力がそこまで及んでたわけだしな、俺のおかげってわけじゃぁないと思う」

『それはそうかもしれませんけど、九鬼さんが教えてくれるまで分からないことも結構ありましたし……と、とにかく九鬼さんのおかげでもあるんです！』

受話器ごしに、なんとなく顔を赤らめながら必死に言っている綾子ちゃんを想像し、つい笑いが出た。

『え？　あ、あの九鬼さん？』
「いや、相変わらず変なところで人を持ち上げるんだと思ってな。別に他意はないよ」
　くつくつと笑う俺に、綾子ちゃんは可愛く唸るような声をして、それがまた俺の笑いを誘った。
「まぁいい。とにかく、四月からはよろしくな」
『うう、はい』
　その時、下から沙弥佳の俺を呼ぶ声が聞こえた。
「お兄ちゃーん」
　俺は通話口を押さえながら、返事をする。
「綾子ちゃん、ごめん。下で妹のやつが呼んでるみたいだから、切るよ」
『あ、はい』
「綾子ちゃん。合格おめでとう」
　一段と元気な声で、ありがとうと言った綾子ちゃんの声を合図に、電話を切った。彼女の元気な声を聞くと、別に自分のことではないが、なんだか自分自身のことのように嬉しくて、こっちの気持ちも弾んだ。
「お兄ちゃーんっ」
「ああ、今行く」
　沙弥佳の催促の声に返事をしながら携帯を机におき、一階へと降りていった。きっとまだその嬉しさをまだ表現し足りなくて、うずうずしてるんだろう。
　俺は、やれやれと思いながらも妹に甘えさせてやろうと、穏やかな笑みを浮かべながら小さなため息をもらしたのだった。

第47章

沙弥佳が綾子ちゃんと揃って今日、笑顔で卒業式を迎えることとなった。二人とも自分の希望していた高校に受かったのだ。それも二人とも俺の通う金城高校だ。これで四月からは、二人とも俺の後輩ということになる。妹に対して後輩というのもくすぐったいが。

「こら」

頭をポコンという音をさせながら、小町ちゃんにはたかれた。教科書を読みながら教室を歩いていたとこも、ちょうど俺の横にきていたらしい。

「九鬼。今はまだ授業中だぞ」

「あ、すみません」

素直に謝りながら、教科書に目をやった。

小町ちゃんは自分の授業が、このクラスでは今日が最後なんだからしっかりしろと付け加え、また教壇の方へと行った。俺はそれを尻目に、窓の外に視線を向ける。このあいだ中学に入ったと思ったら、もう三年間が過ぎようとしているのだから、時間が経つのはとても早いものだ。

かくいう俺も四月からは最上級生になり、いい加減、進路というものを本格的に考えなくてはならない時期にきているのだ。まぁ、就職なのか進学なのか、それすらもまだ決まっていない。大半のやつなら、とっくにそれくらいは漠然ながら決まっているだろうし、進学を決めているやつなら、もうその目指すべき大学も決まっているのだろう。いや、仮にもこの学校は進学校なのだから、その大部分が大学に進むに決まっているのだ。

「こら、九鬼っ」

教壇から小町ちゃんの激を飛ばすような声とともにチャイムが鳴り、今日一日最後の授業が終わった。

来週からは授業が早あがりになることもあって、帰宅する生徒たちの顔はどこか開放感のあるものだった。実質的な授業も、来週はただ暇を持て余して何もすることはないだろうし、俺達生徒にものを教えなくてはならない教師達もいくらかは楽だろう。

教室を出る際にチラリと青山を見たが、俺が教室を出たことすら気付くことはなかったのか、黙々とバッグに教科書やノートを詰め込んでいる。あの様子では黒田のことを掴めていないのだろう。事実、一日二日ではまず無理だと言っていたのだ、それも当然だ。

俺は青山にそれを追求することなく、下駄箱へと階段を下りていく。そこで思わぬ人物と出会った。藤原真紀だ。

「こんにちは先輩。お久しぶりですね」

友人と一緒にいるため、気色の悪い敬語でそう挨拶してきたのだ。

「……久しぶりだな」

間違いなく俺の顔は引き攣っていたことだろう。前にも一度、こんな風に言われた記憶があるが、この女からわざわざ挨拶してくるとは思わなかったし、嫌な顔の一つでもされたら敵わないので、今回は無視しようと思ったのだ。

ところがこの女はそんな俺の気持ちなどお構いなしに、俺を下駄箱の端にくるようジェスチャーした。ため息をつきながらそれに従う。

「なんだ」

「なんだとはご挨拶ね。せっかく私から後輩らしく挨拶したのに」

「あんたにあんな風に呼ばれた瞬間、俺は鳥肌が立ったぜ。それで用件はなんだ」

「単刀直入に言うわ。あなた最近、誰かに付きまとわれているでしょう？」

途端に俺は自分の顔が険しくなるのがわかった。それも当然だ。なんでこの女がそれを知っているのだ。その事実を知っているのは青山ただ一人のはずなのに。

「……あんた、なんでそれを知ってるんだ」

「ちょっとね。それよりも今はあなたのことよ。その様子じゃ本当みたいね。

いい？　もし、何かあったらすぐに私を頼りなさい。あなたが危険にさらされた時、あなたを一番考えてやれるのは警察でも友達でも、ましてや家族でもないわ」

「おい、待ちなよ。あんた、一体なんのことを言ってるんだ。俺が黒田……付きまとわれてるのが、そんなにまずいことだっていうのか」

「そうよ。あなた、相手からはただスカウトされてるだけで何の害もないと思ってるつもり？　だとしたら大間違いよ。相手は去年あなたが出会った、今井のような人種なのよ」

それを聞いて息を飲んだ。やはり、初めて駅で出会ったときに感じた、あの感覚は読み通りだったのだ。

「もちろん、俺だって奴のことをただのスカウトマンだなんて思っちゃないさ。奴が話した内容もな。それに俺自身、奴のことはなんとなく今井と似たような雰囲気ってのは感じ取ってたんだ、別にあんたにそこまで言われる必要はないと思うぜ」

「それが分かってないというのよ。あなた、去年あなたが体験したあの事件が、あまり大きく報道されてないことに気がついてる？」

そう言われてはっとした。確かにあんな風に刺されたにも関わらず、俺と今井のことを扱った記事がほとんどなかったことに、言われるまで全く気にしてもいなかった。それこそトップニュースとは言わないまでも、たとえ小さくても記事にされたっておかしくない話だ。

「……いつか言ってたよな、あんた。情報ってのは隠蔽されてたりするかもしれないって。つまり、俺が入院することになったあの事件は、そうしなきゃならないことだってのか？　他にも、今井ともう会わないとも言ったよな。人間一人を、そんな風に扱えるなんて普通じゃぁない。あの事件で俺のところにきた刑事にしたって、また何かあれば来るとか言っておきながら、あれきり来やしない。

一体俺の周りで何が起こってるんだ」
「落ち着きなさい。周りの生徒たちが見てるわ」
俺は声を次第に大きくし、喚き立てるように早口になっていた。
もちろん、これ以外にも言いたいことは山ほどあったが、気付けば周りの生徒たちが何事かと俺に視線を向けていた。
「……ちっ」
俺が舌打ちし周りを一瞥すると、生徒たちはそそくさと視線を外し、足早に各々の目的の場所に向かうように離れていった。
真紀は俺を見据えながら、ため息を一つついた。
「一旦外に出ましょう、話はそこで」
「……分かった」
真紀の提案に頷き、俺と真紀はそれぞれの下駄箱に行き、靴をはき変える。
すでに真紀は校舎を出て、一緒にいた友人を先に帰るよう促しており、俺が出てきたところでこちらに目を向けた。
「こっちに行きましょう」
無言で真紀に着いていく。真紀が連れられてきたのは、校舎端の花壇のある場所だった。
「さて、私が言いたかったことはさっきの通り。あなたにはとにかく、今あなたに付きまとっている連中からは、なるべく関わらないようにしてほしいということよ」
「俺がどういう立場に置かれているのかは、教えてくれないのか？」
「残念だけど言えないわ。言ったら、あなたを巻き込むことになるもの」
真紀の受け答えに、俺は眉をひそめた。巻き込むからだって？何をいってるんだ、すでに巻き込まれているじゃないか。
「もう巻き込まれてますって顔ね」
思ったことがそのまま顔に出たため、真紀は俺の表情を読み取るように言った。
「そりゃぁそうだろう。俺は今井に何度か殺されかけたんだぜ？

それで巻き込まれてないだなんて、それこそおかしな話じゃぁないか。違うか？」
「……そうね。確かにすでに巻き込んでいるかもね」
「なんだ？　やけにあっさりと認めるんだな」
「ええ、確かに事実だものね。たとえ、それがどんな形であれ、あなたが私や今井と関わったことは変えようのないことだから。
でもね。だからこそ、これ以上はあなたには深く関わってほしくないの。だからあなたに何かあった時は、間違いなく私を頼りなさいと言ってるのよ。だからもう一度だけ言っておくわ。もし、あなたに何かあった時に本当に助けてあげられるのは、友達でも、警察でも、家族でもないわ。私だけがあなたを助けることができるのよ。
いいわね、何かおかしいと思うことがあれば、すぐに私に言いなさいよ？　分かった？」
「だが、あんたは」
「女だから頼れないだなんて思ってるんだったら、余計なお世話よ。良い？」
真紀は今井と対峙したときのような鋭い視線で、有無を言わせぬよう貫いてきた。情けなくも俺は、真紀にただ頷くことしかできなかった。

翌朝、俺はいつものように、沙弥佳に起こされた。
今日は土曜日ということで休日のはずだ。いつもであればこんなに早く起こしにくることなどないのだが、妙にウキウキとした沙弥佳はそんなことはお構いなしの様子だった。今日から入学式までは休みなので、そのせいかとも思ったがどうも違うらしい。そんな雰囲気ではなかったのだ。まぁ、そのことも少なからず意識はしているとは思うが。
「なんだってこんなに早く起こしたんだ。いつもの休日なら、後一

時間は寝てられるはずなのに」
「いいからいいから」
休日で嬉しいとはいえ、俺をわざわざ起こす必要はないだろう。愚痴をいう俺に、沙弥佳はそんなことはどこ吹く風で、朝食のトーストと目玉焼きやサラダを差し出してくる。休日はいつもトーストなのでそれ自体は良いのだが、浮かれているからといって、俺までそれに巻き込むなと思いながらもトーストをかじった。
「父さんたちは？」
「もうとっくに出かけてるよ」
「もうか。早い出発だな」
時計を見ればまだ八時半にもなっていない。それなのにもう出かけているなんて、随分と早い出発だ。まぁ、朝俺が起きる時分には両親が出かけていたというのも良くあることだが、こんなに早くに出かけるとは。もしかしたら日帰り旅行か何かかもしれない。
「それじゃ、私もいただきます」
どこか浮かれた様子の沙弥佳は、いつもの俺の隣の席について、焼き上がったばかりのトーストを手にとった。俺は無言で食べながら、時折コーヒーを胃に流し込む。
そのうちにトーストが無くなると、それを見計らった沙弥佳が席を立ちトースターにパンを入れて焼き始めた。相変わらずその行動には無駄がなく、逐一俺の行動に目を光らせているんだなとぼんやり考えていた。
「はい」
「ん、おお、すまん」
焼き上がった二枚目のトーストには、すでにマーガリンが塗られていて、後は俺がその上に好きなものを乗せたら出来上がり、というわけだが沙弥佳は本当に良く気がきくと思う。
「……で、だ。こんなに朝早く俺を起こしたのには、何か理由があるのか？」
「うん。お兄ちゃんに後で見せたいものがあって」

「見せたいもの？」
「そう。夕方でも良かったんだけど、なんか変に早起きしすぎちゃって」
「で、ついでに俺にも早起きさせたってわけか」
「うん。でも、普通の日よりは遅くに起こしにきたんだから、別にいいでしょ？」
「おまえなぁ……」
まぁ、今日一日くらい別にいいか。どうせ眠くなればあとで昼寝でもすればいいのだ。

朝食を終えリビングでつまらない土曜朝のワイドショーなんかを見ていたが、あまりの退屈さにテレビを消し、ソファーに足を投げ出して寝転んだ。正直にいって、何もない休日というものほど退屈な日はないだろう。
せっかくなので久々に沙弥佳を引き連れて、街に繰り出すのも良いかもしれない。本当なら、綾子ちゃんと行きたいところだが、彼女は今日、例の親父さんと週末を過ごすということなので、誘おうにも誘えない。
まぁ、卒業祝いなんかも含めた意味だろうし、なんだかんだで、たった二人の親子の間に水を差すのも憚られるというものだ。というわけで妹と二人で出かけるのは、実に入院以来……いや、綾子ちゃんと出会う前以来ということもあって、久しぶりに、それも良いと思ったわけだ。
その沙弥佳は、台所でさっき食べた朝食の後片付けをしている。よほど気分が良いのか、俺達が生まれる前に流行った、昔の歌を口ずさんでいる。あいつの声は、こういう時に綺麗な声なんだといつも気付かされる。
ふとテーブルに置かれた新聞を手にとった。まだ中の広告なんかがはさまっていて、ポストから取っただけで誰も読んでいないことは一目瞭然だ。俺はその広告の束を取って、新聞を広げた。

広げた先の紙面には、ある製薬会社に多大な投資がなされたと出ている。また別の紙面には、ヨーロッパのある地域でバスが突然爆発し、テロの可能性を示唆するような内容の記事もあった。新聞をざっと読んではみたが、これといって自分に直接関係がありそうな記事はなかった。

俺はため息をつきながら新聞をたたんで、テーブルに投げた。それでもそれなりに時間は経っていたらしく、すでに十時を過ぎていた。当然ながらすでに沙弥佳も洗い物を終え、二階にあがっているようだった。

沙弥佳に、久しぶりに出かけるかと声をかけてみようとすると、ちょうど二階からドアの開いた音が聞こえた。きっと沙弥佳が下に降りてくるのだろう。だとしたら上に行くのは手間だ。ここで待つとしよう。

「お兄ーちゃん」

案の定、階段を降りてきた沙弥佳を見た俺は、その姿に目を見開いた。

「……おい沙弥佳。なんだそれは」

「えへへ。制服だよー金城の」

「いや、そいつは分かってるんだが、その制服はどうしたんだって意味だ」

驚いたことに俺の前に現れた沙弥佳は、うちの高校の制服を着込んでいたのだ。

似合う？などと言いながら、スカートの裾を持って少し持ち上げたり、くるりと背中を見せたりして、制服姿の自分を俺に見せてくれる。

「おまえ、見せたかったものってもしかして」

「そう、私の制服姿だよ。四月からはよろしくね、お兄ちゃん。あ、この場合は先輩って呼んだ方がいいのかな？」

「いや、別にそれは気にしなくてもいいだろ」

「ね、ね。それよりもどう？　私の制服姿。似合ってる？」

「ああ、思ったよりも似合ってるな」
「むー。全然感情が篭ってないっ。もっと感情こめて言ってよ。それに思ったよりもってどういうこと」
「感情っておまえなぁ……。一体、兄貴に何を求めてるんだよ」
半ば呆れるように言った。それもそうだろう。家族に対して、それ以上なんと言えばいいというのだ。
「え、そりゃ……」
「どうしてそこで顔が赤くなるんだ……。大体、制服ってそんなに早く仕上がるものなのか？　もっと時間、かかりそうなものだと思ってたんだが」
「うん。私もそう思ってたんだけどね、昨日、卒業式の後にお母さんとついでにって、制服も頼みに行ったの。そしたら、ちょうど私にぴったりのやつがあって、それでね」
「なるほどな」
今思えば今朝に限らず、確かに昨日の夜からどこか嬉しさに綻ばせていたが、そういうことだったのか……。事情を飲みこんだ俺は、ため息をついてソファーから立ち上がる。初々しい姿の妹の頭に、手をやった。
「おまえは大体のものは着こなせるからな。十分似合ってると思うぜ」
「ぁ……ありがとう」
赤らめながら言う沙弥佳に肩をすくめて見せながら、俺は久しぶりに出かけないかと提案してみた。その答えは予想できたがその前に写真を撮ろうということになり、二人で写真を撮りたいと言い出したのだ。
「別に今じゃぁなくたっていいだろ？　入学式の日には、否応なく記念に写真を撮るんだ。今撮ることはないだろ」
「それはそうだけど、別にいいじゃん。今撮りたい気分なのっ」
「そうかよ……大体、なんだって俺まで……」
愚痴を言いながらも、結局はそれに従ってしまう自分に、なんだ

か情けなく感じながらも一緒に写ってやることにした。
「じゃあ、庭に行こう。確かカメラは……」
沙弥佳はそう言いながら、カメラを取りに父の書斎に行った。書斎には父の趣味のカメラなんかが置いてあるからだ。
「先に出てるぞ」
書斎の方に向かって言い放ち、一足早く庭に出た。今日はまさしく小春日和という感じで暖かく、一日とても過ごしやすそうなおだやかな日だ。
「お待たせ」
玄関から出てきた沙弥佳は、その手にカメラと三脚を持っている。
「お兄ちゃん、手伝って」
こんなもの取り付けたこともないし、どうすれば良いのか分からなかったものの、ああじゃないこうじゃないと二人で言う内に、カメラをなんとか三脚にとりつけることができた。
「撮るのはどうするんだ、これ」
「大丈夫。後はこれ押せばいいだけだから」
そういって沙弥佳は、俺を花壇の前に行くよう促す。
「うん。その辺りがいいと思う。じゃあ押すよ」
撮影ボタンを押したのだろう、沙弥佳は小走りにこちらにやって来て俺と腕を組んできた。
「ほらほら、カメラ見て笑って」
少しおいて、カメラはカシャリという音を出して俺達を撮ったのだった。ちなみに俺は全く笑えていなかったと思う。

流れていく景色を俺は、心ここにあらずという気分でぼんやりと眺めていた。隣には沙弥佳がいて、幸せいっぱいという顔で俺の腕にがっしりとしがみついていた。
「なぁ……」

「ん、なーに？」
「少し手を放してくれないか。……なんていうか、恥ずかしいんだが」
「でも私たち以外、誰もいないよ？」
「まぁ、それはそうなんだがな……」
俺達は今、電車に乗って海に向かっているところだ。どこか出かけるかと聞いてみたところ、海が良いと言い出したのだ。まぁ、確かに海なら移動の電車代ですみそうなので、それで手打ちにしたのだ。そこで今向かっているのは、K県にあるわりと有名な公園だ。
昔の有名なポップスグループが、そこを舞台にした歌を唄っているのを思い出し、行ってみようということにしたのだ。そこなら海が見えるし、近くにはオシャレな店なんかもあったりするということなので、時間も適当に潰せるだろうと踏んだのだ。
「……まぁいい。今日だけ特別だぞ？　卒業祝いってやつだ」
「うん。ありがと、お兄ちゃん」
沙弥佳は俺の肩に頭を置きながら、一言そう言った。
「このペースなら、公園に着くのは後一、二時間はかかっちまうな」
鈍行に揺られながら俺は、密着している沙弥佳にも聞き取れないような、小さな声でぽつりと呟く。けれど沙弥佳は、目的の場所まで乗り換えもあるうえ、特急や快速なんかに追い越されてしまい、時間がかかるこの鈍行に乗るのを選んだ。
まぁ、ゆっくりと座れるのは魅力ではあるし、今日は俺なりの卒業祝いを兼ねているので、本人がそうしたいのであればそれに従おう。
ちなみに、写真の方はあの後も何枚も撮った。撮ったというより、撮り直しさせられたのだ。さすがにうんざりしてきた俺は、どうせ入学式にも撮るなら今はこれでいいじゃないかと言い、沙弥佳の撮影会を終わらせたのだ。なんだってあんなにまで細かいのか、俺にはいまいち理解できないところだ。
そんな風にぼんやりと外を眺めていると、車内アナウンスが流れ、

次が乗り換えの駅であることを告げた。
「ここだ、降りよう」
沙弥佳は俺の横にぴったりとついて、電車を降りた。
「急ごう。すぐに電車がくる」
「うん」
二人足早にホームの階段を抜け、次の電車に乗り換えるべく、線のホームへ急ぐ。
沙弥佳は俺の歩幅に合わせて移動しているため、かなりの早歩きというよりも走るような形になっていた。しかし、それが功をそうじてか、ちょうど電車がホームに入ってきたところだった。
「これに乗るの？」
「ああ。こいつでいいはずだ」
頷きながら相槌をうつ。
「ここからまだ乗り換えるの？」
「いや、もうこいつ一本でそこまで行くはずだ。なんだったら寝ててもいいぞ」
「え、別に良いよ。それほどは眠くないし」
「そうか。おまえ、さっきの電車の中で結構眠そうにしてただろ？だから無理してるのかと思ったんだ。まぁ、おまえがそういうならいいけどよ」
ガラガラの車内で俺達は、そんな話をしながら席に座った。それと同時にドアが閉まり、電車はゆっくりと動き出していった。

車内アナウンスによって、ようやく俺達の目的の駅まできたことが告げられた。家を出発してから、すでに二時間半が経過しており、いい加減シートに縛り付けられているのにも飽きてきていたところだ。
「沙弥佳」
先ほどから反応も薄くコクリコクリとしていた沙弥佳だったが、見れば案の定、腕に絡ませたまま眠っていた。やれやれ、全く人の

腕にしがみついたまま眠れるなんて、器用なやつだ。
そんな妹に俺は、普段ならさっさと起きろと言うところだが、不思議と気持ちは穏やかで少しだけ笑顔になりながら、そっと起こしてやった。
「沙弥佳……沙弥佳。起きろ、そろそろだ」
「う、うぅん……ぁ、ごめん、私寝てた？」
「ああ。ま、いいさ。とにかくそろそろ着くから起きろ」
「うん、大丈夫」
徐々に落ち始めていたスピードはついになくなり、一拍おいて扉が開かれる。
「降りよう」
まだどこか寝ぼけているような沙弥佳を立たせ、電車を降りた。
今日は休日ということもあって、普段ならあまりいないであろう駅にも、人込みとまでは言わないが、わりと人がいるのが見受けられる。けれど、この駅で降りた人達の目的も俺達と同じなのだろう、向かっている場所は同じのように思える。
「この人たちも同じなのかな」
「じゃないか？　まぁゆっくり行こう。なんだったら、ついでに中華街にでも寄ってくか？」
「お兄ちゃんの食いしんぼ」
「何言ってるんだ、おまえもだろ？」
冗談に冗談を返しながら、公園に向かって歩き出した。やはり他の人達も目的が同じようで、俺達と同じ方向に歩いていた。
「お兄ちゃんに任せてるから問題ないとは思うけど、こんな場所から海に行けるの？」
「海に行くというより、海をのぞむって感じだな。構わないだろ？」
「うん、それはいいけど……そんな場所があるの？」
「あるらしい」
俺自身行ったことがないからなんとも分からない。だから、そうとしか言えないのだ。とにかく海が見えるということなので、悪い

気はしないだろう。実際には海辺に行きたかったのかもしれないが、そうなると自分達の持ち金の兼ね合いもあるので、仕方ない。
俺達は公園に向かう道中、小洒落た店が立ち並ぶ通りを歩き、他愛もない話に華を咲かせた。
「ようやく着いたな。ここから向こうに行くと、海が見える丘らしい」
インターネットで仕入れた情報を頼りに、沙弥佳に説明する。沙弥佳も相槌をうってその場所へ走って行った。移動している途中、一度も解かれることのなかった沙弥佳の腕から、この時ようやく、実に数時間ぶりに解放された。
「わあぁ。お兄ちゃん見て見て、ほんとに海が見えるよ」
海が見えたことがよほど嬉しかったのか、振り向いた沙弥佳は、はしゃぐように言った。
「少しは落ち着けよ、はしゃぎすぎだ」
妹の様子に気恥ずかしい気持ちになり、俺は苦笑する。全く、やはりこいつは子供だな。
「でも、思ったよりもよく見えるんだな。たいして見えないものと思ってたんだが」
沙弥佳に遅れて海の見える場所にくると、確かに海が見える。想像以上にはっきりと眼下に海を見下ろすことができたのだ。
「この辺り一帯からは、海が見晴らせるようになってるみたいだな」
沙弥佳は海を眺めながら、ふいに唄を口ずさんだ。それは俺がここを選んだ際に、そのヒントにした歌だった。沙弥佳はそれを知ってか知らずか、その歌を口ずさんでいる。この歌のオリジナルは男性グループが唄っていて、俺の声ではそのキーの高い声は出せないが、沙弥佳にはそのキーの高さがちょうど良いのか、無理なく出すことができている。
「あの唄だけは他の誰にも歌わないでね、か」
ちょうど沙弥佳の唄ったフレーズを小さく復唱する。きっとこの唄の歌詞も、ここからこんな風に見下ろしながらつけられたものな

んだろう。俺は唄に出てくるの主人公のように、黙って沙弥佳が唄う声に耳を傾けながら、ぼんやりと海とは別にほかの場所を見ていた。

「〝ぼくがあなたから離れてゆく〟……」

沙弥佳が歌い終わる。この唄は、男でも一度は共感できるような歌詞で、俺は結構好きだった。それでいながらどこか他人事みたいに、突き放した感がするのも。

「……私この歌の歌詞、あまり好きじゃないな」

俺のそんな考えを読み取ったのかどうかは分からないが、沙弥佳がふいにつぶやいた。

「そうなのか？　俺はメロディーにうまいことマッチしていて好きだけどな。それに共感できる部分もあるしな」

「うーん……そりゃ人間だから心変わりっていうのはあるから、それは分かるんだけどね。私が嫌なのはそこじゃないんだ」

「だったらどんなところが嫌なんだ？」

「うん。サビの最後の部分の、あなたから離れてゆくってフレーズが好きじゃないの」

「なるほどな。だけど、どんなことにも別れってのがあるもんだろ？　男女の間ならなおさらだ。どちらかの心変わりってので、途端に関係は瓦解しちまう。そいつをなかなかに詩的に表現できてて嫌いじゃぁないね、俺は」

「うん……」

そう言ったきり、沙弥佳は今まで見ていた海から視線を外して俯き、俺に腕を絡めてきた。俺の気のせいか、少しだけ震えているようにも見える。

「どうした？　突然」

「……ごめん。今ね、すごくこうしてたい気分なの」

「……分かった」

この時、沙弥佳の脳裏にはきっと、前に話してくれた夢のことが思い浮かんでいるに違いない。俺はなぜだか、漠然とそう思えたの

だった。

特別何かをするわけでもなく、二人腕を組みながら公園を散策した。三月も後半に差し掛かり、気温はますます上がっている。そのため、園内には花が咲き始めていて、七色といわず、極彩色に彩られ始めていた。きっと後一月とたたずに、公園は春を謳歌しているようになるだろう。その代表とも言うべき桜が、すでに花を咲かせ始めているのだ。

「さて一通り見て回ったが、そろそろ戻らないか？」

「うん、そうだね。ねえ、今度はもっとお花がいっぱい咲いてる時に来ようよ」

「また俺を恋人がわりにするってことか。おまえには好きなやつがいるんだろう？」

肩をすくめながら、くつくつと笑った。こいつには、まだ恋人というのと俺の、明確な境界線はないのかもしれない。家族を大切に想うということに関しては、決して悪いことではないが。

「……うん」

「だからなんでそこで暗くなるんだ、おまえは」

「べ、別に暗くなってなんか……」

「そうか？　そう言う時は、大体図星なんだと誰かさんが言っていたけどな」

俺はニヤリと口を歪めた。

「もうっ。意地悪っ」

いつか俺にしたことのお返しに言われ、沙弥佳はむくれてそっぽを向いた。妹のそんな様子に、俺はまた肩をいからせながら笑うのだった。

結局俺達は、周辺の店を冷やかすだけで何も買わずに帰ってきた。最初は何か一つくらい買ってやろうという気になっていたのだが、なんとも珍しい日もあったもので、沙弥佳は何もいらないと言った

のだ。それで手持ち無沙汰になったこともあり、こうして俺達は帰るということになった。まぁ、自分の財布がこれ以上軽くならなかったということで、俺も良しとしよう。

「ところでこれからどうする？　時間的にまだ帰るには少し早いと思うが」

「だったら……久しぶりに」

「キシマイ堂は却下だ」

「違うよっ。あそこに行きたいな」

「あそこ……」

沙弥佳の言うあそこはどこかと考えたところ、結論として一つの場所が出てきた。

「……あそこか」

「うん。駄目かな？」

「いや、構わないぜ、俺は。しかし、行くのは随分久しぶりだな」

「でしょ？　だからね」

俺は頷きながらそこへ向かおうと歩き出した。俺達の向かう場所。そこは俺達にとっては、思い出の場所だ。その場所はかつて、俺達がよくいじめられていた頃に俺がついぞ爆発した場所で、沙弥佳と俺が今の関係になった重要……と言うのは言い過ぎかもしれないが、そのきっかけになった場所だ。

俺はそういう場所にはあまり興味がないので行かないが、こいつは、たまにだがそこへ行くことがあったようで、何年か前に一度だけ沙弥佳に連れられてそこへ行ったことがあった。

「しかしなんだってまた、いきなりあんな場所に行きたいだなんて思ったんだ？」

あんな場所というのは、思い出深い場所ではあるがこれといって全く何もない場所なのだ。ただの河原の広場にすぎない。

「実をいうと、私もよく分からないんだ。なんとなくとしか言いようがない、かな」

「ま、そういうこともあるわな」

肩をすくめながら肯定する。人間、確かに気まぐれというのはある。そいつに多くを言うつもりもない。
「しかし、本当に行くの久しぶりだな。おまえ、どれくらいぶりなんだ？」
「多分半年ぶりくらいかなぁ？」
「そうか」
「うん。いやなこととかあったりすると行ったりすることはあるよ。なんとなく落ち着くっていうかさ」
「まぁ、人間、そういうのは確かにあるな。いつもは自分の部屋でいいんだが、そうじゃないってときがさ」
些細なやり取りをしているうち、河原に着いていた。確か、俺はあのあと泣きやまないでいた沙弥佳をなんとか泣き止ませようと四苦八苦していたっけな……。河原では、どこかのリトルリーグの野球チームが練習をしていた。皆一様に声を張り上げ、ノックの練習をしているようだった。
「皆元気だねー」
「全くだな。俺には無理だな、あんなのは」
「そうだよね。お兄ちゃんって体格のわりに体育会系じゃないもんね」
「まぁな。同じスポーツをするにしても、俺はマラソンとかの方が好きだしな。チームワークだなんだってのは、どうもな」
「あれ？　昔、マラソンも嫌いって言ってなかったっけ？」
「うるさいな。あくまで野球とかと比べたらって意味だ。俺はどうでも良い上下関係にやたらうるさそうなのは嫌いなんだ。たかが一年二年の生まれの差しかないくせに、でかい顔するからな」
「あはは、しょうがないよ。それが学校っていうものでしょ？」
「まぁ、そうなんだがな」
俺は苦笑しながら、土手の座れそうな場所を見つけて座りこんだ。沙弥佳もそれに従い、足を伸ばしながら隣に座る。
「……あの時からもう六年か。早いもんだな」

「私、あの時小学三年生だったんだよね。本当に早いよね」
ここに来ると話す話題といえば、そのことばかりだ。前に沙弥佳に連れられてきた時も、同じ話題をした記憶があった。
「六年たっちゃぁいるが、おまえはその頃とあまり変わってないけどな。体がでかくなっただけだ」
「えー、私変わったと思うよ？」
「じゃぁ具体的にどのへんが変わったのか、俺に分かるように話してくれ」
「そりゃあ……」
言い淀む。色々と考えているようだが、そうなる時点でまだまだだと言うのが、もろバレだ。
「くっくっく。そいつが答えだな。ま、そんなおまえが俺とは違う、別の誰かを好きになったんだから、その分は成長したかもな」
「なんかそれ、あんまりフォローになってないような……」
「そうだな。あまりフォローしたわけでもない」
そう言うと、沙弥佳はまた唸るように黙りこんだ。やれやれ、俺を言い負かそうなんて十年早い。
俺達は何か会話するわけでもなく、練習している子供たちをただぼんやりと眺めていた。
「……そういえば」
「ん？」
「そういえばさ、お兄ちゃんのクラスにいたあのガキ大将の子も確か野球、やってたっけ」
「あー、言われてみれば、確かにそんな記憶もあるな。俺がこてんぱんにしたせいで、あの何日か後にあった試合に、出れなかったっていう記憶があるな。まぁ、自業自得だけどな」
懐かしい記憶に、下を向いて笑った。あのことがなければ、きっとそいつは試合に出ていたのだろう。チームではなかなかに優秀なやつで、四番を任されていたやつだった。
それにしても今思えばよくもまあ、そんなやつに喧嘩を吹っかけ

ていたものだと思う。相手は俺よりも身長、体重、それに肩幅だってあったやつだったのだ。言うならば、某アニメのガキ大将と眼鏡のいじめられっ子のようなものだ。当然ながら、俺には青い猫型のロボットなど、いはしなかったが。

「そんなやつ、とっくの昔に記憶の彼方にやっちまってたから忘れてたが、唐突に思い出すんだな、おまえは」

「なんとなくね。そういえば私、そのせいもあって野球がすごく嫌いだったんだよね」

「あるよな。嫌いな奴が関わってる全てのことを、無駄に毛嫌いしちまうこと。俺もあの頃は野球が嫌いだったな。いや、今もはっきり言って好きじゃない」

「そうなの？」

「ああ。さっきも言ったが、どうにも、ああいう皆でやらなきゃならないようなスポーツはこれっぽっちも好きになれないんだ。今はマラソンなんかはさほど嫌いじゃぁないんだがな」

「自分との闘いってやつ？」

「どうだろうな。結局は集団だろうが個人だろうが、行き着くところは自分の限界との勝負だろうけどな。だが、ああいう自分のペースでできるものの方が、俺には向いているのは間違いない」

「そっか。でも言われてみればお兄ちゃん、サッカーとかも好きじゃないよね」

「あれも好きじゃぁないな。ま、人間好き嫌いや、向き不向きってのがあるからな。俺は集団でやるのが嫌いで、嫌いだからこそ本気になれないし、不向きなんだよきっと」

ふと、唐突にこんな場所に来て、こんな話をしだした沙弥佳に、ちょっとした疑問が浮かんだ。いや、疑問というよりも疑念といった方が正しいだろうか。

「……なあ」

「なに？」

「おまえの好きなやつってさ……もしかしてあのガキ大将だったや

つか？」
「……は？」
目が点になるとはまさにこういうことを言うのだろう。沙弥佳は俺の顔を見ながら、真顔で何を言われたか分からないという風な顔をしていた。
「お兄ちゃん、それ本気で言ってるの？」
本気で人を馬鹿にしたような顔をした沙弥佳は、妙に迫力のある低い声で言った。
「あ、いや……俺の知らないところで劇的な再会でもしてそこから……なんてのがあったのかと思っただけだ。こんなところに連れてきて唐突にそんな昔の奴の話するから、無駄に勘ぐっちまっただけさ。気にするな」
「……そう。ならいいけど。というよりも、なんで私があんな人好きにならなきゃいけないの」
「だから悪かったって」
全く。こいつの声は澱みないため、本当に迫力がある。けれど、それでつい押し黙ってしまう俺もなんとも情けない話だ。ましてや、こいつは妹だというのに。
その沙弥佳がおもむろに立ち上がって、思い切り背伸びする。
「ね。今日は楽しかったよ」
「ん、そうか。楽しかったんならそれは何よりだ」
「最近暖かくなってきたけど、やっぱりまだ夕方は少し寒いね。そろそろ帰ろうよ」
「もういいのか？」
「うん」
「そうか。だったら帰るとしようか。母さん達も帰ってきてるかもしれないしな」
俺も立ち上がり、最近になって舗装された、散歩するには都合が良さそうな堤防道路に出ると、その手が突然後ろに引かれた。
「っと。なんだよ、いきなり」

「ねぇ。今日お兄ちゃんが私を連れていってくれたのは、私の卒業祝いか何かなんだよね？」
「え？　ああ、まぁ、そんなもんかもな。だからさっきも何か買ってやろうって言ったんだ。でもおまえ、何もいらないって言っただろう？」
「そうだったね。何か欲しいっていうわけじゃなかったから……。でも記念……っていうのかな。それは欲しいかな」
「なんだ。結局欲しいんじゃぁないか。別に無理にいらないなんて言う必要なかったんじゃないのか。まぁいい。あまり高くないものだったら、買ってやってもいいぞ」
「ううん。物じゃないの」
「物じゃない？　だったら……」
「あ、あのね。お祝いっていうなら、これで最後にするから、どうしても一つだけ叶えてほしいことがあるのっ」
沙弥佳は俺の手を握りしめたまま、早口に言う。その顔は逆光になっているせいでまぶしいのか、うつむいている。
「ああ。だからなんでも一つだけだってなら別に良いって」
間いれず、沙弥佳は胸に飛び込んできて、潤ませた瞳で俺を見つめる。それは今まで見てきたどの顔よりも蠱惑的だ。
「お、おい、沙――」
直感的に、このままではいけないと思って俺は抱きしめる沙弥佳を引き離そうとしたが、それは突然のキスによって阻まれた。
おまえ……なんで――
何が起こったのか理解できない。ただ、その柔らかい沙弥佳の唇の感触といつもとは少し違う香りだけが、俺の考えることの全てだった。

第４８章

鳥のさえずり声とともに、俺は目を覚ました。東側の窓からは、カーテンの隙間から朝の光りがもれてきている。

さわやかな朝といってもよいのだろうけれど、そんなのとは関係なしにまだ動悸が激しいような気がしてならない。もちろん、そんなのは昨日の余韻が残っているためで、実際にはそんなことはないのだろう。けれど、なぜかそう感じられて仕方がないのだ。

ベッド脇にある時計を見れば、まだに七時前だ。昨晩はあまり寝付けず、せいぜい、ほんの二、三時間ほどしか寝ていない。

というのも、原因は明らかに昨日の夕方のことに起因している。あの河川敷の堤防道路でのことだ。そのことをひたすら考えているうちに、気付けば深夜も三時を大きく過ぎていたのだ。

寝ても覚めても、という言葉があるが、今の自分はまさしくそういうに相応しく、沙弥佳はなんであんなことをしたのか、そのことだけが頭の中を堂々巡りしていた。昨日の夕方から、俺には沙弥佳の気持ちが読めずにいるのだ。

なぜ俺に？　好きな奴がいるんじゃないのか？　女にとって初めてというのはすごく大事であるというのはわかるので、だとすれば、あいつの好きな奴というのは俺なのか？

だが、俺とよく似ている奴だとも言っていた。だから俺をその前座にしたという可能性は？　それとも、そんな奴がいること自体が嘘だという可能性はどうだろう。しかし、そんな嘘をあいつが？

俺にとっては、とても仲の良い妹というのが正直なところで、それ以上はない。そのはずだ。なのになぜあんなに動悸を激しくしていたのだ？

あいつにとって俺が理想であったとしても、あくまで兄妹としてではなかったのか？　もしくは、俺がそう考えていただけで、実際

にはあいつは俺をそんな風には見ていなかったというのか？　だからあんなキスを……。

そこまで考えると途端に思考が停止してしまい、それ以上のことを考えられなくなる。そんな状態が昨晩から続いているのだ。

俺は足で布団をはがして上体を起こし、思い切り背伸びをする。しかしあまり寝付けなかったためか、いまいち朝起きたという気分にはならない。

「……くそ。どうしてなんだ」

寝起きも一発目から悪態をつきながら、俺はベッドから立ち上がって部屋を出た。頭が軽く混乱している今のままでは、どうせ二度寝なんてことはできはしないに決まっている。だったら起きて、夜は早めに寝た方が良いだろう。

部屋を出た俺はチラリと沙弥佳の部屋の方を一瞥し、一階に降りた。リビングには父さんが起きていて、新聞を広げている。

「おはよう」

「ああ、おはよう。どうした？　今日は休みなのにやけに早起きじゃないか」

「なんだか夜、あまり寝付けなくて。いっそのこと、もう起きちまおうと思ってさ。それに腹も減っちまってるし。母さんは？」

「まだ寝てる」

「そっか。父さん、パンいる？」

「そうだな、もらおうか」

そんなやり取りをしつつ、トースターにパンを二枚いれて焼き始める。手持ち無沙汰になった俺はコーヒーでもいれようと、コーヒー豆もついでに挽きはじめた。

「……ところで」

「ん？」

「綾子ちゃんは今週は来ないのか？」

「ああ。卒業ってのもあって、親父さんと一週間ばかし一緒に過ごすんだと」

「そうか」
俺は頷きながらコーヒーをセットし、スイッチをいれた。後は自動で機械がやってくれる。
「父さんたちこそ、今日はどこにも出かけないのか？」
「ああ。まぁ、もしかしたら後で出かけることになるかもしれん。しかし、今のところはその予定はないぞ。母さん次第だな、そのあたりは。
しかしなんだ？　どこか出かけたいところがあるのか？」
「いや、そういうわけじゃぁないよ。最近よく休日になると出かけてるだろ？　だから今日もそうなのかと思っただけだよ」
俺は言うだけ言うと、洗面所に行って顔を勢いよく洗った。桜の季節になりつつあるが、蛇口から出てくる水はまだ冷たい。
顔を洗い終えると、ちょうどよくパンが焼き上がった音がした。俺は顔を拭いた後、パン皿に焼けたパンを乗せ、父の前に置く。
「ハチミツで良い？　後はマーガリンくらいだけど。ジャムは昨日きれた」
「ああ」
ついでに差し出したハチミチとマーガリンを皿の横に置き、コーヒーをカップにそそぐ。
「砂糖は？」
「いらん。牛乳を多めに」
「あいよ」
注文通りに牛乳をいれて、父の前においた。そこで俺もようやく席につき、焼き上がったパンにマーガリンを塗ってハチミツを垂らしていく。
「んじゃぁ、いただきます」
父さんはまだ新聞を読んで、パンには手をつけていない。その代わり、煎れたてのコーヒーをすすっている。俺は特に話すこともなくなって、一人黙々とトーストにかじりつきながら、時折コーヒーを一緒に胃にいれていく。

「昨日、沙弥佳と何かあったのか？」
不意に父さんはそんなことを聞いてきた。俺は食べるのを止め、ついさっきまで、寝起きにまで考えていたことがまた脳裏に浮かんでくる。別に父さんには悪気があって言ったわけではないだろうが、今はあまりしたい話題ではない。ようやく束の間だが、忘れていることができていたのだ。
かといって、聞かれて答えないわけにもいかない。聞かれてしまったものは仕方がないのだ。けれど、なんと答えればいいのだろうか。当然だ、俺自身が未だよく分かっていないのだ。それをどう説明すればいいのだ？
ありのまま起こった出来事を言えば気は楽になるだろうが、まさか、沙弥佳にキスされましたなどと言えるはずがない。
もしそんなことをしようものなら、父さんのことだから卒倒もしなければヒステリックになることもないだろうが、ありもしない疑惑を持たれてしまうだろう。そうすれば、母さんの耳に入るのも時間の問題だ。
両者の性格を考えれば、父さんならまだしも、母さんに知られるのだけは絶対にまずい。間違いなく沙弥佳と俺を引き離すために、離婚の二文字を思い起こすに違いない。
第一、俺自身がこのことに関して、まだ現実を飲み込みきれていないのだ。そんな状態で、うかつに話すわけにもいくまい。
「……まぁ、ちょっとな」
視線を父さんから外して、お茶を濁す。ようやく父さんは読んでいた新聞を折りたたみ、少し冷めてしまったパンにハチミツを塗って食べ始めた。
「なんだ、また珍しく喧嘩か」
「いや、喧嘩はしてないよ。ただ、なんていうのかな……あいつのことがよく分からなくなってさ」
「分からない？」
反問する父さんに、俺は頷いた。あいつに対して、これからどう

接していけばいいのか、本気で分からないのだ。
「おまえがそんな風になるなんて、これはまた珍しいな。知らないうちに、沙弥佳に何かしたんじゃないのか」
そう告げられたとき、内心ドキリとした。俺が沙弥佳にいたずらしたことを思い出したのだ。
実は沙弥佳はあの日、寝ていた沙弥佳にいたずらしたのに気付いていて、俺を今まで以上に意識するようになった、というのはどうか。それ以前からあいつは俺にべたべたしてきていたし、それが昨日のような形に表されたということだ。
今まで俺はあいつに対しては、あくまで兄としてか接してこなかったし（もちろん、これからもそうとは思う）、まさか、いたずらされるなんて思いもしなかったと思う。となると、綾子ちゃんにすら嫉妬を覚えたという沙弥佳に、そんな感情が芽生えたというのは無理があるだろうか。
ただしこれは、あいつに俺に似ているという奴自体の存在そのものが、嘘であることが前提になってくる。
俺は小さくため息をついた。全くもって、確証がないことばかりだ。どの可能性もありえないとは言えない。けれど、確かな証拠があるわけでもない。何か一つくらいあっても良いと思うが、なにもないゆえに頭もこんがらがるのだ。
「何かあるという顔だな。だったら謝っておけ。女というものは、こちらから素直に謝っておきさえすれば、万事うまくいくんだ。変にプライドを持っている方が色々と誤解されたり、厄介事が増えていったりするものなんだからな」
「……なぁ、父さん」
「ああ」
「沙弥佳のやつ、俺のことをどんな風に見てる……いや、どんな風に映ってるんだと思う？」
「えらく抽象的な言い方だな。まあ客観的に言ってしまえば、ブラザーコンプレックスというやつだろうな。絵に描いたような、お兄

ちゃん子だとは思うぞ」
「だよな……」
やはりそれ以上でもなければ、それ以下でもない。そういうに相応しいとは俺も思う。
「誰がお兄ちゃん子だって？」
後ろから母さんの声がする。俺と父さんに、おはようと声をかけて洗面所へ行った。母さんの前でこれ以上この話題をするのは良くない。俺は新たにトースターにパンをいれ、スイッチをいれた。母さんにはパンを焼いてるからと告げ、早々に自室へと引き上げた。母も起きたということは、そのうち沙弥佳も起きてくるだろう。
今は沙弥佳と会ったにしても、どういう顔をして会えばいいのか分からない。とにかく一度、今度こそ冷静になって考えてみよう。どのみち遅かれ早かれ、沙弥佳には会わなくてはならない。家族として一つ屋根の下にいるのだ、なるべくいつも通りにしてやろう。

ドアをノックする音で目が覚めた。どうやら寝ていたようだ。時計を見れば、すでに正午を過ぎている。昨晩はあまり寝付けなかったし、朝食をとって小腹を満たすと、ようやく気分も落ち着いて、寝ることができたのだ。
再度、コンコンというノックの音がした。部屋の前にいるのは疑いようもなく沙弥佳だろう。
返事をするのを迷ったが、部屋にいるというのは向こうも分かっているのだから、居留守を使うというのもおかしな話だ。俺は小さなため息をついて、部屋のドアを開けた。
「ぁ……」
呻くような、わずかに漏れる声。そこからは明らかに、俺への戸惑いの気持ちのあらわれだろう。
「ほら、入るんだろ？　入ってこいよ」

「う、うん」
態度を窺うような視線と、まるで俺に怯えているかのような声に、なぜか少し苛立ちを覚える。今まで、こんなことはただの一度だってなかったことだ。
「……」
俺は意味も分からず苛立った気持ちを抑えながら、ついさっきまで寝ていたベッドに腰かけた。布団に残った体温が寝ていたときよりも温かく感じられる。
「どうしたんだ、座れよ」
入ってきたまま部屋の真ん中に突っ立っている沙弥佳に、いつものように横に座るようベッドを軽く叩いた。
「ううん。いいよ、ここで」
「そうか。それで？　何の用なんだ」
言った後に失言だったと内心で舌打ちした。用など一つに決まっている。わざわざ、煽りたてるように言うことではなかった。
「……」
「……」
互いに沈黙し、どこを見るでもなく目を泳がせている。本来ならこんな時、俺が気を利かせて何もなかったように振る舞うべきなのかもしれないが、今はそれもできそうな状況ではなくなってしまった。二度寝をする前に普段通りにしようと決めたはずだが、沙弥佳の態度を見た瞬間、そんなことは記憶の彼方に吹っ飛んでいったのだ。
「あ、あのお兄ちゃん」
「なんだ」
苛立ちをふくんだ口調で、呼びかけに応えた。別に怒りたいわけではない。なのに、受け答えするその口調には、自分でも分かるほどの怒りが含んだものだった。
「ぁ……その、やっぱり怒ってるよね？　昨日のこと……」
「別に怒っちゃいない」

「嘘。怒ってるよ……」
「怒ってないって言ってるだろ」
自分の言っていることを否定され、余計に苛立ちが増した。それを察してか、沙弥佳はこのことにはそれ以上なにも言うことはなかった。
「で、用はなんなんだ」
「うん……昨日のこと、謝りたくて」
「謝る？」
「……いきなりあんなことして、ごめんなさい」
少し頭を下げるようにして謝る沙弥佳に、俺は肩透かしを喰らった。なんでこいつはこんなに丁寧に謝ってるんだ。まるで、俺が他人みたいじゃないか。
「あ、いや……」
「本当にごめんね」
どこか悲しげな表情の沙弥佳に、俺はとたんに怒りが収まっていくのを感じた。そもそも怒る方が間違いというもので、特別怒るようなことなどなかったはずなのだ。
「……なぁ」
「なに……？」
「なんであんなことしたんだ」
俺はもう考えるのが億劫になり、単刀直入に聞いた。
「ぇと……」
沙弥佳は視線を俺から外しながら、どう言おうか迷っているようだった。それもそうだろう。しかし、さすがの俺もどうしてかは聞いておかないと、この先まともに沙弥佳に接していけなくなるようで嫌なのだ。
「……」
「どうした、言ってくれなきゃぁ分からんぜ」
「……お兄ちゃん」
何か言いかけた沙弥佳は口をつぐんだ。

「ごめんなさい」
「お、おい」
沙弥佳は一際大きく謝ると、俺の制止も聞かずに、勢いよく部屋から出ていってしまった。
「……なんだってんだ、一体」
一度収まりかけた苛々がまた沸き上がるのを自覚しながら、俺は一人つぶやいていた。

沙弥佳が兄の部屋から飛び出した時より遡って、昨日のことだ。
夕暮れに佇む中、沙弥佳は唐突に兄の唇を奪ってみせたのだった。いや、そう思ったのは兄だけだったかもしれない。妹である沙弥佳は、前々から兄にならそうなっても良いと思われる節があったためだ。
しかし、それでも沙弥佳自身、なんで突然あんな大胆な行動に出たのかは分からなかった。はずみだった、そうとしか言いようがないかもしれない。
だというのに沙弥佳はキスを終えたあと、猛烈な後悔が襲い、兄を置いて一人で走り去ってしまったのだ。頭の中が真っ白になってしまったようで、気付けば自室におり、その間のことはまったく覚えていなかった。
けれど、そこでもまた後悔が襲ってきた。当然だ。兄を置いてきたことにより、余計に顔を合わせづらくなってしまったのだ。どうしようとあくせくし、携帯を取り出して電話をしてみようとも思ったが、結局はかけられずじまいだった。そして思い切ってかけようとしたら、兄が帰ってきてしまったのだ。
おまけに、直後に両親まで帰ってきたこともあって、余計に出づらくなったのだった。母が食事と呼んでも、兄と顔を合わせるのが嫌で下に降りず、寝たふりを決め込んだ。そんなものは、ただの逃

げでしかないとわかってはいたけれど。それが幸か不幸か、時間をかけて遠出したことが沙弥佳を心地良い眠りに落としていった。

空腹で目を覚ました沙弥佳は、夜が明けて今が朝であることに気がついた。しかも昨晩は、着替えずに寝てしまったために、外出用の服にシワがついていて寝汗もひどい。おまけにその服は、クリスマスに兄がプレゼントしてくれた物だった。それを見た沙弥佳は、少し哀しい気持ちになりながら服を脱いだ。空腹を満たす前にまず、シャワーを浴びようと着替えをとった時だった。

カチャリ

そんな音が隣の部屋から聞こえた。もちろん、考えるまでもなく兄だ。休日にしては珍しく、かなり早く目が覚めたようだ。あるいは、自分のせいなのかもしれないと思うと沙弥佳はドアを開ける気にはなれなかった。

そんな自分の気持ちを悟ったのか、兄はいつもと違って、部屋を開けてから少しだけ間があった後に、階段を下りていく音が聞こえた。いつもの兄の行動とは少し違う気がする……いつも兄を見てきたからこそ分かる、ほんのわずかな違いだ。そんなわずかな違いに沙弥佳は、やはり自分のせいだと思えたのだ。

「ごめんなさい……」

沙弥佳はドアを背にして寄り掛かる。なんでこうなったのか……昨日のことに思いを馳せる。

突然キスしてしまえば、誰だってその人物のことを意識せざるをえなくなる。それが友達の関係であれ、先輩後輩の関係であれ。そして、たとえ血の繋がった兄妹であれ、だ。

けれど……あのときの兄の顔――。キスをした直後に見た顔は、明らかに何をしたんだという困惑と迷惑げな表情だった。それが兄が自分に対してどう思っているのか……否応なく理解させられるものだった。

「ごめんなさい……こんな気持ち悪い妹で……本当に」

下にいる兄に強くそう念じざるをえなかった。沙弥佳にはもはや、自分の気持ちが抑えられなくなりつつあったのだ。もう嫌だったのだ。

綾子のことは気の良い友人とは思ってはいるが、それとこれは別に考えるようにしたのだ。たとえそれが、最低な女だと後ろ指を指されることになったとしてもだ。唯一無二とも言って良い友人を、裏切ることにもなるかもしれない。いや、もはや裏切ってしまっている。それは昨日のことで明白になったことなのだ。

けれど、とも沙弥佳は思った。兄が言っていたではないか。本人たちが付き合っていないのなら、自分にもチャンスがあると。だから自分もそれに従ったのだ。

初めは春休みを使って、そうなるように兄を仕向けようとしたものの、思いもよらない形でそれが巡ってきてしまった。兄が卒業祝いということで、一緒に出かけないかと言ってきたのだ。もちろん、断る理由などない。だから一つ返事で承諾したのだ。

けれど、これがいけなかった。兄は自分の気持ちを知ってか知らずか、まるで恋人気分を高めるかのようなスポットに連れていったのである。今まで大好きな兄と一緒に出かけることは確かにあったが、あそこまであんな気分を出させてしまうような場所に出掛けたのは初めてだったのだ。

自分があんな行動に出たのも、そのためだったと言っていい。いつだって自分のわがままを聞いてくれた。時には嫌な時もあったはずなのに、それでも自分を優先してくれた。小さい時には、いつだって守ってくれていた兄。それが昨日は走馬灯か何かのように思い出が溢れ出してきたのだ。だからあんなに突拍子もない行動に出てしまった。

今までも自身が兄に対して、間違いなくブラザーコンプレックスだという自覚はあったが、最近は、もうそれだけではないと思えて仕方なかった。兄が親友であるはずの綾子と話す時の顔。兄がたまにその服に染み込ませていた、他の女の匂い。

それだけじゃない。綾子のストーカー対策として学校まで送ってくれていた時、クラスの女子から兄のことを聞かれた時。その時に抱いていた感情は明らかに、独占欲と嫉妬からくるものであると認めたくなくても、認めざるをえなかった。

それに、クリスマスに兄がくれたプレゼントにしたってそうだ。あれがどんなに嬉しかったことか、兄は知りもしないだろう。沙弥佳にとって、あれはとても重要なことだった。

そんな気持ちをこの数カ月の間、ずっと溜め込んできた。一日だって意識しない日はなかった。そしてその結果が、後悔という予期せぬ感情とは思いもしなかった。いや、キスしたという事実があって、初めて冷静になれたといった方が正しいのだろう。

この数カ月間は、兄と一緒にいて話すだけで、どことなく鼓動が速くなって、思ったようにうまく話せなくなることもあった。学校に行っている間は、気付けばいつも兄のことを考えているようになっていた。

だというのにふと冷静になってみれば、後悔することになるなんて、考えつきもしなかった。こんなことなら、ずっと想いを秘めたままにして、思春期の兄妹によくある、兄に悪態をつく生意気な妹を演じた方がまだ良かった。でも、それで鬱陶しく思われるのも嫌で、沙弥佳は結局いつものようにしていたのだ、この数カ月間は。

もしかするとブラコンであることを利用して、キスしてしまえば兄も自分に振り向いてくれるかもしれないと、無意識に思っていたのかもしれない。

そうしているうちに、階段を上がってくる音が聞こえた。きっと兄が朝食を終えてあがってきたのだ。時間も気付けば八時近い。時間的に考えてそうだろう。耳をすましてみれば、下では両親が何か話しているのも聞こえる。多分話題は自分と兄のことだと思われた。沙弥佳が夕食の席を一緒にしなかったことなど、未だかつて一度もなかったことなのだ。

しばらくすると、兄の部屋からも一切物音が聞こえなくなったこ

とを見計らい、沙弥佳は部屋を出た。リビングに行くと両親が出迎えてくれた。
「あら沙弥佳、おはよう」
「おはよう。昨日はどうしたんだ？」
「おはよ。昨日はお兄ちゃんとちょっと遠くまで出かけたんだけど、それで疲れちゃって寝ちゃったんだ」
「あらそうなの。お兄ちゃんと喧嘩でもしたのかと思ったわよ。あの子もなんかおかしかったし」
「そうなんだ。お兄ちゃんが……」
「それよりシャワー浴びてきなさいよ、寝汗で気持ち悪いでしょ。パン、焼いておくから」
「うん、そのつもりだったから。ありがとね」
沙弥佳はそう告げるとシャワーを浴びるべく、脱衣所に向かったのだった。

沙弥佳の様子がおかしいまま、週は明け、またいつもの日常が始まった。だが、もう今週で学校は終わり、来月には最上級生として、色々とありそうな一年を迎えることになるわけだ。実感などないし、正直にいって、これといったことも考えていないので、ただそうなるのだということだけだ。
それよりも、昨日の夕方から沙弥佳と一言も話していないということの方が、俺には目下の問題だ。今朝の朝食の時には姿を見せなかったし、昨晩の夕食にはきちんと下りてきたものの、俺とは一言も話すことはなかった。それどころか、視線すら合わせようとはしなかったのだ。
ただ、顔には明らかに俺に対して申し訳ないような、何か言いた

いことがあるような、そんなことを窺わせる表情をしていた。俺もそんなことなど気にせずに話しかければ良かったのだろうが、どうにも気恥ずかしさが先立ってしまい、話しかけることができなかったのだ。

今週は授業が最後というのもあって、授業なんてものはなく、担当の教師がただ教室に来ているだけとう状態だ。真面目に自習しているものもいれば、隣後ろとだべっているものもいる。

そんな中、俺はといえば何もせずにただ窓の外を眺めながら、そんな風に妹のことを考えていた。

窓の外から視線をはずすと、ちょうど青山の姿が目に映る。沙弥佳のことばかりですっかり記憶の中から抜け落ちていたが、青山にはあの黒田のことを依頼していたのだった。

俺は雑談をしている級友たちの間をすり抜けて、青山の席に移動する。

「青山」

小さな声で青山を呼ぶ。振り向き、下から覗きこむように見る青山は、なぜかげっそりとした印象を受けた。こいつはこいつで色々と大変そうだ。

「例のことなんだが」

そういうと青山は、首を横に振るだけだった。まだ何も掴めていないということだ。

「そうか。……ところで、最近少し痩せたか？　なんだかやつれているような感じがするが」

「うん、ちょっとね……」

「……そうか」

心底、疲れているような表情をして見せながら（本人にその気はないのだろうが）、苦笑まじりに言う青山に俺も、思わず苦笑してしまう。

俺は周りの生徒たちが俺たちを見ていないかを確認し、青山の前の席に座った。席の主は他の級友のところに行って雑談しているよ

うだった。
「青山。おまえに聞いておきたいことがあるんだ」
「うん？　どんな？」
小首を傾げるような仕種で、青山は俺を見た。あまり人に聞かれたくないこともあって、自然と話す声も小さくなる。
「まぁ……そのなんだ。ちょっと聞きにくいことなんでな。おまえ、確か今、女の子と付き合ってるんだよな？」
「うん」
青山は、少しだけ戸惑うような顔をしたものの、すぐにそいつを肯定した。そこには、確かな意思を感じられる。
「だったらさ、キスとか……もうしたか？」
「え？　唐突だね……ま、まあ、したけど……」
その相手が誰とは聞かない。聞くのは不粋というものだろう。それにその相手は聞かずとも、ある程度予想がついているのだ。
「でもなんで？」
「……女の子がキスする時ってのは、どういう気持ちなのかと思ってね。ただ仲が良いってだけでしたりするものかな？」
「うーん、僕は女の子じゃないから確かなことは言えないけど、普通に考えて、好きな人じゃなかったらしないと思う」
「だよな……」
こちらが何度も考えたことを、青山は至極当然のように言った。いや、そういうものなのだと言うのは、人に聞くまでもなく自分自身気付いてはいたのだ。しかし、そうとは分かってはいても、誰かにそうだと聞かないといまひとつ、そうだと落ち着くことができずにいる。
「誰かとキスしたの？」
「ま、まぁな……ただ個人的には、ノーカウントにしておきたいと言うかだな」
「もしかして綾子ちゃん、だっけ？　あの子？」
知らぬのだから仕方がないとは、青山はいきなり直球を投げてき

た。いや、こういう場合は変化球というべきなのだろうか。なんにしたって俺の心情としては、綾子ちゃんも決して無関係とは言えない。もしキスをした相手が綾子ちゃんなら、こんな相談を持ちかけることもないのだが、青山にそこらのことにまで気付けと言うのは、さすがに酷というものだ。

「いや、全く別の誰かだ。今まで特別な感情なんて全くなかったんだ、ただすごく仲が良いってだけでな。で、そいつにいきなりそうされたもんだから、そいつの気持ちが良く分からなくてな……」

最後のだけは半分嘘だ。だが、そうであって欲しくないという気持ちもあって、俺はあえてそう言った。

「そうだね。話を聞く限りで判断すると、その子はきっと、前々から九鬼くんのことを好きだったんじゃないかな？　そして他に女の子が現れたことで、取られたくないって気持ちと、振り向いてほしいって気持ちがあったのかもね」

「振り向いてほしい……」

「うん。九鬼くんは、その子のこと、特別な気持ちはなかったんでしょ？　だから気付いてほしかったんだと思うよ」

「そうか……。そいつにとって俺は、恋愛の対象だったと考えるべき、なのか？」

「じゃないかな」

青山は断定的な言い方をしつつも、そこには半ば、確定的なもの言いを感じさせるものだった。しかし、そうなってくるとこっちはますます暢気にかまえてはいられなくなる。その相手というのが実の妹なのだ。

妹は歳のわりにしっかりしていると思うし、容姿だって悪くない。性格も芯の通ったやつだ。もちろん、俺はそんな妹がなんだかんだで好きなんだとも思う。だが、それは家族としてであり、それ以上はないのだ。もちろん、妹を傷つけるような奴には容赦するつもりはないが。

そんな妹が犬みたいに俺に飛びついてくるようであれば、俺だっ

て一度くらいは、一線超えたりなんかしないよな、なんて考えたことはある。だが、やはりそいつはないとすぐに思い返したのだ。妹はやはり妹なんだと。

しかし妹は、沙弥佳はそうではなかったらしい。正直に言うとあまり認めたくないし、認めてほしくないのだが、第三者の話を聞くと、そういう方向で考えていかないといけなさそうだ。まだ完全に、そうだと決まったわけでもないとしてもだ。

昨日、沙弥佳が謝ってきたのはもしかすると、そんな自分の行動が軽率だった、という意味だったのかもしれない。さすがのあいつも、そんなことが分からないほど、子供でもなかったということだ。一日明けて、冷静になったからこその謝罪だったのだ。少なくともそう思いたい。

となると俺も、いつまでも自分の気持ちに言い訳しているわけにもいかない。これが良い頃合いかもしれない。

一日の授業を終えるチャイムが鳴り、担当の教師が日直に号令を促した。黒田のことは引き続き青山に任すとして、俺は俺で、この中途半端な関係を終わらせようと決心するのだった。

時刻は午後の四時になるところだ。学校帰りの制服を着た学生や、大学生、サラリーマンなんかで溢れている店内を、俺は一人、席に座っていた。時間通りならそろそろこのキシマイ堂に、ある人物がくるはずだ。

店員の声がして、新たな客が入ってきたのが分かった。もしかしてと入口の方を見ると、そこには俺の待っていた人物がおり、店員に先客がいるのを説明している。そして俺を見つけると、店員にこちらの方を手で示し、軽く頭を下げてこちらにやってきた。

「九鬼さん」

「よお、なんだか久しぶりだな」

「実際はそんなに経ってないと思うんですけどね。でもなんか、もっと会ってなかった感じはしますね」

キシマイ堂で俺が待っていたのは、先々週の週末以来に顔を合わせた、綾子ちゃんだった。卒業式の日は俺も学校で、彼女はその後に実家の方に帰らなくてはならなかったため、その日は会えなかったのだ。

挨拶もそこそこに、俺は正面の席を引いて綾子ちゃんを座らせた。小春日和とはいっても、まだ夕方には寒くなるこの時期、クリスマスにプレゼントしたコートを着込んで、下には薄手のシャツという出で立ちだった。

「すまないな、突然呼び出しちまって」

「いえ、私も九鬼さんとお会いしたかったですし」

思わずこちらが照れてしまうようなことを、サラリと言ってのけてしまうあたり、満更じゃないなと思う。

「親父さんとは楽しく過ごせてるかい？」

「うーん、どうでしょうか。あまり話題らしい話題はないですね。あっても息のつまる学校とか将来の話ばっかりで……まだ、そうなるって決まったわけでもないのに。

あんな話のために、今週末までまだ一緒にいないといけないって分かってたら、いつもみたいにお泊りしたかったです。だって、九鬼さんたちと一緒の方が、比べるまでもなく楽しいですから」

珍しく、綾子ちゃんは嫌悪感を滲ませながら言った。いや、初めてのことと言っていい。今まで親父さんのことを話すにしても、こんなにまで嫌悪感を感じさせるようなことはなかった。将来の話というところに、恐らく彼女にとって、特別嫌な内容が話されたに違いない。

「そうか。君も大変だったみたいだな」

「本当にそうですよ。お父さんったら、なんでもかんでも自分の勝手に物事を進めて、私のことなんか、これっぽっちも考えてくれてないんですよ……本当に嫌になっちゃう」

頬杖をつきながら、ため息をもらす綾子ちゃん。憂鬱そうにしたその姿も、これがなかなかに絵になっている。
「あ、すみません。いきなり愚痴なんて言ってしまって……」
「いや、いいさ。本当は二日前の土曜に、綾子ちゃんを誘おうと思ったんだが、親父さんと久しぶりに週末を過ごすって言うんで遠慮したんだ。親子水入らずってやつでね。
だけどその調子じゃぁ、あまり良い週末を迎えたわけじゃぁなさそうだな」
肩をすくめながら笑った。良かれと思ってしたはずなのに、結果は全く逆になってしまうとは皮肉なものだ。
笑っていた俺だったが、皮肉な結果になってしまったのは綾子ちゃんだけでなく、俺自身もそうなんだと思い出した。そもそも、今日綾子ちゃんを呼んだのだってそのためなのだ。
「それで九鬼さん。今日はどうしたんですか？　何か用があるようですけど……」
「ん、ああ……妹の、沙弥佳のことなんだがな」
「さやちゃんの？」
無言で頷いた。さて、なんと言ったものか……。
俺は目を泳がせながら、どう言おうか考えた。全く、ここにくるまでは、しっかりと言おうと何度も頭でシミュレーションしたというのに、いざ本番、実物を前にすると駄目だった。綾子ちゃんはきょとんとしたような顔で、俺を見つめている。
しかも言おうすると、鼓動はドクッドクッと音がはっきり分かるほどに早鐘を打ち、心なしか息も荒くなっている。
「あー……くそ、もう考えたって始まらないだろうが。綾子ちゃん。単刀直入に言う」
「え？　は、はい」
突然俺が語気を荒らげたため、驚いたように綾子ちゃんは返事をした。その目はそれを象徴するように、大きく見開かれている。
「綾子ちゃん。俺と付き合ってくれ」

身を乗り出し、綾子ちゃんに少し迫るように言った。

周りの音は聞こえなくなり、風景も視界から消えたような錯覚を起こす。自分の鼓動や息遣いすら聞こえない。言う前には、あれだけ早鐘を打っていたというのに。

自分の身体中の全神経が、目の前の綾子ちゃんに注がれていることだけ。そのことだけは、しっかりと理解できていた。

第４９章

悔いとは後の前には立たない。後悔という字はそう書く。そんなのは小学生にだって分かることだ。しかし、いざそれを体験するとなるとどうだろう。途端にこの字の的を射たものだと、心底痛感してしまう。

俺は間違いなく、選択を誤ったといっていい。できうることならば時間を巻き戻して、全てをなかったことにしてしまいたい。そう念じざるをえないほど、目の前の沙弥佳は普通ではなかった。ほんのついさっきまでは、笑っていたのに。ようやく笑ってくれたはずなのに。

仲直りできたと思ったのは俺だけだったというのか……。どうしてこうなってしまったんだ……。

俺達はキシマイ堂を出て家に向かい、その途中に俺は綾子ちゃんに告白する経緯をオブラートに包みながら話をした。もちろんキスのことは話していないが、綾子ちゃんは勘が良い子だから、もしかしたらそのあたりも、もしやと勘づいているかもしれない。けれど、それをあえて聞き返さないあたりがやはり、できていると思ってしまう。

それに形はどうあれ、一応綾子ちゃんと付き合うことになったのだ。一応というのは、あくまで今はまだ、沙弥佳にそうだと思わせるためであって、正式にではないためだ。だが、沙弥佳の一件が落ち着いたら、きちんとした形で、もう一度付き合ってほしいと言うつもりだ。中途半端なのはあまり良くない。その旨も、きちんと綾子ちゃんに言っておいてある。

こんなことを言うのもなんだが、これは付き合う前準備、とでも言い訳しておこう。

「でも……」

「ん？」

「こんなこと言うとなんですけど、さやちゃん、いつかはそうなるんじゃないかっていう予感はあったんですよ。去年からずっとそういう雰囲気があるように感じられて、仕方なかったというか……。さやちゃんの九鬼さんを見る目、普通の仲の良い兄妹とは違うって思うこと、よくありましたから」

「そうだったのか……去年から」

あいつがそんな風に見ていただなんてこと、綾子ちゃんに指摘されるまで考えたこともない。去年からそうだったというのは、つまりは、それ以前からもそんな目で俺を見ていた、そういうことだろう。

綾子ちゃんの言い方を考えれば、それは去年のクリスマスからというわけではない、そう考えて良さそうだ。あのクリスマスあたりから変わったのは本当だろう。しかし、それは沙弥佳に大胆な行動をとらせるにまで至る、カウントダウンに過ぎなかったということだと思う。

そして、もうそれを否定するかしないかという問題ではなく、いかにその先を回避するか、今の問題はそこだ。できればあいつには、俺以外の誰かを好きになってほしい。沙弥佳には俺ではなく、もっと相応しい相手がいるはずなのだ。少なくとも、俺はそう考えている。もちろん、俺が認めた奴でなければ、ケツを蹴ってでも別れさせるつもりではあるが。

「でも九鬼さん。九鬼さんは気付かなかったんですか？　さやちゃんのそういう……」

綾子ちゃんは言いにくそうに、最後の方はゴニョゴニョと声が小さくなっていった。いくらそうだったんだと分かっても、やはり少なからずのショックはあるということだろう。

「正直に言うと、一度くらいはあるよ、もしかして……って思ったことが確かにある。でもそんなのそんな簡単に、はいそうですかと認められるわけはなかったし、以前から沙弥佳は、俺を恋人がわりにしか見てなかったのだとばかり、そう考えていたんだ。

だからかな。あまり、そういう風には考えられなかったよ。俺はあいつをそんな目では見ていなかったしね」

綾子ちゃんは黙って俺の話を聞いていた。そうするというのは、彼女にも沙弥佳にはそうあってほしくないという思いがあってのことなんだろう。だからこんなに、親身になってくれるのだ。他にも、それ以外の感情があると俺は思っているが。

とにかく、俺と綾子ちゃんが付き合うということになれば、沙弥佳もそれ以上は何も言わないのではないか、と俺は思っている。沙弥佳は思い切った行動の後、まぁ昨日の話なのだが、俺に謝ってきたのだ。推測の話ではあるが、あいつもやはり俺達が関係を結ぶというのに、少なからずの抵抗やまずかったという気持ちがあったに違いないのだ。沙弥佳は本当にこれで良かったのかと、間違いなく思っているはずなのだ。

そんな沙弥佳に追い打ちをかけるようで、どこか嫌な気分にはなるが、これもお互いのためなのだ。綾子ちゃんの協力があれば、沙弥佳もそれを受け入れてくれるような気がするのだ。

まだある。綾子ちゃんの協力を得るというのは俺にとっても重要で、一昨日にキスされた瞬間、不思議と嫌悪感というのは全く感じなかったというのがある。もちろん驚きはしたけども、突然のことというのもあるからか、単になんとも思わなかっただけなのかもしれないが、今思い出しても、あまり嫌悪するようなことではないな、とどこか冷静な自分がいたのだ。

こいつがいかんせん、俺を本当の怒りや嫌悪といった感情を、起こさせない何かのような気がしてならない。この冷静な自分は、そのうち本気になれないことをいいことに、なあなあのままに沙弥佳を受け入れてしまいそうで、俺自身、怖くて仕方ないのだ。

だからまだ理性的でいられる今、綾子ちゃんにこうして協力をあおいだというわけだ。
「……あいつなら、きっと分かってくれるよな」
「大丈夫ですよ、さやちゃんならきっと分かってくれますよ」
「ここまできたら、もう信じるしかないもんな」
「そうです。ファイトですよ！」
俺を元気づけるように、綾子ちゃんは手を顔の下で握り、そう言った。
「そうだな。ありがとな、少しやる気が出てきたよ」
「いえ……こうして元気づけるのも、こ、恋人の役目ですから」
綾子ちゃんはそういいながら俺の手を握り、頬を赤くしていくのだった。

綾子ちゃんも俺も無言のまま、家の近所に差し掛かった時だった。曲がり角から、最近見知った奴の顔が現れた。
「お熱い中、失礼でしたかな？」
「あんたは……黒田」
数日ぶりの顔合わせだった。なんてタイミングの悪さだ。
「なんの用だ。何度も言ってるが、あんたのいる機関とやらに入るつもりはないぞ」
「いきなりご挨拶ですな」
「だったら俺の前に現れないでくれ」
黒田は唇の片端を吊り上げるだけで、それ以上は何も言わなかった。黒田の不敵な態度に、いつものように苛々とさせられるが、それもまたいつものことだ。俺一人だけが腹の立つ思いをするのは、どう考えたって不公平だ。
それに今は綾子ちゃんだっているのだ。黒田と会うのは二回目の綾子ちゃんだが、その得体の知れなさに、前と同じように怯えたような表情を見せている。
「用がないんだったら行くぜ。俺はあんたと違って暇じゃぁないん

だ」
綾子ちゃんの手を引いて、黒田の横を通りすぎようとすると、肩をつかまれた。
「っ。なんなんだ」
「お待ちなさい。今回はあなたにちゃんとした用事があって来たのです。なに、大したことではない。すぐに終わりますよ」
そうは言いつつも、肩を掴む手には力をこめていた。本人は加減しているつもりだろうが。
こいつ、握力一体いくつあるんだ。痛いだろうが。
「ちゃんとした用事だと？」
俺は肩を掴んでいた男の手を、強引に引き剥がした。この男に、いつまでも肩を掴まれていたくない。
「ええ。何、ほんの数分もあれば終わる話です」
そういうと黒田は首を動かして、隣の綾子ちゃんの方を見た。サングラスで分からないが、綾子ちゃんの方を見たんだと思う。綾子ちゃんもそれに気付いてか、俺の服の裾を強く掴み、横目で俺の方を見る。
「分かった。綾子ちゃん、すぐに終わるから君は先に家に戻っててくれ」
「え？　でも……」
「大丈夫だ。俺もすぐに行くから」
俺はまだ握っていた綾子ちゃんの手を放し、戸惑いながらも頷いて、彼女もまた服の裾から手を放す。
「すぐに来てくださいね……？」
「ああ、分かってる」
強く頷いて見せ、綾子ちゃんを先に行かせた。
「ふふ、わざわざ先に行かせなくともすぐに終わりましたのに」
ニヤリとした口元には、どこか嘲りを含んでいるように思える。
そんな黒田の態度は無視し、俺はまくし立てるように言った。
「それで用ってのはなんなんだ。さっさと言えよ」

「では、単刀直入に言わせていただきます。あなた、最近ある筋の者と接触されませんでしたか」
「ある筋？」
「ええ。あなたが今井を退けた後、あなたに誰かしら、接触しようとしてきた人物がいるはずです」
心当たりがあると言えばある。あの女狐、藤原真紀だ。今なら分かるが、あの女のどこか得体の知れない雰囲気は、明らかにこの男と同種であることが分かる。それともう一人……斑鳩孝晶だ。奴の行動も、どこかおかしいと感じさせる節がある。
「……思い当たる節があるようですな」
「いいや、そんなものはないね。そんな人間がいたかと考えただけだ。大体、そいつのどこが危険なんだ」
「おそらくその人物は、あなたを手の届くところに置くことで、あなたの自由を束縛しようとしている。そして場合によっては、あなたを殺すことすら厭わないような者です」
「待てよ。なんだって俺がそんな連中に狙われてるってんだ？　俺はどこにでもいる、ただの高校生なんだぞ？　あんたにしろ、そいつにしろ、俺にこだわる必要はないだろうが」
「確かに。あなたはまだ高校生ですが、前も言いましたように、特別な才能をお持ちのようだ。そんな才能を持った人間を、我々が無視するわけにもいかない」
「前も才能だなんだと言ってたが、なんなんだよ、俺にある才能ってのは」
今の今まで、どこか上から目線で喋っていた黒田は、ここにきて不意に真面目な物言いになった。俺はそれが何かとてつもなく危険で、一歩踏み入れたら最後、底無し沼か何かのように、二度と這い上がれないように思えてならなかった。
「……今現在、何十億という人間がいるこの世の中、どれだけ人が増えようが、必ずしもその絶対数が増えるとは限らない、稀有な才能……この世界において、根源的な闘争心とそれを察知することに

長けた才能、とでも言いましょうか。
あなたには常人にはない、桁外れの生存本能がおありだ。私どもは、そういった人間をこうして機関に招聘しているのですよ」
黒田の説明を聞いて、思わず唖然とした。生存本能だって？　特別な才能だなんだとおだてておきながら、とんだお笑い草だ。そんなものがあったからって、今時どうだっていいことではないか。だというのにこの男は、恥ずかしげもなくそう言い切った。
「……なんだそりゃぁ？　わけが分からないぜ、あんたの話は。仮にだ、本当に俺にそんな才能……この場合は本能というのか、あったにしろだ、そんなのはいそうですかと簡単に信じられるようなものじゃない。おだてるだけおだてて、何か別のことを探ろうとしてるんじゃぁ、あるまいな？」
俺は早口で、半ば喚くようにまくし立てる。こいつの言っていることには、鵜呑みにできない何かがあるように感じられて、仕方がないのだ。
「……く、くくくく」
突然、黒田が笑い出した。
「なんだ、何がおかしい」
「くっくっくっくっく。いえ、なるほど。確かにあなたには普通の人にはない、稀にみる闘争心があるというのは、本当なんだと思いましてね。くくくく」
俺はどこか馬鹿にされたような気持ちになり、踵を返した。こんな奴に取り合った俺が馬鹿だったのだ。さっさと帰った方が、得策というものだ。それに綾子ちゃんも待っている。
「くく……おや、どこに行かれるので？」
「用はそれだけなんだろ。もう帰るぜ」
「これは気分を害したようで申し訳ありませんでした。いいでしょう、最後に一つだけ。帰ってもう一度よく考えてご覧なさい。必ずいるはずです、あなたに接触を持とうとした人物がね。そしてこの人物は、大変危険だということもね」

去る俺の背中に、まるで近いうちに何か起こるかのように黒田は言った。俺は忠告ともとれる言葉を拭い去るかのごとく、足早にその場を去ったのだった。

黒田と話していたのは時間にして、ほんの五分かそこらだった。数分とは言っていたが、まさにその言葉通りだった。俺は黒田からの言葉を頭の隅にやりながら、思考を切り替えた。今はまず、目下の問題に目を向けるべきだろう。

「綾子ちゃん」

なるべく早く来たつもりだったが、綾子ちゃんはすでに家の前で待っていた。

「すまない、待ったみたいだな」

「いえ、今着いたばかりですから」

そうかと相槌を打って、深呼吸した。

綾子ちゃんには、さっきの黒田とのやり取りが気になるような顔をしているのが、はっきりと見てとれる。まぁ、それも無理のない話ではある。二人でいるところに突然、得体の知れない奴が現れれば誰だってそうなるのは当然だ。

しかし、俺に先に行っていろと言われた手前か、気にはなりつつも、自分からは口にはしようとしない。しかし、俺自身がこの問題にはあまり関わりたくないと考えている以上、むやみにそいつを人に話すべきではないと思う。今はまだ言うべき時ではないだろう。

しかしそんなことより、自分の家に入るのに未だかつて、こんなに緊張したことがあっただろうか。沙弥佳に付き合うことになったと、ただそれだけを伝えるだけなのにおかしな話だ。気分はまるで、婚約を伝えにいく男のような気分なのだ。そもそも妹にそんなことを、こうして言わなければならないというのもおかしな話というものだが。

とは言え……牽制という意味では効果はあるだろう。兄妹で一線を超えようだなんて考えの方が、どうかしている……とまでは言わ

ない。少なくとも俺は両者の合意があれば、それはそれで構わないとは思う。あくまで両者の合意が前提だ。

今回の場合、俺は沙弥佳とそんな関係になりたいとは思っちゃいないのだ。沙弥佳を傷付けることになるだろうが、今は乗り越えなくてはならない時だ、仕方ないことなのだ。それに……沙弥佳も大事だが、今はその天秤にかけることすら愚かと言っても良いほど、比べられない人ができてしまった。だから、これで正しいはずなのだ。

「九鬼さん」

俺の名前を呼びながら、手を握ってくれた。その手はとても温かい。あるいは綾子ちゃんも俺と同じように、少なからず緊張しているのかもしれない。

「ああ、そうだな。行こう」

「はい」

俺と綾子ちゃんは手を握ったまま、家の門を跨いで、玄関にあがっていった。

家の中は不気味なほどに静まりかえっていた。玄関には靴があるので、沙弥佳がいるはずなのだがとてもそんな風には思えないほどだ。

「ただいま」

家中に聞こえるように大きな声で言うが、返事はない。先ほどの黒田の一件もあってか、嫌な予感がして最悪な想像が頭をよぎる。

「九鬼さん……」

綾子ちゃんもそう思っているのか、不安げな顔をしている。

「とにかく上にあがろう。あいつも寝ているだけかもしれない」

この嫌な感覚がただの杞憂であれば良いのだが、電気すらついていないのが、どうにもそれを払拭できずにいる。

「沙弥佳」

名を呼びながら、ドアをノックする。いないのだろうか。返事が

ない。不審に思った俺は、ドアを開けて中に入る。
「沙弥佳？」
部屋はカーテンが引かれているため薄暗く、おまけに今日は曇りだ。部屋の中は薄ら寒く感じる。
「……いない」
まさかとは思ったが、本当に黒田がここに入ってきて、沙弥佳を連れ去った……？　そんな考えが浮かんだ。正確には黒田の仲間だ。黒田が俺を引き止めて、その間に仲間が沙弥佳を連れ去った、そんな考えが脳裏をよぎるのだ。
普段なら、なにを馬鹿なことを、と鼻で笑うところだが、今はそう考えてもおかしくないほど、俺を取り巻く状況は変わりつつあるらしい。一体何が起こっているのかは当事者ながら、皆目見当がつかないのだが。
とにかくそんな風に考えてしまうくらいに、今この状況は芳しくない。
「沙弥佳」
呻くような小声で妹の名を叫ぶ。俺は携帯を取り出して、沙弥佳を呼び出すものの、コール音だけで、一向に繋がらない。
「九鬼さん……さやちゃんは……」
「駄目だ、出ない」
俺は携帯を折りたたみ、部屋を出た。心臓が再び早鐘を打ちはじめ、動悸が激しくなってきていた。キシマイ堂の時とは違い、明らかに嫌な汗が出始めているのも感じる。
「綾子ちゃん。君はとりあえず、ここにいてくれ。俺は一度外に出て探してみる」
早口になって綾子ちゃんにそう言い、階段を駆け降りようとした時だ。
ガチャリ
玄関のドアが開かれる音の後に、沙弥佳の声がした。
「ただいまー」

「っ……沙弥佳っ？」
俺も綾子ちゃんも驚いて、階段を駆け降りる。
「あ、お兄ちゃん。それにあやちゃんも、ただいま」
「さやちゃん」
「沙弥佳、おまえ……なんともないかっ」
俺は靴もはかずに玄関に飛び降りて、沙弥佳に詰め寄る。
「え？　別になんともないけど……二人ともどうしたの？」
なにもなかったように帰ってきた沙弥佳に俺と綾子ちゃんは、二人して安堵のため息を吐き出した。胸を撫で下ろすなんて言葉があるが、その通りだ。全く、心臓に悪い。
「ただいまーって……何してるの、あんたたち。しかも、靴もはかずに……」
今晩の料理のための食材が入った買い物カゴをぶら下げながら、母の遥子が入ってきた。この様子から察するに、沙弥佳と母さん二人で買い物にでかけていたようだ。母さんは不思議そうな顔で、俺たちの様子を見ていた。

今リビングでは緊張の告白をし終え、穏やかな時間が過ぎていた。沙弥佳と母さんは、二人で買い物に出かけていた。多分、最近様子のおかしい沙弥佳を心配し、母さんが気分転換にとでも誘ったのだろう。なんだかんだで、目に入れても痛くないほど可愛い娘なのだ。あまり態度には出さないが、かなり心配していたに違いないと思う。
そしてうっかりしていたのか（これは沙弥佳だと思うが）、家の鍵をかけ忘れていたようだ。事実、俺は鍵穴に鍵を差し込んだ覚えはない。それで心配したと伝えると二人とも驚いて、ごめんと謝ったのだった。
俺は、そんな場の空気を読んで、勢いまかせに綾子ちゃんと付き

合うことになったと告げた。沙弥佳も母さんも、当の綾子ちゃんも突然のことに唖然とした顔をしたけれど、良かったじゃないなどと言いはじめ、その様子はあれほど緊張していたのが馬鹿だったと思えるほどあっさりとしたものだった。

けれど、母さんならともかく、沙弥佳まであんなにあっさりとした態度を見せるなんて、思いもしなかった。あまりにも拍子抜けし、逆に二人して何か企んでいるのでは？などと疑ってしまったほどだ。

ともあれ、こうして俺と綾子ちゃんは、きちんとした形で付き合うことになったというわけだ。

「あ、いけない。そろそろ帰らないと」

夕飯までのささやかなひとときに、沙弥佳と母さんも交え、コーヒーとお茶受けとともに談笑していた俺達だったが、綾子ちゃんは家の都合のために帰らなくてはならなくなった。

「そうか。だったら送ろう」

「え、でも……」

「あら綾子ちゃん、あなたたちもう付き合ってるんだから、そんなの気にしなくたっていいわよ。どんどんこき使ってやんなさい」

「やかましい」

茶化す母に対して制止し、俺と綾子ちゃんは席を立つ。

「それではお邪魔いたしました」

相変わらず丁寧なお辞儀をしてみせた綾子ちゃんは、ほんの少しだけ沙弥佳の方に目をやったのを、俺は見逃さなかった。

「あやちゃん、またね」

一方の沙弥佳は、笑顔で綾子ちゃんにそう言って、何も感じてはいなさそうだ。この顔を見る限りでは、やはり俺の思い過ごしであり、こいつもしっかりと現実というのを分かっているようだ。

「それじゃぁ、ちょいと行ってくる」

「気をつけなさいよ」

「ああ」

二人に見送られながら玄関に行き、靴をはいた。続いて玄関で靴

を履いている綾子ちゃんを見て、なぜだかそれだけでこちらがドキドキしてしまう。
「はけたか？」
「はい。すみません、待ってもらってしまって」
「いいさ、気にするな」
肩をすくめながら玄関のドアを開ける。今日の夕方は曇り空ではあるが風もなく、西の空からは雲が切れて西日がさしていた。眩しくはあるが、今は逆にそれが心地良い暖かさだ。俺達はそんな中を駅に向かって歩きだした。
「今日はすまなかったな、わざわざ来てくれて」
「いえ。私もいい気分転換になりましたから……それより」
「ん？」
「さやちゃん……本当にあれで良かったんですか？」
「ああ、大丈夫だと思う。正直な話、泣きつかれたりとか、喚いたりするんじゃぁないかと思ってたんだ。思いの外あっさりといきすぎて、後でしっぺ返しがくるんじゃないかと、逆に怖いくらいだよ」
くつくつと俯きながら肩で笑った。
「実を言うと、私もそう思ってたんです。あのさやちゃんがあんなに大人しくしてるなんて、ちょっと驚きました」
「だよな。俺は最悪、綾子ちゃんとの関係が壊れちまうんじゃぁないかと、冷や汗かいたんだけどな。ま、そんなことにならなくて本当になによりだよ。これからも、あいつと仲良くしてやってくれな」
「はい。それはこちらとしてもそうさせてもらいたいくらいですよ。ただ……」
「ただ？」
「あ、いえ、なんでもありません」
綾子ちゃんは途中で話を打ち切って、口をつぐんだ。どういうべきか、そんなことを考えているかのような顔だ。けれど、そのうちにため息をもらし、俺に向き直った。
「九鬼さんは……本当にさやちゃんと何もないんですよね？」

「え？　あ、ああ」
突然真剣な顔になって聞いてきた綾子ちゃんに、俺は間抜けな顔になって、短くそれだけを言うにとどまった。
「こうなった以上、もうお互いに引くことはできないと思います」
お互いに？　それはどういう意味だろう。そんな疑問が浮かんだが、かまわず綾子ちゃんが続ける。
「私の推測……あくまで推測にすぎませんけど、さやちゃんは最後にもう一度だけ九鬼さんに、何かしらしてくるかもしれないです」
推測というわりに、その口調はどこか確信じみたもののようにも聞こえる。
「九鬼さんが、その……い、一線を超えたくないと本当に思うなら、絶対に拒否してくださいね？　もしどこか甘えさせるようなことがあると、必ずさやちゃんは希望を抱いてしまうと思うので」
「あ、ああ、そうか。そうだな、言われてみれば、あいつならもしかすると最後にってのはあるかもしれない」
その通りかもしれなかった。俺が綾子ちゃんと付き合うというのを告白した後に、漠然とした不安があったのはそういうことなのだ。多分、あれが初めてだったとは思うが、キスをしてきたほどの沙弥佳だ。何もないとは考えにくい。だとしたら、さっき笑っていたのは……作り笑いなのか？
なんにしてもだ。綾子ちゃんの言う通り、これはケジメだ。沙弥佳とは、明確な線引きをすることにもなるのだ。
「……すまないな。あいつとは友達のはずなのに、こんなことを」
「いえ……。こんなこと言うのもなんですが、もし、もしですよ？　九鬼さんがさやちゃんのことを妹として以外に見ていたら、私はそれはそれで良いとも思ってるんです」
「綾子ちゃん、そいつは」
ありえないと言いかけた時、唇に綾子ちゃんの人差し指が触れた。
「もちろん、あくまで仮定の話ですよ。私はもし二人がそうであれば、手を引くつもりだったんですよ、本当は。だけど、そうじゃな

かった。だったら、私もやれるだけやってみようって思ったんです。結果としては……さやちゃんに憎まれることになるかもしれないけど……」

どこかはかなげな顔で遠くを見る彼女の言葉は、半ば独白のようにも聞こえる。それと、懺悔のようにも。

「綾子ちゃん……」

「九鬼さん。私ね、本当は九鬼さんと出会ったの、駅で会ったのが初めてじゃないんですよ」

「え？　そうだったのか？」

唐突に綾子ちゃんが切りだす。しかもそれには初耳だった。しかし俺の記憶には、綾子ちゃんと駅で会ったより以前に、会ったという記憶は一切ない。

「ふふっ。知らないのも無理はないと思いますよ。会ったと言っても、ほんの一瞬ですから」

全体的に曇った空模様だが、西の空は雲も切れて、西日がさしている。その光りが俺と、なによりも綾子ちゃんの姿を照らしていた。

「私たちが初めて会ったのは、実は九鬼さんの卒業式の日なんですよ」

「卒業式って……二年前の中学校のか？」

懐かしむように笑いながら、綾子ちゃんは頷いた。まさか、あの日に出会っていたなんて、思いもしなかった。しかし、一瞬と言うのだから、それも仕方ないのだろうか。

「今でもはっきりと覚えてますよ。私、その日は仲の良かった部活の先輩のために式に行ったんですけど、ちょうど式が終わって部活の皆と先輩たちと話してた時、九鬼さんがさやちゃんに抱き着かれて、『なんで式にまで来るんだ』なんて言いながら校門を出ていった……そんな場面だったなぁ」

「あー……言われてみれば確かにあったな、そんなことが」

中学最後のホームルームが終わって母さんと校舎を出たら、なぜか沙弥佳も一緒に着いて来ていたのだ。綾子ちゃんの言うようなこ

とも言ったかもしれない。
「さやちゃんの紹介で会った時は、その頃に比べて身長も大きくなってるし、雰囲気もどことなく変わってるみたいだったので、ちょっと緊張しちゃって。その時のこと言おうとも思ったんですけどね」
「そうだったのか。確かあの年は、式の次の日が入試の合格発表だったんだよ。中学の卒業式と入試の発表って時期的に被るし、あの日は式が終わってもまだ気分がそれどころじゃぁなくてな」
二年前のことを思いだしながら話をしていると、すでにもう駅は目の前だった。
「あ、ここでいいですよ。今日はわざわざ送って頂いてありがとうございます」
「いいよ。まぁなんだ……一応、彼氏ってことになるわけだしな」
鼻の頭をかきながら、目を泳がせた。こんなことを言うのもなんだが、自ら彼氏と口にするのは意外と恥ずかしい。
「そ、そういえばそうなんですよね。あはは、なんかあまり実感ないなぁ」
「だなぁ。俺もだよ」
二人して笑いあっているうちに、ふと思い出したことがあった。それはあくまで今回は沙弥佳への牽制を兼ねての、“ごっこ”であったことにだ。沙弥佳の未練を断ち切る意味でも、この中途半端は終わらせておこう。
「綾子ちゃん」
「はい？」
ひとしきり笑い終えて、真面目な顔で綾子ちゃんと向き直る。
「さっきのは沙弥佳がいる手前だったから、演技という部分もあるんだ。だから改めて言わせてくれ。俺と付き合ってくれないか」
今度はさっきと違い、動悸も激しくなることもなくスムーズに言うことができた。綾子ちゃんは少しだけ目を見開かせたあと目を細めて微笑み、小さく頷いたのだった。
「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

俺の目には、その笑顔がとても眩しく映って見えた。

駅まで見送った俺は、浮ついた気持ちで家路についていた。
とても気分が良かったり、嬉しいことがあったりすると足が軽くなるとはよく聞くが、そうだと思う。今の自分はまさに、そんな状態だった。顔も自然と緩みがちになるし、全く、いつもの自分と比べたら、馬鹿じゃないかと思ってしまうほどだ。
「ただいま」
家に帰りついて自室のベッドに寝転がると、ようやく一心地つけた。上着を脱ぎ、ポケットから携帯を取り出して、登録してある綾子ちゃんの番号を意味もなく見つめる。それだけでまた、自然と気持ちが沸き立ち始めた。
というよりも、今すぐにでも綾子ちゃんの声が聞きたくて仕方がないのだ。しかし、もしかすると電車に乗っているかもしれないと思うと、もう少し待ってみようと思いとどまる。
「そうだ。この際、着メロ変えてみるか」
普段はマナーモードになっているか、買ったときのままの味気ない着信音のままのため気にすることもなかったが、これを機にそうしてみるのも悪くない。普段特になにもないときはマナーモードにしているけれど、これからはそれを解除して他の着信音にみるのも、ちょっとした楽しみになるかもしれない。
コンコン
ドアをノックする音に気がそがれ、寝たままで顔を動かして目をドアの方にやった。
「お兄ちゃん」
「沙弥佳か。入ってこいよ」
そう言うと、ドアを開けて沙弥佳が入ってきた。きちんとドアも閉めるのが、こいつらしい。

「どうした？」
携帯を枕元に置いて起き上がる。沙弥佳の顔は能面でも被っているかのように、無表情だ。ここまで無表情な顔は、見たことがないかもしれない。
「……」
「沙弥佳？」
「お兄ちゃん。嘘だよね？」
「……何がだ？」
沙弥佳は俺から視線を逸らすように俯いた。それからはまたしばしの沈黙があった。
「あやちゃんのことだよ」
短く、簡潔に、そこには一切の感情が込められていない言葉だった。
「あ、ああ、綾子ちゃんのことか」
この時俺は、綾子ちゃんの読みが当たっていることを思い出した。全くその通りだったのだ。俺はため息を一つ、沙弥佳を見据えて言った。
「本当だ。おまえだって見たろ？　俺は……」
綾子ちゃんと付き合うよ。そういうだけのことなのに、なぜか言い淀む。もう、とっくの昔から決めていたことなのに、なぜ言葉に詰まるんだ、俺は。
「……俺は綾子ちゃんと付き合うよ」
沙弥佳から目をそらしながらそう告げる。自分でもなんでそうしたのかよく理解できない。
「……んで」
無表情だった顔に、わずかに感情が込められた。
「なんで……なんでっ」
みるみるうちに、沙弥佳の顔は悲痛さを帯びていく。
「お、おい」
沙弥佳は大股で一歩二歩と寄ると、両手で俺の顔を向けさせ強引

に俺の唇を奪った。そこには前のような、思わず沙弥佳も一人の女というのを感じさせずにはいられないキスとは、全くかけ離れているものだった。

「ん……」

さらに俺を求めようと、今度は沙弥佳の舌が唇を割って、差し込まれる。

「っ！」

舌でそれを拒否しようとすると、図らずも、沙弥佳の舌に触れてしまい、互いの舌が絡みあってしまう。お互いの体勢もあって、沙弥佳は立ったままの状態で舌から唾液を流しこもうとすらした。

俺はそこで沙弥佳の肩を掴み、体を強引に引き離した。体が離れた際に、お互いの唇から唾液の糸が伸び、それが途中で切れる。その糸が俺と沙弥佳の唇と顎にかかって濡らした。

「はぁはぁ……何、するんだよお前はっ」

手で口元を拭いながら喚めいた。

沙弥佳は口元が濡れているのも気にせず、明らかに濡れた瞳で俺を見ている。

「……嫌……嫌なんだよ、お兄ちゃんが他の人のものになるのが」

「何言ってるんだお前は。俺とおまえは兄妹なんだぞ。血が繋がってるんだ。分かってるのかよっ」

「……そんなの言われなくたって分かってるよ。でも、もう無理だよ……」

「いいや、お前は分かってない。この世の中、いつまでも兄妹一緒でいられるわけはないんだ。お前は単に俺をただの恋人代わりにしているだけで、恋というのを錯覚してるだけだ」

俺はまくし立てる。多分ここからが正念場だろう。

「俺にも恋人ができた。もうお前にべったりってわけにはいかないんだ。分かるだろう？　それにな、言ってたぜ綾子ちゃんもな。綾子ちゃん――」

言葉の途中で、飛び込むような形で沙弥佳にベッドへと押し倒さ

れた。そして再び、唇を重ねられる。しかし、今度のはとても短いもので、すぐに唇が離れていった。

「いやだよ……あやちゃんの名前言わないでよ……。私、お兄ちゃんの口からあやちゃんの名前が出ると、すごく嫌な気持ちになるんだよ。お兄ちゃんがあやちゃんと楽しそうに話してるの見ると、胸がすごく苦しくなるの……今はお願いだから、あやちゃんの名前は言わないでよ……お願い」

必死な懇願に俺は言葉を失った。なんで、おまえはこんなにも俺を好きなんだ。なんで血の繋がった兄貴なんかを……。

「でも……でもね？　分かってるよ、本当は……。もうお兄ちゃんの気持ちは私には向いてないって……。

ううん、はじめっからそうだったの。はじめから私はあやちゃんには勝てなかったんだよ……」

そこで言葉を区切った。俺は倒れて抱きつかれたまま、それ以上何もしようとはしなかった。今ならどかせることもできたが、そうはしなかった。

「だけど無理だよ……同じ家の中に、好きな人がいて、でもその人は私のこと、そんな風には見てなくて……。凄く辛いよ、凄く辛かったよ。

でもお兄ちゃん言ったよね？　まだ付き合ってないなら、私にも十分振り向かせる権利があるって。確かにそう言ったよね？」

言った。沙弥佳の言う通り、確かに俺はそう言った覚えがあった。しかし……。

「た、確かにそうだ。そのことは否定しないが、そいつはおまえが他の男を好きだからと思って言っただけで、それが俺だったんなら、あんなことは言わなかった」

第一、俺は沙弥佳のことは、ただのブラコン妹としか見ることはできないのだ。

「……お兄ちゃん。私が誰か好きになってるって、お兄ちゃん以外の人を私が好きになったって、本気でそう思ってたの？」

どこか責めるような言い方だった。だが、それに気付いていたとしても、俺の出した答えはきっと変わらなかっただろう。

「私言ったよね。好きな人がお兄ちゃんに良く似た人だって。その時、本当に何も気付かなかったの？　何も思わなかったの？　それがお兄ちゃんだって……」

俺は何も答えられない。その時の俺は愚かにも、そんな奴がいるのなら会ってみたいとすら思ったのだ。だってそうだろう。まさか本気で兄貴に惚れている妹だなんて誰が信じるというのだ。

「ねぇ、お兄ちゃん……私のこと、気持ち悪い？」

「え……？　そ、そんなことは……」

「お願い、はっきり言って。少しでも私に付き纏われるのが嫌だって思ったんなら、そう言って」

綺麗な、はっきりとした口調。沙弥佳が本気の時のものだ。それがわかっているだけに、なんと答えればいいのかわからない。俺はなんて言えばいい……。

正直、確かに欝陶しいと思ったことがないと言えば嘘だ。しかし、かと言って、それが気持ち悪いだなんて思ったことは、一度だってないことなのだ。

「お、俺は……おまえのことを気持ち悪いだなんて思ったことはない」

「本当？」

「ああ。それだけは一度だって思ったことはないよ」

しばしの沈黙の後、沙弥佳は抱きついていた俺から上体を起こし、今度は腹部に跨がるようにして俺を見下ろした。

「お兄ちゃん……好き。大好き。ずっと前から……本当にずっと、ずっと前から私、九鬼沙弥佳は、お兄ちゃんのことが大好きです」

切なさと哀愁を漂わせるその言葉と、感極まって泣いてしまいそうなほどに潤んだ瞳をみた俺は、思わず沙弥佳を抱きしめたくなってしまってどうしようもなくなった。

だが、それを頭の中の誰かがそれを拒否させた。綾子ちゃんを好

きになってしまった手前、それはもうしない方が良い気がしたのだ。
綾子ちゃんも言っていたではないか、絶対に拒否しろと。
しかし、またそれとは違った、また一つの確信めいたことがあった。それはもしここで俺が沙弥佳を抱きしめてしまえば、それこそ本当に一線を超えてしまいそうな、直感めいた確信があったのだ。
「だから……お願い。一度で良いから……この一回きりで良いから、私を抱いてください」
酷く蠱惑的で、どこか媚びを売るような潤んだ瞳の眼差しと、俺を求めようとしてきたその唇に、俺は自分の理性が限界にきているように思えたのだった。

第５０章（前書き）

性描写が満載ですので、１８歳未満の方は自己責任でお願いします。

第５０章

沙弥佳の大胆な告白に、俺は理性が崩壊しかけていた。ついさっきまであれやこれやと理屈をこねていたのに、いざ最後の正念場を迎えようという時に限って、それが音を立てて瓦解しようとしているのだ。

「な、何を馬鹿なこと……」

鼻で笑おうとしたがうまくできるはずもなく、ただ目を逸らすだけとなってしまう。

「お兄ちゃん……」

沙弥佳はその美声をもって、なおも囁きかけてくる。

俺の上に乗ったままだった沙弥佳は、少しだけ腰を浮かし、そのままずるずると下半身の方へと腰を動かしていく。

沙弥佳はゆっくりとその唇を下げていき、キスしようとした。さすがの俺も、今度ばかりはそれを否定するかのように、顔を背けた。それでもなぜか、目だけは沙弥佳に鍵付けになっている。

そのことを察してからなのか分からないが、沙弥佳は標的を唇から首筋に変え、そっと首筋に触れた。

途端に俺はビクリと身体を震わせる。くすぐったいのと、それとはまた違う、なんとも言えない心地良さがあったのだ。

「さ、沙弥佳、やめろ」

「ごめんね。でも私、やめないよ……お兄ちゃんが抵抗するなら別だけど」

つまり俺が抵抗しない限り、それは同意と見なされるということか。

沙弥佳は俺が強く抵抗しないことをいいことに、首筋を強く吸い、キスマークをつけた。

「……お兄ちゃんにこんなことしたの、私が初めてなんだよね……」

俺を責めていることに興奮し始めているのか、耳元で囁いた。そ

して耳たぶを甘噛みし、耳に息を吹きかける。
「お兄ちゃん……好きだよ」
囁きながら、次は舌を使って、耳たぶの裏から首筋、更には鎖骨のあたりまでねぶる。
今度は反対側へと体勢を変えながら、体全体を使って、俺の耳や首筋の辺りを丹念に舌先で舐めていく。
俺はといえば、そんな沙弥佳の思いもかけない奉仕に、完全にノックアウトされていた。所謂、前戯と呼ばれるものだが、女はこいつが好きであると同時に、大切だと以前ネットで見たことあったがその気持ちがよく分かった。お世辞抜きに気持ちいいのだ。できればずっとこうやってもらいたい気分になってしまう。
こんな風に気持ちを高められてしまうと、もはや理性なんてあってないようなものだ。俺の脳裏からは、だんだんと理性という二文字が気化していくように消えていく。
（もうどうにでもなれ……）
もっとこの快感を貪っていたい気持ちになって、仕方がない。
もう抗う気力がなくなりつつあった。それほど沙弥佳の奉仕の熱の入れようは、凄いものだった。ふと、男の俺すら思い付かない奉仕を、なぜ沙弥佳は知っているのかという、素朴な疑問が浮かんだ。
「沙弥佳……おまえ、どこでこんなの覚えたんだ」
「ふふ、お兄ちゃん気持ちいいんだ。すごく瞳が潤んでるよ……。今時、インターネットっていうものがあるんだから、調べたりするのなんて簡単だよ？　あ、もしかして、私が誰かにしてあげたとでも思った？　知ってはいても実際にするのは初めてだから、安心して。お兄ちゃん以外にはこんなこと絶対にしたくないから」
興奮のため、沙弥佳は掠れたような声になりながら、耳元で囁く。そんな行動の一挙一動がとてつもない快感を生む。まるで、俺がこうされたいというのを知っているかのように。
「なんで……なんでこんなことするんだ」
快感に耐えながら、呻くように言った。

「そんなの……単純だよ。お兄ちゃんに気持ち良くなってほしいから。これ以外に理由なんてないよ」
「なに言ってるんだよ……俺達は兄妹、くっ」
いつの間にかシャツははだけており、あらわになった胸元に、沙弥佳が強く吸ったのだ。先ほどよりも更に強くだ。
「まだそんなこと言ってるの？　言ったよね。もし本当に嫌なら、本気で抵抗していいって。なんでそうしないの？　お兄ちゃんだったら、とっくに私なんか組み伏せることだってできてるはずなのに」
クスクスと、とても沙弥佳とは思えないほど淫靡な笑いをもらしながらも、はだけた胸や腹をその指先をもってして、軽く触れながら撫で回している。
「それは……そんなことしたら、お前に怪我させちまうかもしれないからだ」
「物は言いよう、かな」
クスリとし、沙弥佳はついに俺のベルトに手をかけた。スラックスを脱がそうとしているのだ。
「んと……こうかな」
カチャカチャという音の後に、ベルトが外されたのが分かった。この時、俺は間違いなく理性が解けていたに違いない。普段の、いや、普段も何も普通であれば、兄妹でこのような行為をする方が間違いというものなのだ、今のこの世の中では。
沙弥佳はそんなことなどお構いなしに、スラックスを脱がそうとしている。ついには片手で俺の肌を撫で回しながら、もう一方の手で、己の着ている服を器用に脱ぎはじめていたのだ。
「お兄ちゃん……私の、お兄ちゃん……」
“私の”お兄ちゃん、か……。こいつの中では、俺はもうなくてはならない存在になっているのだろう。
そんな譫言（うわごと）を繰り返している沙弥佳を目にすると、俺ももう兄妹だとかそんなものは、半ばどうでも良くなってくるのだ。むしろ兄妹だから、血が繋がっているからこそ興奮できているような、そん

な感覚に陥りはじめていた。
その証拠に俺は、いつの間にか生唾を飲み込んで、沙弥佳が器用に服を脱いでいる様を、舐めるようにして見ていたのだ。当然ながらその間にも、沙弥佳の俺を撫で回す手は止まらない。俺もその手の動きがとても心地良い。
はらりと、着ていた服をベッドの脇に脱ぎ捨てると、淡いピンク色をしたブラジャーが現れた。意識したことがないため気付かなかったが、意外と大きいのだなと思った。
「ね、お兄ちゃん。……これ、今日初めてつける下着なんだ。どうかな、似合ってる？」
「……あ、ああ」
いつだったかに見せた蠱惑的で、吸い込まれるような瞳で俺を見下ろしている。沙弥佳の濡れた切れ長の目が、俺の中にいる、雄の部分を否応なしに掻き立てる。駄目だと頭のどこかで分かっているのに、なぜか抗えない。俺はぼうっとした頭で、沙弥佳の問いにただ肯定することしかできなかった。
「ん、ありがと。……じゃあ、こっちもね」
そう言って沙弥佳は、ローライズデニムのパンツの留めボタンを外し、ジッパーを下ろす。
「お兄ちゃん、随分興奮してるみたいだね」
「っ。……別にしてない」
指摘されて、思わず顔を背けた。気付けば瞬きするのも忘れ、妹のストリップに目を奪われていたのだ。だが沙弥佳は俺の態度はお構いなしに、さらに俺を興奮させようとローライズデニムを脱ごうとした。
「ん、さすがにこの体勢じゃ無理かな」
沙弥佳は腰を浮かしてデニムを片手で器用に下ろしていくが、ふとももの真ん中辺りにくると、それ以上は下ろすことができなくなった。俺に跨がっているのだから当然だ。けれど沙弥佳は、それでもなお俺から下りる気はなさそうだった。

奇しくも沙弥佳の浮かした腰が、ちょうど俺の腰の下、もっというと股間あたりにまできていたのだ。偶然なのだろうが、見ようによっては俺が、沙弥佳を完全に受け入れ万全かのようにも見ることができそうな状態だ。

「……」

ゴクリとまた生唾を飲む。沙弥佳は確かに妹だが、男のツボを押さえたような扇情的な仕種に、俺は更に興奮していった。俺から跨がり続けているのは、もし自分がどいてしまったら俺が逃げてしまうからと思っているのだろうか。

下ろされた沙弥佳のデニムの中から現れたのは、ブラジャーとお揃いかと思われる淡いピンクをしたパンティで、いつかに見たものと同じもののように思えたが違うようだ。今日のは腰の両側に紐がついていて、それが綺麗に蝶結びになっている。

「気付いた？　これ、前に新しく買ったんだ。お兄ちゃん、こういうの好きでしょ？」

俺を見下ろしながら、普段とは違う掠れ気味の声で囁く。その声は、とても十五の娘のものとは思えないほど妖艶だ。なんで沙弥佳が俺の趣味……というか、ツボを押さえるようなことを知っているのか疑問には思ったが、沙弥佳の囁く美声と、兄妹でこんなことをしているという倒錯した思いがそれを掻き消した。美声の持ち主だけあって、そんな風に囁かれるとそれに抗えなくなってしまうのだ。

「さ、沙弥佳……」

まるで高級なコールガールか売春婦か何かのような行為をして見せている妹に、俺は少なからずのショックを覚えつつも、それとは全くの正反対に、自分でもありえないほどの興奮しているのを認めざるを得ない。それでもまだ自分から手を出さないのは、唯一、最後の理性による呵責の念だけが俺を支えているからだ。しかし、この最後の砦すら崩壊はもはや、時間の問題といってもいいかもしれない。

「お兄ちゃんの胸板、思ったよりもあるんだね……それに腹筋も。

……あっ」

指を俺の胸板から腹部へと撫で下ろしていくと、脇腹の下にある傷跡に触れた。今井の手によってつけられたものだ。

「この傷……私のせいなんだよね」

妹である自分が、兄である俺を責めているという行為に沙弥佳は酔っているのか、どこか夢心地になった声で言った。

そして俺も、その沙弥佳の言葉ひとつひとつに倒錯していった。

「ここ、私が舐めてあげる」

マウントポジションをとっていた沙弥佳は、ここにきてようやく俺から降りて、右の脇へとどいた。だが、手は俺の身体からは離さず、置かれたままだ。

「うっ……」

すかさず腹の傷跡に舌をやり、先ほどのように舌先で数センチの縦長い傷跡を、ゆっくりと上から下へと何度も往復させる。俺はその感覚に思わず呻く。沙弥佳は舌を使いつつも、時折そこに口づけした。傷跡を愛おしむかのように。

「はぁっ……ぉ兄ちゃ、んっ」

呻きながら、なおも傷跡を舐め回し、今度はそこから更にその周辺へと範囲を拡げていく。

その沙弥佳の様子はとても俺の知っている妹のものではなく、完全なまでに男に尽くす、一人の女のものだった。この時俺も、沙弥佳を完全に妹とは思っていなかった。むしろ、もっとしてほしい、もっと自分に尽くさせたいといった、普段の俺からは、おおよそ考えもつかないような思考に、頭の中を支配されていた。

しかし、そのうち沙弥佳の俺を押さえ付けようとする力も自然と無くなっていて、俺はすでに自由になっていた手を何を思ったか、献身的な奉仕をする沙弥佳の頭にやった。

一瞬、ほんの一瞬だが、沙弥佳はピクリと身を強張らせた。多分俺が、無理矢理にでもどかそうとしたとでも思ったのだろう。もち

ろん、俺だってそう思いもした。だというのにこの思いとは裏腹に、身体は意思とは別の行動をとっていたのだ。

これには俺も、内心では半ば驚きがあった。なぜどかそうとしないのか。なぜどかそうとしなかったのか。なぜこんな行動をとったのか、自分でも信じられなかった。

頭の中では冷静な自分がまだいて、こんなことは早くやめろと警鐘を鳴らしているのが、確かに自覚できている。だがそれとは別に、明らかにそうでない自分がいるのもまた自覚できていたのだ。

“そいつ”は、別にいいじゃないか、おまえの好きにすればと俺に囁きかけ、同時に冷静な俺を責め立てているのだ。“そいつ”のおかげなのか、はたまた“そいつ”こそが俺の本心なのかは分からないが、とにかく俺は沙弥佳を止めることはなかった。

沙弥佳は、俺がただ頭に手をやっただけで、そこから何もしなかったのを肯定と受け取ったのか、再び行為を開始した。もはや俺は、沙弥佳に好きにされる人形か何かのようだった。この時点で俺の理性は、あってないようなものだったのかもしれない。

（駄目だ。こんなことはいけないはずなのに……）

多分、自らの意思をもってして沙弥佳を止めるのなら、これが最後のチャンスになるだろう。おそらくそれは間違いない。漠然とだが、瞬時にそれを理解した。

だが、頭の片隅にやめろという理性の必死の声も虚しく、我慢できなくなった俺はそれを無視し、沙弥佳の腕を引いた。沙弥佳によって倒された上体を起こして、素早く沙弥佳をベッドに組み敷く。

「あっ」

ついさっきまでとは打って変わって、沙弥佳は少女らしい呻き声を漏らした。

「……」

俺は無言のまま沙弥佳を見下ろす。今度は、俺が沙弥佳の上に覆いかぶさるような形だ。互いの顔がとても近く、よく注意して見れば、ほんのわずかな動きすら分かってしまうような距離だった。

気付けば、不思議なことに家の中からの音は消え、聞こえてくるのは住宅街から離れた国道を走る車の音と、どちらのものともしれない息遣いと、そしてこんな異常とも言っていい状態であるにも関わらず、普段となんら変わらない自分の鼓動音だけが俺を、俺達の聞こえる全てだった。今この空間において、それらの音以外はなにもかもが排除され、それら以外のものはどこか遠い世界のもののようにも思える。

そんな中俺は、舐めるように沙弥佳の乱れた服の中から晒された、下着と素肌を見ていた。肌は色白で、その表面はとても張りがあるように見え、弾力がありそうだ。

真白い肌にうまい具合にコントラストを醸しだしているのが、黒く長い、しなやかな髪だ。その長い黒髪が乱れ、首や肩、胸の辺りにまでかかっているのがとても淫靡に思えた。沙弥佳はそんな俺を瞬き一つせず、じっと瞳を向けてきているだけだった。

今の今まで、自分が上位にいたはずで、今では組み敷かれてしまっているというのに、全く動揺しているそぶりはない。こうなるのが当たり前であり、当然であるかの如くだ。だがおかしなもので、何もしていないからこそ、またそいつがどうしようもなく男の、雄としての本能が刺激されてしまうのだ。

「……お兄ちゃん」

「沙弥佳……」

互いに呼び合うと、それだけでゾクゾクと何かが背筋を駆け抜けていく。頭蓋の中では最大限に、なくなったと思っていた理性が最後の警鐘を鳴らし、俺を引き留めようとしているのが分かった。

当然、本来であれば、理性に従うべきだというのは理解している。理解しているが、今の俺にはそんなものに従うのは馬鹿のすることで、無意味だと思えていたのだ。沙弥佳だって、ここから先に進んでしまえば、もう後戻りできないことは分かっているはずだ。

俺はまだ掴んでいた手を離し、そのまま沙弥佳の頬にそっと触れた。

「……いいよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんとなら私……後悔しないから」

沙弥佳は投げ出されていた手を、俺の首の後ろに廻してそう告げる。そしてそのまま口づけてくる。その口づけは、強引なものとも、あの河川敷で交わした淡いものとも一切違う、確かに俺への気持ちが伝わってくるものだった。

この口づけを最後に、俺は自分の理性の手綱を自らの手で放り出した。今の今まで気付かなかったが、俺のペニスは痛いくらいに勃起してしまっていたのだった。

俺は、まだ脱ぎかけだった沙弥佳の服を脱がしにかかった。沙弥佳も俺に身を委ねながら、脱がしやすいようにしてくれた。上体を起こし、ふとももの真ん中あたりで引っ掛かっているローライズデニムを半ば強引に引っ張り、肉も付きすぎず、細すぎもしない脚を露出させた。さすがにブラジャーだけは沙弥佳にとってもらったが、カップが外されて出てきた乳房に、俺はゴクリと生唾を飲んだ。

「お、お兄ちゃん、そんな風に見ないで。恥ずかしいよ……」

「あ、ああ、そうだな、すまん」

しかし、恥ずかしげに片手で胸を隠し、今までの興奮とは違う可愛い顔をして見せた沙弥佳のその仕種に、俺は不覚にもドキリとしてしまった。

「……手、どけて」

躊躇いながらも、ゆっくりと沙弥佳は胸を隠していた手をどけた。大きさとしてはC、いやDカップはあるだろうか。男の俺にはちょうどよさ気な大きさと思われた。形も悪くない。きっと人が人なら、モデルをしてくれとでも頼んできそうな、そんな形だ。美乳というのはこういう形をいうのかもしれないと、そんなことを考える。

「思ったよりも綺麗な形、してるんだな」

「そうかな」

「ああ……もしかしたら、俺の好みかもしれない」

そう言いながら、俺は早速目の前に現れた乳房に触れた。その瞬

間に沙弥佳は、ピクンと体を震わせる。そんな反応が可愛く思え、俺は乳房の下から頂きに向かって円を描くように撫でていく。乳房の頂きである乳首に指が触れて、俺は思わずそれを摘んだ。

すると途端に沙弥佳は悩ましげな声を漏らし、体を弓なりに反らした。沙弥佳の思ってもみなかった反応に俺は少し驚きながらも、もう一方の手で沙弥佳の腹を軽く撫でながら、ゆっくりと下の方へ手を伸ばしていく。

指の先が下着の縁に当たると、そこから一気に下へとやった。求めているのは、沙弥佳のデルタ地帯だ。

「んっ……」

噛み殺すような声を出しながら、沙弥佳は俺の愛撫に身を委ねている。その間にも、俺はまだ乳房の愛撫は止めていなかった。いや、止めるなんて選択肢はありなどしなかった。

デルタ地帯に到達した指は、そっと下着の上から触れ、筋の部分を自分なりに探しあて、そこを上下になぞる。なぞるように愛撫していると、少しきつくしてやろうと力強く押さえた時、たまたま爪によってそこを掻いてしまった。この時にも沙弥佳は、強く反応して先ほどのような悩ましげな呻き声を漏らした。

本能的にここだと悟った俺は、そこを少し乱暴に掻き回した。

「あっ、んっ」

今までの中でも一番強い反応だった。沙弥佳は確かに感じてきている、それを漠然とだが肌で感じとることができた。

「……気持ちいいか？」

沙弥佳の耳元に顔をもっていき、低い声で囁いた。自分でも驚くくらいの嘲りを含んだ声のような気がした。もう俺には沙弥佳が妹であるということは、どうでも良くなりつつあったかもしれない。ただただ目の前にある沙弥佳の体は、俺のために捧げられた“女の体”というものでしか見ていなかった。その身体の主が、たまたま妹だったというだけ程度の認識になっている。

「んぅっ……は、あっ……ぉ、兄ちゃん」

問いに牝の声で応える沙弥佳に俺はニヤリとし、股間をいじっていた手を、下着のサイドにある結び目あたりにやった。ついに沙弥佳が身につけている最後の一枚を脱がそうとしたのだ。

顔をやや下に傾け、目だけ下腹部の方へとやった。まずは、向かって右側の結び目の紐を引っ張る。スルリ、と簡単に結び目は解けた。次は乳房を愛撫していた手で反対の結び目にやって結びを解いた。当然だが、空いた手で反対の乳房を愛撫してやるのは忘れない。

俺は這うように身体をスライドさせ、沙弥佳の下半身の方へと動かした。無言のまま、結びが解けた下着を軽く指に引っ掛けて取り去った。

「あっ、やぁ、恥ずかしい……」

この行為をするというのは、どのみち股間を晒さなければいけないのだから、覚悟はしていたはずだろうが、いざそうなるとやはり恥ずかしくはあるようだ。沙弥佳は身をよじって、晒された股間を隠そうとした。

だが俺はそれを許さず、手で両方のふとももを掴んで割った。これでもうどんなに恥ずかしがっても、隠すことはできない。

「お、お兄ちゃ」

全てを言わせる前に俺は躊躇いなく沙弥佳の股間に口をもっていき、舌を出して思いきり舐めてやった。先ほどの愛撫の効果なのか、沙弥佳のそこはすでにうっすらと濡れ始めていたが、俺はそれならばと、舌を差し込むようにしてクレバスの中を舐めてやった。

沙弥佳はそれが気持ちいいのか、強く反応する時には足を急に閉じようとする。が、俺はその度に手で押さえ付け、もっと感じさせてやろうとした。それを繰り返しているうちに、沙弥佳は泣きそうな声で訴えた。

「お兄ちゃぁん、もう許して……」

息を荒くして切なげに言う沙弥佳に、俺はどうしようかと思ったが訴えを無視し、行為を続行した。自身ももうどうにもならないほどに興奮していたし、もっと女のここを舐めていたいという気にな

っていたのだ。
　というのも、沙弥佳のそこはすでに舐め始めた時と比べ、かなり濡れそぼってきていたからだった。いわゆる愛液と呼ばれるものによって、俺の顔はすでにびちゃびちゃになっている。
　これは俺がまだ童貞で経験がないからなのか、はたまた、それが全ての男達にとって当たり前なのかは解らないが、沙弥佳の愛液は、格段味などしないが、どうにも俺の中の雄の本能を刺激してやまない。
　行為を続けていると、沙弥佳はこれ以前よりも更に強い反応を見せるようになっていた。腰は次第に浮きはじめ、逃げるような、逆に舐めている俺の顔に押し付けてくるような、どちらとも取れない感じだ。この様子は迫ってきている快感に耐えている、そんな風に思えてならない。
「はっ、んっ……あっ」
　今までは小さ呻くだけだった沙弥佳だったが、すでに俺の耳に、常に届くほど声が大きくなっていた。断続的に漏らす女の嬌声が、舐めている俺に更なる興奮を呼び起こす。
　俺は、絶頂が近くなっているのかもしれないと判断すると、右手を押さえている足から離し、クレバスの上にある小さな突起を手探りで探した。クリトリスと呼ばれるその部分は、女が快楽を得るための器官だと聞いたことがあるが、それを思い出したのだ。
　舐めているだけでここまで濡れるのであれば、沙弥佳も例外なくそこをいじってやれば感じると踏んだのだが、仮にそうでなくてもこの際だ、気にすることはないだろう。どのみち今の俺には、沙弥佳をもっと責めてやりたいという欲求には抗えないのだから。
　クレバスの上にあった突起は本当に小さく、とてもそこが他の部位と比べて人一倍強い快楽を得るようなものには思えない。だが、鼻に当たるか当たらないかという場所にあったそこは、触った感触は小さいながらも、間違いなく自己主張しているように思えた。
　沙弥佳は敏感なそこを触られて一際大きな声をあげ腰を浮かし、

さらに体を大きく弓なりにした。この様子では、俺が考えていた以上に敏感な部分だったようだ。あるいは沙弥佳にとっては、ここが一番の鳴きどころという部分なのかもしれない。

しかし俺は沙弥佳の痴態を愉しむかのように、クレバスを穿つように舐め廻し、敏感な突起をうまく強弱をつけて摘んだ。

沙弥佳はますます腰を浮かし、体を痙攣させ始めた。それとともに断続的だった嬌声も、ついには連続的なものになり、わけの分からない言葉で何かを訴えてきていた。俺は、ここからどうなるのだろうかという好奇心を抑えきれずに、試しにクリトリスを今までで一番強く摘みあげた。

瞬間、嬌声が止み、沙弥佳の体は一拍おいて、突然波打つかのような強い痙攣を起こす。

「くっ、ああっっっ」

あまりの衝撃に股間は俺の口から離れ、足で必死にブリッジさせながら沙弥佳は、一際大きく、けれど短い嬌声をあげ、自身の体を何度もビクンビクンと強く跳ね上がるように痙攣させた。

この時俺は、これがイクということなのかと冷静に考えながら、手だけは執拗にまだ沙弥佳のそこを責め立てていた。沙弥佳は俺の責めから逃げようと、まだ痙攣が続いている体をよじろうとした。だが俺はまだまだ沙弥佳の痴態が見たくて、それを許さなかった。事実、絶頂を迎えたはずだというのに、またもや沙弥佳のクレバスからは愛液がたらたらと流れだしていた。しかもその量は先ほどに比べて多い。

そのうちに、流れ出た愛液の一滴が自重に耐え切れず、ポタリとベッドへと垂れ落ちていった。以前斑鳩から、女の愛液は男が考えているほどの量は出ないと聞いたことがあったが、もしかしたら沙弥佳は濡れやすく、その愛液の分泌量も多いのかもしれない。

「あ、あっ、お、お兄、ちゃん……もっ、だ、め……ふ、ふんうっっっっっ」

息も言葉もとぎれとぎれになってしまっている沙弥佳は、再び体

を痙攣させた。しかも今度は、先の絶頂時に比べて、小刻みに長く痙攣している。

俺はどこか非日常的な光景に、ぼんやりと頭を巡らせていた。今目の前には、女にとって一番恥ずかしい部分が丸見えになっているのだ。クレバスは愛液と俺の唾液に濡れ、ヒクヒクとしているし、おまけに肛門だって丸見えなのだ。綺麗なセピア色をした肛門のしわ一本一本までしっかり分かる。

長い足も快楽による痙攣のために、張りのある肌の表面が波打ち、もはやつま先立ちの状態にまでなってしまっているこの光景に、正常な感覚でいられるはずがない。しかも、行為を始める前まではあんなに色白だったはずの肌はピンクに染まっていて、快感にうち震えているのをより強調している。

頭も、責められる快感に耐えようとするあまり何度も振り乱したのか、髪は先ほどよりも遥かに乱れきっていた。顔も目はうっすらと涙が浮かんでいて、あの沙弥佳と思えないほど朱く染まっているのだ。

「……よく頑張ったな、沙弥佳」

小さな声で褒め、俺はようやく沙弥佳への責めを止めた。

「は、あ、はぁ……」

苦しそうな荒い息を何度もして、虚ろな瞳で虚空を見つめる沙弥佳は、神に捧げられた巫女か何かのようだった。いや、淫らなミューズそのものといったほうがいいかもしれない。

沙弥佳の痴態を目の当たりにした俺は、沙弥佳によって緩められたベルトを掴み、スラックスのジッパーを下ろした。沙弥佳が裸だというのに、俺が服を着たままというのはどこかフェアではないし、なにより、一刻も早く、自分に捧げられた女の体を貪りたくて仕方がなかった。もはやこれだけのことをしてしまった俺には、モラルのかけらもあるはずがなかった。

「……沙弥佳、本当にいいんだな」

たとえ拒否されようがもう止めることなどできるはずもなかった

が、不思議とそんな台詞が出てきた。もしかしたら最後の最後で理性が働いたのだろうか。

「……ん」

沙弥佳は顔を横にして口をつぐむ。俺はそれを肯定と受け止め、前戯をしているうちに痛いほど勃起してしまっていたペニスを取り出し、沙弥佳の足を大きく広げ、それをクレバスの辺りにあてがった。

あてがうとピクン沙弥佳の体が震えた。それを見た時、頭蓋の中で別の誰かが俺を変に冷静にさせた。

（そうだよな……怖くないはずはないよな）

せめてなるべく痛くならないようにしてやろう、そう考える余裕ができた。相手を労ろうとする気持ちを前にし、途端に自分が禁忌を犯そうとしていることなど、これっぽっちも思わなくなった。頭にあったのは、なるべく優しくする。それだけだった。

「いくぞ、沙弥佳」

沙弥佳はそう告げられて、瞳を閉じた。それを合図に俺は挿入を試みたが、うまくいかない。

（どうなってるんだ……うまくいかない）

数回試みたものの、やはりうまく挿入することができなかった。

「……少し下」

沙弥佳の消え入るような声で、俺はようやくそこを突き止めた。さっきまで、あんなに執拗に舐め廻していたというのに、いざ本番となると勝手が変わるものらしい。

「じゃぁ……いくからな。……耐えられなくなったらすぐに言えよ」

「……お兄ちゃんはやっぱり優しいね。私は大丈夫だから」

片目だけを開け、微笑む沙弥佳。その顔を見てなぜか、自分の中で今まで沙弥佳に抱いてきた、どの感情とも違う、別の感情が生まれたような気がした。

「分かった」

俺は、硬くなったままの愚息を沙弥佳のそこに突き入れる。

「くっ……」

十分に濡れていないと女は当然、入れる男も痛いと聞くが破瓜の感覚はそれとは明らかに違う。今までそんな経験など一度もないが、なんとなくそう思えるのだ。

「……っぁ……くっ」

沙弥佳は目も口をきつく閉じ、痛みに耐えている。それでも時折、呻き声を漏らす。手もベッドのシーツを固く握りしめていた。

俺はなるべく冷静に、ゆっくりと、まだ男を受け入れたことのない沙弥佳の膣への挿入を続けた。

処女の中はきついと言うが、確かにそうだった。奥まで進めれば進めるほど、ペニスを締め付ける圧迫感は増した。膣の粘膜がペニス全体を包む面積が増えるのだから、それは当然なのかもしれないが。

「いっ……く……ん……」

「もうちょっとだ、沙弥佳」

「……ぅん、お、兄ちゃん」

息も絶え絶えでありながら、それでも健気に応対した。そんな沙弥佳に、思わず早く済ませてやりたいと言う気持ちが芽生え、輸送する動きが速くなってしまった。

「ぐぅっ」

一際大きな、明らかに強い痛みのために漏らした呻き声に、俺は動きを止める。

「すまん。痛かったな、今の」

「大、丈夫、だから……」

涙目になり、明らかに表情も強張らせているにも関わらず、沙弥佳は大丈夫だと言う。そんな沙弥佳の言葉に甘えて、俺は更に最深部に向かって動きだした。早く楽にさせてやりたいという気持ちをないまぜにさせ、この気持ちに抗うようにゆっくりとした動きでだった。

「……沙弥佳。全部入ったよ」

「本、当？」
「ああ。しばらくはこのままにしようか？」
「うん。ちょっとこのままが良いな……」
「分かった」
俺達はしばらくの間、繋がったまま何も動かなかった。沙弥佳は痛みにならすため、俺はこのきつい膣の中で、沙弥佳を感じていたかった。こうしていると、ようやく俺も一心地つけたというのもある。
「……お兄ちゃん。そろそろ動いてもいいよ」
「もういいのか？　無理はしなくてもいいんだぞ」
「ん……大丈夫だから」
沙弥佳は固く握っていたシーツを離し、俺の首に手を廻した。
「……その変わり、こうしてても良い？」
「ああ、もちろんだ」
この方がお互いの顔がよく見えるというのもあるし、沙弥佳がそうしたいというのなら、そうさせてやろう。
「それじゃ、動くな」
「うん」
俺は腰を引いて動かした。動くと膣の粘膜が、ペニスによって引っ張られていくような感覚があった。
「うっ……」
「んっ……どうしたの？」
「……い、いや」
予想外だった。沙弥佳は気付かなかったのだろうか。沙弥佳の中は、俺の考えている以上に良かったのだ。ペニスに絡み付いてくる……そう表現すればいいのだろうか。陳腐な言い回ししかできないけども、とにかく気持ちが良い。ペニスを包む圧迫感は相変わらずだが、これはたった今破瓜のためだろう。その圧迫感とは全く違うものだ。それでも俺は限界まで腰を引き、再び中に突き入れていった。

（これが処女の味というやつなのか……いやそうだとしても、この絡み付いてくるような感覚は……）

腰をスライドさせる度、柔らかい粘膜がペニスに張り付くように刺激してくる。

「んっ、お兄ちゃん」

沙弥佳が呻く。この刺激に早くも耐えられそうになくなりつつある俺に、この声が再び冷静さを取り戻させた。

「す、すまん。痛かったか？」

「ん、ちょっと……お兄ちゃんこそ大丈夫？　今痛そうな顔してたよ」

「俺が？　いや俺は大丈夫だ。痛みというよりも逆だ。……思ってた以上に刺激があってな……痛かったわけじゃぁない」

「本当に？　私の中、気持ち良い？」

「ああ。すごくな」

微笑みながらキスをした。沙弥佳もそれを自然に受け入れる。

「へへっ」

「どうした？」

「初めて、だったから」

「ああ、そうだな。女の子ってのは初めては痛いと言うからな」

「そうじゃないよ。キスだよ」

「キス？」

なんのことか分からなかった俺に、沙弥佳は頷いて言った。

「そう。今お兄ちゃん、初めて私にキスしてくれたから……今まではずっと私からだったでしょ？」

「言われてみれば、そうかな……？」

「そうなんだよ。だから嬉しくて」

次は沙弥佳から俺に軽いキスをした。不思議なことに一線を越えてしまったからか、キスも全く違和感なく受け入れてしまっていた。本来ならば、あってはならないはずなのに。

少しばかりのインターバルを挟んだため、膣からの刺激に少しは

堪えられそうな気になったところで、俺は再び腰を動かした。
「んくっ、お兄、ちゃん。いきなりなんて……」
そうは言いつつも、沙弥佳も先ほどまでと比べ痛みが和らいできたのか、あまり痛がらず、声にどこか恍惚さを窺わせる響きを感じさせる。
「沙弥佳……」
「……お兄ちゃん」
囁くような呻くような声で沙弥佳の名を漏らす。対して沙弥佳も俺を呼んだ。
その繰り返しに、だいぶ慣れてくると沙弥佳はわずかに前戯の時のような、くぐもった声を出し始めた。痛みはあるはずだが、もう感じ始めているのだろうか。そんな疑問が浮かびはしたが、すぐにどこかに消えていった。再び強烈な快感が込み上げてきたのだ。
「うっ、沙弥佳……もうっ」
「んっ、お兄ちゃん、お願い、このままでっ」
沙弥佳はここにきて、足を俺の下半身に絡めてきた。
その時、ふと恍惚と快感のために頭の中から消えていた理性が、突然舞い戻ってきた。
「さ、沙弥佳。足、どけろっこのままだと……」
中に出してしまう。そう思うと、背筋を嫌な感覚が走った。
理性が戻ってくると今こうしていることに、どうしようもない罪悪感が込み上げ始めていたのだ。
妹の中に出す……そう考えるだけで、明らかに先ほどまでとは違うものが体を支配した。嫌悪感や罪悪感、それに自分でも訳の分からないプレッシャーもだ。
近親相姦を犯してしまったという事実が、急激に自分の中で恐ろしいほどの負い目になっていった。
「沙弥佳、やっぱり駄目だっ」
だと言うのに、気持ちと裏腹に体は言うことをきかない。
頭が混乱していた。あってはならないはずの禁忌を犯していると

いう負い目からくる重圧感とともに、その裏ではそれとは全く違う、禁忌を犯しているからこそ味わえる快感。妹に出してはいけないと思っているのに、このまま妹の中に出してしまいたいという、矛盾した気持ち。家族である人間に、まるで他人事かのような気持ちで行為に及んでしまった罪悪感。

けれど家族であり、最も長く時間を共有した、最も身近にいた妹とするという、一線を越えたからこそ味わえる開放感。それと同時にやってくる自己嫌悪の感情。それらがなにもかも同時に、俺を襲ってきた。なにもかも。全てだ。

「んっ、はっ、お兄ちゃんっ」

沙弥佳はそんな俺には気付くことなく、目を閉じたままこの行為を受け入れている。だが、下半身に絡めてきた足には強く力を入れて、俺を離そうとはしていなかった。まるで、俺にもこのまま堕ちるところまで堕とそうとしているかのように。

沙弥佳の中は、なおもペニスに絡み付き、快楽を送り込んでくる。それは当然、射精感を高め、もういくばくも無く爆ぜてしまいそうだった。

「あぅっ……お兄ちゃんの、中で大きくなっ」

「だ、駄目だ」

それを合図に、沙弥佳はなんとかして抜こうとした俺の腰に、抜かせまいと足をこれでもかと絡ませてきた。おまけに、ここにきて沙弥佳は、自分の腰を俺に打ち付けるかのように動かした。

その動きはペニスの形を自分のものに記憶させるかのようであり、ペニスを決して離さないという淫魔か何かのような動きでもあった。

亀頭の先に、コツンとでもいうように何かが当たった。それが俺には計り知れないほど強く快感を生み出した。

「沙弥、佳っ」

叫ぶように呻き、頭蓋の中を白で染める。

「あっ、熱いよ、お兄ちゃんっ」

そしてついに、俺のペニスから精液が沙弥佳の子宮に向かって、

吐き出されていったのだった。

第51章

ベッドに寝たまま、真っ白な天井を空虚な気持ちで見つめていた。つい何十分か前まにこのベッドの上で俺と沙弥佳は、越えてはならない一線を越えてしまった。けれどはっきり言って、自分が犯してしまった過ちを今は考えたくはなかった。どのみち考えたくなくとも、後で思い悩まなければならなくなるのは目に見えているのだ。

いや、今こうして考えてしまっている時点で、すでに考えているといっていいのか……。

「ん……」

ゴソリと俺に密着したまま、沙弥佳が鼻を鳴らした。手は胸に、足は俺の腰の辺りにやっている。当然そうなると胸もぴったりと当たっているため、柔らかい乳房とその先端の突起の硬さの感触もよく分かる。

（沙弥佳……）

首を横に向け、裸のままでいる妹の顔を見た。沙弥佳は目を閉じて、いかにも幸せそうな穏やかな表情を浮かべている。この顔を見て俺は、とても複雑な気分になった。沙弥佳からの一方的な告白。そして、たった一度だけという約束で交わした行為……。

兄妹でセックスするなんて、そんなの有り得ない、所詮は夢物語……そう考えていた。考えていたはずなのに、結局は流されるがままに妹を抱いてしまった。それだけならまだしも、妹の中で果ててしまうという、この上ないほどの罪悪感が今の俺にはある。

どうして抱いてしまったんだろう。自分がこうなってしまうというのは分かっていたはずではないか。

女の中で出すということはつまり、場合によっては子供が出来てしまうかもしれないということだ。ましてや相手は、沙弥佳、俺の実の妹なのだ。

途端に鳥肌が立ち、背筋を寒気が走った。そうだ、相手は妹……血を分けた肉親なのに、もし子供が出来てしまったらどうするのだ？　認知は？　学校は？　退学？　沙弥佳も？　親は？　それだけじゃない。世間体だってある。これがバレたら、間違いなく両親は離婚しようとするはずだ……。

怖くなった。全てが突然牙を剥き出しにし、俺に襲いかかってきたような、そんな感覚に捕われた。目の前が、いきなり暗くなったとでも表現すればいいのか。とにかくどうしようもなく怖くなってしまったのだ。

それに……どうしようもない恐怖感にがんじがらめにされそうになった時、ふと脳裏にある言葉が浮かんだ。

『一線を超えたくないと本当に思うなら、絶対に拒否してくださいね？　もしどこか甘えさせるようなことがあると、必ずさやちゃんは希望を抱いてしまうと思うので』

つい何時間か前に、綾子ちゃんがいった言葉だった。綾子ちゃんの言葉によって、なおのこと罪悪感が増した。

（すまない綾子ちゃん。俺は……君の言ったことを守れなかった）

綾子ちゃんの言葉を思い出すと、つかの間の間忘れていた彼女への気持ちがふつふつと沸き起こってくる。綾子ちゃんと付き合うなどと言いながら、舌の根も渇かぬうちに、その日に他の女と寝てしまうなんて……しかも、その相手が実の妹だなんて……。

できうることならば、過去に戻って自分を叱咤してやりたい気分だった。相手がどうあれ、これは浮気ではないか。初めて恋人ができたその日に浮気なんて、笑えないにもほどがある。

かと言って、これを彼女に言えるのか？　……馬鹿な。言えるはずがない。その日のうちにだぞ？　いくら心優しい綾子ちゃんだって、こんなことを許すだろうか。

……分からない。はっきり言って、全く分からなかった。綾子ちゃんではなくそんじょそこらの女ならきっと、嫌悪の眼差しで俺を見て、早速別れ話を切り出してくるだろう。だが綾子ちゃんならど

うだろう。それも有り得るし、困り顔で助け船を出してくれるかもしれない。……こんな卑怯な考えにすがろうとするとは、なんとも情けない話だが。

「……お兄ちゃん」

「ああ……」

呟くような小声で沙弥佳が呼ぶ。

「お兄ちゃん。私、お兄ちゃんとこうすることができたこと、少しも後悔してないからね？」

「そうか……」

「うん。本当のこと言うとさ、お兄ちゃんとしちゃったら、もしかすると嫌いになっちゃうんじゃないかみたいに思ったりもしたんだよ。だけど、やっぱり今も後悔の気持ちなんて全然ないの。むしろ、とっても嬉しくて表現できないくらい」

胸に頬を擦り寄せながら、沙弥佳は続ける。

「私もね、お兄ちゃんに対してこんな気持ちを持っちゃうなんて、そんなのおかしいって思ってたんだけど……。

でも無理だった。お兄ちゃんがあやちゃんに向ける目を見て、やっぱり私はお兄ちゃんが好きなんだって。お兄ちゃんと一緒がいいんだって。だけど私はお兄ちゃんの妹だから……」

「……これを最後にしようって思ったのか」

「うん……。そもそも私がこんなお願いする方が間違ってるんだろうけど……でもお兄ちゃんは受け入れてくれた」

沙弥佳は密着させている体に力を入れて、強く俺を抱きしめた。

「だから私ね、すごく幸せなんだ。大好きなお兄ちゃんに私の何もかもあげることができたんだもの……お兄ちゃんにはもう彼女がいるとは分かってはいるけど。でも、それでもお兄ちゃんは私を受け入れてくれた。多分、そんなお兄ちゃんだからこそ、私は好きになったんだと思う」

沙弥佳は言い終えると、身を顔の辺りまで擦り寄せた。目前に沙弥佳の顔が現れる。

「……お兄ちゃん」
そっと口づけを交わし、沙弥佳は口を離した。離し際に俺の唇をペロリと舐めていき、そのまま目を閉じて俺を抱くように腕を回した。沙弥佳の裸体から感じる体温が、裸のままの身体に心地良い。
あまりに自然なことに感じたため、顔を逸らすことはなかったものの、沙弥佳とのキスすら綾子ちゃんへの罪悪感と、自分への漠然とした嫌悪感があった。
嫌悪感にいたってはそれだけではない。家族とこんなことをしているという何とも言いえぬ嫌悪感も
確かにあった。それでも沙弥佳を拒絶できないのは、俺がただ単に臆病なだけなのか。それとも……。

ピロートークも終え、今まで感じたことのないプレッシャーを感じながら、今後の身の振り方に対して真剣に頭を悩ませていたとき、すっかり忘れていた携帯が振動した。まだマナーモードのままなのだ。
点滅している着信のライトが、電話なのだと分かる。俺は半ばけだるさを感じながら、携帯を取った。
『綾子ちゃん』
液晶画面にはそう表示されていた。俺はまだどうしていいのか分からず、通話ボタンを押すのをためらった。今こんな状況で、電話に出るわけにもいかない。整理もできていないし、勘の良い綾子ちゃんのことだから、電話から何かを察することもあるかもしれない。
「出ないの？」
目を閉じていたはずの沙弥佳が、携帯を片手に画面を見ていた俺に話しかけた。だが、そいつがどうにも気まずくて仕方ない。そもそも普通であれば、こんな状況で携帯なんぞ手にする方がおかしいのだろうが……。
俺を見つめるだけで、何を考えているのか分からない沙弥佳の目は、無言の迫力があった。それがまた新たな重圧感となって、俺に

のしかかってくる。
　出ようか出まいか迷っているうちに着信は途切れ、震えていた携帯も動くのをやめた。着信がやんだとき、なぜか安堵した自分がいた。どうしてそう思ったのか分からない。だが、確かに安堵したのは間違いなかった。
「……ねぇ、あやちゃんからの電話、なんで出なかったの？」
　俺の気持ちを察しているのか分からないが、そんなことを聞いてきた。真意がどうあれ、なぜかなんていうのは今の俺にとって、とんでもなく意地悪な質問だ。
「……自分でも良く分からない」
「そう」
　正直な気持ちだった。それを沙弥佳がどう受け取ったのか分からないが、再び俺の胸に顔を埋め、指で肌を撫でた。
「……お兄ちゃんはさ、私とこうなったこと、やっぱり後悔してる？」
「なんだよ、薮から棒に」
「分かってるつもりだよ、これがお兄ちゃんにとって浮気になってるって。しかも付き合うことになったその日のうちに、こんなことしちゃって……ごめんね、私が悪いっていうのは分かってるから。ただ……」
「ただ……？」
「一度で良いから言ってほしい……好きだって」
　沙弥佳の消え入るような声。それが今更ながら本気なんだと理解できる。
「お願い。……何度もお願いしちゃって呆れるかもしれないけど、これが本当に最後だから。だから好きって言って」
「沙弥佳……」
　そうだ。この行為だって最初で最後のものなのだ。だったら最後の最後くらい、そう言ってやっても構わないはずだ。だというのに……なんで躊躇うんだ。もう一線だって越えた。今更なはずなのに。

「お兄ちゃん……？」
「……」
沙弥佳は顔をあげて、不安そうにもとれる表情で瞳を潤ませている。俺は寝乱れた長い髪を指に巻き付けながら、沙弥佳の頬に触れた。
最後なのだ、もうこれっきりにして全てをなかったかのように振る舞えばいい。言って楽になれ。頭蓋の中で、誰かが俺にそう語りかけてくる。
「沙弥佳。……好」
「あんた達ー、ご飯よー」
言いかけて、下から母が呼ぶ声が響いた。今の今まで、どこか別の世界にでも行っていたかのように錯覚していた俺達は、その母の声で急激に現実へと引き戻された。指に絡めていた髪をはらい、上体を起こす。
「あっ」
身体を起こそうとした俺に沙弥佳は、制止するようにまだしな垂れかかったままだ。
「沙弥佳……今はやめよう」
「お兄ちゃん……」
仕方なく、といった具合に沙弥佳は起き上がりながらも俺を見つめてきた。俺はどこか哀しげな沙弥佳に対しどう言葉をかけていいのか分からずに一瞥して、脱がされた服を取った。もちろん、これが単なる逃げだというのは自分でも痛いくらいにわかっている。
「つっ……」
脱いだ服を取ろうとベッドの上に座り込もうとした沙弥佳が、苦痛に顔をしかめた。苦い気分になっていた俺だったが、そんな沙弥佳にさすがにどうしたのか心配になって、すぐに横につく。
「大丈夫か？　どうした」
「う、うん。ちょっと痛みがでてきちゃって……いまさら過ぎるけど」

下腹部の辺りに手をやっている沙弥佳を見て、痛みというのが破爪によるものであったことを理解した俺は、沙弥佳の脱ぎ散らかされた服を集めて渡した。
「ちょっと待ってろ。下に行って何か薬持ってきてやるから。いいな」
「あ、うん。ごめんね」
「いいさ。……俺のせいでもあるしな」
バツの悪い顔をして俺はベッドから立ち上がる。
「……ありがとう、お兄ちゃん」
「……ああ。とにかく上の服だけでも着ておくんだ」
そう言い残して部屋を出た。
すでに一階には食欲がそそられるような、香ばしい匂いが立ち込めている。
「ご飯よ。沙弥佳は？」
「あー、今ちょっと勉強中らしい。それより傷薬ないかな。できれば粘膜にきくようなやつ」
「どこか怪我したの？」
「ああ、口の中をちょっと……痛いからないかと思ってさ」
「だったら薬箱の中にあるわよ」
「ん、分かった」
母にそう言われ、リビングのサイドボードの中に置かれている薬箱を持ち出し、足早に二階へと上がった。
「ちょっと、どうしたの」
「忘れ物。それと沙弥佳も小さな怪我したらしいから、ついでだよ」
「そう。早く下りてきなさいよ」
適当に母を言いくるめ、俺は自室へと入った。
「持ってきたぞ沙弥佳、ほら」
「うん、ごめん」
「気にするなよ」
俺が下にいたわずかな時間で、沙弥佳はすでに上半身は服を着込

んでいた。そこからは、とてもあんなことをした少女には見えない。
「多分こいつで大丈夫だと思うが」
膣の中とはいっても基本的には口内とは変わらないはずなので、極端にしみたり痒みなんかが出たりはしないはずだ。
「塗ってやるから、ほら足広げな」
「えっ。い、いいよ、自分でするから」
「何言ってるんだ。安心しろ、ちゃんとしてやるから」
「だ、だけど……」
「ほら、早くしろって」
恥ずかしがる沙弥佳を前に、俺は薬液を手に塗った。沙弥佳は俺を見て観念したのか、顔を赤らめさせながら足を開いた。
足を開くとそこに、かけ布団によって見えなかった血痕が現れた。事後の処理をした時にはあまり感じなかったが、冷静さを取り戻した今はそれがなんとも生々しく、沙弥佳が女になったのだと、強く感じさせるのだった。
「お兄ちゃん？」
「あ、ああ、すまん。大丈夫とは思うが、もし痛かったりしたら言うんだぞ」
「う、うん」
一呼吸し、ゆっくりと沙弥佳の膣の中へと指を差し込んだ。
「んっ」
「痛かったか？」
「ん、ちょっと……。それよりも冷たいのがしみる感じ」
「そうか。なるべくゆっくりするから」
「うん……」
言葉の通り、なるべく丁寧に膣壁に薬液を擦り込んでいった。沙弥佳は薬液の冷たさと、異物感による疼痛に、時折呻き声を漏らして沙弥佳は耐え忍んでいる。
「これで良し。多分これで痛みなんかはそのうち消えると思う」
「は、腫れたりなんか……しないよね？」

「さすがにそれはないと思うが……」
沙弥佳は改めてじっくりと恥部を見られたのが恥ずかしかったのか、下着を手に取るとすばやく身につけたのだった。
のろのろと布団から這い出て、ローライズを履いた沙弥佳に俺は、どこか今までと違う雰囲気を漂わせているように感じた。

食事の後、のんびりと心も身体も休めるつもりで風呂に入っていた俺は、いざそうしてみれば休めるどころか、沙弥佳との情事のことばかり考えてしまい、全く休まる気配がなかった。
沙弥佳は俺と結ばれたことに関して、後悔はないと言っていた。では、俺はどうだろう。正直に言うならば、間違いなく後悔しているといっていい。それも後悔の連続だった。
一時の感情に流されてしまうと大変な目に合うというが、まさしくその通りだった。沙弥佳とあんなことなってしまうのを予感して、綾子ちゃんに付き合おうと言ったはずなのに、これでは元の木阿弥ではないか。
それでもまだ望みが全て失くなったわけではない。卑怯かもしれないが沙弥佳が、本当にこれ一度きりの関係でいてくれさえすればいいのだ。そうすれば後は、互いに口を閉ざしてしまえばなんてことはない、全て元の鞘に収まるというものだ。
しかし……。
「……そう、うまくいくものかな」
はっきり言って、そうはならないような気がしてならない。仮にそうなったにしたって、俺と沙弥佳が男と女の関係になってしまったという事実は、永遠に消え去ることはないのだ。繰り返すが、沙弥佳との関係が本当にこれ一度で済むのか。そんな漠然とした不安だってある。
不安なことはそれだけではない。俺自身が、これから沙弥佳をた

だの妹として見ることができなくなってしまうのではないか。少し気分が落ち着いたので考えてみれば、これが一番の懸念すべきことであるような気がしてならない。

俺はこれから先、沙弥佳を今までのように見て、沙弥佳に対して今までのように振る舞うことができるんだろうか……風呂の湯に濡れた頭を、手で抱えた。

「……くそっ、頭の中がぐちゃぐちゃだ。……一体どうすればいい」

綾子ちゃんが言ったように、俺が沙弥佳と関係を結んだとしても、彼女ならきっと戸惑いながらもそれを認め、祝福してくれるかもしれない。しかし、今はそんなことが許される立場ではなくなった。俺と綾子ちゃんは付き合うことになったのであり、もう俺と沙弥佳の関係を、見守っていこうだなどと言えるような立場の人間ではなくなってしまったのだ。俺は綾子ちゃんから責められたって、なんらおかしくない立場にいるのだ。

「綾子ちゃんに合わせる顔がない……」

湯を手に溜めて顔に流す。こうなっては最悪、別れるという選択もある。別れたくはないが、そうなったとしても仕方ないのも事実だった。

俺はため息をつきながら風呂からあがったのだった。

風呂からあがり、パジャマに着替えてリビングに行くとちょうど父が帰ってきていたようだった。

「おかえり」

「ああ、ただいま」

ネクタイを外し、着ていたスーツをハンガーにかけている。

「沙弥佳とは仲直りしたのか？」

「え？　なんで？」

「あいつに会ったら妙に機嫌が良さそうだったからな」

「そうか……まぁ、仲直りできたといえばできた、かな？」

「ならいいが……どうした、今度はおまえの方が元気なさそうだぞ

？」

「そんなことないさ。俺は元気だよ」

「この子ったら、さっきもぼーっとしちゃってたのよ。だって、綾子ちゃんと付き合うことになったんですもんね」

母がいたずらっぽく笑って見せた。沙弥佳と何もなければここはきっと、照れ笑いを浮かべながらやり過ごすところなのだろうが、今は逆にきつい一言だった。

「そうなのか？　……そうか。おまえももうそんな年頃か。良かったじゃないか」

「あ、ああ」

素直に喜びたくても喜べない板挟みな状態の俺は、二人にうまく笑えていただろうか。

「とにかく、風呂はもう空いてるから。おやすみ」

「分かった。おやすみ」

この話はもうしたくないと、俺はさっさと二階に引き上げることにした。あまり長く話していては、確実にボロが出るだろう。

部屋に入る前、もしかすると沙弥佳がいるかもしれないと意気込んでみたものの、思惑が外れた。今は自室にいるらしい。部屋に戻ると、どっと疲れが出てきた。この短時間にあまりに色々とありすぎた。

時間はまだ午後十時を過ぎて間もないが、もう今日は寝てしまいたい。問題の先送りに外ならないが、今のままではどのみち、良いアイディアなど思い浮かびはしない。眠りたいと思えるうちに、欲求に従うのだって悪いことではないはずだ。

そう思ってベッドに転がると、そこにはいつもの嗅ぎなれた自分の匂いと違う、甘い香りがした。沙弥佳との情事で、沙弥佳の匂いがベッドに染み込んでいたのだ。何時間か前にこのベッドで行われた跡を示すように、シーツには沙弥佳が破爪した跡が確かに残っている。

そのことを思い出して起き上がり、かけ布団をはらって血痕を見

た。血痕を指で触れると、当然だがすでに血は凝固し、シーツの表面はかさかさとした感触になっていた。

「沙弥佳の跡……」

その跡が俺に再び重圧感を与えるが、今は不思議と事後に感じた嫌悪感よりも、沙弥佳がいない今だからこそ逆に、変に愛おしくも感じる気がする。とんでもなく大変なことをしたにも関わらず、そんな風に感じるのはどうしてなんだ。もちろん、重圧感はある。なのに、なんでそんな気持ちが出てくるのか……これが背徳感というものなのか……。

「もうわけわかんねぇ……」

俺は苦虫でも潰したみたいに顔をしかめてため息をつくと、どさりとベッドに倒れ込んだ。

倒れ込んだ先、視線の先に携帯があった。着信があったようで手に取ると、着信が四回とメールが一件きているようで、それら全て綾子ちゃんからのものだった。

「……」

メールには一度連絡下さいという、なんとも簡潔な文が書かれているだけだった。大方、沙弥佳とのことだろう。今はこの問題に関して何も考えたくなかった俺は、携帯を折りたたもうとした。

ピリリリリリ――

そんな音を立てて電話がかかってきた。番号はやはり綾子ちゃんからだ。

さっき一度居留守を使ったので、今度は出るべきかもしれない。付き合うことになったその日から、手の平を返したようにそっけなくなるのはさすがにいただけない。

「もしもし？」

『あ、九鬼さん？』

「ああ。すまなかったな、何度も連絡してくれていたみたいなのに」

『いえ。……それよりどうでしたか？』

単刀直入に聞いてきた。そもそも何度も連絡をよこしていたのも、

そのためなのだろうから仕方のない話だ。
「ああ……」
どう言うべきか言い淀む。問題を先送りにしたいほど混乱し、綾子ちゃんにどう言うかなんてのは、これっぽっちも考えていなかったのだ。
『……やっぱり何かあったんですね？』
一拍おいて綾子ちゃんが口を開く。ここで素直に、はいと言えれば気は楽になるかもしれないが、そういうわけにもいかない。
「……」
『どうしたんですか？　何があったんですか？』
「な、何もなかったよ。……君が考えていたようなことは何も」
『え？　……本当なんですか？』
当然の疑問だろう。だが本当のことを言う勇気なんて、今の俺にはなかった。
「ああ。……すまないがもう寝るから、電話切っていいか」
『あ……はい』
綾子ちゃんの声が沈んだのが分かった。本来なら電話代なんかを気にしながら、それでも取り留めのない話をしたりするものなのだろうが、全くそれらからは掛け離れた会話だ。すでに破局も止むなし、そんな会話としか思えない。
「……綾子ちゃん」
『……はい』
「……すまなかった。本当に」
『いえ……』
沙弥佳とのことで
罪悪感を綾子ちゃんに抱いていたために思わず謝罪した俺だけども、彼女は連絡をくれたことに関してと思ったのか、こちらのことを訝しむようには聞こえない。
『あ、あの九鬼さん』
「ん？」

『その、もし良かったら明日会えませんか？』
「明日？」
『はい。……駄目ですか？』
健気にも俺に気を遣ってくれているんだな、君は……。綾子ちゃんの対応に感謝しつつも、今こんな状態の俺が会っていいものだろうかという疑問があった。
「明日、俺学校なんだが……」
『学校が終わってからでもいいので……駄目ですか？』
「……分からない。分からないが、もし空いてたらこっちから連絡するよ。それでいいか？」
『ぁ……はい。じゃあ、連絡待ってますね』
「ああ。それじゃぁ、おやすみ」
『はい、おやすみなさい』
綾子ちゃんの言葉を最後に電話を切った。最後はいつもの綾子ちゃんだったようだが、明らかに無理をしていたと思う。
「……すまない」
もう聞くことのない主に向かって、俺は小さく謝罪したのだった。

深夜。
物音一つ立てるだけで、やたらと大きく分かってしまうほど静まりかえっている。そんな夜更けに俺は目が覚めた。いや、起こされたのだ。というのも、真っ暗な部屋の中でひっそりと一人の人間が立っている気配を感じたのだ。
「……沙弥佳？」
こんな夜更けに部屋を訪れる人間がいるとしたら、間違いなく妹しかいない。俺は闇に紛れて影になっている人物に向かって、呼び

かけた。
「……お兄ちゃん」
「どうした、こんな時間に」
とは言うものの、予想はできる。また俺のベッドに潜り込もうというのだろう。
「……」
「仕方ないな、ほら」
眠たさに負けて早く入ってくるように促した。けれど沙弥佳はそこから動こうとしない。
「沙弥佳？」
「……」
呼びかけに答えず、沙弥佳は足音を立てずに俺のすぐ前まできた。夜目に慣れてきたのか、うっすらと影の形が分かる。
「……死んで」
影はそういうと、突然俺の首を両手で掴んで絞めていく。
「っ！？」
あまりのことに頭が混乱するが、首を絞めている手を掴み、放そうとする。
しかし本気で抵抗するも影の力は半端ではなく、ますます指が首に食い込んでくる。
「くっ……はっ……がっ」
訳が分からない。とにかくベッドの上で、肢体をがむしゃらに動かして必死の抵抗をする。
「……」
影は抵抗する俺など全く気にとめることなく、絞殺機械かと思わせるように手に力を加えていく。
「あっがっ……はぁっ」
気が遠くなり始め、口から洩れる息がヒューヒューと変な音が聞こえた。
首を絞めている手を放そうとしている腕から、力が抜けていくの

も分かった。
「かっ……」
「……ごめんね、お兄ちゃん。でもね、お兄ちゃんが悪いんだよ？　お兄ちゃんがあやちゃんを選ぶから……」
その声を最後に、俺の意識が唐突に途切れた。
「――っ！？」
自分でも分かる、声を殺した呻き声で目が覚める。
「はあっはあっはあっはあっ……はぁはぁ……い、今の……夢、か？」
ぼやけた頭で体を起こし、部屋を見回した。今見た夢のように部屋の中は闇に包まれていて、今がまだ深夜であることが窺える。
「……なんだったんだ、今の夢は」
手で頭を抱えながら俯くと、隣にいつの間にか沙弥佳が寝ているのに気が付いた。
「……ん」
沙弥佳は鼻を鳴らして、寒そうに震えた。俺は思わず自分の首に手をやり、夢で絞められた喉元や気道のあたりをさすった。
「まさかな……」
俺はため息をついて再び寝転がり、布団を被った。ベッドにもぐると、背中がうっすらと汗で濡れていた。沙弥佳は隣で穏やかな寝息をたてていて、その様子からは、とても俺の首を絞めようするなんて思えない。
寝ている沙弥佳の頬に手をやって、何度も撫でる。頬を撫でながら俺は、今見た夢のことを思い返していた。なんであんな夢を見たのかは分からない。そんなことよりも夢とはいえ、沙弥佳によって殺される、ということの方が遥かにショッキングだった。
それに、あの苦しさや沙弥佳の声。あれらは夢というにはあまりにリアルだった。そのことを思い出すと、また首に手をやって、本当は現実に起こったことなのでは？などと考えてしまう。
『お兄ちゃんがあやちゃんを選ぶから』

頭の中で、夢の中で沙弥佳が呟いた一言が、やけに現実味を帯びていて、その言葉だけが何度もリフレインしていた。

珍しく沙弥佳に起こされることなく目を覚ました俺は、朝食もそこそこに家を出て学校に来ていた。沙弥佳が卒業を迎えるまでのあいだ、ほぼ毎日続いていた駅までの登校も今日は一人だ。当然のこととはいえ、どことなく寂しい気持ちになってしまった。

しかし、今週からは授業が午前中で早あがりになり、後三日もすれば春休みだ。おまけに四月からの一年間は、沙弥佳と一緒に学校まで行くことになるので、寂しいという気持ちを味わえるのも、この数日間しかないという事実を考えれば、そいつも悪くはないと思えるのが不思議なものだ。

もう授業の過程を終了し、担当の教師が自習という名の雑談タイムで一日が締めくくられようとしている中、俺はぼうっとしていつものように窓の外を眺めていた。今は授業のことなんて一切頭に入ってこないだろうから、そういう意味では助かった。かといって、今何か考えているのかと言えばそうでもないが。

そうやって何をするでもなく、何を考えるでもなくしているうちに、授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。教師の日直を呼ぶ声で号令がかかり、教師が出ていった。

「……どうしたもんか」

生徒達が次々に教室を出ていく中、俺は一人ぽつりと呟いて席についた。そこにいつものようにタイミングを計ったかのように斑鳩がやってきた。

「なぁ九鬼。今日、これから女子高の奴らと合コンやんだけど、こねえ？」

「……合コン？」

けだるそうに聞き返しても、斑鳩はそんなのは全く気にも留めず、

話を進める。
「そそ。しかも、精華女子だよ精華女子。あのお嬢様学校の。行こうぜー。
あ、合コンっつってもせいぜいファミレスだから、そこらへんは気にしなくていいよ」
「斑鳩、俺は別に合コンなんて興味ないぜ。よって遠慮しておく」
「そんなつれないこと言わずにさぁ」
「嫌だね。第一、俺はそういう類いのものは好きじゃぁないんだ」
「頼むって。実は人が足らなくてさ、どうしても後一人欲しいんだ」
斑鳩は片手を顔の前にやって、この通りと拝むが、そんなの俺の知ったことではない。要するに俺は、行きたくもない合コンの数合わせなわけだ。
「断る。それに俺にだって予定があるんだ。そんなのに付き合う暇はないんだ」
「なぁ頼むよ」
「しつこいぞ。そもそもおまえなら、わざわざ俺を頼らなくてもいくらだって宛てはあるだろ？　俺みたいに行きたくない奴より、そういう連中を誘ってやれよ」
それでもまだしつこく頼もうとして、斑鳩は俺の肩を掴む。それを無視して俺は、さっさとバッグに持って帰るものを詰め込み、教室を出ようとする。
「おい、痛いぞ。放してくれ」
その時弾みで、斑鳩の手が俺の喉元に当たる。
「っ！」
俺は思わず斑鳩の手を思いきり払い、手を首にやった。
「ってぇ……なんだよ、いきなり……。そこまですることないだろ」
「あ……すまん。ちょっと嫌なことがあったんだ……。と、とにかく俺は帰るから他を当たってくれ」
別に強く払うつもりはなかったのだが、夜のことを思い出した俺はつい、思いきり力をこめていたらしい。

「おーい九鬼ー。なんか校門で、おまえのこと待ってる子がいるみたいだぞ。それもすっげー可愛い子」
廊下からクラスメイトが俺を呼んだ。
「俺に……？」
俺は顔をしかめた。まさか……。まだ何か言いたげな斑鳩を残し、足早に校門へと降りていった。上履きをスニーカーに履き変えてグラウンドを横切る。
「あ……」
「……綾子ちゃん」
そう、校門で待っていたのは綾子ちゃんだったのだ。クラスメイトの口から可愛い子と聞いて俺は、即座に沙弥佳か綾子ちゃんを思い浮かべていたので、あまり驚きはなかった。驚きこそなかったが、なぜわざわざ学校まできたのかという疑問はある。今日は俺から連絡すると言っておいたので、こんなことは予想していなかったのだ。
「わざわざ学校まできたのか」
「はい。すみません、突然。ここで待ってようと思ってたんですけど、クラスメイトの方が呼んできてくれると言ったので……」
「そうか。しかし、来るんだったら一言いってくれたら良かったのに……まぁ、いい。おかげでしつこいのから逃げるいい口実になったしな」
俯いて口をニヤリと歪ませる。
「は、はぁ」
「いや、それはこっちの話だから気にしなくていい。それより行こうか」
「あ、はい」
頭で行くよう促し、俺達は歩きだした。しかし歩きだしたのはいいものの、いざとなると話題がない。いや、ないというより、話題はあるのにお互いそれを口にするのを躊躇っている、そんな感じだ。
綾子ちゃんがこうしてわざわざ学校に来たのも、沙弥佳のことであることは明白だ。多分、昨晩の電話の時に何か感じとったに違い

ない。そして、その何かは確かにあったことで、俺は綾子ちゃんに嫌われてもおかしくないことをしでかしてしまったのだ。

結局一言も喋らず終いで駅に到着していた。けれどここにきて、ようやく決心がついたのか、綾子ちゃんが口を開いた。

「あの九鬼さん。よ、良かったらうちにきませんか？」

「……今からか？」

「ええ。九鬼さんさえ良ければ……それに、お話したいこともありますし」

ためらいがちに言う綾子ちゃんに、どうしたものかと考える。別に予定もなければ、断る理由も見つからない。ただ一つひっかかっているとすれば、やはり沙弥佳のことだ。そして綾子ちゃんの言う、話したいことというのも、十中八九そのことだろう。

「そうだな、綾子ちゃんがいいのならお邪魔させてもらうよ」

こうして急遽、綾子ちゃんの家に行くことになった。俺にしたって、いつまでも問題を抱え込んだまま逃げているわけにもいかないというのは、変わりはしないのだ。

今まで何度か訪れたことのある綾子ちゃんの家だったが、今回ばかりはさすがに気恥ずかしい思いがした。今更といえば今更な話ではあるが。

「どうぞ」

「ああ。お邪魔します」

綾子ちゃんの案内で部屋に通された。

「今、お茶持ってくるから待ってて下さいね」

そういって部屋に着くやいなや挨拶もそこそこに、すぐに綾子ちゃんは部屋を出ていった。綾子ちゃんの部屋に一人残された俺はバッグを隅に置き、改めて部屋の中を見回した。

以前、ストーカー対策の一環で一度だけこの部屋に入ったことがあったが、その時はあまり中を見ることはしなかった。ただ、漠然と綾子ちゃんらしい部屋だと思ったくらいだ。

白いシーツと同じ色をしたベッド。その隣には本棚があり、ジャンルは分からないがタイトルから察するに、ファンタジー小説かと思われるものや、ともすれば小難しそうな本と一緒に少女マンガなんかも置いてある。

（……色々観てるんだな）

洋服ダンスなんかもかなり凝ったデザインではあるが、なかなかに落ち着いたものだ。机も同様で、うちにある机なんかと比べると、かなり上質なもののように思える。

また机の上には、赤ん坊を抱いた女性が写った写真立てが置いてあった。俺はそれを手に取った。どこか見知った面影を残したその女性は、おそらく綾子ちゃんの母親なんだろう。目の辺りが少し彼女に似ている。

「すみません、九鬼さん。ドア、開けてもらえませんか？」

「ああ」

写真を眺めているうちに、綾子ちゃんが戻ってきたようだ。俺は写真立てを机に戻し、ドアを開けた。綾子ちゃんは盆に紅茶が入ったと思われるティーポットと、二つのカップを乗せて持っていた。

「お待たせしました」

「そんなことはないよ。ありがとう」

「いえ」

机に盆を置き、来客用の小さなテーブルを取り出した綾子ちゃんは、その上に盆を乗せた。

「今お茶入れますから」

「どうぞお構いなくってか」

クスリと笑いながら綾子ちゃんは、ティーポットから香りよい紅茶をカップに注いでいった。

「あ、ミルクいりますよね。これも一緒にどうぞ」

「わざわざ、すまない」

綾子ちゃんの分も入れ終わるのまで待ち、俺は入れられた紅茶を一口飲んだ。思わずほっと一息つける瞬間だ。

「これ、うちで飲んでるのとは違うか？」
「はい。お邪魔した時に入れるものとは、お茶っ葉が違いますよ」
平静を装って頷きながら、俺は内心ではドギマギしていた。もう悔やんでも仕方のないことなのだから、いい加減、腹をすえた方がいいと言うのは分かっているはずなのだが……。
「九鬼さん」
上品に片手に受け皿を持ってカップを乗せ、そのままテーブルに戻した綾子ちゃんが、真面目な声で呼ぶ。
「どうした？」
「私がお話したいこと……もう分かってますよね？」
「……ああ」
俺もカップをテーブルに置き、横目で綾子ちゃんを見た。その顔はいつになく真剣だ。
「なら率直に聞きます。昨日、さやちゃんと何かありましたね？」
「……」
怒っているようでもなく、それでいて呆れているようでもなく、綾子ちゃんの声からは何が起こったのかというのを知りたいと思う気持ちに、溢れているように聞こえた。こんな綾子ちゃんを前にして俺は、もはや隠し事をし続けるのは無理に思われてならなかった。

第52章

部屋に沈黙が降りていた。目の前の綾子ちゃんは、黙って俺が話し出すのを待っている。俺はどう切り出そうか考えあぐねていた。ある程度の予想はしているかもしれないが、さすがにセックスしたとは言えない。

「まず……まず君に謝っておきたい。……本当にすまない」

綾子ちゃんに向き直り、頭を下げた。それを見て、どう思ったかは分からない。けれど、謝らずにはいられなかった。

なにもいわない綾子ちゃんを頭をあげて見れば、無表情とでもいうのか、今まで見てきたどの表情ともしれないものだった。美人なだけあって、その沈黙がやたら恐い。

「……もう君が考えているように……あの後、沙弥佳からの接触は確かにあったよ」

「……やっぱり。それでどうしたんです？」

「……」

本題はここからだ。なんと言えばいい。多分、何を言っても結局のところ、綾子ちゃんを傷付けることになるのような気がする。

それでもやはり本当のことは言えない。他の女であれば最悪とは分かっていても、寝てしまったと言えばまだ救われる。だが今回ばかりはそんなこと言えない。近親相姦しましただなんて言えるわけがない……。たとえ彼女がそいつを容認できるような人間であってもだ。

「……何を言っても、もう許されないと思う。……だから言うよ。あいつとキスをした」

俺は彼女と目を合わせないよう、静かにそう言った。別に間違ったことは言ってない。言ってはいないが、保身に廻った自分に自己嫌悪してしまう。

「……そう、ですか」
「……」
彼女の悲しげな響きを含んだ言葉を最後に、再び俺達に長い沈黙がおりた。空気が重いというのは、まさにこういうことを言うんだろう。その間にも、次はなんと言えばいいのか考えてはいたが、情けなくも全く何も浮かんでこない。
「九鬼さんは……九鬼さんはそれでどう思ったんですか？」
「どう……ってのは？」
「さやちゃんとキスしたんですよね。その時九鬼さんは、どういう気持ちになったんですか？」
静かに、とても静かに彼女は尋ねてくる。まるで聖母のように……。
「……正直に言うと、よく分からない。良いとは思わなかったが、悪い気にもならなかった……戸惑いこそあったけど、それ以上は何も……」
「……キスしたんですか？　それともされた？」
「もちろん、されたんだ」
「拒否しなかったんですか？　私、言いましたよね。絶対に拒否してくださいって……」
「ああ、そうだ。……だけど、俺はそれができなかった……綾子ちゃんに対して悪いとは思ったんだ、だけど……」
あいつを傷付けたくなくて、結局こうなってしまった……だけど今度は綾子ちゃんを傷付けてしまった。いや、二人を傷付けたくないという身勝手な思いが、二人を傷付けてしまったのか……。
「すまない綾子ちゃん……」
「……ねぇ、九鬼さんは私のことどう思ってるんですか」
不意に綾子ちゃんの雰囲気が変わった。今までのひどく感情の篭っていない声から、責めるような、それでいて悲しくもある、そんな声だった。
「もちろん好きだ。綾子ちゃんと付き合えることができた時、すご

く嬉しかったんだ」
「なら……なんでさやちゃんとそんなことしたんですか。拒否して って言ったじゃないですか」
「……すまない」
「ねえ、なんで？　九鬼さんは私のこと好きだから付き合おうって言ったんでしょ？　ならなんでさやちゃんとそうなっちゃうんですか？　それとも私のことはただの良い友達なんですか？　さやちゃんを騙すための形だけ？　ねえ、黙ってないで答えてっ」
「そんなわけない。俺だって綾子ちゃんが好きになったから付き合おうと言った。最後に会った時言った言葉に嘘はない」
「ならどうしてさやちゃんとキスするのっ。なんで私とはしてくれないのっ」
つい数分前まで物静かだった綾子ちゃんは、泣きそうになりながら叫んだ。
「私だって九鬼さんのこと好きなんだよ？　その九鬼さんから付き合おうって言われた時、私もすごく嬉しかったっ。
……なのになんで？　九鬼さんの彼女になったんだから、私だって何から何まで全部を許せるわけないんだよっ。それとも何？　私だったら許してくれると思ったの？　そんなわけないでしょっ。
ねえ、私は九鬼さんの何？　体の良い友達？　都合の良い女？」
一気にまくし立てた彼女の目には、涙が浮かんでいた。それを見て、俺はなんと言えば良い？
「違う……そんなわけない」
「ならどうしてっ！　私はこんなに好きなのに……なんでっ」
ついに彼女は俯いて泣き出してしまった。俺はその様子の綾子ちゃんを、ただ阿呆のように眺めていることしかできずにいた。本当は抱きしめたいのに、罪悪感からそれすらできなかった。
「……すまない、本当に」
彼女から目を逸らして伏せた。何を言っても結局は彼女を哀しませるだけだ。それに綾子ちゃんの言うことに、なんの落ち度もない。

全ては俺が悪いのだ。
第一、俺だってこうなるかもしれないと分かっていたからこそ、思い悩んでいたはずではないのか。
部屋の中では、綾子ちゃんの啜り泣く声だけが響いていた。

どうすることもできずにいた俺に、いや、俺達の空気を一変させたのは、綾子ちゃんの携帯からと思われる着信音だった。
「……」
綾子ちゃんは鼻をすすりながら両手で何度も涙を拭い、着信が鳴り続ける携帯に出た。
「……もしもし」
涙を拭いさっても、泣き腫らした目からは再び涙が浮かんできている。
「……ううん、なんでもないよ。ちょっと感動しちゃって。それよりもどうしたの？」
綾子ちゃんは、電話の主に嘘をつきながら続けるうちに、一瞬だがこちらに目を向けて言った。
「……ううん、いないよ。でもどうしたの？　うん。……うん、分かった。それじゃあまたね」
電話を終えた綾子ちゃんが、小さなため息をついて俺に向き直った。
「……さやちゃんからです」
「沙弥佳から？」
「はい。……九鬼さんの携帯にかけたけど出ないからって」
「……そうか」
制服のポケットから携帯を取り出して確認すると、確かに数回に渡って沙弥佳から着信があったことが表示されていた。マナーモードになっていたために気付かなかったのだ。
「今更だけど仲、すごく良いんですね。……やっぱり私が入り込む隙なんてないくらい」

「綾子ちゃん……俺は」
「言わないでっ！　……もう、もう帰ってください……」
一際大きな声で言った綾子ちゃんは、それきり俯いたまま何も言わずにただ手を握って震わせた。
「……そうだな、もう俺は帰った方がいいな……本当にすまなかった」
俺はそれだけ言うと、隅に置いた鞄をとって部屋を出た。
階段を下りて靴を履き、玄関を出る。
「……お邪魔しました」
自分でも小さいと思えるほどの小声だ、きっと家の主には聞こえなかっただろう。しかし、とぼとぼと自分でも情けないと思えるような足取りで、門を出ようとした時だった。
「九鬼さんっ」
後ろから綾子ちゃんの呼ぶ声が聞こえ、俺は振り返った。
綾子ちゃんは玄関を出て走り寄ってくる。
「……あの、なんて言っていいのか分からないけど、我を忘れてしまったというか……私、感情的なってしまって」
つい今の今まで激昂していたかと思えば、随分と変わり身が早い。しかし、感情的になりつつも、悪いのは俺であるはずなのに嫌わないでくれている綾子ちゃんには、感謝の言葉もない。だが、今は一旦身を引いた方が良い。話し合いはまた日を改めてだ。
「いいさ……綾子ちゃんの言ったことは間違いなく正論だ。言い訳はしないよ。悪いのは俺なんだ」
バツの悪い気分の俺は、苦笑して言った。
「九鬼さん……。っ！」
俺を呼ぶ綾子ちゃんが、突然、驚愕に目を見開かせる。怪訝に思った俺は、その見つめる視線の先を追った。
「なっ……沙弥佳」
絶対零度という言葉があるが、今の俺達を包む空気はその表現が恐ろしく似合いそうなほど、冷ややかなものだというのが理解でき

た。そんな中、沙弥佳は俺達のことなど、まるで他人を見るかのような眼で見つめている。
「あ、さ、沙弥佳。これは……」
言うが早いか、沙弥佳はつかつかと俺達の方へとやってきた。その間に、一度たりとも瞬きをしないのが余計に恐ろしい。
「……なんだ。やっぱり、あやちゃんのところにいたんだね。多分そうじゃないかと思ったんだぁ」
「……」
その沙弥佳の表情に、綾子ちゃんはためらいがちに目を伏せる。さっきまであんなに激昂していたはずの彼女すら、今の沙弥佳の前ではいささか後ろめたい気持ちになったのかもしれない。
「さ、沙弥佳おまえ、どうしてここに……」
「簡単だよ。お兄ちゃんの学校に行ったら、もう帰ったって聞かされたから。それで電話したのに、お兄ちゃんたら全然出てくれないんだもん」
うっすらと笑みを浮かべながら話す沙弥佳に、俺達はどうしてか緊張してしまっていた。周りから見れば、ただ恋人の仲を冷やかす友人、に見えなくもない状況かもしれないが、当の本人達からすれば、とんでもなく嫌な予感がしてならない。
「そ、そうか。そいつはすまなかったな……」
「別に良いよ、こうして見つかったし。それよりもさ……一つ聞きたいことがあるんだけど、いいかな」
「……なんだよ？」
先ほどからなんら変わらない表情のまま話す妹に、俺はかつてないほどの緊張感を覚えていた。
肉体と精神というのはコンピューターで例えると、ハードウェアとソフトウェアの関係である、というのを聞いたことがある。肉体というのは、感情という名のソフトウェアが表示したいことを表現するための、ハードウェアだとか言われているやつだ。
今の沙弥佳は、そのハードウェアとソフトウェアの間に、致命的

なバグが生じ、それらがうまく機能していないように見える。
……そんな風に考えてしまうほど今の沙弥佳には、とても違和感を感じずにいられないのだ。
俺の陰に半ば隠れてしまっている形だが、綾子ちゃんも俺と同じように感じているようだ。明らかに今の妹に対し、俺達は畏怖する気持ちがあった。
「私さ、さっきあやちゃんにお兄ちゃんがいないか電話したんだけど、いないって言ってたんだよね。なのにそのお兄ちゃんが、どうしてあやちゃんの家から出てくるの？　それってどういうことなのか、きちんと説明してほしいな」
「ぁ、さ、さやちゃん」
凍りつかせているかのような沙弥佳の笑顔は、向けられた者の体温を、急激に奪っていくほど薄ら寒くなるものだった。
なんだってこいつはこんな……。
「ね、あやちゃん。あやちゃん、さっき言ってたよね。お兄ちゃんはいないって。なのにお兄ちゃんがあやちゃんちから出てくるのって、明らかにおかしいよね？　どういうことなの？」
その薄ら寒い笑顔を綾子ちゃんに向けて沙弥佳は、途端にその笑顔が崩れた。
「ねえ、どういうことかって聞いてるんだよ、あやちゃん。答えて」
もし視線で人を殺せることができるなら、きっとこんな眼になるのかもしれない。それほど沙弥佳の視線は、鋭いものだった。なまじ美人なだけあって、向けられていない俺すら足がすくむ。
「さ、沙弥佳。こいつには理由があるんだ。俺が綾子ちゃんに言うなと言っただけで、綾子ちゃんは悪くない」
「……そう。なら、なんでお兄ちゃんはそんな嘘つかせたの？　理由は？」
鋭い視線の標的を綾子ちゃんから俺に変える。向けられた瞬間、思わず息を飲み込む。
「ぇ、あ……」

とっさに綾子ちゃんを庇うための嘘だけに、全く理由など考えていない。沙弥佳は無言で俺を見つめたまま、微動だにしない。そんな無言のプレッシャーを打開したのは、意外にも綾子ちゃんだった。

「……やめてあげて、さやちゃん。九鬼さん困ってるよ」

綾子ちゃんは、一歩俺の横に出て沙弥佳にそう言った。

「なに、あやちゃん。今はお兄ちゃんに聞いてるんだよ。邪魔しないで」

再び刺すような視線を、沙弥佳は綾子ちゃんに向ける。自分に向けられた眼に、少しだけたじろいだように見えた綾子ちゃんだが、それでも沙弥佳から視線を逸らすことはなかった。

「……今のは私をかばって言ってくれただけで、九鬼さんは何も悪くないよ。確かにさやちゃんから連絡もらった時、九鬼さんはすぐ横にいたよ？　でも、電話の相手がさやちゃんだなんて気付いてなかったし、携帯の着信があったのに気付いてなかったのも本当。今日だって予定がないか分からなかったのに、話があるからって、私のわがままで家に来てもらったんだよ」

なるべく落ち着いて、ゆっくりと冷静に綾子ちゃんは沙弥佳に説明する。それでも沙弥佳は、険しい眼を緩ませることはない。

「だから九鬼さんが悪いわけじゃないよ」

「……そう、ならいいけど。それでお兄ちゃんが出てきたってことは、話は終わったんだよね？　ならお兄ちゃん、早く帰ろ？」

「おい沙弥佳」

一方的に決めつける沙弥佳に、少しながら腹が立った。そもそもなんだってこいつはこんなにまで怒る？　よくよく考えてみれば、そっちの方がおかしいのではないのか？

「何よ」

「そんなに綾子ちゃんを責めるな。第一、予定が何もなければ会うことになってたんだ」

「何？　二人して庇いあって」

「そうじゃない。本当のことを言ってるだけだ」

「ふーん、そう。でもあやちゃんもあやちゃんだよね。私との約束よりも恋人取るんだもんね」
「約束？」
沙弥佳の口から出た言葉に、横にいる綾子ちゃんを見た。彼女はバツの悪そうな顔をしている。
「そうだよ？　前々から今日は遊ぶ約束してたの。でもそれが、土壇場になっていきなりキャンセルされたから、もしかしてって思ったの。予想が当たってすごく嫌な気分だけど」
「本当なのか？」
問いただしてみると綾子ちゃんは、黙って小さく頷いた。どうやら本当のことだったらしい。
それをキャンセルしてまで、今日俺と会ったというのはつまり……。綾子ちゃん。君はどこまでも俺と、沙弥佳のために考えてくれていたんだな……。
俺は綾子ちゃんへ、本当にどうしようもないくらいに感謝の気持ちでいっぱいになった。
「……そうか」
「そうだよ。さ、お兄ちゃん帰るよ」
そう言って沙弥佳は俺の手を握って引っ張ろうとするが、こっちもそうですかと黙ってはいられない。
「待てよ、第一おまえは何だってそんなに腹を立ててるんだよ。約束を反故したってのは確かに分かるが、何もそんなにまで怒らなくたっていいだろ」
「……そんなの私の勝手でしょ」
「いいや、そんなわけいくか。どう考えたって、そんなにまで怒りをぶつけるのは綾子ちゃんに対して理不尽だ」
「何よ、そんなにまであやちゃんを庇いたいの？」
沙弥佳の鋭い眼は、ますます険しさを増して俺を射ぬく。だが、俺としてもそうそうたじろいでばかりはいられない。
「そうじゃない。そこまでおまえが怒る理由を知りたいんだ、俺は」

妹の態度にだんだんと腹が立ってきた俺は、思わず叫んでいた。
これでもし大した理由がなければ、さすがに今回ばかりは少しお灸をすえてやった方がいいかもしれない。
「……」
沙弥佳はここでようやく、射ぬくような鋭い視線を俺達から外した。その様子は苛立ちながらも、なんて言うべきなのか考えているようだ。
「どうした、何もないのに怒ってるのか、おまえは」
「……違うもん」
「ならはっきり言うんだ。なんでそんなに苛立ってるんだ？　約束を反故されたからか」
沙弥佳は小さく二回首を振る。
「違うよ。……それも少しはあるけど……それだけじゃないの」
「じゃぁ、なんなんだ」
まだまだ険しい表情をしている沙弥佳だが、ちょっと前に比べるといくらかしゅんとした態度になっているところをみると、いくらかは落ち着き始めているようだった。
「……逆に聞いていい？　お兄ちゃんはなんで私がこんなに悲しい気持ちになった理由、分からない……？」
「悲しい？」
逆に反問されて、思わず眉をひそめて聞き返してしまった。
「どういう意味だよ。それが分かるなら、こんな風に聞いてなんかない」
一瞬だけ目を大きくさせて、驚くような顔をしてみせた沙弥佳は、たちまち眉をひそめ、目を細くして唇を噛んだ。
「……お兄ちゃん。それ、本気で言ってるの……？」
「あ？　……なぁ、さっきから何言ってるんだ。はっきり言ってくれよ」
沙弥佳は次第に小刻みに震えだし、俯くように顔を背けた。腕を掴むその手にも力が加わり、指が筋肉に食い込んで痛い。

「お、おい沙弥佳」
「そっかぁ……お兄ちゃんには分からないんだ……昨日、あれだけ愛し合ったのに、分からないんだ」
「え……？」
沙弥佳の呟いた言葉に、今度は綾子ちゃんが何を言ったなのか分からないという顔になって、俺と沙弥佳の二人を見た。
「……ねえ、あれだけのことして、私の気持ちが分からない？　それともお兄ちゃんの中ではどうでも良いくらいのものだった？」
「さ、沙弥佳。それは……」
まずい。沙弥佳の言葉によって、綾子ちゃんが勘づいてしまった。俺は慌てて沙弥佳を止めようとするが、沙弥佳はもう止めることはなかった。
「……お兄ちゃん、昨日最後に私のこと好きって言ってほしいって言ったのに、好きとは言ってくれなかったよね？　……あれはなんで？　あの一言だけで私、全部諦められたかもしれないのに……私の初恋は終わりって決めてたのに……。なのに私、余計にお兄ちゃんのこと諦められなくなったんだよ？　なんでお兄ちゃんはあの時言ってくれなかったの？」
「あ、あの時は……」
言葉に詰まる。あのとき、もし俺が好きだと言えば、より深みに嵌まってしまうのではと恐れたためだ。だから言うのを戸惑った。だと言うのに沙弥佳は、それを最後にしたかったからだと言う。俺はてっきり、ただセックスの後だったから言ってほしいだけなのかと思ってしまったのだ。
「ねぇ、今言ってよ……」
「なに……？」
「今ここで好きって言って」
強く、はっきりとした口調。たとえ人込みの中であっても、この声は一際澄んでよく聞こえそうな、そんな沙弥佳の声が冗談でなく、本気で言っているのが分かりたくなくても分かってしまう。

「な、なに馬鹿なこと……」
「馬鹿じゃないよ。本気で言ってるの」
突拍子もない沙弥佳の発言に、俺も綾子ちゃんも言葉を失ってしまった。今、綾子ちゃんの目の前で、そんなこと言えるわけがない。いくら怒りの感情に支配されているとしても、我を忘れるような類いのものではない。明らかに分かって言っているのだ。
「いい加減にしろっ。そんなこと今言えるはずないだろ」
怒鳴る俺に沙弥佳は、先ほどよりも怒りに満ちた眼で俺を見る。だが、俺とて腹のおさまりがきかない今、それに屈するわけにもいかない。第一、そんなこと言おうものなら、綾子ちゃんとの関係も破綻してしまう。俺だけならまだしも、間違いなく沙弥佳だってそうなってしまうはずだ。俺はそんなこと望んでいないし、綾子ちゃんもきっとそうに決まっているのだ。
「この際だからはっきり言ってよ、お兄ちゃん。あやちゃんか私、どっちが好きか」
絶句するとは、こういうことを言うのだろう。沙弥佳は、ますます訳の分からないことを言い出した。
「どっちかっておまえ……さっきから訳が分からんぞ。そんなの意味がないだろ」
「意味なくないよっ。お兄ちゃんだって言ってたじゃない。私にも振り向かせる権利があるって。だから私もそうしたんだよっ？」
「だからって、それとこれは別問題だろっ」
自分で言っていて、ぐちゃぐちゃに頭が混乱していた。なんだってこいつはこんなにまで喚いている？　何も、今ここでしなくたっていいじゃないか。そんなことを冷静に考えている自分がいる。
「私にとっては別じゃないよっ」
「おまえ、さっきから支離滅裂だ。何言ってるのかさっぱりだ。第一、俺達の関係はあの一回きりのはずだったろうが」
言葉の弾みだった。つい興奮してしまい、言わなくていいことを言ってしまった。言った後で思わず、小さくあっと漏らすが、そん

なのは後の祭りというもので、あれほどエキサイティングしていた俺達に、一瞬にして静寂が訪れた。

「……っ」

目の前の沙弥佳は当然だろうが、半歩後ろにいる綾子ちゃんもおそらく、驚いた顔をしているはずで俺はそんな二人の視線から、逃げるように目を伏せた。そうでもしないとこの空気には堪えられそうになかった。

「九鬼さん……」

沙弥佳の一言によって、俺と沙弥佳の関係に疑心暗鬼になっていただろう綾子ちゃんは、うかつな俺の言葉で確信してしまったに違いない。だからこそ絶句ともとれる、俺の名を呼んだ。そして同様に、沙弥佳にも全く別の意味で絶句させてしまっていた。

「……」

苦い気分でチラリと沙弥佳に目をやれば、沙弥佳は憑き物が落ちたかのように静かになり、切れ長の目を大きく見開いていた。そして、そのままポロポロと涙があふれ、頬を流れていった。

「あ……」

「……そんな、そこまで言わなくたって……」

沙弥佳の涙を見て、ようやく俺も気を持ち直した。沙弥佳は、とめどなく流れている涙を拭くことなく身を震わせ、掴んでいた俺の手を放す。まるで死にゆく人が露のほども力がなくなり、握ることすらできなくなったかのような、そんな具合だ。

「さ、沙弥佳、今のは……」

離れた手を逆に今度は俺が掴もうとしたとき、その手を沙弥佳によって払われた。

「触らないでっ」

「沙弥佳っ、待ってくれっ！」

手を払った沙弥佳はそのまま背を向けて走り去ってしまった。

俺は今すぐにも後を追いたくなったが、横の綾子ちゃんを置いていけるのかと思うと、足が動かなかった。

「あ、綾子ちゃん……？」
「……どうしたんです？　さやちゃん追わなくていいんですか？」
困り顔で呟く彼女は、明らかに無理をしているのが見てとれる。
「綾子ちゃん、俺は……」
途中まで言いかけて止めた。今何を言ったってそれは、全てただの言い訳にすぎないのだ。
今まで忘れていた綾子ちゃんへの罪悪感が、今更ながら甦ってきた。沙弥佳とはキス、それだけ。しかし脆くもそれが、どうしようもない嘘であったとばれてしまった以上、俺には綾子ちゃんになんて声をかければいいのか、分からなくなってしまった。
「……九鬼さんの様子がおかしいから何かあったんじゃないかって……もしかして、さやちゃんとそうなっちゃうんじゃないかって思ったりもしたけど……結局意味なかったんですね」
「……」
沙弥佳とは違って、一語一語ゆっくりと話す綾子ちゃんは、妹とはまた違う恐ろしさがある。
「……なんか私、馬鹿みたい。好きな人に付き合おうって言われて、一人で浮かれちゃって……でも、その人は私とは違う人と関係結んじゃって……私、ただ二人の当て馬にされただけじゃないですか」
「っ。それは違う」
「じゃあなんなんですかっ。私、ただのお飾りじゃないんですよ？　私だって、好きな人と一緒にいたいって思う気持ちもあるんですよ？　なのに、なんでさやちゃんとそんなことしなくちゃいけないんですか？　都合がよければ誰でも良かったんですか？」
「ち、違う……」
「じゃあどうしてっ」
綾子ちゃんは一際大きく叫びながら、目を真っ赤にして泣いていた。
「……私、さやちゃんと関係を持ったこともショックだけど……それ以上に隠そうとして、嘘つかれたことの方がもっとショックです

……。

私、言いましたよね？　たとえ九鬼さんたちが合意の上で関係をもつのなら仕方ないって……私とさやちゃんの間にはどうしたって、九鬼さんと過ごしてきた時間の長さも、お互いを理解し合っていることも、まだまだ敵わないんです……。どうしたって、さやちゃんに遠慮しちゃうんです。

それが分かってるからこそ、九鬼さんがを選んでくれたのがすごく嬉しかった。これで少しはさやちゃんに追い付くことができるって……なのに……それなのに、こんなのひど過ぎますよ……」

綾子ちゃんの悲痛な独白に俺は、苦い気持ちで聞いていた。聞くことしかできなかったのだ。

これまでにないほど感情をぶつけてくる彼女に、かける言葉など何もありはしない。

「綾子ちゃん……」

「……九鬼さん。今あなたが本当に見ている人は誰ですか」

唐突の問い。ついさっきまでなら、君だと即答できたはずだ。はずなのに、今それができないでいる。どうしても心のどこかで妹が、沙弥佳がひっかかるのだ。理性は嘘でも良いから、綾子ちゃんを選べと頭蓋の中で叫んでいる。なのにそれとは裏腹に、口は全く動こうとしない。

何も言えずにいる俺を見て綾子ちゃんは、どこから出てくるのか知りたくなるほどの涙をあふれさせた。

「……っ」

「綾子ちゃんっ！？」

彼女は俺の制止を振り切って、走って家の中へと入っていった。

俺は阿呆のように、いつまでも綾子ちゃんの消えていった玄関のドアを見つめていた。

綾子ちゃんの家からほどなくした場所にある、小さな公園。そこになにもかもやる気をなくして佇んでいた。

二つだけのブランコとシーソー、それに小さな子供向けの滑り台。後はある意味がなさそうなほど小さな砂場と、至って普通のどこにでもある公園だった。

俺はただ一人、ぽつんと人っ子一人いない公園のブランコに座っていた。ただ一人だ。他の誰もいない。

小さくブランコをこいでみれば、ほとんど人が使うことがないのだろう、キイキイと錆び付かせた音が鳴った。

「……なにやってんだ、俺は」

もう何度目かも分からないほど呟いた言葉だった。つい何十分か前に起こった出来事を思い返し、その都度ため息をつく。

嫌だ嫌だと言いながらも、流されるがままに沙弥佳を抱き、そして結果は傷つけた。それが元で結局は、綾子ちゃんをも傷つけることになってしまった。

「綾子ちゃん……沙弥佳……」

ブランコに座ったまま地面を見つめていた俺は、その場で頭を抱えてうずくまった。

別に二人を傷つけたかったわけじゃない。傷つけたいなどと、思うはずもない。沙弥佳とはいつまでも仲の良い兄妹でいたいし、綾子ちゃんとだって周りが羨むとまではいかなくたって、人並みに付き合いをしたかった。俺が望んだのはただそれだけだ。それだけのはずだったんだ。それなのにどうしてこうなった……。

口の中でギシリと音がした。無意識のうちに強く歯ぎしりしていたのだ。口の周りの筋肉に余計な力が入っているのに気付いた俺は、口元を緩めた代わりに、またため息をついた。それももう何度目か分からない。

本当は分かっているのだ。綾子ちゃんの言う通り、俺がそうありたいと望むのであれば、何がなんでも沙弥佳を拒否すべきだったのだ。きっと沙弥佳には嫌われることになるのは目に見えていた。そ

れが怖かったのだ。
どうしようもなくブラコンで、俺が他の女と遊んだりしようものなら、その女に対して敵意を剥き出しにしたことすらあった。沙弥佳はそんなやつだったのだ。
それが分かっていながら俺は、中途半端にあいつを受け入れた。それが間違いだった。嫌われてしまうことを覚悟で拒否すべきだった。仲の良い兄妹だったのだ。たとえ今はそれでギクシャクすることになったとしても、いずれは分かり合えるはずだったのではないのか……。
よくよく落ち着いて考えてみれば、すごく簡単な話ではないか。一時的に嫌われることになったにしたって、親友同士の二人が本気で関係が破綻してしまうことになるような気はしない。仲の良い二人なら、俺と同じように分かり合えたはずではないのか。いまさらながら、そんな考えが浮かんでは消えていった。
しかし……もう遅い。沙弥佳に嫌われるなんて、俺には考えられなかった。いや、甘えていたのは俺の方だった。あいつなら、俺がどうあっても分かってくれるはず。そんな甘えがあったのだ。その身勝手な考えのせいで、俺は二人を傷つけたのだ。
「くそ……」
いまさらそんなことに気付いたって遅すぎる。悪態をつきながら、のろのろと携帯を取り出して中を開いた。
履歴から沙弥佳の番号を呼び出し、通話ボタンを押そうとするがためらわれた。こんなことになっておきながら、どうして電話することができるというのか。かと言って家に帰ることもできない。もし沙弥佳が帰っていたらと思うと、帰ることなどできるはずがなかった。
それに今はあいつに合わす顔がない。けれど……合わす顔がないと分かっていても、今すぐにでもあいつの顔を見たいと思うのは、あいつへの罪悪感からなのか……。
大切なものというのは、失ってはじめて気付くというが、そうな

んだと気付かされた思いだった。まだそうだと決まったわけではないが、思わずそんな風に思ってしまうような心境だ。

「沙弥佳……」

間違った関係を結んでしまったかもしれないが、一番の良き理解者にして、何にもまして、いつだって俺を一番に想ってくれていた妹のことが、俺にとってとてつもなく大きな存在なのだと実感できた。

綾子ちゃんにしたって同じだ。彼女の独白からは、沙弥佳への対抗心から、ずっと俺を理解しようと努めてくれていたのだ。そんな二人を傷つけるなんて、俺はとんでもない大馬鹿だ……。

携帯を片手に手を膝の上に置いて頬杖をつきながら、大きくため息をついた。

「幸せが逃げちゃうわよ」

突然かけられた声にはっとして顔をあげると、そこにはあの藤原真紀が立っていた。どことなく顔が上気しており、少しだけだが息が上がっているように見えた。

「……あんた、どうしてここに？」

「別に。この辺り、近所だもの」

「そうだったのか……」

それきり俺は興味をなくし、再び地面を見つめるように俯いた。今はこの女に構っているような余裕はない。

「どうしたの、ちょっと見ない間にすごくやつれたように見えるけど？」

「……あんたには関係ない話だ」

「……そう」

そういったけれどそれでも、真紀はなにか考えているのか、その場を離れようとはしなかった。視界には真紀の足だけが映り込んでいる。

「……どうしたんだ。帰らないのか？」

「そうね。半ば冷やかしみたいなものだから帰るわ。でも、ここに

いちゃダメというものでもないでしょう」
「そうかい。だけどできれば遠慮願いたいもんだね。しばらく一人になりたいんだ」
ため息をつきながら、真紀を見ずに言う。
「そう……あなたがそうしたいなら、そうすればいいわ」
「ああ」
それでもすぐにそこを動こうとはしなかった真紀も、俺と同じようにため息一つついて、ゆっくりと離れていった。
「……」
何を思ったのか俺は、去っていこうとしている真紀を引き止めようと顔を上げるが、一人にしてくれと言った手前、それは思い止まった。
（なにを都合の良い……）
自分で突っぱねておきながら、相手が去ってからは都合のいいように引き止めようなんざ、どうかしている。
そんな具合に何事もなかったかのように俯いて、どれほどそうしていただろうか。再びジャリという音とともに、俺の近くに誰かがきた気配を感じた。
「……呆れた。本当にまだそのままだったの？」
その声に思わず顔を上げ、声の主を見た。
「真紀……」
「はい、これ。少しは落ち着けるわよ」
そう言って差し出してきたのは缶に入ったコーヒーだった。それを受け取ると、思いの外熱く、思わず声に出してしまった。
「あちっ」
真紀はこいつを平然と手で持っていたため、てっきり冷たいのかと思ったのだ。
「熱いから気をつけなさい」
言うのが遅い。相変わらず憎たらしい女だ。少しでもこの女に、そばにいてほしいなどと考えた俺が馬鹿だった。

「なによ」
「……別に」
真紀は隣のブランコに座り、自分のコーヒー口を開けて一口飲んでみせた。飲んだ後に、思わずほっとさせる様を見れば、きっとこのコーヒーと同じ熱いものなのだろう。その様子を見れば、俺としても熱いから持てないなどとは言っていられない。
「……ごく」
一口で大量にコーヒーを飲み込み、口の中と喉が焼けそうになる。だが構わなかった。今の俺にはこれくらいがちょうど良い。
食道を流れていく熱い液体によって、途端に身体が、かあっと熱くなった。
「ふふ、そんなに慌てて飲む必要なんてないのに」
穏やかな微笑をして見せる真紀に、少しだけ驚いた。この女と言えば、ピクリともしない無表情な顔か、人を小ばかにしたような含み笑いくらいしか見たことがなかったからだ。
「あんたもそんな顔ができるんだな……」
「え？」
「いいや」
内心で舌打ちした。何を言ってるんだ、俺は。これではまるで俺が、この女を口説いているみたいではないか。
「それで、なんでまた戻ってきたんだ？」
「ただの気まぐれよ」
「……ただの気まぐれね」
苦笑しながら肩をすくめた。ただの気まぐれでこうも都合よく、ついさっきまで、自販機だかコンビニだかで温められていた缶コーヒーを、持ってきたと言うのか。
「別にどうだっていいじゃない」
「ああ、そうだな。確かにどうでも良いことだ」
「……で、あなた本当にどうしたのよ。こんなこと言うのもなんだけど、まるでリストラされたサラリーマンみたいな顔しているわよ

？」

「リストラされたサラリーマンね。こいつは言い得て妙だな」

くつくつと手を額と腹にやって笑った。確かに、あながち間違った表現ではない。俺は人生で初めて恋人というのができたにも関わらず、その次の日には早くもその関係が終わろうとしているのだ。いや、そんなのはもはや、恋人という関係であったかすら怪しいものだ。

おまけにそれでいながら、最も身近にいた人間にすら愛想を尽かされてしまった。今まで、こんなことなど一度だってなかったことで、俺はどうすれば分からなくなってしまっているのだから、そんな板挟みにされている今、リストラされたサラリーマンの心境に近いものはあるかもしれない。

「何よ、突然笑いだして」

怪訝な顔をして見せる真紀を見て、おかしくもないのに笑いが止まらなくなった。

「もう。馬鹿にしてるんなら、私本気で帰るわ」

「く、くっくっくっく。すまんな、別に笑いたくて笑ったんじゃぁないんだ」

「何よそれ。おかしくもないのに私を見て笑ったっていうの」

「いいや、あんたがそんな物珍しそうな顔してるからさ、それと相俟ってな」

はあ、とひとしきり笑い終えてため息を漏らした。

「……ま、缶コーヒーのお礼くらいには話そうか。けど多分、あんたにはなんの面白みもない、くだらない話だと思うぜ」

そう前置きし、俺は真紀にことの経緯を話した。当然だが、妹であるというのは話さなかった。妹の部分だけは、他の女ということで話を進めたのだ。

長年一緒にいて、異性とは見れなくなっていた女から迫られ、一度だけという口約束で抱いてしまったこと。元々その女が俺のことを好きでいたなんて、思ってもいなかったこと。そしてそれが元で、

付き合い始めたばかりの恋人と、早くも破局しそうになっていること。所々変えてはいるが、起こったこと自体は、なるべく真実に近い形で話していった。

「……とりあえず話は、ざっとこんなとこだ」

「あなたって意外とモテるのね」

「俺も驚きだよ。モテた経験なんて、今の今まで一度だってなかったしな。まぁ、たまたま重なっただけだろうよ」

「そう……でも、分からなくもないけどね」

「何がだ？」

「いいえ、なんでもないわ。それよりあなた、これからどうするの？」

「……さぁな」

「私は部外者だからどうこう言える立場じゃないかもしれないけど、前者の方を選んだら？」

「前者って……」

「その幼なじみ？ってことよ。抱く気がなくても結局は抱いてしまったんでしょ？　だったらそっちの子を大事にした方がいいんじゃない？」

「おいおい。俺は一応恋人ってのがいるんだぞ？　それなのにそっちを取れってのか、あんたは。そんなの妥協にも取れるような気もするし……そんな気持ちで付き合ったって、あまりいいことないと俺は思う」

「じゃ、あなたはどうしたいのよ。私は別に妥協しろって言ってるわけじゃない。結局抱いてしまったのなら、あなたも満更じゃない部分があったんだと思うわ。長年一緒にいたんなら、お互い知り尽くしてる部分もあるわけだろうし、逆に言えばやりやすいんじゃないの？」

「……それが許されるような相手じゃぁないんだよ」

真紀には聞こえないような小声で呟いた。真紀は幼なじみか何かだと思い込んだようだが、実際には血の繋がった妹だ。それを知っ

ても同じことが言えるのか、と問いただしてやりたい気持ちになるが、ここはぐっと抑えるべきところだ。
「なに？」
「……いいや。まぁいい。仮に俺が前者を取ったとして、後者はどうすりゃぁいい？」
「別れるしかないでしょうね」
にべもなく言ってのけた真紀に、言葉を失った。
「おいおい。それじゃぁ、その子を傷つけてまで前者と付き合えっていうのか、あんたは」
「そうなるわね」
「なんだ、そりゃぁ……」
「あなたね、そうやっていつまでもうじうじしてたって意味ないのよ？　けじめくらいつけなさいよ」
「分かってるよ、んなことは。でもそれじゃぁ」
「じゃあ、あなたはどうしたいの？　あなたが二人を傷つけたのは間違いない。結局あなたは、自分が傷つきたくないから、二人に嫌われたくないから、そう思ってるのよね？　そんなのはただの独りよがりだわ。二人のことなんて何も考えてない。
あなたはきっちり、どちらかを捨てて、どちらかと付き合うしかないのよ？　もしかして、潔く別れようとか考えたりしちゃってるんじゃないでしょうね？　一つ言っておくけど、どっちからも手を引こうだなんて、ただの逃げだからね」
真紀は俺を見ながら、強くそう言った。
「……二人ともなんて無理なのよ。どちらかしかできないの」
最後の言葉はどこか俺にではなく、自分に向けて放った言葉のようにも聞こえた。真紀はそれきり口を閉ざし、自分からは喋ろうとはしなかった。
「……なあ」
「なに」
「……もし許されない相手だと分かっていたら、あんたはそれでも

そっちを取れと言えたか？」
「……さあ？　私、そういう今起きてる問題を無視して、もしだとかって質問は嫌い。ただの逃げじゃない」
「そうだな……」
どちらかとも知れず、キイと錆びたブランコの鎖が軋んだ音が響く。
「……最後に一つだけいいか」
「いいわよ」
「あんたは前者を取れと言ったが、後者でもいいと思うか？」
「そんなの自分で考えなさい。私はただ、前者の方が後悔しないんじゃないかと思っただけ」
真紀の物言いは、まるでこれから起こる何かを予期しているかのような、そんな風に感じさせる言い方だった。
「……そうか」
「ただ……あなたが本気で後悔しないのであれば、どちらでも構わないんじゃない」
ぶっきらぼうに言い放つ真紀だが、これがこの女なりの優しさなのかもしれないと思った。だがそのおかげで、胸のつっかえが取れたというものだ。
俺は、気付けば温くなっているコーヒーを一気に喉に流し込み、勢い良く立ち上がった。
「どうしたの？」
「いや、帰ろうと思ってな。
ま、なんていうか、誰かに話したおかげで楽になれた。そしたら、俺のやるべきことが分かったんだ」
「そう」
「ああ、あんたのおかげでな。礼を言っておかなきゃな。ありがとう」
俺は真紀に向かって、ほんの少しだけ俯くように頭を下げた。
「別にお礼を言われるまでもないわよ」

「……そうか。それじゃぁ悪いが、野暮用ができたんで帰るぜ」
「ええ。またね」
俺はそばに置いておいたバッグを担ぎ、歩きだした。公園を出る際に、出口の脇にあったごみ箱に缶を投げ入れ、一度だけ後ろを振り返り、まだブランコに座っている真紀を一瞥した。
「ただの逃げ、か」
真紀が口にした言葉をつぶやいて、足早に駅へと向かった。右手では携帯で、沙弥佳へのメールを書きながら。

第53章

空虚――第三者が今の俺を客観的に見て一言いわせれば、きっとこんな言葉をいうに違いない。

俺は部屋のベッドで一人うずくまり、ただただ、無意味な時間を過ごしていた。ただひたすらだ。もう食事だって何日もまともに食べていないような気がする。それより今は何日だ……？　俺はどれくらいこうしているんだ……？　もう、とうの昔に日付の感覚すらなくなっていた。

無気力になり、ベッドから起き上がりたいとすら思わない。どうせ起きたって、することなど何もないのだ。ただぼうっとし、どこかで座り込んで虚空を見つめるだけならば、わざわざベッドから出る必要などない。

そんな俺をよそに、家の前ではどこから嗅ぎ付けたのか、大勢の奴らが大挙して押し寄せていていた。どこかで見たことがある機械なんかを持って、道の往来に人の壁を作っている。その機械の前でマイクを手にし、リポーターらしき奴がこれまたカメラらしき機械を持った奴の前に立って、何か読みあげているような光景もあった。

近所の人達にとってはどうしようもなく邪魔なのだろうが、別になんとも思わない。俺にとっては、それすらもどうでも良いことだった。

部屋は締め切っていているため空気がこもり、埃っぽくなっている。もう何日も掃除などしていないためだ。

どれほどのあいだ掃除してないかは分からないが、ちょっと手を抜いただけで埃というのは溜まってしまうものらしい。

もっとも、俺自身は掃除なんてほとんどしたことがない。部屋の主だというのに、部屋を掃除していたのは、全く別の人物だったのだ。沙弥佳……あいつがいつも掃除してくれていた。

別にしてくれと頼んだ覚えは一度だってない。だというのにあいつは、やらなくたっていいのにわざわざ掃除してしまうのだ。その都度、あれやこれやと文句を言いながら。

そんな文句を口にしているのを聞くたびに、だったらやるなといつも言っていたのを思い出す。

『お兄ちゃん、またゴミ溜まってるから、掃除するからね』

これが掃除する時の合図だった。そのたびに俺は部屋を見回して、どこにゴミがと言ったものだった。きっと今の埃が溜まった部屋を沙弥佳が見れば、間違いなく掃除するからと言い出して聞かなかっただろう。それどころか、なかば怒ったようになんなのこれとでもいったかもしれない。

けれど今はもう……。

「沙弥佳……沙弥佳……沙弥――」

妹のことを思い出すたびに、なんと口にしていいのか分からない感情が、いくつも沸いてきた。

怒りと悲しみ、寂しさと切なさ、自分への無力感もあれば、叱責感もまたあった。なんであの時こうしなかったんだと。なんでもっとこうしてやれなかったんだと。

なによりも沙弥佳への愛しさと、同じくらいに胸の中心がぽっかりと空いたような虚無感。これらの感情が、全て沙弥佳と過ごした思い出とともにいしょくたになって、俺を襲ってきているのだ。

それともう一つ。そのぽっかりと空いた穴を埋めようとしている、圧倒的な後悔だった。もう過ぎ去ったことに対して、あそこはこうした方が良かった、ここはああすれば……そんなことばかりが頭の中を巡っていて、寝ても覚めてもずっとこんな調子だった。

その時、コンコンとドアをノックする音が響いた。俺は思わず勢いよくドアの方を向いた。

「……起きてるか？」

一拍おいて聞こえてきたのは、父の声だった。

「……会社に行ってくるよ」

短く言った父がドアの前からいなくなった気配を、なんとなくだが感じた。こんな時にまで会社に行く父。できればそんなものどうでも良いから、母さんについててやれよと叫びたくなる。

「そうか……もう朝なのか」

朝のような気もするし、昼か夕方のような気もする。暗くなれば電気をつけはするが、しかしそれももどかしく、ここ何日かのあいだは、電気すらも点けなくなったような気がする。

とにかく何かしたいとこれっぽっちも思わないのだ。最初のうちは食べなければ空腹を訴えていた腹も、いつからか全く空腹を感じなくなっていた。食べなくなったことでトイレにも行かなくなったし、風呂にも入っていない。

こんな生活になってからというもの、両親とすら顔を合わせてもいなかった。今の父の言葉を聞くのだって、いつくらいぶりだろう。一緒に暮らして起きながら、いつからか、全く喋っていないのだ。

しかし、久しぶりに家族の声を聞いたというのにも関わらず、なおも俺の関心は沙弥佳だけにしか向いていなかった。

「……沙弥佳」

うずくまっていた俺は、気付けばベッドの上に倒れこんでいた。いつの間にか、視界が横に傾いていたのだ。

桜の花が街中に彩りを添え、いよいよ満開に近づこうとしていたこの時期、暇を持て余した学生やランドセルを背負った小学生らが、これから訪れる春の長期休暇を前に、どこか浮かれているような顔で幾人も俺の横を通りすぎていった。

明後日で今学期も終わるのだから、それも無理はない。そんな中俺は、先ほど沙弥佳に送ったメールの返信がくるのかこないのか、

それで頭がいっぱいで、落ち着きなく家路についていた。
メールの内容は簡潔なものだった。
『どうしても話しておきたいことがあるから、家に戻る。それと、さっきは悪かった』
これだけだ。まぁ、家族に送るメールの内容なんてのは、体抵こんなものだろう。本当に重要なことはやはり、言葉にして伝えるのがセオリーというものだ。
しかし、なるべく気持ちを落ち着かせようと何度も深呼吸しているが、全く効果がない。先延ばしにしては駄目だと思いながらも、できれば沙弥佳とは顔を合わせたくないという気持ちが、浮足立たせている。
けれど、先に進んでいればいずれはゴールにたどり着くというもので、すでに家の近くにまで来ていた。
「ええい、いつまでも逃げてるんじゃねえ」
俺は自分を叱咤し、大股で家の門をくぐった。
「ただいま」
帰ったことを自己主張するために、普段よりもいくらか大きな声で言う。
「あら、おかえりなさい。沙弥佳は一緒じゃなかったの？」
ちょうど母が階段から下りてきたところのようで、出迎えてくれた。
「ああ、ちょっとな……。それより、沙弥佳は帰ってないみたいだな」
「帰ってないわよ。あなたを迎えに行くって四時間くらい前に出てったきり。あんた、会わなかったの？」
つまり俺の前から走り去ってからというもの、まだ外にいるということだ。
「まあ、な」
「そう。だったらあんた、あの子に電話して。今晩は前にあんたが好きになった、ビーフシチューにしようと思ってるから。

あの子、こういうの作りたがるでしょ」
母は、俺達の事情など知らないのだから仕方ないとは思うが、そうだとしても、やはりそうですかと了承できない。
「ちょいと用事があるから自分でやってくれ」
そう言って俺はそそくさと自室へ退散した。母は、そんなそっけない態度の俺に、後ろでブツブツと文句を言っている。そのときふと、沙弥佳がよく文句を言っている時の癖が、母さんと良く似ているのに気付いた。
（やっぱり二人は親子だな……良く似てる）
俺は何気ない共通点に気付いて苦笑しながら階段を上がり、沙弥佳の帰りを待つことにしたのだった。

夜八時――母さんと俺は、そわそわと落ち着かない気分でリビングにいた。
「あの子、どうしたのかしら……」
「……」
俺は携帯を手にしたまま、リビングの中を行ったり来たりと繰り返している。母さんも、テーブルについて座り、何度も時計や携帯を見つめるという動作を繰り返している。
「……沙弥佳」
こんな遅くまで沙弥佳が何も言わずに外出したことなど、今までに一度だってないことだった。喧嘩していても、無言の抵抗を表すためか部屋に篭った、というのはかつてあったが、今回はあまりにイレギュラーずきる。俺は当然、母さんも心配するのは当たり前だろう。
「……俺、ちょっとそこら辺探してくる。もし何かあったらすぐ連絡くれ」
吐き捨てるような口調は、親に向かって言うようなものではない

かもしれないが俺は気にせず、大股でリビングを勢いよく飛び出し、外に出た。

「くそ、あいつ一体どこにいるんだ」

俺は思い付く限り、手当たり次第に探して回った。近所の公園、駅、中学校に高校、商店街や、いつか行った繁華街近くの大きな公園。それにキシマイ堂にも足をのばしてみたが、やはり沙弥佳の姿を見つけることはできなかった。

揚げ句の果てに、さっき行った綾子ちゃんの家にまで行く始末で、やはりそこも沙弥佳がいるような雰囲気ではない。

どうせ綾子ちゃんの家にまで来たのだから、確認ついでに綾子ちゃんに会おうかと思いはしたが、さすがに気が引けたのでやめておいた。あんなことになったというのに、家出のためにわざわざ綾子ちゃんを頼るはずはないだろう。もちろん、万に一の可能性がないとは言えないが、それでもいないと見ていいはずだ。

俺は携帯を手に、沙弥佳の番号に電話した。何度かのコール音の後に、留守番電話サービスの方に繋がってしまう。さっきからずっとこうで、何度も録音を残してはいるが、一向に沙弥佳から連絡がくる気配がない。

「……今度も駄目か」

胸中には、何かあったんではないか、何かに巻き込まれたんではないのか、そんな嫌な想像ばかりが膨らんで渦巻いていく。

（頼む……無事でいてくれ）

天に祈る気持ちで綾子ちゃんの家の前から離れようとした時、突然携帯が震えた。

「もしもしっ」

わらにも縋る思いで出たため、叫ぶような声になる。

『……なんでうちの前にいるんですか？』

一瞬無言電話かと思うような沈黙の後に、聞き慣れた、しかし普段よりもいくらか低い声が聞こえてきた。電話の主は綾子ちゃんだったのだ。

「綾子ちゃん、か」
不安に掻き立てられていた俺だったが、その声のために、不思議と落ち着きを取り戻す。うちの前にという言葉が表す通り、彼女は二階の部屋の窓から俺を見下ろしているのが、こちらからも窺い知ることができた。
『……』
「……少し言いにくいんだが、今いいか？」
『少しなら』
「分かった。なら単刀直入に聞くよ。今、そこに沙弥佳がいないか？」
再び沈黙があった。受話器ごしでも、綾子ちゃんがどんな顔をしているのか分かってしまうのは、いささか複雑な気分ではあるが仕方ない。聞いた手前、綾子ちゃんが話し出すまで待たなくてはならないが、その間の沈黙が恐い。
『……どうしてうちに来てまで、それもわざわざ電話でそんなこと聞くんですか。
それってつまり、私と終わらして、さやちゃんとの関係を続けたいってことなんですね』
「違う、そうじゃない。俺は単純に、沙弥佳がいるかどうかだけ聞いてるだけだ。それとこれは一切関係ないんだよ」
昨日の今日とすら言わず、ついさっきのことなのだから、いくら本当のことであっても信用なんてできないのだろう。仮に俺が彼女の立場であっても、そう思ってしまうはずだ。
『……』
「頼む、聞いてくれ。俺は本当に沙弥佳がいるかどうかだけ知りたいんだ。そりゃぁついさっきあんなことがあったのに図々しいというのは分かっているつもりだ」
『……』
「……沙弥佳が、沙弥佳が帰って来ないんだ、あれから。色んな場所を探したけど、見つからないんだ。だから」

『だからって私のところに来るだなんて、おかしいとは思わなかったんですか』

綾子ちゃんの声はあくまで冷静で、俺を責めている口ぶりだ。当然それは間違いではないのだが。

「もちろん、そう思ったよ。だけど万に一つも可能性がなくたってゼロじゃない。だから来たんだ。

……だが君の言うように、来たのは間違いだったかもな。さっき、あんなことが起こったばかりなのに……」

受話口から、綾子ちゃんの息遣いすら聞こえてきそうなほどの沈黙。その沈黙を、綾子ちゃんは静かに破った。

『……さやちゃんは来ませんでしたよ』

「！　……そうか。すまないな……」

『いえ……』

「……」

今言うべきなのか迷ったが、言わなければ、またタイミングを失ってしまうかもしれない。こうして家のそばに来ていた俺に、わざわざ電話してきてくれたのだ。

「……綾子ちゃん。俺は確かに沙弥佳と関係を持っちまったのは事実だ。そのことに言い訳はしない。だけど……だけど一つだけ言わせてくれ。俺は君のことが好きだ。当て馬にしたとか、形だけだとかそんなんじゃない。本当に好きなんだ。

沙弥佳のことは、自分でも本当に最悪なことをしでかしたと思ってる……間違いだったと思ってる。最低だとも分かっちゃいるつもりだ……だけど俺は、君と別れるなんて嫌だ」

再び長い沈黙が訪れる。綾子ちゃんと話しができないというだけで、俺達の間にとても分厚いガラスの壁ができているような錯覚に陥った。

しかし電話からは、綾子ちゃんが何か言いかけているような、そんな気配を感じていた。

「すまん……一方的なことしか俺は言えない。まだ色々と考えたい

こともあるだろうから、今日はこれ以上もう何も言えることはないけど……もう一度やり直してくれないか」

まだ始まったばかりでやり直すだなんて言葉もおかしいが、率直な気持ちを述べたつもりだ。

『……少し』

「ああ」

『少し考えさせてください』

「いいよ。……君が落ち着くまで、待ってる」

『それじゃ……』

「ああ、待ってるから」

そのやり取りを最後に俺達は電話を切った。けれど視線の先には、二階の窓から俺を見ている綾子ちゃんがいる。互いに少しの間だけ見つめ合った後、どちらからとも知れずに視線を外した。

綾子ちゃんは窓にカーテンを、俺は彼女に背を向けて歩きだしたのだった。

夜十一時半も過ぎ、そろそろ日付が変わろうという頃に家に戻ってきた。探す当てもなくなって途方にくれていた俺は、いたずらに街を歩き回っただけでなんの手掛かりすら得ることなく、舞い戻ってきたのだ。

家に戻ると父さんが帰っていて、母さんと面をぶつけるように相対して席についていた。

「おかえり」

「ああ、ただいま……」

帰ってきた俺を見て、沙弥佳を連れていないのを見た父は、小さなため息を漏らしてそういった。すでに話は母から聞いているようだ。

その母さんに至っては、両手を額にやって俺が帰ったことなど気にも留めていない様子だ。

「そっちはどうだった？」

「駄目だ。クラスメイトにも一通り連絡してみたが、誰も知らないそうだ……」

渋い顔で父が言う。まだスーツすら脱いでいないところを見ると、帰ってすぐに沙弥佳の級友らに連絡をとったのだと思われた。

「なんで突然……」

母の何気ない呟きに、心が痛む。沙弥佳がいなくなったのは、俺が関係しているようでならないのだ。いや、十中八九そうだろう。あんなことがあった直後なのだ。俺が関係していないと考える方がどうかしている。

「とりあえずここは私たちに任せて、風呂に入りなさい。まだ明日は学校だろう」

「でも……」

「いいから行きなさい」

父の静かながら強い言葉に、俺はかける言葉を失った。

「……分かった」

父さんがああ言うようになった以上、今は何を言っても無駄だろう。昔からそういう人間なのだ、九鬼真太朗という人間は。

俺は返事もそこそこに、黙ってリビングを出て自室へと戻っていった。

風呂というのは本来であれば、嫌なことは文字通り水に流し、ゆっくりと過ごすべき時間と俺は考えている。しかし、今日はそういうわけにもいかなかった。間違いなく今回の件に、自分が深く絡んでいるはずなのだ。

もし沙弥佳が事故か何かに巻き込まれて、意識も朦朧としてどこかで俺達を待っているとしたら？　それとも、身内のひいき目なしに人目を引く容姿をしている沙弥佳に、軟派野郎の手がかかっていたりするのだろうか？

もちろんそれならば、まだいくらかは救われるというものだが、もしそうなら、そいつは今すぐにでもぶちのめしてやるところだ。

そしてなによりもだ。あいつが何か、とんでもないことに巻き込まれていたら……？　一度そうネガティブな方向に考え始めると、たちまち疑心暗鬼にとらわれてしまう。ここ数カ月で起こった、俺の周囲を取り巻く状況。それが何であるかはさっぱりだが、何か関係していたりするのだろうか。だとすれば、その巻き添えを食ったという可能性はどうだろうか……。

俺は風呂からあがってベッドの上にいる今も、同じことばかり考えてしまっていた。気付けば、時刻はすでに真夜中の三時を過ぎ、三時半を時計の盤面は示していた。

明日……すでに今日だが、学校があるとは分かってはいても、気が気でないため、全く寝れそうにない。欠伸の一つだって出ないのだ。眠れない俺はため息をついて、ベッドから起き上がる。

「……何か飲もう」

部屋を出て、なるべく足音を立てぬよう階段を下りていくと、リビングにはまだ電気がついていた。

「……」

「父さん」

静かにリビングに入って、一人椅子に座って佇んでいた父に声をかける。その恰好はまだ帰った時のままで、手には酒の入ったグラスがあった。

「……どうした？　こんな時間に」

「いや、全然眠れなくてさ」

「そうか……」

「母さんは」

「ついさっき、睡眠薬を飲ませてようやく落ち着いたところだ」

「そっか……」

俺は冷蔵庫からビールを取り出した。アルコールなんて生まれてこの方、一口だって飲んだことなどないが構うものか。プルに指を

やって、缶を開けた。炭酸の抜けていく音が、なんとなくだがうまそうに聞こえる。

「……おいおい、未成年だぞ」

いつも座る席について、ＣＭなんかでやっているように、一気に喉にビールを流し込む。それを見ていた父が少しだけ驚くように見ながらそう言った。

「――っくぅ、父さん達、よくこんなの飲めるな」

一気に飲み込んだため、３５０ミリリットルのビールは早くも半分ほどになる。

「最初は誰でもそんなものだよ。しかし、だとしても良くそこまで飲めるものだ」

「ただの見様見真似だよ」

炭酸飲料を飲んだ時特有の、ゲップを吐き出しながら、缶をテーブルに置いた。

「それに、こうでもしなきゃ眠れそうにないんだ、本気で」

「……そうだな」

そうしてお互い俯いてしまった。実際には果たして、本当にアルコールの効果で眠りにつけるのかわからない。けれど、そうせずにはいられなかった。沙弥佳からはまだ何も連絡はない。それがこんな夜更けまで酒を煽っている、父さんの理由なのだ。もちろん、だからこそ俺もそうしようと思ったのだが。

「……」

「……」

父さんは、ショットグラスに入った残りを俺がやったように、一気に飲んだ。

「……まずいな」

「何が」

聞き返す俺に父さんは、苦笑いをしながら俺が理解するにはまだ早い、と肩をすくめた。

「それよりも飲んだら寝ろ。眠れなくても、部屋を暗くして横にな

るだけでも違うから」
「ああ……」
喋ることがなくなった俺は、残りのビールを胃に流し込み、空き缶を流しに置いた。ビールは胃が重たくなると言うが、確かにそうかもしれない。そして、たった二口で一缶開けたためか、全身を巡っている血がやけに温かいように感じる気がする。
ほろ酔い気分の時というのは、心地良い眠りにつけるとも聞くが、今がそんな状態なのだろうか。意識ははっきりしているが初めてのアルコールが、眠れない身体をうまいこと寝させてくれそうな気がしながら、俺は部屋に戻っていったのだった。

部屋に注ぐ陽射しに眩しさを覚えて、目を覚ました。カーテンは中途半端に半分ほど開いており、そこから陽射しが入ってきているのだ。
俺は眩しさに目を細めながら、寝ぼけた頭で時計を探す。カツンと手に当たった時計を掴んで盤面を見ると、なんとすでに時間は十一時になろうとしているではないか。
俺は信じられずに、今度は携帯を手にとって見てみれば、『１０：５９』から『１１：００』に数字が変わった。俺の見間違いじゃないことを確認すると、ベッドを跳ね起きた。
自分で寝過ごしておきながらこんなことを言うのもなんだが、なんだって誰も起こしにこないんだ。毒つく思いで制服に着替え部屋を飛び出すと、家の中が妙な緊張感が漂ってるのに気がついた。
（なんだ……？）
下からは、聞き慣れない男の声が聞こえていたのだ。不穏に感じた俺は、無意識のうちに猫立ちのようになっていて、音を立てないように階段を下りていた。
「……それでどうされたんですか？」

リビングに入った時、中にいた背広を着た男二人が俺を見た。
「……」
なんなんだ、一体……。考えてみたところ、即座に沙弥佳のことなんだと気付いた。思えば、俺が寝坊したのだって沙弥佳に起こされなかったからなのだ。
そしてその沙弥佳は、昨晩からまだ帰ってきていない。つまり、今目の前にいる男達は警察か何かの人間ということだ。
「息子さん？」
俺を一瞥した年長の男が、ソファーに座り込んでいる母に聞いた。母は俺を見ながら頷く。
この人達は？とは聞かなかった。なぜならもう一人の年長の男と比べ、まだ歳若い方の男は去年、今井の事件の際に俺と会った男だったのだ。確か南部とかいう刑事だ。年長の男は南部という男の上司か何かなんだろう。
「ちょうどいい。君にも少し聞きたいんだが、いいかね？」
「はぁ」
頭が禿げ上がった年長の男は畠と名乗り、鋭い視線をぶつけてくる。威圧感のある視線に俺は、思わず情けない声で相槌をうっていた。
「君が最後に妹さんを見たのはいつだね？」
「……」
畠と名乗った刑事は単刀直入に聞いてきた。俺は母のいる手前、その質問にどう答えたものか悩む。というのも昨日俺は、母に沙弥佳とは会ってないと答えたのだ。
「確か……朝、あいつが俺のベッドに潜り込んできたのが最後だったと思います」
「朝？」
「明け方に良く潜り込んでくるんです。それで昨日の朝も」
畠はただ頷くだけで、それ以上は何も言ってはこなかった。最後に会ったのは違うが、嘘は言っていない。

「ふむ。それで娘さんが息子さんを迎えに行くと言って出て行ったのが最後だったと」

畠の後をついで、南部という刑事が続けた。母さんはそれにコクリと頷くだけで、何も答えようとはしなかった。母の顔を良く見れば、どことなくやつれているようにも見える。いつもの溌剌とした雰囲気は一切感じられない。ただただ茫然自失という感じだった。

「……あの刑事さん」

「何かな？」

「沙弥佳は、妹は何か事件に巻き込まれたんでしょうか……？」

「現時点ではまだ分からないが……その方面で捜査はするつもりだよ」

「……そうですか」

「ああ、沙弥佳……」

畠の言葉に俺はただ相槌をうつことしかできず、母は悲痛さを感じさせるように、両手で顔を隠してうなだれた。

「とにかく、もし何かあったら先ほどの番号にすぐに連絡をお願いします」

二人は、テーブルに置いてある紙に書かれた番号を示しながら言う。母さんはそれどころではなく、すでに心ここにあらずだった。俺は母さんの代わりに二人に頷き、その紙を手にとった。

「ここに電話すればいいんですね？」

「ああ、頼むよ。何かあったら、の話だが」

二人はそれでは失礼しますと頭を下げ、リビングを出た。うなだれて動けない母に代わって俺が二人を見送ろうとするが、畠が今はお母さんのそばにいてやりなさいという言葉を残し、見送りはせずに母さんのそばに寄る。

「うう……」

「……母さん」

俺は母の隣に座って、そっと肩に手をかける。こうして母の体に触れるのなんて、一体いつぶりだろう。

「ぅう、ぅう、ぅぅぅ……」

手を肩に置いた途端、声を押し殺すように泣き始めた母を前に驚きと困惑を隠せなかったが、俺は母さんの身体を抱きしめた。こんなことをするのは初めてだが、こうしてやるくらいしか今の俺にはできなかった。

（母さん……こんなに小さかったっけ）

ぼんやりとそんなことを考えながら俺は、いつまでも泣き続ける母さんを抱いていたのだった。

二人の刑事が家を訪ねてから、すでに三日が経っていた。いつもは気丈で溌剌とした母が、声を押し殺して泣いてみせた日、結局俺はどうせ遅刻なのだからと学校には行かず、そのままずっとそばについていた。

途中、仕事に行ってしまっている父に連絡をいれようかとも思ったが、帰ってからにしようと連絡はしなかった。夜、帰ってきた父もいつも以上に疲れているように見えたのは、決して気のせいではないだろう。

俺が起きた時すでに父さんがいなかったのは、きっと気丈に振る舞った母さんが気にしないでとでも言って、仕事に向かわせたのだろう。母の性格を考えれば、その方が納得もいくというものだ。

次の日、つまり一昨日も俺はもう学校の授業もないからと、適当に父を言いくるめて仕事に送りだした。父さんからすれば、少しは家族を思って休みにしたかったのだろうが、世間というのは自分のこと意外には関心が薄いようで、せいぜい数日ほどの休みしか取れないらしい。ならば、しばらくは俺が世話をした方が良いというものだ。

そんなことがあってすでに三日になろうとしていたこの日、家に例の刑事から連絡が入った。
「はい、もしもし」
『N市警の畠ですが……今いいですか』
「あ、どうも……あれから何か分かりましたか？」
『残念ながらまだ何も……』
「そうですか……」
この三日間、俺も沙弥佳のことが気掛かりで、あまり寝ていない。それもあってか、まだ何もないと言われるとさすがにつらいものがある。なんだかんだで、俺も疲れてきているのかもしれない。
『それで少しお話があるんですが……今回の件、公開捜査にした方がいいのではと思いまして』
「公開捜査？」
『ええ。いかんせん、妹さんの情報が集まりませんで』
「公開捜査にすると何が違うんです？」
『まず、誰々を見た、といったような情報が得やすくなる、というのが最大のメリットですな。必然的に我々としても捜索はしやすくなりますし』
「……そうですか」
畠の説明によればデメリットとして、いたずら目的の情報や、いたずらではなくても全くの見当違いな情報もあるらしく、必ずしも捜査がやりやすくなるものでもないらしい。しかし全く情報が出ない以上、公開捜査に切り替えた方が、可能性としては高くなるだろうとのことだった。
『……ただ』
「はい」
『お宅の妹さん、美人でしょう？』
「……それがどうしたんですか？」
畠の突然の言葉に嫌な予感がした。
『あまり言いたくはないんですがね……おそらく、マスコミが騒ぎ

立てると思うんですよ。美人の被害者っていうのでね、向こうの食いつきがやたらよくなってしまうんですわ』

なるほど。つまるところ、そうなると自分達の捜査の妨害になってしまうことがあるというわけだ。しかし、情報が集まらない以上、いつまでも手を拱いているわけにもいかない。人命に関わってくるのだから、市民の力を得る代わりに、そういった低俗なことも覚悟が必要ということか。

『それだけにね、一応ご家族には一報いれとかんとならんわけです。ご家族で話し合ってもらって、後日、私の方に連絡して頂けないかと思いましてね』

「……分かりました。今晩、話し合ってみます」

『はい。よろしくお願いします。それでは』

畠の言葉を最後に受話器を元の場所においた。俺は受話器をおいたまま、小さなため息を漏らす。

「公開捜査か……」

マスコミが食いつくというのは、多分夕方や昼間にやっているワイドショーか何かのようなもので、取り上げられたりするのだろう。あれで見る限り、被害者の家族達はどことなく疲弊しているように見える。連日のように取材やなんやらが押しかけて来るのかもしれない。

そう考えると、むやみに公開捜査にするのは決していいことだけではなさそうだ。しかしメリットもある以上、こうやって電話してきたのだろう。

俺は重たい気分でテーブルの席について、両手で頭を抱えている母さんのところに行った。母さんは沙弥佳が姿を消してからというもの、毎日こんな感じだ。家事が得意で、ガーデニングなんかが趣味だったはずの

母が、この数日の間はそれらに全く手をつけないでいたのだ。

「……誰？」

ひどく沈んだ声で、母さんが聞いてくる。

「警察。……捜査に全く進展が見られないって」
「そう……」
予想していたのか分からないが、母は丸っきり興味のなさそうな声で言う。声からも、明らかに精神的な疲弊を感じさせる。
「それでさ、前にきた刑事が、公開捜査に切り替えた方が良いんじゃないかって言ってきた」
「公開捜査……」
今畠から受けた説明を母にすると、目を見開き、椅子から立ち上がって突然喚き出した。
「何よそれっ。なんで初めからそうしなかったのよっ」
「落ち着きなって。公開捜査にはデメリットもあるらしいんだ」
こちらにもはっきりと分かるほど息を荒くした母を宥めながら、説明の続きを話す。デメリットとそうなった場合の状況を自分なりに予想したことを話すと、母は今度はへなへなと力が抜けていき、再び椅子に座ったのだった。
「そんな……」
「……もちろん俺の予想だし、必ずしもそうなると決まったわけじゃぁないけど、それも有り得るって話だから」
フォローはしたつもりだが、そんなのは全く聞こえていないかのように母は俯いてしまった。俺は苦い気分のまま席につき、俺の横にある沙弥佳の席をちらりと見た。
本来なら俺も春休みに入り、こうしている間に沙弥佳のやつも、この椅子に座っていたのかもしれない。そう考えた途端、また自責の念が込み上げてくる。間違いなく沙弥佳は、俺との口論であの場を去ってしまったのだ。つまりあいつがこうなってしまったのは、俺のせいであると言えるのだ。
そうなると、今こうしてひどく重い気持ちになってしまっている両親のことを考えると、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。こんなことになるなら、沙弥佳を抱くんじゃなかった。思えば、この一連の事柄全てそのことに起因している。

真紀が言っていたように、俺は自分が傷つきたくなかったからこうなってしまった。沙弥佳に嫌われたくないという一心で、結局は傷つけ、結果、俺はこうしてこんなところにいる……それが自己嫌悪に浸らせる。

「……沙弥佳」

ごめん、とは母のいる手前、口にはしなかったが代わりに母は、俺の気持ちを代弁するかのように啜り泣きはじめた。俺はただ苦い気持ちのまま母の様子を見つめ、ひたすら父が帰ってくるのを待っていた。

ぼんやりと何日も前に起こった出来事を、そんな風に思い返していた。

父が帰ってからは、三人で面を合わせて話し合った。とはいっても、ほとんど俺と父だけで進行していったのだが。

デメリットを父に話し、その上で公開捜査に切り替えようという結論に達した。ただしすぐに連絡はせず、後一日か二日待って何もなければ、というのが条件だった。

結果としては、二日待ったものの何もなく、畠に連絡をすることになったのだ。畠は特に追求することなく、分かりました、と短く答えただけだった。

それから一日と経たずに、テレビやラジオ含め、沙弥佳の失踪が全国に知られることとなった。そのあまりに速い対応は、もしかしたら向こうも、あらかじめこうなると予想していたのかもしれない。

しかしそうなると対応に追われるのはこちらも同じで、引っ切りなしに電話が鳴るようになってしまった。家の電話には当然親戚がまず始めに、次に沙弥佳の友人らが、そして俺のクラスメイト達からの電話と後を絶たなかった。

当然級友らからは携帯への着信もあって、途中からはそれら一つ一つに対応するのも、鬱陶しさすら感じるようになった。もちろん、彼らはあくまで俺を心配してくれてのことだから、あまり無下には

できなかったのも事実だったが。

けれど、そんなのはまだ良かった。知人たちからの電話がようやく一段落ついたかと思えば、どこから俺の家の番号を知ったか知らないが、マスコミからの電話が鳴るようになったのだ。

これはさすがに腹立たしかった。取材の件で、ということだったが、今家族がこんな状態では無理だと何度断っても、しつこく電話してくるのだ。そのうちに、家の前に一人また一人と、ついに報道陣が群れを為すようになっていた。

うんざりした気持ちでテレビを付けると、画面には見慣れたこの家をバックにし、俺達のことなど何も知らないくせに知ったかぶった連中が、何かを口々に言っていた。連中はまず沙弥佳の容姿を槍玉にあげ、裏を返せばまるで、あいつが美人だからこうなったのだと言わんばかりの、最低なコメントを言うような奴すらいる始末だった。

事実、あるテレビでは美少女失踪事件なんて、人が食いつきそうなテロップなんかも付けて報道していたものもあった。何日か前に電話してきた畠の言ったことが、まさしくそのまま再現されていたのだ。

怒りを覚えながら、それでも俺はテレビの画面を見続けた。この報道を見たら、もしかしたら……そんなわずかな希望を抱いてだ。

しかしそれも虚しく、捜査は何の進展もなかった。一時、報道は過熱し、営利誘拐説、事故に巻き込まれたという説、揚げ句の果てには、北や中国の工作員による誘拐説……聞いて呆れるほどの憶測が飛び交っていたが、なんの進展も見せない事件に、マスコミも徐々に飽き始めていたのだった。

そんな中、暦もとうに四月に入ってそろそろ進級し、新入生も入ろうという頃になって、ついに精神的な疲弊によって母さんが倒れた。さすがの父も、これには会社もそこそこにすっ飛んできたものだった。

医者の話では、精神的な疲労が内臓疾患を及ぼし始めているとの

ことだった。ここ何日もの間、まともに食べていなかったことを考えると、こうなってもおかしくないとも。それに母は、元から体があまり丈夫な方ではなく、そのために薬を必要とする病気を持っていたというのも多少なりとも関係あるらしい。

とりあえずは点滴を受けて、大事には至らなかったが、緊急入院することになったのだ。

俺もそんなことがあってからというもの、沙弥佳がいなくなってからずっと張り詰めていた緊張の糸が、ついに切れてしまったのか、何もかもを全くやる気がなくなってしまった。その日からというもの、もう何日も部屋に篭りっぱなしになったのだった。

俺は傾いたままの視界を起こすこともなく、再び瞼を閉じようとした時だ。

プルルルル――そんな音が下から聞こえてきた。

一度は起きようかとも思ったが、面倒に感じて居留守を決め込んだ俺は、下に行くことなく瞼を閉じたのだった。

第５４章

フラフラと、何ヶ月か前まではよく歩いていた道を歩いていた。
全く足元がおぼつかないため、それに合わせてグラグラと視界も揺れている。
今の俺の視界は、灰色だった。人も犬も猫も、車や建物全てがモノクロに見える。いや実際には、色がついているというのは理解しているが、うまく認識できないという方がいいのだろうか。とにかく、今の俺には何が何色で、何がどんな色をしている、というのが頭でうまく処理できていなかった。
そんな俺を見て道を行く人達は、皆一様にぎょっとした顔を見せている。千鳥足になっている人間がそんなに珍しいのだろうか。
通りすがりの人間などどうでも良く、俺は電車に乗り、学校へとたどり着いた。確かクラス替えはしていないはずなので、そのまま教室に行きさえすれば、後はなんとかなるだろう。教室すら、二年の頃の教室のすぐ下にあるのだ。
「……」
授業中の教室に何も言わずに入る。
突然開かれたドアから入って来た俺に、教室中から視線が集まる。その顔は通りすがりの人達のように、怪訝な顔つきだった。人の顔なんてそこまで面白いものでもないだろうに、無遠慮に見てくるクラスメイト達の顔を見れば、そそくさと視線を外した。
（……なんだっていうんだ）
教室の後ろの方にただ一カ所ある空席が、灰色の世界の中にいる俺にも確認することができた。あれが俺の席なんだろう。
「あ……九鬼、か？」
「……そうですが」
授業を担当している教師が、目を丸くしながら俺に問いかける。

その顔は級友たちと全く同質のものだった。教室中が奇異な目で見ていることを気にすることもなく、俺は空いている席まで行って椅子に座る。

「九鬼おまえ、大丈夫か……？」

「はい」

「はいっておまえ……」

そう言ったきり、その教師は何も言おうとはしなかった。俺の周りの生徒たちも同様だ。

突如として空気の変わった教室に漂う雰囲気に戸惑う生徒たちをよそに、俺はぼんやりと、黒板に書かれている文字をノートに書き写し始めた。なんとも不思議な体験だった。頭はこの上なくはっきりとしているのに、身体の方はこっちが考えているようには上手く動かせないのだ。話しかけてくる人の声もワンテンポ遅く聞こえ、映像と音のピッチがずれているような錯覚すらしてしまう。

そのうち、頭蓋の中を大きな音が響いた。一瞬なんのことか分からなかった俺は、少し遅れて、それがチャイムの音だと理解できた。それほど、今の俺の感覚はおかしくなってしまっているらしい……。

再びチャイムの音が聞こえた時、すでに授業は終わっていた。自分の感覚ではまだ一時間かそこらだと言うのに、もう何時間も経っていたのだ。

「九鬼君」

クラスの女子が呼びかけてくる。声のした方に首だけを動かして、声の主を見やる。

「あ、あの、小町先生が呼んでるって」

「……そうか」

まるで腫れ物でも扱うかのような物言いの女子に、ぶっきらぼうに言って荷物を持って職員室へ向かおうとすると、再び誰かが俺のそばによってきた。

「……九鬼くん」

青山だった。普段はなかなかのポーカーフェイスぶりを披露している青山も、今日は心配そうな顔ぶりだ。
「久しぶりだな、青山」
「う、うん。久しぶり」
「どうしたんだ？」
「うん。前に依頼された例の人物のことなんだけど……」
「ああ、そのことか……。悪いが、今はそれどころじゃぁないんだ。また別の時に頼む」
「あ、う、うん」
確かにそんなことを依頼した記憶があった。しかし今は、そんな面倒事に首を突っ込みたいと思わない。自分で依頼しておきながらこんなことを言うのもなんだが、正直、もうどうでもよかった。今の俺は自分でも驚くほどの無気力人間だし、そんなことに気を廻してなどいられない。
「すまなかったな、また聞かせてくれ」
まだ何か言いたげな青山を尻目に、俺は揺れる視界の中、職員室まで行ったのだった。

フラリと職員室に入った俺の視界に真っ先に飛び込んできたのは、三月以来、久しぶりに会う顔ぶれだった。一人は去年と同じ、クラスの担任を受け持つことになった小町ちゃんと、もう一人は俺の記憶している姿とは違って、初々しいながらもどこか大人びたような印象を受ける綾子ちゃんだった。それにもう一人。全く顔の知らない男の教師だ。
「お、来たな九鬼……って、おまえ、なんて顔してるんだ」
小町ちゃんは相変わらずの調子で挨拶してきたが、俺の顔を見るなり、途端に驚いたような表情を見せた。隣にいる綾子ちゃんも少しだけ驚いているようだが、それ以上に嬉しそうだ。
「別に。普通ですよ」
「普通っておまえ……ちゃんと鏡見てるか？」

「鏡？　……そういえば、どれくらいか前からかは知らないけど、鏡なんて見てないな」

「ちょっとこっちに来い。渡邉も」

自分の椅子に座っていた小町ちゃんは、綾子ちゃんにも着いてくるように言い、俺の手を掴んで立ち上がって職員室隣の休憩室まで連れてきた。そして、ここで顔を洗うよう言い付ける。

顔を洗うといくらかマシになった視界に、鏡に映った自分を見た。

……酷い顔だった。頬は痩せこけ、肌はガサガサになっている上、目の下には黒ずんだクマができていた。食べていないせいもあり、眼窩に窪んでいるようだった。おまけに死人のような目をしている。

とてもこれが自分の顔とは思えない。まるで、二十歳も三十歳をとったような気すらした。そう思えるほど酷い顔していたのだ。

「……」

なるほど。これならば、すれ違う人やクラスメイトらが驚くのも頷けるというものだ。うまく笑おうと口元を歪ませるが、全く笑えない。いや、顔の筋肉が強張るように硬直し、萎えてしまっているのだ。

「……少しは良くなったか」

小町ちゃんが横からタオルを渡してくれる。確かに水道蛇口の前に立つなんて、いつぶりだろう。思えば今日だって二、三日前にあった電話のおかげで、ようやく家を出てきたほどで、日付の感覚なんてまだないのだ。

「……先生、今何日？」

「ん？　ああ、今日は五月の二十八だが」

五月二十八日……あれからもう二ヶ月も経っているのか。感慨もなく、渡されたタオルで顔を水に濡れた顔を拭く。もう沙弥佳がいなくなって二ヶ月も過ぎているなんて、全くと言っていいほど実感が沸かない。俺の中では、まだ昨日の出来事のようにすら感じているのだ。

顔を洗い終え、部屋のソファーに座らされた。隣には綾子ちゃん

も一緒だ。
　背の低いテーブルを挟み、目の前には小町ちゃんが、その横に男の教諭が座る。この男はどうやら、綾子ちゃんを受け持つ担任であると同時に、沙弥佳の担任にもなるはずだった男らしい。
「さて、おまえたちを呼んだのは他でもない、九鬼の妹のことなんだが」
「はい」
「……」
　小町ちゃんは俺と綾子ちゃんを見据えながら話し始めた。内容そのものは大したことじゃない。小町ちゃんが沙弥佳が姿を消してからのこの二ヶ月、どういうことがあったかを聞くだけだった。
「それじゃ、渡邉は何も知らないんだな？」
「はい」
「九鬼は？」
　俺も首を横に振るだけだった。公開捜査にすると電話をもらってからは、母が倒れた時と、後は数度刑事が姿を見せただけで、その度に捜査に進展がないか聞きはしたが、進展は見られないということだった。
「……そうか」
　小町ちゃんだけでなく、綾子ちゃんも男性教諭も表情に影を落とす。今度は二人が綾子ちゃんに向かって何か聞いているようだったが、俺の耳には入ってこなかった。
「九鬼。九鬼っ、聞いてるか？」
「ああ……」
「……やれやれ、その様子じゃ全然聞こえてないみたいだな……」
　ため息をつく小町ちゃんが再度説明してくれた。要するに、俺にあまり引きこもるなと言いたいらしい。
「妹さんとお母さんがあんなことになって気の毒とは思う。だけどな、九鬼。それで引きこもるようになってしまったら駄目だ。余計に辛くなるだけだぞ。一人になってしまえば、いらないことまで考

えてしまうんだからな。
とにかく。今すぐにおまえに立ち直れとは言わない。こちらとしても考慮するから、九鬼もなるべく学校には来い。いいな」
「ああ……」
「……まあいい。渡邉、すまないが君も頼む」
「はい、分かりました」
話はそれで終わりのようで、俺はフラリと立ち上がり、部屋を出た。
「あ、待って。失礼します」
職員室を出たところで綾子ちゃんが追い付いた。けれど俺は綾子ちゃんに目もくれず、いくらか視界が明瞭になったとはいえ、相変わらずフラフラとした足取りで下駄箱につく。外履きに履き変えるため別々になるが、スニーカーに履き変えて校舎を出ると、すでに綾子ちゃんが外で待っていた。
「……」
何か言葉をかけようかとも思ったがなんと声をかけていいのか分からず、何も言わずに校門へと向かって歩きだした。
「ぁ……」
綾子ちゃんの小さな声を最後に、俺達の間に声が発せられることはなく、沈黙がおりる。彼女からしてみれば、色々と話したいことがあるのかもしれないが今の俺は、とてもそんな気分じゃない。できれば一人にしてほしいと言いたいところだ。
地元の駅を降り、改札を抜ける。学生ラッシュの時間ということもあり、同世代かそれよりいくらか年上の連中から、押されるように電車を降りたのだ。
綾子ちゃんは、そんな俺を転ばないように支えてくれる。
「しっかりしてください」
「……ああ」
改札を抜けた後は再び、おぼつかない足で家路につく。一刻も早く家に帰って、倒れ込みたい一心だった。というのも今日一日、途

中からではあるが学校に出てみると、実に体力が落ちていることに気が付いた。何ヶ月か前となんら変わらないはずの持ち物だと言うのに、えらく重く感じ、心臓の鼓動が速いのがなんとなくだが分かる。

だからこそ早く帰って寝てしまいたい。小町ちゃんはなるべく学校に来いと言っていたが、はっきりいって、行く気など毛頭なかった。こんなに体力が落ちているのに、行く気力など起きるはずもない。

それにしても、まさかここまで体力が落ちているなんて思いもしなかった。たかだか二ヶ月かそこらの間、家に篭っていただけだというのに。思えば半年ほど前に入院していた時ですら、ここまで体力の低下を感じはしなかった。

「危ない！」

突然背中を誰かに引き止められた。

次の瞬間、目の前をダンプカーが通り過ぎていく。

「九鬼さん、前をもっとしっかり見て。今赤なんですよ」

横で綾子ちゃんが叫ぶように言い、俺は適当に頷いてその場に立ち尽くす。どうやら彼女が俺を引き止めてくれたらしい。そしてここは交差点で、車の往来が激しい場所だった。

普段なら、車に轢かれそうになれば冷や汗のひとつもかくものなんだろうが、全くそんな気ひとつなかった。

周りの人々が交差点を渡り始める。それを確認し、俺も真似をするように歩き出した。横には綾子ちゃんが支てえくれている。

「九鬼さん、しっかり」

道中、幾度となくふらつきながら、ようやく家に辿り着いた。こんなにふらついているのに、行きはよくぞ事故にあわずに学校まで辿りつけたものだ。

妙な感心をしつつ、鍵を取り出して鍵穴に差し込もうとするが、うまく鍵が入らなかった。それを見ていた綾子ちゃんは、俺から鍵を取って、代わりに開けてくれる。

「ほら、つきましたよ」
「ああ」
靴を脱ぎ捨てリビングに入るやいなや、ソファーに俯せになって倒れこんだ。
「何これ……」
頭上で綾子ちゃんの声がする。ソファーに顔を埋めていた俺も、顔を横にして部屋を見た。
綾子ちゃんが驚くのも無理はない。空いたカップ麺の容器や、使いっぱなしになったままの皿などの食器類が乱雑にテーブルに置かれており、部屋は当たり前のように埃っぽくなっているのだ。掃除なんてもう何週間もしていないだろう。
「……こんなところで何週間も過ごしてたんですか」
綾子ちゃんが一人つぶやいた。久しぶりに家の外に出て帰ってみると、確かに部屋が汚くなっているのがよく分かる。こうなる以前のうちを知っているなら、とても同じ部屋とは思えないだろう。俺とてそう思えるのだ。
しかし、そうだとしても動く気になどなれない。人が住んでいようといまいと、どうせ掃除をしたって汚れていくなら、放っておいたって構いはしない。きっと父もそんなことを考えていたのだと思う。
そう考えると、なんだかんだで父もかなり参っているのかもしれない。そもそも、俺はほとんど食事をとってないし、大部分は父の食べた後だ。
「……私、片付けます」
「……したいなら好きにすればいい」
そう言ったきり、俺は再び顔をソファーに埋めた。綾子ちゃんも綾子ちゃんで、それを合図に部屋を出ていった。きっとゴミ袋や道具を取りに行ったのだ。どうも、本気で掃除をする気らしい。
カサカサとビニールの擦れる音や、その袋の中に色々な物が放り込まれていく音を聞きいているうちに、俺はだんだんと眠りに落ち

ていったのだった。

夢を見た。

夢の中でただ一人、俺しか観客のいない映画館で一方的に流される映像を見ている……そんな夢だった。

映し出される映像は昔の映画のように白黒で音がなく、映像の中で、妹である沙弥佳がどこともしれない場所に繋がれて、何かに脅えている、そんな映像だった。

脅えている顔は俺の知っている沙弥佳と比べ、随分とやつれてしまっているように見える。それに、恰好も白い布切れ一枚だけで、それも所々黒ずんでいるのも分かった。その様はまるで、人に飼われ、人として扱われていないようにも思える。

沙弥佳が何か叫ぶように顔を歪め、足をばたつかせている。恐怖や嫌悪感を滲ませた顔だった。

直後に沙弥佳の前に一つの影が現れ、その影が沙弥佳の髪を引っ張りあげる。影の顔は見えない。見えないが、毛むくじゃらの大きな手で、影が男であることだけは理解できた。

男によって立ち上がらされた沙弥佳は、そのままどこかに連れ去られてしまった。すると、そこでシーンが切り替わる。画面が黒くなり、次に映し出されたのはどこかの実験室か何かのようだった。

台の上に寝かされている沙弥佳は、白衣を着た男が注射器で中の液体を注入するべく、腕に針を突き立てていた。

沙弥佳は先ほどのボロ切れではなく、いかにも実験されているというのが分かるような、白っぽい服を着せられている。そのうえ、台に寝かされている沙弥佳は気を失っているのか、目を閉じたままピクリともせずに、ただされるがままだ。

『……』
『……』
その様子を見ていた白衣の男達が、注射した男に向かって何か話しかけている。男は、この実験か何かのリーダーのようなものなのかもしれない。
『……』
男が周りの奴らに何かを言おうとした時、沙弥佳がいきなり叫ぶように目を覚まし、肢体をしならせながらビクビクと震わせている。
痛みがあるのか、とてもあの沙弥佳とは思えないほどの形相で絶叫している。震わせていた手足を、そのままめちゃくちゃに動かして虚空をかき、台を壊れるのではないかと思えるほど強く蹴る。
周りの男達が、狼狽しながらも暴れる沙弥佳の手足を押さえた。例の男の指示だ。しかし、それでも男達は暴れる沙弥佳の体を押さえられなかった。
華奢とは言わないまでもどこにそんな力があるのか、研究者とはいえ、大の男を両腕たったの一振りで吹っ飛ばしたのだ。足を押さえている男達はなおのことだった。
なおも四肢を暴れさせ、もがき苦しんでいる沙弥佳に俺はどこか遠い出来事のことで、これが妹であるということにすら感慨が沸かずにそれを見ていた。
しかしそれも長くは続かず、不意に沙弥佳はもがくのを止めた。最後に天に向かって手を思いきり伸ばし、何かを求めるように、何かを掴むかのようにして見せた後、事切れたかみたいに気を失ったのだった。
映像はそこで途切れ、夢の中の俺は、どういうわけか漠然とこれで終わりなのだと知っていた。
しかし、再び映像が映し出されると、口元が現れた。音がないので分かるわけはないのに、その口が困惑げに何かを言っているのが、なぜだか理解できたのだ。
「ん……」

身体を揺すられる感覚に、意識が覚醒していく。誰かに起こされている感覚だ。

久しぶりの感覚に、懐かしいとも嬉しいとも取れる気持ちが芽生え、目を覚まそうとした。

「……さやか……？」

うっすらと目を開けると逆光でうまく見えなかったが、鼻孔をどこかで嗅いだことがある甘い匂いがくすぐった。この匂いは確かに記憶にある。しかしどこで嗅いだのか。この匂いをさせていたのは誰だったか……。

「……君は、綾子ちゃんか？」

瞬きしながら逆光に眩しい目を手でかざしながら目の前の人物を見れば、綾子ちゃんがいた。

「おはようございます。朝ご飯、出来てますよ」

「朝ご飯……？」

訳の分からない俺に、彼女は早く起きてと催促するように南側のカーテンを開けると、さらに部屋の中が明るくなった。

「んっ……」

さすがに眩しさで目が慣れるまで少しかかったが、一度目が覚めると大したことはない。

「どうしました？　早く起きないと遅刻しちゃいますよ」

「ああ」

俺は頷きながらベッドから這い出て、すでに用意されていた制服を手にとった。

「それじゃ、下で待ってます」

簡潔に言って、綾子ちゃんは部屋を出て行った。金城高校の制服に身を包み、母さんがつけていたエプロンを身につけた綾子ちゃん。この光景にも、いつの間にかすっかり馴染んでしまっていた。きっかけは五月の終わり頃、唐突に電話がかかってきたことから始まる。世間ではゴールデンウイークも終わり、とっくに五月病を抜け出している頃だ。

その頃俺は、いや、俺達家族は、三月にあった沙弥佳の失踪というショッキングな事件に心神共にやつれさせながらも、なんとか頑張ってはいたのだが、ついに母さんが耐え切れなくなって倒れてしまった。それが四月の半ば頃だった。

その頃周辺では、沙弥佳の失踪を知ってどこから嗅ぎ付けたのか、マスコミの連中がとっかえひっかえになって家の前を囲んでいたのだ。沙弥佳の容姿もあってか、美少女失踪事件なんていう、なんともありがたい見出しまでつけてくれていた。

一日で何件もインタビューさせてくれという電話や、こんなことになることを覚悟してまで公開捜査に乗り出したにも関わらず、いつまで経っても何の進展も見せない捜査。おまけに、何日もまともに眠ることのない状況になっていたためだった。

それらが重なり、俺の前で突然意識を失ったのだ。パニックになりながらも救急車を呼び、父に連絡をとった。幸いにも、前に俺が入院した病院に搬送され、その日かかりつけの医者が偶然にも俺の時と同じ医者だった。的確な指示と処置で大事には至らなかったものの、意識不明の重体ということで、一時は面会謝絶にもなったのだ。

しかし、問題はここからだった。

こうなるまで知らなかったことだが、母は免疫器官の疾患を抱えていたらしく、精神的な疲労が肉体的に最も弱い、この部分にダメージがいってしまっていたのだという。今まで月に一度か二度、病院に通っていたのは知ってはいたが、まさかそこまで重いものだなんて知らなかった。思えば沙弥佳がいなくなってからというもの、病院には行っていなかったはずだ。

第一、処方されていた薬だって、その器官に対してのものであり、精神的なものからくるものに対してのものではない。だからこうなってしまったのだ。

そんなことがあってからは、母は日に日に体力を奪われていった。意識が戻らず、ずっと寝たきりなのだ。それも無理はない。

しかし母さんがそうなると、今度は俺達だった。父が有給休暇を取り、母に付きっきりになった。それでも三日かそこらに一度はうちに帰ってきていたが。

俺も母の入院をきっかけに、ついぞ緊張の糸が切れてしまったらしい。精神的においやられ、家事も手付かずだった母の代わりに家事をこなし、かかってくる電話の対応や、顔色が良くなかった母を気遣っているうちに学校が始まった。もちろん行くつもりもあるにはあったが、絶望に打ちひしがれている母を見ると、とてもそんな気にはなれなかった。

その母が、逆に俺を気遣って学校に送り出そうとした日、倒れてしまったのだ。一人、広い家に残された俺はここにきてようやく、沙弥佳がいなくなってしまったというのを強く実感した。

大きすぎる喪失感は時に、その時にはうまく事実を把握できずに時間を置いてやってくることがあるというが、その通りだった。母の代わりに家のことを切り盛りすることで、俺はそのことから逃げていただけだったのだろう。

結局、大きな喪失感は俺を襲い、あいつへのやり切れない思いが込み上げてきたのだ。そして気付けば、もう一月半も経っていたのだ。

何を話しかけても反応しない俺に、さすがの父も心配したようで、ついに業を煮やしたのか、綾子ちゃんに連絡を入れたらしい。自分で駄目なら仲の良い女の子なら……そう考えてのことだろう。

そして父の目論みは見事に的中し、俺は一ヶ月以上に渡る引きこもり生活から抜け出した。最初は電話がきても出なかったが、何度もしつこく電話を鳴らされたため、仕方なく電話に出たのだ。かけてきた主が彼女だと分かっても、全く何とも思わなかった。沙弥佳がいなくなったあの日、あんな別れ方をしたにも関わらず。

学校に行きましょうという簡潔な内容の電話だったが、俺は適当に相槌を打つだけで学校に行くことはなかった。それでも次の日も、また次の日も電話をかけてきた綾子ちゃんは、ついに家まで押しか

けてきたのだ。
鍵はかけてあるはずだが、父の持つキーホルダーが制服のポケットに入り切れてなかったのを見ると、それが父の鍵で、なんらかの形で父からの口添えがあったのは間違いなかっただろう。
三月以来に顔を合わせた綾子ちゃんは、俺を見るなり、奇怪な生物を見たかのように目を細めたのが印象的だった。
学校に行くようにと、その熱意にほだされたのか俺は、ようやく学校に二ヶ月以上ぶりの登校をすることになったのだ。もちろん、始めは綾子ちゃんも一緒に行くと言って聞かなかった。
しかし、少なくとも自分より優等生の彼女に、俺のために遅刻させられないと先に学校へ行かせた。後で必ず学校へ行くと約束して。
約束した手前、のろのろと、久しぶりに制服の袖に腕を通して家を出た時には、午前十一時を過ぎており、いつもなら三十分とかからない道のりに、一時間近い時間がかかっていた。
それと、四月頃はあれだけいたマスコミ連中も、その頃には誰ひとりいなくなっていた。後に知ったことだが、この頃には他の大きな事件のせいもあり、新しい情報のない事件に連中は飽きていたらしい。世間なんてそんなものだと、改めて思い知らされたものだった。

下に降りた俺は、そのままリビングの隣にある洗面所で顔を洗った。暦はすでに、しつこい残暑の残った九月を終え、十月に入っていた。
「おはようございます」
「ああ、おはよう」
顔を洗い終えてリビングに戻った俺に、綾子ちゃんが朝の挨拶をしてきた。
五月以来、ずっと続いている関係。そして新しい日常。朝になれば綾子ちゃんが朝食を作って俺を起こしにくる……これが俺にとっての新しく始まった日常だった。

俺にとってそうであるように、綾子ちゃんにとってもまた新しい日常だ。いうならばこの状況は、通い妻と言っても過言ではないものなのだ。

高校生になってまだ一年と経っていない彼女に、最近は申し訳ないという気持ちが出てきた一方で、彼女ともっといたいという気持ちもあるのも事実で、もう来なくて良いと言うタイミングを失ってしまっていた。

それでもいい加減、彼女も迷惑であるかもしれないし、いつまでも好意に甘えているわけにもいかない。そろそろ切り出してみるのもいいだろう。

「さ、席に着いてください」

「ああ。ところで綾子ちゃん」

座るように促されながら、俺は切り出した。

「なんですか？」

綾子ちゃんは今出来上がったばかりみそ汁をお椀につぎ、俺の前に置いた。

「まぁなんだ。もうこういうこと、しなくてもいいんだぞ？」

「え？」

「だから、こうして毎朝俺を起こしにきたり、わざわざ朝だって作ってくれてる、そういうことをだよ。もうこんなことしなくてもいいんだ」

別に強く言ったわけじゃない。だというのに綾子ちゃんは、何か信じられないとでも言った表情を見せたあと、みるみる悲しげな顔になっていった。

「なんでいきなりそんなこと……九鬼さんは嫌なんですか？」

「あ、いや……嫌ってわけじゃぁないが、ただいつまでも君の好意に甘えてばかりなのは、迷惑かなと思ってな……」

「私、全然そんなこと思ってません。初めこそ、おじ様に頼まれて始めたことですけど、今はみじんも迷惑だなんて思ってないです。私自身、この生活が気に入ってるんですから」

芯が強く、言う時は言う彼女のことだから、そう言うのであればそうなんだろう。

事実、この生活を始めるようになって、綾子ちゃんの顔が前にも増して明るくなったように感じるのは、そういうことなのだと思える。しかしそれでも、こちらとしてもどうしても遠慮というのが先立ってしまい、素直にそれを受け止められないでいるのだ。

「とにかく。私はやっと、自分のできることが見つけるができたんです。できることなら、まだしばらくこうさせてもらえませんか？

……でももし、九鬼さんが迷惑だって思ってるなら止めます」

「迷惑だなんて、そんなこと思ってないよ。むしろ嬉しいくらいだ」

「そうですか。なら良かった」

半ばまくし立てるような剣幕だった綾子ちゃんは、俺の言葉を聞いてホッとした表情を見せる。心底安堵した、そんな顔だ。

「それじゃあ朝ご飯、いただきましょう？」

「……ああ、そうだな」

朝っぱらからこんなことを言ったあげく、結局はまたいつも通りになってしまったことに照れ隠しに鼻頭をこすり、俺は勢い良くかきこむように朝食を食べ始めた。

朝食も食べ終え、歯を磨いたらいつものように登校する。横にはいつものように綾子ちゃんがついている。

彼女が今日ある学校の予定や、最近あった出来事を彼女なりに面白おかしく話してくれている。俺もそれに話を合わせながらの登校だ。それは一年前までの光景そのものだった。

ただあの頃は、横にいて話をしていたのは綾子ちゃんではなく、妹だった。今朝あんな話題をしたせいだろうか、ふとそんなことを思い出した。

あの頃は学校に行く限り、これがずっと続いていくのだろうと、

勝手に信じて疑っていなかった。それがまさか、一年たった今こんなことになってしまっているなんて、考えもしなかった。

「それで今日は――」

思えばもう十月。笑顔で話をする綾子ちゃんと会ったのも、思えば去年の今くらいだった。沙弥佳の紹介で、今付き纏われているストーカー話を切り出されてからの付き合いだ。

第一印象は、綺麗な子だがおとなしく、やや陰気な雰囲気を持った子だと思ったものだったが、付き合っていくうちに、それは間違いで、実際には控えめながらも良く笑い、しっかりと自分を持った芯の強い子なんだと気付いた。あくまであの時は、ストーカーに悩まされていたからだったのだと思えるようにもなった。

俺はそんな綾子ちゃんを傷つけたというのに、彼女はそんなことなどとうに忘れてしまっているかのように……いやむしろ、無かったことにしているのかと思えるほど俺に良くしてくれている。

今現在、俺がこうしてなんとか人並みに生活できるくらいまでに回復したのだって、間違いなく綾子ちゃんのおかげだ。仮定の話なんて意味はないかもしれないが、もし彼女がいなければ、きっと俺はまだ家に引きこもっていたことだろう。

だというのに俺は、綾子ちゃんをあいつに見立ててしまう。朝俺を起こしに来て、朝食まで作ってくれている。その後、こうして横について学校まで一緒に行くということに、どうしても沙弥佳とダブって見えて仕方なかった。

綾子ちゃんに対して失礼だとは思う。彼女と妹は全く別の人間なのだから、そんな風に見てしまうのは間違いだと分かってはいても、どうしてもそう見てしまっている自分がいるのだ。

だからこそ、さっきだってもう来なくても良いと言ったのだが、結局は流されるがままいつも通りになってしまった。また明日も綾子ちゃんは家に来ることだろう。

それでいながら、この心地良い関係に完全なまでに依存してしまっているのだ、俺は。

「九鬼さんっ」
「えっ？」
「もう。また何か考えこんでましたね？　一人で考えすぎるとすぐ老けちゃいますよ？」
「なんだそりゃ」
下から、眉を八の字にしながら覗きこむ綾子ちゃんに、苦笑気味に笑った。彼女は全く話を聞いていなかった俺に、ちゃんとしてくださいと言いながら、また話を始める。
「それにしても、今更こんなことを言うのもなんですけど、九鬼さん、大分元気になってきましたよね」
「そうかな？」
「はい。一時は本当に酷かったですから」
春頃のことを言っているのだろうが、自分がそう思えなくても、他人から見れば相当酷かったのだろう。当の本人は、全くそのように思ってもいなかったのだから不思議なものだ。
「前のようにとは言いませんけど、私も元気になってくれたらやっぱり嬉しいですし」
「君にはほんと、迷惑かけてると思ってる。……ありがとうな」
「良いんですよ。さっきも言ったけど、私が好きでやってることだから」
先を何か言おうとした綾子ちゃんは、はたと、喋るのをやめたかと思うと突然手を口にやって、くすくすと笑いだした。
「どうしたんだ、突然」
「いえ、なんか逆だなって」
「逆？」
「はい。だってまだ知り合って間もない頃は、いつも私が謝ってばかりで、その都度九鬼さん、そうじゃないって言ってくれてたのを思い出したんですよ」
「あー……言われてみれば、そんなこともあったっけか」
「ありましたよ」

思い返してみれば確かにそうだった。去年の綾子ちゃんは、どことなく俺に遠慮していたように思う。きっと、今の俺のような気持ちだったのかもしれない。そして、今は彼女がその時の俺のような気持ちになっているのだ。

「……今なら、あの時の君の気持ちが良く分かるみたいだ」

「ふふ。私も今ならあの時の九鬼さんの気持ち、分かりますよ」

「だろうな」

互いに笑いながら、穏やかな時間を楽しむ。

一年前までは誰かとこうすることが、こんなにも良いものだと思いもしていなかった。自分の隣にいて、にこやかに話しかけてくれる存在が、こんなにもありがたいことだったなんて考えたこともない。

（もしこれがあいつだったら……）

楽しそうに話かけてくれている綾子ちゃんに、一瞬、沙弥佳の姿がダブって見えた。

『これでまた、今年からお兄ちゃんと一緒だね』

四月なら、きっとこんな言葉の一つも言ってきただろう。

『明日から夏休みだね、お兄ちゃん。プールか海に行かない？』

これも夏休み目前になれば、一度は言ったに違いない台詞だ。

『そう言えば来月の文化祭、お兄ちゃんのクラス、何するの？』

先週発表された文化祭の出し物についてなら、こう言ってきたに違いない。

あいつも着るはずだった金城の制服を着て横を歩く綾子ちゃんに、俺はどうしても沙弥佳の面影を求めてしまう。

この時俺は、ふとこんなことを考えてしまった。俺はもしかして、綾子ちゃんに対して、”恋人としての綾子ちゃん”ではなく、”妹と同じような部分を持った綾子ちゃん”を見ているのではないか。

そんな考えが浮かんだのだ。

現に俺達の間には、暗黙の了解とでもいうのか、沙弥佳の話題は一切あがらない。俺も綾子ちゃんも、あの時以来、一度だって沙弥

佳の名をお互いの前で口にしたことがない。いや、口にできないというのが本当のところだった。

俺の中にある罪悪感がそうさせているのか、それとも別の何かがさせているのかは分からない。だが俺は、綾子ちゃんの前では意識的に沙弥佳の名を口にしないようにしていたのだ。

綾子ちゃんからしても似たようなものだろう。あんなことがあったその日を最後に、一番の親友を失ったとなれば、後味の悪いものであることは間違いないのだ。

「あ、少し急ぎましょう。電車、来ちゃう」

「そんな時間か。そうだな、急ごう」

女の子らしい、革のベルトをした小さな腕時計を見ながら綾子ちゃんが言い、それに頷いた。

まるで俺をリードするように駆け足で駅に向かう彼女の背中を、俺は申し訳ない気持ちで見つめる。俺が春のことを引きずっていることを間違いなく気付いているだろう綾子ちゃんは、なるべく落ち込まないようにと、こうして毎日明るく話しかけてくれている。

その好意と優しさに依存しながら俺は、綾子ちゃんの中に、第二の妹の姿を見出だしていたのかもしれない。

第５５章

十月の学校行事と言えば中間考査があり、そして文化祭だ。学校によって前後したりはするだろうが、まあ、大体そんなものだろう。うちの場合は、中間考査が終わって二週間で文化祭がある。

普段は不真面目な奴も、この時ばかりはいやに協力的だったり、見たまま不真面目だったり、もしくは真面目なままのやつというように見せる顔は様々だが、皆何かしら普段とはテンションが違っているのは間違いない。

すでに今週末に迫った文化祭に向け、授業は午前中までとなり、午後からは準備に追われることになる。特に、今日を含めて後三日しかない今、皆いつも以上にピリピリとした緊張感を漂わせていた。

そんな中俺はというと、普段とほとんど変わらないテンションで文化祭に臨もうとしていた。かといって、別に準備に不真面目というわけでもない。人にあれをしてと言われたらやる、そんな程度だ。それ以外ではただ人のしているのをぼんやりと眺め、言われるのを待っているという状態だった。

今年はクラス替えをしなかったこともあり、去年とクラスメイトが変わっていない。そのためクラス全員が俺の事情を知っているのだ。春休み以前とは、明らかに違う俺に対して皆一線引いているといった印象を受ける。

俺としては格段そんなことを望んでもいないが、むやみやたらに同情の言葉をかけられるよりは良い。

胸の内にそう秘めてはいるだろうが、そんなことをなるべく言わず、普通に話しかけてくれるクラスメイトもわずかにいるが、どうにもギクシャクとした態度になってしまっているのは、この際触れないでおこう。俺だって、そいつは仕方のないことだとは思っているのだ。

けれど、俺はこの学校という空間が好きだった。というのも、学校にいる間は全ての時間とまではいかないが、家族のことを考えないでいることができる唯一の時間といっても良いからである。

しかし、どうしても考えたくもないのに沙弥佳のことが脳裏に思い浮かんでくる時間というのがあるのだ。決まってそれを思い起こしてしまう時間が、こういった皆の雰囲気が違った時だった。

あんなことがなければ、きっと今頃はあいつもクラスの出し物の準備に追われているんだろうかとか、あいつのことだからきっと、授業が終われば毎日のように俺を迎えにきてたんだろうかと、そんなことばかり考えてしまう。中学の時だって、機嫌が悪い日であっても教室の前で待っていたやつだったのだ。

「九鬼くん。悪いけどこれ、捨ててきてくれない？　これごと燃やしちゃって良いから」

ぼんやりとしていたところ、クラスの女子がゴミを捨ててくれと、ダンボールに入った紙クズを指差した。

「了解」

一つ返事で頷き、ダンボールを持ち上げて焼却炉へと向かう。焼却炉は校舎の裏になるため、今の教室からは少し離れている。

教室を出て焼却炉に途中、随分と久しぶりに斑鳩が話しかけてきた。クラスにはいなかったし、準備には参加せずに、どこかで暇を潰していたようだ。

「よー九鬼」

「斑鳩か」

「そ。皆のアイドル斑鳩だよ」

「……自分で言うなよ」

相も変わらず軽い奴だと、俺はため息を漏らす。

「まあ、細かいことはいいじゃん。で、今何してんの？」

「見ての通り、ゴミ捨てに行くところだ」

「ふーん。なら、おれも一緒に行こうかな」

「なんでだよ……。何が悲しくて、野郎二人で焼却炉まで行かない

とならないんだ」「まあまあ。そんなつれないこと言わずにさ」
斑鳩を無視するように俺は歩きだしたが、やつはこんな調子の俺のことなどお構いなしに着いてきた。校舎裏の昇降口を出ると、中とは打って変わって途端に人がいなくなる。当然と言えば当然だ。誰だって、こんな寒々しい場所になんかわざわざ来る奴はいないだろう。
俺はダンボールを置き、中の紙クズなんかを小分けしながら焼却炉の中に放り込んでいく。
「ところでさ九鬼」
「なんだ？」
「おまえってさ、春に随分落ち込んでたじゃん。妹がいなくなるってだけで、あんなに落ち込むほどなん？」
「なに？」
ダンボールの中身を全て放り込み、後はダンボール本体だけとなった時、斑鳩は前置きもなしにいつもの軽い口調で言ってきた。
「だからさ、おまえ春休み明けてからしばらく学校こなかったじゃん？　妹いなくなったからって、そんなになるもんなん？」
「知るか、そんなこと。別に俺だってなりたくてなったんじゃないっ」
衝動的にこいつをぶちのめしたくなるが、ぐっと堪え斑鳩を睨みつける。なんだってこいつはこんなことを言うんだ。
「ふーん。ま、いっけどさ。じゃあさ、一つ気になったんだけど、おまえってさあ……」
あえて一拍置くこの男の話し方は、妙に俺を苛立たせる。しかも、流し見る目は何か含みを感じさせてならない。
「なんだ。何が言いたい？」
「いやさ、意外と女に飢えてんのかなと思ってさ」
「何？　俺が？」
「そ。毎日、あんなに可愛い子連れて学校に来てるし」
「別にいいだろう、そんなの人の勝手だ」

「それに」
今まで含みを感じさせるにやけ面だった斑鳩は、途端に真面目な顔になった。
「おまえ、綾子ちゃんだっけ？　あの子のこと利用してるだけだろ」
「……」
図星だった。確かにそうだ。確かに俺があの子の優しさに甘えているのはまぎれもない事実であり、ある意味で利用しているというのも否定はできなかった。
「俺、曲がりなりにも中坊の頃から色んな女の子と付き合ってきたけどさぁ、九鬼の綾子ちゃんに対して見る目がなんか違うって感じるんだよね～」
こいつはいつも、なんでこうもこうタイミングが良すぎるんだ。まるでいつも俺を見てきているような……。
そこでふと、この男に関して疑問が浮かんだ。こいつのタイミングの良さ……それに去年から今年の始め頃にあった、挙動の読めない行動……。
「……斑鳩。おまえ、一体何を知ってる？」
「なにが？」
「とぼけるなっ。お前、何か隠してるだろう。
前々からお前の行動には不審と思えることがあった。一体何を隠してるんだっ」
斑鳩は驚いたような顔をした後、目を細めていった。
「九鬼……おまえ、何言ってるのかさっぱり分からないんだけど」
「やかましいっ。今年の正月に会ったのは覚えてるだろう。あの時お前、あの黒い車の中で何をしてたんだっ」
斑鳩に一歩詰め寄って、俺は喚きたてた。すると今度は斑鳩が押し黙る番だった。その端整な目を逸らし、苦い顔になる。
「図星みたいだな。言え。なんだっていきなり妹の話をする？　もしかしてお前と何か関係があるんじゃないのか？」
俺は、斑鳩の胸元を掴むような勢いでさらに詰め寄る。

斑鳩は始めこそ苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、その顔からふっと力が抜け、再び人を小ばかにしたようなにやけ面に変わった。

「おいおい、何を言い出すかと思えば……。ま、正直、正月の時の話を言えば、まさか見られてるなんて思わなかったよ。

だけどな九鬼。かと言って、それとおまえの妹の話、どこがどう繋がるっての？　その根拠は？」

「根拠だと？　そんなのはない。だがな、あの時見た車と同じ車が、縁日の会場にぶち込んだんだ。あれは決して見間違いなんかじゃぁない。俺はこの目で確かに見たんだ」

「やれやれ。話にならないな……。九鬼、良く聞けよ？　仮にだ、その車が九鬼の言う通り、ぶち込んだ車と同じ車だとしよう。だとして、その車が俺の乗ったものと同じとは限らないだろ？

この話と沙弥佳ちゃんの話、なんの脈絡もないじゃん」

「それは……」

斑鳩の言う通りだった。車の話と妹の失踪、どこにも関係がない。だが俺は、少しの間ではあったが苦い顔をしたこの男に対して、もしやと思ったのだ。確かに言っていることは間違いないが、どうしても、それとこれを切り離して考えることができない。

正確に言うならば、車の件に関して言えば、直接沙弥佳が関係あるとは思わない。しかし、何をしていたのかは知らないが斑鳩の乗った車と、あの縁日での車……あれは同じものとしか思えない。

つまり、何ヶ月か前に俺を取り巻いていた状況とそれらは、どこかで繋がっているのでは。俺はそう結論づけたのだ。なにより、こいつの言うことには、たとえ正論であっても鵜呑みにすることができないというのもある。

「……信じられないって顔だな」

斑鳩はやれやれとでも言わんばかりに肩をすくめ、ため息を吐いた。

「当たり前だ。そんなの信じられるわけがない」

「はあ。九鬼ってさぁ、おれのことなんでそんなに嫌ってるわけ？
おれ、別におまえに何かしたことなくない？」
「そうかもな。だがな、俺はお前の言葉には今ひとつ信憑性を持てない。だからだ」
「うわ。それ、めちゃ酷くねぇ……」
冗談だと思っているのか、斑鳩はおどけながら、くしゃりと顔を歪める。
普通の女なら、こいつのこういった三枚目なキャラクターに意外性を感じて、仲良くなるのかもしれない。しかし俺には、そんなものはただの演技にしか見えない。一度疑ってしまうと、とたんになにもかもが嘘っぽく見えてしまう。
「大体、妹がいなくなったついでに親が倒れたからって、その苛々を俺にぶつけないでほしいもんだよ、全く。そんなに家族が大切なのかよ」
この男との押し問答はもうごめんだと踵を返そうとした時、斑鳩が小さな声でそうぽつりとつぶやいた。
「何……？」
「あれ、聞こえてた？」
こいつには聞こえない程度の小声だったのかもしれないが、俺の耳にははっきりと聞こえた。
「今なんて言ったおまえ」
「あらら、聞こえちゃったみたいだな。悪かったよ」
斑鳩はいつものにやけ面で謝るが、そんな軽い態度で言われたってムカつくだけだ。今までもこいつの軽口には目をつぶってきたが、今回はもう我慢できそうにない。
「お、もうブチ切れる寸前って顔だな」
怒る俺を前にしてもこいつは全く動揺することなく、いつものように飄々とした態度と口調でニヤリと笑う。こいつは俺を挑発しているのだろうか……冷静な部分が落ち着けと怒る俺を宥めようとするが、もう限界だった。

俺は固く拳を握り、無意識に一歩だけ足を後ろにやる。一瞬何をしたのか分からなさそうな顔をした斑鳩に構うことなく、俺は腰からねじって拳を斑鳩の腹めがけ叩き込む。

「ぐっ」

何をしたのか、いや、されたのか理解できない。口から肺に溜まっていた空気が洩れていく。このにやけ野郎にボディブローをかますはずが、俺の腹になぜかこの野郎の膝がぶち当たっていたのだ。

おまけにこっちの拳は、奴の手によって受け止められていた。

「ひゅう、危なっかしいな。後一瞬遅かったら、こっちがやばかった」

「や、野郎……」

「九鬼、攻撃が分かりやすすぎ。こんなんでおれに喧嘩売るなんて十年早いよ」

斑鳩は今までのにやけ面から一転し、文字通り、冷ややかな眼で俺を見下している。片膝をつきそうになるのをなんとか堪えながら、俺は斑鳩を睨みつける。

しかし次の瞬間、顔に衝撃があった。それを理解した時には、すでに地面に倒伏していた。

「ぐ、ぁっ」

「調子乗りすぎ」

奴が冷たく言い放つ。

力を入れて立ち上がろうとするが、全く力が入らない。それどころかだんだんと意識が遠のき始めている。顎に強く痛みを感じるということは、顎に良いのをもらってしまったらしい。

「ちょっと体力に自信があるからって……」

野郎が何か言っている。

しかし途中からはうまく聞き取ることができずになっていたが、それでも俺にとって、奴が何かとても重要なことを言ったということだけはなぜか理解できていた。

暗闇から一筋の光りが射した。様々な薬品の混じったような臭いが、俺を不快な気分にさせる。
「ここは……」
「九鬼さんっ」
突然、すぐ横で声がする。聞き慣れた声で、もちろん、声の主が誰かなんて言うまでもない。
「大丈夫ですかっ？」
「綾子ちゃん……」
目の前に彼女の顔が現れた。その表情は心配そうなものから、安堵に変わったようだった。
「ここは……。俺はどうしたんだ？」
「ここは保健室です。九鬼さん、焼却炉の前で倒れてたんですよ？」
「焼却炉」
説明を聞いて、混乱していた頭に自分がぶち倒された時のことが、ありありと思い出されてきた。
「そうだ斑鳩だ、あの野郎」
俺は寝かされていたベッドを勢い良く跳ね起きた。綾子ちゃんはぶつからないよう、驚きながら横にどく。
そうだった。俺は奴によってぶち倒され、おかげでこの様なのだ。
「うっ」
勢い良く上体を起こしたせいか、くらりとする。いや、そうじゃない。起きてみると顎にずくずくと鈍い痛みがあり、頭の中が揺れているような気分になる。
「九鬼さん、落ち着いてください。まだ無理しないで」
綾子ちゃんは俺の肩と背中に手をやって、心配そうな顔を向ける。多分、軽い脳震盪というやつなんだろうが、初めて味わった感覚に俺は思わず額に右手をやった。
「でも一体どうしたんですか、焼却炉の前で倒れるなんて」

「……」

語りかけてくる綾子ちゃんに、素直に真実を伝えるべきだろうか。正直にいえば、殴られたためにこうなっただなんて、あまり言いたくはない。そんなことをすれば、ただでさえ世話をかけさせているというのに、また余計な心配をさせてしまう。

「ちゃんと言ってくれなきゃ分かりません。それにその顎の痣」

言われてはっとした。そうか、話さずにしろ嘘をつくにしろ、こいつのおかげでどのみち関係ないということか……。俺はため息をついて、窓の外に視線をやった。とてもじゃないが、目を合わせて話せる気分にはなれない。

「隠すつもりだったけど……意味ないみたいだな。顎、そんなに酷くなってるか？」

自分で鈍痛のする顎をさすりながら問いかけた。綾子ちゃんは、短くはいと答え、俺が話し出すのを待っている。

「そうか。まぁ、単刀直入に言うと殴られた」

「え？」

「だから殴られちまったんだよ、斑鳩の野郎に。良いのをもらったんだろうな、顎に当たってに気を失っちまったってわけさ」

「そんな……」

驚く綾子ちゃんを尻目に、自嘲気味に笑った。けれどそんなのは一瞬だけで、先ほどのことを思い出すとすぐにふつふつと怒りと悔しさが込み上げてきた。

今井とやり合った時ですらもう少しはうまくやれたはずなのに、あの野郎にたったの一撃すら浴びせることなく沈められた自分が、情けなくて仕方なかったのだ。

「そんなわけで、あんな場所に伸びてたんだ」

「でも、なんで九鬼さんが殴られなくちゃならないんですか？」

「それはあいつが……」

言い淀む。口論をしていてカッとなると言うのは良くある話だ。しかし、内容はとなるとどうだ。この世界では先に手を出した方が

悪者にされるという考えが、まるで当然かのごとく蔓延している。
しかし、その原因となったのは元を辿れば、あの野郎の心ない一言から始まったのだ。俺にとってそいつはとても無視できるようなものではない。ただでさえ、前々から気に入らないと思っていた奴に言われたのだから、それも無理はない話だ。
けれど、俺も根拠のない言い掛かり（俺はそうは思ってないが）をつけたというのも、それもまた確かなことだ。
まぁ、口論のきっかけはいいとして、俺が切れて、結果殴られてしまったことを言うべきかは別だ。なんせ、この四ヶ月以上もの間、ただの一度だってしたことがない妹の話題をするのは、どうしても口にできないのだ。
「いや……どうでも良いことで口論になったんでな、そしたらつい手が出ちまったんだ。おかげでこの様だけどな」
かぶりを振って適当にごまかした。もしかしたら綾子ちゃんのことだ、何か気付いてないとも言い切れないが、ここは何も言わず素直に頷き、これ以上は何も聞いてくることはなかった。
ただ俺は、内心奴への怒りで気持ちがいっぱいだったから、気付かなかっただけだったのかもしれないが。
「ところで今何時だ」
「もう五時過ぎてますね」
綾子ちゃんが、自分の腕時計を見ながら答える。クラスの女子に頼まれて教室を出たのが、確か三時半はまだ過ぎていなかったはずだ。どうも一時間半ほど気を失っていたらしい。
「そんな時間か。クラスの準備はもう終わったのか？」
「はい、三十分くらい前に。それで迎えに行ったらまだ皆さん準備してましたけど、九鬼さんだけ見当たらないのでクラスの方に聞いてみたら」
「焼却炉の横で俺が倒れてたってわけだな」
彼女の言葉をひきとって続けた。どうやら俺をここに運んでくれたのは綾子ちゃんらしい。綾子ちゃんは、俺の言葉にコクリと頷い

て続ける。
「焼却炉に行ってみたら九鬼さんが倒れてて、最初はすごく動揺しましたよ。でもたまたま近くを先生が通ったので、それで。　だけど殴るなんて……ひどいです」
「そうだったのか。ま、俺も殴ろうとしたのは事実なんでな。まさかこんなことになるなんて、思いもしなかったんだ」
「九鬼さん……」
「本当君には心配ばかりかけさせてるな、俺は。すまないな」
綾子ちゃんの頭に手をやって、軽く撫でた。毎日顔を合わせているので気付かなかったが、入試の際にショートに切り揃えていた髪は、その頃に比べて大分伸びていた。切った時は肩に届いていなかった髪も、いつしか肩よりわずかに長く伸びている。
嬉しそうに目を細め、綾子ちゃんは俺にされるがままになっている。こうして控え目にされるがままになるのも、彼女なりの甘え方なんだろう。俺も気付けば頭を撫でてやるのが癖になっていて、ついこうしてしまう。
思えば沙弥佳も、今の綾子ちゃんのように頭を撫でて髪を梳いてやると、いつもこんな嬉しそうな表情をしていたのが思い出される。
『お兄ちゃんにこうされるの、好きだよ』
不意に綾子ちゃんと沙弥佳が重なって見えた。
俺は思わず眉をしかめ手をどける。いつの間にか手は横の髪へと移動していた。
「九鬼さん？」
「え？　すまない、今ぼうっとしてたよ」
「私、九鬼さんに今みたいにされるの好きって言ったんですよ。なんとなく穏やかな気分になるっていうか」
「そ、そうか。ところで、そろそろ帰らないか？　五時なら、もう準備の方もとっくに終わってるはずだしな」
俺は手を引っ込めて、ごまかすように言う。綾子ちゃんは特に気にした様子もなく、ベッドの脇から移動して白いカーテンの仕切り

を引いた。南側にある保健室だが西日が窓から射し、室内を茜色に染めている。

外を見ると、幾人かの生徒が校門に向かって歩いていて、下校ラッシュが過ぎているのが窺える。

「靴どうぞ」

「ありがとうな」

ベッドの下にあった靴を出してもらい、靴を履いた。荷物も綾子ちゃんがすでに持ってきてくれていたようで、手渡してきた。それから運良く戻ってきた保健の先生に挨拶をし、部屋を出る。室内と比べると、廊下は少し肌寒かった。

「一度職員室に行くよ。小町ちゃんに挨拶していかなきゃな」

綾子ちゃんを引き連れて職員室に赴く。

「失礼します」

「失礼します」

言うだけ言うと俺はさっさと室内に入り、綾子ちゃんは律儀に一礼して入る。小町ちゃんの席は窓側で、出入口から見るといるかいないかがすぐに見渡せるが、いつもの所定の場所に座って仕事をしているのが分かった。

「先生」

「ん？　おお、九鬼か。もう大丈夫なのか」

「ああ、もう平気だよ」

「そうか。焼却炉の横で倒れてたと聞いて驚いたが、平気そうだな。しかしどうしたんだ、一体」

どうやら、俺が担ぎ込まれた理由は誰も知らないらしい。ならかえって好都合だ。

「自分でも良く分からないんだが、立ちくらみがしたと思ったら、ぶっ倒れちまったんだ。その拍子に顎をがつんとね」

「それで顎が痣になってるのか。まあ、保健の先生もそうじゃないかと言っていたが……」

軽く肩をすくめながら、俺は何も言わないでくれと綾子ちゃんに

目配せした。彼女からしたら、なんで本当のことを言わないのか疑問に思って、何か言うかもしれないと思ったのだ。
「まあいい。あんなことがあって、まだおまえも本調子とは言えなさそうだしな。とにかく見つけて運んでくれた渡邉には、きちんと礼を言っておけよ？」
「ああ。それじゃぁ今日はこれで帰るよ」
「ああ、また明日な」
軽く頭を下げて踵を返す。綾子ちゃんはいつものように頭を下げて、俺の後を追ってきた。
職員室を出て下駄箱に着くと、もはや恒例とも言うべきなのかタイミングの悪いことに、斑鳩の野郎と鉢合わせしたのだ。
「斑鳩……」
「よう、もういいのか？」
先ほどのことなどなかったかのように話しかけてきた斑鳩は、飄々とした態度の下に、明らかに俺への侮蔑を含ませている。
「てめぇ」
さっきのは前哨戦と言わんばかりに飛びかかりたくなる衝動を抑え、この野郎を睨む。こいつはそんな俺のことなど気にも留めず、横にいる綾子ちゃんの方を見て言った。
「大変だね～綾子ちゃん。彼氏がいきなりぶっ倒れちゃうんだもんね」
「……あなたはなんで人を殴ったりなんかしたんですか」
いつもの飄々としたにやけ面と、ずけずけと人の隙間に入り込んでくる斑鳩に臆することなく、綾子ちゃんははっきりと奴の目を見据えて言う。
「あれ、知ってたんだ。ま、仕方ないか、恋人同士だもんね」
くつくつと笑う斑鳩に対し、綾子ちゃんは一向に目を逸らす気がないらしい。
「それに何か勘違いしてるみたいだけど、先に仕掛けてきたのは、おれじゃなくて九鬼の方だから。おれはあくまで正当防衛ってやつ

だよ？」
　横目でチラリと俺の方を見る斑鳩のその仕種に、苛立ちを隠すことができない。間違いなく、野郎は俺を挑発しているのだ。
「そうかもしれません。でも人が気を失うほどに痛め付けるなんて、たとえ正当防衛であっても良いというわけではないです」
「へえぇ。……結構言うじゃん」
　斑鳩は面白い玩具や遊びを見つけた子供のような顔で、綾子ちゃんをまじまじと見た。たとえ斑鳩のような美男子であっても、こんな風にジロジロと頭のてっぺんから爪先まで見られれば普通なら嫌がりそうなものだが、綾子ちゃんは全くといっていいほど微動だにしない。
　キスでもするのかというほど、彼女の顔に近づいていく斑鳩に、俺は奴の肩を掴んで引きはがす。どんな顔の男であれ、人の恋人にこんな態度を取るような奴は許せない。
「ととっ。ってぇなぁ九鬼ぃ……冗談、冗談に決まってるじゃん」
　俺に掴まれた肩に手をやりながら、いつもとなんら変わりないおちゃらけた口調と表情で笑った。
「おい斑鳩。用がないならさっさと消えなよ。少なくとも俺は今お前と話してなんかいたくないし、お前と同じ場にいたくない」
「あらら、随分と嫌われちまったな」
　くっくっくと肩をいからせながら笑う斑鳩に、俺はなんとも不気味な気分にさせられる。
（こいつ、なんだってこんなに笑ってられるんだ）
　状況として決して笑えるような場面というわけでもないはずなのに、この野郎は場違いなほどに笑っているのだ。普通であれば少なくとも、ここでは笑うんではなく怒りなり怯えるなりの感情が出るものだが、こいつは笑っている。それがなんとも不気味に思えてならない。
「もういい。俺達は帰るからな」
　訳の分からない斑鳩を尻目に、俺達二人はそれぞれの下駄箱に向

かう。奴は何がそんなにおかしいのか、さらに大きな笑い声をあげたのだった。

斑鳩との一件から二日、今日は文化祭の一日目だった。ちなみにうちのクラスはフリーマーケットをやるらしく、クラスの生徒たちが持ち寄った品を寄せ集めてみると、これがなかなかの数になった。

これらの品々の大部分は女子達の物で、こういったフリーマーケットでは金を落とすのも、大半が女であるというのを狙ってのことらしい。

そんな中、朝教室に入ると不幸なことに、奥にいた斑鳩の野郎と目が合った。クラスの男子達と雑談していたようで、笑っていた奴の顔から、一瞬だけ笑いが消えたのを俺は見逃さなかった。

けれども、そんなのはほんの一瞬のことで、すぐに奴は連中との会話に入っていった。奴にぶちのめされたのは腹立たしいが、今ここで因縁をぶつけるわけにもいかない。ここはこっちも無視しておくに限るというものだ。

ぎりぎりに来たこともあり、すぐにチャイムが鳴った。直後、慌てた様子の小町ちゃんが勢い良く教室のドアを開け、入るやいなや、大きな声で俺を呼ぶ。

「九鬼、おまえは今からすぐに病院に行け。お母さんの容態が悪化したらしい」

「母さんが？」

一瞬何を言われたのか分からなかった。きっと、間抜けな顔をしていたに違いない。

俺は逸る気持ちを抑えながら病院に向かっていた。頭の中では、なんで、どうして、と同じ言葉ばかりがぐるぐると廻っている。つい昨日会った時は、全く大丈夫そうだったはずではないか。いや、それどころかこの数週間は回復傾向にあり、年末には退院できるはずだと医者も言っていたではないか。そのはずが、なんだっていきなり容態が急変するんだ……。

とにかく今は、一秒でも早く母のところに行くべきだ。何かとてつもなく嫌な予感がしてならない。まるで今井との一件で幾度となく体験した、あの嫌な感覚に似ているのだ。

病院のロビーを足早に抜け、母のいる病室を目指す。病室は五階にあり、いつもであればエレベーターを使うところだが、今回は運悪く、ちょうど人が乗った直後のようで動き出したばかりだった。

エレベーターの上昇ボタンを、早くしろと何度も叩きつけるように連打するが、そんなことをしたってエレベーターは都合良く降りてはくるはずもなく、俺は舌打ちして横の階段を使うことにする。

降りてこないエレベーターを悠長に待っている暇なぞない。今はとにかく少しでも早く母に会いたい気持ちでいっぱいだったのだ。

二段飛ばしで階段を駆け上がる。途中、リハビリか何かを兼ねてか入院患者と思わしき者や看護士とすれ違い、その都度思わずぶつかりそうになるが気にしない。今はそんな余裕はなかった。

「母さんっ」

小さいながらも個室を宛てがわれた母の病室にたどり着き、すべり込むような勢いで扉を開けて入った。

母さんは昨日までつけていなかった呼吸器をつけ、苦しそうに息をしている。顔中に、人差し指の先よりも小さい大きさの汗の玉がいくつもできていて、以前とは比べものにならないほど痩せ萎んでしまっているようだった。それを裏付けるように、母さんの頬の辺りは、やけに痩せこけているように見える。

「先生、母さんは」

そう言い捨て、目の前で看護士らが幾人か飛び出して行く。良く見れば、点滴の種類が変えられているのが分かる。

すると後ろから、出ていった看護士とは別の看護士が入ってきた。その手には用途のいまいち分からない医療用の道具や、新しい薬の入った点滴袋を持っている。

「なんでこんなことになったんだ……」

俺はただ茫然と一人呟いて、医者たちによって治療を施されている母を見つめることしかできないでいた。

ロビーに一人俯き、膝の上に肘をついて頭を抱えたままで座っていた。

「九鬼さん」

頭上で俺を呼ぶ声がする。頭を上げて、その人物を見上げる。

「綾子ちゃん、来たのか……」

「小町先生から、話は聞きました。それで、おば様は……？」

息を切らせているところを見ると走ってきたのだろう、話す言葉にもやや切れ切れになっている。俺はただ首を振るだけだった。

「……面会謝絶だとさ。さっき父さんが来て、今先生の詳しい話を聞いてるところだ」

「そんな……昨日まであんなに元気そうだったのに……」

綾子ちゃんは口元に手をやって、驚きにそれ以上の言葉を発することはなかった。当然だろう。俺もそうだが、彼女もほぼ毎日のように母を見舞ってくれているのだ。

「ここのところ、ずっと回復に向かってたのになんで急にこうなったのか、医者にも今のところ、全く原因が分からないそうだ」

「おば様……」

綾子ちゃんから顔を逸らすように、再び床を見つめた。彼女も、俺の隣に何も言わずにそっと腰を下ろした。

何も言わないというより、何も言えないというのが本当のところだろう。今何を言ったって、そんなのはただの慰めにもならないと

いうのを知っているのだ、彼女は。
「……学校、終わったのか」
「いえ、まだ終わってないですけど……先生に言って少し早く抜けさせてもらったんです。先生方も九鬼さんの事情は知ってらっしゃいますので、私も一概に無関係ではいられないですから……。
　というよりも小町先生から言われたんです。九鬼さんのところに行ってやってくれないかって」
「……そうか」
　説明を終えた綾子ちゃんに小さく頷いた。沙弥佳の一件以来続いている今回も、確かに彼女も無関係とはいえまい。少なくとも綾子ちゃんは常に当事者であり続けたのだ。気持ちの上ではある意味で、家族に近いものを感じているのも確かなことだった。
　事情が事情なだけに、小町ちゃんも気を利かせてくれたといったところだろうか。どのみち、遅かれ早かれ綾子ちゃんの耳には入るし、俺のためにわざわざ協力を頼みこんだというのも関係しているのかもしれない。
　交わす言葉もなく二人でいたところ、病棟の方から父さんがやってきた。父さんも、ここ数カ月で随分と痩せてしまっているのが良く分かる。去年と同じスーツを着ているはずなのに、どことなくブカブカの服を着ているようで不格好に見えるのだ。
「おじ様」
「綾子ちゃん、来てくれたのか。……家内のためにわざわざすまないね」
「いえ……それでおば様は」
「……」
　綾子ちゃんの問いかけに、父はぐっと苦い顔をして見せた。
「……あまり良くない。はっきり言うと、予断は許されない状況だということだ」
「お、おば様が……」
「……」

俺達に重い空気が漂う。未だなお、捜査に進展が見えないという沙弥佳の失踪から始まり、少なくとも倒れた母だけでも良くなってほしいと願っていた矢先に、とんでもないことだった。

「原因は……？」

父さんを見上げながら問う。その問いにも父さんは、ただ首を振るだけだった。

「そうか……」

くそっ。なんだって突然こんなことになったんだ……。俺は無意識のうちに両手の指を固く組んでおり、それはまるで何かに祈りをささげているかのようであった。

その日は、このまま病院に泊まると言った父を残し、俺と綾子ちゃんは後ろ髪を引かれる思いで病院を出て、家路についていた。もう夜の面会時間も終わり、病院を出たのが夜の七時半という時間だった。

「いいのか、本当に。親父さん、心配するんじゃないか？」

「いえ、今海外に出張してますから」

いつものことだけどと付け加え、少し寂しそうにクスリと笑った。相変わらず親父さんは娘をおいてきぼりにしているようだ。

綾子ちゃんは今日は家に帰らず、うちに泊まっていくという。年頃の若い男女が一つ屋根の下に泊まるというのは、健全な連中なら間違いの一つや二つ起こりうるだろうが、俺達に限っていえばそんなことはない。母の入院以来、これまで幾度となくあったことで、取り分け珍しいことではないのだ。

それともう一つ。どうにも綾子ちゃんへの気持ちが高ぶらない。もちろん、彼女に性的な魅力を一切感じていないかといえば、それは嘘だ。

綾子ちゃんはうちに泊まる際、沙弥佳の部屋で寝ている。別に客間がないわけじゃないが、彼女からしても、ストーカー事件の時はずっと沙弥佳の部屋で寝ていたので、それが習慣になっているのだ

ろう。

よって、あいつの部屋で綾子ちゃんを抱くなんて悪趣味なことはしたくないし、そのためだけに、わざわざ客間を使うというのもおかしな話だ。というより、そのためにこしらえるのも下心が見え見えで、どうにも好かない。

かといって自分の部屋では、どうしてもあいつの記憶が蘇ってしまう。今ですら夜一人で自分のベッドで寝ていると、あの時の記憶と高ぶりが蘇ってくるのだ。

それにだ。今はまだ、俺自身の気持ちの整理がつけきれない。沙弥佳がいなくなったことでうやむやになってしまっているが、綾子ちゃんに対する裏切り行為をしたという気持ちが消えたわけでもない。

沙弥佳を抱き、さらに綾子ちゃんまで手をかけようなんて、とてもじゃないが今の俺にはできないし、そんな自分を許せない。結局、沙弥佳がいなくなってからというもの、二人にどうすべきかというのはずっと宙ぶらりんなままなのだ。

他にも、裏切った俺をこうして支えてくれた彼女に、そんな中途半端な気持ちのままでは申し訳が立たないというのもあるが、大部分の理由としてはそんなところだった。

綾子ちゃんと適当な話を交わしながら歩いていると、もう家の前にまで着いていた。一人だと長く感じる道も、人と話しながらだとあっという間だ。

「ただいま」

誰もいない家の中に向かって声をかける。静まり返った家から、『おかえり』という声がどこからか聞こえてきそうな、そんな感覚にとらわれる。

実際にはそんなこと有り得ないとは分かってはいても、もしかしたら、沙弥佳のやつが何食わぬ顔でひょっこり現れるのでは、という淡い希望を抱いているからかもしれない。

「おかえりなさい」
玄関に突っ立ってぼうっとしていた俺に、いつの間にか玄関を上がっていた綾子ちゃんがそう言った。
「あ……なんで」
「分かりますよ、私もずっと一人だったから。誰かにただいまって言いたいし、おかえりって言いたいんですよ」
穏やかな笑みを浮かべたまま、綾子ちゃんはリビングの方へと踵を返す。
「ほら、いつまでもそんなところにいないで、早く上がってください。遅くなりましたけど、ご飯作りますね」
「あ、ああ」
彼女の優しい言葉に感謝の念を抱きながら、俺は靴を脱いで玄関を上がる。この時俺は、新たに得たこの日常がいつまでも続けばいいのにと密かに願っていたかもしれない。

だがしかし、もしそいつが本当にあるかは分からないが……もし運命というものがあるとすれば、その運命にも別れ道というのがあるということを、俺は思い知らされることになる。

第５６章

虫の知らせというのがある。普段はそうでもないのに、その時に限って妙な胸騒ぎがしたりするやつだ。後にして思えば、これこそがまさに虫の知らせというやつなんだろうと思えた。

その日俺はいつものように綾子ちゃんに起こされた。以前は母が良くしていたエプロンをつけているのを見ると、もはや完全に彼女のものであるかのようにも思える。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

こんな朝の挨拶もいつもの通りだったが、一つ違うことがあった。

「……それ」

「ん？　ああ、これですか？」

寝ぼけた顔のまま、綾子ちゃんの頭にあるリボンを指さした。リボンとはいっても大したものじゃないが、そいつで最近長くなってきている髪をポニーテールにしていたのだ。

「後ろ髪が大分長くなってきてるから、そろそろこうした方が良いかなって。どうですか？」

「初めて見るからほんの少しだけ驚いたが、良いんじゃないか？結構似合ってる」

「ほんとですか？　やった。

長くなると、いつもこうするんです。近く、一度髪を少し短くしようと思ってるんですけどね」

朝から妙なテンションの綾子ちゃんに、再度相槌をうってベッドを出た。

「着替え、置いておきますよ」

そう言って綾子ちゃんは部屋を出ていく。つくづく良くしてくれる子だ。きっとああいうのが将来は、良妻賢母なんて言われたりす

るのかもしれないと思う。
　そんなことを考えながら制服に着替え終えて下に降りると、今日は珍しくパンが用意されていた。普通の日の朝にパンを食べるなんて、随分久しぶりだ。
「あ、そうだ。今日、新聞が届けられてなかったみたいなんですけど」
「新聞が届いてない？」
　顔を洗い終わって席に着くと、そんなことを言いながら綾子ちゃんが目玉焼きが乗った皿を目の前に置いた。
「はい。どうした方がいいんでしょう？」
「再配達するよう電話すればいいが、放って置こう。別に俺も毎日読んでいるわけじゃぁない」
「なら良いんだけど……」
　どことなく浮かない顔をしたまま彼女も席に着いた。席はいつしか客用の席ではなく、いつも母が座っていた席になっている。いつもなら静かながらも小さな会話もあるのだが、今日は不思議なほどなんの会話もない。こんな日も珍しいものだ。
　綾子ちゃんは相変わらず、先ほどからどこか落ち着きがなさそうに見える。
「さっきからどうしたんだ」
「え？」
「さっきから、あまり落ち着きがないように見えるよ。何かあったのか？」
「いえ特に何かあったわけじゃないですけど……多分気のせいだと思うから」
「なら良いんだが……。何かあったら言ってくれよ？　俺としても少しは君の役に立ちたい」
「はい、そうなったときは是非」
　穏やかな微笑をたたえたまま、綾子ちゃんはパンをゆっくりとかじっていた。

今日は文化祭の最終日で、朝から一般の来場もあるせいか、いつになく学校は活気に溢れていた。

俺も適当な時間にクラスの出し物であるフリーマーケットの売り子なんかをし、残りの自由時間は、模擬店なんかの食べ物をつまんでいるうちに、もうそろそろ終わりの時間がなろうとしていた。

楽しい時間はあっという間だというし、その通りであるなら、俺もそれなりに文化祭というものを楽しめたということだろう。

「後は後夜祭ですね」

「その前に、自由参加のバンドの演奏もな」

俺は例によって、綾子ちゃんと二人で文化祭を廻っていた。いつも二人だけだからと、同じ自由時間になった青山を誘ってみたところ、すでに先約があるからと断られたのだ。

考えてみれば、あいつにも一応恋人というのがいるわけだから、当然と言えば当然だ。実の姉を恋人と呼んでいいのかは分からないが……。

ともあれこの数カ月、家族の事情もあって夏も遊ぶことがなかった俺は、実に久しぶりに羽をのばせることができたのだ。その点では、今日のこの文化祭というのは俺にとって、とても有意義に過ごすことができたと思う。

そして多分、綾子ちゃんも同様だろう。元々、うちとはなんの関係もないはずだった綾子ちゃんだが、何の縁か俺達のために頑張ってくれたのは感謝してもしきれない。だから今日、もし綾子ちゃんがこの日を楽しんでくれたのなら、俺としてもやはり嬉しいことなのだ。

「どうする。バンド演奏見に行くか？」

「私はどちらでも……」

「じゃ、却下だな」

ニヤリと笑いながら肩をすくめる。どうせ立ちん棒のままのロックといってやるのであれば、あまり見る気にはなれない。俺は同じロックでも、ステージを使いこなすようなライブバンドかジャムバンドでないと、全く興味を持てないのだ。

「なら最後までもう少し廻るか。とは言っても、もうめぼしいものは全部見て回ったか……」

行きたいところはあるかと聞くと、綾子ちゃんは上の空といった感じで黙ったままだった。

「綾子ちゃん」

「あ、はい」

「どうした。大丈夫か？」

「はい。なんて言うか、今こんなことしてて良いのかなと思って」

彼女は少しの間俺を見上げ、すぐに顔を伏せた。

「綾子ちゃん……」

つまりこういうことだ。俺の母が今意識もあやふやなのに、俺達だけこんなに楽しんでいていいのか。そう言いたいのだろう。

「……そうだな、君の言う通りかもな。俺は少し羽目を外しすぎたかもしれないな」

「いえ、それが悪いというわけではないんですけど……。

実は今日、変な夢を見ちゃって。そのせいなのかもしれないです」

「どんな夢？」「誰もいない病室に一人ぽつんといて、誰一人もうそこに来ることがないというのをなぜか知ってる……そんな夢だったんです。なんか、その夢の病室が、やけにおば様の病室のイメージに変換されちゃうんです……。

……ごめんなさい。不謹慎でしたね」

「いや、いいんだ」

この時綾子ちゃんの鬱積した気持ちが伝染したのか、俺もどことなく羽のばししたことを後悔したような気分になった。実の母親というわけでもないのに、実の息子である俺よりも、よっぽど心配しているようですらある。もちろん、俺だって全く心配をしていない

わけじゃない。けれど綾子ちゃんの浮かない顔を見ると、そう思わざるをえなかった。

その時ふと顔を上げると、技術棟の屋上が瞳に映った。そして、そこに随分久しぶりに見る一人の少女の姿もあった。

「綾子ちゃん」

「はい」

「最近色々とあって忘れてたが、良い場所があるんだ。行ってみないか？」

「え、は、はい」

きょとんとした顔のまま綾子ちゃんは頷いた。

あの女があそこにいるというなら、今あそこは開放されているということだ。足を運ぶのは実に久しぶりで、俺もそこに行ってみたい気分にさせられたのだ。

模擬店なんかが徐々に店じまいをし始めだしている中俺達は、足早に技術棟へと向かった。多分綾子ちゃんは、技術棟になどはほとんど立ち入ったことがないだろう。そういう俺自身も、かつてはそうだったのだ。

「技術棟って今まで来たことなかったなぁ。始めの頃に学校案内された時以来かも」

「普通科や進学科なら、大概の連中もそうさ。俺だってそうだったしな」

「今はそうじゃないって口ぶりですね」

「ああ。足を踏み入れるのも随分久しぶりだが、前はちょくちょく来てたんだよ。番の奴と一緒にな」

「番の奴？」

「屋上の鍵守りみたいなやつだ」

屋上はもう目の前だ。俺はニヤリと笑い、肩をすくめた。技術棟の一番上、つまり屋上へと続く階段を上がりきると扉の窓の向こうに、うっすらと影になった都会の街並みと一人の人物の姿が見える。

「ここだ。さすがにここまでは来たことないだろ」

「で、でもここ、入っちゃいけないんじゃ……」
「本当はな。だけど、一度くらい行ってみたいと思わないか？」
やってはいけないということをしようとすることに対する不安からか、綾子ちゃんは少し腰が引けているようだ。しかし、その目には、明らかに期待の色が含まれているのも確かだった。
扉を開けると、一気に開放感に満たされる。半年以上前には良く来ていた場所だが、やはりこの開放感はたまらない。
「よう」
先客……ここの番人である、藤原真紀に声をかける。真紀はあまり興味なさげに、横目でチラリとこちらを見ただけだった。
「……相変わらずだな」
ため息まじりにそうつぶやくと、じっと中庭を見つめていた真紀は、ようやく俺の方に向き直った。
「久しぶりじゃない」
「ああ、全くな」
「そっちの子は？」
知的な印象を受ける眼鏡の奥から、鋭く俺の横にいる綾子ちゃんを射抜く。知的さとは別に、この女にはなんともいえない冷たさがあるのも事実で、綾子ちゃんは思わず頭を下げて挨拶した。
「あ、あの、渡邉綾子です。く、九鬼さんとは」
「渡邉？　ああ、あなたが」
言いかけの綾子ちゃんに真紀は、何か思い出したように口を挟む。
「知ってるのか？」
「まあ、それなりにね。私の後輩があなたのクラスにいるから、多少はそういう情報が流れてくるのよ」
「……そうか」
情報と言ってもそのほとんどは単なる噂話程度のものだろうが、この女ならそれとは別に情報網を持っていそうだ。
「それで？　今日は何しにきたの」
「何かってわけじゃぁない。屋上を見たら、たまたまあんたが視界

に入ったからな。それで久しぶりに来たってだけだ」
「ふーん。それで、ちょうど良いからデートコースにしちゃったというわけね」
「深読みしすぎだ。別にそういうわけじゃぁない。
それよりあんた、もしかしてずっとここにいたのか？」
「さすがにそれはないわよ。適当に見て廻ったけど、やることなくなったからここに来ただけ。一時間くらい前かしらね」
浮世離れして掴み処のない真紀が、他の生徒達と混じって文化祭を満喫していたのだろうか。とてもじゃないが想像できない。きっとこの女のことだから、適当に周りに合わせて飽きたところでここに来た、といったとこだろう。
「ま、いいさ。あんた、まだしばらくここにいるんだろう。俺達も少しの間ここにいさせてもらうが、構わないな？」
「好きにしたら」
そっけなく言う真紀を一瞥し、俺は綾子ちゃんの方を向く。俺と真紀の関係が気になるのか、綾子ちゃんは真紀の方をじっと見ている。
「なにか？」
「あっ、いえ、なんでもありません」
綾子ちゃんには興味すら持っていなさそうだった真紀が、自分を見つめる綾子ちゃんに振ったのだ。
「……ねぇ、渡邉さん。あなたと九鬼君、どんな関係なの？」
真紀が口を開いたと思ったら、いきなり突拍子もないようなことを口にした。
「えっ？」
「おい、あんたいきなり何言い出すんだ」
「先に言っておくけど、別にあなた達が恋人だとか、そういうことを聞いているわけじゃないわ」
真紀がまた意味深なことを言い出した。全く、この女はいつもそうだ。どんな関係だと聞いているのに、恋人だ云々というのは聞い

てないときた。ならば、どう答えれば良いというのだ。
「え？　えと……」
「あんたの言い方はいつもわけが分からないぜ。綾子ちゃん。この女の言ったことは無視してもいい」
「ひどい言われようね。でも、こっちの言い方も悪かったわ。悪いことは言わないから、この人から手を引いた方がいいわ」
「ええっ？」
「おま……何言ってるんだ？」
「言葉の通りよ。今、この人は大変なことに巻き込まれようとしてる。もしそうなったら、貴女は一たまりもないから」
抑揚のない淡々とした声でこの女は、いきなり訳の分からないことを言い出した。いつものこととは言え、さすがに今回ばかりは、こちらの目が点になるようなことを抜かした。
「あんた……一体何言ってるんだ」
きっと綾子ちゃんも同じような心境なんだろう。訳が分からずに、戸惑いの表情を浮かべている。
「あなた、私前に忠告したわよね？　何かあったらすぐに私のところに来なさいって。覚えていないの？」
俺達を見据えながら真紀は、はっきりとそう口にした。言われてみれば終業式を間近に控えた頃、確かにこいつはそんなことを言っていたような気がする。こちとらそれどころじゃなかったので、すっかり記憶の中から抜けていた。
真紀が言っているのは、春の沙弥佳の失踪のことだろう。全国に知れ渡ったことなので、この女が知らないとは思わない。しかし、仮に俺がその時それをこの女に言ったとして、どうかなったとでもいうのか。
この女の持つ得体の知れなさという点で言えば、真紀の従えている連中がどれほどの規模のものかも想像はつかないし、失踪した妹を、警察以上の組織力と捜査力を使って探せるとでも言うのか。
「確かにそんなことも言われていたかもな。だがな、皮肉にも俺は

こうして無事だし、あの時そんなこと頭からすっかり飛んでたんだ。
それに家族のことをあんたに話したにして、あんた、どうにかできたとでも言うのか」
「……そうね、どうかできたわけでもないかもしれないわ。でも、何かしら探ることはできたわ、それだけは間違いない」
いつになく真摯な眼差しで真紀は言いつぐむ。その目には一点の曇りもない、とでも表現すればいいのだろうか。
「……でも、もう駄目かもしれない。あまりに遅すぎた」
目を細め、はかなげな目をした真紀は俺から目を離し、再び中庭に目を向けた。後ろ姿からは、もう私に話しかけるなと言わんばかりに見える。暗にさっさとここから立ち去れともとれる、無言のメッセージなのだ。
「九鬼さん」
「……行こう、綾子ちゃん」
誰にでもなく、俺は一人勝手に納得するように頷いた。ここでいまさら半年も前に過ぎたことを、あれやこれやと言いたくもない。ここで真紀を責めるのはどう考えたって筋違いというものだし、自分が情けなくなるだけだ。
だがしかし、真紀のその姿は裏を返せば、俺への反面教師とも言えるかもしれない。というのも、俺は今まで一度だって自分から沙弥佳を探そうとはしたことなどない。ただの一度もだ。
思い返してみれば、沙弥佳がいなくなってからというもの、駄目になってしまった家族のためという理由を作り、揚げ句には、自分まで引きこもるという悪循環に陥っていたではないか。それを言い訳にして、ただただ事実を受け入れられずに逃げていたのだ。
これではいけない。今回はたまたま綾子ちゃんという理解者がいたから良かったものの、もし彼女がいなければ俺はどうしていたというのか。今でも惨めに部屋にこもっていたかもしれない。
そして俺はこともあろうか、それすら利用して未だそこから抜けだせずにいるときた。今も良く見る沙弥佳の夢は、もしかしたら、

さっさと行動を起こせという、無意識のうちに自分からの警告なのではないのか。もう一度お前にやれることがないか、良く確認してみろという自己意識なのではないのか。

もちろんそうとも限らないだろうが、何も自分でしたわけではないというのは、疑いようもない事実ではないか。

「真紀」

「なに？」

真紀はこちらを振り向かずに返事をよこす。

「ありがとうよ。あんたのおかげで目が覚めたよ」

俺が礼を言い、綾子ちゃんに校舎に向かうよう促して踵を返した時、背中越しに声をかけられた。

「待ちなさい」

「なんだ」

立ち止まって振り返った。真紀もこちらに体ごと向き直っている。

「あなた今日、斑鳩とは会った？」

「斑鳩？　……そういえば見てないな。どうせ奴のことだ、文化祭というのを口実にサボったんだろう。それか遅刻してきて適当にナンパでもしてるんじゃぁないのか？　だが、なんだってそんなことを聞くんだ」

「あの男にだけは気をつけなさい」

「……ああ、分かってるさ」

数日前に殴られた時のことを思い出し忌ま忌ましい気分になり、見栄を張るように肩をすくめる。

「良く聞きなさい。これは冗談とかそんなんじゃないわ。あの男は、決してあなたや他の皆が考えているような人間じゃない。

良い？　あの男と何かあればすぐに私に言って。お願いだから」

お願いだから……。最後のこの言葉には、懇願ともとれる妙な言い回しだ。

「……あんたが心配しなくても、今後はあいつとは付き合うつもりはないぜ」

「なに。なにかあったの？」
「なに、大したことじゃぁない。ちょっとした口論をしちまっただけさ」
「それでどうなったの？」
妙に食いつきが良い真紀に、こっちの方が思わず怪訝に構えてしまう。なんだか、とても嫌な予感がしているとでもいったような、そんな食いつきだった。
「簡単だ。俺がぶち切れちまって殴りかかったのさ。ま、結果はさんざんだったがな」
まさしく苦笑と言わんばかりで口元を歪ませながら、再度肩をすくめた。真紀はといえば、初めて見たと言ってもいい驚きの顔をしていた。まさかこの女のこんな顔を見れるなんて、こっちの方が驚いてしまった。
「あなた、悪いことは言わないわ。今すぐ斑鳩を探して見つけなさい。すごく嫌な予感がするわ」
「なんだって奴を探さなきゃならない？」
当然の疑問だった。真紀は何をそんなに焦っている？
「説明は後よ。私も探すから、とにかく斑鳩を見つけることが先よ」
真紀にしては珍しい、感情を剥き出しにした言葉に思わず息を飲んだ。女というものの感情をストレートに受けると、男というのはこんなにも萎縮してしまうものなのか。
「九鬼さん、この人の言う通りにしましょう。私もなんだか嫌な感じがしてるんです……」
ずっと黙ったままだった綾子ちゃんも不安げな表情を浮かべていて、俺は訳も分からずに頷いていたのだった。

すでに多くの出し物が後片付けを始めており、やることのなくなった生徒らは体育館に移動し始めている頃だ。

俺はその中を一人、逆走でもするかのように校舎の中を足早に動き回っている。綾子ちゃんと俺は二人で、校舎の中を別々になって斑鳩を探して回っているのだ。真紀は体育館の方へ行っている。

すでに行けそうな場所はあらかた行って探してはいるが、一向に斑鳩の姿は見当たらない。

すると前方に、反対側を探していた綾子ちゃんを見つけた。こちらから綾子ちゃんの方へ行くと、向こうも俺に気付いたようだった。

「九鬼さん」

「どうだった？」

「こっちには……。そちらはどうですか」

「こっちにもいなかった。とりあえずトイレにも入ってみたんだが駄目だ。学校内にいるとしたら後は真紀のいる体育館か、後はせいぜい職員室くらいなもんだ。奴が、閉められている部屋の合鍵を持ってなければだが」

「一応、職員室には行ってみたんですがいませんでした」

「そうか。相変わらず電話にも出ないし、やっぱり学校の外にいる可能性が高そうだ」

「……なんだろう、すごく嫌な予感がする」

綾子ちゃんが胸の前に手をやって、つぶやくように言った。心底不安そうな顔をしながら。

「なぁ。さっきも聞いたが、何がそんなに不安なんだ」

「分からない……分からないんです。なんでこんな気持ちになってるのか」

俺の問いかけに綾子ちゃんは、ただ首を振るだけだった。

その時、体育館の方から真紀が顔を見せた。俺達を見つけると、すぐにこっちにやってきた。

「あなたたち」

「真紀か、俺達は駄目だった。そっちはどうだった」

「私も同じ。一応あなたのクラスの人にも聞いたけど、知らないって言ってたわ」

さらりと言ってのけたが、この女はなぜ俺のクラスメイトを知ってるのだろう。今は置いておくとして、そのうち、その辺りも問いただしておこう。

「体育館にもいない、電話にも出なかったとなると、奴は外に行っちまった可能性がほぼ確実だな。

あのいけ好かない奴のことだから、きっとこれ幸いとナンパにでもけしかけたんだろ」

「あなた、さっき私が言ったこと、もう忘れたの？　言ったでしょう、斑鳩はあなたが思ってるような人間じゃないって。あの男のことだからきっと」

「誰がなんだって？」

真紀が話していると突然後ろから声がした。この軽そうな声は間違いない、斑鳩だ。

「斑鳩」

「やあ皆さん、お揃いで」

斑鳩のいつになく軽快な口ぶりに、思わず肩透かしをくらったような気分になる。しかし真紀はその斑鳩に対し何を思っているのか、やけに険しそうに眉をよせている。

「……あなた、今どこに行っていたの」

「おれ？　んー、ま、ちょっと学校の外に出てたよ」

へらへらとしたにやけ面に態度。どうも真紀は、この手のタイプの男は心底嫌いらしい。明らかに、お前など嫌いだとでも言いたげな目つきだ。

「……それにしても、携帯にくらい出なさいよ」

「ん、ああ、ごめんごめん。気付かなかったわ。おれって携帯好きじゃないしさ」

そんなことを言いながら斑鳩は、制服の内ポケットから携帯を取り出した。画面を見る目が上から下へと動く。俺もそうだったが、口ぶりから察するに、真紀も連絡を入れていたのだろう。

「で、着信があったってことは、何か用があったってことかな？」

「ええ。だからあなたはどこに行っていたか質問したの。それが用よ」

真紀もこの男のことが嫌いのようだ。普段は能面でも張り付けたように無表情なのに、斑鳩にはいたく感情的に話をしている。しかも感情的とはいっても、それは嫌悪の感情だ。

「別に。ただ暇だったから街まで出てただけだけど？」

「そう。ならなんであなたから薬品の匂いがするのかしらね」

真紀は鋭い視線で斑鳩を射抜く。

「隠そうとしたって分かるわよ、私はかなり鼻がきくからね。そんなに強い薬品の匂いは、学校の保健室にいても染み込まない。あなたが病院か何かに行ってもいない限りね」

「病院？」

真紀の言葉に口を挟んだ。

途端に背筋を嫌なものがつき抜けていく。こいつは何を言っているのだろう。そして斑鳩は何をしていたのだ？

分からない。分からないが、何かとても嫌な予感がしたのだ。

時が止まったかのように沈黙がおりていた場に、突然携帯の音が鳴り響く。最近は何かあった時のために、マナーモードは解除されている。

取り出して見てみると、かかってきている番号は全く見知らぬ番号からだった。けれど市外局番から判断するに、何か急用なのだと察した。

「もしもし？」

『九鬼遥子さんの息子さんですか？　こちら○○病院ですが、遥子さんの容態が――』

電話に出ると、冷静さを欠いた、まくし立てるような声が聞こえてきた。しかもその内容は最悪なもので、母が、突然血を吐いたというのだ。

すぐに病院に来てくれという看護師の言葉を最後に、俺は向こうが言い終える前に電話を切った。

「九鬼、さん……？」
綾子ちゃんが何を汲んだのか、不安そうに俺を呼ぶ。しかし俺はそれどころではなかった。
血を吐いただって？　なんで急に。昨日から良くない状態が続いているとしても、なんで急に……。
「くっ」
「あっ、九鬼さんっ？」
俺はいても立ってもいられず、綾子ちゃんの声も振り切って走り出した。目の前に現れた斑鳩を突き飛ばし、そのまま校門を抜けて病院を目指す。
とにかく嫌な考えしか頭を過ぎらない。いくら昨日の今日だからといったって、突然血を吐くだなんてありえない。
何か医療ミスでもあったのか。この昨今、医療ミスによる死亡もあるのだ。それが起きないとは言い切れない。
「……母さん」
俺は嫌な考えを無理矢理頭の中から吹き飛ばすよう、無我夢中で走った。元々体が頑丈な方ではなかった母だが、その持ち前の明るさとポジティブな思考を持ってして、決して人前……特に俺や沙弥佳の前では弱音を吐いたことがなかった。
そんな母が沙弥佳の失踪を気に、倒れてしまったのだ。きっとあの明るさは、俺や沙弥佳のために気丈なフリをしていただけだったのかもしれない。
今考えてみれば、そうでもしないとこんなにまで弱くなってしまうものなのかという疑問が、少なからずあった。俺の知る母は決してそんなではない。ならば本来の母は、実は誰かに依存しないと強く生きれないのでは、という気になるのだ。
だからあんなにまでやつれてしまったうえに入院までしてしまい、未だ治る見込みが分からないとすら言われたのだ。
「くそっ。頼むから無事でいてくれ」
無意識のうちにそんな言葉を口にしていた。綾子ちゃんが朝から

いやに変な感じがすると言っていたのは、これを予感していたというのだろうか。遅まきながら俺はそいつを今、ようやく実感していた。

息も切れ切れになりながら全力疾走し、病院に到着した。昨日にも同じようなことがあったが、気分の上では昨日以上に最悪といっていい。

今日は昨日と違い、運良くエレベーターに乗り込むことができ、直ぐさま上昇ボタンを押した。向こうから入院患者らしき人物がここを目指して歩いてきていたように見えたが、今はそれどころではない。

エレベーターの上昇特有の動きが止まって扉が開くと、足早に病室へと足を運ぶ。

病室の扉を開けると、いつもは入って目と鼻の先にあるベッドの上にいるはずの母の姿がない。ベッドの周りには、色々な機具や点滴袋が置いてはあるが、そこに肝心の母がいないのだ。

「はぁはぁ……どこに」

走ってきてきたために荒れた呼吸を整えながら、病室を見回す。当然ながらどこにも姿は見当たらない。血を吐いたというのだから、集中治療室かどこかに移されたのだろうか……。こんなことなら、受け付けで一度聞いておくべきだった。ここに致るまで、丸っきり何も考えつきもしなかった。

俺は舌打ちしながら病室を出ると、たまたまいつも母の世話をしている看護師に出会った。

「すみません。母は、ここの病室にいた人は今どこに」

「遥子さんの息子さんですね？　今一階の集中治療室に――あ、九鬼さんっ」

彼女の言葉を最後まで聞かずに俺は飛び出した。今俺に何かできるわけでもないが、それでも行かないわけにもいかない。案内図で治療室の場所を確認し、逸る気持ちを抑えながら向かう。

一階にある治療室の前に来ると、使用中という文字の赤いランプが点灯していて、今、この扉の向こうに母がいるのだと窺い知ることができた。背中ごしに、普通病棟の方から外来の患者や看護師らの話し声が響いてくるが、なぜかやたら遠くに聞こえる。同じ棟であるはずなのに、まるでここだけが別の場所に隔離されているみたいな錯覚を起こしたのだ。

「くそ……」

顔を歪め、毒つきながらそばにある長椅子に座った。こんなに心配し、今すぐにでも助けてやりたい気持ちなのに何もできないというのがこんなにも、もどかしいものとは知らなかった。

何もできない自分に苛立ち、そしてただ祈るだけ……この行為が、ただただ恨めしくて俺は仕方がなかった。

母が謎の昏睡に陥ってから早いもので、すでに三カ月以上が過ぎていて二月になっていた。

母は医師達の必死の治療にも関わらず、一向に目を醒ます気配がなく、それどころか日に日に頬は痩せこけ、眼窩はくぼんでいっている。これ以上、どこに痩せるための肉があるのかと思えるほどだ。

年齢のわりに、あまり歳というのを感じさせなかった一年前の母とは、まるで別人だ。ただ寝ているだけのはずなのに、書いて字のごとく、その顔は異常なまでに病的に蒼白となっていた。

俺は今、何もすることなく意識のない母を目の前にして、一緒にいてやることしかできないでいる。いいや、それは何もしていないのと同義だ。何か……何か母のためにしてやれることはとないかと模索はするが、結局何も思い浮かぶことはないのだ。

コンコン

病室のドアをノックする音が聞こえる。きっと綾子ちゃんだろう、彼女も毎日のようにここを訪れているからだ。

「こんにちは、おば様」
綾子ちゃんは眠ったままの母さんに、ベッドの横からそっと手を額にやって囁いた。
「九鬼さん。これ、小町先生からです」
そう言って彼女は、鞄の中からプリントを出して俺に渡す。
「いつもすまないな。なんだか、君を連絡係か何かに使ってるみたいだ」
「そんな……私が勝手にやっていることだから」
そうかと短く答え、肩をすくめた。手渡されたプリントには俺の卒業が危ないということと、進路のことに関して書かれているものだった。
しかし俺はその内容を見ても、全く動じることはなかった。学校のことなどもはや、どうでも良くなっているのだ。去年の春から立て続けに起こったことが尾を引いていて、俺は沙弥佳の時のように後悔したくないという気持ちから、文化祭のあの日を境に、ほとんど学校には行っていない。もし留年ということになったとしても、その時はその時だ。
学校と母の命。そんなこと、わざわざ天秤にかけるはずもない。
それでも、一度は小町ちゃんも病室を訪ねてきたことがあった。要は、家族も大切だが、少しは自分のことも考えろと言いたかったらしい。
しかし俺の言い分としては、学校なんざいつでも入り直せるが、母が死んでしまったらもうどうにもできない。そんなことをまくし立て、俺は小町ちゃんを追い出した。心配してくれるのは嬉しくはあるが、別に頼んでいない。余計なお世話だった。
けれど、そんな俺と小町ちゃんのやり取りを見ていた綾子ちゃんは、やはり先生の言うことも正しいと俺を諭し、彼女の強い勧めもあって、たまにだが学校に行くこともあった。ごく稀にだ。
けれど行ったとはいっても全く授業など耳に入らなかったし、ある時は、行ったその日が期末考査だったりもした。来たらすぐさま

小町ちゃんに職員室に来るよう呼ばれもしたが、用があると断って以来、それを最後に学校には行っていない。それがもう二ヶ月も前の話だ。

多分父さんも、俺がもうまともに学校に行ってないことは耳に入っているはずだが、何も言ってこない。というのも父さんは、いつ頃からか家に寄り付かなくなっていたのだ。

仕事終わりには必ず病院に顔は見せるし、たまに洗濯物としてワイシャツや下着なんかがあることを考えると、俺がいない時には帰ってきているようだが、母さんが昏睡状態になって以来、まともに家で顔を合わせた記憶がない。

目の下にはクマができ、不精髭が生えていたり髪もボサボサになっていたりと、父さんも決して普通の精神状態でなくなっているのが窺えるのだ。

「あの九鬼さん」

「ん……？」

「……一度学校に行きませんか？　今年はまだ一度も」

「いいんだ。どっちみち今のままじゃぁ留年はほぼ確実だ。四回のテストも二回しか受けてないし、受けたテストにしたって赤点のオンパレードだったんだ。

どうせ今から行ったって、卒業まで頑張って来いってだけの話しかないんだろう？　だったら、もう行く必要なんてない。そんなことよりも、俺は今こうしていたいんだ」

そう強く告げると、綾子ちゃんは言いかけた言葉を飲み込み、それ以上は何も言わなかった。母さんの性格なら、きっと自分のことより俺自身のことを優先しろと言うに決まっているだろう。そんなことは家族である俺が一番良く分かっていることだ。

だが、もうあんなことは嫌だ。あんな気持ちになるなんて、もう嫌なのだ。

「また家族失うなんて……俺はもう嫌なんだ」

俺は、ぽつりと力無く呟いていた。

時間なんていうのはとても無情なものだと思う。

結局、それから何日と経たないうちに、母は静かに息を引き取った。医師達による懸命な努力にも関わらず、母は昏睡状態から一度も目を醒ますことはなかったのだ。

ある朝、なんとなく胸騒ぎを覚えて目を覚ました俺は、まだ朝霧に包まれた街を一人導かれるように病院に向かった。思えば、なぜあんな行動を取ったのか説明はできないが、とにかく行かなければと思ったのだ。

夜間の緊急出入り口から入って、まだ誰も起きていない病棟を部屋に向かった。病室に到着し、心拍数を表示する機械を見れば、急激に心拍数が落ちているのが分かった。

そして俺は無言で痩せ細り、骨が尖ってきていた母の上体を抱きしめた。温かい体も、指先なんかはすでに生きている人間のものとは思えないほど冷たくなっている。

俺は、もう母が永くないというのを頭ではなく直感で理解した。

「母さん……」

その直後だった。心停止したことを告げる音が鳴った。

もう痩せ細った体のどこにも力などないと思えた体から、わずかに筋肉が弛緩したのが分かる。俺の胸に頭を預けるように、ゆっくりとしたものだった。

しばらくすると、だんだんと温かかった体から体温がなくなっていくのも、まだ直前までは生きていたことが分かる顔だったのに、死んだ顔になっているのも分かる。

心停止を告げる無機質な音が響くなか、俺は泣くこともなく、ただ強く、強く母さんの体を抱き続けていた。

第57章

母がこの世を去って、早三週間が過ぎていた。

不思議なもので、哀しいはずなのに未だ一滴の涙も出てこない。

それどころか、俺は自分がこんなにも冷血漢だったのかと思うほど冷静であったほどだ。

しかし代わりと言ってはなんだが、葬式のあった日、綾子ちゃんが涙で顔をぐちゃぐちゃにするほど嘆き悲しみ、泣いてくれた。まさしく号泣と言ってもいいほどだった。集まった親族ですら、あそこまで泣いてはいなかった。間違いなく、あの日一番泣いていたのは綾子ちゃんであろう。

沙弥佳が失踪した時もそうであったが、俺はあまり泣けない性分なのだろうか。もし綾子ちゃんのように泣くことができれば、いくらかはマシになっただろうか。

あるいは、母が死んだあの日、最期を看取ったのが俺であったからなのかとも思う。最期を看取ることができたのが幸運なことだったのか分からない。けれど、俺が母さんを看取ることになったのは事実であり、妹である沙弥佳の突然の失踪から一年足らず……わずか一年足らずでまた一人、俺は大切な家族を失ったのだ。それもまた確実なことなのだ。

法的なことは全てやっておくという父はそう言い残して以来、まともに顔を合わせなくなってしまっていた。考えてみれば父さんと母さんは、おしどり夫婦の代名詞ともいえるほどに仲睦まじかった。その母を失ってしまった父が仕事に逃げてしまったのも、無理はないかもしれない。

頼るべき相手を失った人間に対して、それは良くないだとか、そんなことをいうつもりもない。たとえ仕事に逃げたにしろ、それで死ぬわけじゃない。そうでもしないと自分を支えられないというの

なら、俺は構わないとすら思っている。
仕事人間であっても、生きているならこの先何かあるかもしれない。いずれは向き合わないといけない事実ではあるが、今はまだ無理というのなら、俺は何も言うことはない。死んで、もう取り返しのつかなくなるよりは遥かに……。
その反面で、仕事に逃げることができた父を羨ましくも思う。現実が辛いから逃げたわけだが、裏を返せば、半ば事実を認めているともいえるのだ。俺はといえば、そんな父と比べたらとても中途半端なのだ。
父さんのように、どこか逃げ込めそうなものがあるわけでもなく、それでいて、最期を看取ったにも関わらず、完全に母さんの死を受け止めきれているわけでもない。だが、心のどこかではやはり、事実は受け入れなくてはならないと思ってもいる。
最期を看取ったからなのか、父さんのように事実を認めたくなくても認めざるをえないのだ。
「九鬼さん」
「ああ」
「ここで少し一休みして、お昼にしませんか？」
「そうか、もうそんな時間か」
「はい。お昼とは言っても、もう大分経っちゃってますけど」
綾子ちゃんが指し示した時計は見れば、もう午後の二時を回っている。随分と時間が経っていたらしい。今日は休日で、俺は今綾子ちゃんと二人で母の遺品を整理しているところだ。
「そうだな。ここで一休みするとしようか」
「お昼は簡単なものでもいいですよね？」
「ああ。適当なので構わない」
綾子ちゃんが台所へ出て行くのを横目で見やった後、俺はため息をついた。遺品の整理というのが、思いの外大変だというのを思い知ったためだ。
腰に手をやって片付けられていく思い出の品々を見ると、再びた

め息が漏れる。最後に母と会話を交わしたのはいつだったろう。文化祭の始まる直前だっただろうか。

それに遺品といっても、それは別に大した物ではない。今までに必要に応じて買い集められた物に過ぎない。だというのに、その人物が使っていたというだけで、それらの品々は途端に思い出深い物に変わる。特に生前その人物が愛用していた物ほどだ。

今時古風なもので、誰かに手紙を書いたりするときは、必ず愛用の万年筆を使っていた。

クローゼットの中には、俺がガキの時分に母が好きでよく着ていた秋物のコートなんかがあったが、いつだったかそのコートをえらく汚してしまい、母をひどく悲しませたことがある。そのコートがもう使われることはないのに眠っていた。よほどのお気に入りだったということが、今ならよく分かる。

他にもお気に入りだったバッグや、お気に入りの靴にアクセサリー、そして指輪。いつだったか家族で旅行した際に、父が俺と沙弥佳に内緒でこっそりと母に買ったものだと聞いた指輪だ。

結婚指輪は形見として父が持っているが、俺は何もない。結婚指輪を除けば、最も大事にしていた物の一つであったそれを、俺も持っていてもいいだろうかと考える。

とにかく普段なら何も感じなかった物が、今になって色々な記憶を呼び覚まし、整理しようにも手をつけようもないという状態だったのだ。綾子ちゃんがいなければ、きっとこの四分の一だってはかどることはなかっただろう。

「九鬼さん、できましたよ」

遺品一つ一つをじっと眺めているうちに、台所の方から綾子ちゃんの声がかかった。自分ではほんの数分のつもりなのに、時計を見ればすでに三十分近くが経っていた。

俺は箱から指輪を抜き取ってポケットに突っ込み、リビングに向かったのだった。

二月末日。一年で一番寒いと言われる時期も終わり、徐々に暖かくなっていく頃だ。もちろん、まだほんの少しでも風が吹けば、すぐにでも温かい室内に入り込みたくなるのは言うまでもない。風が穏やかで、晴れている日であればの話だ。そんな二月最後の週末を利用して、遺品の整理をしていたのがつい二、三日前のことだ。

もう一つ。このほどめでたくも俺の留年が決まったという、ありがたい電話もあったのも同じ日だった。

それもおかしな話で、電話をしてきた小町ちゃんは理由をつけて学校を長く休んでいた俺に、どことなく申し訳なさそうにそう告げたのだ。それが何を言い表そうとしていたのは分からない。ただ卒業させてやれなかったからなのか、はたまた母や妹のことを気遣ってなのか。

俺は、春からの学校はまだどうするか決めていないということだけ告げ、電話を切った。実際のところ、もう学校なぞ辞めてもいいという気になっていたし、進学するにしても、今時なら高校卒業認定試験を受ければ問題はない。後は実力次第なのだ。

かといって、今すぐにでも学校を辞めるというのも嫌という、矛盾した気持ちもある。とにかく、今は将来のことも含め、自分の気持ちと向き合うべき時であることは間違いない。

そして、もう一つ気掛かりなことがあった。将来という漠然としたものではなく、もっと身近で、はっきりと目に見える形でのことだ。

そんなわけで俺は今、ある喫茶店にいた。今流行りの落ち着いた空間というよりは、もっとカジュアルで春から秋頃になると晴れの日には、オープンカフェに早変わりするというスタイルの喫茶店だ。経営時間を見れば、夜になると所謂ミッドナイトカフェとしてもや

っているらしい。
昼の一番忙しい時間帯も過ぎて、店も一段落といったところだろうか。平日だが大学生のカップルかなんかが店内に何組かいるのが話し声から分かる。普段ならば、こんな場所に一人でなんか来ることはないが、俺は一人、この店の奥まった席である人物を待っていた。
というのも、その人物がこの店を指定したためだ。おまけに座る席まで、この席を座るよう指定したのである。時間を見ようと店内を見回すが時計が見当たらない。キシマイ堂なんかもそうだが、この手の喫茶店は時計が置かれていないことが多い。客に、せめて店の中にいる時くらいは時間を忘れてくつろいで貰おうという配慮からだ。
ともかく、その人物との待ち合わせの時間は午後三時ということだが、仕方なくテーブルに置いた携帯を見ると、約束の時間はすでに過ぎていた。
店内に一際大きな笑い声が響いた。この店の店長らしき人物と、カウンターに座った店の常連らしい人物が、口を大きく開けて笑っている。その光景を横目で見ながら、コーヒーに口をつける。
すると話に区切りがついたのか常連の客が立ち上がり、こちらに向かって歩きだした。最初はこちらの方にトイレがあることから、そちらに行くのかと思いきや常連客は、俺の前にきて対面の椅子に座ったのだ。
「やあ。君が九鬼君かい？」
男の身長は、百七十五センチ前後といったところだろうか。今時あまり流行りそうもない渋い緑色をしたロングコートを羽織り、若い頃のマイケル・ジャクソンでも意識したような頭をしている。この男が待ち人に違いないようだ。
「あなたが加藤さん？」
「ああ、僕が加藤だ。どうやら君で合ってたみたいだな」
テーブルをぐっと乗り出し人の顔を舐めるように眺める男に、思

わずこちらから少し身を引いてしまった。
「ああ、ああ、ごめんごめん。ついつい僕の悪い癖が出てしまった。僕はね、人の顔を眺めるのが癖なんだよ。だから悪気はないんだ。気を悪くしたんなら許してほしい」
「いえ。あの、それで……」
放っておいたら一時間は一人で喋っていそうな加藤に、俺は前置きもなしに聞いた。この手のタイプはさっさと本題に入った方がいいと判断してのことだ。
「うん、例の男の件だね」
例の男というのは、あの黒田のことだ。
母の死に対して、決して全てを受け止めたわけじゃない。しかし、ある種の区切りのようなものがついたのも確かで、おそらくは、日々衰えていく母を眼にしていく中、俺もいつしか母の死というのを受け止めていたのかもしれない。まだ納得しきっているわけではなくとも、母の死が俺に新しい道を照らしてくれたような気がしていた。
いや、むしろ逆にすっきりした部分が確かにあるのだ。今回のことは去年の沙弥佳の失踪から一連の流れになっている。あいつがいなくならなければ、きっと母は死ぬことはなかった。
俺はようやく、身の回りで起こった出来事を冷静に判断できるようになっていた。一年近くもかかってしまったと見るべきなのか、それとも、一年で済んで良かったと見るべきなのかは分からないが。皮肉にも母の死というショッキングな出来事が、俺をようやく立ち直らせるに到ったのだ。
それで今回、原点に立ち返り、未だ警察すらなんの成果もあげていない沙弥佳のことを、自分なりにできることをやってみようと思い立った。
まず沙弥佳の事件を担当しているはずの、畠とかいう刑事に連絡を入れて捜査はどうなっているのか探りを入れてみた。予想した通り、未だ、なんら情報が得られないということだった。もちろん、

あまり期待はしていなかったとはいえ、少しばかしの期待がなかったといえば嘘だ。なんらかの手掛かりが得られて、捜査が進展しているのに越したことはない。

そうなると次は自分のことだ。今までは、まず沙弥佳の容姿を含めた、能動的な事件として捉えていた。しかし実際には、ことあるごとに真紀が口にした、俺のせいで巻き込まれた受動的なものだったのではないかということだ。

となるとだ。いくつかの疑問が浮かんでくる。

まず、なんで俺なのかという点だ。自分で言うのもなんだが俺にはとりわけ、これといったものは持っていない。その点については、あの黒田とかいういけ好かない奴が俺の生存本能がどうたらとうんちくを語っていたが、どこまで信じていいものかは分からない。

まぁ、その点はこの際置いておくとしよう。仮にそうだとして、去年のいつ頃からか、一切黒田の姿を見かけることがなくなったというのには、いささか疑問が残る。あれだけ熱心に俺をスカウトしにきていた奴が、この何ヶ月もの間、一度たりとも姿を見せていないというのは、どうにも解せない。何か理由があると見ていいだろう。

ただ、俺が引きこもっていたことに対して評価が取り消されたというのなら、それはそれで結構なことだが、一応は調べてみておいたほうがいいと思ったのだ。そこで俺は、以前依頼しておいた黒田という人物のことを知るべきだと、遅まきながら青山に連絡した次第だった。

久しぶりに俺からの連絡を受けた青山は少しばかし驚いた様子ではあったが、直ぐさま対応してくれ、今日この店のこの席で、加藤という人物が来るからとだけ告げたのだ。よって、目の前の加藤なる人物がどんな人間なのか、どんな顔をしているかなどは一切分からなかった。

「まず彼の名前だけど、本名は黒田健太郎というらしい。年齢は三十歳で、職業はスカウトマンだ」

「スカウトマン」
　奴が名乗ったままのもので、本当にそんな職業があるのかと思わず疑いたくなったほどだ。とりあえず、黒田が自ら言った素性に関しては本当のようだ。
「ああ。どうも雇われのスカウトマンらしい。ようするに、スカウト専門のプロといったところかな。こんな職業があったなんて僕も知らなかったよ」
　軽薄そうな笑い顔をたたえながら加藤が言う。俺が頷き、加藤が続ける。
「スカウトの内容そのものは実に多岐に渡るが、特に多いのは、海外への特殊技巧に関してが一番だった。
　ちなみに特殊技巧というのは、おおざっぱに言うと軍人や、ある一定の訓練された技能を持った人間をを雇って派遣したりすることを言うらしい」「軍人を派遣って、つまり」
「つまり兵隊として、戦地に送り込む仕事ってことだよ」
　なんだか憂き世離れした言葉の数々に、俺はどう答えればいいのか分からずに戸惑った。本当だとしたら、黒田なる男は人を兵器という形で売りさばく、武器商人みたいなものではないか。初めから黒田のことは信用していたわけじゃないが、やはりとんでもない話だったようだ。
「黒田は、その方面のフリーエージェントと呼ばれる類いのものだ。あ、フリーエージェントってのは、委託先から仕事を独自に仕事を請け負うような奴のことね。
　彼にはいくつものお抱え委託元があるようでね、聞けば、君も彼から接触を受けたんだってね」
「そうなんだ。でも奴の言った言葉にはいまいち信用できなくて青山に頼んだんだ。
　とりあえずあの男が仕事請け負い人だというのは分かったけど、依頼主は分かるかな。奴は自分の上司が評価したから来たんだと言っていた。だったらフリーエージェントというわりには組織だって

るような気がするんですが」
「うん、君は着眼点がいいよ。君の言う通り、彼はフリーエージェントとは言うが一人でやっているわけじゃない。むしろ、ある人材派遣の会社に勤めているみたいだからね」
「人材派遣会社？」
加藤が頷く。俺達の話し声はだんだんと、周りを意識するように小さくなっていって、気付けば互いにテーブルに前のめりになっていた。
「人材派遣の総合商社とでもいえばいいのかな。もちろん、商社というからには扱う人材は多岐に渡る。だから彼以外にも同じような人間は何人かはいるはずだよ。
きっと黒田はその部署において、最もバックグラウンドがグレーに近い人間なんだと僕は思う」
「なんでそう思うんです」
「まず彼の経歴だね。彼はH県の高校卒業後に自衛隊に入っているんだけど、そこで二年間籍を置いた後に日本を出てフランスに渡っているんだ。
フランスは先進国の中でも、最も多く移民を受け入れている国だ。ほら、あの国じゃスポーツ選手なんかはサッカーに限らず黒人は決して珍しいものじゃないだろ？　その理由が地中海を挟んだ対岸、アフリカからの移民が多いせいなんだ。
事実、パリでは市内の人口はせいぜい二百万から二百五十万程度の人口なのに、その都市圏の人口まで入れれば、たちまち千二百万を数えるんだ。とはいっても、かなりの割合で移民なんだが。ま、東京での二十三区と東京都全体の人口の対比とでも思えばいいよ」
「それと黒田の話がどう繋がるんです」
「うん。彼のバックグラウンドにはそういった国の事情を知っておいた方が、理解しやすいと思ってね。
彼は自衛隊にいた。特に料理人になりたいわけでもない、日本の軍隊といっていい自衛隊員がそこに行く理由はただ一つだよ」

「……外人部隊か」
俺は閃いたように言った。より正確にいうなら、それしか思い浮かばなかったのだが、どうも当たっていたらしい。加藤の口がニヤリと歪んで首を縦に振る。
話には聞いたことがあるが、実際にどんなものかは良く知らない。ただ、軍隊やそれらに近い機関に所属していた人間にとっては、フランス語さえ理解できれば後はどうにでもなるらしい話は聞いたことがある。
「この黒田は、フランス外人部隊に九十年代に数年間だが所属した過去がある。黒田から漂う、あの得体の知れない雰囲気はその頃に培われたものだと思う。
なんせその頃は、アフリカの内紛ある場所にはフランス軍は必ず姿を見せていたからね。まあ、それは別に九十年代から始まったものでもないが」
「それで黒田が軍を退役した後は？」
「退役後は民間の、ある仲介会社に入ったらしい。ようするに全く関係ない者同士が権利を争うことになった場合、第三者からの視点でそれらを上手く取り纏めるのが仕事の会社だ。この会社のグループに、その人材派遣の会社があるんだ。
ところがだ、問題はここからだ。彼の入ったこの会社、日本ではなくフランスにある会社なんだが、もかなり密接にフランス軍と関係があるみたいなんだよ」
おかしいだろと言いながら俺に同意を求める加藤だが、何がおかしいのかいまいちピンとこない。
俺の態度を悟ったのかどうかは知らないが、加藤はもはや囁くような小声になり、饒舌になっている。知った秘密は誰かに喋りたくて仕方ないといった風だ。
「だって考えてもみなよ。彼はフランスに行ってたかだか数年、さらにその半分近くがアフリカの戦線にいたんだよ？　外人部隊にいるくらいだからそりゃ言葉も理解はできるだろうし、喋れるだろう。

だけど、それで他人の権利なんかの仲介なんてできると思うかい？
僕はとてもじゃないけど、そんな仕事やれないと思う。
きっと会社と軍が繋がってることから、何か特別なコネクションがあったんだと思うんだ。そうでもないと、言葉巧みに人の仲介をして、そこから契約に持ち込むなんて仕事につけるわけがない」
加藤の言う通り、確かにそうかもしれない。日本人同士にたとえれば良く分かるが、片言しか日本語が喋れない外国人に、仲介なんてしてもらいたいだなんて思わないし、思えない。やれるとしても、せいぜい通訳かなんかの仕事くらいだろう。それでも、きちんと熟せるのか怪しいものだ。
その後の加藤の話をまとめると、黒田はそんな不透明な経路で会社に入ることになった。そこには軍との癒着があった可能性があり、社会に口外するには憚られるような部門があるのでは、とのことらしい。
おそらく、黒田の言っていた機関というのもそれだ。奴の口からは断片的な情報しか語られることはなかったが、間違いないだろう。
さらに加藤によれば、その会社は四年ほど前から日本にも入ってきているようで、それどころか世界中に関連企業があるらしい。黒田の帰国も、この時期と見事に呼応しているという。
そうなると奴が俺をスカウトしにきたというのは、軍事方面へのスカウトと見ていいかもしれない。考えてみれば、戦場において死ぬのは当たり前の世界だ。果たして俺に、そこまでのものがあるかは分からないがそんな世界で生き抜くには、確かに強靭な生存本能が必要とされるのは間違いないだろう。
奴が俺との接触をはかったのは、ほぼそう見ていいかもしれないが疑問がある。なぜ俺に白羽の矢を立てたかということだ。俺はそんじょそこらにいる一高校生の一人に過ぎない。今までだって、格段目立って何かしてきはいないし、特別な才能があったわけでもない。
どうやって俺を知ったのか、ということも気にはなる。また、奴

は今井とやり合ったことすら知っている様子だった。奴とのことは、新聞にすらならなかったのになぜ今井のことを知ったのかも疑問だ。

黒田は今井との一件以来、俺に接触してきた人間がいるとも言っていたが、その人物のことは何も知ってはいなかった。むしろ俺に聞いてきたくらいなのだ。

ぱっと思い浮かぶのは、やはり真紀と斑鳩の二人だ。この二人はどう考えても素性が知れない。あるいはどちらかではなく、二人ともという可能性も否めない。勝手にどちらか一人と決め付けていたが、片や傷害事件だったとはいえ事件を世間的にほぼ潰し、揉み消したような奴だ。片や、得体の知れない誰かとの繋がりを持っていて、全くの信用を持てない奴なのだ。

これら二人が、もしかしたら俺を欺いている可能性は決して無視できない。おまけにあの二人、どうも顔見知りらしいというのもそれを裏付けることができそうだ。確たる証拠はなくとも、二人を信用してはいけないということだけは分かる。

ただ真紀の方からも、俺が黒田から接触されたのではないかと聞かれたことがあることを考えれば、真紀と黒田の二人は、敵対関係にあるとみていい。必ずしも敵対関係とはいえないかもしれないが、少なくとも両者は、互いに牽制しなければならない関係にあるのだけは確実だ。

両者の目的がはっきりとしないので、なぜそうなったのかは分からないが、俺が何かしら関係しているということだけは理解できた。

しかし残念ながら、これらが沙弥佳に結びつく理由でないことに、少なからずの落胆はある。おまけに、まだはっきりとした目的も分かったわけでもない。ようやく俺は第一歩を踏み出したばかりなのだ。今はやれること、思い付く限りのことをやるまでだ。

「なあ加藤さん。スカウトするというのが……なんていうのか、いかがわしい場合だったりするだろうか」

「ん？　どういうこと？」

「つまり、危険な職業へのスカウトってことだよ」

「うーん、どうだろう。日本ではそんなの聞いたことないからなぁ。だがアメリカなんかには、少なからずケースはある。だが、もっと直接的だな。たとえば、軍関係者がその人物のもとを訪ねたりっていうのはあるかも……というより、実際にあるよ、そういうことは。

けれども、仮にも民間を名乗っている会社が軍や工作員といったもののスカウトとなると、ちょっと考えにくい。というのも、民間の企業という表社会に属した機関がそれを仲介するより、独自にスカウトした方がはるかにメリットが多いからなんだよ。

デメリットとしては、まず民間を間におくと、場合によっては軍などの機関が隠し持っている秘密の漏洩なんかがないとは言いきれないしね」

「なるほど。確かにそれも一理あるか」

お互い頷き合いながらコーヒーに口をつけた。加藤と話し出してからというもの、互いに話してばかりで、いつの間にか口の中がからからになっている。

「だが……これは僕の推測だから確かなことじゃないから鵜呑みにはしないでもらいたいが、軍との関係をもった企業なら話は違ってくるかもしれない。

今回のことに限っていえば、たかだか権利仲介の会社が世界中に支店や関連企業を持ってるってのも、少し大袈裟のような気がしないでもないんだ。本当にそれだけで、世界中に展開できるほどの資金を持てるのか、という疑問はあるからな。

権利仲介なんてのは表向きだけで、実は裏では何か、もっと巨大なビジネスが動いてるんじゃないか、そうみれなくはない」

「そのために、俺みたいな人間をスカウトしたりするものかな」

「うーん、あくまで僕の推測にすぎないから、そこらへんはなんとも言えないなぁ。

だけど軍と繋がることで、そこに関係した仕事のためにスカウトした……そうとしか思えないのも確かだな。もしそうだとしたら、

向かう先は軍隊であるのも明確だ。軍隊ってのは結局、戦争しないと儲からないんだから」

加藤はやれやれと肩をすくめ、首を振った。

しかし、そう言われるとやはり奴がスカウトしようとしたのは軍だとか、そっち方面であると考える方向が良いかもしれない。奴からの断片的な情報だけではまだはっきりと断定はできないが、とりあえず公的な機関だと初めて会った時に言っていたし、奴のいう才能という条件にも合う。こう考えてみれば、あながちでもない。

「加藤さん。ぶしつけなお願いがあるんですが、良ければもう一つ頼まれてほしいことがあるんだ」

俺は今取り巻く人物達を知るため、目の前の男に連中の素性をもっと調べてほしいと頼みこんだ。最初から駄目元ではあったが、彼は心地良く引き受けてくれた。

「いいさ。なんたってあの青山君の友人だ。ただ、他にもやらなきゃならないことがあるから、少し時間はかかると思う。それはいいね？」

加藤はウインクしながら人差し指を立て、任しておいてよと付け加える。そうして彼は席を立って離れていった。去っていく後ろ姿を目で追いながら、俺も俺で、やれることをやるべく席を立ったのだった。

時間は過ぎていく。誰もその事実に気付くことなく、ある時、ふと時間が経ったのだと気付かされるのだ。

青山の紹介で加藤と会ったのが二月末。それからすでに一月以上が経とうとしていた。カレンダーを見れば、今日から四月になったというのに気付いたのだ。

俺はこのところ、突然失踪してしまった沙弥佳のことだけで頭がいっぱいだった。もうクラスメイトらは一人残らず高校を卒業し、それぞれの道を歩み出している。当然といえば当然だが俺は留年が決まってい
て、今年もまた高校生をやることになっている。

しかし肝心の本人は全くといっていいほど、学校には興味がなくなっていた。この一ヶ月の間、沙弥佳に関することをひたすら調べているといった状態だ。

あの日、綾子ちゃんの家の前で走り去っていった姿を最後に、沙弥佳の姿は見ていない。そこで俺はまず綾子ちゃんの家周辺から、しらみ潰しに聞き込みを始めたのだ。

俺にとってはとても大切であり、昨日のように思い出せることであっても、世間からすればすでに一年も前という感じで、始めは尋ねてきた俺に怪訝な顔を向けてこられたものだった。もちろん今もそれは変わらないが、人間いくらもすれば慣れてくるもので、今ではあまり気にならなくなってきた。

中には、なぜか俺がその時の家族だと知ったようで申し訳なさげに答えてくれた人もいて、最近では逆にそいつを利用してやっているほどだ。沙弥佳に繋がるかもしれないことなら、もう何だってやってやるつもりだ。

沙弥佳を失ったショックは未だにあるが、いつまでも凹んでばかりもいられなかった。あいつがまだ死んだものと決まったわけではないし、生きているとすれば俺たち家族と逢いたいと思っているに違いない。そう思うと、いても立ってもいられなくなる。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

起こされてリビングに降りてきた俺に、綾子ちゃんが挨拶をしてきた。

顔を洗い終えて席につくとすでにテーブルの上には朝食である、真っ白なご飯と味噌汁、それと昨晩の残りものの魚の煮付けが用意

されていた。ここのところ、綾子ちゃんも家事が板についてきているのか、一切の無駄がなくなっているように思う。今となっては、俺や父さんなんかよりも家のことを知り抜いているだろう。

「いただきます」

「いただきます」

二人で手を合わせ、箸をとった。

母が死んで以来、朝はこんな風に二人で過ごすことが当たり前になっていて、父はもはや、まともに家に寄り付くことはなくなっていた。

たまに深夜に家に帰ったきた音が聞こえはするが、朝、俺が起きる頃にはもう家から消えているのだ。この家には沙弥佳と、最愛の妻の思い出が詰まっているわけだから、それらを思い出すと、とても正気ではいられないのかもしれない。そう、かつての俺のように……。

「九鬼さんは今日も行かれるんですよね？」

「いや、今日はそうしたいのはやまやまなんだが、他に用事があるから聞き込みはしない」

「そう、ですか」

「ああ。前々から頼んでおいたことがあったんでな。でもどうしたんだ。何かあるのか？」

「い、いえ、そうじゃないんだけど、ただ九鬼さん、ここ一ヶ月くらいの間、毎日休むことなく出かけてますよね？　あまり無理はしないでくださいよ？」

「そうだな。重々承知したよ」

軽い冗談のつもりで言ったつもりだったが、綾子ちゃんはどこか浮かない顔のままだ。

「……大丈夫だ、無理はしないよ」

再度、改めて言い直した。というのも、綾子ちゃんの言い分も分からなくもないからだ。

俺は彼女の言う通り、この一ヶ月の間あまり寝ていないし、食事

もせいぜい朝と夜だけで二回しか食べていない。時には朝食べてから次の日の朝まで食べなかった日もあったほどだ。決まってそんな日は、綾子ちゃんがうちに来れない日でもある。おまけに睡眠もけして多くなく、綾子ちゃんが心配するのも無理はない。

けれど不思議と食欲も眠気ともに、あまり感じないのだ。何かに集中していると空腹感や睡眠を感じにくくなるというが、体験した限りでは本当のことのようだ。

いや正確には、全く感じていないわけではないが、それらを摂りたいと思わなくなるというのが正しいだろう。欲求が限界にきたときのみ、最低限の睡眠と食事をとるといった生活になっているのだ。

「……悪いな綾子ちゃん。君には迷惑ばかりかけちまってる。もし疲れているなら、一日二日くらい休んだって良いんだ」

「そんなことはないですよ。だけど、むしろ九鬼さんの体の方を心配してるくらいです。お昼もあまり食べてないみたいだし……」

バツの悪いこと、この上ない。綾子ちゃんは、とっくに俺の行動なんてお見通しだったのだ。

「……返す言葉がないってのは、こういうことを言うんだろうな。ああ、確かに君の言う通りだけど、あまり苦にならないんだ、不思議とね。

だけど、本当に無理はしてないんだ。やっていると、常に眼と脳みそが冴えた状態になってるだけだ。パワーダウンしたらきちっと食べてるし、寝てるからな」

「ならいいんですけど……」

とは言うものの、綾子ちゃんの顔は決してそうは言ってない。これがもし反対の立場であれば、俺としても同じことを思ったに違いないので、仕方のないことだ。俺はこの話題はもう終わりだと言い聞かせるように、茶碗の白米をかきこんでいった。

朝食を終えて一服しながら俺は、綾子ちゃんの準備を待っていた。今日は珍しいこともあるようで、綾子ちゃんは実家の方にどうも

用事があるらしく、昼前には帰らなければならないということだった。そこで、俺も駅までは一緒に行こうという話になったのだ。

今日の予定として、街に出て加藤と会わうことになっている俺は、電車に乗らなければならない。そして彼女は駅までは一緒の方向なのだから、久しぶりに一緒に歩こうという綾子ちゃんからの提案だった。

ちなみに綾子ちゃんは今、自転車を使って毎日うちに来ている。

「お待たせしました」

「いいさ。それじゃぁ行こう」

「はい」

家の鍵をかけ、家を出る。空は雲一つなく晴れ渡っていて、気温も高く穏やかな一日のようだ。

気を紛らわすために、綾子ちゃんと他愛ない話を彼女の自転車を押しながら駅まで歩く。それでも、妹の沙弥佳と母の話題は避けていた。さすがにこればかりは互いに気を遣うため、話題にすることはない。そういう意味においては、俺と綾子ちゃんの関係は一年前と比べ、良くも悪くも変化していると言える。

良い変化としてはまず、沙弥佳がいなくなったことでどん底にいた俺を、救い出してくれたということだ。このことに関していえば、感謝してもしきれない。おかしな話かもしれないが、あのおかげで綾子ちゃんとは、なおのこと歩み寄ることができたのだ。

悪い変化といえば、皮肉にもそのおかげでもう一歩、互いに歩み寄れないでいることだろうか。俺からすると、どうしても今のこの関係は、沙弥佳がいなくなったからという種の、同情にも似た前提があってこそだと感じられて仕方ないのだ。

もしかするとこんな風に考えているのは俺だけで、綾子ちゃんは何の気にもしていないかもしれない。けれど、どうも自分には割り切れずにいる。

ふと、そんなことを考えているといつの間にか会話は途切れており、綾子ちゃんが顔をこちらに向けて俺を見た。その何気ない仕種

に俺は、思わずドキリとさせられる。
自分の中ではもはや家族に近い感覚になっていた綾子ちゃんに、やはりそれとは別に、女としての綾子ちゃんを見たからだ。沙弥佳の紹介で知り合って以来もう一年半になるが、あの頃と比べるといくらか大人びてきているのを感じたのだ。
女の一年は男の二年、三年と同じだとどこかで聞いたことがあるが、今の彼女を見れば思わず納得してしまいたくなる。綾子ちゃんは俺を見てうっすらと笑みを浮かべ、どうしましたと聞いてきた。
「いいや、なんでもない」
肩をすくめて、かぶりを振る。
一年……この一年のあいだ、あまりに劇的なことが多すぎて、本当に一年も経ったのかと思わざるをえない。
家に寄り付かなくなった父、母の死、そして沙弥佳の失踪も、俺にはここ一週間かそこらの出来事としか思えないほど、濃縮された一年だった。だが、いい加減全てを受け入れ、前に進むべき時だ。
もう泣き寝入りも、逃げることもしたくない。俺を取り巻く状況を誰一人教えてくれないというのなら、自らの足を使ってでも調べてやろう。
俺は新たな決意を胸に、前を向いた。

第５８章

遠くの空はどんよりとした暗い雲がかかっていて、真下の街は今にも雨が降り出しかねないほどだった。

しかし、その方角から湿った空気のまじった風が、こちらに向かって吹いてきている。おそらくもうしばらくすればここら一帯にも、暗い雲が降りてきて雨を降らせることだろう。空は気まぐれというが、全くだ。朝はあんなに良い天気だったというのに。

それを理解してか、道行く人々もどこかせわしげに歩いている。俺はそれとは別の理由で人込みに紛れるように、雨が今にも降り出しそうな街に向かって足早に歩いていた。

（くそ。あの野郎、どこまで着いてくるんだ）

進行方向にあるビルの大きなガラス窓を、忌ま忌ましげにチラリと見て毒ついた。

駅で綾子ちゃんと別れ目的地の駅に着いてからというもの、どこからか視線を感じた俺は、信号待ちをしていた時に何気なく見たガラス鏡に、不審な人物が写っていたのだ。

最初はなんとも思わなかったものの、多少込み入った場所にさえその人物がついてきているのを悟ると、目的地である前に加藤とあった喫茶店を通りすぎ、その人物を確かめてやろうと思ったのだ。しかし、つけてきている男は一向に俺から離れようとはせず、気付けばいつの間にか、大分離れた街にまで歩いてきてしまっていた。

どうして良いものか考えているうちに俺はバス停近くにおり、そのバス停で足を止めた。普段はあまりバスを使わないため良く分からないが、一つ言えるのは、この路線のバスは家の近くを通っている路線であるのは間違いないということだ。

（確かこの路線は……）

バスの巡回するルートと停まるバス停を見ると、通り過ぎてきた

加藤との待ち合わせ場所にもほど近い、電車の路線に繋がる場所にも停まることが分かる。

バスを待つふりをしながら、さりげなくチラリと横目で歩いてきた方を見ると、先ほどの男は小道に曲がっていった。しかし、これまでずっと着いてきたと思われる男が、急に変な道に入り込むなんて明らかに不自然だ。曲がっていった小道の先には、今いる道よりも大きな道路に繋がっているが、ここまでにいくらも向こう側に行く機会はあったのだ。よってさっきの男は、まだそこらにいると見ていいだろう。

待つことわずかに一分ほどでバスが到着した。俺以外に乗る客が誰もいなければ、降りる客もいない。

がら空きの車内に乗客は俺を含め、わずかに三人しかいない。窓側の席に座って後ろのほうを確認すると、野郎が焦ったのか小道から出てきたのが見受けられる。男が急いで走ってきているが、バスに乗ったのが俺一人というのもあるのか、ドアはすぐに閉められて発車した。

（ふん、ざまあみろ）

とりあえずは三駅先のバス停までは落ち着けそうだ。しかし、今井の一件以来用心深くなっていた俺は、これで安心したというわけではない。

それにしても、先ほどの男は何者なんだろう。人に尾行されるなんて初めてのことなので、困惑はあっても仕方のないことだが、あの男が何者かという疑問は放ってはおけない。

黒田の仲間だろうか。思いつく限りでは、それが一番可能性が高い。今まで奴が誰かと一緒にいたのを見たことはないが、加藤から聞いた話から推測すれば仲間がいないというわけではないだろう。奴らもついに業を煮やしたというわけだ。

あるいは、真紀や斑鳩達の仲間というのも考えられる。しかし、現時点ではやはり黒田の仲間かもしくは、それに近い人物という風に見るのが自然だろう。今までもっとも強引な手口を使ってきたの

は、奴しかいないからだ。
車内に次に停まるバス停がアナウンスされると、俺は降車を知らせるボタンを押す。いくらもすると、あっという間に目的のバス停に着いた。
乗車賃を払ってバスを降りる。念のため周りを見回すが、先ほどの男のような類いの奴は見受けられない。あの男以外にも仲間がいて、先回りしていないとは言い切れないと考えられたためだ。
幸い、そういう連中はいなかったようだがまだ安心はできない。俺は足早にタクシー乗り場へと向かい、ドアを開けて客を待っていたタクシーに乗り込んだ。
始めは電車というこも考えていたが、電車だと最悪、駅に連中が待ち伏せしていないともいいきれない。せっかく男を撒けたかもしれないのに、間抜けなことはしたくない。そこで俺は急遽、タクシーを使うことにしたのだ。
運転手に行き先を告げると早速、運転手はアクセルを踏んで車を発車させた。やや荒い運転だったが、運転手の親父はどことなく喜々とした様子で最短ルートと思われる道を走る。もしかしたらこの親父は今でこそタクシーの運転手をしているが、昔は無免許運転で、名のある道という道を爆走していたのかもしれない。そう思えるほど、ハンドルを握っている時はその前と比べて別人に見えたのだ。
バスと違い、最短ルートを走ることのできるタクシーは、わずか数分で目的の喫茶店近くまで着いた。最短ルートであったのと、信号が運良く全て青だったということもあるだろう。タクシーを乗り捨てた俺は、足早に喫茶店へと向かった。もちろん、例の男がいないかさりげなく周囲を確認するのも忘れない。
喫茶店に入ると、ようやく一心地つけた気になった。店内に連中の一人がいるという可能性もあるが、多分大丈夫だろう。もしここに張っていたなら、最初から俺を尾行なんてしたりするはずはないと踏んだのだ。
一月ほど前に来た時と同じ席に座り、加藤を待つことにする。す

でに約束の時間は過ぎているが、前回は店内にいたにも関わらず、時間を過ぎてからやってきた男だ。少しくらい遅れても構わないだろう。

店員が注文を聞きに席に来て、冷水と氷の入ったコップを置く。別に何か飲みたいわけでも食べたいわけでもないが、まぁ仕方ない。俺は適当にメニューに目をやってブレンドコーヒーを頼んだ。

店員が消えると、俺はため息を漏らした。それも当然だ。なんだって俺が人につけられなくてはならないのか。その理由が全く分からないのだ。さっきは黒田の仲間という可能性を考えたが、全くの第三者という可能性はどうだろうか。真紀や斑鳩にしても、黒田にしてもそうだったが、唐突に訳の分からない連中が俺の周りに現れやがる。そんな経験から考えれば、その可能性もなくはない。

しかし、素性がいまいち知れない連中から、こうも執拗に気をかけられて浮かれるほど俺はおめでたくない。何か理由があるはずなんだろうが、やはり頭をどう捻ってみても答えは出てこない。

「お待たせしました。ブレンドコーヒーになります」

コーヒーを運んできた先ほどの店員に頷き、携帯の時計で時刻を確認する。まだ加藤が現れる気配はない。待っていればそのうち来るだろうと、俺はコーヒーにミルクを入れてかきまぜ、一口飲み込んだ。

熱い液体が喉を下りていく感覚に不思議な安堵を覚えると同時に、突然携帯が鳴りだした。俺は携帯をとってかけてきている主を確認すると、珍しく青山からだった。

「もしもし？」

『九鬼くん？　今テレビ見れる？』

珍しついでに青山は、落ち着きなくまくし立てるような声で言った。

「どうしたんだ、そんなに慌てて。今は外出してるところだから、テレビは見れないぜ。今から加藤と会うところなんだ」

俺がそう言うと青山は、受話器の向こうで息を飲んだ。

『九鬼くん、落ち着いて聞いてね。その加藤さんのことなんだけど……』

「ああ、加藤がどうかしたのか？」

青山は、自分を落ち着かせるように一度深呼吸をした。

『加藤さんが亡くなったらしいんだ』

「なんだって？」

『僕もまだ信じられないし、まだ確認もとれてないから良く、ううん。もうテレビでやっているから間違いないんだけど』

いまいち言っていることがちぐはぐな青山だが、要はまだ混乱しているのだ。しかし、かくいう俺もいささかショックがある。ましてや、今日会う予定の人物だったのだからそれも当然のことだ。

俺は話を分かりやすく説明するよう、青山を落ち着かせる。

『……一号線で起こった死亡事故のニュースを見たら、それが加藤さんだったんだ。ちょうど横断歩道を渡ろうとしてたみたいなんだけど……』

「突っ込んできた車に轢かれた、ということか」

『うん……』

しかも、その事故があったのが今日の朝早くで、ほとんど人通りのない時間帯だったらしい。そんな朝早くに、加藤が何をしていたのか気にならなくもないが、彼の生活パターンを知らない俺には皆目見当もつかない。

青山の話では事故の目撃者はおらず、朝の七時頃に散歩をしていた老人によって発見されたという。残念ながらその時にはすでに、加藤の息はなかったらしい。

ただ現場の状況から少なくとも突っ込んできたのが車であり、猛スピードであるがゆえ、ほとんどブレーキがきくことはなかったということだけは間違いないのだという。

つまり、横断歩道を渡ろうとした加藤に、突如として横から猛スピードの車が突っ込んできたというわけだが、どうも腑に落ちない。今日これから会おうという日に限って、突然こんなことが起こるな

んて出来過ぎな気がしてならない。こうも都合良く人が死んだりするものなのだろうか。

「青山。事故っていう話だが、本当にそうだと思うか？」

『うん……昨日、チャットで加藤さんとは話すことができたけど……本人はやけに興奮気味だった印象があったんだよ。加藤さん、チャットではいつも冷静な雰囲気な人だから、普段とはちょっと違うなくらいにしかその時は思わなかったんだけど。

ほら、チャットは文字だけだから文面通り、本当に冷静に文字を打ってたとは言い切れないけど、その加藤さんが昨日に限っては、妙にテンションが高かったのは多分間違いないよ。あの後、朝早くに用事があるからって落ちたんだけどね』

「何かチャットで言ってなかったか？」

『うーん……あ、そういえば』

青山は少しの間うねるように考えていたが、何かを思い出したのか閃いたように言った。

『何かって言えるほどのことじゃないかもしれないけど、加藤さん、変なこと書いてたんだよね。良くある独り言みたいなレスだったからなんとも思わなかったんだけど……』

「そいつを教えてくれ」

『うん、ちょっと待って。確かログが残っているはずだから』

受話器の向こうからカチカチという、クリックする音が聞こえてくる。

『あったよ。”僕はとんでもないことを知ってしまった”、”だけど知ったところでどうしようもない……”

これだけだけど、この後も妙に子供がチャットしてるみたいに興奮気味だったんだ。そして落ちる直前に……”これ以上は彼もどうしようもできないだろう”っていうログを書き残して落ちたんだよ』

「彼ってのは」

『加藤さんは、いくつか同時に仕事をこなしていたからなんとも……』

「そうか。とんでもないっていうのはどういうことなんだろうか」
『分からない。だけど、なんとなく九鬼くんの依頼したことに関係しているような気がするけどね』
これが対面しながら話していたなら、間違いなく俺は肩をすくめていたことだろう。俺が関係していたなんてなんとも光栄な話だが、その結果、人間人一人が死んだとなると素直にそう思えるはずもない。
とはいえ青山の言う通り、あながちでもないとも思える節があるのも事実ではある。加藤が死んだのがもし、黒田や真紀、斑鳩のことを調べていたからだとしたら……。その可能性がないとは言い切れないのだ。
もちろん、これは俺の勝手な推測に過ぎない。加藤は、今回の件以外にも仕事があるようなことを言っていたので、そっちの方を調べているうちにとんでもない地雷を踏んでしまった、ということだ。
ともあれ、こんな風に考えるには一つの可能性が前提になってくる。
「なぁ青山」
『うん？』
「その事故って話だが、本当にそうなんだろうか」
『……というと？』
「単刀直入に言えば、殺されたというの可能性はあるだろうか」
『可能性という観点から言えばないとはいえないけど……。だけどニュースでは事故だと言っているしね』
「その報道が嘘っていうのは？」
真紀のようなことをいうなんて、自分でもおかしなことを言っていると呆れるものだが、どうも俺は加藤の死が何かを暗示しているような気がしてならないでいる。
『本音をいえば、きな臭い話とは思ってるよ？　昨日の今日なわけでさ。
だけど、ニュースで映った事故現場を見る限り、やっぱり偶然な

のかなとも思えるんだよ』
「どういうことだ？」
『ブレーキ痕って知ってる？　事故現場なんかでは良く見られるものなんだけど』
「ああ、知ってる。スピードを出していた車が急にブレーキをかけると、摩擦でタイヤの後が地面に残るとつくというやつだろう。確か、轢きたくないという心理的な意味合いもあるって話だ」
『うん。そのブレーキ痕が事故現場にはくっきりと残されてたんだよ。ブレーキを踏んだけど結局は轢いてしまったっていう、そんな感じもすごくあるんだ』
「そして、車はそのまま走り去った……良くある轢き逃げ事件ということだな」
『うん』
なるほど。確かに言われてみれば、そんか気がしなくもない。だが、俺にはどうにも全てを鵜呑みにはできない。ついさっきだって、変な野郎に後をつけられていたところなのだ。無関係だということもあるかもしれないがここは一旦、自分と何かしら関係があることだと考えた方が良いような気がするのだ。
第一、真紀や斑鳩のことを探ってみると言った矢先にこれだ。いくら事故だなんだということであっても、絶対にそうであるという保証だってないはずだ。その瞬間を見た人間がいるわけでもないのだ。
「わざわざ電話してくれてありがとうよ、青山」
『ううん、いいよ』
どちらからとも知れず電話を切った。俺はため息をつき、コーヒーに口をつける。運ばれてきた時は温かかったはずのコーヒーは、いつの間にかややぬるくなっていた。かなりの時間、青山と話こんでいたということになる。
しかし、待ち人がまさか死んでしまったなんて、どうしたものか。まさか、直に真紀や斑鳩に問い詰めるわけにもいかない。

「どうしたもんか……」
改めて口にすると、唯一の手掛かりになるかもしれなかった手立てを失ったことに、どうしようもない失望を感じていた。

行く当てもなくブラブラと歩いていた俺は、これから先どうしようかと本気で頭を悩ませていた。
情報を得るはずだったのに、それを与えてくれるはずだった人物の思いもかけない訃報は、俺のモチベーションをも下げていたのだ。道行く人々は、そんな俺の心を象徴するかのようにどことなく暗い顔をしている。
そんなのは俺の思い過ごしだろうが、かの名画・モナリザだって、見る人間の気分によって表情が変わって見えたりするものだと聞く。生きた人間であれば、なおのことそう錯覚したって不思議はない。
感傷に浸るのはやめよう。皆の顔が憂いて見えるのは、単純に雨が降り始めたからにすぎないのだ。先ほどは降り出しそうになっていた雨は、気付けばやはり降り出してきていた。
待ち人が来ることもないのだからと店を出たのは良いが、こうなってくるといい加減うちに戻った方が得策だろう。雨に濡れたって良いことは何もない。
適当なところで駅に行こうとして運悪く、信号につかまった。道は車の往来も激しいところであるが、それに反比例して歩行者の数はあまりない。
そんなスクランブル交差点で信号が変わるのを待っていると、俺の気付かぬうちに両隣を二人の男が立っていた。ご丁寧にも、顔は分からぬよう半歩だけ後ろにだ。
「……」
ちょっと前までの俺なら、嫌だと思いながらそれ以上は何も思わなかっただろう。人には、他人に対して無意識に許せることのでき

る、距離や範囲を表すパーソナルスペースと呼ばれるものが存在する。

自分の家族や恋人、気のおけない友人などにならすぐそばに近寄られても不快に思う者はいないだろうが、あまり馴染みのない人間や、全くといっていいほど知りもしない人間には距離を置こうとする心理が働く。つまり、その距離が近ければ近いほど、対象に対して許容できているというのを示すための心理的範囲をそう呼ぶらしい。

この二人は明らかにそいつを侵害している。せいぜい俺との距離は二十センチかそこらといったところだ。交差点には腐るほどのスペースがあるというのに、あえてここまで近くに寄ってきているのには、何かしら意味があるに違いない。あまりに近すぎる。

おまけに、俺が逃げられないような位置取りをしているのも気に入らない。さりげなく信号待ちしているように見せてはいるのだろうが、この時ばかりは違和感があるというのを理解していた。

道を挟んだ反対側には、誰一人として信号待ちをしている者はいない。こうなれば当然起こすべき行動は決まってくる。

今まで青を示していた信号は、黄色に変わった。赤になった時が瞬間が勝負だ。

数秒をおいて、黄色から赤に変わる。両隣の男が同時に、わずかに俺の方に近寄るように揺れる。

（今だ）

俺はそれを合図に背を低くするような姿勢で、一気に走りだした。まだ歩行者信号は青にはなってないが構わなかった。どうせ車は停まっているのだ。

「っ！」

背中から息を飲むような声を聞きながら、全速力で横断歩道を走り抜く。

いきなりのスタートダッシュに一瞬足がとられそうになりながらも、スピードを落とすことなく駆ける。

「待てっ」
二人のうちのどちらかが声を張り上げる。
だが、俺に止まる意思など微塵もない。男達は、制止の声をあげながら俺を追ってきているのだ。
何十メートルか先の歩行者信号がチカチカと点滅しだし、歩行者に信号が変わろうとしていることを示しだしている。
俺は少しでも速くと、下手すれば前のめりに転倒したっておかしくないくらいのスピードになっていた。
交差点にきた時、信号は赤になった直後だった。しかし俺は、気にすることなくそのままの勢いで道を飛び出して向こう側へと走る。
「待てっ！」
さっきよりも強い声、いや、もはや怒声といっても過言ではない声はそこで急に途切れた。と同時に、甲高い摩擦音とともに鈍く何かがぶつかった音が背後から聞こえた。
俺が振り向くと追ってきていたと思われる男が一人、道路に仰向け気味に倒れていた。
白い軽自動車がそのすぐ横に止まっている。フロントガラスが蜘蛛の巣状に割れていることから、倒れている男をはねたのだ。
男は俺に向かって何かを放った。それが男の拳だと気付いた時にはすでに、俺の鳩尾深くに突き刺さっていた。
息が止まり、あまりの衝撃と痛みに何をされたのかいまひとつ要領を得なかったが、さらに次の瞬間、息つく間もなく後頭部のあたりに衝撃を受けた途端、俺は意識を失った。

暗闇の中から、かすかに人の話し声のするような音が聞こえる。
身体全体がひどくだるい。

「ぅ……」

自分のものとは思えない、ひどく低くくぐもった呻き声とともに意識を取り戻した。うっすらと目を開くと、視界がぼんやりとしていてうまく焦点が合わない。

いや違う。男は俺に向かって何かを放った。それが男の拳だと気付いた時にはすでに、俺の鳩尾深くに突き刺さっていた。

息が止まり、あまりの衝撃と痛みに何をされたのかいまひとつ要領を得なかったが、さらに次の瞬間、息つく間もなく後頭部のあたりに衝撃を受けた途端、俺は意識を失った。

暗闇の中から、かすかに人の話し声のするような音が聞こえる。身体全体がひどくだるい。

「ぅ……」

自分のものとは思えない、ひどく低くくぐもった呻き声とともに意識を取り戻した。うっすらと目を開くと、視界がぼんやりとしていてうまく焦点が合わない。

いや違う。辺りは真っ暗で、光源といえるようなものが一切なかったのだ。

しかし、それでもどこからか光が漏れているのか、うっすらとだが何か物が置いてあるのが分かる。だが、その形までは分からず、ただ置いてあるというのがかろうじて分かる程度の光量だった。

(……一体、なんだってこんなことになったんだ)

俺はまだやや鈍さのある頭を無理矢理に回転させ、状況を整理しようとした。目が覚めて、自分がいきなり暗闇の世界に放り込まれていたなんて今まで一度だって経験したことがないし、自分がこんなことを体験することになるなんて考えたこともない。

しかし幸か不幸か、後ろから突然鈍く錆び付いた扉が開かれる音がし、途端に光の束が室内に注ぎ込まれてきた。幸い俺には、後ろからであるというのが、光を直接見ずにすむことができたのは良かった。おかげでぼんやりとしていた頭も、完全に目を醒ますというものだ。

俺は扉が開かれるのと同時に、頭を再度うなだれさせ、気を失っているふりをした。格段意味があるわけでもないが、何かされるかもしれないという、漠然とした不安がこうさせたのかもしれない。

「……起きたか？」

「いや、まだみたいだ」

「構わん。いい加減目を醒まさせてやろう」

三人目の男の声で俺は目を開けざるをえなかった。男の声は目的のためならば、手段は問わないとでも言っているかのように冷淡なものだったのだ。

「うっ……」

目を開けて首を動かそうとするが、やはり首に鈍痛が走る。痛みと忌ま忌ましい気持ちで呻き声をあげた。

「ん、どうやら目が覚めたみたいだな」

「良し。ならば始めるとしようか」

男達の淡々とした会話に耳を傾けていると、何かとんでもないことをされそうで不安で堪らない。だが、だからと言って今どうにかできそうな状況でもない。とにかく今、全てにおいて不利な状況であるということだけが確かなこであるのは間違いない。

「おい、気付いたんなら返事しな」

男の一人がそう言いながら、俺の髪を掴んで顔を上げさせる。

「う……」

無理に首を動かされたため、そこに痛みが走った。俺は思わず苦痛に呻き声を漏らした。

「おまえに聞きたいことがある。おまえと連中、一体どういう関係なんだ」

「く、なんの話をしてるんだ……」
当然の疑問だ。俺にはこの男の言っていることがさっぱり分からない。
「とぼけるのはよしな。おまえと奴が接触したってのはもう分かってんだ。痛い目にあいたくなかったらさっさとゲロっちまった方がいいぞ」
全く話が噛み合ってない。奴とは誰のことなんだ。
「待ってくれ。奴ってのは一体誰のことなんだ」
「けっ、言わなきゃ分からないとでも言いたいのか。そうやってうやむやにしようとしたってそうはいかん」
興奮した男が、髪を掴んだまま頭を振る。
「本当だ。心当たりがありすぎて全然分からないんだ」
俺は惨めにも、半ば泣き出す寸前になりながら喚いた。良く映画なんかで見るシーンをいざ体験するとなると、こんなにも恐怖を感じるものなのだろうか。俺は泣きたくもないのに、涙目になりつつあるのが自分でも分かったのだ。
すると後ろにいる他の二人が囁くように話をし始めた。俺は自分がこんな目にあっているというのに、頭のどこかで冷静な自分がこのままで終わらすまいとしていることを、素直に感じ取っていた。
「本当に知らなさそうだな」
「ああ。しかし、嘘をついてない可能性がないわけでもない」
「どうする」
「何人か心当たりがあるようだから、そこから問い詰めてみよう」
苦悶に満ちている俺は、そんな会話がなされているのを確かに聞いていた。不思議とすぐに死なないというのが分かると、途端に落ち着きを取り戻した。
後ろにいた二人のうちの一人が、俺の方に近寄ってきたのが影の動きで分かった。また声の感じが、ここに連れてこられる前に俺をぶちのめした奴だということにもだ。
「おまえは今何人か心当たりがあるといっていたな。では聞こう。

おまえはある男になにか調べるよう依頼をしていたな？」
　こいつの言っているのは加藤のことだろうか。だとすれば確かにそうだ。俺は加藤に黒田と真紀、斑鳩の素性を調べるよう依頼した。
「あ、ああ」
「おまえはそれである男の調査を依頼しているな？　そいつは誰だ」
「く、黒田のことか？」
　男といえば他にも斑鳩のいるが、なんとなく黒田のことだと思えた。違ったら違ったらだ。
「黒田」
　その名前を聞いて男は、じっと何か考えているようだった。
「どうして、その男のことをなんで調べようなんて思った」
　威圧的に問いかけてくる男は、態度からして三人のリーダー的存在なのだろう。この男が話しているときは、他の二人はいるのかすら分からなくなるほどだ。
「……それは俺が知りたい。俺自身よく分からないんだ。なんであの男に俺が付きまとわれるようになったのか……知る手立てがないから、あの男に頼んで調べてもらっていたんだ」
　うなだれながら言い終えると、室内に静寂が訪れた。この間がなんとも重苦しく感じて仕方ない。
「何か心当たりはないのか」
　沈黙を破って男が問う。
　俺は痛む首を、ただ力無く振るだけだった。それ以上何も言いようがなく、どうしようもないのだ。
　男が髪を掴んでいる男に向かって顎で合図するのが影の動きで分かった。すると、頭を突き飛ばすようにして掴まれていた髪が解放された。
「こいつ、どうするんだ。ここまでやっておいて何もなしに解放するわけにもいかないぜ」
　もう一人の男がリーダーらしい三人目の男に囁きかける。何か考えているような男は、不意に縛られている俺の腕の拘束を解いたの

だ。
「……？」
「勘違いするな。我々は、まだおまえを完全に信用したわけじゃない。しかし、その黒田を釣るには良い餌になる。だから解放するにすぎない」
拘束されていた手をさすりながら、俺は後ろを振り向こうとした。だが室内に入り込む光に目が眩み、連中の顔を拝むことができない。
「忘れるな。我々はおまえを信じたわけではない。何かあった時はおまえを許しはしない」
男の声は今まで以上に威圧的で、有無を言わせぬ迫力があった。まるで言葉という空気の波に当てられたような感覚で、俺は眩しさに目を細めながら、情けなく頷くだけであった。

意識が戻って目を醒ました時、そこは自室のベッドの上だった。おまけに部屋の中は真っ暗で、始めはまたどこかわけの分からない場所に寝かされているのかと焦ったほどだ。けれど、すぐにここが家の自室であることに気付くことができたのは、ベッドの脇に綾子ちゃんがいて眠ってしまっているのに気付いたからだった。
真っ暗とは言っても、先ほど自分が拘束されていたところに比べれば、はるかに明るく、周りにある物の形も見える。蛍光塗料が塗られた時計の盤面を見れば、すでに時刻は真夜中の一時になっていた。部屋がこんなに暗いのにも合点がいく。
（……俺はどうやってここに）
部屋を見回して、脇にいる綾子ちゃんの寝ている姿を見ながらぼんやりと考える。たしか昼間に青山から連絡を受けて、加藤が死んだという話を聞いた。その後どうすべきかと街をうろついているうちに、どういうわけか、俺を尾行していた人物と遭遇したというのも覚えている。

問題はそこからで、逃げ回っている最中にその人物の仲間と思われる奴から打撃を受けたと思ったら、次に目を醒ました時には真っ暗な場所で一人拘束されていたのだ。もちろん、その時交わされた話の内容だって覚えている。

そうか……。俺は連中の顔を拝んでやろうとしたが、結局それは叶わずに、頭に黒く分厚い布を被せられた。布の表面には何か薬液が染みこまされていたようで、俺はその匂いをかいでいるうちに意識を失ったのだ。そして連中がここまでご丁寧に運んだ。多分そう見ていいだろう。

しかし、あの連中はなんだったんだろう。いきなり人を拉致したかと思えば、その聞かれた内容は黒田のことをなぜ調べているのかというものだった。

「ん……ぁ」

ベッドの脇に座りこみ、上半身だけを俯せにして眠っていた綾子ちゃんが鼻を鳴らした。どうやらこちらも目が覚めたらしい。

「九鬼、さん？」

「ああ」

暗闇の中でお互いを確認しあう。

「電気、つけよう」

俺はベッドから立ち上がり、自室の室内灯ではなく机の卓上灯を手探りで点けた。卓上灯の淡い光なら室内灯ほど明るくないので、さほど眩しく感じないはずだ。

「おはよう。……というのもおかしな言い方かもしれないが」

「それよりも九鬼さん、一体どうしたんですか。街中で急に倒れたからって、男の人がうちまで運んでくれたんですよ？」

「倒れた？」

どうやら、色々と話が変えられているようだ。まぁ、当然といえば当然といえるだろう。こちらとしても、そういうことにしておいた方が良い。倒れたといっても実際には倒されたというのが正しいが、あながち間違いでもないからだ。

なにより、倒されて得体の知れない連中に、一時的とはいえ拉致されたと綾子ちゃんが知ったら、またいらぬ心配をさせてしまう。それに比べれば大したことではないだろう。

綾子ちゃんによれば、いつもより帰りの遅い俺に玄関を出たところ家の前で止まった車から出てきた男によって、ここまで運ばれてこられたのだという。多分、昼間のやつらのうちの一人だ。そんな奴が家に入ってきたなんて、考えただけでも忌ま忌ましく、腹立たしいことだった。

けれど、綾子ちゃんを変な厄介ごとに巻き込むことよりは、まだいくらかマシと言えるかもしれない。

「そうか。途中から記憶がなくなってるから、どうなったのか自分でも良く分からないんだ」　俺は思い出したように頷いて適当に話を合わせ、言い訳をしておいた。しかし、それでも綾子ちゃんの顔は、納得したいができないとでも言ったような顔をしている。

まさか、カマでもかけられたりしたのだろうか。だとしたら、いささか浅はかな思いつきだったかもしれない。いかんせん俺には、ここに運ばれたまでの経緯がまるで記憶にないのだ。

「どうかしたか？」

「いえ……九鬼さん。本当に倒れただけならいいんです。もし……もし何か、大変なことに巻き込まれたんだったらって思ったら私……」

俺から視線を外し、俯きかげんに言う綾子ちゃんに図星をさされたようで、思わずドキリとした。すっかり忘れていたが、この子は妙に勘の鋭い子だった。

「気にしすぎだ。巻き込まれようにも、こっちには何の見当もつかないし、そんなことになることもない」

「そうですよね。ごめんなさい、私ったら……。

あ、それよりご飯どうしますか？　一応作ってあるんですけど」

顔をあげ、無理に笑顔を作ろうとする綾子ちゃんはどことなく痛々しく感じるが、そうさせているのが自分であるというのを思うと、

複雑な気持ちだ。

「ああ、そうだな。さすがに腹が減ったから貰うよ」

「分かりました。それじゃ温め直しますね」

作った笑顔を貼付けたまま、綾子ちゃんはドアを開けて部屋を出ていく。それに続いて、俺も明かりを消して部屋を出た。

パタパタとでも擬音をつけれそうな綾子ちゃんの歩く後ろ姿を眺めながら、俺は全く別のことに頭を巡らせていた。当然それは先ほど出会ったあの連中のことだ。まず何者なのかということが一つ。色々と考えをめぐらせはするが、全く正体が掴めそうにない。

そして黒田との関係性もだ。口ぶりからすると、連中は黒田のことを知っているというわけではなさそうだった。だとすると、連中の狙いはなんだろう。関係を考えれば、真紀や斑鳩の仲間と見るには無理があるだろうか。あるいは、真紀・斑鳩、黒田とも違う奴らなのかもしれない。

少なくとも、そうすれば今日のことは上手く説明できる。しかし、身の上に起こったことは説明できても、加藤を殺したことは説明できない。いかんせん、動機がないのだ。もしあるとすればやはり、加藤が今日俺に話すはずだった内容に理由がありそうだ。

これで明日からまた行動すべきことが決まった。それにしてもおかしな話だ。俺はまだ加藤が死んだことが他殺だと決まってもいないのに、漠然と殺されたと思い込んでいたことに苦笑がもれた。

まぁいい。本当に事故であったなら、その時はその時できちんと手を合わせればいいだけだ。とにかく、やれることは手当たり次第全てやると決めたのだ。決めた以上は、たとえ気が遠くなりそうなことだってやってやる。

思えば、警察がやっているはずの聞き込みをあえて俺一人でやり続けるより、こっちの方が、意外な点と点で結ばれているかもしれない。もしそうであれば効率も悪くない。

それにだ。古来より日本にはこういう諺があるではないか。急がば回れ、と。きっと調べていくうちに、今日の連中の正体だって分

かってくるに違いない。
料理を作っておきながら俺を待って食べていなかったのか、二人分の食器に取り分けていく綾子ちゃんを眺めながら、明日すべき行動を考えていた。

第59章

大小様々なコードやコンセントがあり、部屋のあちこちに延びている。しかし足の踏み場がないというわけではない。きっちりと人が通れそうなくらいには隙間ができていて、よく見ればそのコードの類いも、なるべく絡まらないよう配慮がなされていた。

東側と南側にある窓にはカーテンがされていて、昼間だというのに随分と部屋が暗く感じる。そんな中、カタカタとタイピングする音が響いていた。タイピングの速度はといえば、俺が知りうる限り最高速といっていい。

「何か掴めそうか？」

それを横で見ていた俺が、不意にそう聞いた。

区切りの良いところまできたのか、タイピングする指を止めて肩を軽く回しながら青山が答える。

「さすがにそう簡単には……。だけど、加藤さんの家は分かったよ」

「本当か？」

俺は思わず身を乗りだし、画面に顔を近づけた。けれど、画面には俺には理解できそうにない文字列ばかりが列んでいて、全く分からなかった。

青山はマウスで画面を操作し、分かったという加藤の家の住所を示した。

「K県K市……」

意外だった。俺に待ち合わさせた場所がより都心に近いところだったせいか、てっきりその近くに住んでいるものとばかり思っていたのだ。画面に映し出されている住所を携帯のアドレスに登録し、頷いた。

それを尻目に青山は脇においてあったカップを手にとった。中にはミルクたっぷりのコーヒー……というよりは、カフェオレといっ

た方が正しいかもしれないが、それが注がれている。青山の姉貴がそいつを運んできたのだ。

そいつを盛大に一口飲んでカップをおくと、再び画面に向かった。同時に指も高速で動き出した。昨日立て続けにショッキングな出来事が起こったが、かといってへこたれているわけにもいかない。そう考えて俺は今、青山の部屋に来ているのだ。

理由はもちろん、加藤の死に起因している。そして、あの男達もだがとにかく今は、加藤が俺に話すはずだったことを調べてみる必要がある。何か重大なことが隠されているのではないか……俺にはそう思えてならないのだ。

そこで俺はまずは青山に頼んで、加藤が掴んだかもしれない情報を調べてみようと思い立った。青山は有能なハッカーであるし、もし加藤がパソコンから何かしら情報を得ていたなら、何か分かるかもしれない。

それにこの昨今、青山やあの加藤といった人種の連中が、パソコンなしで情報収集するだなんて考えられない。全てじゃないまでも、何かヒントくらいは掴めるはずだ。そこで今回、青山に探ってもらっているところだった。

青山も今回ばかりは人一人が死んだとあって、あまり乗り気ではなかったが、主にこちらの事情ばかりではあるが説明すると、本人もやる気になったらしい。

なんせ元はと言えば青山と加藤は、チャットで知り合ったとはいえ顔見知りなわけだし、加藤を俺に紹介したのも他ならぬ青山なのだ。

「うーん、いくつか気になるサイトを見てはいるね。だけど、どれも直接加藤さんの死に繋がるようなものはないなぁ」

画面と睨めっこしていた青山がぽつりとつぶやいた。本当に作業中の思わずでた、独り言といった感じだ。

「やっぱり直接、加藤の家に行くしかないかな」

「うん。その方が早いかも」

俺は頷きながら携帯を開き、今しがた登録した加藤の家の住所を眺めた。こうなったら加藤の家に行くしかない。
「分かった。俺は今から加藤の家の方に行ってみる。青山は何か分かったら連絡してくれ」
「うん。……九鬼くん。気をつけてね」
「ああ」
青山はきっと一昨年の今井のことを思っていったのだろう。俺は重々しく頷くと、青山の部屋を出ていった。

青山の家を出てすでに三時間近くが経過していた。その間、昨日の奴らとは出くわすことはなかった。それでも油断は禁物だ。昨日はたまたま三人だったが、他にもまだ仲間がいないとはいえない。昨日の今日なのだから、俺は周囲に対して昨日以上に気を配っていた。
もっとも、望遠カメラなんぞまで使われていたりしたら元も子もないのだが。
加藤の家の近くにまできた俺は、近所に住んでいそうな主婦に声をかけ、詳しい住所を聞いた。なんの疑いもなく教えてくれた彼女に礼を言い、教えられた通りに道を進むと、ほどなくして加藤の家に着いた。
「ここか」
念のため住所を確かめると、ここであることは間違いないようだ。加藤の家とはいうがなんてことはない、絵に描いたような古ぼけた木造二階建てのアパートだった。これなら似たような作りになってはいたが、斑鳩のアパートの方がまだマシといっていい。
加藤の家、いやこの場合は部屋といった方が適切だろう。部屋は階段を上がって二階の一番端だ。階段は鉄製のものだがすでに錆びつき、ところどころ穴が空いていて下が丸見えになっている。おま

けに一段上がるたびにギシギシという上る者を不安にさせる音をさせる。事実、二カ所ほど錆びついた手摺りが途切れていた。

壊れたりしないだろうかと慎重に上っているうちに、二階に上りついていた。二階には一階と同じ三部屋あり、上った先一番端の部屋が加藤の部屋だが、ここでまず他に住人がいないか確かめてみようとした。が、多分誰もいないだろう。一階の階段横にある郵便受けには、加藤の名しかなかったからだ。

念には念を押して二階二部屋のドアを強めにノックし、反応がなければドアノブを回す。しかし反応がない。やはり誰もいないのだ。俺は加藤の部屋のドアを開けようとして、思い戸惑った。一年半も前になるが、蒲生の家でのことを思い出したのだ。

（馬鹿馬鹿しい。同じようなことがそうそうあってたまるか）

ため息をつきながらかぶりを振る。ドアノブを回すと、いとも簡単にドアが開かれたのだ。おかしい……。まさか加藤は、部屋を出るのに鍵をしなかったのだろうか。ちょっとの用事で部屋を出るなら、まあ、そいつは分からないでもない。誰も見てなければなんとかなるだろう。しかもこのアパートには加藤以外、誰も住んでいないのだ。

しかし、たしか早朝に出かけたといい話だったが、ここから事故現場までは歩けば直線距離でも一キロ近くは離れている。それだけの距離があれば、ちょっとの用事にしたって鍵をしないというのはさすがにおかしい。

俺は警戒しながらそっとドアを開けた。ドアが取り付けられている金属部分が錆び始めていたため音が出るかと思ったが、思いのほか、変な音がでることもなくすんなりと開いた。

「これは……」

開けたドアを閉めながら、部屋の中を見回した。部屋は一人で住むには広めの２Ｋで玄関の横がすぐ台所という、ありがちな間取りになっていた。だが問題はそうじゃない。部屋の中に誰かが侵入した形跡があり、無惨にも荒らされていたのだ。

俺は部屋に上がって考える。物取りの類いだろうか。当然まず最初にそれを思い付く。しかし、この部屋の主は昨日死んだのだ。俺に何か話そうという予定のその日にだ。

そんなことのあった翌日に都合良く物取りが入るのかと思うのは、さすがに都合が良すぎな気がしてならない。しかもよくよく見れば、物取りが入ったように見えるのにあまり金めの物が取られていない。

言ってはなんだが、こんな薄汚い部屋にあまり金めの物もないというものだが。とにかく先の侵入者が何をしていたのかは、俺としても知っておきたいところだ。

部屋に入ると万年床になっていたと思われる布団が無造作に剥がされ、おまけに靴の後がしっかりと残されていた。足跡から察するに、侵入したのは男だろう。

隣の部屋にはその足跡はほとんどなく、中もあまり荒らされていない。侵入者はあくまで、加藤が寝床に使っていた部屋で何かをしていたらしい。

では金めの物を盗るのでなければ、その野郎が何をしていたか。本人の死と何か深く関係しているものに違いない。手短に部屋の中を探ってみるが、それらしいものは何もない。せいぜい風俗店のカードが、何十枚も荒らされついでにぶちまけられているくらいだ。

まぁ、あの感じでは特定の恋人はいなさそうだったので、格段驚くようなことでもないが。

ふと、部屋のやや中央の壁の前に置かれたテーブルの上にあるパソコンが目に映る。

「……パソコン。そうか、パソコンなら何か分かるかもしれない」

俺は生前、きっと死ぬ何時間か前まで使っていたと思われる機械の電源をつける。パソコンはただちに起動し、順調に立ち上げ作業をこなしていくがアカウントの選択画面で、思わぬことになった。アカウントを立ち上げるにはパスワードが必要だったのだ。

普段、自分が使うパソコンには自分以外使わないのだからと、そんな面倒な設定はしていない。そのため、まさかパスワードが必要

だったなんて思いつきもしなかったのだ。仕方なく自分で思い付く限りのパスワードを入力していくが、どれも受け付けない。
「くそ。なんでパスなんて設定してあるんだ」
感情にまかせてディスプレイを殴りつけたくなる衝動にかられるが、そんなことをしたって意味はない。少しの間どうすべきか考えてみるが、何も思いつかない。と、そこで携帯が鳴りだし、俺は思わずビクリとしてしまった。
驚かせやがってと毒づきながら携帯をとると、着信は青山からだった。電話してきたということは、何か掴めたのかもしれない。
「もしもし？」
『九鬼くん？　僕だけど』
「ああ。何か分かったのか」
『やっぱりいくら探しても、それらしいのは分からないよ。なんとか分かったのは、加藤さんはいつも仕事の前に必ず誰かしらとメールでのやり取りがあったっていうことくらいだな。多分、肝心の情報そのものは、直接会って集めていたみたいなんだよ』
「つまり加藤が死ぬ前、最後に会った人物を当たってみた方が良いということか」
『かも……』
「分かった。その人物のことを教えてくれ。待て、メールにしてくれないか。口頭よりそっちの方が確実だ」
『うん、分かった』
「ところで今加藤の家にあるパソコンを見ようとしてたんだが、どうだ。何か入ってると思うか？」
『パソコン？』
「ああ。起動させてみたんだがパスがかかってて、見ようにも見られないんだ」
『うーん。あの人がどこまでパソコンを使っていたか分からないけど、多分中にはあまり重要なものは入ってないんじゃないかな。

データとしてやり取りできるものであれば、わざわざ人と会ったりしないと思うし……』

「……そうか。何かあるかもしれないと思ったんだが、言われてみればそうかもしれないな」

パスワードを入力するよう示したまま画面は止まっている。その画面を見ながら俺は小さく頷いていた。

どうすべきか考えを巡らそうとした時だ。

「ここです」

「!?」

ドアの向こうで声がしたのだ。このアパートの管理人かもしれない。それともう一人、誰かいるらしい。

俺は咄嗟に電話を切り、慌てふためいた。ガチャガチャとドアに鍵を差し込む音がする。しかし俺が鍵をしなかったため逆に鍵がかかり、おかしいなどと言いながら、再びドアを開けようとしていた。

俺はそのあいだにも、ここから逃げ出そうと窓を開けて、下を覗きこむ。すぐ下は幅わずか十数センチのブロック塀だった。一瞬迷いがあったが考えている暇などない。

「ん？　誰かいるのか？」

ドアの向こうから俺の気配か音かに気付いたのか、男の声がする。俺は窓を乗り越え塀の上に足をやり、そのままアパートの入口の方とは逆に向かって伝いはじめた。

ほんの数秒だが時間を稼げているだろうが、見つかるのは時間の問題だ。だったら確実に捕まりそうな入口方面より、建物の裏手に回った方がいい。そう考えたのだ。

案の定いくらもすると、背後から待てという声が響いた。俺に向かって言ってるのだ。

（後少し）

塀の上はけっして幅があるとは言えないが、その両側には昨今の耐震基準を確実に満たしていなさそうな古いアパートのおかげで、

両手を伸ばせば簡単にアパートの壁に手をつけるので、バランスにさえ気をつければなんてことはない。

「待て、コラァ」

再度怒声を響かせた男のことなど気にもかけず、俺は塀の端にまできた。すると塀の下に男がいるのが脇目に窺えた。よく見れば男は深い紺色をした制服を着て、同じ色をした帽子を被っている。

そう、その男はなんと警察官だったのだ。後ろから怒声を響かせた男かとも思ったが、多分違う。

あまりに下に到着するのが早過ぎる。警察官であれば、大体二人組であることが多いので、事情を察した一人がこっちに先回りしたといったところだろう。

だが、その警察官も俺に向かって怒声を響かせてきたが、こちらに来ることはできない。

なぜなら、アパートと壁の間はほんの三十センチもないのだ。体を横にしながらであれば来れなくもないが、どのみち俺を捕まえることは無理に近い。

俺は警察官たちを無視して、隣の家の庭にジャンプした。着地の衝撃がほんのわずかに足に響くが、そんなことに構ってはいられない。

幸いにも、住人の趣味か庭にはガーデニングのための柔らかい土が敷き詰められていたのだ。衝撃がほとんどなかったのは、そういう理由からだ。

直ぐさま上体を起こし駆け出した。駆け出した先、突如として目の前に大きな犬が現れて、俺に向かって吠え立てた。

いや、吠えるというより、半ば唸り声になっている。不幸にもこの家には、大型犬が放し飼いにされていたのだ。

俺は犬に対して申し訳なく思いながらも、容赦なく蹴りを繰り出した。まず犬の鼻っ面に当て、怯んだ隙にボディにもう一発くれてやる。

俺のためにこうなってしまったという罪悪感からか、最後の一撃

はわずかに加減できていたはずだ。キャインと泣き声をあげて、痛みにうずくまるようにしている。

少なくとも、俺がこの家から逃げるだけの時間くらいは稼げる。

（そう睨むなよ）

まだ俺に小さく唸りながら睨みを利かせているが、これなら大丈夫だろう。

犬に向かって肩をすくめてみせた俺は、再び家の門に向かって走りだし、塀を飛び越えた。この家の塀はあまり高くない、所謂デザイナーズ建築という種類のものであるためだ。

ほんの一区画分走ると、すぐにやや大きめの道に出た。来た時とはまるで逆方向になるが仕方ない。俺は携帯を取り出して履歴から、青山に折り返してかけなおす。

『九鬼くん？　大丈夫？　突然切れたみたいだけど』

「ちょっとな。それより加藤が最後に会ったという人物のことを教えてくれ」

早口になっている俺に何か悟ったようで、青山はすぐさま加藤が最後に会ったという人物のことを口にし始めた。もしかすると、すでにいつでも教えることができるよう準備していたのかもしれない。

『うん。まず、その人物の名前はハンドルネームでしか分からないんだ。加藤さんとはメールで定期的に連絡を取り合ってたみたいで、ｋａｏｌってハンドルネームを使ってるみたいだね。ｋ、ａ、ｏ、ｌで”かおる”って読むのかな？』

「かおる」

中性的な名だ。男ともとれるし女ともとれる。おまけにこの手のハンドルネームは実名のようでもあり違うようでもある。人を混乱させようとするのが狙いなのかと、つい邪推してしまうようなハンドルネームだ。

「最後はどこで会ったのか分かるか？」

『今それを調べてるところだよ。メールにはいつもの場所でって書かれていたから、そこに行けば会えそうだけど……』

「いつもの場所……」
そんな場所など思い付くはずもない。思い出すことができたのは、例の喫茶店くらいだ。
「仕方ない。一旦加藤と知り合った喫茶店に行ってみるとするよ。あの店の常連だったみたいだから、マスターなら何か知ってるかもしれない」
『分かった。僕ももう少し調べてみるよ』
そう言って青山が電話を切った。俺はため息一つ、どうしたものかと考えようとするが、何も思い浮かばない。
それにしても、最悪なタイミングで警察官が出てきたものだ。おそらく彼らは昨日死んだ加藤の身辺調査にでも来たのだ。部屋の中が荒らされているのに気付いた彼らは、間違いなく俺を犯人だと決めつけていることだろう。
それに伴い、一刻も早くここから立ち去った方が良さそうだ。向こうは、パトカーでまだ辺りを探している可能性が高い。
気付けばいつの間にかどこかしらの公園にまで来ていた俺は、足早に対岸の出入口まで突っ切った。どことなく憂鬱な気分になっていた俺と裏腹に、公園の桜は今が盛りと淡いピンクをもってして公園に彩りを与えている。そいつがまた、俺にはどうしようもなく気分を下げさせるのだ。
「……そうか。もう一年も経っちまったのか」
否応なく視界に映りこんでくる桜を尻目に、俺はぽつりと口にしていた。だってそうだろう。あの日から俺の人生は変わってしまったのだ。
他人からすれば、家族がいなくなったから学業も修了できなかったなんてという奴もいるかも分からないが、それが引き金となって母が倒れ、父はほとんど家に寄り付かなくなった。おまけに頼りになるはずの警察は、今もまだきちんと捜査しているのかと疑いたくなるほど、何の音沙汰もない。
カタが着くまでとことんやると決めた以上は、赤の他人になどな

んといわれようが気にする必要はない。どうせ言ったところで、良くも悪くも何かあるわけでもないのだ。

そうなると同時に俺には、自分の人生はこの先間違いなくまともな人生は送れないような、そんな予感があった。少なくとも平凡とは言い難いものになる気がして仕方ないのだ。

理由は分からないがこの桜の花を見ていると、どうしようもなくそう感じさせるのだった。

ガヤガヤと店内はうるさく、スーツを着た休憩中のサラリーマンやまだ春休み中のはずの学生らで賑わっている。

「やあ、待たせたね」

「どうも」

加藤と待ち合わせに使った喫茶店のカウンター席で、仕事が落ち着くのを待っていると頼んでおいたブレンドコーヒー片手に、マスターがやってきた。

「それで加藤さんのことだったね。僕もニュースを見た時はさすがに驚いたよ。ほらあの人ってさ、どちらかというと殺しても死ななさそうなタイプの人だったし」

マスターの言い方に思わず苦笑を浮かべる。たしかに加藤はなんとなくゴキブリみたいな、しぶとそうなタイプに思えたのだ。

「加藤は……加藤さんは、ここには良く来ていたんですよね？」

「ああ、それこそ週に一度は来てくれていたよ。探偵業？だったかな。そういうことをやってることもあってか、話もすごく面白い人でねぇ」

「なるほど。ところで、加藤さんはここに良く来てたということですけど、他に、誰かと一緒に来たりすることはなかったんですか？」

「んー……加藤さんがここに来る時はいつも一人だったな」

「もしくは待ち合わせに使っていたりとか……」

「待ち合わせ……ああ、そういえばたまーにだけど、ここに加藤さんと待ち合わせにしてたお客さんがいたな」
「どんな人ですか？　同じ人？」
もしかすると、ｋａｏｌなる人物かもしれない。そう思うと、つい
いつい身を乗り出してしまいそうになる。
「多分、同じ人だと……思うけどね」
なんとも歯切れの悪い言い方だ。
「だと思う？」
「ああ。なんとも変わった外見をしてる人でね。毎回来店するたびに印象が違って見えてねえ……」
「男なんですか？」
「いや、悪いけどそれも分からないんだ。男のようにも見えるし、女の人のようにも見えるんだ。でも……多分、女の人だと思う。
さらに言うと、声も随分と中性的でね。なんというか……不思議な声の持ち主だね、あれは」
「そう、ですか……」
掴んだかもしれないと思ったのは、ただのぬか喜びだったらしい。あまりにも抽象的すぎる。
「ごめん、あまり役に立てなかったみたいで」
「いえ……半ば好きでやってることですから」
落胆を隠すように半分本当、半分嘘で適当にお茶を濁した。
「趣味でやってるのかい？」
「趣味というわけでは。でもちょっと気になったんでね」
「なるほど。でもあるよね、そういうこと」
爽やかな笑顔でマスターは自分の趣味を話し出した。いつもであれば話に耳を傾けるところだが、今はそんな気分じゃない。俺は適当なところでぐっとコーヒーを胃に流し込み、カウンターを立った。
「ありがとう。四百円になりますね」
財布から五百円玉を取り出して、マスターに手渡した。
「はい、百円のお釣りです。

あ、そうそう。趣味で思い出したんだけどね。趣味というか、半ば仕事とも言ってたけど、まあ、実益を含めてってやつなんだろうけど……加藤さん、よく風俗街に入り浸ってると言ってたな。

ま、職業柄、色々な人が来るからだろうからと思うけど」

「風俗街？」

そう言えば加藤の家にも、たくさんの風俗店のカードが落ちていた。もしかすると、新しい展望があるかもしれない。俺はマスターに礼を言って店を出て、携帯で青山に連絡をする。

『もしもし』

「俺だ。少し調べてほしいことがある。加藤が風俗によく行ってたというのは知ってるか？」

『知ってるよ。数少ない趣味の一つだといってたっけ……』

懐かしげに言う青山に思わず口元を歪めた。俺よりは長い付き合いなのだから、当然といえるだろう。

「それで、加藤がどういった店に行っていたか調べられないか？あるいは常連だった店なんかはないかな」

『死んだ人の懐をあさるみたいな気分になるけどやってみるよ』

「悪いな。分かったらすぐに折り返してくれ」

半ば事務的に頷いて電話を切った。全く、あいつをこき使ってばかりだが、今は少しでも情報がほしいところだ。青山にはもう少し付き合ってもらおう。

すでに時刻は、夕方も六時になろうとしている。ぐうという腹の虫が鳴る音がした。思えば朝の八時くらいに食事をして以来、午前中に青山のうちと今の、たった二杯のコーヒーしか口にしていない。その間、隣のK県にある加藤のアパートまで行き、おまけにそこでは警察に捕まりかけた。思わぬ逃走劇を繰り広げてしまったせいで、余計に腹が減ってしまったのだろう。

青山からの連絡を待つ間、どこか適当な場所で小腹を満たそうとした時、着信があった。多分青山だ。電話をしてからまだほんの、一、二分しか経っていないがそうだろう。

「青山か」
『うん。分かったよ、加藤さんが良く行っていた店』
「本当か」
青山の話だと、加藤はいくつかの風俗店に足を運んでいたらしい。その中でも特に懇意にしていた店が、S区にある風俗街にあるという。
その店は”楽艶”という名前の店で、月に二度か三度、必ずそこに足を運んでいるようだった。しかもだ。加藤はその店にほんの三日前に訪れたばかりだったのだ。
「分かった。そこへ行ってみよう」
他にもいくつかの情報を聞き、俺は早々にその場から動いて駅へと向かう。S区といえば、ここからあまり離れていない。電車を使えば、せいぜい三十分かそこらあれば行ける距離だ。
ともあれ、ようやく得た手掛かりなのだ。そこに行ってみないと始まらない。俺は気合いを入れなおし、地下鉄の駅の階段を下りていった。

四月も始め、駅の改札を抜けて目的の店のある街に降り立つと、周辺には仕事帰りのサラリーマンで溢れかえっていた。中にはこのところ新しい季節とあって、昨日一昨日くらいから新社会人になったらしい者の姿も少なくない。
そういった者はスーツの着こなしから、選択された色や柄といったもの全てが初々しさを醸し出しているから、すぐに分かる。きっと、つい最近までの学生気分でいたところを一気に奈落の底へと蹴落とされ、現実の厳しさを早くも思い知らされたやつもいることだろう。皆どことなく疲れた表情で、足早に下りてきた駅に向かっている。
その人の流れに逆流する形で、目的の店である楽艶に向かう。時

間帯もあるのだろうが、この街では俺のようなラフな私服姿のやつは妙に目だっているような気がする。なんせ、スーツ姿というのが当たり前といわんばかりの場所なのだから、当然ではある。

オフィス街を抜けた先に、やや込み入った一画がある。そこら一帯のみ同じ街とは思えないほど、いかがわしい雰囲気に包まれている。その中に楽艶は確かにあった。

「お。お兄さん初めて見る顔だね。ここらは初めて？　だったら安くしとくよ。どう？」

客引きのいかにもらしい台詞に苦笑しながら肩をすくめ、看板の見える楽艶へ足を運ぶ。店の入口前に止まって看板を見て、どうしようか今更考えた。勢いでここまで来たものの、ここからどうするべきか見当もつかない。初めてなのだから仕方ないといえばそうなのだが。

するとドアが開かれて、中からスーツを着たこれまた軽薄そうな客引きらしい、若い男が出てきた。

「お客さん、今なら良い子いるよ。どう？」

「あー……」

なんて答えるべきか考える暇もなく、男が聞いてくる。こちらの意思をうやむやにして客を引こうとする、この男のやり方なのかもしれない。まぁいい。こうなったら俺もやれるところまでやってやる。

「良い子って言われても見てみないことには分からないな」

「ってこと遊んでくんだね？」

「そいつは見てから決めるよ」

確か店に入れば、登録された女の子の写真を閲覧できるというシステムがあったのを、とっさに思いついた。

「ＯＫ、ＯＫ。ま、とりあえず中に入んなよ」

軽薄そうな男はニヤリとして、俺を中に招き入れた。俺と同様、中に入れさえすれば後はどうとでもできると思っているのかもしれない。

建物は五階建ての小さなビルで、ところどころ、老朽化が始まっていそうな箇所が見受けられる。建物の仕様が明らかに昭和の香りのある建物に、無理にそれらしく見せようとしているのが容易に見てとれる。

そんなビルの一階は、やはり思った通り受け付けになっていた。ほんの一畳ほどの広さしかなく、その背後には水色をしたカーテンがされている。それがまた安っぽさを際立たせていた。男は受け付けの台にまわって、中にある名鑑を出した。この中から気に入った女の子を選べということらしい。

「さ、どの娘にする？　ちなみにこの子なんかは、おれとしてはかなりオススメだよ」

そういって男が指差した女の子は、言うだけあってなかなかの、いやかなりの美人だった。正直、なんでこんなところで売りを出しているのか理解できないほどの美貌だ。

俺がそんなことを考えているうちに、男は次から次へと商品である女の子のページをめくっていった。その様子はまるで、俺に決めさせず、自分の好みの露呈をしているみたいだ。しかし男が紹介する女の子達は、どれもなかなかの美人揃いだった。これならば、加藤が自宅から離れているはずのこの店に、足を運ぶのも分かる気がする。

ふとこの時、自分がなかなかの粒ぞろいを前にしながら、あまり自分が無感動であることに気がついた。確かに男が薦めてきた女の子はどれも、街を歩けば少なくとも一度や二度は、ナンパされたことがあってもおかしくなさそうなものだが、俺はいまいちピンとこなかったのだ。

その理由は明白だった。沙弥佳だ。あいつの美貌と、どうしても比べてしまっていることに気がついたのだ。沙弥佳を基準に比べたら、最初の子以外はどれも物足りなく感じる。あるいは写真と実物では印象が違うので実際に会ってみたら、また違うかもしれないが。

そりゃあ、中には顔はそこそこでもスタイルが抜群という子もい

たが、若さからなのか、やはり顔が判断基準になっていた。
「ま、この辺がオススメだよ。おまけにこの時間は今いった子皆いるから、より取り見取りだ」
　自信満々で言う男を無視し、名鑑を再度、頭から見直す。源氏名なのだろうが、俺は彼女達の名前が気になっていた。この中にｋａｏｌなる人物がいるのかどうか……それを確かめるためにこんな場所にまで来たという目的があるのだ。いちいち男の商売文句に付き合うことはできないし、その必要もないだろう。
「ところで話は変わるんだが、あんたに聞きたいことがある」
「なに？　俺に答えられるなら答えるよ」
「数日前、ここにある人物が訪ねてきてるはずなんだ。加藤という名前なんだが」
「加藤さん？　ああ、彼ならつい二、三日前にも来たけど、彼がどうかしたのか？」
「ああ、いや。実はその人からこの店の話を聞いてね。それでｋａｏｌという名前の子を探してるんだ」
　俺は分かりやすく説明するため、教えてもらったｋａｏｌのアルファベットを、台の上で指を使って書いた。すると、今まで軽薄そうなにやけ面をしていた男が、みるみる真面目かつ冷淡な顔になっていった。
「そいつを聞いてどうするってんだい？」
　しかし俺としてもこの一年半ほどの間に、幾度となく死にかけたことがあった俺には、そのくらいではなんとも思わない。
「是非、会って聞きたいことがある」
「……あんた、何者なんだい」
「あんた、加藤が死んだのは知ってるか？」
「加藤さんが？」
　怪訝そうに眉をひそめ、男が聞き返した。その声は明らかに、驚きのニュアンスを含んでいる。
「ああ、つい昨日の朝のことだ。実はその日の昼に彼は、俺に会っ

て何かを伝えるはずになってたんだ。それで生前ここに良く来ていたという話を聞いてね」

どうしても確かめなくてはならないことがあるんだと付け加え、口をつぐんだ。男は訝しんだ表情のまま、俺を舐めるように見ている。どうすべきか考えているという顔に見えなくもない。

しばしの間そうしていた男は、頷いて小さな声で囁いた。

「分かった。あんた、見たところ警察の人間には見えないし、その言葉を信じよう。

だが、その前に加藤さんのことが本当なのか確認させてもらう。いいな？」

俺はだまって首を縦に振った。それでｋａｏｌなる人物に会えるというなら、お安い御用だ。

「良し。それじゃあ、しばらく待っててくれ」

すると男は携帯を片手に、水色のカーテンの向こうに消えていった。奥で、何かやり取りしているような声が聞こえてくる。ぼそぼそとした声で内容はうまく聞き取れないが、男が別のもう一人に話しかけている声だ。電話をしているあいだ、店番してくれとでも言っているのかもしれない。

壁に寄りかかるように待っていると、店のドアが開かれ、赤っ鼻をしていかにも好色そうな親父が入ってきた。建設業にでも就いているのか、ツナギを着た五十代らしい親父はこれからのお楽しみの時間に、心躍らせているとでもいった風だ。

「あれ？　なんだい、今日は待ち時間があるんかい」

でかい声で親父が俺を見て、そう口にした。

しかしその声を聞いてか、奥から眼鏡をかけた、これまた典型的なメタボ野郎が姿を現した。歳は確実に俺より十歳は上だろう。身長は日本人の平均といったところだが、とにかく横がでかい。真正面から見れば、恐ろしいくらいに菱形の体型をしていた。

「いらっしゃいませ。今日もいつもの子で？」

「ああ。頼むよ」

店に入ったとたんでかい声を出した親父に、おそらく常連だというのは予想できたが、やはりそうだったようだ。

こんな親父を相手に若い女の子があれやこれやと、言葉にするのも憚れるようなことをするのだろうか……想像したら、軽く吐き気でも催してきそうだ。俺はかぶりを振って想像しかけたことを無理矢理、頭の外に追い出した。

「それじゃあ、どうぞ」

「ああ、ちょっと待った。今日はそっちのお客さんが先なんだ。悪いね、おじさん」

メタボが親父を案内しようとすると、カーテンの奥からさっきの男が出てきて、女の子に先約があることを告げた。

「おいおい、なんだそりゃあ。人がせっかく来たってのによぉ」

「ごめんごめん。その代わり、今日はサービスするからさ」

男は親父に手刀を切り、この子なんかはかなりオススメだよとさっきも聞いた言葉でやり取りし、親父を納得させてメタボ野郎に案内させた。

「待たせたな。こっちだ」

そういって男は俺についてくるよう言い、脇のエレベーターに乗った。

「ほら、早く来いよ」

「ああ」

促されてエレベーターに乗り込んだ。小さいビルのためなのか、はたまた建物が古いためなのか分からないが、収容できる人数はせいぜい三人か四人も乗ればいっぱいというエレベーターだ。

俺が乗り込むとすぐに扉を閉めた。階数を示す5のボタンがすでに押されている。

「少し揺れるから注意しな」

直後、男のいう通りガクンと大きく揺れる。おまけに閉まったと思ったはずのエレベーターの扉は、完全に閉まりきっていなかった。多分、エレベーターの点検なんてもう何年としていないだろう。

上にようやく上がりはじめたエレベーターはとても遅く、これなら階段でいった方が早いのではないかと思えるほどだ。あくびが出るほどの遅さで五階につくと、扉が開くのになぜか数秒待たされた。エレベーターに乗るのに、こんなに苛々とさせられたのは初めてだ。

エレベーターを降り、そこから脇にある階段を上った。どうも、一階から五階までにある階段とは全く別の階段で、ここだけが独立しているようだった。

「この中だ」

男の案内でビルの六階らしいフロアにくると、そこは小さな部屋になっていた。とはいえ、一人で居座るには十分すぎるほどの広さがあった。広さにすれば、六坪か七坪かそこらといったところだろう。

「俺はここまでだ。後は好きにしな」

男はそれだけで、さっさと階段を下りていった。なんとも事務的だが、別にサービスを求めているわけでもないので、気にすることなく中へと進んでいった。

「……」

俺は中を目を凝らしながら進んでいく。部屋の中は、なんとも毒々しい空間だった。壁には暗幕がかけられ、照明は紫にペイントされたものが被せられている。そのため、異世界にでも迷いこんだかのような錯覚をおこしかねないほどだ。

さらに、部屋の中は何かひどく甘く、それでいて何か腐ったものも混じっているような、爛れた匂いが充満していたのだ。

「あんたか？　あたしに用があるってのは」

数歩すすんだ時、突然声がした。

思わず声のした方を見ると、そこにはなんとも扇情的な姿をした女が一人、怪しい光りに満ちた眼差しで俺を見つめていた。

第６０章

部屋の中は、たった今から何か魔術の儀式でも行うのかと思えるような内装だった。

小さな髑髏の置物もあれば、ヒンドゥー教の曼陀羅をもした絵もかざってある。他にも部屋のあちこちに、何か宗教的な意味合いを持つ置物が幾何学的にかつ、計算されて配置されているように見える。

女はそんな中、一人で水タバコをくゆらせていた。その姿は、ジプシーやベリーダンサーかを思わせる恰好をしており、薄い生地の下には素肌が透けて見えた。あまりに先ほどまでとは違う異様な空間に圧倒され、俺にここが風俗の店であるというのを忘れさせるものだった。

それでもかろうじてその名残を見せているのか、女は下着を付けていないのも分かった。生地が透けているせいで、乳首がはっきりと見えているのだ。胸がそうなのだから、きっと下も付けていないのだろう。

日本人であるはずだが、髪は結って後ろにやっていて目は大きく唇も厚いその顔は、随分とエキゾチックな顔立ちをしている。

魔性の女とでもいうのか、一度見たら引き込まれてしまうような、そんな顔だ。

「あたしに用があるってのは、あんたなのかいって聞いてるんだけど」

黙っていた俺に、女が再び問いかけてきた。

「そうだ。あんたがｋａｏｌっていう人なのかい？」

「ああ、まあね。とはいっても、ｋａｏｌってのはただのハンドルネームだ。

それで？　あたしに何か聞きたくてここに来たんだろう？」

水タバコの管をもち、女は俺に語りかけてくる。高圧的な物言いと態度だが、不思議と嫌に感じない。むしろ、背筋をぞくぞくとさせられ、今すぐにもこの女にむしゃぶりつきたくなる誘惑にかられる。

「何日か前に、あんたに加藤という男が会いにきたはずだ。俺はそのことに関して、あんたに聞きたいことがある」

「……」

俺が加藤の名を出しても、女は丸きり反応しない。瞬き一つせず、じっと俺を見つめているままだ。

「……そんなこと知ってどうするんだい」

「まずその前に、加藤が一昨日死んだというのは知ってるかい？」

女がゆっくりと頷きながら、鼻から肺にたまった煙をはきだしている。

「俺は彼にある人物たちの近辺を調べてもらうよう依頼したんだ。彼はその中で何かを掴めたはずなんだが、そいつを俺に伝える前に死んでしまった。

だから、彼の情報を教えたかもしれない人物に当たってみることにした。そこでまずあんたに会ってみることにしたんだよ。

あんた、三日前に加藤と会ったろう？」

少しの間沈黙があったのち、女がゆっくりと頷いた。

「そう、おまえが依頼主だったのかい。彼があたしに依頼するくらいだから、どんな人間かと思ったけれど……とんだ子供だったね」

「やっぱりあんたが情報提供者だったのか」

女は水タバコの管を口にくわえ、紫煙を吸い込んでいる。口をはなすと同時に、大量の煙が吐き出されている。

「まあね。あいつとはお互いもちつもたれつの関係だった。ただの友達とは言わないが、いい関係だったよ」

そういって再び管から煙を吸い込んでいる。煙を吸い込む姿はとても妖艶で、そんな仕種一つだけでムラムラときてしまう。唇がゆっくりと管をくわえ込もうとするのを、わざと見せつけているのか。

女の醸し出す雰囲気は、これまで俺の見てきたどの女よりも官能的で、唾をごくりと飲み込んだ。

「ふふ。あたしがほしいかい？」

「……ああ。だけど残念ながら持ち合わせがない。今日来た理由はそうじゃぁないからな、今度にしておくよ。

それより教えてくれないのか」

「若いというのはせっかちだな」

唇の両端を歪ませて笑う顔は、こちらの意思なんか目ではないとでも笑っているかのようだ。

「まあいい。今度というなら今度はきっちりと相手してもらおうか。それで加藤があたしから聞いた情報だったね。

藤原真紀と斑鳩孝晶に関してだが、この二人は対外的には見知らぬ人同士を取り繕っているが、実際には違う。二人の間には共通の背後関係があるのさ」

「共通の背後関係」

俺の反問に女は頷いた。瞬きをほとんどしないため、その目は怪しく濡れている。

「そうだ。この二人の経歴を調べることができたが、藤原真紀は北は北海道にある片田舎で生まれている。四才ごろまでその町に住んでいた藤原は、その後、埼玉にある施設にいれられている」

「どういうことだ？」

純粋に驚いた。真紀は物ごころつくかつかないかという頃に、突然施設にいれられたなんて想像もしなかった。

「理由はよくある両親の離婚が原因だ。生まれてすぐに両親が離婚、母親に引き取られたのを機に上京した。しかし、母親は育児ノイローゼになってしまい、これ以上子供を傷つけまいとして施設にいれたらしい。母親としての最後の理性だったのかもね」

そこでまた管をくわえて、煙を吸い込んで吐き出した。

「藤原真紀は、この施設でもう一人の斑鳩孝晶と知り合っている。この二人は同じ施設で育てられたんだ。

斑鳩は比較的裕福な家の出だが、両親は共働きだったこともあり、ほとんど家には帰ることがなかったそうだ。帰りはいつも、日付の変わった深夜で、朝は斑鳩が登校する前にはすでに家にいないという生活だったらしい。

そんな生活が何年か続いたある日、今から遡って七年ほど前に、斑鳩は施設に入れられることになった。理由は父の浮気、それに母親の仕事などからのストレスによる虐待……じつにバイオレンスな幼少時代を送っているみたいだな。斑鳩はそんな中、たまたま施設の関係者と知り合うことがあって、自分から施設に入りたいと言ったらしい。

らしいというのは、そこらのことは本人が頑なにそう主張したからで、実際にはよく分からない」

「そして、入った先で二人は出会ったというわけだな」

「そうだ。斑鳩はかなり人見知りのする子供だったらしいが、藤原とはうまが合ったのか、よく一緒にいることが多かったそうだ」

あの二人が一緒にいる……。想像してみるが、いまいち具体的に思い浮かんでこない。それほど今の二人の姿や言動からは暗い過去があったというのが想像できないのだ。女の話では真紀の親は分からないが、少なくとも斑鳩の親はまだ生きているらしい。

それにしても、あの斑鳩が人見知りするだって？　そんなの今の奴からはとてもイメージできそうにない。

そういえば以前、斑鳩が唐突に学校に来なくなった時期があった際、小町ちゃんが両親に連絡をとったようなことがあったが、知らない顔をされたらしいことをぼやいていたような記憶があった。だとすれば、これで合点がいくというもので、親元から離れて暮らしていたというのにも必然的に納得がいく。

施設に入りたいという、本人なりの防衛本能と両親の利害が、奇しくも一致してしまったというわけだ。つまり、奴は半ば両親から見捨てられてしまっているのだ。

これで二人の背後関係は分かった。やはり睨んだとおり、あの二

人は顔見知りだったのだ。そして二人が顔見知りであるというのを悟らせないようにしていたのは、施設にいたというのを知られたくなかったからかもしれない。だが、それでもあの二人の時折見せる、異様な雰囲気やいかがわしさにはまだ説明不足だ。それ以外に、何かあるはずなのだ。

「二人の出生は分かった。問題はそれだけじゃないはずだ。加藤は何か、とんでもないことを知ったと言っていたらしいからな」

俺がそういうと、女の目が鋭く光る。

「……二人の預けられた施設、ここにはどうもあまりよくない噂があったようでな」

まるでこれを知ったら、俺はもう引き返すことはできないと暗示しているかのようだ。タバコの煙をくゆらせることもなく、じっと見つめてきている。

「その施設がなんなんだ」

俺を試しているのか、もったいぶる女に俺は先を促した。

「その施設はね、元々、旧日本軍との繋がりもあった場所なんだ。そして、不思議なことに預けられた子供の数と、今いる子供の数が合わないのさ。……どういうことか分かるかい？」

俺は首を振った。そんなこと言われたって分かるわけがない。

「成長して施設を出ていった。そうじゃないのか」

「違う。子供たちは密かに売られていってたのさ」

女の言葉に眉をひそめた。売られる……この意味が分からないわけではないが、この現代の日本でそんなことが行われているというのか、この女は。

「元々の建物の所有者が軍隊ということもあって、今も運営しているのは当時の軍関係者の孫だ。

また、この施設には時折、海外からの来客があってその客達の肩書も中々なものだ。みな、軍の幹部だったり政治家だったり、あるいは投資家だったりとね。時には、製薬会社の人間も出入りしていたようだね」

この女の顔に冗談を言っているような節はない。きっと本当のことなんだろう。よく知らない方が幸せなことがあるという言葉があるが、全くその通りだった。真紀と斑鳩は、そんな場所で何年も過ごしていたというのか……。

それとも施設の裏の顔は、一切知らされることはなかったのだろうか。いや、知らされなかったというより、知る機会そのものがなかったのかもしれない。

「それはつまり、人身売買といっても過言じゃぁないんじゃないのか？　金や権力を持った奴らから、施設の運営を出させていたんだろう」

「そうだ。その上、運営者の片倉という男もなかなかのやり手でね。現在、幹事長の相談役を任されているんだそうだよ。

全く、こんな人間が国民の上に立って政をしようだなんて、世も末さ」

女は事あるごとにタバコの管を口に含ませ、鼻から煙を噴かせている。

「二人はどうしてそんな場所で、何年も過ごすことができたんだろう」

確かに施設の話は驚くべきことだが、これが真紀のあの得体の知れないバックグラウンドにはならない。まぁ、あの女が良くも悪くも、ねじ曲がってしまった理由としては納得がいくというものだが。

「簡単さ。あの二人は片倉のお気に入りだったらしい。だが、お気に入りとは言っても、ただ、他人に向けた愛情を注いでもらっていたわけじゃない。片倉は軍関係者の孫と言ったろう？　二人はずっと訓練を受けていたのさ、片倉からね」

「訓練というのは……」

聞かなくたって分かる。軍で訓練といえば、戦闘訓練以外において他はない。他にもあるだろうが、この場合はそれを指しているに違いない。斑鳩にノされたことを思いだせば、簡単に理解できることだ。あるいは武術、それも実戦式の訓練を受けているのなら、説

明できるというものだ。
「二人は戦闘訓練を受けている。そして早くから、片倉の右腕として手腕をふるっていたということだ。つまりこの二人は、戦闘のエリートといっていいかもしれないね」
先ほど管をくわえた際、相当量の煙を吸い込んでいたのか女は言い終えたのち、口から肺に残っていた紫煙を大量に吐き出した。それを舌と口をうまく使い、煙を遊ばせている。
しかし、これで大まかの謎は解けた。政治の中枢に食い込むような人間のそばにいる者なら、ある程度の人員起動力はあるかもしれない。いや、実際にあるのだろう。事実あの女狐は、ことあるごとに”私たち”といっていた。だというなら、決してありえないことではないはずだ。
と同時に、加藤が死んだのはそういった余計なことを知ってしまったから、と見ていいのだろうか。もしそうであるなら、俺も危険だったかもしれない。なんせ、俺自身も得体の知れない男達に掠われたのだ。加藤と会った後では無事ではすまなかっただろう。
「加藤が死んだことに関して、あんたはどう思ってる？　俺はとてもじゃぁないが、ただの事故死とは思えない。……友人は証拠から事故じゃないかと言っていたんだが」
「そうかい。だったら事故なのかもね」
いい仲だったというわりに、女はとても淡泊な受け答えだった。人によって付き合いの仕方は違うものなのだから、これが女の付き合い方だったというのなら俺が口だしすることではないのかもしれない。しかし、こちらが拍子抜けしてしまうほどの物言いだと、本当にそんな仲だったのかと疑ってしまう。
俺は軽く肩をすくめ、話題を変えた。
「ところで、今回のこととはもしかしたら関係がないかもしれないんだが、加藤は他にそれらしい人間と会ったりしていないだろうか。実は昨日、加藤と会う日にわけの分からない連中に尾行された。何か心当たりはないか？」

「素人さんを尾行するなんて、とんだ連中だね。よほどの理由があったと見える」
「まさにその通りだよ。だが、そのよほどの理由というのが俺にはさっぱりなんだ。もし何かあるのなら教えてほしい」
俺は、吸い込まれてしまいそうな女の瞳を見据えながら言う。
「何も知らないと言ったら？」
挑発的な言葉のあとに大きな瞳を細める。きっとこうやって何人もの男を手籠めにし、さらには骨抜きにしてきたのだろうか。そう思えるほど、女の仕種一つ一つはとてつもなくエロチックだ。どうすれば男が反応するのか、そいつを知り尽くしているようだった。
誰が言った言葉だったか、『真の情婦とは才能である』と聞いたことがあった。この女を前にすると、この言葉がよく理解できる気がした。目の前の女にはその言葉の通り、情婦になるべくして生まれてきたようにすら思えてならないほどの妖艶さがあった。
「あんたが知らないなら、また一から出直しだ。それか、直接その施設とやらに乗り込むしかないだろうな。唯一、新しい手掛かりなんだから。
あるいは……あるいはあんたが何か知っていて教える気がないんであれば、レイプしてでも聞き出してやる」
再び肩をすくめながら、俺はニヤリとしてみせた。男の本能を刺激してやまない女へのせめてもの抵抗のつもりだが、ただの虚勢にすぎない。しかし今いった言葉は本当だ。たとえ遠回りになろうと、得られた情報がそれしかないのなら俺はそこに乗り込む気持ちに変わりはない。
互いの眼を見つめ合いながらしばしの沈黙の後、女が不意に笑いだした。
「くっくくっ、あはははははは。なんだいそりゃ。面白いね、いいよ、あんた」
つい今の今までの間クールそのものだった女の笑顔は、とても同一人物とは思えないほど、くしゃりと顔を綻ばせているものだった。

笑顔そのものはなんとなく実年齢よりも若くみえ、見ようによっては少女のようにも見えなくもない。いや、もしかしたらこっちの方が実年齢に近いのかもしれない。ともかく女の笑う姿は、先ほどまでとのギャップがありすぎて対応に困る。

「いいねぇ、あんた。気に入ったよ。まさか今時、乗り込むなんて言うやつがいたなんてね。おまけにあたしをレイプするだって？女を前にそんなこと言う奴、普通はいないよ」

「普通ならそうかもな。

だが時代に関係なしに、俺みたいなのはいると思うけどな。人が多すぎて見えにくくなった、ただそれだけだと俺は思うね。

もしくは過去が美化されているかのどちらかだろう、きっとな」

女は何がおかしいのか、さらに高笑いになり腹を抱え込まんと言わんばかりだ。だが俺は、決して自分でいったことが間違ったことだとは思っていない。どんなに輝いてようと、ひしめく物の数が多くなれば必然的に影ができて、光は見えにくくなる。ただそれだけの話ではないか。

「まあいい。確かに加藤の死に関して確定的なことは言えないが、昨日男が一人、あたしのところに訪ねてきた。今まで何人も情報を買いにくる客はいたが、そいつは初めての客だったよ。加藤に命じて我々を探っているやつがいるから、何か知ってるなら教えろとね」

「探してるやつってのはまさか」

「そう、あんたのことさ」

そうだったのか。となると、昨日の三人は真紀や斑鳩の仲間ということになる。きっと加藤は、真紀と斑鳩のことを調べていくうちに、あの連中のことまで知ってしまうことになったのだ。それで加藤の死には納得がいく。今井の時だって、真紀のいった『もう二度と会うことはない』という言葉から察しても、人一人くらいならなんとかなるだろう。

これで構図がはっきりとしてきた。まず昨日の連中は真紀・斑鳩の一味であるが、俺と真紀・斑鳩の関係を知っているわけではなさ

そうだ。もっというと、俺という人間そのものを知らない風だった。つまり、連中は同じ組織内の別の派閥か何かということだ。

黒田は、この連中とは全く別の組織に属していて、敵対関係にあるというのもはっきりしてきた。昨日俺があんな目にあったのも、このためだったわけだから疑う余地はないだろう。

「最後に、昨日訪ねてきた男というのはどんな奴だったんだ？」

「あんたよりも十センチは確実に大きいやつだった。あたしを前にしても、眉一つ動かさない男なんて初めてだから印象的だったね」

この時俺は、その男がなんとなく昨日の三人のリーダー的存在だった、あの男のような気がした。

「あんたが加藤に話したのはこれだけか」

「ああ、まあね」

ニヤリとしている女の顔は、それだけではないと暗示しているように見える気がしてならない。

「……まだ何か知ってるなら教えてくれ」

眼を細め、鋭く女をつらぬく。相変わらず妖艶な微笑のまま、ゆっくりとタバコの管をくわえる女は意味ありげに言った。

「なあ、あんた。あたしはあんたが気に入ったからここまで喋ったが、それ以上はさすがに無理があるってもんだよ。気に入ったからこそ教えたくないということもあるんだ」

口から紫煙を勢いよく吐きだしている。管を手に持ったまま、立てていた片ひざを肘置きにした。

「……俺に何かしろって言いたいのか」

「おや、察しがいい。あんた、若いが見込みあるかもね」

「それで何をすればいいんだ」

「そう固くなりなさんな、簡単なことさ」

そういうと女は、初めて大きく動いて立ち上がった。足をクロスにするような足取りで、ゆっくりと近づいてくる。

「ねえ、あんた。女が美しさを保つのに一番の方法を知ってるかい？」

俺は近づいてくる女の妖艶さに、ゴクリと生唾を飲んで首を振った。下半身は金で縁どられた真っ白な腰飾りが、際どい部分だけをギリギリで隠している。やはり下着はつけていないようだ。女が俺の首に手を回し、耳元でひどく悩ましげな声で囁く。

「単純な話さ。男を抱いて、その精をもらうんだ。それも若い男の精をね」

耳に息を吹きかけ、顎の辺りをペロリと舐められる。

「あんたは気に入ったし、金は加藤に免じて今日はいい。あんたはすっきりして知りたいことも知れる。そしてあたしも、ね……？」

再び生唾を飲み込んだ。心臓がバクバクと脈打っているのが分かる。

「さあ、こっちにきなよ」

女に誘われるまま俺は頷いていた。

夜も十時を廻ったところだ。周りには早くも老若問わず、酔っ払い達が大声で馬鹿笑いをあげている。

近くまで地下鉄を使って一人訪れたのは、七階建ての小さなビルだ。

「小泉ビル……間違いない、ここだ」

向かいにある水色の文字で書かれた看板とマークの有名コンビニ店に、ビル隣にある不動産店。教えてもらった住所と地理的にも間違いない。

香織――ｋａｏｌの本名だ。彼女に教えてもらったビルを前にため息を一つ、俺は一階に入ったテナント横の階段を上る。楽艶のビルと違い、きちんと一番上まで行くことができそうだ。

このビルの一番上に居を構えているのは、香織からの情報によれ

ば所謂ヤクザ者らしい。ただし組としては少人数で広域指定暴力団ではなく、幹部連中も少しは話のできる連中とのことらしい。俺がここに訪れた理由もなんの因果なのか、なんと斑鳩に関係のある連中だったためだ。

というのも、斑鳩には沙弥佳のいなくなる前から不穏な動きがあったのは言うまでもないが、奴の周辺にも何か嗅ぐわしいことがあったはずなのだから、そこを突いてみようというのは当然のことだ。

いつだったか、綾子ちゃんといった縁日の会場に突っ込んだあの車に乗っていた人物こそが、ここのビルのオーナーであり、連中の組長だったのだ。いや、今となっては組長だったというべきか。もう死んでしまっているのだから。現在はその時の若頭だった人物が新しい組長の座についているらしい。

最上階につくと、右に曲がって左手にある黒い観音扉になっている部屋が連中の事務所になっている。これも香織の情報と一致している。

いつの間にか歩く足音を消しているのに苦笑し、扉にそっと耳をやって中に誰かいないか確認する。すると、確かに人の話し声がするのが分かった。喋っているのは二人のようだ。だが、口を開かないだけで後一人か二人いるかもしれない。もしくはそれ以上だ。

とにかく最低でも二人以上の人間がいるのは間違いない。俺は扉から耳をはなして二度三度深呼吸し、それからノックした。中で話していた声が止まる。

少し間があって、向かって右側の扉がカチャリと開かれた。

「誰だ」

中から出てきたのは身長百七十センチちょっとの恐面（こわもて）の男で、年齢は三十代後半といったところだろうか。ヤクザの事務所なのだからやはりヤクザ者のはずだが、恰好はやや青っぽいスーツを着た小洒落たサラリーマンといった風だ。ヤクザといっても、俗にいう経済ヤクザというやつなのかもしれない。

「九鬼ってもんなんだが、あんたらにちょいと話があってきた」

「……こっちに話なんざない。とっとと消えろ」
男が目を細め、あごを使って帰るように促した。
「いいのか。前組長さんのことだっていってもかい」
少し前の自分であれば間違いなく逃げ出してしまいそうになるであろう、そんな恐面の男に向かって平然と言ってのけていた。つくづく俺は、変なところで図太い性格をしているようだ。
前組長という単語を聞いたとたん、男の視線に鋭さが増した。さすがにゴクリと生唾を飲むことになった。これが迫力というものなのかと脳裏に浮かんで消える。
「……おまえ、なにもんだ」
「ちょいと訳ありのもんとしか言いようがないね。なに、別にあんたらに迷惑な話をしようってわけじゃぁないんだ。少し聞きたいことがあるだけだよ」
「ちょっと待ってろ」
そういって男が扉を閉めた。中にいる組長か何かに伝えに行ったのだろう。耳を澄ますと先ほどの二つの声ともう一つの声が、何か言っているようなやり取りが聞こえてきた。
「待たせたな」
再び扉が開かれて、同じ男が顔を覗かせる。中に入れということらしい。
部屋の中は、映画やなにかでよく見るなんともヤクザ者らしい内装だった。焦げ茶色をした革張りの三人がけのソファーがガラステーブルを挟んで向かいあって二つ。その隣にヴィンテージ・マホガニーと思われる大きな机があり、卓上には不釣り合いなクリスタルの原石らしきものが置いてあった。
達筆のため、なんと読めばいいのか分からない文字が書かれた紙が額縁に入れられて飾ってもある。こういったものはこの組の心得なのか、それともただの趣味なのかいつも考えてしまう。
その部屋の中に男が三人、机の横に一人とソファーに二人座っている。先ほど喋っていたのはこの二人だろう。そして招き入れた男

を含めた四人が部屋の中にいたことになる。皆一様に鋭い目つきで俺を見ている。

「おまえさんか、話があるってのは。……随分と若いな、まだガキじゃねえか」

こちらから見て、ソファーの奥に座っている男が俺を眺めながらつぶやいた。態度と最初に口を開いたことから、この男が組長についた若頭だろう。オールバックの髪型と薄いピンクのシャツの胸元を開けた恰好は、組長というより若頭の雰囲気そのままだった。

「単刀直入に聞く。あんたらの元親分を殺した奴についてだ」

「あ？」

ソファーに座っているもう一人が眉間にしわを寄せて凄んだ。この四人の中では一番体積のありそうな奴で、力士か何かに見えなくもない。

招き入れた男とともに、机横にいる奴も俺を見る目に鋭さが増した。

「おいおい、いきなりご挨拶だな。誰が殺されたって？」

「あんたらの元親分さ。ここの組長だったはずだ」

再び奥に座った男に向かって言った。男は他の三人と違い、眉ひとつ動かさずいたって冷静だ。小規模とはいえ、さすがに人の上に立っているだけのことはある。だがこちらとしても、そういった態度は予想していたことで驚くことでもない。

「……確かに親父が死んだのは事実さ。だがな、それで殺されたってのは暴論じゃねえのか？」

「……そうだな、あんたの言う通りだ。確かに決定的な証拠はない。それに、仮にあんたが親分を殺そうとしてたにしたって、俺にはなんの関係もないことだしな」

落ち着いて瞬きせず、ゆっくりと男に向かって一息にいった。こういうときに瞬きしたりするのは良くない。瞬きをするということは、それだけで人に焦ったような印象を与えるためだ。

良く大統領選においての討論会や、高度な政治戦や取引などに使

われるテクニックだ。人は集中すると極端に瞬きをする回数が減る。他人の目には集中しているふうに映り、それが本気であるというアピールになる。

「ほう？　だったら坊やはなんでこんなところに来たんだ。関係のない話ならここに来る理由はないだろう？」

「ああ、そうだ。こいつはただ俺の仮説の上で成り立っていることだし、本当だとしてもなんら興味のない話だ。俺が知りたいのは仮に親分が殺されたとして、そいつを殺したのが誰かということさ」

「……そんなわけの分からない仮説の立証のためにここに来たというのか」

「あんたらの元親分はその日、護衛も付けず一人で車を運転していた。理由は知らないけどな。そしてその日の夕方、ある縁日の会場に車で突っ込み、中に乗っていた親分は事故で死んだんだ。頭から血と脳しょうをぶちまけてな。

それが一応、公式の死ということになってるが、なんの因果か俺はその場に居合わせたんだ。あの男が死んでいるのを見たが、どう見たってただの事故なんかじゃぁなかった。何者かによって額を撃ち抜かれていた後が、はっきりとあったんだ」

「あ、兄貴……」

力士のような奴が兄貴と呼ばれた奥の男に向かって、明らかな動揺の色を見せた。この男ほどではないが、他の二人にも驚きの色が確かに浮かんでいた。

男も同様で、ようやくピクリと眉を動かした。眉間にもしわを寄せている。しかしそれは他の三人のようなバレたといったものでなく、よくも俺のようなガキがといった感じだ。

「で、仮にそうだとして、おまえさんはどうしようっていうんだ？　そう思うのなら、警察にでも行けばいいだろうが」

「だからいったろ？　そんなのは興味ないってな。別に俺はあんたらをゆすりたいとかそんな魂胆は一切ない。単純な話だよ。その殺したかもしれない奴のことを知りたいだけさ。もしかしたら、そい

つは俺の知り合いかもしれないんだ。
　でもそいつを調べるにはあまりに情報が足りない。だからこうして、少しでも係わり合いがある可能性があるなら……ってわけなんだ。それともう一つ。加藤の弔いも含んでのことだ」
　加藤の名を出したとたん、沈黙が下りる。とりあえず、香織の話では話せば分かるという連中だそうだが、さてここからどうしたものか。
　今でこそヤクザなんてしているこの男は、元々加藤と知り合いでひょんなことから交友が始まった。香織は詳しくは話さなかったが、この連中には加藤に何らかの恩があるらしい。
　だからここで加藤の名を出せば、少しは有利にことが動くはずだ。話せば分かるということは、なるべく手の内をひけらかした方が良いということでもある。
「……」
「おまえ、その話誰から聞いた」
「風俗嬢」
　短く答える。男は思うところがあるのか、あいつかと言いながら舌打ちする。すると男は何か観念したように問いかけてきた。
「それで。おまえはそいつのことを聞いてどうしようっていうんだ？」
　踏ん反り返ったように足を組んで腕をソファーの背もたれにかけていた男は、足を解き、両腕を膝の上にやって上体を前のめりにした。
「さぁね。そいつが俺にとってのゴールなのかすら分からないんだ。とにかく今は、手当たり次第ぶち当たっていくしかないからだ」
　軽く肩をすくめた。嘘は言ってない。本当にどうするかなんて決めてなどいないのだ。あくまで俺にとっての目的は沙弥佳なのであって、それ以上は何かを望んでいるわけでもない。もちろん障害があれば、俺は何がなんでもそいつを取り除くつもりではあるが。
「若いってのは向こう見ずだな……ま、おれも人のことを言えた義

理じゃないがな。……おい」
　男が机横の男に向かって何か指示をする。一番ほっそりとした男は、それだけで男が何を欲っしているか分かるのか、すぐに机の上にあった電話をとって男に手渡した。受け取った男は直ぐさま番号をプッシュし、耳に受話器をやった。
「……ああ、おれだ。実はおまえさんとこに一人、依頼人がいるんだが今大丈夫か？　ああ……ああ、分かった。向かわそう」
　そんな短いやり取りの後に男が電話を切って、再びほっそりとした男に電話をやった。
「おまえさんは香織の紹介だからどうこうするつもりはないが、おれの口からは何も言うことはない。詳しい話が聞きたいなら今から紹介するところに行きな」
　男は目の前のテーブルの上にあるメモ用紙とペンをとり、さらさらと紙にペンを素早くはしらせる。書き終わるとメモ用紙を切り離し、俺に手渡した。
「M区のRの裏通りに三波という家がある。そこに行ってみな。多分、おまえの知りたいことが分かるだろうよ」
「どうも」
　俺は男達を一瞥しドアの方へと移動すると、背後から男に呼び止められた。思わずドキリとしてしまう。驚いたことをなるべく悟られぬよう、ゆっくりと首を横にして男を見やった。
「おまえ、加藤と知り合いなのか」
「ああ」
「……やつはなんで死んだんだ」
　俺とは目を合わせずに、一人ごちるように呟いた男に俺は首を振るだけだった。
「分からない。だが、ただの事故なんかじゃぁないって俺は思ってる。奇しくも、加藤の死とあんたのとこの元組長を殺したかもしれない奴は、なんらかの形で結びついてる可能性があるから調べてるんだ」

「……そうか」
男が加藤に恩があるというのは本当なのかもしれない。昔かたぎな奴とは聞いていたが、確かにその通りだ。きっとこの男も、加藤の死を知って衝撃を受けたに違いない。うなだれる男を尻目に俺は黙って肩をすくめ、ドアを開けて部屋を出た。
扉を閉めると、俺はそのまま身体を扉にもたせ、そこでようやく深く息を吐きだした。今頃になってバクバクと、心臓が早鐘を打ち始め緊張の糸が切れたのを実感した。
「……なんとかなるもんだな」
一拍おいて、気を新たに階段を下り始める。全く、いくら口利きがあったとはいえ、まさか、単身ヤクザの事務所に行くなんて思いもしなかった。
実際には行くまでの間、とてつもなく不安だったのにいざ扉をノックした辺りから、まるで自分が自分じゃなくなったような気がしていたのだ。おかしなことに、全くといっていいほど緊張していなかったのだ。アドレナリンが過剰分泌したためなのか、はたまた、何も考えがなかったからなのか。ともかく、良い意味で冷静でいられたことがうまくことが運んだことに繋がったのは間違いないだろう。
階段を下りながら、男に手渡された紙に目をやった。男が書いていたのはM区Rの簡易地図だ。通りの名前と目印になる建物やなんかの名前が書かれ、中心からやや外れたところに目的の場所と思われる印がしてあった。男はただ行けと言っただけで、ここに何があるのか全く見当もつかない。
それでも一つだけはっきりとしているのは、ここは一般人が立ち入るような場所ではないということだ。いい加減俺も学習するというもので、ヤクザ者から紹介を受けるような場所が普通のところであるはずがない。良くないことが起こりそうな、そんな予感があるのだ。
先ほども、電話口で男が俺のことを依頼人などと口走っていたの

が思い出される。逃げ出すのであれば、多分今が最後かもしれない。

俺はそう考えてかぶりを振った。馬鹿な。泣き寝入りなんて、もうごめんだ。あんな惨めな気分になるくらいなら、危険だろうがなんだろうが、自分で納得がいくまでやると誓ったばかりではないか。沙弥佳のためだったらなんだってすると誓ったばかりなのに、逃げ出すなんてことをするはずもない。

それでも一瞬、ほんの一瞬だが綾子ちゃんのことが脳裏を掠めた。本当にそれでいいのかと。

だがそれも、あくまでほんの一瞬だった。彼女のことは大切ではあったが、妹がまだ死んだと決まったわけでもない以上、俺にはあいつを探し出す権利があるはずだ。その権利があり、そうすると決めたからには多少の危険があっても俺は行ってやる。そしてそうなった以上、俺にはやれる限りやらなくてはならないという義務もあるのだ。権利と義務……これは常に一体でなくてはならない。

ビルを出るとふわりと風が凪いだ。今晩は最近としては肌寒い夜だ。けれども、つい先ほどのやり取りの後で体温が急激に上昇した身体には心地が良い。

俺は渡された紙をくしゃりと握って、そのまま上着のポケットに手を突っ込んだ。渡された紙に書かれた場所が危険なのかそうでないかは別に、俺にとって賽が投げられたようなものだ。

自身の安全を考えれば行く必要はないが、そんなことをしてしまえばもう二度と沙弥佳に会えない気がしてならない。それどころか、会う資格すらなくなってしまうように思えて仕方ないのだ。

やれやれ、全くおかしな話ではないか。沙弥佳と最後に会ったあの日、仲たがいし結果的に綾子ちゃんを選んでしまったというのに、今となっては逆のことをやろうとしているのだ。これがおかしいと言わずになんという。

突風が吹き、寒さにもう片方の上着のポケットにもう一方の手を突っ込んで、中の携帯を握りこんだ。駅近くにある時計を見ると、

すでに二十三時になろうとしている。どうやら今晩は家に帰れそうにないようだ。

第６１章

目の前は真っ暗で、全く視界がきかない。念入りに二重に目隠しされているためだった。

耳には目隠しの布が通って締めつけられ、頭全体は何やら大きな布袋が被せられているため耳に入ってくる音もくぐもって、いまいちよく聞こえない。

ただ一つだけはっきりとしていることは、今車に乗せられてどこかに向かっているということだけだ。おまけに車を走らせるスピードもかなりのものだ。もしかすると高速を走っているのかもしれない。

視界が真っ暗でなおかつ見知らぬ人間たちに強制的に連れられていくのが、こんなに人を恐怖させるとは思わなかった。

車内には俺を含め、四人が乗車している。自分以外の三人は全て男だ。

それでもこういう時に限って変に冷静になろうとしている自分がいた。被せられている布のため息がしづらいが、何度も深呼吸をして落ち着かせようとしていた。

しばらくすると走っていた車が停車した。ドアが開く音が三つ。すぐに俺の横のドアも開かれた音がする。

「出ろ」

低く高圧的な声だ。俺はその声に従って車を降りると、歩けと背中を押される。

「まっすぐ進め」

右と左、後ろにそれぞれ男が一人ずつついているようで、目が塞がれている俺のことなどお構いなしに速く歩くよう促してくる。

直進しながらしばらく行くと、肩を強く掴まれて止まらされる。右の男が何か操作している音が聞こえる。耳に布がきつくかかって

いるためかとも思ったが、どうやら違うらしい。今いる場所は、俺たちの歩く音が止まると不気味なほどに静まりかえっているため、些細な音も聞こえるのだ。

男が操作し終わると、前からガシャリと何かが開かれる音がする。多分、ここはキーロック式か何かの扉の前なんだと思われた。

「進め」

背中を小突かれ、再び歩きだした。そこで扉と思わしき中に入ると、ほんの数歩あるいたところで再び止まらされた。すぐに床が下に向かって動く。ここはエレベーターだったのだ。

下に着くとまた歩く。幾度か右に左にと曲がり、ようやくどこかの部屋とおぼしき場所にきたのか、俺はそこに置いてあったらしい椅子に座らされた。

背もたれに両手をまわされて拘束される。手首には何か手錠のようなものがかけられる感覚があった。

三人の男たちはそれらを施すと、さっさとその場を立ち去って行った。

音の反響具合から考えても、今のこの場がただの部屋でないことは確かで、どんな場所で拘束されているのかまでは分からないが、多分ちょっとしたホールになっているのかもしれない。

一人にされるとマイナスイメージばかりが浮かんでくる。今拘束されている椅子は、実は、拷問用か何かの椅子なのではないかとか、目の前にはすでに銃か何かが突きつけられているのではないかといったイメージだ。

試しに今ほどかけられた手錠が解けないか、がむしゃらに動かしてみるが全く解ける気配はない。足は自由のため席を立とうと思えば立てそうなので立ってみるが、今度は手錠に手首が引っ掛かり、動けそうもなかった。

どうもこの手錠、椅子そのものに取り付けられているようで、びくともしないのだ。おまけに立ち上がった時に勢いよく立ち上がり過ぎたためか、肩と手首がいように引っ張られてしまって痛い。

それでもなんとか抜け出そうと思いつく限り試みてみるが、どれも虚しく、一ミリだって動くことはなかった。椅子自体も床にしっかりと固定されているみたいだった。

俺はうなだれるように椅子に座り掛かった。結局のところ、今は何をしたところで無駄だということが分かった。となると今は今後のことのためにも、なるべく体力を温存しておくべきと判断したのだ。

改めて考えると、多分今すぐに死ぬことはないはずだ。もし死ぬんであれば、さっき、あの場所でとっくの昔に死んでいたはずだろう。

深呼吸をすると、先ほどのことがありありと思い出される。時間にすると、まだ一時間と経ってない。

ヤクザから紹介されて訪れたRにある、三波という人物の家でのことだ。念のため綾子ちゃんには青山の家に泊まると言っておいた。

もういくばくもすれば日付が変わろうかという時刻になり、ようやく俺は三波の家を訪れた。三波の家とはいっても、広さは綾子ちゃんの家よりもさらに一回りか二回りは敷地も建物も広そうだ。

建物の外観は上の二階だか三階だかの部分は一面曇りガラスになっていて、庭には高さが何メートルもある木が数本立っている。それらがライトアップされているのを見ると、ちょっとした小洒落たオフィスに見えなくもない。

一等地のど真ん中にありながらここまでの規模の邸宅を建てるなんて、とんでもなく金持ちのようだ。

俺は敷地に足を踏み入れ、コンクリートの石畳を正門に向かった。門まで無駄に何メートルもある。綾子ちゃんの家を見た時もそうだったが、金持ちというのはどうしてこう、無駄に広く、大きく見せようとするのか不思議だ。

それとも俺が単に根っからの小市民なだけで、普通はこういう広い家を持ちたがるものなのだろうか。

正門の横にある呼び出しボタンを押すと上にあるライトが光った。門は非常に精巧な金属の細工が施されている。青っぽい緑がかった色は青銅製だろう。こちら側からは分からないが、向こうからはこちらが見えているという類いのものだ。少しの間の後に中年女の声が出た。

「はい。どちら様？」

女の声は、どことなく上から目線な声だった。それと建物の豪奢さとは正反対の、下品そうな感じもする。

「すみません。紹介されてきた九鬼という者なんですが」

「ああ、あんたかい」

きちんと話が通っていたことに安堵を覚えホッと一息した直後に、正門が自動で開かれた。ぱっと見は手で開く昔ながらの門かと思いきや、とんだ高性能な門だったようだ。

庭はテレビでよく見る豪邸を思い出させる広さで、南の国でよく見かける木々や植物があり、まるで南国のリゾート地みたいな雰囲気だ。

その中を玄関までくると、見計らったように扉が内側に開かれて中から男が出てきた。

「君か。入りたまえ」

赤い薄手のセーターをきた中年男だった。五十代と思われる男だが、もう少し若い四十代にも、もっと上の六十代にも見えなくもない妙齢の男だ。先ほど対応した女とは夫婦なんだろう。

「失礼します」

俺が入ると男はついてきたまえと告げ、どこかへと案内する。

これからどんなことが起きるのか見当はつかないが、行けるところまで行ってやろうではないか。

男に話しかけることもなく、また話しかけられることもなく建物の中を進む。すましているが、男はやはりとんでもないことをやって生計を立てているに違いない。

途中、幾人か人がいるのを見かけた。皆一様に濁った目をして、

どす黒いといっても過言ではないほどのクマを作っている者もいた。けだるそうにして、目の焦点があっていない。

俺の知識の中にあるのでは、こんな症状に陥るのはドラッグだ。事実、こんな都会のど真ん中で、異常ともいえるほど頬が痩せこけている者もいたのだ。

（一体なんなんだ、ここは）

人間をやめて、気持ちの悪い顔をした連中に見つめられると、とてつもない嫌悪感にとらわれる。もしそのまま近付いてこようものなら、躊躇いなく殴ってしまいたくなるほどだ。

階段を一階分降りた先の部屋で、男はソファーにかけるよう言った。床は四角い形をした白と黒が交互に縦横に敷き詰められ、テーブルはきっと百万や二百万では買えなさそうなほどの高級感あるものだ。もちろん、周りの家具も同様だろう。

男にしたがってソファーに座って少しすると、奥からどうなったらこんなにまでなれるのか、逆に聞きたくなるほどの太った女が出てきた。

よく歩けるものだと感心してしまうほど重量のある女で、体重は百キロや百五十キロではすまないだろう。百八十キロか百九十キロはあってもおかしくなさそうだが、そうだとしてもまだ十キロか二十キロはサバをよんでそうな醜女（しこめ）だった。

「九鬼ってのはあんただね」

巨体の醜女の声は大きく、恥じらいなど一切感じられない。

太りすぎているため年齢は予想もつかない女は、歳のわりにニキビがひどく髪もパサパサで、頭頂部あたりは少し薄くなっていた。

声から察するに先ほどの声の主であることが分かるが、なるほど。この女……もはや女を捨てていそうな奴をそう呼んでいいのか分からないが、歪んだコンプレックスから人を見下すようになっているのだろう。

外見とは裏腹に莫大な金を持つという、世間一般から見て羨望の眼差しを受ける事実によって、それらを満たしているのかもしれな

い。
「あんたが三波さん？」
「まあね。あのやさぐれ者から紹介を受けたということは、あんたもアタシに何か依頼があるんだろう。何が望みだい」
目前の二人がけのソファーが、この醜塊な奴によって占拠された。肉がつきすぎて踵が床についていない。
醜女が席につくと、すかさず先ほどの男が甘そうなクッキーを持ってきて前にあるテーブルに置く。醜女はさも当然のようにそれらに手を延ばした。動作の一足一動がどこか滑稽だ。
「あんた、K組の元組長を知ってるかい？」
醜女が俺にもクッキーをすすめてくるのを首を振りながら断って、話を切り出した。K組というのはさっきのヤクザ達のことだ。
「あんたをアタシに紹介したやさぐれ者の元親分だろう。去年死んじまったが、そいつがどうかしたのか」
「……組長はただ死んだんじゃない。殺されたんだ、頭をぶち抜かれてね」
醜女のクッキーをとる手が止まる。
「……復讐しにきたってわけかい」
首を振って否定した。
「違う。俺が知りたいのはその組長を殺したのが誰かということさ」
自然な会話だが、醜女が組長が殺されたことに対して否定しなかった。やはり事実だったということだ。
「……」
醜女は目をきょときょととさせて何と言おうか迷っているようだった。あるいは、今の発言が失言だったとでも思っているのだろうか。
「俺はK組の連中にこのことを言ったら、あんたに会えと言われたんだ。つまり、あんたは何か知ってるんだろう？　何でもいい、教えてくれ。それが俺の依頼だ」
ただ頼みこんだって素直に教えてくれるとは思わないが、依頼と

なればどうだろう。依頼とあればこの醜女も何か喋るのではないか。そう思って言ってみたのだ。

「依頼か……ものは言いようさね。ふん、まあいい。依頼というなら教えてやる。

あそこの親分が死んだのは紛れも無く殺しだ。アタシが当時若頭だった男に依頼されてね、プロの殺し屋を斡旋したのさ」

プロの殺し屋……。裏世界にはそういった連中がいるというのは聞いたことがあるにはあったが、どうにも実感が沸かずに半ば冗談にも思っていた。

しかしこの話からはそれらが冗談であるとはとても思えない。確かに殺し屋というものは存在するのだと、この時初めて知ったような気がする。そしてこの女は、危険な連中を依頼があれば紹介する斡旋屋だったというわけか。

ついでに麻薬なんかも売りさばいているんだろう。もちろん、それが裏の本当の顔で、表向きは先ほどの男が別の職に就いて稼いでいるに違いないのだ。そうでなければ、税務署からの目はごまかせないはずだ。

「斡旋したというのは、どんな奴なんだ」

「アタシが斡旋したのはまだ若い男さ。そうだね、あんたとさほど歳は変わらないだろう。

元々、別口でアタシの斡旋リストに入った奴だけど、かなり腕が立つって言われて入れてみたが、確かにその通りだった。良かったのは顔だけじゃなかったというわけさね」

顔だけじゃなかった……つまり、なかなかのイケメン野郎ということになるが、こいつはますます斑鳩である可能性が強まってきた。顔を見たわけではないが今までのことから、斑鳩が限りなく黒になったのは間違いない。

「その殺し屋とやらはどこから紹介されたんだ」

「H市にある児童養護・保護施設さ。アタシも詳しくは知らないよ。腕が立って使えるというのなら何でも使う、ただそれだけの話だか

らね」
　間違いない。そいつは斑鳩のことなのだ。奴が殺し屋だなんて少なからず驚きがあってもおかしくないが、感覚が麻痺してしまったのか全く驚かなかった。むしろ、そうだったのかという納得の方が大きい。
「その保護施設ってのは、殺しの技でも教えてるのかい」
　ニヤリと皮肉を込めて言ったつもりだが、醜女には全く効果がなかったようで気にする風でもなく続けた。
「みたいだね。ま、日本ではそうじゃないかもしれないが、こんなのは別に珍しい話じゃない。海外に行けば、こういう話はしばしばあることだからね」
　女がそこで一旦話を区切ってクッキーを口にやった。口を開けて食べるため、ポロポロと粉々にされていったクッキーが落ちていく。
　とりあえず、斑鳩があの組の元組長を殺したのは間違いなさそうだ。また、そうである以上はなぜ殺したのかという理由などいらないだろう。依頼されたから。ただそれだけの話なのだろうから。
「分かった。それでその施設ってのは、一体どんなところなのか分かるかい」
「分かるさ、そりゃあね」
「ならそいつを――ぐっ！？」
　教えてくれないかと言おうとした時、突然背後から首を絞められた。
　首を後ろに向かって思いきり引っ張られる。
「くははは、油断したね。アタシらを騙そうたってそうはいかないよ。最近アタシらのことを探ってる奴がいるから、注意しろって情報が入ってきてるんだ」
「うっ、ぐっ、はあっ」
　醜女が容姿にぴったりの下品な高笑いをしながら喚いている。顔面が暗い喜悦に歪んでいる。
　少しでも空気を体内に取り入れようと、立ち上がって座っていた

ソファーに膝を立ててた。
だがそうするとさらに後ろに引っ張られてしまい、首にかかっている糸に力が篭められる。
糸を少しでも緩めようと首に手をやるが、しっかりと皮膚に食い込んでいて全く指を入れる隙間がない。
糸はワイヤーか何かであるのが指に触れた感触で分かる。
だがそんなことが分かったところで何の意味もない。
ワイヤーはさらに皮膚の深い部分に食い込み、薄い筋肉の層にまで進行していて、もう息がまともにできない。
全く訳が分からなかった。突然後ろから首を絞められるなんて考えてもいなかったのだ。
（も、もう駄目だ……）
食い込むワイヤーに指が滑った。もう力がなくなってきているのだ。
意識が遠退きかけたその時、どこかで誰かが叫ぶ声が聞こえた。
次の瞬間、食い込むワイヤーからふっと力が抜けて首から緩んだ。
だが同時に、後ろからに重たい何かがどっと覆いかぶさってきたのだ。
首に食い込むワイヤーを緩ませ、俺は呼吸困難になりながら空気を肺に吸い込んで、ソファーに倒れこむ。
何が起こったのか分からない俺は、苦しみながらも顔を上げようとするがうまくいかない。遠退きかけた意識は、自力ではそう簡単に元に戻せなかったのだ。
たとえそんな状態であっても、俺は何が起こったのかは見届けようとした。
まず後ろから覆いかぶさってきていたのは、先ほどここまで案内した男だった。
背中を真紅の血を滲ませているが、赤いセーターによって色がカムフラージュされている。
そして、のろのろと首をあげた瞬間、俺と同様に混乱していた醜

女が額に小さな穴をあけてソファーに沈んだ。
額に風穴が開いたため、醜女の頭は上を向いた。
きっと立ち上がろうとしたのだが、この巨体では思うように立ち上がれなかったのだろう。
醜悪な肉塊となった女は、死してなおも醜さをきわめている。
「こいつだ」
倒れていた俺を全身黒づくめの男が見つけると、肩を掴んで仰向けにする。全く動けないのをいいことに乱暴な扱いだ。
「これを被せろ」
男の後ろからもう一人似た恰好の男が現れて、黒くて分厚そうな袋を取り出した。
俺の後ろからは、さらにもう一人いたようで黒い布切れを目元にあてて、思いきり後ろで縛られた。
「うっ」
耳まで布に締め付けられたため、思わず呻き声をあげた。続けざまに頭に何かを被せられる。目の前の男が持っていた黒い布袋だろう。
首を絞められたと思えば今度は目元を縛られる。こういうのを踏んだり蹴ったりというのか。
被せられた袋の篭った臭いに眉をひそめるが、そいつを理由に叫び声をあげたとしても無駄だ。いや、それどころかこいつらに何を要求したって意味はなさそうだ。ここは一つ、この男達の言う通りにしておく方が良い。
だんだんと、首が絞められて酸欠状態だった脳みそに酸素が行き届きだし、頭が回転し始めていた。
楽観的かもしれないが、今すぐ死ぬことはないだろう。もし殺すのであれば、わざわざ夫婦だけを殺したりはしないはずだし、こいつらの短いやり取りから察するに、多分どこかに連れて行こうとしているのだ。
一瞬しか見えなかったが連中は全身を黒一色に染まった服を着て

いて、同じように頭も黒いマスクをしていたのだけは、はっきりと見えた。胸辺りには何か硬そうな物が入ったベストみたいなものを付けていた。手袋やブーツなども、市販のものとは違うように思われた。

連中の顔を拝めないのは残念だが仕方ない。とにかくここは大人しく連中に従って機会を窺った方がいい。こんなことを言うのもなんだが連中が来なければ、俺は間違いなくあのまま殺されていたのだ。

しかし、そうして気付けば、こんな糞ったれな椅子に拘束されてしまっているのだ。ますます自分を窮地に追いやってしまった気がしてならない。

（こんなことなら、捕まった時にもっと奮起しておくべくだったか……）

後悔しても始まらない。俺はゆっくりと深呼吸して気持ちを落ち着かせる。格段密閉性が高いわけでもない袋だが、やはりずっと被らされているためか、どことなく息苦しく感じるのだ。

すると、後ろからカツカツと誰かが歩いてくる足音がした。それも一人ではない。間違いなく俺のところにやってくるだろう。

そのうちの一つは足音から察するに女だろう。男物の革靴の音にまじって、女物のハイヒールの音が聞こえるのだ。ただ、ピンヒールというわけでもなく、そこまで細く渇いた音ではない。

複数の足音は俺の後ろに、女と思われるやつは横を通って前にきて止まった。思わずゴクリと生唾を飲んだ。

目の前にいると思われる女が動いたような気配を感じる。すると頭の袋が取り払われ、きつく締められていた目隠しも取りさられた。

目隠しをされていたので気付かなかったが、照明を当てられていたらしい。瞼を閉じていても、照らされている中ではそれだけでも眩しく、とても目を開けてはいられない。なんとか薄目で目の前にいる女を見ようとつとめても、やはり、すぐには眩しさに目が慣れない。

「行動力あるわね。まさか、その日のうちに三波の家にまで行くなんて思わなかったよ」
　目の前にいる奴はやはり女だった。だが俺にはそれよりもその声の方が重要だった。というのも、女の声は聞き覚えのある声だったのだ。
「……あ、あんたは」
　ようやく少しばかり目が慣れてきたところで女の顔を見ると、驚いたことにあの”楽艶”にいたはずのｋａｏｌ、いや香織だったのだ。
　先ほどまでとは打って変わってキャリアウーマンに似た装いで、あのエキゾチックな顔から化粧がいくらか落とされているようだった。
　もしかするとそのままなのかもしれないが、とにかくぱっと見ても香織だと分かるのには間違いない。
「どういうことなんだ」
　眩しさに片目をつぶり、少しでも光を遮りながら喚く。
「やっぱりあんたは気に入ったよ。この若さでここまでできる奴はそうはいない。まさか、本当にヤクザ者の事務所にまで行くなんて思わなかった」
　くつくつと笑う香織には、楽艶で見せていた妖艶さは全く感じられない。いや、それどころか態度そのものからして違っていた。全くの別人のようにすら見えるほどだ。
「これはどういうことなんだ。あんたは何者だ」
「単純なことだよ。あんたを試させてもらったのさ」
「試すだと？」
　微笑を浮かべて香織はそっと俺の頬を撫でた。
「そう。あんたがヤクザ程度に尻込みせず行けるか、そして三波の邸宅にまで入り込むことができるか……それらを試したのさ。
　あるいは連中らと一悶着あるかとも思ったけど、それにしたって何も問題なくあんたはきちんと熟すことができた。十分合格さ」

「待て。あんた、さっきから何の話をしてるんだ」
香織を睨みながらさらに喚きたてた。だが、後ろの奴が髪を引っ張って大人しくさせる。
「うっ。……くそが。あんたに頼ってとんでもない目にあっちまうなんてな」
「ふふ。普通ならこんな状況になれば、恐怖で何も言えなくなるか命乞いをするものなのに、悪態をつくなんて……なるほど。あの女が目をつけるわけだわ」
頬を撫でていた手をゆっくりとあげていき、今度は髪に触れる。楽艶ではあんなにぞくぞくとさせられるような行為だったはずなのに、今はとんでもなく不快だ。
「触るんじゃない」
とりあえずこの女の罠にかかった自分を呪って、触れてくる女の指を拒絶の意味をこめて思いきり頭を振った。
「あら、さっきはあんなに激しくしてくれたのに、随分冷たいね」
ここで香織はようやく先ほど見せた、妖艶な顔をして見せる。こんな状況であっても思わずぞくりとさせる顔は、やはりこの女が天性の魔魅を持っているんだと思わせる。
「そんなことより、あの女ってのは誰のことだ」
「ふふっ、あたしが言わなくたって、もう分かってるんじゃないのかい？」
その通りだった。俺にはすでに香織のいう、あの女の正体に薄々感づいていた。あの女というのは多分……。
「……真紀。藤原真紀のことだろう」
そういうと香織は口の端をわずかにあげて頷いた。やはり……。
「つまり俺は、はなっからあんたや真紀に嵌められていたというわけか」
「それは違う。元々あたしらはあんたには少しの興味もなかった。だがあの女は何を思ってか、あんたに随分とご執心だったようだからね。

あたしらとしては、あの新参者に、そういつまでもやられ放題というわけにはいかない。だから出し抜く必要があったのさ、あんたを手に入れることでね」

そうか……加藤が死んだ日、俺を尾行させていた男たちもこの女の差し金だったというわけか。

真紀・斑鳩の派閥ともう一つの派閥の親玉がこの香織だった。どうりで二人のことにも詳しいはずだ。

「新参……ってことは、だ。あんたは、あの女狐に何度もしてやられてるってことか。それでその腹いせに俺を人質にして、あいつを脅そうって魂胆なんだな」

「ふん。言い訳はしないさ、間違いじゃないからね。だけど一つだけ勘違いしてるよ、あんた」

「何？」

妖艶な笑みを浮かべていた香織から、すっと憑き物が落ちたみたいに笑みが消えた。まるで、今までの顔が作りもののように思えるほどの無表情さだった。

「人質にしようなんて、あたし自身はこれっぽっちも思ってないってことだ。あの女が悔しがるというなら、今すぐにあんたを殺してやったっていいんだ」

無表情から一転、女は擬音をつけるとすれば、キシリとでもいうような暗い、壊れたかけた人形のような笑みを浮かべて見せた。思わず、ぞくりと鳥肌が立ってしまったほどの暗い喜悦の表情だ。

女はポーカーフェイスが上手いというが、どうやらこっちがこの女の本性らしい。

しかし、殺すことを躊躇わないと言う女のこんな表情を見せられた日には、さすがに死を実感するというものだ。下手を踏めば、今すぐにでも銃かナイフかを頭や首に突き付けてきそうな勢いで、ここは少しでも気を落ち着かせてもらった方が良さそうだ。

「……あんたと真紀、どんな関係なんだ」

「くくっ、簡単なことさ。同じ職業、殺し屋だ。とはいっても、あ

たしのが業界は長いけどね」
「俺を試したと言ったな。それはどういう意味だ」
「あんたに適性があるかどうかだよ、殺し屋としてのね」
「なに……？」
一瞬、我が耳を疑った。殺し屋としての適性だって？
黒田も俺の生存本能がどうとか言っていたのを思い出した。この女といい、あの黒田といい、なんだってそこまで俺に執着するのだ。もっともこの女の場合は、純粋にそれだけではないようだが。
「馬鹿馬鹿しい。そんなもの、俺にあるはずがない」
「いいや、あんたには間違いなくその素質がある。
事実、あんたはあの今井を退けたし、昨日今日と、いくつもの試練を乗り越えた。少なくとも、警察から完全に行方を眩ませることができたのには満点をやってもいい。途中に出会った犬をきちんと撃退したのもプラス評価だ。
そして、加藤の部屋で風俗と何か関係があるとまで考え、三波の家にまで臆することなくたどり着いた。おまけに、その間一度も波風立てなかったのは十分それを示してる。
昨日も尾行に気付いて撒こうとしたのだって、素人には簡単にできることじゃないんだよ。しかも自分でそれに勘付き、実行するところも評価できる。
まあ、最後は捕まったが文句はない。十分合格レベルさ」
こいつは驚いた。加藤のアパートにいた時、確かに警察が来たがまさかあれもこいつらの仕業だったのか。つまり、部屋の中をぶちまけたのも必然的にこいつらだということになる。俺にヒントを残すためにだ。
事実を知って舌打ちする。当然だ。昨日の尾行から現在に至るまで、なにもかも仕組まれていた。俺は仕組まれていたとも知らず、まんまと連中の手の上で踊らされていたのだ。
「それで。俺をこれからどうしようっていうんだ」　しばしの沈黙のあと、ぶっきらぼうに言った。気付くと女はま薄笑いの表情にな

っている。
「さて、どうしようか。あの女に、目にものを言わせてやりたいのは確かだけど……。あんたをなかなかに気に入ったというのも、決して嘘じゃないからね」
香織は顎に手をやってどうしようか考えているふりをしている。ふりというのは真紀もそうだが、実際にこの手の女が何も考え無しに行動してないはずがないと思うのだ。この女はきっと何か企んでいるに違いない。
「そうだね。このまま、あんたをあたし達の仲間にしてしまうのも悪くない」
「仲間だって？」
薄笑いだった顔は、良いこと思い付いたと言わんばかりに、ニヤリと口元を歪ませる。見え透いた冗談だ。間違いなく始めからそう決め込んでいたに違いないのだ。
俺としても突然仲間にすると言われて、はいそうですかと頷くほど安くない。俺を試すといって、幾重も仕掛けを張ってきた女に対して素直に仲間になど入れるはずもないだろう。ましてや、この女にとって憎い真紀に絡んでいるらしいのだ。
「嫌だと言ったら」
「全く、こちらの予想通りの台詞をいうなんて、つくづくいい男だよ、あんたは」
待ってましたと言いたげな物言いではあるが、いちいち気にしてはいられない。どうせ何を言ったって、同じようなことを返してきたに違いないだろう。
「そうだね。あんたの家に出入りしてる可愛い子……あの子にいたずらしちゃうかもしれないよ？」
妖艶さとは程遠い、思わず殴り飛ばしたくなるような嫌な笑みを浮かべて女がとんでもないことを言い出した。
「なんだと」
「おや、突然目の色が変わったね。そんなにあの子が大事かい」

「あんた……」
無意識のうちにギリッと強く歯を噛み締めていた。
俺が仲間にならなければ綾子ちゃんに手を出すというのか、この女は。そんなこと許せるはずがない。彼女はなんの関係もないではないか。
「ふざけるなっ。彼女は何も関係ないだろう！」
「ふふ、だったらあんたの取るべき選択は一つだね」
くそ、なんてことだ。こんな女に良いようにしてやられるなんて……。かといって綾子ちゃんを巻き込むわけにもいかない。ただでさえあの子には色々と面倒をかけているのに、こちらの都合で危険にさらすなんてどうにも承認できることではない。
だったら、言うことを聞くしかないのか……苦虫を潰したように顔を歪める。いや駄目だ。言いなりになるなんて、俺には認められない。きっと、そこからさらに深みにはまっていくに決まっているのだ。
どうすればいい……考えろ、考えるんだ。何か……何かないか、この状況をうまく回避できる方法は……。
「迷っているね。いいさ。時間はたっぷりあるんだ、好きなだけ考えるといい」
そういって香織は後ろにいる奴にも顎をつかって出るよう促した。
「待て、俺を解放しろ」
「馬鹿いうんじゃない。そんなことできるわけないだろう？　だけど安心するといい。あんたが仲間になるというなら、また来るさ」
するりと頬に触れていき、そのまま香織たちはここに訪れた時と同じくして、カツカツと足音を立てながら去っていく。
「待てっ、こいつを解くんだ」
とにかく少しでも隙間ができないかがむしゃらに動かしてはみるが、結果は変わらない。余計に体力を使うだけだった。
「くそっ、俺を解放しろよっ。解放しやがれっ！」
これでもかと声を張り上げても連中の去っていく足音は止まらず、

だんだんと小さくなっていった。
「ちくしょう、これを外せよ……」
どうしようもない怒りに俺は、自由になっている足で思いきり椅子を叩きつけた。
くそっ……こんなことになるなら、この足で女を蹴りつけておくべきだった。そうすれば少しは気も晴れたはずだ。
足音もなくなると本当に静かだった。まるで俺以外、この建物には誰もいないかのようにすら感じてしまう。
息を荒くしていた俺だがしばらくするとそれも収まっていき、冷静さを取り戻す。連中の言いなりになりたくなければ、なんとかしてここから脱出しなければならない。
冷静になった頭で再度、どうにかできないかとくくり付けられている周辺を見回した。できた当初は染み一つない真っ白だったと思われる、薄汚れて大きな壁が左右にある。前には同じような壁があるが、上部には窓ガラスが取り付けられている。電気がついていないためなのか、ガラスの向こうは真っ暗だ。あるいは、こちらからは窺えないようにできているのかもしれない。
突然目隠しを外された時に眩しさを感じさせた照明は、そんな壁に設置されて座らされている俺に向け一斉に照らしている。白く強烈な蛍光色の光に照らされていれば、どうりで眩しく感じるはずだ。
また音の響き具合から、それなりに広い場所だとは思っていたがやはりそのようで、ここは部屋というよりもちょっとしたホールになっている。天井は高く、少なくとも十メートルはあるだろうか。あるいはそれ以上かもしれないが、下からではいまいち高さを把握できない。
（ここはなんなんだ）
天井や壁、床までも白い大きなホールの空間となると、それらに該当するものといえば真っ先にビルや病院の吹き抜けを思い出す。
だが、ここはそれらが当て嵌まるとは思えない。確かに、ビルや病院であればこのくらいの高さと広さを持った場所はあるだろうが、

四方に窓がないというのはどうか。さすがにビルや病院の吹き抜けであるはずがない。

正面に窓があるにはあるが、少なくとも太陽の光を取り込むためのものではないのは間違いない。どちらかと言えばこちらからは見えないのに、向こうからはこちらが見えていて、監視をするためのものに思える。

（監視……そうか、ここはもしかしたら）

ここはもしかすると、話に聞いていた児童施設とやらではないのか。前後の話とそこに関わっている人物の登場と照らし合わせれば、そう考えることもやぶさかではあるまい。そう思うと、途端にここの重苦しい雰囲気にも納得できた。

しかしそいつがわかったところで、今なにかできるわけでもない。周りには脱出にはおろか、この忌ま忌ましい拘束椅子を解くのに使えそうなものなど、何もないのだ。ただホールの中央にある固定された椅子に、くくり付けられているだけの状態なのだ。

足の自由だけはきくだけに、逆にこの状況には辛いものがある。もしかすると連中はそれも見越して、こんな場所に連れてきたのかもしれないが。

なんにしても、これでは何も変わらない。ただ状況を確認したにすぎないではないか。

「くそ……どうすりゃぁいいんだ」

どれほどそうしていただろうか。いくら頭を捻ってみても、この状況を打破できそうなアイディアは浮かんでこない。いい加減諦めてしまおうかといい気にもなってくるが、さすがに早過ぎる。

その時、突如として轟音が響いた。

「っ！？」

轟音とともに、ガラガラと何かが崩れていく音が響いてきた。何十、何百キロもの石が砕けるような音だ。

その響きは床を伝わり、固定された椅子にも伝わってくる。何が起こったのか分からないが、とんでもないことが起きたということ

だけは分かる。
後ろの方、歩いてきた通路の方から幾人かの怒声と、どこかに走っていく足音が聞こえる。
再び轟音が響く。それも今度はかなり近い。
続けざまに、やはりガラガラと何かが崩れていく音がする。音は俺のいる真上辺りで起こったようだった。
「なんなんだ、一体」
地震ではないというのは分かるが、さすがに焦った。わけも分からず、いきなり建物が崩れだすような音を聞くと、誰だってそうなるだろう。
この建物のどこかで、誰かが走り回っているような音もした。
理由は分からないが、ここが何者かから攻撃されている、そのようにも思える緊張感がある。
ここにいるのはまずいのでは、そう感じて何度も試して駄目だった拘束椅子を、ぶち壊すつもりで腕に力を篭める。
「何をしても無駄だ」
後ろから聞こえる声。振り向くまでもない、香織の声だ。
「一体何が起こったんだ。今の音はなんなんだ」
「建物が爆破された。今からあんたをここから移動させる」
「移動させるってどこにだ。それよりも俺を解放しろっ」
女に向かって喚き立てる。もしかすると逃げられるチャンスかもしれない。
だが、手短に説明した香織が足早に俺の後ろにきて、新たに腕に拘束具をかけた。やはりそう簡単にはいきそうもない。
「騒ぐな」
香織は低く冷たい声の後で、こめかみの辺りに何かを突き付けられた。
「死にたくないだろう?」
グリッとこめかみを押されて俺は押し黙る。
思わず息を飲んだ。横目にうっすらと分かるその形状は、間違い

なく本物の拳銃だ。
「それでいい。おとなしくしてれば別に殺すつもりはないさ」
香織がカチャリと忌ま忌ましい拘束具を外そうとする。
だが次の瞬間、またも轟音があたりに響く。今度は壁ごしではなく、直接、壁を破壊した音だと分かるほど大きく、つんざく音だ。
「くっ」
香織が頭上で呻く。
後ろの通路の方から、辺りに埃や粉状になってしまったコンクリートが飛ばされてきて、うっすらと舞った。
どうも、このホールの壁が破壊されたわけではなかったらしい。
変わりに耳鳴りがする。
だが今はそんなことを気にしてはいられない。逃げ出すチャンスを見逃すわけにはいかないのだ。
「そこまでよ」
複数の駆けてくる足音の後、ホールに稟とした声がした。
「大人しく銃を捨てて、両手を上げなさい」
「……ちっ」
香織は舌打ちする声の要求に従い、銃を捨てて両手を上げた。
「そこから十歩下がって膝をつくのよ」
少しばかりの躊躇いがあったのか、すぐに動かなかった香織に声の主が早くと促し、女はようやくそれに従った。
カツカツと声の調子と同じくして、稟と感じさせる歩き方。声の主が俺から離れた香織に向かっているのだろう。
「あなたを拘束させてもらうわ」
「おまえ……なんで」
声の主が一方的にやり取りを終わらせたのか、香織の呻き声の後に誰かが倒れるような音がした。
全て、俺の目の見えない背中ごしのやり取りのため、完全な判断はつけられない。
今度は足音が俺の方に向かってきた。

後ろにきた声の主はカチャカチャと音を立て、腕にかかった二つの拘束を解いた。
後ろ手にされていた腕が、ようやく前にやれる。
「あなた、なんでいつもこんななのよ」
「……ふん、悪かったな」
声の主は、真紀だった。そう、ここに乗り込んできたのは藤原真紀だったのだ。
俺は、そんな真紀の顔を見上げずにそう言った。この女には色々と複雑な感情が渦巻いているため、どうにもうまく接することができない。
「まあいいわ。それより早く立ちなさい。ここは間もなく完全に破壊されるわ」
真紀が振り向いて後ろにいた連中に指示し、倒れていた香織を運ばせる。皆一様に黒い恰好をしていて、俺をここまで連れてきた連中に似ている。それも皆、男ばかりだった。真紀はその中で紅一点といったところのようだ。
どれほどの間くくり付けられていたのか分からないが、随分と全身の筋肉が硬直していた。立ち上がると、軽い立ちくらみとともに、全身がひどく打ちのめされたように疲れていたのだ。長時間、車に乗ったままでいた後に、休憩のために外に出た時のような感覚に似ているかもしれない。あれを、もっと酷く疲れさせた感じだ。
「思ったよりも大丈夫そうね。まあ、ナイフで刺されたのに死ななかったような人だものね、あなたは」
久しぶりに会ったというのに、真紀は相変わらずの皮肉を言ってきた。まあ、この女らしいといえばらしいので無視しておこう。それに今回は助けられた手前、文句を言うわけにもいかない。

第６２章

カチカチと、一秒ごとに刻まれていく秒針の進んでいく音にまじって、風呂場からは水音が響いてくる。今は部屋の主がシャワーを浴びているのだ。

一足先にシャワーを浴びた俺は、何をするでもなく壁に寄り掛かって座り込み、ぼんやりと天井を眺めていた。それでも時折、思い付いたように部屋の中を見回した。

フローリングの床にはふわふわとした繊維の絨毯が敷かれ、その上に一人がけ用のソファーが二つ向かい合って置かれている。その二つの間に小さなガラステーブルもあった。

他にも同じ色をした木目の本棚や箪笥、さらには邪魔なのか、大きな木のテーブルが部屋の隅に横にして立てられている。

テレビも、一人暮しをする高校生とは思えないほど大きな薄型テレビで、ベッドの近くには、やはり高校生が持つには不釣り合いなほど高そうなコンポが置いてある。

そもそも、部屋そのものが広い。俺の自室は七畳か八畳程度であるに対し、この部屋は明らかに十畳はある。おまけに隣にはダイニングキッチンまでついている。

これらは、同じ年代でさほど歳の差がない俺の部屋にあるものと比べると、軽いカルチャーショックを覚えるほどだ。

「どうしたの」

そんなことを考えながらテレビの辺りを見ていると、シャワーからあがってきた部屋の主に声をかけられた。

「いいや。ただ今時の高校生は、こんなに良い機械を持ってるんだなと思っただけだ」

「あら、何いってるの？　あなただってまだ高校生じゃない」

「残念ながら、もう高校生じゃぁないぜ、俺は」

そういって肩をすくめ、真紀の方に視線を向けた。
「そんなのあなたが勝手に言ってるだけでしょ？　一応まだ学校に籍はあるはずよ。つまりあなたと私は、同級生ということになるわけ」
一応真紀も、俺がどういう立場に立たされているかは分かっているらしい口ぶりだった。
日付が変わってしまっているが今日一日アクティブに動き回ったせいで、時間の感覚が失われつつある。ほんの何日か前までは、まだ学校をどうするかなんて考えることもあったはずなのに、気持ちのうえでは、もはや高校生であったことなど遠い昔のような気になっていたのだ。なんともおかしな話ではあるが。
真紀が部屋の隣のダイニングキッチンにある冷蔵庫から、スポーツ飲料水らしい飲み物を取り出して、一口二口含みながら部屋にやってきた。
「あなたもどう？」
真紀は前にきて飲料水を渡す。実をいえば俺もかなり喉が渇いていたため、ペットボトルに入った薄い白濁のスポーツ飲料水を一気に飲み下した。
「すごい飲みっぷりね。まあ、いいけど」
そうは言われても仕方ない。俺は朝、家を出る前に朝食をとって以来、たったコーヒー一杯しか胃袋には収めていないのだ。
中身を全て飲み干してしまい、ペットボトルを口からはなした。五百ミリリットルのペットボトルに入った飲料水は、四分の三は俺の胃袋に入ったことになるほどだったのに、まだいくらか飲み足りない気がしなくもない。
真紀は空になったペットボトルを取り、キッチンの方へ持っていった。そのままガサゴソと何やら探っている音が聞こえるが、ここからは死角になって何をしてるのかよく分からない。
「はい、これ。今これくらいしかないけど、いいわよね」
そういって差し出してきたのは、いくつかの缶詰が入った袋だっ

た。フルーツのシロップ漬けは当然、ツナやコンビーフ、カンパンなんかの缶詰が入っている。

「良いのか。これ、あんたの非常食なんだろう？」

「いいわよ、別に。また買えばいいんだし。特別高いものでもないしね。はい、これ」

割り箸を受け取って頷いた。一応聞いてはみたが本当のところ、了解などなしにすぐにでも食いつきたいほど腹を空かしていたのだ。

俺は目の前に出された食料を余すことなく開け、冷静であれば、自分でも少しは落ち着けよと言わんばかりの勢いでがっつき始めた。

コンビーフを一口食べればツナを一口、主食がわりにカンパンを次々に口に放り込んでいく。フルーツとそのシロップをチェイサーの代わりにした。真紀はそんな俺の様子を何か言うでもなく、じっと見つめている。

「ふう……ごちそうさん。やっと落ち着いた」

差し出された缶詰全てを平らげ、ようやく心も身体も一息つけた気分になった。生前、母が疲れている時に食事をすると、ほっとすると言っていたのを思い出した。確かにそうかもしれない。俺は今まで今日ほど疲れた記憶はなく、だからこそ余計にそう思えるのかもしれない。

「満足したのならそれでいいわ」

一息ついてつぶやいた俺に、真紀は短くそういった。

「ところで本題に入りたいんだが、いい加減教えてくれるよな。あんた、一体何者なんだ」

「そうね、もう隠したって意味ないものね。私はあなたの想像通り、いわゆる殺し屋稼業についてるわ」

普段と同じ、抑揚のない声で真紀は語った。自分の出生から、あの施設に預けられることになって殺し屋になるための訓練を受けたこと。また、そこで斑鳩と出会い、斑鳩もやはり同じように訓練を受けていたことまで、細かい部分では先に聞いていた話と若干違う部分もあったが、大筋では香織の話した内容に間違いはないようだ

った。
「あの女とはどういう関係なんだ」
「単純に向こうが一方的に私を嫌っているだけよ。私は別に、彼女のことをどうと思ってるわけじゃないもの。まあ、その理由に心当たりがないわけではないけど」
俺は黙って頷いた。真紀の心当たりという部分が原因となって、あの女は真紀のことを気に入らなくなったのだろう。いや、それがあったからこそともいえる。
「それで」
「こんなこと言うのもなんだけど、どんな組織であっても、人同士が関わるのだから必ずどこかで衝突があったり、人間関係にヒビが入ったりもするものよ。それがどんな理由であってもね。
私は別に彼女を憎いと思ったことはないけど、私の属しているグループと彼女とその配下の人達は、元々良い間柄じゃなかった。今回みたいなこともしばしばあったくらいだから」
話を聞く限り、相当冷え切った関係のようだ。ようするに、政治家たちによる政党内での派閥争いそのままといっても良さそうだ。
「だが良かったのか、あの建物を破壊してしまって。いくら派閥争いがあったにしたって、元は同じ組織のものなんだろう？」
「別に構わないわ、もうあの場所は必要なくなったから。
だけど彼女たちはあそこを自分達の根城にしていたの。あそこを破壊するに至って、彼女たちは猛反対した。だってもう必要なくなったものを破棄しようと提案したのは私の属しているグループの立案だったから」
「あの女もあそこで育ったのか？」
「ええ。いうなら彼女と私は歳のはなれた姉妹みたいなものかもね」
ならば、斑鳩とは兄妹みたいなものなんだなと思った。
「だとしたら、あんたたちの親玉は片倉とかいう奴なのか」
「いいえ、片倉はただ単にあそこを任されていただけよ。まあ、彼が組織で手腕を振るっているのは間違いないけど」

片倉はあくまで、あの施設の責任者にすぎないということか。
「それで話は変わるんだが、あんた、加藤という男を知っているか？」
「知らない」
この女もこの女で大層ポーカーフェイスのため、この言葉にどれほど信用できるかは分からない。分からないが、今はひとつ信用しておくとしよう。少なくとも、その前まで話していたことは本当のようなのだから。
となると、やはり加藤を殺したという持論において最大の主犯は香織、といって良さそうだ。あの女は加藤とは良い関係といっていたが、実際にはそうではなく、俺を信用させるための嘘っぱちだったんだろう。
「でも、なんでそんなこと聞くの？」
「いや、こっちの話だ。別に他意はないんだ。それよりあんた、なんで俺があそこに捕えられていると分かったんだ？」
「あそこは元々今日破壊されることになってたのよ。ついでに、彼女の身柄を拘束する必要もあったから。だっていうのに、あなたがいて私としても驚いたわ」
「そうか」
俺にはまるでなにもかも知っていて、そのうえで襲撃したように思える。もちろん、真紀のいっていることも本当なんだろうが。
「あのヤクザ達はどうなったんだ」
「K組のこと？　彼らなら拘束されてるわ。といっても、もう一人だけだけど」
「一人だけ……」
この女の正体が知れた今、残りの連中の末路は簡単に想像がつくというもので、深くは追及しない。
「だが分からないな。なんだってあんなヤクザもんを野放しにしていたんだ。さっきの黒づくめの男達を見る限りでは、ヤクザなんて赤子の手をひねるようなものだろう？　香織と繋がっていたという

なら、別に今日でなくとも、とっくの昔にどうにかできたんじゃぁないのか」

「そうね。でもこっちとしても、そうは簡単に動けないの。確かに彼らを捕らえることは造作もないことだけど、そうすると彼女がそれに気付いてしまう。一網打尽にするチャンスと理由が必要だった。それに私たちみたいなのは、公式には存在していないことになっているのよ。そんな私たちが勝手に動けるわけないじゃない。存在しないからには、一応は世の中のルールは守って、形は合法的に見せなくてはいけないの。ううん、存在しないからこそ、ね。

……で、その時に限って、あなたがあんなところにいたというわけ。まあ、あなたのおかげで、彼女に全く気付かれることなく作戦を遂行できたのは良かったけど」

なるほど、そうだったのか。そして、ここでもまた俺は、この女に良いように使わされていたということか。

まあ、いい。理由はどうあれ、今回ばかしはこの女が来てくれなければ、とんでもないことになっていたかもしれないのだ。それは感謝しておくべきだろう。

「……それにしても、あんたが殺し屋とはな。前々から得体の知れないやつだとは思っていたが、これで納得もいくというもんだな」

こいつのこれまでの冷静すぎるまでの態度や言動は、そこに起因していたわけだ。殺し屋なんてものは、常日頃から冷静でいるものなのだろう。

もう一人、斑鳩にしたってそうだ。奴のあの、のらりくらりとした態度も実際にはそんな殺し屋であることを隠すには、うってつけなのかもしれない。納得する理由としては十分すぎるものだ。

「で、だ。俺をここに連れてきた理由は」

もう言うまでもないが俺は今、真紀の住む部屋に来ている。来ているというよりも、半ば強制的に連れてこられたといった方が適切かもしれない。

あの後、真紀に助けられて施設を抜け出してからは、香織ととも

に、俺も得体の知れない黒づくめの連中に捕われた。
しかし、捕われはしたがすぐに解放されることになったのだ。理由は当然ながら、真紀の口利きがあったためだ。そしてそのまま有無をいわせず、黒塗りの車でここまで連れてこられたのだ。
俺は真紀の寝巻姿を見ながら問う。白く薄い長袖のニットのシャツに、黒のスウェットズボンがこの女のいつもの寝間着のようで、シャツにはうっすらと乳首の形が浮かんでいる。
まあ、俺も上半身はTシャツ一枚で後はスラックスだけのシンプルな恰好だ。なぜこの女が男ものの服を持っているのかは、聞かないでおこう。
「それは近いうちに……ううん、明日話すわ。それより食べたんなら寝ましょう。もう深夜三時を過ぎてるんだから」
言いにくいことでもあるのか、真紀は強制的に話を終わらせて立ち上がり、寝支度を始めた。
「あんたがそう言うんなら、今はその言葉を信じよう。だけどもう前までのように、隠し事だけはしないでくれよ。明日というなら、必ず明日喋ってもらうぜ」
「安心しなさい。そう息巻くらなくても、必ず言うから。それよりも早く来なさいよ、寝るんだから」
真紀がベッドに入って隣を指し示す。一瞬何をいったのか理解できず、目が点になりそうだった。
「……あんた、本気で言ってるのか？」
「私のうち、これしか布団がないもの。それより早くして、この時期の夜はまだ少し冷えるから」
やれやれ、どうやら妥協するしかなさそうだ。真紀の言う通り、何もなしで寝るにはまだ肌寒いのだ。ここまできて、いちいち女と一緒に寝るだけのことに尻ごんでいられない。要は、この女に手を出さなければいいわけで、また出すつもりもないのだ。
「あんた……何を考えてるか分からないと良く言われないか？」
「そうかもね。別になんとも思ってないけどね」

「だろうな」
ため息まじりにつぶやく。観念して俺は、真紀のいるベッドに潜り込んだ。
そうだ。第一、沙弥佳とだって何度も一緒に寝てきたのだから、いまさらな話ではないか。とはいえ、少しばかり緊張してしまう。寝ようというのに緊張すると、眠気も飛んでしまうかもしれない。
俺がベッドに潜り込むと、真紀はリモコンで部屋の灯りを消した。豆球にして寝る女の子も多いと聞いたことがあるが、真紀は真っ暗にして寝るらしい。
部屋が真っ暗になって隣で、コトリと真紀がリモコンを枕元に置く音がした。枕元は木でできた、ちょっとした収納になっているためだった。俺は枕なしで、代わりに両腕を頭の下にし、腕枕にしていた。
「ねえ。枕、使わなくてもいいの？」
暗闇の中、真紀が聞いてくる。
「いい。俺は枕がなくても寝れるタイプの人間なんだ」
だんだんと目が慣れてきたのでチラリと横目で真紀の方を見ると、真紀はこちらに背を向けていて、俺からは後頭部しか見えない体勢だった。
「……ねえ。あなた緊張してる？」
真紀にしては珍しく、ややためらいがちに問いかけてきた。
「いいや。……といいたいところだが、少しばかり緊張しているかもしれない」
「……そう」
それからどれほどそうしていただろうか、窓の外から風の吹く音が、カチカチとさっきも聞こえた時計の音が聞こえる。何気なく真紀の方へ顔を向けると、女の子特有の甘い匂いがした。いや、この部屋中にそれが染み込んでいるのだ。
（やっぱり、真紀も女なんだな）
「……なあ」

なんとなく口を聞いてみたくなって声をかけた。
しかし、返事はない。もう寝てしまったのかもしれない。よくよく耳をすませば、小さく寝息も聞こえる。
（すぐ隣に男がいるってのに、随分無防備なやつだ）
俺を男として見てないのか。だったら今ここでいたずらしてやろうか……そんなことをぼんやりと考えているうちに、いつの間にか眠りに落ちていた。

朝、目を覚ますと日は高く、すでに正午を過ぎていた。
俺は一人、真紀のベッドで寝ていて本人はどこかへ出かけていったのか、部屋はもぬけの殻だった。忘れがちだが、今は春休みなので別に学校があるわけでもないだろう。
まあいい。どのみち今日中には喋ってもらわないといけないこともある。部屋で待っていれば、そのうち帰ってくるだろう。
そう思うと、真紀がいないことなど、とたんにどうでもよくなった。俺はベッドの上に寝転がって、これからどうすべきかを考え始めた。
昨日はこの二十年足らずの人生の中では、最も印象的な一日だった。おそらく、今後どれだけ生きるかは分からないが、きっと一生ものの思い出になったのは間違いない。
同時に、俺は沙弥佳へ繋がる道を失ってしまった。また一から出直しということになったのだから、どうするかは早急に手を打つべきだろう。
「どうしたものか……」
部屋の白い天井を見ながら、一人つぶやいた。やはり、青山に頼むしかないだろうか。
やつは俺から見て、間違いなくいっぱしの情報屋といっていいはずだ。あいつの持つ幅広い人脈は、こうなった以上はとても魅力的

に思える。
「あいつのハッキングの相当のようだしな」
やはりここは一つ、再度あいつに頼み込んでみるしかなさそうだ。
やるべきことが決まると俺はすぐに着ていた寝巻を脱ぎすてて、部屋の隅においてあった私服に着替える。と、そこで部屋の金属製のドアを開ける音がした。
「あら、起きたの」
部屋に入ってきたのは、当然ながらここの主である真紀だった。
「ああ。ちょっと前に起きたばかりだ」
「そう。始めは起こそうかとも思ったんだけど、疲れてそうだったから止したのだけど、疲れはなさそうね」
「そうだな、これといった疲れはないと思う。おかげさんでな」
真紀は手に持っていた袋を隣のダイニングキッチンに置いて、ガサゴソと中身を取り出し始めた。
「買い物に行っていたのか」
「ええ。それだけではないけどね」
相変わらずの無表情に加えて、こちらにチラリとも顔を見せずに中身を冷蔵庫の中やエレクターに置いていっている。
それだけではない、か。何か含みのある言い方だ。昨日のことか、それとも俺のことか……。
買ってきた物を起き終わると真紀がコップいっぱいに入ったミルクを持ってきて、俺の前に置いた。
「はいこれ。まだ何も飲んだり食べたりしてないんでしょう」
「悪いな」
差し出されたミルクを一気に飲み干した。一度何かを腹に入れると、突然腹が空いてきた。寝る前に食べはしたが、やはり簡易食では物足りなかったらしい。あるいは、予想以上に精神を削られたために体力の消耗が激しかったのかもしれない。
「とりあえず食事にしましょう。話はそれからでも良いでしょう？」
意外だが、この女は俺が思っている以上に気の利く女のようだ。

俺は静かに頷いた。

食事を終えて一段落したところで、真紀は、さて、と前置きして話し始めた。

「昨日の話だけど、あなたをここに連れてきた理由は一つ。あなた、私たちの仲間にならない？」

世間話でもするかのような話し出しだったため、俺は思わず無意識のうちに頷いてしまいそうだった。それほど自然体だったのだ。

「仲間だって？」

「ええ、そうよ。聞けば、あなた、妹のために今回みたいなことに首を突っ込んだのでしょう？　それで何か収穫は得られたの？」

痛い指摘だ。たしかに結果としては全くといってない。得られたものなど何ひとつなかった。関係あるかは分からないが、身の回りで起きたことを整理しようとして、あの様だったのだ。もちろん、それが沙弥佳に繋がる可能性があるというのであれば、なおのことだ。

「あなたがどれだけ警察を頼ろうと、あるいは探偵でもいいけど、それらを使ったって、世の中には知ってはいけない領域というものがあるのよ。それはもう分かっているでしょう？」

「……」

真紀の言う通り、昨日一昨日であんな目に遭えば、さすがに馬鹿でもそれは理解できるというものだ。まさか、二日も続けて拉致されて拘束されるなんて思わなかった。

いや、そもそもがあんなこと、映画や何かの世界でしかないとすら思っていたのだ。

「だけどな」

「もちろん、私は強制はしないわ。だけどあなたのことだから、きっとこれからもあんな無茶をするでしょうね。

今回はたまたま私が助けることができたけど、次なんて分からないのよ。そうなった時、今度こそあなたは死ぬかもしれないの。場

合によってはそれだけじゃないかもね」
「それだけじゃない？　どういう意味だ」
「あの子……渡邉さんだったかしらね。彼女だって危険に晒されるかもしれないって意味よ。大切な子なんでしょう？」
そうだった。現に、香織は綾子ちゃんにまで手をかけようとしていた。真紀の言ったように、もしあそこでこの女が現れなかったら、彼女がどうなっていたかなんて想像もつかない。
「……俺にメリットは」
「まず、大概の裏情報は知ろうと思えば知れるはずよ。場合によっては、あなたの妹のこともあるかもしれないわ。表の世界には知れ渡らないこととというのも確かにあることだから。
次に、今回みたいなことがあったにしても、私たちのバックアップを受けれることもあるかもね。
後は、訓練次第だけど、あなたにも私や彼女たちに対抗しうる戦闘術も身につけてもらうことになるわ。そうすれば、今回みたいなことは余程のことがない限り、自分で対処できるようになる」
「……知りたい情報というのは、どんなことでもか」
「ほぼ、ね。人がいなくなったという類いのものなら、大体は知れるはずよ」
いつの間にか真紀の話に、食い入るようにして聞き入っていた。確かに知れないことが知れるというのは魅力的な提案だった。要するに、これまでのような遠回りをしなくてもすむかもしれないのだ。
だが、同時にデメリットもある。メリットとデメリットは紙一重だ。戦闘訓練を受けるとはつまるところ、命をなげうって作戦に参加しなければならないことだ。あるいは、斑鳩が行ったような誰かの暗殺なんかもあるだろう。果たして自分にそんなことが出来るだろうか……。
それに……それにだ。仮に俺がそうなれたとして、彼女は、綾子ちゃんはどうなる。俺に綾子ちゃんを見捨てて、そんな世界に入ることができるだろうか……。他にも、父のこともある。俺までなん

らかの形で死んでしまったら、残された父はどうなるというのだ。
「迷っているみたいね。ま、無理もないけど。さっきも言ったけど私が提案するのは、あくまで一つの選択肢にすぎないわ。答えは今すぐじゃなくても良い。あなたにとって大切だと思う方を取りなさい」
真紀は優しくもなく、かといって見放すでもなく、淡々とした口調で言った。
しかし俺には、それがとてつもなく重く響いて感じられた。

真紀の部屋を出て家にたどり着いたのは夕方の五時も近い頃だった。その気になれば、まだいくらも早く帰ることができたのだが、不思議とあまり帰りたいとは思えなかったためだ。
門を開けて玄関に行くとすぐそばには、いつもの綾子ちゃんの自転車が置いてある。
「綾子ちゃん、来ているのか」
今となっては、うちの合い鍵を持っている彼女だから、別にいて悪いというわけではない。むしろ、感謝したい気持ちでいっぱいなのだ。
けれど、今はなぜだか後ろめたい気分だった。別にバレなければどうということもないのだろうが、なぜかそんな気になってしまう。
「ただいま」
扉を開けて中に入ると、すぐに血相を変えた綾子ちゃんが飛び出してきた。まるで、死んだ人間が生きていたことに驚いたような表情だ。
「九鬼さんっ」
「よう。どうしたんだ?」
あまりの勢いのよさに、こちらが驚いてしまった。俺が驚きざまに問いかけると、綾子ちゃんはへなへなとその場にへたり込んでし

まった。
「お、おい綾子ちゃん、大丈夫か」
俺は少し慌てながら靴を脱ぎすてて綾子ちゃんに歩み寄り、彼女の肩を抱く。
「……良かった。九鬼さんが帰ってきて……」
俺の顔を見て、心底、安堵した表情を浮かべて微笑んでいる。そのためか、わずかに目元が潤んでいた。
「おいおい、俺の家はここなんだ。ちゃんと帰ってくるさ」
「だって、朝からずっと連絡がつかなかったんですよ……？　心配するに決まってるじゃないですか」
「朝から？」
「そうですよ。ずっと、おかけになった電話は電波の届かないところにいるってばかり……心配しますよ」
そう言われて、はっとする。今の今まで気付かなかったが、昨晩から携帯を見ていない気がする。いや、確かに真紀の部屋にいたあたりから携帯を見てもないどころか、触ってもいない。
どこで落としたか……。使ったのは昨晩、綾子ちゃんに青山のうちに泊まると連絡したのが最後だ。その後は……三波の邸宅を訪れた時だろうか。あそこでなら、香織の息がかかった連中に捕えられ、前後に無くした可能性はある。そいつが一番可能性が高そうだ。
「どうして電話に出てくれなかったの……」
「すまない、綾子ちゃん。実は携帯をどこかに無くしてしまったらしいんだ。だから出れなかったんだ」
潤んだ瞳で訴える綾子ちゃんに、俺はただ落ち着くよう言い聞かせることしかできなかった。嘘はついていないが、無くした理由そのものを言うことなどできない。できるはずもない。
以前、俺が嘘をついてまで厄介事に首を突っ込んでいたことを思い出しているのか、綾子ちゃんは素直に頷こうとはしなかった。無理もないことかもしれないが、これはこれで哀しいものがある。
「わかりました。私、九鬼さんのこと信じます」

「綾子ちゃん」
安堵と裏切り。嘘はいってないのに、どうしてこうも後ろめたいのだろう。
（またか……また俺は、君を騙している）
綾子ちゃんを抱きながら、俺は何度も心の中で謝罪していた。それを汲み取ったわけではないだろうが、綾子ちゃんは目尻を指で拭きながら話題を変えた。
「……実はさっき、九鬼さんが帰ってくる少し前におじ様から連絡があったんですけど、今日大事な話があるから夜の9時には帰ると」
「父さんが？」
綾子ちゃんは、頷きながら続ける。
「私にも話しておきたいから二人とも夜はいてくれということでしたけど……何かあったんでしょうか」
「分からないな。とにかく夜に帰ってくるって話なら、それまでは待とう」
それにしても突然どうしたんだろう。今までこんなことはなかったことだ。何か、あまり良くなさげなことがありそうな気もしなくもない。
俺達は立ち上がってリビングに赴いた。綾子ちゃんにはコーヒーを煎れてほしいと頼み、俺はソファーに深々と座り込む。
自宅に帰ってソファーに座ると、たちまち、どっと疲れがでてきた。今まで外で過ごしていた時はそうでもなかったはずなのに、不思議だ。なんだかんだで、思っている以上に真紀の部屋にいた時に緊張していたのかもしれない。
「なんだか、疲れてるみたいですね」
「ああ。やっぱり自宅の方が落ち着くよ」
一瞬、青山の家にいなかったというのが見抜かれたのかとヒヤリとした。この子は勘がいいので、ほんのわずかな違いであっても何かを感じ取ってしまう。
そんな器量の良い綾子ちゃんを眺めながら、俺は真紀の言ってい

たことを考えていた。

『あなたにとって大切な方を取りなさい』

俺はどうするべきなんだろう。当然ながら、沙弥佳のことは大切だ。沙弥佳があんなことになってしまった手前、指をくわえたままというわけにもいかない。

そうなると、おそらくは綾子ちゃんを捨てることになるだろう。彼女を巻き込むわけにはいかない。

しかしかといって、綾子ちゃんを取った場合、平穏を手に入れることができるかもしれないが、沙弥佳を見捨てなければならなくなる。仮に見捨てることはなくとも、今後も今回のようなことに巻き込まれないとは言い切れない。

どちらも一長一短だ。こんなことをいうのもなんだが、綾子ちゃんとの関係がこれから先も続いていく保証はないし、沙弥佳にしたって最悪、生きているとは言えない。

……俺は、どうしたいんだ。

真紀はいつかにも、両方なんて無理だと言っていた。全くその通りだ。何事も、背負えるのは一つだけなのだ。それ以上を求めるのは、単なる強欲者でしかないし、ただのエゴだ。

もしくは、こうとも言い換えることができるかもしれない。何かを得るには何かを捨てなければならない。人が持てるものなんてのは、そう、いくらもあるわけではないのだ。

夜9時を回った頃、言伝られていた通りに父が帰ってきた。

この時間に帰ってくるなんて、ずいぶん久しぶりではないだろうか。いや、そもそも父と顔を合わすこと自体が久しぶりだった。久しぶりに見た父の顔は、急激に五歳か十歳は歳をとったように見えた。

まだ四十も半ばだが、まるで五十代に見えるほど老け込んでいたのだ。愛娘の失踪から始まって最愛の妻の死に至るまで、父は言葉にこそしないが、とてつもなく精神的にふさぎ込んでいるのだ。そ

れが久しぶりに父を見て、すぐに理解できた。
「……久しぶりだな。もう元気になったようだな」
「ああ……」
いつもならここらでジョークに憎まれ口の一つも言うところだが、今の父を見ていると、とてもそんな気にはなれない。綾子ちゃんも同じようで、とても心配そうにしている。
「食事は？　まだなら綾子ちゃんが作ってくれたものがあるけど」
「いや、今はいい。後でもらうよ」
父はリビングに来るなり、俺と綾子ちゃんを座らせた。
「さっき電話した時に綾子ちゃんに伝えたが」
「何か話があるってことだろう。それで何があったんだ？」
「そうだ。……実は今度、転勤することになった」
「は……？　転勤って……どこに？」
「O市」
二人横ならびに座っている俺と綾子ちゃんの顔を見ながら、淡々と話す父。その様は、とても俺の知っている父とは思えない。前はあんなにどんと構えて、父として一家の大黒柱として存在感を放っていたはずなのに、今は体が心なしか小さく見える。
「O市って……」
俺の代わりに綾子ちゃんがそう口にした。かといって、何かそれ以上いえるわけでもない。決まってしまった以上、こればかりは、俺にも綾子ちゃんにもどうこう言える問題ではないのだ。
けれど、だからといって、はいそうですかと言うわけにもいかない。そんなことをしてしまったら、あいつとの、沙弥佳との繋がりが途絶えてしまう。
「父さんは……父さんはそれでいいのか？」
「もう決まったことだ」
「そうじゃない。あいつの、娘のことだ。あいつはまだ死んだと決まったわけじゃない。それを見捨てろっていうのか」
つい語気を荒くして、責めるように問いかけた。冗談じゃない。

俺にはここを離れて暮らすわけにはいかないし、また、そのつもりもない。

「……私だって嫌に決まってる。だが……」

「だけどなんだって言うんだ。父さんは……沙弥佳を放っておけるのか。もし沙弥佳が無事だったら、ここに戻って来るかもしれない。そんな時に俺達がいなくてどうするんだよ」

「……」

父さんが黙り込む。

「九鬼さん……」

綾子ちゃんが困惑げにつぶやく。

もちろん、俺にだって父さんの立場を分かっていないわけではない。理屈から考えれば、父さんが正しい。はっきり言って、俺の主張はただの感情論にすぎないのだ。だが、ここを離れて暮らすのだけは我慢できなかった。

言いたいことをぶちまけると、リビングには重苦しい雰囲気が漂っていた。はたと冷静になると、いってはいけないことを言ったようにすら思えてならない。

しかし、俺の主張は決して間違ってなんかないはずだ。誰だって自分の家族が失踪して心配しないはずはない。ましてや、目に入れても痛くないというほど可愛がっていたのだ。

だが、こればかりは無理だ。父の気持ちは分かるが、これだけは絶対に従えない。

俺は父の顔を見てはっきりと口にする。

「父さんがO市の方に転勤するっていうのならすればいい。だけど俺は嫌だ。……俺は二人を捨てられない」

「……こっちに残るというのか」

「……父さんがそうするってんなら、そういうことになる」

妹と母。俺には、まるで二人を捨てるみたいな行為に思えてならない。

父も目を細め、こちらを見据えている。

「私は、ここに誰も住まわせる気はない」
「……なら、俺がここに一人で住む」
「駄目だ」
父が即答した。いつもは厳しげながらも穏やかな顔をした父が、珍しく険しい表情をしている。
「なんでだよ。誰も住まわせることはないってんなら、誰にも売ることはないってことだろ？　だったら、俺がここに住んだっていいじゃないか。俺はこの家から出るつもりはないんだ」
「駄目だ。確かにここを売るつもりはない。だが、誰も住まわせるつもりもない。たとえおまえでもだ」
開いた口が塞がらなかった。何を言ってるんだ、父さんは。
「おまえがこちらに残りたいなら止めない。もう年齢的にも親離れしてもいい年頃でもある。しかし、ここからは出ていってもらう」
俺は反論しようと喋りだそうとした時、隣の綾子ちゃんから服の脇あたりを引っ張られて言い出そうとはしなかった。
「……もういい。勝手にしろよ」
俺は忌ま忌ましげに舌打ちし、苛立ちながら立ち上がって大股歩きでリビングを出た。これ以上は、何をいっても平行線なのは火をみるよりも明らかだ。
そのままの勢いで自室に戻り、ベッドに倒れ込む。
「なんだっていきなり……」
毒ついて、最近はあまり使わなくなった机の方を向いた。卓上には、いつだったか沙弥佳と二人で撮った写真が、写真立てに入れて飾ってある。不器用で全く笑えていない俺と、わざわざ制服を着て、屈託のない顔で笑っている沙弥佳の写真だ。
（そういえば……あいつの制服姿を見たのは、この時たった一度きりだったな）
だから俺はこの写真を選んだのだ。確かに俺の膨れっ面はなんとも言い難いが、沙弥佳の毎日着るはずだった高校の制服を着たのは、この時一度だけだ。あの時、沙弥佳が制服を見せたいと言わなけれ

ば、この写真を撮ることはなかっただろうし、制服姿を見ることはなかったのだ。今考えてみると、撮っておいて良かったと切実に思う。

コンコン

ドアをノックする音の後、綾子ちゃんが部屋に入ってきた。

「九鬼さん」

「どうした？」

俺は綾子ちゃんに視線だけを向けた。大方、さっきのことで何か言いたいことがあるんだろう。

「あの、おじ様のいうことも分かってあげてください。決して、さやちゃんのこと、心配してないわけじゃないと思いますから」

「……んなこた分かってるさ。多分、心情からすれば、ここを離れるのは嫌に決まってるだろうよ。

父さんの会社の本社は、O市にあるんだ。自社ビルだってある。つまり今回の異動は、栄転といってもいいだろうよ。だが父さんが、ただ働くだけのことを考えて転勤することを承諾したとも思えない」

「だったら……」

綾子ちゃんが言いかけたのを遮るように、俺はベッドから身体を勢いよく起こして言った。

「だけど、俺の言ったことも決して間違っちゃぁいないはずだ。違うか？　家族を待つことの何が悪いっていうんだ」

きっと綾子ちゃんからしてみれば、第三者だからこそ言い争いなんてしてほしくないと考えているんだろう。だからこうして、ここへ来たはずなのだ。

「父さんは……きっと父さんは、もう嫌になっちまったんだと思う」

「どういう意味ですか？」

「……この家には、俺が二才の頃越してきたんだ。両親にとっては初めてのマイホームってやつだ。

当時、生まれてまだ半年かそこらの妹と、俺のことも考えてのことだろうな。子供を育てるのには、ある程度の広さのある家が良い

と聞いたことがあるから、きっと、そんな理由もあったんだろう。
今なら分かるが、この家には本当に色々な思い出が詰まってる。良かったことも悪かったことも含めて、間違いなく良い思い出だといっていいよ、俺にも父さんにも。
だけど、だからなんだろうな。ほんの些細な出来事が頭をふと過ぎる……それが辛いことがあるんだ」
だから俺は未だに沙弥佳の部屋に入ろうとはしない。入ろうとすると、やけに足がすくむような気になってしまうためだ。
「父さんは、それにもう耐え切れないんだと思う。もう、良い思い出としてこのうちを封印したいんだと思うんだ。辛かったことは良い。だけど、良かった、楽しかった思い出ってのはすごく胸を締めつけるんだ、当然だよな。
父さんが、母さんが死んで以来うちにあまり寄り付かなくなったのも、そいつが理由なんだと思う。父さんはまだ母さんの死を受け入れられないんだ」
ふと自分がこんなことを言うのは、すでに母の死を完全に受け入れてしまっているからだと気付いた。おかしな話かもしれないが、俺は今たしかに、母の死は過去の出来事だと冷静に見つめている自分に気がついたのだ。
「でも不思議なもんでさ、俺は妹はまだどこかで生きていると信じているんだ。根拠なんざ一かけらもないが、間違いなくそう信じこんでいる自分がいる。……ま、それこそ、受け入れられないって気持ちもあるけどね。
ただ一つ違うのは、俺はまだ妹が死んでないと信じれるに対して、父さんは半ば、もう妹が死んでいると考えていて、なおかつ、心のどこかではやはり母さんも死んだというのを認めようとしてる部分があるということなんだ、理性ではね。
なのにもう一方の感情は、そいつを真っ向から否定してる。二つの背反した気持ちを持ち続けることに、もう辛くて耐え切れなくなったんだよ、父さんは」

「……」

俯いて俺の話を聞いていた綾子ちゃんは、黙ったまま何も言わなかった。本当は言いたいことがあるが、今の俺にはなんの意味もないと悟っているのかもしれない。きょときょとと悲しげに目を泳がせている。

「君はいつか言っていたよな、父さんと母さんが羨ましいと。その一つの結果がこれなんだよ。母さんもそうだったが、二人は弱かったから互いに補完し合ってたんだ。

もちろん、人間なんて一人でやれることなんざたかが知れているんだから、両親を否定するつもりはないけどな」

長い独白を終え、俺は口をつぐんだ。

「でもそれじゃ、おじ様がかわいそう……」

母の葬式の日もそうだったが、綾子ちゃんは今にも泣きそうなほど顔を悲痛に歪めている。

さすがに彼女のそんな顔を見ると、俺もうかつだと思ったが仕方ない。父さんの言う通り、俺はもう独り立ちすべきところにまできているのかもしれない。

「……とにかく俺は、絶対に諦めない。大体、某国に拉致された日本人だって、何年もたって再び日本の地を踏めたじゃぁないか。

かつて、二次大戦時に撃墜されて戦争終結後三十年近くものあいだ、太平洋の孤島に取り残されて生活せざるをえなかった旧日本軍の兵士がいた。彼も生きて日本に戻ってこれたんだ。

……あいつにだって同じようなことがないとは言い切れないだろ」

俺は苦虫を潰すように顔をしかめ、沙弥佳と二人で写った写真に目をやりながらつぶやいていた。

第６３章

父からの突然の告白から数日。世間では新年度を向かえ、学生らは一つ上の学年に、あるいは上の学園へと上がって、期待と不安に満ちた新生活が始まったところだ。

俺はといえば、いや、俺達家族も新しい住居に向けて引越しの準備をしていた。

通常なら、転勤が決まってから物件選びに行くはずなのだろうが、父はもう向こうの社宅に住むことを決めていたらしい。多分、俺たちに言う前から転勤は決まっていて、またそれを承諾していたのだろう。

引越しの準備は実に淡々としたものだった。そもそも、する必要のない綾子ちゃんの手伝いがあるためでもあるが。

後日の話し合いで、とりあえずこの家は管理費を父が払うということで、遠い親戚によって一応は管理されることになったという。

また、大部分の荷物は父が引き取ることにもなった。当然といえば当然だ。Ｏ市の社宅は二階建てらしいのだ。

それと俺は、高校に行くことの継続が決まった。小町ちゃんの口利きのおかげかなのか、それとも始めから準備していたのかは分からないが、そういう流れになったのだ。

同時に一人暮しするにあたって、学生寮に住むことにもなった。高校からはやや離れた場所に建っている学生寮だが、時期が時期だけに、入れるかどうかというところだった。運よく入寮できそうなので、そのまま学校にも行くというのも自然に決まったわけだ。

綾子ちゃんは、俺達親子が別々になることに対して悲しげな表情を崩すことはなかったが、俺が学校にも残るということになった時は、安堵のため息をしたのは印象的だった。そんなことされると、さすがに照れてしまうが嬉しくもある。

そして今日が引越しの二日目だった。もう家からは何もかもなくなって、がらんとしている。こんなにがらんとしたこの家を見たのは覚えている限りでは初めてのことだ。それが不思議で、同時に寂しくもある。

そして俺たち親子も。おそらく、今日を最後にしばらくの間、俺と父は会うことはなくなるだろう。

「もう忘れ物はないな」

「ああ」

ようやく荷物のほとんどをラックに詰め込み終わった。

「……だが、なんであれだけあのままにしておきたかったんだ？」

あれとは、沙弥佳の机のことだ。深い理由はない。誰も住まなくなるとはいえ、この家から沙弥佳の痕跡を全て無くすのは嫌だったのだ。

「せめて一つだけ。ここに何か残しておきたかっただけさ。でもいいんだろ、それでも」

「……そうだな。おまえがそうしたいのなら、それで構わんよ」

父の言葉に頷いて、最後の荷物が積み込まれるのを見届ける。最後の荷物は母の遺品が入ったダンボールで、父はそれを感慨深げに見つめている。

「これで全部ですか」

引越しの作業員が俺達に向かって尋ねる。父が彼に向かって頷き、作業員はトラックへと戻っていった。すぐにトラックのエンジンがかかり、二台のトラックがO市に向けて出発した。

「行ったな」

「ああ、そうだな。では私も行くとしようか……。おまえも身体には気をつけるんだぞ」

「ああ。父さんこそな」

父さんは俺の肩に手をやって、重々しく頷いた。俺も俺で、肩におかれた父の手の上に手を重ねて頷き返した。少しの間だけ見つめ合うと、父さんは肩から手を外して車の方へ行く。

これが今生の別れというわけでもないのに、自分は選択を間違ったのではないかという気になったのはなぜだろう。

車に乗り込んでエンジンをかけ、父さんは運転席の窓を開けた。何か言うわけでもないが、その眼が何かを訴えている。それが何なのか……俺には理解するよしもなかった。

「それじゃあな。がんばるんだぞ」

「ああ、父さんこそ体には気をつけて」

「おじ様、あまり無茶はなさらないでくださいね……」

「ありがとう、綾子ちゃん。そのうち、めどがついたら戻ってくる」

そう言い残し、父は車を走らせた。俺と綾子ちゃんは、車が視界から消えるまで見送り続けていた。

「……いってしまいましたね」

「これでいいんだ、多分な。それにいつかはまた会えるんだ。その時には、父さんも現実を見れるようになるさ」

綾子ちゃんはなにを考えているのか、じっと消えた車の方を見つめたままだ。俺はそんな彼女を尻目に、空き家となった我が家の方に振り返って、感慨深げに見つめる。

まさかこの家を、こんな形で離れることになるなんて思いもしなかった。てっきり、大学するなり就職するなりで一人暮らしの必要がある時にここを出る、そう思っていたはずなのに。

「やっぱり、ここを離れるのはいやですか？」

「ん？　ああ、まぁな。だけど仕方ないさ、こうなっちまった以上は」

俺は家の玄関へと移動し、鍵穴に鍵を差し込んだ。鍵を捻ると、ガチャリと錠の開く音がして扉を開けた。

「あ、九鬼さん」

「少しだけ。いいだろ」

本来なら管理人への明け渡しが決まってからは入ってはいけないのだが、構うことはない。たった今の今までここの住人で、今日の朝だってここで寝て起きたのだ。管理人代理だって一足早く帰った

今、咎める者は誰もいない。

「物が無くなると、この家、すごく広く感じるな」

横についた綾子ちゃんは無言のままだ。いつも思うが、彼女のそんなところは本当に好感が持てる。

俺達は一階をぐるりと見たあと、二階に上がった。何も無くなった自室。必要な荷物は今頃、トラックに運ばれ学生寮の方に向かっていることだろう。

家具は全て寮に揃っているらしいので、本当に必要最低限だけしか荷物にはまとめなかった。あとはほとんどが父の行くO市の方に送られた。

東と南側についている窓にはブラインドが下ろされている。ブラインドの、事あるごとにカチャカチャと鳴る音のせいで、カーテンを後から取り付けたため、ほとんど使うことはなかったが。

俺は南側の窓だけ、ブラインドをあげた。今日は雲ひとつない晴天のために、窓からは陽が射して部屋を明るくさせる。

「夏の花火大会なんかは、ここからはよく見えたんだ。

だからいつも沙弥佳と一緒にここから見ていたな。ほら、あいつの部屋からだと、向かいの家が邪魔で見えないだろ」

あるのは向かいの家と、遠くに高いビルのうっすらと見える影。いつもと代わり映えしない光景だというのに、今の俺にはとても懐かしく思い出深いものに感じる。むしろ、代わり映えしないからこそ、そう感じさせるのかもしれない。

少しの間ここからその時のことに浸っているうち、ため息をひとつ、再びブラインドを下ろした。

自室のドアを閉め、隣にある沙弥佳の部屋のほうにいった。今では、今日までの間、沙弥佳の代わりに綾子ちゃんがうちに泊まる際に使っていた部屋だ。

軽く深呼吸をしてドアノブを回した。俺の部屋とは反対に、南と西側に窓が取り付けてある。

この部屋に足を踏み入れるのは、本当に久しぶりだった。引越し

の際にここは綾子ちゃんが荷造りしていたため、準備の時に開いているドアから中を覗くことはあれど、入りはしなかったのだ。

部屋の中には、ぽつんと一つだけ沙弥佳の使っていた机だけが置いてあった。なぜこれにだけ、こんなに執着したのかは実のところ、自分でも良く分からなかった。けれど、ここから沙弥佳のものが全てなくなるのはいやだったのだ。

例にならって南側の窓のブラインドをあげて、中に光を差し込む。これだけで部屋の中に、温度とは違った暖かさを感じるのは気のせいだろうか。

「……九鬼さん、変わりましたよね」

なんの前触れもなく、綾子ちゃんが口を開いた。俺の触れている机に視線をやりながら。

「なにがだ？」

「さやちゃんがいなくなってから九鬼さん、私の前ではさやちゃんの名前呼んだことなかったのに、最近はそうでもないでしょ？　だから、変わったなあと思って」

「そうかもしれないな」

確かに俺はずっと、綾子ちゃんの前では沙弥佳の名前をいうのは遠慮していた。沙弥佳と綾子ちゃんとの関係は、後味の悪いまま未だ宙ぶらりんなのだから、どうしても、綾子ちゃんの前であいつの名を出すのがためらわれたのだ。

けれど、父さんがここを離れると言った時、つい俺の感情のリミッターが外れてしまい口にしてしまった。そうなるともはや、いつまでも沙弥佳の名を呼ばないのもおかしいというものだと思うにいたったのだ。

「父さんが転勤すると言った日、あの日までは意図的に沙弥佳の名を口にしたくなかったんだ。

そこでも言ったが、俺はまだあいつが死んだとは思ってない。自分なりの決意を口にした時、配慮のあまり、自分が君の前で沙弥佳の名を口にするということから、逃げてるんじゃないかと思うよう

になったんだ。
だから、逃げるのはやめたくなった……そんな心境の変化はあるよ」
「九鬼さん」
俺は肩をすくめて言った。そして、いい加減、真紀への返答もすべき頃合いでもあるだろう。
「さて、そろそろ出ようか」
「あ、はい」
ブラインドを下ろし、沙弥佳の部屋を出た。廊下を、前を歩く綾子ちゃんの後ろ姿を、複雑な気持ちで眺めていた。

道をいく雑踏の喧騒さの中、俺と綾子ちゃんもぶらぶらと大した目的もなく歩いていた。まあ、こんなことはいつものことではある。しかし目的がなくとも、綾子ちゃんと過ごすといった意味では、これも決して無駄な時間とはいえない。むしろ、今の俺には必要なことだと考えている。
俺達が出向いた先はしばらく訪れていなかった、街の商店街だ。ここに来るのは本当に久しぶりで、少なくとも一年以上は来ていないだろう。この日は週末ということもあってか、人通りもまずまずといったところで、いつかに訪れた時よりは人がいくらか多い気がしなくもない。
本当ならここらで、普段お世話になっていることの礼に何か一つくらい綾子ちゃんに買おうとするところだが、彼女は遠慮してか首を縦に振ることはなかった。適当に店に入っても、結局はただの冷やかしにしかならなかった。まあ、本人がいらないというなら無理に買う必要もないだろう。たとえ買ったにしても、そんなものはただの押し付けにしかなるまい。
「あ、あそこ」

ふいに声をあげて綾子ちゃんが指をさした先には、やはりいつぞやに立ち寄ったCDショップだった。
「行ってみるか」
「はい。CD屋さんなんて、しばらく行ってなかったですし」
「俺もだよ。よし、いってみようか」
二人して頷き合いながらCD屋の中に入っていった。一年以上前に訪れたときとくらべ、店内がいくらかすっきりしていた。それもそのはずで、店内には閉店セールと大々的に貼紙がされていたのだ。
「ここ、無くなっちゃうんだ」
「みたいだな。大した思い入れがあるわけじゃぁないが、なんとも寂しいもんだな」
「そうかな？　私はわりと思い入れがあるかもしれません。だって、九鬼さんが初めて私の意見を聞き入れてくれたでしょ？」
彼女にしては珍しい、小悪魔的な笑みを浮かべていう。
「言われてみれば……それもそうか」
「そうなんですよ」
「あの時は、君のマシンガントークに驚かされたもんだったな」
あの時のことを思い出して笑った。思えば、あれで彼女の印象もまた変わったものだった。綾子ちゃんといて、とても楽しいと思った出来事だ。
「わ、私、マシンガントークだなんてしてないです」
綾子ちゃんは焦ったように否定し、ぱたぱたと胸の前で両手を振った。全く、そんな仕種も可愛く見えるのは俺が彼女に惚れたからだけではないだろう。
「まぁいいさ。とにかく、君の意外な一面を垣間見たのは間違いないしな」
ニヤリと薄笑いを浮かべみせ、俺達はジャズコーナーに行く。沙弥佳の件があって以来、音楽もまともに聴くことがなくなったが、やはりこうしてみると、再び音楽への熱がチリチリと燃え上がるのを自覚する。

「今日はジャズ談議はなしか？」
「もうっ。そこまでお喋りじゃないですよ。
それより、今日は九鬼さんのオススメを聞かせてください」
「俺のオススメか。綾子ちゃんはどんなのが好きなんだ？　というより、どんなのを聴いてみたい」
「バップみたいな少し激しめか、ボサノバみたいな軽快なのがいい、かな」
「じゃぁ、R&Bやレゲエなんてどうだろう」
「えっと……」
ジャンルを聞いて綾子ちゃんは、明らかに困惑げな苦笑いを浮かべている。おそらくジャンルから、今流行りのヒップホップ系の音楽を思い浮かべたんだろう。
「安心していい。今の流行りものの音楽じゃぁない。最近のR&Bもレゲエも、あくまでヒップホップありきのものだ。俺がすすめるのは、純粋にそれだけのものだからな」
ジャズコーナーから移動して、ルーツミュージックと書かれたコーナーにいく。
「ええと……ああ、これだこれ。これなんかは入りやすいかもしれない」
俺がそういって差し出したのは、オーティス・レディングのCDだった。
「オーティス・レディング？」
「ああ。彼こそ、R&Bの帝王なんだ。元々はソウルシンガーなんだが、今となっては、ソウルの枠を超えてR&Bシンガーとしても有名になったんだ」
「ソウルシンガーだったんですか？」
「ああ。だけど、彼のスタイルはそれこそ、あのローリングストーンズや、後のロックボーカリスト達に多大な影響を与えたほどだ。
他にも、同世代のR&Bシンガー達にも影響を与えたほどで、ある歌手なんかはオーティスの出現でR&Bに革命が起こったといわ

しめたほどさ。彼の声量や歌唱力、表現力にいたっては、最近の連中の比じゃないぜ」

俺は得意げに説明しながら、さらにもう一枚ＣＤを取り出した。ラベルにはボブ・マーリーと書かれている。

「名前くらいなら聞いたことがあるんじゃぁないか？　彼の歌うこの曲は有名だ」

俺はそう言って、曲のタイトルを指さしてフレーズを口ずさんだ。レゲエ界のスタンダードナンバーであるこの曲を知らないとなると、レゲエは正直すすめにくい。だが、元々同じ黒人音楽を好む俺たちだ。きっと大丈夫だろう。

「ああ、この曲知ってますよ」

「だろう。エリック・クラプトンってやつがカバーして売れて、世界的に有名になったんだ。

レゲエとスカは切っても切れない関係だし、その辺りの音楽と合わせて聞けば、オーティスも聞けるはずだよ。この二つは根底では同じだし、時に激しく、時に緩やかにって音楽だからな。

ジャズにもオーケストラはあるだろ？　確かビッグバンドだったよな。あれが直接的にしろ間接的にしろ、スカにも影響を与えてるから、きっと大丈夫だ」

おまけにセール中とあってか、四割引きときた。二枚でも昔のアルバムだから、あまり高くつかないのも俺としては嬉しいところだ。

「この二枚がオススメだな。もちろん、他にもまだあるが、一応有名どころが入ったそれをすすめておくよ」

「じゃあ、買ってみようかな」

「ああ、是非聴いてみてくれ」

綾子ちゃんはその二枚のＣＤを片手にレジへと向かった。俺は歩きながらそのあいだに、すかさず財布から五千円札を取り出しておいた。

「四千五百円から四割り引きまして、二千七百円になりますね」

店員の弾き出した金額を前に、綾子ちゃんが財布を取り出そうと

していた横から俺は、用意しておいた五千円札をだした。綾子ちゃんはそれを見て、ぱたぱたと胸の前で両手を振った。
「えっ、わ、悪いですよ」
「いいや、いいんだ。普段お世話になってるお礼ってことでな」
「で、でも」
恐縮している彼女をよそに、俺は半ば強引に店員にそれを受け取らせる。さすがにそこまですると綾子ちゃんとしても、もう何か言うことはなかった。ただ、本当に良いのといいたげな顔をしているだけだった。
それでも店を出たところで、微笑みながら小さくありがとうございますという彼女に、俺はこの笑顔を見れるなら安いものだと思えるのだった。

CD屋を出てからも、どこか決まった場所に行くわけでもなかった俺達にとって、時間は緩やかに過ぎていった。
それにしても綾子ちゃんの口数が少ない。俺も決して多くはないが、それにも増して、綾子ちゃんはやけに口数が少ないのだ。
さっき買ったばかりCDの話題もほとんどなかったし、それ以外のことにしたってそうだった。何を話してもどこか上の空なのだ。きっと彼女のことだ、俺が考えていることに関して、何か勘づいているのかもしれない。
「なあ、これからどうする」
「九鬼さんに任せます」
「そう、か」
こんな会話ともとれない会話を、何度も繰り返していた。任せると言われても、こんな調子ではどこに行っても同じな気がしてならない。そんな、どこか本調子でないまま時計の針は、早くも夕方の六時に差し掛かろうとしていた。
「もう、帰るか？」

「はい」
やや間があって、綾子ちゃんが肯定する。そもそも今日は出かける予定もなかった。俺が行きたいと、半ば無理に引き連れてきていたようなものなのだ。
最寄り駅から電車に乗ろうとして、今日から住居が変わったのを思い出した。寮だと当然ながら門限がある。入寮のその日からと門限に遅刻いうのはさすがに気が引けるが、まあいい。綾子ちゃんを家に送らなくてはならないし、門限と綾子ちゃん、天秤にかけるまでもない。

結局、終始無言のままだった綾子ちゃんを自宅まで送り届けた時には、すでに門限にはギリギリ間に合うかどうかという時間だった。十九時半という、あまりに早い門限など、今時の高校生にとっては守るに値しないほど早過ぎる時間だ。
それに俺には、綾子ちゃんの様子の方がはるかに気になって仕方ない。今日は朝からずっとこんな感じのままで、何かに憂いているとでもいった雰囲気だ。
他人事のようにいうが、十中八九、俺や父さんのことなんだろう。やはり、彼女にはこんな形で家族がばらばらになるのは、色々と思うところがあるのかもしれない。
「綾子ちゃん、着いたぞ」
「え？　あ、はい」
鍵を取り出して施錠された門を解除していく。
「あ、あの」
「ん？」
門を開けて敷地内に入ろうとした彼女が、その動作を途中でやめて口をきいた。綾子ちゃんの方から何か聞いてくるなんて、このところあまりなかったことだった。
「……」
「どうした？」

言いにくいことなのか、目を泳がせながら、何度か口を開けては閉じるという行為を繰り返している。
「九鬼さんは……大丈夫ですよね？」
「何がだ？」
「九鬼さんは私の前からいなくなったりしませんよね……？」
綾子ちゃんは俺の顔を見据えながら瞳を向けた。潤んだ瞳が切実に何かを訴えてきている。
「なんだか、今日の九鬼さん、すごく変です」
「俺が変だって？」
声が裏返りそうになるのを堪え、聞き返した。綾子ちゃんは小さく頷きながら続ける。
「何か……何か無理してるみたいに見えるから」
「別に無理はしてないさ」
「うそ。ずっと私のこと見ながら、何か無理に楽しそうにしようとしてました。
言いたいことがあるのに、何かをずっと隠してるみたいに……」
綾子ちゃんは門にかけていた手を放し、俺の左手を掴む。
「綾子ちゃん……」
切なげな両の瞳が俺を映す。彼女のこんな表情を見て、さすがにいたたまれない気持ちになる。同時に、こんなにまで俺のことで憂いてくれていることに、どうしようもなく嬉しくなった。だが、だからこそ俺は君と……。
「……大丈夫だ。何かあれば、きっと、また元通りになる時がくるさ。そう、きっとね」
掴んできた手に右手を重ね、慰めにすらならない言葉をかけた。全く、どうしようもない陳腐な台詞だ。こんな言葉しかかけてやれない自分を呪いたくなる。
「それじゃぁ、また明日、な」
名残惜し気に彼女の手を離して、別れの言葉をいった。
背を向けて歩きだす。歩きだして数歩のところで、突然、背中に

軽い衝撃があった。綾子ちゃんが抱き着いてきたのだ。
「待って」
「お、おい、綾子ちゃん」
突然のことに驚きつつも、頭のどこかでは冷静だった。あるいは、彼女に引き止めてもらいたかったのかもしれない。
「お願い、行かないで」
心なしか、声が震えている気がする。
前にも同じシチュエーションがあったな、などと考えながら俺はほんの少しの間だけそのままでいた。
「九鬼さん……お願い、行かないで。ずっと、ずっと……」
綾子ちゃん……泣いてるのか、君は。そして、また泣かしてしまったのか、俺は。
西の空に太陽が完全に沈んでしまっていて、辺りには茜色に薄い黒が混じり始めていた。
背を向けていた俺は、振り返って抱き着いている綾子ちゃんを見据える。震えている声で予想をした通り、彼女は瞳に涙をためていた。
その泣き顔を見た時、その瞳を見た時、どうしようもなく彼女を抱きしめてしまいたくなった。
いや、もはや言葉など必要なかった。気付けば俺は、彼女を抱きしめていたのだ。
「九鬼さん」
「……綾子ちゃん」
互いの体を密着させると、今まであまり気にしなかった匂いがした。いつかにも嗅いだ記憶のある匂いだ。綾子ちゃんの匂いではなく、明らかにこれが香水の香りであることは分かるが、いつだったか……。
ぼんやりと考えているうちに、綾子ちゃんは、俺の腕の中から少しだけ離れるようにして顔を上げた。潤んでいる瞳が誘っている。
いいんだな……。彼女に眼で問いかける。わずかにだが、微笑ん

だ気がした。
それを合図に、彼女の唇にそっと口づけた。
柔らかい唇の感触。強引に唇を割り開き、下唇を含んだ。
含んだ下唇をぺろりと舐める。舐めた瞬間、彼女がぴくりと身を震わせ小さく鼻を鳴らした。
「ん……」
そんな反応がいちいち嬉しい。
どれほどの間そのままだったか分からない。俺は始めのときと同じようにそっと唇を離した。
「ぁ……」
小さく、綾子ちゃんは名残惜しいのか呻いた。口を離したあと、みずみずしい唇がぷるんと弾力をもって目の前から離れていく。
互いに言葉はない。なくていい。代わりに視線を交わす。
キスの直後の高ぶりからか、綾子ちゃんの瞳はどこか恍惚さを帯びている。きっと俺も似たようなものだろう。
「……九鬼さん」
ささやく綾子ちゃんの甘い声が、彼女のつけた香水の匂いがどこでかいだものなのか、記憶の彼方から引き出された。
「この匂いは……」
「気付いたんですか。……この香水、さやちゃんの使っていたものです。ずっと前から、たまにだけどつけてたんですけど……気付きませんでしたか？」
「覚えのある香りとは思っていたんだが、どこでかいだものなのかは思い出せなかったんだ。
そうか、沙弥佳の……」
納得して頷くと、彼女が目を細めて俺から逸らした。まるでいたずらをして、問い詰められる子供のようだ。
「ごめんなさい。使うべきじゃないと思ってたのに」
おれは首を振った。むしろ、どことなく嬉しい気持ちになっていた。あいつの遺した、確かな遺産の一つなのだ。

「いい。君が使ってくれ」
「……なんとも思わないんですか？」
あげていた顔を俯かせ、小さく言った。声には悲しげな響きが含まれている。
「私、この香水を使う時、いつも嫌な自分を見てしまってます」
懺悔とでもいうのか、綾子ちゃんは、寂しげな声でとつとつと語り始めた。
「初めてこの香りを使ったのは、さやちゃんがいなくなってしまって半年以上経った日……覚えてますか？　文化祭の始まる少し前の日……」
確かに、そんな記憶があった。ある朝、目を覚ましたときにこの匂いをかいだ記憶がある。いや、むしろ、この匂いに目が覚めたといった方がいいかもしれない。
「そうか。あの朝にかいだ匂いは……」
頷きながらいうと、綾子ちゃんは悲しげな笑顔を浮かべて、俺の顔を見据えた。
「そうです。あの日、九鬼さんは私のこと、さやちゃんと間違えたのか”さやか”って言ったんですよ。
さやちゃんがいなくなって以来、九鬼さんがさやちゃんの名前言ったの、あの時だけでしたからね、すごく印象ありました」
「あれは……」
俺が言いかけて、綾子ちゃんは首を振った。
「分かってます。さやちゃんと同じものをつけたんですから、誤解されたって当然だと思います。
ううん。むしろ、そうさせたかったんです。さやちゃんの遺したものを使ってでも、九鬼さんを振り向かせたいって」
「綾子ちゃん、俺は……」
「いいの。……九鬼さんが本当に大切にしたかったのは、多分私じゃないんですよ、さやちゃんだったの。
この一年間、九鬼さんを見ていたら、それがよく分かったんです。

九鬼さんの行動には全て、さやちゃんのためだってことが分かってしまったから」

再び、かける言葉を失った。俺の行動が全て沙弥佳のためだって？

違う。そんなことはない。俺は君のことが確かに好きで、君のことを考えている。そう言えばいいはずなのに、心の底では、指摘されて妙に納得している自分がいたのだ。

「おかしいですよね。普通なら、自分を一番に見てくれない人のこと、好きでなんか居続けられないのに。……だけど、それでもいいから、二番目でもいいから私のことも見て、って思ってる私、おかしいですよね。

でもそれは、やっぱり仕方ないかとも思ってる。九鬼さんにとって、一番大切な人があんな目にあったら、当然そうなっちゃいますよね。

……そこまで想われてるさやちゃんに、完全に負けちゃってるんだなって思ったりもしますよ」

綾子ちゃんの自嘲気味な笑顔に、胸が痛む。なんで今それを口にするんだ……。

一、二分前の出来事を思い浮かべると、とてもではないが正気ではいられない。綾子ちゃんがこんなことを考えていたというのに、俺はあろうことか彼女の唇を奪ってしまったのだ。おそらく初めてであろう、その唇を。

「……そんな顔しないでください。そんな顔されたら、私の初めてのキスがすごく後味の良くないものだったって思っちゃうから」

「あ……す、すまない」

仕方ないですねとでも言いたげな苦笑い。俺は思わず謝っていた。そいつがまた彼女に笑いを与えてしまう。

「いいですよ、許してあげます。

それに……今はまだ一番じゃなくたって、将来はわかりませんよね？　言っておきますけど私、一度思い込んだらとことんってタイプですから」

最後になって綾子ちゃんはようやく、いつかにも見せた、あの最高の笑顔をして見せた。

夜――もう深夜といっても差し支えない、一時に時計の針はさしかかろうとしていた。

あたりには、海から潮の匂いが風にのって漂っている。ここが海に近いのだから当然のことだ。

俺は一人そんな人気（ひとけ）のない、海辺に程近い倉庫街にきていた。

遠くには県をまたいだ先、おそらくK県のK市あたりだろうか。あるいは隣のY市だろうか。同じくして倉庫街の向こうにある、ビルを示す赤い光りがうっすらと見える。海辺ということと、時期的に黄砂による影響なのか、光りは瞬いて見えなくもない。

時刻はほぼ予定通りだ。予定通りならば、この先にある人物が待っているはずだ。古びた倉庫の出入口の上に書かれている番号を頼りに、ゆっくりと歩を進めていく。

5という数字で書かれた倉庫を右に折れる。その先にいるはずだ、やつが。

「本当に来たのね」

倉庫の間にある通路を抜けたところで、女の声がかけられた。どこか人を小ばかにしたような声。言うまでもなく、女は藤原真紀だった。

一度は向かおうとした寮だが、結局、寮に向かうことはなかった。綾子ちゃんと別れたあとで真紀の携帯に連絡したところ、今夜の日付が変わって深夜一時に、この港の五番倉庫の先へくるよう言われたのだ。

「志願したんだ、来るさ」

俺は肩をすくめながら言う。海から吹く強い風のために、普段よりも大きめの声だ。

いつも会う時は制服姿の真紀だが、今日は黒っぽいスーツを着込んでいる。つい何日か前に出会った、香織と似たような恰好だ。制服で見慣れている俺には、どこか子供が背伸びしているように見えなくもない。けれど、同世代としてはなかなかの着こなしだ。

「第一、俺を勧誘したのはあんただぜ」

「そうね。あなたがそういうのなら、私はもう何もいうことはないわ。だけど、こうなった以上は、何があっても自分の責任よ。たとえ死ぬことになったとしてもね」

真紀の言葉に重々しく頷いた。少なくとも過去数回、その片鱗には触れたことのある俺なのだ。真紀の言っていることは百も承知の上だ。

二人の間を、まだ冷たい海からの風が凪いでいく。

「だったら、あれに乗りなさい」

そう言って指で指し示したのは、一つの貨物船だった。巨大なタンカーといってもいい。よく見る、車や大量の物資を海を越えた向こうに運ぶためのものだ。

「分かった」

真紀が先導しながらタンカーに向かい始め、俺もそれについていく。

（……寮にも戻らずじまいだったんだ。朝になれば、周辺では大騒ぎになるだろうな）

しかし、それでもクラスメイトたちはとっくに卒業しているし、顔など見たこともない後輩たちと一緒に過ごすことがなかったのが幸いだ。

やはりというか、自分で決めたことであっても、どうしても後ろ髪ひかれる思いはある。なにより、綾子ちゃんに何一つ言わずに出てきたのだ。それも当然といえるかもしれない。

徐々に迫りくる巨大なタンカーを眺めながら、つい何時間か前の出来事を思い出していた。綾子ちゃんの家の前で交わした言葉の数々。それらのひとつひとつが、ありありと浮かんでくる。

「綾子ちゃん……」
「九鬼さん、いつか言ってましたよね。何かする時、理由がどうあれ自分にも責任があるんだって。
あの言葉、今ならすごく分かる気がするんです。これって人を好きになることも同じなんですね。
九鬼さんの気持ちがどうであっても、その人を好きになってしまえば、付き合うことになれば、自分にもその責任がついてくるんだって」
なんとなく覚えがある。綾子ちゃんが北条とかいう野郎に、ストーキングされていた時に言った言葉だ。
「私の初めてのキスをあげたのも同じなんですよ。好きになれば、ただ自分を見て欲しいって気持ちだけじゃ駄目……だから人を好きになるなら、自分もリスクを生わなきゃいけないって。だから、だから」
だんだんと、彼女の言葉は弱々しくなっていった。言いたいことはよく分かる。つまり綾子ちゃんは、自分が一番に想われていないのなら、いつまでもそのままでいてはいけないと言いたいのだ。
だから、こんな俺であっても、繋ぎとめようと彼女なりの精一杯の選択をしたのだろう。それが今、その時だったということか。
だというのに俺は……。
「でも不思議……。たとえ一番でなくても、ずっと一緒であればいずれは一番になってるんじゃないかって思ったりするんですよね。……自惚れかもしれないけど」
頬を赤く染めながらいう彼女に、いたたまれなくなって仕方ない。綾子ちゃんなりに覚悟というものを決めたのだろうが、俺は俺で、すでに一つの選択をしているのだ。そのために、どうしようもなく胸が締め付けられるような思いだった。
「だから九鬼さん、お願いだから行かないで……」
はたと気付いた。そうか、行かないでというのは、そういう意味

だったのか……。鋭いのこと君だ。俺の選んだ道を知らなくとも、漠然と何かを感じ取ったにちがいない。行かないでとは、その気持ちの表れだったということなんだな……。

「ああ、俺は君のことが大切だ……大切なんだ。だから」

だからこそ、君の前から消えるかもしれない俺を許してくれ。いや、許してくれなんて言わない。責めたっていい。恨んだっていい。俺が進む道に君がいれば、君が危険に晒される。いずれ、どこかで、いずれはだ。

もう大切な人を失いたくないんだ、俺は。だから今は辛くても、せめて君が、いつかは幸せになれるかもしれない選択をするつもりだ。きっとその頃には、俺のことなんて忘れていることだろう。そう、それでいい。それでいいんだ。

「だから……？」

綾子ちゃんは言葉に詰まった、俺の言葉の続きを待っている。

「い、いや。つまりは、君にありがとうってことが言いたいんだ。こんな俺を好きになってくれてな」

取り繕うように俺はありがとうと言った。だが、精一杯の心からの感謝の気持ちをこめたつもりだ。多分、もう君に何かをしてやれそうにないだろうから。

互いに黙り込んだまま見つめ合っていると、横を車が猛スピードで走り去っていった。さすがに恥ずかしくなってか、どちらからとは言わずに互いに離れた。腕と胸には、まだ綾子ちゃんの暖かさが残っている。

「そ、それじゃぁ今度こそ行くよ」

「あ……はい。あ、あの九鬼さん」

潮時かと立ち去ろうとした時、再度呼び止められた。俺を見つめる綾子ちゃんの顔は、明らかに行かないでほしいと書かれているのが見て取れるほど、切なげなものだった。

「ま、また明日会えますよね……？」

そう問いかける声は小さいはずなのに、声の大きさとは比べもの

にならないほど、強く感情がこもって聞こえた。感情だけではないだろう。暗に、行かないでと懇願しているのだ。

「ああ、もちろんだ。また、明日会おう」

彼女に応えるために、精一杯の笑顔で言ったつもりだ。作り笑いの苦手な俺に、うまく笑えていたか分からないが。

そんな俺を見て綾子ちゃんは、まだ何かを言いたげな様子だったが、俺はこれ以上はこちらが無理だと判断し背を向けて歩きだした。

「……本当にありがとう」

きっと、まだ背中を見つめているだろう綾子ちゃんに、俺は小さくつぶやいた。

「そこ、気をつけて」

突然後ろを振り返って真紀がそう言った。

人差し指がタンカーから降ろされているタラップを指している。タラップはわずか数センチだが、地面との間に隙間ができているためだった。夕方のことを回想しているうちに、タンカーの手前にまで来ていたのだ。

俺は顔を横にし、横目で後ろに広がる倉庫街を一瞥した。もし本当にやめたいなら、ここが最後のチャンスだろう。今すぐにでも背を向けて走り去ればいい。そして、何食わぬ顔で寮に戻るのだ。それだけで、また明日から綾子ちゃんとも顔を合わすことができる。

もしそうなった場合、真紀からは白い目で見られることになるだろうが、そんなの知ったことではない。

しかし俺は、目を強くつぶって足を前に踏み出した。顔をあげたところで、そんな俺をタラップにあがっていた真紀が、無言で見つめていた。そして、小さくつぶやいた。

「大丈夫よ、あなたなら。きっと、あなたならね」

肩までのショートカットの髪が、風に揺れている。俺を見つめる冷たい真紀の眼は、何を思い見つめているのだろう。そして一瞬だが冷たい瞳に、どこか熱いものがやどったように思えたのは気のせ

いだろうか。
風の凪ぐ音しかしなかった港に、船の汽笛の鳴らす音が轟いた。
汽笛の音は、まるで地獄の番人が新しい地獄の住人になる俺に、
ファンファーレでも吹いて祝うかのようだった。

第６４章（前書き）

今回より新章が始まります。

第６４章

ザクザクと、雪を踏み締める音がしていた。視界には見渡すかぎりの白、一面、白銀の雪世界だ。

なだらかな傾斜になっている雪の平原を、一人黙々と進んでいる男がいた。登山用の装備で全身を包み、一歩、また一歩とゆっくりと進んでいる。

積もった雪は深く、少なく見ても七十センチから八十センチはあるだろう。場所によっては、一メートル以上の積雪になっているところがあってもおかしくない。

けれど積雪量は、これでもまだ例年よりは少ない方だし、時期的にも徐々に雪の季節も終わって暖かくなり始める時期であるため、少しずつではあるが雪も溶けはじめている頃でもある。

けれど男にとって、今回の気象の変化は意外なことだった。もう今年はまた雪の時期にならない限り、ここまでの積雪はないだろうと思っていた。

だというのに、昨晩はこの時期にしては珍しく、吹雪いていたのだ。おかげで、せっかく溶けはじめていた雪も、朝には再びこの通り降り積もっていたのだ。

しかし今日は、昨晩の吹雪が嘘だったのではないかと思えるほど、空は晴れ渡っている。しかし、油断はできない。ここは平地とは違う山だ。山の天気は変わりやすいため、ほんの二十分か三十分後ですら、瞬く間に天気が変わって吹雪くことすらあるのだ。

男は思う。季節はずれの吹雪によって、歩くことすら思った以上の苦戦になってしまった。そもそも、こんな雪の中をスノーモービルもなしに進む方がおかしいというものだ。しかし、そのスノーモービルが朝になると動かなくなってしまっていたのだ。

元々、たいして良いマシンでもなかった支給されたスノーモービ

ルだが、それでも無いよりはマシのはずだった。その唯一のアシが使えなくなったのは、不運としか言いようがない。

しかし、それももう少しの辛抱だ。この調子であれば、あと三十分かそこらで目的の場所に着くはずだ……。そう自分に言い聞かせながら、道なき道を進んでいた。

雪の平原を進み続ける男は、ただの地元の人間ではない。もっと言うなら、民間人ではなかった。男はこの国に仕えている軍人だった。彼は数日前、上官に呼び出された時のことを忌ま忌ましげに思い出していた。

雑務に追われていた彼は、突然の上官からの呼び出しに内心、憂鬱にさせられた。なにゆえ呼び出されたのか……。まさか、たまに遊び代欲しさに地元のチンピラや悪徳警官から、金を巻き上げていることがバレたのだろうか。あるいは書面を改ざんして、少しばかりの金を横領していることだろうか。小悪党ともいえる自分の行動の数々を思い出すと、いても立ってもいられない。

緊張した面持ちで上官の執務室の扉をノックし、部屋に入った。そこで彼を待っていたのは、ある任務を任されるという全く予想だにしないものだった。

彼の行ってきたことが、上官の口から明るみに出なかったことに心底、安堵してしまったためか、彼は、その任務の内容を詳しく聞く前に承諾してしまったのである。

今はその時の自分を殴ってやりたい気分だが、こうなってしまった以上はもう諦めるしかなかった。ともかく、自分の悪行が表ざたにならなかっただけでもありがたいと思うようにした。もし上官の耳に入ろうものなら、懲戒免職は免れない。

昨今、この国では就職難のため、年々失業者が増え続け、未就業者がすでに十数パーセントにまで膨れあがっていた。

ある民間のリサーチ社によれば、その数字ですら良い方で実際には、失業者の数は二十パーセントをとっくに超えているという話すらある世の中だ。そんな世の中で懲戒免職で職を失おうものなら、再就

職の道は困難をきわめる。
それに比べれば、この任務ははるかに楽だろう。辛いのは今だけなのだ。
男が言い渡された任務とは、なんとも変わったものだった。数日後の今日、ある地点にて某国からの亡命者が届けられることになっているので、そこでその人物の身柄を確保、保護しろというものだ。
そういった話そのものは、格段おかしいことではない。国境に一番近い基地に配属されている以上、そういったことはあることなのだ。
変わっていると気付いたのは、迂闊にも早合点してしまった後に上官から亡命者の詳細を聞いた時だった。その人物は某国の人間ではなく、東の島国、日本からの亡命者らしい、ということだったのだ。
なぜわざわざ日本からこの国へ……そんな疑問が沸き起こったが、上官は承諾してしまった彼に、これ幸いとにんまりと笑い、今すぐ出立するように言って下がらせたのだった。
今思い出しても、あの時の上官の薄汚さそうな笑い顔が脳裏に浮かぶと、なんとも腹立たしい気分になる。だが、いまさら文句も言えない。だから、こうして黙々と進んでいるのだ。
男は一息つこうと足を止め、光の反射によって七色に光るバイザーを額に上げて、頂上のあたりを見上げた。頭全体を寒さから守るためのフードは目元だけが開いていて、隙間からは金色の細い髪の毛がはみ出ている。
彼の瞳は青く、視界の先や足元に広がる雪が太陽光を反射して眩しいために、目を細めている。彼はおもむろに、着ている白のウィンドブレイカーの中から地図を取り出して、辺りの地形と見比べた。
「間違いない。あそこを登った先だ」
頷きながら、また地図をウィンドブレイカーの中にしまい込む。
バイザーを目元に下ろすと、彼は気合いを入れ直し、またなだらかな傾斜の頂上へ向かって歩きだした。

傾斜の頂上は、スキーやスノーボードで滑降する出発地点としてはちょうどよさ気な雰囲気で、周りには針葉樹が幾本も立っている。目指す地点は、頂上を超えて百メートルほど先だ。また、そこが国境にもなっている。

ようやく、なんとか頂上まで登ることができた。ここからはほとんど平淡なので、進むのはいくらかマシになる。針葉樹に覆い隠されているにも関わらず、ここらにもかなりの積雪があった。

五分と経ったろうか、やっとのことで目的地のあたりにまで来ることができた。男はバイザーを上げ、視界に広がる銀世界の平原を眺めた。目的の地点は、針葉樹の林を抜けた先、突如として現れる平原だったのだ。

「後は、向こうが来るのを待てばいいだけだな」

男はそばにある針葉樹に背中を預け、ぼうって平原を眺めていた。そうしたまま、数十分に渡ってその場にいた彼も、いい加減待つのに飽き飽きし始めていた。ウィンドブレイカーの胸ポケットから、時計を取り出して時刻を確認する。

時間はすでに正午を大きく廻っている。予定ではちょうど正午のはずだ。なのに目的の亡命者はおろか、受け渡し人すら現れる気配がない。

まさか、自分がルートを間違ったのではないか……あるいは向こうが……。周りの鬱蒼と覆いしげる針葉樹と、白以外なにも見えない中に取り残されている彼の脳裏に、任務失敗の文字が浮かぶ。

いいや、そんなはずはない。自分は決して間違ってなどいないはずだ。何度もルートを確認しながらここまでやってきたのだ、間違ってなどいない。

「くそ、まだかよ」

男は深呼吸して気持ちを落ち着けるために、そう自分を言い聞かせて悪態をついた。

その時だった。周りには自分以外、誰もいないはずだと思っていたのに、突然、背後から声がしたのだ。

「待たせたな」
男はひどく驚いて、後ろを振り返る。しかし、後ろには誰もいない。
「ど、どこだ、どこにいるっ」
彼の声は、明らかに狼狽しているのが窺える。
いつの間に来たんだ。つい今の今まで、自分以外いないはずだったではないか。それとも、すでに自分が到着する前にはいたというのか……。いや、いくらなんでもそれはない。ここに来た時は、確かに自分以外は誰もいなかった。いなかったはずなのだ。
なら、声の主は一体いつ……。少なくとも近くまで来ていたなら、雪の踏み締める音が聞こえるはずだ。彼はなんだかとても嫌な予感がした。
「ここだ」
彼からほんの七、八メートルほど後ろの樹から、一人の男が現れる。彼は突如として現れた男を前にして、ごくりと生唾を飲んだ。
男はどうやら東洋人らしい風貌をしていた。らしいというのは、なんとも不思議なことかもしれないことだが、確かに東洋人特有の真っ黒な髪と瞳の色をしているのに、どこか西洋人を窺わせる顔立ちをしているのだ。
そして、なによりも雰囲気だった。男の醸し出す雰囲気は、これまで出会ってきた全ての人間の、誰とも重なり合わない雰囲気を持っていた。それでいて、どこかで会ったことがあるような、懐かしい気分にもさせられたのだ。
「ぼ、亡命するっていうのはあんたか」
「いや、私ではない」
彼の問いかけを否定した男の眼は、まるで彼のことなど映していないようにすら思わせる。彼ではなく、ずっとずっと遠くの情景を見ているかのようだ。
それにどこかおかしい。亡命者でないのなら、この男は受け渡し人であるはずなのに、肝心の亡命者の姿が見えない。彼は何か不吉

な予感に、緊張感を漂わせる。
「そ、そうかい。だったら」
彼が皆までいえることはなかった。なんとも奇怪なものが視界の先に映ったためだ。男の真後ろから何かとてつもなく黒く、そして大きな何かが迫ってきていたのだ。
混乱していた、というよりも、頭が現実を理解できないでいた。なんなのだ、あれは。
猛スピードで迫ってきた黒い影は、男のすぐ後ろにきた時、視界から消えた。いや、跳躍したのだ。
彼は頭上を見て黒い影がいないのを確認すると、すぐさま後ろを振り返った。後ろには一面の雪原だ。
しかし雪原には、ありえないほど巨大な姿をした何かがそこにいた。
猿……？　いや、あそこまで大きい猿なんているはずが……。
彼が無意識に後ずさる。……違う。あれは猿などではない。獣のように四肢を使っていたが、あれは猿というよりもむしろ……人間に近い気がした。大きさも垂直に立てば、二メートル以上はありそうだ。
人の顔を青黒くさせて少し面長にし、口は裂けているようだった。そして耳は長く尖って、眼は鋭く赤に光っている。
全身が顔同様の色をしていて、ところどころが毛むくじゃらになっている。さらには人というには手足が長くもあるが、あれは確かに人といった方が近い気がする。
いうならばあれは、幼い頃によく言って聞かされた、狼男のような風貌をしているのだ。
「そうそう、ここに君の待ち人は来ない。彼らには眠ってもらったからね」
男が淡々という。眠ってもらった……この言葉が意味するのは一つしかないだろう。
それを理解した時、彼は後ずさりから体を反転させて一目散に駆

け出した。装備としてアサルトライフルを所持していたが、戦おうなどとは一切思わなかった。とにかく逃げ出したかった。この場から、あれから、そしてこの男から。

彼は何十センチとある雪の地面を、何度も転倒しながら必死に逃げた。わけが分からなかった。なんなのだ、あれは。あの男は。一つだけ分かっていることは、あの男達が普通でないということだけだった。

先ほどの傾斜の頂上付近にまで来た時、彼の進行方向を遮るように一人、何者かが現れた。あの男の得体の知れない雰囲気や、狼男といっても良い化け物と出会った後では、その人物は至って普通の様相だった。

彼はとまどった。彼と同じような、白と黄色、それにピンクと明るい色のウィンドブレイカーを身に纏って現れたのは、女だったのだ。いや、少女と言ったほうが適切だろう。

晴れているとはいえ、この雪の世界にいるにもかかわらずフードをつけていなかったため、少女の顔がよく分かった。

彼は思った。美しい……。背中のあたりまである、長く艶やかな黒い髪。日の陽りが当たっているために黒髪が光って見え、白銀の世界によく映えていた。

なによりも目を引いたのは、その顔立ちだった。何を思っているのか、彼を見つめる切れ長の瞳と整った眉、すっと通った鼻筋。唇は小さいめながら肉厚でみずみずしく、健康そうなピンク色をしていた。

髪の色や同じ色をした瞳から察するに、彼女は先ほどの男と同じ東洋人だろう。しかし、東洋人にあまり縁のない彼だが、そうだとしてもほとんどお目にかかることのないほどの美少女だった。

そして、実に神秘的でもあった。これが東洋の美少女というものなのか……。彼は逃げてまどっていたことすら忘れ、思わず言葉にしてしまっていた。歳はまだ十四か十五といったところだろうか。いや、東洋人は童顔だと聞くから、もう二歳か三歳は上かもしれな

い。

けれど、少女のあまりの落ち着きぶりと神々しさすら感じる容姿からは、その年齢よりも上のようにすら感じさせた。

彼はそんな美少女を前に生唾を飲み込んだ。一体この子はなんなのだろう。どうしてこんなところにいるのだろう。そんな疑問の数々が、脳裏に浮かんでは消える。

もう彼に、少女の呪縛から逃れることはない。たとえ今、殺されることになるとしても。いや、彼女になら命すら捧げたっていい……。一瞬、そんな考えすら思い浮かべてしまったほどだ。

少女が動く。一歩、彼の前に足を踏み出すと同時に、彼女の手には、一丁の拳銃が握られていた。

彼もそれにはぼんやりとだが気付いた。しかし彼は動かない。少女に釘付けにされたままで、動こうとしない。あるいは魅了されてしまい、動けなくなったのかもしれない。

少女が彼に向かって銃口を向ける。彼は動かない。

次の瞬間、少女が笑った。少しだけ困ったような、そんな笑みにも見える。しかし、彼にはそれがまるで、聖母マリアが微笑みかけてくれたかのように感じたのだ。

直後に、パンッという意外なほど短く鋭い音が、針葉樹の森に響きわたる。

「……」

少女は無言のまま銃を下ろして、物言わなくなった男の死体を眺めた。雪の上には真っ赤な鮮血と、脳漿が飛び散っている。

向こうからザクザクと雪を器用に足で掻き分けながら、男が少女のもとへやってくる。それとともに、あの狼とも人間とも知れないものも後ろに従えながら。

男の瞳には、目前で人が死んだというのに何も映していない。映しているのは、自分にとって最もお気に入りともいえる、黒髪の少女ひとりだけだ。

死体をよけ、少女の前に男が立った。

「ふふ……なんの躊躇いもなく人を殺せるなんて、初めてとしては上出来だ。いや、素晴らしいといってもいい。
だから言ったろう？　君になら、こんなことは難無くこなせるとね」
少女の頬に男の指が触れる。触れられた瞬間、人を殺したにもかかわらずぴくりともしなかった少女の瞼が、わずかに震えた。
そして少女は、頬に触れている指をゆっくりと何度も上下させている男の顔を、静かに見上げた。少女に殺すよう指示していたのは、間違いなくこの男だった。
少しだけ、ほんの少しだけ少女は頬を緩めるような仕種をして見せる。男には、それだけで歪んだ心が洗われていくような気にさせる。あの狼のような姿をして見せる人間も、その二人にかしずいていた。
「やはり、おまえこそ私の聖母に相応しい。さあ、いこう。マリア」
男に促されて少女は頷く。
男の一歩後ろについて、彼らは緩やかな傾斜をおりていったのだった。

しとしとと雨が降り続いていた。この時期にしては珍しく、ここのところ毎日降り続ける雨は、もう何日目なのか分からない。おまけに今は夜だった。
昼と違い夜になると、この街では急激に温度が下がり始める。もっというと、体感温度が違うのだ。そのため、テレビなんかで表示される温度と実際に感じる温度とでは、かなり異なって感じる。
遠くでは、街をいく車の走る音が雨のしぶく音と紛れ、この寝座にまでかすかにだが響いてきている。

けれどそれを除けば、今日は比較的静かな夜だった。こんな日は、部屋に買いためてあるスコッチでも飲みたい気分にさせられるが、残念なことに、今はまだそういうわけにはいかなかった。今日はまだ仕事がある。たいしたことではないが、サボタージュするわけにもいかない。全く面倒な話だ。

まだ時間はいくらかあった。見てもいないテレビのスピーカーからは、濃い茶色の髪をしたタレント達が数人で、何かについて言い合っている。

今部屋の灯りは、テレビの前にあるテーブルの上にあるライトスタンドだけしか点いていないため、部屋の中は非常に薄ぐらい。

その部屋の中で俺は一人、窓の脇に寄りかかって外の景色を眺めていた。見つめる先には何もない。ただ空に向かって、暗闇がひたすら続いているだけだ。雨があがっていれば、見つめる先に大都会の摩天楼がかすかに見えるのだが、生憎の空模様だ。

もう、どれほどの時間そうしている分からない。いい加減、この代わり映えのしない景色にも飽きてきて、俺は窓からはなれた。まだ少しばかり時間があるとはいえ、そろそろ準備して出たほうがいいだろう。仕事なんて、さっさと済ませるに限るのだ。

テーブルに置いてあるリモコンでテレビを消す。そして続けざまに、ライトスタンドの灯りを消した。十坪かあるいはそれ以上あろうかという、広い部屋に、ほの暗い沈黙がおりる。

この街に住み着くようになった最初の年、たまたま街に繰り出した時に一目惚れして買った、焦げ茶色の革ジャンを羽織って部屋を出た。ドアを閉めると同時に、鍵穴に鍵を挿してロックする。別に盗まれて困るようなものなど一切ないが、なんとなく習慣というやつだ。

ドアの外は、そのまま階段の踊り場になっている。昔のレンガでできた壁。階段もレンガになっているが、現代風にみせるためなのは知らないが、コンクリートによって塗りかためられている。手抜きもいいところな階段だ。

俺の住む部屋は、古ぼけた五階建てのアパートの一室だった。部屋は全部で十部屋あり、一人で住むには広すぎるといえるアパートだが、実際には住人は俺を含めてわずかに三人しか住んでいない。

なんでも十九世紀に建てられたというこのアパートは、当時の面影を残したまま時代に取り残されていったのだ。エレベーターはおろか、部屋に電話線すら通っていないようなボロアパートなのだ。おまけに、階段の各踊り場の横の壁に設置されている電灯も、ところどころチカチカと点滅していて消えそうになっていたり、すでに中のフィラメントが切れてしまったのか、点いていない電灯もあるほどだ。

そんな、綺麗好きと知られる日本人である俺が、こんな薄汚いボロアパートに身を寄せたのが今からもう二年以上も前のことだった。

アパートを出ると、頭にぽつぽつと雨の滴が降ってきた。この程度の雨なら傘は必要ないだろう。こんなのはこの街であれば日常茶飯事なのだ。

ジャンパーのポケットに手を突っ込み、人通りの全くない道を南東のほうに向かって進み始めた。たいした雨でなくても、やはりあまり濡れたくないせいか、つい足早になってしまう。

周りには、俺の住むボロアパートと大体同じ造りになった薄汚さそうなレンガの壁でできたアパートや建物が、いくつも密集している。

今俺が歩く道は、幹線道路に抜けるためのここら一帯のメインストリートではあるが、夜になると人っ子一人歩くことはなくなってしまう。というのも、建物と建物の間の小さな隙間にあるゴミ箱を、野良猫なんかと一緒になって漁っている浮浪者や、何を考えているのか分からない、気違いじみた者もこの辺りには多いためだ。いわゆる、不良と呼ばれる若者も多くいる地区だった。

今はさほどでもなくなったが、かつてこの地区は街では、指折りの貧民街の一つとして有名だったらしい。しかし七十年代後半頃からこの街は、大規模な区画整理を行うようになってからというもの、

大分そういった人種も少なくなったと聞く。
だがそれは表向きだけで、実際には人目のつかない路地裏や古い建物の裏手なんかでは、いまだそういった輩はいくらも存在している。

ちょっと前にはアパートからほんの一ブロック先のところで、ティーン達の間でちょっとした抗争があったと聞くし、この地区には、裏でドラッグを売りさばくディーラーも存在しているのだ。また、そんなガキどもやディーラー達の背後には、ギャングと呼ばれる連中がおり、この地区ではやはり、よく見かけることのある連中でもある。

そして、ほとんどお目にはかからないが、俺と同業者も存在している。最も危険なのはこのタイプの連中だ。一般人にはさほど見分けはつかないかもしれないが、一度でもこの裏世界に身をおくと、よく分かる。どんなに巧妙に雰囲気を隠していても、直感が囁いてくるのだ、こいつは危険だと。

もっとも連中は馬鹿ではないから、人目はつかないよう工夫をしているのは分かる。中には目立たぬようこんな危険な地区ではなく、もっと安全で、清潔な地区に住んでいる者もいるだろう。理由は簡単だ。普通にしていることこそが、最も目立たないことだと知っているからだ。

そうとは知りながらも俺がこんないかがわしく、後ろめたい地区を選んだのは単純に、ここならば多少危険なことであったとしても、すぐに雲隠れできると踏んだためだ。

この手の地区には、土地柄もあってかあまり人気のある地区ではないため、何かあった時のためのアジトになりそうな空き部屋が、いくつも存在しているということ。また、俺みたいな外国人であっても、金さえ出せば簡単に住まわせてくれるというのも利点だったのだ。

しかし、そんな土地に住むことになるなんて、俺もとことん落ちぶれてしまったものだ。だが、別に後悔しているわけでもない。元

々好奇心旺盛な俺だ。かつて、日本を離れて外国に住んでみたいというささやかな願いは叶ったのだ、その点に関しては、一切なんの文句もない。

それに、仮にこの地区で何か危険があったとしても、その危険な何かをしでかす怖れが一番高いのは、間違いなく俺のような人間なのだ。

ギャングに絡まれたことも一度や二度ではすまないが、皆、瞬く間に返り討ちにしてやった。中には永久に病院の世話にならないといけない奴だっているだろう。あるいは俺に絡まなければ、まだ生きていた奴もいたはずだ。

自分では単に身を守っているだけに過ぎないつもりでも、そんなことばかりあれば自然と、俺が一番の危険な奴だというふうに認識されていってしまうのだ。それを望もうと望むまいと。

アパートから三十分も歩いただろうか。今晩の仕事場に着いた。俺の住むアパートのボロいが、この建物も負けじとボロそうだ。いや、壁にヒビが入ってなかったり、裏手に金属の螺旋階段がある分、まだ向こうのほうがマシだろう。

そんな建物の横から裏手に回って、俺はジャケットの内ポケットからナイフを一本取り出した。これくらい古い建物だと裏口のドアには鍵があったとしても、ナイフ一本で、簡単に開けることができてしまうほど安易なものであることが多い。もしかしたら、鍵がかかっていない可能性すらある。

裏に回って簡単に周囲を見回し、頭上も確認する。四階建ての建物の三階の窓に、うっすらと灯りが洩れているのが見えた。

あそこか。俺は横に現れた裏口の横の壁に背をもたれさせ、ノブを静かに回してみた。案の定、そこは鍵がかけられていなかった。ニヤリと薄ら笑いを浮かべ、音を立てぬよう、ゆっくりと中に身を滑り込ませた。

床は板張りかとも思ったが、杞憂だった。この建物もやはり、申

し訳程度には改装してあり、床はコンクリートが塗り固められていた。これなら、足音はあまり気にしないですみそうだ。おそらく、階段も同じだろう。

中は当然、真っ暗なのでなにも見えない。見えないが、俺には物体の形やある程度まで進めば、明るい色合いのものならそれがどんな色なのかくらいは理解することができる。夜目がきくためだ。元々夜目がきいた方だが、訓練によってそれがさらに研ぎ澄まされることになったのである。

つま先立ちに近い形になりながら先を進む。どうやらこの建物は、今でこそ朽ち始めて誰からも見捨てられているようだが、昔は商業ビルだったようだ。

アパートであれば、一階であっても居住スペースがあるはずなのに、ここにはその居住スペースといえるものがなく、どこか事務的な広間が階段の先にあるのが分かったのだ。

そのまま足音を忍ばせたまま、階段をのぼって二階まであがる。ここまで来ると、さらに上の階のターゲット達の何かを話す声が響いてくる。この建物は今、連中と俺以外は誰もいないし、周辺もいたって静かだ。本人達も、格段大きな声でしゃべっているわけではないだろうが俺の耳には、はっきりと聞こえる。これも俺の特技の一つで、訓練されたことにより、小さな音でも判別できるようになっていた。

三階に向かって階段を上り始める。なんの話をしているかは知らないが、決して世に公表できることではないのは間違いないだろう。

この国のギャングの偉大なる先輩たちはかつて、アジアは中国で大量のドラッグを売りさばき、それに怒りを覚えた中国がこの国の政府に、売るのを禁じるよう訴えたことがある。アヘンとして知られるものだ。

アヘンは知られている通りドラッグの一種だ。ドラッグである以上、一時的には嫌なことから解放させ、ある種の爽快感すら生む。

そこに目をつけて、そんな嘘を謳い文句に、現在の中国は広州を

中心に、全土に広がっていった。アヘンは現在のヘロインやコカインなどに比べると危険度は低いかもしれないが、やはりドラッグはドラッグだ。当然ながら、それに味を覚えた中国人たちは、だんだんと廃人へと変わっていった。だからこそ中国と、中国に密輸し国益をあげていたこの国は戦争をすることになったのだ。それがのちに、アヘン戦争と呼ばれた戦争だ。

結果はご存知の通り中国が敗北し、今、香港として知られる都市が、この国の植民地となったのは周知の事実だ。

そして、その戦争が今から数えること百数十年前。どの国でもギャングたちの、最大級の稼ぎになるのがドラッグだ。もちろん、この国のギャングであっても例外ではない。

おそらく、今日この場で行われているのは、そのドラッグの受け渡しと取引だ。俺がこんな古ぼけた建物に来たのも、その取引を中止するためだった。すなわち、その場にいる連中を、全員あの世に送るということが今晩の仕事の概要だ。

こんなくだらないことなんて引き受けるべきでないのは分かっていたが、どうしてもと頭を下げられたのだ。プライドの高いこの国の人間がそうまでしたのだ。乗り気でなかったのに、つい請け負ってしまったというのが真相だ。

全く、つくづく俺は変なところで人が良い気がしてならない。

今日の連中はどうも、この辺り一帯を取り仕切っている連中らしく、全く違う組織でありながら、何を考えたのかドラッグを取引することで、事実上の結託をすることになったらしい。それを快く思わない第三の勢力が、俺にこんな依頼をしてきたというわけだ。

正直いって、今回の仕事はどうにも乗り気にはなれない。別にギャングそのものが怖いとか、報復が怖いというわけじゃない。たんに面倒なのだ、ギャングというのは。

それぞれの領分というのが存在しているうえ、領分で何か起これば、巻き添えを食わないとも言い切れない。奴らのくだらないいざこざに、幾度か巻き込まれたことすらあるのだ。そんな連中を殺す

ことに、俺はなんのためらいなどない。
はっきりいえば、連中などいくら死のうとも構わない。もし俺が独裁者であれば、ギャングなど問答無用で死刑にしてやっても良いような存在だ。
それ以上に気に入らないのは、連中はまるで銃を持てば、たちまち自分が殺しの世界で生きているとでもいった顔をし始めることだ。
連中は、自分達こそが人を脅しつけ、場合によっては人を殺す権利があると勘違いしている。そんな権利は連中にはあるはずがない。
奴らが自分たちの領分の中だけでそれを振る舞うなら勝手にすれば良いが、領分を超えてしまっているのにそんな態度は許せない。連中は所詮は素人だ。決して、その道の訓練を受けているわけではないのだ。
脅しつけて何もできないことをいいことに、ただよってたかって弱者を嬲る。そんなのはプロとして認められない。それでいて奴らはいざ真のプロを前にすると、己の愚かさを知り身をすくませたり、惨めに命乞いをし始めるのだ。
少なくとも俺は、権力を傘にする連中をプロとして認めるわけにはいかない。プロとはどんな世界であっても、誇りを持たなければならないと考えている。ましてや殺しのプロとして、スーツを着ているだけでプロ慄然としてもらっては困る。真のプロとして黙ってなどいられない。
だからこそきっちり教えてやるのだ。銃を持つということは、自分が殺されても当然だという、覚悟がなくてはならないということを。当然、それを知る時は、死ぬ時だろう。
よって、本来ならギャングどもの依頼など受ける気にはならないのだが、いい加減前回の仕事で稼いだ金が尽きようとしているため、仕方なく引き受けることにしたのだ。いつもの何十倍の金をふっかけてだ。その依頼金を少しでも渋れば、即刻断るつもりだった。
支払いで連中が明日食う金がなくなろうと、借金苦になろうと俺の知ったことじゃない。なのに依頼人は、二言返事で了承したのだ。

そして翌日、つまりは昨日、金額の半分を持ってきた。となると、こちらとしても仕事せざるを得なくなるということだ。もう断るわけにもいかず、その場で前金は受け取った。

こんなわけで俺は今、連中の潜んでいる三階にある部屋のドアの前にきて、息をひそめていた。連中はすんなりと商談がまとまったようで、そろそろお開きといったところのようだ。

おそらく中にいるのは、六人から八人だろう。取引に、たくさんの人員を動員するとは思えない。それでは目立ってしまう。

俺は未だ持っていたナイフをしまい、脇の下に吊ってある拳銃を抜いた。銃口にサイレンサーを取り付けて一呼吸おいたあと、勢いよくドアを蹴ってぶち破る。

すかさず、ほぼ正面にいた黒スーツの頭をぶち抜いた。

中に素早く身を滑り込ませ、横にいるもう一人の黒スーツとダウンジャケットを着た野郎も道連れにする。

商談中で椅子に座った奴は何が起こったのか分からずに、驚いた顔をしている。その額に弾丸が食い込んで倒れた。ついでと言わんばかりに、反対の椅子に座っている奴にもだ。

ようやく状況を把握し、銃を掴んだ奴の喉を狙って引き金を引く。残った連中が物陰に素早く身を隠す。

これで六人。まだ足音は二つ。やはり八人いたみたいだった。

「ちくしょう、殺し屋かっ」

連中が叫んだ。俺は答えない。

ふん、間抜けな奴らだ。おまえたちが隠れているの場所は分かっているのに、そんな場所に身を隠したって意味はない。

連中が飛び込んだのは上部に窓が取り付けられて、薄い木の壁だった。木の壁は真ん中に人が通るための通路によって分断され、両側の部屋の壁に向かって部屋を区切っている。その厚さは、ほんの一センチもないだろう。

俺は連中が隠れているあたりを見定めて銃口を向け、一気に引き金を引いた。

計六発の弾丸が連中の隠れているめがけ発射され、木の壁を貫いた。部屋に沈黙がおり、続けてカシャと二つの金属でできたものが落ちる音がする。

その音を確認して壁の方へ歩みよった。念のために銃を構えながら壁の向こうを覗いてみれば、男が二人、頭をたれていた。死んだ直後のため、身体が小刻みに痙攣している。

弾は、確実に連中の急所をえぐったようだ。俺はその様子をみて小さく頷いた。

後は連中が何を取引していたかだが、ちらりと椅子に座ったまま死んでいる連中の、中間にあるテーブルのほうを見やる。二つのケースがあり、一方には白い粉が袋に入れられていくつも入っている。もう一方は蓋が閉じられているが、おそらく中は金だろう。

興味などないが、一応確認しておくとしよう。

念のために持ってきていた手袋をはめ、まずは白い粉袋を手にとった。一つは確認のためだろう、小さな穴が開けられている。

続いて金が入っていると思われる、もう一方の閉じられているケースの蓋を開けてみた。やはり入っていたのは金だった。日本円にすればどんなに少なく見ても、間違いなく数億は下らないと思えるほどの大金だ。

「なんだ、これは」

ケースの中に敷き詰められていた札束の一角が抜けていて、代わりにそこには液体か、別の何らか薬品でも入っていそうなものがサンプルケースに入れられて、一緒におさめられていたのだ。目の前の大金よりも、俺はそのサンプルケースの方に興味を持った。

サンプルケースを手にとって窓から差し込んでくる、かすかな明かりの方に向かってサンプルをかざす。サンプルケースは銀色で、中指の半分ほどの大きさをした円筒形をしている。

上部には小窓がついていて、そこから何かの薬液のようなものが入っているように見える。手にとった際、そこから気泡がかざした上部に向かって動いていったからだ。

中の色までは正確によく判らないが、どことなく赤っぽい色をしている。血……だろうか。あるいは赤い色をした薬液というのも十分考えられるが……。

怪訝に思いながらも、上部と下部にそれぞれ中指と親指を添えて円筒形のケースを回してみた。すると、裏側に何か文字が書かれているラベルが貼られていた。

しかし残念ながら、そこに書いてあると思われる文字までは分からなかった。というのも、ラベルには水性のマジックで書かれていたようで、摩擦によって大部分の文字が、すでに消えてしまっているためだった。

全くの謎だ。ドラッグの取引で金以外のものが動くなんてのは、そうあることじゃない。俺はなんでか、このサンプルケースの中身に入っている液体に興味を惹かれてしまった。

すでに前金で報酬は半分だが得ている。それだけでも当分は働かなくたっていい額だ。後の報酬は、このサンプルケースというのはどうだろう。そいつも悪くないかもしれない……。

なぜ俺がこんなにまでこれの中身に興味を惹かれたのかは全く判らないが、とにかく妙に欲しくて堪らなくなっていた。まるであの時の耐え難い、情欲にも似た不思議な感覚だった。

ふと、冷静になってかぶりを振った。何を考えてるんだ、俺は。

軽く肩をすくめてサンプルケースを元あった位置に戻し、ケースの蓋を閉めた。とにかく、この金は依頼した奴に引き渡さなければならない。そこでサンプルされたこいつの交渉をすればいいわけだから、ここで抜き取る必要もないだろう。ケースを手に、そう自分に言い聞かせて部屋を出た。

すでに時刻は深夜の三時を過ぎている。そろそろ依頼人が姿を見せても良い頃のはずだが、一向に姿を見せる気配はない。

待ち合わしている場所は、この地区のさらに南東にある小さな墓場だった。ここは周りに家らしい家がなく、この時間、暗闇に紛れれば人目につくこともほとんどない。

闇に紛れているせいで、鬱蒼とした墓場特有のぬめる雰囲気が、昼間以上に増している。きっとガキの頃であれば、間違いなく近付きもしなかったろう。

すると、闇夜に紛れて男が一人やってきた。片手には、おそらく残りの報酬を入れた金をいれたケースを持っていた。

「待たせたな」

ぱっと見、紳士に見える男は、年齢は俺の四、五歳上といったところだろう。普通にしているようでいて、顔からは明らかに普通でない雰囲気が醸し出されている。墓場に相応しく、黒いスーツを着込んでいた。

「約束の金だ」

男はそういってケースを俺の前差し出して蓋を開けた。確かに、相応の金額が納められていると思われる。金を前にしながら、俺は首を振った。

「どういうことだ？　金はきっちりと持ってきた。まさか、ここにきて足りないというのか」

「いいや、そうじゃない。金はもういい。その代わり、こいつをくれ」

男と同じようにケースを開けて、中にあるサンプルケースを取り出した。

そのケースを見た男は、とたんに驚愕した顔になっていき、急に喚きだした。

「駄目だ！　金ならいくらだってやるが、それだけは絶対に駄目だっ」

持っていたケースを地面に投げ付け、俺からサンプルケースを奪おうとしてきたのだ。

しかしこちらとしても、そうですかと渡せるはずがない。一応、

こいつはきちんとした取引なのだ。俺は手をあげて男に奪われないよう、手の中にサンプルを握りこむ。

「何してる！　そいつをよこせっ」

突如として豹変した態度は、これまでの態度からは明らかに別人ともいっていいほどで、俺はそんな男に不審げに顔をしかめた。

なんなんだ、こいつは……。金よりもこのちっぽけなサンプルケースの方が、この男にとってよほど大切らしい。

思えばこの男、通常であれば眉をひそめてしまうほどの金を要求したにもかかわらず、いともあっさりとそいつを承諾したのだっておかしい話だ。

ギャングなんてのはほとんどの場合、金の方が大切なはずなのだ。今時、仁義だ人情だとか抜かす輩は、いはしない。もしかしたら、この男がそんなタイプの人間であるかもしれなかったが、態度を見る限りそうでもなさそうだ。

「おいおい、金よりも大事だっていうのか」

「うるさいっ、早くそいつをよこすんだっ」

喚き立てた男は、俺が放さないのを見かね、突然腕に噛み付いてきた。

「くっ」

まさか噛み付くなんて思わなかった俺は、握りこんでいた手を放してしまった。

男は落ちたサンプルケースをすぐに拾い、両手で抱き込むようにしてその場を走り去ってしまった。

俺は左腕を革ジャンの中に入れて、噛まれた右腕をさすりながら走り去った男を見つめていた。

「……なんだったんだ、一体」

全く、わけが分からない。たかだかサンプルケースのどこに、あんなにまで必死にさせるほどの何かがあるとでもいうのか。まあ、俺自身、急にあのケースに魅入られてしまっていたわけであるが。

だが、手元からなくなったとたん、なぜ金と引き換えに固執して

しまったのか、馬鹿らしい話だ。
まあいい。そんなことより、この金をどうするかの方が今は先だ。報酬の残りと、それに片付けてやった連中から奪った金。
もちろん、ちょろまかすることに躊躇いがあるわけではないが、とりあえず前者は俺のものだからいいとして、後者はこのまま俺が持っていては、少々面倒なことになるかもしれない。しばらくはどこか、別の場所に隠しておいた方がいいだろう。
もし誰かにつきつとめられた場合は、返せばいいし、もし音沙汰なければ、そのまま俺がちょうだいすればいい話なのだ。散らばった札束を二つのケースにしまいこんで、この陰気な場所からさっさと退散するとしよう。

部屋に戻ってスコッチを煽っていると、徐々に空が明るんできていたことに気付いた。時計を見れば、すでに午前六時を過ぎている。後十分か二十分もすれば夜明けだ。
だというのに、空はうっすらと曇り空だ。夜に降っていた雨は、仕事を終えた時にはあがっていた。このまま夜明けまで雨は降らないと思ったが、そうでもなかったらしい。この分だと、また少ししたら小雨が降り出してくるかもしれない。
全く、この国の天気は変わりやすいというが本当だ。俺は瓶に口をつけ、一気に喉にスコッチを流し込む。
勝手なイメージだが、この街は霧と雨がよく似合う。窓から外を眺めてみると、テムズ河から発生した河霧によって、街が雲海に沈んでいるように見える。加えて、今にも降り出してきそうな天気。俺の思い浮かべるイメージにぴったりのコンディションだ。
今はもうそんなイメージなんて、何十年あるいは一世紀以上も昔のイメージにすぎない。
かつて十九世紀には、産業革命で巻き起こった蒸気機関の発達によって、煤煙（ばいえん）と呼ばれるものが大気中に巻き上げられていた。煤煙とは、石炭が燃焼することで生みだされる微粒子のことだ。その煤

煙とテムズ河からしょうずる霧が混ざりあってできた、スモッグと呼ばれる濃霧が発生していたのだ。

このスモッグは朝方に発生する河霧と、一日の天気が変わりやすい気象。このせいで、よく雨が降る前後に空気が湿ってくるために発生する霧が、ほぼ四六時中、過剰生産された煤煙と結びついて、常に生み出され続けていたとすら言われている。

昔のある記事には、昼間だというのに煤煙のせいで、太陽が隠れてしまうほどひどかったこともあったという。

今は石炭など燃やすこともなくなり、視界を遮るほどの煤煙やスモッグはなくなった。

が、朝方の霧と一日のあいだに劇的に変化する天気のために、よく降る霧雨の時なんかは濃霧がやはり発生し、その時だけはまだその頃の面影は残していた。

四六時中、濃い霧に包まれている頃この街は、こう比喩された。

霧の眠らない都――と。

そんな霧と雨の街、ロンドン。俺は今、この街に生きていた。

第６５章

不愉快なデジタル時計の目覚ましが鳴り続けている音に、俺は目を覚ました。

不機嫌なのは、安物のデジタル時計のせいなのか、はたまた気分良く寝付いていたためにそう感じるのかは、さだかではなかったが。

枕元に置いておいたデジタル時計の頭を、腕の振り下ろすがままにたたき付けた。ガシャンとたたき付けられた音のした後、音が鳴りやむ。

このまま寝てもよかった。いや、寝ていたかったが昨晩のことが脳裏に浮かんできたために、仕方なく起きることにした。

両手をあげて大きく背伸びし、頭に血液をめぐらせる。寝る前に飲んでいたアルコールも、頭には残っていないようですっきりとしている。

ベッドの上に片ひざを立てたまま、上体を起こす。時計を見れば、時刻は十三時を廻ったばかりで、カーテンのない窓からは気持ちの良さそうな陽の光りが射していた。

なんとなく気を良くした俺は、ベッドから跳ね起きるように立ち上がった。まだ休日ではないが、昨晩の仕事で金は手に入ったのだから今日は、豪勢に肉料理でも食べに行くとしよう。

この国では、休日や週末となると大食になるという変わった風習がある。イギリスの文化は、他のヨーロッパの国と違っているのだ。もちろん、ヨーロッパといえど、国ごとに文化が違うのは当然といえば当然だが、島国だからなのか、あるいは、かつて世界の海を制覇し、一大帝国を作りあげた賜物なのかは俺には知る由もないが。

ともあれだ。昨晩の金をどうにかする必要はある。さて、どうするか……。こうは考えるが、すでに分かりきっている考えだ。

いつもの場所に預けるしかないだろう。シティの銀行に知り合い

がいるので、そいつに預けるのだ。そうと決めたら、早々と着替えてでかけるとしよう。

しかし、その前に汗を流してからだ。昨晩は部屋に戻ってからシャワーを浴びていないため、着替えの前にまず軽くシャワーくらいは浴びた方がいい。寝汗になんとなくだが、アルコール分が混じっているような気がするのだ。

もちろん、そんなのはただの気のせいでしか有り得ないが、なんとなく、そんな気がしてならないのだ。

着替えを終えた俺は、早速、昨晩手に入れたケースの一つを持って部屋を出た。

治安が決して良いとはいえないこの地区も、さすがに昼間はそうでもない。ただ通り抜けるだけであるなら、女子供であってもたいしたことではない。危険なのはあくまで日が沈んでからなのだ。

ロンドンという街は、中央にシティと呼ばれる世界最大の金融街がある。イングランド銀行は当然、世界に名だたる銀行がいくつもあり、保険会社から証券会社とその取引所、株の取引など金が動くものであればすべてが集まるといっても過言ではない場所だ。

これこそがこの街最大の、果ては都市のすべてといっていい。物価なども、このシティに巣くう連中によって取り決められているのだ。金の価値は、つまるところ黄金との対比によって取り決められたとも、一説にはささやかれている。いや、それらはまだ現在進行形だろう。

もちろん、それだけではない。そんなシティを中心においてロンドンという街は、流行のファッションはそうだし、医療から文化や音楽、モデルケース、思想……その他もろもろ、無いものはないともいえるほどの最先端の情報が、世界中にむけて発信され続けているのだ。

この点においては、近年、いくら世界的に注目が集まる東京でもまだロンドンには及んでいない。

そんな、常に莫大な金額が動き続けているロンドン、いや、シティ・オブ・ロンドンの存在は、その巨大さゆえに歴史の影にシティあり、と呼ばれるほどだ。

事実、ロンドンには各国の裏世界の最重要人物たちが連日、日替わりで訪れているほどなのだ。

裏世界の最重要人物とはようするに、政治家たちのスポンサーだ。アメリカは当然、フランスにしろどこにしろ、どこの国の大統領であっても例外ではない。みな相談役という肩書で、金を持った連中こそが世界の真の支配者なのだ。

連中にとって、政治家などはとるに足らない傀儡にすぎない。政治家にすることでどこまで利用できるか。あくまで、自分に利益が生み出せるのかどうか。政治家など、その一点にしか価値はないのだ。

誰がいい始めたのかは知らないが、この世界は、金を持っている奴こそが支配者になれるという。こんな裏事情をちょっと知るだけで、たちまち、こんなにもこの言葉に説得力があるとは思いもしなかったほどだ。

この街にそんな裏の顔があると知りつつも、なんだかんだでその一機能である銀行に赴こうとしているなんて、全く苦笑せざるをえない。

シティに向かってのびる、メインストリートに出た。メインストリートではあるが、日本人の感覚からするとこじんまりとしていて、道幅も日本の都会の道と比べて狭い。場所によっては四車線か五車線ある道もあるが、だいたいは片側が三車線しかない。特にシティに向かっていくと、ところによっては二車線の箇所すらある。にもかかわらず、車線はやはり日本と比べて狭い。

しかし、それも仕方はないだろう。車が走れるよう、しっかりとコンクリートやアスファルトで路面は補修されてはいるが、道幅までは無理もない話だ。

東京やニューヨークなどといった比較的新興の都市に比べると、

ロンドンは道幅の整理うんぬんの前にすでに、世界で一、二を争う人口を誇っていた都市だ。江戸ですら、全盛期には百万人から百二十万人だったといわれているが、この街はその頃、すでにその三倍からの人口があったのだ。

おまけに当然ながら、当時は今のように車が走っていたわけではない。走っていたのは馬車なのだ。

そんな時代に、現代のような車時代のことを考えて都市機能を持たせろなどとは、言えようはずもないだろう。

このためロンドンでは、大都市であれば必ずといっていいほど見る渋滞が、時間を問わず起こる。朝方の通勤時間帯や帰りの時間帯には、シティ中の道という道が車で埋めつくされる。そして合間を縫うようにあるく人々、といった具合だ。

おまけに渋滞が起こりやすい要因として、横断歩道では歩行者がいれば、歩行者の前を車は横断してはいけないというのが徹底されている。大都会にしては珍しく、あくまでも歩行者が優先されているわけだ。

ちなみに、もし歩行者がいる前を車が横断した場合、運転手は切符を切られてしまうほど徹底されているとのことだ。

なので、近くまではタクシーあるいはバスを使って行き、近くまできたところでおりて歩くというのが、この街での基本だ。あとはチューブ、地下鉄を使うことだろう。

チューブと呼ばれる世界初の地下鉄も、東京同様、ロンドンのいたる地に張り巡らされ、巨大な蜘蛛の巣状になっている。いや、東京がロンドンを真似たというのが正しいわけだ。

さて、今いるこのストリートは交通量もそれなり、少し行けばチューブの駅もある。安さをとればチューブ、早さをとればタクシーになるがどうしたものか。

まぁ、いい。チューブまで着けばそれでいいし、その前にタクシーがくればそいつに乗ればいいだけの話だ。この時間であれば、シティ以外の地区は大いして道も混んでない。そのため、タクシーが

俺のような人間目当てに周りの地区をうろちょろしているのだ。そう納得させて俺は真っすぐチューブの駅に向かって歩く。

歩道をいく俺の横を数台の車が通りすぎていく。チューブまでと、ほんの四、五十メートルといったところで、脇を一台のタクシーが通り過ぎようとした。

俺はすかさず右手をあげてタクシーを停めさせた。運転手も俺みたいな人間を狙ってか、あえて普段よりもスピードを押さえているのだ。タクシーはそいつを窺わせる停まりかたをしたように感じる。

停車後、すぐにドアが開いて、中に乗り込んだ。

「シティの近くまでやってくれ」

そう告げると、運転手はしっかりと頷いてドアを閉める。ドアの閉まる音のあと、運転手はアクセルを踏んで車を発進させた。

走る車内から、流れていくロンドンの街並みを眺めていたところ、日本人と思われるカップルが歩いているのが目に映った。二人とも手を繋いで、楽しげに笑いあっている。

すると普段はほとんど気にすることもなかった、自分が日本人であることを不意に思い出した。

誰かが外国にいると、日本に帰りたくなることがあるといった。しかし、俺にはそうは思えない。何もかも、かなぐり捨ててきた日本。確かに俺にとっての母国だけども、だからこそ帰りたくないと思うことがある。それだけこのロンドンという街は、俺にとってはとても居心地の良い街なのだ。

外国人ゆえの開放感とでもいうのか、俺はあまり日本に帰りたいとは思わない。全く帰りたくないかといえば嘘になるが、正直にいえば、帰るのは必要がでた時だけだと思っている。

そのうち、否応なしに帰らなくてはならない時がくるだろう。そうなったら帰ればいいだけで、自分から今帰りたいとは思えないの

だ。

また、日本を出て良かったと思えることとして、この世は本当に物事を見えにくいようにしているのだと気づかされたことだろう。政治家も、警察も、ギャングも……そして、世界中の金持ちども。こいつらはみんな、どこかで必ず繋がっているというのに気づくことができたのは幸運だったかもしれない。

おそらく日本にいたんでは、こういった事実に気付くのに後何年もかかったろうし、気付くことすらなかったかもしれない。世間に公表されない事実が、実にたくさん知ることができたのは真紀のいった通り、非常に大きなメリットだった。

しかし同時に、知れば知るほど世界の大きさを思い知らされていったのも事実で、なぜ権力者が権力を欲しがるのかもまた理解できた。そうしなければ、自分が消えてしまうからだ。

人は大なり小なり自己権威欲とよばれるものを持っている。スターになりたいだとか、万人に羨望の眼差しを一身にうけてみたいだとか、あるいは面白おかしいことをしてみたいだとか……。これらは全て、自己権威欲があってのことだ。

中には、普段目立たない者が突然饒舌になったりするのもそうだし、周りとペースを合わせないといったのも、それに当て嵌まる。自分で作ったものを、後世に残したいというのもまたしかりだ。

おそらく、人の歴史は裏返せば、この自己権威欲から発生しているものと言ってもいいかもしれないのだ。

権力もまた同じだ。むしろ、この上ないほどの強烈な自己権威だろう。なんせ、何千何万、何百万何千万の人々の上に立つのだから、当然のことだろう。ましてや金があれば、自身のいうことを聞かない奴などいようはずもない……かもしれないのだ。

究極ともいっていい自己権威欲にとりつかれた連中にとって、その権力を失うことがもっとも恐れていることであり、もし権力を手放してしまったら、同時に自身の価値というものすらも失ってしまうと考えているのだ。だからこそ権力者は、今いる立場より上に立

とうとする。

そして権力者たちは、己の権力を保つために権力という目に見えないもので他者に縛りつけ、同時に圧力もかけるわけだ。そうでもしなければ、自分というものの価値を見いだせないからだろう。

全く、へどが出る。別に自己を目立たせたいという欲を否定するつもりはないが、何事も欲をかきすぎると、ただの亡者にしか見えない。弱いから集まって物事を画策して世を支配する……そんな構図の中心にこの街がある。

しかし、その中で一つ分かったことがある。たとえ俺の考えが正しいにしても、連中は確かにこの世、ひいては人の上に立っているのは間違いない。こんな連中の中には直接、人を支配したいという強い欲求を持っている者がいる。

こいつらはどれだけの数がいるかは見当もつかないが、なんとも強欲で、その欲求を満たすために人買いに手をそめているものも珍しくない。

少し前に仕事で、人買いに手を出している連中を始末してほしいという依頼を受けたのだが、こいつらは、なんともどうしようもない連中だった。

俺が殺し屋だと判った瞬間、依頼された額の三倍出すなどといってきたのだ。もちろん容赦なく地獄へ送ってやった。というのも、その野郎は自分の欲求のために、何人もの女を拷問し殺したのだ。依頼を受けたのだから、命乞いしようが結果は変わらないがその野郎を始末するのに、一切の躊躇いはなかった。

なぜなら、始末をつける際に野郎の屋敷に侵入したかところ、たまたま拷問にかけられていたのが日本人らしい少女だったというのも、俺から一切の感情を消し去ったのに一役かったのは決して気のせいではなかっただろう。

少女は色白をした肌に、ほどよい大きさの乳房は無惨にも切り取られていた。死体となった少女は激痛に顔を歪めていて、生きたまま乳房を切り取られたにちがいない。死体の横に、切り取られた乳

房が置かれていたのは、まだはっきりと脳裏に焼き付いている。女の象徴ともいうべきそこを切り取られるなんて、よくそんな惨いことができるものだ。

あるいは野郎に、カニバリズムの習慣でもあったのかもしれない。もしそうであったのなら、銃弾一発などで始末をつけるのではなかったと、あとになって後悔させられたものだった。連中は死ぬにしても、楽に死なせるべきではない。被害者たちの何十分の一だろうと、何百分の一でも苦しみを味わって地獄に堕ちるべきなのだ。

また、そう思わせるに至った一つの要因として、少女がどことなく妹に似た雰囲気をした容姿をしていたのもあった。妹との共通点といえば、長い黒髪と色白の肌くらいなものだったが、彼女もなかなかの美少女だったのも妹にダブらせることになったかもしれない。

彼女にとって唯一の救いは、痛みと恐怖に歪ませた顔から察するに、乳房を切り取られる最中か、後かにショックで死ぬことができただろうということくらいだ。乳房以外は、ほとんど外傷がなかったことからも、おそらくはそうだろう。

そんなわけで、俺はこの人買いの路線で何か調べることができないかと思い始めていた。ちょうどシティに向かうのだ、ここはひとつ情報屋から何か仕入れてみるとしよう。

「兄さん、そろそろシティだよ。まだ先まで行くかね」

変わりゆく景色を眺めているうちに、シティに近づいていたようで運転手が声をかけた。

「ああ、行けるとこまで行ってくれないか。渋滞につかまったら、そこで降りる」

「了解」

運転手はそう頷いて、言う通りに渋滞につかまり始めそうになったところで俺をおろした。

「釣りはいい。チップとして受け取ってくれ」

「ありがとよう、兄さん」

チップとしては、いくらか多いかもしれないが構わないだろう。

日本ではチップは必要としないので馴染みはないが、ここイギリスに限らず、海外では基本的にチップを支払う必要がある。

日本では料金の中に、サービス料というのが含まれているためにチップを支払う必要はない。しかし、海外では料金にサービス料が入っていないため、このチップを支払う必要があるのだ。もちろん、出す金額は相手との親密度なり、良いサービスを提供したかによって常に変動する。つまり、その人次第ということだ。

タクシーを乗り捨てた俺は、真っすぐにシティへ歩きだした。この街は歩道があまり広くないのに、似つかわしくないほど人の数が多いため、自分のペースで歩くことはほぼ不可能に近い。そのペースが自分に合っていれば問題はないが、少なくとも俺には少々窮屈なのは否めない。

まあ、おかげで何かあった時に紛れる人ごみに困らないのはいいことだが。

タクシーを乗り捨てて二十分も歩いたろうか、ようやく目的の銀行にたどり着いた。ここを訪れるのは、もう何ヶ月かぶりのことだ。

やや灰色がかった白い石材でできた壁に、アーチ型の出入り口。まさしくヨーロッパといった雰囲気だ。

アーチ型になった出入り口から中に入ると、いつも人の多い受け付けロビーは客でごった返し、今日も職員たちが入れ代わり立ち代わりで応対に追われている。

そんなロビーの中央付近には、三人の警備員がいる。そのうちの一人に声をかけ、支店長を呼んでくるよう伝えた。別に窓口でも良かったが、窓口だと時間がかかりすぎてしまう。こういうときは警備員に言づてるのも、時間を有効に使うときのテクニックだ。

とはいっても俺の場合、口座を開設したいわけでも、証券という名の商品プランを買いたいわけでもない。あくまで、この金を専用金庫に預けるためだ。

日本人が金庫を使いたいと言っていると伝えれば分かると警備員に伝えた俺は、近くのソファーに座った。やや離れたところではテ

レビが設置され、ニュースが流れている。
それによると、ロシアに面した中東の名も知らない国で、大規模のテロが起こったというものだった。死者は現時点で百五十人を数える。この昨今、あの地域でのテロなんて物珍しいものでもないが、ロシアにほど近い国でテロというのは少々ひっかかる。
一応、イスラム圏に入る地域だが何か、武装勢力の拠点になっているところでもあったのだろうか。
公表は決してされることはないが、テロが起こる場所では、必ず英米露などの軍関係者や高官がいる場所であることが多い。武装勢力たちもまた同様だ。
だから何かあったのではないか……そう訝しんでいたところ、視界の脇にイギリス仕立ての高級そうなスーツを着た男が現れた。
「久しぶりですな、ミスター」
丁寧な英語で話しかけ握手のための手を差し出した男は、ここの支店長だ。いや、シティの銀行の支店長なのだから、相当の立場の人間だ。同じ支店長といっても、他の支店から見れば立場は上なのだ。
「ああ、久しぶりだ」
俺は彼の差し出してきた手を握りかえすべく、ソファーから立って握手をかわした。
彼はイギリス紳士らしく振る舞ってはいるが、実は俺と同じ組織の一員だ。組織には、現場の破壊活動などは行わないが彼のような、組織の人間のバックボーンとして実社会を支えるための部署に配属された人間がいる。
組織を維持するのだって、決してタダというわけにはいかない。どんな理由であれ、やはり金は必要なのだ。だからこそ、彼はこの銀行に所属しているわけだ。
「忙しいところすまないが、金庫を使わせてほしい」
「かしこまりました。どうぞ、こちらへ」
支店長の男にうながされながら、銀行の貸し金庫に向かう。銀行

の金庫は、たいていはこういった支店長の管理する鍵が必要になるためだ。

「……昨晩、東地区のほうのビルでマフィア同士による抗争らしいものがあったらしい」

金庫に向かう途中、支店長の男がぼそりとつぶやいた。俺が何か関わったのではないかと言ってきているのだ。まぁ、それは違いないわけだが。

俺は肩をすくめ苦笑して、なんのことだかと答えておいた。

エレベーターを使って一番下に降りる。というよりも、このエレベーターでしか金庫のある階まで行けない。つまり、金庫専用のエレベーターというわけだ。

銀行の一番下の階につくと、扉が開く。開いた扉の向こうには、ご丁寧にも二人の警備員が配置されていた。侵入者にたいしてすぐに対処できるよう配置されているわけだが、こんなところにわざわざ侵入したりする者がいるのか怪しいものだ。ましてや、ここは今下りてきたエレベーターでしか、地上とは繋がっていないのだ。

そう考えると、思わず苦笑してしまった。

「なにか」

ひとり勝手に笑う俺に、支店長の男が聞いてくる。

「いいや、なんでもない。ただの思いだし笑いだ」

適当にごまかしているうちに、金庫の前に来ていた。金庫に入るためには、警備員の二人が両端にそれぞれ設置されている鍵穴にキーを差し込み、同時に回す必要がある。

男が二人に頷いて、警備員たちは即座にキーを鍵穴に差し込んだ。

「ワン、ツー、スリー」

右の警備員がカウントし、二人が同時にキーを回した。すると、鈍い音を立てて金庫のロックが解除される。いつ見ても思うが、なんとも大掛かりな仕掛けだ。けれどシステム的には、これですら一昔前のシステムだと彼はいう。

ではなぜ、一昔前のものが使われているのか。決して予算がない

からではない。必要がないのだ。
この金庫は地中深くに存在しているので、壁に到達するまで周りの土を掘り出すのには、何十年という時間がかかってしまう。チューブよりもさらに何十メートルも深い土の中なのだ。おまけに核シェルター並の強度を誇る壁には、地中を掘ってきたにしてもどうしようもないのだ。
「どうぞ」
開いた扉の中に入って、俺専用の貸し金庫の前まで移動する。支店長の男は俺が金庫に移動したのを見届けると、いったん外に出た。やや間があって、重々しい金庫の丸い形をした扉が閉まっていく。中の人間が用を終えるまでは、ここに誰も入ることができないというわけだ。
俺は閉まった扉を確認した後、すぐさま金庫の扉を開けるべく、専用金庫に取り付けられたロックを開ける。ロックは、八桁の数字を入キーワードとして入力することで開けることができる。
キーワードは俺の生まれた年と、沙弥佳の生まれた月日を組み合わせた数字だ。赤色に光っていたロックが緑色に変わって、ロックが解除されたのがわかる。
扉をあけて中から箱を取り出し、そばにある台に置いた。箱の中身はなんてことはない、銃に予備のマガジンが一つに、ポンドとユーロの札束がそれぞれ三つずつ。これら全てでしばらくは生活に困ることはないのだが、日本で長いこと生活していたせいか、予備の金というのはあまり手をつける気にはなれない。あくまで何かあった時の金なのだ。
だが、それも今日までの話だ。しばらくは、金にあくせくすることはなくなったのだ。
箱からポンドとユーロの札束を一つずつとって、左右にあるジャンパーの内ポケットに一つずついれた。ポンドの束をさらにもう一束、手にとって財布に無理矢理つめこむ。
それと忘れずに、銃をとってジャンパーの中に吊されている革の

ホルスターに吊った。昨晩つかった銃は部屋に置いてある。予備のマガジンももうなくなっていたので、預けてあった銃を持っておく必要もあったのだ。

マガジンも吊り革につめて一通り必要なことをし終えると、箱の札束を端によせて持ってきた金のケースを入れ無理に閉じた。もう一つの金のケースは金庫に直接いれることにする。

金庫に箱とケースを閉まって開けたままになっていた扉を閉めた。再びロックがかかったことを示す、赤色にロックの色が変わる。

出口に向かい中から出るために再度、金庫で入力したキーワードの数字を入力した。ここは誰か使っている場合、他の人間が入ることはできない。結果、出る際に、金庫を使用した人間が出ることが同一であることを示すための配慮らしい。

もし金庫が破られたことを考慮してのことなんだろうが、もし壁が破られて金庫に侵入されたら、わざわざ金庫の出入口から出て行くはずもないと思ったのは俺だけだろうか。

「お疲れ様です」

金庫から出た俺に、支店長の男が声をかけてくる。事務的に頷いた直後、再び金庫の大扉がゆっくりと閉まっていった。

銀行を出て遅い、朝食兼昼食をとるべくシティから繁華街に向かって歩いていた。街の中にある時計に目をやるとすでに三時ちかく、ずいぶんと時間をくっていたようだ。

さて、今から向かう店もまた久しぶりだ。というよりそこは、銀行にいくさいには必ずワンセットで立ち寄る店で、偏屈もののマスターと、イギリス人にしてはなかなかの顔立ちをした看板娘が切り盛りしている。

パブが立ち並ぶストリートから少し入り組んだ場所にあるその店は、十九世紀の中頃に建てられた建物を改装しなんともこじんまりとしている。外装はまさしく当時そのままといった面持ちをしていた。

「こりゃあ、ずいぶんと久しぶりに顔見せたな、坊主」
店に入ったとたん、ご挨拶なことを言ってきたのがこの店の主人で、名をマーロンといった。看板娘のレベッカは休みなのかいないようだ。
「グレンリベットと何か適当にくれ」
「なんでもいいのか」
主人に頷いてカウンターについた。この国に限らず、欧米のカウンターには椅子のない場合がほとんどだ。主人がグレンリベットの瓶をとり、グラスに注いでいく。
「で、今日はなんの用なんだ」
「聞かなくたって、あんたならわかってるだろう」
「一応聞くのも仕事のうちさ。
まあいい。今日の明け方、ハイドパークのほうで他殺体が見つかったって話をちらっと聞いたくらいだな」
「殺人だと？」
スコッチの入ったグラスを受け取りながら、聞き返す。マーロンは静かに肯定し、目前で適当に食事を作りだした。肉を取り出したので、ステーキにでもするのかもしれない。
「別に殺人なんてこの街じゃ珍しくはないんだが、どうも発表されなかったというのがな」
「発表されなかった……」
「ああ。気になった話はこっちの話だな」
マーロンの言い方では、他にもなにかあった口ぶりだ。俺は確かめるために他に何かあったのか聞いてみたところ、昨晩、東地区でも同様に他殺体が見つかったとのことだ。
当然、そちら側は俺の仕事のことをさしているはずなので、どうでも良いことだ。
「また、何か事件に首を突っ込んでいるのか」
「いいや、ただの興味だな。いつものことさ」
このやり取りもいつものことだった。マーロンは、俺がなんでも

屋とでも思っているらしく、よく色々とネタを提供してくれる。なんでも屋にとって、ネタこそ最大の稼ぎになるというのを知っているからだ。

実際には違うが、まぁ似たようなものなのだ。人を殺すことがあるかどうか、違いなどその一点しかない。

適当に世間話に華をさかせながら、食事をする。出されたのは、予想した通りステーキだった。スコッチにステーキとは、少々合わないのだがまぁいい。こういうおおざっぱさも、イギリスの料理を楽しむうえでのマナーみたいなものだ。

俺以外、誰も客のいない店で食事をすませたあと、マーロンの親父から聞いたハイドパークで起こったとされる殺人現場にいってみることにした。

別にただの殺しであるならなんてことはない。しかし俺が仕事を終えた直後に、また殺人が起こったとなると話は別だ。

なにより、ハイドパークは昨晩の依頼をうけた場所に外ならない。そのような場所で殺人があったのが、どうも気になって仕方ないのだ。

チューブを降りて、ハイドパークへと入っていく。明け方に見つかったというから、もう何時間も前だ。当然、現場に立ち入ることはできないだろうが、まだ何か近くにヒントが残されてないとはいえないかもしれない。

ハイドパークを進んでいくうちに、黄色いテープでバリケードがされている場所が目に映る。そこが例の殺人現場なのだ。さすがに、やじ馬はすでにいなくなっている。

「何かあったのかい？」

ここにはよく来る近隣の人間を装い、バリケードに立っている制服をきた警察官に尋ねてみた。

警察官はまだ若く、おそらく俺と歳はほとんど差はなさそうだ。まだ制服姿もどこか初々しく、若さ特有の軽薄そうな雰囲気がある。

「なんだ、ニュースを見なかったのかい、あんた。今朝、ここで他殺体が見つかったんだよ」

「他殺体？　それって殺人ってことかよ。勘弁してほしいね、ここにはちょくちょく散歩にきてるんだ」

「あんた、中国人か？　この近くに住んでるのかい？」

「いいや、日本人だ。ここは仕事場が近いんでね、気分転換によく来るんだ」

肩をすくめ適当に会話をしてみたところ、向こうも同じくらいの年齢というのもあってか、ぺらぺらとこっちの知りたいことから必要のないことまで喋ってくれた。もしくは、なんの変哲もなさそうな広大な公園で見張りを任された退屈しのぎかもしれない。

ここで殺されていたのは、どうもマフィアらしい男であったというのと、抗争の『こ』の字も浮かんでこなさそうなこの場所で、額に銃弾を撃ち込まれていたなんて想像もしなかったなどといった情報だ。

そのうち、死んでいた男の恰好を聞いたときのことだった。

「おいおい、まさかその男……」

若い警察官から聞いた男の特徴は、昨晩、俺があった男の特徴とそのまま一致したのだ。怪しまれないために、大して驚きもないことに少々大袈裟に目を見開いていった。

「あんた、その男と知り合いなのか」

「いや、知り合い……そうだな、知り合いといえば知り合いかもしれない。だが、どうってことはない。ただの挨拶をする程度の仲だ。彼もよくこの公園に来ていたからな。だから、たまに見かけることがあったんだよ」

事実、あの男がここを待ち合わせにしたのも、よく来る場所だからと言っていたのだ。

説明を聞いて、若い警察官も頷いている。日本であればこの事実

だけで、また色々と思案する輩もいるかもしれない。しかし、この国は幾度となく顔を合わせる人間には、挨拶やちょっとした世間話をする仲には簡単になれる。別に怪しまれはしないはずだ。

「そうか、彼が……」

演技する俺の肩に若い警察官が手をおいた。元気をだせとでもいったところなんだろうが、演技をしてみせながらも頭の中では全く別のことを考えていた。

依頼人だった男が依頼完了のすぐあとにくたばったとなると、さすがに無関心のままではいられない。もしかしたら、俺のことを嗅ぎ付けられているかもしれないのだ。

まず、俺が殺した連中の同輩による逆恨みの線が最初にくるがどうだろう。もちろん、なくはない。しかし、だとしても早すぎる。これではまるで、始めから俺に目星がついているみたいではないか。あるいは、男は最初からマークされていたというのは？　これなら、奴がこんなに早く殺されたのも頷ける。

「おい、あんた。大丈夫か？」

「大丈夫だ。色々と考えてたんだ」

警察官の言葉に頷きながらいう。

「まあ、仕方のない話だよな。挨拶程度の仲でも、知り合いが死んだんだもんな」

今度は彼が肩をすくめて、再び肩に手をやって軽く叩いた。

「悪いが、もう行くぜ」

急にしゃべらなくなった俺に気をつかったのか、彼は軽く頷いただけで何もいうことはなかった。そんな彼を一瞥し俺はパークの西に向かって歩きだした。

歩きながら考えると、あの男が始めからマークされていると考えるほうが現実的といってよさそうだ。

かりに俺の仕事がすぐにわかったにしたって、その場合はまず俺のほうに殺し屋なりなんなりが差し向けられるはずだ。だが昨晩は、俺を尾行している者などいなかった。依頼されてからだって、そん

な人間の影は一切感じなかった。
そうなると男が俺に依頼したあと、殺されるまでの間に誰かにマークされたと考えるのが妥当だろう。
また、誰が男を始末したかも重要だ。始末をつけた奴が誰かによって、俺の安否が決まるのだ。
もちろん最初の容疑者は、当然ながら昨晩俺が始末をつけた、二つの組織の連中だ。どちらにしても、依頼した男と実行犯である俺の両方を見逃すはずがない。
第二の容疑者は、男と同じ組織の連中だ。男は依頼のさいも、一人きりで俺の前に現れた。俺にはどうでもいいことだが、男が実は内乱者だったとは言い切れない。知られたくないゆえ、一人で俺に依頼をしてきたということだ。
あるいは三すくみで協定でも組まれていた中、ドラッグの売買という条約違反をしたが男の組織は黙認し、それに耐え兼ねた奴が阻止するために……まぁ、いまいち信憑性のない可能性ではあるがなくはないだろう。
第三はマフィアなどとは一切関係なく、誰かの個人的な恨みを買った可能性だってある。俺としては、この可能性にかけてみたいところだ。
なんにしても安否がかかっている以上、事実の確認をしないわけにはいかない。
「さて、と。どうしたものか」
言葉にしてみても何も変わるわけではない。それでも口にしないではいられなかった。
やれやれ。全く、面倒くさいことに巻き込まれなければいいが……。
店内には、罵声や怒声に近いほどの大声がいきかって、耳を塞ぎ

たくなるほどだった。あまりのやかましさに耳を塞ぎたくはあるが仕方ない。こういったやかましさも、日本ではなかなか味わえることではない。

昔ながらの石畳に石の壁。それに古いウィスキー樽をそのままテーブルとして使っている内装は、近年、世界的に拡がりを見せつつあるリユース指向であり、百何十年前までの日常が味わえる趣向になっている。

午後二十時。俺は今イギリスでは庶民的なパブにきて、ウィスキーを胃に流し込んでいた。そろそろ、あいつがくる時間だ。

時間には少々口うるさいやつのことだから、ものの数十秒後には現れるはすだ。

そう思ってまた一口スコッチを口に含んだとき、待ち人が現れた。

「相変わらず時間には正確だな」

「そうかしら。私に言わせてもらうと、あなたが単にルーズなだけよ」

開口一番、皮肉げにいう女。別に皮肉をいったわけじゃないのに、なぜかそんな風に感じてしまう。

「ま、いいさ。とにかく座んなよ」

椅子もどこか昔らしさを出すためか、木でできている。その椅子を引いて座るよう促した。現れた女は、ずいぶん久しぶりに会うことになった藤原真紀だ。

「あなた、よくこういう場所にくるの？」

「どうだろうな。気が向いた時はきてる」

本当は週に一度か二度は、飲みあるいているがどうでもいいことだ。

「まあいいわ。それで、こんな場所に私呼んだ理由を聞かせてもらえるわよね。

こんなことというのもなんだけど、あなたが私に逢いたいなんて理由で、呼び出すはずがないですもんね」

手に持ったカクテルのグラスを傾けて、じつに一年ぶりに会う真

紀が聞いてきた。
「もちろんだ」
こくりと顎を縦にふり、俺はことの経緯を話し始めたることにした。

第６６章（前書き）

少しインターバルができてしまいました。
本来なら、一話でまとめるはずが長くなってしまったので、今回は三話に分けたいと思います。

第６６章

夜の二十三時を過ぎた頃、真紀と二人パブで飲みかわしていた俺は、頃合いだと店を出た。

毛嫌いする理由もこれといってないはずなのに、どうもあの女のことは好きになれずにいた俺だ。だというのに久しぶりに会ったせいか、あの女狐の顔を拝みながらの食事は、不思議とのどをするすると通っていた。

ここのところ、ずっと英語での生活を続けていたためかもしれない。久しぶりに何時間も日本語でのやり取りをしたのも、理由にあげないわけにはいかないだろう。

「それじゃあ、私はしばらくはこの国にいるつもりだから、何かあった時は連絡しなさいよ」

「もちろん、そうさせてもらうさ」

店の前で少しの間、真紀と見つめ合う。普段、何を考えているのかよく分からない女だが、非常に有能なやつであるのは知っている。

そんな真紀にじっと見つめられていると、なんとも落ち着かない気持ちになる。俺は軽くため息をついた。

「それじゃぁ俺は行く。何か分かったら、すぐに連絡してくれ」

夜は冷える時期だ。俺は革ジャンのポケットに両手を突っ込み、寝座へと足を向ける。

一拍おいて、背後からカツカツとハイヒールの響く音がした。真紀も自分のホテルに戻っていく音だ。もしかすると、途中でタクシーでも拾うかもしれないが。

タクシーに乗ってもいいが、この時間はまだまだメインストリートは渋滞になっていてもおかしくないので、チューブを使うことにする。

道にはすでにできあがった連中も少なくなく、二人から四人ほど

の友人同士で道を歩きながら、何か爆笑している者たちも見受けられる。あの様子では、これからまだ店をはしごするんだろう。

そんな酔っ払いの徒党と何組みとすれ違いながら、近くのチューブへと下りていった。下のほうから風が巻き起こり、髪がなびく。どうやら電車がきたようだった。

チューブに降り立ったときに、運悪く電車が通りすぎていったので、一本後の電車に乗った俺は、シートに座り暗くて何も見えない窓の外を、先ほどのことを思い返しながら、ぼんやりと眺めていた。

俺の目の前に現れた真紀は、昔と比べ、ずいぶんと印象が変わっていた。この前に会ったときもそうだった。顔つきも雰囲気も、大人びているのだ。うっすらとのばした化粧も着飾った服も、なにもかもが俺の知る頃とは変わっていた。

「今日呼んだのは他でもない。ちょいとばかし聞きたいことがあってね。

あんた、今日の朝、ハイドパークで他殺体が見つかったって話、知ってるか」

「ええ、知ってるわ。でも、それがどうかしたの？」

「この男について知りたい。どうもマフィアだったらしいんだが、この男の組織がどんな状態だったのか教えてもらいたい」

俺がそう言い終えると真紀は、どことなく、うんざりしたように眉をひそめた。いや、実際、かなり呆れていたのかもしれない。

「ひとついっておくけど、私はあなたの情報屋じゃないの。そんなこと、いちいち私に聞かないで」

なんでそんな面倒なことを、とでもいいたげな口調だ。仮に俺が真紀の立場だったとしても、きっと今の真紀のような態度になっていたにちがいない。

俺から目をそらし、真紀はカクテルを一口含んで一息いれた。たしかに真紀の言う通りだがこの女は、知る限りではそこらの情報屋よりも豊富なネタを持っているのだ。なんせ、所属しているのは情

報そのものを扱う機関にいるのだから、そいつも当然だろう。
「……本当、あなたって勝手。あなたを引き入れたのは間違いだったかもしれないわ」
眉間にしわを寄せながら、真紀はため息をついた。どうやら折れたみたいだ。俺が何をいっても従わないのは知っているのだから、妥協したほうがいいと知っているのだ。
「……今朝、死体で発見された男の名前はアンソニー・ベケット。ベケットは母方の姓で、父親はイタリア人。幼い頃に両親が離婚して以来、母親とともに生活してたらしい。
苦労しながらもアンソニーは、十五のときまでは学校にも行っていたようだけど、その頃に母親が死んでいるわ。と同時に」
「……学校をドロップアウトして、ギャングに入ったといったところか」
真紀の言葉を引き取って俺が続けた。真紀もそれに頷いている。
「まぁ、よくある話だな。それで」
「アンソニーはギャングになってからというもの、瞬く間に成長していった。気付けば組織内の調停役――ようするに外交官といったところかしら。その役職についている。わずか二十二歳の若さでね。
彼の働きで、ロンドンのマフィア同士による争いは、ほとんどといっていいほどなくなったわ。彼がそれぞれの縄張りに明確な線引きをしたのと、何かあった時は、必ずそれぞれの組織の幹部同士での話し合いを行うことなどを条件にして」
それの条件として、必ずそれぞれに利益が得られるようにでもした、そういうことだろう。
「で、始末された動機はなんなんだ」
俺がそう聞くと、真紀は珍しくいい淀んだ。知ってはいるがいうべきか、とでもいった雰囲気だ。
「……実をいうと、まだ調査中といったところ。いくつか線があるから」
「それでいい。少なくともひとつくらい、動機としての可能性を知

ってるってことなんだろう」
「あくまで可能性よ」
少しばかし強く前置きし真紀が続ける。
「あなた、ベケットのいる組織以外の二つが、ドラッグの取引をしようとしたのは知ってるわよね。
これらの取引も、本来なら幹部同士の会議である、幹部会を行わなければならないというルールを破ってのことだったらしい。
ベケットはそれらを行わず、勝手に取引を行おうとした連中たちに憤慨したの。きっちりと、書面での協定契約をしたにもかかわらずの行為だったからでしょうね」
なるほど。俺はまさしく、どうでもいいことに巻き込まれようとしていたわけだ。
「それを阻止しようとして殺しの依頼をするも、逆にベケットも、やはりマークされていて殺された……あんたはそういいたいのか」
「……だと思うんだけどね」
一度口をつぐんだ真紀が、なんともおかしいとでもいいたげにつぶやいた。
「だと思うっていうことは、違うかもしれないってことか？　それに、いくつか動機があるみたいなことも言っていたよな」
俺が思い出したようにいうと、真紀は綺麗に整った眉をよせた。
「ええ、そうよ。一番もっともらしい動機はそうだけど、それでは説明できないことがあるの。
普通、同じファミリーの一員が殺されたとあれば、マフィアならすぐにも何かしらの動きがあるはずなのに、そんな動きが一切ないのよ。まるでファミリーが、彼を殺したのかと疑ってしまいたくなるほどね」
「実は、ファミリーは他の二つの組織の取引を知っていて、ベケットがそいつに反対したため、反乱分子としてみられるようになったというのはどうかな」
先ほど考えたことを述べると真紀は頷くが、釈然としない表情の

ままだ。
「もちろん考えたわ。だけど、ベケットにそんな様子は一切なかったらしい。むしろファミリーの幹部たちは、彼にかなりの信頼をおいていたみたいだから。
ただ彼はここのところ、ひとりでよく外出をするようになっていたみたい。ベケットと思われる人物が、ロンドンは当然、バーミンガムやリバプールにも顔を出していたそうよ」
マフィアの重要人物がひとりで外出……それもバーミンガムや、リバプールにまで遠出していたというのは確かに少しひっかかる。
普通なら、護衛の二人や三人はつけるはずだ。なんせ、いがみ合っていた三つの組織を、調停にまで導いた人間だ。そんな人間に護衛がつかないのはさすがに何かあるとみるのが当然だ。
ベケットは俺に会うさいも一人きりだった。つまり、組織には知られたくない何かを行っていたというのに間違いはないだろう。
「ベケットは何をしていたんだろうか」
「分からないわ、今はまだ。だけど彼は、遺伝子工学の権威とも会っていたそうだし、組織とは全く無関係の人間を使って密輸していたとも聞くわ。もちろん、ファミリーには秘密裏にね」
マフィアが遺伝子工学の権威と会う……想像が全くつかない。密輸となればうなずけるというものだが、遺伝子工学の権威となると話は別だ。
「ただ、遺伝子工学のほうに関しては、彼は前々から興味を持っていたみたいだから、個人的な趣味ともいえなくもないわ。ベケットは学校をドロップアウトしたあと、組織にはいってからも色々と勉強していたようだから」
俺は軽く肯定した。たしかにベケットは三十かそこらではあったが絵に描いたような、イギリス紳士の恰好をしていたのを思い出したのだ。あきらかにインテリといってもよさ気な雰囲気だった。
「全く、俺とはまるで大違いだな」
自虐気味にくつくつと笑った。俺も奴と同じ、学校をドロップア

ウトした人間だ。
だというのに、俺は以来、まともに勉強などした記憶がない。せいぜい、あの地獄ともいうべき船の中で、英語やフランス語などの外国語と、殺しの技術を学んだ程度だ。どれも生き残るためのものばかりで、生活や将来への知識のためではなかった。
「まぁ、あまり考えられないけど、ただの強盗に襲われた可能性もなくもないけどね」
「強盗ね」
「ええ。だって彼はその時、片手に大金を詰めたアタッシュケースを持っていたって話だから」
「なんだって？」
真紀がいったことに思わず声を裏返してしまう。
「だけど彼の死に際まで持っていたはずのケースはなかった。死んだあと盗まれたことも考えられるわ。つまり、たんなる強盗殺人の可能性もないわけじゃない」
「……そうかもしれないな」
その後も色々と話をしたものの、これといってめぼしいネタは聞き出すことはできなかった。
しかし、それでも死亡推定時刻を聞き出せたのはよかった。どうも、死体が見つかる二時間ほど前だったらしいのだ。
真紀の前では言わなかったが、持っていたケースがなくなっていただって？　そいつはありえない話だ。やつのケースはこの俺がたしかに持っていたのだ。
おまけに話では、やつは死ぬ直前まで、つまりハイドパークに入る前後までという話だった。そんなのありえない。ベケットは俺の持ち出したケース以外は、なにも持ち合わせていなかった。となると、この情報は嘘だということになる。
もしくは、俺と落ち合うために来る際にも、やはりハイドパークを突っ切ってきて、その時、姿を見られたというのならまだ分かる。
しかし、これはありえないだろう。なぜなら、ハイドパークから

俺との待ち合わせ場所にはどう短くみても、三十分はかかってしまう。それも車で移動する、という条件でだ。

しかし奴は、歩きで墓場にまできていた。もし車であれば、まず俺が見落とすはずがない。姿はわからなくともあんなに寒々しい場所だ、音で気付かないというのは考えにくい。

もし仮に、近くまで車できていたとしたら、そもそも目撃情報などあるはずがない。最寄りのチューブを使ってきたという可能性もなくはないが、もしそうだとすれば、防犯カメラに一度はベケットが映るはずだ。なのにそんな情報は聞かなかった。つまり、チューブは使っていないということになる。残るは、ベケットがタクシーを使ったという可能性が残されるが、だとすれば、ますますケースを持っていたという証言は嘘になる。その日に乗った客の顔は忘れないというのを誇るロンドンタクシー運転手が、乗客の荷物の有無を忘れたり、気付かなかったはずがない。

また死体が見つかったのも明け方で、死亡推定時刻は、その二時間ほど前というからますますおかしい話なのだ。奴の額に銃弾がぶちこまれたのが俺と会った一時間近く後になるのだから、やつがケースなど持っていなかったことを証言などできようはずがない。つまり、この証言はとても信用できるものではなく、それどころか嘘っぱちなのだ。

ベケットの死の動機は、やはり依然として謎のままだ。けれど、真紀の話をきいて浮かんだ一つの可能性がある。ベケットに、上の連中が死を覚悟させなければならないようなことがあったのはどうか、というものだ。

上の連中は何がなんでも出し抜きたいものがあり、そいつをベケットにやらせた。しかし、そいつにはとても危険が孕んでいて、命を落とすかもしれない……そんな可能性だ。幹部連中から信頼されていたベケットなら、あるいは引き受けた可能性はなくはない。

だが、どうなんだろう。今時、マフィアにそこまで殊勝な奴がいるとも思えない。結局、奴らも金にしか興味のない連中ばかりなの

だ。

ベケットもベケットで、そうまでする価値があったのかという疑問もある。少なくとも俺はどんな組織であれ、その組織のために、などという理由で命なんかかけられない。そんなことするくらいなら、野垂れ死にしたほうがまだいくらかマシだ。

ガタンガタンと、チューブの走行する速度に揺らされて、車両の連結機が音をならす。あと二駅でアパート最寄りの駅だ。

ふとその時、ベケットが異様なまでの形相で欲しがっていたものの存在を思い出した。

あの、手の平に握りこめば、簡単におさまってしまうほどのサンプルケース。そういえば、あの若い警察官も、真紀もそれについては一切ふれなかった。用途不明のそんなものを持っていれば、少しくらい話題にあがってもいいものだが、そんな話題は何も出なかった。

あの若い警察官は、財布などの金品は奪われた形跡もないと首をかしげていたのを思い出す。もしベケットが死に際にも金の入ったケースを持っていたとすれば、財布の中の金などはした金だろうから盗ろうなどと思うはずがない。

けれど実際には死に際にケースは持っていなかった。俺がもっていたのだから当然だが、そうなると、思い付くとすればあとは、あの赤っぽい液体の入ったサンプルケースしか思い浮かばない。

（まさか、あのケースをめぐって殺されたというのか俺は）

馬鹿な。あんなちっぽけなものが、そこまで大切なものだというのか、俺は。

頭に思い浮かんだ考えを、即座に否定した。しかし、そう否定はするが、どうにも気になってしまって仕方なくなってしまった。

ほんの少し手にとって眺めていただけなのに、一時ではあれ、金の代わりにいただこうという気になったのはなんでなのか……そいつがどうにも気になるのだ。

別にいまさら、あんなものを欲しいといいたいわけじゃない。だ

が、ほんの少しばかし好奇心がわいた。あれの行方を追ってみても良いかもしれない。

チューブを降りて、ようやく部屋に戻ってきた。時刻はまもなく日付が変わろうとしているところだ。

帰ってすぐにシャワールームにはいった。頭から湯をかけて、シャンプーを手に取って短髪の頭につけ、思いきり泡だてる。身体を洗うスポンジなどないから、適当にシャンプーの泡でもって身体も洗った。

シャワーの湯は温く、湯を浴びていてもどこか肌寒い。しかし、いちいち温度を上げる気にもならず、そのままにしてあった。

泡を落とした俺は、湯をとめてシャワールームを出た。バスタオルで髪と身体を拭いて、タオルを腰にまく。

テーブルに置いてあるリモコンでテレビをつけると、ニュースをやっていた。深夜であってもニュースをやるのは、今の時代どこの国でも同じだ。

ちょうど内容が切り替わる。次のニュースは日本で政権が変わったという内容のものだった。どうもそれによると前政権は、ほんの一年ほどしかもたなかったらしい。相も変わらず、政権の移り変わりが早い国だ。そんなだから日本の政治家は、他国から見下されるのだ。

ある知り合いたちが、こう漏らしていたのが思い出される。日本人というのは堪え性があるのかないのか分からないだとか、日本の首相はすぐ変わるから名前を覚えられないだとか。

そう言われて俺は、ただ肩をすくめながら苦笑することしかできなかった。そいつらのいうことはごもっともだ。たかだか一年や二年で世の中が変わるわけではないし、そんな頻繁に変われば、主体性もあったものではない。要はそう言いたかったんだろう。

苦笑まじりに肩をすくめる俺はただ一言、日本人は流行りものばかりに目がいくんだとだけ告げた。日本で生まれ育った俺ですらそう思うのだ、ましてや国外の人間からすれば、そう思われるのはなおさらのことだ。

テーブルの脇に出しっぱなしになったままのスコッチをとって、瓶を口にやって熱い液体を流し込む。ふと窓の外に目をやると、今晩は珍しく霧が出ていない。珍しく、ロンドンは丸一日中快晴だったようだ。

思えば、俺が初めてこの国に降り立った日も、こんな風に穏やかな天気の日だった。本気で逃げ出したいとすら思ったあの船でのことも、こうして過ぎてみればなんてことはない。なんてことはなくなっても、やはりあの日々のことは思い出さずにはいられなかった。

俺が日本を秘密裏に出国したのが、今からちょうど四年ほど前だった。真紀に連れられて乗った巨大なタンカーは、それ自体が一つの訓練場だったのだ。それを知らされたときは驚いたものだった。

乗せられたその日から、何も知らされないまま、いきなり訓練を開始させられたのだ。

まず手始めの挨拶がわりに、教官を名乗る男から突然切り付けられたのだ。それも冗談抜きの殺意のこもった突進で、向かってくるスピードも半端ではなかった。

それでも始めのうちはわけも分からなかった俺も、だんだんと男の動きについていけるようになっていった。昔から比較的、動態視力と反射神経は悪くないと思っていたがあの時ほど、そいつに助けられたことはなかったろう。

男になんとか反撃を食らわせようと組みいったとき、次の瞬間、俺は男から鳩尾を思いきり蹴られて気を失ってしまった。そして気付くと、船の救護室に寝かされていたのだ。

「……ここは……？」

うっすらと目を開けた俺は、見知らぬ天井に気付いてぽつりとつ

ぶやいた。
「目が覚めたか」
視界に入らないところから、唐突に声がする。俺はその声にはっとするが、跳び起きようとはしなかった。
「ふむ。用心してベッドを起き上がらないのは、なかなかにいい心掛けだ。場合によっては、起き上がったとたん罠が、というのもないとは言えないかもしれないからな」
「……あんた、さっきの男か」
声の主はおそらく、寝ている俺の左斜め上あたりにいるようだ。目をそちらにやって口を開く。
「そうだ。俺がこれからの数カ月間、おまえをみっちりと鍛えることになった教官だ。半年か一年もするころまでに、おまえを必ず一人前の工作員にしてやる」
そうか、この男が俺の……。納得がいったところでゆっくりとベッドから上体を起こし、教官を名乗る男のほうを向き直る。部屋の隅の壁に寄り掛かっていた男は、名を服部（はっとり）といった。
目つきが鋭く、体格も俺より縦も横もある。一見しただけで、肉体が筋肉の鎧に覆われているのが見てとれる。しなやかともいって良さそうな筋肉は、鋼の肉体とも言い換えることができそうだ。
一目みて、この男がただ者でないのは素人であっても丸わかりだろう。もっとも、この男とて普段までこんな厳（いか）つい雰囲気をまとっているわけではないだろうが。
ともあれ、この服部と名乗る男が教官として俺に技術を仕込むことになっているらしい。

巨大なタンカーは太平洋を横断し、どこだかの港に向かって航行しているらしいという話以外のことは、なにひとつ聞かされなかった。それどころか俺は、数カ月ものあいだ日の出ている時間に、甲板に出ることがなかったのだ。
もちろん日が出ているというのは、丸い小さな窓から確認するこ

とはできた。それでも昼間に太陽を拝むことは一度もなかった。たとえそれが日の出だろうが、日の入りだろうがだ。

甲板に出ることが許されたのは一日の訓練が終了し、消灯の時間までの、ほんの数分間だけだった。消灯時間というくらいだから、いつも見る景色は黒一色の暗黒世界だった。

ときには疲れ果て、もう甲板に出る気力すらもない日もあるにはあった。毎日がそんなことの繰り返しなうえに、あんな息のつまる船の中に押し込められていると、気が狂いそうにすらなったものだ。

そんな訓練の第一段階はまず基礎からで、筋肉トレーニングは当然、船の中を決められたルートを何十周も走らされ、射撃の訓練に、日の沈むころには語学の勉強だった。

一見、楽に見える語学勉強だが楽というには程遠い。なぜなら、勉強の間は決して日本語を使っては駄目だったし、もし一言でも日本語をつぶやこうものなら、次の瞬間には鬼教官から鋭い蹴りなり、拳なりが飛んでくるというわけだ。

もちろんどれも、やわな奴ならちょっと当たり所が悪ければ、あっという間に死んでしまってもおかしくないほどで、体罰なんて生易しい、正真正銘、生死をかけた勉強といっても過言ではないものだ。

また時間も設けられていて、時間内に答えられなければやはり同様の結果になる。だが唯一の救いは、たとえ蹴りが顔面に飛び込んできたとしても、そいつをかわす権利だけは与えられていたことくらいだ。

今にして思えば、あれは俺の闘争心を煽らせるための、一種の訓練だったんだと思っている。

おそらく俺は、あの数カ月の語学勉強だけで普通に喋ろうと勉強している連中の、何十倍もの速さでものを覚えたことだろう。そうでなければ死ぬことになる。自分の命がかかっている時、人間はなんだってできるものだ。

語学勉強は船に乗っている間は、ずっと継続され、はじめに英語

で次にフランス語、後はロシア語なんかも習った。習わされたというのが正確だがとにかく、それらの言葉を最低限は喋れるようになったのは間違いない。

訓練の第二段階は、より実践的だった。射撃に関しては船の中、全てを使ったサバイバル戦といってもいい。一応、頭と身体には防弾メットと防弾チョッキをつけての訓練だが、銃に使われるのは実弾だ。

そうそう死ぬことはないとは言ってはいたが、当たり所によっては死なない保障はなかった。手足に当たれば、死ななくとも激痛には違いないだろう。

服部は当たった場合、明日からはずっと勉強会だとぬかした。それはつまるところ、怪我をしたからといって鬼教官の服部が、勉強でミスした際に蹴りが飛んでこないわけではない……遠回しにそういっているのだ。

忌ま忌ましい気分になるが文句をいう暇なぞ与えられない。銃を渡された瞬間から、その訓練が行われたためだ。そしてやはり、何度か銃弾がすぐ脇をかすめていった。

その時は無我夢中だからあまり気にならない。むしろ後になって、よく死ななかったものだと背筋をひやりとさせられたものだった。

そんな訓練が数日おきにあり、訓練開始の直前になって教官の口からそれが告げられるたびに、いずれはこの男にもの言わせてやると誓ったものだった。訓練は、基礎以外は基本、服部の気分次第だったからだ。

教官の前に立っているときは、本当に気が重くなっていた。おかげで目が覚めるとまず、今日は教官からどんな訓練を言い渡されるのか、いやな気分にさせられたものだ。

けれど、こんな日々を送れば色々と見えてくるものもあって、最後のほうはいくらか余裕すら出てきたように思える。

だが、いくら死ぬすれすれの訓練であっても、いつまでも続くわけではない。いずれは終わりがくるものだ。

そして最後の日は、今までのように唐突に告げられた。教官の前に立って、今日はどんな訓練をさせられるのかと考えていたときだったのは、今もはっきりと覚えている。そこでようやく俺は、ついに日のあるうちに船の甲板に出ることを許された。

錆ついて、ところによっては床が抜けるんではないのかと思わせるほど、腐食した個所もある甲板にあがった俺は、遠くに見える陸地を細目になって眺めた。頬をなでていく海風はとても冷たく、今どこの海を航行しているのか見当もつかない。

わかったのは、遠くに見える陸地に向かっているというのと、ここがとても寒い地域であるということだけの二つだけだ。いや、もしかすると単に、季節が変わって寒くなっているだけなのかもしれない。

茜色に染まった西の空に、太陽が沈もうとしていた。周囲の海もその光に照らされて、幻想的な朱色をしている。寒さで空気が乾燥しているためかもしれない。

それにしても、一体どれくらいぶりにみる太陽だろう……とうの昔に日付の感覚などなくなっているため、どれほどの期間こんな船の中に閉じ込められていたのか、想像もできない。

太陽が沈むのを眺めているだけだというのに、なぜか心があらわれていくような感覚にとらわれる。この数カ月の訓練で俺は、いつ死んでもおかしくない経験を毎日のようにしていたのだから、それが関係ないとは思わない。

沈んでいく太陽を眺めていると、背後に動く気配を感じてわずかに身体が緊張する。

俺は直後に後ろから放たれた攻撃の気配を感じ、身を低くした。頭上を蹴りが跳ぶ。

脚が虚空を蹴ったのを気に、一気に相手のふところまで間合いをつめて、喉元に向け拳を叩き込む寸前で止めた。

「……悪くない拳(けん)だ。今のおまえなら、たいていの奴なら一撃で殺せるだろう」

鬼教官の服部を補佐する役目として乗船した男は、やはり俺の教育係のひとりであり、主に体術と暗記術を担当していた。服部も背丈は低くなかったがこの男は、俺よりも頭半個分は大きい。身長は百九十から百九十五といったところで、東洋人としては目をみはるような大男だ。

男が拳を目の前にして、ニヤリと笑ってみせた。俺はゆっくりと上体を戻し、再び太陽のほうへと視線を向け直す。

「今、何月なんだろう……長いこと船に閉じ込められていたから、日付の感覚がない」

「今のおまえに日付の感覚など必要ないだろう？　ふん……まあいい。今はもう十月も終わるところだ」

「十月末……」

実に半年以上も、こんな糞みたいな船の中に閉じ込められていたのか……。驚きの気持ちはあれど、さほどのものではなかった。それ以上に、ストーカー事件から二年が経ったのかなどと、どうでも良いことをぼんやりと考えていたのだ。

「おまえは良くやったよ、実にな。後は最後のサバイバルをクリアできれば、晴れて一人前だ」

「まだ何かあるのか」

男のほうを振り向いて聞いた。すると男は薄ら笑いをうかべたまま、前方に見える陸地を見ながらいう。

「目の前に見える陸地は北欧の国、ノルウェーだ。

俺達は日本を出て太平洋を横断、パナマ運河を経由して、さらに大西洋を斜めに横断したということになる。いや、縦断といったほうがいいか。地球を軽く半周以上はした計算だ。

おまえは明日、この船を降りて小さな舟を使ってであそこまで行くんだ。詳しくは明日伝えられるだろうが、指定された街のある地点まで行かなければならない。それが最後の訓練だ」

いつの間にか俺のほうを見ながら薄笑いを見せている男に、ため息をつきながら遠くに見える陸のほうを向き直った。出発地点はノ

ルウェーというが実際に指定されるのは、おそらくノルウェーの国外だろうと、なんとなくだが思った。

この鬼教官どもがノルウェーだからといって、ノルウェー国内の街に来いなどというはずがない。最後の訓練というくらいだから、今までやってきた全てのことは当然、それ以外にも自分で、危機を乗り越えなくてはならないというのも見せないといけないはずなのだから。まあ、覚悟はしておいたほうがいいだろう。

「くくく、怖いか」

男が憎たらしげに笑う。

「いいや。ここまできたんだ、今はもうやるだけだ。それに、今までもなんとかしてこれたんだから、今回だってなんとかなるはずだ」

なんの根拠もなしに、つぶやくように言った。男は俺の言葉を聞いて、さらにくつくつと笑い声をあげるが、俺は本気でそう思っていた。なにより、なんとかしなければ、どのみち死ぬのは目に見えている。

もし途中で力尽きて倒れたところを、近隣の住人に助けられたとしよう。この時点で、パスポートも持たない若い日本人が行き倒れていたというだけで、話題になるだろう。だがそうなると、失敗と見なされる可能性が高いのだ。

失敗したとなれば当然、光栄にも先輩である殺し屋が、俺を始末をつけようとするのは目に見えている。あるいは、住人に見つかることがなくたってあんな寒そうな国で力尽きてしまえば、どう考えたって凍死はまぬがれない。

先に考えた、国外の街に行くのがクリアの条件だとしても、やはり国境が面倒になる。ここらの国の国境警備隊は、怪しいやつには容赦なく銃をぶっ放してくるはずだ。

うまく逃げ込めても、指名手配されないとも限らない。やはり、一難去ってまた一難の状況になることは考えるまでもない。

そしてこの最終訓練に、時間制限すらつけかねない。この鬼教官たちならそれも十分に有り得ることだ。

だが、たとえどんな訓練であれ状況であれ失敗すれば、どのみち結果は同じだ。つまり、俺には始めから選択肢なんてありはしない。やるしかないのだ。

それを分かっているから男は、こうしてわざわざ煽り立てるようなことを言ってきているんだろう。

翌日。寒さに震えながら目を覚ますと、船内にもうけられた簡易のブリーフィングルームへと向かった。

いつもなら俺が先に部屋にいるのに、今日に限って服部のやつが部屋にいた。壁が錆ついていることもあって、照明が一つしかない部屋は思っている以上に暗く見える。そんな部屋に一人待っている服部は、感情らしい感情など持ち合わせてはいないといった表情のまま、俺がくるとすぐさま最後の訓練を行うと短く告げた。

内容は、今から連れていく場所から始まって、ロシアはモスクワまでたどり着けというものだった。やはり……。予想していた通り、外国が終着地だったのだ。

また、そこにたどり着くまでの手段は問わない。ただし、途中にある中継地点を通過しなければならず、制限時間がつけられていた。それも八十時間以内という苛酷なものだった。

そう告げられたあと、すぐさまボートに乗るよう命令される。甲板の横に取り付けられたボートは調査用の小さなものだが、きちんとモーターがついており、これなら多少の波でも大丈夫だろう。

俺がボートに乗ると、服部もそれに続いた。タンカーはこのままノルウェー南部の、デンマークに近い港まで行くらしい。

現在もノルウェーの南部に近い位置になるようだが、これは俺を乗せてあるボートの燃料などを考慮してのことなんだろう。この教官たちが俺のために、陸地に近い場所まで送ったとは考えられない。

ボートが降ろされ、ヨーロッパの大地に向かってボートはモーターのうねる音とともに動き出した。十月も終わりとなると、海の上には流氷もちらほら見受けられる。きっと、あと一、二週間もすれ

ばたちまち一面が流氷に占拠されることだろう。
波しぶきと風によって顔の表面が凍るように冷たい。十五分もすると冷たさを通り越して、痛くなってきた。それは服部とて同じはずだが、スピードが緩まる気配はない。
だがそれも後少しの辛抱だ。もう目の前まで陸が迫っている。すると、そこでボートが停止した。
「よし、ここだ。おまえはここから泳いで陸までいけ」
服部の言葉に静かに頷く。船をおりる前にダイビングスーツを着ていたのでここまでは風を遮ってくれたが、ここからは海に潜らなければならない。
海面の温度は、流氷が現れ始めていることから考えても零度近いだろう。あるいはそれ以下ということもありうる。海面温度がどれくらいかは知らないが、とにかくとんでもなく冷たいのは間違いない。
時間を合わせて頷いた俺は、服部のほうに顔をむける。
「時間をあわせたな？　今、ちょうど朝の八時だ。このＧＰＳの時計で、三日後の夕方四時がタイムリミットだ。時差が二時間あるから、現地時間の午後六時までにつくんだ、いいな。
ではミッション開始だ」
こうして服部の短いコールで最後の訓練、いや、卒業試験ともいえるミッションが始まった。

タンカーの中で必要なものをまとめていれてある防水袋を背にしょい込み、ボートから海に脚からゆっくりとつかっていく。いくら急いでいるとはいえ、いきなり海中に飛び込むのはよくない。なんせ表面の温度は、水が氷になってもおかしくないほどなのだ。
海水に身をひたすと、身体がとんでもなく冷え込み始めた。直接、水が身体に触れないのが唯一の救いだろう。
陸までは、目測でおよそニキロといったところだろうか。もっと少ないかもしれないが、とにかく早く陸にあがりたい一心で俺は泳

ぎはじめた。泳ぎだせば自然と身体が暖められる。ならば、ここは早く泳ぎきってしまった方がいい。

俺はまず、慣らすように平泳ぎからはじめ、身体が温まってきたころで、一気にクロールへ切り替えた。

直に海水が触れている顔が、だんだんとかじかんでくる。だが、今はそんなことを気にしてはいられない。とにかく一秒でも早く、この冷たい海から上がりたい一心だったのだ。

時折、陸を確認しながら泳いでいるうちに、足が地面につくあたりにまで泳ぐことができた。そこからは泳ぐのをやめて、水を掻くように走った。

海から上がると俺は、近くの岩場までいって防水袋に入っている着替えを取り出し、ダイビングスーツを素早く脱ぎすてて着替える。

北欧人らしい、厚手クリーム色をしたのタートルネックになったセーターと、やはりやや厚手のブルージーンズ、足にはブーツという服装で、中にはシャツを重ね着して着込んでいる。これで寒くないわけではないが動いているあいだは、吹雪にでもならない限り寒さに凍える心配はない。

防水袋から、他にも必要なものをすべて取り出した。というよりも、袋にはサックがそのまま詰められていて、サックには必要なものをすべて入れてあるのだ。後はＧＰＳだ。

服部から至急されたＧＰＳで、現在地を確認する。どうやら、ここら一帯には街らしい街はないようで、街までは五キロは行かなければならないらしい。

俺は進むべき方向を頭に叩きいれ、ＧＰＳをサックの中にしまった。サックをしょうと、すぐに移動を開始した。時間は有限だ。こんなところで、まごまごしているわけにはいかない。

まず目の前の岩壁を登って、登頂部にあった針葉樹の林を抜ける。抜けた先は急勾配になっていて、上りよりも気をつけて下りなければならず、慎重に崖を下った。

崖を下りきると目の前には、一面雪の平原が広がっている。誰一

人、いや、獣すら通った跡が見えないほど、綺麗に積もっていた。昨晩はさぞかし吹雪になっていたことだろう。

今日はこの地域としては暖かい朝なのか、雪は降っていないが空を見上げれば灰色にどんよりとしていて、今にも雪が降り出してきてもおかしくなさそうな天気だ。

その前兆からか、雪原を進んでいるうちに、先ほどよりもぐっと冷え込んで感じる。やはり街についたら、コートも調達した方が良さそうだ。

第67章

「ん……」

肩を掴まれて、身体を揺さぶられている感覚に目を覚ます。どうやら寝てしまっていたようだ。

「おい、そろそろ国境だぜ」

「ああ、そうなのか。すまなかったな」

トラックの運転手に起こされ、辺りを確認した。相変わらず一面の雪景色だ。今俺は、フィンランドとロシアの国境付近にいる。

ノルウェーでオスロまで出た俺は、いったんは、そこからは鉄道ではなく飛行機で行くことにしたのだ。パスポートなどないが、海外の国は、日本ほど出入国が難しくないと、教官たちから聞いていたのを思い出し、なんとか作業員にでも成り済まして、飛行機に乗ったところで乗客に紛れようと考えたのだ。事実このやり方で、出入国を繰り返していた人物がいるんだそうだ。

しかし、当然ながらそんな楽は認められなかった。どういうわけか、鉄道を降りて、決して多くない金額のドル札を換金し終え、銀行を出て空港に向かおうとしたところ、突然、警察に追われることになったのだ。コートも着ているし、手元にはサックも持っている。明らかに海外からの旅行者の恰好になっているはずの俺に、なぜ警察が……。

考えるまでもない、あの鬼教官どもの仕業に決まっている。おそらく、今密入国者がいるとでも通報したんだろう。それはようするに、警察も撒けないやつなど工作員として必要はない、こういった思惑があるに違いない。

忌ま忌ましい気分で、俺は人込みに紛れて行方をくらました。そこで急遽、飛行機をやめて鉄道で移動することにしたのだ。

まず無料のネット閲覧所で鉄道の宿舎と時刻表を調べ、宿舎に赴

いた。何食わぬ顔で裏口から入って、ロッカールームに入る。適当なロッカーから鉄道作業員の服を拝借し、素早く着込んだ。

鉄道作業するふりをして、鉄道の中に潜り込む。できれば客席がいいが、わりと高級仕様の列車であったため、そういうわけにもいかない。客席にいれば、すぐにばれてしまう。自由席があったにしても、どのみち無賃乗車であるのがばれれば、時間をロスしかねない。

そこで、変わりに貨物車に身をすべりこませた。列車は国境を超えて、スウェーデンとフィンランドの国境近くまで行くというのは調べてある。

その間、寒さに凍えないためにも、作業服は着たままにしておく。なんせ貨物の中は真っ暗なのだ。当然、中は暖房などついているわけではないのだから、少しでも温かくするためにも、そうすることにしたというわけだ。

それと、二食分の携帯食料品も買い込んでおいた。後は見つかることなく、終点の駅まで行けることを祈るだけだ。

そんなわけで、なんとかフィンランドの国境に近い場所にまできた。ＧＰＳの機能で現在地に日付と時間を確認すると、ここが間違いなく終点の駅であることがわかる。後は国境を二回越えればいいわけだが、うまくいくか、まだ安心はできない。時間も、ノルウェーに上陸してからすでに二十五時間が経過している。

それでもここまでは比較的スムーズに来れたはずだ。終点についたのを列車の動きと音で確認し、貨物車の上部にある天窓のようなものを引きあけた。

あけた途端、中に雪がひとつふたつ降り込んでくる。どうやら、外は雪が降っているらしい。

昨日のノルウェーに比べると、いくらか暖かい気がしなくもない。やはりバルト海の上にあるボスニア湾という内海があるせいだろう。

オスロは、北極海からの冷たい風が吹きつけてくるわけだから、この辺りは、たとえ緯度がオスロより高い地域であっても、内海か

らの風の影響で暖かいのだ。
おまけにスウェーデンという国は、隣のノルウェーとの国境に山脈があるのも忘れてはならない。この山脈が北極海からの、冷たい風を防いでくれているというわけだ。
天窓らしきところから頭を出すと、すでに列車は止まっている。となると乗客はもうみんな降りているだろう。ここは、列車が整備を受けるための場所で、貨物などの荷下ろしも行う場所でもある。
幸か不幸か人の姿は見受けられないが、そのせいなのか、ここがまるで列車墓場みたいに思えてくる。俺は肩をすくめて天窓から身をのりだし、コンテナの上に出た。
作業服はその場に脱ぎ捨て、足早にここを去ることにする。ノルウェー上陸以来、軽い携帯食しか口にしていないので、何か腹にいれたいところだ。

「気をつけていけよ、坊主」
俺をトラックから下ろした荒くれ者らしいトラックの運転手は、一言そういうと、すぐさま道なき道で折り返して、また元きた道を戻っていった。
あの運転手とは、スウェーデンのフィンランド国境付近の街で出会った。丸一日以上何も食べていなかった俺は、街の薄汚い、いかにも北欧の寂れた街の食堂らしいレストランで食事をしていた時に出会うことになった。
最初は地元の人間かと思っていたが、カウンターのバーテンと話しているのをよくよく耳をすましてみると、どうも、片言ながら英語を話しているようだった。つまり、外国人ということだ。
見るからに、粗野で荒くれ者らしい雰囲気を持った男にそれとなく話しかけてみたところ、彼はフィンランド人だった。物資を運ぶ仕事をしているという男に、ロシアの国境あたりまで行けないかと頼みこんでみたところ、二言返事で了承してくれた。
以前、北欧、それも特にフィンランド人は、日本人にとても親切

だと聞いたことがあるが、たしかにその通りだった。なぜかと聞いてみると、かつて二十世紀の初め頃にロシアからの独立を宣言したフィンランドは、ロシアと戦って勝ったという歴史をもつ日本にとても親近感を覚えるから、らしい。いわゆる、日露戦争として知られるものだ。

このおかげとあってか、わざわざフィンランド国内へのパスまでなら、なんとかしてくれるという話になったのだ。なんともありがたい話だ。ここは利用できるものならなんでも使えという、鬼教官どもの言葉に忠実になってやろうではないか。

それにもう試験の残り時間は、後三十時間しかない。

フィンランド越えは意外なほど簡単にうまくいった。渓谷沿いに横断する形で乗り切ることができたのだ。さすがの国境警備隊も、一人の人間を見つけるのは困難だろうと踏んだのだ。

ましてや俺は、まだ顔も割れてない新人工作員だ。それにロシアには、アジア系の顔立ちをした人間は少なくないときく。なんとか街にまで行くことができれば、格段怪しまれはしないはずだ。

しかしそうして油断していたのが失敗だったのか、ＧＰＳで街を目指すために確認していたところを、国境警備隊に見つかってしまったのだ。街まではあと、ほんのニキロかそこらだったというのに。

たまたま物影から出た俺に、突然のライトアップがなされた。おまけにロシア語で、止まれ、止まらないと撃つと警告するが連中は間いれず、銃をぶっ放してくる。もちろん、威嚇射撃などではない。初めから本気で撃ってきている。

多分、連中は話に聞いていた、ＦＳＢの国境警備隊に違いない。ＦＳＢはロシア連邦保安庁の略で、ソ連時代の旧ＫＧＢの後続機関だったはずだ。

旧ソ連解体後、当然ＫＧＢも解体され、いくつかの機関に分裂し

た。しかし、組織そのものの体制自体は、名前を変えて保持された。それがＦＳＢとＳＶＲ、ロシア対外情報庁と呼ばれる二つの諜報機関だ。

ＦＳＢはロシアにおける現ＫＧＢであり、独立国家共同体（ＣＩＳ）においてのみ活動する諜報機関で、ＳＶＲはその名の通り、国家共同体以外の全世界を股にかけた諜報機関だ。国境警備隊は解体時は独立した機関だったが、現在ではＦＳＢの管理下にはいっていりはずだ。

なんのことはない。これらの旧ＫＧＢの上層部は丸々ＦＳＢに以降しているわけだから、そもそもが組織としてはなんの変わりはない。

そして連中はそのＦＳＢの連中だろう。こんな場所に派遣されているのだから、とんだ田舎ＦＳＢだとは思うが悠長なことはいっていられない。連中の目標が俺である事実に変わりはないのだから、とにかくなんとかして生き残らなければ、これまでのことが全て水に流れてしまう。

まだ十月の終わりだと聞いてはいても、この辺りはすでに日本では真冬の、それも極寒の寒さといってもいい。当然、一面は雪が積もっていて移動しにくい。雪の地面に、銃弾が撃ち込まれて氷が弾けとぶ。

連中はどうやらスノーモービルに乗っているらしい。俺は雪がくぼんで、向こうに隠れることができそうな場所を見つけて飛び込んだ。しょっていたサックから、手早く銃を抜き取る。映画やなんかで、もっとも知られた形であるベレッタだ。

思いの外、射撃訓練においても絶賛された射撃の腕を、ここで披露してやるつもりだ。

一呼吸して影から身を乗り出して、奴らに向かって撃つ。すぐさま、また身を隠した。

相手はスノーモービル二台それぞれに二人が乗っていて、運転手の後ろには射撃手がいた。

相手が動いているので、いくら射撃の腕がよくてもなかなか当たらない。だが、連中の位置くらいは確認できた。俺を挟むようにして後方三十メートルほどの地点だ。

俺はまず左側の連中を狙うべく、陰から身を出して引き金を引いた。すぐに一台のスノーモービルは舵がきかなくなって横転した。運転手を狙ったためだ。

二度三度と発射された弾丸は、最低でも一発は当たったことになる。初めての実戦としては悪くないのではと自画自賛してみたくなる。

横転したため狙撃手もそれに巻き込まれ、これで事実上、敵はあと二人になった。仲間がやられたせいで、連中の攻撃に怯みを感じた俺は、右側を走るもう一台のスノーモービルに向かって三発の弾を撃ち込んだ。

しかし当たらない。すぐに陰に隠れて一呼吸つく。

その間に、連中の攻撃が始まった。そして隠れていた物影の横を、スノーモービルが擦り抜けていく。

攻撃手が擦り抜けざまに、俺のほうに向かって小型のマシンガンの銃口をむけている。

やられる……。瞬間、そう思ったが銃弾は幸運にも、すぐ脇や足元にぶち当たるだけで当たらなかった。向こうも移動しているという条件は変わらない。狙いが定めやすいのは有利だろうが、精度はやはり個々の技術によるところが大きい。

こうなると俺のほうが有利になるというもので、攻撃が一旦やむと、すぐに反撃した。俺の前をいってやや背を向けている攻撃手に狙いを定め、一気に引き金を三回引いた。

直後に攻撃手が地面に倒れ、一瞬なにが起こったのか分からなさそうに後ろを確認した運転手にも、続けざまに弾丸をぶち込む。

するとスノーモービルは先にあった大木にぶつかり、運転手もその木に強く体をぶつけてしまった。どうやら、撃った弾はきちんと当たっていたようだ。

ピクリともしていなくなった連中を見ると、なんとか撃退することができたみたいだ。俺は大きく息を吐き、近くに倒れている奴のそばまで歩みよった。背中からは大量の血が流れ、手にしたマシンガンからは指が力無く開いていた。

先に撃退したほうも見やれば、運転手は俺の銃弾によって倒れ、攻撃手は乗っていたスノーモービルの下敷きになっていた。

殺しだ……。脳裏に、この二文字が思い浮かんだ。

生まれて初めての殺人になんとも言い難い、ぬめるような嫌な気分が全身を包んだ。仕方なかったとはいえ、嫌なものは嫌に決まっている。気付けば俺は顔を強くしかめていていた。

普通の反応であれば、ここらで全身が震えたりするのかとも思った。なのに俺は、できあがった四つの死体を前にしても、早く次の行動に移したほうがいいなどと、冷静に物を考えていて、あまり動揺していなかったことに、俺は一番驚いていた。

運転するスノーモービルの、雪を滑る音が耳にうるさく響く。モスクワまで、後二十数時間で着かなければならないなか、予期せぬ足ができたおかげで、少しばかり時間的な余裕ができた。

ＦＳＢの国境警備隊の連中から奪ったスノーモービルで俺は、街にまで降りてくることができたのだ。初めのうちは慣れない操縦に四苦八苦したスノーモービルだが、コツをつかむと一気に渓谷をくだったのだ。

ついでに、連中から制服と防寒具を剥ぎ取るのも忘れない。他にも連中から拳銃と弾薬の補充もできたし、街では制服をちらつかせ理由をつけて燃料の補給もできた。国境警備隊に見つかった時は焦ったが結果としては、なかなかにいい方向へ傾いてきているかもしれない。

ロシアはまず国境の田舎街から大都市である、ロシア第二の都市、サンクトペテルブルグへと入った。ここは中継地点として通過しなければならないということもあって、いくらか気が楽になった。街

にある指定場所には、組織の一員がいるらしいためである。
途中、街に入る手前でスノーモービルは乗り捨て、車を頂戴することにした。この国ではヒッチハイクはできないのは聞いていたので、どうせならと民家に忍びこんだのだ。住人は留守だったのか、俺が車を動かした音にも家屋から出てくる気配はなかった。
しばらくは田舎道になるが街にまで入れば、雪の道でもタイヤの跡が残ることはない。
そうして中継地点であるサンクトペテルブルグの街に入った俺は、組織の人間がいるという目新しいビル街の一画へとはいった。
車をビルの前に置いて、正面から堂々と中に入っていく。この時期、気温はすでに真昼どきに一日快晴でも、摂氏五度か六度になるかどうかのサンクトペテルブルグの街において、ビルの中はセーターを着ているだけで汗が出そうになるくらい暖かかった。
ここは街のやや中央に位置するオフィスビルで、ここで俺は組織から通行許可証なるものを貰うことになっている。きっちりとここを中継して通過したという証明書なんだろう。
「すまないが、ドミトリー・ボーリンを呼んでくれないか」
受け付けロビーでドミトリー・ボーリンなる人物を呼び出した。この人物が伝えられていた、組織の連絡員になる。組織も巧妙にできていて、世界のいたる都市にこういった現場の工作員のサポートをするようになっているらしい。
車の中で、防寒具や制服は脱いでいるので上陸したとき同様、セーターにジーンズの装いだ。周りはほとんどがスーツを着ている人間ばかりなせいか、ラフな恰好の俺はずいぶん目立っているが仕方ない。有り合わせの金もほとんどないのだ。
しかし、ほとんどがスーツを着ていても、中にはごくわずかに私服を着ている者もいるので、特にあやしまれることはないはずだ。まぁ、何が目立つかといえば、俺が東洋人らしい顔立ちをしていることが一番だろうが。
大理石でできた巨大な円柱に背をもたせかけ、ボーリンが降りて

くるのを待つ。ここなら、ホール全体を見渡すことができるので、俺に近づいてくる人間はすぐ判る。おまけに石柱の後ろは壁で、付近には通路もない。

不思議とこうして待っていると、妙に緊張してしまうのはなぜだろう。なにかやましいことがある時なんかは特にだ。まさか、つい何時間か前、国境付近で警備隊連中を片付けてやったのが早くもFSBに勘づかれてしまった……なんていうのはあるだろうか。

そんな不吉な考えを巡らせていると、ビジネスマン風のスーツを着込んだ男が、足早に近づいて来て、英語で声をかけられた。

「おまえがクキか」

「ああ。そういうあんたがドミトリー・ボーリンだな」

頷きながらこちらも英語で聞き返すと、男もコクリと頷いた。男が握手を求めてきたので、俺も握りかえす。すると手の平に妙な感覚があった。

「ここまではなかなか順調だな。時間までにモスクワの赤の広場に行け。そこにいる人物に到着の報告をしたら訓練は終了だ」

「待ちなよ。その人物ってのは誰なんだ」

当然の疑問に、ボーリンはただ唇をニヤリとさせただけだった。一体なんだというのだ。

「急げ、あと二十時間をきった」

確かになるべく早く行動をおこしたほうがいいのは間違いないが、会う相手が分からないのもまた考えものだ。しかしボーリンの一方的な会話はそれで終わり、俺に早く行くよう顎を使ってジェスチャーしてみせた。

俺はため息を一つはいて、すぐに歩きだした。こうなった以上は、何を聞いても無駄だろう。まだ訓練中なのだからこのていどのサバイバルくらいは、自分でなんとかしろと言っているのかもしれない。

それに今しがた手渡されたものも気になる。

寒い荒涼とした平原に俺は一人草むらに身をかくして、ひたすら列車がくるのを待っていた。防寒具は着ているが、じっとしていると凍えるような寒さに感じる。

すで日は暮れて、あたりは暗闇となっていて、空気は急激に冷え込んできているため吐く息は白い。口で息をすると冷たくなった空気が器官を痛め付けるので、なるべく鼻で息をしていた。

一刻も早く、列車に乗らないとならない。指令というのもあるが、気分的には早く暖まりたいというのが正直なところだ。

ボーリンと別れた俺は、車の中に戻って手渡された紙に目をやった。カラープリントされた厚紙で、書かれていたのは、はしり書きされた指令書らしいものだったのだ。

それによると、まずサンクトペテルブルグ郊外にある駅から列車に乗り、モスクワに入る前までに下車しろとのことだった。その間に面倒が起こった場合は、すみやかにそれを排除するようにと添え書きもされていた。

俺はエンジンをかけ、サンクトペテルブルグの駅まで飛ばした。途中、危うく事故ってしまいそうになって、何台かからクラクションを鳴らされたが気にしない。残り時間があと四分の一をきってしまっていることを考えると、悠長なことはやっていられない。

ボーリンのいたビルから車で走ること約十分、サンクトペテルブルグの駅についた。駅に行って、時刻表を手に入れておいたほうがいいと踏んだのだ。

どうせなら、サンクトペテルブルグ駅から列車に乗ってしまいたいがどういうわけか、そういうわけにはいかないらしい。指令書には、サンクトペテルブルグの郊外から乗らないといけないと書かれているのだ。

だが、その問題はすぐに氷解した。駅で時刻表を手に入れた俺は、モスクワに時間以内に入るには、次の列車に乗らなければならないことに気付いた。と同時に、その列車にはＶＩＰが乗ることになり、

列車が貸し切りになっているということも、たまたま話していた作業員の話からわかったのだ。

しかもそのＶＩＰとは、どうもロシアの政党局員らしいとのことだった。政党局員という、ロシア一億五千万人の頂点に立つ人間の一人なのだから、何かしらの権力を握っている人物ということになる。

そんな人物が乗る列車となれば、警備はかなり厳重になる。なにより俺が頭を痛めた問題は、連中以外の乗客はいないということだった。貸し切りなのだから仕方ないといえば仕方ないが、この列車に乗らなければ時間内に着くことはできそうもない。

指令なんぞ破棄してやりたいものだが、今そんな大胆なことをしてしまえば、同業の先輩たちが俺を始末にくることになるので、命令を無視するわけにはいかない。

……そうか、つまりこの指令書は訓練をかねているだけで、実質的な俺の初仕事というわけだ。面倒がおこった場合は排除すべきとは書かれているが、ようするにこれは起こるべくして起こるものだから、対象を始末しろといっているのだ。

とてもじゃないが、訓練だからといってこうも都合よく、乗らなければならない列車に世界のおよそ半分を牛耳る組織の一員が乗っているはずがない。もちろん、元々は別の誰かがこの任務につくはずだった可能性も考えられなくはない。訓練と称してこの辺りに時間通りに現れたから、ついでに俺に試させようとしている可能性だってある。

どのみち、俺としては迷惑な話であることは変わりないし、どうにかして乗り越えなくてはならないことであるのは揺るぎようがないのは確かだ。

そんなわけで、こんな寒々しい場所に一人いるわけだ。

車はもう必要がないので、近くの川に突っ込ませて捨てた。薄汚れた水をしている川だ。泥があちこち触った箇所を綺麗に拭い去ってくれるだろう。指紋なんかでアシがつくなんて、仮にも工作員と

してあまりにも馬鹿らしい話だ。
そうしているうちに、左のほうからカタタンと列車の来る音が聞こえてきた。幸いにも、今の時刻は夜の九時を過ぎていて、すでに周りのものが見えなくなっている。
（来い……早く来るんだ）
寒さとはやる気持ちを抑えながら、遠くから響く列車の音に耳をかたむける。するとついに、遠目に列車の姿が見えた。
列車の中からは逆光になってこちらの姿は見えにくいはずだ。連中に気付かれることはないにしても、問題はいかにしてうまく列車に乗り込むかだ。
列車の向かってくる先には駅がある。今少しずつ加速し始めたといったところで、俺のいる地点にくるころには時速五十キロ近くにはなっているはすだ。
轢死した自分を想像して、かぶりを振った。鉄の塊にしがみつこうとするのだから、ほんの一瞬の判断が命取りになりかねない。
それでも乗り込まないわけにもいかない。なんせ列車に乗り込まなければ、後にも先にも死がまっているだけなのだ。
なにより、今はまだ死ぬわけにはいかないと決めた俺だ。とにかくやるしかない。どっちみちやらなければ死ぬのは確実であるなら、やるだけやったほうがいいに決まっている。
「……きた」
目の前まで、あとほんの二、三十メートルだ。失敗は許されない。俺は緊張から、ゴクリと生唾をのんだ。
列車が半分ほどすぎた時、俺は動いた。線路は、日本のものと比べて盛り上げられておらず、地面にそのまま枕木がおかれたうえにレールが敷かれている。
日本の場合は、安全性などを考えたうえで線路が造られているらしいが、ヨーロッパやアメリカの大陸横断鉄道は地面に直に枕木とレールを敷く。これはたんに経済効率のためだ。
日本は国土のわりに非常に鉄道が発達しているが海外では、さほ

ど鉄道に移動手段の比重がおかれていないため、こういった手段が用いられている。移動手段に鉄道を使うのは、せいぜい大都市に住んでいる人間だけだ。日本なら都市圏に住む人間も使うだろうが。

また、日本の場合はヨーロッパやアメリカなどからみると、地盤がゆるいという避けがたい地質的な理由があるため、地震による多少の揺れからは避けられることもできると聞いた。たしかに直にレールを敷くよりは、石を使って盛り上がらせたうえにレールをしくほうが、地震による揺れの伝達が拡散されるのは間違いない。

俺の目と鼻の先を、列車がモスクワに向かって加速していっている。ぶつからないよう、うまいこと列車に乗り込まなければならない。

列車に合わせて走りだした俺に、列車は構うことなくスピードがあがる。一番後ろはなるべく行きたくない。というのも、後ろには警備の連中がでばっている可能性が高いためだ。できれば、その手前までに乗り込めるのが理想だ。

走りながら後ろを振り向くと、列車への乗車口が見えた。あそこにしよう。いや、あそこで乗れなければ、もう列車には乗り込めない。

乗車口が目の前にくる瞬間、手を伸ばしてジャンプした。伸ばしたさきにある手摺りを掴む。速く動いているものにつかまった衝撃で、腕や肩の骨と間接がきしむ音がした。

足はかろうじて列車の車体にへばりつくことができた程度で、とても不安定だ。このままでは落ちてしまう。

もちろん、その間にもぐんぐんスピードはあがっている。もう時速七十キロは確実に出ているだろう。

「くっ」

手摺りを掴んでいる手からは汗のためか、もしかしたら溶けた雪かもしれないが、少しずつ確実に、ずるずると身体が落ち始めてきていた。

（まずい。今落ちたら……）

落ちたあと轢死した自分を想像してしまい、手に渾身の力をこめて手摺りを改めて握った。

足をなんとかしてかけられそうなところを探すが見当たらない。せめて、乗車口が開いていれば……。

そう、乗り込もうとしたそこの扉が開いてさえいれば、なんとかなりそうな感じなのだ。

どうにかして扉を開けられないだろうか。列車はさらに速度をあげていて、時速百キロには確実に達しているだろう。

身体に吹き付ける風も、先ほどまでとは比べものにならない。おかげで、またも手が手摺りから引き離されようとしている。

なんとか、なんとか扉に手をやるんだ……なんとか……。

車体からギシリと嫌な音がした。よくよく見れば、車体の壁はところどころ老朽化していて、なにかの拍子で壁に強い衝撃があろうものなら、そこが砕けて穴でも開きそうになっているのだ。全く、これだからロシア製のものは……。

内心で毒づき、車体に身体をへばりつかせる。しかし風のせいで、徐々に身体が落ち始めた。

このままでは無駄に体力を消耗してしまうだけだ。一刻も早く扉に手をかけなければならない。今はまだいいが、この先トンネルがないとも言い切れない。トンネル内を通過するさいは、とんでもない風圧になるはずだ。もしこのままトンネルに入ってしまえば、確実に落ちて死ぬだろう。

再び、ギシリと嫌な音がする。おまけに今度は先ほどよりも響く音が大きく、掴んでいる手摺りあたりから音がしたのだ。もしかするとこの手摺り、俺の体重を支え切れなくなっているほどに老朽化しているというのか。

くそ、なんということだ……どうすれば。

その時だ。なんと扉の向こうからカチャカチャと、こちらを開けようとしている音がしたのだ。

扉は外に向かって開くタイプなので、扉が開きさえすれば、うま

いことしがみつくことができるはずだ。
ガチャリと音がし、扉が開かれる。俺は全身をバネのようにして扉に跳び移る。その瞬間、扉の向こうにいる奴の手を掴むのも忘れない。
「!?」
掴んだ手を引っ張り、中の奴を外に落とす。落ちる瞬間、そいつの顔が見れた。三十代くらいと思われるＦＳＢの制服をきた男だった。掴まれた奴は、何が起きたのか訳もわからずにいたことだろう。
扉は風をそのまま受けているので、勝手に閉まることはない。俺は器用に扉の内側にある取っ手を右手で掴む。さらに左手は扉の上のふちを掴んだ。これでいい。先ほどまでとは段違いに楽になった。
内側から右手を上部のふちにやって、なんとかへばり付かせていた足を離した。扉にぶら下がった状態だ。
左手を身体のほうに向かって、右手より内側に一瞬で動かした。次に右手を少しずつ車体のほうに向かって動かしていく。
右手がこれ以上動かせないところにまできたら、まだ外側から扉を掴んでいる左手を一瞬はなし、そのまま内側から掴んだ。これで身体全体が扉内側にぶら下がった状態だ。
左足を取っ手にかけ、勢いをつけて車内に飛び込む。なんともぶざまな乗車だが、こうしてなんとか列車の中に入ることができた。
「はぁっ、はぁっ……」
自分のものとは思えないほど息が荒い。それも当然だろう、列車に乗るのにこんなに命懸けだったことなど、いまだかつて一度だってないのだ。できれば今後は、二度とこんな乗車はしたくない。
ともかく、列車に乗り込んだのだから仕事をすませなくてはならないわけだが、ターゲットがどこにいるのかはさっぱり分からない。
それと、今しがた引っ張り落としたＦＳＢの制服を着込んだ奴がいたことから考えると、乗っているＶＩＰとは、ＦＳＢの高官かもしれない。ＦＳＢの高官ともなれば、場合によっては他の権力者にとって打倒すべき政敵であることも、十分考えられる。

連中の権力抗争になどこれっぽっちの興味もない俺だが、仕事である以上は片付けるしかない。それに権力者を始末するなんて機会は、こんな職にでもつかなければ、まず得られるものではない。

ここは、世界中の一庶民にして、連中からしたらただの働き蟻たちの代表として、時に蟻も牙を剥くんだというのを思い知らせてやる。蟻とはいっても、軍隊蟻とよばれる、獰猛な蟻だって存在するわけだから。

もっとも獰猛な軍隊蟻はときに、大型の肉食獣を襲うことすらあるという。軍隊蟻はアリ科の蟻の中でもとりわけ大きく、その数は何十万とも何百万とも言われるほどの蟻が襲ってくるという話だから、襲われでもしたら一たまりもないだろう。

だから一人くらい、権力者という貪欲な肉食獣を襲う蟻がいたっていい……そう考えると、なぜだか舌なめずりしている自分に気がついた。俺は苦笑しながら、かぶりを振った。

状況こそ違えど、これはまるでガキの頃の再現だ。沙弥佳を守ろうとして爆発した小学生の頃を思い出したのだ。

あの時はがき大将とその取り巻きが相手だったが今回は違う。一国の、それも大別して、世界を二分するほどの大国の権力者が相手なのだ。

だというのに俺はどういうわけか、奥底から滲みでてくる暗い愉悦に身を焦がしていたのだ。

俺は滲みでてくる暗い愉悦を振り払うように、まだ開けられたままの扉を思いきり閉めた。別に力をこめたくてこめたわけではない。こうしないと、風に重くなった扉を閉めることができなかっただけだ。

気を鎮めるために一度、大きく深呼吸する。列車の中は外にくらべると、別世界の暖かさだ。また、列車の外壁はとんだお古だというのに、内装はそこからは想像もつかなかったほど高級感溢れるものだった。

どうやらこの車両は食堂車だったようで、円いテーブルの周りに

みっつずつある椅子。テーブルにはきちんと白いテーブルクロスがされていて、それらが等間隔に置かれていた。テーブルの中央には花が彩りを添えている。

赤黒い、上品な絨毯が敷き詰められていて、同じような色を意識した木目の壁もよく見れば、無垢の木でできていた。窓も、枠には金で縁取ってある。いや、ほとんどのインテリアに、ことあるごとに金が縁取ってあったのだ。

ムカつくほどに、まさしく権力者向けといえるほどの内装だった。いや、ムカつくなんてものはもう通りすぎてしまって、素直にすごいと思ってしまった。

しかし、なるほど。こんな列車であれば、そうそう庶民などいれてしまいたくなどないと思うのも無理はない。

しょっているサックから、国境警備隊の連中からちょろまかしたマカロフ拳銃を取り出し、足音は立てずに素早く車両を移動する。もっとも、いくら高級列車とはいっても走行中の振動があるのだから、車両の隔たりもあれば、気付かれることはないだろう。

おそらく、先ほどのＦＳＢの制服をきた奴はたまたま、移動していたときに出入口付近の異変に気付いたといったところだろう。まぁ、男にとっては不運だったとしかいいようがない。

マカロフを構えながら次の後方車両に移動すると、どうもＦＳＢたちの移動中の詰め所ともいえそうな内装の車両にでた。幾人かのコートが座り心地のよさ気なソファーに無造作にかかっている。俺は無造作におかれたコートの数を数え、頷いた。

コートの数は六着。つまり少なくとも今この列車には、運転手とターゲットとなるＦＳＢ将校ふくめ八名はいることになる。もちろん、どこだかで休憩している者がいてもおかしくない。他にも将校の護衛官が二名から三名いるはずなので、しめて二十名は確実にいると考えたほうがいい。

国境付近でＦＳＢ連中からマカロフのマガジンの予備も奪ってあるし、これだけの人数がいれば、武器に不自由することもない。

俺はかかっているコートから自分に合うものを一着とって着込み、さらに後方車両に移動した。お次は連中の荷をまとめた車両だった。

やれやれ、こんな高級列車にこんなにまで乱雑に荷を放りだしているなんて信じられない。乱雑に扱うぶん、それだけ早く物が傷むわけだから、これでは税金が無駄に必要になるに違いない。

もちろん、これは日本だろうとアメリカだろうと同じことなので、いまさら口にすることではないが。

次の車両にきた時、車両を隔てているドアの向こうから人の声がした。耳をすますと、連中が馬鹿笑いしている声だった。

ドアにある小窓から中をうかがう。みんなＦＳＢで、やはり休憩中なのか、かなりラフの恰好になっている。

普通であれば、まだ勤務中なのだからこんな楽はできないはずだが、きっと、自分達しかいないうえにモスクワまでノンストップの列車に、まさか侵入者がいるなどとは夢にも思ってないのだろう。そんな経験も今までないからこそ、あんな態度でいられるのだ。

もしかしたら休憩中であるだけで、今は勤務中ではないとでもいうのだろうか。ＦＳＢともあれば、かの旧ＫＧＢにおける、仕事には忠実であれという教えにも忠実であるはずなのに。

服部からは、旧ＫＧＢの訓練はかなり苛酷だと聞いた。なんせ服部自身、旧ＫＧＢの工作員から直に手ほどきを受けたらしいのだ。そして、その技術は俺に受け継がれたというわけだ。

中の連中の数を数えると六人。今通過した車両にあったコートの持ち主たちに違いない。連中も立場こそ違え同門であるはずだから、最低限の訓練を受けている。なのにこの体たらくだ。

まぁいい。なんにしたって俺には有利な状況だ。見たところ連中は銃を携帯してはいても、そばに置いているだけだった。今の俺なら、連中が引き金に指をそえるまでに五人は片付けられるはずだ。

それでも、緊張はしている。冷静であれば五人はやれる。これは訓練のうえで服部からもお墨付きをもらえたくらいだ。問題は初めての特攻で、きちんと指が、身体が訓練のときみたいに正確に動い

てくれるかだ。
俺はゆっくりと何度か深呼吸した。大丈夫……大丈夫だ。今の俺は連中のコートを着込んでいる。一瞬くらいは油断を与えられるはずだ。国境付近のときのことを思い出せ。俺にならできるはずだ。今までもそうだったのだ、なんとかできるはずだ。
深呼吸するあいだ、そう何度も自分に言い聞かせた。どのみちここまでくれば、なんとかしなければ結果は同じなのだから、後は自分を信じるしかないのだ。
……よし。覚悟はできた。あとはタイミングだけだ。俺は一度だけ軽く頷いて小窓から再度、中を盗み見る。手はいつでも突入できるようドアノブにそえておく。ドアノブは、下にまわせばすぐにでもドアが開くようになっている。
次の瞬間、連中にまた馬鹿笑いが生まれる。
今だ。
俺は呼吸をとめ、一気にドアノブを回して突入した。ドアが開ききる前に引き金を引いた。
まず右側手前の奴の頭が弾けとぶ。さらに続けざまに二射、三射と弾丸が飛んでいき、最初の男の隣にいた二人が同様にぶち倒れる。異変に気付いた向かって左側の男三人が手に銃をとる。いや、とったような気配を察知したというのが正しい。
俺はそれを確認する前にはすでに、連続して二発撃っていた。その銃声は一発にしか聞こえない。
ドアが開ききる。直前にさらにもう一発。これで五人だ。
俺はドアが開ききったと同時に、中になだれ込んだ。
幸いこの車両は、ゆったりとするための娯楽車両になっていて、身を隠すには苦労しないですむ。
最後の一人も仲間がやられたせいか、ほんの二秒三秒前とはくらべものならないほど動きがいい。やはり、向こうもプロということか。
ソファーに身を隠し、向こうもそばにあるビリヤード台の陰に隠

れた。
俺はここでようやく息をはいた。全く、五人やれるかどうかだと不安になっていたのに、杞憂だったようだ。まさか本当に五人やれるとは思いもしなかった。ここは素直に、自分の反射神経に感謝すべきだろう。
ともあれ、このままではいられない。後の一人も早々に片付けなければならない。向こうだって、同様にそう思っているはずなのだ。さて、どうするか……。片付けると一言でいっても、こうなるとなかなかに難しいかもしれない。なんせ、まだ向こうには援軍がいるのだ。もし、すぐ隣の車両にそいつらがいたとしたら、とても厄介になる。向こうとしても、今すぐにでも叫んで仲間を呼びたいに違いない。
ゴクリと生唾を飲む。早くどうにかしなければ……。
俺は一呼吸おいて、ビリヤード台にむかって二発三発と連射し、また身を隠す。
すると今度は向こうがこちらに向かって迎撃する。そんな攻防を二回、三回と続けるうちに俺の肩に、相手の銃弾が弾かれる。
「くっ」
訓練で初めて弾に当たったときは、とんでもない熱さと、じゅくじゅくともずきずきともしれない痛みに悩まされたものだった。
そのせいもあってか今回は、痛みにたいしてさほど苦しめられることはなかった。経験と、現場での緊張感によるためかもしれない。向こうも弾をかすめていった手応え、あるいは感覚ともいっていいものを感じたはずだ。
俺は痛みをこらえ、それでも放さなかった銃をビリヤード台にむける。
男が、弾をかすめた感覚からか台から身をだした瞬間、俺は引き金をひいた。弾は、見事に男の喉元をとらえていた。
どうやら俺は、一人で六人を相手に殲滅することができたらしい。これで後は十四、五人といったところだ。

揺れる列車をさらに後方へと移動した。

今になって気付いたが列車の騒音は思っている以上に少なかった。その変わりにドアをあけ、連結機のあたりにくるとかなりの騒音になる。この調子であれば、後方車両にいる連中には銃声は聞こえていないだろう。

これも今更かもしれないが幸運といえるかもしれない。というのも、俺はサイレンサーもつけずに発砲していたのだ。

全く、こればかりは本当に運が良かった。サイレンサーを携帯しているにもかかわらず、そんなことで敵に感づかれることだけは願い下げだ。

次の車両は誰もいなかった。先ほどの奴が増援を呼ぼうとすることもできたはずなのにしなかったのは、たんに人がいなかったからのようだ。

そんなことを考えながら足早に車両を移動すると、次の車両では今までの車両とは、あきらかに装いが変わった。今までもなかなかに高級感のあるものだったが、この車両はまさしくＶＩＰ向けというのがよく判る、そんな装いだ。

あの船の中で鍛えられた感覚が、ここのあたりにターゲットがいると告げている。無意識のうちにゴクリと生唾を飲んでいた。

先ほどは取りつけ忘れたサイレンサーをしっかりと取りつけ、今までの出入口よりもさらに凝った感のある扉に手をかける。見える限りでは向こうは廊下に二人だ。

今回は一呼吸とおかずにノブを回して素早く扉を開けた。すかさず引き金を一回引き、ほんの少しだけ間を開けて二回目の引き金を引く。

目の前にいた二人が声をあげる間もなく倒れる。二人は、自分に何がおこったのか気付くことすらなかったに違いない。

自分でいうのもなんだが、ずいぶんと冷静に対処できているような気がする。心拍音から呼吸の仕方まで落ち着いていて、これが心

地良い緊張とでもいうのか、ほんのちょっとのことでもすぐにそれに気付くことができているのだ。

しかし、廊下にいる二人が倒されたことで、部屋の中に詰めている連中にも気付かれただろう。それでも俺は憶することなく、先ほどまでと変わらない足取りでターゲットがいると思われる部屋の前まで歩を進めた。

部屋の前まであとほんの一、二メートルのところまできたところで、部屋の中から護衛官らしい男が一人現れた。

大きい。これまでのＦＳＢ連中とくらべ、とても大きく感じる。それもそのはずで、身長は俺よりいくらか大きいだけにすぎないのに、横も奥行きも俺がまるまるすっぽりと収まってしまうのでは、と思えるほど筋肉質な体つきをしていたのだ。眼はまるで、ガラス玉でもはめ込んでいるみたいに感情を感じさせない。

出てきた男はＦＳＢの高官らしく、コートに階級を示すバッジをつけている。階級としては少佐のようで、おそらくこの男が今回の作戦の指揮官である可能性が高い。

「ふん、鼠が忍びこむ可能性があると聞いていたが、この列車に乗り込んでいるとはな。

……だがしかし、まさかこんなひよっ子とは我々も嘗められたものだ」

男は表情ひとつ変えずにいう。あまりに平淡な口調に、雰囲気と見かけもあいまってか、もはやロボットみたいだ。

「あんたがボスみたいだな。悪いがここは通させてもらうぜ」

いうが早いか、男は突然右の拳を思いきり突き出してきた。

俺は半ば予想していたことであったため、拳を後ろに避け、同時に右腕めがけて蹴りを放つ。狙うのは肘だ。

だが男も黙ってはいない。蹴りを予想していたのか、肘を左手できっちりとガードしたのだ。

爪先を掴まれる前に素早く足をひく。今度は左足の蹴りが飛んでくるが、俺はこいつを簡単に避けることができた。

「ほう、俺の初撃をかわすとはなかなかやるな」
ここにきてようやく男は感情らしい感情をみせ、口元をニヤリと歪ませる。
感情をようやくみせた男に対し俺は、なんともいいえぬ嫌悪を感じた。理由は単純だ。この男はおそらく、サディストだと思えてならなかったからだ。
初撃をなどと抜かしているが、こいつは初めから手加減していたに違いないのだ。なぜか。簡単な話だ。手加減が明らかなのは、俺という鼠を少しずつ追い込んで、じわじわといたぶるやり方に他ならない。そうすることで、己の嗜虐感によるエクスタシーを得ようとしているわけだ。全く、へどが出る。
こんな話がある。追い込まれた鼠は時に、猫の鼻面をかじりとるという。だとすれば、俺もこの目の前の巨大で、筋肉質の猫の鼻面を叩き潰してやろうではないか。
男は廊下に転がっている部下の死体を足蹴にし、ボクサーのような軽いステップを刻んで、一気に俺との間合いを詰めてきた。
顔の横を拳がとぶ。それを俺もぎりぎりでかわす。そしてかわした方に奴もステップでまた距離を縮める。
このままではまずい。だんだんとやって来た前方の車両に向かって後退していては、いずれ本当に逃げ場がなくなってしまう。
迎撃したいところだがこうも一方的だとそうもいかない。一瞬でも攻撃の姿勢に入れば、すかさずその瞬間を狙われておしまいだ。
このとき、タンカー内での訓練を思い出した。あれは確か……そう思考する俺の顔面めがけ、再び右の拳が飛んでくる。
俺は半ば無意識に振り下ろされた拳に向かって、すれすれのところでかわしつつ相手の内側、懐に入り込む形になりながら男の反動とこちらの勢いを利用した拳を、脇腹を真横から叩き込む。
叩き込んだ瞬間、ゴリッといった嫌な音がして拳に伝わる。
「ぐぅっ」
今まで攻撃することに関して、圧倒的有利だった男から初めて攻

撃の手が止んだ。そしてすぐに男は俺から一歩、二歩と離れ、俺が打ち込んでやった左の脇腹を左手で押さえている。

愉悦に歪んでいた顔は一変していて、苦痛に耐える顔になっていた。よほど体術には自信があったのだろう、まさか俺にこんなにまで早く反撃されるとは思ってなかったようだ。

それを証明するように、ガラス玉みたいな眼も、信じられないとでもいいたげな目つきだ。

俺はこの機を逃すことなく、もっとも自信のある銃で決着をつけるべく、すかさずマカロフを握りなおした。

奴もそれに一瞬だが早く気付き、腰にある拳銃を取ろうとする。が、銃の腕に自信のある俺だ。奴がグリップを握る前に、俺のマカロフからは弾が発射されていた。

「……う」

そんな呻き声を最期に、男は廊下に倒れた。額には直径一センチほどの大きさの赤い穴ができている。銃弾がＦＳＢ少佐の額をぶち抜いたのだ。

倒れた後頭部からは、血と脳漿をぶちまけている。

そんなものを目の当たりにしていながら俺は、ほんの少しだけ顔の筋肉を引き攣らせただけで、気分はなおも、落ち着いたままであった。

第６８章

幾度となく深呼吸を繰り返していた。

たった今の今まで、ＦＳＢ部隊のボスだった男とやり合ったばかりのためだった。

数回の深呼吸のあと、俺は廊下にできあがった三つの死体をよけて通って、ようやくターゲットのいるらしい部屋にたどり着くことができた。

俺は一度、閉じられたドアについている小窓から部屋の中を探ってみたところ、中では実に奇妙なことになっているのが判った。なんと、すでにターゲットらしいＦＳＢの将校がくたばっていたのだ。

全くわけのわからない状況になっている。俺は警戒しながらドアを開けた。

ドアを開けて中に入って将校の男を確かめる。だが確認するまでもなく、ターゲットだった将校はすでに死体になっているのはわかる。今しがた倒してやった少佐と同様、この死体にもぽっかりと額に穴が開いているためだ。

うつろな眼差しでどこかを見ている死体は、口髭をたくわえ、まさしく一国のトップ局員といった服装と雰囲気を感じさせる。

いや、感じさせていたというのが正確なところだろう。もう息はしていないのだ。死体に歩みよろうとした瞬間、背後に何か気配を感じた俺は銃をそちらに構えながら、素早く振り向いた。

振り向いた先には、一人の男がそこにいた。なりや雰囲気を含めその男こそ、この政司局員をただの肉塊に変えた張本人に間違いない。

意外だったのは、男が俺と同じ、東洋人らしいということだった。精悍で、わりと整った顔立ちをしている。らしいというのは、東洋人というにはどこかイメージからは遠い顔立ちをしているのだ。

いうならば東洋人と白人のハーフ、いや、もっと近くてクォーター、そんな感じだ。まだ若いようだが、なんとなく二十代半ばか後半のようにも見えなくもない。

部屋の窓は割られていている。当然、この男が外から室内に侵入した際にできたのだ。豪奢なＶＩＰ用の室内に、たくさんのガラスが散らばっていることからも、それは明白だ。

廊下で部隊のボスとやり合っていたのは、せいぜい、ほんの二分かそこらだ。この男が将校をやったのは間違いないことだが、問題は部隊のボスが部屋から出て、俺が部屋に入るまでの二分かそこらの時間で、部屋に押し入って驚く将校を始末するまでの手際のよさだ。

それだけのことだが、そこから目の前の男が工作員として、相当な腕前であることが予想できる。

「何者だ」

俺は銃を構えたまま低い声で叫ぶ。当然のことだ。ターゲットが死体に変わっていたのだから中を警戒するのは当たり前であったにもかかわらず、男はそこに留まったままなのだ。

「……おまえが九鬼か」

同業者としてか、男はなかなかにいい度胸をしている。俺はぴったりと相手の心臓をとらえていて、何かあれば瞬きするほどの時間のあとには死体に変えてやることができるのに、全く動じる気配すらないのだ。

「だとしたらどうだっていうんだ」

銃口を向けているのはこちらの方だというのに、男はいたって冷静で、思わずこっちが叫んでしまった。

なにより、初対面だというのになんでこの男は俺の名を知っている。まさか、もう俺の顔写真がＦＳＢの連中に知れ渡ったとでもいうのだろうか。

あるいは、他の対組織でもいい。この場合は後者の可能性のほうが高いかもしれない。もし男がＦＳＢだとすれば、自分の上司ない

し組織での幹部を殺すなど考えにくい。
「そう構える必要はない。別に俺はおまえの敵じゃない」
「敵じゃないだって」
続けて、じゃあ味方だといいたいのかと叫ぼうとした時、部屋の外から叫び声とともに、この部屋に向かって走ってくる音がしたのだ。
「こっちもやられてるぞ」
そんな声がした直後、開いたままになっていた扉にＦＳＢの制服を着た二人が顔を覗かせた瞬間、その二人は胸を銃弾で貫かれて倒れた。
俺は現れた二人のうちの手前のやつしか狙っていない。つまり、もう一人は部屋にいた男が撃ったことになる。男のほうを見れば、何も持っていなかったはずの右手に、俺と同じマカロフがあった。
「あんた……」
そうつぶやくと、男は静かに肩をすくめて言った。
「これで少なくとも、今は君と敵対するわけにはいかなくなったな。俺もここからはうまく脱出しなくてはならないんだ。
どうだ。ここは一つ、脱出するまでは協戦にしないか。敵はあと、ざっと計算しても五十人からは乗っているからな」
「五十人も……」
俺が軽く計算したときは二十人はいるとは思っていたが、さすがに一人であと五十人を相手にできる自信はない。どうやら、ＦＳＢはよほど重要なものを運んでいたらしい。
そう考えて、チラリと将校の死体に目をやった。どんな理由なのかは知らないが、殺されなくてはならないほどの重要人物だ。もしかすると、五十人、いや、もう今の二人もいれて六十人からの兵士が護衛しなければならないほどの人物だった可能性もある。
日本人の感覚からするとあまり信じられないかもしれないが、欧米ではしばしば政府の重要人物が死ぬことがある。当然、それらは全てといっていいほど暗殺者の手によってだ。殺されたとは一般に

は公表されず、事故という形で処理されるのだ。
　一年くらい前までの俺なら、そういった情報は全て鵜呑みにしていた。今となっては、その最前線に送り込まれた身である以上、それらの事件に何かしら裏があったのだと見るようになったが。
　ともかくだ。まだ最後の訓練中である身としては、今ここで死ぬわけにもいかない。
「分かった。あんたが何者かは知らんが、ここは協定を結んだほうが良さそうだ」
　俺は男の提案に頷いた。
「決まりだな」
　提案を飲んだ俺に、男が薄く笑っていう。
「それで脱出はどうするんだ。話じゃぁ、この列車は終点のモスクワまでノンストップだ。まさか、そうなる前に飛び降りるとかいうんじゃぁないだろうな」
「安心するといい。きちんと脱出プランはあるさ。もちろん列車より、モスクワまで早く着くことができる。なんだったら君も一緒に来ればいい」
　魅力的な提案だ。列車よりも早くモスクワに着けるなんて思いもしなかった。ずっとこの列車に乗っていても、モスクワに着くまでに途中下車しろなどと、なんとも無茶苦茶な指令が書かれていたのを思い出した。
「よし。俺についてくるんだ」
　男は言葉のあとにすぐに部屋から出た。俺もそれに続く。
　暗い赤の絨毯の廊下には合計で五つの死体が転がっている。うち四つは俺の手によるものだ。
　全く、自分がまさか人殺しになるなんて、去年まで想像すらしなかったことだ。そして、昨日今日で初めてであったのに、すでに感覚としては当たり前のように馴染んでしまっていることのほうが、俺としては驚いているほどだ。

男と二人で、一丸になって後方車両へ向かって走る。男の話では最後尾の車両まで行くという。さらには、乗り込むときはもっと後ろの方かとも思ったがターゲットのいた車両は、後方ではあったがまだ中腹といったあたりに位置していたらしい。

各車両には二人から三人の人員が配置されていて、一人一人はそう大したものでもなかった。思えば、昨日は国境で四人、今日も乗り込んで始めに遭遇した連中も六人だった。

いきなりここまでの複数を相手にしてしまうと、感覚が麻痺するのかもしれない。それに俺にとっては、今回が初めての経験だ。こんなことが普通なのかどうかなんて知りえるはずもない。

「とまれ。どうもここが最後の難関らしい」

そういう男は、親指で扉についている窓から車両の中を指差した。そっと見てみれば、言う通り確かに難関かもしれない。中には九人もの男達がいたのだ。まだ俺達が扉の前にいることには気付いてないようだが、連中は全員が武装している。

「九人か。なんとかできなくもない、といったところだな」

俺がつぶやくと、男が笑った。

「君はとんだ馬鹿なのか、それとも相当な自信家なのか」

「どちらでもないぜ。だが、なんとかしないといけないのは変わらないんだ、援護してくれ」

どちらとも知れずに息を合わせ、ドアノブに手をかける。

「待て。こいつを使おう」

踏み込もうとしたとき、男がポケットから何かを取り出した。タバコの箱程度の大きさのそれのスイッチを押して鋭くいう。

「目をつぶれ」

即座にそれがなんであるかを理解した俺は、中から顔を背けて扉の陰に隠れる。

男が扉を素早く開けて、黒い箱のようなものを連中に向かって投げる。次の瞬間、車内で閃光がほとばしった。

男が取り出したのは、閃光弾だったのだ。中から何か叫び声があ

がる。
「今だ」
男の声で俺は扉を蹴破って中に突入し、目前の男二人に向かって発砲した。
続いてその右隣にいる男の胸にも赤い血が散った。
すぐさま身を伏せて近くの物陰に身をひそめると、直後に背後から銃声が二回。男が発砲したのだ。
「これで後は四人だ」
通路を挟んで反対側の物陰に隠れた男が叫ぶ。
俺は大きく頷いて、陰から右手と右半分だけ顔を出して連中に二度撃ち込んだ。一発は外れ、もう一発は一人の左足に命中する。
足を負傷した奴が鋭く叫んで陰に隠れた。怪我をしつつも、少しでも身を護ろうとする姿勢はなかなかの心掛けだ。
今度は反対側にひそむ男が、連中に向かって発砲した。
ひどく醜い声があがって、短く連射音がする。こちらに向かって反撃しようと身をだしたところを、男に撃たれたのだろう。
その隙に俺は陰から出て、少し先にあるソファーの横に移動した。ここからなら、連中のうちの一人が出てきたときよく見えそうなのだ。
さぁ、早く姿をあらわすんだ。その瞬間、俺の弾丸でぶち抜いてやる。
いったん両者の撃ち合いがやんだ。いやな空気が流れていく。
俺は銃撃が止んでからも、隠れている一人のいる場所に銃口を向けたままだ。緊張から気付けば、握っているグリップに汗が滲んでしまっている。大丈夫とは思うが滑らないか心配になってしまった。
たいして時間は流れていないはずなのに、妙に時間の経過が遅く感じた。口の中はカラカラに渇いていて、なぜだか鼓動の音が大きく聞こえた。
その時、銃を向けていた辺りから影が動いた。そこに向けたままの銃口から、一発の弾丸が発砲されて影にぶち当たる。

それを皮切りに再び俺の後方から、二発の銃声があがって止んだ。
静まり返った車内には列車の走行する音と、揺れて車体の金属がきしむ音だけが響いている。
背後に人がきた気配を感じた。男がやってきたのだ。
「なかなか良い腕をしてるな」
顔をあげて男を見ると、九人もいた車内の静けさになにを思っているのか、どこか遠い目をして、俺達以外誰も動かなくなった車内を見回している。
「そういうあんたこそ、すごい腕してるじゃないか。これまでのところ、百発百中だ」
そうなのだ。この男が全ての敵をみんな一発で沈めてきていることは、決して並大抵のことではない。一人につき一発。これをほぼ正確にこなしているのだ。
「射撃は結構得意なんだ。だが、君のように一瞬で二発も三発も撃てないがね」
車内は何十発もの弾丸が飛び交ったせいもあって、硝煙の匂いがたちこめていた。俺はそうかい、といいながら肩をすくめ立ち上がる。
次の車両へ移動を始めた矢先、死体のすぐ横にまだ一人、息があるものがいた。顔面を蒼白とさせて、足からはとめどなく出血が続いている。そのせいか、眼窩がこころなしかくぼんで見える。
俺が足に当てて、陰に引っ込んだ奴にちがいない。
「出血がひどいな。多分、うちももにある動脈を傷つけられたんだろう」
男が説明する。確かに想像以上の出血で、辺りには血の池ができている。もちろん心臓が動き続けるあいだ、出血は続くのだから当然ではある。ましてや、動脈を傷つけられているのだ。
いや、傷つけられた程度ではここまでの出血はしない。完全に、動脈をぶち切ってしまっているはずだ。そうでもなければ、ここまでの出血はないだろう。

自分で招いたこととはいえ、こんなのを見せ付けられるとさすがの俺も気分が良くない。だというのに男は、倒れている奴にとどめをさせと促してきた。

「別にいいだろう。もう、こいつは助からないはずだ。だったら、わざわざとどめをさす必要はないはずだ」

俺は男にたいして苦い顔で睨み返した。

「確かにそうだ。しかし、この男が何かしら、こちらに不利になるようなダイイングメッセージを遺さないとも限らない」

この世界の道理として、男の理論はもちろん正しい。俺とてそう思う。だが、もうほうっておいても死ぬのは確実という奴に、俺はどうにも引き金を引く気にはなれない。

そう思って戸惑う俺に、男は倒れてもう意識もまともになさそうな男に対して、無言で銃口を向けた。俺がそういうのなら、自分でやるということだろう。

俺には止める権利などない。今一度いうが男の言い分は、俺達の世界ではこうすることが当たり前のことなのだ。教官だった服部もやはり、同じことをいっていた。

乾いた音が車内に短く響く。そして再び車内は、列車の走行音と金属のきしむ音だけになった。

「……君は優秀なやつだが、詰めが甘いな。こんなことでは、いずれ死んでしまうぞ」

「……かもな」

俺は男の言葉に肩をすくめて、ぶっきらぼうに一言そういうだけしかできなかった。

「行こう」

そんな俺をどう思ったのか知らないが、男はまた車両を移動し始めた。俺は物言わなくなった死体を一瞥し、ため息をついた。そろそろ、列車の最後尾にきていてもおかしくないはずだ。

俺に先行する男を追って車両を移動すると、車両の雰囲気が今ま

でと変わって感じた。
今までであれば、扉から車内に入ってまっすぐ目をやると視線の先に扉の小窓から隣の車両が見えたのだが、今回はそうではなかった。向こうにはただ暗闇があるだけだ。ようやく最後尾にまで来たのだ。
俺が車内に入ったのと入れ違いに、男が先の扉を出たところだった。俺も男を追って足早に移動する。
「ここからどうするんだ」
車内から出た俺が、一足早く出ていた男にむかって叫ぶ。走行音と風をきる音が大きくて、普段の声量では相手には聞こえないのだ。
外はすでに真っ暗で、列車から漏れる光によって、線路周りの雪が反射して輝いている。
「今から屋根にあがる」
男が短くいう。俺が反問する前に男は、横に取り付けられている出入り口を開けて、外に出ようとしていた。
俺が乗り込む時に行った逆の行程をして、起用に屋根にあがっていく。男があがりきり、見えていた足が出入り口の上、外側に消えていった。
「くそ、またこいつをやらないといけないのか」
乗るときもそうであれば、降りるときもやはり同様に危険が孕んでいた。全く、降りる時くらいは普通に降りたかった。
内心で毒づきはするが、しのごのいっていられる状況ではない。意を決して、男に続いて出入り口から顔を出して、男が消えた上のほうを見る。
なるほど。うまくすれば、上に上がれそうな作りになっている。屋根には手がかけられやすそうになっている出っ張りがあり、扉も風の影響で勝手に閉まることもない。後は自分のやり方次第といったところだろう。
まずドアノブに左足をかけ、反動をつけて一気に屋根の出っ張りを掴んだ。懸垂の要領で身体を持ち上げていき、肩が屋根の出っ張

りよりも高くなったところで、右足を大きく振って出っ張りにまでやった。

今度は左手を逆手に出っ張りを掴み、同様に右手も逆手にする。後は再び、出っ張りにかけた右足と両手の力で身体を持ち上げていき、屋根にあがることができた。

「こんな、途中、下車もっ、二度と、ごめんだっ」

息が荒くなってしまっているために、言葉もとぎれとぎれになってしまった。屋根にあがると、その風圧に身体がよろめいて落ちそうになる。

一瞬、全身から血の気が引きそうになったとき、俺の襟首が掴まれた。見上げると、男がしっかりと俺の襟首を掴んでくれていた。

「気をつけろ。もう少しの辛抱だ」

男が叫ぶ。俺はただ頷くばかりで、何も言葉にはできなかった。さすがに今のは冷や汗をかいてしまった。

しかし、大勢の敵を相手にするときはそうでもなかったくせに、こんなときに冷や汗をかくなんて、我ながらおかしな話だ。そう思うと、思わず苦笑してしまう。

「なんだ。こんな状況で笑うなんて、やはり君は普通じゃないな」

「いや、なんだか自分がおかしなことになってると思うとな。それに、そういうあんたも笑ってるぜ」

俺が指摘すると、男は一瞬だけ真顔なったあと、再びふっと笑った。張り詰めていた緊張から解放されて、柔らかいものごしをした笑顔だった。

「君にあてられたのかもな」

一言だけそういい、男は掴んでいる襟首を一気に引き上げた。

「ここからあと数分のところに、急カーブする箇所がある。そこにきたら、ここから飛び降りるんだ」

「飛び降りるだって」

何を馬鹿なことをと言おうしたところ、すかさず男が口を開く。

「急カーブになるため速度が落ちるんだ。そこで俺の仲間が待機し

ている」

「なるほどな。だから最後尾まできたってわけか」

俺が男の作戦を聞いて力強く頷く。飛び降りるにしたって、危険のある中腹よりも最後尾で飛び降りたほうが無駄な力を使う必要もなく、列車の動く力を利用して飛びこめるというものだ。

相当に用意周到だったようで、男に続けざまに言われた俺は、ただだまって頷く以外になかった。まぁ、いい。そういうのであれば、俺も付き合うしかない。

どのみち、モスクワに着く前に途中下車しなくてはならなかったのだから、これはこれで悪い条件じゃない。モスクワまでの足は、他で調達すればいいだけの話だ。

俺は、屋根の上で中腰になって列車の先頭付近を見つめていると、男のいう急カーブの地点にきているのがわかった。気付けば、列車の速度も落ち始めている。吹きつける風の勢いも、少しずつおさまりかけていた。

「そろそろだ。心の準備はしておいてくれ」

「大丈夫だ。いつでもいける」

互いに頷きあい、緊張した面持ちでカーブの辺りを待っていると、下が騒がしくなってきているのに気がついた。今までは風をきる音で気がつかなかっただけかもしれないが。

「どうやら残りの連中も気がついたらしい」

男が言い終えるのと同時に、すぐ下、つまり俺達の真下に連中が走ってきている音がした。

俺達は黙って息をひそめる。ほんのわずかな音も、もしかすると下に響かないとも限らない。車内は、外からの音はシャットダウンしているが、そのぶん直に響く音はすぐに気付かれてしまうかもしれないのだ。

生唾を飲み込んで、連中が気付かないことを祈るばかりだ。いや、気付かれるのも時間の問題だろう。なぜなら、ここまで上がるさい、列車の扉を開けっ放しなのだ。気付かないはずがない。

開けっ放しの扉のおかげでここまでこれたのだから、それを責めることはできないがとにかく、少しでも時間を稼ぐ必要はある。
俺は、あがってきた辺りを睨んでいると、男が肩に手をおいた。見上げれば、立てと合図している。どうも脱出ポイントまできたらしい。列車はカーブを曲がろうと、さらにスピードが落ちる。
「同時に跳ぶんだ、いいなっ」
男が叫ぶ。
頷くと同時に、下で連中が騒ぐのが聞こえた。男が叫んだのが聞こえたのかもしれない。
「後もう少しだ、後少し……今だっ」
男は叫んだと同時に列車の屋根を蹴る。俺も続いて屋根を蹴って、下が暗闇で見えない空中へ向かって飛び降りた。
「くっ」
半ば釣られる形で跳んだだけに、いざ身体が中空を落ちていくと少しばかり後悔がある。下が見えないというだけでこんなにも竦み上がるものなのかと、そして、そんなところに飛び降りて、本当に助かるのかという後悔だ。
身体が逆さまになろうとしていたとき、どさりと妙な感触がして落ちた。不思議な感覚に、俺はすぐさま体勢を整えようとするが、地面がぶよぶよと動いてうまく姿勢を保てない。
「行ったようだ」
ぶよぶよとした地面の感覚に、なんの疑問も持たない男が横で、上を見上げながらぽつりとつぶやいた。
男の視線を追って俺も上を見上げると、列車は急カーブを越えてそのまま走り去っていった。音から察するに、止まる気配はないようだ。
「それよりなんなんだ、この地面は」
気が動転していたのか、俺は小さくわめき立てた。手を使ってぶよぶよする地面に力を加え、揺らす。そうすると、余計に地面が揺れた。

「簡単なことだ。ただのクッションさ」
わめく俺に男は、雪の下に隠れたクッションに力を加えて撥ねさせながら、冷静に答えた。白い雪の下に隠れて見えなかったが、言われたように確かにクッションのようだ。撥ねて、雪がぽろぽろと落ちていく。
「おい、早くしろっ」
男とのやり取りを中断するように、後ろの暗闇から新たに男の声がする。非常に低く、野太い声だ。俺は思わず声のしたほうに、しまっていた銃を一瞬で掴み銃口を向けた。
「待て。やつは仲間だ」
制止する声に、俺は銃口をさげた。しかし、いくら仲間だといっても、俺にとってはただ利害が一致して行動をともにしただけであって、まだこの男達を信用しているわけではない。そのため、俺は銃はまだ握ったままにしておく。
「早く、そいつをしまえ。さっさとずらかるぜ」
暗闇から出てきた男は、身長はニメートルに届きそうなほど大柄な黒人の男だった。イメージに違わず、ずいぶんとマッチョな体型をしている。
「とにかく、証拠は残したくない。このクッションをしまうから手伝ってくれ」
男が俺に向かっていう。黙って首を縦に振って、クッションをおりようとする。今気付いたがこのクッション、かなりの大きさがあり縦も幅もはゆうに十メートル以上はある。いや、二十メートルはあるかもしれない。とにかく、かなりの大きさだ。おまけに雪に紛らわせるためか、色も白かった。
クッションは単純に空気をいれて膨らませてあるだけのものだが、ここまでの大きさに膨らませるのには、かなりの時間がかかるのではないかと予想できる。となると、仕舞うのもまた然りだ。
すると、新たに現れた男がクッションから空気を抜き始めた。俺達は急いで巨大なクッションからおりる。巨大に膨らんでいたはず

のクッションは、目の前でみるみるうちにしぼんでいく。
「このクッションは便利にできていてね。ボタン一つで膨らますこともできるし、中の空気を抜くこともできるんだ。ただし、欠点を一つついうと」
「一回きりしか使えねえってことさ」
男の言葉を引き取って、黒人の男がいう。なるほど。確かにそれは大きな欠点かもしれない。
「ボタン一つでって、どんな仕組みなんだ」
「今この場にはないが、このクッション専用の空気入れみたいなものがあるんだ。そいつをボタンのある装置に取り付ければ、後はすぐに出来上がる。判りやすくいえば、圧縮された空気を一気にクッションの中に送りこんで膨らませるんだ。
小型のものであれば、クッションそのものにも取り付けられてあるものも、すでに我々の世界では実用化されている」
「なるほどな。しかし、こんな巨大なものを一瞬にして膨らませる機械なんて、使い方次第じゃぁ、兵器としても応用できるんじゃないのか？」
俺が嫌味っぽくいうと、男はニヤリとして続けた。
「もちろんさ。むしろそいつは、爆弾の爆発の要領を応用したものなんだ」
……どうも俺が思っている以上に、この世界の技術は進歩していたようだ。
「おい、話すのはあとにして手伝ってくれ」
黒人の俺がしぼんだクッションをしまおうとしている。
「わかった。さあ、君も手伝ってくれ」
俺は肩をすくめて、クッションをしまうのを手伝うことにした。

上空から見るモスクワの街は、思っている以上に近代化されニュ

ータウンのほうは、東京にも負けないんではないかというほどの高層ビルが立ち並んでいる。さすがはヨーロッパ第三位の都市だと関心した。

俺がモスクワの街並みを感慨深げに眺めていると、パイロットがそろそろ降下すると叫ぶ。俺達は今、ヘリコプターに乗っていた。高速に回転するローター音は大きく、普段の声の大きさでは何を言っているのか分からないのだ。

パイロットの声に俺は大きく頷き、隣の男は大声でわかったと叫んだ。男が、今まで外を眺めていた俺に大声でいう。

「そろそろだ、準備しよう」

「どこに降りるんだ」

俺がそう叫ぶと男は、ある一点を指差していう。

「あのニュータウンの一画に、我々組織が管理しているビルがある。そこの屋上だ」

大声に負けない、力強い頷きで返した。つまり、そろそろ俺の最終訓練も終わりを迎えるというわけだ。

結局、ここまで素性の知れない男と行動をともにし、モスクワにまでたどり着いたのだ。しかし、移動手段は特に何か言われたわけではないから、これはこれで構わないはずだ。

俺達は列車から脱出したのち、男の仲間が待機していた地点から車でヘリまで、暗い森のなかを移動した。全体を白に塗った４ＷＤで、あれだけ大きかったクッションも、楽々積み込むことができた。

その４ＷＤで移動すること約十五分。ヘリのある地点まで移動し、そのヘリに乗り込んで一旦、サンクトペテルブルグ・モスクワ間にあるヘリポートまで移動した。そして、そこに待機していたヘリに乗り込んでようやく、モスクワにまで着けたというわけだ。

ちなみに黒人の男とは、そのヘリポートで別れることになった。黒人男の仕事はどうも、男を回収し、ヘリコプターのある地点まで送ることだったらしい。

その間、最初のヘリの移動に約三時間。その後、待機していたヘ

リに乗り込んで、次の中継地点にいくまでが約二時間半。そこでは燃料の補給と、ここまでのあいだ、ほとんどゆっくりと寝ることのなかった俺に休息するよう言われて、約六時間ほどの休息時間がもうけられた。

そして、起きて軽い朝食をすませたあと、ようやく最後のモスクワまでの行程を、一気にヘリできたことになる。列車に乗り込んでからここまで、約十五時間といったところだ。もう残り時間は二時間をきっている。

男が指差したビルの屋上にヘリを降下させ、飛び出すようにヘリからでて、急ぎビルを降りていく。

俺は早く赤の広場にまで行かなくてはならない。というのも赤の広場が終着地にしたって、そこにいる人物に会わなくてはならないというのだ。

おまけにその人物のことは、なに一つ知らされていないときた。となると必然的に、足も速くなるというものだ。

そんな俺に付き合う必要もないはずだろうが、男も俺に付き合うといって、一緒に赤の広場まで行くことになった。どうも、俺とこの男の目的は同じである可能性が高い。

一緒に行動していて分かったが、どうやらこの男は、俺と同じ組織の工作員であるらしいということだ。そうでもなければ、俺が片付けるべきターゲットを始末する必要もなかったろうし、いつまでも俺に付き合う必要もない。

昨晩の作戦はもしかすると、準備の用意周到さから考えても、本当はこの男が指令を受けたエージェントだったと見るのが自然だ。

俺の腕をみるために列車に乗せ、もう一方で別のエージェントを、保険として列車に送り込む。これを立案した奴は、なかなかに頭が切れるようだ。そして、その人物こそ、俺が会わなくてはならない人間なんだろう。

高さが百五十メートルは確実にあるビルを、エレベーターのあるところまで階段を使って駆け降りていく。

モスクワに来る前の休息地点で、俺は着替えを渡されて一般的なモスクワ市民の服に着替えるよう言われていた。ヨーロッパ上陸時の服はボロボロになってしまっているので、俺としてもありがたいことだった。

向こうとしては、たんにビルから抜けたあと、たった一日二日で薄汚れてボロボロになった服をしたアジア系の男がいれば、すぐに不審に思われるからだろうが。まぁ、なんにしてもこんな街中で列車で手に入れた、ＦＳＢの制服を着込んだままでいるわけにはいかないのは確かだ。

いくらここが組織の所有しているビルとはいっても、中に入っている企業はそんなこと何も知らない普通の企業なのだ。

エレベーターのある階までおりた俺達は、何食わぬ顔でエレベーターホールまで突っ切っていき、降下ボタンを押した。ちょうどよく少し下の階に停まっていたエレベーターが、ほどなくして到着した。

一階のボタンを押すと、エレベーターが下にさがり始める。昔、旧ソ連時代のエレベーターなんかは、なかなかにおんぼろで、乗り降りするのに時間がかかっという話を教官の服部がいっていたが、近年のロシアの近代化は、そういったことはもはや一昔前と言っていいほどになっているようだ。

そんなことが、このエレベーターの降下速度からなんとなくだがうかがえる。まぁ、そんなのも世界中で暗躍している、同業の先輩であるスパイどものおかげでもあるというのも、この世界に身を置いて実感できた。

「着いたぞ」

男の声に頷き、扉が開いたと同時に足早にエレベーターを降りて、ロビーへ移動する。スーツしか着ていない人々の中を、私服を着込んだアジア系の顔をした男二人が突っ切っていくと、幾人かが、不思議そうな顔つきでこちらを見ていたのが分かった。

「気にするな、大丈夫だ。多分、私服を着ていることに不思議がっ

ているだけさ」
なんとなく男もその視線に気付いたのか、そんなことを言ってきた。俺はただ肩をすくめるだけで、何も言わなかった。

赤の広場は、思っている以上に閑散としたところだった。メディアからのイメージでもそれなりに人はいても、決して多いわけではないのは知っていたが、思っていた以上に人がいない。
今がたんに時間的にそうなだけなのか、やはり見た目通りなのか判断しかねるところではあるが。
俺はＧＰＳを使ってで時間の確認をすると、残り時間はもう後数分しかない。
「どうやら、時間ぎりぎりで間に合ったみたいだな」
隣にいる男が、遠くを見てつぶやいた。男の視線をおったところ、その先には俺の見知った顔の人物が悠然とした足どりで、こちらに向かってきていた。
「あいつは……真紀、なのか」
「ああ、藤原真紀。一応、君の上司ということになるらしい」
「上司だって？　あの女が？」
俺は驚いて男のほうを振り向いた。どうやら、もう配属先もすでに決まっているらしい。しかも、よりによってあの女狐が上司になるなんて……。
俺はこれから先、何かと思いやられそうな予感がしてならず、思わずため息が出た。
「ふふ、彼女はまだ若いがやり手だ。お小言をいわれないように気をつけた方がいい」
人ごとだと思って、男が茶化すように笑う。
「時間通りね、二人とも」
「久しぶりだな、真紀」
「ええ、久しぶりね。あなたの活躍ぶりは聞いているわ」
どうやら、真紀と男は知り合いだったらしい。二人は、どちらか

らでもなく握手を交わした。握手がとかれたあと、真紀が俺のほうを見ていった。

「あなたも久しぶりね。しばらく見ない間に、ずいぶんと印象が変わったわ」

「変わっただって？　俺がか」

「ええ。半年ほど前までとは比べものにならないくらい鋭い顔つきになったわ」

「……そうかい。それで？　俺は最終訓練に合格なのか」

とりあえず必要なのかわからないが、サンクトペテルブルグで出会ったドミトリー・ボーリンから貰った紙を、真紀に半ば投げるように渡した。

真紀はその紙を見たあと、男のほうを見た。

「どうだった？　あなたから見て彼の働きは」

「技術、行動力、頭の回転、どれをとっても問題はないだろう。なにより、作戦中における冷静さは、かなりのものだと思っていい」

「おい、どういうことなんだ」

真紀と男のやり取りを中断させ、会話に割って入った。

「つまり彼は、あなたの行動を見るために私が使いに出したってわけよ」

「嘘つけ、それだけじゃぁないだろう。あの列車の作戦、もし失敗したときの保険をかけたな」

「あら、気付いていたの。確かに頭の回転も悪くないわね」

ああいえばこういうとは、まさしく、こんなことを言うのだろう。

真紀は平然とした態度で、淡々としたものだ。

何がおかしいのか、男は俺と真紀のやり取りを黙って眺めて、薄ら笑いを浮かべている。

「ともかく、現場の第一線のエージェントがいうなら、あなたは文句なしの合格よ。おめでとう」

まだ色々といいたいことはあるが、よく考えてみれば、別に俺をはめようとしたわけではない。いちいち真紀に突っ掛かる必要はな

いのに、なんでか、この女のやることなすことには、何か言っておかないと気が済まない。
「さて。作戦も終了だ。俺はここでお暇させてもらう」
俺と真紀のやり取りに一区切りついたとき、男がそういって背を向けた。
「待ちな。そういえば、あんたの名前をまだ聞いてなかったな。俺の名前は知っていたようだが、こっちがあんたの名前を知らないのはフェアじゃぁないぜ」
「別に隠すつもりもなかったさ。単に君が聞かなかっただけだからな。
まぁ、いい。俺の名は田神だ。君と同じ、組織の工作員をしている。現在は、主にヨーロッパを中心に動いている」
それだけいうと初めて会った時同様に、気配を感じさせることなく颯爽と俺の前から消えていった。
「田神、か……。なんだか、不思議な男だな」
「ええ。彼は他のエージェントからも一目置かれた、一流のエージェントなのよ。彼の素性はよく分かってないけどね」
「分かってない？」
「そう。ある日、突然私たちの前に姿を現して、仲間になることを志願してきたらしいのよ。
上も使えるのならということで置いているけど、どういうわけか経歴を一切無くしてるみたいで、どんなネットワークにも引っ掛からないの。言うなら、彼は透明人間みたいなものね」
「透明人間……」
田神の消えたほうを見たまま、俺は力無く答えた。確かにそれはおかしな話だが、データだけが全てではない。少なくとも俺は、あの田神という男のことを悪い奴だとは思えなかったことに間違いはない。
こうして何か納得がいかないような、むず痒い気分のまま、俺は最終訓練を終えたのだった。

東ヨーロッパを、西ヨーロッパへと向かう国際鉄道の列車の窓から、流れていく景色を眺めていた。
食堂車両で、ヨーロッパの雄大な景色を眺めながらの食事は、なかなかに気分のいいものだった。
食事を終え、食後のワインに舌鼓をうつというのがより優雅に過ごすためのものなのかもしれないが、アルコールの味なんて大してわかりもしない俺には、どうでも良いといえばどうでも良いものではあった。
しかし目の前の女は違うらしく、目をつぶって一口二口と、ゆっくりワインを口に含ませている。
「で、いい加減、話をしてもらってもいいかな」
目の前の女――藤原真紀に話しかけた。
「……ん。そうね」
本当にじっくりと味わうように、口の中のワインを飲み干した真紀は、小さく何度も頷いている。俺にはわからないが、わりと良いワインだったのかもしれない。
「それで、どこまで話したかしらね」
「あの女がどうなったか、だ」
「ああ、そうだったわね」
あの女とは、香織を名乗る女のことだ。俺がこの世界に入る、直接的な原因にもなった女で、はじめはネット上にｋａｏｌというハンドルネームで、その存在を知った女だった。
「彼女は監禁されているわ。シベリアにね」
「シベリア……」
あんな荒涼地獄ともいうべき土地に監禁されるなど、もはや生きてこの世に出られることなどできないのではないか。そんな予感をさせるような土地なのだ、シベリアという地域は。

彼女は、組織反逆罪という罪でそこに送られた。俺が組織に入る前にあった、真紀たちと香織たちの派閥争いで、たまたま俺はそこに首を突っ込んでしまうことになった。

そして真紀達が香織達のアジトに踏み込むさい、首を突っ込んだために捕われの身になった俺は、突入した真紀と鉢合わせする結果になった。

この二つの派閥による争いは、最終的に、真紀側の勝利だったというわけだ。

ちなみに俺が香織側に捕らえられたのは、真紀が俺を勧誘しようとしているのをあらかじめ知っていたためらしい。敵対している連中が手元に引き寄せようとしている人間ならば、香織達にとってこの上ない、脅迫材料にもなるかもしれないと考えてのことだったそうだ。

真紀たちが欲しがっているのなら、手元においておきさえすれば、あとはどうとでもなるというものだ。もし邪魔になれば、始末すればいいだけの話なのだ。

あるいは、本気で仲間にしていることも考えていただろう。事実、香織は俺を仲間に引き入れようとしていたことを思い出す。

それと、今井の話も聞くことができた。

今井は元々、組織のエージェントだったらしい。それが、奴は組織にたいしてなんらかの不満を持っていたらしく、他のエージェントを殺害し行方をくらましたのだという。

今井は組織を抜ける当初、ヨーロッパを主に活動拠点においていたようで、抜けたあとの後継として現在は、田神がそのポジションについているということになる。

もちろん他にもエージェントはヨーロッパに存在しているが、やはり外国人だからこそのメリットもあるのだろう。

今井は、組織の張った罠を巧妙にかい潜って、再び日本に戻ってきた。その直後に、奴はK県にあった製薬会社のトラックを襲撃し、中から例のカメラなど、いくつかの重要なものを盗みだした。

青山から聞いた、警察が来る前に到着した不審な人間達は、組織の調査員達だったらしい。

まだある。今井は組織を抜ける前まで、工作という仕事柄、大金を稼いでいた。直前に、必要があるからと組織の力を使って自分を死んだものにしたらしく、稼いだ大金で蒲生から戸籍を買ったのだ。

いや、正確には蒲生の戸籍を質に入れたようなもの、といった方がいい。今井は必要がなくなれば、蒲生に戸籍を戻すとでもいい包めたにちがいない。また、蒲生が金にがめついた性格をしていたのも、今井が蒲生を選んだ理由だろう。

そして首を切って一応、物理的にも死体となったことで今井は組織の目をかい潜ったというわけだ。もちろん、そんなのは一時的な効力しかないだろうが、組織の目を欺くことができたのは凄いことだ。

その虚偽の死亡書類を作りあげたのも、その筋の人間だった。そいつをやはり金の力で買収した今井は、その人間も口封じのために殺している。

全く、金まで払っておきながら殺すなんざ、ずいぶんと金遣いのいいことだ。まぁ、波風立てずに口封じするには、もってこいと言えるのは確かだが。

それと、今井が殺して回っていたのは、すべてが組織の末端の人間だったということ。

組織が世界を股にかけて活動するには、やはり金が必要になる。その金を稼いで納めるための要員が彼らだったというわけだ。

今井はその連中、果てには組織を裏切らなければならないほどの理由があったのかもしれない。こんな組織を裏切らなければならないほどの理由……俺には想像もつかないが、奴にとってはよほどのものだったんだろう。

「だが、もうその今井も、もういないということか」

「ええ、そうよ。彼は二年近くも前に死んだわ。今度は正真正銘、ね」

今井がどうやって始末をつけられたのかは聞くまい。こんなことを言うのもなんだが、せめて楽に死んでいてほしいと、なぜか思ってしまった。奴とはいい関係だったとは言い難かったが、不思議ともう憎む気持ちなど全くなかったのだ。

真紀が再びワイングラスに口をつけた。紅色の液体が、少しずつグラスから減っていった。俺はそんな真紀を尻目に、流れていく雄大な景色に目をうつした。

ともかく、世界を股にかける巨大な組織なのだ。これからはせいぜい、そのネットワークを使わせてもらうとしよう。そのためにこんな苦労をしてまで入ったのだから、そいつを使わない手はない。

景色を眺めているうちに、窓の外がごつごつとした岩ばかりしか見えなくなっていて、列車はいつしか渓谷へと入っていた。

真紀との会話に区切りがついたところで、とりあえず目の前に置かれていたグラスを手にとって、中に入っている大して味も分かりもしないワインを嫌なものでも飲み干すように、一気に飲み下した。

ぶどう特有の匂いにまじって鼻孔にはアルコールの匂いが、舌にはぶどうとアルコールの滲みるような味が拡がるのを感じつつ、俺は今後の身の振り方について、真剣に考え始めていた。

第69章

目を覚ますと太陽はすでに高く、昼下がりといっていい時間になっていた。

昨晩、真紀と別れて部屋に戻ってきてからというもの、ソファーに座って酒をあおっていたところ、そのまま眠り込んでしまったらしい。

やれやれ。今日は午前中には起きれると思っていたのに、いつもとあまり変わらない時間に起きてしまった。俺は酔っていようといまいと、寝起きの時間にはなんら関係ないらしい。まぁ、その分、必要に応じて早起きできるわけだから、気にすることでもない。

ソファーから身体を起こして思いきり背伸びしたあと、洗面所に行って顔を洗った。そこでようやく頭と目が冴え始めた。

洗面所を出ると、キッチンに乱雑に置かれたままになっているパンを袋から出して、食いついた。普通であれば、バターならジャムなりを塗るところだが冷蔵庫には、そんなものはないのだから仕方ない。

「ちっ。少し硬くなってやがる」

かじったパンを咀嚼して一言つぶやいた。近くのパン屋で三日前に買ったものだが、欧米のパンは日本のもの比べて、パサパサとしているためだ。

パサついているということは、それだけ水分が少ないということになるが欧米人は、東洋人と比較して唾液の分泌量が多いと考えられるため、彼らには日本のパンは逆にベチャベチャと感じやすいのだそうだ。このため、日本であれば三日やそこらでは硬くなりにくいものでも、こっちでは乾燥しやすくなっているのだ。

そのせいかやや味気なくなって半斤ほど残っていたパンを食べ終えると、俺はさっそく行動を開始した。どうにも、ベケットのこと

がまだ気掛かりで仕方なかった。
洗濯籠から干した後、とりいれたままになっているやや厚手のシャツを引っ張り出して着た。下は昨日のジーンズと、上着には革ジャンといういで立ちだ。まぁ、いつも通りといえばいつも通りだ。
部屋を出ると、ちょうど他のアパートの住人二人がアパートに戻ってきたところのようだ。階段をおりる俺と、自分たちの部屋に戻ろうとして階段をあがってきた二人とすれ違う。
俺のことなど全く気にもせず二人はあがっていく。二人を見る限りいつも必ず一緒に行動していて、できているのではないかと思わず勘ぐってしまいたくなるのは、決して俺だけではないだろう。
アパートを出て、今日もシティの方へ向かう。アパートに面したストリートを北西に向かって歩き、シティへ続くメインストリートへと出た。
メインストリートに出るとすぐにタクシーが通り、俺は手をあげてタクシーを停めた。
「シティまで行けるところまでやってくれ」
タクシーに乗りこむと、運転手がこちらに聞こうとするまえに行き先を告げる。俺の言い方が悪かったのか、普段からこうなのかはわからないが、運転手の男はどこか不機嫌そうに頷いてタクシーを発進させた。
シティ間近にきて道が混雑してきたところで、タクシーを乗り捨てて歩きだした。俺が向かっているのは昨日もいったマーロンの店だ。
あの偏屈者だが仕事には人一倍真面目な親父のことだから、この時間ならもう店の準備をし始めているにちがいない。
歩いて三十分とかからずにマーロンの親父の店についた俺は、店のドアを強く二回叩いて中に入った。
「なんだおまえ、今日も来るなんて珍しいじゃないか」
「ああ。今日はあんたから情報を買いにきたんだ」

「ほう」
情報を買いにきたというとマーロンの親父は、目の色を変えた。この親父は副業として、情報屋を兼ねているのだ。昨日はさほどの用事でもなかったから金を取ることもなかったが、今日は違う。
「どんな情報を買いたいんだ」
「あんた、昨日ハイドパークで殺人があったといったよな。アンソニー・ベケットのことだ。
そいつの組織のことについて、いくつか知りたい」
「なんだ、もう知ってるんじゃねえか。いまさら、俺から聞く必要なんてないんじゃないのか」
「知ってるのはベケットの素性のことまでだ。奴の組織までのことは聞かされなかったんだ」
やや早口にまくし立てると、親父はそうかと頷いた。
「ベケットは、ここいらじゃわりと名の知れた男だった。おまえも知っているかも知れないがロンドンには今のところ、三つのマフィアが存在している。
マフィアっていうそのものは公式では、この国には存在しないことになっているのを知っているか?」
「らしいな。だが、そんなの嘘だ」
「そうだ。この国には、イタリアだとかアメリカ、中国やおまえの国みたいに、その国においての必要悪として誕生した、組織だったものは確かに存在しなかった。
もちろん、なかったわけじゃない。ようは、ファミリーって呼ばれるものが存在してなかっただけでな」
「悪名高いフーリガンなんかもそうらしいな」
俺は親父の言葉に相槌をうちながら、続けさせる。
「フーリガンはある意味において、我が国で初のマフィアと呼べるかもしれん。
連中は組織だってのサボタージュは当然、リンチや利権の奪取、外国人を言葉巧みにあやつって、強制労働所に監禁していた事件が

昔あって、当時、世間を驚かせたものさ。ただ、フーリガンと呼ばれるだけで、固定の名を持たなかっただけでな。

だが、連中には他国のマフィアと違って、情報網を会して動いている、一つのコミュニティとしての一面もあるからな。だから、公式には存在しないということになってるわけさ。

あと連中には、先導しているリーダーらしい人物らの存在こそあれど、組織をまとめるトップというのが存在していないのも、マフィアとは違う点としてあげられるだろう。

しかし、そんな我が国においても近年は、完全にマフィア化された組織が台頭し始めてる。それが」

「ベケットのいた組織なんだな？　あとの二つもだ」

俺は親父の言葉を引き継いで続けた。となると組織そのものは、かなり若い組織なのかもしれない。

なんにしても、それらを早くから統合、ないしは協定にまでこぎつかせることができたベケットの手腕は、かなりのものとみていいだろう。そんな人物の死は、やはり組織にとっては痛手にちがいない。

親父はそれに強く肯定し、頷きながら続ける。

「いうならベケットら新しいマフィアの台頭ってのは、フーリガンへのアンチテーゼとも言えるかもしれん」

「マフィアがか」

「ああ。考えてもみな。フーリガンが人徳的にみて、非道なことをしている様を見せられて、良い気分になるやつは普通いないぜ？

ましてや外国人とはいえ、強制労働所で監禁して死ぬまで働かせてたなんて、ナチと比べたって劣るとも勝らない所業だろうさ」

「なるほどな。だから連中へのアンチテーゼということか」

つまり、ベケットら新しいマフィアの存在は、いうならば裏世界での左翼的存在とも見れることもできる。

「ベケットの組織はどんなことでしのぎを削っていたんだろう」

「もとはといえば、高利貸だったようだな。リバプールに本拠を構

えていたらしいが、十何年か前にロンドンに本拠を遷したらしい。
ほら、東地区の方では今、再開発が進んでるだろう？　副都心計画の一環なんだが、連中も一口噛んでるって話だ」
言われてみれば、俺の住む東地区では今、都市開発計画が発表されていたのを思い出した。俺のアパートはその計画にはなにも引っ掛かる地区にはなく、あまり興味のない話だったのですっかり忘れていた。
それにベケットの組織が高利貸をやっていて、おまけに本拠をわざわざロンドンに遷したのも引っ掛かる。
マフィアであれば普通、地元密着主義なはずなのに、なぜそこから離れてロンドンに遷したのかは疑問だ。
「なぜロンドンに本拠を遷したんだ？　普通、高利貸なら支店をロンドンにおけばいいだけの話だろう」
「そこなのさ。少しばかり俺も気になったんで、建設や不動産で働いている客にそれとなく聞いてみたら分かったんだ。
ま、結論からいえばやはりというか、利権の問題だった」
「……そうか。連中は、金融業というのを傘に、建設業の人間を買収したんだな？」
「そうだ。しかもそれだけじゃない。連中、いくつかの建設会社の大株主でもあったらしい。いや、もっといえば、そのために大株主になったというのが正しいだろうな。だから、東地区再開発事業に加わってる建設業者は、全て連中の息がかかってるって話だそうだ。
ついでにいうと、不動産業者まで抱え込めば、リバプールなんて場所にいるよりも、より多くの甘い蜜がすすれるってもんさ。
ま、連中の同業である、他の二つの組織がリバプールにも入ってきていたというのも、背景にあるようだな」
確かに、リバプールよりも人間も多くいて、東地区という、土地柄あまりよくない場所の開発というのは、投資するには決して悪くはないかもしれない。開発で新しいスポットができれば、人が来るようになる。人が来れば金を落とす。金が落ちれば地権を持ってい

る連中がうるおう。ならば、地権を持っている連中を抱え込めば、自分たちがうるおうというわけだ。本拠が他の連中に荒らされるようになったのなら、なおさらだ。

なによりマフィアに限らず、ビジネスにおける稼ぎとは、根本的にやったもん勝ちな世界だ。それを分かっているから、そんな一大投資に踏み切ったのだろう。

それに東地区は現在、昔の良くないイメージの払拭をしようと、地元民が声を高らかにしている背景があるのも、連中を後押しすることになったはずだ。

「ま、後はいつも通り、といってしまうのもなんだが、連中は最近じゃ、ドラッグの密輸にまで手を出し始めてるって話は聞いたな。近々、その取引もあるなんて噂がたったが、どうなったんだろうな」

その取引は失敗しているわけだが言う必要はないだろう。俺のことを、なんでも屋と思っているやつに、素性を明かすことなどしたくはない。

「ところで、ベケットはどんな仕事についていたのか分からないか？」

「主に、組織内での資金運用を任されてたって話があるが、どうかしたのか」

「いや、ちょっとした興味さ。資金運用というが、それだけじゃぁなかったんじゃないのか」

「いや、あながちでもないらしい。奴は金の動く話なら、その場に必ずといっていいほど足を運んだそうだぜ。何からなにまでな」

「何からなにまで」

親父の話を聞く限りでは、よほど金に執着のある人間にしか聞こえない。いや、事実そうなんだろう。となるとだ。ここで一つの疑問が生まれる。

生前やつは、俺の報酬に関してなにひとつ文句をいわなかった。それどころか、嫌な顔すら見せることはなかった。

ベケットのそんな態度には、逆にこちらが肩透かしをくらったよ

うな気分にさせられたもので、法外の金など払うはずもないだろうとたかをくくっていたのは記憶に新しい。

そんな人間が金の亡者だったというのは、実際に会った俺のイメージとはいまいち合わない。それに真紀の言っていたことも気になる。

おそらく、親父と真紀の言うことの相違の差は、実際にはたいしたことじゃない。密輸という限り、少なからずそこには利権が絡むわけだから、実際の差はありはしない。言い方と見方が少し違うだけにすぎないのだ。

となると、俺が聞いた情報で残るのは、後は遺伝子学の権威と会っていたというものだが、これもまた胡散臭く感じなくもない。

真紀はこれに関しては、ただの趣味である可能性があると言っていたがどうだろう。そこに何かしらの利権が絡んでいたというのもある可能性も、考えられないではない。

「ベケットは、いや、組織自体は、密輸をやっていたと思うんだ。そこから何か分からないかな」

「密輸なんて、裏世界の住人たちなら多かれ少なかれやっていることだからな。ドラッグ以外になら、せいぜい武器くらいなもんだろう。

あとは、建設業を取り込んだわけだから、鉄鋼なんかも有り得るかもな。ま、それらは、わざわざ密輸するほうがおかしな話ではあるがな」

俺は無言で頷いていた。あとは、商品としての流通自体が禁止されている動物の毛皮だとか、人身売買なんかくらいしか思い当たらない。

そして真紀は、人身売買といったことには一切触れることはなかった。つまり、人身売買には手をつけていないと見ていい。

第一、現在のマフィアの台頭が外国人を、言葉巧みに労働者として強制的に働かせることに秀でた奴らへの、アンチテーゼとして発足したらしい背景がある以上、それと同じくらいに非道なことをや

るとは思えない。動物の毛皮なんかは有り得たかもしれないが、莫大な利益というまでには程遠い話だ。

そう考えると、密輸と利権と一言でいっても漠然としすぎて、いまひとつ釈然としない。

「そういえばベケットのやつは、年に一度だけほぼ必ず日本に行ってたって話があるぜ」

「日本にだって？」

「ああ。残念ながら理由はわからん。インテリだったというベケットのことだから、ジョン・レノンにでも影響受けてたのかもな」

くっくっくと肩をいからせながらマーロンの親父は笑った。ジョン・レノンは大変な親日家だったらしく、年に一度か二度は来日していたという。正確には日本人を妻にしたことから、日本に強く興味をもったのかもしれない。

まぁ、ビートルズのファンでもない俺には、そんなことはどうでもいい。親日家だったというのと、ビートルズが日本に来たという事実だけは変わらないのだから。

「日本にか……」

笑う親父を尻目に、俺は誰にいうでもなくつぶやいていた。

マーロンの親父の店で情報を買った俺は、そのまま軽い食事をして店を出た。今日も、看板娘であるレベッカと会えなかったのは残念だ。

向かったのは繁華街にある無料ネット閲覧所で、親父から仕入れた情報から、東地区再開発事業に携わっている建設会社を調べることにしたのだ。

最大手検索エンジンを使い、キーボードでロンドン東地区再開発事業計画と打ち込む。

「こいつだ」

すぐに表示された検索結果の一番上にある、『東地区再開発計画』と書かれているページをクリックしページに飛んだ。

マーロンの親父は、この再開発事業に参加している建設業者は全て、ベケットら組織の息がかかっているといっていた。そこで俺はその建設業者の名前と事務所の住所、ならびに関係者たちをピックアップして頭の中にたたき込んでいく。

建設業者の事務所は、もっと東地区に近いところにあるとなかば考えていたところ、意外にも西地区にあるようで、俺はすぐにネット閲覧所を出てその事務所に足を向けた。住所は、チューブを使ったほうが早いところにあったため、近くのチューブの駅へと降りていく。

ホームに降りるとすぐさま列車がやってきそうで、こちらに向かって強い風が吹いてくる。この国の地下鉄は日本の地下鉄同様運転が比較的丁寧で、他国の地下鉄と比べると好感がもてる。

まぁ、その分到着時は列車特有の、あの耳障りな音が響くことがままある。それらの音を、なるべく響かせないという配慮を運転士に徹底させているなんて話を聞いたことがあった。

チューブに乗って四駅いったところで、俺はチューブを降りて地上へとあがった。西地区は中央と比べてどこか賑わしく感じるところで、旅行者やロンドンっ子もよく足を運ぶ地区だ。

というのも東地区とは比べものにならないほど安全なうえに、生活するうえでの必要なものがあら方揃っているためだ。ショッピングセンターや、歩行者天国、市民の憩いの場である公園、さらに各種ショップなんかが立ち並ぶファッショナブルな地区なのだ。

さらにこの西地区は、休日ともなると公園の脇道やなんかに露店が並んだり、大道芸人が現れたりと、さらに活気溢れる街になるのが好まれている。

ただし、この西地区に住むとなると東地区の三倍から、場合によっては四倍ちかい家賃が必要になる。ロンドンは欧米の都市としてはかなり安全な都市であるが、それでもやはり、日本の都市とは比

べられない。地価が高いのにはようするに、安全料というのが目に見えない形で組み込まれているということに他ならない。

欧米の都市部において、日本であれば誰しも当たり前にあると教えられる、”安全”というものにまで金を支払わなければならないのだ。そのうえで警備会社なんかが幅をきかせている世の中は、やはりどこかおかしいと言わざるをえない。

地上に降りたって五分も歩くと、事務所の入っているビルについた。受け付けなんていもしない小ささで、そんなビルを前に、俺は真下から見上げた。本来なら夜いった方が人目につかなくていいのだが、いまさら夜まで待つ必要もないだろう。

それに、会うべき人間も決まっているのだから、特に問題はない。場合によっては、一悶着あるかもしれないがその時はその時だ。

エレベーターで事務所のある五階へと移動し、開いたエレベーターの前は早速、連中の事務所になっていた。中の人間は、現地に行っているのか少ない。ほんの三人の男しか中には詰めていなかった。いきなり得体の知れない東洋人がはいってきたこともあってか、連中の見る目はかなり険しく、敵意を感じさせるものだった。

「東地区再開発のことで少し聞きたいことがある。責任者を呼んでくれ」

間をあたえずにそう言い放ち、三人を見据えた。三人とも何を言ってるんだこいつはとでも思っているにちがいない。

「なんなんだ、おまえは」

「ベケットの使い、とでもいえばわかるか？」

ベケットのことを前情報として知っていたとはいえ、ビンゴなキーワードのようだ。俺がそういうと、とたんに三人の顔つきが変わったのだ。

「ミスター・ベケットの……」

ベケットよりは確実に五歳から十歳は年上の男達が、いくら目上のベケットであっても、やつのことをミスターと呼ぶなんて思わなかった。よほど、下に慕われていたとでもいうのだろうか。あるい

は、畏怖されていたか。しかし男達の様子を見る限り、畏怖しているようには見えない。

「あんた、本当に旦那の使いなのか？　ベケットの旦那の名を使ってなにかしようってんじゃないだろうな。俺は知ってるぜ、ベケットの旦那は昨日死んだってな」

男の一人が思い出したように喚いた。態度から察すると、やはりベケットはわりと下の連中から慕われていたようだ。少なくとも、この男にとっては尊敬すべき対象だったんだろう。

そのせいなのか知らないが、ずいぶんと勘の鋭いやつだ。まぁ、別にベケットを使ったのは、その”何か”をなるべく起こさせないためだ。

「別に嘘ついてるわけでもないぜ。まぁ、確かに俺はベケットの使いってわけじゃない。しかし、ビジネスパートナーっていうのは嘘じゃない。

やつから、ある依頼をされてたのさ。その途中に死んでしまって、俺としても色々と困ってるんだ。だから、こうしてきた」

なるべく信憑性を持たせるために、連中の顔を見ながらゆっくりと告げた。それに、少々の脚色はしたがあながち間違ったことをいったわけでもない。

「……分かった。ここはひとつ、あんたを信用するとしようか」

三人のうちの一人が、ぽつりとつぶやくようにいった。

「それで。あんたは何が知りたいんだ」

「たいしたことじゃぁない、東地区再開発事業についてだ。この計画について、あんたたちはベケットから多額の金を受け取っているな？」

俺がそういうと、一度は収まりかけた連中の沸点がまた上がったようで、空気に緊張が走る。

「安心しな、俺は警察じゃぁない。あんたらが金を受け取っている事実はすでに把握してあるが、別にあんたらを脅迫しようってわけでもない。

それに、もしあんたらを拘束しようってんなら、もっと正攻法でここに乗り込んでるはずだぜ。だが、もしそんなことしてしまえば、俺の身だって危険になるからな。なにより、自分の仕事に支障をきたすんだ」

男達にしゃべらせる間を与えずに続けた。

「この事業について、あんたら、ベケットから何か聞いてないか」

「なんなんだ、その何かってのは」

やや苛立たしげに話を切り出してきた男がいう。

「何かは何かさ。ほんの些細なことでいいんだ、何か聞いてないか」

男達は互いの顔を見合わせて、みんなただ首を振るだけだった。

その表情からは、本当になにも知らなさげなのがうかがえる。

「そうか。だったら他の質問だ。

ベケットが死んだのは知ってるようだからはっきりと聞かせてもらうが、やつが何者かから狙われていたという話は知ってるかい？」

俺がそれを口にした途端、連中は閉ざしていた口を開いて他の二つの組織がやったに決まっているだとか、あるいは密輸していたことがバレて警察に始末されただとか、あるいはフーリガンが……。

そんな確かな根拠もないことを口々にいい始めたのだ。

ただ一つたしかなことがいえるなら、連中にも実行犯のことはわかりえないということだけだ。

俺は言い合う連中に、ため息をついた。どうやら無駄足だったようだ。結局、連中はなにも知らされてもいなかったのだ。せいぜいベケットが、近年台頭してきているマフィアだということくらいしか知らされていなかった。

まだ、ありもしない口論を続けている男達を制止して、礼をいった。それでも俺のことなど無視して、再び口論を始めた。

うんざりして、もうここには用はない、いったん東地区の再開発現場に行ったほうがと思って踵を返そうとしたところ、男の一人が喚きたてる。

「やっぱり、ベケットの旦那が日本から仕入れたもののせいなんじ

ゃないか」
と、言ったのだ。俺はすぐさま男のほうへ向き直る。
「おい、あんた今なんて言った」
「ああっ？」
喚いていた男が、話かけるんじゃないという態度で俺のほうへと向いた。
「あんた今、ベケットが日本から何を仕入れたって？」
「別にたいしたもんじゃねえよ、たまに日本から変なもんを仕入れてたってだけの話だっ」
男はくだらないとでもいいたげに、語気の荒い口調で言い返してくる。
「それは一体どんなものなのか、わかるか」
「けっ、知らねえよ、んなこたぁ。そんなのは、それで生計立ててる奴にでも聞けよ」
喚きながら男がまくし立てる。俺はなるほど、それはごもっともだと納得して、今度こそ踵を返した。
密輸で食ってるという知り合いがいなくもないが、そいつとは本当に知り合い程度の仲で、全くそっち方面での面識がない。とりあえずは、そいつに会って話を聞いてみるとしよう。
そう思案しつつ、エレベーターに乗り込んだ。

西地区からチューブを使って、反対側の東地区を通りすぎたところでチューブを降りた。というよりも、終点だったために降りざるをえない。
駅からタクシーを拾って、さらに東に進んで海の方へと向かう。理由は単純にある連中に会うためで、こいつらは以前、俺がこの国に入る際に、俺の密入国を手伝ってくれた連中だ。
それ以来一度も会ったことがなく、俺が覚えていても向こうはも

う忘れている可能性はある。まぁ、密輸で食っているような人間だ。そうは人の顔は忘れてはいまい。

仮に忘れていても、ちょいと組織の力を使えば問題ない。あまり権力を傘にはしたくないがこの場合は仕方ない。それに俺としても、格段おどしつけなければならないような問題でもない。

仕事以外にロンドンを出て、他の地域にでるのは随分久しぶりだ。この地域にくるのはもう二年半も前のことで、いささか記憶があいまいだ。タクシーの運転手におぼろげな記憶を頼りに、道筋をあれやこれやと指示しているうちに、ようやくそれらしい場所にくることができた。

タクシーを乗りすて、倉庫街を歩く。記憶が確かなら、このあたりだったはずだが……。

「アルグレン海洋物流……」

倉庫街を道なりにそって歩いていたところ、英語表記された会社名の看板に書かれた文字を口にした。そういえば、確か連中はアルグレンと呼んでいた記憶がある。となると、ここで合っているはずだ。

会社自体は小汚い現代的な小さい建物で、俺は三階におかれた事務所へ、カンカンと音をたてながら階段をのぼった。記憶が確かなら、この建物は設立から二十年かそこらのはずだが、いわれている以上に老朽化が進んでいるように思えた。きっと、海からの潮風をもろに受けているからだろう。

階段をのぼりきり、先にある事務所のスチール製のドアを二度、三度と叩く。少しの間があったあと、内側に引かれる形でドアが開いた。

「誰だ」

ドアを開けながら開口一番、不機嫌そうにいう男。一度しか会ったことはなくとも、はっきりと男の顔は覚えている。この男こそ、アルグレンだ。

「久しぶりだな」

ご挨拶にご挨拶で返す俺に、アルグレンが怪訝な表情でこちらを見ている。この様子では、こちらの顔など覚えてはいなさそうだ。
「どうやら、俺のことは忘れているみたいだな。もう二年半も前に世話になったんだ、当然といえば当然かもしれない。
オランダからの密入国を手伝ってくれたろう？　思い出せないか」
そういうとアルグレンはそっぽに目を向けて考えだしたところ、思い出したのか鋭い目を見開いて、大きく頷いた。
「ああ、あの時の日本人か。確か、イギリスに亡命したいからとかいっていたな」
「思い出してくれたみたいだな。そうだ。
どうだい？　あれから元気にやってるか」
「いや、最近は取り締まりが強化されちまって、商売あがったりだ。それで。今日はなんの用事なんだ？　まさか、いまさら挨拶にきたってわけでもないだろ」
男の問いに俺は瞼を閉じて肯定する。
「密輸で食っているあんたに、少しばかし聞きたいことがあってきたんだ。
あんた、ロンドンマフィアの存在を知ってるかい？」
「ああ。何年も前から知ってるぜ。そいつがどうかしたのか」
「そのうちの一つに、アンソニー・ベケットという名のマフィアがいた。あんた、この男のことに関してなにか知らないか」
「アンソニー・ベケットだと？　アンソニー、アンソニー……いや、あいつじゃねえな」
「話によるとベケットはどうも、密輸に何か関わっていたらしい。時には、日本からも輸入をしてたと聞いたんだが」
俺がそういうと、アルグレンは何か思い出したような顔になり、とりあえず事務所のなかに入れと促してきた。
「客としては、ほんの二、三回しか取引したことなかったから忘れかけてたが、もしかすると奴のことかもしれねぇ。
そいつ、えらく紳士ぶった、少し変わったやつだろう」

アルグレンは、建物の外見通りといってもさしつかえないような中をした事務所の机の引き出しを開け、ガサゴソと紙を引っ張りだしながらいった。まさしくその通りで、俺もそいつだと口にした。

「あったぜ、こいつだ。

……アンソニー・ベケット。おれとの取引では、資材物資と書かれてるな」

「資材物資？」

「ああ。ま、当然ちがう。中身は武器さ。金属を運んでくるわけだから、資材というにはちがいないがな」

「他になにかないだろうか。たとえば……何か、薬品のようなものとかだ」

武器の密輸なら、真っ先に考えた可能性なので驚くことはない。問題はそれ以外に、なにかあったかどうかだ。

「薬品か……残念ながら、そんなのはなかったな」

「わかった。なら他の質問をしたい。あんたは、台頭してきているロンドンマフィアの存在を知っているようだからこれも知っていると思うんだが、ベケットのいた組織以外の組織二つが、秘密裏に取引を行おうとしていたのを知ってるはずだ。

これに関して何か知らないか？」

「ああ、確かつい最近あった、殺し屋に襲われて、取引がおじゃんになったという事件のことか。

それなら知ってるぜ。おれの同業者で知り合いのやつがいて、そいつが連中にブツを渡したって話だ。つい、三日かそこらくらい前だ」

「そいつの名前は」

「テイラーって名の密輸業者さ。ここから、車で十分くらい行ったところに事務所を構えてる。行けばすぐにわかるはずだぜ」

アルグレンは机のわきにあったメモ用紙に、テイラーの名と事務所の場所を書き添えて渡してくれた。住所はたしかに近い場所で、車なら十分といわず、ものの五分かそこらあれば行ける距離だ。

「今からいくなら、話を通してやるがどうするね」
「そいつは助かる。さっそくいってみるつもりだったんだ」
そうかとアルグレンは首をふって、言葉通りに、すぐ向こうに電話しはじめた。受話器から、こちらにもかすかに聞こえてくるコール音がしばらく鳴ったあと、ようやく件のテイラーを名乗るやつが出る。
「おお、テイラーか。久しぶりだな。……いや、そうでもねえさ、ぼちぼちってとこだな。
それでこれから、おめえさんとこに一人、会ってみたいって男がいるんだが今大丈夫か」
アルグレンの親父は電話にでたテイラーと軽い世間話をしたあと、本題をきりだした。
「……いや、デカじゃねえ。むしろこっち方面のやつさ。そこは安心していい。おめえさんの仕事に関して聞きたいことがあるんだそうだが、どうだろう」
アルグレンは受話器に耳をあてたまま、二度三度と頷いたあとにわかったと一言そえて、電話をきった。
「よし、これで大丈夫だ」
「随分と慎重なんだな」
わざわざ電話をしてまで相手に会いにいく有無を伝えるとは、逆にこちらが警戒してしまう。万に一つはないとは思っても、職業柄、なにか企てているのではないかと勘ぐってしまうのだ。
「なに、気にするな。実をいうとやっこさん、極度に警戒心が強いのさ。だから、よほど見知ったやつからの紹介でないと、会わないことにしているらしい」
だから、いつもぎりぎりの経営なんだとつけくわえた。俺はただ、そうかと肩をすくめることしかできない。
「ところでおまえ、マフィア殺しの話をしたってことはなにか、関係してるのか」
「大してないさ。ただ、連中のことをどうにかしないと、自分の仕

事がうまくいかないだけさ」
苦笑しながらドアを開けて、俺は事務所をあとにした。

アルグレンから書いてもらったメモ用紙を片手に、俺は近くを通ったタクシーを乗り捨てメモに書かれた住所にまできた。
外観は、アルグレンの事務所よりもさらに酷い有様だ。向こうの事務所もお世辞に小綺麗とは言い難かったが、こっちはそれらに輪をかけて酷い。比べればアルグレンの事務所が、とたんに小綺麗に見えてしまいそうだ。
建物は半ば廃墟ではないのかと思えるほどで、とてもではないが人が居着いている建物とは思えない。もしかするとアルグレンのやつは、本気で俺を嵌めようとしているのではないかという疑問が浮かんだ。
もしそうなら、すぐにでも折り返してやつの事務所に戻るところであるが、やつに嘘をいっているような節は感じられなかった。よほどのポーカーフェイスでない限り、俺はあまり騙されない。わりと言いたいことをいうようなタイプのアルグレンが、俺を嵌めようだなどとしているようには思えない。
そもそも、俺を騙す理由がない。それなのにわざわざ嘘をつく必要はないはずだ。ここはひとつ、やつを信じてみるとしよう。経営もぎりぎりだと言っていたから、建物の補修ができないほどというのも考えられるのだ。
俺は怪訝に感じながらも建物の中へと入っていった。一応、商業用の建物とあってか、入口は観音開きのガラス張りの扉だ。ガラスの周りをアルミ製の鈍く輝く灰色をした枠に縁取られている。日本の中小企業の建物でもよく見かける仕様の扉だ。
まず左の扉を押すものの、動かない。動かないよう施工されているのかとも思ったが違うようで、扉の回転器具が錆び付いてしまっているだけだった。
仕方なく右側の扉を押すと、今度はなんなく開けることができた。

それでもギシギシと器具の錆びつきを思わせる音がしたのは、やはり廃墟からなのかと改めて思わせるものだ。

一階は待ち受けロビーになっているみたいにも見えたが、奥が事務所になっていた。役所のオフィスのような雰囲気に思えなくもない内装だ。

机の上には、たくさんの書類がファイルもされずにところ狭しと置かれているだけでなく、床にまで書類が落ちていて足の踏み場もないほどだ。

書類だけならまだしも、始めのうちはきちんとファイルされていたのかもわからない書類を収めたファイルすら、いくつも落ちている。俺も普段、けっして掃除をするようなタイプの人間ではないが、さすがにここまではひどくない。これならまだ、たまにテレビなんかで見る為替市場の中継でみられる場所なんかのほうが、まだ綺麗に見えることだろう。

よく見ればファイルや書類はほとんどが日焼けしていて、とても働いている人間がいる場所とは思えない。あるいは、今は放棄された事務所といったおももちだが、昔は何人かの従業員がいたのかもしれない。

事務所のさらに奥からは一筋の光が漏れているのが見える。テイラーなる人物は、きっとそこにいると思われた。というよりも、そこにいてもらわなうと困る。

アルグレンの電話を受けてからまだ十分と経っていないので、人がくるとわかっていれば留守にするはずがないのだが、どうにも人がいるような雰囲気をうけない。

テイラーが奥にいるなら、人が来ようと来まいと関係ないというスタンスの人間だというのは、部屋の惨状や雰囲気から理解できる。まぁ、こちらとしても別に礼をつくせなどとはこれっぽっちも思ってないので、一向に構わないところではあるが。

ここまできたのだ、俺は気兼ねすることなくゴミとなった書類の山を踏みしめて奥におもむくと、突然、右から何かが振り下ろされ

そうな気がして床に飛ぶように伏せた。
「うわああっ！」
飛び込みながらすかさず革ジャンの下に吊ってある拳銃を引き抜き、対象に銃口を向ける。
突如として俺に攻撃をしかけてきたのは、男だった。男は奇声をあげながら、俺に角材をたたき付けようとしたのだ。
男は病的なまでに痩せこけており、目は大きく見開いて瞳孔が開いているうえ、下にはどす黒いクマができている。息は百メートルを全力疾走したかのようにあがっていて、手足、いや全身が大して寒くもないの変な感じに震えている。はっきりいってその様は、今に死んでもおかしくなさそうだ。
両手で角材をもったまま、こちらを瞬きもしないで見つめている男の初撃をかわしてから、それ以降なにもしようとしてこないのが逆に不気味にみえる。もちろん、その容姿からくるものもあるだろう。
この症状……確か、日本で見たことがある。そう、あれは三波の家で見た、廃人たちと同じだ。となると、こいつも何かキメているということなのか。
「……もしかして、あんたがテイラーか」
「な、なんで、俺の名前し、しってる」
しゃべるにもガチガチと歯をかちあわせる男は、異常者だと思わせるには十分なものだ。それでも、まだなんとか意思疎通ができそうな気がしないでもない。というより、さっきアルグレンから連絡を受けたのだから、こっちが名前を知っているのは分かるはずだが、やはりドラッグにやられて頭がどうかしているのかもしれない。
「アルグレンの紹介できたんだ。あんたに聞きたいことがある」
「ア、アルグレンの紹介……あ、あんたがそうなのか」
やれやれ、こいつは時間がかかりそうだ。
「そうだ。あんた、つい何日か前に、ある取引をしたそうだな。その内容について知りたいんだ、教えてくれないか」

男は怪訝そうにこちらを覗きこんでこようとするが、ギョロリとした瞳がなんとも不快な気持ちにさせる。けれど男は、そんなことを気にするはずもなく、とつとつと忘れかけていたことを思い出すように話はじめた。

第７０章

摩天楼群からはずれた場所にある、カフェの路上テラスでコーヒーを飲みながら俺は、反対側にある、ほんの半ブロックも離れていない場所に建っているビルをさりげなく眺めていた。

ビル自体の高さは、せいぜい百メートルちょっとといったところだろう。しかし、摩天楼群からは離れている地区にあるためか、この辺りではかなり目立っている。

俺はコーヒーに口をつけてビルの中に入っていく、いくつもの男女のペアを見つめる。みな、ドレスアップして華やかな装いで、これから、あのビルの上階であるパーティーの参加者たちだ。

そんな連中に気を向けながら、俺はある人物がくるのを待っていた。時間にうるさいやつなので、そろそろくる頃のはずだが……。普段はほとんど身につけることもない腕時計に目をやれば、十八時半になる二分前だった。

それにしても、やれやれだ。俺がまさか、こんな大層なタキシードなんざ着ることになるなんて、思いもしなかった。タキシードなど一生縁のないものだと思っていたのに、人生わからないものだ。

まぁ、これも仕事のうちだ、仕方のない話だといえよう。それに縁がなかっただけで、こういった堅苦しいのもたまには悪くないかもしれない。こんな服は、こんなことでもない限り着ることがなかったのだから、いいチャンスだと思うことにしよう。

俺はそんな風に自分に言い聞かせて、二日前のことを思い出していた。アルグレンの紹介で出会った、テイラーとの一件だ。今日のことにしたって実のところ、廃人と化していたテイラーから取引の内容を聞き出したことに始まる。

ドラッグのキメすぎで、記憶障害すらおこしていそうなテイラーの言い分には少しばかし不安があったが、なんとか聞き出すことに

成功したのだ。
「み、三日前に、港で取引したんだ。取引のな、内容はま、麻薬だ」
「それはわかってる。麻薬以外に、他にもあったはずだ。これくらいの小さいケースに入れられた」
俺は手で大きさを示してみせる。するとテイラーは、コクりコクりと二回頷きながら、呻くように言葉をつむいでいく。
「あ、ああ、確かにあった。あれは日本から送られてきたもので、ある血液サンプルと、や、薬品をまぜたものだと聞いた」
「血液サンプル」
なるほど。やはり赤く見えたあの液体は、血液だったというわけだ。しかし、密輸で血液サンプルを手に入れようだなんて、馬鹿げた話ではある。そうしてまでしないと、手に入れられないものだというのか。
「それで」
「あ、あれは、ふ、普通の血液じゃない。特別製なんだ」
「どういうことだ」
「わ、判らない。ただ、奇跡を起こすと」
「奇跡……」
なにやら、とたんに胡散臭い代物だと思えてくるのは俺だけだろうか。まぁ、薬品をまぜたものだという話だし、そこからなんらかの化学反応をおき、それが奇跡とでも呼べる何かを引き起こした、とも考えられなくはない。血液はまだ、意外とブラックボックスと呼べる部分があると聞いたことがある。
有名なところでは七十年代に発見されて以降、八十年代にかけて一躍世界的に有名になったエボラウイルスだ。
フィクションの話なんかでよく見られるようになったウイルス兵器は、もとを辿れば、このエボラウイルスがベースにされていることが多い。九十年代に日本で流行った、ウイルスに感染してゾンビになるというゲームがあったが、あれもエボラウイルスを彷彿とさせる。

このウイルスによって引き起こされる病気は、消化器官や体中の粘膜からの大量の出血、常に四十度に達する発熱をおこすのが特徴で、これらの特徴を引き起こすことから、エボラ出血熱と呼ばれている。その致死率は九十パーセントともいわれ、知られている限り最も凶悪な殺人ウイルスなのだ。

それでも、人体の不思議とでもいうのか、感染したにもかかわらず、これを自然治癒させた者がいるのも事実だ。ある研究者が彼らの血液を採取して分析したところ、普通の血液にはない反応をしめしたらしい。他に遺伝的にも、わずかながら突発的なパターンも確認されたという。

俺は専門家ではないから、小難しい単語や血液の種類などわかりようもないが、彼らの血液を使って実験が行われたこともあったのは確かだ。しかし、同じ血液型の人間に血液を投与しても、あるいはその血液から血清を造ったにしても、感染者が改善することはなかったそうだ。

つまり、この血液に宿る力を引き出すには、生まれもった体にその血液をもった本人そのものにしか、効果が得られないという結論にいたったわけだ。

そんなことからも、血液学を含めた遺伝子学の分野では、まだまだブラックボックスが存在していることがうかがえる。決して世間がいうほど、科学は万能ではないのだ。

とにかく、あの血液サンプルが何かしらの効果をもったものである可能性はなくもない。ただし、強い効果をもつものは必ずといっていいほど副作用をもたらすので、血液サンプルがその副作用を引き起こしかねない、何かを含んでいることは否めない気はする。

マフィア連中は、何か効果をもたらすかもしれない血液サンプルを、わざわざドラッグと一緒に密輸したということになるが、ドラッグの取引が失敗したのにその話が、ほとんどといっていいほど噂されないのは、本来の目的がこの血液サンプルであったということを隠すための、カムフラージュだったことを示唆しているようにも

思えるのだ。

末端価格でどれほどの金が動くかもしれないドラッグよりも、あのサンプルのほうが価値が上だという結論に、いまいち納得をもてない俺だが状況としては、間違いなくそう示唆しているのだ。

つまり今回の事件は、ベケットらの組織と残り二つのうちの一つがこのサンプルをめぐって水面下で争い、最後の一つがベケットらでなく、もう一方に手に入れたサンプルを渡そうとしたところ、そいつを渡せるはずもないベケットが俺に殺しを依頼した、というものだ。

これなら、今まで与えられてきた情報が一点に繋がる。ベケット自体は組織として関与でなく、個人でこれらに関わったのかもしれない。だが一点だけいうと、ベケットが殺されたにもかかわらず、所属する組織が一切動いていないというのは、少しばかし気にはなる。

ベケットが個人で動いていたにしろ、組織だって動いていたにしろ、組織の動きが何もないというのはやはり気になるところだ。それとも、動けない理由があるとでもいうのだろうか。それどころか、取引を邪魔だてされた他の二つの組織にしたってそうだ。何も動きを見せていない。

こうして改めて考えてみると、おかしな話ではないのか？　まるで、どこからか第三者の手で、今回のことが封殺されているみたいではないか。

そしてその中心に、あの血液サンプルのケースだ。テイラーの言い分によれば、あれは奇跡だというが果たしてそれが意味するのはなんなのか。くしくも、連中のいざこざに巻き込まれた当事者の一人としても、こいつは知っておいたほうがいい気がしてならない。それにまだ、自分の安否が決まったわけでもないのだから。

その後も、テイラーから取引に関することを聞き出した。取引に応じて現れたのは、あの日、俺が撃ち殺した連中だったというのと、元々ベケットもあの取引に応じようとしていたという事実もあった。

なにがなんでも欲しかったらしいサンプルを奪取するために、俺に依頼してきたのはこれで明白になった。殺される何時間か前にベケットが見せた必死な表情からも、それはうかがえる。しかし依然として、連中がなんであんなものを欲しがったのかは判らない。

そこで俺は、キマッていた状態から効果が切れ始めたのか、妙な痙攣をし始めたテイラーを揺さぶった。さらにベケットと関わり合いを持っている人物がいないか問い詰めたところ、チャールズ・メイヤーなる人物の名を口にして、テイラーは事切れたみたいに動かなくなった。

なんとか息はしているようだが、ここで医者を呼ぶわけにもいかない。テイラーには悪いがそのまま放置して事務所を出た。

こんなことをいうのもなんだが薬漬けになるなんて、そんなのは自業自得だ。現在では誰しも、ドラッグの危険性を知っているにも関わらずこの様だ。そんな自業自得のことのために、足がつくかもしれないような行為はしたくないというのが本音だ。

それに、もしこのまま逝けるならある意味で幸福といえるだろう。好きなドラッグにまみれて逝ったとあれば、きっと本望にちがいない。ドラッグをやっている連中の気持ちなど知りたいとも思わないが俺は、これからそう思うようにしようと心に決めた。

テイラーの事務所を出た俺は、ロンドンのホテルに滞在しているはずの真紀を呼び出し、チャールズ・メイヤーという人物を探ってほしいと伝えた。すると、小さなため息のあと少し待たされ、この人物が遺伝子学の方面では名の知れた人間であることを教えてくれた。

と同時にメイヤーは、学会の論文発表のためにバーミンガムからロンドンに出てきているとも。スケジュールでは明日、ロンドンにある商業多目的ビルでパーティーを行うことになっているという。

となると、すぐにでも行動に移ろうとする俺に真紀は、今日は学会の関係者らとの懇談会なんかも控えているそうで、押しかけるに

は分が悪いわよと一釘してきた。
そこで真紀は、明日のパーティーのときが一番いいと言い出したのだ。というのも、パーティー自体は学会とは一切関係あるものではないようで、知り合いの祝いの席であるらしい。だったらと明日、つまり今日これからそのパーティー会場にいくため、こうしてカフェで待ち合わせしているわけだ。
そして、その待ち合わせしている人物は――。
「待たせたかしら」
いつものように淡々として、全く待たせたというのをなんとも思ってなさそうな口調だ。
「いいや、大して待っちゃぁないぜ、真紀」
刺のある言い方で、皮肉をいいながら後ろを振り向いた。
「そう。ならよかったわ」
「相変わらず時間通りだな。なんだってこんなに時間に正確なのか、今度教えてくれ」
タキシードを着た俺にたいして、真紀は見事にドレスアップしていて、一瞬だが我が目を疑ってしまった。おまけに、いつもしているはずの眼鏡は、今日は取り払われていて裸眼だ。眼鏡をかけてない真紀を見るのは、昔、日本にいるときにこいつの部屋に泊まったとき以来だ。
しかし今日は、その眼にはっきりとわかる、ややピンクがかったベージュのアイシャドウがひかれ、いつもはナチュラルメイクの化粧も別人かと思えるほど気合いが入っている。
「……真紀？」
「なに？」
「ああ、いや。なんでもない」
ほんのごくわずかな時間といえど、まさか目を奪われただなんて口が裂けたっていえない。もしそんなことが知れたら、俺には一生ものの恥といっていい。
確かにこの女は女狐だが、造形自体はけっして悪いわけではない。

それだけに俺は、こいつの女狐が気に入らないのだ。美人であれば、なんでも許されるなんていうのが嘘だというのは、このことからも然るべきことだろう。

「……そう。だったら行きましょう」

どことなく鬱屈としたような態度で、真紀がそういった。俺はそうだなと頷きながら椅子を立って、目標のビルへと歩きだした。

「待ちなさい」

「なんだ」

歩きだしたところを突然よびとめられて、振り向いた。すると、真紀は俺の腕に手をかけてきたのだ。

「……なんだ、こいつは」

「なんだとは失礼ね。こういうときは、女性を男性がリードするものよ」

「そんなのはわかってる。だからといって、あんたにこんなことしろだなんて頼んだ覚えはないぜ、俺は」

正論のはずだ。そもそも今日、真紀と一緒になることになったのだって、ただの成り行きでしかない。

というのが、今日のパーティーは男女同伴でなくてはならないということだったためだ。始めは、マーロンのところで働いているレベッカを誘おうとしたのだが、残念なことに、レベッカはまだ店に来ていないので連絡をとれなかった。そのどさくさに紛れて、彼女の携帯番号を入手できたのでさっそくかけてみたが音沙汰なしだった。

それで仕方なく真紀に再度、連絡をとったのだ。真紀は、いつものように一言二言いって、なにかに理由をつけるみたいにして、結局了承したのだった。

それが昨日の夜の話で、俺は早朝から街に繰り出してこのタキシードを調達した。さすがはロンドンというもので、ショップには手に入りにくそうなタキシードも、種類豊富に取り揃えてあった。常に、客のニーズに応えようとすり姿勢には、なかなかに好感がもて

たものだ。
　とにかく、そうなると真紀としてもきちんとしたドレスを着なければならなくなるというもので、今日の待ち合わせ場所に、きちんとくるようにと念を押さえられたのだ。
「別に男女同伴だからといって、そこまでする必要はないんだ。どうせ、中に入れば、俺はなるだけ早くに仕事に取り掛かるつもりだ。同伴していた奴がいなくなると、あんたとこうしていれば逆におかしなもんだろう？　怪しまれちまうかもしれない」
「あら、一流の工作員ともあろうあなたが、女一人いるだけで狼狽するの？」
　メイクのせいもあるのだろう、薄く浮かべる笑いがやけに妖艶にみえる。希代の魔性の女とは、こういう女のことをいうのかと考えてしまったほどだ。
「なんだと？」
「安心なさい。別に同伴だからといって、他人のパートナーのことまで見ている人間なんていないわ。それに、きっとあなたは私を頼ることになるはずよ。
　それまでは、それらしく見せておいたほうが逆にいいわ。ほら、行くわよ」
　俺に有無をいわせずに真紀は、腕を引っ張るようにして歩きだした。つられて俺も歩きだすが、なにか納得のいかないために口を開く。
「待てよ。それとこれは別だろう。なんだって、あんたと恋人同士みたいなことしないといけないんだ」
「細かいことは気にしないことよ。要は、あなたの仕事に支障がなければいいんでしょう？　あなたの仕事のために、こうして付き合ってる私のことも考えてもらいたいわね」
　そこまで言われると、もうぐうの音もでない。俺は観念してため息をついた。
「……もう勝手にしてくれ」

「ええ、そうさせてもらうわ。ほら、私の歩調に合わせて歩きなさい」

俺はもうひとつ盛大にため息をつき、仕方なしにいわれたように歩調を合わせる。もうこうなったのなら、これで通すと決めたのだ。真紀のいう通り、別に仕事に支障をきたすわけではない。

たんに真紀にこんなふうに寄り添われるのが、どうにも恥ずかしく、気が重く感じられてならないだけだ。もちろん、この女の女狐ぶりを知っているだけにだ。

ゆったりとした歩調で進みながら、ちらりと真紀のほうを盗み見た。

シルクと思われるクリーム色をしたドレスは、首元から鎖骨、上胸元にかけてあいている。ヒールを履いているために背がいくらか伸びひているとはいえ、俺からは真紀の胸の谷間がしっかりと見えた。

下は横が切れているため、そこから時折、足と足首を覗かせる。それによく見れば、耳には七色に輝く宝石がついたイヤリングがされている。眉と横は肩で綺麗に切り揃えられている真っ黒な髪も、今日はどこか輝いてみえる。

全く、こいつの気合いの入れようがうかがえる服装だ。そして、いつも仏頂面をした真紀に、不覚にも目を奪われた俺がいうのだから間違いないが、きっと男の目を奪わずにはいられないだろう。

「……ねえ」

「なんだ」

気付けば、俺がほんのわずかに真紀の前をいく形で、俺達は歩いていた。

「……この恰好、どう？」

真紀にしては珍しく殊勝なこともあるようで、どこか恥ずかしげに聞いてきた。そんなことというなと言いたいところだが、さすがに気が引ける。

「馬子にも衣装だな」

肩をすくめて一言そういうと、真紀はとたんに綺麗に整った眉をひそめた。

「……やっぱり、あなたにそんなことを期待するのが間違いだったわ」

「悪かったね、期待外れで。でも、別にいいだろう。所詮は形だけなんだ。

もし俺が、嘘でもあんたを褒めるようなことをいえるような奴であれば、こんな人生、歩んでなんかない」

小さく吐き捨てるようにそう口にした。真紀との腐れ縁に、いまさらロマンスなんざ感じるはずもないのだから、仕方のない話だ。

それにもし、もしの話だが、このまま真紀と人生をともにするとなれば、とてもじゃないが気が気ではなくなるというものだ。仕事の上ではそれなりに上手くいっているにしても、プライベートではいかがなものかというのが正直なところではある。

それと何故かと聞かれて、はっきりとした理由をいえないのが辛いところだが、真紀のことは、どうにも異性として見れないのだ。個人的には、真紀は俺の女性観というものからすると、どうも苦手で、一緒にいたくないと思えるタイプの人種だとしかいえない。

いわゆる、永遠の平行線とでもいえるようなやつなのだ。きっと真紀もそう思っているはずだ。もし俺が真紀の立場なら、絶対に俺みたいな人間と一緒になんかなりたくない。

「あなたは今の人生が嫌なの？」

「好きとか嫌いってのとは少し違うな。だが、あえていえば、今は好きとは言い難いかもな。

俺は好きで人を殺すようになったわけじゃぁないんだ。できるものなら、時間を巻き戻せたらと思うタイプの人間なんでね」

「そう。あなたって、意外とネガティブなのね」

「格段、そういうタイプでもないさ。だけど、どうしてもそう思いたくなることがあるんだ。あの時、違う選択をしていたらと、夢にさえ見ることすらあるからな。

それでも、そのしがらみから抜け出すわけにもいかないからな。結局、またこんな人生を生きるしかないってことになるわけだ。ネガティブというより、現実的にものを考えた結果だろうさ」

真紀は何かいいたげにしていたがそれを口にすることはできなかった。ビルに入ったところで、ドアマンに呼び止められたためだ。

「失礼ですが、紹介状をご提示いただけないでしょうか」

ドアマンがそんなことをいってきたため、一瞬どうするかひやりとしたところ、隣の真紀がすぐに切り返した。

「待ってくださる？」

そういって、手提げバッグから一枚の紙を取り出し、ドアマンに渡した。ドアマンは渡された紙を一瞥したあと、その紙を真紀に戻す。

「失礼いたしました。ではどうぞ、あちらへ」

ドアマンがエレベーターホールのほうを指し示した。

「エレベーターで二十四階へどうぞ」

「ありがとう」

優雅な立ち居振る舞いで、真紀はドアマンをあしらった。まるで本当に、どこだかのセレブにでもなったように思える振る舞いだ。俺はエレベーターホールに向かう途中、そんな真紀に向かっていった。

「……あんた、最初から知っていたな。必要になるって、こういうことだったのか」

「ふふ。もし私がいなかったら、あなた、門前払いだったわよ」

俺はなにも言わず、ただ、ため息をついただけだった。こういうのが真紀の有能なところであり、俺の癪に障るところでもある。

別に有能な女が嫌いというわけではない。むしろ、知的なタイプの女は好みの部類といってもいいが、どうしてか、真紀みたいなタイプだけは好きになれない。生理的に受け付けないというのはこういうことなのかと思った次第だ。

あるいは、同業として見ているからなのかもしれない。いや、だ

とすれば、初めてあったときから感じているこの気持ちに説明がつかない。やはり、生理的にうけつけない、これが正解なのだ、きっと。

エレベーターが到着し扉が開く。そこは豪華絢爛な空間だった。ホール内ではクラシックな音楽が流れ、中央では何組ものペアがその調べにのって、優雅な舞を見せている。

まず遠目から見えたのは、巨大なシャンデリアだ。幅はいうに、六、七メートル……いや、あと一、二メートルはあるかもしれない。とにかく、馬鹿でかいシャンデリアだ。おまけにシャンデリアは当然というべきなのか、クリスタルでできている。

それに小さい、何百かあるいは千数百にも及ぶ数の照明が取り付けられているが、その照明が下にむかって螺旋をえがくように吊り下げられている。一番下に取り付けられた磨かれたクリスタルには、真上、横、斜めからの光をうけ、乱反射していてやけに眩しい。

壁も白を基調にして、縁には金の塗料が塗られている。天井も聖書かなにかからのワンシーンかと思われる絵が一面に描かれていた。さらに、床と正確に配置された柱は、つるつるに磨かれた大理石でできているみたいだった。

「ほら、行きましょう」

「ああ」

真紀の一言で、ホールの中へと進んでいく。みんな、タキシードとドレスを着ていて、それに混じって黒服をきた幾人かの給仕の姿もあった。

「さて、チャールズ・メイヤーはどこかな」

ホールに入ると俺はさっそくメイヤーの姿がないか、さりげなく人込みに視線を向けた。前もってメイヤーの顔写真で、どんな顔のやつなのかはすでに判っている。

「ねえ、あっちに行ってみない？」

メイヤーを探しだした俺に、真紀が止めるようにそういった。

「なに言ってるんだ、あんたは。俺はさっさとメイヤーを見つけて、

仕事をすませたいんだ」
「いいじゃない、少しくらい。入って楽しみもしないでメイヤーを探そうとするなんて、そっちの方がおかしいと思わない？」
ごもっともらしいことをいいながら真紀は、いうが早いかホールの真ん中へと導いて、手を肩の位置にまであげさせる。俺と踊ろうというのだ。
「自慢じゃないが、この手のダンスなんてしたことがないぜ、俺は」
「クラシックに限らず、あなたがダンスなんてしたことがないことくらい、分かってるわ」
「そうかい。だったら、ご教授願おうか」
皮肉たっぷりにいう俺に、真紀は任せてと囁くようにつぶやいた。ダンスなど全く経験のない俺を、ゆっくりとリードしてくれた。旋律に合わせて、ここで右足をだとか、ここでターンさせるだとか…何が悲しくてこの女とこんなことをしないといけないのか、自分がわからなくなってくる。
曲が二曲三曲と変わっていったところで、ふとホールの端にメイヤーの姿が目に飛び込んできた。メイヤーは一人のようで、佇むように大きな窓のところにいて、ワイングラスを持っている。
曲が終わるまで待つべきかとも思ったものの、つい今しがた曲が変わったばかりでは、あと数分はこのままだろう。となると、とるべき行動は決まってくる。
「メイヤーがいた。一番大きな窓のところだ」
そちらのほうから目を逸らさずに、真紀にそっと耳打ちした。
「……捕捉したわ。行くの」
「ああ。悪いが、ダンスはまたあとでだ」
そう告げると俺は真紀の手を放し、すぐさま優雅に踊る連中のあいだをすり抜けて、メイヤーのいるところまでゆっくりと、やや大股で歩みよっていった。
「メイヤー教授ですよね？」
この男は、反社会的なことをする連中が嫌いだというのは、すで

に真紀が調査済みだ。俺はなるべく好青年を装って、にこやかに話しかける。

「いかにもそうだが、君は……」

「これは申し遅れました。私、フリーのライターをしていまして、実は今度、遺伝についての記事を書こうと思っているんですよ」

「ほう」

メイヤーは、どこか怪訝な表情をしていてこちらを見ていたが、俺がそういうとあからさまに食いついてきた。

身長はこの国の平均的なもので、百七十五かそこらといったところだ。腹部はだらしなく大きくなっているせいで、せっかくのタキシードもきつそうに見える。

頭頂部は見事に禿げあがっており、両サイドから後頭部にだけは白髪が残った、典型的な白人中年といった風貌だ。

それに学者というのは研究のために篭りがちな人種で、物静かにしていてもこういう風に切り出すと、とたんに目の色が変わる。本当は知っている知識を、誰かに話したいという欲求を隠し持っていることが多いためだ。

俺は遺伝子についての、基本的なことから教えてほしいというと、まず遺伝子がどういうものなのかということからメイヤーは話し始めた。

目の前のメイヤーはこのうえないほどの饒舌になっていて、延々と遺伝学についての講義をしてくれていた。ちらりと壁にかかっている時計を見れば、午後十時になろうとしているところだ。

話しかけた当初は二、三十分もあれば終わると思った談議も、気付けばもう二時間半、いや三時間近くに渡って、俺にはたいして理解できないことを論じている。俺が一をいえば十をいう、まさにそんな感じである。

窓際で二人、話し始めたときが十九時ごろで、二十時半になろうという頃に、ようやく周りのことが目に入ったのか、二人で落ち着

いて話せる場所に移動した。それからすでに一時間半ちかく、もういい加減うんざりしていた。

二人ともテーブルを挟んでソファーに腰掛けながら俺は、半ば事務的にメイヤーのいうことに頷いている。頭の中では、どうやってベケットのことを聞き出そうか考えていたのだ。そのとき、メイヤーが遺伝子にはまだまだ隠された可能性があるといって、いったん話を結ぼうとした。

そのときを聞き逃すはずもなく、すかさず俺は、例のサンプルのことを仄めかすように話しだした。

「遺伝子に隠された可能性という話を聞いて思い出したのですが、今、日本である血液がちょっとした注目を浴びた、という話を聞いたことがありますか。

その血液がイギリスにも輸入されるだかされないだかといった話を、小耳に挟んだのですが」

やれやれ、ようやく本題に入ることができそうだ。全く、ここまで自分の話をさせずにひたすら喋らせてやるなんて、俺もお人よしだ。

「うむ……君、その話どこで聞いたんだね」

俺がそういうと、メイヤーは今までのテンションはどこへやら、トーンの低い声になった。

どうやら、例の血液サンプルが合法的なものではないというのを知っている可能性が高い。あるいはそうとは知らなくとも、ベケットの稼業を知っている可能性もある。

まぁ、いい。入手経路とベケットとの関係、さらにはあれの効果とはなんなのか、それが知れさえすればいいのだ。別にメイヤーをしょっぴきたいわけではない。

「……ベケット」

囁くような小声で、ベケットの名をつぶやいた。すると、ベケットの名を聞いたメイヤーはたちまち苦い表情になっていった。やはり、この男もベケットの稼業に関わっていたのだ。

「この名前をいえば、あんたならもうわかるだろう」
いい加減、堅苦しい好青年を気取るのにも飽きてきた。俺は普段と変わらない態度でメイヤーにぐっと迫る。
「し、知らん。そんな名前の人間など、私は知らんぞ」
「いいや、あんたは知ってるはずだ。ベケットはあんたの研究室に、もう何年も前から足を運んでいるはずだぜ。
あんたはベケットと手を組んで、やつに血液サンプルを密輸させようとしたんだろう。違うか」
好青年と思っていたはずの人物の豹変に、メイヤーは顔を青くしながら、ふるふると力無く顔をふるだけだ。もちろん、そんな態度はますますこちらを確信させるものでしかない。
「き、君は一体何者なんだね」
「誰だっていいさ。警察でないのは間違いないがな。
それより、あの血液サンプルをベケットに密輸させたんだろ。とっとと吐けよ、痛い目にはあいたくないだろう」
鋭い視線でメイヤーを射抜き、ニヤリと唇を歪める。男はそう告げられただけで自分の末路を思い浮かべたのか、観念したように小さく頷いてみせた。
別に本気で痛め付ける気はないがこういう風に、相手にいったんオープンにさせた後にどん底に落とさせるやり方は、脅しをかけるには最適なやり方だ。その方が相手も口を開くし、無駄に血に訴える必要もないのだ。これが俺と同業者であれば、また話は変わってくるのだが。
メイヤーはぶるぶると口を震わせて、語り始める。
「わ、私はた、ただ研究のためにあの血液を手に入れようとしただけだ。決して、あの男と結託したわけじゃない」
「そんなのはどうだっていいさ。あんたはこっちの質問に答えてくれるだけでいいんだ。そうすれば、俺だって何もするつもりはない。
では最初の質問だ。あのサンプルを手に入れたがっていたようだが、マフィアにあれを密輸するよう頼んだのはあんたか」

そう告げるとメイヤーはまだ震わせている顔を小さく頷かせる。
「次だ。ベケットと面識のあるあんただ。なぜあれを、わざわざ他のマフィアを使って手に入れようとしたんだ。それこそ、ベケットを使えばよかったはずじゃないのか」
「あ、あれは確かに秘密裏にしか手に入れることはできない代物だが、出荷される数は限られているんだ。理由はわからない……い、一説には出荷する側も、そのサンプルをあまり所持していないというのを聞いたことがあるが……」
「あれは初めて出荷されたものだったのか」
「い、いや、知る限りでは過去に二回ほどあったと聞いたよ……今回の取引で出荷されるのは実に数年ぶりだと、ベケット本人が言ってたんだ、間違いない。
だが……ベケットは、い、いや、ベケットたちには、それを手に入れることができなかった。なぜなら、他のマフィアらがそれの権利を手に入れていたから、らしい……」
手に入れる権利……よほど、喉から手が出るほどの代物のようだが、あんな血液サンプルにそこまでの価値があるのだろうか。
しかし、テイラーがあれを奇跡だといっていたのを思い出し、そのためなのかと再考して自分を納得させた。あれがどんな効果をもたらすものかは別として、あのサンプルケースが焦点になっていることだけは間違いないことなのだ。
さらにメイヤーの話によれば、そのために今回、わざわざ三すくみになっている組織幹部らでの談合が行われたらしい。つまり、ベケットの組織はその談合のオークションに負け、取引をやめさせるために俺を雇ったということになる。
とると当然、ベケットが俺を雇ったのは個人的なことではなく、組織ぐるみだったと見て間違いないだろう。組織の運営費から捻出すれば、いくら俺が高額な報酬を要求しても、たいした金額ではない。
これで組織の連中がベケットを殺されたにも関わらず、ほとんど

といっていいほど動きがなかったことも頷ける。いうならば連中のやったことは、強奪といっても良いのだから当然だ。

そして、うちの一つは逆にベケットらの組織ともう一方を相手取り、商売に転じた……概要としてはこんなものだろう。さらに、大量の麻薬のおまけ付きとあれば、連中にとっては欲しかったというのも仕方のない話だ。

「それで」

俺はメイヤーをさらに追及する。

「べ、ベケットはそれはもう怒り狂ったみたいだった。し、しかし、私としてはそんなことはどうでも良かった。あれが手に入るのなら、ベケットだろうと誰であろうと……。それなのにあの男は脅してきたんだ、あれをよこせと。

だが、そんなことができるわけがない。あれはマフィアなんかに渡せるようなものじゃないんだ……」

「ようするに、あんたが連中をけしかけたのに、ベケットは逆にあんたを脅して、例のサンプルを奪取しようとしたわけだな。

結果がどうあれ、あんたが今回の件の発端だったのか」

遠回しにいうメイヤーに、俺は端的にそういった。すると、ここで一つの答えが導き出される。

「そうか……つまり、あんたがベケットを殺した犯人だな」

「ちっ、違う！　断じて私ではない。あれは私が手をくだしたわけじゃないんだっ」

メイヤーが焦りのためか、早口にそう告げた。その言葉を聞いて、俺は再び口の端を吊り上げていう。

「あんた、今ので墓穴を掘ったぜ。あんたが手をくだしたわけじゃなくても、他の人間にやらせたというわけだ。

全く、たいしたもんだ。学者の身でありながら、人殺しを依頼するなんてな。まさしく世も末だ」

嘲りを含んだ物言いをされて、メイヤーは渋い表情になる。渋くなったり青ざめたりと忙しいやつだ。

「あんたはベケットがマフィアの取引を止めさせ、あのサンプルを奪取しようとするのを読んだ、こういうわけだ。
そして始末したあとに、死体からそいつを持ってこさせればいい……あら方、こんなところなんだろう。違うかい？」
その言葉にも、メイヤーは力無く頷く。
「……まぁいいさ。俺としては、別にあんたが殺人の依頼をしようが知ったことじゃぁないからな。
それで、ベケットをやったのはどんなやつなんだ」
「と、東洋人の男だ。多分、おまえと同じ国の人間だ」
「日本人？」
なんとまぁ、殺し屋は俺と同じ日本人だとメイヤーはいうのだ。
もちろん俺以外にも、日本人でありながら殺し屋なんていう、どうにも救いがたい職についている奴が他にいないはずはない。けれど、まさか日本人だとは思いもしなかった。
「不思議なやつで、人を魅了するとでもいうのか……と、とにかく、神秘的といってもいいような雰囲気を持っていた……そいつに頼んだんだ」
なんとも抽象的すぎるメイヤーの説明だが、今後そいつと鉢合わせすることもあるかもしれない。極力、避けたいところであるが。
「で、受け渡しはもう終わったのか」
「い、いや、まだだ……」
「なら、次だ。あんたは随分とあのサンプルにご執心だったな。いや、今もか。
俺にあんたのことを教えてくれたやつがいっていた、あれは奇跡だとな。これはどういう意味なんだ。まさか、知らないとか抜かすんじゃぁないぜ」
釘をさすように睨みつける。メイヤーはこれに関して、あまり言いたげではない。しかし人間、そんな風にされると逆に知りたくなるというもので、俺は続きをうながした。
「あ、あれは……」

「あれは、なんだ」
いい淀む男に俺が台詞を反濁する。
「……あ、あれは……あの血液は、あるヒトゲノムの培養液なんだ」
「培養液だと」
ヒトゲノムとは、ようするに人間の遺伝子のことだが、その培養液とはどういうことだろう。しかも、あるヒトゲノムと強調したということは、普通のものとは少し違うのかもしれない。
「確か三年ほど前のことだ……ある論文が発表された。その論文はヒトの進化に関してのもので、日本のある研究チームが、ヒトゲノムの培養に成功したと書かれていたんだ……。
短い文章でそれだけしか書かれていなかったが、私はその論文のどこよりもその短い文章に注目したよ。なぜなら、ヒトゲノムの培養を成功したなんて話は聞いたことがなかったからだ。
……これは、ヒトゲノムプロジェクトと呼ばれる人類史に名を刻むことになるだろう、壮大なプロジェクトの一環なんだ……。その培養に成功したとあれば騒がれるはずなのに、そんな話は全く聞いたことがなかった……どういうことなのかと、私はこの論文の発表者に連絡をとった。
すると……この研究チームはある筋から手に入れたものを、二年がかりで解析することに成功したんだという。その、ある筋とは誰なのかと聞き返したが、彼らはそれ以上は教えてはくれなかった……誰かから口止めされているみたいだったんだ……。
私はそれをなんとか解析してみたいと思っていたところ、学会の集まりでたまたま、その研究チームのスポンサー企業にいた人物と知り合うことができた。だから掛け合ったよ、どうにかそれを譲ってくれないかと……」
渋い表情のまま、顔を伏せた。それを暗示しているのは、譲ってはくれなかったということだろう。メイヤーが続ける。
「……一部だけでもいいからと必死に頼み込んだが、企業秘密だからと断られたよ。しかし彼はあとでそっと耳打ちしてくれたんだ。

どうしてもというならできなくはない。だが、これは正規のものではない、もし欲しいというなら……」

「密輸でしか手に入れられない、そういったんだな」

俺は言葉の先を読んでそういった。

「……そ、そうだ。彼らには正規に海外に流せるルートがないからと……」

メイヤーはそう告げたあと、口をつぐんだ。それにしてもどういうことだ。たかだか実験サンプルを正規で流せないだなんて……。どうやら、よほど噂されるのにも憚れるような代物のようだ、あのサンプルケースは。

流せるルートがないものを、人目につかずに流そうと思えば密輸しかない。なるほど、確かに密輸で扱われる類の品というのに相応しい一品であるわけか。

「で、サンプルケースはいつあんたの手元に届けられるんだ」

「き、今日……このパーティーが終わったあとで……」

メイヤーは顔を伏せたまま、消え入るような小さな声でいった。こいつは運がいい。だというなら、俺もそれに付き合ってやろうではないか。

第７１章

午後十一時も大きく回り、あと十分もすれば日付も変わろうという時刻に俺は、灯りが消えて街路灯からの光だけしか入ってこない部屋のなかで、うっそりと息をひそめてうずくまっていた。

部屋は広く、俺の住むボロアパートよりもさらに一回りか二回りは広いだろう。

ここを訪れる前に俺は、先ほどまで着ていたタキシードは脱ぎ捨て、いつもの革ジャンとスラックスの出で立ちに着替えておいた。

そしてここはロンドンの西地区のややはずれにある、閑静な住宅街の一角にある邸宅だ。とはいっても誰も住んでいる気配はなく、誰の買い手がつかなかった新古住宅となってしまっている。これはおそらく、もう何年か前にアメリカが発端となって起こった、サブプライムローン問題の影響だろう。

これは地震のあとにおこる、津波のように波及して世界の株価に影響を与え、ついには大恐慌すら上回る衝撃を世界中に及ぼした、リーマンショック問題を引き起こすきっかけの一つにまでなった。

これらの問題は、かねてより深刻だったアフリカの国々にさえ甚大な影響を与え、ある国に至っては、金が本当にただの紙屑になった事例も存在するほどだ。札束がただの紙屑になるということは、ティッシュやトイレットペーパーなんかよりも価値がないことになるわけだ。いや、それらのほうが、はるかに人々の役に立つので、その国の人々は、かつての自国の札をティッシュがわりや火をおこすために焼(く)べたりしたほどらしい。

国が完全に破産し、倒産してしまったわけだから、札束などそうするしか使い道などありはしない。今では物々交換という、なかば原始に近い生活をおくるようになったと聞く。まぁ、人間はそうや

って生活していたのだから、元に戻っただけともいえるが。
とにかくだ。サブプライム問題は、ヨーロッパでも決して無関係だったわけではない。ロンドンは株価だけでなく、アメリカと同様に、ローンが払えずに住居からの立ち退きを命じられた者も少なからずいるのは事実で、その時期の前後に建てられたものは、いまだ買い手がつかずにそのままになっているのだ。
俺が今いるこの邸宅も、そんな時期に建てられたものの一つだ。誰のものでもない住居を受け渡し場所に指定するなんて、今時珍しい。まぁ、こういった方法のほうが確実ではあるが。
チャールズ・メイヤーは落ち着かない様子で、先ほどからこの部屋の中をぐるぐると回って、隅から隅を行ったり来たりと繰り返している。しきりと腕時計を見ては、ため息を漏らしている様からも、そう見てとれる。
麻薬なんかと一緒に密輸されたものを手に入れようとするのだから、当然といえば当然かもしれない。
そんな、先ほどからそわそわしたメイヤーの光景も、ようやく終わりがきた。裏の勝手口から、かすかにドアを開ける音が響いたのだ。こんな場所にこの時間に入ってくるのは、もちろん例の男とみていいだろう。
そいつは足音を殺しながら、そっとメイヤーの待つリビングにまでやってきた。俺からは、はっきりとそいつの影がわかるがメイヤーはまだ気付いていない様子だ。このことからも、男が正真正銘のプロであることがわかる。
こちらに向いて歩いてきていたメイヤーが、再びくるりと背を向けて男のいる部屋の出入口に向き直ると、ひっそりと佇む影に驚いて、短くて小さい悲鳴をあげた。
「……」
侵入者の男は、そんなメイヤーなどお構いなしに二歩三歩と歩み寄り、今まで突っ込んでいたジャケットのポケットから手を差し出した。残念ながら俺の位置からはその手に何を持っているのか見え

ないが、十中八九、例の血液のサンプルケースだろう。
「お、おお……これが……」
メイヤーは呻くような声を出しながら男の差し出したものに一歩近づくと、男はすぐにその手を引っ込めた。
「……残りの金が先だ」
男がややくぐもった声でメイヤーに告げる。
重々しく二回、三回と頷くメイヤーは、近くに置いた小さなアタッシュケースを取り、慎重に男に手渡した。
「……よし」
男はケースの中の金をざっと数えメイヤーとは打って変わって、かすかに首を縦に振ったにすぎなかった。そこでようやく、今しがた手にして見せたサンプルケースをメイヤーに渡そうとする。
その瞬間を俺は見逃さず、銃を抜き取りざまに物影から姿を見せた。
「……どういうことだ？」
「おっと、動くなよ。今、銃口は確実にあんたの左胸をとらえてる。もし下手に動いたら、次の瞬間あんたは死体になっちまうぜ」
言葉の通りに、ピタリと銃口を相手の心臓に向けていた。男は試しにか、かすかにメイヤーに差し出した右手を下げようとするが、俺は微動だにせず指がかかっているトリガーにわずかに力をこめる。その動作だけで、男はピタリと動きを止めた。
「おい。男の手からそいつを取り上げるんだ」
メイヤーに命令するために、ほんの一瞬だけ男から視線を外した瞬間、男が従おうとして動いたメイヤーの腕を掴んで盾にした。
「ひいっ」
「動くなっ」
素早くメイヤーのこめかみに銃を突き付け、男が鋭く叫ぶ。
「……おいおい。そいつを人質にでもとったつもりなのか。いっておくがな、俺とそいつはなんでもないんだ。殺そうと殺すまいと、俺にはなんの関係もないぜ。必要とあればその男もろとも、

あんたをぶち抜くことくらい朝飯前だ」
「とりあえず、念のためさ……」
どこか嘲るように男がいった。まるで、俺がそんなことできないてでもいいたげだ。
「や、やめろ、やめてくれっ。撃たないでくれっ」
メイヤーが男に向かって叫ぶ。まさか自分が銃をつきつけられるなんて、露のほども考えたことがないのだろう。それか、俺に向かっていったのかもしれない。あるいは、その両方に。
しかし俺は、そんなことお構いなしに告げた。
「そうかい。だったら、やってみるがいい。だがな、俺はやるといったら必ずやる男だということは肝に銘じておきな」
影になって顔すら見えない男に鋭く睨む。向こうからは確実にこちらが見えているはずで、向こうがそんな俺をどう捉えたのかはわからない。しかし、本気だというのは間違いなく伝わっているはずだ。
「……おもしろい。だったら、やってみるとしよう」
そういうと影の男がメイヤーを盾にしたまま、じりじりと後退し始めた。
こいつ、俺を嘗めているのだろうか……。苛立ちを抑えながら男の左胸に狙いを定めつつ、同時にメイヤーをも狙っていた。
やるといった手前、俺は必ずやる男だ。メイヤーには悪いが、自分の不運を呪ってもらうほかないだろう。
そもそもマフィアなんぞをけしかけたあげく、その一員を奇麗に片付けようとする用意周到さ加減は、そこらの胸糞悪い連中と全く同質のものだ。こうなった以上、メイヤーにも一因となった者としての責任を負わせるべきだ。殺し屋を雇うというのが、いかに恥知らずで、醜悪かというのを身を持って味わわせてやらなければならない。
俺はそう思い込むと同時に、いつものように冷たい瞳で影の男を見据える。

二人揃って地獄にたたき落としてやる……そう思って引き金を引こうとした瞬間、男がメイヤーを俺に向かって突き飛ばした。

メイヤーが俺に掴まろうとするのを瞬時に判断し、俺は後ろに避けるように後退しながら引き金を引いた。

俺が撃った弾丸はあらぬ方向へ飛んでいく。

床に倒れ込もうとするメイヤーの後ろで、男が俺に銃口を向けているのが一瞬目に映る。

メイヤーが床に倒れ込む。その瞬間を狙って、男が引き金を引いた。

「ぎゃあっ」

メイヤーごと相手を狙っていたのは俺だけではなかったようで、メイヤーは床に倒れ込んだところを背中から二発三発と弾丸を食い込ませ、絶命した。

床を転げ回る俺は、そのままテーブルの下に転がりこむ。

そこから男に向かって再度銃口をむけ、トリガーを引いた。奴のように二発三発と弾丸をぶち込むが、ここからではうまく当たらない。

だが奴は、俺の姿がいったん見えなくなると反撃しようとはせずに、出口に向かって走り出した。

「待てっ」

思わず叫んでしまったが仕方ない。俺は即座に立ち上がりざまに、奴の背中に向けて銃をぶっ放すが弾丸はそばの柱に当たっただけだった。

その間にも入ってきたとき同様に、奴が裏口から屋外へと飛び出していった。俺も奴を追おうとして走りだすが、不幸にも二三歩駆け出したところで何かに躓いた。

メイヤーだ。いや、メイヤーだった人物の死体に躓いたのだ。それはまるで、自分をこのままにしておかないでくれとでも無言のメッセージを伝えてきているかのようだ。

しかし、今はそんなことを気にしている余裕などない。こうして

いる間にも奴は、どんどん逃げていくのだから死体になど構っていられるはずがない。

俺は死体を乗り越えて、すぐに駆ける。裏口をぬけて外に飛び出すと、はるか先に闇に紛れながらも、街灯にうっすらと照らされて動いているものが確認できる。もちろん奴だ。

なんとも素早い奴だ。もうあんなところまで行っているとは……。俺は内心で舌打ちし、奴の姿を追った。ここまできて、奴を見逃す道理はない。

とりあえず、乗りかかった船というやつだが、殺されかけたことに関しては、俺には十分、奴を追いかけるに理由にはなる。

このままにしておいてやるほど、俺はお人よしではない。どうしても奴にはオトシマエというのをつけさせなくては気が済まないのだ。

放棄された区域だけに、ここらには人がほとんどいない。人目がつかないことがわかれば、いちいち人目を気にすることなく全力疾走する。

それでも、ものの数分もすると、瞬く間に体力がなくなっていき、放棄された区域と隣の地区を抜けるころには、完全に息があがっていた。

ぜいぜいという荒い息と激しい動悸のする音が、自分でもよく聞こえるほどにまでなっていたのだ。そこそこに体力には自信があると自負しているつもりだが、さすがにこいつはきつい。

少しは先にいる野郎との距離を詰めることができているようでも、依然、その差は開いたままだった。おまけに、奴は俺よりも早く走り出しているにも関わらず。

俺よりも奴のほうが体力的には一枚上手ということなのだろうが、かといって速度を緩めるわけにもいかない。そんなことをすれば、たちまち差が開いてしまう。

とにかく、奴を見失わなければそれでいい。

しかし追いかけているうちに、もしや、奴は俺を試しているんではないのかという思いにとらわれた。というのも、差がほとんどといっていいほど縮まらないこともあるが、それ以上に、どこかわざとらしさを感じるのだ。

まるで俺をどこかに誘っているのではないか……そんな気にすらなってきていた時、今までほぼ道なりに逃げていた男がすっと消えた。

足が空回りしてこけそうになるのをこらえ、さらに速く走って奴が消えた辺りにまでやってくると、そこは十字路になっていた。

まっすぐに行けはするが先はもう、開発のためにさら地にされた場所しか広がっていない。右も同じようなものだった。となると当然、左に曲がっていったというわけだがどうか。

俺は左を向いて目を細めて先を見てみると、先のほうにまだできて間もない倉庫のようなものが見えた。そこからは一切の光が見えないけれども、おそらく倉庫で間違いないだろう。

奴のどこかわざとらしい走りなどから、始めからここに誘いこもうとしていたと考えるべきだろうか。しかし、そうだとすると、奴は俺を知っていると考えるべきという結論になる。

だってそうではないのか。俺は奴のことなど知りはしなかったのだ。こちらは知らなくとも、なんらかの出来事がきっかけで俺を知ってしまった、もしくは、知らざるをえなかったというのは十分に考えられなくはない可能性だ。こちらとしても、その思い当たる節はいくらもあるのだから。

俺はかぶりを振って、早歩きで倉庫のほうへと足を向ける。可能性はどうあれ、俺の顔が割れたとあれば、放っておくわけにもいかない。奴が殺し屋であり、その身を寄せているのがどんなものなのかもはっきりさせなければ、安息などありようもない。

歩きながら荒い息を整え、倉庫の門にまでやってきた。門は鉄の格子になったどこにでもあるもので、それが人一人はいれるかどうかといったほどの隙間が開いていた。

電気一つ点いていなさそうな倉庫に、門だけがこんな不自然に開いているはずがない。間違いなく奴はこの中にいる。

ジャケットの中から携帯してきている拳銃を抜き取って、慎重に敷地の中へとはいった。

この辺りは、先ほどまでの住宅街とくらべてはるかに街灯が少なく、倉庫の敷地にはほとんど光が届かない。おまけに敷地内には、外界からの光を遮るがごとく、何本もの大木が植えられているために、余計に視界が利かなくなってしまっていた。

いくら夜目がきく俺であっても、こんな状況で不意打ちを喰らえば、ただではすまないだろう。

それに奴は、夜襲を得意としているに違いない。受け取り場所の家の中でも、光はあまりなかったのに、まるで昼間の外にいるかのような素早い動きだったのと、自分にも不利に成り兼ねない、こんな暗い場所にやってきたことからも、それは確かだ。

そんな暗い視界にもうっすらと、さらに暗い闇が数メートル先にあるのがわかった。高さは三メートルほどで、そこから右に四メートルほどのところに窓のようなものが見えることから、倉庫内への扉であることが窺える。

俺は二度三度、深呼吸をして扉を背にして中を覗いてみる。当然ながら、この上ないほどの闇で、ほんの一、二メートル先にあるものの影すら確認することはできない。倉庫なのだから、扉の脇かそこらに電灯のスイッチがあるはずだが、これでは丸きり判断のつけようがない。

もしかしたら、奴はこの扉の裏にでも潜んでいて、俺が入ってくる瞬間を待っていることも考えられなくもない。いくら夜襲が得意であっても、ここまで暗い中では、自分にも不利に成り兼ねないことを知っているはずだ。

そうなると奴としても、あまり中で動ける範囲があるとは思えない。もちろん、ナイトヴィジョン、ようするにスターライトスコープのような類いのものをつけているとなれば別だが。

俺はいつも最悪を想定して動くので、そういった装備を奴が持っていないとは考えていない。夜襲の専門家が今時、それらの装備品を持っていないとは考えにくいし、ここは奴の縄張りであるような気がしてならないのだ。

俺はいざというときの対策として、首に薄いプラスチックのカラーを巻き付けた。こいつはもし首に糸を巻き付けられたときのためのもので、これがあるだけでも首への攻撃によるダメージがかなり軽減される。少々首を動かしにくくなり、不格好になるが仕方ない。

奴が銃を持っているのはわかっていても、暗闇の中だけは少しでも相手の攻撃手段を減らしたほうがいいに決まっている。もし暗闇の中で攻撃されようものなら、銃であれなんであれ助かる見込みは少ないが、何も絶対というわけでもない。事実、これのおかげで助かったこともあるのだ、用心に越したことはないだろう。

目を細め、音を立てないように静かに入った。こうしてしっかり見ようとすると、全くの暗闇と思っていた倉庫内にもわずかにながら、物の影がうっすらと見える。しかし、そこに何かがあるという程度で、実際にどんな物であるのかまではわからない。

目も重要ではあるが、それ以上に重要なのが耳だ。視界がきかない中では、音が一番の情報源になるわけだから、耳は常にすました状態にしておかなければならない。視覚と聴覚、この二つの器官を同時に集中させるのも決して楽ではないが、ここは我慢が必要だ。

闇の中を一歩一歩、慎重に進んでいく。いくら進んだのか、あるいは何メートル先まで歩いたか自分ではわかりようないがすぐ目と鼻の先に、窓があるのが見えた。

窓からは、どこからか照らされている街灯の光をうけて、暗闇の中にかすかにだが光をもたらしていた。

俺は安心したように、歩みを早めて窓に二歩三歩と近づいたとき、直前になって足を止めた。こうして、かすかにながら光のある場所にこれたのは良いが、こんな時に気を緩めて油断してしまうなんて間抜けのすることだ。

光がかすかにでもそこにあるということは、そこから先は、それまで以上の闇に見える光のマジックがある。つまり、そのマジックを使い近くに奴が潜んでいる可能性が高いのだ。

俺は一瞬とめた足を、迷わず窓から漏れるかすかな光の中にやった。影ができるほどもないほどの濃い黒の中でも、真っ暗闇の世界よりは幾分かはマシだ。

暗い先を見据え銃を構えたところ、突然声がかけられる。いや、かけられるとは違った。この建物の中で反響したような、そんな感じの響き方だった。

「そこで止まるんだ。今、こっちからはおまえが良く見える。銃口が確実におまえを狙っているぞ」

奴の声だ。どうやら、奴からは俺が丸見えらしい。しかも銃をこちらに向けているということは、割合近くにいると見ていいだろう。せめて、奴の気配さえわかればすれば、そこ目掛けて銃をぶち込めるのだが。

「銃を前方に投げるんだ」

暗闇のいずこからか奴の声が命じる。俺は苦々しい気持ちで、その声に従った。野郎の気配もわからないでは、こちらも反撃のしようがない。

前方に向かって銃を投げ下ろした。カチャンカチャンと、銃の角ばったパーツが地面にぶつかって転げる音がする。

「さぁ、これで俺は晴れて丸腰だ。あんたも姿を現したらどうだい」

「いいや、そういうわけにもいかんね。プロである、君という人間を侮るつもりは全くないんでね」

「そうかい。随分と臆病なやつだな。経験上、あんたみたいな人間は実際にはたいした奴じゃぁないって思ってるんだが、やはり勘は当たっているようだな」

「ふん。挑発になど、私は乗らんよ。さて、無駄な話はここまでにしておこうか」

奴の冷静な声に、内心で舌打ちせざるをえない。思いきり、侮蔑

の感情を込めて挑発してやったのに丸きり反応がないということは、奴も相当に訓練されている人間だと考えていいだろう。
　同時に、奴に俺を始末するのに迷いはないとみていい。くそ、なんということだ。あともう少し早く、奴の目論みに気付いていればまだ他にやりようがあったかもしれないのに……。
　仕方ない。ここのところは奴に従う他ない。今はおとなしくしておくとしよう。
「さて、質問だ。メイヤーを裏切らせたのはお前だな」
「さぁな。勝手に行動を起こしたのは俺じゃぁない、メイヤーだ」
　高圧的に質問してきた男に俺は、とぼけるようにぼかして答える。しかし奴も俺がこういう風にいうのを予想していたのか、全く動揺する気配がない。
「メイヤーが欲しがっていたあれをお前も欲しがっていたのか」
「いいや。全然興味なんかないぜ、俺は。ただ、こっちの安否ってのが問題なんでね。それで調べていたところ、たまたまあの男に行き着いただけだ」
　言葉を選びながら、慎重に受け答えしていく。奴に正確な情報を伝えるつもりなど、さらさらないのだ。なによりこの圧倒的に不利な状態から、いかにして抜け出すか、それに頭をフル回転させなければならない。
「だったら、なぜメイヤーと一緒に取引場所にまできた？　安否だけなら、わざわざそこまでする必要などなかったはずだ。
　つまり君は口ではそういいながら、実際にはあのサンプルケースが欲しかった……こうじゃないのかね？」
　男のいうことに言葉が詰まる。正直な話、ただの暇つぶしも兼ねていたと言ったところで、とても信じてもらえるようなことではない。俺が奴の立場だとしても、到底信じられる話ではないだろう。
「……残念ながら、違うね。今回の一件は、俺も絡んでいるんだ。マフィアどものくだらない抗争なんぞに巻き込まれかねない一件だ。だからこそ、俺としても必死になるものさ。しかも、俺を巻き込

んだ野郎が殺されたとあればな」
　俺がそう口にすると、今度は奴が押し黙る番だった。ベケットの死に関して、この男が絡んでいるのは間違いないことだ。奴のことを思い出したのか、男は沈黙した。
「……なるほど。君がベケットから依頼された殺し屋か」
「だとしたらどうだっていうんだ」
　鋭く叫ぶ。
「ベケットが最期に言っていたよ、俺を殺したら依頼した殺し屋が私を殺しにくるとな」
　ベケットを殺したら俺がこいつを殺すだって？　一体なんの話をしてるんだ、こいつは。俺はただベケットから、ある連中を殺してほしいと依頼されただけだ。ベケットを殺されただけで、俺がベケットを殺した奴を殺そうとするだなんて初耳だ。
「あんた、一体なんの話をしてるんだ。俺はベケットを殺した奴を始末しようだなんて話、初耳だぜ」
　俺が顔をしかめながらいうと、奴はさらに沈黙する。この沈黙を察するに、話が食い違っていることに戸惑っているか、それとか、なぜそうなったのか考えている、といったところか。
　すると、じゃり、と音を立てながら前方から一人の影が姿を現した。背丈は俺とさほど変わらず、暗闇に紛れやすい全身黒づくめの衣装をまとった男だった。
　左手には今しがた俺が投げた銃を持っていて、右手には一丁の拳銃が握られている。銃口はこちらに向けられており、間違いなく俺の心臓をピタリと狙いすまされているようだ。
　この男が俺が先ほどまで追っていた男になるが、やはり男は思った通り、双眼式のスターライトスコープを頭部につけており、両目のあたりにそれらを示す、なんとも無機質な暗視鏡がこちらを見ている。
「ようやくお出ましか」
「単純な話だ。もう私が君を狙う理由はなくなったからな」

「だったら、さっさと銃を降ろしたらどうなんだ。ついでに、反対の手に持ってる銃も返してほしいもんだね」

茶化すようにいいつつも、男から目を逸らすことはなかった。俺を狙う理由がないなどといいながら銃を降ろさないのは、まだ俺を信用していないことにほかならない。銃を渡さないのも、同じ理由からだ。

「残念だがそいつは無理な相談だな。銃を渡した途端、こちらに撃ってこられては困る。

同時に銃を降ろさないのも、君がまだ何か武器を持っていない保証はない。よって、君の要求は全て却下だ」

随分と理屈にかなった言い方だ。なんとなくだが、田神を彷彿とさせる。

「……君の名前は」

「俺の名前なんて聞いてどうしようっていうんだ」

「やはりな。君のその態度、私としても警戒せざるをえない態度だ。忘れてもらっては困るが、今君には銃口を向けている。もし何か私の気に入らない発言でもしたら、次の瞬間、君に鉛玉をぶち込むことになる」

なるほど。こいつは冷静ぶった奴だが、実際には相当頭にきているとみた。きっと、なにもかも自分の思い通りにならないと気が済まない、そんな内側の欲望を持っているにちがいない。

「そうかい。だったら好きにしな」

ここは俺がいったん折れるとしよう。こいつがどんな奴であれ、なにかの弾みで銃をぶっ放されるなんて真っ平だ。それに、おさまりかけていることを改めて掻き乱すことはしないほうがいいに決まっている。

「それでいい。では再度、質問だ。君の名は」

「九鬼だ」

「なに……九鬼だと」

「ああ、そうだ。何か文句でもあるのか」

奴は何を思ったのか、急に黙り込んだ。スコープをつけたままのせいもあり、いきなり黙り込まれると不気味に見える。

「……そうか。君が九鬼か」

つぶやくように、小さな声でそういった。おまけに、今までの英語のやり取りでなはなく、日本語でのつぶやきだった。メイヤーがいっていたが、確かにこいつも日本人であるのは間違いなくなった。

「あんた、俺を知っているのか」

当然の疑問だ。今まで、足がつくような証拠らしい証拠は残してこなかったつもりだが、やはり、どこかでしくじったのか……そう思ってしまうつぶやきだったのだ。

俺は奴にならって日本語で聞き返す。

「ああ、風の噂に君の名を聞いたことがある。ヨーロッパに日本人の殺し屋がいるとね。……まぁ、それだけでもないが。

何がともあれ、まさか、君が九鬼とは思いもしなかったがね」

「ほう。そいつは光栄な限りだね。まさか、俺の噂が流れてるだなんて初耳だぜ」

ニヤリと唇の端を歪め、再び肩をすくめる。

「となるとだ。必然的に、君を生かしておくわけにもいかなくなるな」

「おい、待てよ。今の今まで、俺を狙う理由がないといってたろう。それがなんで名前ひとつ聞いただけで、突然そうなっちまうんだ」

さすがに、話が一瞬にして変わってしまったことに狼狽した。このままでは、なんのなす術もなく弾丸をぶち込まれてしまう。

そんなの、一殺し屋のプライドにかけて許されることではない。殺し屋たるもの、最期の一瞬まで生き残ることを考えなければ失格だ。別に殺し屋でなければいいのかという問題でもないかもしれないが、とにかくこの状況はまずい。

奴は狼狽して身じろぎする俺の動きに合わせて、正確に銃口を動かしている。いつでも心臓を撃ち抜けるようにしているわけだ。

（まずいぜ……このままじゃぁ……）

背中を、嫌な汗がじんわりとにじんできている感覚があった。
本当になす術がない。奴の銃を持つ手の動きから察して、俺が横に飛び出すにしても結果は変わらないだろう。
ならば、一か八か正面からこっちが向かうというのならどうか。……きっと最初の一歩、運が良くて二歩目を踏み出した瞬間、やはり鉛玉が俺の心臓、あるいは額をぶち抜いているに決まっている。
「ではさらばだ、九鬼」
「待て。なんで俺の名前を聞いたとたん、そんな話になったんだ」
俺は必死になってわめき立てる。とにかく、少しでも時間を長引かせてなんとかしなければ。こいつに、こんな手がきくとも思えないがやるだけやってみなくてはわからない。手段が何もないのであれば、惨めだろうとなんだろうと、思いついたことはなるべく実践してみたほうがいいに決まっている。
「君が知る必要はないさ。だが、これだけは言える。君に生きていてもらっては、少々面倒なことになりかねないんだ。
どんなに些細なことであっても、私は見逃すつもりはないのが信条なんでね。不本意ではあるがそのためにも、君には今ここで死んでもらわなくてはならなくなった……そういうことだ」
奴の一方的な説明に顔をしかめて唖然とした。しかし次の瞬間には、沸々と内側から沸き起こるみたいに怒りが込み上げてくる。
「つまり俺は、お前のわけのわからん企みか何かのために殺されなくてはならないってのかっ」
唾を飛ばして怒声をあげる。奴はそんな俺を見ても微動だにしない。
「では今度こそさよならだ、九鬼」
「待て、まだ話は――」
終わってないと叫ぼうとした次の瞬間、突然、倉庫内に明かりが燈(とも)された。
「うっ！？」
奴が呻くように叫び、両手で目の辺りを押さえようとする。スタ

ーライトスコープは、わずかな光でもはっきりと暗視しているものを映像化して伝えているため、室内灯の光量ともなれば、視界が真っ白に眩んでしまうのだ。

俺も似たようなものだが、奴よりはずっと楽だ。すかさず奴のところまで間合いを詰め、両手に持たれた銃をはたき落とす。

「くっ」

奴もその気配を感じたのか、たたき落とされた瞬間を狙って、蹴りをくりだしてくる。視界がきかないというのに、なかなかに正確な蹴りだ。

俺は再びくりだされた蹴りをかわし、転げこむと同時に落ちた銃をつかむ。

上体を起こすと、すぐさま奴に向かって銃口を突き付ける。

が、なんと奴も左手にもう銃を持っていて、こちらに向けたのだ。小さい銃で、弾はわずかに二発しかないといった仕込み銃だ。

左手の長袖の中に仕込んでいたんだろう、俺はまさか仕込み銃まであるとは思いもせず、もう勝った気になっていた。

それに、奴が機敏な動作になったのかもよくわかった。すでにスターライトスコープは取り去っていて、右手に持たれていたのだ。

だが、それでも男の素顔がわかることはなかった。なぜなら、奴は仮面をつけていたからだった。目の辺りだけはくり抜かれ、視界をきかせることができている。

「惜しいな……あと一瞬、あとほんの一瞬だけ君が速ければ、私を撃てたかもしれないのにな……」

非常に落ち着いた声で奴がいう。確かにそうだ。後、ほんの一瞬でも速ければ、俺の銃から弾丸が発射されて、この野郎をぶち倒せることができたというのに。

「ああ、そうかもな。それでもさっきまでと比べりゃぁ、天と地ほどの差があるぜ。さっきまでは、いつお前に殺されたっておかしくない状態だったんだ。それに比べりゃぁな。

だが、これなら話は別だ。お前も銃の腕には自信があるみたいだ

が、俺もわりかし銃の腕には自信があるんでね」
「ほう、なぜ私に銃の腕が良いと思えるんだね？」
「ふん。俺が気付いてなかったとでも思ってるのか。お前、俺の心臓を正確に狙っていただろう。俺が少しでも動けば、確実にそれにそった動きをさせていた奴が、銃に自信がないはずがないだろうが」
口だけはニヤリと歪ませつつ、視線は奴を思いきり睨み付けながら説明してやった。
ようやく、最悪の状況を脱したわけだがかといって、事態が好転したわけでもない。まだまだドローといっていい状況だ。
「そこまでよっ」
「！？」
どれほどのあいだそうしていたのか、突然、横から声とともに一人の女が三、四メートルほど先にある通路から現れた。
もちろん、その声で主はわかった。こんな場所に体よく現れる女なんて、あの女狐以外にいるはずがない。
「よう、真紀」
視線を野郎から外すことなく、そういった。さすがの奴も、この状況に困惑気味だ。視界がきくようくり抜かれた仮面から覗かせる目が、それを暗示している。
「二人とも動かないで。まず、そっちのあなた、銃を降ろしなさい。そのあとはゆっくりと両手をあげて、膝を地面につけるのよ」
真紀は男に銃を向けながら叫ぶ。
「早くっ」
急かすように鋭くいう真紀に、男はふっと笑った……ような気がした。口元は仮面によって覆われているので、実際に笑ったかどうかはわかりようもないのに、なぜかそんな風に感じられたのだ。
ただ目を伏せるみたいにして、静かに閉じた。ただそれだけの行為だというのに、なんでそんな風に感じるのか説明できない。できないが、俺の直感が頭蓋の中で叫ぶのだ、油断してはいけないと。
「……ふっ」

すると、奴が笑ったみたいに小さくため息を漏らした。俺に向けていた小銃をいったんさげたと見せ、すぐさま真紀に銃を向けたのだ。

その隙を見逃さず、俺は奴の胸に弾丸を二発ぶち込んだ。男は、体が着弾の衝撃のために、踊るように弾んで横にぶち倒れる。

「……」

ぶち倒れた男に対し、俺は違和感を覚えた。いくら真紀が現れたからといって、撃たれるのをわかっていて動こうなんて浅はかな行動をするとは、とても思えないのだ。

そう感じたので、あえて男の急所をさける形で弾をぶち込んだ。よって、まだ男が死んでいるわけではないだろうが、なんとも妙な行動を起こした男に対し疑問符が浮かばざるをえない。

俺はそう思いながら立ち上がった。奴は仰向けになって、手足を大の字に力無くのばして倒れている。

「あんたが電気、つけてくれたのか」

真紀のほうに視線をうつしていうと、真紀は小さく頷いた。

「あなたを追ってみたら、また変な場所にいるでしょう？　それで、なにかあったんだと気付いたのよ」

「追った？」

「まあね」

真紀はその手に携帯を持って示す。

そうか。携帯のＧＰＳ機能を使って、逆探知したというわけか……。この女は組織の情報部にいるし、そのうえ俺の携帯は真紀から支給されたものだった。この女の手にかかれば、そんなことくらいはおてのものだろう。

「なるほどな。まぁいい。あんたが来てくれたおかげで、今回ばかりは命拾いできた。礼をいっておこう」

そんなやり取りをしているところ、倒れた男が不気味な笑いをあげた。

「まさか、まだ仲間がいたとはな……迂闊だったよ。だが、まだ気

を緩めるには早いんじゃないかな？」
「どういう意味だっ」
倒れた男に向かって叫ぶと、奴は右手の袖から小さな細い箱状のようなものを取り出した。どうも、いろいろと袖に仕込んであるようだ。
「こいつは起爆装置さ。私は何かあったときのために、アジトを必ず破壊できるよう用意しているんでね」
「お前……」
くつくつと仮面の下から笑い声がもれている。
「九鬼……安心するなよ。私は君を殺すといった以上、必ず君を殺す。君がこの世界に生きている限り、必ずな……」
「待てっ」
奴が言い終えると同時に、起爆装置のボタンを指が押そうと動いた。俺は叫ぶと同時に銃口を奴に向けるが、引き金を引く前に奴の指はボタンを押した後だった。
瞬間、低い地鳴りのような轟音とともに、倉庫ないたる場所から破壊されていく爆発音が響きだす。奴のいっていた起爆装置は、はったりなんかではなく、本物だったのだ。
「くっ」
「早くこっちに」
真紀が叫んだ。
俺はいうが早いか、真紀のほうに向かって駆け出した。
「くっくっく……九鬼、私は諦めないぞ。私は必ず君を」
倒れたままの男が、背を向けて駆け出した俺に向かって、不気味に笑いながら落ちていった。爆発の影響で、倒れていたあたりの床が抜けたのだ。
奴が落ちていったのを見届けたあと、すぐに駆けた。床が抜けたということは、この辺りも同等の危険があるかもしれないということだ。
真紀はすでにひと足早く、通路の先を走っていた。俺も急いでそ

の後に続く。
あまり、深いところにまで潜り込んでいないはずなので出口はすぐのはずなのに、変に焦ってしまっているせいか、やけに出口が遠くに感じる。
「待って。そっちじゃないわ」
先行している追い付いて、歩いてきた通路の感覚を思い出しながら行こうとしたところ、真紀がこっちだと指示する。
「このまま、まっすぐ行けば窓があるわ。そこから抜け出したほうが早いわ」
なるほど。そういうわけか。頷きながら、銃を構えた。前方に窓が見える。真紀のいう窓はあれのことだろう。
走りながらだと狙いがつけにくいが、この状況でしのごのいっているわけにもいかない。俺は二発三発といわず、ありったけの弾丸を窓に撃ち込んでいく。
そのうちの何発かが窓ガラスをぶち破り、派手な音をたてながら割れた。
「先に行く」
ぶち破った窓に走る勢いそのままに飛び込む。
あまった窓ガラスが割れる音を耳にしながら、次の瞬間には地面に身体をぶつけ、転がっている感覚があった。
鈍い痛みをこらえて、ぶち破った窓のほうを見る。真紀もなんとか外に出ることができたようだった。
まだ小さい爆発音のあとに、轟々と地鳴りみたいな音が響いている。中の床や壁が抜けたりしている音だ。
真紀が抜け出したのを見計らい、俺達はなるべく倉庫から離れるために再び走りだした。
すると、ベキベキと、ついに倉庫の外壁が音を立てて崩れ始めた。中の壁や支柱を失って、自重に耐えられなくなったのだ。
ものの数秒で倉庫は完全に瓦礫の山になり、あたりには大量の砂埃が舞った。

俺と真紀は鼻と口を押さえ敷地内から急いで出る。門の側に、真紀が乗ってきたと思われる車が目に入ったためだ。

ドアを開けて中に入ると、そこでようやく一息つけた。それでも真紀は、一息いれる間もなく車のエンジンをいれて、すぐさまそこを離れた。

ここら一帯は、まだまだ人がほとんどいないとはいえ、完全に人がいないというわけでもない。瓦礫の山と化した近隣の倉庫の惨状に人が出てこないとは言い切れないのだ。

運転の荒い女だが、今だけは高速に飛ばす車の性能と真紀のドライビングテクニックに身を任せることにしよう。

……それにしても、あの野郎がいったことがどうにも引っ掛かる。なんで突然、俺を始末しようだなんていい始めたのか……。いや、そもそもなんで俺のことを知ったのか。その情報源はどこなのか。

あのサンプルケースから始まって、意外な形でそれが自分に還ってきていることにわずかな混乱を覚えつつ、新たな謎の浮上に疑問を投げかける。

やれやれ……これからしばらくのあいだ、寝れない日々が続くかもしれない。また明日からの忙しくなりそうな予感に、俺は小さなため息をもらしたのだった。

第７２章

まどろみの中からだんだんと意識が浮上し始めるのを感じて、目を覚ました。なんとなく甘い匂いに誘われたのだ。

そうか、ここは真紀の……。薄く瞼をあけた俺は、ぼんやりとした頭で考えた。昨晩は真紀の車に乗ったまま、あの女が滞在するホテルにまでやってきて、部屋に泊まったのを思い出した。もう瞼が落ちてしまい、意識が沈みそうになっていたときに、ホテルに着いたのだ。

襲いくる眠気に気持ちよくなっていた俺は、不機嫌になりつつも真紀の泊まっている部屋まで連れ立って入ると、すぐさまベッドに倒れ込んだはずだ。

しかし、今の下着以外取り払われて裸になっている自分の成りを見る限り、真紀が服を脱がせてくれたのだろう。ついでに布団もかぶせてくれていた。

「目が覚めた？」

俺の横に下着だけの姿で真紀がそういった。

「あんた……」

こいつの妖艶ぶりを示すみたいに、下着は紫色をしていた。おまけにそれが、意外なほど良く似合っているのがどうにも目の毒だ。まぁ、かといって起きぬけから女にむしゃぶりつきたいとは思わない。ましてや、目の前の女があの藤原真紀であるのなら、なおさらのことだ。

「その恰好で寝てたのか」

ぼんやりとしながらも、そう口にした。真紀は俺よりも早く目を覚ましていたようで、すでにいつものすました表情をしている。

「そうよ。寝るときはいつも下着だけど、それがどうかしたの」

「いや。そいつはそうかもしれないと思っただけだ」

つまり俺は、この女と再び一つ屋根の下で、一晩を過ごしたことになる。最初のときは寝巻を着ていただけに、あの頃から相応に時間が経っているのだなと、感慨深い気にさせられる。

「なに。私がこの姿で寝ちゃいけないの？」

「別にそんなこと言ってないだろう？　あんたらしいと思っただけだ」

ぐっと背伸びしながら、俺は起き上がった。いつも思うことだが、なんで起きぬけに背伸びをすると、こうも気持ちがいいのだろう。

「それより、起きてたんなら服を着てくれないか」

「あら、気になるの？」

「さぁな。だが、いい歳した女が恋人でもない男の前でいる恰好じゃぁないな」

ベッドからおりて洗面所へと向かった。両手に水をためてみると、ずいぶん水が冷たく感じる。どうやら今日は、外気温が最近としては低いのかもしれない。

冷たい水でもって顔を洗い終えると、横から純白のタオルが手渡された。

「あなたって、変なところでうぶよね」

「なんの話だよ」

タオルで顔を拭き終え目の前の鏡に目をやると、真紀はいまだガウンを羽織ることもなく、下着姿のままだった。

「普通、いい歳した女がこんな恰好でいたら、もっと違う行動にでるはずなんじゃない？」

ニヤリとした唇がどうにも妖艶さを醸し出しているが、この女にそんなことをされても正直にいって、欝陶しいだけなので無視して話を切り上げた。

「ところで、あんた今日はどうするんだ」

「どうって」

「俺は今日からまた動くつもりだ。それであんたはどうするんだと聞いてるんだ」

真紀の横を通りすぎ、ベッド脇のソファーにかけてあった服を着て、携帯で現時刻を確認した。ちょうど朝の九時になったばかりで、普段の俺からするとかなりの早起きだ。

「食事はどうするつもり」

「もちろん、朝食くらいはとるさ。寝起きの食事ってのは必要だろ」

真紀の質問に頷きながら、携帯をしまった。それから部屋から出ようとして立ち止まる。

「そういうあんたこそ、朝食はどうするんだ。なんだったら――」

あんたも一緒にどうだと言おうとしてやめた。こんな台詞、俺が真紀を口説いているみたいではないか。

俺はたとえ嘘でも、この女にそんなことを言いたくはない。

真紀のことだから、いったらいったらでまた何かいってくるにちがいないのだ。だったら、それをわかっていながら、わざわざ自分からそんなことをいう必要もないだろう。

「なに？」

いいかけた俺に、真紀が続きを促すように聞いてきた。それにかぶりを振って、軽く肩をすくめた。

「いや、なんでもないさ。それじゃぁな、また何かあったら頼むぜ」

真紀への捨てぜりふとしては上々だなんて思いながら、俺は立ち止めた足を、再びドアに向かって動かした。まぁ、きっと真紀のことだから、また勝手なことばかりとでも毒ついているかもしれないが。

ホテルのレストランで朝食をとったあと、足早にホテルを出てタクシーに乗り込んだ。今日も早速、マーロンのところに行くつもりだった。

郊外とはいえ、昨晩ロンドンで起こった出来事が、あの親父の耳にはいっていないはずはないだろう。ホテルのロビーにあった新聞

の朝刊にも大々的に一面を飾ってあったのだから、何かしら他の情報を掴んでいるにちがいない。

タクシーの運転手に行き先をつげると、運転手はすぐに車を発進させる。さすがに一流ホテルお抱えのタクシー運転手で、アクセルの踏み出し方ひとつとっても、かなりのものだった。発進させる時に、全くの振動を感じさせずに動きだしたのだ。

そんなタクシーでシティ周辺にくると、やはりいつも通りの混み具合だったため、そこでタクシーを乗り捨てた。ここからなら、歩いていったほうが早い。

いつもであれば、真っすぐにマーロンの店に直行するところだが今日はそうはしなかった。やつが開店準備をし始めるのは、早くとも午後の二時頃からだ。こんな時間では、まだ店にすらいないだろう。

そこで俺が向かうのは、マーロンのよく足を運ぶ場所だ。近年、ロンドンでも東京同様、夜に働く人間目当てに朝方、あるいは昼前まで店を開けているパブやバーなんかがある。マーロンはそういった店に足を運んでいるはずで、それが日常であることはとっくの昔に調べあげてあることだった。

親父がよく足を運んでいるのは、店の看板はおろか、店の名前すら書かれていないパブだ。名前など知らなくても、場所は知っているのだから問題はないが。

飲み屋が軒を連ねているストリートの、一画からさらに奥まった場所にあるその店は、灰色の石の壁を強引にくり抜いて、そこに焦げ茶色をした木の扉を取り付けてあった。

一見してここが店だとは、とても思えない作りだ。そう思えるとなると、当然ここが何時から何時まで経営しているのかも、わかりようがないのだ。俺も、マーロンの親父がここを使っているというのを知ることがなければ、例外ではなかっただろう。

木の扉を引き開けて下へと続く、壁と同じ石の階段をおりていく。階段は薄暗く、気をつけなければ頭をぶつけてしまいそうになるほ

ど、天井は低い。
やや急勾配になった階段を、頭をぶつけないように一番下までおりると、右に店のガラス張りになったドアがあり、中の様子をうかがえるようになっていた。しかし、そこから見る限りではマーロンの姿は見えない。
俺はドアを開けて店内へと入った。外界から入る際に通った、はじめの焦げ茶色の木の扉と同じ素材の木を使ったテーブルと椅子、それにカウンターや壁に打ち込まれた柱も同じものであることが窺える内装だ。
電気を使った照明は、店の天井中央にのみ暗い橙色をした電灯があるだけで、あとは全て蝋燭の光だけであるため、店内はぐっと落ち着いた雰囲気になっていた。
そんな店内には、やはり夜の労働を終えて、一杯やっている同業者らしい者たちが数人、酒を飲みかわしながら肩を寄せ合っている。
そんな中、カウンターの奥まった場所に見知った顔をした男が一人、ぐっとウイスキーを喉に流し込む姿が目に映った。探していた人物であるマーロンだ。
探し人を見つけて俺は、さっそく隣まで歩みよった。
「よう、やっぱりここにいたな」
「なんでぇ、おまえ。どうしてここがわかったんだ」
「一応なんでも屋だぜ、俺は。ある程度は情報屋みたいなこともやるんだ、あんたほどはなくともな。ま、あんたがここにいるかどうかは、なかば勘みたいなもんだったんだけどな」
「それでわざわざ、おれのとこに来たってことは、何か買いたい情報があるってとこか」
マーロンの言葉に頷き、マーロンと同じものを頼むと俺は、すぐさま本題を切り出した。
「あんた昨晩の件、もう聞いたか」
「郊外の倉庫が瓦礫になってたって話か」
「さすがだな。耳が早いぜ」

ニヤリと唇の端をゆがめ、小さく頷いた。
「やれやれ、そのためにわざわざ俺を探しにきたなんて、俺も愛されてるねぇ」
肩をいからせて笑い、マーロンはショットグラスに残り少ないウイスキーを一気に呑んだ。
「冗談はいいから早く教えろ」
「へぇへぇ、気の短けぇお客さんだ。
……それで、昨晩の件だったな。まず、おまえはどこまで知ってるんだ？」
「大して知りはしないさ。まず、あそこの所有者を知りたい」
「あの倉庫は、例のマフィアのものだぜ。ベケットとは違う奴らのだ。連中、東地区に専用の取引場所を作るために、あの倉庫を買い取ったらしい。あの辺りは例のサブプライム問題で真っ先に放置されたから、はした金だったろうな。
だが、あそこはテムズ河が近いせいもあって、かなり手引きしやすい立地だな。そのうえ、買い手もほとんどつかない場所であれば、考えようによっちゃ悪くはない」
「ベケット以外となると、二つに絞られるがどっちかな」
「そりゃぁ、前回の取引で、ベケット達ともう一方を相手取ったほうに決まってるさ。奴ら相当、金狂いらしいからな。
ともかく、自分達の縄張りが荒らされたんだ、やっこさん、相当お冠だって噂が早くも流れてるぜ」
マーロンに相槌をうって、目の前に置かれたウイスキーの入ったグラスに、口をつけた。
「あの辺りに不審な人物がいたということはないか」
「それさ。この数日のあいだ、あの辺りに見かけない男が一人うろついてたって話だ。
連中は、そいつが今回の件となにか関係があるんじゃないかってんで、やっきになってるらしい」
おそらく、その人物こそ例の黒づくめの男だ。だとすれば、そい

つがすでにこの世にいないとわかるまで、まだしばらくはかかるだろう。あれほどの瓦礫の下敷きになったのだ、死体を掘り起こすまでどんなに短くても、一週間か二週間はかかるはずだ。

さらに、連中が探して回っているとなると、あの男が間違いなく連中とは関係がなかったことを示している。しかし、プロである奴がなんの前情報もなしに、連中の所有している倉庫をアジトになどするだろうか。考古学者じゃあるまいし、偶然だったと片付けるのには、あまりに早合点しすぎだろう。

奴は、あそこがそういった場所だと知っていて、ほとんど使われることがないというのも承知の上であそこを選んだにちがいない。もちろん、何かあったときの用心のために、有利になりそうなポイントとしてもだ。

つまり、奴にはメイヤーからの依頼以外に、何か他の目的があったと見ていい。むしろそのためにメイヤーに近づいた……こう考えたほうが合理的だ。そうでもないと、わざわざマフィア所有の物件を一時とはいえ、アジトになどするはずがない。

ならば、奴の目的とは一体なんだったんだろう。

「他にはないか？」

「やはりマフィア絡みでもう一つある。ベケット殺しの件で、マフィアが静観してたろ？　それがなぜか、昨日あたりから連中の動きが妙に慌ただしくなってる。昨晩、俺の店にもそれらしい連中がきて、何か知らないかと言ってきたな。

なぜ突然、動き出したのかは今のところはっきりしないんだが、どうも昨晩、西地区のほうであったお偉方のパーティーが臭いな」

「どういうことだ」

「こいつは、連中の言葉を断片的に拾いあつめた推測にすぎん。それでもいいか？」

さすがマーロンといったところで、相変わらず慎重な物言いだ。もちろんそれは、この親父の頭の良さに結実しているからだろう。

そう聞いてくる親父に、俺はただ頷くことしかできない。なにか

しら、情報がほしい今は推測であっても聞いておくべきだが、この親父に限っていえば、推測もかなりの信憑性があるものだ。
「話によると三つの組織は今、協定を破棄して仲たがいの状態になっているらしい」
「なんだ、随分と唐突な話だな」
「俺もそう思ったんだがどうも、最近はそうじゃなかったらしい。多分、発端は例の取引の失敗だろう。
しかし……おまえもわかっちゃいると思うが、取引が失敗したのに連中が大人しかったのには、裏がある。それが」
「昨日のパーティーだった、あんたはそいいいたいんだな」
そうだとマーロンが強く頷いて肯定した。
「実をいうと、昨晩もよおされたパーティーは前々から予定されていたものらしくてな、かなりの大物が招待されていたそうだ。中には、海外からの重鎮がいたっていう話だ」
「海外からの重鎮だと」
「ああ。それもフランスからの客人だそうだ。
おまえもご存知とはおもうが、我が国とフランスは大層仲がよろしくない。まぁ、おまえの国でいえば韓国や中国との間柄に近いといえばわかるかな。
あのパーティーの主催は、国内のナンバースリーといえる人物の側近だ。いや、側近というよりも、事実上のナンバースリーだろうな。相談役というやつさ。
政治家のスポンサーともいうべき人物なんだが、こいつがまた臭い奴でね。四十を過ぎたばかりの若造だが、二十歳そこそこの時分から、商売敵から政敵まで自分の前に立ちはだかる奴は、全て葬ってきたという男だ。事実、その年齢にして、国内でも屈指の株長者だからな。
それとともに、やっこさん、例のベケットとも繋がりがあったみたいでな。いや、それどころじゃねえ。ベケット達は当然、ほかのマフィア連中の資金源にもなってるって話さ。というよりも、ほぼ

確実にそうだろうな。
　そんな奴だから、周りからの評価にはやたらと気にしているんだ。ま、無理もない話なのかもしれんがな。
　とにかく、そんなやつにとって、昨晩のパーティーは重要だった。今マフィア連中にロンドンで騒がれると奴の面子は潰れかねない。だから奴が連中を止めていたってとこだろう。
　国内でナンバースリーの黒幕である男からの命令とあれば、マフィア連中といえど、いうことを聞かざるをえん……そういうことだ。ましてや、連中にとっての一番のスポンサーなわけだしな」
「そして、そいつは三つのマフィア稼業からも利益をあげている……ってわけか。全く、ボロい商売気だな。
　まぁ、いい。それでそいつの名は」
「ボネット、ウィリアム・ボネットという名だ」
「ウィリアム・ボネット」
　名前をしっかりと脳みそに記憶させ、俺はしっかりと頷いた。きっとこいつとは何か一悶着ありそうな予感があったのだ。なぜそう感じたのかはわからないが、とにかく、こいつのことを知っておいて損はない。
　それにしても国が違えど、政治家とギャングの癒着なんて当たり前にあるものだ。まぁ、それを悪いだなんて青臭いことをいうつもりもないが、連中が驕っていて、実際にはどうしようもない連中だというのは間違いない。金持ちなんていう奴らを信じることなんて、俺にはできない。
「しかし、いくら資金源といっても、連中だって汚いながらも仕事はあるんだろう。いいなりってのは少し考えがたいところだな」
「そこさ、ボネットの強運とでもいうのかな。いや、相当のキレ者だそうから、はじめから奴は計算していなかったとも言い切れないな。
　ボネットは、テムズ河口一帯の地権なんかも持ってるって話を聞いたぜ」

「テムズ河口一帯か。それは、例の東地区の再開発事業も当然からんでるんだろう？」

「相変わらず察しがいいな、その通りだ。あの後に、そのへんのことを俺なりに調べてみたんだが、ベケット達がロンドンに拠点を遷すことになったのも、どうやらボネットの口添えがあったらしい」

それからもマーロンは、ボネットに関することを教えてくれた。

もちろん、今回は情報を買いにきたのだから、金は払うつもりだ。

ベケット達がリバプールからロンドンに遷った理由は前に話してくれたので知っていたが、それをうまくことを運ぶよう、裏を合わせてくれたのがボネットだったわけだ。

他にも、ボネットがテムズ河口一帯の土地の権利を持っていることに関しても、マフィアの密輸に目をつむっていることが窺える。そして東地区再開発も奴が関わっているとなると、昨晩の倉庫や住宅街一帯も、ボネットが一口噛んでいると見て間違いない。

するとだ。これらのことからメイヤーの雇ったあの殺し屋が、このあたりの事実を知らなかったとは少々考えにくい。むしろ、メイヤーが語っていたことを思い出せばあの殺し屋は、ボネットが雇ったスパイだったと考えたほうがいい。まぁ、はじめからボネット配下の暗殺要員だったとも考えられるが。

ともかく、ボネットに命令されてあの殺し屋はメイヤーに近づき、メイヤーは見事にそれに食らいついたわけだ。そして、ここからは俺の推理になるが、ボネットは、もはやマフィア連中を見限ろうとしているのではないか、ということだ。

英国第三位という肩書をもった男のバックにいるほどの奴なのだ、利用できる奴はどこまでも利用するが必要なくなれば、必ず始末をつけようとするだろう。

俺のこれまでの経験からも、こういった権力者というのは多かれ少なかれ、必ずそういったことをやっている。ましてや、そんなポストにいて、若い頃から気に入らない奴らをたたき落としていった奴なのだ、そうでないはずがない。

政治家なんてのは、あくまで金持ちどもの駒にすぎない。ボネットのようなタイプの人間にとって、国内第三位の人間のバックにいるというのであれば、いつまでもマフィアなんかと組んでいたいとは思わないだろう。ましてや、奴に暗殺要員ないしはフリーの殺し屋を雇うような金とコネクションがあるなら、当然だ。

もしこれから先、マフィア連中との癒着が知れれば、せっかく築きあげてきたものが、瞬時にして瓦礫へと変わっていくのだ。権力を欲しがる人間にとって、マフィアみたいな連中より、世間的にいう公的機関を味方につけたほうが、はるかに建設的だと知っているのだから。

他にも、ボネットに関することを聞き出した俺は頭を回転させながら口を開いた。

「ボネットに関してはわかった。あんたはフランスからの客人といったが、誰なんだ、そいつは」

「ああ、間違いなくオーギュスト・ジャックモンドだろうな」

マーロンの話によれば、この六十近いフランス人の男はフランスではかなりやり手の経営者らしく、国内でもその筋では有名なのだという。

今回は、ジャックモンド含む数人の経営者らがわざわざロンドンにまで来たのは、ここロンドンをフランスから出て世界進出するための足掛かりの第一歩にするためで、国外初店舗を出すための視察なんだという。

「ジャックモンドは経営者だが、幾人もの後続の経営者を育て上げた奴だ。その経営手腕はその筋じゃ有名で、その名は業界じゃドーバー海峡をこえたここロンドンにまで届いてるくらいさ」

マーロンはそういうとグラスに余っていたスコッチを、一気に飲み下した。それを見た俺も、マーロンに習ってグラスのスコッチを一気に半分ほど飲み込む。

「ジャックモンドか。そいつに関しては何かないのか」

「こいつはいたって健全だ。まぁ、なにをもって健全とするのかは

別として、ボネットのような黒い噂なんかは聞かないな。純粋な経営者なんだろう」

そんなフランスからのゲストに対してあんな大規模なパーティーをやるくらいだから、ボネットのやつはやはり、かなり周りからの評価を気にするやつなのは間違いない。

おまけに、そんなやつが主催したパーティーにメイヤーのような学者も呼ばれるとなると、ボネットのやつはもしかしたら、はじめからこうなることも予想してメイヤーに取り入った可能性もある。

「マーロン、あんた、ボネットの出資先についてはわかるかな」

「色々あるぜ。鉄道や航空産業にまで出資しているみたいだった」

「他にはないか？　たとえば、研究の分野かなんかだ」

俺がそういうとマーロンは怪訝な表情で眉をひそめたが、すぐに眉を一度大きく上げて、すぐに元の表情に戻った。情報屋という職業柄、マーロンも薄々、俺が単なるなんでも屋ではないということに勘づいているかもしれない。

「……そういえば投資とは違うが、バーミンガムにあるボランティア団体に献金しているって話は聞いたことがある。そのボランティア団体の行動自体はてんで怪しいところはないんだ。まっとうな団体といっていい」

「その中に誰か有名な人物はいないだろうか」

「いるぜ。やはりチャールズ・メイヤーって名の遺伝子学者だ。他にも、地元の名士や政財界にも顔のきくやつもいるらしい」

……やはり。ボネットのような奴は下の人間を使わずに、自ら動いて対象に近づいていくはずだ。そのほうが、相手も警戒心を解きやすいためだ。

ボネットのやつは、もしなにかあった場合、人を介して知り合うより直接の知り合いであるほうが、色々と融通が利きやすいというのをわかっているのだ。

これでますますボネットが、はじめから駒として使うために、メイヤーに近づいたという風に考えたほうが良さそうだ。きっとメイ

ヤーのことを調べあげ、いらなくなったマフィア連中をけしかけるように仕向けていったのだ。

他にもいろんなやり取りがされたとは思うが、要約すればそんなところであると見てほぼ間違いない。今まで敵という敵を、全て葬ってきた男らしいから、そんなことは朝飯前だろう。

「そうそう、こいつはサービスで教えておいてやるぜ。ボネットと客人であるジャックモンドとは、元から知り合いらしいぞ。

ボネットのやつは学生の頃にパリに留学していたんだが、その大学で経営学の教鞭をとっていたのがジャックモンドだって話だ。

それとジャックモンドは当時、経営学者でありながら遺伝子学方面でも博士号をとってもいるらしい」

経営学者がまさか遺伝子学にまで手を出していたとは少しばかし驚くが、まぁ、全く関係のない分野の博士号を持っている人間自体は、学者の世界では決して珍しいことではない。日本でも近年ではヨーロッパ同様、全く違う分野で博士号を持っている者も出始めているらしいから、別におかしな話ではない。

それよりも俺が気になったのは、ジャックモンドが遺伝子学を勉強していたということだ。

遺伝子という、ボネットとジャックモンドの意外な共通点を見つけた俺には、一瞬にして全てが繋がったと確信できた。

ボネット自体が遺伝子について勉強していたのかは別にしても、先の血液の入ったケースをめぐる騒動から推測すれば、奴もまんざらでなかったと見るほうが自然だ。

おそらく、殺し屋の男は例の血液の入ったサンプルケースは、メイヤーに渡してないのではないのか。奴がメイヤーに渡そうとしたのは、同じようなケースに入れられた、あるいは中身はすでに他の物に変わった、全く別の物だったのではないのだろうか。

あの殺し屋がボネットの息がかかった奴であることは間違いないことであり、そのボネットは目的のためなら、どんなこともやる、あるいはやらせるような奴だ。そんな奴があのサンプルケースを、

メイヤーのような人間に渡すだろうか。
　はっきりいって考えにくいことだ。中身だけ別の物にすり替えて、あの取引場所に偽物を持って行かせたに決まっている。ましてやボネットは、意外なことに遺伝子学方面の知り合いと、ずっと以前から知り合いだったわけだから、あの血液に興味がなかったとは思えない。
　奴は遺伝子学という隠れた興味をダシにメイヤーに近づき、今回のマフィア一掃のための駒にしようと仕向けたのは、もはや疑いないことだと思える。
　何も知らない一般人なら、証拠もないのに何を……とでも聞こえてきそうなものだが、それこそ素人判断というやつ以外に言いようがないだろう。人を疑って当然という職業につくと、悟りでも開いたみたいに、とたんに物事が見え始めるものなのだ。この世は、決して綺麗事なんかでは回っていない。
　まぁ、この世が綺麗事で回っていないからこそ、たまにある、”美談”というやつに人々は感動するんだろう。そして、まだこの世の中も捨てたものじゃないというふうになるわけだ。
「ありがとうよ、知りたいことは大体わかったぜ」
　俺は大いに満足いく情報を聞けて頷いた。財布から無理矢理に詰め込んだ五十ポンド紙幣の札束から、適当に何枚か掴んで周りから見えないように、さっとマーロンのジャケットの内ポケットに突っ込む。そのあと、残りのスコッチを一気に胃の中に流し込むと、おもむろに席を立った。
「もういくのか」
「ああ、知りたかったことは知れたしな。これ以上、あんたの時間を邪魔するわけにもいかないさ」
「けっ、日本人ってのは、なんでそんなことを気にするんだ？　日本人は意外と心が狭いみたいだな」
「くっくっく。そういうなよ。俺も日本人の無駄に気をつかうところは、あまり好きじゃぁないさ。美徳とは思えないね。

だけど残念ながら今は仕事中なんでね、少しばかり急ぎの用事があるんだ」

俺は適当にマーロンをあしらい店を出た。今日は雲一つない快晴で、陽の光りも届いていてこの時期にしては珍しく暖かい。

それに今日は祝日とあってか人の往来が激しく、俺はあえてそのストリートを、チューブとは反対側に向かって歩き始めた。

さて、俺がこれから向かうのはシティのほうに向かっていく途中にある、武器屋だ。ロンドンは結構安全な街であるため、こういった裏の商売をあきなっている連中は多くない。この点は日本に近いだろう。

むしろ、隣は海峡を越えたパリなんかのほうがはるかに危険で、薄汚い街だ。ロンドンに流れてくる以前、ほんの少しの間だけパリに住んでいたことがあるが、花の都なんていう敬称とは裏腹に、どちらかというと陰鬱げな印象をもたせる街だった。

別に住むんであればパリでも良かった。あの街はなんでか外国人が自分を外国人と思わせなくさせてくれる、不思議な魅力があったからだ。

なのになぜこのロンドンに移り住んできたかというと、なんのことはない。仕事で少々トラブったのが原因だ。

フランスにはいわゆる秘密警察というのが存在していて、こいつらとなんの因果か揉めてしまったのだ。

秘密警察とはいったがもっといえば諜報機関で、フランス対外治安総局（ＤＧＳＥ）と呼ばれている機関だ。まぁ、ロシアのＳＶＲ、アメリカのＣＩＡと置き換えればいい。常任理事国には必ず、この手の諜報機関が存在している。

このフランスの機関は前身の機関である、防諜外国資料局（ＳＤＥＣＥ）と呼ばれた機関が一九八二年の政権交代を機に、名称をＤＧＳＥへと変わったことから現在に至るわけだが、もちろん、連中の仕事内容が変わったわけではない。相変わらず、世界中にスパイを差し向けて諜報活動を行っているのだ。

特に、かつてのフランス領だった国々には常に工作員を派遣していて、なにかあればすぐに対応できるようになっている。フランス領だった国々は、やはり反仏感情が強いため、それらから生じる反対活動、抵抗運動なんかの抑止にあたるというわけだ。

当然、抑止というのは政治的交渉のことではなく、血の報復なので、この諜報機関によって命を奪われた者は数知れない。

有名なのは二次大戦中の四〇年代に、アルジェリアで行われた諜報活動だ。この頃はまだＳＤＥＣＥではなく、情報活動中央局（ＢＣＲＡ）と呼ばれていたが、基本的な中身は言わずもながらだ。こいつらはアルジェリアでの一般市民もお構いなく虐殺してまわったこともあり、フランスは国際的な批難を浴びたこともある。

おまけにこの頃、アルジェリア側からスパイがフランス国内に潜入したという情報のために、それらと疑わしい人間はフランス人であれ、潔白の者であれ関係なしに処罰したことが、ますます国内からの批判、アルジェリア側との摩擦をうんだ。

そのために国内からは、ナチスに寝返った者もいたほどで、他にもアルジェリアをはじめ、アフリカのフランス植民地になっていた国々からは、ナチス・ドイツに肩入れしようとしていた国もあったのだ。

新世紀になった今もこういった歴史的な事実のために、フランス植民地だった国々からはドイツに対し、親独感情を持った国が少なくない。

俺がそんなＤＧＳＥと揉めたのは、単純な話だ。仕事で、ある人物を殺してほしいと依頼を受けた俺は、すぐさまそいつを始末しにいく準備をしていた。そして、いざその時を迎えた日、突然、俺の寝座に厳つい連中が押し入ってきたのだ。

なんとか、その不粋な連中を返り討ちにして仕事を済ませようとしたところ、今度も直前になって邪魔された。しかも相手はプロの殺し屋で、こいつをなんとか締め上げてみたところ、なんとＤＧＳＥだったのが判明した。

どうもターゲットのほうに、暗殺者が狙っているという匿名の電話がはいっていたらしい。俺は間抜けにも、そんなことも知らず暗殺ポイントに向かっていたことになる。

そして、この匿名の情報提供者こそ俺の依頼人で、後になってわかったことだが、そいつはＤＧＳＥの局員で幹部といっていい人間だった。つまり俺という殺し屋を雇ってダシに使うことで、自分の株をあげようとしたわけだ。

暗殺が失敗しても事前に知らせたことで、ターゲットからの信頼が得られる。暗殺が成功しても、やはりそいつにとっては好都合……どっちに転んでもおいしいということになるのだ。おまけにターゲットはＤＧＳＥの局長という大物だった。

もちろん、俺はコケにされた当然の権利を遂行すべく、依頼人だった男の脳みそをぶちまけてやったのは、まだ記憶に新しい。

こんなわけで、俺はフランスを離れることにしたのだ。いったんは日本に戻り、その後にここイギリスにやってきたのだ。

俺の好きなローリングストーンズやザ・フーといったバンドの生まれ故郷だったし、昔、ガキの時分の俺にとってヒーローだった、ジェームス・ボンド、シャーロック・ホームズを生んだ国といった、憧れみたいなものもあったかもしれない。

シティに向かってメインストリートを俺は、休日を楽しんでいるような面持ちをしながら、内心ではやや緊張した気分で歩いていた。というのも、マーロンのいた店を出てすぐに、尾行されているような気配を感じたのだ。

たまたま映ったビルの鏡みたいに研きあげられたガラスに、その尾行している奴を窺えることができたことで確信した。全く素人じみた尾行者は、おそらく店にいた連中の一人だ。店に入ったとき、店内にいた連中の服装を瞬時に見分けたが、そいつの服が、店の中にいた奴の一人の服と酷似していたのだ。

俺は何食わぬ顔で人々のあいだを縫って歩きながら、大勢の人が

立っている交差点にさりげなく近づいていった。そろそろ信号が、赤から青に変わろうとしていたからだ。

尾行者は、ガンでもつけているのかと思えるほどの視線で俺を見ている。実際に見たわけではなくても、背中にビンビン視線を感じさせてきていることから、それは間違いないだろう。

おそらく尾行者は、俺が交差点にきていることもあまり気にはしていまい。これだけの人間がいれば、たかが尾行者の一人や二人を撒くのに、なんの造作もない。

だが、かといってあまりに簡単に撒くわけにもいかない。尾行が素人全開なことをうかがわせることから、プロというわけではないだろうが尾行者には、なぜ俺をつけてきているのか、何者なのか、はっきりさせる必要はあるのだ。

交差点にくると、すぐ信号が変わった。人々が一斉に歩き始める。やや大股で、空いた隙間を蛇行するみたいにして進んでいく。あっという間にストリートを横断し、さらにその先にいる集団の中に紛れ込んでいった。

尾行者は焦ったのか小走りに俺のあとをつけてきた。それを気配で感じ取った俺は、ビルとビルの間の脇道にきたとき、さっとそこに入った。

脇道にはいると走りだした。きっと尾行者は俺を見失ったと思って、完全に焦っているにちがいない。

もちろん、こちらもただ闇くもに撒こうとしているわけじゃない。この先には、ハイドパークほどではないがわりと大きめの公園があり、そこに誘い込むつもりだった。

その公園はハイドパークに比べあまり人気（ひとけ）のある公園であるため、”尋問”するにはちょうど良い。

脇道もあまり人がいないので、走っている俺を見つけるのも決して難しくはあるまい。尾行者にこちらを見失ってもらっては困るのだ。

脇道の先にまでくると、目の前にある公園が目にはいり、ややス

ピードを落とす。公園の門から入ると、すぐにビルの陰になって見えなさそうな脇の木陰に身を隠した。

ここからなら、尾行者が近くにくればすぐにでもわかる。さてどうしてくれようか……。

尾行者の追ってきている様子を木陰からちらりと窺うと、ようやくそいつが脇道から出てきて、あたりをキョロキョロと見回しているところだった。

俺は、目の前の公園に行くか、それとも両側に続いている道を行くべきか迷っている男を、じっくりと観察していた。どうやら、他に尾行者はいないようだった。そもそも、対象に尾行が気付かれてしまうような素人の尾行をしているほどだから、多分一人だとは思っていた。

ともあれ、こうなるとこちらからしてみても好都合だ。幸い、この辺りはいま人影も一切ない。俺はいったん木陰に身を隠し、息をひそめた。

周りに人がいないこともあって、先行していた俺がいないとなると公園に入ったはずだと、男がこちらに向かって足早に歩いてくる。

公園に入ってくると、足が芝生の上にある落ち葉を踏みしめる音がして、すぐそばまで来たことがわかる。歩く音が最大になったと思われたとき、俺は木の陰から男の服の胸元とともに喉元を親指で思いきりつかみ、もう片方の手で男の右手を後ろ手に組ませて木にぶち当てた。

「よう、さっきから人の後ろをつけるなんて、どういうつもりだい」

「なっ、なにしやがる、放しやがれっ」

こちらが喉元を押さえているというのに、男はやかましいくらいの叫び声をあげた。俺は構うことなく男の喉元を親指で強く押さえ、さらに掴んでいる腕を思いきり締めあげる。

男がぐっという苦悶の呻き声をもらした。尾行していた男は、背丈が俺よりもいくらか低く、歳は三、四歳ほど年上と思われる男で、二十代半ばといったところの風貌をしていた。いや、白人は日本人

なんかと比べるといくらか老けて見えるので、実際にはまだ二十五にも達していないかもしれない。

「さて、あんたには答えてもらうぜ。なんで俺をつけていたんだ」

しゃべりやすいよう、喉元の指だけは放してやったが、まだ胸元を掴んだままにしておく。何かあっても、これならいつでも締めあげてやることができる。

「し、知らねえよ、おまえのことなんて。偶然、おまえと一緒の道を歩いてきていただけだろう」

「見え透いた嘘はやめるんだな。だったら俺が走りだしたとき、なんでおまえも走りだしたんだ。おまけに、そこの道を出てきたとき、明らかに俺を見失って狼狽していたじゃないか」

そうまくし立てると、男が押し黙る。俺はわずかに掴んでいる腕に力をこめた。

「さぁ、人がまだ優しいうちに吐いたほうがいいんじゃぁないか？先にいっておくが、あまり嘗めた態度をとらないほうがいいぜ。もしそんな行動をとったりしたら、俺はおまえの掴んでいる腕の骨をぶち折るくらいは簡単だ」

続けてまくし立てると、俺の本気が伝わったのか男は、わかった、しゃべるよと焦るようにいった。

「お、おれは人に頼まれておまえをつけてただけだ。別に恨みがあるとか、そんなんじゃねぇよ」

「誰に頼まれたって？」

「うう、知らねぇ……昨日になって突然、一人の日本人が俺に、今日おまえを尾行するよう頼んできたんだ。一年、二年じゃ到底稼げないような額のゲンナマを渡されたら、誰だってそうするだろっ？」

男が惨めに、早く放してくれと叫ぶ。だが、まだ男を放すわけにはいかない。おそらく、その日本人らしい男とは、昨晩の殺し屋であることはほぼ間違いないだろう。そうそう同じ日に、一連の出来事に関わっている人間を、あの殺し屋とは全く違う日本人がこんな素人を訪ねるわけがない。

となるとあの男は、はじめから俺を狙っていた可能性が高い。話の途中から、俺を始末しようなどといい始めた男だが、それが嘘で、はじめから始末する気でなければ、わざわざ俺を尾行させようなどとは思わなかったはずだ。

だが、その行動自体につじつまがあっても、その動機はなんなのかという疑問が残る。もちろん、今まで何人もの人間を地獄に堕としてきた俺なので、始末してきた人間の関係者が恨みをのんで依頼した、というのは考えられなくもないことだ。

だがあの男は、俺を狙っていたにしてはおかしい節があったのは否めない。奴が俺の名を知っていたのは間違いないにしても、なぜか顔だけは知らなかったのだ。だから俺が名を告げた際、妙に驚いていた。

いや、名を知っていて顔を知らなかったのは、もしかしたら俺の名は業界に知られていても、顔写真はまだだった可能性はあるはずなので、おかしいことではない。

奇妙だと思える点は、はじめから俺を狙っていたように思わせるのに、それでいながら名前しか知らなかった、という点だ。

奴の俺と出会うまでの行動は、俺を狙っていたと仮定したほうがつじつまがあうのに、どうして、俺の名前しか知らなかったのか……。

ターゲットにしているのなら、はじめからこちらの顔を知っていて当然のはずだ。なのに奴のあの態度は、間違いなく俺の顔を知っている風ではなかった。この矛盾は一体どういうことなのか……。

まぁいい。それは、この男をさらに締めあげればわかることもあるかもしれない。この男には、まだいくつか聞きたいことがあるのだ。

俺は時折、苦悶の呻きを漏らしている男にさらに質問をあびせ答えるよう、うながしていった。

第７３章

薄汚い地下から這いでてきた時は、すでに日も傾いてきていた。空が朱色になり、それが薄くなっていくとだんだんと紫っぽい色から青くなって、ついには黒に染まる。

そんな誰もが知り当たり前のことも、ふとした時に見上げてみてみれば、思いの外、感慨深い気分にさせられるものだ。

しかし、そんな気分とは裏腹に辺りには、すえた臭いが漂っていた。再開発が進むロンドンではあるが、ここだけは別だ。いまだ暗い雰囲気があり、何かあれば人間の一人や二人が消えても、なんの不思議もなさそうなほどなのだ。

ましてや、時間ももう夜になろうという時間だ。そういった雰囲気が、より一層深まっていく。事実、裏路地から出ると、ここに赴いた一時間ほどまでとは比べものにならないほど、ストリートを歩く人影が少なくなっていた。

小物の犯罪者らが、少しずつ動き始める時間帯になるわけだが、まぁ、そうだとしても、よほど刺激することがなければ大したことはない。連中は、そのほとんどが盗っ人やチンピラばかりだからだ。

一般人であっても、財布の中身をさっと出してしまえば、それだけでことなきを得ることが大半なのだ。いくら連中でも、殺人となればやはり、そうそうできるものではないのだ。

今の時代、たとえそれがチンピラであろうとホームレスであろうと、あらゆる底辺にいようとも階層の住み分けがなされているものなのだ。人間というのは、どんな状況であっても、常に自分よりも惨めな者をみれば、安心してしまうという心理からくる現象なのかもしれない。

さて、もし縦に階級分けをするとなれば、間違いなくロンドンの最下層ともいえる地区を歩いているのにはわけがあった。

俺はまず、昼にハイドパークをほぼまっすぐ、北に一キロほどいったところにある街の一画に、行きつけの武器屋がうっそりと店を構えている。いうまでもないが、わかりやすいようにはなっていない。古ぼけた小さなオフィスビルの中の地下一階に、ガンミュージアムと銘打たれているものだ。

名前の通り、これらはかつて二次大戦、米ソの冷戦時代の頃に英軍が使っていた武器で、目には見えないが壊れてしまっているために廃棄されるはずだったものを、軍からの承諾を得て、こうして展示しているらしい。

格段、この手の銃だなんだの武器に興味があるわけではないが、職業柄、自然とこういったものにも目がいくようにはなった。

昔は、こういった銃や戦闘機、戦車に潜水艦といった類いのものを興味津々に見ている連中など、やばい奴らだと思っていたものだと、つい思い出し笑いを浮かべてしまう。

今でこそ、職業人としてそれなりの知識を身につけたつもりだが、俺は今も昔もそういったものよりも、音楽を聴いたり、知的分野での読書なんかのほうがはるかに好きだ。まぁ、読書は沙弥佳からの影響も否めないが。

ガンミュージアムの番をしている男に話しかけると、すぐに内線でここの支配人が呼び出される。この支配人こそ、俺が使っている武器商人なのだ。

彼に武器がほしいと耳打ちすると、小さく頷いて彼は、いつもの場所に、と短く告げた。それに俺が頷くと、彼は再び奥に引っ込んでいった。

あとは取引するための、いつもの場所に行きさえすれば、そこに俺に合わせた武器が置いてあるというわけだ。そこに俺が武器と引き換えに金を置くという寸法で、そのほうがお互い足がつきにくいうえに、互いに信頼されてさえいれば、取引もスムースにいくのだ。

とりあえずは用事を終えることができはした。しかし、新たにやることができたため、すぐに移動しなくてはならない。俺は先ほど

締めあげた若いチンピラからの情報をたよりに、そこを訪れるつもりでいたからだ。

ガンミュージアムを出た俺は、さっそくそこを訪れるべくビルを出る。結局、あのチンピラから聞きだせたのはマフィアどもの根城と、マフィアどもが今になって騒ぎだしたことについてのみだった。

連中が騒ぎだしたことは事前にマーロンから聞いて知ってはいたが、あくまで推測の域を出ないものだった。もちろん、あの親父のことだからそれだけでも十分、納得のいくものだった。

あのチンピラから聞けたのは、やはりそれを補強するもので、さらにはそれだけでなく、連中同士だけの争いではなくなっているというものだった。

話によると、連中の中には今回の取引の失敗のために、ベケットら一味による報復だと叫んでいる者もいるらしい。連中同士の仲たがいだけでなく、組織内でも上からの命令に憤りを感じて、ひそかに行動を起こしていたのだという。今回のマフィア騒動は、こういった連中が騒ぎ立てているようだ。

ベケットの一味は誰がベケットを始末したのか、麻薬を買い取るはずだった一味はベケットらが、あるいはそれとは違う連中がやったのか。もう一方はこの二つ以外にも思いつくことがあるに決まっている。

つまり、今回の一件に関して、まだ連中は互いに誰がことの原因を作ったのかわかってはおらず、疑心暗鬼になっていることがこれらのことから理解できる。もしそいつがわかっているなら、こんな騒動を起こすはずがない。

それとともに、俺としても悠長に構えてはいられなくなってきたのも事実だった。いわゆる過激派とでも形称していいのか、この連中にとっては俺は間違いなく憎い相手であるはずなのだ。

ベケットが組織ぐるみで俺を雇ったと見られる限り、誰が俺を依頼しようと提案したのか、誰が俺のことを知っているのか、見当もつかない。

もし知っている人物がいるとして、そいつが他のマフィアどもに捕えられてしまったら……もちろん、実行犯である俺のことを喋るに違いない。連中のことだから、少しでも自分の助かる道があるのなら、俺のことなど簡単に見限るに決まっている。

やれやれ……こんなはずではなかったはずなのに、想定していた最悪のパターンで物事が動いている。しかし、いつまでもうるさくいっても仕方がないので俺は、ある紹介人を訪ねることにしたのだ。その人物は裏世界の住人には非常に顔のきく人物で、俺も何度か世話になったことがある。

今俺がロンドンでこんなにまでひっそり……とまではいかないが、裏世界の住人でありながら比較的穏やかに暮らせているのは、間違いなく彼のおかげといってもいい。

その名をデニスといって、ファミリーネームは聞かなかったのでわからない。そもそもがこの世界の住人達は、ファミリーネームを捨てている者も少なくないので、デニスもそんな人間である可能性はある。まぁ、本人が名乗らない以上は、そこらへんはどうでもいいだろう。

俺は、組織からの受給品や恩恵はなるべく受けないように心掛けているため、イギリスに入国する際に、パスポートを用意してくれたのがこのデニスだった。

デニスはまだこの業界に入りたての俺に、なんでか良く計らってくれた人物で、個人的にも数少ない信頼をもてる人物だ。なんで、こんなどこの馬の骨とも知れない俺に良くしてくれたのかはわからないが。

まぁ、今回はそのあたりを含めて訪ねるつもりだった。もしかすると、最悪を想定している俺としては、この国から出ないといけなくなることも考えられないわけではないのだ。そのためにもやはり一度、彼に会っておいたほうが良いと判断したということもある。

最寄りのチューブから彼の以前住んでいた地区に近い駅の、二駅手前で降りた。ここからは歩きでいくことになるのだが、そのため

にはルールがあった。彼がいつも住む場所を変えているからだった。
デニスはその顔の広さから、スコットランドヤードからも危険人物と指定され、ブラックリストに載っているほどの人物なのだ。
そこでそんな彼と接触するには、いくつかの手順が必要になってくる。まず、降りた駅から南に歩いて十分ほどのところにある、私設書籍箱に赴く必要がある。俺はその書籍箱の場所にまでくると、さっそく箱を開けて中を確かめた。
中には一枚の便箋が入れられており、その便箋の中にある紙を手にとって読むと、同地区内にある郵便局に行けと書かれてあった。文字は、筆跡鑑定されないようパソコンで打たれたものが印字されてあり、それ以外は一切書かれていない。
頼りはそれしかないので、黙って指示にしたがい俺はただちに、郵便局に行くことにした。イギリスは日本ほどは郵便局が多くなく、郵便局といっても数は限られる。
しかし、候補はいくつかあるわけだがそんなのはさしたる問題ではない。いうならばこれは、ぞくにいう陽動作戦の一つといっていい。
もっとも必要になるのは便箋の中の紙に書かれた内容ではなく、便箋につけられた郵便局の消印こそが、真に指示された郵便局ということになるのだ。
誰だって便箋の中に紙があれば、その紙に書かれたことが手掛かりになると考えるのが普通だ。これはそんな心理的な盲点をついた、いい作戦といえるだろう。
かといって、手紙の内容が重要じゃないというわけではない。これらの中にも何かしらのヒントがないとは言い切れないのだ。デニスは、そこに書かれた全てのものに注意を払えといっていたのだ。
俺は書かれている文章と、便箋袋に貼られている鳩のイラストの入った切手から、印字されている消印まで隈なく記憶し便箋袋はダストシュートにほうり込む。中身の紙はジャケットの内ポケットに突っ込んだ。これはデニスが、場所を探らせないための一つの手段

らしいので、それに従うつもりだ。
俺としても、彼を危険にさらすつもりはない。自分にとって必要な人間を危険にさらせば、いざというときの手段もその分減るわけだから、そういうわけにはいかないのだ。ましてや、それが有能な人間であればなおさらだ。
この汚れた世界だからこそ、信頼というものを失うことは文字通り、死に直結しているのである。
さて、便箋袋は捨てたが中身の手紙を捨てるわけにはいかない。便箋と中身の両方が必要になってくるかもしれないからだ。
デニスが以前、俺に教えてくれたやり方はこうだ。まず書簡のはいった場所へ行き、そこから中の手紙をとって確認する。そして便箋袋に押された消印の郵便局に行く。手紙の内容はあくまで、警察や公安といった連中からの目を欺くための狂言内容になっている。
さっそく消印に記されていた郵便局に向かうが、向かうあいだに次のヒントがなんであるかを予想しておく必要がある。郵便局員が何かを知っていて伝えてくるかもしれないし、局内にある、なにかしらのヒントを自力で探し出さなければならないかもしれないからだ。
これらは半ば運によるところが大きく、デニスの謎掛けゲームを攻略する必要があるのだ。まぁ、非常にイギリス人らしい、手の込んだやり口といえる。
これがおおまかな手順だ。こういった伝言推理ゲームが二つか三つあったあと、最後に記されることになる場所にデニスがいる、あるいはデニスの使者がいるということになる。
郵便局に着くと、局内にはそろそろ窓口閉店の時間とあって、局員らは慌ただしく動いていた。窓口の閉店となると、俺としても早くしなければならざるをえない。
幸か不幸か、窓口はすべて対応していることもあって、こちらに注意を向ける者はいなかった。俺以外にもまだ数人の待っている客

がいることから、まだしばらくは時間が稼げそうだ。
ロビーの端にいすわった俺は、注意深く局内を見渡した。壁は昔ながらの石の壁だが、床はきちんと、大理石から薄く切り出したものを何百枚も敷き詰めてある。わりと歴史のある郵便局のようだ。
これは郵便局いがいにも銀行などにもいえることだが、ヨーロッパではこういった昔ながらからの場所に拠を構えているものは、非常に歴史が古く、対応する窓口カウンターもやり方がそのまま昔のままなのだ。
ここは大きな郵便局であるため、天井もビルの吹き抜けといわんばかりに高く、人の話し声から書類をめくる音、さらには人々の動く音が広いホールに反響して、かなりうるさく聞こえる。
また、ホール内に立てられているいくつもの四角柱には、それぞれの面に四方を囲むみたいにして、大きな鏡が取り付けられてあった。それが一つの防犯に繋がっているのかもしれない。
俺はジャケットから手紙をとりだして再度、内容の文を確かめた。郵便局に行け、何度見ても文面には英語でそう書かれているだけだ。これ以外のヒントは一切ない。
となると、だ。局員の誰かがなにかしらの伝言を受け取っていて、それを俺に言おうとしているか。あるいは、局内のどこかにヒントが隠されているかだが……。手紙から顔をあげ改めて局内を眺めてみた。
ほんの少しの時間だったはずなのに、窓口の局員たちは次々に対応をし終えて、閉店業務にはいっていた。空いた窓口に数人いた客たちもそこへいって、何かやり取りをしている。
すると局内を、日本でも聞き馴染みのある曲が流れはじめた。よく、帰り時を示すときに流される、『家路』だ。この曲が流れると、対応のしていない窓口からは次々に局員が窓口カウンターではなく、奥にある自分のデスクのほうへと移動していっている。
この様子だと局員に、何かしらのヒントを与えられている可能性はなさそうだ。元々、自力でやらなくてはデニスに会う資格は与え

られないというもので、そう考えてみると人に何かを聞かなくてはならないというのは、はじめから選択肢としてないも同然かもしれない。

しかし、こうも与えられているヒントがないとなると、本当にここで合っているのかといった疑念も浮かぶ。そんな間抜け、かつ、嫌な考えを軽くかぶりを振って否定した。

まさか。デニスの伝言ゲームのルールを考えれば、間違っているなどとはありえない。知的なゲームは、小難しくはしてあっても必ず、わかる人間にはわかるように作られているはずだ。

全くわからないように作ってしまえば、それはただの自己満足でしかないし、なにより知的な人間が秘匿しようとしながらも、それらをほのめかすみたいにすることで、これはこうなんだ、自分は知っているんだというアピールができない。ヒントが全くないとすれば、それはゲームとして意味がないのだ。

「お客様、本日はどのようなご用件でございましょう」

デニスとの無言のゲームに頭を回転させていたところ、六十は過ぎてあと一、二年もすれば定年、といった初老の男性局員が声をかけてきた。身なりからみると、典型的なイギリス紳士を絵にかいたみたいに、制服をきっちりと着込んでいる。ちなみに、イギリスの定年は日本よりも五年長く、六十五までだ。

「ああ、いや。探し物があったかもしれないと思ってきてみたんだが、違ったかもしれないんだ」

自分でも苦しいかと思える言い訳に、苦笑いを浮かべて肩をすくめた。

「探し物でございますか？　どんな物でしょう」

「あー……」

そういわれることまで予想していたにも関わらず、どういえばいいのかまでは全く思いつくことがなく、いい澱んだ。

「失礼、紙とペンをお持ちいたしましょう」

初老の局員はそんな俺の態度を、言葉では言い表しにくいと判断

したようで背を向けて、まだ空いている窓口カウンターに移動していった。

この隙に逃げようかとも思ったが、そういうわけにもいかない。ここのどこかに伝言ゲームの次のヒントが隠されているはずなのだ。

それでもなにも考えが浮かばずに、ふと入口のほうを見たところフロアを磨きにきたのか、ビルの清掃員が入ってきた。同時に、窓口カウンターを越えた先にある壁にかかっていた時計が定時刻を知らせ、下の部分から、ぽっぽぽっぽとおもちゃの鳩がでてきてうるさく鳴いた。たまたま自分のいる位置から見えた鏡に、おもちゃの鳩が見えたのだ。

しかし、それがヒントになった。その鏡に映った鳩が、あの便箋に貼られていた切手のイラストと似たような構図になっていたのだ。

「お待たせしました、お客様」

先ほどの初老の局員が手にペンと紙を持って、再びやってきた。

「今日は清掃員がきているんだな」

何気なく、そうつぶやいていた。

「はて、清掃は今日ではなく明日だったと記憶しておるんですが……どういうことだ」

初老の局員は、入ってきた清掃員のほうを見やりながら、怪訝そうに告げた。

「今日じゃない？」

局員のなかば独り言に近いつぶやきに、俺はまだ鳴いている鳩が映った鏡のほうを見た。まさか……。

「すまない。せっかく持ってきてくれたのになんなんだが、やはりここにはなかったみたいだ」

「はぁ……」

突然の俺の言葉に、局員は目を少し見開いてつぶやいた。なんなんだ突然、とでも思っているのかもしれない。

それでも局員は、礼儀正しく頭をさげて入ってきた清掃員のほうに歩みよっていった。どうやら、彼はここの責任者かなにかなのだ

ろう。

局員が清掃員のほうに向かっていったのを見計らい、ようやく鳴くのをやめ再び時計の中に引っ込んだ鳩が映っていた鏡に、足早に向かった。幸い、誰もこちらを見ている者はいない。

鏡の前にきた俺は、さっそく鏡になにかないか手短に調べてみた。見たところ、これといって何か書かれているわけでもない、どこにでもある普通の鏡だ。だが、特定の場所から見た場合にのみ、イラストと似たような構図になるのであれば、これが偶然とは思えない。

偶然だとしても、もしデニス、あるいはその周りの連中がこのことを知ったら、なにかそれらしいものを仕込むはずだ。俺ならそうする。

もちろん、外れである可能性もないわけではない。けれど、外れるかもしれないと弱気になったままでは、結局はなにも進展はしないのだから、調べてみるだけの価値はあるはずだ。

そういうわけで、俺はこの鏡の表面に触れようとして、思いついたようにそっと下から裏側を覗きこんでみた。すると鏡の裏側に、なにかが挟み込まれてあった。

鏡を持って、柱との間にできた隙間に手をいれて、それを素早く抜き取った。

「こいつだ。間違いない」

誰にも聞こえないような、小さな声で一人つぶやいた。こんなところに不自然に挟み込まれている一枚の紙が、次の招待状でないはずがない。

俺は人目を避けるために柱の裏に回り込み、折りたたまれていた紙をすぐに開いて確認した。清掃員からある物を受け取ること。文面には簡潔にそう書かれていた。

紙をジャケットのポケットに突っ込んで、俺は先ほどの局員に口うるさく、なにかいわれている清掃員のほうへ歩みよっていった。

「まぁまぁ、間違いは誰にでもあるさ。そう咎めることもないだろう」

とりあえず客である俺にそういわれると、さすがの初老局員もバツが悪そうにしている。普段は、あまり客の前ではそんな姿は見せないよう、徹底しているのだろう。

「……まあいい。今度からはもっと気をつけてくださいよ」

そういい締め、初老局員は俺にたいして軽く会釈して立ち去った。話によると、会社には今日、この郵便局の清掃が予定されていたらしく、わざわざきたらこんな対応で困惑していたらしい。

「……悪いな、あんたのおかげで助かったぜ」

「いいさ。それよりも、デニスから何かメッセージを受け取ってるはずだ。そいつをよこしてくれ」

「あ？　誰だって？」

眉をひそめて、清掃員はなにをいってるんだと言わんばかりの怪訝そうな態度で、そういった。

「おいおい、あんたこそなにいってるんだ」

それでも清掃員の態度は変わらず、その態度からは本当に何も知らなさそうだ。もちろん紙に書かれていたことを信じるとすれば、彼として考えられるのはこの清掃員くらいしか考えられないが、どうにも違和感があった。

「ったく、最近ついてないぜ。わけのわからんこと聞かれるわ、じいさんにどやされるわ……」

ぶつぶつと独り言をいいながら、彼は仕事のために広げていた道具を直し始めていた。そんな彼を見ていると俺はふと、あることに気がついた。清掃員から受け取るよう指示されてはいても、必ずしもそいつがわかるように口伝されているわけではなく、わからないように暗号化されているんではないかと。

典型的なイギリス人としての気質を持ち合わせたデニスのことだ、脳みそをひねらせなければわからないというのは、十二分にありうる話だ。いや、むしろはじめから、それが当たり前と考えるべきだった。

この清掃員がなにも聞かされてないとなるとあと考えられるのは、

清掃員が身につけているものの何かがヒントにされているか、彼が乗ってきた車かだろう。それ以外は、清掃員である彼とは関係のないものばかりなので、あまり考えられない可能性だ。

ため息をつき、道具をしまい終えようとしている彼を見る限り、あまり暗号化されたヒントを身につけているわけではないようだ。ポケットに何か入れてあればわかりようもないが、それはないだろう。隠すようなヒントなどであれば、はじめからヒントとして隠す必要がない。

となると、外に廻してあるはずであろう、車に焦点がうつる。車となれば必ずある、ナンバープレートだ。こいつになら、思いつくのはこれくらいしかない。

もちろん、それ以外にもなにかないとは言い切れないので、まだ外に出る気配のない清掃員よりも早く、車のところにまでいってみる必要がある。少々、無理があるかもしれなくとも、今はそれに賭けるしかない。

俺は早々にこの場をはなれ、外に停めてあるはずの清掃会社の車のあたりにおもむいた。白に青やら赤、黄色やらといった極彩色にいろどられたバンで、タクシーのように、上にはＣＬＥＡＮＩＮＧと書かれてあるランプが取り付けられてあったので、すぐにわかった。

当然、まずはもっともそれらしいと思われる、ナンバープレートを盗み見た。ＬＯの二文字から始まるアルファベット四文字と、その後ろに数字が並ぶ形式のナンバープレートは、ＥＵでは統一されている形式だ。ＬＯとは、登録地がロンドンであることを示している。ちなみにイギリスでは日本やアメリカと違い、ナンバープレートは全てプラスチック製だ。

しっかりと記憶し、他になにかヒントになりえそうなものがないか、手短にバンを調べる。

調べてみたところ、特にそれらしいものは見当たらない。見当たらないが、それがまた頭の痛くなる事実にもなった。ナンバープレ

ートに書かれてあるものがなんらかのキーなり、パスワードであったりするかもしれないが、仮にそうであっても、次はどこに向かえばいいのか……それが一切わからないのだ。

（くそ……一体、どうしろっていうんだ）

こうも手掛かりがないと本当にここで合っていたのか、やはり不安になってしまう。しかし、鏡の後ろに紙があったという事実が、その不安を打ち消した。

そうなると、俺が紙を見つけてからここまでの間のやりとりに、なんらかのヒントが隠されてある、と見ていいだろう。何か見落としていないか……。

その間のやり取りを順を追って思い出してみたところ、あの清掃員がつぶやいていた独り言を思い出した。ほんのささいなものだったが、もしかすると、そうかもしれない。

『ったく、最近ついてないぜ。わけのわからんこと聞かれるわ、じいさんにどやされるわ……』

わけのわからんこと……これが、次のヒントに違いない。俺は直感でそう思った。ここまでの短いやり取りのあいだで、何かそれらしいことがあったとすれば、これ以外にはない。

俺は天啓でもうけたかのごとく、すぐさま引き返して、先ほどの清掃員のところに戻ろうとした。しかし、彼はすでに郵便局を出ており、こちらに仕事道具を持って向かってきていた。

「なんだ、あんた。まだなにか用なのかい」

「ああ、たった今、あんたに用事ができたよ。

あんた、さっきわけのわからんことを聞かされたと言っていたな。一体どんなことを聞かされた」

「はあ？　なにいってるんだ、あんた」

わけがわからないといった表情をしている清掃員に、とにかく教えろと、なかばわめき立てるみたいにしていうと、彼は肩をすくめて告げた。

「まあ、いいけどよ。おかしな話だぜ。今朝、日課になってるビル

の玄関を掃除していたら、そばをホームレスのじいさんが通っておれにわめき立ててきたんだ。バスに乗れバスに乗れってな。

多分、バンに乗ってきてたおれに何か思うことでもあったんだろうな」

くつくつと笑う清掃員にたいして、俺は適当に相槌をうちながら考えを巡らせた。

バスに乗れ……間違いなく、これは次のメッセージだ。当然、乗るバスは、ロンドンの代名詞のひとつである二階建てのバスだ。今は赤い色をしたバスは旧型となり廃止されているが、それでも観光ルートを回るものとして少なからず動いている。まぁ、なかば赤いバス自体が、ちょっとした近代文化遺産のようなものになっているわけだ。

現在は、新型も二階建てになっていたりするが、旧型にはなかった乗車口に自動扉が取り付けてあったり、車掌がいたことに対し、ワンマンになっていたりなど、経営の効率化とサービスの向上がされているらしい。

そんなバスの路線に乗らなくてはならないわけだが、きっとナンバープレートの数字が、乗らなくてはならないバス停の数字にあてられていると推測される。プレートの数字は『８１９４』の四つだったので、単純に考えて、乗るバス停と降りるバス停の数字であるとわかる。

清掃員に小さく礼をいい、すぐに近くのバス停を探した。探すとはいうが、大都市に相応しく、ほんの一ブロックか二ブロックに一つはバス停があるのでたいしたことはない。

やはり、歩きはじめて二、三分もすると、すぐにバス停が見つかった。バス停に書かれている数字を見ると、『６８』と書かれてあった。『８１』のバス停に行くには、ここからだと二十分はかかりそうな場所にあるようだ。

ちなみにロンドンのバスは、各国の都市にある地下鉄のように、乗り換えができるバス停が存在している。数が多いわけではないが、

東西南北に向かう路線への乗り換えが可能になっているのだ。こうすれば、ルートを無駄にたくさん回りすぎずにすむというわけだ。中心の渋滞をなるべく避けようとする配慮からしい。

『９４』番のバス停で降りた俺は、入れ代わりでバスに乗り込もうとしてきた客から、すれ違いさまにさっと何かを受け渡された。ここまで自分のとってきた行動が正しかったということだ。

バスが次の停留所にむかって走りさっていくのを見計らい、素早く手渡されたものを見ると、一本の鍵であった。家やビルの管理キーとは違って小さな鍵で、小さな箱か何かの鍵に思えた。

俺が小さな箱の鍵と思えたのは、これが銀行の貸し金庫にある鍵と同じように思えたからだ。おまけに、目の前にはこしらえてあったみたいに銀行だ。

「ここしかないよな」

もうここまできたのだから、信じていくしかない。俺は意を決して、銀行の中へと入っていった。銀行は郵便局に続いて、そろそろ窓口終了の時間にきているようだ。

忙しそうにしている行員の女に声をかけ、貸し金庫が使えないか尋ねてみると、快く案内してくれた。シティの銀行と比べると、あまり厳重なものでない貸し金庫なのかもしれない。

案内されると行員の女は、それではごゆっくりと一礼して来た通路を引き返していった。このシステムはかなり古いシステムなので、金庫自体にはあまり重要な物はないだろう。しかし、今の俺にとっては必要なことだ。

目の前にあらわれた金庫は、引き出し状の金庫になっていて、それがいくつも納められてあった。それら一つ一つが個人の貸し金庫になっているわけだが、本当にここでいいのか、いまひとつ判断によわるところだ。

俺は目の前の金庫群の一つ一つにつけられてある、ナンバープレートを見つけて確認していく。おそらく、先ほどの車のナンバーと

同じナンバーがあるはずだ。それがこの鍵の金庫に違いない。確証などないがここまでこれたのだ、自分の判断を信じたほうがいい。

『８１９４』のプレートを探しているうちに、『８』から始まるプレート群があらわれた。固唾を飲みながら近い数字を探すと、『８１９３』と書かれたプレートの次に、たしかに『８１９４』の数字が書かれたプレートがあった。

こいつで合っているはずだ。俺は渡された鍵を、ナンバープレートの横にある鍵穴に差し込んで回す。カチリという控えめな音がして、その金庫の鍵があいた。結果からいえば、これで合っていたというわけだ。

金庫をあけて中にあるケースを取り出す。ケース自体にはなんの錠もないので、開けることはわけないが、問題はなにが入っているのかという点だ。経験上、もうそろそろデニスの居場所がわかるところにきているはずだが、これを見る限りではまだ何かあるかもしれない。

ケースを台におき素早くあけると、中には一枚の書面が入っていた。俺はそれを見て、思わずニヤリと唇を歪ませた。これは典型的な暗号文を記したものなのだ。

書面に書かれてある文章を、定められた数に従って文字を飛ばしていく。三という数字であれば、その文字から三文字飛ばした文字を。四であれば、そこから四文字飛ばすといった具合だ。

今回は、当然ながら『８１９４』なので最初の文字から八文字飛ばし、次の文字は一文字を、次は九文字を飛ばして文字読んでいく。それを繰り返していくと、一つの文章が浮かび上がってくるという、かなり古典的な方法がデニスらしいやり方だ。

すると、一つの文章が浮かび上がった。そこには、東地区にあるＩ地区の工業地帯の地名が記されていたのだ。そこで待つと明記されてある地域は、俺の寝座からほんの二駅のところにある地域だ。どうやら、デニスのやつはかなり俺の近くにいたらしい。

あの辺りは工業地帯とはいっても古い地域で、昔は石炭を錬成し

たりするのに地下にまで工場（こうば）を作ってあり、そのためにちょっとしたアンダーグラウンドタウンになっている場所もあると聞いたことがある。

今の時代、アンダーグラウンドタウンなんて見かけなくなってしまったそうだが、その跡地なんかを、やはり根城にしている者はまだいるらしいのだ。

デニスのことだから、地下にいるとは言い切れないが、だからこそ地下に潜っているともいえなくもない。だからこそ、奴はいまだ警察から何十年も姿を消し続けていることができるのだ。

いたる所に拠点を遷し続けるデニスも、ようやく、それらしい場所に身をおいたようだ。それでもあと一年としないうちに、そこから姿を消してまたどこかにひっそりと、息をひそめるに違いない。

普通であれば、こんなにまで拠点を変えるのは危険きわまりないが、それを簡単に行ってしまうあたり、デニスの凄さであり、彼を必要としている人間達からもそのために協力させることができる、重要な人物であることが窺えるというものだ。

ともあれ、なかばわらにも縋るようなものではあったが、ようやく、デニスの謎解きゲームも終わりに近づいたというわけだ。

俺は近くのチューブを経由して、Ｉ駅を降りた。そこから一昔、あるいは二昔は前に建てられたと思われそうな小さい雑居ビルが乱立している路地を、適当に進んでいった。これらの路地は昔の名残で、地下に入るカムフラージュのために建てられたものがあり、そのせいでどこかに地下に入る入口に通じているのだ。

駅周辺はそうでもないのに、一歩奥まったところに入り込めば、たちまちここらは半世紀前、一世紀前の東地区を彷彿とさせるような治安の良くない雰囲気が漂い始める。俺の住むアパートもお世辞に治安が良いとは言い難いが、ここらはそれ以上だ。

辺りにはゴミが散乱していて、一体いつそこに捨てられたのかすらわからない大きなゴミ袋がいくつもあった。それだけならまだしも、野良猫なのか野良犬なのか、はたまたホームレスのものかと思

わせる、糞尿すら転がっているのだ。
もちろん、何に使ったのかすら想像もつかないような、化学物質のカスなんかと一緒にだ。まぁ、それでも昔のパリに比べればマシだというから、昔のロンドンやパリの路地など想像したくもない。
それらの放つ臭いが混じり合い、思わず眉をひそめて息をとめた。地上こそこんなだが、地下はそうでもない。なので地下に入るまでのあいだ、我慢すればいいだけのことだ。
そうしている間に、視線の先に地下へと続く入口が目にはいった。あとは、地下のどこかにいるはずのデニスに会えればいい。
俺は一人、小さく頷きながら地下へ続く道を進んでいった。

第７４章

怒鳴るような声と雑踏と話し声のまじった喧騒が、耳をつんざくように響く。いくつもの屋台が立ち並び、漂ってくる香ばしい匂いが行く人々の目と鼻を楽しませていた。

ロンドンの中華街では、週末の二日間になると恒例になる屋台が立ち並ぶ。今日はその週末の一日目であり、仕事あがりのサラリーマンや遅めの買い物に主婦、さらにカップル、女同士で、男が数人で……と様々な人々が行き交い、屋台の料理に舌鼓をうっている。

このロンドンの中華街は、数あるヨーロッパの中華街のなかで最大のものだ。日本の横浜にある中華街も大きいほうだと聞くが、ロンドンのものもそれに引けをとらないほどの規模だ。パリにも大きな中華街があり有名であるが、ロンドンのものと比べると規模はかなり小さい。

いや、正確には横浜やロンドンの規模の中華街になれれば、どこの街の中華街でも間違いなく小さく感じるだろう。まぁ、全ての中華街を廻ったわけでもないので、なんともいえないところだが。

今回、この中華街にきたのは先ほど依頼しておいた武器を手に入れるためだった。今向かっている店に、俺が依頼しておいた武器が届けられているはずだ。そのため俺は、行き交う人々で賑わう屋台には目もくれずに一人、足早に目的の場所へ歩いていた。

中華街の、けっして幅のないメインストリートに立ち並ぶ屋台通りの、中腹あたりを左に折れた。そこから四、五十メートルほどいったところを、今度は右に曲がる。

路地に入って、すぐの奥まったところにある雑居ビルの一階と二階に構えた店があった。武器の受け渡し場所として、たまに世話になることがある中華料理店だ。

俺はそのビルの脇から裏に廻った。裏には従業員専用の出入口が

あり、その出入口の横にある換気用の窓が開いている。その窓ガラスを六回、やや強めに叩いた。

すると窓があき、そこから囁き声がもれた。

「頼まれた物、届いてるヨ」

「ありがとよ。代金だ」

窓から聞こえてきた片言の日本語の主に代金の束を渡し、同時に茶色いボロボロの紙袋に入った武器を受け取った。

「アリガトネ」

やはり片言な日本語のあと、そこまで強くする理由もないだろうと思えるほどの勢いで、窓が閉じられた。まるで、これ以上のは会話は拒否しているみたいだ。まぁ、別にそういうわけでなく、たんに中国人に愛想いいやつなんていないだけの話だ。

今まで何度か聞いてきた声と行動だが、その人物の顔をみたことがあるわけではない。あくまで、向こうはただの受け渡しだけで、それ以外は全く関与しない。だから俺の依頼した物は、知りようもないことだ。

もっといえば、知ってはいるが知らないというのを、徹底しているといったほうが正しいだろう。中国人は善くも悪くも、我関せずなのだ。ついでにいっておくと、愛想もないので、今のような行動になる。

日本人であれば、怒ってるのかと思わせるほどまでに物を動かしたり、ドアや窓を閉じたりはしない。まぁ、そこらへんに民族性だとか国民性といったものが出やすいのは確かではある。

外国に住んでいると、そういったことに日本人の良さというのを感じてしまうものだ。

そんなことを思いながら俺は、早々に店を離れた。そろそろマフィア連中も、俺のことを勘づきはじめていてもおかしくないはずだ。奴らに泡をふかせてやるには、はっきりいってこの程度の装備では無意味だ。

そこで俺がとった作戦はこうだ。マフィア連中にとって、一番の

敵は自身達ではなく、ボネットと呼ばれる一人の男だと信じさせることだ。幹部連中だって、いつまでもボネットの影に怯えたくはないだろう。

別にマフィアなんていくらだって始末してやったっていいが、さすがにそれではこちらの分が悪い。全員を相手にするとなると、何百人と相手にしなければならないのだ。

もちろん、どさくさに紛れて幹部連中を始末するという選択肢も、十分に考えられることだがそいつは一先ず置いておくことにする。とりあえずは、狙いをボネット一人に絞っておいたほうがいい。

ボネットを始末する算段をつけるために、まずやっておかなければはらないことがあった。本当に面倒ではあるが、ボネットのことを良く思っていない連中のところに行き、根回しをしておく必要があるのだ。そのために先ほど俺は、デニスの根城に赴いたのだ。

中華街でタクシーをつかまえ、行き先の少し手前で乗り捨てた俺は、そこから歩いて古ぼけた雑居ビル群の中で一際目立つ、近代的で新しいビルにやってきた。

いくつもの企業がテナントとしてはいっているビルで、その最上階に目的の連中がとぐろを巻いている。これはデニスの教えてくれたことだった。

吹き抜けになったロビーを抜けて、エレベーターの前にまでくると、ちょうど良く、エレベーターが下りてきていた。上昇ボタンを押してエレベーターに乗り込み、最上階へのボタンを押す。

すぐさまエレベーターは上昇をはじめ、ものの一分と経たずに最上階にまであがった。最近のエレベーターは昔にくらべ、本当に速くなったものだ。

エレベーターを降りてそのままっすぐいった先に、例の場所がすでに視線の先にある。廊下は灰色がかった青い絨毯になっていて、それがずっと廊下の先まで伸びている。

壁は白く、両側に等間隔に絵画が飾られてあった。さながら、ち

ょっとした美術館のようでもある。俺はそんな廊下をいつもみたいに、やや大股に歩いて廊下の先にある観音扉の前にまできた。

ノックすることもなく扉を開けてみると、中にいた連中は突然の訪問者に驚きの表情を向けた。まぁ、当然の反応かもしれないが。

「……何者だね」

中にいたのは五人で、その内の一人が驚きの顔からすぐに怪訝そうな顔で、そう聞いてきた。すでに、次はどうするべきかという顔になっている。

（こいつか）

肝っ玉の据わり具合から、たった一言しか発していないがそのしゃべり方から判断して、この男こそ、デニスから教わった人物に違いない。ボネットの政敵であり、今までのあいだ唯一、ボネットからの執拗な政治戦をかわしてきた人物だ。

マーロンの親父からは、全て葬ってきたという話を聞いていたから、まさかそんな人物がいるとは思わなかった。けれど、何事にも絶対なんてことはないのだから、むしろ当たり前であるともいえるかもしれない。

「あんたにちょいと話があってきた」

「話？」

チラリと他の四人を目配せすると、すぐに男が気付いて人払いするよう言い付けた。男の二人だけになると、俺はさっそく話を切り出した。

「……ブルース・テイラー、ウェールズ、カーディフ出身の年齢四十八歳。十六のときに家族とともにロンドンに移住。ロンドンにある一流の高校、大学、大学院に通い、大学院時代にボネットと出会って以来、互いをライバル視。

ボネットが裏で政治家を操るに対し、あんたは逆に政治家として活動。ボネットの政略をかわしながら、保守派の番頭として、次の選挙では代表として立候補する予定。

それに伴い、最近ではマフィアからの実力行使によって幾度か命

を狙われていて、つい何ヶ月か前に殺し屋に殺されかけてからは、プライベートでの外出はしていない……まぁ、他にもまだあるが、ざっとこんなところでいいかな」

俺が説明してみせると、テイラーは無言のまま目を細めた。

「私が次回の選挙で立候補することは、まだマスコミにも、誰にもいってないはずだが……側近の者以外には誰にもね。誰かリークしたと考えるべきかな」

「多分、誰もリークはしてないと思うぜ。しかし、そういった情報や動きは、わかる人間にはわかっちまうもんだろう、テイラーさんよ」

「……ふむ。それで、君は一体どんな用件で私のところに来たというのかね」

テイラーのしゃべり方は上流階級にありがちな、どこか上からものをいっているようなしゃべり方だった。それにしても、ノックもなしに入ってきて突然、人払いさせるような人間に対してなんの畏れを抱いている様子がないのはさすがだ。

しかも、命が狙われているという事実を知っていることより、選挙に出ようとしていることを知っている、ということのほうに食いついてくるあたり、冷静にきちんと物事を受け止めている証拠だろう。国の次期トップを狙おうとするだけの、最低限の器はあるというわけか。

「あんた今、外出は控えているわけだが、それがなんでかは知っているかな？」

「……私が出馬することを誰も知らないとなれば、誰か私のことを気に入らない政敵あたりが、出馬とは関係なしに始末しようとした、といったところかな」

この言い分で気付いた。テイラーは、自分を狙っている連中の背後に誰がいるのか、薄々ながら勘づきはじめているようだ。

「その様子じゃぁ、誰があんたを狙ってるってのを口にしたところで、あまり有益な情報にはならなさそうだな」

いつもとやや勝手の違う会話に肩透かしを食らった俺は、苦笑して肩をすくめた。わずかな会話だけでよくわかった。この男は、本当にトップになるためならば危険であっても自分の身を投じて、政治の汚い世界で本気で戦っているのだと。

つまり、そのためであれば自分の命が狙われるのも仕方ない、自分はすでに半分は死んだも同然であると思っているからこその、この落ち着き払った態度でいれるのだ。

「いや、知っているというのであれば、是非とも教えてもらいたい。今はこんな状態だが、私としても、いつまでも引っ込んでいるわけにもいかない」

「別に教えるのは構わないが、あんた、すでにわかってるんじゃぁないのか」

「すでに、何人かの目星はついている。しかし、決定的な証拠がないのだよ。だから教えてもらえるのなら、教えてもらいたい。もちろん、ただでとは言わんさ」

ニヤリと口を歪めた男に、俺はやれやれと小さくかぶりを振った。どうやら、この男は筋金入りの政治家のようだ。紳士的に振る舞ってはいるが、その情報を元にあれやこれやと、いかにして自分に有利な方向へもっていくか、考えはじめているのだろう。

「目星がついているってのなら、単刀直入にいおう。あんたを狙ったのはマフィアだぜ。そして、そいつらをけしかけて裏から操っているのがボネットの奴だ。

他にも奴は、自分の手元に暗殺要員を置いてる。先日、あんたが暗殺されかけたときの犯人はそいつさ」

「やはりボネットか。彼は私のことが気に入らないらしいからな」

真実を告げても、テイラーは全く怖じけづく様子はない。むしろ確実なことを知って、納得したといった表情をして頷いている。

「ついでにいうと、奴はあんたの首相への道を、確実に潰すだろうよ」

「なぜだね」

「簡単なことさ。あんたの後援者たちを裏で買収しようとしてるらしい。このままだと、あんたは確実に落ちるぜ。ついでに落選を理由に、あんたの政治生命すら奪いかねない計画を立ててるって話もあったな」

最後のは脚色だが、まぁ構わないだろう。この手のタイプの人間は、こういっておけばどうにかしようとするはずなので、何かしら俺に助言なりを求めてくるに違いないと踏んだのだ。

「つまり、君はボネットをどうしようというのかな」

「実をいうとあんた以外にも、ボネットのことを目の上のたんこぶみたいに思っている連中がいる。そいつらは訳あってボネットの言いなりになってるみたいなんだが、場合によっては、ボネットに一泡ふかしてやりたいと考えてるらしい」

「つまり、どういいたいんだね」

テイラーは、ぐっと身を前にのめり出し俺の話に耳を傾けだした。本人は気付いてないかもしれないが、この態度はなんだかんだでボネットのことをかなり気に入らない様子だ。

「つまりだ、ボネットを始末すればいいって話をしてるのさ」

「始末だと……？」

明らかに物騒な物言いの俺に、テイラーは眉をしかめて反問した。政治なんていう、薄汚い世界に身を沈めている男のことだから、俺のいっている意味がわからないはずがないだろう。

けれど今までのあいだは、そんな物騒なことには無関係できたのかもしれない。だからこそ、汚いものでも見るかのような目で俺を見ているのだ。

「はっ、何をいうかと思えば。ボネットを始末するだって？　ようするに殺そうというわけだ。誰がかね。君がするとでも」

額に手をやって擦りながら、大仰に笑ってみせる男に俺は内心でほくそ笑んだ。まるで人を小ばかにしているようなテイラーだが、実際にはそうは思ってはいまい。間違いなく、その機会があるのであれば……そう思っているはずだ。

「もちろん、俺がやるさ。こちらとしても、奴を放っておくわけにはいかない理由があるんでね」
テイラーの顔をしっかりと見据えながら、そう告げた。
「うむ……」
黙りこんだまま何かを考えている様子のテイラーに、俺は畳みかけるようにいう。
「ま、別に信じたくないなら信じなくてもいいぜ。その場合は、あんたに票が集まらなくなるだろうがな」
「……私のメリットは」
「安全と首相への道。安全がなければどっちみち、あんたは死んじまう運命にあるがね」
肩をすくめていうと、さすがのテイラーも先ほどまで以上にしかめ面になる。当然だろう。日本と違い、安全も金で買わなければいけない海外において、目にわかる形で保証されるのであれば、誰だって買おうとするだろう。もちろん、俺だってそうする。
ましてやこの男は、次期トップを狙っているような奴だ。そんな奴が、安全という目に見えないものを考えないはずがない。ヨーロッパでは一国のトップとあれば、アメリカ同様、暗殺される危険が非常に高いのだ。
「わかった、信じよう。それで、君は何が欲しいのかね」
さすがに話がはやい。タダで情報を売りにきたわけではないことを良くわかっている。
「簡単なことさ。今から言うことをしてくれりゃぁいい」
ニヤリとして俺は、ようやくテイラーの前にある椅子にひいて腰かけた。

日付も変わった深夜――東ロンドンのはずれに位置する、テムズ河のふもと近くで俺は車の中で息をひそめていた。辺りには俺以外

の車は一切ない。
　車の中から俺は、対岸にある、今晩乗り込むマフィアどもの根城を双眼鏡を使って覗きこんでいた。外の見張りはたったの七人だが、ここからは見えない死角にもいないとは限らない。
　ここから見る限りでは死角が二カ所あり、そこに十分見張りがいる可能性が考えられる。なんせ、他の七人からも見えにくそうな位置になっているためだ。そう考えて勘定すれば、見張りは九人ということになる。
　最悪を考えて行動するのだから、九人はいる、こう考えたほうがいい。もし見てのまま七人であれば、それはそれで儲けものだと思えばいいのだ。
　連中の根城はちょっとした工場地帯の中にある、工場を併設したビルだ。ビルそのものは五階建ての、あまり大きなものではないが、作業員は全て手下になるらしいので実際には、かなりの人員が配備されているとなる。
　しかし、それも今、これからの時間帯となると話は別だ。連中も、表向きは工場で働く作業員という肩書きがある以上、必要以上にむやみやたらと人員を動員できるわけでもない。おまけに、今晩は週末の夜だ、だからこそ、連中は必要最低限の人員しかいないと見ていい。
　デニスの情報ではこいつらは、ベケット達ともう一方を相手どって商売していただけでなく、ボネットともっとも強く結びついているのだという。そして今晩、ボネットの野郎がここを訪れることになっているとも。
　これを見逃さない手はない。さすがに、マフィア全員を相手にはできないけども、いつも週末にここを訪れるというボネットも、慣れた場所であれば必ず警戒を緩めて警備も手薄になると踏んだのだ。
　さらに五階には一切の電気がついてないことから、今回利用される部屋が四階にあることもわかる。五階が使われるのであれば廊下には当然、見張りがいるはずなのにいない。さすがに配置されてい

るのに、建物内で電気をつけないというのはおかしいだろう。
そしてデニスの情報通り、人員も手薄なうえに、今しがた覗きこんでいる双眼鏡に、ボネットの野郎が乗っていると思われる車が飛び込んできた。
俺は双眼鏡の倍率をあげ、よりしっかりと車を凝視する。倍率は最大になり、車のナンバーまで読み取れるほどだ。車の到着時間もいつも通り、一分の狂いもなさそうだ。
工場に入っていく車はビルの手前で止まり、中からボネットの奴が出てきて建物のなかに入っていったのを見届けると、俺も即座に行動にはいった。
必要なものは全て防水袋にしまってある。これからテムズ河に潜り、泳ぎで工場の敷地内に潜入する手段を今回はとった。工場敷地内、ならびに内部と配管の位置まで、しっかりと頭の中にたたき込んである。
双眼鏡をほうり出し、すでに着込んでいるダイビングスーツになるため、服を脱いだ。やれやれ、またいつかのように泳がなくてはならないのかと思うと、少しばかり気分が重くなる。
確かあのときは凍えるほど冷たい、北欧の海を遠泳したのだった。あのときを比べれば、今回ははるかにマシといえる。テムズ河は確かに大きな河だが、川幅は日本の三大水系のものと比べると、さほどない。せいぜい、二百三十メートルかそこらだ。
しかもさらに下った河口付近にあるシステムのおかげで、水量のわりに水流はあまり速くないのも俺にとっては好都合だ。車を降りて、水の中に入る地点にまで降りていく。
連中はあくまで、近づいてくる奴だけを監視しようとしている。河隣りだからこそ、河を監視しなければ意味がないというのに。それとも、河が背水の陣になっているとでも思っているのだろうか。
一呼吸おいて、足からゆっくりと汚いテムズ河の中に身を沈ませていく。首のあたりまで水に浸かると当然、足などつかなくなるが目下の問題はそうではない。テムズ河の水質だ。

この河の水はとても汚く、そんな水に身をひたすというだけで、どうしようもなく嫌悪感が沸き起こる。東京の川だって汚いし、誰も入りたいなどと思うものはいないだろうがテムズ河の水は、そんな東京を流れている川の水のほうが、まだマシといえるほど汚れているのだ。

深夜なので、はねるような水音は連中に気付かせてしまうかもしれないので、平泳ぎでなるべく音を立てぬよう、ゆっくりと進んでいく。顔の表面に、下水の水とはいわないが、それにも劣らない汚水が流れていくのを堪えながら、ようやく侵入するポイントにまでたどり着いた。

（さて、ここからが最初の難関だ）

なんせ、これから頭のてっぺんまで汚水の中に潜って、排水管の中を泳いでいかなければならないのだ。

こんな汚い水の上で呼吸するのも憚れるが、仕方なく水中に潜る前に思いきり息を吸い込んで、一気に水中に潜った。

水が体内に入ってくるわけではないが、それでもなんともいえない臭いが、レギュレーターの中からも漂ってきていた。そんな臭いを少しでも拭い去るように潜り、手探りで排水管をさぐる。

俺の潜ったポイントはちょうどよく真下に排水管があったようで、なるべく近いポイントを目指して泳いだつもりだったが、なかなかにいい勘をしていたらしい。

排水管の入口は、なんとか人が一人はいれるかどうかというほどの大きさになっており、格子がされている。それを防水袋とは別にかついできた道具で焼き切るつもりだった。今の時代、水の中ででも鉄を焼き切れる道具があるなんて、便利になったものだと思う。

見張りの連中からは、この位置は死角になって見えないはずなので、構うことなく格子を入れるよう二本、上と下を両方焼き切って捨てる。ここまで水に潜って、まだ十分とたっていない。

汚水で視界が悪い中、防水袋をまず先に通しすかさず自分が排水管の中へと身をすべらせる。

そのまま、ゆっくり流れに逆らって水流の中を泳いでいく。時折、得体も知れないゼリー状のヘドロが肌をヌルリとすべっていく感覚があった。思わず鳥肌が立ちそうになるが、堪えてもくもくと前進する。

早くたどり着けと念じ続けるうちに、ようやく上昇ポイントにまでやってこれた。水をかくため前に出した手に、排水管の壁が当たったのだ。

ぐっと腰を落とし、思いきり上に向かって床を蹴る。水の抵抗もあってあまり上には進まないが、その推進力を得るために蹴ったのだからこれで十分だ。

上を目指して水の中を泳ぐのは浮力の影響もあり、前に進むことよりも簡単なので先ほどまでとは、比べものにならないほど楽だ。このまま一気に出口を目指す。

出口を目指して泳ぐうちに、やっと上のほうがほのかに明るさを見せ始めた。出口が近い証拠だろう、排水管の幅が先ほどよりも広くなり、より下に流し込もうとする力が強くなった。わかりやすくいえば、溜まった風呂水を捨てる際に、栓を抜いたときのことを想像してもらえればわかりやすいだろう。

あれと同じで水が落ち始める場所というのは、平らで平均的にかかっていた水の圧力が重力によって落ちようとするため、流れ落ちようと水がその一点に向かっていく。このため、排水口というのは最も比重がかかるために、他の場所に比べて水圧が何倍もかかるのだ。

もちろん、今回はそれも織り込み済みだ。俺は、担いでいる酸素ボンベの下にあるスイッチをひねった。すると、途端にボンベの中から大量の酸素が下に向かって勢いよく抜けていき、一気に上昇し始めた。

本来、酸素ボンベは下に空気を抜くための穴はついていないのだが、今回のために、デニスのやつが用意してくれた特別性のボンベだ。というより、デニスがうまく逃げるための道具として開発した、

といったほうが正解だろう。
　とにかく、流れこんでくる水圧に向かって、爆発的な推進力を得た俺は、瞬く間に水面にまで浮き上がることができた。水面に浮く直前にボンベは酸素を使い切り、ただの金属の塊となったので捨てた。
　ここまでくれば、もう水のことを心配する必要はない。再び平泳ぎで、なるべく音を立てぬよう水から上がれる場所へといく。まぁ、水が滝のようにうるさく流れこんできている場所だから、クロールでもいいのだろうが、念には念を押しておいたほうがいい。
　水から上がれそうな場所を見つけた俺は、そこからすばやく上がると、早速ダイビングスーツを脱いで水の中に投げた。後はあの汚水の滝が証拠を消してくれるだろう。もしそうならなくとも、ここまで暗くては連中が気付くことはないはずだ。気付く前に、俺が始末をつけるからだ。
　続けて、口をガチガチに縛ってある防水袋の紐を服の中にしまっておいた鋭利なセラミックナイフで切り、中から仕事道具を取りだして身につける。銃口にはこういうときのためのサイレンサーを、ついでに暗闇のなか目立たないために、あらかじめ黒い顔料を塗っておいた仮面で顔を隠して準備完了だ。
　頭の中でこの工場の図面を広げ今どこにいるかを大まかに把握し、見張りがどこにいたかを立体的に考える。車の中から見たとき、死角になった箇所に見張りがいないかと勘ぐった箇所には、それらしい奴が見当たらない。これはつまり、数えた通りの人数がここに出ばっていることになるわけだ。
　一呼吸おいて身を屈めながら、素早く鉄骨の後ろに走る。そっと陰から顔を覗かせ、見張りの位置を確認する。
　まず一階と二階のあいだの階段に一人、二階にあがってすぐの場所にも一人。あとは一番高い三階部分に、外を見張るよう命じられている奴が一人だ。反対側も覗いてみると、鏡で見るみたいにやはり同じような形で三人が配置されていた。

（あと一人は）

導き出される答えは一つしかない。すかさず頭上を見上げた俺は、二階にあがれそうな階段を探す。

階段は二カ所しかない。だが、そこの周辺には見張りがついている。おそらく、連中には最低限の配置の知識しか与えられていないか、何も知らずにそこにいるかのどちらかだろうが、こいつはなかなかに厄介だ。それでも行くしかないのだから、そいつを嘆くわけにはいかない。

俺は再び深呼吸を二度三度し、一気に階段へ詰め寄って階段の裏の下に回った。階段はよくある金属性のもので、段と段のあいだが抜けている。それを猿渡と片手懸垂の要領で、手を使ってのぼっていくのだ。

銃は口にくわえて、弾みをつけて数段上の階段を掴んだ。この手の階段は、のぼる際つま先が隙間から抜けないよう留めるため、奥が少しだけ上を向いて曲げられている。これに指を引っかけると吊られた形になり、そこから腕の力を使ってのぼっていくのだ。

せいぜい階段は十三、四段といったところだろう、そう考えると大したことはないように思える。いや、実際にこの状態であがるだけなら大したことではない。

だが、今回は勝手が違う。なんせ、音や自分の荒い呼吸も立てるわけにはいかないのだ。たったそれだけのことなのに、途端に作戦の難易度は変わる。

抜き網になった床は、下から上の様子がよくわかる。今見張りの奴は持ち場を少し離れた場所に向かって、背中を見せて歩いている。この隙を俺が見逃すわけがない。

すかさず、両手を使ってで身体を浮き上がらせ、階段のふちに足をひっかける。気分はまるでロッククライマーだ。そのまま身体を横にスライドさせ、横から上に向かうように、わずかに弾みをつけて飛び上がる。階段の急勾配のせいであまり弾みがきかないが、つけないよりはマシだ。

右手を二階床のふちに逆手でかける。当然、ぶらりと身体が前後に大きく揺れた。それだけでも右手にかかる負担はかなりのものだった。はじめ、このまま落ちてしまわないだろうかと、本気で思ってしまったほどだ。

むやみに四肢を動かすと余計に右手への負担がかかるので、ここは揺れが落ち着くまで何もしない。もちろん、そうはわかっていても、何メートルも下に落下すれば連中に気付かれかねないという思惑を、早くなんとかしたいという本能がそれを邪魔して、二度三度と足を動かしてしまった。

だが、それも少しの間だけだ。なんとか気持ちを落ち着かせると、自然と身体の揺れもなくなっていき止まる。止まったところで一気に左手も二階床のふちにかけ、懸垂の要領で上体をあげていく。

床が胸元のあたりにまできたところで、右足を階段の手摺りの支柱にやり、一気にすべらせるように身体を床にやった。その間、銃をくわえていた口と歯に強く力をこめていたらしく、間接のあたりに軋むような痛みを感じる。

やっとのことで二階にまであがった俺は、すぐに後ろを向いている奴へ視線をやると、続けざまに周辺にも目をやった。俺のいた一階部分の真上に、やはり見当たらなかった七人目がいた。そいつは、あくびをしてぼんやりと全く見当ハズレのほうを向いている。

ニヤリと唇を歪め、最初の標的へと視線を戻して足早に近づいていく。得物は銃ではなく、ナイフだ。いくらサイレンサーが付けられているとはいっても、さすがにこんな場所で銃をぶっ放すわけにはいかない。

限りなく気配を消してナイフを逆手に、背後から相手の口を左手で押さえ込む。

「!?」

一瞬、驚きを見せた相手にわずかな考えを起こさせずに、ナイフで首をかっ切った。

刃先が頸動脈と気管を切った瞬間、ぶるりと相手の身体が強く震

えた。きっと、何が起こったのか理解できなかったにちがいない。そいつを理解する頃には、もう声も出せない死ぬ直前というわけだ。

びくびくと痙攣する男の四肢を押さえ、震えが止まったところで静かに死体を物影に横たえる。

その物影から、同じフロアにいる二人の位置を確認し、同じように相手が後ろを振り向いたときを狙って、次々に見張りの連中の息の根を止めていく。

続いて反対側の見張り連中も、同様に始末していった。銃を持ってはいても所詮は形だけだ、たいしたことじゃない。

一通り始末をつけると、俺は小さくため息をついてすぐに行動にうつる。連中はまだ誰も気付いていないようだが、油断はできない。なんせ中には、少なくとも二十人からのマフィアどもが武装しているのだ。

工場三階部分の見張り台から、なるべく音は立てずに階段をおりていき、敷地内の建物の中に裏口からはいる。ここからなら少しばかし、ルートが短くなるのだ。

人の少ない時間帯だけあって廊下は薄暗く、見張りの連中もいない。俺は足音に気をつけて素早く廊下を抜けて、階段を駆け上がる。

二階にきたとき、角を曲がった先にある廊下の端のほうから、小さく話し声が聞こえた。すばやくそれを察知し、すぐに壁に背中をつけて廊下をうかがった。

外の連中とは違い、黒のスーツをびっしりと着込んだ奴らが二人いて、暇つぶしなのか、小声で談笑しているようだった。

本人たちは気付いていないのだろうが小さい声とはいっても、深夜では意外なほど音は響くものだ。それも、連中はかなり盛り上がっているのも、ここからもよくわかる。

二人がこちらに向かって歩きだした。もちろん、こちらに気を向けることなどしそうもない。

このチャンスに俺はナイフをしまい、今まで口にくわえていた銃をようやく手にした。サイレンサーだと威力も飛距離も小さくなる

ので、確実に始末するためにはなるべく引き付ける必要がある。
せっかく気付かれずにここまできたのに、一発で仕留められなかったために敵に気付かれるなんて真っ平だ。
二人の声が、歩くスピードに合わせて大きくなってくる。だんだんと近づいてきているのがそれだけでよくわかる。
ゴクリと喉が動いて、目一杯近づいてきたと直感で判断した俺は壁から大股で身をだし、向かって左の奴の顔面めがけて引き金をひく。
引き金をひいた直後、間入れずにその隣の奴も同じように、額に弾丸をぶち込んだ。二人目の死に顔は、何があったのかわからないといった顔のままだった。間違いなく、痛みを感じることなく死ねたはずだ。それだけは、外の連中と比べればいくらか幸運だろう。
一人目は鼻っつらに、二人目は額に小さな穴を開けて倒れ、そんな死体を一瞥することもなく俺は、足早に廊下の先にまでいく。
経験上、この三階へ続く階段の踊り場あたりから上のあたりに、もう一人か二人ばかし連中がいるはずだ。事実、上のほうにかすかにだが、人のいる気配を感じるからだ。
次はゆっくりと階段をあがっていき、踊り場につく前に壁を背にして、上をうかがう。人のいる気配はあるが、ここからは見えない。
再びゆっくりとした動きで残りの階段をあがり、先ほどのように壁に背をやり、廊下のほうに視線をやる。
やはりいた。それも先と同じで二人だが、その立ち位置が下の二人のそれとは全く違う。一人はこちらに体を向けているが視線は別の方向にやっていた。
問題のもう一人は、一人目から十メートルほど奥にいて視線はあさってな方向に向けている。今にも俺に背を向けさらに奥へと歩きだしかねない、そんなポーズに見える。
奥の奴が予想通り、俺に背を向けて動きだすのに三十秒とかからなかったろう。手前の奴の視界が死角になった瞬間、俺は素早く身をくりだし、先ほどのように頭部を狙って弾をぶち込んだ。

そいつが倒れ込もうとする次の瞬間には、すでに奥の奴に銃口が向いている。相手がこちらに銃をむけたとき弾は発射され、妙な呻き声のあとに、そいつはぶち倒れた。

「……ふぅ」

緊張したが、相手が本格的なプロでない以上、機敏な行動と判断力をもってすればたいしたことはない、プロであればできて当然のことなのだ。

この要領で、三階から四階へとあがった。四階の見張りも始末したことで、ようやくボネットと対面できるというわけだ。

三階同様、四階も見張り二人が両に分かれていたということは、その中間辺りの部屋にボネットの野郎がいるということになる。

部屋が二つあるが考えるまでもなく、向かって右の部屋に、ボネットや他の連中がいる部屋がいるはずだ。いかにも連中が密談をかわしていそうな、重々しい雰囲気をもった扉があるためだ。

そっと、その扉に耳をあててみる。残念ながら中の声までは聞こえないが、たしかに人のいる気配を感じさせる。ボネットは、間違いなくこの中だ。

問題は何人中にいるかだ。まだ他の見張り連中は、俺という侵入者に気付いている様子はない。

先ほど、中にはざっと二十人からの人間がいると思ったが、いざ中に入ってみれば、見たのはたった六人だ。ビルの正門側にも裏側同等数の人員を配置していると考えるのは当然だが、だとしても人数から考えるといまひとつおかしな感がある。

人の気配が丸きり感じられないのだ。二十人だとすれば正門のほうに六人いると仮定して、やはり十人はいるはずなのに、部屋の中に十人近い人間が詰めている気配はない。

そう感じるのは、なかば直感ともいっていいかもしれないが経験上、こういった場所ではそれくらいの人員が配置されるものなのだ。まして、相手は完全なプロとは言い難い、にわかなのだ。

（どういうことだ）

怪訝に思いつつも、俺は扉を開けることにした。ここまできてボネットを始末しないわけにもいかないのだ。逃走経路もしっかりと頭の中に、刻み込んである。どうにかなるはずだ。

一度、深呼吸をして思いきり扉を開けた。一瞬で中にいる人間の数を把握する。相手は六人だ。もちろん、ボネットの野郎も頭数にはいっている。

「誰だっ」

そう叫び声があがった瞬間、続けざまに三発の弾丸を連中にぶち込んだ。

この初撃に反応できた奴は一人もいない。用心棒らしい奴が二人、腹と胸にそれぞれ弾をあびてぶち倒れ、もう一人は腕にあたった。

恐慌状態になった連中の中、ぶち倒れた奴らを目の当たりにし一人だけ、素早くかけていたソファーの影に身を隠した奴がいるのが、視界の脇にうつる。ボネットの野郎だ。

後の二人はボネットの動きにつられ、ようやく体が反応したようで、脇にある銃に手をやろうとしていた。

連中がスーツの中の拳銃を向けようとした瞬間には、俺はすでに二人に銃口をむけて引き金を引きだしていた。

二人分の苦悶の声がして、肉の塊が床にぶち倒れる音がする。

続けざまに、初撃で仕留めそこなって倒れこんでいる三人目の喉元にぶち込む。俺に向かって、銃口をむけてきているのが一瞬、視界に確認できたからだ。

「さぁ、あんたの用心棒はみんな片付けてやったぜ。次はあんたの番だ」

「殺し屋か」

俺は、そんな問いには答えない。声だってむやみに聞かすわけにはいかない。今の時代、どんな機能をもった道具があったか知れたものではない。

ましてや、今までずっと気に食わないことは闇に葬ってきたような男だ。そんな道具を、隠し持っていないとは言い切れない。

「ふふ……まあ、いい。君の相手は私ではないよ」
「なに？」
そうつぶやいた瞬間、部屋の奥にあるドアが突然ひらかれた。
脇見で素早く、物影に隠れようとしたが遅かった。肩に銃弾がぶち当たったのだ。
「ぐっ」
当たった瞬間、何が起こったのか、まるで理解できなかった。それでも、あの地獄だった船の中での出来事が脳裏に浮かび、これが銃によるものだとすぐに理解できた。
右肩に受けたため、銃を落としてしまう。着弾による衝撃で、腕が痺れるためだ。
「突然のことだったので驚いたが、君もここまでのようだな。このあいだに私は逃げるとしよう」
ボネットの野郎が嘲笑いをしながら、開かれたドアに向かって隠れたソファーから走りだした。
「待てっ」
ボネットの後ろ姿を見て叫ぶが、顔のすぐ横を弾丸が飛んできてつけていた黒い仮面が弾けとぶ。
肌に直接触れはしなかったが、すぐ近くを飛んできたためにとても熱く感じる。
「……動かないほうがいい。今のは威嚇だが、次は間違いなく顔を狙う」
ドアの向こうから聞こえてきたのは、驚いたことに日本語だった。それもかなり流暢な発音で、一切の淀みがない。つまり、相手は日本人ということだ。
「さあ、そこからゆっくり立ち上がってもらおう」
落としてしまった銃を取り上げたいところだが残念ながら、それは無理な話だ。俺は運よく物影に隠れることができたが、銃はその場に落としてしまったため、銃を拾おうものなら次の瞬間、間違いなく顔などといわず、この男の腕なら俺の顔の好きな部分に弾をぶ

ち込めるだろう。
俺は小さく舌打ちして、仕方なくいう通りに立ち上がった。
「賢明ですな」
その物言い、口調には聞き覚えがあった。俺は思わず眉をしかめ、開け放たれたドアの奥にむけて目をこらす。
「あ、あんたは……」
「ふふふ、お久しぶりですな」
間違いない。この癪に障る言い方、人を見下したような態度を感じさせる声は……。
「黒田……」
日本を離れて以来、この男の存在などすっかり忘れていた。しかし、目の前の男は間違いなく、あの得体の知れなかった自称スカウトマン、黒田の姿があったのだ。

第75章

ドアの奥に佇む男――かつて俺の前に、スカウトマンとかいう肩書きを振りかざして現れた、あの黒田がいた。

しかし、その姿はあの頃のような窮屈げなスーツ姿ではない。全身を黒い服で包んで同じ色のブーツをはき、鋭い視線を向けながら口の端をつりあげている。まるで獲物を狩りたくて仕方のない、野獣を思わせる。

「なんだって、あんたがこんな場所に……」

「おや。そんなに珍しいですかな、この裏社会に身をおくあなたが」

たしかにその通りだ。黒田の持つ、あの異様な雰囲気は間違いなく、俺と同業者の持つそれと同じだ。かつて、黒田と今井の持つ雰囲気が似ていて同じ類いの人間だと思ったものだったが、まさしくその通りだったということだ。

「昔、あんたが気に入らないと思っていたもんだったが、その理由がよくわかったよ。同じ殺し屋同士、そりゃぁ気に入らないと思うはずだぜ、たとえあの頃この世界に足を突っ込んでいなかったにしてもな」

皮肉げに告げると、黒田の顔から気に入らない薄笑いが消えた。

「やはり、おまえはこちらの世界にきたな」

「なに？」

今までの薄笑いが嘘であったのがもろにわかるほど、ガラリと印象が変わった。いや、これこそが奴の本性だ。今まで奴のことが気に入らなかったのは、似合いもしないスーツを着込んだ下に、殺し屋としての本性を隠しきれずにいたからだろう。

それほどまでに今の奴の姿は、内に潜む凶暴な本性とマッチしているのだ。

「おまえはいずれ、この世界にくると踏んでいたのさ。それがわか

っていたから私の上司も、おまえを引き抜いてくるよう命令されたんだろう。こんな世界にでもいるんだよ、暴力の世界で生き抜ける強さと才能をもった奴がな」

「そいつが俺だっていうのか」

「そうだ。スポーツの世界においてもそうだろう？　その年齢に似合わない、圧倒的な才能をもった奴がいる。それと同じだよ。

事実、おまえはこの世界に入門し、数々の試練を打ち破った。いや、こっちの世界にくる以前から、その片鱗を見せていた。まだ素人でありながら、それらをことごとく切り抜けていくおまえの才能は、全く大したものだったよ。現役である私からしてもね」

「同業の先輩である、あんたにそういわしめるなんて俺もたいしたもんだな。だが、半分くらいは運もあったぜ。そいつがなけりゃぁ、間違いなく死んじまってたろうな」

黒田の評価に対して、俺は皮肉げに口を歪めながら笑ってみせた。俺のいっていることは嘘いつわりもない本当のことだ。

確実に死んでいてもおかしくなかったと思えることが何度もあり、そのたびに悪運の強さで乗り切ったことが思い出される。それらは今思い出しても、背筋が寒くなってしまうほどのものばかりだ。

「もちろん、技術は当然さ。しかし、それ以上に必要なのは、殺されそうになっても切り抜けられるほどの強運だ。これがなければ、この世界ではやっていけない。

だから私たちはおまえを引き込もうとしたのだ。そして、それに見合うだけの……いや、それ以上ともいえる働きを見せるおまえは、もはや脅威といったほうがいいかもしれない」

「で、わざわざあんたがご足労願ったわけか。こいつは大変、名誉あることだ」

再び、くつくつと肩をいからせながら笑ってみせると、チャッとした銃を握りなおす音がする。

「そうだ。本来であれば依頼がない限り、むやみに人は殺さない主義だが今回ばかりは勝手が違う。おまえには今ここで死んでもらわ

なければならない」
「依頼がないだって？　ちょっと待ちな。そいつは単なる嗜虐趣味によるものじゃぁないのか。依頼もなく殺すのなら、それは主義に反するんだろう。だったら俺を殺そうだなんて考えがどこからくるんだよ。こっちはあんたをやろうだなんて思っちゃぁないんだ」
　わめき立てながら、黒田から逃れようと思案しつつ身を少しばかし動かすが、奴は俺にむけた銃口をその動きに合わせて動かした。俺を始末するために、心臓のあたりを確実にとらえているのだ。
「しかし、あの女にはしてやられたよ、全く。我々には嘘の情報を流し、そこをすかさずおまえという逸材を掻っ攫っていったのだからな」
　あの女……真紀のことだろうか。話の流れから推測すれば、該当するのはあの女狐くらいしか思い当たらない。
　いつだったか、黒田が俺の周りに危険な人物がいるだとか抜かしていたのを思い出す。あれはきっと真紀のことだったのだ。それしか考えられない。
「あの女とあんたは……いや、あんたらは、はじめから敵同士だったというわけか」
「いう必要はないさ、今から死ぬ人間には」
　つまり、それは遠回しに肯定しているとみていいだろう。真紀も、一度だけ黒田に付き纏われていたときに、自分を頼れといってきてきたことがあったのも思い出した。これらのことからも、やはり敵対関係にあったものだと考えて問題なさそうだ。
「……そうか。俺が直接巻き込まれたとき、裏で糸を引いていたのは、あんたらだったんだな」
　つぶやくようにそういうと黒田は、つぶらで蛇か何かを連想させる眼を、わずかに細めた。
「図星だな、香織という女と裏で手を組んでたってわけか。考えてみればあの頃、俺の周りじゃぁ、妙に色々なことが起こっていたからな。誰かが人為的に起こしていたんじゃぁないかと、あとあと思

ったもんだった。
だが……なるほどな。香織とあの女狐がよくない関係であることに目をつけて、そのどさくさに紛れて俺を引っ張りこもうって魂胆だったわけか」
「やれやれ。今も昔も、よくそこまで頭が回るものだな。それももう過ぎたことだ。
……さて、もう話は十分だ。そろそろ死んでもらう」
非情にも黒田は、話は終わりだと突き付けていた拳銃を、腕を伸ばしてあらためて向けなおる。
「待て。あんたはいいのか、俺がこのままこの組織にいても。場合によっちゃぁ、あんたらの組織にくら替えしたっていいんだ」
「ふふ、馬鹿なことをいってもらっちゃ困る。あまり、心にもないことをいうもんじゃない。そんな口から出まかせを信じるほど、甘くはない」
助かるなら、それでもいい。なかば本気でそう思ったのに、にべもなく却下された。別に組織になんざ、忠誠なんて誓ってもいない俺だ。どの組織にいたって俺の求めるものは変わらないのだから、そういったのだ。
「待て、待つんだ。出まかせなんかじゃぁない。だったら証拠を見せたって――」
みなをいうことなく次の瞬間、左肩に衝撃を受けた。黒田の野郎が撃ったのだ。
「ぐあっ」
その衝撃と痛みに、撃たれた箇所を右手で押さえながら後ろに倒れ込む。肩から下が衝撃で痺れて動かない。
「そこまでして生に執着するなんて、見果てたものだ。だがいったはずだ。心にもないことをいうなとね」
この業界の人間にとって、咄嗟の思い付きなんてものはただの命乞いにしか聞こえないだろうから、こういう展開は予想済みだ。むしろ今の俺には、どうやって“一撃だけ”を食らわすだけに留める

かのほうが重要だった。
　初撃を受けた際に、防水袋に入った予備の銃は黒田側に落ちてしまったため、それを取ることはできない。だが、まだ望みがあったのだ。その望みを繋ぐためにも命乞いでもなんでもして、とにかく一撃でやられないことだけが目下の問題だった。
　その問題も今のでなんとかなった。倒れ込んだ瞬間、俺が特攻をかけた際に始末してやったスーツ野郎の持っていた銃を手に入れるのが目的だったのだ。黒田相手に銃一丁で命が保証されるわけでもないが、ないよりはマシだろう。
　俯せに倒れたため、身体を陰に黒田からは銃を取った瞬間は見えなかったろう。もし、それがわかったのであれば、俺が倒れた次の瞬間には、急所に弾丸が食い込んでいたに違いないはずだからだ。
　まぁいい。本当に、一か八かの賭けだったがその賭けに勝ったのだ。この幸運を逃さないはずもない。奴とは五年も前からの因縁があるのだから、それを清算してしまうには絶好のチャンスでもある。そのために肩を犠牲にしてしまったが、死んでしまっては元も子もないのだ。
　痛みには耐えればいい。弾をうけた箇所から熱さをもった鋭い痛みを、顔を真っ赤にして堪えながらあの地獄の訓練で受けたことを思い出す。あれに比べればまだいくらかはマシだ。
「さぁ、今度こそ終わりだ。……せめて、最期くらいは私の手で終わらせてやる」
　そういって黒田がこちらに向けて銃を構え直したと同時に、俺は掴んだ銃を背後の部屋の照明めがけて撃つ。
　ガラスやフィラメントの砕ける音が室内に響く。当然、瞬く間に部屋の中が暗闇につつまれた。
　しかしさすがの黒田も、俺の思わぬ行動には銃を撃つ暇などなかったらしい。俺に向けていた銃から弾が飛び出てこなかった。
　俺はその間にソファーの後ろに回り込み、黒田のいたあたりに向かって弾をぶち込んだ。

だが手応えはない。奴も危険を察知して、あたりの物影に隠れたのだ。

撃った直後、再びソファーに隠れて呼吸を整える。こうすると、だんだん五感もそれに合わせて落ち着きはじめ、いつもの状態になっていった。

（落ち着け……大丈夫だ）

俺は真っ暗になった室内を、あらためて素早く見回した。落ち着きだしたことで、いつものように夜目がききだしてきたのだ。

暗くはあるが、いつもみたいに落ち着けば夜目は当然、感覚が研ぎ澄まされている分だけ、物音やかすかな空気の流れなんかも聞き取り、感じることができるはずだ。

暗闇というのは視覚が遮られてしまうだけに、他の感覚が鋭敏になるように人体はできているのだ。だからこそ俺達は、訓練で夜目を鍛え、他の感機能もより鋭敏になるようにするのだ。

もちろん、それは黒田にしても当然だろう。だが、互いに条件は五分と五分であり、これなら俺にも分があるというものだ。状況自体がひっくり返ったわけではないが、つい、ほんの三十秒かそこら前にはまだ圧倒的に不利な状況だったことを思えば、はるかに好転してきたと考えるべきだろう。

さて、ここからは思考のゲームになるがどうすべきだろうか。俺が行きたいのはボネットの野郎が飛び出していった、ドアに向かうことだ。しかし、当然ながら黒田もそこから現れてこの部屋に入ったわけだ。

おそらく奴が隠れたのは、俺の隠れたソファーのテーブルを挟んだ反対にあるソファー、こう考えるべきだろう。奴が飛び込んだにしたって、決して時間があったわけでないことまで考慮すれば、それが最も現実的であるはずだ。

そしてやはり奴も、俺の進みたい方向は把握しているのは目に見えているので、そこらを狙いすましていることは、十分に考えられる。あるいは逆に、それを見越して動かずに黒田を狙っている俺を

狙おうとしているかもしれない。
　主に考えられるのはこれくらいだが、これだけが全てとはいえない。奴にとって、まさか電灯を撃つだなんてことは、全く想像もできなかったことだろうから、そんな突拍子もないことを黒田が考えてないとも言い切れない。
　だがおそらく、そいつはないだろう。というのも、あらかじめ考えておいたことでなければ、ここまでの行動を移すのは難しい。ましてや暗闇のなか、いつ敵が襲ってくるのがわからない状況では、それら以外の可能性はほとんど実行不可能だ。
　よって、俺が飛び出すか向こうが出てくるか……極端に可能性は二分の一といっていい。そして、なるべく早く暗闇に目が慣れたほうの勝ちでもあるといえるかもしれない。
　ともかく、条件が同じであるなら後は運だ。奴もそれはわかっているはずだ。どうせ何をやっても事態が好転しないのであれば、俺は自分の運に賭けてみることにしたのだ。
　今まで、今回以上よりもはるかに低い可能性にだって賭けてきた俺だ。二分の一も可能性があるのなら、決して悪い賭けでもないはずだ。
　呼吸が落ち着いてくると、自然と身体自体も落ち着いてくる。かといって、あまり落ち着かせるわけにもいかない。ほんのわずかに緊張させることがもっとも最高の状態だ。いわゆるこの状態こそ、集中していると呼ばれるものだからだ。
（よし）
　俺はもう一度深く呼吸したあと、小さく頷いて行動を開始した。普段なら行動は手短に、かつ、効率よく行うために最短ルートを行くところだが、今回は逆にあえて物影を迂回して扉に行くことにしたのだ。
　それにいつまでも黒田一人に構ってもいられないし、もしかすれば不意をつけるかもしれない。まぁ、向こうもプロだから、瞬時に迎撃してこないともいいきれないが、考えすぎは逆に良くなかった

りするものだ。
俺はそう言い聞かせると早速ソファーから回り込み、一気に向かい側のソファーへと身をかがませて走る。
すると、部屋の中でかすかに何かが動く気配があった。俺が動き出したと同時に動くものなど、当然ながら黒田以外ここにはいない。
つまり俺の動きは、決して悪いものではなかったということだ。回り込もうとして動き出したのは、奴の読みの裏をいっていたわけなのだから。
バスンとでもいった銃声が聞こえた。黒田の奴が俺の動いた気配を読んで、銃をぶっ放してきたのだ。
大まかな場所に狙いをさだめると、そのあたりに向けて迎撃する。当たるとは思わないが、こちらにも攻撃する意思だけは示しておく必要があるのと、もし当たればめっけものでもある。
そのまま暗闇の中、扉にむかって走る。戦略的撤退というやつだ。あくまで俺の狙いはボネットなんであって、黒田ではない。
それに黒田は、俺を始末するために現れたといっていたから、俺を追ってくるはずだ。そう踏んで、逃げながら奴と戦うことを選んだのだ。
かすかに見える開かれたドアを摺り抜け、部屋を飛び出した。階段も当然ながら光はなく、闇に沈んでいる。
俺は暗闇の中の階段を、下へと駆け降りる。視界がきいていれば何段かごとにまたいで降りるところだが、今回はそういうわけにもいかない。一段一段、慎重に素早くだ。
下階との踊り場にでたとき、背後から鋭い銃声があった直後に俺の周囲で、金属質の物体が弾かれる音が響く。奴も俺が部屋を飛び出したに気付いたんだろう。
下階は当然ながら薄暗くはあるが灯りがついているため、動くのにはさほど苦労しない。同時に黒田の野郎にも、よりはっきりと的が見えるために危険度は上がるが、気にしても仕方がない。俺は直接やつから見えないように陰になるよう、階段を下りていく。

二階まできたところで、にわかに建物の中が慌ただしい雰囲気になってきているのを感じた。ボネットの野郎が、侵入者の存在を知らせたんだろう。

ちょうど二階の廊下から出合い頭に出てきた見張り二人に、銃をぶっ放す。感覚が鋭敏になっている以上は、こちらのほうが早撃ちには幾分有利だ。

一階へと降りる間際に、目の前の窓からボネットの野郎が乗ってきた車が目に映る。護衛らしい黒っぽいスーツを着込んだ連中が、慌ただしく車をすぐに動かせるように準備していた。

しめた。ボネットはあの車で逃げる気のようだ。だったら、ここから奴を狙えるかもしれない。距離も、せいぜい二十かそこらだ。

いや、そんなにもないだろう。俺の腕ならスナイパーライフルがなくたって、十分、奴を狙撃できうる距離だ。

だが……問題は上から追ってきているはずの黒田だ。俺がボネットを狙いさだめているうちに、間違いなく奴は俺を狙い撃つに決まっている。

俺は、現状の装備でもいけそうな絶好の狙撃ポイントを前にしながら、舌打ちしながら階段を飛び降りた。着地の衝撃で足が痺れるが、そんなことに構っていられない。

一階に降りるとやはり目の前に窓があり、そこからはちょうど良くボネットの野郎が車のところにきて、乗り込もうとしているところだった。

ここからなら、二階からよりもさらに条件がいい。すかさず銃身をスライドさせ狙いをつける。

「あばよ」

小さくつぶやいたと同時に引き金を引いた。発射された弾丸が窓ガラスを突き破り、逃げようとする男の胴体に食い込んで血が飛んだ。

周りの黒服連中も一瞬のことに目を見開いているが、俺はすでに連中に向かっても引き金を引いていた。

次々に倒れ込む男達を尻目に、俺はさらに右側斜め上方向に向かって撃ち込む。黒田らしい影が視界に入ったのに気付いたからだ。

しかしその影もこちらの行動にいち早く気付いていたようで、素早く物影に身を隠した。

それを合図に、出口めがけて俺は廊下を一目散に走りだす。窓から出ていたんでは、外に出るまでには確実に黒田から狙い撃ちされるのは、火をみるよりも明らかだ。

なにより、ボネットを始末するというのが今回の目的である以上、必要以上に黒田に時間をさくわけにもいかない。黒田とは決着をつけるつもりではあるが、今はひとまずボネットが生きているかどうか、そっちのほうが問題だ。

建物の正面玄関あたりに、新たに見張りの連中が三人集まってきているのを確認すると、瞬きする間もなく、こぞって狙い撃ちにする。

断末魔の叫びともとれない、情けない叫び声をあげながら三人とも崩れ落ちる。

そして玄関口に着くと、開かれているドアを飛び出して走ってきた廊下めがけて発砲した。はじめ、俺に気付かなかった見張り連中が、侵入者の存在に気付いて集まりだしていたのだ。

その一人に、奴、焦りともとれる表情を浮かべた黒田の姿があった。集まりだしていたノロマの見張り連中が邪魔で、思うよう走れないのだ。おまけに俺から発砲されて身を屈ませている連中のために、なおさら走りにくそうだった。

車の側に倒れているボネットの背中めがけ、心臓あたりに一発弾を撃つ。着弾の衝撃で、野郎の体が大きく揺れた。どうやら最初の一撃で、野郎の急所をとらえていたらしい。

（よし。後は奴だけだ）

一瞬だけ建物の中にいる黒田のほうを一瞥し、素早く車に乗り込んだ。

その背後を弾丸が飛んでいく。なんとなくだが、黒田の奴が撃っ

たんではないかと思う。
奴は間違いなく俺を追ってくる。はっきりと俺を殺すと明言していた黒田のことだ、追ってこないはずがない。ましてや、すぐ目と鼻のさきに獲物がいるのであれば、なおらさだ。
車に乗り込むとすでに車はエンジンがかかっていて、ドアを閉めながら急発進させると、キュルキュルというタイヤの摩擦音を響かせる。
敷地内から出たところ、突然天井にボコンとでもいうような音がして穴が開いた。どうも、見えないところにスナイパーが潜んでいたらしい。
さすがの俺も、これには肝っ玉を冷やすというものだが、もしスナイパーの存在を知っていたら今のような、特攻ともとれる行動は起こさなかったにちがいない。なんともおかしなものだが知らぬが仏、だったということだ。
しかしスナイパーの存在に気付かなかったのも、半ば仕方のないことだったかもしれない。おそらく侵入者の存在が明らかになったので、逃走経路になりえそうな箇所に急いで配備した、そういったところだろう。
もちろん、まだまだ油断は禁物だ。なんせ、黒田の奴が確実に追ってくるはずだからだ。
俺は海のほうに向かって、アクセルをフルスロットルにして飛ばす。瞬く間に建物がミラーに遠ざかっていくのが見える。
だが、時間的にそろそろ黒田が出てきてもおかしくないと踏んでいたのに、一向に建物からは動きを見せる気配がない。
海へ向かう、ほぼ一直線のストリートにぶつかったところで、当初の予定通りに海に行くためにハンドルを右に切る。もう建物はミラーからは、ほとんど見えなくなっている。
黒田が追ってこないなんて、俺の考え違いだったか……そんな考えに頭を巡らせ、まっすぐのストリートをやはりアクセル全開で進んでいると、何か低い耳鳴りのようなものが聞こえた。

はじめは車のエンジン音かとも思った。車は高級車であるがゆえ、オートマチックではなく、マニュアル車だったためにギアの入れ間違いかと思ったのだ。

しかし違った。その低い耳鳴りのような音はだんだんと近づいてくるように、音が大きくなってきていたのだ。しかも音は下からではなく、上からきているようでもあった。

（まさか）

俺は思い浮かんだ答えを確認するべく、車の窓を開けて上空を見上げると、なんと一機のヘリコプターが空中に低くて轟く音を響かせて、近づいてきているではないか。

もちろん、追ってきているのは黒田であることは疑いようもない。まさか、たまたま辺りを飛んでいた報道ヘリが、深夜に爆走している車をわざわざ追ってきたりなどしないだろう。まぁ、深夜だから、ということもあるかもしれないが。

だが、今回に限っていえば、間違いなくそんなことはない。追ってきているスピードからしても、ついさっき飛びたって、徐々にスピードを出し始めたといった感じなのだ。

頭を引っ込ませ、さらに車を飛ばす。もうスピードは、メーターを振り切ろうとしている。

正直、車の運転というのには邪念の入る口の俺にとって、メーターを振り切らんばかりのスピードはとんでもなく緊張させるものだが、今はそんな弱気なことはいっていられない。

もし止まろうものなら、ヘリに装備してあるだろう機関砲の一斉掃射にあうことは、目に見えている。ヘリの装備で一斉掃射されては、こんな車、一たまりもない。

ここから海へは、ざっと七十キロかそこらだ。このペースでいけば後二十分とかからずに着くはずだ。

そう思考させている矢先、上空のローター音がつんざくように耳をついた。よりターゲットを映し出すために、眩しい照明が車を照らす。

このために、視界が一気にきかなくなるが俺は構わず車を飛ばし続ける。止まっても死、止まらずも死であるなら、どう考えたって後者だろう。どっちみち海に行かなくてはならないのだから、考えるまでもない。

そして考えた通り、機関砲により撃射が開始された。走る脇を機関砲の弾がアスファルトをえぐっていき、それが徐々に俺の乗る車のほうへと距離を縮めてくる。

「野郎、なかなかいい腕してるじゃぁねえか」

悪態をつきながら、俺は少し小刻みにハンドルを切って弾を遠ざけようとする。

しかしそれも虚しく、サイドミラーが突然弾けとんだ。機関砲の操者は、かなりの腕をしているようだ。このままでは、海に着く前までにミンチにされてしまう。

俺は全開にしているアクセルを、さらに力いっぱい踏み込んでスピードを上げる。メーターは完全に振り切ったままにたっていて、果たしてどれほどの速さになっているのか、俺には判断のつけようもない。

だが間違いなくスピードはあがり、連中のヘリよりも速くなった。スピードが上がったことにより、いったんは止んだ砲撃も、スピードが一定に保たれるようになったために再び開始される。

「くそっ、早く着いてくれ」

深夜の郊外に向かう車など皆無に等しいストリートには、幸か不幸か他の車が一切見当たらない。爆走するにはうってつけだ。こうなると、あとは横からくる車と、どうにか海に着くまでが勝負だ。

それに黒田とて、海までには決着をつけたいはずだ。俺が向かっているテムズ河の河口付近の海には、軍関係の施設も存在しているため、陸地とはいえ、付近を機関砲をもったヘリが近づいているとなれば、向こうが黙っているはずがないからだ。

それをわかっていない黒田ではないだろうが、奴としてもヘリを引っ張りだすしか、追ってくる手立てがなかったということだろう。

とにかく、一刻も早く海にまで行きたい俺にとって、奴らの攻撃を少しでもやめさせたいところだ。

そう考えていたところ、次は助手席のドアが金属同士の打ち擦られる耳を塞ぎたくなるような音がした直後、ドアが音を立てながら外れた。

あまりの猛スピードのために、わずかな走行の揺れも実際にはかなりの揺れ幅になる。そのせいでいつのまにか、機関砲の弾道上を走ってしまっていたのだ。

忌ま忌ましい気分で前を見ていたところ、海まであと十五キロと案内標識がでていた。思っている以上に早く海に着けそうだが、早く着きたいという気持ちがスピードを出していたらしい。

再び、機関砲の砲弾が後部座席のあたりにぶち当たり、かなりの衝撃があった。それに伴い車がバウンドするが、アクセルを緩めることはない。

そのまま黒田の追撃をかわしながら進むうちに、ようやく港地区に入ってきた。ここまでくれば俺の勝ち……そう考えていた俺が甘かった。黒田を乗せたヘリはこちらの意に反し、なおも追撃をしてくるではないか。

「くそっ、早く折り返せっ」

ハンドルをうまく操作しながら、迫りくる障害物をよけた。港にくれば当然、色々なものが置いてあったりするのでこのスピードでは、ほんのちょっとの操作ミスで命取りになる。

もうあと三分とたたずに、海に突っ込んでしまいそうであるのにまだヘリは俺を追ってきている。そして、このままでは本当に海に突っ込んでもおかしくないことを考慮すると、もしかすると海に突き落とそうとしているのかもしれない。

『この先、海　危険』と書かれた看板が、一瞬目にうつる。本格的に危ういと思った矢先、車体がガクンと変に上下に動いてハンドルを取られそうになった。

なんとかハンドルを切り返して元に戻すと、車体のヘッドに鋭く

金属音がする。何事かと前を見ると、ほんの何十メートルか先はなくなっていて、真っ暗な海が広がっていた。

俺は急ブレーキをかけるが、日本での法定最高速度の軽く二倍は出ている速さでは、そんなものはなんの意味もない。

あっという間に車は、ブオンとタイヤが高速で空回りする音を響かせたあと、次の瞬間にはドカンという衝撃とともに海水が車内に浸水しはじめた。

助手席側のドアがなくなっているために浸水は想像を絶するほど早く、瞬く間に車内から酸素を車内から海中へと噴出させていく。

俺は思いきり空気を吸い込み、水の中でなんとか身体を横にして足をドアの側面に向ける。続けざまに、もはや暗い海中にもずくと成り果て、沈みゆく車のドアの窓を蹴った。幸い、行動が早かったためか、まだ助手席側が上を向いているからだ。

水中で跳ね上がる身体を車の外に投げ出した俺は、腕で車の骨格部分を掴んで、さらに海上へと押し上げる。深夜のために、それが本当に海上なのかはわからないが、港を照らすライトの残光が、わずかにだが暗い水中からでも確認できるような気がして、それに従ってみたのだ。

海に没したのはほんのわずかな間のはずだが暗闇のせいか、思った以上に深く感じる。感覚としては、せいぜい十メートルかそこらと思えるが、実際にはさらに数メートルか……あるいは、十数メートルは深いところにまできているのかもしれない。

なんせ、あっという間に浸水されたのだから沈むスピードも、予想以上に速くても当然だ。おまけに、車のスピード自体も速かったこともあって、さらに沈むのが早かったのかもしれない。

とにかくだ。今は早く海上に出たい。思いきり海の中に出るさいに息を吸い込んではいるが、訓練もなしでは、そんなものはたかがしれている。

一刻も早く、新鮮な空気を吸いたい一心で俺は、もがくように上へ上へと泳いでいくものの、暗い水の中は、ただでさえ遠近感を狂

わせる水の中をさらに遠くに海面を感じさせ、思った以上に感覚を狂わせるものらしい。全く、上に向かっているような気にならないのだ。

もしかすると俺は、勘違いをしてありもしない光源に向かって下へと、自ら深く沈んでいっているのではないか……そんな気持ちにすらなった。

息もだんだん苦しくなり、溺死するんではないかと思った矢先、首が海面に出た。

「ぷあっ、がはっ」

バシャバシャと海面を手で叩きながら、咳込むような苦しみに合わせて、思いきり空気を肺に吸い込む。

ふと、この世に生まれたばかりの赤ん坊は、泣くことで初めて自分の力で呼吸するというのを、脳裏によぎった。きっとその瞬間というのも、今の俺みたいに、喉を刺激するような激しいものなのかもしれない、と。

海面に首が出たところ、突然眩しい光が俺を照らす。上空を、ローター音のうるさい音を轟かせ、ヘリが俺を照らしているのだ。

照らしているだけならまだしも、こちらを確実に機関砲で狙い撃とうとしている。はっきりいって、絶望的な状態だが俺にはまだ最後の切り札がある。あとはそれを待つだけなのだが、間に合うかどうかは全くわからない。

俺は手を額にかざし照らされた光のほうを見上げると、光源の上のあたりに、なんとなく動く影があったような気がした。気のせいかもしれないがもしそうだとすれば、間違いなく黒田の野郎に決まっている。

デニスとの裏取引は、功をそうしなかったのか……そんな考えすら浮かんできたとき、ヘリの背後からもう一機、ヘリがこちらに向かってきているのがわかった。黒田の乗ったヘリとは別に、ローター音が響いてきたからだ。

間に合った……こう思った瞬間、新たに後方に現れたヘリは問答

無用に、黒田の乗ったヘリを攻撃し始めた。
あまりに突然なことで俺も一瞬、なにがあったのかわからなかったがなかば本能的に海に潜り、岸のほうへ向かって泳ぎだしていた。
車のスピードが相当のものとあって、考える以上に沖にきている。車でもスピードがあれば、少しは飛べるものらしい。
息つぎのために海面に頭をだすと、その瞬間、黒田の乗ったヘリが爆音を響かせて炎上する。てっきり黒田のように機関砲かと思ったがどうやら、ナパーム弾を撃ち込んだのかもしれない。
黒田の乗ったヘリは制御不能となり、機体は不自然な回転をしながら海へと落ちはじめていた。
しかし俺は見逃さなかった。海に落ちるほんの少し前、機体から黒い影が海に飛び降りる瞬間を。当然、そんな芸当をやってのけるのは、あのヘリの乗組員には一人しかいない。
黒田だ、黒田の奴はまだ生きている……こう結論づけた俺は、急いで岸まで泳ぎ近くにあった船を繋いでおくためのロープを掴んで、どうにか陸に上がることができた。
陸にあがると、すかさず近くのコンテナの影に身を隠す。どうやらこの辺りは、大量のコンテナが置かれてある場所のようで、なんとも巨大なブロックパズルの中にいるように錯覚してしまいそうだ。
ヘリが落ちていった辺りから近い場所を暗がりから見つめていたところ、バシャンと水音がして、一つの影が陸に上がってくるのがわかった。
もちろん、黒田の野郎だ。やはりヘリが墜落しようとした際に海に落ちたと思われる影は、黒田だったというわけだ。
自ら海に落ちたとはいえ、夜の海に落ちるとあればそれは、昼間の海に落ちるのとはわけが違う。奴もそれをわかっているんだろう、必要以上に咳込んでいる。
それでも黒田は、咳込みながらもあたりを見回して、俺のようにすぐ近くのコンテナに身を隠した。暗がりから俺が狙ってないかを考えてのことだろう。

上空を、バラバラとヘリのローター音が響き、俺と黒田はその中で息を潜めあう。なにかあってもすぐ対応できるように銃を持とうとしたところ、銃が手元からなくなっていることに気がついた。

車を運転しているときに助手席に放り込んでしまい、そのまま車とともに海に底に沈んだのだ。当然、建物に潜入するために持ってきた道具もまとめて、海の底だ。

つまり今の俺にとって武器らしい武器は、いつも何かあった時のために常に携帯しているナイフ一本しかないということになる。

だがおそらく、黒田のほうも似たりよったりだろう。いくらヘリから逃げ出すことができたにしたって、装備品まで持ち出せたとは思えない。仮に持ち出せたにしても、海に落ちてしまえば弾薬が湿ってしまい、銃の弾としての威力など全くなくなってしまう。

よって、奴の武器もせいぜいナイフくらいなものだろう。もちろん、ナイフ以外にも水に強い武器がないわけではない。黒田がそれらの武器を、携帯していないとは言い切れない。

俺はそれを念頭にいれ、頭だけそっと物影からのぞかせる。奴が隠れた場所から、奴が出てきた気配はない。奴も奴で、どうすべきか考えているにちがいない。

こうした硬直状態がどれほど続いたろうか、上空であたりを飛び回っていたヘリが、だんだんと遠ざかり始めた。黒田はヘリの墜落とともに死んだとでも判断したのだろうか。

ありえない話ではないが、とにかくヘリが遠のいていくと同時に、黒田が隠れた場所から人影が這いでてきた。ここから見える限りでは、銃のようなものは携帯していない。代わりに、ナイフを一本右手に持っている。やはり予想通り、俺と同じで銃火器の類いは持ってはこれなかったらしい。

「さぁ、出てこい九鬼。私はナイフ一本だけしか持っていない。おまえもそうだろう。

ここで正々堂々、ナイフだけで決着をつけよう」

黒田は無人の港に向かって叫ぶ。信用してもいいものかと考える

が、どのみち奴にとってはこの辺りはアウェーなので、助かる見込みは少ない。だとすれば、せめて一矢、目標だったらしい俺を始末してから死のうとするのは、当然のことだろう。

もし俺が奴の立場だとしたら、やはり同じことをしたかもしれない。ただ俺の場合は、まだこんな場所で死ねないので有利な場合であっても、下手に出て命を落とす危険がある可能性に賭けるより、このまま逃げ出したほうがはるかに条件がいいに決まっているので、つい慎重になってしまうのだ。

黒田は出てこいと辺りに向かって何度も叫んでいる。俺は一度はここから逃げようとしたものの、変なところでお人よしが出てしまい、物影からそっと姿を見せた。全く、自分でもどうかしていると思う。

「……どうやら私は、おまえのお情けで生きながらえることができたということになるらしい」

自分の背後から現れた俺に、黒田がそう言い放つ。それもそうだろう。背後から現れるというのは、いつでも狙い撃つことができたというわけだから、殺されていたにしても仕方ないわけだ。

もっとも今の俺には、ナイフたった一本しか手元には残されていないが。

「まぁ、なんだっていいさ。それよりいい加減、決着ってのを着けようぜ。俺はもうあんたの顔なんざ見たくないんだ」

肩をすくめながら、憎まれ口をたたく。今度は形勢が変わった。先ほどはいかにして不利な状況をプラスマイナスゼロにするかだったのに、今度はプラスの状況から自らゼロの状態にしたわけだが、まぁいい。

「……ふっ、手元にあるのはナイフだけか。もしかすると銃でも一丁、隠し持っているかと思ったが……まだ私も運には見放されてないようだな」

「そいつはわからないぜ。もしかしたら、仕込み銃を持ってるかもしれない」

ニヤリと口元を歪め、持っているナイフを右手で握る。それを見た黒田も、同じようにナイフを持ち軽く構えた。

じりじりと互いの距離を詰めたところで、いったん足を止める。両者のあいだは、せいぜい四、五メートルといったところで、互いが一歩踏みだせばあっという間に急所をつける距離だ。

二人のあいだに、なんともいえない緊張が走る。状況を自ら追い込んだ者としてそれを跳ね退ける必要があるうえ、顔が割れてしまった以上はここで逃げてしまえば、これから先、黒田から執拗に追われない可能性はないとはいいきれないからだ。

バラバラというヘリのローター音も完全に消え、あたりに静寂がおとずれる。実際には、かなり遠くまでいっているのかもしれないが、深夜のために音がかなり響いてきているんだろう。

視線は一点に集中しすぎないよう、全体を観るように視界を拡げる。こうするだけで、不思議と心まで落ち着いてくるのだ。

視界の中で、黒田がゆらゆらと動いているのがよくわかる。どちらかが一歩でも前に動こうとした瞬間が、攻撃の合図になるだろう。

視界を拡げるうちに、自分の呼吸や鼓動音も聞こえなくなってきた。集中力が高まってきた証拠で、あとはいつ攻撃に出るかが勝負の分かれ目になる。

さぁ、こい……動いた瞬間、俺があんたの急所にこのナイフを突き立ててやる……そう考えた時だ。

視界の中で、ゆらりと大きく動く影があった。

「ふっ！」

自分でも自然と口を尖らせて、息をついていた。

動いた影の下から上に向かって、孤を描くように右手を突き出した。相手の動きに合わせ、その動きを利用する感じだ。

直後、右手に鈍い感覚があった。それと顔、左の顎のあたりに鋭い痛みが走る。

「ぐっ」

左の耳元で、低く呻き声が聞こえた。黒田だ。

ここにきて俺は、ようやく視界を一点に切り換えて黒田のほうを流し見た。黒田は顔面の筋肉を引き攣らせ、苦悶の表情でこちらを見つめている。

「……」

黒田の右手は俺の左後ろのほうに大きく流れ、反対に俺の右手は相手の左側の肺に深く突き刺さっていた。それも、完全に刀身が肺の中に押し込まれているようだった。

「……ふ、ふふ……わ、私の負けということか……」

黒田は俺のほうを見るでもなく、虚空を苦悶に呻きながらつぶやいた。そこからは普段の力強さは全く感じられず、もうすぐにでも力尽きてしまいそうなほど弱々しいもので、空気を吸っているのに穴の開いた肺から抜けて、ヒューヒューという音が聞こえる。

「……だ、だが、やはり私の目に、く、狂いはなか……」

みなまでいうことなく黒田は、俺の脇にズルリと力尽きて倒れこむ。と同時に、刺したナイフの刀身がそれに合わせて抜ける。

「黒田……」

何か一言つぶやこうとした俺は口をつぐむ。勝者が敗者にかける言葉などなにもない。力尽きもう意識もなく、ほんの数秒後には死んでしまう者になら、なおさらだ。

べっとりと血で濡れたナイフの刀身を脇見ながら、倒れている黒田の背中を瞬きすることなく見つめていた。

因縁だとしても、たった今のことであってさえ過ぎてしまえばなんてことはない。なんの感情もありはしない。

港の入口のほうから、眩しくヘッドライトでこちらを照らしながら、一台の車がやってきている。俺はそれに気付きながらもただ目を細め、倒れた男の姿を見下ろしているだけだった。

第７６章

ガラガラと音を立てながら車が止まった。エンストしそうになった直後に、運転手の男がクラッチを踏んで車の動きを止めたのだ。

自分の運転もお世辞に上手いとは言い難いが、この運転手ほどではない。そもそも、こんな下手くそな奴を運転手に添えなくてはならないほど、人手不足だというんだろうか。

まぁ、いい。見た目、二十歳にもなっていなさそうな、まだ少年といった雰囲気をもった運転手だ。技術もへったくれもないかもしれない。日本の若者みたいに、きちんと自動車学校に行ったというわけでもなさそうなのだ、自前の感覚だけでマニュアル車をなんとか動かしているんだろう。

「そろそろだ」

助手席に座る男が短くそう告げる。つい二十分かそこら前には、時速二百キロを上回るだろうスピードで車を走らせていたせいか、進む速さにたいしてとても遅く感じる。

「ここは……」

男の視線を追ってみるとそこは、なんとも古ぼけた監視小屋だった。今では海を埋め立てて巨大になった港も、百年、あるいは二百年以上前にはまだまだ発展途上にあったわけだから、この監視小屋もその頃に建てられたものであれば、古ぼけるのは当然といえるが。

いや、もうとうの昔に放棄されている小屋のようなので、元監視小屋といったほうが正確だろう。そんな小屋が連中の基地の秘密の入口だというわけだ。

そして案の定、その監視小屋の前で車が止まり外に出るようにいわれた。土台の石は黄ばみ、小屋そのものの外壁は建てられた当時のままの、日本なら地震がくれば一発で倒壊してしまいそうなコンクリートになっている。

この小屋こそが、デニスが手を結んでいる左翼レジスタンスの基地の入口になるらしい。この辺りは今でこそ軍用地ではなくなったが、百何十年も前は軍が管理していた土地だ。

その名残を受けて左翼のレジスタンスは基地にしようと目をつけたというわけだが、基地にしたのが左翼だというのが意外だ。むしろ、左翼ではなく右翼のほうが保守的な地理を利用して拠を構えそうなものなのに、実に意外だ。あるいは、そうした心理の逆手をとってからこそなのかもしれない。

車を降りた俺は、助手席に座っていた男が小屋の鍵をあけ中に入る。顎を使い入ってこいとジェスチャーするので、それに従い小屋に入った。

小屋の中は埃っぽい、こもった臭いがしていて、思わず手で鼻と口を覆ってしまいたくなるが男はそんなこと気にしていないところを見て、ぐっと我慢した。気にするほうがおかしいのかも知れないが、なんとなく負けた気になるからか我慢したのだ。

小屋の中には奥に小さな部屋があるようで、壁は昔ながらの石組みになっていた。そちらに向かって男は歩きだす。ここがきっちりと監視小屋として機能していた頃は、もう一人、当直か何かのために使われていたと窺わせるように、もう使えそうにないベッドの骨組みだけがあった。

「そこで止まれ」

部屋に入ろうとしたところで、男に止められる。男はベッドの脇にある壁の石を何個か叩くと、一つだけ音が違った。もちろん、そこまでくると俺にもわかる。この部屋の床なり壁なりが隠し扉になっているのだ。

音の違った石組みの石を、男はぐっと力を入れて中に押し込んだ。すると、ゴロゴロといった音をたてながらベッドはそのままに、床が等間隔に区切られながら下に落ち始めた。部屋の床そのものが階段になっているのだ。

しかも床が落ちきったあとをよくみると、その先が螺旋階段にな

っている。それもここから見る限りだと、かなりの急勾配だ。
「こっちだ」
顎を使っていう男に頷いて、彼の後に続いた。長めに感じた螺旋階段を下りきったところで、上のほうから再びゴロゴロと音が響いてきた。男はそれを特に気にすることもなく、下りきったところにある薄暗い通路を進み始めた。何もスイッチらしいスイッチを押さなかったので、ある一定時間経つと自動的に元に戻る仕組みなのかもしれない。螺旋階段にも、何か監視カメラのような類いのものがなかったことからも、多分そうだ。
薄暗い通路をまっすぐ進むと、その先にすぐ扉があるのがわかった。扉の上部に古ぼけた照明が一つ垂れさがっていて、扉を照らしている。取り付けられた当時は新品らしく銀色に鈍く光っていたかもしれない扉は、今となっては錆びついて焦げ茶色をしていた。
男はその扉をノックで合図した。三回叩き一拍、また二回叩いて一拍、最後に二回強く叩くと扉がギシギシと音を立てて開かれる。この扉も、上の隠し階段と同様に機械仕掛けらしい。
扉に入るといつもの癖で、素早く周りを確認した。真っ暗でよくわからないが、天井らしい部分に一点の赤い光が見える。おそらく、監視カメラといったところだろう。
となると、ノックの音を響かせて扉を開けるような監視式のものだとわかるが、同時にこの施設があまり広いものでないと予想できる。ノックが合図なんであれば、その音を聞き取れる範囲に監視員ないるはずで、彼らがその音を頼りに扉をスイッチを押して開けるといったものなのだ。当然そうなると、決して施設そのものも極端に大きいものでない可能性くらいは、すぐに予想できるのだ。
男は一言も発することなく、その光点のほうへ向かってもくもくと歩みを進める。
「ここからはおまえだけだ」
光点を横切ったところで、男が告げた。先ほどの扉と同様に、ギシギシと音を鳴り響かせて目の前に突然、四角い出入口が現れる。

この暗い空間と違い、少しだけ灯りがあるようだ。
「入ったら橋を渡って右にまっすぐ行け。三つ目のドアに入れ」
それだけ告げると男は、また来た道を一人、ほとんど音を立てることなく戻っていき、いくらかしたところで闇の中に姿を消した。
男を一瞥して俺は、彼のいう通りに通路に出るとそこは、どうも水路のようで水の流れる水音が聞こえる。
ここは通路とはいうがもっというと水路の脇に作られた、幅わずかに五十センチほどの窪みといった感じだ。水路自体の幅は七、八メートルといったところで、下を覗いて水の流れを見ると深さはざっと見ても十メートルはありそうだ。
もっとも、暗くて流れ落ちていく水量からそう判断したにすぎない。一つ確実なのは、もし落ちたらもう這いあがってこれそうにはないというのは間違いない。
これはまた当たり前のように錆びついた橋を渡ると、俺は足元に気をつけながら男にいわれた通りに、右に水路に沿って歩きだした。
ここがもし、ちゃんとした灯りがついていれば問題ないのかもしれない。けれどあるのは目印程度にしかならない弱光を放つだけで、本来の意味を失った古い裸電球が十メートルほどの間隔で設置されてあるだけだ。この水路全体を照らしているわけではなかいため、もし足を踏み外し水路に落ちようものなら、大変なことになる。
おまけにこの弱光では、ほんの二メートルかそこら先までしか照らさないため、男にいわれた扉など見分けられるのかと危惧したところ、手をつけていた壁に金属の扉らしい感触があった。どうやら、これが一つ目の扉のようだ。
この調子で五分か、あるいは十分なのかはわからないが進んだところで、ようやく三つ目の扉の前までくることができた。とりあえず、ここからはどうすればいいのか聞かされてないので、適当に先ほどの男がやったのと同じやり方でノックでもしようと手をやった。
直後に、その扉がギシギシと音をあげながら開きだした。一見なんの変哲もない鉄製の扉かと思いきや、どうも違っていたらしい。

「これは……」

扉が開いた先は、思ってもみない光景だった。てっきり誰かと会わせるためだと思っていたのに、目の前の光景はそれを裏切るものだったのだ。

まず視界に飛び込んできたのは、下から上へ向かって湾曲している巨大な黒っぽい壁だ。その壁の前には三本のタラップがかかっていて、そのタラップを渡って壁の中へ何人かの作業員と思われる人物たちが、それぞれのタラップから出たり入ったりを繰り返していた。

その壁の前にはいくつもの資材が置かれてあり、木の箱のもの、どこからか運ばれたらしい鉄筋の束、あるいは四方三メートルにはなる鉄板が何枚もあった。もちろん何が入っているかは知りようもないが、ダンボール箱が何十といわずに置かれていて、つい今しがた見た作業員らは、そのダンボールを運んでいたように見えた。

この壁の向こうにまだ何かあるんだろう。これほどの資材が置かれているのを考えれば、きっと何か建造物があると考えるのが妥当だろうが。しかし何を造っているのかは知らないが、地下にこんな巨大と思われる建造物を建てようだなんて、酔狂な話ではある。

いや、そうでもないか。地下建造物なんてものは、いつの時代も酔狂だと思われていたのだから、別に今のこの時代だからといってなんの不思議もない。

今でこそ、大都市に行けば当たり前にある地下鉄や地下街も、元をたどれば十八世紀末頃に計画されロンドンが発端となった、地下都心計画の計画、着手されるまでは、何を馬鹿げたことを、といわれていたのだ。それに比べれば海辺の地下で何か造っていたとしても、おかしな話ではないかもしれない。

まぁ、結局ロンドンは、地下鉄を作りはしたけれど、地下都市までは作らず終いだった。地下鉄の建設で莫大な費用がかかってしまったというのと、ロンドン市民のあちこちから地下鉄を延ばしてほしいという、要望があまりに多かったからだという話だ。

これが、単なる要望であればよかったかもしれない。これは非公開なことではあるが実のところ、地下鉄開通の成功で市民の中には、なかば脅迫する形で地下鉄延長工事をさせたこともあると、当時の建設作業員の残した日誌が見つかってもいるらしい。ようするにこれは日本でいうところの、無駄な道路建設の感覚に近いかもしれない。

そんなことに思いを馳せていたとき、背後に人の気配を感じた俺は、仕舞いこんだナイフを素早く手にとって振り向く。

「おっと。危ないぜ」

そこにはどこか愛嬌を感じさせる二十代後半と思われる男が立っていて、俺に切りつけられそうになったにも関わらず、男はあまり驚く様子もなく飄々とした態度でそういった。当然ながら、殺気を感じなかった俺も、本気で切りつけようとしたわけではなく、寸止めに留めておいた。

「あんたは」

「デニスの使いといえばわかるかな。彼から今晩、一人の日本人が訪れるはずだから案内しろと言いつかってきたのさ」

「デニスの……」

男のデニスという単語を反芻させ俺は頷いた。

「こっちだ。ついてきな」

「ああ」

全く、たいした男だ。いくら殺す気がなく寸止めだったとはいえ、ナイフを切りつけられそうになりながらも、動揺する仕草も見せないなんて。デニスから言づかってきたことから考えても、ただ者ではないのは間違いない。デニスの側近、あるいはそれに限りなく近い人物と見ていいだろう。

俺は巨大な壁を流し見ながら、男の後をついていった。俺の英国脱出計画には、ここに来ることが必須だからだ。

流れが前後することになるが俺がイギリスを脱出するのには、理由があった。それも急遽、脱出せざるをえなくなるような理由だ。

もちろん、遅かれ早かれそいつは覚悟してはいたものの、まさかまだなんの準備もないうちに脱出しなくてはならなくなるなど、思いもしなかったのだ。

ことの起こりは、俺がデニスの隠れ家を訪れたときのことだった。妙に俺を気に入ってくれているデニスだが、彼が挨拶もそこそこにこう切り出してきたことによる。

「久しぶりだな、デニス」

「ああ、実に久しぶりだ。最後にあったのは、おまえさんがこの国にやってきたときだったかな」

「最後もなにも、直接会ったのはあれが初めてだった」

薄暗い地下だというのに、不自然なほど大きなサングラスをかけた浅黒い膚をした男……イギリスの警察、すなわちスコットランドヤードではその存在の大きさと行動がゆえにテロリストとして登録され、裏世界ではその行動と誰隔てることなく接し人望を集めることで有名になったのが、このデニスだ。

「くく……ジョークだよ、ジョーク。もちろん覚えているよ。私を訪ねる東洋人など、ミス・フジワラくらいなものだからね、君はその二人目ということになる。

さて、それはさておき、そんな君がこうして私を訪ねてきたということは、何か特別なことがあるようだね。例えば、マフィアに狙われている、といった具合な」

「マフィア？」

思いもかけない単語がデニスの口から飛び出し、俺はついオウム返しのようにつぶやいていた。けれどもこの様子ではデニスは、ある程度、俺の取り巻く状況を知っているようだ。でなければ、いきなりマフィアなんて言葉をいうはずがない。

「アンソニー・ベケットが死に、マフィア同士の拮抗が破られたことで水面下で連中が動きだしている。ある者たちはファミリーの仇討ち、ある者たちはあら疑いをかけられての防衛のため、またある者たちは予期せぬ事態で混乱を避けるため……理由は三者三様だが、

とにかく動きだしている」
　ニヤリとするデニスの口から、薄暗い中でもよくわかる白い歯がのぞいた。その薄笑いと言い回しからは、明らかに俺が関係していることを窺わせる。
　普段であれば、もったいづけずにさっさと教えろというところではあるが、デニスの言葉とたたずまいからはそんなことを言わせない、雰囲気を感じさせるのだ。
「あんたが唐突にそんなことを俺にいうってことは、俺がそれに無関係じゃぁないってことか」
「その通りだよ。残念ながらベケットのファミリーからは、君は狙われている」
「……あんた、俺を連中に売ったな」
　俺は目を細めてデニスを見据えた。彼はそんな俺など気にする様子もなき、薄笑いを浮かべたままだ。
「悪く思わないでくれたまえ。これも君のためを思ってのことなんだよ」
「俺のためだって？　人を売るような行為をしておいて、そんなの信用できるわけがない」
「まぁ、少し落ち着きたまえよ。私とて命を狙われている人間だ、それも仕方ないんだ。それにあくまで連中には、君らしい人間が関与したかもしれない可能性を仄めかしたにすぎないよ。連中が君だというのを嗅ぎ付けるのは時間の問題だろうが、まだいくらか時間がある」
　デニスは何がいいたいのだろう。人を売っておきながら、まるで自分は味方だといわんばかりの言い草だ。
「なぁ、結局あんたは何がいいたいんだ？」
「簡単な話だよ、クキ。そろそろイギリスを出ないか」
　軽いジョークでも飛ばしたみたいな、何気なく言い放った。思わず唖然とし、俺はどう受け答えするべきなのかわからず、言葉を失ってしまった。

「こうなってきた以上、君がこの国に滞在し続ける意味も必要もないんじゃないか。どうだね、ここらで日本に帰るというのも一つの手だと、私は思うがね」

「おいおい、ちょっと待ちなよ。なんだって突然そんな話になるんだ。たしかに日本は俺の国だが、それとこれとは話が違うぜ。第一、今すぐに帰ろうったって、こっちにも最低限の準備ってものがある。そんな思いつきでいわれたことを、はいそうですかと受け入れられるはずがない」

デニスの言葉を遮るように、早口にまくし立てる。

「出国準備か。たしかに今の君のパスポートでは、追っ手を差し向けられることは間違いないだろうね」

「だろう。おまけに、金だって今から準備しなくちゃぁならない。そんな簡単にはできないぜ、いくらなんでも」

「クク、君は変なところで心配性だな。君は私を誰だと思ってるんだい？　その程度など、私の手にかかればなんの造作もないことだ」

ニヤリとした唇が、さらに深く横に伸びる。改めて見ると、デニスはアヒル顔をしている。それに、決してファッションでかけているわけではないサングラスはどこか中途半端さを感じさせ、どこかのルンペンかなにかを思わせる風貌といったほうがしっくりくるかもしれない。

「たしかに、そうかもしれんが……だがな、俺にだって予定ってもんがあるんだ」

「だからいったろ？　まだいくらか時間があるとね。その間にやることを済ませてしまえばいいんだよ。君のことだ、もうボネットのところまで考えついてるんじゃないのかな？」

やれやれ。ぐうの音もでないとは、まさしくこんなことをいうのだろう。全くデニスのいう通りだった。

「気にしなくていい。私としても、ボネットのことは前々からどうにかしなければと思っていたんだ。君が始末をつけるというなら必要なものは全て用意するよ、全てね」

そういうデニスの顔から、これまでの薄笑いを浮かべていた表情が消えた。

「あんた、一体なにを企んでるんだ？　あんたは以前、たしかに俺によくしてくれたが俺はなんであんなによくしてくれたのか、ずっと疑問だった。この世界に身を置いてると、なにかしてくれるというのはすなわち、打算であるってのが鉄則だろう？　それこそがこの世界を生き抜いていくことができるルールみたいなもんだ。俺の人生哲学には、タダほど怖いものはない、タダを疑えと思ってるんだ。

だってのにあんたは、ほとんど無償といってもいい、なんのメリットもない俺の密入国を手伝ってくれたよな。まだ今よりも若かった俺はなんの疑いもなくそれに乗っちまったが、今にして思えば、あんたは俺を何かの駒にしようとしたかったのか」

早口になりながら、なかばわめき立てるようにそう言い放つ。

「……いって信じてもらえるかはわからないがね、私は純粋に君や、あるいは他の者を助けているつもりだ。なんせ、こんな成りであっても一応は神父なんでね」

「神父？　あんたがか」

「ああ。まぁ、とはいっても昔の話だがね」

デニスは、やや自嘲気味に肩をいからせながら笑った。なにがあったかは聞かないが、きっと神父として危なげなことに首を突っ込んだ結果巻き込まれ、揚げ句には、神父としての性格ゆえに他者を救おうとしたのかもしれない。

俺なら余計なことはするなとは思う反面、助ける助けないもまた、助ける側の自由とも思えるので、成るようにしか成らないと考えるところだ。しかし、デニスはそうやって生きてきたからこそ、今のような立場になっていったんだろう。

だが、こんなお涙ちょうだいな話を鵜呑みするほど俺はおめでたくはない。デニスが悪どい奴だとまでは言わないが、かといって全てを信用することはできない。神父だったにしろ、なんだったにし

ろ、デニスという男がイギリスの地下社会において重鎮であること、同時にスコットランドヤードが危険視するような人間であることには変わりはない。それまでに至る経緯がどのようなものであったにしろだ。

ましてや、頭をひねらせるようなゲームを好むような奴であれば、なおさらだ。どのみち、どういう理由だったのかわからなくとも俺の望む、あるいは知りえたいことは聞けそうにない。

「……まぁ、いいさ。この際あんたがどんな理由で俺を助ける気になったかは、もう聞かないでおこう。

それより、今あんたはなんでも用意するといったな。だとするなら、逃走経路の確保と国外脱出のための飛行機をなんとかしてほしい。それと、ボネットの野郎の居場所もだ」

そういうとデニスは、一度力強く頷いていった。

「ああ、任せてくれ。必要なものは今日中に用意させよう。

それとボネットの居場所は正確な場所は残念ながらまだわかってない。やつも狡猾で、ちょくちょく住居を変えているようだからね。だが、そんな奴もこの二ヶ月ほどのあいだのことなんだがね、秘密裏にある場所に週に一度必ず向かう場所があるんだ。そこに行きたまえ。そこは鉄鉱の精錬と加工を生業とした工場らしい。

最近わかったことだが、そこの社長は自分の力一つで会社を大きくしていたと思われたんだけども、どうも違ったらしい」

「ボネットの野郎が裏で糸引いてたってことか」

「そういうことになるね。ま、そんな話は別に珍しい話でもないからいい。問題はそこがマフィアの資金源の一つになっている、というところだ。いや、作業員自体がマフィアなんだよ。

同時に、この連中が今回の騒動の直接の原因なのさ。これも珍しい話でもないが組織というのは、ある一定のラインを越えてしまうと必ず資金のやり繰りに頭を悩ませる。特に裏世界の組織であれば当然、やってはいけないというルールがあったとしても、やってしまいたくなるものなんだ」

そうか。ベケットが結ばせたという協定とやらを蹴ったのは、この連中だったというわけか。

ある程度の予想はしていたことではあるが、これではっきりした。ベケットを始末したのはこの連中なのだ。協定を結ばせたような重鎮なのだ、そんな男を殺せば当然混乱は免れない。しかも、その連中の親玉が金の亡者であるボネットとあれば、協定を結ばせ必要以上に裏金を作らせないように線引きをした目障りなベケットを、始末しようと考えるのも自明の理というものだろう。

そこで、連中は残る一方の組織を引き込んだ。三すくみであれば、二対一と孤立させられてしまうのは当然の結果なのだ。だからベケットは俺に連中を始末させたというわけだが、まさかもう自分が始末されるよう手を回されているとは、思いもしなかったろう。

いや、実際には組織内でですらベケットは孤立していたのかもしれない。ベケットが殺されたというのに腰の重かったファミリーのことを考えれば、本当は奴が目障りに思われていた可能性は十分に考えられる。

なんだかんだいってはいても連中だって組織なのだ、金を稼ぎたいに決まっている。ましてや、ライバル組織二つがボネットを後ろ盾に荒稼ぎし始めたとなると、当然焦るはずだ。しかし協定をけしかけた側として、いきなり撤回するわけにもいかない。ようするに連中はベケットの死を利用することで、荒稼ぎするための理由が欲しかったに過ぎないというわけだ。

まぁ、そんな自分の命が狙われていないとは思わなかったろうが、まさかこんなにも早く、命を落とすことになるとはベケットも思わなかっただろう。

「ところで君はブルース・テイラーという人物を知っているかな」

しばしの沈黙があったあとに、デニスが静かに聞いてきた。

「名前だけだな。たしか、労働党の代表だった男だ」

「この男と接触してみるといい。テイラーはボネットの政敵ともいうべき男でね、このところ、ボネットに命を狙われてからというも

の、住居を人知れず変えて雲隠れしているんだ。野心の強い男で、次の首相選挙にも出馬するという話だ」

「ほう。そいつは初耳だね。それが本当なら、俺の耳にも入ってくるはずだが」

「くくく。私を甘くみないでもらいたい。与党がいくら変わろうとも、私はイギリスの犯罪者として常にブラックリストに載っている人間だよ？　そんな人間がとる行動など、君ならいわずとも理解できるだろう？」

デニスはなにをいってるんだと笑いながら、俺を見据えた。なるほどな。そこまでいわれれば、確かにわかりやすい話だ。デニスのやつはテイラーの側近に、自身の部下をスパイとして潜り込ませているというわけだ。

俺は肩をすくめながらいった。

「それで。あんたはそのテイラーと俺を会わせて、どうしようっていうんだ？」

「単純なことだ。彼に逃げる手筈を整えさせるのさ。テイラーは労働党の代表ではあるが、それでいながら軍との強力なパイプを持っている人間でもあるんだ。

いや、むしろ彼は、軍上層部が送り込んできた政治エージェントといってもいいかもしれないな。あるいは、ボネットからの執拗な攻めに対していくうちに、自然と軍方面の人間へ傾いていったのかもしれない。ボネットはあれでいて、軍上層部とはウマが合わないようだから」

「待ってくれ。ボネットの奴は、敵だった連中は全て葬ってきたと聞いたぜ。奴の手から逃れられた奴がいたのか」

デニスの語っていることは、マーロンの親父の話していたこととは食い違う。マーロンの親父が正確でない情報を喋ったことなど、いまだかつて一度もなかったことのせいか、デニスの語ったことには少しばかしの驚きがあった。

「確かに、それもあながち間違いではないさ。しかし、人間のやる

ことに絶対なんてものはないのだよ。攻めの百戦練磨の者がいるなら、やはり守りの百戦練磨もいるものだからね」

確かにそれも一理ある。世の中、人間が思っているほどうまくいくものでもない。極端な話をすれば、たとえ全てがうまくいっていたにしてもその日、ひょんなことで死んでしまうことだってある。そいつからすれば夢半ばなのだから、全てが水の泡になるのだ。こう考えればデニスのいっていることは、別になんの不思議もないことだ。

俺は重々しく頷くと、顎でデニスに先をうながした。

「うむ。そのテイラーのコネクションを使えば、君をすぐにでも国外へ脱出させることができる。パスもあちらで用意させよう」

「……しかし、テイラーがそうも簡単にどこの馬ともしれない俺の頼みを聞いてくれるだろうか」

「なに、そこはこちらからの圧力をかけておけば問題ないさ」

そこまでいうならもう何もいうまい。俺はそう判断して、ただ肩をすくめるだけだった。

「わかった。あんたを信用するとするよ、前のこともあるしな。ならボネットの場所はわかるかい？」

「もちろんさ。裏世界の情報はほとんどといっていいほど、私のところには流れてくるからね」

薄い笑みを浮かべながらデニスは囁くようにいう。全く、得体の知れない人間というのは、こういう人間のことをいうのだと良い見本だ。

「さっきもいったがボネットは毎週、裏で糸引いているマフィアのアジトの一つに赴くことになっている。それも時間、ぴったりにね。この二ヶ月のあいだは一度もそれが破られてはいないから、おそらく今日もそこに現れるはずだ」

「おいおい、ちょっと待てよ。今日だって？」

「ああ、そうさ。なんとかできるだろう？　場所もわかるし、そのために必要な物も手に入る。君の腕なら簡単なはずだ」

呆れてものもいえないとはこんなことをいうんだろう、俺はその、まるで人の行動を予知していたんではないのかと疑いたくなるほど用意周到なデニスに、なにもいえずただため息をつくと、やれやれとかぶりを振って肩をすくめることしかできなかった。

「やれやれ、もうそこまで準備が整っているなら、こっちとしても今晩やらざるをえないんだろうな。あんたのその手腕には毎度のことながら驚かされるよ、全く」

「ふふ。私のネットワークは広いのさ、この業界の誰よりもね。まぁ、とりあえず、君の起こした火の後始末はこちらでなんとかしよう。そのほうがこちらも好都合だからね」

薄暗い中であるはずなのに、デニスの口元が確かにニヤリと歪むのがわかった。この男が裏世界の重要人物であるというのを知らなかったら、本当に胡散臭い人間きわまりないほどの薄笑いだ。

「それじゃぁ、頼んだぜ。獲物はこっちで用意できるから、あんたには脱出の準備をしておいてもらいたい。俺からの要求はそれくらいだ」

「ああ、わかったよ。君がいつでも脱出できるよう、日付が変わるまでにはなんとかしておこう」

俺はデニスの言葉に頷くと踵を返し、来た道を戻ろうとするがふと思い出したことがあった。情報通でもあるデニスならば、あるいは知っているかもしれない。

「デニス、最後に一つだけ聞きたいことがある。あんた、ベケットの奴が始末された理由を知らないか」

「……というと？」

「これは俺のちょっとした推測なんだが、ベケットはただ、協定を結ばせたからマフィア連中から目の敵にされていたんじゃぁないってことさ」

「つまり、なにか他に理由があるといいたいのかな」

デニスの問いかけに、俺は小さく首を縦に振る。

「あんたのことだから今回の発端に、マフィアどもの裏取引があっ

たことはもう知っているはずだ。その取引されるブツの中身の一つが消えていた。たいしたことのない話なのはわかってるつもりだけど、妙に気になってるんだ。こんな小さなサンプルケースにいれられた物なんだが……あんた、何か知らないか？」

あの血液の入ったサンプルケースの大きさを、右手の指で示す。

デニスは少しのあいだ何か考えるそぶりを見せたあと、思い出したように語りはじめた。

「……サンプルケースなんていくらもありすぎて、私にも正確には答えようもないことだけどね……。

何年か前に、あるドラッグがロンドンの地下クラブで流行ったことがある。それこそ君がロンドンに流れてくる、ほんの何ヶ月か前の話だ」

「ドラッグ？」

「ああ。実のところ、私もよくはわからない。あまりに速いペースで瞬く間に流行ったものだったが、消えるのもあっという間だったんでね。

そもそも、流行ったかどうかすらあやしいものだった。出回りだしてから噂が消えるまでは、ほんの二ヶ月か、せいぜい三ヶ月がいいところだったからね」

「そのドラッグが、サンプルケースの話と関係あるのか」

自分の知りたいこととは全く関係のなさそうな話が飛び出してきて、俺はつい、デニスの話の腰を折った。けれどデニスは、そんな俺のことを鼻でふっと笑い、気にすることなく続ける。

「まぁ、別にその手の話がどうとは思わない。そんなのは日常茶飯事だからだ。けれど、そんな私がこの噂を聞き付けたきっかけがあったからなんだ」

「どんな」

「ふっ、おかしな話さ。このドラッグを吸引した者は、みんな一様に死んでしまったからだよ」

「死んだ」

「ああ。一人残らず、ね。中には助かった者もいるんだという話もあるにはあったが、結局は、なんの根拠もないただの噂に過ぎなかったがね」

一人残らず死んだ……確かにそいつはおかしな話だ。たとえ強力なドラッグであったにしても、いくらなんでもキメた奴が一人も生き残ることなく死んだというのは、いささか考えにくい。

もちろんキメすぎれば、過剰摂取により免疫力の低下し数多の合併症を併発したり、あるいは衰弱死してしまうことは知ってはいる。しかし、かといって常用者、つまりジャンキー全てが死ぬというのはどう考えても異常だ。

たとえば、スピードボールと呼ばれるものがある。これは麻薬の成分と覚せい剤の成分を混じり合わせることで、互いの相乗効果によってさらに依存性、人体への悪影響を高めるために作られるドラッグだが、もっとも有名なのが麻薬の代名詞であるヘロインと、同じく覚せい剤代表のコカインで作られたスピードボールは、なにものにも代えがたい至高のドラッグになるという。

まぁ、スピードボールなんていうのは、麻薬と覚せい剤それぞれに含まれる成分が結合して作られるわけだから、実のところは麻薬と覚せい剤でなくても作ることはできる。当然、ヘロインとコカインの組み合わせほどのものではないが。

つまるところ、全く種類の違う栄養ドリンクを何本かまとめて飲めば、場合によっては胃の中でスピードボールが生成されないともいいきれないのだ。

実際にドイツで昔あったことだが、ある青年がドラッグによる過剰摂取によって衰弱死したという事件がある。その事実は、周囲の人間を驚かせたという。家族や恋人、友人たちは青年がドラッグをやるような人間でないと知っていたからだ。青年がそうなるまでに禁断症状がでたことがあったとか、あるいはドラッグを買いに行くようなそぶりは一切なかったことからも、それはあまり考えられないというのが周囲の人間たちの一致した気持ちだったという。

そして、家族が再捜査を願い出てわかったことが、青年が健康マニアであるということだった。彼は元気になれるというのを理由に、毎日朝昼晩の三回、全く成分の異なる栄養ドリンクを飲むことが日課だったというのだ。ときに青年は一日一本でいいドリンクを、立て続けに二本三本飲むことすらあったらしい。

これが青年を死に至らしめた原因だった。これは世間的にも知られていることだが、ドラッグの成分は完全に抜けきれるまでには軽いもので少なくとも一週間、ヘロインなんかはごく微量であっても三週間からの期間は必要であるといわれている。この抜ける期間はあくまで薬物摂取し始めた、最初期の目安であるから、常用者には当て嵌まらない。

つまり青年は、知らず知らずのうちに、薬物常用者のそれになっていたということになる。一日一本でいいものを二本三本と、種類の違う栄養ドリンクを飲んでいたことを考えると、完全なジャンキーになっていたんだろう。良かれと思ってやったことなんだろうが、全く皮肉な話だ。

実際には、日本でも栄養ドリンクが手放せなくなり、飲まないと調子があがらないといった症状のある者も確かにいるのだ。これも理由はドイツの青年のものと同じである。

ともあれ、ヘロインとコカインのスピードボールの危険性は、他のドラッグのそれよりもはるかに上回るものだ。しかし、たとおこの組み合わせであっても、たった二、三ヶ月のあいだで常用者全てが死ぬわけでないのに、そのドラッグはわずかな期間で全ての者が死んだというわけだから、なるほど、デニスも噂程度であっても耳にいれておきたいと考えるのは当然の成り行きというわけだ。

「しかしそんな中、その筋からの人間からの情報で、そのドラッグがタブレットや粉末状のものでなく、液体であるらしいというものがあった。それも、ほんのわずかに薄いピンク色をした液体だという話だったな。

たしかそのドラッグは、薬液保管用の小さなサンプルケースに入

れられた、今までにないタイプのものだと聞いたよ。もしかしたら君のいっているのは、そのことじゃないかな？」

「……俺もはっきりと見たわけじゃぁないから確かなことはいえないが、多分、そいつであってると思う。というよりも、そんな形状をしたブツなんて、そうそう出回るような物でもないしな」

「……これも根も葉も無い単なる噂話程度のものだがね、その新種のドラッグを得るために、常用者同士の殺し合いすらあったと聞いた。よほど、他には得難いものだったらしい。

まぁ、なんにしてもどこまでが本当の話かはわからないけれど、一ついえることは、そんな物などないに越したことはないということくらいだね」

デニスの肩をいからせながら薄笑いを浮かべているのを見ると、それこそどこまで信じていいのかわからなくなってくるというものだ。しかし俺は、そんなデニスになにもいうことなく、ただ一度頷くだけだった。

男に通された部屋は色々なコンピューターがいくつも並べられた、いかにも指令室といった雰囲気の部屋だった。なんともおかしなもので、大人心に少しばかしそれらに興味がわいた。

東洋人である俺が指令室に姿を見せたにもかかわらず、部屋に詰めている連中はほんの少しだけこちらを見ただけで、すぐに目の前のコンピューターへと視線を戻した。彼らもいきさつは聞いてはいるのかもしれない。

「テイラーさんから話は聞いてる。今晩、ここに一人の日本人が訪ねてくるはずだから、脱出の手助けをしてやれってな。いつまでたっても来る気配がなかったのに、それがいきなり車で近くまで爆走してくるだろう？　それでこっちもすぐに出れるように待機しておいたんだ」

つまりこの男がヘリを出動させたということになるわけだが、なるほど。テイラーが軍と関係しているというのは間違いなかったことにもなる。この男は先ほどのこのアジトへの案内人の男と比べ、ずいぶんと軽そうな印象を与える人物だった。しかし、攻撃されそうになったのに全く驚く様子のなかったことから、その印象はあくまで印象であって、実際には違うのだ。

「テイラーから聞いてるんだったら詳しくいう必要もないだろうから省略させてもらうが、脱出はどういうルートを使えばいいんだ」

「ああ、もう準備はほぼ整ってる。こっちだ」

そういうと男は指令室らしい部屋を抜け、隣のドックへと通じている通路へと出ていく。どうやら、脱出のための道具が見えてきた。地下にあることからも、おそらく……。

「ここを真っすぐいくと下にいくための階段がある。それを降りてドックまで行く」

男の説明に頷きながら、ガラス張りの通路を階段へむかって移動していく。ここの構造上、おそらくこのドックが先ほど目にした巨大な壁の向こう側といったところだろう。通路からは死角になっていてよく見えないが、指令室の下あたりにその乗り物があるに違いない。

「それにしても驚いたな。まさか、脱出のための乗り物が潜水艦だなんてな」

「ほう。なんでそう思うね？」

「簡単な話だろう。海、地下、ドック……ついでに俺の脱出のための手筈といい、これらから導き出されるのはどう考えたって、潜水艦くらいしか思い付かないぜ。ま、乗ったことなんてないが」

通路の先にあるドアを開け、すぐ目の前にあった螺旋階段をくだってドックへと降りた。周りには壁の反対側と同じく、いくつもの荷が置かれてあったがもう乗組員らしい人影は見当たらない。

「ま、君のいう通り、これから乗ってもらうのは潜水艦だ。色々不便はあるだろうが安全に君を日本に帰すためだ、そこらへんは我慢

してもらおう」
　男の言葉に黙って首を縦にし、後をついていった。周囲を見回し、件の潜水艦を探すがそれらしいものは全く見当たらない。あるのは、反対側と同様の上に向かって大きく湾曲した黒っぽい壁と、中になにが入っているのかわからない荷物ばかりだ。こっち側からも壁に向かって橋がかかっているのを見ると、作業員たちが反対側から運んできた荷物は、こちら側に置かれているようだ。
「さぁ、そろそろ出発の時間だ。乗ってくれ」
「おい、ちょいと待て。乗るっていったって、その潜水艦はどこなんだ。もしかして、この壁の向こうなのか」
　俺が疑問を口にすると、男が眉間にシワを寄せて笑い出した。
「潜水艦ならもうあるぜ、目の前だ」
「目の前……」
　そういって真っすぐに視線をやる。あるのはあくまでも湾曲している巨大な壁だけだ。
「まさか、この壁か」
　そうか……湾曲している変な壁だとばかり思っていたが、それもそのはずだ。壁は壁でもそれは潜水艦の外壁だったのだ。
「ご名答。さ、とにかく乗ってくれ。それからの指示は艦長がだす」
「ああ」
　いうが早いか俺は早速、単なる壁だとばかり思っていた潜水艦の中へと入っていった。中に入ってすぐのところに艦長らしい、厳格そうな五十代くらいと思われる男が立って、俺達を待っていた。なかなかに整った顔立ちをしていて、サッカー選手であるベッカムの二十年後はこんな感じだと予感させるような顔だ。
「この男が話に聞いていた日本人だ。あとはよろしく頼む」
「了解した」
　そんな短なやり取りのあと、ここまで案内した男はすぐに艦を降りるべく、目の前から消えていった。
「君はこの艦の大事な客人であるから、丁重にもてなすつもりだ。

だが、この艦に乗る以上、私の命令には従ってもらう。いいね」
そう艦長が告げると次に彼は、これからの俺の脱出のための手筈を説明し始めた。俺にはどれも目新しい説明ではなく、適当に相槌を打つだけで、興味は完全に潜水艦そのものへと移っていた。
艦長はああいったがそれにこちらとしても、別に彼らのいうことを聞かないつもりは毛頭ない。海のことは海の男達のいうことを聞いておいたほうが、絶対いいに決まっている。

海の中を航行している潜水艦の窓すらない船室は狭く、なんとなく息苦しく感じられた。窓……いや、外の景色が一切見えないというだけで、見かけ以上に船室が狭く思えてならない。実際に船室はせいぜい四畳半一間といった広さしかない。
それでもこの大西洋のど真ん中において、これほどまでの広いスペースを与えられるなんていうのは、一国のトップか、もしくは王族くらいなものだ。はっきりいって海の中の一畳なんてのは、東京やロンドン、ニューヨークなんかの一等地に建てられた超高級マンションの一部屋と、おまけでベンツがついてきても、まだ軽く何百万円ものお釣りがくるくらいに貴重なのだ。おまけに部屋には、兼用ながらシャワー室ととトイレまで完備されている。
そんな貴重な空間を南アフリカまで、俺というどこの馬ともしれない荷物を運ぶというのだから、ちょっとした貸し切りにも近い感覚かもしれない。それもそのために、何億、十何億という金が動く金わけだから、まさしく超ＶＩＰ待遇といっても過言ではないだろう。
南アフリカからは飛行機で一路インド、それからシンガポールへと渡り、上海、そして東京というルートで帰国することになっている。もっと短いルートもあったらしいがあくまで安全に、そして確実に俺を帰すというのが任務であるそうなので、こんな回りくどいルートをいくことになったらしい。
ともあれ、南アフリカまでは暇を持て余しているので、やろうと

思えばいくらでも惰眠を貪ることもできるし、俺のためにわざわざ五ダースものウイスキーの箱が運び込まれているらしい。どれも最高級のウイスキーらしく、東京のバーであれば一杯三千円はからはするものばかりだという。

そして早速、その一本であるバランタインの３０年を開け、豪快に瓶に直接口をつけて胃に流し込んでいた。ぜひ一度やってみたかったので、これもいい機会だ。

けれど、こんなウイスキーをたらふく飲み、酔っては寝る生活をすでに数日ものあいだ繰り返していると、いい加減呑んだくれの日々にも飽きがくる。その日はウイスキーを口にすることなく、ただぼんやりと英国脱出した日に会った、デニスとの別れ際に話したことを思い返していた。

「ある人物に会ったときの話なんだがな、そいつがいってたよ、ある血液のサンプルは奇跡が秘められてるってな。そいつはどうしようもないジャンキーだったから、どこまで話を信じていいのかわからない。だが、たかだか血液のサンプルにそんなことがあったりすると思うかい」

「つまり君は、それが私の話したところのドラッグがそれではないかといいたいわけだ」

俺のいいたいことを先読みして話すデニスは、こういうとき本当にやりやすい。こちらの話す手間を省いてくれるのだから。

「正直、俺にもわけがわからないんだ。だってたかが血液だぜ？それが仮にあんたの話したドラッグだとして、わからないことが多すぎる。血液がドラッグだなんておかしすぎる話じゃぁないか。そんなものをジャンキーどもやバイヤーが手をつけたとも思えないんだよ、俺にはな。

もしくは、あんたのいうドラッグと俺のいうサンプルの話は別なのかもしれない。はっきりいって、今現在の情報からじゃぁ判断材料が少なすぎて、別々のものとして考えたほうがいい気がするんだ」

俺はそこまでいうと、いったん言葉を区切る。

「気がするが気にもなる……同じ物である気がしてならない、といったところかね」

「……ああ、判断材料が少ないのは確かだけどな。しかし不思議なことに、ある程度の状況証拠があるのも事実なんだ。あんたは俺がこっちに流れてくる何ヶ月かくらい前だといった。時期的に、ある人物が語っていた時期と重なるんだ」

俺はチャールズ・メイヤーが語っていたことを思い出していた。あの男があの血液サンプルの論文が発表されたのは三年前だと、たしかにいっていた。俺がロンドンに流れてくる、ほんの少し前といえば時期的にはそれと符合するのだ。他にも、マフィアであるベケットが異様な態度であれを欲しがったのもそうだ。

そして遺伝子学者のメイヤーが欲しがったのも、またベケットが欲しがったあれだった。ベケットは趣味からか、遺伝子学方面へ多少なりとも明るかったと思われるが、もしあれがデニスのいうようにドラッグであれば、ベケットが欲しがったのも理解できないわけじゃない。

しかし……問題は、売りさばくにしてはその量が少なすぎるというのと、ドラッグそのものをベケットの奴が本当に売りさばきたかったのか、といった疑問は残る。それにメイヤーは死ぬ前に、日本の研究チームがあれを解析したと口にしていた。ついでにそれにスポンサーがついていたというのも気になる。

だとすれば、俺としてもそいつを確かめてみてもいいかもしれない。どうせ日本に戻っても時間はあるのだから、片手間であればあれの追跡をしてみるのも悪くない。なんとなくだが気になるのは確かだからだ。あくまで片手間だから、後回しになるのは仕方ないとしても。

そうだ……日本に帰れば、時間は別の方面に使われることだろう。海外の裏事情を知ったうえでの帰郷だ、おそらく以前とは比べものにならないほどの耳寄り情報を仕入れることができるにちがいない。あいつの、沙弥佳の失踪事件の情報を……。

俺は感慨深げに過去のことに思いを巡らせる。五年前の、沙弥佳の失踪のときの記憶だ。

（ここらがいい潮時だな）

小さくかぶりを振って、もたれていたベッドが面した壁から背をはなし、ベッドから立ち上がる。こうなったら、まずはコネ作りからだ。幸い、この何年かの間でそういったやり方はわかったし、人が集まっているところに情報もあるという鉄則から考えても、以前日本にいたときよりはかなり楽に情報収集やコネクション作りができるはずだ。

何が待ち受けていようと、必ずおまえを助け出してやるからな、沙弥佳。だから、まだしばらくのあいだ待っていてくれ。俺が必ずなんとかするから。

デニスを通じて、テイラーに部屋から持ってこさせておいた沙弥佳の失踪の少し前に撮った写真を手にとって眺めながら、そう心の中で固く誓った。

写真の中の俺達は、対照的な表情をしている。一方はぶっきらぼうにしていて、笑っているんだかなんだかよくわからない表情、もう一方は心の底から嬉しく微笑んで一方の腕に両手でもって、しっかりと掴み絡ませている。

暗い海の中を、南アフリカに向かって航行する潜水艦の中で自らを奮い立たせながら、俺は日本に着いたらどうするべきかを考えはじめる。早く、一秒でも早く日本に戻りたいと、強く願いながら。

第７６章（後書き）

今回で前夜編は終わりです。次回から現代編の続きになります。

第７７章

ふわふわとした浮遊感に、どこか懐かしさを覚えた俺はぼんやりと、その意識の浮遊に身を任せていた。

『……ないで』

不意に聞こえてくる音。

いや違う。……声だ。いつもの、囁くような小さな声。だけれど、とても心地よい囁き声。

『死なないで……』

もう俺は無理そうだ……もうこのままでいたいんだ。

囁く声に、俺は静かに語りかけるように答える。疲れた……だから、もう眠ってしまいたいという気持ちが先だっていた。

『駄目、死なないで。お願い……』

もう何度も聞いてきた声に、それと同じく、何度も同じことをいってきた俺の意識が突然、ぐいっと下から引き伸ばされていくような感覚があった。

『駄目よ、死なせない。絶対にお兄ちゃんは死なせないから』

もう止してくれ……。

あのとき、たとえ幻覚だったのかもしれなくても、おまえの姿を見ることができたんだ。俺はもうそれだけで十分だ。

始めは小さな囁き声だったのが、今ではっきりとそれを表すように、とても大きなうねりとなって俺の意識に嵐のごとく、がんが

んに響き渡る。

まるで、俺の意識そのものを支配しようとするみたいでもある。それを象徴するように俺を強く否定する声は、こちらの意識をさらに下に下にと引き伸ばしていく。

それはさながら、意識の渦……あるいは、意識を宇宙にたとえるならば、ブラックホールのようですらあった。抗えないほど強力な重力に捕われた俺の意識は、ただ落ちていくことしかできない。

『お兄ちゃんはまだ死んじゃいけないのよ』

まるで呪詛のようにも聞こえる言葉を最後に、俺という自己を持った意識は、完全にそのブラックホールの中へと吸い込まれていった。

暑さにうなだれる身体に、鞭打つようにゆっくりとベッドから起き上がる。なにもしていないのに、すでに身体中汗ばんでいた。

それも当然だ。暦は六月も終わってすでに、七月も下旬に差しかかろうという頃になっているのだ。じめじめとした梅雨の季節もつい三日前に梅雨開け宣言がなされ、これからは夏本番一直線といった具合だった。

もちろんながら、こんな時季なのだから昼間の外気温は連日のように三十数度を記録するのは当たり前だ。しかし、今年は例年以上に暑いようで、梅雨のあいだも当たり前に三十度を超え、昨日にいたっては早速この夏一番の暑さとして、三十八度というとんでもないを記録をたたき出した。また、毎年日本の最高気温を観測する盆地では、四十一度近い気温を記録したらしい。

うだるような暑さ

とはまさにこのことで、きっと誰もがこの夏もまた、猛暑になるだろうと予感したに違いない。全く、とんでもない暑さだ。そうなると、この暑さではに人の流れも鈍くなるというもので、大手デパートやショップなんかでは、早くも一月単位での売り上げが前年比の十パーセント近くも落ち込んだというのだ。夏本番も始まったばかりのこの時期でこれでは、おそらく八月になっても売り上げはさらに落ち込むことは必須だ。

そして今日も、昨日と比べてもあまり大差ない猛暑日だった。こうなると、ちょっと馬力のない空調であれば、温度をいくら低く設定しようがあまり効き目はないかもしれない。そのせいかどうかはわからないが昨日今日と、夏休みに入ったばかりのこの時期にしては珍しく、人の流れが少なく鈍くなっているように思う。

まぁ、夏になれば人が流動的になるので売り手としては、それを利用しようして売り上げを伸ばそうとするのはわかるが、暑すぎると人は逆にあまり外出しなくなるので、当然といえば当然の結果であり、そうなっていくんだろう。とはいえ、冷たい飲み物や食べ物は相変わらず好調のようだが。

もう夕暮れ時の午後七時を過ぎようという頃でも、外はちょっと動くだけであっという間に汗だくになりそうだ。それを予感させるように、寝ていただけで身体を動かしていないのにじんわりと、汗がにじんでいるのだ。

「全く、暑すぎる」

忌ま忌ましげに、一人ぽつりとつぶやいた。けれど不思議なもので、このままでいるのも億劫な気分だった。そんなときは暑かろうと寒かろうと、身体を動かすというのが信条の俺だ、着ていた白い無地のシャツを脱いでベッドの上に放り投げる。

脱いだシャツの下から現れたのは、傷だらけの肌だ。ちょっと前まではこの傷の周辺に無数の痣があり、自分でも思わず頬の筋肉が引き攣ってしまいそうなほど、痛々しいものばかりだったのは記憶に新しい。それもこれも春に全身の筋肉はおろか、全身の骨という

骨が粉々に砕かれたことに起因する。
全く、あの後は大変だった……というと、少々語弊があるかもしれない。大変だったらしい、というのが正確だ。島津の研究所で、ゴメルとかいう化け物と闘りあったとき、身体を掴まれた際に全身の骨を砕かれたのだ。
子供が掴んで放さない人形のような感じで身体を掴まれれば、どんな人間であっても太刀打ちのしようもないだろうが、幸いにしてその化け物は倒すことができた。その直後に俺は意識を失ってしまったため、あとのことは同行していた田神から聞いた話にすぎない。
意識を失ったあとに、エリナと仲間（必然的に俺の仲間ということにもなる）が近くに待機させていたヘリで、島津研究所跡から脱出し近くの港にまで移動した。連中の話によれば元々、島津は破壊すべき対象として何ヶ月も前から目をつけていたらしい。そこにあの日、俺達が特攻をかけたというわけだ。
しかし、これも急な作戦変更だったという。なぜなら、俺達が特攻をしかける情報を察知したためで、連中はただちにチームを編成し俺達よりひと足遅いながらもやってくることになった。必要最低限の人員しか用意できなかったようだが、爆撃すらやりかねない連中だと田神が漏らしていたのが印象的だった。
同時に、それほどまでに島津の研究所には破壊しなくてはならない物があったということであり、知ってか知らずか、俺達がその手助けをしてしまうことになってしまったことになる。まぁ、直前の連中の言い回しから察するところ、それだけではないだろう。
俺にとっては、島津研究所は明確な復讐すべき対象であり、唾棄すべきものであったわけだから、あそこを瓦礫の山にしてしまうことにはなんの躊躇いもないし、やって当然だと思うのでこれっぽっちもそうしてやることに疑問はない。だからこそ逆に、連中がわざわざあそこを何ヶ月も前から目をつけていた、というのには疑問が生じた。
研究所の実態が実態なだけに、何ヶ月も前から目をつけていたと

いうのは、まぁ、理解できないわけではない。しかしそれはあくまで、その実態が許せないといった正義感からくるものなんではないのか。仮にも殺しを生業とするような連中が、果たして一文の得にもならないことをするだろうか。はっきりいってしまうと、にわかに信じがたいのが正直な気持ちだ。

つまり連中には、他になにか別の理由があったのではないのだろうか。そのほうが何ヶ月も前からマークしていたというのにも説明がつきやすいし、連中の職業という観点からもそれが道理とみていいはずだ。

もちろん問題もある。それがいったいなんなのかだ。どんな理由なのかは今のところ知りようもないけれど、ある程度の推測はできる。まず、殺し屋だった今井の存在だ。

この男は昔、島津製薬の大株主だった男の息子にあたり、この男と島津の研究所で責任主任に就いていた坂上とは、なにか関係があるかもしれないと思うのだ。そして坂上の研究の集大成である、ＮＥＡＢ－２といわれる新薬も、関係しているだろう。この薬は作った研究者いわく、遺伝子に強く働きかける作用があるらしい。

この研究のために、坂上は何百、あるいは何千という子供達をモルモットにしていたのだ。これだけでも十二分に連中をマークするのには理由としては、うってつけといえる。

今井はかつて、依頼されたわけでもないのに島津の運搬用のトラックを襲撃し、島津研究所の新薬を盗み出したという過去をもっている。今にして思えば、今井の奴が島津にたいしてなんらかの怨みを抱いていたとみたほうがいいだろう。なんせ奴は俺に対して、邪魔するなら殺すと脅してきていたのだ。

これも今ならわかるがプロたるもの、素人に足止めされたからといってあそこまで感情をぶつけてくるはずはない。もちろん、気に入らない奴をぶちのめすことはあるかもしれなくとも、わざわざ殺したりはしないものだ。

あの感情は間違いなく本物だった。だとすれば今井は、島津にた

いしてよほど復讐しなくてはならないような理由があったわけで、それがなんらかの形で坂上と繋がっているのではと俺は考える。おまけに奴は、今年の春に出会った殺し屋、佐竹が過去に仕えていた今井令嬢の実兄だったというわけだから驚きだ。

そう、俺は今井の奴があんなに躍起になっていたのには、いまさらながら奴の妹のことが関係しているのだと考えていたのだ。家族から見限られていたらしい妹のことを、奴がどう考えていたのかは今となっては知りようもないことだが、島津の株主になっていた家系の息子としては、なにかしら関係があったにちがいないはずなのだ。それに昔、蒲生の家にあった関係者のリストも今さらながら無関係だったとはどうにも思えない。

おまけに松下薫の話では、今井親子が行方をくらましたといっていたことからも、当然これらが関係していたとみて間違いないだろう。おそらく、これらのどこかにあのコミュニティの連中が狙いすましていた何かがあると見ていいだろう。いや、もっといえば連中の中心的な人物である、武田とかいう奴の狙いだ。

以前、田神が武田には何かしらの目的があるのではといっていたのが思いだされる。もしかしたら、島津の研究主任だった坂上の行ってきた研究がそれである可能性はないだろうか。

坂上の研究で作られたＮＥＡＢ－２と呼ばれた、あの新薬がそれだ。あれにどれほどの意味があったのかは現段階では窺い知ることはできないが、今回の件には間違いなくどこかで絡んでいると踏んでいるのだ。

ＮＥＡＢ－２の研究過程であの研究所で出会った、あのゴメルとかいう全身の毛が逆立つほど悍ましい化け物が生み出されたわけで、他にも奇怪な化け物たちが何体も創りだされていた。

そして、沙弥佳のこともだ。いや、おまけ程度の扱いなのは他のことで、俺にとってはこちらの方が命題なのだ。しかし皮肉なことにこれらの事象は、全て妹を追っているうちに起き遭遇してきたことばかりなのだ。

しかもだ。俺がこれらのことに首を突っ込まなくてはならなくなったのに、このＮＥＡＢ－２が沙弥佳に投与されたという、なんとも許しがたい理由があった。おまけに、この薬の正確な効果はわかっていない上、それを与えられながら唯一生き残った妹も、三週間に一度はそれを投与されなくてはならなかったというのだから、なおのことだ。

俺は汗ばんだ身体にシャワーを流し浴び終えると、バスタオルを腰にまいて浴室を出た。ちょうどそのとき、外からドンドンと音が響いてきた。確か今日あたり、どこだかで花火大会があると田神がいっていたので、多分その音だろう。

こんなクソ暑い中、日本の夏を彩る一大風物詩の花火を見に行こうと、今日に限っては何万といわず人々が街を出歩いているのだろうが、わざわざ、人込みの熱気でさらに暑くなるはずである中に繰り出したいとは思わない。

けれど、そうは思いながらも足は自然と窓のほうへと寄っていき、ここから見えないだろうかとついつい視線を泳がせてしまう。まぁ、外に出て見に行きたいとは思わなくとも、こうして部屋から見るんであれば、それはそれでいいかもしれない。

「……見えないか」

どうもこの部屋の窓からは、花火を見ることはできそうにない。元々、あまり期待しているわけでもなかったが少しばかし残念だ。なによりこの部屋からは、視線の先に特別高くはないが近代的なビルがいくらも建っていて、それらは全てこの古ビルよりも高いために遮られているのだ。これでは、どうあっても花火など見えようはずもない。というよりも、この古ビルの背が低いわけだから仕方のないことだ。

そうしていたとき、後ろでガチャリとやや重い金属性の鍵が解かれた音がした。瞬間、俺はそちらを振り向きベッドの枕の下に隠してある銃に手をやったが、おそらくそいつを出す必要はないだろう。

「起きたか、九鬼」

「ああ。ついさっきな」
そうかと相槌をうって部屋に入ってきたのは、この部屋の主である田神だ。やつにしては珍しく帰ってくる時間が遅いと思ったら、どうも買い物をしてきていたらしい。茶色い紙袋に、缶詰からインスタント食品に野菜、フルーツと飲料水などといった、数多の食料品が買い込まれている。それとインスタントとは別に、焼いたりレンジで温めて後は適当なものとトッピングすれば出来上がりといった、ちょっとした加工食品の外装なんかも見える。
「いつもすまないな」
「なに。気にしなくていい」
キッチンのテーブルにそれらを広げているそばに寄り、いくつかの食料品に手を延ばしながら今度は、こちらが頷いた。
俺は今、理由(わけ)あって田神の部屋に転がり込む形で世話になっていた。田神はそのあいだ現在に至るまで嫌がる顔ひとつ見せず、こうして数日に一度はどっさりと食料を買い込んできてくれている。
「……あいつ、大丈夫だろうか」
「エリナのことか。まぁ、本人が大丈夫だといってるんだから大丈夫だろう。それに彼女も第一線のプロだ、そのへんは抜かりないだろう」
「まぁ、そうなんだが」
さすがにこれ以上、腰布一枚では気恥ずかしいのですぐにぱくつける、菓子パンの袋を手にとってベッドのほうへと戻る。ベッドの脇に、替えの下着とデニムのスラックスが置いてあるからだ。それらをすばやく履いて、菓子パンの袋を開けて早速食いついた。
「君が気にする気持ちはわかるが、とりあえず今は彼女からの連絡を待ったほうがいい。おそらく今日、この後にも彼女からなんらかの連絡がくるはずだから」
一気に菓子パンを胃におさめ、田神の言葉に相槌をうった。本来ならば自分のことは自分でやるという主義の俺だけれど、エリナに諜報活動を任せ、こうして田神の部屋に引っ込んでからというもの、

すでに早二ヶ月以上が経過している。
やれやれ。こんなに時間的な足止めを食らうことになるんであれば、田神のいった通りにしておけばよかったと今さらながら後悔していた。思い立ったら即行動が仇になったのだ。
俺が病院のベッドで目を覚ましたのがちょうど、ゴールデンウイークも終わった五月の半ば、もう下旬にさしかかろうという頃だった。島津の研究所でゴメルに身体を掴まれてしまい、全身の骨という骨が砕かれ、いくつかの内臓も損傷した状態で約二ヶ月のあいだ、運ばれた病院のベッドの上で生死の境をさ迷っていたのだ。
正直、いつ死んでもおかしくない状態であったが、奇跡的に助かったらしい。運び込まれたのがあの毛利の病院というのもあって、すぐに手術開始という流れになったのも幸いだっただろう。まぁ、俺のような人間が一般向けの病院に行けるわけでもないが。
ただ毛利いわく、単にそれだけでなく驚異的な回復力のおかげでもあったらしい。特に術後、その回復力が驚かされたのが、普通であればまだ不完全であっても、なんとか食事をしたりするレベルにまで回復するのに半年はみなければならないところを、俺の場合、意識を取り戻した頃にはすでにそこまで体力が回復していたというのだ。
思えば昔、今井に刺されたときもそうだった。あのときも、医者から回復が早いと驚かれたものだ。どういうわけか、俺は回復力だけは人並み外れているようだ。
そんなわけで意識を取り戻してからというもの、俺は落ちた体力をつけるために多少苦しかろうとも、いつもの二倍三倍もの量の食事をとって、さらなる回復をはかったのだ。
まぁ、それに関していうと、多分に田神の協力を得ることでできたことでもあるのだが。なんせ気付いたときには、直前まで身につけていたもの以外、持ち物全てが失くなっていたのだ。
なんとも間抜けな話だけども、俺の意識がなかったあいだに寝座のあったマンションが火事で炎上し、建物ごと消し炭になってしま

ったのだ。当然、私物も全て灰になり、服から身分を示すようなものまで、何もかもだ。

皮肉にも、入院していたおかげで命だけは助かったことになるが代わりに、沙弥佳と一緒に映った写真を失ってしまったのが俺としては一番のショックだ。他のものはまだいい。替えなどいくようにもなんとかできるものだからだ。

そもそも日本に戻ってからの自分の立場は、デニスの計らいでイギリス脱出のために乗り込んだ潜水艦の中でもらった、偽名のパスのおかげだ。そいつを使って社会的な立場は全て手にしていたのだ。裏社会で本名だけを使うのはあまり賢明ではないが、偽名と本名の両方を使うのであれば、それはそれで混乱を招くこともできるだろう。そういった配慮もあって、デニスがわざわざ計らってくれたというわけだ。

まぁ、俺の場合はその頃はまだ幸運にも、数多のスパイどもに顔が割れてないというのと、併せて俺が何かしら動きやすいようにというのも理由にあげないわけにはいかない。

だからそれらを失おうとも、特に悔しいとも思わなかった。自分が助かったのだから付随品など、別にどうとでもなるけれど、あの写真だけは別だ。あれだけは俺にとってとても大切な品であり、なんだかんだで命の次に大切なものになっていたといっても過言ではなかったのだ。

あの、ふざけた訓練時代を終えて一旦は戻った日本から、再びヨーロッパに舞い戻ったときに持っていったものだ。そんなものを失ってしまえば、さすがにどんなに強靭な精神力を持っているような奴であっても、少しの落胆を感じないはずがない。

かといっていつまでも落ち込んでいるわけにもいかないので、どうしようかと悩む前になにか行動を起こそうとしたのだ。だが、これがいけなかった。田神は、今警察やなんかが動いているので行動するのは止した方がいいといってきたのに、その制止の言葉など聞く耳もたずといったふうに、行動を開始したのだ。

しかし、どうしてなのか俺の行く先々で、妙な連中がチラチラと視界に映るのが目についた。格段、なにかしてくるといったわけでもなかったがそれが逆に不気味に思えてきて、振り切るようになおのこと行動が活発化すると連中の数が増える、といった悪循環に陥っていったのだ。

もちろんながら、それが我慢ならない俺としてはそのうちの一人を取っ捕まえようとすると、それをいち早く察知したのかパタリと姿を見せず、それができないことばかりだった。そんな中、俺の状況を見た田神がこうして俺をひそかに匿ってくれているというわけだ。

しかも田神はエリナに、その連中を調べるよう俺の代わりに行動させた。あの女は田神と奇妙な共同生活をしていた際、ここからはほとんど出歩くことがなかったことから、俺と入れ代わりであってもバレることはないという判断だ。

それに猛反対したエリナだが、なんだかんだで田神に信頼されている証として、行動することをしぶしぶながら承諾した。

そうすることで、定期的に田神を通して情報が流れてくるようになってきた。まず、どうも警察が俺を指名手配しているということ。この情報を聞いたとき、思わず声を大にして聞き返してしまったものだ。それも当然というもので、指名手配されるようなことなど何もしていないのだ。いや、してこなかったわけではないが少なくとも、警察の世話にならなければならなくなるような証拠は、一度たりとも出てないはずだったからだ。

しかし、もし捕まったりすれば、死刑判決が下されるのは間違いなしの所業はしてきているので、少しばかしの焦りがないといえば嘘になる。かつてフランスにいたときのことか、それともイギリスにいたとき、デニスが俺の情報をインターポールに売ったとしたら……そんな不安だ。まだ第一報では警察とはいっても、どの警察なのかわからなかったのだ。

続いて第二報、第三報……と情報が届いてくると、だんだんと俺

を取り巻く状況が明瞭になってきた。それによると、火事でアパートの唯一の住人である俺が、ずっと不在であったことが不審に思われたのが発端となったということ。死体も出てないうえに、火事が起こったのが入院してからわずか一週間後であったため、その間、一度も帰らなかったのがまずかったらしい。

警察としても住人の安否を確かめないわけにもいかず、それで捜索されたという、なんとも情けない話だ。しかし、警察も馬鹿ではない。捜索が続けられていくうちに、偽造パスでアパートの契約をしているのがわかってしまったのだ。

偽造パスの大半は、過去に実在した人物の名前と個人名義が使われることが多い。それだけが全てではないが、もし調べられたとしても死亡した人物かどうかまでは照会されることは、あまりないことだからである。今回は元々イギリス旅行していたが、なんらかの事故に遭い死亡している人物の名前で作られた物だ。

今回は不幸にも、照会されてしまったために不法滞在、ならびに密入国者として連中に追われる身になっというわけだ。つまり連中の言い分は、住居が燃えたにも関わらず、いまだ姿を見せない一人暮しの住人が実は偽のパスポートで密入国してきた、中国人か朝鮮人か何かだと思われているということらしい。

おまけに、ただの不法滞在なら指名手配されることはなかったのに、指名手配された理由としては要するに、偽造パスポートを作ってまで密入国してきた俺が、中国か、もしくは朝鮮から送り込まれてきたスパイだというのだ。これらの国は、独自に対日本情報局を持つ国であるというのがあげられる。死亡した人間のパスを作れるくらいの情報を得られるほどに、組織化されているという判断がなされたためだろう。

勘違いも甚だしく、心外ではあるが、とまぁ、そういうわけでなんともありがたくも、警察から指名手配を受けることになったわけである。しかし問題はこれだけではなく、どうも春に起こった、政治家連続狙撃事件の犯人が俺ではないかという、おまけ付きだ。

しかしそれ以上に頭の痛い話であるのが、なんと殺し屋として同業者からも狙われているらしいという話だった。警察に追われることも確かに気苦労のあることではあるが、こっちはまだいくらも立ち回ることができる手段があるので、まだいいのだ。

さすがの俺も、同業者から狙われるというのだけは頭を抱えないわけにはいかない。連中は、あの手この手で狙いすましてくるに違いないのだ。もちろん同じ立場でもある俺だから、連中の手の内をある程度は想定することは可能ではある。それでも必ずしもそいつが的中するわけでもないのが正直なところで、できうるならば避けて通りたいところなのだ。

意外なことと思われるだろうが、この日本では海外以上に厄介事には厳しい。刑罰だとかそんな話ではなく、日本の場合、海外から見ても危険の度合いが低いため、有事にたいしての危機感も低いと昔からいわれている。そのために事が起こるとこの国では非常に目立つためである。

有事というのは別に戦争だけのことじゃない。いわゆる、工作員含めた殺し屋たちの現場の諜報活動も、有事に当たる。日本人は、戦争を意識することはあっても、一匹狼の殺し屋どもからスパイの殺し屋まで、こういった連中まで意識することはほとんどといってないだろう。

ところが海外では、ある程度の地位にまでくるとこういった連中に狙われることが度々あるため、一般の人間でも、スパイは間違いなくいるという意識がかなり割合いるものなのだ。とはいっても、知識として知っているだけなので、詳しいことは知らされていないだろうし、どうすればなれるのかも知らないはずだ。もちろん、今目の前で話している人間がそうだとも気付かないだろう。

けれど日本人はこんなことといったとしても、そんなのはただの絵空事かのようにありえないと笑うか、軍事オタクかなにかと思われるのが関の山だ。

ともかくだ。こんな理由から、よほどの手回しがされていない限

り、ちょっとしたことでもすぐに動きがバレてしまうのが唯一の利点ではあるだろう。まぁ、実際には諜報組織は巨大であるため、ほとんどのことに手を回されて日本人が気付くことは、まずないといっていい。悲しいことにそういった点で、海外から見て平和ボケしていると嘗められる一つの要因になっている気がする。

なんにしても、俺にとって今のこんな状況は好ましくない。一刻も早くなんとかこの状況を打破したいところなのに、田神はまだ情報が少なすぎるのでまだ止めておけというのだ。普段であれば、そんな制止は構うことなく行動するところだが、その制止を聞かなかったためにこうなってしまっては、今度ばかりはそれを聞かないわけにはいかない。同じ徹を踏むなど、この道のプロてしてあってはならない。

こういったわけで俺は、田神の部屋に転がりこんでから早くも二ヶ月が経過し、そのあいだ一歩も部屋から出歩くこともなく、ただ悪戯に日々を過ごしていた。

窓の外から、道行く人々の話し声が聞こえてくる。もう花火も終わって帰宅している途中といったところだろうか、事実、もう三十分以上も花火の音が聞こえてきておらず、時刻もすでに九時半を回っている。

「九鬼、そろそろエリナが来る頃だろうから出てくる」

「ああ」

田神は徹底してここに俺がいることを悟られないよう、エリナからの連絡も直接会って聞くのではなく伝言板を利用し、そこから指定された場所にいってようやく情報を得る、といった方法をとっているらしい。

ずいぶんと回りくどいことをしているとは思われるかもしれないが、これも俺を匿っているということを悟られないための田神流の

措置なのだから、そのことに関してこっちがとやかく横槍をいれることではないだろう。田神は俺と同じで、そうすると決めたら梃子でも動かないタイプの人間なのだ。

こうして田神が定期連絡のために外出すると、途端に部屋が静かになる。まるで部屋が主人である田神以外、俺をこの世界には似つかわしくない異物かなにかのように、拒んでいるかのような錯覚を起こしてしまうのだ。

その上こんなときは決まって、沙弥佳のことばかりが脳裏に浮かんでくるのだ。当然ながら原因はわかっている。三月に幾度か出会ったあの女――。

初めて出会ったのは俺が仕事で出かけたN市で真田暗殺の日、気取ったクラブで――。

続いて二度目は、あの女を追ってみたところ間抜けにも取っ捕まってしまい、吹きざらしの廃工場で。そして三度目は、あの島津の研究所で――。

しかし残念ながら、これらの人間が同一人物なのかといった疑問は残る。確かな証拠などどこにもないのだ、本人がそうだと言わない限りは。

けれど、俺はなかば確信していた。あれは全て同一人物であり、島津研究所で見たのが間違いなく沙弥佳である、と。こればかりは俺は絶対に譲れない。たとえ、それは幻覚だといわれようともだ。

たしかにあのときの俺は意識が朦朧とし、いつ死んでもおかしくない状態であったのだから、幻覚だといわれても仕方ないかもしれない。おまけに、あいつの夢を度々見るようなほどなのだから、それと死にかけのときに起こるという走馬灯とが混じり合い、願望となってそう見えた……こうともいわれるかもしれない。それでも不思議と、俺にはあれが幻覚だったとは思えないのだ。

自分の直感が……本能とでも言い換えてもいいかもしれないが、あれは確かに沙弥佳だったと確信しているのだ。第一、否定するにしてもその材料もまた不確かなものばかりなのだから、俺がそう確

信している以上は百パーセント幻覚だと証明できるものでもないはずだ。

しかし、不安にならないわけでもない。あのとき見たのが確かに沙弥佳だというのなら、なぜあいつは俺になにもいってこないんだろう。もしかすると、やはりあれが幻覚だったというのを裏付けているんでは……そう考えてしまうこともある。

それに田神やエリナの話によれば、俺が毛利のところの世話になっていたあいだ、あいつが俺のところに訪ねてきたことはただの一度だってないという話だった。二人以外にも、意識を取り戻して少しばかし経った頃、毛利に同様の質問をぶつけてみたが得られる解答はやはり同じだった。エリナ以外の女は、誰も見舞いになどこなかったらしい。

こうして、また思考のループに嵌まった俺はかぶりを振り、沙弥佳のことは思考の片隅においやった。これらの確かな証拠が得られない以上は、早合点かもしれないのだ。そもそもの話が、今回はそいつを含めて田神が動いてくれているのだ。とりあえず、沙弥佳はまだ生きている、それだけは信じる気になっているのには違いない。

俺は窓際の壁に隠れるようにして、そっと外を眺める。外の景色を見るくらい、おおっぴらきになって見てみたいものだが残念ながらそいつはできない。今何どき、どこに敵が潜んでいるかわからない状態なのだ。そんな状況では、迂闊に窓も開けられない。

けれど、それもすぐに飽きた。外の景色などそうそう変わるものでもないのだ。この代わり映えしない日々のなか、唯一現実を理解することができるのがパソコンだ。この世界でただ一つ、まだ現実と繋がっているというのを実感できる、数少ない媒体だった。

このパソコンを使えば、ありとあらゆる情報を仕入れることができるわけだけれど、俺にはネット上に星の数ほど無数に存在するページを掻き分けて、そこに書かれたニュースの真意を裏読みすることくらいしかできない。昔付き合いのあった青山なんかはそれを元に、そういった筋の人間からさらに込み入ったところまで耳にして

いたわけなんだろうが。
　幸い、そういった世界にどっぷりと浸かった身としては、必ずしも人づてでなくともわかる部分はあるというものだ。おかげでそいつがわかるようになって、逆にうんざりさせられるようになったのはなんとも皮肉なものだが。
　こうして俺は、思いついたときにでも田神のパソコンで過去にあった出来事の載った記事を探し、何かしら約に立たないかと自分なりに情報収集をしている。今井令嬢襲撃事件、島津製薬に関して、あるいはその周辺の関係者なんかも今調べられることのできる範囲内で、あらかたクリックしまくっていた。
　そうすると当然、それなりに面白い記事も見つけることができたのも確かだが、そこから気になった記事に関してさらに探そうとしてみたものの、そういった記事はあまり一般大衆にウケが良くなかったせいなのか、古くなった記事はリンク切れになっていた。情報発信もサーバーの関係上決してタダじゃないのだから、無理もない。これがリアルタイムな記事であればとは思うが、とても残念でならない。
　さて、そんなことをしているうちに時が経ち、気付けば日付も変わって深夜も一時になろうという時刻になっていた。
　軽く二、三時間はパソコンの前にいたことになるが、それがいけなかった。ネットサーフィンに集中しすぎていたせいで、周りのことに意識が全く向いていなかった。
　突然目の前にあるパソコンのディスプレイが、カシャンと小気味いい音をたてて割れたのだ。直前に部屋の窓ガラスが砕けるような音がしたのは、聞き間違いではないだろう。
「スナイパーかっ」
　そう、画面を破壊したのはどこからか放たれた銃弾だったのだ。
　たまたま俺は、ぐっと背伸びをし反動をかけて前のめりに腰を曲げたのが幸いして、その銃弾に当たることはなかった。そのまま前のめりになった恰好のまま床を蹴って、部屋のテーブルの影に逃げ

込む。
それでも、ディスプレイに直撃したのが銃弾だと気付いた瞬間、ヒヤリとさせられた。身を隠した直後、銃を手にしようとして触れた脇の下に、今までなかったシミを作っている。
同時に、それとは別にドキリとさせられてしまった。いつもならすぐ何かあってもいいよう近くに置いてあるか、脇の下に吊ってあるはずの銃が手元になかったのだ。田神の部屋ならおそらくは大丈夫だろうという、気の緩みから万全を怠っていたのかもしれない。
するとすぐ足の脇を鋭い金属音をたてて、何かが弾ける。スナイパーからの第二射だ。
俺はすぐにその場をベッドの方へ身をかがめながら素早く移動し、ベッドの上き置かれ銃を手に取った。島津研究所でぶっ倒れたときから身につけ、武器商人だった最上の親父の寝座からとってきたワルサーだ。
こいつでスナイパーから身を守れるとも言い切れないが、ないよりはマシだ。それに、向こうとてライフルを使用しているはずだから、二発も外した以上はもう撃ってくることはないと考えていい。こうなってくると、向こうとしても危険になるためだ。こちらからの反撃を予想しないはずはないだろうし、あまりのらりくらりやっていると逃げる時間を失い、逆に返り討ちにされる危険だってあるのだ。
だが、俺としては色んな意味で好機ともいえる。田神には悪いがいい加減、部屋に閉じ込められているのにも飽き飽きしていたのはもちろん、殺し屋が動員された以上ここにいるのはかえって危険だし、匿ってもらう意味もなくなった。もしかすると、匿っていた田神にも追っ手がかかっていないとも限らない。
そしてもう一つ。このスナイパーを取っ捕まえて、少々聞きたいことがあるのだ。なぜ俺を狙うのか。雇い主は誰か。あるいはその機関、組織などもわかることだろう。
とにかくそうと決まれば一秒でも早く、向かいのビルに行く必要

がある。この古ビルの向かいには道と三軒の家を挟んで、八階建てのビルがあった。狙撃するんであれば、そこからしかありえない。

それにもしかすると、敵はたいした奴じゃない可能性もある。こんな近くで二度も狙撃を失敗しているのだ。俺も格段、狙撃が得意というわけでもないがさすがにこの距離を外すことはない。

ワルサーを片手に、ベッド脇にある台の引き出しから予備として弾を手にとると、すぐさま玄関に行き靴を履いて飛び出した。銃を隠せるよう、薄い半袖のベストを身につけるのも忘れない。

おそらくはまだそう遠くへはいけないはずだ。そう思い、階段を四、五段ずつ飛び越すように駆け降りていく。

あっという間に古ビルを一階まで降り、さらに勢いよくビルまで走ろうとすると、なんと驚くべきことに、ビルの前には警察官や機動隊といった連中がバリケードを作っているではないか。飛び出してきた俺に、連中は一斉に銃を向けてくる。

「そこの男、動くな。そこで止まれ」

がなり立てるように拡声器を使って、一人の男がこちらに向かって叫ぶ。

なんなんだ、これは……。あまりに予想外なことに、呆気にとられた俺の一瞬をつき、ビルの影に隠れていたらしい機動隊の一員に背後から飛びつかれる。

「くっ、何しやがるっ」

背中から飛びついてきた男に対し、俺はそのままの状態から上体をのけ反らせながら、相手の膝小僧を踵で思いきり蹴りつけた。

「んがぁ!?」

正確に膝小僧に当たったわけでなく、相手の膝の内側に当たったらしいがなんにしても受けた男はたまったものではなく、悲鳴をあげる。

怯んだ隙に相手の内側に入り込むと、そこから足払いし男の喉元に右手を充てたまま倒れ込む。

地面に倒れ込んだ瞬間、硬いものがコリリといった感触を腕に伝

え男は変な呻き声をあげて動かなくなった。倒れ込んだときに俺の体重がかけられた腕によって、喉笛潰し頚骨をぶち折ったからだ。

これを見た連中が唖然として動かなくなった隙に、持っていたワルサーで連中を指揮しているらしい男に向かって銃口を向けた瞬間、トリガーを引いた。

その男が血しぶきをあげて地面に力無くぶち倒れる。

俺は一気に連中のバリケードにできた隙間目がけて走りだすと、続けざまに周りにいる一番近い警察官に向かっても引き金を引く。

動揺が連中の間に広がりだしたときにはすでにバリケードのあたりにまできていた俺は、走りながらまだ状況を掴めきれていない警察官の顔面に、思いきり鉄菱を食らわせる。

鉄菱を食らった警察官は悲鳴をあげて顔を押さえ、その場に膝をついて倒れた。そのときには、さらに別の警察官の股間を潰し、また別の警察官にはワルサーでふとももに銃弾をぶち込む。

次々と倒れていく警察官や機動隊の連中に一瞥することもなく突っ切っていくと、すでにバリケードを抜けようとしていた。ビルを出てからここまで、おそらく一分とかかっていないだろう。一人目を始末してやったことがまさかの行動だったようだ。

バリケードを抜けるとすぐに道の脇にまできた。連中はこのまま捨て置くことにして、一刻も早くスナイパーのいたビルまで行かなくてはならない。

さすがにその頃までには連中も非常事態として俺を追い始めるが、ぐんぐん走るスピードをあげてビルに向かう道へ出たとき、横から車が飛び出してきた。それに気付いたところで足を止めることなどできるはずもなく、俺は顔面を引き攣らせた。

身体に強い衝撃を受けたことを理解できたときは、すでに俯せになって地面にぶち倒れていたのだった。

第78章

誰かの話し声に似た音と、ミシリという身体の鈍い痛みに目を覚ました。うっすらと開けた瞼によって、視界はまだ薄暗い。

それとともに視界に飛び込んできたのは白い天井と、同じ色をした壁、それに本来ならそれらと色を同じくした床は差し込む陽の光に焼けたのか、かすかなブラウンに染まっている。おまけに今ベッドに寝かされていることも明らかで、やはり同じ白い色のシーツとかけ布団がかけられてあった。

考えるまでもなく、ここは病院だった。身体が訴えるこの痛みから察するに強くどこかにぶつけたんだろうが、うまく受け身をとったのか、劇的な痛みのする箇所は今のところは感じられない。けれど問題はどうしてこんなところにいるのか、そして一体この状態はどうしたものなのかと、まだぼんやりとした頭でどういった経緯でこんなところで寝ているのか、記憶を巡らせる。

確か……田神のアジトである古ビルから、俺を狙ったらしいスナイパーの正体を探ろうとしてアジトを飛び出したとき、目の前に何人もの警察官がビルの前に陣を敷いていた。そこを強行突破し、道に出たときに……そうか、そうだった。ちょうど道に出てきた車とぶつかったのだった。

より正確にいえば、曲がり角だったため、運悪く出くわした車に向かって俺がぶつかりにいった形になる。逆にいえば、だからこその軽傷だといえそうだ。もちろん、向こうも狭まった道ということもあって、徐行運転に近い速度だったというのも不幸中の幸いだったといえる。

「くそ、ドジったのか」

おそらく俺はバリケードを敷いていた警察官連中によって、ここに連れてこられたとみて間違いないだろう。こう結論づけたとき、

思わずそうつぶやいていた。その声に反応したのか、部屋の隅のほうでゴソリと人の動く気配を感じた。
「目が覚めたようだ」
落ち着いて冷静さを感じさせる男の声がしたあとに、こちらに向かって歩いてくる足音があった。一人でないことは言葉のニュアンスから確かだが、その足音は二人分ある。
「気分はどうかな」
俺を見下しながらそういう男は、いかにもインテリといった印象を抱かせる。
「……」
男の問いに答えることなく、じっと黙り込む。二人が何者なのか気になるところではあるが、それ以上に気になったのはインテリ風の男の後ろにいる男だ。どういったわけなのか、男は俺に対して睨みつけてきているのだ。
「まず、君がどうしてここにいるのか、理解できるかな」
この質問にも俺は答えることはない。どう答えようと、自分にいい結果にはなりえないというのを理解していたからだ。この状態の人間に対して、なにも心配そうにしていない態度はどう考えたって、連中がこんな状態にした張本人に違いないのだ。
「おい、てめぇ！　黙ってねえで答えろやっ」
だんまりを決め込んだ俺に向かって、後ろにいて睨みつけていた男が突然、塞きをきったような怒声を張り上げた。馬鹿でかい声で、周りの空気が瞬間に爆発するような振動をもって震わせた感すらあるほどだ。
「おい落ち着け、南部」
「うるせえ！　これが落ち着けるもんかよ、佐々木！　こいつが……こいつがぁ！」
南部と呼ばれた男は、今にも俺の胸倉を掴もうという勢いだが、それを佐々木と呼ばれたインテリ風の男が何度も落ち着けといい窘める。南部とかいうほうは、よほど俺のことが気に入らないらしい。

「殴ったところでなんの意味はない。それにそれをやったら、おまえだってただじゃぁすまないかもしれないんだぞ」
「やかましい！　んなこたぁ、わかってるっ」
声でガラスがビリビリと震動しているようで、南部が怒声をあげるたびに周りの窓ガラスが放つ反射の光が形を変えている。
「……そうか、あんたらは刑事か」
二人の関係と、佐々木の言葉から裏を読んでみたところ、二人は刑事だと思われた。まぁ、車に激突したらしい俺がこんな場所で寝ているのなら、二人が刑事であってもなんらおかしい話ではない。となると同時に、ここが警察病院であることも間違いないだろう。
俺は二人の様子を冷めた目で見ながら、ぽつりとつぶやいた。それに佐々木が頷いて答える。
「……そうだ。その様子だと、だいぶ意識がはっきりしているみたいだな。車とぶつかったのだから何かあってはまずいと念のため脳検査なんかもしておいたが、目立って悪い部分は見当たらなかったというからな。
もう理解もできているだろうが君は、我々によって逮捕されている。罪状は、殺人に銃刀法違反、傷害罪と公務執行妨害だ。それと違法滞在や、テロ行為ならびにスパイ容疑もかかっている」
「テロ容疑だって？」
男の言葉を聞いて、一瞬わが耳を疑った。テロだと？　誰が？　俺がか？　一体全体、どういったわけで俺がテロ容疑にかかったというのだ。他の罪状にいたっていえば、それは十二分に頷けるものなので別に文句はない。それでも、テロ容疑というのはどう考えたっておかしい。濡れ衣ではないのか。
第一、俺がいつどこでテロルなど起こしたというのだ。確かに俺は人殺しではあるが、至ってまともだ。無差別に人を殺したことなど一度だってない。あるとすれば、仕事で依頼された連中の部下を始末してやっただけだ。そうしなければこちらも危険なのだからた当然だ。

中にはもちろん、要人もいなかったわけじゃない。だがそれを始末したというだけでテロだなんて、これはどう考えたって甚だおかしいことではないか。

スパイ容疑だというのも笑える話だ。おそらくこれはデニスの計らいでもらったパスのおかげだろう。今現在はパスの戸籍上、九鬼という姓を名乗っていないため、それが朝鮮や中国なんかのスパイだと思われたと考えればわからないでもない。というのもこれらの国にも当然、諜報部というのが存在しており、その中でも特別に対日本情報部があるためだ。

これらの国では、時に反日感情を植え付けるための教育プログラムがなされることすらある。だから日本人である俺が、わざわざ偽造パスで入国してきたとなると、何かあるに違いないと勘繰られるのは当然というわけだ。あるいは中朝国家はもちろん、それ以外の国による現地工作員かもしれないといった疑惑だろう。

おまけに田神の部屋に転がりこんでからというもの、そういったこととは一時的にとはいえ無縁なっていた状態だった。その直前まで俺を尾行している連中がいたことを考えれば、警察や公安が俺に対して余計な確信を深めたとしても、決して不思議はない。

しかし一番の問題は、俺の持つパスがなぜ偽物だとわかったか、である。もちろん、公安の人を疑い調べあげるノウハウなんかを嘗めるつもりはない。偽造である以上、どこかでバレないという保証などありはしないのも、また確かだ。

それでも、偽造がバレる瞬間というのはまず空港から降り立って、入国審査を受けるときなのだ。このときにバレなかったのに一年以上も経っていまさら、というのは少々つじつまが合わない。

おそらく、入国してからこの一年と数ヶ月のあいだで、誰かがそういった情報をリークしたと見るほうが自然だ。とてもではないが、そうでもないと説明がつかないのだ。

「おいっ、聞いてんのか、てめえっ」

「怒鳴らなくても聞こえてるさ」

ビリビリと空気を軋ませる怒声に、俺はうんざりしたように煽ってみせた。南部とかいう男はみるみるうちに顔を紅潮させ、思いきりこちらの胸倉を掴んで殴り飛ばそうと拳を握り振り上げたところ、佐々木に腕を掴まれて再び制止させる。

「やめろ」

「うるせえっ、放しやがれ」

俺はこの男を挑発して、胸倉を掴んできた腕を逆にこちらが掴んでやろうとしたところ、それがかなわないことに気がついた。腕が胸のあたりにあることにはもちろん気づいていたけれど、なんとあろうことか、俺は見事に拘束具を着せられていたのだ。これでは反撃はおろか、相手の腕を掴むことなどできはしない。

「こいつのせいであの人は死んだんだぞ、黙ってられるかっ」

「気持ちはわかる。だが、今は駄目だ」

なんとも対称的な二人だ。佐々木のほうは刑事としては珍しく、グレーがかった小洒落たスーツを着ているうえに、細めの眼鏡をかけた好青年といった感じで顔も悪くない。隣の男と比べても全体的に細くスラリとした体躯は、それだけでいかにもインテリらしい冷静さを醸し出していて、同時に年齢不詳な感もさせる。

一方の南部と呼ばれたほうは、白いワイシャツに黒いスラックスと同じ色のベルトをしていて、身長は俺よりも五センチかそこらは高く、胸板が張っているのがシャツの上からでもが良くわかるガタイをしている。そして短髪の頭という出で立ちは、いかにもといった熱血漢さを思わせる。いや、不良刑事といったほうがしっくりくるかもしれない。

「……それで、俺はこれからどうなるんだ」

二人を無視する形で尋ねてみると、再び南部がわめき立て、それを佐々木が窘めつつ質問に答える。

「意識を取り戻したから、君は明日にでも署に連行されることになる。そのあとはもちろん、刑務所行きだ」

すでに容疑が確定しているうえ、どうも話から察するに俺は連中

の知り合いかなにかを殺したようだ。多分、あのバリケードを強行突破したときだろう。もしかすると、この二人もあの場に居合わせたのかもしれない。

「このあと念のため、もう一度異常がないかを確かめるための検査があるが、そのあとすぐにでも護送車で身柄を更迭される。以上、君のこれからの流れだ」

「……こりゃぁ、親切にどうも」

それだけいうと、佐々木は踵を返した。それに南部が続いた形だが南部は、絶対にてめえを死刑にしてやる、と再度、刑事としてあるまじき言葉を吐き捨て部屋から出ていった。当然、鍵は厳重にかけられ門番が一人か二人見張りとしてつけられている。そういった、なんともＶＩＰ待遇なのは想像に難くない。

二人が部屋をでていくと、俺はため息を漏らす。さすがに佐々木の説明を聞いて少々焦りがでてきたのだ。検査がいつ行われるのかはわからないが、意識を取り戻した以上はおそらく今日中とみて間違いないだろう。通常なら検査結果が出るまで、一日から数日といったところだがここはあくまで警察病院だ。せいぜい数時間、下手すればすぐその場で判断が下されるということも十分考えられる。いや、この場合はそういう想定で考えたほうがいいだろう。

かといって、今ここから抜け出せそうな方法が思い浮かぶわけでもなかった。よくよく見れば窓もあるにはあるが、外側に鉄格子がされていて窓からは抜け出せそうにない。空調の配管なんかも考えられたが、明らかに人間が入るには狭すぎる。あとは二人が出ていった、たった一つの出入口のみだ。これだけでも考え物だというのに、ご丁寧にも拘束具というおまけ付きだ。

マジシャンには縄抜け、拘束具抜けなんて技があるらしく、そいつを駆使すればあるいはこの忌ま忌ましい拘束具を外すことも可能だろう。そんな技術が俺にあればよかったが、残念なことにそんな技術はない。マジシャンに限らず、古い武術にもやはり関節を自在に外し、拘束を抜けるといった技術があるのを思い出しはしたもの

の、結局は自分ができないのでは意味はない。
とにかく、護送車に乗り込んでしまうと本格的にまずいことになる。護送車の警護官のいる中で連中から逃げ出せることは、おそらく不可能に近い。そうなる前に一刻も早く、ここから出るためのアイディアを練らなくてはならない。こんなところで捕まって、死刑台に送られるなんてことだけは絶対にあってはならない。それでは今までやってきたことが、全て無駄になってしまう。
その前に、なんとかここで脱出したいものだが一体どうしたものか……だが、いくら頭をひねろうともそんなアイディアが浮かぶはずもなく、いたずらに時間が過ぎていくだけだ。ここは一つ様子見することにして、チャンスを待つとしよう。
鉄壁そうに見える要塞も、所詮は人が作ったものだ。どこかにスキがあるはずだろうし、場合によっては、その人間そのものが逃げ出せるための要因になることすら有り得るのだ。そういった手段を用いて鉄壁の要塞から脱出した人間が、確かにいるのもまた事実だからだ。
とりあえずは連中が再度検査をするということだから、そのときにチャンスがないとはいえない。なんとかチャンスのできそうな隙を作るしかない。
拘束具をつけられたまま、どれほどのあいだベッドに縫い付けられていたのか、気づくと空がうっすらと夕焼けに染まりはじめていた。ここには時計なんてものはないので、時間などの概念があまりない。せいぜい、窓の外から見える景色だけがそれを感じさせてくれる。
（今、夕方の四時か五時頃だろうか……）
結局、佐々木と南部の二人がでていったあと、三十分とせずにこの病院のスタッフがきて検査室へと、ベッドごと運ばれた。そのと

き、なんとか暴れようとしたものの、拘束具の前にそれも空しくただもがくだけに過ぎなかった。

そして予想通り、ものの数時間で結果がでるということで、今日の夕方にも……つまり、そろそろ護送車が迎えにくることになってしまったのだ。それでもまだ何かできないかと頭をフル回転させはするが、やはり全く脱出できそうな手だてやアイディアが思い浮かぶことはなかった。

そんなことに思いを巡らしていると、鉄製の扉からガチャガチャと重い金属質のした音が聞こえてきた。考えるまでもなく、護送車に俺を乗せようとするためにきたのだ。俺は無駄だろうとは思いつつも、再度身を思いきり動かして拘束具から抜けようと試みるが、やはり結果が変わることはない。

「おら、刑務所行きのタクシーがきたぞ」

なんともなご挨拶とともに扉から入ってきたのは、あの南部とかいう男だ。もちろん、その後ろには佐々木も一緒だ。

しかし俺は、二人とは一足遅れて入ってきた人物に興味をひかれた。先ほどはいなかった人物で随分背丈のある女だったのだが、どこかで見たことのある顔だったのだ。

「あんたは確か……」

「あ、あなた……」

思わずつぶやいた言葉に、女が応えた。どうやら向こうも、こちらのことを覚えていたらしい。

「なんだ里見、おまえ、この野郎と知り合いなのか」

南部はジロリと睨むように、里見と呼ばれた女のほうを向いた。隣の佐々木も意外だったようで、細い目を丸くして女のほうを向いている。

「え？　い、いえ、別にそういうわけじゃないです……」

しどろもどろにいう女は場違いなほどに顔を赤くしていう。それでは明らかに知り合いだと告げているようなものだと人事ながら心の中でつぶやくと、やれやれとため息が漏れた。

「別にその女とはなんの関係もないぜ。ただ単に、どっかの誰かと勘違いしたんじゃぁないのか」
「……ふん、まあいいだろう。どのみちお前をムショにぶち込むことには変わりないからな」
「南部のいう通りだ。里見、いまは私情をはさむときじゃない」
「え、と、あの私、そんなわけじゃ……は、はい」
先輩二人にお灸をそえられたように、シュンとする女。あの様子からは、本人としては本当になんでもなかったとも、はたまた俺に気があるのかどちらとも取れる態度だ。あれでは他が勘違いしたとしてもおかしくない。
まぁ、こちらとしても自分の美的センスの範疇から程遠い人間に好意を抱かれても、甚だ迷惑なだけではある。おまけに立場も立場なのだからなおさらだ。
それにどれだけの期間、男所帯だろうと思われる場所で働いているのか知らないが、自分の意思表示もできないような女など、どれだけ美人であってもこちらから願い下げだ。仮にも俺よりはいくらか年上なんだろうし、それでこの体たらくでは魅力もなにもあったものじゃない。
とはいっても、あの藤原真紀みたいな女狐もまた願い下げだ。
「おい、足枷だ」
南部の指示で見張り番だったらしい警察官二人が寝ている俺の足首に、鉄の足輪を鎖で繋いだ足枷をはめ、その鎖にもう一本の鎖でもって拘束具にかけられた鎖に繋いで、逃げ出せないよう厳重に枷をかけられる。これではまるでアメリカの囚人並の扱いだ。
「よし、連れていけ」
しっかりと施錠されたのを見届けると、南部が見張りの二人に命令し俺を立たせる。前に南部と佐々木、左右に見張りの二人がそれぞれについて、後ろに里見とかいう女刑事、といった配置で護送車まで連れていく気らしい。
鎖で歩幅を制限されたために、歩くには小刻みに走るといった感

じになりながら、エレベーターに乗り込む。先ほどの検査室にいく際にも使われたエレベーターだけれど、先ほどはベッドにくくりつけられたままだったのでここが何階であったのかはわからなかった。ただ上にあがったということしかわからなかったのだ。しかし今はその戒めはないので、ここが三階であったのがわかる。

エレベーターで一階に降りるまで、なんとか拘束具や鎖を解けないかと連中の様子を盗み見る。けれども、鍵を見つけることはおろか、とてもこれだけの人数を出し抜けることなどできそうにない。

そのうちエレベーターは一階につき、両脇の二人に歩くよう腕のあたりを触れるように促された。そんなことしなくとも歩くというのに、いちいち触れないでもらいたいものだ。

エレベーターを左に曲がり、まっすぐ先に見える黒っぽい扉。その扉が不意に開かれた。どうやら外にもまだいるようだ。

「……ところで」

「うるせえ、口開くな」

少しでも刑務所送りになるのを長びかそうと口をきこうとしたところ、南部によって止められる。しかし、そんなことにめげる俺ではなく、無視して続けることにする。とにかく、少しでもチャンスを作るべきだ。

「まぁ、そういうなよ。あんた、随分と俺のことが気に入らんらしいが、一体なんだってそんなに俺を目の敵にするんだ？　まさか、理由がないとはいわないよな」

すると前を歩いていた南部と佐々木はゆっくりと立ち止まり、こちらを振り向いた。南部の顔はもう我慢ならないといった表情になっている。

「……てめえが殺したからだろうが」

「南部」

「うるせえ佐々木っ、引っ込んでろ！　もう我慢ならねえっ！　てめえが、畠さんを殺したからだ、てめえがぁ！」

激昂し、今度こそ胸倉を拘束具ごと掴みあげる南部は、その勢い

のまま右手でもって殴ろうとする。それを佐々木や周囲の三人が制止しようとするが、俺はチャンスといわんばかりに上体をできうる限り反らし、そのまま南部の顔あたりめがけて頭突きを繰り出した。

「ぐっ、野郎」

拘束具をされたままでは思い通りに頭突きを食らわすことはできなかったものの、南部の正拳突きを回避することはできた。無駄な足掻きともとれないことでもないが、何か少しでも隙をつかなくてはならない今は、なにか行動を起こさなくてはならない。あるいはこれが、本当に脱出するための機会にならないとはいえないのだ。

「てめ……この、畠さんの敵……」

突然暴れだした俺に四苦八苦していた周りの連中は、四人がかりでなんとか取り押さえることに成功し、南部が顎のあたりを気にしながらなおも睨みつけてくる。

だがこれでようやく理由がわかった。きっと南部のいう畠というのは、バリケードを敷いていた連中の陣頭に立っていた男のことだろう。強行突破をかけた際に、一番最初に弾丸でもってぶち倒してやった警察官だ。どうやら、この三人にとっての上司だったということだ。なるほど、これでこの男が俺のことをこんなにまで嫌悪……いや、憎悪といってもいいだろう、する理由がわかった。

「なるほどな。通りで俺のことが気にいらないわけだ」

四方を囲まれながらも、俺は不敵に笑って見せる。ムショに送られたあとどうなるかはわからないまでも、今ここで死ぬことはないのだから思いきり嘲ってやるつもりだった。どのみちこいつら相手では自分に好転する気配もないのだから、もうどうにでもなれだ。

「ふざけるなよ、貴様」

普段温厚そうに見える佐々木が声を荒げて怒鳴る。ふん、そんなの知ったことか。

しかし暴れることができたのはこの時だけで、外に待機していた連中が何事かと飛んできたことによって、その場はおさめられた。廊下に半ば打ち付けられる形で取り押さえられたのだ。

その後、引きずられるように後ろの開け放たれた青黒い護送車に乗せられると、外に待機していた連中二人が運転手として前座席に乗り込んだ。俺のいる広い後部席部分と、前座席とのあいだには目の細かい金網がされており、運転手らとはなんとかコミュニケーションがとれないわけではない。ここでなんとか連中を言いくるめて、脱出するためのチャンスを作れないものか……。

考えを巡らせはじめると自然に静かになるというもので、護送車の前座席に座った二人も刑務所送りにされる俺にたいして、ようやく観念したかとでも思ったのかこちらを振り向いて軽く頷いたあと、車のエンジンがかけられる。

ゆっくりと進み始めた車が徐々にスピードをあげるかと思いきや、むしろスピードがやや遅くなったように思われた。どうしたんだと、唯一外が見える金網から覗く前座席のフロントガラスから、その理由がわかった。なんと、病院の外には何台ものカメラがこちらに向けられていて、その何倍もの数の報道陣の人間が出張ってきているではないか。

「……なんなんだ、これは」

「おい、座ってろ」

外を見ようと立ち上がった俺に、助手席に座っている男が怒鳴る。しかし、俺からすると一体全体どういうことなんだと聞かざるをえない状況になっていた。

「おい、こいつは一体どういうことなんだ。なんなんだ、このマスコミの人数は」

「おい、座っていろといっただろう。それにおまえ、知らないのか？」

なんの話だという前に、男が一足早く口を開く。

「おまえ、今全国でも有名な犯罪者なんだぜ。話にきけばおまえ、春に起こった政治家連続狙撃事件の容疑者なんだってな。もう証拠も見つかってるんだ、諦めな。

おまけにテロリストとして、国家反逆罪もあるってんだからどう

しようもないな」
　下卑た笑い声をあげる助手席の男は、運転手の男に窘められるがお構いなしに続ける。
「大体、おまえらみたいな犯罪者に限って恵まれてるのにおかしな思想にハマって、訳のわからんことを言い出すんだ。俺はな、今まで異常な奴を何人も見てきたからわかるんだ」
「恵まれてる？」
「そうさ。周りじゃ、おまえのことを半島や支那からのスパイだとかいって囃し立ててるらしいが、俺にはわかる。おまえはあんな劣等人どものスパイなんかじゃねえ、間違いなく日本人さ。
　だってのに、お国に逆らうなんてどうしようもないクズでしかない。わかったか、このクズ」
　やれやれだ。何を言い出すかと思えば……男の講釈に開いた口が塞がらない俺は、ただ小さくかぶりを振って、ため息をつくことしかできない。大体、どうしてこんなに人がいるんだという質問の答えになってないのだから、そう思うのは無理もない。一つだけいえるのは、この男がバリバリの極右翼ということだけだ。朝鮮や中国のことを、半島だとか支那とかいう奴らは大抵そうだ。
　別に俺にとっては、朝鮮人や中国人などどうでもいい存在だ。邪魔するなら始末するだけの話なので、そこに民族間や国家間の事情による思想など、それこそ片腹痛い話なのだ。
　第一、俺みたいな人種にとっては国家主義や民族主義……要するに全体主義というやつほど唾棄すべきものはないと考えているので、そこに日本人だとか他の国の人間だとかは一切ない。だってそうではないか。国家なんてものは、どうせ弱いものを守りなどしないのだから、どこに行っても変わりはしないのだ。
　まぁ、それはさておき、男の言葉から読み取ってみると、どうやら俺はどうしたわけか突然、国家に仇なすならず者というレッテルを貼られてしまったのは間違いない。身に覚えなど全くないが、そうらしい。

そしてその犯人が俺だとなれば当然、マスコミも騒ぎ出す。ちょうどN市にいたときにあった、真田の狙撃事件がトップニュースになり全国はおろか、世界中で知られることになった事件なのだから、その注目度も高いのは至極当然のことだろう。

おまけに、やってないことを確実に証明できるものなど無いに等しく、むしろ、銃の所持、警察官殺害などといった全く関係のないはずだった要素が、間違いなく俺を事件の犯人として仕立てあげる材料として、絶好の要素になるのも目に見えている。検察も、確実に俺のやってないことまで事件の容疑者として捜査を創っていくにちがいない。

下卑た言葉で俺を罵り笑う男を無視し、俺はさっさと車に備え付けられてある囚人用の座席に座ると、冷静になって今回の一連の流れを整理してみることにした。おそらく、裏で誰かが警察に情報を売った奴がいるのは間違いない。そいつ、ないしはそいつに関係を持っている人間が今回の黒幕ではないかと睨む。

思えば島津の研究所で意識を失い、毛利の病院にて意識を取り戻してからというもの、以来何者からか尾行されていたし、その前にも佐竹との一戦のあとになぜか尾行されていたこともあった。あのときは状況が状況だっただけに、あまり事を大きくしないほうがいいという判断もあって撒いたが、今にして思うとあれも、意識を取り戻してからこの方現れだした尾行者どもの仲間だった可能性はないだろうか。得体の知れなさもあって撒いたわけだったが、それが逆に向こうを不審に思わせることになったというのも、十分にあることだ。

推測に過ぎないことであるが、日本に戻ってからというもの、それも佐竹の件以降、どうにも腑に落ちないことがこうも多いと、さすがに俺自身がなんらかの事情に組み込まれていないとも考えられないでもないのだ。ましてや今現在の状況が状況だけに、こういった可能性を考慮しないわけにもいかない。

まず、尾行していた連中がどういった連中で、どういった理由が

あってのことか考えてみよう。もちろん狙われる理由など履いて捨てるほどあるので、全てにその理由がないわけではないけども、そのどれかに必ず答えがあるはずだ。

となると一番手っ取り早く、かつ、俺のことを疎ましく思う連中がいるとすれば殺し屋の連中だ。こいつらなら仕事と称して俺を付け狙うことは容易い。そして、その理由も十分過ぎるほどのものなので、やはりこれが一番説明がつきやすい。

しかし一つ問題があるとすれば、なぜわざわざ殺し屋を雇いながら警察にも情報を流したのか、ということだ。殺し屋を雇っておいて、なおかつ警察も動員させるとなると暗殺する側、引いては俺のことを疎ましく思っている雇い主にもリスクが有りすぎる。田神の部屋で襲ってきたことを考えてみれば当然というもので、外に警察がいるときにあんなことをすれば、放たれた弾丸から足がつかないとは言いきれないのだ。

普通ならばやはり殺し屋だけ、警察にだけというのがベターだろう。仮に警察に頼ったにしろ、逮捕後ならこちらの身柄などいかようにもできるはずなので、その両方をとなるとブッキングしたことによって共倒れにならないともいえないからだ。

あるいは……警察にリークした奴と殺し屋を雇った奴がそれぞれ別の人間だった、というのもなくはない。むしろこのほうが今回のことに関して、説明がついているのではないか。一人の人間を狙うとしても、そんな面倒でリスクを負うような真似はしまい。あまりに非効率的すぎる。

こうなってくるとだ。やはりそれなりの理由というのがあるわけで、そいつを探ってみる必要がある。警察のほうは佐々木が語っていた理由で十分だ。もちろん、濡れ衣だといわざるを得ないものもあるが、この際それはどうでもいい。問題は殺し屋のほうだ。

尾行の手口から、おそらく追跡者はプロだろう。こちらが、ちょいと連中を問いただそうとしたときに限って姿を現さないことからも、それが一番可能性が高い。警察ならばここまで正確に、追跡の

影を消したり現したりはできそうにない。
　こうして冷静になって考えてみれば、俺にとって当面の敵は同業者ということに落ち着くわけだが、ここはやはり、島津の一件からと見たほうがいいだろうか。ヨーロッパにいたときにも敵を作ってきた俺ではあるけども、向こうを脱出したのがもう一年以上も前であれば、向こうからの刺客というのは考えにくい。この時代に、一年なんてのは間隔としては開きすぎともいえる期間だ。それにデニスのこともあるから、おそらくこの可能性はない。
　島津絡みでなら、あげられる理由はいくらもある。あんな非人道的なことをやっているような連中だ、殺し屋を雇うなんてのはわけないだろう。
　同時に俺の顔が割れてしまったのは、あの日、島津研究所にいた面子の誰かとも思われる。あれだけ破壊された施設から防犯カメラのデータを発掘するのは至難の業だろうし、それよりは顔を知った連中が俺に関してなんらかのことを吐いた……このほうが建設的だ。なにより、武田を名乗る男のこともある。
　しかしそうなると、田神にも危険がないとはいえないのではないだろうか。やつも島津の研究の一端を知ってしまった人間だ。俺だけに殺し屋が襲撃してきて、やつにはなにもないというのはまず有り得ない。田神の身にも、同様の危険が迫っていると考えておいたほうが良さそうだ。それは当然ながらエリナにもだ。
　島津の研究所でいただいてきた坂上の研究データに関しても、田神に渡して以来なんの音沙汰もない。あれも必要で、沙弥佳に投与されたＮＥＡＢ－２とかいう、ふざけた新薬のデータがあれば、あるいはそこから治療薬を造ることも可能だからだ。
　そこまで考えたとき、突然、車のクラクションが高々と鳴らされる。考えることに没頭していたために、その音に思わずはっとさせられる。
「くそ、なんなんだ、こいつらっ」
　音に顔をあげたのとほぼ同時に、助手席に座っている右翼野郎が

言い放つ。俺は迷わず席を立って前方を覗こうとするが、ここからでは何が起きているのかよく見えない。だが、確かに護送車前方に邪魔するように一台の白い車が走っているのが見えた。

しかもそれは一台だけではないらしい。右翼野郎はこいつらと複数型でいったことから、俺の位置からは見えないだけで、おそらく四方を囲むようにして、あと二、三台、周りにいるようだ。

護送車の後ろにもいるはずのパトカーから、何か制止するような声がしたかと思うと、その声が不意に途絶えて金属の塊が壁にぶつかって砕ける音もした。

「くそがっ、どきやがれ……おい、こいつら、なんとか――」

台詞も途中で、助手席の窓ガラスが割られるような音と混じって、銃の連射音が響く。フロントガラスに細かい蜘蛛の巣状の亀裂がいくつも入った。

「うわああっ！？」

それを真横で見た運転手の男が惨めに叫ぶ。同時にその様子を目の当たりにした動揺からなのか、急ハンドルをきったために車体が大きく揺れた。揺れに耐え切れず、俺は車の中で受け身をとることすらできずに倒れ込む。

「今度はなんなんだ」

誰にいうでもなく、倒れ込みながら叫んだ。すぐさまフロントガラスが割られる音がした後に、運転手の男が悲鳴をあげるもその声が、車内からあっという間にフェードアウトしていく。

それがおそらく時速五十キロか、あるいは六十キロかそこら出ている車の外に投げ出されたものだと理解するのに、一秒だってかかっていないだろう。だとすれば今車は暴走しているのか……そう、半ば絶望的になった顔をあげた時、助手席から、今まで見たことがないフルフェイスの戦闘用らしいマスクを被った奴が俺を覗いていた。

「よし。このままポイントαまで行くぞ」

どうも運転席には別の奴も乗って車を運転しているみたいだ。そ

いつの声に助手席の奴がこちらを向いたまま頷くと、その手に何か黒いものを取り出して投げる。

一瞬、それが爆弾かとヒヤリとしたがそうではなかった。投げられたそれは白い大量のガスを撒き散らし始め、それが瞬く間に車内に広がって視界がぼんやりと白に染まっていく。フロントガラスが割られたことで、前方からの風によって後ろにガスが勢い良く流れてきているのだ。

俺はすぐに匍匐前進してでも後方に引こうとするも、拘束具のせいで、まともに匍匐前進などできない。その間にも白いガスは車内に溜まる一方で、ますます視界が白になっていく。まるで深い霧の中にいるような錯覚に陥ってしまう。

「おまえら一体何者なんだっ、俺をどうする気だ……」

まだ言いたいことはあるはずなのに、急激に頭が重くなってくる。どうやらこのガスは、強い催眠効果を持った催眠ガスらしい。くそ、やれやれだ。また眠らされるのか……。

どうせ催眠ガスというなら、殺される心配はない。初めから殺す気であれば、わざわざ護送車を襲うはずもないだろう。

全く……最近意識を失ってばかりではないか？　……まぁいい、もう知ったことか……どうにでもなればいい……。殺される心配はないのだから、今はこの眠気に身を任せよう……次は一体どこで目が覚めることやら……。

額に何かがぶつかるような感覚があった。それが車の床だとぼんやりと気付くことができたあと、すぐに意識がブラックアウトしていった。

第79章

暖かい――身体を包むようにして、毛羽立った毛布がかけられているのが肌に触れている。

パチパチと火の焚く音がしてゆっくりと瞼を開けると、暖炉らしいものが視界に入ってきたと同時に、何者かの手が瞼の動きに合わせて動いたのがわかった。身につけている銃か、あるいは他の武器を手にしようとしている動きだが、あまりに自然で全く無駄のない動きであるために、服がなんとなく気になって、そこを直そうというような動きにしか見えない。

「……」

「目が覚めたようだね」

男の声に、すぐに意識が完全に目覚め眼球をくるりと、周囲の状況を確かめてみる。が、特になにかあるわけでもなさそうだ。

「安心したまえ。ここに君をおとしめるような罠はない」

囁き声とでもいってもおかしくない声なのに、言葉の一音一音がはっきりとした声はえらく人を心地よくさせる。それも男のものなのに、妙な話だ。俺も相手が気づいているのに、狸寝入りして眠りこけている必要はないと判断し、朝起きたときのような気持ちでゆっくりと起き上がった。

「どうやら、あんたが助けてくれたみたいだな」

ソファーに寝かされていた俺の動きに合わせ、奇妙な男の座るソファーの脇に立っている大男が、再び手を動かそうとするのが見えた。妙な動きをすればいつでも俺を撃てるんだという、無言の警告だ。

「ああ、そうとも。今君に捕まってもらっては困るんでね」

「どういうことだ。……いや、その前にあんたは一体……」

どこかで見覚えのある顔の男に向かってそういうと、奇妙な男は

微笑を浮かべながら軽く首を振った。全身をマントなのかと思える黒っぽい服で身を包み、頭は丸坊主の恰好をした奇妙な男は、どこか仏教徒のようにも見える。僧服をアレンジしたような服と坊主頭がそうさせるのだろう。

「まぁ、それは置いておこうじゃないか。それよりも今は君のことだ、九鬼君」

九鬼君？　まさか君付けで呼ばれるだなんて思いもしなかった俺は、思わず眉をひそめた。一体いつぶりだろう、最後にそう呼ばれたのは。おそらく、そう呼んでいたのは青山が最後ではなかったろうか。

まぁいい。それよりも初対面であるはずの人間が、俺の名前を知っているということのほうがはるかに疑問であり、警戒しなくてはならないことだ。

「いいや、そういうわけにはいかないね。助けてもらったことには感謝しちゃぁいるが、それとこれは別問題だ。あんたは俺のことを知ってるようだがこっちはあんたのことなんて、これっぽっちも知らないんだぜ？　そんなのフェアじゃない」

この手のタイプの人間は話していくうちに、こちらの意志をなし崩しにし最終的には受動的に肯定させてしまうようなタイプと踏んで、俺は男の話を折ってやった。これで引いたりするような奴でもないのだろうが、こっちもきちんと意思表示をしておく必要はある。

「ふむ。確かにそれもそうかもしれんな。しかしまだそういうわけにもいかなくてね、すまないがあえてそれは伏せさせてもらおうか。だが一つだけ。私は、決して君の敵ではないということだけは信じてもらいたい」

「けっ、初対面の人間にいきなりそんなことといわれて信じるほど、おめでたかないぜ、俺は。だったら助けるときにだって、わざわざ催眠ガスを使ったりする必要なんてなかったんじゃぁないのか」

奇妙な男の目を見ながらわめくと、男がふっと口の端を歪めて笑った。そんな表情一つ見せるだけなのに、波立つ気持ちが妙に落ち

着いていくのがわかる。
「君がそういうのも仕方ない。それも事実だからだ。しかし、私には今すぐにでも必要だったんだよ、君が。そのために、少しでも早く君を助けようとあんな行動をとってしまったんだ。手荒な真似をしたことは謝るよ」
　男も俺から目を離さずに、そう口にする。なんだろう……こいつと話していると、いつもの自分のペースが乱されてしまう。苛立ちを隠そうとしない俺なのに、なんでかこの男がなにか口を開くたび、その苛立ちが鎮まるのだ。こんなことは初めてのことで、自分自身に困惑してしまっていた。
「……ちっ。それで。なんだって俺を助けたりしたんだ。必要だというが要するに、俺になにかやらせたいんだろう」
　そうだ。助けるにしても、あんなやり方を選ぶような奴に、タダで助けてもらえたとは思ってなどいない。ましてや、こんな業界の人間を助けようだなんて、たんなる慈善事業でもない限り、都合よく使える駒かなにかのためだと考えるのが普通だ。そして俺の場合、当然、後者ということになる。
「察してもらうと助かるよ。実はぜひとも、君にやってもらいたい仕事があるんだ」
「仕事だと？　どんな」
　怪訝に眉をひそめた俺に、男が軽く肩をすくめて見せた。どういうことでもないんだが、と前置きし、一拍おいて告げる。
「君には一人、どうしても手にかけてほしい人物がいる」
「……単刀直入だな」
「ああ。君という人間を前に、いちいち遠回しにいう必要はないからね。
　それでだ。実はその人物に、ある、とても重要な情報が漏れてしまったのだ。それはとても危険なもので、本来なら廃棄されていたはずのものなのだよ」
「なんだ、勿体振らずに早くいえよ」

男はほんの少し俺から視線を外したあと、すぐにまたこちらの目を見返す。

「……ところで君は物理は得意かな。まぁ、数学でもいいんだが」

「別に得意でもなんでもない。せいぜい人並みだ。だけど、そいつが一体なんの関係があるんだ」

「そうか、だったら細かいことは省略しようか。ではｎ次元という言葉は聞いたことがあるかな」

「ｎ次元……確か、零次元が点、一次元が線、二次元がそれに動きだったか？の概念をもって、三次元が奥行き……こんな考え方だろう」

「まぁ、細かい部分は違うが、おおむねそんなところだ。君のいったのは次元空間という概念だ」

「それでそいつがどうしたんだ」

「これらの概念に基づいて、ある実験をした連中がいる。それを使えば、あらゆる利権を手にすることも可能になるからだ。いや、そんなものはまだマシだ」

男がこともなげに告げる。俺は男のいっている意味がわからず、ただ頭の中でクエスチョンマークが浮かぶだけだった。

「その実験はかつて、アメリカで行われた実験だったが失敗しているんだ。しかし、どうやらその時の資料を手に入れた連中がいたらしい。そのとき行われた実験のデータを基に、新たな解釈と補強を重ねていくこととで……」

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。話が突飛すぎて、なにをいってるのかわからない」

勝手に話を進める男に俺は、話をやめさせる。

「もう一度説明したほうがいいのかな」

「そうじゃぁない。俺がいってるのは、その概念による実験がどうこうってのはどうでもいい。それとなんの関係があるんだっていう話だ」

そういうと男は、ふむ、と左手を顎にやり気取った態度でなにか

考え始めると、すぐに口を開き語りはじめた。
「そういうことか。もちろん君にも関係があるからこそ、こうして話しているんだよ。だから少しのあいだ、話を聞いてもらいたい」
男にそう告げられると、なぜだかここは素直に聞いてやるかという気持ちになる。いつもの自分なら、そんなこともないはずなのにだ。しかし俺が関係あるといわれた以上は、仕方ないとはいえ聞かざるをえないのも事実だ。きっとそんな思いから、男の言葉にも素直に肯定したにちがいない。
「どこまで話したか……ああ、そうだ、新しく実験を行ったというところだったな。
この実験には、ある意味で間違いなく人類にとって大きな夢であることだ。今いったように、先ほどの概念を使うことでタイムワープすることを目的としている」
「タイムワープ……だって？」
「そうだ。聞いたことはないかな？　タイムトラベルだとか、タイムスリップなどという呼称でもいいが。その実験というのがまさしく、それらの研究だったというわけさ。この研究が成功すれば、人類社会は劇的に変化することになるだろうしな。
初めは七十年代にアメリカで行われた実験だ。当時この実験は軍部の管轄下におかれ、数学、物理、化学といった分野の科学者は当然、天文学、地質、建築など他にも様々な分野からそれぞれのエキスパート達が招集されて行われた。しかし最終的に実験は、理論にいくつかの欠陥が見られたために失敗。人類の夢ともいわれたタイムスリップは、やはり夢だったわけだ。それが一九八五年のことだ。
その後、このプロジェクト自体がアメリカのトップシークレットだったため、メンバー全員にこのプロジェクトに関して絶対守秘義務を命じられ、チームは解散した。結局、誰もが夢にみた試みは失敗のまま、闇に葬られることになった」
「ところが、どこからかそれが漏れた……こういうことだな」
「そうだ。その動きがあったのが五年後の九〇年当時、バブルに沸

いていた日本でのことだった」

「日本で」

思わず俺は男の言葉を反芻させていた。それに男の話は以前、田神がチラリと口にしていたことがあるのを思い出していたのだ。あのときはさすがの田神のいうことでも、いささか信じることができずにいたがこうして改めて聞くと、それが本当のことなんだと信じざるをえないかもしれない。

「そう、ここ日本でだ。あのプロジェクトチームの中に、日本人がいたのだよ。

動きがあったとはいえ、動向そのものは芳しく、特別気にするほどのものではなかったのだ。実験しようにもあれだけのものをやろうとすれば、相当の金額が必要になるし、少額にしたって実験を行うにもどんな実験なのか申告しなければ、投資などされるはずもないからだ。当然ながら、そんな突拍子もない話を真面目に受け止める者などいるはずもなく、実験に協力し費用をもってくれるような人間など誰一人としていなかった。

しかし、ある時からその実験にアメリカのときほどはなかったものの、ささやかながら資金を出しはじめた者が現れた。その人物こそ、この春に暗殺された大物政治家だった真田博之だ」

「真田が……。そうか、そういうことだったのか」

N市での出来事がここにきて、ピタリと全てが当てはまった。あそこで手にした情報でも、真田のやつが湯水のように金を使っていたというのを耳にした。初めは政治資金のためとも目されていたがそれにしても巨額だったと、情報屋の小林がいっていたのを思い出す。それらの金は全て、実験に投資されていたというわけだ。

N市のど真ん中に、街の象徴ともいうべきビルでそんな実験施設を造らせたのも、間違いなく真田だ。奴がビルの建設や権利に関わっていたことからも、最初からあのビルが、実験を雲隠れするためのものだったと見てよさそうだ。当然、そんなことなど知らない一般企業をテナントに招聘することで、一大商業ビルとしてきっちり

と商売もしていたのだ。後で知ったことだが、あそこには地元なら当然、全国に展開、あるいは世界を股にかけている企業も入っていた。

それに、日本でも有数の街の中でまさか、そんな眉唾な実験をしているなんて思いもしないだろう。やり手ながら、多くの人間に恨まれても仕方ないくらいのこともやってきたと聞く真田のことだから、完成までに問題が起きたとしても、そんな問題は揉み消すに決まっているはずだ。

男が俺のつぶやきにコクリと頷く。

「これでもう気がついたろう？　君は関係しているんだよ。君がTビルに入ったことで、真田とは無関係じゃないのさ」

「……ちょいと待ちな。あんた、なぜ俺がTビルにいったことを知っている？」

「……私とてこの世界の住人だ、少し調べてみればわかることさ。おまけに、今の君は有名人だからね」

そういって男は話をはぐらかした。……気に入らない奴だ。不思議な雰囲気をもった男に、なぜか気を許しかけていた俺だがやはり、どうにもこの男を信用しないほうがいいと、直感が告げている。

「ちっ……まぁいい。それで実験はどうなったんだ」

「真田の援助を得ることができるようになってからは、たちどころに研究の成果がみられるようになっていった。その間に、真田はTビルの建造計画も思いついたようだがね。

そして幾度かの小さな実験が行われ、その都度、出てくる問題を払拭していったプロジェクトチームは、Tビルにその本拠が移される。それが四年ほど前のことで、そこは今までとは比べものにならないほど大規模な実験施設だったこともあって、大胆な実験も行われたらしい」

「その甲斐もあって、実験は成功したってわけか」

話の先を読んでいうと、男は首を横に振った。

「いや、残念……というべきではないかもしれないが、実験の最終

段階にきて、それが叶うことはなかったのだ。実験の行われるはずの前夜のことだ、施設がある者によって襲撃を受けたんだ。もう言わなくてもわかるね？」

俺は男の言葉に黙って頷いていた。そう、あの夜の二日前に、珍しく真紀から召集され作戦のレクチャーを受けたのだ。珍しいついでに、日時の指定もされていたのが思い出される。あのときはなにか準備でもあるのかと思っていたが、なるほど、そういう事情があったのか……。

やれやれ……あの女狐め、知っていたのにわざと教えなかったな。あの女狐のことだから、裏に何もないとは思わないがよほど教えたくなかったものだったということか。

「あんた、実験が最終段階だといったが本当にそんな実験が成功すると思うのか」

田神のときにも似たような質問をしたが、本当にそんなことが可能なのかという疑問はなかなかに払拭できない。しかし最終段階だというには、それなりの成果があったと見ていいのだろうが……。

「当然の質問だな。だが、理論上では可能さ。なぜそんなことをいうのかといえば、まだ実験は安定には至らなかったためだ。これでは意味がないからね。

つまりはまだ実験そのものが成功したわけじゃない。しかし、それが成功したにしろ失敗したにしろ、我々にとって決して良い結果にはなりえないからね」

「……なるほど、要するにあんたもその実験に関して、どこかで何かしら一口噛んでるってわけだ。

だがわからないな。あんたは利権を得るといったが仮にできたとして、まぁ、そいつは理解できないでもないさ。だとしても、そんな不確かなものに人一人を殺さなきゃならない理由ってのがいまいちわからない。

しかもだぜ？　さらにいえば、あんたは俺があの日に施設を潰してやった人間だと知ってる。実験が食い止められた時点で、そいつ

の野望……このプロジェクトに関わった他、全ての連中にとってもあまりに大きな損害になってるはずだ。
おまけに連中の実験に一番乗り気で投資していた奴も、もうこの世にいないときた。これだけの事実で、これから先、プロジェクトが立ち上がることは無いに等しいだろうさ。
少なくとも、ここにくるまでに何年十何年と投資してきた連中が、また同じことに金を出したいなんて思わないね。いや、それどころか一度ぶっ潰された以上、それまでよりも多くの金が必要になるだろう。
あんたのいう始末してほしい奴ってのも、あらかたプロジェクトに関わった奴なんだろう？　ならやはり、わざわざ始末を着けなくてはならないような相手とは思わんがね」
男が目をつぶったまま重々しく頷いてみせる。そのあとに瞼を開けて、囁くような不思議な声で語りだした。
「ああ、そうだ。君のいうことはごもっともさ。しかし、その実験データを盗んだ奴がいるんだよ。だから始めにもいったろう？　君も関係があるから話している、とね」
「盗んだって……いや、まさか……」
静かに言葉をつむいだ男は、俺の目を見据えていう。告げられた俺は、脳裏に一人の人物像のことが何度も浮かんでは消えていく。あの晩Tビルに侵入し、なおかつ生き残ったのは、捕らえたエリナの他には俺と田神、それとあの女狐、藤原真紀の四人だけだ。
そして、このメンバーの中であの施設の中からデータを取り出して持ち去っていったのは、真紀しかいない。つまり男のいうデータを盗んでいったのは真紀、ということになる。
「そのまさかさ。君らが抜き出したあのデータこそ、プロジェクトの全てを記録しているものだったんだ。彼女……藤原真紀はすでに、君よりも早くにマークしていたんだが、いつも後一歩というところで取り逃がしてしまっていた」
「そうか。なかなか捕らえられない真紀に変わって、行動を共にし

ていた俺を捕まえようって腹か。つまるところ、警察に俺の情報を売ったのは、あんただってわけだ」

目を細めてそういうと、男は少しばかしバツの悪そうな表情になり告げる。

「すまない。実のところ、君が彼女と関係してはいても、何も知らされていないだろうというのはわかっていたんだ。だが彼女を捕らえるためには、君を使ってあぶり出そうとしてみればどうか……こう結論づけたわけだ。君と彼女は、事あるごとに行動をともにしている節があるからな」

「別に一緒に行動したくて行動しているわけじゃない。単にあの女にとっちゃ、そのほうが色々と融通が利くんだろう。

ちっ、まぁいい。それはそれ、これはこれだ。少なくとも、関係ないとわかっていながら俺を陥れようとする人間のことを、信用できないというのもはっきりしたしな」

男はストレートに皮肉ってやったことに、ただ苦笑しながら肩をすくめるだけだった。そこからは、こっちは確かに悪いと思っているんだという風にみえなくもない。

「だがこれでわかったぜ。ここのところ、俺の周りを尾けている妙な連中がいたがあいつら、あんたの差し金だったんだな。プロだろうというのは尾け返してやろうとしたのに、全く捕まらなかったことからわかっちゃぁいたからな。そういう理由だったのか」

一人で合点がいったのを頷き、その後も男とはこちらが気になったこと、俺の今後の処遇についてなど、いくつかの点を話し合うことになった。

まず俺の今後については、俺がテロの犯人などというデマを撤回させるというのと、警察に与えた情報は全て取り上げさせるということで双方の合意をえることになった。これで晴れて俺は自由の身になれるはずだ。俺をこんな目に遭わせたのだから、それくらいのことはしてもらおう。プロをチームとして扱えるような奴なのだ、それくらいはいくらでもやりようがあるだろう。警察のトップを脅

すことなど朝飯前のはずだ。

他にも尾行していた点についても話をきくと、ここでは一つの疑問が浮かび上がった。というのも、尾行していた全ての連中が男の差し金ではなかったという点だ。話では、俺が毛利の病院で意識を取り戻し田神の部屋に転がり込むまでの間だけ監視していたというのだ。

俺の記憶では、あの佐竹の件があった次の日に、確かに尾行してきていた連中がいた。あれは男の息がかかった奴らではないようなのだ。ともすれば、警察によるものなのかと考えるところだが、どうもそうでもないらしい。そもそも警察が俺のことをマークしていたのなら、とっくの昔に何かしらなアクションがあったはずなので、警察ではないのは理解できる。

だとすれば、誰があのとき尾けてきていたのだろう。やはりここは、組織の連中が最有力候補になる。好き勝手にしている俺だから、目をつけられてないとはいえない。

あるいは……他の組織に狙われてないとも言い切れないところだ。なんせ訓練生時代に、ロシアの国境警備隊や現政党局員とその部隊を撃ち殺した経験があることから、あの件の犯人をＦＳＢが捜索していることは否めない。いや、間違いなく売られた喧嘩を買わないはずはないから、ついにバレたということも有り得ないわけではない。まぁ、政党局員を始末したのは田神だったが。

その件で連中が、ついに俺に目をつけたというのはどうか。この日本にもＳＶＲの現地人工作員だっているのだから、そういった連中が現れた可能もなくはない。だが、これもしっくりこないのも事実で、仮にそうなら、連中のことだから尾行なんて狡い真似などせずに、もっと過激なやり方でくるはずだ。

イギリスにいた頃のことから、ＭＩ－６にもマークされてないとも限らないが、これは大丈夫だろう。デニスがなんとかしてくれているだろうし、そもそもが連中の目の敵にされるようなことはしていないはずだ。ＣＩＡに関しても然りだ。

どれも可能性があるようでいて、その割にはいまいち説得力に欠けるカードばかりだ。あのとき撒かずに、いつものように誰の命令で動いていたのか聞き出しておくべきだったと、いまさらながら後悔した。変に気まぐれな自分の性格が恨めしい。

「他に質問はあるかな？」

「ああ、もちろんあるぜ。あんた、俺に仕事の依頼をする気だったんだろう。相手は誰なんだ。それと、理由もだ」

「ああ、当然それはいうつもりだ。まず先に話したプロジェクトのデータが藤原真紀によって盗みだされたことで、その人物に渡されることになっていた。この人物こそ、君に始末をつけてほしいターゲットだ。

彼はすでに世でいう権力を、ありとあらゆる形で掌握しているといっていい。つまり、世界でも有数の大富豪なのだよ、彼は。そういった人間はどういうわけか、変態趣味や不思議な事象に興味をもってその身を投じてしまうものらしいが、彼もまた例に漏れずその一人だ。

どこから聞き付けたのか興味をもった彼は、例のプロジェクトに投資していた真田に自分も共同で投資しようとかけ合うも、真田はこれを頑なに拒否していた。真田にとって彼に逆らえばいかに危険にさらされることになるか、わからないはずはないだろう」

それを聞いたとき、思わず二度三度と頷いていた。Tビルにいた私設部隊の謎も解けたのだ。あの部隊は男のいう彼とかいわれる奴から、自身の身と実験データを護るためだったのだ。まぁ、結局のところは俺達……いや、エリナ達の手によって壊滅させられたわけだが。

「それで」

「間違いなく彼の手に渡ったであろうデータがあれば、近いうちに必ず真田の研究所に匹敵する施設と機械が作れるだろう。

彼はそれを使って、世界そのものの歴史を変えるつもりらしいのだよ。真田に関してもそうだが、権力に取り憑かれた人間というの

は倫理感すら失ってしまうものなんだろうな。なんでも手に入れてきたことから、なんでもできると勘違いしているのかもしれないが。

ともかく、このプロジェクトだけは絶対に凍結させなければならないのだ。二度とそんなことをさせてはならない」

「俺からしたら、あんたも同じように見えなくもないがな。それでそいつは誰なんだ」

「……君は今自分が身をおいている組織が一体どんなものなのか、考えたことがあるかな」

突然そう告げられて俺は言葉を失った。男のいうことはもっともで、今までまともにそんなことは考えてみたことはなく、その必要性もなかったからだ。

今までは必要なことを聞き付けるために仕事を熟していくだけで、そこからどうすればいいのか、ただそれだけだった。自分にとって有益かどうかだけで、それ以外は必要ないといった具合だ。だからか、組織がどんなものなのかなど考えてみた試しなどなかった。

「君のいる組織は、固有の名称は特にない。ただ一ついえるのは、ミスター・ベーアと呼ばれる人物がトップに君臨している組織であることだ。このミスター・ベーアの暗殺を君に依頼したい」

ミスター・ベーア……これがこの組織のトップの座にいる男の名前……なのか。初めて知った名でどんな人物なのかも知らないが、裏切り者には容赦はしない人間だというのは間違いない。あの今井の末路が良い例だ。

同時に、その組織の末端にいる人間に依頼するあたり、目の前の男にはますます気を許してはならなくなるもので、場合によってはこいつも手をかけることも選択肢に残しておかないわけにもいかない。ぱっと見はそうでもないのに、この男はどこか危険な香りがするのだ。

「……そいつをやるにしても、俺になにかメリットがあるのか？」

「もちろんさ。君の知りたいことを何でも教えよう」

「はっ、俺の知りたいことだって？　馬鹿いうなよ、あんたに何が

わかるっていうんだ。俺が知りたいことなんて、あんたにゃどうでも良すぎるくらいの瑣末なことなんだ、わかりっこないさ」

男の、まるで全てを見通してますとでもいうような態度が気に入らなかった俺は、人事のように茶化していった。実際のところ気持ちの上では、なかば自分でもやけになりつつあるのも確かなことだったからだ。

もちろん俺が知りたいことなど、妹のことしかない。こんな、どうしようもない世界に身を投じたのだって、元はといえば沙弥佳のためでしかない。それ以外のことは、全てその副産物でしかないのだ。

だが自分がいくらそうなるよう行動したって、必ずしも良い結果に恵まれるとは限らない。あるいは、まだ道なかばゆえに結果が出ていないだけなのかもしれないが、なんにしたって、まともに沙弥佳へ結びつくような決定打がない以上、たまたま不幸に見舞われた少女一人のことを調べ抜けるものなのだろうか……。

「私に協力してくれれば、探すのを手伝ってもいいんだ。君の妹のことを」

「なに……？」

「今の君があるのは、妹の失踪事件がきっかけだ。違うかね？　私なら、君の妹を探す手立てを見つけることができる」

「なるほどね。そうやって脅そうってわけか。嘘も大概にしておけよ、そんなの簡単にできるはずがない」

馬鹿もほどほどにしておけと笑って見せる俺だけども、内心ではかなり動揺していた。理性は言葉の通り、できっこないと告げているが、感情ではもしかしたら……と思っているからだ。藁にもすがりたい思いというのはきっと、こういったことをいうんだろう。

「嘘ではない。私の友人に、君の妹、九鬼沙弥佳と直接コンタクトをとった人物がいるのだ。その人物は少々変わり者でね、なかなか人前に姿を見せたがらないんだ。

しかし私の頼みならば、彼も無下にはできない。君とコンタクト

をとれるよう計らうつもりでいるよ」
　こいつ……初めから俺のことを完全に調べ尽くしていた上で、何もかもわかっていながら小出し小出しに、脅しとはいわれない程度に脅し文句をつけてきているのだ。俺が一番ムカつくやり方の一つではないか。
　しかし今ここで、それを断れるような雰囲気ではない。というのも、奇妙な男の後ろに控えている男のためだ。こいつがもし断ろうものなら、すぐにでも銃をぶっ放してきそうな勢いなのだ。男の交渉の段階に入ってから、二度も腹のあたりを掻くような仕草をしてみせている。これは暗に、いつでも俺を殺せるという意味だ。
　しかも俺は警察に捕まってからというもの、今までずっと丸腰だ。さすがの俺であっても、この状況で切り抜けることは不可能に近い。おそらく、仮に俺が目の前に座る男に飛び掛かったとしても、喉元に指が届いた次の瞬間には、こっちの身体に一発か二発かの弾丸が食い込んでいるだろう。
　つまるところ、始めっから俺には交渉の余地などなかったということだ。だとすれば、ここはもうこの男を利用するだけ利用してやろうではないか。嘘か本当か……まぁ、メリットがないわけでもないし、胡散臭い以上は男の話が十中八九、嘘だと思って行動すればいいだけの話なのだ。
　しかし罠などないと抜かしたのに、その前に始めから半ば陥れるような形でこんなことをいうような奴は、俺の暗殺者リストに入れないわけにもいかない。この男はそれほどまでに、どこか危険なものを感じさせるのだ。
「……ふん、今ここで断ったところで俺にメリットがなさそうだからな。俺に白羽の矢を立てた理由もまぁ、わからなくもない。いいだろう、引き受けてやる」
「君ならそういってくれると思ったよ」
　ふふっと微笑む男の表情からは、裏などないといわんばかりのものを感じさせる。

「だが、契約である以上、まずこっちのやりたいようにやらせてもらおう。そこに口出しするのなら、すぐに降りてとんずらするぜ？　いいな」

男がこちらに視線を向けたまま、重々しげに頷く。

「それと、早速聞きたいことがある。あんたが妹と会ったらしい奴を知っているんだとすれば、どうしても知らなきゃならんことがある。

あんた、坂上という名の研究者を知らないか。いや、絶対に知ってるはずだぜ」

こちらも視線を外すことなく、男に向かって言い放つ。妹のことやTビルでのことを知っているような輩だから、島津研究所の責任者だった坂上を知らないはずがない。

「ああ、知っている。島津製薬の研究所で、神をも畏れぬ実験をしていた男だ。本当なら後で教えようとも思っていたが、まぁいい。どのみち遅かれ早かれ知ることになるだろうからな。

先のアメリカで行われたプロジェクト、ここであらゆる分野の学者が集められたといったろう。ここに坂上も呼ばれたのだよ。遺伝子学者の坂上が呼ばれたわけだから、実際には動物実験なんかを行っていたんだろうが」

「坂上が……。だが待てよ。実験があったってのはこの際、本当のことだと信じるぜ。だとして、なんだって坂上が呼ばれたんだ。関係ないんじゃぁないのか」

「それは思い込みというやつさ。実験というものは現実には、かなりグローバルなものなんだよ。実験の際にどんな事象が起きうるのか予測はするが、その通りになるわけではないだろう？　あるいは、ある段階では成功しても次の段階では失敗することもある。おまけに机上の空論といっても差し支えないような実験となれば、なおのことだ。

ある程度、段階をおって成功させてきた実験だったわけだが最終的には、生身の人間がタイムワープできなくては実験が成功したと

はいえない。それで人間がとる行動は、おのずとわかるだろう？」

男の言葉に小さく頷いていた。どういった実験をしていたのか想像もつかないが、本当に時間を飛ぶことができるのか……それを実証するために、動物を使ったというわけか。そして、場合によってはその影響で遺伝的な変質が起きていないかなど、そいつを調べるのが坂上の仕事だったのかもしれない。仮に実験がうまくいったとして、その影響で自分が変質していくだなんてとても成功とは言い難い話だ。

「実際に実験に使われた動物はどうなったんだろう」

そこで俺は、ふとした疑問を口にした。あまり深く考えての発言ではなかったが、どういうわけか、妙に気になったのだ。しかし男は、肩をすくめ首を振るだけだった。

「だが、彼がそこで得たデータを基に、様々な実験を行うようになったのは間違いない。何か、よほど気になるデータが取れたんだろう」

男の言葉にあの実験にされていった子供たちや、ゴメルと呼ばれた化け物のことが思い出される。もちろん、ＮＥＡＢ－２を投与された沙弥佳のこともだ。

それと松下薫が口にしていた、不老不死のための実験というのも気にかかる。男のいう通り、もしかすると坂上はアメリカでの実験の際に、それに繋がるかもしれない重要な何かに気づいた可能性はある。

男の口ぶりからは、坂上がどんなことをして、どんなデータを取ることができたのかまでは知っているわけではなさそうだ。まぁ、食えない奴なので全てを話さずに、ただ知らなさそうな態度をとっているだけかもしれないが、おそらく本当に知らないと思っていい。もし知っていたんであれば、とっくの昔にどうにかできたはずだ。

坂上はゴメルに対して、沙弥佳に次ぐ成果だと死の直前に口走っていたが、不老不死のための重要なデータが取れていたからこその言葉だろう。あの化け物は確かに文字通りの存在で、機関銃による

一斉掃射を浴びようが、身体の一部に大火傷を負おうが、有り得ないほどのスピードで回復していき、何千トン、あるいは何万トンもの瓦礫の下敷きになってもなお、生きていたのだ。しかも、銃創から目玉を作るような異常さだった。

やれやれだ。これは、しばらくは二つの方向を同時に並行してやるしかなさそうだ。それと、俺を付け狙っている奴がいるかもしれない可能性も考慮しなくてはならない。事実、警察に捕まる前に俺を狙い撃とうとしていた奴がいたので、事は慎重をきすことにこしたことはない。

こうなってきたからには、一刻も早く田神と合流したほうが良さそうだ。やつのことだから、エリナから何か情報を届けられることになっていた以上、なにがなんでも情報を手に入れていると考えていい。やつの口ぶりからは、そろそろ何か重要なことがわかってきているような感がしたので、田神を探すことから始めなくてはならない。

「では、そろそろお開きとしよう」

「なに」

今後のことを考え始めていたとき、不意に男がそう告げる。それからはまるで、もう俺と話すことはないとでもいったように思えるほどで、発言を許さないといった雰囲気があった。

一方的に話を切り上げ、男がソファーから立ち上がって暖炉のほうへと歩きだした。

「おい、待て。俺にはまだ聞きたいことが……」

「いいや、今回はここまでさ。私にも予定があってね。だが今日は楽しめた」

「ふざけるな。まだ話は終わってない」

叫び声をあげて立ち上がるのと同時に、脇に控えていた男の手に銃が握られていて、その銃口の先には正確に俺の胸、心臓のあたりをとらえている。

「大人しくしてもらおう」

「やかましい」
暖炉の向こうに扉でもあるのか、男が暖炉の影に隠れて消えた。
俺はその跡を追おうとするが、突然背後から両肩を掴まれる。
「貴様には仕事の件で、まだいてもらわなくてはならない」
そういって脇に控えていた大男が、静かにこちらに歩みよってくる。改めて見ると、その身長はゆうに二メートルはある。能面にガラス玉でもはめ込んだのかと思わせる面は、この世界によく見るタイプの表情だ。
「くそが……」
肩を掴む脇の二人も男と同様に冷たい眼をしていて、とても同じ人間とは思えない。あの男の命令とあれば、髪の毛一本の幅ほどの躊躇いもなく俺を殺すに違いない。そんな冷たい眼をしている。
「さぁ、こっちにきてもらおう」
こっちが観念したと思ったのか、大男は両脇の二人に顎をつかって連れていくよう指示をだした。
人を客人とも思っちゃいない連中の扱いに、一暴れしてやりたい気分ではあるがここは少し冷静になって、成り行きを見守ることにしたほうが良さそうだ。こんなプロ三人を相手に、丸腰では勝ち目がない。しかも妙な雲行きになってきているので、事を混乱させて自分の首を絞めるような真似は、今はしないほうがいいに決まっている。
もちろん、納得できない部分がないわけではない。けれど、とりあえずはこちらにも、何かしらのメリットが生まれてきているのでこれはこれで、悪くないかもしれない。前向きに考えてみれば、組織を抜けるにはちょうど良い口実になるかもしれないではないのか？　そう思えば、条件が悪いわけでもないのだ。
とはいっても、まさか自身のいる組織のトップを手にかけることになるとは思わなかった。今まで闇の中にいたような存在の人間が、いきなり降って沸いてきたわけだから幸運というのには変わらない。
全く……以前から思ってはいたがどうにも俺は、何も知らされず

にただ使われるだけということに関して、とりわけ気に入らない質の人間らしい。別に、全てを知っていないと辛抱たまらんといった極端な性格でもないが、間違いなくそういった気質がある人間であるようだ。

組織にいながら、上からただ命令されるのも気に入らない俺は、組織への損失があろうとなかろうと知ったことではないし、ミスター・ベーアなる人物とこの組織に忠誠も誓っているわけでも、恩義を感じているわけでもない。

あくまで、自分に命令できるのは自分だけ。これがスタンスなのだ。そのためなら、こんな組織なんぞ出し抜いてもいいと、日々考えているほどだ。

何より使えないのは、一応世界中にその網を張り巡らせているにもかかわらず、俺の欲しい情報にはまるで引っかからなかったことだ。そんなにまで使えずに、俺を満たしてくれないところに、わざわざ居続ける必要性など微塵も感じない。

たしか、マウスと藤原真紀が呼んだデータの基になった、アメリカでの軍事実験に関しても、そこに関連した人間が再び実験を再開し、おまけにそれを真紀を使って奪取しようとしたベーアも、丸きり無関係であるとも思えなくなったのだ。

なんせ先のアメリカでの実験には、島津でいかがわしい実験を繰り返していた、あの坂上が関わっていたとあっては俺としても調べないわけにもいかない。どういうわけか、真田がやろうとしたものと坂上の創ろうとしていたらしい新薬は、全て関係があるのではないかという予感があった。そして、そこに群がってきた連中も。

ともあれだ。当然そうなると、組織では裏切り者として見られても致し方ない。結局は、俺という人間の求めるものとトップの思惑がずれてくるという構図には、全く変わらないのだ。

だったらもう、取るべき道は決まってくる。自分に少しでもメリットのある側につくのが殺し屋であり、スパイというものだ。厳しくないとはいわないが、初心を忘れてない以上はこうなるのもまた

当然の結果だろう。
相変わらず両肩をしっかりと掴まれながら、大男の案内で部屋を出て薄暗い廊下を歩いていた俺は、今後の活動をどうするか考えていた。どうせこの大男からミスター・ベーアの情報は得られるはずなので、そこはなんとかなるだろう。やはり、脳裏をめぐるのは田神たちのことで、もしかすると二人にも協力を仰ぐことにもなるかもしれない。
目の前をいく大男が立ち止まり、鍵の束を取り出した。どうも廊下の先に着いていたらしい。それにしてもの量は、一体どこにそんなたくさんの鍵をしまっていたのかといわんばかりで、鍵特有の金属音もなかったのでここまでそんなものを持っていたとは思わなかった。
大男は、その何本といわずにある鍵の中から一本の鍵を迷うことなく選びだし、廊下の先にあった古ぼけた鉄製のドアの鍵穴に差し込んだ。解錠して開らかれたドアの先には、全くもって予想もしていなかった光景が広がっていた。
「ここは……どこなんだ」
目の前に広がる世界。雲一つない青々とした水色の空に、延々と広がっているのかとすら思える深緑とかすかに見える、幾本かの筋のようにうねった川。それに遥か先には、日本の象徴たる富士山がうっすらと影になって眺めることができたのだ。
そして今いる場所が森の中にある、自然にできていたと思われる小高い岩場の中にあった空洞を、人工的な近代的通路にこしらえてあったものだということも、驚きのあまり呆気にとられていた頭でも理解していた。ゴツゴツとした岩肌は、赤茶に焼けた色をしている。
「貴様には、早速動いてもらう」
全く……一体どういうことだ。俺のやりたいようにやるというのが条件だったはずなのに、これではまるでこちらが出した条件が通っていないではないか。まるでこれからの俺の行動は、全てお見通

しだといわんばかりの大男の言葉に、俺は眼を細めて大男を憎たらしげに見つめていた。

まるで先行きが違ってきたことを表すかのように、視線の遥か先にある山々に、薄暗い雲がかかり始めていた。

第８０章

暗い森の夜道を、搬送用のトラックがガタゴトと悪路に揺れながら走っている。なんせ舗装もされていない道だ、そのせいで道の凹凸具合は最悪といっていい。荷台部分に座る男たちの体も、それに合わせて幾度となく揺れていた。互いに身を寄せ合い、所狭しに六人ずつが対面する形で座っている。

男たちは全員が黒い服に身を包んでおり、同じ色のマスクをしていた。分厚い革のブーツに、黒の手袋、黒いジャケットという出で立ちは男たちが軍の部隊に所属していることを窺わせ、その誰もが傍らに機関銃をおいているのだ。

幾許もしないうちにトラックはスピードを緩め、ついには動きを止めた。それと同時に男たちの中の一人が手でトラックを降りるよう指示し、一斉に他の十一人全員が銃を手にトラックから降りて身を屈めると、ゆっくりと暗い森の中へと踏みいっていく。ある者は、装備品とは別に二十リットルは入りそうなポリタンクを背負っている。

季節はすでに夏に入ってはいるが、ここは森の中とはいっても標高が二千メートル近い山の中だ。標高の低い場所にある都会の街中と比べれば、このあたりは昼でもうっすらと肌寒い。そんな土地ではたとえ夏であろうと、夜ともなればとてもではないが薄着ではいられないほど寒い。おまけにあたりには、人家らしいものは全くといっていいほど見当たらない。

そんな中、男たちは何を警戒しているのか、用心深く歩を進めていく。その全員がスコープをつけていて、なるべく音が立たないような足場を選びながらの、慎重な行軍だった。

そのうちに部隊の先端をいく隊員が、なにか見つけたようで立ち止まって後続の隊員たちに注意を促した。彼から前方百メートルほ

ど先、トラックを降りた地点から北に一キロほどいったところにぽつんと、人家らしい明かりがあったのだ。どうも彼らの目標はそこのようで、やや切り立った丘からそこを望むことができた。

それを受け、先ほど隊員たちを指示した者が再び手を使って二手に別れてそこにいくよう、指示をだした。この男こそが部隊を率いている隊長らしい。右回りで五人、左回りに四人、そして隊長と他二名で真正面というふうに、三方から攻め込むつもりなのだ。

二手に別れてもなお、じりじりと確実に明かりの灯った人家へと進んでいっていた部隊が、ついに人家へとたどり着く。人家は周りの壁をすべて丸太で作られており、こじんまりとしたコテージのような面持ちをしており、窓は四方の側面に一つずつ、建物の中央付近から真上に向かって煙突が突き出ている。

向かって右側の隊員らが、建物のドアにそっと張り付くように配置につくと、ほぼ同時に左側に回っていたメンバーも裏口についた。配置についたのをその様子を窺っていた隊長に合図すると、隊長がそれを見計らい、さっと手でゴーサインをだした。

次の瞬間、隊員たちは銃を構えたまま真正面のドアと裏口から、なだれ込むよう人家へと侵入し、間入れず機関銃による一斉掃射をしかけた。

それが数分のあいだ続くと、隊長が人家へ入りやめさせる。中には硝煙の臭いと煙が立ち込めていた。

「生存を確認しろ」

隊長の短い言葉をうけて、隊員の一人がゆっくりと掃射された中心に向かって歩み寄る。数分間で九挺のライフルから発射された弾の数は、数千発どころか、実に一万発を超える。それだけの弾丸は全て同じ箇所一カ所に向かって放たれたというのだから、向けられた相手が生きているはずがない。

だというのにそこに向かっていく隊員二人の恐る恐るといった感じの足取りは、明らかに不自然だった。

ゴクリ――。メンバー全員が二人の様子を見守るなか、誰かが静

まり返った建物の中では固唾をのむ音は良く響いた。
「……隊長、死んでいます。すでに死体となっています」
「よし。だが、まだ油断はするな。こいつらは化け物だ、我々の常識ではものは計れん」
隊長の言葉に頷きながら、隊長の男は死体を収容しろと部下に命じる。隊員たちが命令に即座に動き出し、死体と呼ばれたそれを運ぶために、袋に詰め込んでいく。その動きには一分の隙もなく、手慣れた様子だ。
死体は何百、あるいは何千という弾丸を体中に食い込ませていったために、四肢こそかろうじて繋がってはいるものの手の指は七本がちぎれ飛び、体には鼠が食い散らかしたチーズのように穴ぼこだらけだった。むしろ、赤やピンクの肉片ばかりしか見えずに、素肌が見れる部分のほうが面積的にいうとはるかに少なかった。
それならば当然といってもおかしくないだろうけれど、生前は美人で通っていただろうその美貌は、もはや見る影などない。体と同じように両の眼球は飛び散ってしまっていて、軽いウェーブのかかった美しいブロンドの髪も、血と頭蓋骨から飛び散った脳漿（のうしょう）によって濡れていた。
それにしても……と、隊長の男はそんな女の死体と、それを収容すべく行動する部下たちの働きを見つめながら思う。目の前に転がった死体は見たところ、ほんのちょっと前までただの人間と同じ姿形をしていたはずなのに、なぜここまでする必要があるのか。いや、これは人間の形をしただけの化け物だとは理解しているつもりだ。だがそうだとしても、依然として理解できない部分がないわけではなかった。
というのも昨晩、突然、軍上層部にいる上官から呼び出され、秘密裏に今回の作戦を言い渡されたのだ。それ自体は何も問題などなかった。こういった表沙汰にされることのない作戦こそ、彼の仕事の本分だからである。問題は、付け加えられた条件のほうだった。
「いいかね、これから君に言い渡すことは、国家の、果ては人類そ

のものの危機になりえることだ。それを重々承知したうえで命令を聞いてもらいたい」

こんな奇妙なくだりから始まった指令は、ある人物の暗殺と、その死体を細切れになるくらいにズタズタにすること。それと、肉片になったとしても、それらをすみやかに回収してくること……。これらを徹底的に行えというものだったのだ。そして回収した死体は、八時間以内に指定された軍用施設にまで送り届けることも、指令の中には含まれていた。

「収容、完了いたしました」

「わかった。これから八時間以内に基地まで戻らなくてはならん。撤退だ、急げ」

しかしこれが命令であり仕事なのだから、それは遂行されなくてはならないのだ。そこに疑問を持つことなど、彼らには許されない。たとえそれが、どんなに非道なものであっても。

死体を回収し終えると仕上げにと、ポリタンクを背負っていた隊員たちがそれの蓋をあけ、建物の壁や床に中の液体をぶちまけるようにかけていった。液体は非常に強い発火性のもったもので、隊員たちは一人また一人と足早に建物から出ていき、最後の一人がドアに向かって液体を線引くように流していく。

ドアに着くとその隊員は、余った液体をドアの周辺にかけて、胸ポケットからジッポのライターを取り出して火をつける。隊長がそれを見て軽く頷くと、隊員はそれを床の、液体が溜まっているあたりに向かって投げると、液体が火に反応して激しく燃えはじめた。

これで建物は、あっという間に燃え広がっていく炎によって消し炭へと変わっていくことだろう。なんせ木製なだけあって、燃えていくその速さも段違いだ。

燃え盛る炎が建物を四方から、あるいは中から溢れて完全に建物を包んでいくのを、隊員たちは誰一人として一瞥することなくその場を離れ、ヘリコプターに乗るための地点を目標に移動していった。その彼らの様子を暗闇に紛れ、遠く離れた高い木の上から見ていた

一人の男の存在に気付くことなく……。

俺が謎の男の手によって刑務所行きの護送車から助け出されてからというもの、早いものですでに二週間以上が経っていた。

八月に入ってからは、世間も遅ればせながらようやく夏休みムードになったようで、子供たちが思い思いに休みを堪能し始めたのか街に溢れ返っている。おそらく、この猛暑にも体が慣れてきたんだろう。

とはいえ、うだるような暑さは健在なのでこちらとしては人が溢れてきた分、道を歩きにくかったり人目が多くなったりといった小さなデメリットも多くなったといえる。

そんなくそ暑い晴れた夏の日に俺は、街のど真ん中にある噴水が何カ所も吹き出る造りになった公園のベンチに座って、清涼飲料水の入ったペットボトルに口をつけていた。アメリカに本社をもつ大手企業が出している白濁色をした飲料水で、青い柄の外装をしたやつだ。

「暑い……くそ、早くこいよな」

こんな暑さの中で俺は、涼しい建物の中に入るわけでもなく人がくるのを待っていた。連日のように記録的な猛暑だと騒がれているのに、頭がどうかしてしまいそうな暑さの外で人待ちなんてあまりしたいものではないけれど、向こうが待ち合わせにそういってきたのだから仕方ない。おかげで、つい先ほど買ったばかりの五百ミリリットルのペットボトルも、あっという間に中身がなくなろうとしている。

そうしてもう何度目かのつぶやきのあとに、座るベンチの端に、一人の小男が向かって右側から気配をあまり感じさせることなくや

ってきて、ちょこんとでもいうふうに座った。もちろん、待ち人きたるといったわけであるが、すでに前に二度も同じようにして俺と接触してきているので、もう驚くこともない。

「次のターゲットが見つかった」

なんの抑揚のない声で、小男が端的に告げる。以前二回とも同じ言葉で切り出されたことから、本当に仕事には私情を持ち込まない性格なのかもしれない。

「それで」

「次はこいつだ」

男がそういって差し出してきたのは、二枚の写真だ。写真にはいつものように同じ人物が写っていて、それが別の角度から撮られている。渋めの顔立ちで口の周りは当然、頬の下部分から揉み上げや顎下にまである髭は肌とまだらになっているのが、そう感じさせる。なかなかに高級そうな灰色のスーツに身を包んでおり、それが本人がかもしだす雰囲気とマッチしている。ジョージ・クルーニーを日本人っぽくしたら、きっとこんな感じかもしれないといった雰囲気をもった男だ。

「今日の午後九時半、M区のシティホテルで会合が行われる。その壇上にあがったときに……」

「いつもと同じだな」

前回までと、全く同じ言い回しの男の言葉を遮るようにいうと、男はコクリと頷く。

「それと、今回が最後でいいということだ」

「……ようやくか」

つぶやく俺に、男はただじっとしたまま小さく肩をすくませると、ベンチを立ってきた方向へと去っていった。相変わらずの無愛想ぶりだ。

俺は去っていく男の背中を横目に、盛大にため息をついた。どうにも事がうまいことといっていないことに、いい加減うんざりしていたからだ。

まず、俺を警察に売り飛ばそうとした男のことにしてもそうだった。初め、なんとも話ができすぎていると感じたものも、結局はあの奇妙な男の筋書き通りに話が転がったことだったのが、気に入らない、うんざりすることの要因になっていた。

警察から救い出された先はY県の片田舎ともいえない、全くの人里離れた森ともいうべき場所だった。そこで奴の部下らしい男たちの運転する車によって街に送られる最中、しぶしぶ男と契約を交わすことになった仕事の詳細を聞くことになる。ミスター・ベーアなる人物がいかなる人物なのか、といったことも含めて。

この人物が、いつ、どこで生まれたかなどはわかっていない。聞くところによれば、すでに初めから類い稀なる人望と一体どこで手にすることになったのか、一切謎に包まれている財産を持っているということが一つ。

これだけですでに、なかば眉唾ものだがその道のプロですらわからないとなれば、こちらとしては知りようはないし、信じざるをえない。ありとあらゆる人脈からたどっていっても、どういうわけか、あと一歩というところでルートが途絶え、男の関係者との繋がりがわからなくなってしまうのだという。

二つ目は、どうも少なくとも三十年は前から財界に君臨しているらしく、おそらくは株取り引きで財を得たんではないかと噂されてはいるものの、どうやって莫大なる財を得てきたのか、その明確な手段も全てが謎だというから雲を掴むような話だ。これではまるで、現代版の岩窟王といっても過言ではないだろう。あるいは本当に、どこかで金脈でも見つけたりしたのかもしれないが……。

この男を連中が狙う理由は、例の男の口から聞いているのでそれはいいとして、果たして、そんなこの世にいるかどうかも怪しい人間の始末をつけるというのは、少々骨が折れるというものでもある。

しかしそれでも、この人物にはダミーが数人いることがわかってきたのは本当らしく、このダミーたちを片付けていけば、必ず本物にもぶちあたる、こう連中は踏んだわけだ。探す手立てがない以上、

こうでもしていくしかないのは当然の成り行きだろう。
今にして思えば、ミスター・ベーアの作ったこの組織は、組織というわりに今ひとつ目的がはっきりしていない部分があったのも確かで、アメリカのＣＩＡやロシアのＦＳＢならびにＳＶＲ、イギリスのＭＩ６といった他の諜報機関と比べても、国家の利益などを守るといった理由らしい理由もあまり聞いたことがない。
一応、殺し屋兼スパイとして国家の諜報機関も去ることながら、後ろめたいことをしなくてはならないような企業からの委託によって、利益を得たりはしている。世界中に俺みたいなやつがいるから、それは当然であるかもしれないが。
しかし、この組織そのものがミスター・ベーア私設のものであるとすれば、こうした疑問にも納得がいく。組織そのものが私物のものであるなら、そこに特別な理由など必要はない。あるとすれば、いつ狙われてもおかしくない自分の身を守るためとでもしておけばいいことだ。
また同時に、そんな理由だとすれば、当然それに反発する者が現れてもおかしくはない。誰だって、一個人の所有物でいたいとは思わないだろう。そこでこの人物がとったのが常套手段ではあるが裏切り者は制裁を加えるというもので、こうして組織というものの優位性を打ち出すことができた。
結社や組織なるものは、これまで歴史的に見てもこうした裏切り者への死の制裁というのは行われてきたので、別に不思議はない。今までに散々使い古されたやり方ではあっても、これ以上に有効な手段もないのも事実なのだ。少なくとも、あの今井という男の例があるので間違いないだろう。あとはなるべくそんな者が出ないよう、現場では工作員の好きなようにやらせておけばいい。
となると、そのミスター・ベーアの目的というのがないのかといえば、そうでもない。少なくとも組織の力を使って、ある実験プロジェクトの重要な機密データを盗ませている。かつてアメリカで軍によって行われていた実験の、その後続プロジェクトとして継続さ

れたものだ。これもまた眉唾な話になるが、その実験というのがタイムワープするためのものだというのだ。つまるところ、連中はタイムマシンでも造りたかったらしい。

もし本当にタイムマシンができたなら、それはそれで歴史的かつ人類にとっての夢ともいうべき大発明といって言い過ぎではないだろう。きっとノーベル賞の一つや二つでは足りないにちがいない。とはいえミスター・ベーアもよくもまあ、こんな半ば非現実的なプロジェクトに目をつけたものだと思うけども、そこが金持ち特有の着眼点の差というものかもしれない。

なんであれ、それを巡ってまた別の組織が動き出しているのも事実で、その組織は物騒なことに、殺しを生業とするコミュニティーだというのだ。そんなものがこの日本にあったのかと思わずにはいられないが、実際のところは日本にその本拠が置かれているわけでもないらしい。いや、ただの集まりである以上、どこが本拠ということはないだろう。

これで少なくとも、このデータを巡って二つの組織が動いているわけだが、俺はといえばどっちつかずのまま依頼の遂行をしていることになる。ミスター・ベーアのダミーを殺したということは、必然的に裏切ったことを意味しているが今はまだ、組織からそれらしいアクションは起きてない。つまり、まだ組織は俺という存在に気づいていないと見ていい。

組織の興りと形成過程を考えてみれば、トップであるミスター・ベーアさえ片付けることができれば、あとはなし崩しになるはずなので、組織の連中が気付くまでにこの依頼を遂行してしまいたいというのが、今の自分の本音だ。

また、奇妙な男が依頼してきた仕事内容には、当然ながら真紀が奪っていったマウスと呼ばれたデータの奪還も含まれている。まぁ、俺が無関係でないと説明された時点で、ただ一人の人間を片付けるだけで終わりとも思っちゃいなかったが。

それと、俺が突如意味不明の指名手配をうけたことに関しては、

男の部下から解放された翌日にはそれが取り消されていた。というよりも、死んだことにされたらしい。

これもこの世界によくある嘘っぱちの情報そのもので、中国に逃げ込もうとしたスパイ、つまりここでは俺が、アメリカと韓国の合同軍事演習に巻き込まれて死んだ疑いがもたれた、というものだ。よくもそんな都合良く……と思ったシナリオだが、実際に今現在、韓国は北朝鮮からの突然の砲撃によって、北緯三十八度線近くでは住民らの緊張が高まっていたらしく、それに伴って、本当にアメリカとの緊急軍事演習を黄海沖で行っているではないか。

これは警察に捕まった日の一日前のことであり、二日か三日だけではあるが世間の動きを一切知ることのできなかった俺にとって、全くの予想もしなかったことだった。そのため、なんだその理由はと思ったところ、このニュースを知ったのである。同時に、その海域に南から航行してきた不審船が、”間違って砲撃された”らしいというニュースも飛び込んできたのだ。

それによれば、アメリカの戦艦からの再三に渡る警告を無視したためだそうで、そこには日本の警察が追っていた犯人らしい人間の死体があがった、こう説明されていた。それをどう捩曲げたのか知らないが、その死体を例のスパイのものだということにしたわけだ。

おかげで俺は国籍も何もない、宙ぶらりんな人間ということになるがまぁ、それはそれで構わない。そもそも死んだことになったのは、デニスから貰ったパスの、もう存在してもいない人間なのだ。九鬼という俺自身はまだ生きているのだから、別に大したことじゃない。

むしろ、そうやって死んでくれたおかげで、安心して世間を堂々と闊歩できるのだから、いいことだと捉えている。パスなんかは、また後でどうにでもできることなのだ。

そうして、連中が調べてきたターゲットを始末するようになったわけだが、今回が最後だという。このダミーたちはミスター・ベーアの側近だと目されているようで、同時にこの人物の、世間的な代

行人でもあるらしい。もしかすると、ミスター・ベーアなんていう人間は存在しておらず、単に、ダミーと思われる人間たち全てがミスター・ベーアなんではないのか、と考えてはみたが結局は全員を片付ければ同じだという結論に達した。

だが連中は、そうは思ってはいないようだった。もしそうであるなら、誰かが、あるいは全員がマウスの行方を知っているはずなのに、これまでのところ、誰一人としてマウスの行方を知る者はいないというのは、やはりオリジナルがいるに違いないということらしいのだ。確かにターゲットたちがそのことに関して口を割ったことはないし、知らないの一点張りだったことを考えれば、連中の言い分もわからないでもない。

かといって、果たしてそうなのかと疑問を思わないわけでもない。どういった経緯で希代の大富豪かつ、一組織のトップに立ったのかはわからないが、世界経済に影響を与えるほどまでの地位に就いているらしい男が、そんな簡単に口を割るとも思えないのだ。

確かに政治家や普通の富豪なんかであれば、惨めに命乞いする連中など珍しくもないけども、経験上、その辺りを遥かに突き抜けてしまった類いの人間は、間違いなく肝っ玉が座っているうえに、そのために命を賭けているような連中が多い。こうした事実があると考えてみると、やはり連中の言い分を鵜呑みにはできない。

まぁいい。それも次のターゲットで判明するだろう。もしこの写真に写っている男がマウスのことを本当に知らないとすれば、連中の言い分が正しいになるのだからそれを今あれやこれやと考える必要もない。

「それよりも……」

ピラピラと、写真で顔を扇ぎながらそう口にした。とりあえず今は、この写真の男のことは置いておくとして、どうしても知っておかなくてはならないことがある。俺は口の開いたペットボトルに口をつけ、残りを一気に喉へと流し込んだ。

残りも少なくなってしまって、完全に温くなっていた液体を飲み

干すと、公園を出る手前に置かれてあるゴミ入れに容器を投げ入れる。ガタンと音を立ててペットボトルはゴミ入れに沈んでいった。

ガヤガヤとやかましいくらいに、店内には荒れ狂れ者たちの怒声とも罵声ともとれる声が、幾重にもなって響いていた。まだ夕方の五時半を回ったばかりだというのに、もうアルコールがまわって出来上がっている者もいる。そんなサバカ・コシュカの店内に俺は、カウンターの一番隅に座りそんな連中の馬鹿笑いや話し声に耳を傾けていた。

いや耳を傾けているわけでなく、勝手に耳に入ってくるのでそれについ聞き耳を立ててしまう、そんな具合だ。時として、そういった話の中からも何かしら重要なヒントが与えられたりすることもあるので、そういう意味では、まぁ、やはり聞いていないわけでもないが。

「おら、俺のおごりだぜ」

やかましい店内でも一際馬鹿でかい声で親父がそういいながら、グラスに並々と注がれたストレートのスコッチを差し出してきた。手にしていた瓶がバランタインの三十年だったのを、俺が見逃すはずもない。

「あんたにしちゃぁ、気前がいいな」

「抜かせ。おまえの出所祝いさ。いらねえってんなら、このまま俺が飲むぜ」

俺は苦笑して差し出されたグラスを取って、一気に半分ほど飲み込んだ。出所祝いというだけあって、普段ならショットグラスに入って出てくるところ、今回はロックグラスに入れて出してきていた。半分ほど減りはしたがそれでもまだ、ざっと見てショットグラスの三、四倍の量が残っている。

「なんでぇ、まだまだいけそうな飲みっぷりじゃねえか」

「いいや、こいつでそろそろ打ち止めだ」
結構呑んでるからなと付け加え、俺は遅れて出されてきたチェイサーに口づける。店に姿を見せたのが、つい四十分かそこら前のことだ。しかし久しぶりに顔を見せた俺に、ここに入り浸っている輩から何杯ものウイスキーをおごられるはめになったのだ。そこでこの追い打ちとくればさすがの俺でも、もういい加減うんざりするというものだ。
ここに来る連中も皆が皆、脛に傷をもつ連中ばかりなので、俺がやらかしてしまったところをなんとか出てきたんだなと、暗黙の了解というやつで何もいわないでいてくれたのは気兼ねしなくていい。あれこれと言いたい性格でもないので、そこは本当に助かった。
それに気遣いは嬉しいが、これからまだ仕事が残っているので、これ以上は仕事に異常をきたしかねない。これが何もない日であるなら、まだ飲み足りないところだが、さすがに今は飲み過ぎといってもいいレベルだ。
「それで？　お尋ね者だったおまえがここにきた理由は」
「いっておくが、俺は単に嵌められただけだ。嵌められたところを、きちんと白紙に戻してやっただけさ。
まぁいい。それよりも、ガスのやつはどこにいる。やつに用があってきたんだ」
俺がそういうと親父の雰囲気が一変した。いや、それを待ってましたといったほうが正しい。
「多分、ガスのやつはこないぜ」
「どういうことだ」
親父はカウンターを他の若いバーテンに任せ、ぐっカウンターから身を乗り出してくる。どうやら、あまり大きな声ではいえないことのようだ。
「どうもこうもないぜ。実は昨日、店じまいをする時間がきてからのことだから、午前四時か四時半くらいだったと思うが……ガスが姿を見せたのさ。それも、えらく必死の様子でな、息も絶え絶えっ

て感じだった」
「ガスのやつが」
「ああ。それで、俺にこんなことを言い残して、またすぐに出ていったよ。明日おまえがきたら、それは罠だと」
「罠……一体、なにをいってるのかさっぱりわからないが……」
怪訝な表情を見せながらいう俺に、親父も重々しく頷いた。
「それは俺だって同じさ。だがやつは、今日の早い段階で、必ずおまえになにかメッセージが伝えられるはずだといっていたぜ。後、これを聞いたら必ずS区のHビルに行けともいっていた。話は通してあるから、ともいってたよ。
あの様子は、まるで誰かに追われてるみたいだったな……おれにはわかるんだ、ああいった顔を見せるやつは、もう先が長くないってよ……」
親父が珍しく俯かせながら、静かにいった。その心情は俺としても同じだ。変なところで金にがめついた奴ではあったけれど、決して悪い奴ではなかった。むしろ、妙に愛嬌のある奴で、仕事も正確ないい奴といった人間がガスだった。
まさか、そのガスがこんなことになろうとは、思いもしなかった。きっと奴ならしぶとく生き残るに違いない……そう思えるような奴だった。だったが、やはりこの弱肉強食の世界では、そんな優しさや愛嬌さというのは、ただ寿命を縮めるだけでしかないんだと、改めて再認識させられる。
「S区のHビルといったな……そこに何があるんだ」
「さあな。なんにしても、確かに伝えたぜ」
親父はそういったきり、口をきくことなくその場から動いて再びカウンターへと戻っていった。俺は一体どうしたものかと俯いて、ガスの伝えようとしたことに考えを巡らせる。
罠というのが何か検討もつかないが、今日までに伝えられたメッセージといえば、昼に依頼された男の暗殺があげられる。ガスのいうメッセージとは、このことなんだろうか。思い当たるのはこれ以

外にはないので、罠だとするならばこのこと以外に考えられない。
まだあった。そもそも俺がガスに仕事の依頼をしたのは、田神のことなのだ。俺と田神が別れて以来、なんの音沙汰もないというのがどうにも気になるのだ。エリナに任せていた情報収集を俺に伝えるため、面倒であってもその橋かけ役を引き受けていたので、何か伝えられる、あるいは伝えられたかもしれない以上は何がなんでも田神を探し出す必要がある。
きっとやつのことだから、エリナからなにか伝えられたに違いないだろうが、予期していた通り、田神の身になにかあったと見てまず間違いない。だとしても田神の性格上、なにもいってこないというのは少々考えにくい。きっと何かしら、別の手段を使ってでも俺との接触をはかってくるはずだ。
けれどこの二週以上ものあいだ、全くの音沙汰なしというのであれば、こちらから田神を探す他ない。濡れ衣ではあるが皮肉にもスパイなどと、ありがたくも大々的に俺の存在が知られた以上は向こうとしても、ある意味探しやすいはずなのにそれがないとすれば、当然だろう。
そこで俺はガスの寝座にわざわざ赴いて、田神を探すよう依頼したのだ。それが三日ほど前のことで、三日後である今日、田神を見つけて接触をはかれるようにするための算段を伝えるよう、この店を指定しておいたわけだ。もし生きて会うことがあれば田神のことだから、きっと身の危険を案じて直接会うんではなく、回りくどかろうとも伝言ゲームか何かみたいにしてメッセージを伝えてくるに違いないからだ。
よって考えられる可能性は……まず一つ、エリナから情報を与えられずに四苦八苦しているか。二つ目、エリナから情報を伝えられたものの思わぬ敵の出現により、俺に伝える前にどこかに身を隠さなくてはならなくなった。三つ、あるいは敵に命を狙われたため、捕縛されたか。最後はそのいずれでもなく、死んだか……この四つだ。

最後の可能性は真っ先に捨てるところだが、ここまで何もないとなるとその可能性も無きにしもあらずで、最悪のケースを想定して動かないとこちらも危ない身としては、致し方ないところだ。その場合は、俺が一から動く必要性もでてくる。

しかし、ガスが何を告げたかったのかは別として、田神が死んだというんであれば探し人死すの一言ですむところを罠だと、意味深なことを告げたあたり、まだ田神が死んでいないと見てもいいのではないだろうか。もしかすると、罠だと伝えようとしたのが田神からのメッセージである可能性もあるのだ。

もし罠というのが、今夜俺が片付けなくてはならない仕事のことだとしたら、田神が事前にそれを察知し自分を探すガスに目をつけないはずもないので、万一のことも考えてここは一旦仕事の延期ということにしておこう。どうにも、今回で最後でいいだとか、ミスター・ベーアという人物像にしたって、何もかもが胡散臭く思えて仕方ないのだ。

ともかくだ、これからの俺の行動が決まった。ガスの遺言にもなったろう言葉にしたがって、まずはS区のHビルにいってみるとしよう。話はまずそれからだ。

俺はグラスに残っていたスコッチを一気に喉へと流し込むと、すぐに席を立ち店を出た。

ガスの遺した言葉に従い、地下鉄を乗り継いで向かったS区のHビルにたどり着いた俺は、ビルの受付嬢に今日ここに来るよう言づかってきたと告げると、すぐにビルの最上階に行くよう案内された。話はつけてあるとは聞いてはいたが、そのあまりの対応の良さにこちらの方が怪訝に思ってしまう。

指し示されたエレベーターで、ビルの最上階へとあがるべく上昇ボタンを押した。ボタンの数字は二十五階を示していて、このビルが二十五階建ての建造物であることを教えている。ビルの高さは、一階あたり三メートルとして七十五メートルは少なくともあるよう

だ。いや、近年の建築事情なら人立ち入れない屋上や最上階の上にあるフロアは階数として数えないこともあるそうだから、実際には後十メートルか十五メートルは高い。

そんなことを上昇していくエレベーターの中から、沈みゆく太陽に照らされて青暗くも茜色に染まっている街を眺めながら考えていた。不思議と、誰かから素性のしれない場所に行けだとか人間に会えだといわれると、妙に落ち着かない気分になるものだ。

職業柄なのか、自分の性格だからなのかはわからないがもしかしたら、ここに行けというメッセージそのものが罠なんではないか……そんな風にすら考えてしまう。ガスが命を賭して伝えようとしたメッセージが実はガセネタ、そんなありもしないことをだ。

エレベーターは乗っている人間に駆動音を響かせることなく、静かに最上階へとついた。開くドアも、ほとんどといっていいほど音がしない。

降りてみた先のフロアは意外にも、全く物が置かれていない寒々しい場所だった。四方はエレベーターに面している方以外は全てガラス張りになっていて、フロアに沈みゆく夕陽が余すことなく差し込んできている。何もないと思っていたところ、フロアの一番端の中央に黒っぽい色をした机と椅子があった。それとともに、横には夕陽の逆光で影になってよく見えないが、一人の人物が立ってのもわかる。

俺は眩しさと一体誰なんだという疑問に目を細め、ゆっくりとその人物のほうに向かって歩みだした。

（一体何者なんだ……こいつがガスのいっていた、話のつけてある人物なのは間違いないだろうが）

机の側までくると、机の上に置かれてあった金縁の置き時計がカチコチと、秒針が時を刻んでいっている音が響いてきた。目の前の人物はこちらがきたにも関わらず、背を向けたままこっちを向くこともなく後ろ手に組み、ただじっと無言で沈んでいく夕陽を眺めている。

その後ろ姿からはこの人物が男であるというのが窺えるが、どうにもこの後ろ姿に見覚えがある気がしていた。髪はオールバックにされていて背丈は俺と同じか少し小さめだ。おそらくは高級なんだろうと思わせるダークグレーのスーツと、同じく高級感ある黒い革のビジネスシューズを履いた後ろ姿は、確かにどこかで見覚えのある姿だった。

「……あんたか、俺をここに呼んだのは」

「……」

こちらの呼びかけに、男は無言を貫いた。いつまでも外を見続けるはずもないだろうから、向こうの反応を待つことにした。まさか耳が聴こえないなんてことはないとは思うが、多分、夕陽が沈みきるまでの時間だろう。

案の定、男の肩から見える夕陽は沈み男がそこでようやく、小さいながらも肩をすくませるような動きをみせた。その動きに、俺はひどいデジャヴュにも似たものを覚え、過去から記憶の波が押し寄せてくるのを感じた。

「夏の夕陽は長くていい。……そうは思わないか」

「その声……まさか、あんたは……」

告げられた声に懐かしさとともに、やはり様々な記憶が次から次へと甦っては脳裏をかすめ、また次の記憶が甦っては脳裏をよぎっていく。

「久しぶりだな」

振り向いて見せたその顔は逆光になってはいても、見間違えることのない懐かしい顔だった。

「親父……」

そう、その顔はかつて日本を出てこの薄汚い世界に飛び込む前、考えの違いから踵を反した父……九鬼真太郎、その人だったのだ。

第81章

西の空に茜色の残光があるだけで、太陽は完全に空の彼方へと沈んでいった。広い室内に佇む二人のあいだにかすかな息遣いをまじえ、沈黙が降りていた。目の前には、全く予想もしなかった人物がいたからだ。

「お、親父、なんでこんなところに……いや、親父が俺を呼んだのか。どうして俺を……？」

かつて家族として過ごしていた頃の記憶の奔流によって、出る言葉もやや混乱気味になっていた。なんだってこんな場所に親父がいるのだ？　そもそも親父はO市に栄転して……いつこっちに戻ってきたのだ？　そんな言葉ばかりが、何度も頭の中でリフレインしていた。

「久しぶりだな。最後に会ったのは確か、五年前だったか……家の前で、綾子ちゃんと一緒だった」

そういう親父の顔は穏やかで、その言葉通り目を細めている表情は、本当に懐かしみを抱いているものだった。親父のいうように確かにそうだけれども、こちらとしては今そんなことはどうでも良かった。劇的な再会なんて、ただ自分の感情を混乱させるだけでしかない。

「ああ、そうだった。だけど今はそんなことはいい。それよりも俺の質問に答えてくれ」

まだ混乱気味の頭で俺は早口にまくし立てるが、親父が穏やかな表情を崩すことはない。

「……驚かせたみたいだな。まぁ、それも無理はないだろうが……こちらとしても驚いたよ。まさか、自分の息子が犯罪者になるなんてね」

さすがにそこを突かれると返す言葉に困るものだが、それは一先

ずおいておくとして、今は親父のことだ。第一、引越しのとき以来、一度だって会っていない俺達は、断絶に近い状態だったはずだ。その親父とどうしてこんな場所で会うのだ。

「俺が犯罪者だってのは否定しないぜ。だがそれは必要があったからで、それ以上でも以下でもない。ただ一つだけいうとすれば、テロリストだってのは単なるでっちあげだ。テロ行為をした記憶なんて、一度もないね。

それより今はそっちが答える番だ。俺達は、なかば絶縁に近い状態だったはずなのに、なんだって突然俺の前に現れるんだ。

ガスを使って俺をここに呼んだのは親父だろう？　あいつは普通に生きてりゃぁ、決して交わることはない人種の人間だ。そのガスを使うなんて……いや、それを知っていたからこそなんだろ？　だとすれば……親父は今、カタギじゃぁないってことだ。違うとはいわせないぜ」

「そこまでいわれてしまうと……違う、といっても信じてはもらえなさそうだな。だが言っておく。誓って私はおまえがまさか、そんな危険な世界に身を投じていたなんて知らなかったんだ。数日前に、テレビでおまえの顔写真が流されたのを見たとき、衝撃を受けたんだよ。まさかそんなはずはない、とね。

それで急遽、前に住んでいた我が家へと向かったがもぬけの殻だ。私はてっきり残るといったおまえが、ずっといるとばかり思っていたんだ。高校卒業後に戻ってくるかもしれないから名義は全ておまえにしておいたし、その際に必要な蓄えも残しておいたからな。だからあのニュースを聞いたとき、我が目を疑ったよ」

「……」

目を伏せて告げる父の態度からは、それが本当であると窺い知れるものだけども、こんな世界に長いこと身を浸かっていると、どうしても本当にそうなのかと疑ってしまって仕方がなかった。もちろん、親父がそんなことに嘘をつくような性格でないのを知っていてもだ。

「……わかったよ。今はそうかもしれないと信じるさ。だが、それでガスを使って俺を呼ぶことへの答えにはなってない。

親父……何か知ってるんじゃぁないのか？　裏で何かが動いてるってことを……」

「ああ、知っている。といっても、全てじゃないがね。

本当のところは、おまえの友人に聞いたというのが正しいんだ。今、おまえが大変な目に遭っているとね」

「俺の友人？」

父から出た思わぬ言葉に、俺はつい口にしていた。親父の言葉をそのまま受け止めるとすれば、おそらく友人というのは田神のことだ。あの田神なら、こうした演出だってしかねない。

「田神……そいつは田神だろう」

そう直感して、思わず少しばかし声を荒げてしまった。

「いや、悪いが名前まではわからない。ただ、今日この時間にここにくれば、おまえと会えるだろうとね。今自分はここから動けないからと言い残し、後はガスと名乗る情報屋に言づてたようだ」

親父の説明を聞いて、ますますそれが田神である可能性が高まった。死んではいないはず……そう思っていたが、やはり田神は死んではいなかったのだ。

「そうか……やっぱりそいつは田神だ。ずっと探していたんだが……そうか、生きてたのか……」

話を聞いて田神が生きていると知ると、途端に肩から力が抜け安堵のため息を漏らした。だが、やはり奴は奴だった。全く田神め……人を心配させておいて、とんだサプライズをけしかけてきたものだ。

「その男と会うことはできないか。できれば今すぐにでも」

興奮気味に問いかけるものの、親父は目をつむり首を振る。

「彼は今いる拠点を今日にでも引き上げるといっていたから、おそらくはもう、そこにはいないだろうな。自分にはどうしてもやるべきことができたと、彼はいっていたよ。

だが代わりに、おまえに会うことができたらこれを渡してほしいといわれている。なんでも今後、おまえにとって重要なことになるに違いないと」

そういってダークグレーのスーツの内ポケットから白い便箋を取り出し、俺に差し出してきた。

「手紙……田神からの……」

重々しく頷いた親父に小さくつぶやく。それをゆっくりとした動作で受け取ると、中に入っている数枚の手紙を取り出して広げた。

手紙を見ると、予想通り田神からのもので、はじめに……という書き出しで、なぜこれまでのあいだ連絡をとれなかったのか、エリナが掴んだ情報、それと今後の俺のとるべき行動について田神からの案、といったものが予想を超える綺麗な字で書き連ねてあった。

『はじめに……これを受け取ってくれているのは九鬼、君であることは疑いようもないことだと思っている。おそらく、ここまでに大変な目に遭っていることだろう。君が指名手配を受けたという情報をもらったとき、すでに遅すぎた。何者かに、俺の部屋に君を匿っているという情報が流された後だったからだ。

だが君のことだから、きっとどうにかして難を乗り越えていることだろう。唐突に君の指名手配が解かれたことからも、何かしらの裏取引がなされたに違いない。同時に君もこっちを探しているかもしれないだろうから、先に告げておきたい。

今俺は、ある者に狙われている。君もこうなる前には、何者かから狙われていたろう？　どうもその連中とは仲間らしいが、決して信用するな。この連中を信じてはならない。もっとも、君のことだろうから鵜呑みにはしていないとは思うが、たとえ何があっても信用してはいけない。』

「信用してはいけない？」

田神からの手紙なんて初めてのことだから、普段書くとすればどんなものになるのかはわからないけれど、文面からは田神にしては珍しく、強い嫌悪にも似た拒絶を感じられた。一体どういうことな

のかと、さらに手紙を読み進める。

『連中は九鬼、君を手籠めにしようとしているんだ。そのためには手段を選ぶことはない。もちろん今こうして手紙を読んでいるのなら、それは強く感じているはずだ。

また連中にとって、君以外の人間はとても不都合があるらしい。その理由は残念ながら、現段階では窺い知ることはできない。一つだけいえるのは、君と関わりを持つ全ての人間を始末するつもりだということだけだ。』

そこまで読み終えると、一枚目が終わる。田神はその連中からの執拗な追撃から逃れるため、しばらく姿を消すと二枚目に書かれてあった。このことから、もう田神があの古ビルに戻ることはないのは間違いない。それと、やつが今どこに潜伏しているのかは、知りようもないというのも。

なぜ俺なのかという疑問には答えてくれていないが、続きに田神がなぜ、ああも寝座を変えていたのかには答えていた。ヨーロッパに移ったあと、俺と係わり合いをもつようになってから度々何者かに狙われることがあったそうで、それで数ヶ月ごとに居場所を変えていたというのだ。これが本当のことであれば、俺はかなり前からこの連中に付け狙われていたことを意味する。

そうか……あの時、田神の部屋で狙撃された理由がわかった。あれはきっと、田神を狙っていたのだ。俺からすればとんだとばっちりとしかいいようがないが、田神からしたら幸いだったわけか。スナイパーからすれば、とんでもない誤算だったに違いない。あの時間、普段であればあまり出歩くことのない時間帯であったことが、良くも悪くも、それぞれの運命を別けた。俺や田神だけでなくスナイパーにとっても。

そして次に書かれていたのは、俺が知らなくてはならないことのオンパレードだった。

『おそらく次に記すことは、君にとって知りたくて仕方のないことだろうと思う。いや、君は知らなくてはならない。奇しくもそれは

俺自身の仕事とも重なってくるが何かあったときのことも考えて、以下のことを伝えておきたい。

島津研究所で君が手に入れたデータは、一部破損してしまっていて修復できなかったり中には何も入っていなかったものもあった。が、いくつかはまだデータが残されていたのでそこから判明したものだ。

まず坂上が研究していたＮＥＡＢ－２からだが、坂上が遺伝子に作用するといっていたろう。あれは正確にいえば遺伝子のもつ繋がりを爆発的に振動させて、大量の熱を発生させることによるり変質させるものしい。』

読み進めていくと、驚くべきことがわかってきた。遺伝子の形が二重螺旋状になったものであるのはよく知られているが、そこに、Ｘ状になっている染色体に遺伝情報が納められたものだ。これらが幾重にも繋がり形作られることにより、数多の生物それぞれの姿やなんかが決定されていくそうだ。

これはたとえどんな生命体であっても例外なくいえることなんだそうだが、遺伝子が結合したり、あるいは変質したりするとそこに必ずその状況に合わせた熱が発生する。その熱量を利用することで染色体のもつ性質が働きはじめ、細胞が活発化することによってそれぞれを組み合わすことが可能になり、多種多様な生命体が生まれる。

人間のハーフやクォーター、犬や猫の種類にしたって理屈は全て同じだ。それどころか遺伝子は同じに見えても、実際には所々で違いもある。核と呼ばれる部分が種の基本情報を司り、二重螺旋状の遺伝子がそのオリジナル（この場合は親と呼ぼう）の掛け合わせによって新しいオリジナルとは似ていても、やはりどこか違う形のものが生まれることで新しい生命が誕生するわけだ。

ところがＮＥＡＢ－２は、この熱量を爆発的にあげるというのだ。遺伝子が動く際に発生する熱がこの動きに比例するならば、逆にいえば、その熱量を超えては思い通りに遺伝子は動かせないことにも

なる。しかも、その発生する熱量にも限界がある。そのリミッターを外すことを可能にしたのが、坂上が開発したこのＮＥＡＢ－２らしい。

つまり言い換えれば、これは全く違う別の種と種を、組み換えることも可能になるというのも意味しているんではないのか。その疑問はすぐに文面にそうであると記してあり、同時に研究所の地下で見た、あのグロテスクな生物達を即座に思い出したことで合点がいった。

ただし手紙には、だからといって必ずしも全ての組み合わせが可能になったわけでもなかったらしく、組み合わせるにはある一定条件が必要だとも書かれてあった。熱量が同じ一定の速度と、共通の膨張反応を見せたもの同士でなくてはならない、とされている。

同じ一定の速度とは、その速度で互いがぶち当たることにより互いの熱量を相殺し合うことで、これが新たな結合に導かれる。宇宙で小惑星同士がぶつかっていき、一つに纏まっていく行程と同じものだと思えばわかりやすい。大きく結びつくことで、さらに大きな拡散を見せることにも繋がる。

共通の膨張反応は、一定の速度でぶつかり合ったもの同士によって結び付いたものの数、とでもいえばいいのだろうか。これらの反応があることで、新たな全く違う生物が生まれていくことを可能にした実験を、坂上は何年も行っていたのだ。ましてや最終的には人間に施し成功させなくてはならないから、何人もの子供を使って人体実験を行っていたというのだ。全く坂上という男は、やはり地獄に堕ちても文句などいえようはずがない。惜しむらくは、奴をこの手で地獄の底に突き落としてやれなかったことだ。

さらに手紙の中で告げられていたのは、進化の過程でより複雑な遺伝子、細胞を持つようになっていった生物は、その一定条件の範囲が非常に個体さがあるため、それに当て嵌まる条件は万に一つでもあれば良いほうで、あるいは億よりも少ない可能性だという。

そんな実験をしていた坂上にとって、沙弥佳はまさに希望ともい

っていいものだったといえる。たとえそれが、三週間に一度はＮＥＡＢ－２を投与しなくてはならなかったとしても。

この事実とともに、このふざけた薬の副作用も記されてあった。何度となく投与された場合、だんだんと恒常性をもつようになるとあったのだ。要するにこれは、ＮＥＡＢ－２にはドラッグと同じような常用性をもたらす効果もあるということだ。

だから坂上はあの観察のためにとっていた日記に、最後にまずいと書き記していたのだ。田神の手紙によると、坂上にとっても沙弥佳が脱走するなんて思いもよらぬ事態だったのが、あの一言からも十二分に読み取れるが、投与し続けた結果は坂上自身にも未知数だったというのだ。

それでも、いくつかの仮説は立てていたらしい。もっとも可能性が高いのは今までの実験と同じく、死亡する可能性だ。とはいっても、行き着いた可能性は結果、ほとんど死に至るものばかりだそうで、そんなものは可能性ともいえないものばかりだ。

けれど、これまでの実験から導き出された可能性と、さらに確証はなくとも理論上有り得るかもしれない可能性……これらをクリアしていれば、あるいは今までにない新たな可能性が見えてくるという。それに至るまでは段階分けされていて、次の段階に進むごとに投与するというプロセスを、田神らしくつらつらと手紙には書かれてあった。

ＮＥＡＢ－２の投与は遺伝子、ならびに細胞分裂の際に発生する熱量を、爆発的にあげるのは説明された通りだ。その熱量は、当然ながら被験者の体温も爆発的にあげていく。被験者はその熱に、体が耐え切れなくなりいずれ高熱で死に至る。

これは誰でも知っていることだが人間は四十度を超える熱が出ると、致死率が急激に高くなる。四十二度に達したまま放っておくとその確率は、実に三人に二人が死ぬ割合だというから、被験者は確実にそれ以上の熱が出ていたはずだ。これを乗り切れるかどうかが、最初の段階だ。

これを乗り切った第二段階では、体温が正常値に戻ったあとで普段となんら変わりなく生活し、ある程度の運動ができるかどうかが焦点になっている。乗り切ったあとであっても、次の日、あるいは明後日の朝にはベッドの上で冷たくなっていることがほとんどだったとされている。普段の生活においても、手足を動かしたり食事をすれば内臓が活発化することで体温が上昇するので、そんなちょっとしたことでもすぐに不安定になってしまうわけだ。

そしてここからが第三段階になる。ここでは安定後にどういう反応を見せるのかが焦点になっていて、ここまで残ったのはわずかに六名しかいなかったらしい。データから判明したのは、この六名が見せた反応は、それぞれで全く違ったということだ。

ある者は急激に老化が進んだり、ある者は突然奇行に走って自殺、またある者は飢餓状態に陥って衰弱死したりもした。また、ある日突然それまでの記憶を失い、記憶喪失になって脳みそが零歳児と同じかそれ以下になって動くことすらままならなくなった者もいたというから驚きだ。

これはつまるところ、第二段階の延長ともとれなくもないが段階分けされていることから、ここに至るまでなんらかの理論があってのことなんだろう。しかしその辺りの詳しい経緯は、手紙には書かれてはいなかった。

これらの異常を見せなかった状態で、初めて第四段階になるとされていた。そしてここまでにたどり着いたのは、沙弥佳たった一人ということになる。だからこそ坂上はＥＶＥなどと、ふざけた呼称をつけたのだ。

だがすでに知っているように、問題はないと思われた沙弥佳にも三週間に一度という制約がついた。坂上のレポートには、これが最終段階である可能性が高いと書かれてあったらしく、坂上……ひいては島津の連中が求めた不死への第一歩に繋がると見ていたらしい。

全く、どうしようもないといえばどうしようもない思想ではあるが、気になることもあった。通常、次の段階に進むまでに十日前後

の期間を設定してあったのに、その倍の時間を使い、さらに再び投与されたにも関わらず何も起こらなかったというのは、少なくとも沙弥佳がそれらを克服し体内で、何か免疫といっていいのかわからないがそれに似たものを持った、こうとれるのではないだろうか。

やはり同じことを坂上も思ったようで、沙弥佳の血液を採取し、これを培養していたようなのだ。今まで到達することのなかったところにまで到達した者の細胞を使えば、そこから別の実験にも使えるはず……こう考えるのは科学者なら当然のことだ。ましてや沙弥佳を最高の研究成果だと宣(のたま)うような奴だ、嬉々として血液を採取して悦になっていたに違いない。

『さらに次のことは俺にとっても少々信じがたい部分はあるけれど、坂上の持っていた研究データを見ると最終的な答えは、これまでにない新しい遺伝子を創った、こう結論できるそうだ。

遺伝子組み換えだとか、そんなものの話をしているわけではない。ある研究所に依頼して専門家にデータを分析してもらったので間違いないだろうが、あのデータからはこの世のありとあらゆる遺伝子のパターンとは、全く別のものになっているということだ。

言い方を変えれば、進化したともいっていいかもしれない。この世のいかなる生物とは違うパターンであるといったが、進化の到達点といわれる人間の遺伝子パターン……ヒトゲノムと呼ばれるものだ。このヒトゲノムとは全く違うパターンを持ち、かつ、より複雑化していたと分析官がいっていた。念のため、他の研究所にも同じ依頼をしてみたところ、やはり得られた解答は同じだったことから、間違いない。』

「進化……だと？」

思わずそう口にしてしまわざるをえないほど、手紙に書かれていた内容に驚愕した。眉唾だとか、頭がどうかしてるだとか思っていた坂上の研究が、まさかそんなところにまで話が飛躍するだなんて、とても考えが及ばなかった。

俺が手紙を読みはじめ静かにそれを見つめていた親父も、なんの

ことだといわんばかりに眉をひそませている。手紙の内容になにが、とでも思っているのかもしれない。

それだけじゃなかった。採取、培養された血液からはまた違う薬が造られたようで、これは他のいくつかの研究所や一部がレポートとして世に発表されていると書かれてあるのだ。これは一年数ヶ月前までいた、イギリスでのことがすぐに記憶の彼方から引き出されてきた。確か、ヒトゲノムの謎が解けたとか……そんな内容の論文だったはずだ。

あのときも、日本の研究チームによって解明されたと聞いた。だが、まさかそれが坂上の研究チームだったとは……。

ここまで読み進めたとき、ここでもまた一つ謎が解けた。坂上がゴメルと呼んだ、あの化け物のことだ。

あれは、採取した血液を使って生み出されたものだったのではないのだろうか。あの化け物を坂上は、やはり沙弥佳に次ぐ成果といっていたので、そう見ていい気がする。

けれど同時に、あまり考えたくないことまでわかってしまった。そうだとするなら、あのときベケットの奴が欲しがっていたサンプルは……。

ゴクリと、無意識のうちに喉を動かし唾を飲み込んでいた。あのとき手にした瞬間、思わず魅入ってしまったのは、あれが人間であったものから、人間を超えたものになったものへの何かを、俺の遺伝子が感じとったとでもいうのか。

俺は小さくかぶりを振った。いや、だとしても手放したくないとまで思ったことへの説明にはならない。あれはきっと、そんな理由なんかじゃない。別の、もっと別の理由があったからに違いない。単なる気の迷いだ。絶対にそうなのだ。

いつもなら気のせいだと受け流すことなのに、俺は必死になって否定した。自分自身なぜそうまでして否定しようとするのか、理由はわからないが。

『また、いくつかの機関へサンプルとして流された血液は薄められ、

そこで他の薬品と混ぜ合わされて別の薬という形で世に出されたものもあったようだ。今となっては、それらを確かめる術はないが。

だがその中で気になったものがあったので、書いておく。以前イギリスにいたことのある君だから、もしかしたら噂程度には聞いたことがあるかもしれないが、ヘヴンズ・エクスタシーと呼ばれたドラッグの噂だ。このドラッグを巡って、アンダーグラウンドで争いが起きたこともあるほど希少価値が高かったそうで、一説にその効果は、ヘロインも足元にも及ばないとすらいわれたりもしたらしい。

その劇薬ぶりは、たった一度の吸引で人間を廃人にできるほどだが、そのあたりは定かではなさそうだ。ただ少なくともたった一度だけでも、えもいわれぬ壮絶な快感と生涯、後遺症に悩むことになりかねないレベルだというからとんでもない代物だ。話によれば、一時間おきに痙攣した直後に仮死状態に近い状態になって気を失い、突然息を吹き返すと、また仮死状態になる……といった症状を見せるのだとか。

しかも驚くべきことだが、このドラッグも採取された血液から生成されたもので、ヘロインとの合成によって生み出されたものだ。

このドラッグはたまたま、ギャングに関係している研究者の手に渡ったことから、そんなものが生み出される結果になったけれど、別の研究機関に渡ったものは新薬の開発に使われ、人体に急激な変化をもたらしかねない危険な薬として認知されてもいるらしい。ちなみにその研究自体はすでに、島津によって実験されている。どういう理由でその事実を隠蔽したうえで、他の機関に血液を流したのかは不明だ。』

その内容を目にしたとき、以前、俺はそいつに出会っていると唐突に思い出した。忘れもしない。もう七年近く前になるが青山たちと共に向かった、あの蒲生の家でのことだ。運よく難を逃れたことはまだはっきりと記憶に残っている。

手紙の内容から思い出したのは、このとき蒲生宅の一室に落ちていた小さなガラス瓶に入っていた、白い粉のことだ。後に青山が語

っていたことと、どことなく似ている気がするのだ。おそらくは十中八九、あれは島津が八年前におこなった実験と研究の成果だとみていいだろう。

ヘヴンズ・エクスタシーと呼ばれたドラッグに関してもまた然りだった。イギリスにいたときに出会ったジャンキーが、このドラッグの禁断症状の効果とよく似た症状を起こして、事切れたかのごとく動かなくなったのを見たことがある。あれこそデニスが口にしていた、アンダーグラウンドで流行ったというドラッグだったのだ。たった一度の吸引で廃人という触れ込みは、嘘偽りなしというわけか。

生涯、後遺症を残すということは、あのときに出会ったジャンキーは一生あんな具合なのだろうか……ふと、そんな考えが頭の中に浮かぶ。ヘロインあたりでよせばいいものを、余計なものにまで手を出すから悪いという持論はこれっぽっちも揺るがないとしても、一生あのままという気持ちはどうなんだろうかと、柄にもないことを考えてしまった。

けれど新薬作りにしろ、ドラッグとの合成にしろ、血液のサンプルがそれらに幅広い用途でもって扱うことができるのは間違いない。今井の奴があのとき突然苦しみだしたのも、ドラッグとしての摂取によって急激な廃人化や死に至る原因も、元を辿っていけば、全てＮＥＡＢ－２にぶちあたる。

手紙の内容を要約すれば、この薬が遺伝子のメカニズムを急激に変えようとする作用をもっていることから、むやみやたらに摂取していいというものでなく実際には、ごく限られた者にしか使えない、ということだ。そして、仮に適応することができたとすればそれは、人間の形を持ちつつも、人間とは違う別のものになってしまうかもしれないという可能性だ。

坂上に飼われていた、あのゴメルとかいう化け物がまさしくそれに当て嵌まる。多分、奴はどことなくゴリラを思わせる外見的特徴をもっていたことから、元々はやはりゴリラだったのではないかと

考える。つまりあの化け物は、坂上の数少ない成功に近いサンプルだったわけだ。

おまけに島津製薬のエージェントだった松下薫も口にしていた、不死の研究に確実に役に立っていたにちがいない。俺自身、あのわずかな時間のあいだに、死んでもおかしくないはずの攻撃から再生し立ち上がってきた瞬間を、何度も目撃したことからもそれは疑いない。もっとも最期には、生物としての理性はおろか、脳みそすらどこにいったのかわからないという具合に奇形化していったのも確かだが。

ともなると、進化の先にあるのが不死ということになるのだろうか。近年の研究で、生物は生きるために老いる、という研究論文が発表されテレビやインターネットで見た記憶がある。詳しくは見なかったのでなんともいえないけれど、確か生きるために、同じ遺伝子の細胞を堪えず生産し増やすことで成長させるのだとあった。逆説的にいえば、単細胞生物こそが長寿であり、不死なのだということもいえるのが面白いものだと思った記憶がある。

もっといえば死というのは、生きるということに関し崇高なプロセスの一つであり、死ぬことまでが確かな生ともとれる。こういったプロセスから見れば、多細胞生物である人類が不死を目指そうとするなんて、ちゃんちゃらおかしい話ではないか。

自然界には必ず、あるメカニズムが存在しているのは誰しも知っていることだ。これは細胞にもいえることで、古くに生み出された細胞がその生物の核たる部分を作り、次にそこから生まれた細胞が古い細胞を守るために、さらに新しい細胞を作る。そこで生まれた細胞がまた前に生まれている細胞を守るために新しく……これは、単細胞生物以外全ての種にいえるプロセスだ。

しかし細胞分裂にもエネルギーがある。この細胞のエネルギーは同時に、その生物にとってのエネルギーともとれるものだがこれを発散するとともに、次の新しい細胞を作るためのエネルギーの確保をするために、他の種の持つエネルギーを奪う。だからこそ何もし

ていなくても、腹が減ったりするわけだ。次々と体内の、目に見えないレベルで細胞分裂を行うためにだ。

こうしてある時がくると、古くに生み出された細胞たちは生成を止める。これが一般的に老化が始まるとも呼ばれる時期になるのだろうがこうしなくては、その生物はいつまでも細胞が分裂し続けるために、さらに多くのエネルギーを必要とすることになり、古い細胞のエネルギー維持のために新しい細胞は弱って分裂できなくなってしまうからだ。

こうして生産をやめた古い細胞たちに構うことなく、新しい細胞たちはまだまだ過剰に生産を続けエネルギーを作りだそうとする。そして古い順番に細胞は新しく細胞を生成しなくなっていき、細胞としての活動をやめていく。

こういった細胞が増えつづけると、エネルギーの消費と、そのための生産が追いつかなくなっていき、ついには限界がくる。限界が全ての細胞が生産を止める。もうエネルギーを作っても需要がないからだ。

そしてこの状態こそが死、ということになる。これが生という一つのプロセスなのだと、研究者がいっていた。

これらの考えとあのゴメルの例をとってみると、おかしなことに矛盾しているようで互いの欠陥を補っているようでもある。爆発的に熱量をあげるということは、言い方を変えると遺伝子は当然だが細胞の活性化にも繋がることなのだから、理論的に考えてみれば確かに正論であるかもしれない。なんせ、本来なら活動しなくなるはずの古い細胞にも常にその熱量、つまりエネルギーが与えられつづけるわけだから、細胞は若さを保ったまま分裂し続けることになり、新しい細胞も同様に常にエネルギーを保ち続けることが可能だ。そうすれば、ずっと生き続けることもまた可能だということになる。

俺個人の考えでは、松下薫がいっていたことと同じで、家族や恋人がいなくなり、友人や知人が死んでいなくなるのを傍目に見続けていかなくてはならないなんて、それこそ生き地獄に近いものがあ

るかもしれない。
　やはりこの世に生まれた以上、地球の一生物として歳とって死んでいきたいものだ。こんな殺し屋稼業に就いている分、余計にそう思ってしまう。
　そんなことを考えてめくった手紙は、もう最後の一枚になっていた。
『さて、最後になったが九鬼、これから君がやっておいたほうがいいと思うことを書いておきたい。君はこれから、ある人物を始末するよう言われたと思われるがどうだろう。もしまだであるなら、思い止まってほしいんだ。
　ここのところ二人の要人が暗殺されたニュースを耳にした。多分に君が関わったことだろうと思う。だが、これは連中の罠だ。君はこの二人がどういう人物だったか知っているだろうか……二人は、世界を股にかけた事業をおさめた大富豪であり、日本に限らず世界経済に影響を及ぼしかねないほどの権力者だ。この事実に、どうも世界中のスパイがここ日本に大挙して押し寄せてきている。
　シナリオの最後に、君をあぶり出す作戦が共同で練られたんだ。まさか、スパイたちがこんな形で結託することになるとは夢にも思わなかったが、とにかく二人に関わった三人目の人物を囮にして、犯人を捕まえる気でいるのは確実だ。世界経済に深く関わった者を暗殺した者となれば、この世界では知る者はいないといってもいいくらいの有名人になるからな。
　そこで俺は、君に一つの提案をしたい。君は今から毛利医師のところに行け。すでに彼には話はつけてあるし、連中の中でもかなり中立に近い立場にいるから、少しのあいだ君を匿ってもらうことは可能だ。
　それと、俺のことは放っておいていい。この混乱に乗じて、仕事を片付けたい。なにかあれば、すぐにでも毛利のところに連絡がいくようにもしておいたので、あるいは仕事が片付き次第、君とも合流できるかもしれない。』

手紙に、連中というのと毛利という言葉が出てきたとき、どうしようもなく嫌な予感があった。連中の中で、ということはつまり、毛利がその中に属していることになるが、毛利が属しているのは、あの武田とかいう奴を筆頭にしたコミュニティーしかない。つまり、俺を今回巻き込んだ張本人は武田ということになるのではないか……。

ゴクリと喉が動いた。そうだとすれば、俺は奴によって良いように転がされていたことになる。

『そうそう、少々お節介かとも思ったが今回は君の父親に宅配人を頼んだ。連中の手の及ばないところが見つかるまでのあいだ、親父さんは毛利の病院近くにあるホテルに滞在してもらうことにした。数日のあいだは、そこから出歩かないようにいっておいたのでおそらく大丈夫とは思うが、これは連中が不都合になったときに脅し付けることを想定してのことだ。だから、あまり悪く思わないでほしい。後はなにか聞きたいことがあれば、その都度、毛利を通してくれれば何かわかるかもしれない。』

なるほど。親父が突然姿を見せたのは、田神の計らいだったのか。手紙の一番下に、追伸と書かれてあるところに目をやったとき、文章を読んで思わず目を見開くようにしかめた。

『言い忘れていたので、追伸として締めておく。

連中のリーダーらしき人物に出会ったら要注意だ。そいつは全身黒づくめの、糞掃衣（ふんぞうえ）のようなものを羽織った奴だから、すぐにわかるはずだ。この人物にだけは、絶対に信用してはいけない。』

手紙には、最後にこう締めくくられてあった。糞掃衣……そういわれて思いついたのは一人だけだ。

奴だ……。俺を警察に売り、助けだそうなんていう茶番をしてみせた、あの独特な雰囲気を持った男。武田というのは、あの男にちがいない。

俺は知らず知らずのうちに、手紙の端をきつく握りこんでいた。いつだったかエリナのやつが、近いうちに武田に会うと口にしてい

たのを思い出し、確かにそうだったと冷静に考えながらも、どこか頭の奥ではチリチリと怒りが込み上げてきていたからだ。

……なるほどな。武田の奴は、よほど人をおちょくるのが好きらしい。茶番もいいところだ。

面白い……そっちがその気なら、もうこっちも黙ってはいられない。何がなんでも貴様を追い詰めて、この手で地獄に送ってやる。覚悟しておくがいい。

田神からの手紙に従って、親父の身の安全を優先するために毛利の病院にほど近い、高級感のあるビジネスホテルへと赴いている。おまけにビジネスホテルだというのに、最上階の部屋は下手すると二流のシティホテルのスイート並といってもいいほど広く、設備も整っていた。

「……行くのか」

「もちろんさ。罠だとわかった以上、こちらも何もしないわけにもいかないからな」

そうかと俯かせた親父の表情は、諦め半分、心配も半分といった複雑そうな顔だ。それも仕方ないだろう。自分の息子がなんらかの大きなことに巻き込まれていると知ったら、人の親としてなにも思うなというほうが無理というものだ。

「……おまえは強いな。私とは大違いだ」

「なにが」

「おまえは遥子の最期を看取った。しかもいまだ行方不明になった沙弥佳の身を案じて、一人で探しつづけてる……私にはそこまで大胆な行動はできないよ」

力なく笑った親父は小さく肩をすくめると、おおげさにかぶりを振ってみせた。

「親父は……親父はまだ母さんのことを？」

「ああ。まだ完全に受け止めきれていないんだ。ようやくさ、遥子のことも見なくてはならないと思えるようになった。

だが、それでもまだ昨日のことみたいに、遥子が死んだ日のことを思い出す。受け入れようとしても、思い出すたびにそれが邪魔して遠回りして逃げる日々さ」

「親父」

父が見せる様は、やはり俺とは違い弱々しさや落胆を影に感じさせるものだった。これが別の、全くの赤の他人であれば落ち込むなとでも声をかけるところだが、家族としての情からなのか、そんな父の姿を見て、どう声をかけていいのか俺にはわからない。あるいは、そんな自分を一喝してもらいたいのかとも思いはしても、やはり声をかけにくく、タイミングを逃してしまう。

「だが……こうして五年ぶりにおまえと顔を合わすことがてきて、本当に嬉しかったよ。これも私にいい加減現実を見つめろという、神からの思し召しかもしれん」

神、か。そんなものはいないぜ、親父。声にすることなく、心の中でそうつぶやく。当たり前のことを口にしたってなんの意味もないし、前向きに取り組もうとしている人間の出鼻をくじくような真似はしたくない。

もちろん、親父だって本気でそういっているわけではないはずだ。そもそも宗教になんか、これっぽっちも信じていなかったしこれからもそうだろう。きっと、クリスチャンだった母のことがあってからこその台詞だったに違いない。

「ところで親父は仕事はどうするんだ。ここに何日かのあいだ泊まることになるんだから、会社には一言いっておいたほうがいいんじゃないのか」

「大丈夫だ。しばらくのあいだ、有給をとったからな。ことが落ち着くまでは、このホテルでゆっくりと休養にするさ」

遥子が死んで以来、纏まった休みは初めてだと付け加え、オーバーリアクション気味に両手を上に思い切り伸ばしてみせる。

「ならいいが……。まぁいい。時間ができたらまた来るから、勝手にホテルからチェックアウトはしないでくれよ。それと出かけるときは、どんな些細なことでも毛利か俺の番号にかけること。絶対に忘れないでくれ」

「ああ」

俺はもう一度強く念を押し部屋から出ると、足早にホテルを後にした。

第82章

親父と別れ毛利の医院を出たときには、すでに日もとっぷりと暮れた時刻になっていた。

これも仕方ない。まさか、医院にエリナのやつがいるとは思いもよらぬことだったからに他ならない。

エリナの話によれば、俺と同様に拿捕されかけたことで田神との接触が遅れ、本来とは別のルートを使うことでようやく田神と会うことができたらしい。手紙にもあった通り、二人とも何者かから狙われていたのだ。

しかしその連中の正体を告げられると、エリナは髪を振り乱し必死にそれらを否定した。それもそうだろう。なんせその黒幕ともいうべき人物である武田からの差し金であったのだから、奴を信頼していたエリナが信じる気になど到底なれないのも当然だ。

それでも田神がそう結論づけたうえに、俺自身に起こったことから考えてもそいつは疑いようはないことで、嘘だといえと、なかば脅し付ける口調で凄んだエリナに、ただ本当のことだというしか俺にはできなかった。

愕然として呆けるエリナを、毛利がしばらく休めと空いたベッドにまで肩を支えながら寝付かせた。連れていくときに、さりげなく手にした注射器を俺は見逃さなかった。きっと軽い麻酔薬をエリナに打ったんだと思われた。

「それにしても……とんでもない話だな」

エリナを寝付かせ戻ってきた毛利が、不意にそういった。

「どうかな。俺ははじめから武田の奴は気に入らなかったから、むしろ、やっぱりなって気持ちしかないぜ。奴はどうにも信じれるようで、どこか胡散臭いところがあるからな」

「そうか……おれには武田がそんな人間には思えなかったんだが」

見る目がないなといいながら、毛利は少し早めの締め作業にはいる。

「だがいいのかい。あんたは俺を匿っちゃくれてるが、別に仲間ってわけじゃない。いくら田神に頼まれたとはいえ、律義にそいつを守る立場じゃぁないと思うんだがな」

「それはそうだが、田神の話が本当であれば、おれは間違いなく武田から狙われることになる。それが匿っていようといまいと、関係なくね。だったら、頼まれたことはきちんと守るさ。

それに、たしかにおれは戦闘訓練を受け殺人の技術があるけども、あくまで医者だ。匿わなくては確実に死ぬだろう人間を、みすみす放っておくことはしないさ」

そういって肩をすくめてみせた毛利であるけれど、武田から裏切られたというショックは、少なからずは確実にあるように感じられた。

俺なんかは、どちらかといえばすぐに人を裏切るタイプだと自分では思っているので、信頼していた人間に裏切られた気持ちというのがいかなるものなのか、計り知れないものがある。

だってそうだろう。過去に綾子ちゃんを裏切り、沙弥佳も裏切った。そのうえ、人を裏切ってなんぼの、こんな商売をしている人間にはそいつをわかれというのが無理な話なのだ。まぁ、毛利もわざわざ俺からの同情なんて、欲しいなどとは思ってはいないだろう。

「ま、あんたがそういうんなら俺はもう何もいわないよ。

ところであんた、武田について何か知らないか？　なんでもいい。どんな些細なことでもいいから、何か知っているなら教えてくれ」

「おれが知ってることなんて、大したことはないよ。あくまで武田から医者としての腕を買われただけだからな。だが、おれが勧誘された経緯くらいは話せる」

「そういうのでも構わない。是非教えてくれ」

とにかく少しでも武田のことを知っておきたい俺は、毛利の言葉に大きく頷いて部屋にある使い古された椅子に腰かける。その様子

を見計らい毛利も自分の椅子に腰かけると、白衣のポケットからくたくたのタバコの箱を取り出し、一本手に取った。
「おれが日本を飛び出して戦場医師として働いていたのは前に話したな。それが今から十五年ほど前のことで、たまたまそこに一人の少女を助けてほしいと連れてきたんだよ、武田のやつがな。それを助けたところ、武田からこういうことをしているから、君も参加しないかと持ち掛けられたのさ。
結局、外国人は一斉退去を命じられたことをきっかけに、おれは日本に戻って武田のところにいったというわけさ。それが十三年くらい前のことだったな」
毛利はくわえたタバコに火をつけて、煙を思い切り吸い込んだあとに鼻からその煙を吐き出した。
「俺は以前、武田の野郎からこのコミュニティーに入るための試験とやらをやらされたが、あんたはそういった類いのものはやらされなかったのか」
あの廃棄工場で背中を撃たれたことを思い出しながら尋ねると、毛利は首を振った。
「いいや、おれのときにはそんなものはなかったな。そもそも、そんなこと自体やるだなんてことが初耳だったくらいだ。
武田にとって九鬼という人間は、何かよほど試したいことがあったのかもしれないな」
「俺だけ特別待遇だなんて、嬉しすぎて涙が出ちまいそうになるね」
厭味なくらいに思い切り皮肉っていうと、毛利は苦笑しながらはかぶりを振る。
「武田はあまり他人に関心を持たないやつだからな。そういった点では、間違いなくおまえさんは特別だぞ。いまにしてみれば、随分前から気になる奴がいると口にしていたのを幾度か聞いたことがあったんだが、もしかしたらあれは、おまえさんのことだったのかもしれないな」
「随分前からだって？　それはつまり……もし武田のいう気になる

奴ってのが俺だとしたら、ずっと前から俺は武田の奴からマークされていたというのか」

思わず眉をしかめ、早口にまくし立てる。

「あくまでも推測でしかないがね。たが基本、武田はコミュニティーに入ろうとする者を拒んだり試したりなんてことはしないはずなんだ。なのに、おまえさんにだけは試したり、今回のような色々と面倒になることをやったりと、あらゆる点で異例のケースばかりだ。これも単なる推測の域をでないが、武田は君のことを、仲間として迎え入れなくてはならない理由でもあるのかもしれない。つまり、本来であればそうしたくはないが仕方なく、といった具合でね」

「どういう意味だ、それは」

「そのままの意味さ。どうも、そんな印象を受ける。根拠はないが、あまりに聞いたことがないようなことばかりだからな」

毛利は軽く首を振り、タバコを口につける。

「……昔から、時折、妙な連中に付き纏われることがあったんだが、それも関係あったんだろうか」

毛利の言葉からはどこまでが真意なのか読み取れないこともあって、ついそんなを漏らす。毛利はわからないとしつつも、どこかでそれらが関係していないとも言い切れないと告げた。

「結局はわからないことだらけというわけか」

「いいや、すべてというわけでもないぞ。少なくとも九鬼にとって……おれにとってもそうだが、武田が敵であるということがわかっただけでも良いといえるだろう。十分であるとはいえなくとも、まだいくらかはマシだ」

そういうもんかねと適当に相槌をうちながらも、毛利が武田のことを敵だとしたことに内心では安堵した。別にそうというわけでなくとも、なんとなく同じことを考えに行き着いている人間がいたことに安心感を覚えたのだ。武田の野郎と初めて会ったときに抱いた、あの不思議な感覚が忘れられないでいただためだった。

初対面の、それも明らかに同じ世界で暗躍しているらしい奴をは

なから信用するのは、この業界では命取りでしかないはずなのにどういうわけか、あの野郎にだけは最初から妙な安心感を持って接していたのだ。あれを人徳とでもいうのであれば、そうなのかもしれない。だが、俺が初めての人間にそんな感情を抱くなんてのはありえない。ましてや、この業界人になど……。

以前、田神があの連中の目的がどうだといっていたのを思い出す。現時点での連中、ならびに武田の目的などはわからないけれど、連中がだんだんと集まり一つの纏まりになっていったのには、なんとなくだが理由がわからなくもない。おそらく、連中の大部分は武田に、なかば心酔する形で集まってきたのではないかと思うのだ。

我ながら、いまひとつ説得力に欠けるものだとは思うが、不思議と信憑性はあったりするのだ。武田のもつ、あの独特で、えもいわれぬ人を無条件に安堵感を与える雰囲気を前にしたとき、人に対しまず疑うことから始める俺ですら雰囲気に完全に呑まれていたことから、そう考えるのは当然といえる。

「ところで、あんた今、武田の奴が一人の少女を連れてきたといったが、詳細はわかるかい」

「いいや、全くわからない。十五、六の歳で、ブロンドの髪をしていたということくらいしか覚えてないな。戦場で被弾したといっていたが、今となってはそれも本当かどうか、だな。

弾を摘出したあと一応は処置はしておいたが、そこからはずっと少女に武田が一睡もすることなく付きっきりだったのも覚えてるな。そこで話しかけたところで、誘われたんだよ」

「なるほどな。で、その後そいつとは会わなかったのか」

「残念だが、おれが日本に戻った頃には亡くなっていたらしい。元々体が弱いという話だったから、それが原因かもしれない」

頷きながら、その少女と武田がどんな関係だったのか考えを巡らせる。武田の出生がわからない以上、そこから推測はできないが湾岸戦争時に現地にいたそうたがら、そのあたりから何か探れないものか……。

そういえば、武田のことを教えてくれたのはガスだった。思えばガスが追われなくてはならなくなったのは、もしかすると武田のことを探ったために奴のブラックリストに名前が載ったのかもしれない。おまけに、ガスと俺は顔見知りというのもあるから十分にそれは考えられる。

「まぁいい。とりあえず俺は、これから会っておきたいやつがいるから少し出かけてくるぜ」

そうして俺は情報収集するべく、毛利の医院を出た。とにかく、武田の情報を少しでも集めなくてはならない。

地下鉄に揺られ俺が向かったのは、約五ヶ月ぶりとなるジュリオの店だった。最後にきたのは、それこそ島津研究所に乗り込む日であったのが思い出されるが、色々とありすぎて、たった五ヶ月しか経っていないのかという、妙な感慨深さがあった。

もちろん、そのときにあった修羅場のことも忘れてはいない。実のところ、この時のこともあってかジュリオのところに行くのは、少しばかし行きにくいきらいがあるのだ。だがしかし、自分の仕事をなんとかしなくてはならない以上は、そんな甘ったれたことをいってはいられない。

……いや建前上はそうでも、心のどこかで俺はそれとは全く違う、別のことも考えていたのは否めない。もしかしたら彼女に会えるんではないかという淡い期待と、馬鹿なことは考えるなという葛藤があったのだ。建設的に物事を考えれば、わざわざジュリオのところに行く必要はないのだから、そんな下心が少なからずあっての行動だというのは素直に認めよう。

店にほど近い駅を降り階段をあがると、いつもはあまりいない店の前の通りは仕事帰りのサラリーマンやＯＬで溢れていた。午後九時に近い時間でこの暑さなのだから、今夜もまたいつもの通り熱帯夜であることは確実だろう。皆そんな暑さにやられて、けだるげに歩いている。

かく言う俺にしても、通気性のよい薄手の灰色がかったスラックスに、無地の白いタンクトップの上からTシャツ一枚という、簡素な出で立ちだ。当然、今は銃などは身につけていなかった。銃がないと、どことなく勝手が違ったりも感じるが、まぁ、なんとかなるだろう。

「久しぶりだな、ジュリオ。繁盛してるじゃぁないか」

まだいい時間帯ということもあって満員の店内に入ると、従業員の女の子がテーブルが空いていないと案内してきたのを手で制し、厨房で料理を作るジュリオに声をかけた。

「おお、クキさーんじゃない！　どうしたの、どうやったの」

「どうもこうもないさ。ま、色々と大変だったがこの通りさ」

やはりいつものように、ジュリオが店内に響く馬鹿でかい声で俺を迎え、握手の手を差し出してきたのでそれに応じながら答える。

「ニュースを見たとき、ほんと心配したよ」

そういうジュリオに苦笑し、肩をすくめた。

「ところで、今いいか。ちょいとばかし、あんたに聞きたいことがあるんだ」

これ以上ジュリオのペースに合わせていると、都合の悪いことも口にしかねないので、そうそうに話を切り上げ声のトーンを下げながらいった。するとジュリオはすぐに察し軽く頷くと、こっちよと顎を使い店の奥へと案内した。

案内された先はロッカールームのさらに奥にある部屋で、普段、従業員もほとんど使わないのだろう、床や物の上は当然、積もることなどほとんどない壁にまで埃がはびこっていた。口や鼻を覆わなければ、すぐにでも気管支をやられてしまいそうなほどだ。

「悪いな、わざわざ。早速だが、いくらか情報を買いたい。この何日かのあいだに何か変わったことはないか」

「クキさーんならタダでいいよ。なんたって、命の恩人だからね。

最近あったのは、財界の重鎮が暗殺されたって話を聞いたくらいだよ。あとは、クキさんのことがテレビで流れてたのは……まぁ、

いう必要はないか」
　いつもはどこか片言なジュリオの言葉が、こういったときだけはなぜか流暢になるのが可笑しい。しかしジュリオは特にないとしながらも、昔のアコギな商売柄か、いくつか気になることがあるという。
　まず一つ目は、重鎮といえるほどの人物であるならば、もっと大きく取り上げられてもおかしくなうはずなのに、ほとんど報道されることがなかったのには疑問を感じたという。
　まぁこれに関しては構うことはない。始末をつけたのは俺だし、報道を制限した連中もわかっているのだ。俺が気になったのは、次にジュリオかま口にしたことだった。
「一番気がかりだったのは、二人目が殺されたとき、死体に二つの同じライフルの弾によって穴があいていたというのだな。初め聞いたときは、はじめから二発撃たれたのかとも思ったけど、そうではないらしい。どうも、違う方向から撃たれたって話だったんだ」
　ジュリオの話を聞いたとき、俺は眉をひそめながら目を見開いた。確かに二人目といわず、二人とも暗殺に使ったのはライフルだったのは間違いない。だが、ともに放ったのは一発だけだった。二発というのはおかしいのだ。
　しかも、ライフルの暗殺において二発というのもおかしな話だ。そもそも急所を狙っているのに、どうして二発も放つ必要があるというのか……二発目以降は、失敗したときだけのことだと考えるのが普通だ。そうでなければ、スナイプする意味がない。
　ここから導き出されるのは俺とは別に、別の誰かがターゲットを狙っていたということに他ならない。財界の重鎮だというくらいだから他の殺し屋に狙われることがないとはいわないが、だとしてもわざわざ俺に全く気付かせずに事を終えようとしたなんて、どう考えてもおかしなことだ。全く同じ弾を使うというのも、何かを暗示している気がしてならない。
　ジュリオの話では、ほとんど同じ方向から風穴を開けられたとい

う話だから、俺よりも後方から狙撃したことにもなる。もし、こちらよりも前の地点から狙撃したなら俺が気付かないわけはないのでそう見ていいが、弾の食い込み具合を割り出せることなかったことを考えると、相当後方からである可能性が高い。

なにより、角度もそうだが全く違う場所から正確にターゲットに対して二つの風穴を同時に開けるなんていうことが、一番ありえないことだ。二人が連携し、正確に連絡し合っていたのならまだしも説明できる。しかし、今回の件はそんなことは一切していない全くのぶしつけ本番の上、互いに顔も合わせたことのない奴がバディなのだから、これは不可能に近い。

殺すにしても、俺が狙っているのを知っていたにしろ、そのタイミングを合わせる必要は全くといっていいほどないし、向こうにだってなんのメリットもないだろうから、この話はなんかの間違いなんではないのかと疑ってしまう。

「だけど、この情報はすぐに続報が出てからというもの、一発だったということに差し替えられていたんだ。まるで、何か隠蔽しているようにすら思えたね」

ジュリオの言葉に耳を傾けながら、頭の中では丸っきり違うことを考えていた。二発だった弾が一発に差し替えられたことも気にならないわけではないが、それ以上に気になる……もっというと思い出したことがあるのだ。スナイパーといえば、佐竹とやり合った際にも、奇妙な行動をとった奴がいたのを思い出していたのだ。あの時と今回、なにか繋がりがあるように感じて仕方ない。

この業界は広いようでいて、実際には狭かったりもするので、完璧を目指すのが当然のこの世界において、こんな完璧に見せてはいても、全くの意味不明ともいうべき行動をとる輩はあまり多くはない。さらにスナイパーともなると、なおのことだ。

「そうそう。あと今晩、都内のシティホテルで財界の重鎮が主催するパーティーがあるよ。何人か、きな臭い噂のある人間がきているから、何かわかるかも……。

あとは……これは関係ないかもしれないけど、何日か前にロシアの国境付近の森で、不審火による火災があったという話があったよ。全く人気のないところなのに、数ヘクタールに及ぶ火災になったらしいけど、火がつく要因が全く見当つかないって話だったな。人為的以外には考えられないってね」

後者は職業柄、少しばかし気にならないわけではないが、確かに関係なさそうなのでこの際は放っておくとしよう。それよりも気になったのは前半のことで、おそらくジュリオのいうパーティーというのは、今晩俺が片付けなくてはならない仕事のことを指しているんだと思われた。皮肉にも田神が罠だといった催し事に、首を突っ込まなくてはならないかもしれないのだ。

「わかった。ありがとうよ、ジュリオ」

俺はジュリオの肩に手をおいて頷くと、財布から福沢諭吉が印刷された札を二枚とって、ジュリオのズボンのポケットに突っ込んだ。前に田神が、物入りになるかもしれないと渡してくれた軍資金の一部だ。

「ありがとね、クキさん。だけどそのパーティーには……って、クキさん」

そういいかけたジュリオを尻目に俺は大丈夫だといって、早速行動を開始するべく埃だらけの部屋を出た。多分、警備が厳重だ、そういいたかったのだろうがそんなのは百も承知なので、いまさら気にすることはない。

俺はこれもなにかの縁かもしれないと自分を納得させ、仕方なしに今日行くはずの現場に赴くことにし、仕事終わりで美味そうにピザやパスタ、ビールなんかを口にしている客でいっぱいの店をきたときと同様の足取りで出ていった。

地下鉄を乗り継いで降りた先にあるシティホテルに到着した俺は、

早速周辺のチェックにホテルを一周したところ、表玄関よりも従業員用の裏口のほうが、警備がさりげなく厳重になっているのがわかった。

配備された警備員自体の数はどうみても表玄関のほうが多いが、裏口にいたボディーガードらしい黒服の連中は、明らかにその道のプロであることがすぐに見てとれたのだ。ここらで黒服を一人くらいノして変装するのも手段として思いつくけれど、見たところ裏口にしか配備されていないので、連中から服を奪って変装……というわけにはいかなさそうだ。

ならば表玄関はというと、これがまたうまい具合に警備員全て持ち場を離れることなく、全員がホテルに出入りする人間たちを横目でチェックしている。おまけにいつぞやと同じで、入るのに案内状のようなものを掲示して入っていっているのを見ると、強行突破など無理だ。これではとてもではないが変装などできそうにないので、この案は却下だ。

街中を走る国道を挟んで、表玄関の前にある喫茶チェーン店にはいった俺は、一面ガラス張りの店内からホテルとその周辺を、どうするかとコーヒーに口をつけながら眺めていた。

それにしても、あれほど厳重な警備がされていると逆に何かあるんではないかと、教えているようなものではないのか……ぼんやりとそんなことを考えたとき、一台の車が目の前の道を走り去りホテルの裏手へと回っていった。

「これだ」

しめた。目の前に現れた車は、施設の洗浄のための清掃業者のものだった。これは願ってもいないチャンスに違いない。一人つぶやいた俺は、コーヒーもそこそこにすぐ立ち上がり店を出ると、裏手に回った車を追って道を渡る。

先ほど訪れた裏口のある通りに出ると、清掃業者の車が裏口の手前で止まっているのが見えた。清掃会社によくある大きめのバンだ。すぐに中から二人の清掃員が出てきてバンの後ろに周り、中から道

具を出しているのもわかった。二人はいかにもガテン系の仕事人といった風貌で、準備を終えるとすぐホテルの中へと裏口を通って入っていった。

それを見計らい、俺はバンの後ろにつくと、平静を装いながらバンのトランクを開けた。この手の連中は盗られるものなど何もないと思ってか、車の鍵を閉めない者が多く、おまけに中には予備の道具やなんかが置きっぱなしにされていることがよくあるのだ。

案の定、バンの中はいくつもの道具が置かれ、それだけでなく作業着であるツナギすらあった。完全になにかあった時のためのものであることが、使い古された感がすることから窺える。

俺はそのツナギをはくと、適当に道具を見繕って先に入っていった二人を追うように裏口に向かう。

「待て」

当然というべきか、黒服の連中が制止した。

「なんだい。今から仕事なんだ」

「施設の清掃員は今入っていったぞ」

「先輩たちだろ。俺はやることがあったから、遅れてきただけだ。それより早く通してくれよ、先輩たちにどやされちまうんだ」

急かすようにいうと、黒服の一人が他の連中を見て肩をすくめて行けと命じた。もしここで正体がバレたら、開き直って全員倒す覚悟でいたが、どうやらその必要はなさそうだ。できうる限りは穏便にいきたいところなので、助かったというのが本音だった。

「くそ、なんだってんだよ」

何も知らないふりを装うために、毒づきながらホテルの中へと入った。なにか言われるかとも思ったが、どうやらなんとかなったようだ。

俺は先に入った二人に遅れないようにと、足早にまっすぐの廊下を進み、適当なところで地下にあるホテルのボイラーなどを管理するための施設へ続いているらしい、鉄製の重い常用口の扉を開け中へと入る。そのまま階段を下っていき地下の機械室にきたところで

道具を放り出すと、続いてツナギも脱ぎ捨てた。ここならあまり人はこないはずなので、捨て置くのにもちょうどいいだろう。珍しく丸腰での移動になるが構わない。

このまま機械室を適当に歩き回ってみると、本当に運がよかったらしく、ここは各階の電気系統やその他、管理室といったところの電気制御室であるのがわかった。何百もの小さな明かりのついたスイッチが部屋中に散りばめられ、いくつもの制御盤がそれぞれの階や用途別にわかれた棚に設置されている。

こいつを利用しないわけにはいかない。俺はすぐに管理室の制御盤のある棚を探しだした。そいつを使って、一時的にコンピュータのシステムをコントロール不能にさせてやるのだ。別にコンピュータを破壊するわけではない。あくまで少しばかしいじってやるだけでいいのだ。

人の背丈よりは小さい制御盤の棚を少し進んだところ、お目当ての盤はすぐに見つかった。ご丁寧にも、わかりやすくきちんと管理室と書かれたプレートがされてある。制御盤には幾本かのコードが接続されており、そのどれにも横に小さな緑や黄色のライトが点きコードに正常に稼動しているのを教えている。

俺はそのうちの二本を適当に抜くと、抜かれたコードの横のライトが消えた。

「よし、これでいい」

頷きながら俺はすぐにそこから移動し、階段の下までやってきた。階段の下は人が一人入れる程度の空間があるため、そこに脱ぎ散らかしたツナギや道具をしまい自分もそこに隠れる。おそらく、いや間違いなく異変に気付いた連中がここにくるはずなので、そいつらをノして変装することにしたのだ。

しばらくそこで息を潜めていると、上の扉が重々しく開く音がして男の声が響いてきた。それも二人だ。声の感じからまだ若く、おそらく二十代といったところだろうか。その二人が、こんな人気のないところに送られてきたことに愚痴を言い合いながら、階段を降

りてくる。
「ったく、勘弁してほしいよ、全く。こんな忙しいときにシステムエラーだなんて」
「全くだな。上の人使いの荒さ、どうにかしてほしいよな」
どうもホテルの従業員らしい二人が下につくと、今しがた俺が引き抜いた制御盤のところにいき、そこでもまた愚痴をいいだした。
「なんだよ、コードが抜けてんじゃん」
「マジで？　本当だ。なんだって抜けてんだよ……」
やれやれとため息をつきながらも二人はコードを着け直し、イヤーモニターで上の連中と正常になったかどうかを確認している。一人が頷いたところで動き出したのをみると、どうやら合っていたようだ。
俺が動くのはここからだ。暗い制御室の影になった場所に、まさか他の誰かがいようなどとは微塵にも思っていない二人に、俺は足音は当然、気配も消して近づくと、二人に当て身を食らわせて気絶させる。その一瞬の衝撃に、二人は何をされたのか気づくことはないだろう。
「悪いが、貸してもらうぜ」
もう気を失った二人にそういい、俺は二人の着ている服を脱がし始め、自分にあったサイズを見繕っていく。二人とも若干俺よりもサイズが小さめだが、まぁ、この際は仕方ない。Tシャツを脱ぎ二人のうち小さめのやつの制服を着て、ズボンは大きめのほうのものを拝借した。どうやら後者は足が長いらしく、俺が穿いてもちょうど良いサイズだ。
両者のネームプレートを奪うと、他になにか必要になりそうな鍵の束やカードキーなんかをとると、腕を後ろ手に縛る。そしてイヤーモニターを耳につけ、制御室を出た。とりあえず潜入することができたところで、ホテルの中を軽く見て回るついでにターゲットの面を拝むことにしようか。
作業員たちがちらほらと姿を見せるホテルの裏から、表の華やか

なロビーへと出ると、思っていた以上に豪華な内装をしていた。赤い絨毯が敷き詰められ高い天井から大小のシャンデリアが交互に垂れていて、手を拡げても一人や二人では囲めないほどの太い柱が広い、吹き抜けのロビーに五本も立っている。

俺がエレベーターのほうへと回ると、すぐにエレベーターが降りてきた。中からの人が出たところで、さっと乗り込むと後ろから六人のドレスアップした客が乗ってきた。乗り込んだ連中は皆、こちらに早くボタンを押せという風な視線を送り、一瞥する。それもそのはずで、今はホテルマンの恰好をしているのだから、俺のことをホテルマンと見ているのは当然なのだ。

内心やれやれとため息をつきながら、何階か聞くと一様に最上階である二十七階を指定してきたので、そっとその階のボタンと上昇ボタンを押した。

比較的新しいホテルというだけあってエレベーターの上昇するスピードは早く、ストレスなく、あっという間に最上階にたどり着く。俺はホテルマンらしく自動ドアを閉まらないよう手で止め、客たちを先に出すとすぐにそれに続いた。

エレベーターから降りた先は、そのままパーティー会場になっていたようでフロア全てがパーティーのために、内装が整えられている。外国からも招待客がいるのか、ちらほらと白や黒、褐色の肌をした者も見受けられ、全ての者が鮮やかなドレスとタイトに決めたタキシードに身を包んでいる。

それに混じって俺と同じ、給仕のホテルマンやホテルウーマンたちが盆を片手に、飲み物やなんかをピシッとした姿勢のままで歩き客たちに振る舞っている。

俺は会場の横にある食べ物やなんかがおいてある箇所にいき、そこで銀の盆を手にとって、見様見真似で給仕を気取りながら会場を練り歩く。ターゲットを探していれば、何か別のものが引っかかるに違いないと踏んでいたのだ。

そうして、すれ違う人間一人一人の顔をさりげなく見ていたとき、

良く見知った顔が視界に入ったのに俺は驚いた。それも一人ではなく二人で、どちらも女だ。客としてきているのだろう、見事にドレスアップしていて一瞬、誰かわからなかった。

しかし両方とも人の影に遮られ、行く手がなくなってしまう。おまけに一瞬でそれらを判断し見分けるため、すぐに見失った。向こうも動いているのだから、それも仕方のないことではあるが。

どちらを追うか頭で考えるまでもなく、俺はすでに行動を起こしていた。二人がどうしてこんなところにいるのか気になるところではあるが、二人の環境を考えれば、すぐにわかることだし今の俺には大したことではない。とにかく、そんなことは関係なく呼吸するかのごとく、自然と身体が動いていたのだ。

人垣に邪魔され、なかなかうまく彼女のいたところへ行けない。しかもその間にも他の客は、俺の持つ盆に飲み終わったグラスを置こうとしてくるのだ。そういった連中には一睨みきかせ、とにかく進んだ。

人垣を超え、ようやく彼女がいたらしいあたりにまでたどり着きはしたものの、残念ながらもうすでに、そこに彼女の姿はない。一瞬だけだったので、もしかすると自分の見間違いかとも考えたがそれはないだろう。あれは絶対に見間違えることはないのは、自分でもどうしようもないほどによく解っているからだ。

「綾子ちゃん……くそ」

見つけられなかったことに、つい悪態をもらしてしまう。俺が見かけたのは、間違いなく綾子ちゃんだった。薄く微笑をたたえていたけれど、その裏ではどこかぎこちなく感じさせる、そんな表情をしていた。内心では、うんざりしているというのがよくわかる、そんな表情だった。

けれど、そこで気づく。

(俺は……何をしているんだ)

ふと、自分のとった行動の浅はかさに冷静になったのだ。自分で彼女とは距離をおくべきだと認識しているはずなのに、どうして彼

女を危険に曝すかもしれない行動に出ようというのか。
馬鹿なことはするべきじゃないと自分に言い聞かせ、ため息を一つ、再び歩きだす。時折、自分がわからなくなることがあり本当に彼女に関しては後々、後悔させられることが多い。その分、きっちりと分別をつけなくてはと考えるのだ。だというなら、はじめっから彼女に近づかなければいいはずなのにと、いつも頭を悩ませる。
そうして、きっちりと仕事に専念するべきだと頭を切り替えあたりを見回したとき、突然、後ろから左手を引かれる感覚があり、思わず反射的にそれを返す。
「……あんたは」
引いた手を返したところで振り返りその人物を見ると、俺の手を引いたのは視界に映ったもう一人、藤原真紀だった。
「こんなところで何してるのよ」
「そいつはこっちの台詞だぜ。あんたこそなんだってんだ、その恰好」
「私は……」
言いかけた真紀は、周囲を目で確認して再び俺の手を引くと、人のあいだを抜けるようにフロアの端にある大きな窓のところにまでやってきた。
「この数ヶ月間、ずっと姿を消していたあなたが、なんで突然こんな場所に現れるのよ。どうやって入ってきたの」
小声でまくし立てる真紀に、俺は肩をすくめながらいう。その顔には、珍しく驚きの表情を見せている。
「どうもこうもないさ。ただ単に、仕事で潜りこんだだけだ。姿を消していたのは仕事で少しばかしドジ踏んで、仕方なく姿を消してただけさ。
それであんたは、なんだってこんな場所にきてるんだ」
「もちろん、私も仕事よ。とはいっても付き添いなんだけど」
「付き添い？」
真紀が頷きながら説明してくれた。どうも今晩の仕事は、パーテ

ィーを開いた財界の重鎮を警護するというものらしく、それで仕方なくドレスを着てこんなところにいるという。なんでも相手はビジネス上とても重要な奴だそうで、普段、滅多と人前に姿を見せるような人物ではないそうだ。

しかし、今回はそういうわけにもいかないらしい。というのも近頃、その人物にとっての重要な人物たちが、立て続けに暗殺されたというのだ。それ以上のことは守秘義務があるので曖昧に真紀は答えたが、その人物のビジネス上の重要人物とやらを葬り去った張本人としては、それだけで十分すぎる情報だ。

真紀のいう暗殺された連中というのが、間違いなく俺の仕事によるものであることは、いうまでもない。自分が狙われるとわかっていながら公の場に姿を見せたということは、ターゲットにとって暗殺した二人に代わる、新たなビジネスパートナーが必要だということだろう。同時に、その裏にいるというミスター・ベーアにとっても。

なんであれ、仕事でドジって姿を消したといってしまった手前、あるいは真紀も俺が暗殺した張本人だと気付いた可能性はあるが、今はそいつを実行する気はないのでここは置いておくとしよう。もちろん、もし何かしてきたとしたら話は変わってくるが。

それにしても、真紀が護衛するのが今晩俺が始末をつけるはずだったターゲットというのには、少々驚いた。つまりこの点から考えても、ターゲットが暗殺者のことを警戒した、もしくはこの数百、千数百の人間がいる会場に、プロが混じっているのは間違いない。すでにこれらの事実を知って真紀、ならびに組織の連中を動員していると見ていい。

田神がいう罠というのは暗殺者をあぶり出すためだと手紙にあったので、そいつを知っていれば、下手な手をうつことはしない。頭の回転が速い真紀であれば、俺に監視をつけないとは言い切れない。どこまでいっても、この女狐はあくまで俺と同業なのだ。

それに場合によっては武田の野郎も、俺に監視をつけているかも

しれない。ターゲットにとって重要なビジネスパートナーが暗殺されたとなれば、当然護衛をつけないわけはないだろう。となれば、向こうも罠を張っていないとは限らない。それを知って俺が逃げ出さない保証などないので、武田の野郎が監視をここに紛れ込ませていないとは言い切れないのだ。

かくも味方みたいな言い方をしてはいた奴は、そのために人を陥れるような真似をしたあたり、決して信用できるものではない。二重の監視対象になっている可能性は考慮しておく必要はある。

つまるところ武田にとって今回で最後ということだから、用がすんだらついでに消す、このパターンだってないわけではないのだ。むしろ奴のとった作戦や行動、おまけにどういったわけか、良くも悪くも特別待遇の俺に対してのことを考えれば、そっちの可能性のほうが高い。この可能性がある以上ここは何も行動せずに、じっと機会を窺うべきだ。

それだけではない。今回のターゲットが、ミスター・ベーアにほど近い人物である信憑性も高くなったのも確かなことだった。もしかするとターゲット自体が本人そのものである可能性もあるが、暗殺を警戒して何かしらのアクションを起こしえる可能性が限りなく高いことは、間違いないだろう。

「それであなたは今まで一体どこで何をしていたのよ。携帯にも連絡がつかない、アパートにいけば部屋が燃えてる……どう考えたって異常よ」

「だからいったろう、仕事でドジって死にかけてたのさ。変な連中に狙われてたらしくてね。

それで気付いたらなぜか病院いたんでな、そこでしばらくの間リハビリも兼ねて休養してたってわけさ。ま、俺もまさか部屋が全焼しちまうなんて、さすがに考えもしなかったがな」

別に嘘ではないが、そう肩をすくめていう俺に真紀は、訝しげな表情を見せている。そいつも仕方ない。普通であれば、まず呼ばれることのない場所で今まで行方をくらましていた奴が突然、姿をみ

せたというのだから。
「まぁいい。俺にはなんの関係もない話だからな。
それより、あんた対象の護衛はいいのか。この間にも暗殺者ってのは対象を狙っているかもしれないんだぜ？　俺が暗殺するんであれば、今がチャンス以外のなにものでもない」
「大丈夫よ、他の腕利きに任したから。それより、その様子じゃ暇でしょう？　着替えて私に付き合いなさい」
真紀がこともなげにいう。それでいいのかと思わずつっこんでしまいたくなるが、まぁいい。狩りにきた張本人がやらないのだから、別にターゲットが死ぬわけじゃない。ある意味では真紀のその判断も間違いではないのだ。
もしかするとこの女狐のことだから、何かカマをかけるなり、はじめっから俺を疑って行動に移させない配慮からの言葉かもしれない。
「そうするのも悪くないが、いかんせん仕事中なんでね。遠慮しておこう」
後者を警戒して俺は流し台詞をいうものの、真紀はそんなものはどうとでもなるとほざいてきた。やはり見抜いていると見たほうが良いのではないか……そう勘繰ってしまうほど、真紀は不自然に俺を誘う。
「あら、私と踊るのが嫌なの。前は踊ってくれたじゃない？」
「あれは別に踊りたくて踊ったんじゃぁないぜ。仕事で仕方なく踊っただけだ」
「そう。だったら今度も仕事で仕方なく踊ればいいじゃない。仕事で忍び込んだ先で誘われたとあれば、それは仕事の一部よ。
それとも私とは踊れない理由でもあるの。この中の誰かを殺さなくてはならないから、とか」
最後のほうは周囲には聞こえない小声でいった真紀に、俺は思わず眉をひそめそうになるのを堪え、なんのことだと肩をすくめて見せる。

「あら、図星なの。第一、あなたが殺しの理由以外でこんな場所に潜り込むはずもないものね」
「もう一度いうが殺しの依頼なんて知らないね、俺は。それに潜入が必ずしも殺しのためとは限らないぜ」
確かに任務のため、邪魔するのであれば仕方なくというのは過去にも度々あったことなので、結局は殺しも依頼に入っているのは事実だ。そいつは否定できないが、かといって、必ず残った連中を虐殺してきたわけでもない。
「一線の一殺し屋からいわせてもらえば、誰かを始末するにしたってわざわざこんな人目につく場所じゃぁ殺らないね。リスクがありすぎるってもんだ。俺はそんな危険を冒すほど馬鹿じゃぁない」
真紀に合わせて俺も小声でいったところ、突然、俺たちに声がかけられた。
「君、藤原くんじゃないかね」
「あら。これはご無沙汰していますわ、渡邉様」
かけられた声に真紀は振り向くや会釈し、背筋を戻しながら垂れた髪を耳にかける。
俺たちの前に現れたのは、やや前髪のあたりが白髪になりつつも頭頂部がうっすらと禿げ始めた中肉中背の中年男で、他の部分がまだ黒いだけに禿げ始めた部分が目立っている。腹も貫禄が出始めているところを見ると、運動なんてものはほとんどしていないに違いない。
「先ほど六角先生の側にいたのを見てまさかとは思ったが、やはり。久しぶりだね、元気かな」
「ええ。渡邉様もお変わりなく」
「いやいや。最近は運動不足気味でね、この通りだ」
渡邉と呼ばれた中年男が自分の体型をネタに笑い、真紀がそれに相槌をうちながら微笑する。どうも真紀とは知り合いのようだが俺としてはそれよりも、この女狐が猫をかぶった薄笑いに対して関心をよせていた。普段を知っているだけに、それがなんとも気色悪く

思えてしまい顔が引き攣った。
しかも六角というのは、今夜俺がターゲットにするはずの男の名で、先生と呼ばれるほど財界の中でもトップに立つべき男なのだと、改めて気づかされる
「ところで、そちらは……」
そういって中年男は俺のほうへ視線を向けてくる。
「ああ、私の同僚ですわ。給仕の恰好をしておりますけど、今夜のために特別に配置させていただいておりますの」
「おお、なるほど。そういうわけか。相変わらず抜目ないね、藤原くんは」
恐縮いたしますわなどと、取り繕っている真紀を尻目に、渡邉は一瞬だがこちらをつま先から頭のてっぺんまで、鋭くもどこか上から見るような目で見たのを、俺は見逃さなかった。男が真紀とどういう肩書きで知り合ったのかは知らないが、ずいぶんと人を見下した親父だ。
「そういう渡邉様も、お婿探しでございますか」
「うむ、実はそうなんだよ。この度、娘もようやくその気になってくれてね、挨拶も含めて今皆さん方に声をかけているんだ。来年の春には大学のほうも卒業することになるから、いい加減ね。まぁ、それでも遅いくらいなんだけれども」
「ふふ、あまり強要なさっては娘さんにも悪いのではありませんか」
「いいさ。これまでは自由にしてやっていたのだから、さすがにいい加減、将来のことも考えなくてはならない時期にきてるのだからね。今もいったが、遅すぎるくらいなんだ」
親父の身勝手な言い分にヘドが出そうになって、思わず何か一言いってやろうとしたが無関係の俺に、わざわざ何かいうのも筋違いもいいところなので、スルーして周囲を見回したとき、その親父の後ろから見知った顔がぎこちなく俯いたまま、ゆっくりと近づいてくるのが視界に映る。
「おお、ちょうど良いところにきたな。いい機会だから藤原くん。

紹介しておこう。娘の綾子だ」
綾子？　渡邉のいった言葉に俺は思わず男に目をやり、すぐにその紹介された彼女のほうへとやった。
「はじめまして。渡邉綾子です」
目を俯かせたまま彼女は硬い会釈をし、向き直ったその視線をこちらに向ける。すると俺と、互いの目が重なりあった。
「え？　九鬼……さん？」
まさか、またこんなところで、こんな再会を果たすことになるなんて思いもしなかった俺は、眉をひそめながら目を強く見開いていた。彼女も同様に驚きの表情で、こちらを見ている。
互いに予期せぬ再会に言葉を失う。つい先ほど、一瞬とはいえ一度は見かけたそのドレス姿は、確かに綾子ちゃんその人だったのだ。

第８３章

運命なんてものを信じるかといわれれば、人はなんと答えるだろうか。

俺ならば間違いなく、そんなものは自分で切り開いていくものだと答える。ただ待っているだけで何か物事が起きるかもしれないだなんて、そんな夢物語は信じない。運命なんてものは書いて字の如く、命を運ぶ、もしくは運ばれるてくる命と書くので、自分が意志をもったとき初めて、今そこにある命が運ばれてきたときにこそ、そう呼ぶに値するものなんだろう。

ただ待った結果にあるものが運命だなんて、そんなものになどなんの価値もありはしない。自分で勝ち取ったものにこそ価値があり、それこそが運命と呼ぶに相応しいのだ。

つまり今、この状況は自分にとっての運命といっていいことになる。予期せぬことだったのは間違いないが、自分自身でしっかりと考えて起こした行動の結果なのだから。

「どうしてここに……？」

呻くようにつぶやく彼女に、俺はバツが悪いこともあってなんて答えればいいのか、全くわからずにいた。同じ会場にいるのだから、こういうことも十二分に考えられることだというのに、なんでそいつをシミュレーションしなかったのか自分を呪いたくなる。

「なんだ綾子、この青年と知り合いなのか」

男は綾子ちゃんに向かっていいつつも、目はこちらに向けたままだった。

「あ……はい。同じ高校の先輩なの」

人のことをいえた義理ではないのだろうが、綾子ちゃんにも動揺はあるのが見てとれるほど、ぎこちない紹介の仕方だった。

「九鬼です。はじめまして」

視線を外して会釈する俺に、この親父は全く目を逸らすことはない。それどころか、細めて見るその目はどこか侮蔑を含んでいるように感じさせる目だ。

「九鬼……そうか、思い出したぞ、君が九鬼か。五年前に、うちの娘にちょっかいを出していた男だな。どんな男なのかと思っていたが、随分とまぁ……」

「ちょっ……お父さん」

綾子ちゃんの親父は、突然声を低くして鋭くいった。面識なんぞないが、それぞれ情報としては互いを知っていたらしい。

「それでもようやくその気になった娘の前に、いまさらなんの用なのかね。まさか、復縁したいとでもいうんじゃなかろうね？」

やれやれ、随分と嫌われているものだ。話には聞いていたから、多分に高慢な親父とは思ってはいたがまさかここまでとは。

「……なんだ、何がおかしい」

「いいえ、別に」

笑いたいわけでも、笑うべきところでもないのはわかっているが、以前想像したままの態度をぶつけてきた親父に、俺は思わず苦笑せずにはいられない。これでは綾子ちゃんがうんざりするのも仕方ない。もしこれが彼女の父親でなければ、即一発お見舞いしてやっているところだ。

「あなた、少し失礼よ。申し訳ありません、渡邉様。彼には厳重に注意いたしますので」

事態が思わぬ方向にいきかねないことを察してか真紀は、目の前の親父に対して平謝りするもこっちの態度がよほど気に入らなかったのか、男はますます不愉快そうに顔を歪めていっている。

「藤原くん。君には六角先生のこともあるから大目に見てきたし、これからもそのつもりだが、この男は少々見当違いもいいところではないのかね。こういった場は、もっと教養のある者だけがいていい場所だ。それなのになんなんだね、この男の態度は」

俺はなにもいわずに、ただ親父のまくし立てる言葉を右から左へ

聞き流し、関心は目の前の綾子ちゃんだけに向けていた。こんな父親を前に、よくこんな気立てのいい子が生まれたものだと、ほとほと感心したのだ。

いいや、むしろこんな父親を反面教師にしたといったほうがしっくりくる。思えば過去に、綾子ちゃんがこの親父に対して愚痴をもらしていたことがあったので、そうしようとするのは自然な成り行きだったのかもしれない。人間、本当に唾棄したくなるものを見聞きすれば、そうならないよう努力したりするものだ。彼女にとって、この父親はそういった対象であるわけだ。

「お父さん、いい加減にして」

放っておいたら一時間でも人を罵倒していそうな父親に、綾子ちゃんは美しい眉をひそめて強く制した。

「この人は私の命の恩人なのよ。これ以上の侮辱は私が許さないわ」

鋭く言い放った綾子ちゃんは、親父の口が開こうとする前に俺の手をつかみ、親父と真紀を残してその場を離れる。その動きにつられるように、俺もそれに従った。

それを目の当たりにして親父は俺たちの背中に向かってなにかいってきたが、俺も彼女もそんなことに構うことなく人の隙間を縫って歩き、先ほどの場所とは正反対のところにまでやってきた。周囲には会場に彩りを与えるために祝賀用の大きな花飾りが何本もあり、ちょっとした壁になっている。その花飾りの後ろにまで、綾子ちゃんは手を引っ張ってきた。

「ごめんなさい、九鬼さん。父があんなことを……」

「いいや、別に構わないさ。ただ初対面の人間にまさか、いきなりまくし立てられるとは思わなかったがな。それよりもよかったのか」

肩をすくめながらいうと綾子ちゃんは、恐縮そうにして顔を俯かせ、ただただ謝って、別に構いませんと言い捨てた。よほどあの父親のことを恥ずかしく思い、気に入らない様子だ。

「それにしても、まさかこんな場所で会うなんて、さすがに驚いたよ。君がいいところのお嬢さんだってのは知ってはいたが、それで

もここまでとは思わなかった」
　花飾りの壁の向こうをざっと見渡しながら告げると、綾子ちゃんはそんなことありませんと畏まって否定した。慌てていった彼女の様子がどことなく可愛く、俺は思わず小さく笑ってかぶりを振る。
「まぁいい。なにがともあれ、君のおかげで助かった。そいつには礼をいっておかなきゃな」
「別に私なにもしてないですよ」
　きょとんとする綾子ちゃんに真紀との腐れ縁について少しばかし話してみると、何か思い出したようで二度三度と頷いた。
「藤原さんって、高校の文化祭のときの……同じ会社に就職されたんですね」
　会社といわれて、思わず苦笑する。もしかしたら真紀は、綾子ちゃんの親父に警備会社か何かの人間だとも伝えているんではないのか？　俺がこんな格好で紛れていることにも、あまり驚いてはいなかったあたり、考えられない話ではない。あるいは、あくどいことをやってそうな親父だったから、あの女の本性を知らないわけでもないのかもしれないが。
「まぁ、似たようなものかな。しかし君も婿探しとは……ずいぶんと時間が経ったんだな」
　綾子ちゃんに限らず、世の大抵の人間にとっても同じことがいえる。ある時期に差しかかると、皆唐突に時間が経ったんだと認識するのかもしれない。俺にとっては目の前のドレスアップした綾子ちゃんを目の当たりにするにあたって、そいつを強く実感した。
　だけども、俺にはどうしても沙弥佳のことが頭を離れないこともあって、とてもではないがこんなにも時間が経っているだなんて思えない。いつまでたっても俺の時間は前に進むことはない。進んでいるようでいて、同じところを延々と行ったり来たりしているのだ。
「そういえば九鬼さんは今、どんなお仕事をなさってるんですか」
　綾子ちゃんがいきなり言いにくいことを突っ込んでくる。他意はないのだろうけど、なんとも言い難い質問だ。

「ま、一言でわかりやすくいえば、便利屋みたいなものかな。依頼があればそこに赴くって感じのな」

「便利屋……」

どうも言葉の意味がわからないのか彼女は、クエスチョンマークを頭に浮かべているのが表情から見てとれる。

「もっと砕いていえば……探偵まがいなものさ。色んな調査をしたり、情報の買い付けのために色んなところに潜入したりもするんだ」

ふと、後ろめたいことをやっている連中が家族にだけはそいつを秘密にしておく気持ちが、このとき理解できた。理屈ではわかっていても、いざそいつを体験するとでは、えらい違いだ。全てが本当とはいわないが、あながち嘘でもない。さすがに殺し屋をやっているだなんて思いもしないだろうし、彼女にはそいつを知ってもらいたくはない。

「そう、なんですか……」

どんな職業を思い描いていたのか、俺の言葉を聞いて綾子ちゃんは、たちまち驚いた表情を見せ取り繕うようにそういった。いわゆる、スーツに会社というサラリーマンとでも思ったのかもしれないがまさか、そんな職業に就いているとは思いもしなかったんだろうというのが、雰囲気から手にとるみたいにわかる。

しかし気を遣いすぎといってもいいくらいに相手に気を遣う綾子ちゃんは、そこからなんと口にすればいいのか考えあぐねてしまい、俺も俺でなんとも気まずいこの雰囲気に押し黙ってしまう。これが他の誰かなら構わないのだが、綾子ちゃんに対してはどうにも後ろめたい気持ちになって仕方がなく、なんともむず痒くなる。

「と、ところで、六角って奴はどこにいるか知っているかい」

沈黙が降りて居心地が悪くなった俺は、そいつを打開しようと唐突に話をふった。綾子ちゃんも同じ気持ちだったのはいうまでもなく、話にのってくる。

「先ほどまでスピーチで、壇上にいましたけど……脇のほうで顔見知りの方たちと、おしゃべりしていたのは見かけましたよ」

「親父さんも挨拶にいったわけか」
あまり人前に出ない権力者だけあって、ここの連中もターゲットに取り入ろうと必死のはずなので、強欲そうな綾子ちゃんの親父がそれに飛びつかないはずはない。そう読んでいってみたところ、図星を指され綾子ちゃんも苦笑しながら軽く頷いた。
あの親父にとってこのパーティーは、色んな意味で重要なプレゼンであるに違いないだろう。真紀にいった綾子ちゃんの婿探しは当然として、六角という財界は当然、政界にすら大きく顔が利く人間の懐に入ることができる可能性を、みすみす逃すわけがない。上流連中の政略結婚など別に興味などないが、かつての想い人がそうしないといけなくなると話が変わる。このまま目の前の綾子ちゃんをさらって、どこか遠くの地に消えるのもいいかもしれないという気になってくるのだ。
だがそいつは無理な話というもので、俺一人ならともかく、彼女を連れて人知れぬところに逃げおおせるほど、現在、この世界は甘くない。どこに行くにしろ、どうあっても人目につくうえ、その気になれば今現在は衛星からでも個人の顔を把握しようと思えばできなくもないほど衛星の監視システムの性能も上がっているのだ。そうなれば、脱走した俺に追っ手がかかるのも時間の問題だ。
まぁ、今のところはそのあたりの動向が知られてはいないはずなので問題はないが、もし綾子ちゃんの親父が六角と繋がりを持つとなると、そういった可能性が極めて高くなる。
そこまで考えたとき、自分が馬鹿なことを考えていることに気付いて自嘲気味に笑った。何を考えているのだ、俺は。仮に人目をかい潜り、数多の追っ手を返り討ちにしたところで、彼女を危険に曝してしまうのに変わりはない。そんなことは絶対に許されない。俺の都合で俺が死ぬんであれば、それはそれで仕方ない。だが、綾子ちゃんは俺の世界とはまるで無関係なわけだから、そんな彼女をこちらの都合で巻き込めるわけがない。
「九鬼さん？」

「ああ、いや。もし良ければ、その六角ってやつのところに案内してもらえないか」

急に黙りこんだ俺に綾子ちゃんが呼びかける。とりあえずターゲットの顔を拝んでおくのも悪くないと踏んだ俺は、彼女に案内を頼んだ。正直にいうと、もはや六角なんぞどうでも良くなっていたのが本音だが俺の直感は、まだ何かしら面白そうなネタがあるはずだと告げている。

綾子ちゃんは俺を案内するために、再び先ほど見かけたらしいあたりにまで案内してくれた。するとフロアの端、とまではいわないが、ホテルの大きな窓ガラスに近いところに写真で見たターゲットの男が取り巻きに囲まれて、談笑しているのが見えた。皆、男に取り入ろうと必死で、その光景はまるで主人に尻尾を振る犬みたいに滑稽だ。

そして取り巻いている連中は、どれもこれも財界や政界に幅を利かせている連中ばかりで、改めて、ターゲットがこの世界の重要人物なのだと窺わせる光景でもあった。それは同時に、奴を後ろから操っていると目される、ミスター・ベーアと呼ばれる人物の存在も。

けれど俺はそれ以上に、六角の背後や取り巻き連中の邪魔にならないながらも確実に連中を監視している、黒服の男たちに目がいった。以前、真紀や組織の工作員たちと組んで作戦を行ったことがあったのだが、そのときに組んだ連中がなかば陣を組むようにして周囲を取り囲んでいた。

中には俺とは全く面識のない男もいて、その内の一人は、日本人らしいがどことなく外国人っぽく見えなくもない、不思議な雰囲気と外見を持った男もいる。その男は護衛のわりに歳がいっているが年齢を感じさせない、がっしりとした体格と高い上背をしていた。

この世界にもやはり引退というものはあって、やはり例によって高齢の者から現役を退いていくのは変わらないが、中にはどう見てもこの業界に限らず引退していてもおかしくない者が少なからずいる。別に正確に何歳までという規定もないので構わないのだが、こ

こではやや浮いて見えなくもない。あの男も年齢は六十近くに見え、引退していてもおかしくない年齢ではあるがその優秀さから、まだ現役を退く必要性はないのだ。つまりそれだけ作戦の立案も悪くないわけであり、おそらくは、あの男が今回のチーフなんだろう。

「すみません。ちょっといいですか」

その男に近づいて耳打ちすると、男がわずかに方眉をあげ、こちらに気を向けた。さらに小さな声で続ける。

「不穏な奴がいる。そろそろ引き上げたほうがいい」

そう耳打ちすると男は途端に顔をしかめ、どういうことだと反問してくるがそれには答えることなく、ただ肩をすくめるだけだった。

実際にそんなやつなど俺以外にはいないが、連中の動きを見るにはちょうどいい。六角がミスター・ベーアの傀儡ならば、これでなんらかの動きを見せるはずだし、場合によっては武田の野郎を出し抜く何かが掴めるかもしれない。

男はそんな俺の意図など考えることなく、急ぎ足に六角のところへ行き耳打ちした。それに軽く頷いてみせた六角は、取り巻きの連中に手でジェスチャーしてみせ歩き出したときだった。

「おい、なんだあれは」

大きな窓ガラスの向こうに広がる闇夜に向かって、誰かが叫んだ。すると、六角の警護に当たっていた組織の連中がそちらに向かって、一斉に視線をやる。俺も当然その言葉に反応し、訝しげに首をひねる。

視界に眩しい光が飛び込んできて、その光が何かにつられて動いている。それは、とても有り得ない物体だった。ヘリだ。それも報道用や個人所有のみみっちいものではなく、背景の黒に溶け込んではいても軍用機であるのがはっきりとわかる、戦闘用のヘリだ。光はヘリの追跡用の照明だったのだ。

なぜあんなものが……疑問が頭を掠めたときはすでに身体が自然に動き、叫んでいた。

「伏せろ」

横にいるチーフの男を突き飛ばし、少し離れたところにいる綾子ちゃんのところまで一気に跳躍し、庇うように抱いて床に伏せる。

床に身体がぶつかる衝撃と、つんざく激音がしたのはほとんど同時だった。ヘリから機関砲の掃射によって、窓ガラスは当然、壁や床、シャンデリアといったものがたちまち破壊されていく。

何が起こったのか理解できない一般人は、容赦なく機関砲の餌食にされ瞬く間に肉塊へと変わっていき、あたりには阿鼻叫喚の声があがって血飛沫や肉片が飛び散る。

「九鬼さんっ」

腕の中にいる綾子ちゃんが叫ぶ。俺が影になっているため、あたりを見ることができないのだ。だが、今の今まで華やかだったパーティー会場が瓦解していく音と震動、死んでいく者たちの悲鳴に不安になっているのだろう。

彼女を庇う背中に、床や壁のコンクリートの破片が飛んできて当たる。それらに混じり、何か柔らかげで湿り気のあるものも一緒に背中に飛んできた。想像したくないが、誰かの肉片だろう。

案の定、伏せている俺達の横に、惨めな叫び声をあげて倒れてきた男の顔は苦痛に満ち、まだ生きている俺達を恨めしそうに睨んでいる。おまけに、弾が顔を掠めたようで、左のこめかみから眼底、頬骨のあたりにかけて吹き飛んでしまっていて、眼球は破れて中の水分が流れたのかひしゃげている。

「ひっ……」

ちょうど真横に倒れてきたこともあって、腕の中の綾子ちゃんには酷い形相の顔がよく見えてしまったらしい。恐怖を押し殺した短く呻くような悲鳴をもらす。

砲撃によって破壊されたフロアの天井から吊されたシャンデリアが、再び砲撃の弾が当たりミシミシと音をたてて床まで一気に落ちる。

巨大なシャンデリアだけに、真下にいた、まだかろうじて息のあった連中は下敷きになって押し潰され、落ちた衝撃でクリスタルの

きんきんとした高く透き通った音が何百にも重なって砕けて、耳障りな音がフロアに響く。

風通しの良くなったフロアに、今度は爆発音が響いた。どうやら手榴弾が投げ込まれているらしい。

「耳をふさげ」

それをすぐに察知した俺は、綾子ちゃんに叫んだ。彼女は完全に心ここにあらずといった感じで、全く動く気配がない。俺は仕方なく、綾子ちゃんの腕をとって耳元までやってふさがせる。すると彼女はのろのろともう一方の耳に、自分で手をやってふさぐと祈るように目をつぶって体を硬直させる。

ヘリはバラバラとメインローターの回転する音を響かせながら、ゆっくりとホテルの壁の側面に沿って移動しホバリング、また戻ってホバリング、といった動きを繰り返している。ここにいる人間は、誰一人として生かすつもりはないらしい。

そのヘリからの機関砲による砲撃音が不意に止んだ。怪訝に細めた目でそちらのほうを見遣ると、中からこちらに何かライフルかと思われる機銃を向けてきた人影があった。

幾人かがやはり、唐突に止んだ砲撃に訝しんで顔を動かしたのがわかる。

あの六角もその一人だったようで、ヘリに顔を向けたが次の瞬間、男の顔が水の入ったパンパンの風船が割れる音に似た、低い音をたてて爆ぜた。顔面が突然後方に向かって飛び散り、粉々になった衝撃で体ごと同じ方向に引きずられて、六角の上骸骨部分は完全になくなった。同時に弾道上にいた護衛の胸にも風穴を開ける。

いくら見慣れているとはいえ、やはりこの光景は思わずこちらの顔をしかませるには十分なものだ。目をつぶったままの綾子ちゃんがそれを見なかっただけでも、幸いといったところだろう。

（一体どういうことなんだ、これは）

ヘリの襲来は予想通り、六角の奴が目的だったのは間違いないとしても、関係ない連中まで皆殺しにする意味がわからない。理由づ

けするとなると、俺ならばやはり島津製薬のときのように非人道的といってもいい実験を繰り返し、沙弥佳を苦しめたとして復讐してやるに十分なものなので、それなら理解できないわけではない。

だが今回は、だとしてもあまりに明確な理由を感じさせない。六角が目的だというのは間違いないので奴を始末しようというのなら、まだいくらもやり方があったはずだ。ここまで徹底的に、他の連中まで巻き添えにする理由はなんなのか……。激しい憎悪を感じさせるようで、ただの無差別のようにも思わせる。

ホバリングしたまま一向に離れそうないヘリを睨みながら、横の死体を蹴って離し顔を反対に向かせると、のろのろと起き上がった。風通しがよくなったため、メインローターが巻き起こす風に砂塵が低く舞い、反対側の壁に追いやられていく。

吹きつけられる風に顔を左腕で覆い、ヘリにいる、六角を撃ち殺した奴の面を拝んでやろうとしたが風は容赦なく吹きつけるため、うまく目を向けることができない。ただ、奴はなにを思っているのか撃った方向にライフルを向けたまま、こちらに向けることなく代わりに顔を向けてきているように思われた。

「くそ、風のせいで……おまえは一体何者なんだ」

眩しい光に相手がよく見えないが、俺はそいつに向かって叫んだ。ローター音に掻き消され、相手に届いたとは思わない。それでも叫ばずにはいられなかった。

するとヘリはホバリングをやめ、一度大きく後方下にさがる。それを見て俺は走りだした。逃げるつもりなのだ。

逃すものか。なにがなんでも取っ捕まえて、白状させてやる……。そんな思いで俺はずたずたになったフロアを走る。だが床に倒れたいくつもの死体が邪魔して、上手く走れない。それでもなんとか、死体を避けながら走る。

幸いなのは外壁とヘリの間はせいぜい三、四メートルといったところで、しかも窓ガラスのあったところは全てなくなって蹲(つまず)きそうなものも一切ないため、思い切りジャンプすることなくヘリの下腹

部にせり出た足掛けに掴まれるはずだ。
だが、そんなときだった。
「待ちなさいっ」
鋭く叫ぶ女の声に俺は気をとられ、走るスピードを緩めてしまった。中途半端なことが危険だとわかっていながら中途半端にスピードを緩めたことが災いして、窓の直前になって止まろうとしてしまったのだ。
一瞬で全身の血の気が引く。こんなところで止まっては、とてもではないがスピードを完全に殺すことは不可能に近く、命綱などない今、どう考えても百何十メートルも下の地面めがけて真っ逆さまになる。
そしてそれは免れそうになかった。目の前には暗い夜の空が広がっていて、視界の脇にヘリがある状態では、最後の一歩はもう空中に踏み出すことになるのは間違いない。跳ぶことができてもヘリに掴まれる保証などない。
それでも中途半端な状態でありながら、俺は踏ん張りをきかせて跳んだ。どっちみち落ちるかもしれないなら、やるだけはやってやろうと床を蹴ったのだ。
いや、意識したわけでなく、身体が勝手に動いたのだ。
不思議に、何もかもがスローモーションに見えた。極度の緊張感におかれたとき脳内のアドレナリンが過剰に分泌されて起こる、あれだと不意にそう思った。過去にも幾度か、似たような経験をしてきたことがあるからか、妙に落ち着いて頭の片隅でそう考えていると、ヘリにいた狙撃手がこちらに向かってライフルを伸ばしてきたのがわかった。
妙なことに、世界がスローモーションに見えるというのに、なんでこいつがこっちの動きについてこれるのだと考えながらも、身体は本能に忠実で、すでにライフル砲身を掴もうと空中に飛んだ身体の前に左腕が動いていた。落ちるスピードはゆっくりだが、せり出されくる砲身と腕の動きははいつもと変わらぬ速さだった。

なんとか、なんとか掴むんだ……そう強く念じながら、ついに手が砲身に触れ掴むことができた。このときにはスローモーションに動く世界の中で、自分だけが普段通りに動けることなどもはやどうでも良かった。

「ぐっ」

砲身を掴んだ瞬間、スローモーションだった世界が唐突にいつもの速さで動き出した。なんとか掴めはしたものの、腕に自分の体重と下に落ちようとする重力が一心かかって鈍い痛みが走る。

俺が掴まったことで、うまくホバリングしていたヘリがその衝撃に大きく揺れた。ライフルを持った奴もそれによって下に引きずられたが、なんとかもってくれた。

下に向かって左右に揺られる感覚と気持ちは、とても表現できるようなものではなく、いつ落ちてもおかしくない状態で焦燥感だけが先行する。それを助長するように、掴んだ砲身がつるつるのため先が外れないか、とてもではないが気が気でない。

だがふと気づいた。揺られているのは俺が掴まったためでなく、実はあえて揺らされているのではないかということに。もちろん俺が飛び移ったことで、急激に機体が傾いたのは事実だ。しかし、いつまでも揺れ幅が減ることなく、どちらかといえば揺れが大きくなってきているように思えるのは、決して錯覚ではないだろう。

そしてその思惑は見事に的中した。しかもそいつをやっているのは他の誰でもない、ライフルを差し向けた奴本人だったのだ。

「待て、待つんだ。今揺らされたら……」

だんだんと、揺れの勢いに腕が堪えられなくなりつつあって、俺は上を見上げて叫ぶ。こいつはまさか、とんでもないことをやろうとしているのではないか……脳裏をよぎった考えに、俺は今さらながら冷や汗をかいているのを実感し、やめろと奴に向かって叫ぶが、一向に止める気配はない。

「うっ――」

揺れが最大になったかというところで、奴は思い切り俺を壁に向

かって投げようとした。俺としてももはや耐え切れそうになく、渾身の力を振り絞り最も揺れ幅が壁に近づいたときを見計らって、飛んだ。

飛んだ瞬間、心臓が縮み上がる思いで壁に掴まった。だが、先ほどの掃射でボロボロになった床はざらついていて、おまけに、うまく指をかけられそうな場所が見当たらないだけでなく、しがみついた壁も衝撃でミシリと嫌な音がした。

必死になって、床がざらついていようがなんだろうが腕の力で落ちそうな身体を支えてしがみつくが、つるつるの砲身を掴んでいた左手にはあまり握力がなく、ずるずると下に身体がさがり始める。しかも砲身を掴んだときの衝撃によって腕が痛んでいることもあって、思うように腕が動かない。

このままでは落ちてしまう……嫌な予感がしたところで腕が思い切り、誰かに掴まれた感覚に思わず顔をあげる。

「九鬼、さん……」

驚いたことに、俺を落ちないよう支えてくれたのは綾子ちゃんだった。ドレスが床に散らばった血や埃やなんかに汚れることは構うことなく、自分の体重よりもずっと重い俺を持ち上げようと引っ張る。顔がうっすらと紅潮していて、必死に力を振り絞っている。

女にこんなことをされては、こちらとしても泣き言などいってはいられない。俺は再び腕に力をこめ直し、引っ張られる方向に合わせて上体を持ち上げていく。

左腕が痛みに悲鳴をあげているがあと少しだと心中で自分を鼓舞して、コンクリートにざらつく床を掴むように左手をへばり付かせる。しがみついた壁に入っていた亀裂から、ポロリと破片が地面に落ちていった。

そこまでくると、あとは足を窓枠の縁にかければいい。右足を大きく広げて縁にかけると、引き上げようとする力と自分の力によって身体が一気に軽くなって、半ば転がりこむ形でようやく建物の中に戻ることができた。

一息つく間もなく俺は、こちらを気にしていたらしいホバリングするヘリのほうを向く。全く意味不明の行動をとる奴らだ。さっさと逃げれば良いものを、なんだっていつまでもこっちの成り行きを見守る必要があるんだ。だったら、そもそも始めから俺を引きずり上げておいたほうがいいはずなのに、一体どういう理由で……。

内心毒づきながら連中のほうを見ていると、なにを思ったのか、ライフルで俺に助け舟を出してくれた奴が被っていた、黒っぽい戦闘用ヘルメットをとったのだ。

直後、ヘリの眩しく照らすライトに阻まれ、その眩しさに瞼の上に手をかざしたため、そいつの顔を拝むことができなかった。それでも、そいつが長い黒髪を後ろで留めた女だということだけは、一瞬であってもはっきりとわかった。

それを見たとき、なんともいえない心臓の高鳴りを覚えた俺は、怪訝に思いながらも再度窓のほうへと駆け寄る。

まさか……いや、そんなはずは……だがしかし……。こんな思惑が渦巻いている中で俺はただ、もう顔を引っ込めた女の乗るヘリを神妙な面持ちで見つめた。ヘリはぐんぐんホテルから離れていき、あっという間に豆粒よりも小さくなったかと思った頃には、もう夜空に紛れて見えなくなった。

「九鬼さん」

背後から綾子ちゃんの不安げな声がする。

「ああ」

一言そうつぶやいただけで、俺はもう何もいうことはなかった。最後の一瞬だけ見えたあの長い髪の女は、おそらく島津の研究所で出会ったあの女だろう。だとするなら、それはつまり、あの女が妹である可能性があるのだ。

はっきりと顔を見たわけでもないし、これまでだって確証なんて何一つ得られた試しもないが、なんとなくだがそんな気がするのだ。これを妄想だと笑いたい奴がいるなら笑えばいい。だが俺には、どうやってもその疑念と可能性が頭から消えないのだ。いや、それど

ころか、ますますそう思えて仕方ないのだ。
「……あなた、彼らとは知り合いなの」
今しがた現れたヘリの乗組員たちのことをいってるんだろう、床に転がった無数の死体の合間をぬって真紀がやってきてそういった。俺はただ、わからないと首を振るだけで精一杯だ。
その場で少しのあいだ、彼方に消えていったヘリのあとを何を考えることなく見つめたあと、ため息をついて振り向いた。

ホテルで起きたヘリの襲撃による騒ぎで、ホテル周辺では何事かと人々が口々に騒ぎたてホテルのほうを見上げていた。そんな彼らを、国道を走る黒いリムジンの中から流れていく景色の一部として、横目に見ながら目の前にいる連中のほうへ向きなおる。リムジンは、乗車前の短いやり取りで高速にといっていたので、首都高速を目指しているんだと思われた。
目の前には六角の護衛として黒服連中のうちの一人が、向かって右に真紀、そして俺の右には綾子ちゃんが座って、それぞれ三者三様の表情を見せていた。目の前にいる男は護衛チームのチーフをしていたらしい男で、白髪まじりの短髪に、歳のわりに若く見える印象の顔立ちをしている。笑っているわけではないはずなのだろうが、どこか薄笑いを浮かべているように見える。
真紀も真紀で足を組み、手はその上においたまま真正面にいる綾子ちゃんを、冷めた瞳でじっと見つめている。綾子ちゃんはそんな真紀に見つめられ、そわそわとして居心地が悪そうだった。別に真紀に見つめられるからとは限らず、人に何をいわれるでもなく、ただじっと見つめられていると落ち着かない気持ちになるのは当然だろう。真紀の容姿はなまじ悪くないだけに、なおのことだ。
二人とも、今度の騒ぎで着ているドレスが煤と血で汚れてしまっており、せっかくの衣装が台なしだった。けれども妙なもので、そ

れがまた不思議な色気をもって美しく見えるのだ。
「それで、いい加減どこに向かっているのか教えてくれてもいいんじゃぁないのか」
綾子ちゃんと真紀の微妙な空気に耐え兼ねて、目の前にいる男にそういうがこいつはまるで口を開く気配は感じさせずに、ただニヤリと唇を歪ませ肩をすくめるだけだった。黙ってついてくれば、そのうちにわかる……そんな態度なのだ。
俺は忌ま忌ましげに舌打ちすると、踏ん反り返ってシートに低く座り直した。ついでに走るリムジンの後方に見える、ヘリによって最上階が破壊されて大惨事を巻き起こしたホテルに視線をやり、頭の中でここまでの流れを整理していた。
ぼんやりとヘリが去ったあとの夜空を見つめていた俺だったが、にわかに周辺が慌ただしく動き出したことで背後にいる綾子ちゃんに、ありがとうと伝えて真紀のほうへと大股で歩みよった。
「おい、なんなんだこいつは。あんたの護衛もずいぶんといい腕をしているな」
少し前までの、きらびやかさや華やかさなどまるでなくなったフロアを、指差していった。ヘリからの砲撃を受ければ、こんな防弾性もなにもないホテルの壁など一たまりもなく粉々になるのは当然で、もはや壁はボロボロに砕け、百何十メートル下の地面にコンクリートの破片や鉄骨なんかが落ちていた。
おかげで下にいる連中は当然、周辺にいる人間たちにまで騒ぎが波及することになっていった。予期せぬ自体ということもあって、おそらくは明日のトップニュースはこのことで間違いなく、話題も持ち切りになることだろう。
「まさか、ここまで大胆な行動を起こすなんて思わなかったのよ」
必死に告げる真紀の態度からは、確かにそうかもしれないと思わせる節があり、押し黙って頷いた。真紀のいう通り、まさかこんな街中で軍用機を駆り出してくるなんて思わなかったので、それはお互い様なのだが……問題はなぜそんな目立つやり方をしたのかとい

うことだ。
　おそらくあのヘリを動員させたのは十中八九、武田の野郎だ。今夜のことを罠だと提言してくれた田神や、毛利がいっていたありがたい待遇からもなぜか気に入らないと思っているらしいので、そう考えていい。奴の筋書きは俺が今夜ここでターゲットを消して、用済みになったところを始末するという常習手段を用いるつもりだったのだ。
　なんともムカつく野郎だ。はなっから胡散臭い奴だと思って信じることはなかったが、やはり正解だった。この世界では人を欺くのが当然のこととしてまかり通っていて、世の道理など口先だけであったものではないことくらいは、嫌というくらい知っているつもりだ。
　しかし、今回のように人に依頼してきておいて最後には始末するなんてのは、この世界でもご法度だ。この道理の通らない世界で数少ないルールであり、それを破った者には死しかない。だからもう何がなんでも、必ず俺がこの手で武田の息の根を止めてやる。
　……ふん、まぁいい。忌ま忌ましくも今はまだやりたくてもできないので、放っておいてやる。ともかく、まずはこの状況から脱するのが先決だ。
　俺は血と臓腑が散らばって、とてもここがホテルとは思えない戦場さながらのフロアを見て、顔をわずかにしかめる。幸いに、フロアの端にいた連中は怪我をしつつもまだ動ける者もいるようで、もそもそと起き上がってきている。
「悪いが、俺はさっさとここからおさらばするぜ」
「待ちなさい」
　真紀の制止をみなまで聞くことなく、続けざまにいう。
「いっておくが、俺はあんたに付き合う義理はないはずだぜ。俺にはなにがなんでも、あの連中を知る必要があるんだ」
「では君も我々のところにくるかね」
　俺と真紀のあいだを割って、チーフの男がそういった。

「おそらく今日、この場を狙ってスイーパーが現れるのは予想できていた。我々としても相手を知る必要があった」
「そのために護衛対象を殺されてもか」
極めて事務的にいう男に、俺は自分のことを棚上げすることも省みずにいうと、こいつはさらに続ける。
「そうだ。おかげである程度絞り込むことができた」
「どういうことだ」
なにか言いかけた男が周りをちらりと見て、口をつぐむ。
「ここでは止めておこう。今から戻らなくては」
「私も行くわ。あなたはどうする」
真紀にふられた俺は、どうしたものかと思案する。どうやら、こいつらも今回の襲撃者のことを察知していたようで、それであえてこの催しに参加したらしい。となると、こちらにもメリットが生まれてくるというもので、武田の奴をやる手だてができるかもしれない。
俺からいわせてもらえれば、こいつらも同類だが武田のいけ好かない行動と思惑に付き合わされた挙げ句、命を落としかけたことへの落し前をつける必要がある以上は、まだしばらくはこいつらについている方がメリットがある。しかし問題は……。
「綾子ちゃん、君はもう帰ったほうがいい。どうも君の親父さんもまだ生きているらしいしな」
崩れた壁の破片の下敷きになってひっくり返った彼女の父親を親指で指差し、綾子ちゃんにいうと彼女は弱々しくふるふると首を振った。
「嫌です……やっと会えたのに……。ううん、九鬼さんは何を隠してるんですか。またあの頃みたいに、九鬼さんに隠し事されるのはもう嫌です」
……やれやれ、痛いところをつかれたものだ。けれど彼女を巻き込まないと決めている以上は、断固として拒否しなくてはならない。今回のように、まさかヘリを動員するなどの予想外のことがこの先

起きない保証などもない。
「駄目だ、君はくるな。こいつは仕事なんだ。それに今回は助かったが、これからも助かるだなんて保証はないんだ」
続けざまにまくし立てようとしたところ、突然男があいだに割って入っていう。
「女相手に喚きすぎだ。二人が知り合いなら、いい機会だ、一緒にきてもらえばいい」
「おい、あんた。なに言ってるんだ」
「君は、要は彼女を巻き込みたくないのだろう。これから先なにがあるかわからないのは確かだ。だからこそ、自分の手元に彼女を置いておけばいい。
そして彼女にしてもそうだ。包み隠さず今の自分を見てもらえばいい。それで離れれば、それこそ君の望むところなんじゃないかな」
「そんなことは言われなくたってわかってる。だからといって、そんな話を了承できるもんか。俺はそう決めたんだ」
感情的になってわめき立てたところで、この様子を見ていた真紀がもう時間だわと、男に促した。それに頷いた男はすぐに踵を返し、俺を見る。全ては俺次第だと訴えてきているのだ。
「できるわけが……」
「私、行きます」
「なっ……なにいってるんだ、綾子ちゃん」
こうなっては俺の意思などあってないようなものだ。紳士的に振る舞っちゃいるが、危険なこの世界の住人である男や真紀について行こうとする綾子ちゃんを放っておけるはずがない。男の言い方にしても、よくよく今考えてみれば、明らかに誘導している言い方だった。つまり俺は愚かにも、また良いように言いくるめられてしまったわけだった。
つくづく俺は、自分で思うほど頭の回転は良くないのだと気付かされる思いだ。自分でいうのもなんだが殺人機械としては、そんじょそこらの連中とは比較にならないと自認しているのだが、いかん

せん、頭を使う方面にはいまいち向いてないのかもしれない。
もっといえば悪くはないのだろうが、人並みといったところで、少なくとも人をうまく使う類いの人間ではないことは明確だろう。この男や真紀、あるいは田神なんかを見ているとそう思わざるをえない。
そう思案していると、いつの間にかリムジンは、走っていた高速を降りてどこかの閑静な住宅街にまできていた。それもただの閑静な住宅街ではなく、建っている家々はどれも豪邸といっていいものばかりだ。
そのうちにリムジンは豪邸が立ち並ぶ一画を右に折れ、少しいったところで高い壁の塀があるT字の交差点にぶち当たった。そこを左に曲がってまっすぐ行くと、塀が途切れて巨大な観音式の門が現れた。綾子ちゃんは真紀の冷たい視線から逃げるように、その門を興味深げに見つめている。
運転手が門の手前で止まって、そこにいる守衛に二言三言いうと、すぐに門が音もなく門が開いていき車は徐行運転で敷地内に進んでいく。なんとも広大な庭で、一面に芝生と所々に亜熱帯地域でよく見られる緑用樹林が植えてある。それらにはなにか謂れでもあるのかライトアップもされていて、これだけでもはやそこらの屋敷とは比べものにならない大豪邸だとわかる。
それらのあいだを突っ切って屋敷の前にまでやってくると、すでに車を待機していたらしい給仕がドアを開けた。
「ご苦労」
男はそういいがら車を出ると続いて、俺、真紀、綾子ちゃんの順で車を降りる。
「こいつは……」
なんとも馬鹿でかい屋敷だった。三階建てらしい屋敷は白っぽい壁で、各階にいくつもの窓が等間隔に設置されている。建物の端にはそれぞれ塔が立っていて、見張り台とも、隔離幽閉し監視するためのようにも見える。どことなく、鬱屈したものを感じさせる塔だ

った。
　十段かそこらの階段をあがり、主人を待ち侘びるかのように、すでに開かれている正面玄関の扉をくぐると、屋敷の中は中世ヨーロッパは貴族の城に迷いこんだのかと錯覚するほどのものだった。広々としたエントランスからは向かって三つに枝分かれした階段があり、二階へと繋がっている。
「おかえりなさいませ、ご主人様」
　そういって屋敷へと案内した給仕の男が、チーフに向かって告げると軽く頭をさげた。
「ご主人様だなんて、あんた、この城の主なのか」
「うむ。そういうことになるな、九鬼君よ」
　ここにきて先頭をいっていたチーフの男は、振り返って薄笑いを浮かべる。どういうことだと口にする前に、真紀がいった。
「いかがでしたか、ミスター・ベーア」
「ああ。なかなかに悪くない。君の見立て通りだな」
　ミスター・ベーアだと？　真紀が目の前のチーフらしい男に放った言葉に、疑問符が浮かんでは消えていく。
「ふふ、驚かせてしまったかな」
「……そういうことだったのか」
　信じられないことに、してやったりといわんばかりに気に入らない薄笑いを浮かべている男こそ、ミスター・ベーアと呼ばれる人物そのものだったのだ。俺は驚きながらも、内心ではついに獲物の一人に辿り着けたことを悦んでいた。
　武田のことは当然だが、思ってもいない大物がかかったとあれば、このチャンスをみすみす逃すつもりはない。もしかすると、これまで明らかにされてこなかったことや知りたかった情報は元より、それ以上のことも知ることができるかもしれない。

第８４章

冷房の効いた部屋に俺は一人黙って、ずっしりと長椅子に腰かけていた。

とても広い応接間で、屋敷のもっとも東側に位置している部屋は、南側に五つ、東側にも四つの大きな窓があり、それぞれに一人用の狭いバルコニーがついている。敷き詰められた絨毯は例によって赤色をしており、つややかに見えるその繊維にはシルクが混ざっているのが窺えた。

そんな部屋の中心に、細く長い楕円形のテーブルとその周り三方に一人掛けのソファーと左右に四人掛けのソファーが置かれてある。一人掛け用の先には暖炉があることからも、季節に関係なくこの部屋を使うことができるのは、考えるまでもないだろう。

部屋とはいうけれど、むしろ、ちょっとした広間といったほうが適切かもしれない。広さとしては、ゆうに三十坪近くはありそうだった。これだけの広さがあれば我が国の国土事情と建設法を察して、ここに小さめの平屋建ての一軒家を建てることだって可能だろう。

しかし、こうも広いと逆に恐縮してしまうのも事実で、どこか落ち着かない気分でいるのも確かだった。自分の意思でくることを選んだにしても、これではさすがに落ち着ける気分ではない。

それに俺は格段、豪奢な生活や見栄えのするものに興味があるわけではない。自分でいうのもなんだが、わりあい貧乏であっても全く構わない、つつましい生活で十分満足できる人間だ。もっというと、スコッチを片手にダラダラと自堕落に過ごせればあとは特になにか欲しいとは思わないのだ。

そんな自分の性格と、初めてきた場所は瞬時になにがあるか確かめずにいられない職業病とあいまって、部屋に通されたときから気になっていた壁際のサイドボードにある酒に目がいっていた。気分

を落ち着かせる意味で、少しくらい飲んでもばれやしない、そう思って長椅子を立ち上がりサイドボードの前にきたところ、部屋のドアが重々しく開いた。

「待たせたね」

そういって颯爽と入ってきたのは体格が良く上背もある初老の男、ミスター・ベーアだ。アクションサービスの恰好をして六角の側にいた男が、実はミスター・ベーアという大物だったのだ。

その男は自身の屋敷に戻ってきたこともあって、紅いシャツに白のスラックスという簡素な出で立ちだった。家ではいつもパイプを手放さないのか、左手にはパイプが握られている。

「女性陣の着替えには時間がかかるから、しばらくは私たちだけで話そうか」

ミスター・ベーアは一人用のソファーに歩みよって、ゆっくりと腰かけた。その一連の動作はきびきびとしながらも、優雅さをも感じさせる。

「そうだな。秘密の商談には、昔から男だけってのは相場が決まってる」

ニヤリとしながら、俺もサイドボードの前から横の長椅子まで移動して座った。酒は手にすることはかなわなかったものの、男二人だけで本気の話をするのに酒はまずい。会話から、今後に響いてくる話もでないとは限らないのだ。

「ひとまず、君には礼をいっておかなくてはな」

「なんの話をしてるんだ」

「ホテルで君が私を突き飛ばしたろう。あのおかげで助かったのだ。もし君があの時突き飛ばしてくれなければ、私はきっと今頃胸に風穴を開けられていたことだろうな。あるいは顔だったかもしれないが」

別に助けたくて助けたわけではない。たまたま綾子ちゃんを助けようとしたときに、この男が邪魔になって突き飛ばしたにすぎないのだ。それに気づいてないわけでもないのだろうが、わざわざ礼を

いわれるようなことではない。けれど相手がそう思っているのなら、それならそれで勝手にそう思わせておくとしよう。

俺は瞼を閉じて片眉を上げながら、肩をすくませた。

「俺としては、まさか組織のトップといわれる男とこうして面を向かって話せるだなんて、思ってもみなかったですがね。ずいぶんと出世したことになるわけだ。

まぁ、そいつはいい。それよりも、あんた、今晩のパーティーになんだって危険を冒してまで出席したんだい。俺にはそっちのほうが気になるぜ、だってそのために六角という優秀な駒を失っちまうことも、あんたには読めたんじゃぁないんですか」

当然の疑問をぶつけたところ、ミスター・ベーアは一度だけ首を振る。

「君はなにか勘違いしているようだがね、私は六角のことを駒だなんて思ってはいない。彼、六角は私の表向きの代行人という仕事を全うしていたのだ、もちろん立派にやっていたさ。

そんな優秀な人間を失うかもしれないのに、あんな催しをただ開くはずがない」

「つまり、失う可能性が高くても開催する価値があった……ミスター・ベーア、あんたはこういいたいんだな」

言葉を引き継いでいうと、男が大きく頷いた。そして、その価値というのが暗殺者……結果としては違ったが、前の二人を暗殺した奴をあぶり出そうとしたわけか。

「うむ。概ね当たっている。六角に限らず前に殺された二人も同様に優秀であったんだが、彼らは組織の運営を行うための資金を稼ぐためには、とても重要な人材だった。

そもそも三人いたのだって、仮に誰か一人の身に何かあったとしても残りの二人でなんとかできるはず、そう考えてのことなのだ。さすがに二人も失うとなると、一人ではカバーしきれない。だから……」

「危険だと知りながら、わざわざ表舞台に出てきたってわけか」

こうミスター・ベーアの言葉を引き継ぐと、彼が頷く。三人がそれぞれ異なった分野の事業で利益を上げていただけに、一人だけではカバーしきれないので二人の代わりを、今回新たに見繕おうとしたわけか。男は、やはり人の上に立つ者として多くを語ると相手に付け入る隙を与えてしまうことを恐れる習性からか、あまりストレートにものを言わなかったので裏を読んでみたところ、概要としてはそんなところだろう。

「まぁいい。組織の稼ぎ頭という三人が死んだだけで、俺もあんたに貢献していないわけじゃないからな。それよりも、俺が知りたいのは今回襲ってきた連中の正体だ。

あんたは知りたければ一緒にこいといったよな？　だからここにきたんだから、そいつを教えてもらおうか。あんたの口ぶりからは、どうも何か掴めてるみたいだしな」

普段通りの調子で聞いた俺にミスター・ベーアは、不意に真面目な口ぶりと眼差しでこちらを見遣った。一瞬にして重々しい空気になったのを察し、俺も目を細めて見返す。

「実は君に折り入って頼みがある」

「頼み？」

「ああ、そうだ。もう四年前の春のことだが……もしかすると、君も聞いたことがあるかもしれない。その頃ロシアの南方、グルジアやアゼルバイジャンなどの国境付近にあるカフカース山脈で、ある事件が起きた。

ロシアの国境付近では、小競り合いが頻繁に起きているのは君も知っているね？　当時、あの事件もそうした事件の一つだと思われた。良くある話だから、公安や警察を使えばそれですむ……そんな話だった」

ミスター・ベーアはどこか、遠い昔話を言い聞かせるような口ぶりで話しはじめた。

「この辺りの国境には、近くに必ず軍の基地がおかれてあるものだ。そういった場所では時折、ロシアから亡命してきたり、あるいは中

東方面の国々からロシアへ亡命しようとする者がいるからだ。
　当初、このときもよくある話でロシアを経由して、亡命しようとする者を軍が拘束する、ただそれだけの話だった。……だったのだが、そこに予期せぬ事態が起きた。国境警備隊の基地が、たったの一日でもぬけの殻となったというものだった。当時、基地に駐在していた兵ならびにスタッフ総勢五十九名が、行方知れずになったということだ」
「どういうことだ」
　俺はミスター・ベーアの言葉に眉をひそめた。お互い、国境という田舎も田舎、それも辺境といっても過言でない地域には大抵監視や国境周辺のトラブルの際に出動できるよう、軍の施設や小基地が設営されてある。そこには少なくとも必ず一個小隊が配属されているものだが、それが死んでいたというのならまだしも、たった一日で消えるなんてことがあるのだろうか。
「これは国は当然、国際的な極秘扱いにされているものなのだが判明するきっかけになったのは、毎日の定時連絡だった。朝の定時連絡に誰も出なかったことを疑問に思った連絡員が上層部に伝えたことを起因とし、はじめはロシアからの侵略行為かと思われたことで現地に兵が派遣された。　ところが派遣された兵からは、とんでもない報告がなされた。基地に詰めていた全員が、忽然と姿を消していたというのだ。もちろん、この報告に上層部は眉をひそめたものだったろう、結果報告の再提出を求めた。
　しかし、その結果が変わることはない。どう調査しようともそうとしかとることができないというのだ」
「カフカース山脈となると、辺りは雪山だろう。あの辺りの山がどれほどの高さがあるかは知らないが、少なくとも日本アルプスや北アルプスよりも高いはずだ。おまけに春頃となれば、まだじゃんじゃん雪は降ってもおかしかないはずだぜ。
　基地の周りに、足跡や何か痕跡はなかったのかい。五十九人が消えたのなら、そこらの積もった雪に足跡らしいものくらいついてる

はずだ」

当然の疑問を口にすると、男は首を振った。

「もちろん、そんなことは調査した者の誰かが気づいたろう。忽然と消えたというのは文字通りの意味で、基地を出たすぐのところの雪には踏みならされた跡がいくつも見つかった。ところが少し開けたところに出た途端に、それらが消えたというのだ。

基地の中にいたっては、まだ計器類や空調は正常に動き休憩の兵が聞いていたと思われるラジオも垂れ流しになったままだったそうだ」

「つまりあんたがいってるのは、何十もの人間が神隠しにあったっていいたいわけか。

馬鹿馬鹿しいぜ。きっと誰かに襲撃されたんだろう。いや、この場合は任務を放棄してトンズラしたか、ロシアとの国境が近いというなら、なんらかの事情でＦＳＢにでも拉致されたんじゃぁないのか」

その問いにもミスター・ベーアは、再び小さく首を振った。

「いいや、それはない。そもそも、侵入された形跡は一切なかったらしい。調査に当たった兵は、もし誰か入ってきたのだとしても、中に自然と入っていったとものでしか有り得ないと断言した。言うまでもなく基地は、真正面からしかネズミ一匹だって入ることはできない。というのも、基地は地下に向かって建設されたものだったからだ。

まだある。仮に正面突破を許したにして、不審な者がきたとなるとそこに威嚇射撃なりの弾痕があるはずなのに、そういった痕すらなかったらしいのだ。報告によれば、入口には軍の施設らしく見張りの兵も置かれていたのだから、これは明らかに異常だ。

基地内も、騒ぎ立てられた形跡はなかったようなのだ。誰がどのようにして兵たちを連れ去ったのか、皆目検討がつかなかった」

ミスター・ベーアのいう通り、それは確かにおかしい。軍の施設、それも辺境とはいえ基地に近づいてきた者に対して、威嚇射撃すら

なかったというのは明らかに何かあったと見るのが普通だ。見張りの兵は確実に、ライフルなりマシンガンなりを持っているはずだからだ。

話によれば、基地は山間に作られているそうなので、あるいは登山家がルートを逸れ道に迷ったから、なんてこともないとはいえない。しかしその場合、そうした人間は保護して拘束なりなんなりをすればいいだけであって、わざわざ銃をばらまく必要などない。それに、そうした事情があれば必ず日誌などにも記録されるはずなので、やはり調査員たちが気付かないはずはない。これらの点から必然的に、この線はいいということになる。

「誰かが極秘任務のために訪れた可能性は」

「無論考えた。しかし、そのようなことはなかったようだ」

俺は頷いて、なんとも奇怪な話に首をもたげた。誰かが来たとあれば、実はそいつがスパイで基地の連中を始末するために送りこまれた……そんな線も考えられるのだが、そうでもなかったらしい。何より現実的に見て、たとえ殺し屋によって皆殺しにされたとしても謎は残るのだ。仮にそうだとして、軍相手に一人だけというのもおかしいし、複数人だろうと戦闘の形跡が一切ないのはさらにおかしい。第一、戦闘を行った揚げ句にその死体を運び出し、基地内で何事もなかったかのように演出することのほうがはるかに難しく、そして非行率的すぎる。

「だが……だが、唯一の手がかりとなりうるものの影が写っているテープが回収されたことで、事実が判明した」

「テープ？」

ミスター・ベーアはゆっくりと落ち着き払って告げると、俺の反芻した言葉に目で頷いた。

「これは、君でない別の者がある指令を受けて任務についたときに、偶然に入手したものだ。中に写っていたのは、とても信じられないものだった」

そういって男はどこに隠し持っていたのか、ビデオテープを取り

出した。今時ビデオテープだなんてと思われるかもしれないが、東欧や中東方面ではそれでもまだ良いほうで、場合によっては録画用のテープすら支給、設備されていないことだってあるので珍しいものではない。

「一先ず、これを見てくれたまえ」

そういうと、中央のテーブルの下にある引き出しからリモコンを取り出すと、虚空に向けてスイッチを押した。すると、かすかな駆動音もさせずに天井から大きな黒枠のモニターが降りてきたのだ。そしてそのモニターの下部にはテープ、ならびにＤＶＤなども見れるようプレイヤーも備え付けられてあった。

ミスター・ベーアはそのテープをそこに挿入すると、リモコンをテーブルの上に置いてモニター画面のほうへと視線をやったので、つられて俺も同じ方向へと目をやった。同時に画面には不鮮明な映像が映し出される。何度も一瞬映像がとぎれとぎれになったりと荒い映像だが、どうもそこに映し出されたのは話の基地内部であるらしい。

不鮮明のためわかりにくいものの、映っていたのは基地の中枢といっても良い箇所にあたる場所のようで、ブリーフィングルームや指令室らしい部屋を両脇にした通路だ。地下に設営された基地らしく薄暗そうに見える通路に、幾人かの兵が軍人特有のキビキビと忙しげに歩いて、手に何かしらの資料を持って出入りしているのがわかる。画面右上にはその日の日付が表示されており、四月二十三日であることを教えてくれていた。その隣には、秒単位で変化する時刻も示されてある。

しかし、そこには普段の基地の様子といった感じで、緊急を要する慌ただしい事態に陥っているわけでもなさそうだった。そんな俺の思惑を感じとったのかさだかではないが、ミスター・ベーアがいった。

「ここまではまだ普通の基地内部の様子だ。問題は次なのだ」

そういって目を細めた彼に、俺は画面を注視したときだ。

「……なんだ、これは」
それを見たとき、思わずつぶやいていた。通路に、基地の兵たちがぞろぞろと現れはじめたのだ。
それもただ歩いてきたというわけではなく、全員が全員、足を引きずるように歩いているのである。ふらふらと一歩あるくたびに上体が右に左に揺れ、その姿はまるで夢遊病患者かなにかのようだ。
画面の右上の時刻はテープが再生されてから連続された映像で、テープがいじくりまわされた形跡はない。
映像の中では、ブリーフィングルームや指令室などからも次々に兵士らが集結してきており、異様だった。もちろん全員が、夢遊病患者のような足取りでどこに向かうでもなく、画面の中でさ迷っている。
もうこれ以上は、新たに集まってくる兵士たちを映しだせなくなるほど画面いっぱいになると、どういうわけかその兵士たちの人垣が中央から割れていき、人ひとりが通れる程度の花道ができた。その花道を、一組の男女が歩いて人垣の中央にまでくると、男のほうが何か言いだしはじめたのだ。
「なんだ、なんていってるんだ」
ここまで無音状態であったため、男の言葉を聞くことができない。おまけにカメラの設置位置が男の後ろから斜め下に向けてあるせいで、あとわずかのところで男の顔を拝むことができない。
「残念ながらわからない。だが続きを見れば、ある程度は推測できる」
男の言葉など聞くまでもなく、俺はじっと画面を見つめていた。すると、両手を後ろ手に休めの恰好をとっていた男が、こちらを振り向いた。いや、画面に映る、他の兵士たちに向かっていうために振り向いたのだ。
「この男は……」
振り向いた男の顔を見て、眉をひそませた。というのも男は、あの武田の顔それだったのだ。

四年も前の記録になぜこの男が現れるのか、その行動の意味を窺い知ることはできないが、確実にいえるのは奴の行動は決して普通でないというのと、ここに来なければならない理由があったのは間違いないことだ。どうやっているのか知らないが軍人という、屈強な男たちを無気力にさせ見たところ、無傷で基地内部に立ち入っているのはどう考えても普通であるはずがないし、仮にも軍事施設なのだからそんな特別な意味がなければそもそも用事などないはずだ。

武田の野郎が振り向いて周りの兵たちに言い終えた直後、連中の頭上を黒い影が飛び越えていった。ほとんど一瞬といっていい出来事に最初は目を疑ったが、それが見間違いでなかったことが次の映像で証明された。

俺はいつの間にか息を止めて、映像を食い入るように見つめていた。全くもって、この記録映像はなんなのだ。わけのわからないことの連続で、頭の奥にいる冷静な自分が、まるで映画でも観ているんではないのかと思ってしまうほど、驚きの連続だったのだ。

兵士たちの行動や武田の野郎が映っていたのはもちろん、一瞬見せた黒い影の姿がはっきりと見えたとき、そう思わずにはいられなかった。画面に映っていた影は、通路の天井に長い手足で掴むように真っ逆さまに張り付いているのだ。重力によってだろう、硬質そうで針みたいな毛がこちらに向かって威嚇しているように見える。

顔らしい部分があるのもわかる。巨大な犬か狼を連想させる顔で、縦に伸びた鼻に口は大きく開かれていて、中から鋭く長い犬歯が上下にそれぞれ二本生えている。目の色はとても大きく吊り上がっており、白黒の画像からでは判断しにくいが赤く色づいているように見え、瞳孔は全くない。そして全身が黒っぽい色をしていた。

そいつは、どう見てもこの世のものとは思えない様相をしていた。よくよく見れば長い手足から伸びた指は人間と同じ五本で、犬や狼のそれとは明らかに別物なのだ。だが下半身……といっていいものなのか、臀部らしい部分からは尻尾らしいものも伸びており、ガチガチに尖っているように思えた。

奇怪な動きで、天井に張り付いているというのに重力などまるでないかのごとく、縦横無尽に走り回っているのだ。そして、そいつの奇怪な動きに下の兵士たちは誰ひとりとして頭上を見上げることはなく、変わりに今まで微動だにしていなかった女が興奮しているそいつを、窘めるように両手を上に捧げ振り向いた。

そこにあるのはどう見ても、妹である沙弥佳の顔、それだった。

「沙弥佳……？」

記憶の中の妹と変わらぬ顔立ちは、思わず俺にそうつぶやかせずにはいられないものだった。背中まである長い黒髪や整った切れ長の瞳も、すっと通った鼻筋から、やや上向いて均等のとれた唇まで、まさしく記憶の中で思い描いている沙弥佳そのものなのだ。

映像の中の沙弥佳は静かに目をつぶった。その表情は、いつか俺に口づけてきたあの時の表情と同じもので、なにか儀式めいて思えるものでもあった。直後に、天井を嬉々として走り回っていた影は瞬時に止まると、今度はこちらに向かって走りはじめ画面が黒に塗り潰された瞬間、画像が大きく乱れたところで映像が途切れた。

音もなく、ただ何も映し出されていない画面を茫然と俺は見つめたままだ。頭が混乱していた。武田、黒い影、妹、沙弥佳……そして、なぜ沙弥佳がロシアの国境にほど近い場所にいるのか。そして、なぜ武田の野郎なんかと一緒にいるのか……。

「映像はここまでで、彼らがこのあとどうなったのか詳細は不明だ。ただ、この映像からは、現れた男が彼らを連れ去ったという風にしか思えない。君も見てもらった通り、どう見ても男が彼らを扇動しているとしか思えないからだ。

しかし、にも関わらず、大の大人……それも、しっかりと訓練を受けた軍人が揃いも揃って全員がそれに同意したとは、とてもではないが考えられん。むしろ、なにか薬物でも投与され仕方なく動かされた、という説明のほうがまだ現実的だ」

ミスター・ベーアがなかばまくし立てるように言い捨てた。まぁ、その気持ちもわからないではない。だがしかし、あの武田を前にす

るとどうだろう。奴にはどういうわけか、人の心を深いところで掴んで放さない、特別なものを持っていると思えて仕方ないのだ。あれがカリスマとでもいうのか、とにかく俺ですら気が飲み込まれそうになっていたのだけは間違いないことなのだ。なんとも忌ま忌ましいことだが。

それよりも今の俺には、最後に映っていた沙弥佳のことで、頭がいっぱいだった。もちろん武田のことも気にならないわけではないが、四年前の春といえば沙弥佳が島津の研究所を脱してから一年以上は経っている頃で、そんなときに二人が一緒にいるという事実に、自分でもどうしようもなく衝撃を受けていたのだ。

それとともに、研究所の責任者だった坂上が三週間に一度はＮＥＡＢ－２を投与しなければならないといっていた事実も、脳裏によぎっていた。沙弥佳が生きていた……この事実は限りなく俺を歓喜させる事実であるけれど、かといって、あんな危険な薬を投与されて三週間に一度はそれを体内に取り込まねばならないという中で、どうしてそれをしなくとも一年以上も生きることができたのか、それだけが心にひっかかり気になった。

どんな目的があろうとＮＥＡＢ－２の投与は被験者を死に至らしめるものであるのに、どういうわけか沙弥佳はまだ生きていた。この事実に俺は素直に喜ぶことができず、どうやって生き残ったのかという疑問がつかず頭の中にこびりつく。

「入手できた記録映像は以上だが映像の、兵の中を割ってきた出てきた男が私が追っている人物だ」

「もう一人の女は」

「残念ながら不明だ。男と同じで過去の経歴は当然、個人データの何から何まで調べさせたが検索に引っかからない」

ミスター・ベーアは、かぶりを振りながら答えた。俺はその答えに面白みのない話だと肩をすくめはしたけれど、内心では一体どういうことだと再び疑問符を浮かべた。失踪にしろ死亡にしろ何かしら記録としては残るはずなのに、それらの記録が一切見つからなか

ったというのは、どう考えたっておかしい。
まさか沙弥佳の出生届がなされてないというのは、さすがに考えられない。両親の性格上それは絶対にないだろうし、論理的にそれを法律や世間も認めることはないだろう。もっともらしい理由は他人の空似というやつだが、こうも都合よくあるものなのか信じがたい。
また、ここまでの一連の流れを考えて、沙弥佳が実は俺の周りにすでにいる可能性がある以上、映像の中の女が妹である可能性がもっとも高いといえる。第一、沙弥佳の影が現れたと思わせるときは、全て武田絡みのときだけだ。このことを考慮すると有り得ないどころか、むしろ可能性が高まる一方なのだ。
「疑問があるぜ。あんた、この男を追っているといったよな。あんたとの関係は？　それと追わなきゃいけない理由はなんなんだ。
それと……こうして俺にトップシークレットであるこの映像を見せるってことは、何か理由があるんだろ？　そいつも包み隠さず話してもらおう」
強気に話す俺にミスター・ベーアは、もちろんそのつもりだと答え、続ける。
「この際だから隠す必要はないから言おう。ことの興りは八十年代にアメリカであった、ある実験から始まったのだ。軍がスポンサーとなり、新世紀に向けた新たな装置の開発のための実験だ」
「ああ、そいつは知ってるぜ。タイムスリップするための実験だろう。結局は失敗して、お蔵入りになった」
「そうだ。だが、この実験の失敗に裏があったというのは知っているかね。この実験が成功するかしないかは別として、強制的に失敗させられたという事実を」
初耳だった。結果としての事実は知ってはいたが、その話は聞いたことがない。ミスター・ベーアはそんな俺の空気を察したのか、静かに語りだした。
「実験が事実上の失敗に終わり、プロジェクトが解散したのは一九

八五年九月のことだ。当初、この実験が成功した場合、その一部を世間に公表することが決まっていた。なんせ、ありとあらゆる分野の権威たちが集められ、よかれ悪かれ多くの収穫がなされた実験だから、そのいくつかの実験からは世間に公表することでアメリカとしても、旧ソ連に対して軍事的、経済的の両面から無言の牽制にもなりえるものだからね。

それに対しソ連は、実はその一年以上も前から実験のことを知っていたのだ。当時は、冷戦を終えた両国が一旦は良好な関係を築き、共に発展しようということで双方が合意を得た頃だ。しかし、それは表向きだけで実際には互いにスパイを送り込み、地下戦争を行っていた時期でもある。君なら、この辺りは説明しなくとも察しがつくだろう」

「つまりＫＧＢから送りこまれたスパイによって、ソ連の上層部にはすでに知られていたってわけだな」

「そういうことだ。当時のソ連は莫大な資金を軍事費に注ぎ込んでいたのは知られていることだが、その実、世界中に軍事拠点を置くことでアメリカを超える一大帝国を築こうとしていたのだ。

そして、その工作員の一人に……こういう男がいたわけさ」

そういって差し出された写真を見て、俺は我が目を疑った。その写真に映っていたのは俺も最近知った顔で、あの武田の顔が映し出されている。

「この写真は……一九八五年当時、なんだよな……？　どういうことなんだ」

ミスター・ベーアの頷きに眉をひそめ説明を聞くと、写真はプロジェクトが終結する二週間ほど前に撮られたものだと説明を受けたが、この顔はどう見たって、つい昨日一昨日に撮られたものではないのかと思えるほどに、全く時間の経過を感じさせないものだった。

以前、死んだガスに依頼して武田のことを調べさせたとき、写真を見て今回と同じで、まるで奴の時間は止まっているんではないのかと思えるほど、老いというのを感じさせなかったのが思い出され

る。おまけに今回にいたっては、それよりもさらに何年か前の頃のものなのにだ。

今でこそ考えが及ぶものだが初めて武田の野郎と出会ったとき、奴の顔立ちや印象が写真とはやけに違って見えたこともあり、奴を武田だと気づけなかったのはかなり痛かった。もし気づいていれば、まだいくらかやりようもあったかもしれなかったのだから、今さらながら後悔していた。

「まるで不老に見えるだろう」

ミスター・ベーアが写真を食い入るように見る俺に、静かに聞いた。どうやら俺が以前、ガスを使って武田を調べさせたことも、目の前の男はすでに知っているらしい。

しかし俺はそんなことよりも、不老という言葉に思わず、ありもしないことを考えいた。不老というのは、あの島津が行っていた研究の命題で、そのために坂上を筆頭にしてプロジェクトチームを組んであったのを思い出していたのだ。

普通であれば何を馬鹿なと笑い飛ばすところだが、いかんせん今の俺には確実にそれらを笑い飛ばせる自信はなかった。というのも、あの坂上が創りあげたゴメルという化け物やなんかのことを思い起こしてみれば、それもあるかもしれないとどうしても脳裏をかすめてしまう。

素人判断ではあるけども、少なくとも不死なんてものよりは、いくらか不老のほうが可能のような気がするのだ。あのゴメルの驚異的な再生能力を思い出すと、不死は脳みそが吹き飛んでしまったことから無理であっても、不老ならあるいは……そう思えて仕方ない。

「この男がどうして年齢を重ねていないかのように見えるかは、この際おいておこう。問題は、プロジェクトを無期凍結に追いこんだのがこの男だということだ。

君も知っている通り、この武田と名乗る男は世界を股にかけた凄腕のスパイだ。この当時はＫＧＢの工作員として動いていて、何人ものＣＩＡ工作員を闇に葬っている。もしかするとＫＧＢの身分を

手にする前にも、何かしらスパイ活動を行っていたかもしれない」

武田の詳しい素性は、ミスター・ベーアのもつ組織網を駆使しても掴めなかったそうで、それはかの旧ＫＧＢやＣＩＡにしても同じことだったという。つまり、武田の正体は依然として謎のままなわけだ。世界屈指の情報収集能力を誇る連中をもってすら正体が掴めないだなんて、とんでもない奴ではある。情報屋として一流だったはずのガスであっても素性を知ることができなかったのは、仕方ないといってもいいだろう。

そんな武田だが、先ほどの映像が元でどうにかいくつかのことがわかってきたらしい。かつてのＫＧＢ筋から、武田らしい非合法員（イリーガル）が存在していたという情報が洩れたのだ。そこから判明してきたのはどうやら一時は渡米していたこと、さらには当地の人間を巧みに操り情報を仕入れていたというものだった。

「いくら現地の人間を使ったといっても、軍の機密プロジェクトだろう？　そんな簡単に掴めるものとは思えないが……」

「うむ。それに関しては私も同じ疑問を抱いたものだが、後に武田が情報屋として使っていた者を捕らえて聞き出すことに成功した。その人物は、元々プロジェクトの中枢にも絡んでいた人物だったので、そこに武田が付け込み、なんらかの裏取引でもなされたのかと目された」

「違ったのか」

「ああ、そうらしい」

「らしい？　捕らえたというわりに、えらく抽象的だな」

俺がそう口にするとミスター・ベーアは、眉をひそめて苦笑いを浮かべながら答えた。

「もちろん捕らえたさ、我々がね。私の部下にはそういった組織の中にもいるからね。しかしそれらのことを告げた直後、何者かに射殺されたのだよ。

おかげで武田の足取りは掴めずじまいだったが今度の騒ぎで、再び武田が暗躍しているのをようやく掴むことができたのだ。実に、

湾岸戦争時以来のね」

結局、武田がかつてのプロジェクトを失敗するよう工作したのには違いないが、その理由まではわかっていないとのことだった。というのも、武田はこの事件の直後にＫＧＢから姿を消すことになったからだそうで、三年後の一九八八年の中東で姿を見せるまでの間、消息を絶っていたというのだ。

それだけでなく、それと並行する形でソ連の政党局員すら手籠めにし、ソ連解体を導くための手引きすらしたというから、武田はＫＧＢを裏切ったことにもなる。いや奴に限っていえば、工作員という肩書きすら仮初めで始めから、何か別の目的があってＫＧＢに潜入したと見るほうが自然だ。いつからスパイなんぞやっていたのか知らないが、プロジェクトを中止させた直後に姿を消し再び現したと思いきや、母体となる国を解体にまで導いたとなると少なくとも、組織に忠実だったとは言い難い。

また湾岸戦争時においては小隊を率いていたと聞いたから、てっきり傭兵部隊なのかと勝手な先入観を持っていたけども実際には違っており、クウェート側の正規部隊だったというのだ。別にクウェート国籍を取得している日本人がいないわけではないので、珍しくはあるがおかしいわけでもない。

俺が気になったのはそこではなく、武田の奴が偽造旅券でクウェート入りし、クウェート国籍を手に入れたあと軍に入ったのはいいとして、そんなに都合よくいくものかという疑問があった。連合軍の差し金でＫＧＢ仕込みの身分を与えられたというのなら、まだ理屈は通る。しかし、その前にドロップアウトした奴がそれをできるとは、少し考えにくい。

あの戦争にＫＧＢ……いや、その頃にはソ連は解体していたのでＫＧＢはもうないが、その後続機関が関わってないはずがないので、連中が戦時の水面下において行動していたのは違いない。そんな中で裏切り者である奴が動いていたなら、奴はとんでもなく図太い神経の持ち主だといってもいいだろう。全く、裏切り者には死という

鉄則がこの業界の常であるはずなのに、いけしゃあしゃあとよく現れることができたものだと感心する。

しかし、武田がそこまでのリスクを負うとも思えないのも事実だ。奴にはそうまでして得なければならないことがあったということ、また、奴がどういったからくりがあるのかも気になるところだ。

「ところであんた、武田の奴が政財界に顔がきくと聞いたことはないかい」

「聞いている。しかし、そこに結託している人物たちが一向に見えてこない。いても、どういうわけかすぐに死体となって見つかるので、行方知れずになるからだ。

あるいは、そもそもがそんな人物たちがいなかったともいえるかもしれないが、だとすれば奴は一人で政治や金、市場は当然、軍事すら動かしていきたことになる。さすがにそれは有り得ないことなので、こうして何年も追っているのだがね」

最後はやや自嘲気味にいったミスター・ベーアに俺はそうかと一言告げ、考えを巡らせる。

目の前の男もどうやって巨万の富を得たのかという点では武田と同じではあるけども、さすがに武田ほどの怪しさはない。もしかしたら俺が知らないだけで、もっと別のやり方があるのかもしれないのでそこは置いておくとしよう。問題は武田のほうで、聞けば聞くほどに掴み所がなくなっていくように思えて仕方がなかった。まるで、武田という人間の幻影を追っている気分にすらなる。

奴がいくら優秀なスパイであろうと、冷酷極まりないＫＧＢから逃れただけでなく、戦時中とはいえ戦場の最前線に出てこれたのには、間違いなく何か別のルートがあったはずだ。そうでなければ、そんな大胆な行動などできるはずがない。

まぁいい。そのあたりのことはいずれ必ず突き止める必要があるが、今はまだ謎が謎のままだというのなら、このままでいいとしよう。わからないことにいつまでも気をとられるわけにもいかない。他にも気になることはあるのだ。

「まぁ、武田のことはひとまずいい。さっきの映像に出てきた……黒い影は」

化け物といおうとしてやめ、俺はいい換えた。島津研究所で見たゴメルと比べれば、大したことではないように思えたためだ。自分の変に冷静な面が出ただけなのか、単に異様なそれそのものに慣れただけなのか定かではなかったが。

「うむ。あの影についてはすでに目星はついているのだ。君とて、もう気付いているんではないかな。島津の研究所に乗り込んだ君ならね」

まぁなと、俺は小首を捻りながらくしゃりと答える。やはりあの黒い影は、坂上の研究によって生み出された化け物だったのだ。正確には坂上の研究を元に、といったほうが正しいだろう。坂上がわざわざ人に研究データを渡すとも思えないうえ、武田も奴から、ただデータを頂戴したわけでもないはずだ。きっと抜目ない武田のことだから、データをコピーし改良を加えたと見たほうがいいに決まっている。映像を見る限りでは、あのゴメルとは随分違って思える様相だったのがそれを示唆している。

ゴメルの場合は始めから奇形な感のする姿をしていたが、今回は奇形といえるほどの姿はしていない。自然の生んだそれとは違うのは間違いないとしても、どこか整然とした姿をしているように感じたのだ。ゴメルがまるで、黒い影の化け物へと進化するための成長途中であるかのようですらある。

そして当然というべきなのかミスター・ベーアは、島津での実験の概要を知っているようで、さらなる説明をしてくれた。

坂上はゴメルを沙弥佳に次ぐ成果だと告げていたが、実際にはそこから新しい段階への実験を行っていたらしい。奴は、ゴメルという実験体の成功に伴い、その細胞を使って新たな生命体の創造を試みたという。幾度に渡って採取され培養されていた沙弥佳の細胞と、ゴメルの細胞を組み合わせて全く違う生命体を創ろうとしたのだ。

しかし、それを行うには母体となる雌の生命体が必要になるらし

く、本来であればオリジナルこそ母体に相応しいそうだがそんなわけにいかなかった。そこで仕方なく、何種かの生物に培養されていた沙弥佳の血液を投与し、それらの生物を新たな母体として補うことで、沙弥佳とゴメルの細胞を引き継いだ新たな種の創造を試みたのだという。

これは要するに、他種間による人口交配ならびに、代理出産に近い概念だといえばわかりやすい。種としての仲間同士を超えた交配に成功させた坂上は、それだけで科学を信望する連中からすればノーベル賞ものかもしれない。

「……なるほどな。島津の研究所で見た、あの奇形の化け物たちはそういう過程で生み出されたものだったのか」

あの虎や熊を思わせる姿をした生物たちは、新たな実験で生まれた新しい生物だったというわけだ。坂上がゴメルとそれ以外といった具合に口走っていたのを思い出し、俺はそういうことだったのかと納得できた。

あの生物たちは成功への過程という形で生み出され、成功へ近づけるために必要なデータを取るために生かされていたにすぎない、サンプルでしかなかったともいえる。

だとしても全く違う種同士の組み合わせで、母体となる生物に似てはいても全く違う種を生み出したわけだから、坂上の実験はある意味では成功だといえるかもしれない。普通に考えれば、全く違う種同士で子孫ができることなどありえないのだ。

しかしこの事実は、ミスター・ベーアのいうオリジナルというのが沙弥佳のことを指しているわけで、俺にはどうにも悍ましい気持ちしかなく、やはり坂上などこの世にいらない奴だと改めて思うだけでしかない。

だってそうだろう。ゴメルのような化け物に、自分の妹が遺伝子レベルでのレイプをされるようなものなのだ。それに嫌悪感を抱かないはずがない。おまけに、あの化け物たちが遺伝子レベルでの話とはいえ、自分にとっての甥か姪に当たるだなんて考えたくもない。

たとえそれが代理出産による、間接的なものであったとしてもだ。
やはり坂上だけはこの手で八つ裂きにしてやりたかったと、改めて後悔した。たとえ坂上が天才であり科学者として優れていようが、俺が奴を褒めたたえることなどないし仮にまだどこかで生きているとしたら、次こそ喜んで地獄に叩き落としてやるつもりだ。

ミスター・ベーアの計らいで部屋を割り当てられた俺は、広いベッドの上に大の字で寝転がりクリーム色をした天井を、これからの身の振り方について考えながら見つめていた。
やれやれだ。こんな組織なぞ抜ける気でいたこともあったので、良い口実として武田と半ば強制ではあったが手を組んだはずのに、お次は組織のトップだという男の話を聞いてすぐに組織を脱走するわけにもいかないというジレンマに陥ってしまうだなんて、予想もしなかった。
まだ組織に残っているほうが利用価値もあるので、しばらくのあいだは抜けるつもりはない。が、俺の動きを読んでいる節のあるミスター・ベーアに対し、警戒を怠るわけにもいかない。体よく、ついてくると言い張って聞かない綾子ちゃんを盾に、断らせないよう仕向けたのは明白なのだ。今はよくても、そのうちクビを言い渡した挙げ句に始末をつけてこないとは言い切れない。
こうなると逃げ場がない。綾子ちゃんを見捨てるならカタがつき次第、逃げ出すという選択肢もある。しかしまことに残念ながら、変なところでお人よしな俺にそんなことができるはずなどなかった。そのためこれまで以上に、なんとかしてミスター・ベーアと武田の二人を出し抜く必要がでてくる。
まずミスター・ベーアは武田のことを告げてきたことから、奴になにか恨みなりなんなりがあると見た。俺に全て言うなどといいながら、男は武田との関係を話すことはなかった。しかし、ここから

ミスター・ベーアという男が武田に何か思うことがあることが、すぐにわかった。

次に武田の野郎は謎めいていて、はっきりとした目的が判明するまではまだなんともいえないところだが、こっちもミスター・ベーアを狙っているのだけは確実だ。つまりこの二人には、どこかで見えない何かで繋がっているとみて間違いない。二人を出し抜くには、その何かを突き止め、俺がそいつを奪取するしかないということだ。

その何かがなんなのかという疑問はあるが、これに関してはそれなりに目星がついている。重要なのは、それらの関係性なのだ。関係性がわからなければ、目星がついていたとしても奪取する意味がない。

こうなると、本来であれば今すぐにでも動きたいところだがこの屋敷にいる綾子ちゃんの手前、そんな行動は控えなければならない。その彼女にも俺同様に部屋があてがわれているはずなので、彼女の部屋にいくべきだと思っていたところ、部屋のドアをノックする音が響いた。

俺はドアのほうへ首を捻り、無言のままドアからの反応を少しのあいだ待って、のそのそとベッドから立ち上がりドアまで歩み寄った。ドアの向こうからはまだ人の気配を感じる。

俺はそっとドアを開けて外にいる人物を確認すると、一気にドアを開けてその人物を招き入れた。その人物とは、同じくミスター・ベーアの計らいで同じ階の客室に部屋をあてがわれたはずの、綾子ちゃんだった。

「眠れないのか」

「……」

こちらの問いに綾子ちゃんは、小さく頷く。

「どうしたんだ」

俯く彼女に俺は怪訝な様子で伺ってみるが、綾子ちゃんはただ無言でその場に突っ立ったままだ。突然の来訪者の思いがけない態度に、俺は間がもたず落ち着かない。

考えてみれば、彼女は勢いでついてくることになったとはいえ、俺の様子が色々と違うことに何か勘づいていないはずはない。彼女の思わぬ登場で気が動転していて忘れていたのかもしれないが、スパイ容疑やらなんやらで一時は全国に指名手配を受けた俺だ。落ち着いた今、それらの真偽を確かめたいと思って訪れたとしても不思議はないだろう。

「九鬼さん……」

蠱惑的にそうつぶやいて俺を見上げる彼女の目は細く、瞳はうっすら潤んでいる。それは男を惑わせる、女の魔性を垣間見る媚びた目だった。

俺は思いもかけない彼女の態度に内心ひどく困惑しつつ、君でもそんな目をするのかと考えながら、自分以外は誰も気づかないほどの小さなため息をついた。

第85章

深夜の高速を、車で西に向って走っていた。綾子ちゃんを助手席に、粘つく熱帯夜の中を軽快に飛ばす。

車内には気を紛らわすためにつけたラジオから、リクエストで三十数年も前にヒットした歌が流れている。平日の深夜も二時になろうというこんな時間のラジオを聞いている、殊勝な人間もまだ世の中にはいるようだ。それも、リアルタイムにリクエストするようなヘビーユーザーが。

そのハイミディアムなテンポと軽快な調べにのって、ついついアクセルの踏む足にリズムをのせてしまい、スピードが上がったり下がったりを繰り返してしまう。

隣に座った綾子ちゃんは昨夜話した俺の話を聞いてからというもの、すっかり黙り込んでしまい高速で流れていく夜の景色を、あまり瞬きすることもなく眺めていた。俺が仕事だからとミスター・ベーアの屋敷を出ようとしたときに、自分もついていくと言って以来、互いに言葉を交わそうとはしない。

本来なら、仕事についてくるだなんて強く拒否しなくてはならないところなのに、自分でもどういうわけか顎でしゃくり、連れてきてしまったのだ。自分が気まぐれな気があるのは知っていたが、さすがに今回ばかりは一体どうしたんだと自問自答せざるをえない。

ともあれ、ミスター・ベーアのところに彼女を置いておくわけにもいかないのも確かだった。今回は仕方ないと自分に言い聞かせ、それ以上のことは頭の隅においやった。

速度計をチラリと見遣ると、速度はすでに一三〇キロ近くになっている。深夜の道を走る車は、みんな一概に法定速度などはるかに上回る速度で走るため、とても一三〇近くも出ているとは思えない。感覚としては、まだ百キロ出ているかどうかという具合だ。

互いに交わす言葉もないまま、高速の緑色をした標識が目的地まであと四〇キロであることを告げる。このペースでなら、目的地までどう長く見積もっても三〇分とかからない。しかし、俺はそこまで行くつもりは毛頭なかった。

「次の出口で降りるぜ」

標識には、次の出口まで一キロとも表示されてあった。もっとも近い出口まで行けるのが理想ではあるけども、ミスター・ベーアのことだから、尾行をつけていないとはいえない。今のところは、まだ俺が裏切り者であるとはバレてはいないようだが、向こうには、あの真紀がいるのでもしかすると、あの女狐から何かしら入れ知恵されないとも限らない。

ちょくちょくサービスエリアに立ち寄り、尾行の車がないかも確かめてきたので大丈夫だとは思うが念には念を入れて、数十キロも手前で高速を降り、そこから地道で行くことにしていた。もちろん、そこからは今のこの車も乗り捨てて、新しい車に乗り換えるつもりだった。大した錯乱にはならないだろうが、十分な時間稼ぎにはなるだろう。

綾子ちゃんは俺の一声にただ頷くばかりで、神妙な顔つきを崩すことはない。今までは高速ということもあって、こちらからもあまり声を発することはなかった。しかし、これからの地道ではそんなわけにもいかない。一応、一緒にいる以上はこちらに従ってもらう必要がある。なんせ、強力な軍や部隊を持ち合わせた奴らを、同時に相手にしなくてはならないのだ。

前もって告げていた通り、出口が見えてきたところで俺たちの乗る車以外、誰も降りそうにない田舎道へと続く出口へ、キャッシュで料金所を抜けて地道に出る。地道に降りたこともあってアクセルを緩めた。速度計は四十キロを示しているが急激な速度変化のため、とてもそんなに出ているとは思えないほど、のろのろ運転に感じて仕方ない。

「とりあえず、そろそろ降りる準備をしておいてくれ。業者が見つ

かり次第、この車とはおさらばするからな」

まぁ、荷物ははじめから足元に置いてあり、準備らしい準備もないがそういった俺に対し彼女は、表情を曇らせるだけで頷くことはなかった。きっとミスター・ベーアの屋敷で、この車を拝借したのを思い出しているのだろう。もしくは昨晩、俺に告げられたことをまだ考えているのかもしれない。

昨晩、屋敷で今後の活動について考え練っていたところ、割り当てられた部屋を訪れた綾子ちゃんにどうしてもとせがまれて、渋々、俺が彼女と再会するまでの経緯と春からの一連の出来事について、かい摘まんで説明することにしたのだ。彼女はその間黙ってこちらの話に耳を傾け、頷くことさえほとんどしなかったのが印象的だった。

「……まぁ、この数年間のおおざっぱな概要としてはこんなもんさ。別に君のことが嫌いになっただとか、そんなわけじゃない。結果として君を裏切ったにしてもな」

じっと俯き加減に見つめていた綾子ちゃんから、俺は逃げるように虚空へと視線を泳がせる。どうにも俺は、彼女の向けてくる視線には弱いらしい。それは罪悪感がなせるものなのか、それとも別のことからくるものなのか定かではないが。

「……九鬼さんは、さやちゃんのために今までの生活を捨てた……そういうことなんですよね？」

ゆっくりと告げられた言葉に、俺は肩をすくめるだけだった。往生際が悪いといわれるかもしれないだろうが、なんとなく素直に認めることができない。

「動機としてはそうだが、一概にそれだけでもないよ」

逃げともとれるこんな台詞をいうだけで、そのときの俺には精一杯だった。こんな俺の話に愛想を尽かせるというのなら、それはそれで結構なことだ。少なくとも俺との縁は切れるだろうし、俺の肩の荷も降りるというものだ。

しかし綾子ちゃんは目を伏せると座っていた椅子から立ち上がり、

無言で部屋から出ていった。これで彼女との繋がりも、完全に終わった……そう思い、翌日の朝には屋敷をトンズラする予定で今後の活動を考えていたら不覚にも、ベッドの上に伏せた形で眠ってしまっていた。

朝から俺は屋敷から抜け出すための準備に取りかかり、夕方には屋敷を離れる予定でいたのだ。しかしそこで予定外なことがあった。朝から動いていた俺に不審げに思っていたに違いない綾子ちゃんが、旅の道連れになることを自ら望んだのだ。その心中は俺には理解しがたくもあり、同時に感謝の気持ちもあるのは間違いないが。

それでも見方によっては、当面はまだ組織の一員として行動することがあるはずなので良いが、どのみちミスター・ベーアが敵になることは確実なのだから、こちらの手の届くところに綾子ちゃんがいるならば、それはそれで安心もできるのも確かだ。結果として彼女を巻き込むことになってしまうけども、こうなった以上、後悔していたって何も始まらない。

そこで今回俺は、一路関西に向けて車を走らせることにした。関西の港には、海外から運ばれてくる多くの物資に紛れて、秘密裏に輸入される物がよくある。持ち込まれる物量自体は東京のほうがもちろん上だが、その割合が高いというのが正確な表現だ。

密輸によって入ってくる品物などはどこの国でも同じようなものだが今回、俺がわざわざ関西にまで走ることになったのは屋敷を抜け出して毛利の医院に戻ったとき、そこで思わぬ収穫を得ることになったためだった。

医院で休んでいたエリナが田神に招集されたらしく、今夜から早速動くと言い張ったのだ。はじめは罠かとも疑いはしたが、田神がどうやって伝達させるのか手段を知らないこちらとしては、エリナが田神からだというのであれば信じるしかない。

内容は、田神が関東と関西の両方に行かないといけないが一人では無理かもしれないから、関東で動いてくれとエリナに依頼したのだ。関西のどこかとは書かれていなかったものの、俺には田神がい

そうな場所がおおよそ予測ができたので、そこに行ってみることにしたわけだ。もちろん、田神に会うためだけではない。奇しくも、やつの仕事と俺の仕事が重なったことによる。

何がなんでもミスター・ベーアと武田の二人を出し抜かなくてはならない俺だけども、田神が伝えてきた情報によれば関西に、ある大物スパイがO市に入ったという情報がもたらされたのだ。それだけなら俺もわざわざ動く必要もないが、その大物スパイというのが、春にあった政治家連続狙撃事件に関わっているらしいというのだ。

これだけで動くには十分な理由だった。それはつまるところ、あの忌ま忌ましい武田の野郎と繋がりがある可能性が高いと考えていいだろう。あの事件の犯人にしたてあげられそうになった身としては当然、そもそもの犯人が野郎の手先であることは間違いない。もっと砕けていえば、その大物スパイというのが、武田である可能性だってあるのだ。

そこで俺は、俺が動くのなら自分は田神のほうに行くと言い張るエリナをいいなだめ、関西に向かうことにした。エリナの話によれば、田神は全国を動く際に、いたる所に中継地点ならびに使えそうな業者やなんかも押さえておいたらしい。行くのであれば、そういったものを使ったらと、エリナはブーたれながらも教えてくれた。

そんなわけで、俺は念のためにエリナの話にあった業者を訪ね、この車を乗り捨てることにしていた。ミスター・ベーアの屋敷を半ば脱走する形で出てきたこともあって、追手がかかってないとも限らないし、屋敷から持ち出したこの車に、追跡用のＧＰＳが取り付けられてある可能性だって考慮しておかなくてはならない。

エリナの話にもあった業者の一つである車の解体業者の店舗にまでついたところで、俺は早速店主の男に新しい車を買い付けた。改造車ということもあり、なかなかにいい装備らしい。

「こいつのアクセルを全開にすれば、トップスピードまでたったの三秒とかからない。二百五十キロは確実に出せるはずさ」

こんな謳い文句で買った車に乗り込み、再び車を西に向かって走

らせる。乗ってきた車は、業者の男にくれてやった。男は一緒にいる、明らかに場違いな雰囲気の綾子ちゃんには一瞥するだけで、特に詮索することはなかった。以前、田神からいただいて金と、まだ新品同様の高級感ある車を代わりにくれてやったのだから、まぁ、多少の口止め料にはなったろう。

新しく乗り込んだ車でこれから向かうのは、O市の港だ。そこを取り仕切る業者に会ってみれば、武田がなにをやろうとしているのかわからなくとも、何か手がかりが見つかるに違いない。

「……いつもあんなことをしてるんですか？」

地道でO市に入ろうとしたところ、綾子ちゃんがぽつりと、そうつぶやいた。

「あんなこと？」

「はい。さっきの業者さんに頼んだことって、本当はいけないことなんじゃないですか？」

先ほどまで無言だった彼女から漏れた言葉は、無表情でありながらも、どこか批難の色が窺える。ついてくると聞かない彼女には、こちらのやることには従ってもらうというのを条件にしてはいるが、やはりいざとなれば、思わず口にしてしまいたくなるのかもしれない。おまけに俺たちは、もともと気心の知れた仲なだけに余計だろう。

「否定はしないさ。だけど、こいつは必要な措置だから、そういうわけにもいかないんだ。屋敷から出る際に乗ってきた車に最悪、追跡装置が取り付けられていないとは絶対にいえないんだ」

俺がこういうと綾子ちゃんは、首を横に振った。

「そういうことじゃありません。昨日、あの男性の方と、私と藤原さんがくるまでの間、何か話していましたよね。そのことです」

あんなこととは要するに、自分を蚊帳の外に置くことについて尋ねているわけか。彼女をあまり邪険にしたくはないが、仮に事細かに事情を話したところで、俺にはなんのメリットもない。もちろん、そいつは綾子ちゃんにしても同様だ。知ったところで彼女になにか

できるとは思えないうえ、彼女をますます危険に曝すことになりかねない。ただでさえ、今この状況だって決して良いものではないのに。

「私に話してはくれないんですか……？」

「……君にいったところで、事態が好転するわけじゃない」

突き放していう俺に彼女の表情がにわかに崩れ、わずかに陰りが感じられる。こんなところにきてまで、まだ俺を信じようとしてくれている彼女には申し訳ないが、紛うことなき本心だった。安い同情など、欲しくはなかった。

とりあえず屋敷で話はしたけれど、人を殺しただとか、そういった暴力的なエピソードは一切語ることはなかったので、そこらへんは問題ないだろう。しかし、それも今だけだ。このままずっと俺と行動しているとなれば、必然的にそういったことにも遭遇し巻き込まれるのは目に見えている。勘のいい綾子ちゃんのことだから、つい二日前にあったホテル襲撃のことからも、そこらへんは薄々勘づいているに違いないだろう。

O市に入った俺はまず、手頃なビジネスホテルへと行き部屋をとった。本当ならもっとちゃんとした拠点を用意したいところだったが、今回はあまりに急だったので仕方ない。それにビジネスホテルなら、シティホテルほどは堅苦しくないうえ、深夜の来客でもあまり怪しまれることはないはずだ。

さすがの長い移動で疲れたのか、綾子ちゃんはホテルに着く前後からうつらうつらとし始めており、部屋につくやいなや、ベッドの上に倒れこむように寝転がった。そのまま寝息を立て始めたので、俺は彼女をそのままに布団をかぶせてやると、部屋をロックし足早に繁華街へと向かった。どのみち、ここからは自分一人で動くつもりでいたので好都合だ。

O市の繁華街は平日の夜だというのに、やけに人が出歩いているように思われた。人々の、にわかに浮かれた様子に小さな疑問が浮

かんだところ、そばをすれ違った通りすがりの会話を小耳にはさんで、理由が判明した。どうやら世間は八月もなかばに差しかかり、明後日から盆休みに入るという。なるほど、通りで人が多いわけだ。中には有給を使って、今日明日、あるいはすでに昨日から休みに入っている連中だっているかもしれない。

俺は繁華街の通りに入ってすぐのところにある、古く小汚いビルとビルの間の路地へと折れる。灯りは三、四〇メートルほど先の路地が切れたところにある街灯一つだけで、薄暗い陰気な路地だった。

その路地の中腹にある、さらに狭まって身体を横にしなければ通れなさそうな隙間道に身を滑らせる。隙間道をまっすぐいくと、目の前にビルの地下へと続く、所々ひび割れた階段が現れた。階段の幅は大人二人が横に並べるほどの幅があり、通ってきた隙間道は、設計ミスだったのではないのかと疑うほどのものだった。

ひび割れた階段を降りると、左手に安物の金属ドアがあった。向かって左上部の枠には、時代錯誤もいいところの裸電球が取り付けられていて、その古さを象徴するかのように光はとても弱々しく、今にも尽きてしまいそうなほどだ。俺は錆ついて軋む音のするドアを開け、中へと入る。

「……こんな時間にくるだなんて、とんだ客もいたもんだね」

軋む音のするドアを閉めると同時に、薄暗く埃っぽい部屋の奥から、低くしゃがれた声が室内に響く。老人のようだけども、しゃがれにしゃがれた声からは、声の主が男なのか女なのか窺い知ることはできない。姿形にしても、ここからではどこにそいつがいるのかすら、見ることができないほどに暗かった。

「深夜のほうが、そっちの都合がいいと聞いたもんでね」

部屋の中は薄暗いため、どんなものが置いてあるのか把握しにくく、おまけに、まごまごと大小様々な物が散らばっているせいで、奥まで進めないようになっている。早くも暗闇に慣れてきた視界には、両の壁に何が入っているのかわからない、一メートル平方大の箱が何段にも積み上げられてあるのがわかった。

「聞いた？　ほう、誰にきいたんだね。それにおたく、ここいらじゃあまり見ない顔だね」
　ひっひっと老人はうすら寒くなるような醜い笑い声をあげながら聞いてくるが、その手には乗らない。自然に聞いてきながらも、その実、俺から新たに情報を仕入れようとしているのだ。俺は肩をすくめながらいう。
「誰だっていいさ。そいつが、あんたに聞けばわかるかもしれないといっていたから来ただけだ。
　それよりも、ここ数日でO市に、ある大物スパイが入ったという話を聞いた。そいつに関して情報を買いたい。それと、もう一つ。それに前後して、アンダーグラウンドでなにか起こっているはずだから、そいつも知りたい」
　簡潔にいった俺に、老人は薄気味悪い囁き声で語りだした。
「……若いのに随分と警戒心が強いね。ふん、まぁいい。スパイについてだったね。
　何日か前に、O市の港からスパイらしい人物が入国してきたというのは事実さ。もちろん、わしには目的なぞわからん。だが間違いなく事実だ。そいつが入港する前に、O港にある取引がされたという話も伝わっておるから、もしかするとそれとなんらかの関係があるのかもしれんな。その取引と前後して、ある外資系の会社が周辺の請負業者やなんかに、地周りしていたそうだ」
「ある外資系の会社？」
「うむ。いわゆるハゲタカファンドというやつだ。元々の資本はフランスだそうだが、国内ではここ十年ほどで急激に伸びてきておる会社で、業界内ではすでに大手の一つとしても数えられておるらしい」
「そんな外資が、なんだって地周りなんてしているんだ」
　業界大手の一つにもなっている連中がどうしたって、今さら地周りをしなくてはならないのか別にしてはいけないわけでもないが、少しばかしの興味が湧いた。これまでの経験上、こういった話には

大抵裏があるのは火を見るより明らかで、先のスパイに関しても確実に繋がっているに違いない。

「おかしな話さ。連中は八月一日の夜に、一日だけ港を使いたいから、誰か荷の運び出しを手伝ってくれというものだった。それも、日付も変わった頃になるべく人知れず、という注文付きでね。深夜にそんなことをしていたら、警察に目をつけられかねない。そんな上手い話、そうそうあるはずもない。しかし、どうにかして一軒の零細業者を見つけ、承諾させたらしい。数年は豪遊していけるだけの報酬を代わりにね。

そしてその日、取引が行われた。何が取引されたのかは、その業者には伝えられなかったよ。それでも、危険なブツだというのはすぐに理解できた。そもそも数年分もの報酬を一挙に支払うわけだから、中身を知らないに越したことがないものだったとは、考えるまでもなかったろうがね。

取引では一日の深夜一時に、一万トンクラスの船が入港するから運ばれてきたコンテナを、トラックに運び出してほしいというものだった。この内容なら大したことではなかった。おかしかったのは、運ばれてきたコンテナがたったの三つしかないということだった。それと、もう一つ。入港した船の船員が、立ち会った外資の幹部に、あるトランクケースを手渡していたというのもだ」

「トランクケースだと」

思わず眉をひそめて聞き返した俺に、部屋の奥にいるらしい人物が肯定する。

「拳銃だったのか、大量の札束だったのか、あるいは麻薬だったのか……ケースの中身はわからん。ただ開けられたケースからは、幹部の男がおもむろに小さなケースを取り出していたのは確かだ。

問題は、この取引が終わってからものの数日で、O市内にあるいくつかのクラブやなんかで、あるドラッグが売りさばかれるという話が出回りおった。これはお前さんの欲しい、二つ目の情報だな。これに限っていえば現在進行形のようだから、そこらの不良どもに

でも聞けばすぐにわかるだろうがの」
　老人の話を聞きながら俺は、かつてロンドンにいた頃にデニスから聞いた話を思い出していた。まさか、そのドラッグというのは……。
「ヘヴンズ・エクスタシー……そのドラッグはヘヴンズ・エクスタシーじゃぁないのか」
　俺は思わず口にしていた。間違いない。確証などないが、それはヘヴンズ・エクスタシーであるに違いない。
「ほう、知ってるのかね」
「昔、ちょいとな」
「ならば話は早い。そのヘヴンズ・エクスタシーが今アンダーグラウンドじゃ流行ってるらしいんだよ」
「だが、ヘヴンズ・エクスタシーはかなりの劇薬だぜ。吸引したら瞬く間に廃人だっていう話だからな」
　やや早口にいうと、老人もそれに同意するニュアンスで話を続ける。
「それでもやりたがる、どうしようもない連中がいるのさ。まぁ、売り手もそれをわかっているからこそ売りさばくんだろうがね。
　まぁいい。とにかくそのドラッグが出回るようになったと同時に、例のスパイが動き出したという話も流れたのさ。いや、むしろこのスパイ自身がわざと流すように指示した可能性もある」
「なんだって、わざわざそんなことをする必要があるんだ」
「一情報屋のわしにはわからんよ、そんなことは。だが、わしは、それは十二分にあり得ることだと思うがね。なんたって外資ファンドの幹部連中がそのスパイと会合していたという話で、目撃談もある。ま、その目撃者はここのところ行方知れずということもあって、ますます信憑性も高くなるというものさ」
　俺は適当に頷きながら、これからの行動を思案し始める。老人のいう通り、わざと情報を流すよう指示したというのならば、そこにはなんらかの目的があることは疑いない。おまけに業者が見たとい

う小さなケースというのは、あのベケットの事件で見たサンプルケースのことではないのか……。ヘヴンズ・エクスタシーについてもそうなのだから、そう見て間違いない。

もしこれらが俺の思っている通りであるなら、この辺りの事実関係は追っていくうちに判明していくのは確実であるはずから、今ここで深く追求する必要はないだろう。

ここはやはり、その取引のために無茶な依頼を受けたという業者と、そこから外資の幹部を洗っていく必要がある。もちろん、今からはまだ営業中だろうクラブを、どさ周りすることが最優先だ。

「ところで、以前ここに男が一人訪ねてきたはずだ。身長は俺と同じくらいか少し大きめの、二枚目なんだが」

「……あんたはここを単なる事務受付かなんかだと思ってるのかい」

「そうだったな、ここは情報屋の根城だった。一枚多く払おう」

「二枚だ」

俺は明らかに足元をみていう老人に対し舌打ちしながら、ジーンズのポケットにしまってあった軍資金をつまみだすと、そこから適当に六、七枚の一万円札をつかんで老人のほうへと投げる。

「いい心がけだ、若いの」

「いいから、さっさとしゃべりな、古いの」

老人の証言によると、十日ほど前にそれらしい人物が現れたという。なんとも奇妙な情報を買っていったそうで、過去にあった、ある惨殺事件の詳細を聞きにきたというのだ。探偵かなにかなのかとも考えはしたけれど、ずっと一人なにかを調べているらしい田神のことだから、そうした一見奇妙な情報を買ったにしても、あり得ない話ではのもまた事実だ。

その後、その人物は古都に向かったということだった。その人物が本当に田神であるならば、場合によっては俺も古都に向かうことになるかもしれない。直感ではるが、田神は俺にとっても重要になりそうな何かを握っているような気がするのだ。

そろそろ夏の早い夜明け時刻のため、東の空がうっすらと色づき始めている。俺は繁華街を南に移動し、やや外れた一角にあるビビルを訪れていた。ビルの地下には、最近O市で流行りのクラブが店を構えている。

階段を降りきってなんの飾り立てもされていない、こげ茶色の金属ドアを開けて店の中へと進む。もう夜も明けようという時刻なのに、中ではまだ熱気がこもり、何十という若者が引き締めあっている。カウンターにいるバーテンにシーバス・リーガルを注文し、酒が出されるまでのわずかなあいだ、大音量で流れるトランス・テクノに耳を預けながら店内をざっと見渡した。カウンターはダンスフロアから一段高くなっていることもあり、全体が見渡すことが容易だ。

フロア自体はなんの辺り触りもない標準的なものだけども、周りをぐるりと囲むように席が並べられており、まるでローマにあるコロッセオの極小規模版といった風だった。客はそうした雰囲気には似つかわしくない、ホストよろしく髪を金髪に、重力に逆らわせておっ立てている大学生らしい数人のグループが、いたるところにいて目をついた。服装も似たり寄ったりで、皆一様に安っぽい、薄手の黒い合皮のスラックスを穿いている。俺にはよく理解できないが、あれで恰好いいと思っているつもりらしい。

しかし、それ以上に気になったのは彼らに混じり、一人でいる数人の外国人だった。国籍は様々だが、連中は暗いフロアにも関わらず、サングラスをつけていてどことなく滑稽だ。

ふと、フロア隅の目立たないところで、ずんぐりとした外国人の男が長い茶髪を巻き毛にした女二人に、何か話しかけているのが見えた。一見楽しげに会話をしているようにも見えるが、俺はこいつが怪しいと睨みをつける。

「やっぱり外国人というのは、日本の女が好きなんだな」

「かもしれませんねぇ。彼、良くうちの店にくるんですけど、両刀じゃないかって話がありますからね」

バーテンに顎で男の方向へ指示しながら探りを入れてみると、そういった。両刀……つまりはバイ・セクシャルということになるが、そんなことはありえない。もちろん、別にバイの連中をどうこういうつもりもないが、少なくともあの男に限ってはまず、バイなどではない。

「ところでお客さん、あまり見ない顔ですね。ここは初めてですか」

「ああ。この街にたまたま仕事できたんでね。もしかすると、この街で飲める最後の夜になるかもしれないから、寄ってみたんだ」

スコッチを差しだしてきながら、バーテンが話しかけてくる。俺は視界の脇に男と女二人の行動をおさめ、差しだされたスコッチを一気に半分ほど胃の中におさめ、適当に相槌を打ってやった。

「それで、ちょいと聞きたいんだがいいかな。最近、ここの売上ってどうだい」

「売上ですか？　まぁ、この昨今じゃぁ嬉しいことに右肩上がりですけど……それがなにか」

「ああ、いや、実は将来的に店を構えたいと思っててね。ここの経営者と会って、話をしてみたいと思ってるんだ」

こう告げるとバーテンは、今上にいますよと教えてくれたので、呼んでくれないかと俺の言伝を快く引き受けて姿を消した。話しかけられるのはさほど嫌いなわけではないが、反面、面倒でもある。あれこれ自分のことを聞かれる都度に嘘をつかなくてはならないし、流行りなどには全く興味のない俺だから、話題にもついていけないのだ。元々、あまり人付き合いがうまいわけでもないから、そこらへんも関係しているかもしれない。

ともかく、このビルの経営者が例の外資ファンドの常務だというのは、先ほど訪れた情報屋から仕入れている。つまり、ここは完全に連中の巣窟といっていい。クラブの売上と、その中で秘密裏に麻薬の売買を行っているというわけで、まさに一石二鳥の隠れ蓑にし

ているのである。
それと、先の情報屋が一つ気になることを告げていた。このビルは元々七〇年代に建てられたもので、売りに出されたところを外資ファンドが買いつけたらしく、クラブのオープンと合わせて、ほんの一年半ほど前にグランドオープンさせたという。これは要するに、はじめからここをこれから市場に流すであろう、ヘヴンズ・エクスタシーのための事前工作とみていい。
スパイが動き出したのと、ヘヴンズ・エクスタシーが流れ出したのがほぼ同時期であることから、こいつが一連の工作をおこなった張本人であることも疑いえない。そのためにも、これから会えるだろうファンド幹部を絞り上げてやるつもりだった。
「失礼します。ご相談というのはお客様ですか」
スコッチに口をつけたところで、一見優男風のこじゃれたスーツを身にまとった男が、先ほどのバーテンに連れられてやってきた。細いフレームの眼鏡をかけた男は、年齢もまだ三〇代前半といったところで、幹部というわりにかなり年若い青年だ。
「ええ、そうなんですよ。実はここの経営者の話を小耳に挟みまして」
「ああ、そうなんですか。でしたら、こちらへどうぞ」
いかにもな愛想笑いを浮かべている男に会釈してみせると、男が手で案内してみせながら移動する。
男の後についてやってきたのは、ビルの二階にあたるフロアだった。エレベーターを降りると、八畳ほどの木張りの部屋へ通され、黒い革のソファーに腰かけるよう告げられた。中に入ったとき閉められたドアに、さりげなく鍵をかけておくのを忘れない。
「それにしても驚きました。わざわざこんな時間に、それも経営についてお話を伺いたいだなんて」
「いえ、本当は日を改めようと思ってたんですが、まさか連れてきてもらえるとは思わなかったんです」
互いに頷きあい、男が長方形のテーブルを挟んだ反対側、真正面

のソファーに座る。
「それでご相談とは、どういった？」
「ええ、実はですね」
顔を伏せがちにつぶやいた次の瞬間、俺は男に飛びかかる。一瞬で呆気にとられている男の喉元を右手で、左手で右手首を掴みあげる。
「こういうことさ」
「あぐっ、ぐっ……」
喉を掴まれて、男は呼吸困難に陥っている。それだけでなく、左足で男の右足を動かないよう思い切り踏み付けており、さらに右膝で腹のあたりをいつでも蹴ることができるよう、押さえ込んでいるのだ。
「さぁ、吐いてもらおうか。おまえに口答えする権利はないぜ。俺の質問に答えることだけを許す。馬鹿な真似をしたら、すぐにでも指をへし折る。いいな」
ぶるぶると小さく頷いた男に、喋れるよう少しだけ喉の力を緩めてやる。
「ま、待ってくれ。あ、あんたは一体……ぐっ」
「おいおい、話を聞いてなかったのか。あんたに質問する権利はないといったはずだぜ。黙って俺の質問に答えればいいんだ。次、わけのわからんことを抜かしたら、容赦なくへし折る。こいつが最後通告だ、わかったな」
手首から指へと掴むと、俺の本気が伝わったのか男は黙りこんだ。表情に恐怖心を滲ませていることからも、こちらのいう通りにするはずだ。
「最初の質問は今いった通りだ。おまえらはここを拠点のひとつとして、薬をさばくためだろう。違うか」
ぶるぶると震えながら、男が首を縦に振った。やはり……。俺は自身の考えに納得がいったところで、さらに質問する。
「お前たちは八月一日の夜に、あるドラッグの密輸をしたはずだな。

そいつについてしゃべってもらおう」
　握る手に力をこめ相手の指を圧迫すると、男が惨めな呻き声をあげて早口にしゃべりだした。
「そうだ、した、したよ。ヨーロッパから流れてきた新種で、ヘロインの何倍も強いドラッグだ。そいつを独占するために、ここをオープンさせたんだよ」
「そのために港を使えるよう、業者を探したそうだな。なぜだ」
「おれは知らない。う、上からそう命じられただけなんだ。本当に知らないんだ」
「上だって？　冗談いうもんじゃぁないぜ、あんただってファンドの幹部じゃないか。そのあんたが知らないなんて、そんなことあるもんか」
　見え透いた嘘はよせと告げた俺は、掴んだままの人差し指と中指を同時に手の甲へと反らし、そのままへし折った。鈍く篭った響きとともに、硬いものが折れる衝撃が手に伝わる。
「かっ」
　まさか本当にへし折られると思わなかったのか定かではないが、男は目を見開いて情けない呻きをあげる。
「いったろうが、冗談じゃないってな。自業自得だ。それよりもさっさと吐け」
「あ、あうぅ……ほ、本当だ、本当に知らないんだよ……社長しか……知らないんだよっ、本当だっ」
「なら社長の名前と住所は」
「大友……大友孝也（おおともたかなり）……住所は、N区のHにある。三階建ての大きなモダンなデザイン建築の家だから、すぐにわかるよ……」
　男は必至に赦しをえようと震える声でいうが、俺は気にすることもなく薬指に手をかける。
「ドラッグはどこから仕入れてきたんだ」
「オ、オランダでだが、もともとはイギリスで作られたという噂もあるやつだ。それがどういうルートでか、東欧や中東方面にも一部

流れたところを、社長がそれを独占して上海ルートで仕入れたんだ。社長自身がいっていたから間違いない」

男の話に、おもわず小さく舌打ちしていた。イギリスで作られたという話がどこまで信用できるかは別として、イギリスから齎(もたら)されたという点が重要だった。これがヘヴンズ・エクスタシーであることは確実だろう。気に食わないのは俺がイギリス脱出前後にはすでに、国外に持ち出されていたということに何ともいいえぬ、敗北を喫したような気分になったのである。

この男の言い分が本当であれば、イギリスにあったサンプルは、遺伝子工学者だったチャールズ・メイヤーの元にいくはずだったやつしかない。もちろん、あれ以外にもなかったともいえないが、もし二つ以上あったとすれば、ベケットもメイヤーもあんなにまで必死になることはなかったはずだ。つまり、ヘヴンズ・エクスタシーを作るための薬は、あの時点では一つしかなかったということではないのか。

結局はメイヤーの手に渡ることもなく、メイヤーが雇ったという殺し屋が持ったまま、有耶無耶になってしまっていたはずだ。あの殺し屋はメイヤーとは別に依頼主、あるいは自身のための別の意をもっていたように思われた。そもそもがメイヤーになぞ、渡すつもりはなかったようだったので、あの黒づくめの殺し屋があの時点で、すでにオランダ方面に流していた可能性は否定できない。

第一、ヘヴンズ・エクスタシーの原材料になったものが、あの沙弥佳の血液から精製して作られたものだというから、俺自身、一概に無関係とはいえない。そして、これらが微量ながら出回るというのは、あいつがまだ生きているとは考えられないだろうか。決定的な証拠に欠ける現在としては、ただの希望的観測の一面があるのも確かだが。

「よし。だったら、あんたに社長のお宅にまで案内してもらおうか」

「な、なんでおれが……うっ……わ、わかった、わかったよ。お願いだからこれ以上はもうやめてくれ……」

言い終えれば解放されるとでも思ったのか、男は惨めにすすり泣く声をもらしながら俺になかば引きずられる形で、ドアのところにまでやってきた。

「もちろん、今これからだ。いいな」

そういって念のためにかけておいた鍵をあけ、ドアが開いたところ、横から勢いよく襟元をつかまれたような感覚があり、ひっぱられたと思った次の瞬間、向かいの壁に叩きつけられていた。

「くっ」

俺は叩きつけられた衝撃を受け身で和らげて、床に倒れこみかけながらもこれをこらえ、叩きつけた奴のほうを睨む。

「大丈夫ですかい、ボス」

流暢な日本語で話す男は、先ほど下のクラブで、女二人を相手にしていた野郎だった。ボスというのは惨めにすすり泣きをあげていた男のことだろう。

「あ、ああ、よくやった。時間どおりだ。まさか、本当に指をへし折られるとは思わなかったが……」

「時間どおり？」

つまり男は、バーテンに呼ばれてやってきたとき、すでにこうなることを予想していたということになる。俺に暴力を受けることは当然、惨めにすすり泣く様も全ては演技だったというのだ。

「ちっ、うかつだった」

思わずつぶやいた言葉に、男が俺を見下して笑った。

「折角仕入れた情報も、こうなっちゃぁ元の黙阿弥だなぁ」

男の前に売人の男が立ち、腕を組んで見下しながら威嚇する。この野郎は、売人と男のボディガードを兼任しているらしい。

「おら、立ちな」

ずんぐりとしたボディガードの男が、ゆっくりと俺のほうへと向かってくる。それを丹田呼吸で息を整えつつ、ぐっと身体に力を溜め込む。

「なんだ、もう終わりか。ジャップなんて所詮はこの程度だな」

油断し嘲笑してみせる野郎が俺の髪を掴んで持ち上げたと同時に、俺は右手で野郎の股間を掴みあげた。そのまま、今出せる力の限りに引っ張りあげる。

「ぎっ！」

そんな悲鳴をあげて顔を歪めた男の目に、人差し指と中指で作った握り拳を叩き込む。ぶよぶよとしたゼラチン質の眼球が潰れ、眼球を形成していた組織が絡み付いてくる感触があった。

「がああああっっっ！？」

眼球を潰され眼窩からは、半透明の体液と赤い血液が混じり合った、ややとろみがかった液体が流れていっている。俺は容赦なく眼窩に埋まった二本の握りこんだ指をひねり、さらに眼球をすり潰す。

だがこれで攻撃の手を緩めるつもりはなく、さらに相手の顔面、鳩尾へと鋭い拳と手刀を叩き込み男を床に沈めた。倒れたあたりからは、少しずつ血が流れだしてきており、床が赤に染まっていく。

「……さて、馬鹿な真似をしてくれた落し前、しっかりとつけさせてもらう」

「ひ、ひぃぃぃっ！　わ、悪かった。もう二度としないっ！　だ、だから赦してくれっ！」

よほどボディガードだった男の腕前に自信があったのか、男はあっけなく倒された野郎と見下ろす俺を交互に見返しながら、全身をがたがたと異様なほどに震わせている。そして不様に拡げられた足の付け根の間から、それを強調するかのようにスーツを濡らしていく。

「安心しな、殺しやしない」

少なくとも今はな……。言葉をみなまでいわずに男にゆっくりと近づき、顔面を思い切り殴りつける。これくらいで済ますつもりもないが、今のところはこれだけで我慢しておいてやろう。

「形勢逆転だな。いや、はじめから何も変わっちゃぁいないか。ただ内容が少しばかし変わっただけでな。

さぁ、立ちな。本当なら案内だけですませてやるつもりだったが、

そういうわけにもいかなくなったぜ。大友のところまで、しっかりと連れていってもらわないとな」

低い声で脅しつけ、アンモニア臭のする男を立たせる。動かなくなったボディガードの体を蹴って道を作ると、エレベーターまで強制的に歩かせた。車までの途中、作業用の黄色と黒が螺旋を作ったロープを見つけると、案内できるよう口だけはそのままにしておき、車の中で男を縛って後部座席の床に放りなげる。

身じろぎする男を無視し、ドアを閉めた。頭が当たりそうになって思わず体をビクリとさせたのが滑稽だった。

朝の出勤ラッシュ時間がくる前までに事を終えておきたい俺は、素早く運転席へと座り即座にエンジンをかける。今日はこれからいくらもやらなくてはならないことがある。綾子ちゃんは心配するかもしれないが、一段落終えるまでは帰れそうにない。

今日一日の行動予定を頭の中で組み立てると、車を一路、大友の家に向けて発進させた。

第８６章

午前五時半を過ぎた頃、外資ファンドの幹部だという男の案内でやってきた社長である大友の家は、一等地であるのにとても大きなもので、建て坪は軽く八〇坪はありそうな邸宅だった。

両手足を縛り車の床に放りこんでおいた男の話によれば、大友は現在独身で、愛人数人をかこった生活をしているらしい。俺はあらかじめ、大変なことになったと男の携帯を使って大友に電話させ、すぐ行くよう言伝させた。大友は男に対して信頼を寄せているのか、疑うことなく車庫を開けておくと言い残して電話をきった。

実のところ、押し入るしかないと考えていただけに、思わぬ幸運に感謝しなければならないだろう。なんせ、向こうから懐に招き入れたのだ。

「お前が先に行くんだ」

告げられていた通り開いていた車庫に車を乗り入れ、車の後部座席の床に転がしてあった男を這い立たせると、低い声で背中を小突きながら先行させる。怪しまれないようロープは外しておいたが、自慢のボディガードを秒殺されるのを目の当たりにしたためか、男は完全に萎縮しきっており、逃げ出すような真似はしないだろう。仮に逃げ出そうとしたところで、どうにかできるとも思っていないに違いない。

邸内へは、車庫から裏口玄関へとそのまま繋がっているらしく、鍵もかけられていない裏口玄関を男が力なく開けると、続いて俺も中へと入りそっとドアを閉める。もう日はのぼっていて、あたりは夏の朝の暑い陽射しに照らされだしてきているというのに、邸内は外と比べ随分と薄暗いように思われた。

目の前を行く男はこの家に何度も出入りしているのか、迷うことなく大友の待つ部屋へと進んでいく。背後から、何かされやしない

だろうかと考えているのか、よく見ればその肩が小刻みに震えているのがわかった。恐怖を感じているというのなら、それはそれで勝手にそう思わせておくとしよう。そのほうが何かと都合いい。

大友は三階に部屋を持っているようで、男はフローリングになった階段を二階からさらに上の階へとあがっていく。一階や二階もそうだったが、邸内はモダン建築だという男の言葉の通り、邸宅の外観から中に置かれたインテリアも、機能的さを兼ね備えた前衛的なもので飾られていて、ファッショナブルではあるけれど、どこか無機質さを感じさせるものばかりだ。

社長という役職についているので、少なくとも目の前の男よりはいくらも年上であるだろうが、こうしたインテリアなどから受ける印象は、役職のわりにかなり若い人物であるように思われる。あるいは、愛人をかこっているらしいから女の趣味なのかもしれなかったが、どっちみち、大半が俺の趣味のデザインではない。

「こ、ここだよ……」

男が縦に長い、大きな観音扉になった木製のドアの前にやってきて止まり、小声で震えながらいった。

「早く入るんだ」

「あ、ああ、わかった。わかったから……」

脅しつけるのはやめてくれ、そういおうとしたかったのだろう男の言葉をみなまでいわせず、俺は肘で背中を小突きドアを開けさせる。

「……社長、ただいま参りました」

男が少しのあいだ待ちドアを開けると、中に入ろうとした男の足が止まった。

「ひっ」

小さな悲鳴をあげて立ちすくんだ男は、半歩足を後ろに引いてよろめいた。

「どくんだ」

男の様子に違和感を覚えた俺は、肩を引いて後ろに下がらせると、

そこには考えてもいないことが起こっていた。いや、起こった後だった。白を基調とした十数坪は確実にあろうかという部屋の中心部が赤く染まり、男一人、女三人の全裸の肢体が無造作に転がっていたのだ。

全員見事に額を撃ち抜かれており、脳漿を飛び散らせて死んでいた。男のほうはベッドの縁にもたれかかるように座りこむ形で、額は当然、顔面に他三発の弾丸を食いこませていて、とても顔を判断することはできそうになく、醜悪なペニスがだらりと垂れ下がっている。

一方の女たちは皆二〇代、それも大学生かそこらといった感じだ。長い黒髪と短くショートに切りそろえた黒髪、それに長い茶髪の巻き毛の女たちは、全員が正確に一発ずつ弾丸を喰らって裸体を晒したまま、物いわぬ肉塊へと変えられていた。緊張のためか硬くなってらしい乳首が妙にエロチックで、みな一様に目を見開いているのがどこかぞっとしない光景だった。

「あ、ああ、ああ……しゃ、社長……」

目の前にできあがっていた四つの死体を前に、男が再び失禁させながらつぶやく。できあがった男の死体は、つぶやく声からもわかる通り、ファンドの社長である大友孝也であるらしい。どんな意味があるのか、左胸にある炎と閃光をモチーフにしたような刺青が彫られていて、それが大友ということになるらしい。

俺は舌打ちして、部屋になにかヒントになりえそうなものがないか、男の肩をつかんでまくし立てる。しかし、男は混乱のためか前後不覚に陥っており、小刻みに震え首を振っているのかいないのか、微妙な動きをするだけで何も答えることはなかった。

「一体どこの誰が……」

もちろん考えるまでもない。例のスパイとかいう奴に決まっている。今追っている一連の出来事の登場人物は、俺を除けば、ファンドの幹部連中に取引を行うために積み荷の運び出しを受け持った業者、それにO市に入ったというスパイしかいない。一連の取引を任

されたはずのファンドの幹部連中が、そのトップを殺すとは到底思えないし、雇った業者がこんな手の込んだことをするとも考えられない。よって、導き出される答えは一人だけだ。

俺は男の死体を簡単に調べてみた。体温はまだ残っており、殺されてからまだそう経ってはいない。体温から判断するに、まだ二〇分と経ってはいないはずだ。つまり、こちらに来るという連絡を受けて、すぐに始末されたということになる。

そばの女たちの死体の体温も調べてみると、こちらもまだいくらか温かさが残っていはするが、男のほうと比べると、いくらか冷たい。推理すると犯人はまず、邪魔な女たちを始末し次に男を始末したことになるが、先ほど電話に応じたとき、すでにここには殺し屋がいた可能性が高い。車庫を開けておくといった点も、スパイの奴が大友に銃をつきつけながらいわせたと見るべきだろう。

電話で、一連の背後関係を洗おうとしている人間がくることを知ったに違いないスパイ野郎は、大友に車庫を開けるよう脅し、そこに何も知らない不法侵入してきた俺が到着するのを見計らう。そして……。

「くそが」

俺は悪態をついて舌打ちし、本物の死体を前に恐怖している男の肩を掴んで引っ張る。もうここに用はない。推理が正しければ、確実にこちらの動きをスパイは監視しているはずだ。だとすれば、ここには危険しかない。

そして予想通り、遠くでサイレンの鳴り響く音が聞こえてきた。もちろん、スパイ野郎が通報したに違いない。

気食の悪い色をしたベッド脇のスタンドテーブルに置かれた携帯をとっさに手にすると、男に走るよう命令し急いで車庫までおりていく。ともかく、一刻も早くここを離れなくてはならない。政財界に顔の利くらしい武田が一応は指名手配を取り消しはしたものの、これでまた警察に捕まろうものなら、せっかくの自由の身になったのが台無しになる。

それどころか、警察は突然指名手配が取り消しになった俺について、確実に不審におもっているはずで最悪捕まりでもしたら、次こそは言い逃れや外部からの圧力は効かないはずだ。今のところは、かつてデニスが用意してくれたパスポートのおかげで、俺という人間のことを詳しく知るには至らなかったけれど、それでも警察も馬鹿ではない。いずれは、九鬼という人間のことを嗅ぎつけることは目に見えている。そうならないためにも、やはり警察の世話になるわけにはいかない。

車庫におりたところで、異変に気付いた。入れたときには開け放たれたままだったはずの車庫の扉が、ここにきて閉まっていたのだ。開閉装置がないか探すと、扉のすぐ左側に手動の開閉装置があり大股で近づく。だが忌々しいことに、装置はすでに壊されていた。つまりスパイ野郎は車庫に車が入ってきたところで、行き違いにここを閉じ壊していったわけだ。これはつまるところ、例のスパイ野郎がついさっきまで敷地内にいたということに他ならない。

俺は車庫と裏口玄関のあたりで棒立ちしている男を先と同様に後部座席に、自身が運転席に乗ってすぐにエンジンをかける。開かないものは仕方ない。このままバックで門を破壊し出ていくしかない。

ギヤをバックにいれ、アクセルを思い切り踏みむとガクンと車体が揺れながら、後ろに急発進した。

硬い金属や車庫を形成するコンクリートの壁が、車の急激な突進によりひしゃげ、粉砕される音がうるさく響くと、次の瞬間には後ろから座席の背もたれにとんでもない衝撃が伝わった。その衝撃に、背中が打ちつけられ一瞬呼吸ができなくなってしまい、上体が自分のものではないかのように揺れたのだ。

バックで急発進し、車庫の閉じていた門を破壊できたはいいが、それにともない、道の反対側の壁に激突したようだ。運転席に伝わった衝撃はどうやら、後ろに放りこんだ男が運転席に体を思いきりぶつけたためだったらしく、ぶつけた肩を痛そうに押さえて前のめりになっている。

俺はすぐにギヤをバックからニュートラルにいれると、ほぼ同時にローギヤへといれて車を発進させた。バックバンパーからは壁に激突した際に壊れた壁のコンクリート片が、いくつも道に落ちていき、あたりに散らばる。

「おい、いつまでも痛みにうずくまってるんじゃぁないぜ。お前らが取引するために使った業者のところへ行く。案内しな」

「う、うぁぁ……骨、骨が折れたかもしれない……お願いだ、病院へ……」

「駄目だ。そんな時間はないし、わかっていながらドラッグを売りさばくような人間に病院だなんて、もったいないね」

こう告げられて男は絶望に顔をゆがめる。ふん、自業自得だ。こいつだって、間違いなくドラッグであがった金で潤った生活を送っていたのだ、そんな人間に慈悲の心などこれっぽちも必要ない。少しは痛い目をみてもらうとしよう。もっとも、あのボディガードをけしかけようとした時点で、この男の死刑判決が変わるはずもないのだが。

本気で肩を痛めたらしい男は、俺も本気で病院に向かうことはないと悟ったようで、うなだれながら件の業者の住所をいい、そこまで案内しはじめた。どうやら、業者はM区も外れに住んでいるらしい。

大友の邸宅から車で二〇分とかかったかどうかという場所に、業者の住む家はあった。近年の再開発でレジャー化が進んでいる一方で、昔からの住人にとってはその日陰に追いやられる形で、あまり人目を引かない、ひっそりとした昔ながらのトタン屋根も見える地区で、そろそろ早い者は一日の活動を始める頃だというのに、まだあまり人影がない。

無論、こちらとしてはそのほうがやりやすいのは確かだ。今回のことにしたって、できるだけことを大きくしたくない身としては、まだ人の活動が鈍いというのはありがたいことだった。

かといって、のんびりもしていられない。警察が場合によっては

俺のことを勘づく恐れがある以上、さっさと事を済ませてしまわないといけない。

「あそこで間違いないんだな」

男に案内された住所の少し手前にある小さな公園の前で、俺は車を止め男に問いかける。二度三度、強く頷いた男の両手足を再びロープで縛って口に猿轡をかけると、あご先に思い切り拳を叩き込んで意識を失わせる。場合によっては近所の人間が車の中を覗きこむとも考えられないではないので、念のため後部座席の背もたれを引いて、男をトランクへと転がした。

ざっと周囲を確認してみたが、どうやらまだ人が外に出ている様子はない。俺はビジネスライクを気取って、大股で業者の住む家に向かう。

業者宅の屋根瓦には遠目にみても、破損しているのがわかるほど大きなひび割れができており、今にも崩れ落ちてきやしないかと心配になるような家で、先ほどの大友の邸宅とは比べ物にならない質素かつ貧困者の家といった雰囲気が漂っていた。二階建ての家は、道路側に面した二階窓にやはり屋根同様のひびが入っていて、それらをガムテープでふさいである。

俺はまともに使えるのかどうかも怪しい呼び鈴を押す。港の業者というのは朝が早いからもしかするといないかもしれない可能性もあった。しかし外から様子を窺うに、がらんとした様子ではあるが、まだ外出はしていないはずだ。

そして思った通り、待つこと十数秒といったところで中からがそごそと音がし始め、目の前のガラス戸が引かれて小柄な男が現れた。身長一六五センチ前後の初老の男で、髪は薄くのっぺりとしていて、顔は海の男らしく赤く腫れぼったい感じがする、そんな男だった。

「……なんだい」

「すみません。少しばかし聞きたいことがあるんです」

早朝の訪問者に対し、幾分訝しむ表情になった初老の男に俺は、外資から引き受けたという仕事について単刀直入に切り出した。ま

さか突然の訪問者から、そんなことを聞かれることになるだなんて思わなかったらしい初老の男の顔が、ひどく驚愕に歪む。

「……お、おれは何もしらねぇ」

弱々しく否定する男に、俺はたたみかける。

「いいんですか。いっておきますが、あなたのやったことはすでにわかっている。このまま頑なに話さなかったとしても、結果は同じだ。それに……もし話してもらえるなら、今回の一件は目をつぶりましょう」

どうやら早朝の訪問者のことを、警察かなにかと勘違いしたらしい。なるほど。この男はもしかすると、例の取引のために雇われた際、嫌々ながらやったのかもしれない。しかし、金欲しさに結局は引き受けた仕事だったが、内心ではとんでもないことをしでかしたと心を痛めてる、そんな具合だ。初めて顔を合わせたとき、妙に緊張感を漂わせていたのは、きっとそれが原因なのだ。

「は、話せば本当に目をつぶっててもらえるかい……？」

「話してもらえるなら」

「わかった、話す。話すよ……」

目を見ながら頷く俺に、初老の男は居間まで招き入れようとするもそれを断り、玄関で話を聞くことにした。殺し屋という性分からなのか、どうも何かあった際のことを想定してしまい、奥深くまで進む気がしないのと、やはりトランクで眠る男のことも気になるところだからだ。

話によれば七月の中旬頃に、突然ファンドの営業マンが訪れ、七月の終わりから八月一日深夜までの約十日間、作業してくれないかと仕事を持ってきたという。情報屋と多少の食い違いがあるが、別に構わないだろう。おそらく一日、それも深夜だけだとおかしいから、それまでの数日間はただの偽装工作だ。もちろん、その間にも世間には公表できない代物が流れてきた可能性は十二分にあるが、俺にとって重要なのはあくまで、最終日の外資ファンド連中も立ち会って行われた取引のほうなのだ。

「その外資連中の取引を見たといったな。どんなものだったんだ」
「わからねえ。この業界で何十年と働いてるが、あんな馬鹿でかいコンテナは見たことがねえんだ」
そういえば、あの情報屋も三つのコンテナが搬入されたといっていた。通常、コンテナというのは世界的に形状から重さ、使用目的まで全てが規格によって定められている。その三つのコンテナは、どう考えても規格で作られたものではなかったらしいのだ。
「大型輸送船の場合、深夜の積み荷や搬出作業は、基本的にコストがかかり過ぎてやらないんだ。周りに、作業に足りうるだけの照明がないというのも理由だ。
その日はどういうわけか、なにがなんでもやってもらうといわれて仕方なくやった。実際、今まで見たこともねえような金額を掲示されたからな。実際、楽だとおもったさ。なんたって、あげなきゃならねえコンテナはたったの三つだ。それでいざ実物を見てみたら、今まで一度だってお目にかかったことのない、馬鹿でかいコンテナだったんだよ。
あのコンテナなら、積もうと思えば一般の乗用車を二十台は軽く運べてもおかしくない代物だった。中にどんなものが入っていたのか、そいつはわからん。ただ、揺れることは許さない。風に揺らされるのも駄目だと抜かしやがったんだ。んなこと、無理だといってやったが、結局慎重にやって、一時間半ほどかけて搬出したんだ」
「この作業中に、外資の連中が取引しているのを見たという話もきいた。それに関しては」
「ああ、あれか。割合近くで見てたら、すごい剣幕でがなり立てられたんで、詳しくはわからねえ。アタッシュケースっていうのか？
あれに色々と入ってたみたいで、そいつを渡された奴がその中から変なケースを取りだして灯りに向かってかざしてたのを見ただけさ」
「変なケースってのはどんな形だったか覚えてるか」
「こんくらいの大きさで、銀色っぽい感じの表面だったな」

男が手で示す大きさと色は、まさしくイギリスで俺が見たものそのものだった。さらに男は、中を覗けるように小さなガラス部分もついているというではないか。

これで話は繋がった。スパイはこいつを大友に入手させ、ヘヴンズ・エクスタシーとして市場に流したのだ。例の外資ファンド幹部は大友からの命令で、実態はよくわからないといっていたので、大友自身もこのスパイの傀儡であろう。これは、邪魔者として始末をつけたことからも間違いない。

また、同じ形のものが使われたという時点で、この世界のどこかに精製した沙弥佳の血液を流している奴がいるはずだ。スパイは、こいつに雇われたものだと考えていいだろうから、スパイの正体を突き止める重要性がますます高まったといえる。

「最後の質問だ。あんた、外資の連中が取引しているのを見たというわけだが、実際にその場に何人いたかわかるかい。それと、その日、搬入するためにやってきた船の名前なんかもだ」

「すまねえが、わからねえ。だが、同じようにスーツ着た連中が三、四人はいたのは間違いねえ。

あの日入港してきた船も名前は全く載っちゃいなかったが、連中が相手の企業名か何かをいってた気がするんだ。確か……ニッセンとかなんとかって。風が吹いてたんでうまく聞きとれんかったが、その風に乗ってそんな名前をいってた気がするんだ」

「ニッセン……もしかして、日船工業のことか」

記憶を頼りに口にした単語に、初老の男が強く首を縦に振った。

「ああ、そう、それだ。日船工業だよ。その名前に間違いねえ」

「……そうか、そうだったのか」

思わず俺はつぶやいていた。日船工業といえば、春に起きた政治家連続射殺事件の引き金となった、真田博之を輩出した企業だ。もちろん、真田と島津が横繋がりしバックとなっていた秘密クラブ、鳳凰館と繋がりがあったことで無関係だとも思っちゃいなかったがこれで、それまでの今ひとつ把握できていなかった事象同士が一本

の線となって、紐解かれてくる。

この射殺事件の一連の犯人は間違いなく、今度のスパイが始末をつけた。もしくはその仲間かもしれないが、ともかく同じ一味であることは確実だろう。スパイは、はじめから今回の取引を見据えて真田を始末したのだ。

企業にとってトップともいっていい真田が死ねば、自身が裏で糸をひいて市場への流通を一手に担えるし、これからも多岐に渡って様ざまな物資を送り込むことができる。当然、真田が研究していた実験についても目をつけていたとみるべきだが。

真田は敵対関係、もしくはそれにかなり近い立場にいる人物から始末されたと考えるべきだろうから、これでその立ち位置に近い人物が誰なのか、より明確になってくる。やはり当初俺が直感したように、武田側の陣営によるものだと理解して、まず間違いない。

ここで一旦話を整理したい。これまで一連の事件に関わっているのは、ミスター・ベーアを頂点とした真紀などの組織の連中、武田を中心とした殺し屋のコミュニティ、そして島津製薬や真田の日船といった企業ら、そして俺といったのがそうだ。あえて陣営にいれるとすれば、田神もこちらに入るだろう。

まずミスター・ベーアは武田と敵対関係にある。これはもう疑いようはない。そして武田にとっては、もう一方の島津ならびに真田らとも敵対関係にある。いや、真田たちを襲撃することなど武田にとっては造作もないことだから、敵対とは少し事情が違う。それでも、味方とはいい難いだろう。

そしてミスター・ベーアにとっても、真田はいけ好かない奴だったのだ。しかし、少なくとも武田と違い、襲撃するのは最終手段で、あくまで自らの手中に真田陣営を取り込もうとしていた。これも、これまでの状況証拠から判断できる。こうした観点から、スパイが武田側に雇われた、あるいはコミュニティの人間であるということが導き出される。

ミスター・ベーアにとってみれば、直接対象を始末するよりも陣

営に取り込んだ方が有益であるという、人の上に立った視点でものをみるはずなので、こうした直接的な行動には出にくいはず、というのも理由だ。問題は、真田陣営がなぜ両方から狙われたか、ということだ。もちろん、これには両方が俺に告げた共通点にあると見ていい。

真田はN市でタイムワープの実験を行い、島津製薬の研究主任である坂上は不老不死の研究をしていて、両者には八〇年代にアメリカで行われたタイムスリップの実験に関係があるということがわかった。真田はその実験を継承し、坂上は当時の実験そのものに参加していたというのだ。

この二つは、鳳凰館という悪趣味な秘密クラブで密接に関わりあっていた。真田はどうもここの会員であり、クラブを取り仕切るオーナーの伊達総一郎は、必要に応じて真田や坂上に奴隷を売りさばくという、人身売買を行っていたのだ。

つまり、ここから俺がミスター・ベーアと武田の二人を出し抜くには、この二つの直線状にある、真田が行ったという実験概要のデータで、真紀が”マウス”と呼んだものと、ヘヴンズ・エクスタシーは当然、あのゴメルやなんかをも生み出すことになったＮＥＡＢ－２の投与によって変わったらしい、沙弥佳の血液か何かが必要ということになる。あるいは、沙弥佳そのものなのかもしれないが。

こうした事情からマウスはミスター・ベーアが、ＮＥＡＢ－２を創る技術、ないしはそのものを持っているかもしれないものは武田が、といった具合で、連中を出し抜くにはこの二つを俺が入手し、対等の取引をさせなければならないということだ。もちろん、そうなった場合はミスター・ベーアとて俺を裏切り者として扱うにきまっているから、ミスター・ベーアも武田と仲良く死んでもらうことになる。

俺は自分のやるべきことが明確に見えてきて、さらに強く頷いていた。こうなると、一刻も早くスパイの正体を突き止めなくてはならない。

午前十一時。俺は外資ファンドの入ったビルの三〇階にある一室で、身を屈ませながら大きなデスクの引き出しを、開けては閉める行為を繰り返していた。ここはかつて大友孝也のオフィスだった部屋で、幸いにも大友は今日、会社を休むつもりだったようで忍び込むのは容易だった。とはいっても、そんな人間のオフィスを物色するのだから、手短かにすまさなければならない。部屋の外ではまだ社員たちが働いているのだ。

「こいつか」

いわれていたものを見つけ、俺は小さく口にする。机の一番下にある引き出しから、いくつもの電話番号が並ぶ請求書を見つけ出し、その紙を左手で掴みあげる。

俺が知りたかったのは日船からの電話番号だった。幹部の男に、日船工業との関係について吐かせてみたところ、男は日船がお得意さまであることを必死になって大きく頷いた。そこで俺は、大友の邸宅で手に入れた携帯の着信履歴に目をやり、数回に一度、非通知でかかってくる電話があることに注目した。今時珍しく非通知も、履歴として残しておいてくれるタイプの機種だったことが幸いしたが、これが大友のプライベート用であることが最も重要なのだ。

外資の幹部である男をさらに締めあげた際、男が会社の金で携帯代を見つくろっていたらしいということを聞き、もしやと思い至ったわけだが、勘は当たった。大友は、公衆電話からかかってきたあと、必ず折り返して電話をしていたのだ。

けれども、通話記録に記されている番号はどれもばらばらで、まるで統一性がない。あるときは市外局番から九州のほうであったり、あるときは四国、またあるときは海外のときすらあったようだった。

だが俺にはわかった。これらの電話の主が全て同一人物であるかは別にして、最後の海外からかかってきた電話こそ、例のスパイからであるということが。

かかってきた日付を見ると、七月の十二日の深夜となっている。

そしてこの翌日となる十三日以降、大友からのトップダウンで業者探しが始まったというわけだ。業者が見つかった直後と思われる頃に、大友は再び海外からかかってきたらしい電話に出ている。これらのことから大友に指示を出していたのが、このスパイであることは確実だ。

俺はこの通話記録書を適当なサイズに折り曲げて、スラックスの後ろポケットにつっこみさらに確たる証拠がないかをもとめ、引き出しの中を探す。この記録だけでは、まだまだ不十分だ。必要なのは、スパイの正体を掴める証拠なのだ。

おそらく、大友はスパイからの命令によって実行を命じていたにすぎないだろうから、スパイと直接の面識があるとは思えない。だが大友を消したということはすなわち、どこかでスパイと繋がる何かがあるに違いない。証拠を揉み消してきているなら、わざわざ手を下す必要などないはずだし、大友に限ったことではないがこうした連中は、別のことにも使えるかもしれないと残しておくのが通例なのだ。

この点で、スパイは重大な足跡を残していったと思われる。大友の周囲の人間を調べていきさえすれば、必ずこのスパイにもぶち当たると俺は確信した。

第87章

夜のO市の歓楽街を一人、外れに向かって歩いていた。夏の連休前とあって、至るところに少人数の人だかりができている。大学生と思わしき集団もたくさんいて、道を横に並んで歩いているのが鬱陶しくてかなわない。かといって目的地までタクシーを使うほどの距離でもない、そんな微妙な距離だ。

ようやく歓楽街の外れにくると、すぐに信号が変わろうとしたため急ぎ足で横断歩道をわたる。目的となるビルは、横断歩道をわたってすぐにある、車の離合ができない小さな道を入った先だ。

この辺りは再開発の余波を受け、撤退するテナントや取り壊しを行う予定のビルが点在している地区だ。大友のオフィスにいたとき、突然やつの携帯が鳴りだしたことを発たんとして、俺はこの地区に訪れていた。着信の番号をみると、どこからかはわからないまでも、市外局番を使った電話であることが間違いないのを確認し、その番号がどこからかかってきたものかを調べたのだ。

するとこの番号が、O市の繁華街にほど近い場所に構えている、ビルのテナントにはいっている会社からであることが判明した。さらにこの周辺には、再開発の余波を受け、テナントの募集も取りやめて空き家になっているビルなどがあることも突き止めた。このとき、こうした稼業を生業にしている人間の直感で、ここに田神が潜んでいる可能性があることに気がついたのだ。

そうした経緯と、近くの繁華街周辺で田神らしい人物の姿を見たという、先の情報屋の話とがリンクし俺はここに赴いたのだ。古都にも向かったという話もあったが、ここがやつの活動拠点ではない以上、いくつも拠点を作るのは難しい。それに古都ではこうした拠点になりえそうな場所はけして多くないので、この辺りにいたというのなら拠点にしやすそうな土地柄と相まって、まずここらにいると判断していい。

小道に入った俺は、いくつかそれらしいビルを見つけると、それらをしらみ潰しに探して回るつもりだった。やつのことだから、この周辺に、いくつかの情報網をすでに築きあげている可能性も否定はできない。ここらを見知らぬ男が出入りしているというのがやつの耳に入れば、なんらかのアクションがあるはずなので、それはそれで構わないだろう。

まず手始めに入ったのは四階建ての小さなビルだった。まるで、両側のビルによって押しつぶされているかのような印象すら受ける、やけに盾に潰れたビルで、まだ取り壊しに至るための準備なども行われていない様子だが、テナントは全て撤退している。短期間の拠点にするにはもってこいだ。

ビルにしろ家屋にしろ、押し入りも得意な俺としてはビルの鍵を開けることなど、なんの造作もない。しかし、ここは残念ながら外れだったらしい。全てのフロアの部屋をくまなく探してみてみたものの、拠点にされたような跡は一切見受けられなかったのだ。

こんな調子でそれらしい五つ目のビルを探し当て、中に入ったときだ。ビルの空気が妙に張り詰めている気配を感じたのだ。当たりか……そう口にする間もなく、突然真上から糸が首に絡みついてくる。

「ぐっ」

一瞬にして呼吸ができなくなり、首が重力に逆らって真上に引き上げられる。目が瞬く間に充血していき、首に絡みつく糸を必死になって外そうとするが、食いこんでしまっている糸はとても指で外せるものではなかった。

「……九鬼」

わずかに意識が遠のきかけた中、耳に知っている男の声が響く。もちろん、声の主はいうまでもなく田神だ。

俺だとわかったようなので、こいつを外してくれと指で二度三度、軽く首をたたく。直後に首に絡んだ糸が緩み、これに合わせて身体のほうも一気に弛緩し地面に膝をついた。

「九鬼か。なぜ君が」
「ごあいさつだな、田神」
糸がはらわれた首の中腹辺りをさすりながら、苦しげに返す。呼吸も徐々に戻りつつある。俺は一度大きく咳こんでため息を漏らすと、深呼吸する。
「そうか、エリナ……エリナに聞いたのか」
立ち上がり、ついた膝の汚れを軽く払う俺を眺めながら、田神がつぶやいた。
「そうさ。あんたのいうスパイってのが気になってね、こっちにきたってわけだ。あんた、暗い部屋の中にいる情報屋から買ったろう？　そいつを辿ってきたんだ」
俺の説明に田神が事務的に頷き、口を開く。
「あるいは君がこっちにくることも考えてはいたが、まさかアジトにまでたどり着くとは思わなかった。大丈夫か」
「ああ。もう大丈夫だ。しかし、まさかいきなり首吊り死体になるかもしれないと思ったときは、さすがに焦ったがな。
それよりもだ。あんたの仕事と俺の仕事、どうにもかぶっている部分があるらしい。俺はそいつを聞く必要があると思って、あんたを捜したんだ。もちろん、タダでとはいわない。こちらも今までに知り得たことはいおう。ギブ・アンド・テイクだ」
田神はこちらの提案に再度頷くと、前置きもなく切り出した。
「俺が関西にきたのは、ある男を追っていたからなんだ。その男は全国を転々としていた。だから俺も、その情報を聞きつけるたびにそこへ赴いて、必要があれば使えそうな業者や拠点を作っていたんだが……ある日、その男があるスパイを殺したという噂を聞きつけた。それからさ、そいつの活動がやけに活発化していったのは。
以前、君が話していたコミュニティというのがあったろう。実は俺も島津研究所でのことをきっかけに、彼らと接触してみることにしたんだ。なんせ相手はみんな殺しの技術を会得しているという話だったから、なるべく慎重に行動していたのが功をそうしたようで、

ある男とうまく接触できたんだ。そいつは君も知っている男だ」
俺も知っていて、かつ田神も知っているとなると知る限りにおいて、思案するまでもなくそんな人物は一人しかいない。
「なるほど。毛利か」
「そうだ。彼と接触できたのは大きかった。彼の情報網は決して有能とはいい難いが、かなり広いのは確かだ。そこから少しずつ俺なりに、あの男を追っていたんだ」
納得だ。毛利の情報は少しばかし不確定要素も多いように感じられたので、俺はなかば聞き流している部分があったのは否めない。それをこの男は、細部までしっかりと記憶し、合理性のあるものだけを着実に掻い摘んでいった、こういうことなのだ。何がなんでも手に入れた情報は細部までしっかりと把握してこそ、を信条にしているらしいこの男のことを考えれば、合点もいく。もちろん、一度見たものはすぐに記憶できるという、特技も持っているからであるのも間違いないだろう。
「今度は俺の番だな。つい最近、それも昨日一昨日のことだ。俺たちのいる組織のボスとやらに会ってきたぜ」
「会ったのか」
ミスター・ベーアとの馴れ初めを話したところ、いつもは無感動にしている田神が妙に驚いた表情をしながら、黙って耳を傾けていた。
「つまり、君はミスター・ベーアに気に入られたというわけか」
「ああ、一応はそういうことになるかもしれない。だが、油断はできないな。正直、俺は何か裏があると読んでる。なんたって、あの男の右腕には藤原真紀がついているからな」
不意に真紀の名を出すと、田神が端正なその唇をふっと吊りあげていう。
「君は、本当に真紀が嫌いらしいな」
「ああ。なぜかは自分でもわからないんだが、どうにもあいつのことは好きになれない」

それでも時折、あの女狐に対して妙な感情を抱くことがあるとは口にしなかった。たとえ田神であろうと、こんなことは口が裂けたっていえることではない。

「まぁいい。とにかく、あの女がいる限り、どんな罠が待っているか知れたものじゃない。だから屋敷から逃げ出してきたのさ」

この話はここまでだと、投げやりにいって話を終わらせ次に進める。

「それでだ。あんた、ミスター・ベーアの狙いはなんだと思う？俺はあのＮＥＡＢ－２がそうなんじゃぁないかと思うんだ」

「ああ、話を聞く限りそれは間違いない。しかし、おそらくそれだけでもないだろう」

「というと？」

聞き返すと、田神はかすかに渋い顔をして見せながら、小さくかぶりを振った。

「どうもこうもないさ。君は、島津の坂上がどういう実験をしていたのか、覚えているだろう」

「ああ。全くもってくだらない話さ。不死の実験だろう」

俺は坂上が行っていた実験そのものを嘲笑してみせ、肩をすくめる。そんな俺とは反対に田神はいたって冷静そのもので、神妙な顔つきだった。田神がそんな表情をするとは、こちらになんとも不吉な予感をさせる。

「……これを話す前に、君には話しておかないとならないかもしれないな。まずは見てもらいたいものがある」

神妙な顔つきのまま、田神は建物の奥にあるアジトまで連れていく。奥にあった階段を使いやってきたのは三階にある、一応売り物件になってはいるものの、とても買い手などつきそうもない古ぼけた貸しスペースだった。床はところどころヒビが入っていて、これでは人など来ようはずもない、そんな場所だ。薄暗い室内には、歓楽街から放たれる照明の束が窓から差し込むだけで、寒々しいアジトであった。

「こいつだ」
そんな室内にある、今はもう使われていない机の上に置かれてパソコンなどのデジタル機器に混じっている、一枚の写真を取って渡してきた。
「なんだ、これは」
さらにもう一枚、田神が写真を手渡した。そこに写っているものを見て、俺は思わず声にだしていた。そこに写されていたのは、あのゴメルのような化け物の姿だったのだ。
「この二枚の写真が撮られたのは、今から一年ほど前のことだ。この頃から、世界的に妙な事件が多くおこり始めていて、今年に入ってからは、特にその傾向が強くなってきている。つい最近でも、ロシアの国境付近の森で原因不明の火災があった。十中八九、これが絡んでいると見て間違いない」
「おいおい、待ってくれ。田神、つまりあんたはこんな化け物が生物兵器よろしく、投入されてるとでもいいたいのか」
「そうだ、九鬼。君はなぜ坂上がＮＥＡＢ－２を使い、あんな実験をしていたと思う。本当に、ただの不死を追い求めていただけだったとでも考えているのか」
そこまでいわれてしまうと、返す言葉に困る。坂上が不死というものを研究し実験を行っていたのは間違いなく、奴にとってはそれが至上のことだとは思う。しかし、ただ一概にそれだけだったのかと問われれば、当然ながらそれだけであるはずがない。ああいった実験にしても投資が行われているからこそのものなんであって、決して慈善事業などではないのだ。
あれほどの施設を以って実験していたのだから、経営者は知っていただろうし、大株主なんかもやはりそれを知っていたに違いない。以前聞いた田神の話では、坂上は中間報告をしなければならないといっていたらしい。では、誰に報告するのか。決まっている。島津のトップや大株主、あるいはその周辺のあの実験に関わりあいをもった者たちにだ。

「ミスター・ベーアは、そういった兵器を持とうとしている、こういいたいんだな」

「それだけではない。ここ一年ほどで、世界中の政財界の動きがやけに活発化している。どうやら何人かのスパイが入り、暗躍しているという話だ。ＣＩＡやＭＩ６は当然ながら、各国の諜報組織が動きを見せているんだが、これらとは明らかに一線を画している連中も暗躍している。我々なんかもその一つではあるが。

特に後者のほうは、前者を隠れ蓑にした二重スパイなんかもいて、全体を把握できない。明確な線引きができないせいで、誰が誰の味方なのか、そういったことさえできずにいるんだろう」

「つまり島津は裏で、あのゴメルのような化け物を次世代の兵器として世に出し始め、なおかつそれをめぐって各国のスパイどもが、暗躍しているといいたいわけだな」

二枚目の写真には、どうも体の胴体にあたるらしい部分が写っている。そこにはいくつもの裂傷ができており、傷口からは白い目玉のようなものが見え隠れしていた。この写真がどういった経緯で撮られたかは知らないが、おそらくこいつと出会った際に命と引き換えに撮ったものだと思われた。おそらく、撮影者はもうこの世にはいないだろう。

何にしても、あの化け物たちを兵器として利用しているのだとすれば、有用性は確かに高い。戦争なんてのはどれだけ崇高な大義をもちかけようとも、結局は金もうけのためでしかない。つまり、兵士という人件費に対していかにそれらを抑えるか、なのだ。それでいて敵は多く倒さなければならず、かつ自軍の被害を最小限に抑えなければならない軍のトップにとって、この兵器を利用すればいつも頭の悩ませどころなことが、一気に解決される。もちろん、武器商人にとっては自慢の兵器を世に知らしめる、最高の舞台でもあるだろう。

自身の経験からも、あんなのが戦場に投入されたりしたら、とてもではないが気が気じゃない。ましてや機関銃の一斉掃射程度では

倒れない、まさに不死身の兵士なのだから、パニックが起こったってなんの不思議もない。俺とて命からがら、ようやく一匹倒せたに過ぎないのだ。

その後も俺は、ミスター・ベーアとの会談の際に見たビデオテープに写っていた記録から、武田から依頼された半ば強制の仕事の件など、それらを話すたびに田神は何度か力強く頷いていた。自分の仕事において、納得できた部分があったのかもしれない。

「なるほどな、これで繋がったよ。以前、ヨーロッパにいたときのことだ。ある事件について調査する任務を帯びて、政府ならびに当局によって事件そのものが隠ぺいされた、東欧のある国で起きた殺人事件を調べることになったんだ。事件自体はもう十数年も前のもので、おまけに隠ぺいされていただけに調べるのに少々時間がかかった」

「殺人事件を隠ぺいだなんて、よほどの重役が死んだのか」

「いいや。死んだ男……名前はラドゥ・メチニコフといって、地質調査員だった男だ。世界を股にかけて飛びまわっていはしたが、至って普通の民間人だ。しかし、その職業がゆえに起きた事件だった」

「メチニコフ……ルーマニア系か」

窓から差し込む街灯やネオンの灯りに、俺たち二人の顔が照らし出されている。その光源に向かって、田神は頷きながらチラリと流し見た。

事件の概要はこうだった。メチニコフはルーマニア地質学会の調査員で、ロシア北中西部にあるクレーター痕へ調査のために訪れた。その調査資料と日誌からは、メチニコフがある日そのクレーター内で見つけた不思議な岩石を発見したことが、事件の引き金となったらしい。

ロシア国内で採取されたものは、いかなるものであっても国外に持ち出すことが禁じられているため、メチニコフはロシアの研究所で採取した岩石を調査したという。驚くべきことに石の中に含まれた成分に、今まで発見されたことのない元素を含んでいる可能性を

秘めていると日誌につづられてあったのだ。

元素とはこの世の物質を形成するにあたって、最も重要な要素の一つであるが現在、一〇三個の元素が確認されている。そのため、もし一〇四個目の元素が見つかったとすれば、それだけで世紀の大発見といってもいいものであり、その年のノーベル化学賞受賞は間違いないだろう。

そんなものが岩石の含有成分にあるとすれば、ロシア当局としては絶対にその岩石を国外に持ち去ることは認められないだろうし、場合によってはメチニコフを監禁拘束することすら考えるはずだ。最悪、命すら狙われても、なんらおかしなことではない。

ともかく、その岩石をめぐってロシア当局は、メチニコフに脅しをかけてきたという。こうして、やむなくメチニコフは岩石をロシアに渡すことで事無きを得たわけだが、この時にはすでに遅かった。岩石を採掘しキャンプに戻った際、メチニコフはそれを手で何度も触っており、中継地のキャンプで手にかすり傷を負ったと日誌にはあった。

本来採掘物などを手で直接触れることは良しとされていないが、メチニコフはどういう理由か、岩石を手に取られずにはいられなかったとも書いてあったという。結果これが原因となり、帰国後にメチニコフは死に至ったというのだ。

「岩石に毒でも含まれてたってことか」

「見方を変えればそうともいえるだろう。これは最近になってようやく地質学者たちの間でも信じられるようになってきたことだが、宇宙から飛来したものは、時に地球上では考えられない事象を招くことがある。君はロシア、当時のソ連領で起きた、ツングースカ事件を知っているか」

「ああ。二〇世紀初頭に起きた、シベリアの大爆発事件だろう。爆発の原因が諸説あって、いまだに解明されてないって話だ」

「そうだ。このツングースカの事件は、爆心地周辺の針葉樹が、ある一定の方向にむいてなぎ倒されていたことで様ざまな説が飛び交

ったんだが、いくつか説明不可能の現象が起こっている。爆心地周辺の動植物に遺伝的な疾患が見つかっているんだ。

とりわけ影響が大きかったのは樹木と昆虫だ。成長が止まったり、異常なまでに成長が早くなったり、あるいは胴体部分は普通であるのに、手足だけが異様に長くなったりもしていたという報告もある。もちろん、その逆もあったそうだ。それだけならまだしも、この大爆発後にこのツングースカでは、それまで見られたことがない新種の生命が見つかってさえいる。

樹木にしても年輪が止まったまま、何十年と生きているものがあったり、樹木の年輪が季節ごとに一つから二つという異常な速度で作られていき、結果、記録のために傷をつけた部分はたったの二年後には消えていたといった、やはり常識からは考えられない現象が報告されているんだ。これはもはや、ツングースカの環境そのものがそれ以前とはまったく別物に変化したといってもいい。いや、常識など通用しない、異世界といったほうが近いかもしれないな」

「おい、そいつはまさか……」

固唾をのんでつぶやいた俺に、田神が静かに首を縦に振った。そうなのだ。田神の話を聞いて俺の脳裏にまず浮かんだのは、坂上が研究し開発した、あのＮＥＡＢ－２だった。生物の異常な成長、本来の形を変えた異常形態、異常な速さの再生……それはまさしく、あのゴメルと同じではないか。

「ツングースカの場合は隕石が空中爆発したというのが現在、最も有力な説とされている。これは、隕石が空中では爆発しないと信じられていたことと、クレーター痕がなかったため隕石説が否定されていたことが要因だったんだが、九〇年代に、木星に九つの衛星が衝突するという天体イベントがあった。この際にいくつかの衛星が地表にはぶつからず、空中で爆発したことが確認されたことで、近年は再びこの隕石説が強く肯定されてきている。

しかも、木星の場合と同じで、空中爆発の際にできる特殊な形の爆風痕がツングースカでも起きていたことで、さらに強く裏付けら

れている。ツングースカ・バタフライというんだが。そしてこれはツングースカの場合に限らずだが、隕石の衝突や爆発の際、周辺の地層にイリジウムという地球上ではほとんど採掘されない元素が見つかるという点でも、同様だ。

さらにイリジウムという元素は、本来地球上にはなかったとされる元素であるとされている。地球上にはあまり存在していない元素はイリジウムの他にもあるが、そういったものはおそらく本来は地球上にはなく、宇宙からの贈り物と考えるべきだろうな」

「なるほどな、そういった話は確かに面白い。しかし、メチニコフが死んだからといって、なんだって隠ぺいする必要がある。死因が毒素が入ったことでの事故死ってのはわかったが、連中がそこまでしなくてはならない理由はなんなんだ」

「そこさ。これにはいくつかの様々な要因がある。まずはじめに、メチニコフがロシア側から脅しをかけられたといったろう。実際には彼を助けたのは、ＣＩＡの工作員だった。このスパイが他の任務で行きがかり上、メチニコフと接触したためにロシアはＣＩＡとの関わりを疑ったんだろう。

ＣＩＡのスパイはこのときのいざこざで命を落とし、結果としてメチニコフは岩石をロシア側に奪われた。これが元で、ロシア、アメリカ政府高官たちのあいだで緊張が高まった。もちろん、それに巻き添えを食らう形でルーマニアにもそれが及んだんだ。おかげでメチニコフが発掘した岩石もろとも、この事件が闇に葬られることになった。ルーマニアからすれば、一人の人間の死を葬ることで大国二つからの圧力を回避できるというのなら、天秤にかけるまでもなかったろう。

これで事件が解決したかに思われたが、今度はアメリカ側が、このどさくさにまぎれて密かに新手の工作員を投入していたことで、事態の収拾がつかなくなっていった。当然ながらアメリカとしては、ロシアの諜報組織が絡んだこの一件に、自分たちの思惑がばれたと思ったろうし、ロシア側がやっきになった岩石のことも、気になっ

たに違いないだろうからな。
　そしてここからさ、俺が任務をうけたのは。はじめ真紀からのメッセージで行うことになったこの任務だけども、事件の概要を調査し実態の確認するまでに留めておくという、なんともおかしな任務だったんだ。しかし俺は、どうにも上はこのメチニコフという男の死について、なにか考えがあるらしいと思って、さらなる調査をしたわけさ」
　確かに、それは少しおかしい。そんなものはちょいと圧力でもかけて、地元の警察か何かにさせれば済む話だ。これは俺が田神の立場だとしても、きっと田神と同じ行動をとったに違いない。田神は、ニヤリと肩をすくませながら続ける。
「メチニコフの死因は、間違いなく例の岩石から検出された含有成分によるものだと思われた」
「間違いなく思われた？　変な言い方だな」
　そう指摘すると、田神は再び肩をすくめながら苦笑した。
「実際のところはよくわからなかったのさ。ただ死にいたる要素が、それ以外には見つからなかったというだけの話でね。なんせ、メチニコフの死体から検出されたのは確かに含有成分と似たものだったそうだが、明らかに変質していたというんだ。
　この成分はどうしたわけかタンパク質に強く作用する特性があった。君ならもう分かるかもしれないが、これは坂上が創り上げたＮＥＡＢ－２と同じ効果をもたらすものだ。タンパク質すなわち、遺伝子にも強く影響を及ぼすということだ。そして、この頃はまだ坂上もＮＥＡＢ－２の完成には至っていない。
　つまり、この岩石の含有成分を用いて坂上は、ＮＥＡＢ－２の生成に着手することができたということだ。これについては裏付けもすでにとってある」
　田神は俺が島津研究所からくすねてきたデータを解析、復元し、またデータ化されたプロジェクトの日誌を見つけたという。俺が島津から念のためにもってきたものが、ここまで役に立つだなんて思

いもしなかった。

どうも、坂上のＮＥＡＢ－２の生成には、前身のプロジェクトが発端となっているらしい。これについては、坂上の口からも聞いたので今さら驚くことでもないが、問題は前身のプロジェクトの被験者の存在だった。もちろん坂上のことだから、その実験に関してもいわくつきだったのはいうまでもないだろうが、この被験者というのがあの今井重工の娘、つまり、あの殺し屋、今井の妹だというのだ。名前は確か、今井夏姫だったはずだ。

思えば、今井夏姫のそばに仕えていた佐竹も彼女が病弱だといっていたし、島津のもとで働いていた松下薫も同様に、今井夏姫の治療をおこなっていたと話していた。つまり佐竹が家族から見放されていたという話は本当であるが、表向きの理由こそ治療だっただけで、実際には逆で、実験の被験者だったからこそ病弱だったのだ。

この実験そのものは、やはりＮＥＡＢ－２の開発へ繋がるもので、ここで得られたデータをもとに、どこからか入手した例の岩石の含有成分とを混ぜ生成していったのが、あのＮＥＡＢ－２という新薬だと、田神ははっきりと口にした。

「あのゴメルという化け物を産み出すことができた理由も、これで大体わかった。タンパク質を変容させるということはつまり、遺伝子も変容するということだ。遺伝子はコードと呼ばれる遺伝配列をもった、タンパク質でできているからな。ＮＥＡＢ－２はこの情報配列を壊すことで、対象を破壊するわけさ。

逆にいえば、配列の破壊と絶妙の兼ね合いで操作することができれば、ゴメルのような化け物もできあがるということなんだろう。もっとも、そのために何千何万か……あるいはそれ以上の、果てしない実験を繰り返してきたんだろうが」

「タンパク質の変容か……。指の傷口からそいつが入っていったために、メチニコフも死んだってわけだな。だがかといって、ゴメルの異常な再生能力とかの説明にはならないんじゃぁないか？　俺には、そこんところがよくわからないんだ」

「いったろう、ツングースカの例を。植物の異様な早さの再生能力、これをさらに発展させたのが、あのゴメルの再生能力の答えなんだと思う。そして、それらを補強することになったのが、前身となったプロジェクトの概要だ。坂上にとって前身のプロジェクトは、あくまで通過点にすぎなかったのかもしれないが。

以前、手紙で君にＮＥＡＢ－２の効果について教えたと思うが、あれはまだ効果の一端でしかない。本来の効果は、今いったようにタンパク質の変容にある。坂上が以前おこなっていたプロジェクトは、細胞ならびに遺伝子の老化現象についての論文から影響を受けて、不老という結論を導き出した。つまり、老化の遅延を目的とした実験だったということだ。

そのプロジェクトは紆余曲折を経て、最終的に成功を収めたらしい。これだけでもたいしたものだが、この最後の被験者となったのが今井夏姫だ。この今井夏姫の細胞を培養し、例の岩石から採取された成分とを組み合わせたのが、おなじみのＮＥＡＢ－２というわけだ」

俺は強く頷きながら、さらに説明する田神の話に耳を傾ける。

ＮＥＡＢ－２として完成をみたものの、その元となった遺伝子そのものは同じ人間からとったものとはいっても全くの別人のものなのだから、いくら精製されたものであっても拒絶反応が出るのは当たり前だ。細胞の発する運動摩擦熱によって反応し、それを治そうとするのではなくあくまで生成させ続けるための遺伝子に、もう一方の持つ、細胞老化の遅延という効果をもたらす。

この両方の効果が常に一定に保たれることができれば、いつまでも若い遺伝子ならびに細胞と、それらを補強するために急激な再生能力と生産力をもつことになり、不老不死に繋がるはず……坂上の理論は、おおまかとしてはこんなところだったらしい。

これは要するに、臓器提供による治療と同じ理論ということでもある。臓器移植の理論は二次大戦以前にはあったそうだが、はじめは正気の沙汰ではないと非難されたらしい。しかし第二次世界大戦

の際、奇しくもそうした論文が再発見、評価されたものの、これが実施されるようになったのは五〇年頃から始まったとされる。現在でこそドナーだとか、拒絶反応だという言葉が一般の人間でも知られるようにはなったが、その頃は拒絶反応を起こすことまでは、あまり考えられてはいなかったという。

つまり坂上は、藁にもすがる思いで自身の理論を確かめるため、気の遠くなるような作業と修正を繰り返した結果、最期には地獄に身を堕としたわけだ。

「坂上のデータには、手に入れた岩石に含まれていた成分にはまだまだ未知数だとも記されてあったから、絶対とは言い難いのは確かだが。ともかく、結果としてこの適応者がくしくも君の妹だったというわけだ」

「効果については未知数だといったな。坂上は三週間に一度、ＮＡＢ－２を投与する必要があるといっていたが、もしかすると、こいつが新たな領域にまで達したということはあり得る、こうもいえるんじゃないかな」

「大いにある可能性だな。今はＮＥＡＢ－２を投与された者を、便宜上キャリアと呼ぼうか。

タンパク質の変容とはいうが、それがどの程度変化するのかまでは数値上示してはあっても、実際どれほどの変化にブレを起こすのかまでは書かれてはいなかった。人間だけに限らず、幾多の種の生物たちを使った坂上だから、この微妙な変化の中でキャリアの姿を変化させることなく、遺伝情報だけが変わるほんのわずかなブレの領域に納まったものが出てきたとしても、なんらおかしくない。

それに人間という種ほど、個体さでの遺伝情報が事細かに出来ている生物は珍しい。これだけでも、真のキャリアになり得る可能性をもつ者がいたとしても、決して不思議な話ではないんだ。もしかしたら生き残ったことによって、キャリアとしてＮＥＡＢ－２と共存できる何かを体内に創りだしたともいえるかもしれない。あるいは、それ以上のものも」

「それ以上のもの……」

田神の説明を聞いているうちに、だんだんと気が滅入ってきていた。説明が理解できないというわけではないが、どうにも、あの沙弥佳がそんな新発見された動物よろしく見られるというのに、気が殺がれていったのだ。もちろん、あいつがこの可能性にあたって生き残ったというのなら、それはそれで構わない。むしろ生きていたのだから、もろ手を挙げて喜ぶべきところだ。

だというのに俺は今、あいつが人間の姿をした何かに変わっているかもしれないと考えてしまい、それが本当に良いことなのかと、自問自答している。もしこの予感が正しいのであれば、あいつが何度か俺の前に現れたかもしれないと思われるとき、俺に言葉もかけなかったのはこれが理由なんではないのか……。そんな気がしてたまらないのだ。

「ああ。それこそ、本当に不老不死の存在が生まれた、といった可能性もないわけではない。坂上にとって、真のキャリアが現れてこそ、次のステップに進めると信じていたようだからな」

「やれやれ……やはり、あんたを捜して正解だったな。俺だけでは少々理解が追いつかないところもあったが、あんたのおかげで随分とすっきりしたぜ」

「いや、君の話のおかげでもあるからな。おそらく、坂上の実験は最終段階に達したともいうことができるかもしれない。岩石の含有成分がどんなものであったにしろ、ある一つの効能を発揮することができた以上、この被験者となった君の妹が狙われていないとも限らないな。もしかしたら、君が捜しているのに見つからないのは、それを知っている人間の元にかくまわれている可能性もある」

かくまわれている。情けないことに、俺は今までそのようなことは考えたこともなかった。あいつを見た最後の姿は、俺の手を払って走り去っていく後ろ姿だった。俺に愛想をつかせ、誰かのもとで幸せに生きているのかもしれない、そう考えるとそれもいいのではないのかという気になった。

しかし田神は、そんな俺の心中を読んでいたかのように続けた。
「だが、もしかくまわれているとしても、決していい環境とはいい難いだろう。仮にもし坂上のいうところの最終段階にまでなっていたとすれば、必ずなんらかの形でそれが出るはずだ。そうすれば、人は恐怖するか、それか利用としようとするかのどちらかだろう。もしかしたら受け入れようとする人間もいないとも限らないが、これはそう滅多とあることではないと考えるべきだろうしな」
断定していう田神の言葉に、俺は思わず息をのんだ。確かにその通りだ。ましてや、伊達聡一郎が経営していた鳳凰館から、島津研究所……こうした修羅場をくぐり抜けた沙弥佳が、俺の知るそれ以前までと同じであるのかという不安は、間違いなく俺の胸の中にもあったのだ。
もし俺の知る沙弥佳と今が違ったとして、俺はどうすればいいのか。ふと浮かんだ疑問に思いを巡らせはするも、大したことなど何も思い浮かびはしなかった。俺はため息をつきながら、話題を変える。
「まぁいい。それで、あんたはある男を追って関西くんだりまできた。別に俺は、その男を追っているというあんたの仕事に横やりを入れるつもりはないんだが、その男とスパイの関係は」
「……残念ながら名前はいえない」
「いえない？」
「別に君に教えないといっているわけじゃない。わからないんだ、その男の名前を。外見の特徴もその時々で違うので、捜しようがないのさ。だから、どんな男なのかは不明だ。しかしスパイのほうは、生前に大友孝也を絞りあげたから、すでにわかっている。スパイは二人。それも、男女のペアだという」
「あんた、大友と会ったのか。俺も今朝、早い時間に自宅を訪れたら死んでたぜ。それも、撃たれた直後だった」
田神は手をあごにやった。なにか、思うところがあるらしい。
「大友と会ったのは二日前の夜だった。彼の死を昼のニュースで知

り、あるいはスパイが近くにまで及んできているのを実感できたものだが、そうか、俺は運が良かったみたいだ」

全くさと、相槌をうつと田神は、大友から絞り出した情報を整理しながら語った。

大友は何年も前から中東や東欧に興味を持っており、時間が許すときに旅行へ出かけていたという。そんな大友が一年ほど前、たまたま旅行したトルコの大都市イスタンブールのアンダーグラウンドで、西側から密輸されたドラッグの話を聞きつけた。なんせ有数のファンドの社長ともなれば遊ぶ金は腐るほどもっている大友だから、当然その話にすぐ飛びついた。このとき大友の頭の中では、すでにそのドラッグを密輸して荒稼ぎしようという考えすら持っていたかもしれない。

しかし、その大友が掴まされたのは、いわゆる普通のドラッグだった。これに激怒したという大友は結局、噂にきいたドラッグをお目にかかることなく日本に戻るも、すでにこのとき、件のスパイの罠にかかったことを知らずの帰国だった。

「つまり、はじめから大友はスパイ連中に目をつけられていたわけだな」

「そういうことになる。大友は、ドラッグを吸引しているところを撮られたらしい。それを警察に知られたくなければ、自分たちのいうことを聞け、とね」

つまり、結局は利用するだけ利用され、死に至ったことになる。時間的に考えても、田神が行動を起こしていたことも、スパイには何らかの形でキャッチされていたに違いない。そして、その発信源はといえば大友だったわけで、奴は今朝、愛人の女たちもともに揃って始末されたのだ。けれど、もともとドラッグなどやらなければスパイの手先にもなることなどなかったはずで、俺からいわせれば自業自得といえる。

とにかく、大友はその後、スパイの手先になるよう脅されて、仕方なく傀儡になることを了承した。二か月ほど前に、大友が旅行に

見せかけて上海にヘヴンズ・エクスタシーを買い付けにいったという。いや、もっと正確には沙弥佳の血液といったほうがいいだろう。もちろん、大友に原材料がなんであるかなど、教えられたとも思えないが。

　このあたりの話はすでに聞いていることなので、特に目新しいものはない。重要なのは、その後だった。

「最後に大友は、もう一人スパイの手先になっている人間がいるといっていた。この人物は手先とはいうが、このスパイと実際に何度か会っているというんだ」

「それであんたは、わざわざこんな場所に張りこんでいるってわけだな」

　田神の肯定に俺も相槌をうって、これからどうするのかを少しのあいだ、議論を交わした。とはいっても、すでにほとんど田神が考えていた立案ではあるが。俺は田神がとるべき行動をとるだけで、あとは田神が見張りをするということで決まった。スパイがどんなやつかはわからないまでも、見張りがいれば何らかの形で保険にはなる。

　そもそも田神は、スパイが二人いたからこそエリナを関東に残させたのだという。別々に行動しているとも考えてのことだったそうだが、そのときはまだ確信が持てなかったらしい。

　田神とのやり取りを終えた俺は、窓の脇の壁に隠れるようにして、そっと街のほうを眺め見た。せいぜい三階かそこらしかない小さなビルばかりが立ち並んでいて、向こうに繁華街の背高いビルの窓から漏れる灯りと、ネオンのぎらぎらした夜景が飛び込んでくる。

　ともかく、スパイの野郎と繋がりのあるという人物を締めあげないわけにはいかない。こいつからスパイへたどり着けなければ、いつまでたっても武田へもミスター・ベーアへもたどり着けない。この二人を出し抜く決定打を手に入れるためにも、なんとしても俺はここでその人物に会わなくてはならない。

俺が田神の簡易拠点にしているビルに忍び込んでからというもの、三時間が経とうという頃だった。パソコンの前で一人なにか考え込んでいる田神の代わりに双眼鏡を使って、背の低いビル群と大通りを挟んだ向こうにあるビルを監視していたとき、一人の男がビルの路地へと入っていくのが見えた。

先ほど、田神が広げてみせた周辺の見取り図では、あの先にあるのはビルの通用口しかない。俺が見張りにたってからこの数時間、そこへと入っていった人間は誰もいないことから明らかに曰くありげだ。いくらスーツ姿であるとはいえ、夜の十一時になろうというこの時間に一人ビルの中へ入っていくなんて、普通ではない。おまけに、スーツ姿の男はさりげなくではあったが、周囲を確認したのも見逃さなかった。

十中八九、大友が吐いたもう一人の手先と見るべきだろう。双眼鏡を覗いていた俺は、ズームアップし、ビルの窓に灯りがつかないか待っていると、案の定、ビルの死角になっていて見えなかったが電気がついたのを確認した。反対側のビルの壁に、漏れた光がぼやけながらも反射したのだ。

「田神。やっこさん、現れたようだぜ。ビルの五階だ」

双眼鏡をはずしながらいうと、田神はこちらに目を向けながら一瞥し立ち上がると、ほとんど足音を立てずに歩み寄り手を差し出す。

「こいつを渡しておこう。あまり上等なものではないが」

「いいや、十分さ。ちょいといってくるぜ」

田神から手渡されたものはいわゆるイヤーモニターというやつで、そいつを素早く耳につけると、俺はすぐさま部屋を飛び出る。もちろん、田神と同様に足音はなるべく消してだ。

上等なものではないというが、半径数百メートルくらいは十分に周波数が届くはずなので、こちらとも音声でやり取りができる。もしかするとやつのことだから、上等なものでないというのが謙遜で

ある可能性もある。ともかく、今はこれで十分だ。
二段飛ばしで階段をおりていき、表へと出た。おそらく、スーツの男は銃などの武装はしていないはずから、こちらも丸腰で問題ないだろう。もし武装していればスーツの上からその盛り上がりがわかるはずで、さりげなくとはいえ、ビルに入ろうとするのにわざわざ周囲を確認しようとするのが、いかにも素人くさい行動だった。
本来ならナイフの一本でも持っていきたいところだが、多少の厚着をしているとはいえ半そで、さらに季節は夏だ。そんな折に長袖を着込んでの武装など、逆に怪しんでくださいといっているようなものなので、仕方ないだろう。これが銃社会のアメリカなどであれば、まだ長袖にしたとしても言い訳が通った可能性もあるかもしれないが。
数時間前に横切った大通りの横断歩道を再び渡り、男が入っていったビルの路地へと入った。路地裏だけあって大人が一人通れるかどうかの狭い通路を道なりにいくと、すぐに空へと吹き抜けになった少し開けたスペースに出る。右手には灰色らしいビルの通用口があり、俺は素早く開けて中へと身を滑り込ませた。
入った先は、真っすぐな通路の端にあるドアの上にある非常用出口の緑色をした灯りだけが、不気味にあるだけだった。そのすぐ脇に階段があるのを見つけた俺は、その階段を音もなく素早くのぼっていった。所々に窓があり、そこから街の光が差し込むだけでビルの中はかなり暗い。このビルは基本的に、夜間は誰もいてはいけないことになっているらしい。
五階までのぼってきたところで、左へ折れ、うっすらと白い無機質な廊下に漏れ出した光のところへ静かに近寄り、中を覗きこむ。中では男が一人なにか探していて、その動作はどこか慌てている様子だ。つい先ほどビルの中へと入っていった、スーツ姿の男だ。
『着いたか』
左の耳にしたイヤーモニターから、田神の声が発せられる。俺は小さく、ああと相槌をうって、一気になだれ込もうとしたところ、

突然どこかで聞き覚えのある電子音が響き渡り、中の男がビクリと体を大きく震わせた。恐る恐るといった具合に、男はスーツから取り出して机の上においていたらしい携帯電話をとりあげ、かすかに震える手で通話ボタンを押して耳へと持っていく。

「あ、ああ、私だ。……いや、そういうわけじゃない」

男の声が震えている。どう見ても電話の主に対して脅えているのがわかる、そんな声だ。俺は中に飛び込もうとしてドアノブに伸ばした手を放し、男の様子を盗み見ながらイヤーモニターを彼のほうへと向ける。

途切れ途切れの会話からは、男が電話の主に脅されているらしいのがよくわかった。そして、やはりこの男こそ、例のスパイの手先であることを、自ら言い放ったのだ。

「今まで、あんたのために何度も汚れ役を勝手きたろう。頼むから、もう解放してくれ。周りの人間が怪しんでるんだ」

その言葉を聞いて、俺は思わずほくそ笑む。どういう事情かは知らないが、男も大友と同様に脅されて仕方なく手先になったらしい。もしかすると、はじめこそスパイと共同体として工作活動に励み、後々、それを逆手にとられて脅されることになった、こうした可能性もある。

まぁいい。どちらにしろ、今の俺には好都合の事実だ。田神も同じことを考えたのか、イヤーモニターから指示をだしてきた。

『こいつは運がいいな。これを利用しない手はない』

どうやら一方的に告げられて通話を終えたのはスパイのほうで、切られた男は頭を抱えながらその場にあった長椅子に腰かけ、その背中からは絶望に身を包まれたとでもいった雰囲気を醸し出している。

田神はフロアの電気を消すよう指示をだした。田神の指示に従ってその場から移動すると、移動先にあったブレーカーをすぐさま落とす。

突然おとずれた出来事に男の驚く声が、廊下に響く。もしかした

ら、スパイの件とあいまって、敏感になっているのかもしれない。
俺は足音が立たないよう静かに、かつ素早く部屋にまで移動すると、やはり静かにドアを開けて中に入る。男は突然灯りが落ちたため、おろおろとしている姿が影となってわかる。
「大人しくしな」
「だ、誰だっ」
わけもわからずに突然発せられた声に反応した男の上ずった声は、戸惑いと、誰もいないはずのビルにいた別の人物への恐怖が入り混じっていた。
「誰でもいいぜ。とにかく騒ぐんじゃぁない。今おまえには銃口が向いてるんだ」
「銃……」
もちろん銃などないが、それらしく肘から先をを男に向けると、男が低い声でそういった。銃なんて憂き世離れした言葉に反応したわりには、やけに落ち着いている声だった。まるでそれ自体が、日常茶飯事といった具合のニュアンスにもとれる。
「あんたが、”ドッグ”に雇われた殺し屋か……早いな」
「……」
犬と呼ばれ、俺は暗闇の中で眉をひそめた。どうやら、スパイはドッグという暗号名（コードネーム）で呼ばれているらしい。
「殺し屋まで派遣するなんて、もう俺も終わりか」
うわごとのようにつぶやく男の言葉に、イヤーモニターから田神がいった。
『どうやらこの男は、”ドッグ”からの指令に不備をきたしているようだ。多分、死ぬことを覚悟しているのかもしれない』
俺は田神の言葉に小さく頷く。
「おまえさんにはいくつか聞きたいことがある。それができるというのなら、”ドッグ”に処刑の取り消しを口聞いてやってもいい」
思わぬ切り返しに、男がはっとする表情を見せた。そんなことができるのかという、驚きに困惑が混じった表情。田神はそういうが、

俺は覚悟していたにしたって、そう簡単に人間が生を諦めたりするはずがないと思ってのことだ。

うろたえながら男は、何度も確認するように本当かとオウム返しに聞き返し、俺は安心させるように何度も肯定する。ともかく、スパイと接触できる数少ないチャンスを、逃すわけにはいかなかった。

第８８章

人気のない男の家のそばにある公共駐車場で、田神と二人、車の中で息をひそめていた。視線の先にあるのは二階建ての男の家で、電気のついた二階にある部屋だ。二人でここに張り込みを始めてから、すでに二時間以上が経過している。

「ドッグの奴は現れるだろうか」

沈黙を破ってつぶやくと、助手席の田神は力強く頷きながらいう。

「現れるはずだ。奴とてスパイだというのなら、自分にとってのメリットを易々と潰すはずもないさ」

田神の発言に、今度はこちらが頷く番だった。実際のところ、俺自身、現れるはずだとは半ば確信を持っているものの、果たして本当にうまくいくかというとやはり、不安になる部分というものはあるものだ。だからこそ、そんな台詞が口をついてきたのである。

宮部順一（みやべじゅんいち）を名乗ったドッグ手先の男は、落ちつかなげに電気のついた部屋の中をうろうろしているのが、その影から窺える。おそらく、命惜しさに俺たちの手先となってしまったことが、自分の首を絞めることになるのではないのかとでも考えているのだろう。そもそも、スパイの手先になるというのはそういうことなのだから、どのみち後には引けないのだけども。

「きた。おそらく奴からの電話だ」

持っていたスコープを田神が手渡してくると、そのスコープでもって部屋のほうを覗き見た。落ちつかなげだった宮部が携帯を耳に、二度三度と頷いているのがみえる。もちろん、こんな深夜に電話をかけてくるのは、ドッグ本人であることは間違いない。助手席に座る田神が膝においたノートパソコンを操作し、イヤーモニターに音声を繋いだ。

『あ、ああ、いま家にいる……ああ、わかった。わかったよ……』

弱々しく、仕方ないといった感じの声に、演技らしい素振りは全くない。やはり、二重スパイという立場からくる恐怖や、強迫観念があるからかもしれない。

『そ、それで話というのがあるんだ……ああ、実はついさっき、あんたを探ってるらしい男が一人、訪ねてきた。……いいや、知らないといっておいたさ、もちろん。ああ……ああ』

宮部はドッグからの指示を仰いで、何度となく頷き相槌をうっている。宮部もこちらの指示通りにしたので、ドッグの奴は間違いなく、こちらのことを疑っただろう。とすれば、なんらかの指示を出すに違いないというのがこちらの考えだ。宮部には指示されたことをメモ書きし、家から出る際にはそのメモをポストのそばに落しておくよう、こちらも指示しておいた。

案の定、しばらくすると宮部の部屋から電気が消え、時間差で男が玄関から出てきた。スーツのポケットから鍵を取りだす瞬間に、丸められたメモ紙が偶然落ちたかのように捨てられるのが、確認できた。これもこちらの指示通りだ。

「タクシーを使うつもりらしい」

この深夜帯に電車は動いていないので、移動するのは歩きでなければタクシーくらいだろう。宮部は足がつかないよう、ドッグの奴と落ち合うときは必ず公共機関を使うといっていたので、残る選択肢はタクシーしかない。

右左を見て周囲を確認し繁華街のほうへと向かって歩く宮部を確認すると、田神は車を降りてすぐに玄関の前に落されたメモを取りに行く。車を出たと同時に、車のエンジンをかけて少しの時間をおき徐行させながら、玄関先に車をだした。田神はメモを拾うとすぐさま再び車に乗り込んで、俺はそれを確認するまでもなく車を発進させる。

「さて、どう動くかな」

くしゃくしゃに丸められたメモを広げ、田神はそこに書かれた行き先を読むと、俺にもそのメモを渡してくる。向かう先は意外にも

O市を大きく離れ、N県N市の住所が書かれてあるではないか。どうやら、そこでドッグの奴と落ち合うつもりらしい。メモを田神に渡し、田神は早速パソコンでその住所を調べだした。

先行していた宮部を追っていると、繁華街へと続く目抜き通りに出る直前で追いついた。宮部には俺たちが追ってきていることは伝えているが、どの車でだとかどんな手段で追ってきているのかまでは伝えていない。こちらが通り過ぎたところ、バックミラーで確認すると向こうはこちらに気付いた様子はなかった。もしかすると、この車が俺の乗った車だと、薄々気付いた可能性もないではないが。

宮部は目抜き通りに出たところで、運よくやってきたタクシーを掴まえ乗り込んだ。運転手に行き先を伝えると、こちらのイヤーモニターにもはっきりと声が伝わり、ほぼ同時にタクシーが動き出す。急ぎだということで、宮部は高速を使うようういい渡すと、眠いからと一切の口をつぐむ。

「罠が仕掛けられている可能性も無視できないな」

都心環状線に乗って、タクシーを追う俺たちの車にも沈黙がおりていたところを、俺が無理やりにそれを押し破った。田神は頷くこともこちらを一瞥することもなく、静かに言葉をつないだ。

「充分に考えられるだろうな。いや、むしろそう考えて行動した方がいいに決まっている。そこで現地では、二手にわかれて行動したほうがいいと思う。イヤーモニターがあるから大丈夫だし、おそらく君が宮部の後を追ってくるというのは、想定していると考えていいだろう。向こうは元が二人組ということもあって数の上で有利に立っていると考えているはずだ」

「つまり向こうは、こちらが二人組だというのを気付いていない可能性が高いってわけだ。さらにいうと二手にわかれれば、連中の不意をつけることも可能というわけだな」

できることならば、二人組だというのなら二人とも捕えたいところだが、果たしてそんなことが可能か……俺は一人頷きながら、そんなことを考えていた。仮にも向こうだってプロなのだ。おまけに

二人となると、生け捕りは正直難しい。田神がいるから心強いのは間違いないが、だからといって二人とも生け捕れるかといった確かなことをいえるわけではない。

もちろん、やれるかやれないかの問題ではなく、やらなければならないのだがやはり考えてしまう問題ではあった。それに二人組というのは、どちらかが失敗してももう片方が生き残るとなると、とても厄介なのだ。

まぁいい。二人組が質の悪いものであるというのは、いつの世も決まり切っていることではないか。考えようによっては、どちらかを生け捕ればいいということもいえなくもないわけで、もう一人は片づければいいともいえなくもない。こちらのほうが、二人を生け捕ることよりもはるかに簡単なのだから、そうした可能性だってないともいえない。

ともかく、今はN市に着くことが先決だ。あまり会話しようとせずに、パソコンで熱心になにかを調べている様子の田神が、向こうに着くころまでには何かしらの作戦を立てているに違いない。

そろそろ東の空が明るくなり始め、あと一〇分と経たずに夜明けとなる頃、タクシーとそれを追う俺たちの車は、目的のN市街近郊にまでやってきた。高速を降りたタクシーは一般道を到底ありえないスピードで走り、こちらもそれに合わせながらも緩急をつけながらも、後を追うことで、あっという間にN市街を通り過ぎて郊外へと抜け、山のほうを目指していった。

田神が調べた住所の場所は、どうやら、市内も外れにある病院だということが判明した。意外や意外、もっと街中の病院でいいのではないのかとも思うのだが、あえてそんな場所を指定したあたり、なにか曰くありげだ。しかも病院というのがどうにも、俺を嫌な予感にさせる。

「ところで九鬼」

「ああ」

これまでほとんど口を開かなかった男が、ここにきて唐突に話しかけてきた。
「さきほど君にいった話、覚えているか」
「アジトでの話か」
「そうだ。あのときはいわなかったが、実はまだ君に話しておきたかったことがある。まさか、すぐにも病院に行くことになるとは思わなかったから黙ってたんだが、この際だ、仕方ない。メチニコフの話の際、ツングースカの事件について触れたろう。あれの延長といってもいいんだが」
どことなくもったいぶって前置きした田神は、膝の上のノートパソコンを閉じ、前を見たままゆっくりと語りだした。
「ツングースカでは、周辺の環境が変わったといったのは覚えてるな。これを環境実験の手法を用いて、遺伝子にどういった影響が出るかなどの実験をしたレポートがある」
環境実験などといわれてもピンとこなかったが、田神の説明を聞いているうちにそれがどうしたものなのか、すぐに理解できた。要するに、その事象がどうして起きたのか、理論的な説明付けをするために似たような環境を作り上げて行うこと、言葉のままの意味のようだった。
この環境実験にならって、遺伝子単位でもそれを行うことができるという理論がなされたらしく、この実験がこれから向かう病院では密かながら行われているというのだ。
「ヘヴンズ・エクスタシーを市場に流すためにドッグの奴が工作したというのなら、こうした研究を行っている病院に目をつけないはずもないな。宮部をそこに呼んだことといい、きな臭いな」
「全く、島津の件があって以来、その手の話はほとほとうんざりさせられるぜ」
そういう俺に、田神は苦笑をもらしながら肩をすくめるだけだった。さらに驚くべきことに、病院の株を所有している人物が、あの島津製薬のトップである、島津宗弘だというのだ。これで、ますま

す今回の一連の事件との関連性が強まる。
そして、そこへ新たに現れたドッグというコードネームのスパイ……。こいつがいかにして関わってきているのかは計り知れないものがあるが、確実に、今までのどこかの時点で関わりをもってきているに違いない。
宮部を乗せたタクシーは、目的地となる病院の何百メートルか手前で止まると、金を支払ったらしい宮部が降りてきた。やや勾配になった道路を道なりに進んだ先には、件の病院が視界にうっそりと佇んでいる。
「どうする？　とりあえず俺が宮部を追うつもりだが、あんたはこのまま車で待機するかい」
「いや、俺は少し気になるところがあるから、そっちへ行ってみようと思う」
田神は周辺の街並みを見渡しながら、そういった。
「たぶん、病院にいるのは片割れしかいないと思う。あとの一人がいるとすれば、病院ではなくもっと別の場所にいるはずだ」
確かにその通りだった。俺としても、プロが二人同時に同じ場所へ向かって、同じく行動を共にするとはとても思えない。二人ということはすなわち、どちらかが別動隊となって行動したほうが効率がいいにきまっている。そうした点でも、こちらもそれなりに予防線を張っておくに越したことはない。
第一、向こうは二人組ということで、和の上では有利だと判断しているとすれば、こちらも一人と思わせておいたほうが、もう一人いたという思わぬ油断になる。田神のことだから、間違いなくそう判断してのことだろう。
「わかった。島津のときのようなものがないことを祈るばかりだな」
強気にそう告げ、俺は車から降りた。すでに外は太陽の暑い陽射しが照りつけており、夜の冷えた空気から、早くも蒸せる空気へと変わり始めている。今日も暑くなることは確実だ。
宮部は昨夜のスーツ姿のまま、足早に病院へ向かっている。俺は

時折すれ違う人を尻目に、宮部のあとを追う。ものの数分で病院の敷地へと入った宮部は、病院の正面玄関を素通りし、建物の裏手のほうへと回った。おそらく、裏口から入るつもりなのだろうが昨晩のビルといい、病院といい、裏口へ回るのが好きなやつだ。　とはいいつつも、自分も似たり寄ったりなものだと思うと、人のことはあまりいえないのかもしれないが。

　ここまでのあいだ、宮部はこちらが尾行していることに気づいている様子はなかった。気が気でないということもあってか、そこまで気を回す余裕がないのだろう。スパイの手先という立場であれば、下手を打てば自分の死に直結しかねないというのを心得ているからこそだ。

　宮部が回っていったほうへ俺も続く。建物の裏手はいわゆる中庭というやつになっていて、芝生や幾本かの木々が青々と茂っている。中庭を右手に宮部はさらに奥へと進んでいき、渡り廊下でつながった別棟すらも通り過ぎて、さらに奥にある背の低い、三階建ての建物のほうへと向かっていく。どうやら、その建物こそ宮部の目的の場所らしい。

　案の定、その建物の前にきたところで立ち止まり周囲を一瞥したため、俺はいち早くそれに気付いて咄嗟にそばに立っていた木の陰に隠れる。こちらに感づいた様子もなく、素早く中へと入っていった。

　木陰から出て、すぐに宮部を追った。建物はどうやら病院の研究施設になっているようで、ここだけは明らかに前に建った二棟と違い、病棟といった赴きをしていないのだ。

　俺は入る直前、ここにどんなものが待ち構えているか、用心してドアノブを捻る。そうそうあることではないとは思うが、島津のときのように、想定を遥かに超えた化け物がいないかだけは、心に留めておく必要があると踏んだのだ。もし遭遇しようものなら直ちに逃げなくてはならないし、逃げるにもある程度の心得というものは必要だろう。

建物の中は、どこかひんやりとしていて、あまり人の気配というものを感じさせない。一般病棟は看護師や医師たちが朝の準備に追われている頃だろうから、ここが無人であっても不思議はないのだけども、この無機質さはそれとは明らかに違う何かを感じさせるものだ。嘘であるとは考えられないが、田神の話が本当ならここには何かあるはずなのだ。

耳を澄ませるまでもなく階上からは宮部だと思われる人物の、どこか忙しない足音が響いてくる。この音を頼りに俺は、足音を響かせないよう小走りにすぐ脇の階段をのぼり、二階へとあがった。足音はまだ階上から響いてくるので、ドッグの奴は三階を指定したらしい。

さらに階段をのぼって三階へとあがる途中、今まで響いていた足音が突然途絶えた。どこかの部屋に入ったということだろう。

俺は足音を忍ばせつつ三階へとやってくると、そのままの調子でこの階にあるドアの全てに耳を押し当てるつもりだった。だがおそらく、そこまで必要ないだろう。足音は、平坦な場所についたところで少しして消えたので、あまり遠くの部屋にまではいっていないはずだった。

そう考えながら最初の部屋のドアに耳を押し当てると、早速中から男の話し声が聞こえてくるではないか。思わずニヤリと唇の端を歪ませたところで、引き戸になったドアの取っ手に手をかけて、そっと開けたときだった。

「ああ、きたよ。ようやくだ」

そんな台詞とともに、ひどく低い男の声がした。

違和感と若干の困惑を覚えながらも、俺は部屋の中へと身を屈ませながら滑り込ませる。この状況でそんなことをいう輩は、消去法からいって一人しかいない。

「まんまと騙されたというわけか」

俺はヘマをしたと内心舌打ちしながら毒づいた。相手の妙な素人演技に、見事に騙されてしまったのだ。

「ふふ、こちらこそ見事に引っ掛かってくれて嬉しいよ、九鬼」
宮部に名指しされ、わずかに眉をひそめる。俺の名はあまり知られていないはずなのに、どういうわけか宮部の奴は知っている。ここに疑問符を浮かべないわけにはいかない。
「ドッグってのは、あんたのことだったんだな、宮部」
「いかにも。私こそドッグさ。私の周辺をどうも、うろちょろする奴がいるというのに気付いて網を張ったわけだが、なるほど、随分と大物殺し屋が釣れたものだ」
今の一言でこの宮部……いや、ドッグの野郎がこいつらを探っていたのが田神とは気付かずにいるというのと、俺と田神とは全く区別がついていないというのわかった。俺の名だけでなく顔まで知られていたとなると、かなりの不利になるがこの際仕方ない。少なくとも田神のいった通り、こちらに味方がいないと思ってくれているだけでも幸運といえる。
だとするなら宮部にはこのまま、こちらにはバックがいないと思わせておくことに限る。万に一の可能性も考えておくも当然だが、少しでも男から情報を聞き出す必要もある。
「今、誰と話をしていたんだ。演技にしたって、まさか、誰とも話すことなく携帯とお喋りしてたわけでもないだろう」
あえて挑発的にいってみたのに、宮部はクスリともせずに受け流していう。
「駄目だ、駄目だよ九鬼。そんなことをいって私から情報を盗みだそうとするなんて、私には通用しないよ。
君は、はじめから私を利用し操るつもりでいたようだが、当てがはずれたな。まさか本当にここまでつけてくる車に、なにも気付かないとでも思ったかね。私が君をここに連れてきた理由もわからなかったんではないのかな」
「理由か。そうだな、大方、ここで行われている実験についてのことが絡んでるってところ以外、想像なんかつかないね。それとも、まだ他になにかあるとでも」

無駄とはわかってはいても挑発的にいう俺に、宮部のやつは薄笑いを浮かべるだけでなにも答えることはない。こちらに有益になりそうなことは、なに一つ教えるつもりはないらしい。

「なるほど、まぁいい。だが、一つだけわからんのだ。なぜ俺が九鬼だと思った」

「依頼人が君の情報をよこしてくれたにきまっているだろう」

「その依頼人というのは」

そういうと再び薄笑いの沈黙が降りる。大したプロ根性だ。もともと一筋縄でいくとも思っちゃいなかったが、再び腹を据え直す必要がありそうだ。

「それで、あんたは依頼されて俺を始末しようってわけか」

「端的にいえばそうなるな」

そう告げた瞬間、宮部は懐からナイフを一本とりだし、こちらへ完全に向き直った。

「しかし、いいのか。ここでそのナイフで俺を始末すれば、確実に証拠が残るぜ。こんな場所にまでわざわざ誘い込んだということは、それなりの理由があると思うが、だとしても、少々荒っぽいやり方とは思わないか」

「安心しろ。ここの人間は私の味方だよ。君に対してご立腹の連中だからな」

宮部がいい終えた直後に、しまったと口の中でかみ殺すような小さな舌打ちしたのを、俺は見逃さなかった。俺に対してご立腹だと？　宮部のいい方だと、はじめから俺が狙われていたということになるが、一体誰がこんな殊勝なことをしてまでつけ狙うというのか。そんなの決まっている。この病院そのものが奴に依頼したわけであり、そんなことをやるとなると当然、それらを揉み消せる立場にあり、それでいて俺に恨みを持つ人間しかいない。

そして、その人物とは……。

「そうか。島津宗弘……島津宗弘があんたの依頼人ってわけだな。連中の総本山ともいうべき研究施設を粉みじんにしてやったからな、

その腹いせというわけだ」
　田神もここが島津と関係のある施設だといっていたので、十中八九そうだろう。しかし島津の研究施設を壊滅させてやり、その上で俺に矛先を向けてきたというのなら、この上なく腹の底から充足感が湧きおこるというものだ。そのおかげで連中は泡をくったというわけなのだから。ざまあみろだ。
「……なにがおかしい」
　薄笑いを浮かべながらも冷たい眼でこちらを見ていた宮部が、怪訝さを含んだ調子で小さくいった。
「いいや。単なる思いだし笑いというやつさ、気にしないでくれよ」
　思わず表情に出ていたらしい。これは俺の悪癖というやつなのかもしれないが、それはともかく、笑わずにいられるわけがない。宮部のいったことから推理すると、依頼人がまず島津宗弘と見ていい。そして俺にこうして殺し屋を差し向けたということは、自分も始末されてもいいという覚悟もあるというわけだ。つまり、これを口実に島津の頭脳も始末していいという、ゆるぎない報復の権利を与えられたわけなのだから、これが嬉しくないはずがない。
「それであんたは、ヘヴンズ・エクスタシーを市場に流すために工作活動を行った、こいつも間違いはないんだな」
「そこまで知っていたのか。まあ、今さら隠しておく必要もないからいってしまうと、君のいう通りさ。だが、別に私がしたかったからではないがね。あくまで、仕事だったから行ったまでだ」
　確かにそうだろう。どんな汚れ役であろうと、それを行うからこその工作員なのだ。そこに私情などあってはならない。こうした点では、俺はイレギュラーに近いのかもしれない。しかし、それでも一スパイという観点からすれば、使えない組織にいつまでもいるのもまた、矛盾したものであることもまた事実なのだが。
「……さて、もうお喋りは十分だろう。こちらとしても次の仕事があるのでね」
　次の瞬間、宮部が身を低くして一気に間合いを詰める。繰り出さ

れる刃先に完全に眼がいっていて、この動きに反応できたのはほとんど偶然といっていいほどだった。
本能からだったのか、俺は避けるついでに男のナイフを持つ腕めがけ、蹴りを放っていた。だがその蹴りは完全に読まれており、奴はいとも簡単に腕でブロックする。
「ちっ」
舌打ちとともに体勢を立て直し、一旦間合いを広げるべく一歩後ろへと下がる。
「ふんっ」
腹の底から漏れた気合の声とともに、宮部は間入れず詰めよる。身を固めるように細め、突き出されるナイフの腕の内側へと左手を瞬時に伸ばし、二の腕を思い切り掴む。そのまま肘を横に曲げていき、男を引っ張るようにその体を引く。
そのときにはすでに、右手で掌底を男の顔面めがけ打ち込んでいた。
「がっ」
顔面を拳による打撃でなかったことに逆に油断したのか、宮部に一瞬の混乱があった。それを見逃さず、俺は相手のみぞおちにその掌打でもって膝をつかせる。
持っているナイフを地面に落した男は、胃液を逆流させ吐き散らし、苦悶に表情をゆがめている。ナイフを足で蹴り飛ばし、さらに膝で宮部の顔面も蹴りつける。
そして、気を失ってはいないが朦朧としている宮部の肩を掴み固めると、思い切り力をこめて関節を外す。鈍い感触とともに、宮部は声にならない悲鳴をあげる。
「久々の実戦で、腕が落ちたかい」
自分でも思いのほか冷静に対処できたことを実感しながら、冷たく言い放った。ここのところ、実戦に次ぐ実戦で感覚が鋭敏になっているのかもしれない。
「くっ……」

もちろん油断はない、はずだった。宮部の腕を後ろ手に組んで立ち上がらせたとき、奴のこめかみのあたりに一点の赤がともっているのが視界に映ったのだ。

それを見たとほぼ同時に、俺は宮部の体を突き飛ばし後方へ飛び込んでいた。

窓ガラスの割れる音が響いた瞬間、宮部が短い悲鳴をあげてそのままうつ伏せに倒れこむ。考えるまでもない。スナイパーの放った弾丸により倒れたのだ。

机や椅子を壁にしながら匍匐前進し、倒れた宮部の足を掴んで引き寄せる。物陰から出れないこともあって仰向けにするのには、普段以上の体力を要する。

スナイパーの奴は宮部を一撃にして仕留めるつもりだったんだろうが、いち早く俺がそれに気付いて突き飛ばしたことが功を奏したのか、弾は胴体部分に当たったようでまだ宮部の息はあった。

しかし、それもあとわずかだというのが、顔と短く連続する不規則な呼吸に現れていた。死相の出た顔には眼を見開いて、ひどく驚きの表情も見て取れた。

「何かいうことは」

耳元で叫ぶ俺に、宮部は唇を震わせながら動かした。かすかにしか聞こえない声を聞きとろうと、耳を口元へやる。

「なぜ……裏切っ……」

「裏切った？　そいつはお前の片割れのことか、そうなんだな」

続けて叫ぶ声に、男はかすかに首を縦にしたような気がした。もう体のわずかな筋肉を使う力すら、なくなってきているのだ。

「もう一人の正体を教えるんだ、名前はっ」

「な、名前は……」

意識が混濁し、眼を見開いてはいるがもはや見えてはいないだろう。それでも宮部は、外部からの声に従って、手を血まみれになったスーツのほうへと動かしたところで、その手の動きが不意に止まり、床へと垂れ落ちた。

「くそ、どういうことだ」
息絶えた宮部からは、白い床によって強調された赤がぬるぬると流れ出ていく。俺はスーツのポケットから携帯と他にもなにかないか探ってみたところ、内ポケットからメモ帳が見つかった。すでに端っこのあたりが血に濡れているが、表の顔と裏の顔を使い分けているのは考えずともわかるが、何かヒントになるかもしれない。俺はそのメモ帳を、スラックスの後ろポケットにしまいこむ。
スナイパーからの第二射は今のところないが、こちらを狙っていないともいないので俺はそのまま匍匐前進で、ドアのほうへと向かった。
「田神、田神っ」
イヤーモニターに手をあて田神の名を呼んでも、やつからの応答はない。それどころか、ジャミングが不愉快な音を立てて聞こえてくるだけだ。
舌打ちして部屋を出ると、壁に背をやりながら素早く二階へと下りる。俺に返り討ちにされたと思ったところを何者かによって狙撃された宮部は、直前にこの後に仕事があるといっていた。それがどんな内容のものなのか今のところ知ることはできないが、そいつを調べる必要はある。
（そういえば……）
建物から出ようとしたとき、用心して分厚いドアを背にそっと開けたときのことだった。ふと、以前にも同じようなことがあったことを思い出した。確かあのときは、佐竹との一戦でヤクザどものビルにいったときだ。あのときも、壁の爆発によってできた穴から佐竹を狙撃したやつがいた。
そのときと今回、妙に似ている気がするのだ。俺にやられ、ダメージをおった相手が何者かによって突如として狙撃される……時と場所は違えど、同じような状況がこうも起きるというのは、少々考えものだ。前回は戦闘の混乱の中でのことであったというのと、こちらにも向かって撃たれたことが俺を混乱させたが、今回は明らか

にはじめから宮部本人しか狙っていなかった。
そして宮部が死の直前に告げた、裏切りという言葉。これが何を意味するのか。もちろん答えはわかりきっている。ドッグという二人組の工作員の片割れが、宮部を裏切り狙撃したということに他ならない。
二人組であったというなら、それまでも二人で行動していたと考えてもいいだろうが、どうして今回に限ってパートナーを撃ち殺したのか、この疑問だけが晴れない。あるいは、片割れにとって最初から宮部は単なる捨て駒でしかなかったのか……考えれば考えるほど、疑問は深まるばかりだ。
俺はかぶりをふった。わからないことを、今あれこれと考えても仕方ない。ともかく今は、田神と合流することが先決だ。田神もなにか目的があるようなので、そいつと照らし合わせなければならない。俺はあたりを見回し、影になるように建物から飛び出した。

空は雲が低くなり暗かった。この様子では、雨が降り出すのも時間の問題だろう。おまけに、遠くでは雷の鳴り響いており、先ほどと比べ風も強く吹いている。先ほどチラリと見た天気予報では、夕方から明日にかけて雨が降り続くという予想がなされていたから、もしかすると今日はちょっとした嵐になるかもしれない。
トタン屋根が風にさらされて、耳障りな音が室内に響いている。つい昨日までの猛暑と比べれば天国と地獄ではあるけども、こうも急激な温度変化に身体は逆に寒いと感じているらしい。それでも風雨をしのげるという点なら、これはこれで十分になんとかなるだろう。
俺は今N市内の片田舎にある、六畳一間の廃屋に身を潜り込ませていた。田神がここで活動する際の、拠点の一つとして選んだアジトだ。なにかあったときは、お互いここにくるよう確認しあっていたので待っていれば、そのうちに向こうもここにやってくるはずだった。

向こうが車を所持しているので、ここまでくるのにさほど苦ではないだろう。少なくとも、俺に比べればはるかに楽だ。時間的な問題と人目がつきにくいという条件のもと、ここしか見つからなかったということもあって、街中から少々離れた場所にまでくるのは、少しばかし時間を要するものだった。

しかし、いくら合流場所として使うにしても、水も食料もなしではいささか苦しい。考えてみればN市に到着してからというもの、まともに物を口にしていないのだ。せめてこに来る途中で、適当なものを買い込んでおくべきだったと今さらながら後悔した。アジトにならば、缶詰かなにかあるだろうと、タカをくくっていたのが仇となった。

そうした点でここをアジトに選んだという田神に、そんなことにまで気を回す余裕がなかったほど、時間もなかったという証拠にもなるのだろうが。

今にも飛ばされそうなトタン屋根の音が不意に途絶えたと思ったところ、擦りつけるような金属音があがった直後、トタン屋根が俺の見つめる景色の中へ飛ばされ、ついには地面へと落ちていった。雨漏りがしないかと、少しばかし心配になる。というのも、窓ガラスにだんだんと小粒の水滴がつきはじめていたためだ。時間的にはまだ夕方の五時にもなっていないはずだが、この空もようからはもう日没直後といった雰囲気だ。

ついにはぽつぽつと雨音がトタン屋根に落ちてきているのがわかると、遠くから車のヘッドライトがこちらに向かってやってくるのが見えた。自分の甘い期待と、周辺に人家らしいものがないこともあって、車の目的はここだろうと思ってしまう。しかし、その思惑はほぼ確実といってもいいだろう。だんだんと近づいてくる車に見覚えがあったのだ。必然的に運転者も田神だということで間違いない。

案の定、廃屋の前で止まるほどの速度で車は裏手のほうへと徐行していき、ほんのわずかな時間をおいて、ドアの閉まる音がしたあ

とに、田神が顔を覗かせた。
「どうやら無事だったようだな」
「あんたも無事で何よりさ。ところで早速で悪いんだが、まず腹を満たしたい。なにかないか」
「そういうと思って、適当に買い込んでおいた。好きに食べてくれ」
廃屋にあがりこんだ田神の腕の中には、どこかのスーパーから買ってきたらしい食料品のはいったビニール袋と、おなじみのノートパソコンの入ったサックが抱え込まれている。俺は袋をうけとると、中から缶詰や惣菜なんかを取り出して、それらをスピードを緩めることなく胃袋の中へとおさめていく。
田神も、その中から適当なものをいくつか選んで食べ始めると、お互い無言のまま、一五分と経たないうちに食事を終えた。なんとも味気ないいえば味気ないが、空腹を前に簡易食しかないというのだからそれも仕方ない。
「それで首尾はどうだった」
食べ終えた俺が早速そういうと、田神は軽く一度頷いたあとに口を開いた。
「ああ、やはり俺の睨んだ通りさ。こいつを見てほしい」
そういって田神はサックから、ノートパソコンと例の病院からくすねてきたらしい資料を取りだして、俺の前に広げて見せた。手前に広げられた紙を適当に一枚手にとって、そこに並んだ文字列を眺めてみる。丸きり意味不明の文字列で、数字やアルファベット、それに記号なんかが等間隔に並んだそれは、俺には一体なんなのかわけがわからなかった。
「なんなんだ、こいつは」
怪訝に眉をひそめて、紙から眼をはなして田神のほうを向き直っていう。
「それは、ある一つのコードだ。だが少し特殊なコードになっていて、解析に時間がかかりそうだ」
「コード？」

「原始プログラムと呼ばれる、元になる文字列のことだ。厳密にはソースコードというんだが。

そいつは、そのコードを配列化しているものらしいんだ。しかしどうしたわけか、配列化されてはあるがどうも複雑に分解してあるという。そこで、その道のプロにこれの構築化を依頼しておいた。どんな結果になるかはわからないが、これまでの一連の繋がりがあるのは間違いないと思う」

田神は断定的にいい、この配列の説明を付け加えた。以前、島津研究所に潜入したときにも、同じようなものを見かけたことがあったという。そこでこいつを見た瞬間、これがなんらかの配列だと気づくのにわけはなかったらしい。格段に記憶力のいい田神のことだから、すぐになにかあると気付いたのも頷けるというものだ。

そしてもう一つは、あの病院が島津製薬のグループ内の下請けともいうべき施設であるということと、島津で作り産み出されたものを市販用に量産するための研究をしていたともいった。厳密には、そのうちの一つだというのが本当らしいが、なぜその中の一つにすぎないあの病院が選ばれたのかは気になる。

「宮部は、あそこの人間が味方だといっていた。しかし、あんたの説明だと、わざわざあそこでなくても良かったはずだ。他にもなにか理由があったとしか思えないな」

「ああ、もちろんそれには理由がある。今日……とはいっても、もう過ぎてしまったことだがあの場所に、島津宗弘が現れる予定になっていたらしい」

「島津宗弘が」

そういうことか。俺は一人納得し、無言で頷いた。依頼人である島津があそこを訪れるというのであれば、雇った殺し屋が殺人現場にしたとしても、自分でいいように揉み消すことができる。だから宮部は、O市から遠く離れたあんな場所を選んだのだ。いくら殺し屋とはいえ、殺人が合法というわけでもないので、その後始末を請け負ってくれるというのならこれほど楽なことはない。

「そういえば宮部は俺を片づけたあと、まだ仕事があるといっていたな。いうわりに急いでいるようにも思えなくて、少し不思議に思ったんだが島津の奴と会う予定だったというのなら、それも納得がいくな。あそこに島津が現れたとなると、そのまま会いに行くのが当然だろうからな」

しかし、俺にはどうもそれだけではないように思われた。会いにいくというのは間違いないにしても、ただそれだけでの理由というのは、かすかな違和感を覚えるのだ。俺を片づけたのを報告するにしても、そんなのは電話一本ですむ話だし、わざわざ会いにいかなくてはならないほどのことではない。俺がそう告げると、田神もそれに深く同意した。

「同意見だな。島津との仕事に関しては、まだなにかあったに違いない。もしかすると島津だけに限らなかったかもしれないが」

「どういう意味だ」

「昨日君にいったろう、ロシアの国境付近であった原因不明の不審火の話だ。新たに判明した事実と照らし合わせると、あれが島津と宮部の繋がりを確かなものにし、なおかつ、次の仕事に繋がるものなのかもしれない」

島津宗弘と宮部の二人は時折、東欧やロシアに赴いていたという話もあるそうで、なんらかの工作活動をしていたとみて間違いない。そして、宮部を裏切った”ドッグ”の片割れにしても然りだ。しかし、ここで俺は一つの疑問、というよりも可能性に閃いた。

「今俺たちは、宮部がドッグの実働部隊ありきで考えているが、実際に海外での行動では片割れという可能性はないだろうか」

俺は宮部が片割れに裏切られ始末されたという事実と、不意に思い浮かんだ可能性を投げかけると田神は押し黙り、あごに手をやっ考えを巡らせだすと、それも束の間、すぐに手を解いて頷いた。

「君のいうのもごもっともだ。宮部が現れたからてっきり先入観を持ってしまったが、海外での工作活動は片割れが行っていたという可能性は十分に考えられる。それと宮部が裏切られたというのが、

実際には片割れのほうがもっと重要な何かを掴んでいるとみていいだろう。仕事があるといっていたというなら、おそらくは、その概要程度しか知らされていなかったんだと思う」

「つまり、片割れがもっと別のそれ以上の任務を帯びて、それに合わせた実動部隊となるのが宮部だったというわけだな。実際、単なる実動部隊であれば、換えはいくらもきくからな」

大まかとしては俺の考えたことと一致して、内心安堵する。結果としては、片割れにとっては宮部という男は単なる捨て駒だったということになり、俺の知りたい重要なことは知り得ていなかったということにもなる。宮部がこちらの質問になに一つ答えようとしなかったのには、教えるつもりがなかったのではなく、はじめっから何も知らされていなかったのだ。きっとそうに違いない。

しかし片割れが奴を始末したということは、もし俺に叩きのめされた後のことを考えてのことだろう。始末しなくてはならないよほどの理由……つまるところ、宮部は片割れのことを何らかの形で知っていたということではないだろうか。たとえ宮部には知らされていなくとも、奴の口から片割れにたどり着くような重要な何かを喋らせないために。

少なくとも、奴は片割れの正体くらいはしっていたに違いないはずだから、それだけでも何かしら手がかりになることもある。あるいは、片割れと落ち合う場所も決めていた可能性もあるかもしれない。ともかく、片割れにとっては色々とまずいことになりかねないからこそ、宮部の奴を撃ったと考えるのが妥当なのには変わりない。

「しかし、片割れを捕まえるとなると、これはまた骨が折れるな。どこに奴がいて、どこで奴と落ち合うつもりだったのか、手がかりが一切ないんだ」

「確かにそうだが、全くのゼロというわけでもない。今、この配列を依頼したといったろう。そこで少し思い当たらないこともないことがあった」

今しがた見せた配列のコピーされた髪を手でぴらぴらと揺らして

見せながら、田神は気になることを告げた。話によると、依頼を受けた人物がこう漏らしたという。少し前にも、田神の持ってきた配列を見て似たようなものの依頼を受けたというのだ。これと相俟って、分析、構築化するのは比較的たやすいとも漏らしたらしい。

「つまり、前々から今回俺たちが侵入したあの病院は、狙われてたってことか」

「少なからず、そうみていいだろう。だが、以前持ち込まれたものに関してはわからないな。島津の他の研究施設にも同様のものが流されていないとも限らない。

依頼してきたという人物にしてもドッグの片割れだったのか、あるいは全く違う誰かだったのかもわからない。今回、宮部を狙撃した人物と同一人物である可能性もないわけではないが、これも別人同士だったということも十二分に考えられることだろう」

俺は田神の言葉に重々しく頷きながらも、その依頼してきたという人物と宮部を片づけた人物が同一人物ではないかと、なんとなく確信をもっていた。もちろんこれは、俺と対峙した人物が二度も何者かによって狙撃されたという経験とも、重なっているからといったほうがいい。

「あんたが依頼したところに現れたらしい人間と会う方法はないかな」

「君ならそういうと思って、すでにそれらしいことを聞いておいた」

ニヤリとする田神に俺も、思わず苦笑しながら肩をすくめた。依頼されたのはすでに一〇日も前ということなので、そろそろ結果が出る頃らしいのだ。となると俺のとるべき行動は決まってくる。

「だったら話は早い。あんたが依頼したという人物に会ってみるとしよう」

俺の言葉に頷きあいながら窓の外へと視線を移すと、強くなってきていた雨足はいつのまにか叩きつけるような、どしゃぶりの大雨になっていた。

第89章

どしゃぶりの雨の中、足早にO市の目抜き通りを横切った。田神とは置いておいた車の近くで一旦わかれ、活動の拠点としておいた、市内のホテルへと戻るつもりでいたのだ。さすがに丸一日以上、二日近くもあけているとあって、道連れのことが少しばかし心配になったというのが本当のところだった。

適当なところにおいておいた車は、車上荒らしにあうこともなく、ずんぐりと持ち主である俺のことを待っていた。その車を無人の港まで走らせると、そこでアクセルを固定して海のもずくへと変えてやった。

中には外資ファンドの男が衰弱しきった状態で気を失っており、そのまま車と共に海中へと沈めてやった。どのみち男については死刑執行を心に決めていたので、少なくとも気を失ったままあの世に逝けたのは、運が良いというものだろう。

あとはそのまま何食わぬ顔で海沿いを走る沿道を歩き、適当なところでタクシーを捕まえてホテル近くまでやってきたのである。すでに夜も十一時を回ったところなので、ロビーにはフロントマンもおらず、エントランスを素通りすることができた。

エレベーターで宿泊している部屋に戻ると、念のためにドアをノックして中の様子を確かめる。一置きあって中からロックの外される音がして、ドアが開かれた。

「……九鬼さん」

ドアを開けて顔を覗かせた綾子ちゃんの表情が、訪問者が俺だとわかり安堵に緩んだのを見逃さなかった。それもそうだろう、目を覚ますと部屋には誰もおらず、何十時間もこんなホテルに缶詰めになっていたのだから。

俺は開いたドアからするりと中へと身を滑り込ませ、静かにドア

を閉めたと同時にロックが自動的にかかるのを確認し、綾子ちゃんをエスコートするように部屋の中へと進んだ。さりげなく何もなかったことを確かめると、ようやく肩の力を抜いた。

「すまなかったな。こんなに長く開けることになるなんて思わなかったんだ」

「いえ……」

力なくいう彼女の目じりが、少し赤くなって腫れぼったくなっている気がした。安堵の感情で気持ちが満たされたといった表情から、もしかすると不安からか泣いていたのかもしれない。それを察するとこちらとしても正直なところ、やりにくいものがあるのは事実で、そいつには触れることなく切り出す。

「食事はしたか」

「はい。夕方に軽く」

「そうか」

短いやり取りのあとに、沈黙が降りる。見て見ぬふりをしようと切り出したのに、どことなく他人行儀で、あまりにも的外れな感がしたのだ。多分、彼女にしても必死に泣き止もうとしたに違いなく、それに触れるのが躊躇われたはずなのに、やはり自分の愚かさからか、なぜ泣いていたのか気になって仕方がなかった。

これが他の女ならもっと別の扱い方もあるのに、彼女が相手だとどうにも勝手が違ってしまってかなわない。気にしすぎといわれれば、それまでの問題ではあるのだが。

「服、着替えたんだな」

「え？　あ、はい」

彼女としても缶詰の状態でありながら、日中に外出し、適当に服を買っておいたらしい。現金はそれなりに渡してあるし、替えの服くらいは買っておいたほうがいいといっておいたのだが、今日か昨日か、本当にそいつを実行していたようだ。

ローライズデニムのパンツに、ベージュのキャミソールといった簡素な出で立ちの彼女に、俺は短くそう告げていた。いつまでも、

高級感のある服を着られたままではかなわない。

気まずい空気が流れたところ、その雰囲気から逃れるようにシャワールームへと移動して扉を閉めた。今まで何も聞こうとしない綾子ちゃんに感謝することが多かったが、こういうときは逆にそれが辛い。おそらく、何があったのか知りたいはずなのだろうが。

ふと恐妻から逃げるようにトイレや風呂に駆け込む夫のようだと、自嘲気味に苦笑いを浮かべてかぶりを振った。今はまず、宮部からとってきた携帯とメモ帳を検証しておいたほうがいい。

まず携帯の履歴を見てみると、昨晩に非通知で連絡がきているのがわかった。この時間帯は、例の宮部の家でのことだ。問題はその次で、あろうことかそこから先の履歴が一切残っていなかったのだ。わざわざ今回のために電話を新調したとも思えない。そもそも、古いとも思わないが明らかに新品とも言い難い状態から、履歴が毎回消されていると判断したほうが自然だ。

しかし履歴などはたとえ消えていようとも、調べようと思えばいくらだって調べようがあるので、見かけだけともいえなくもない。事実、田神は履歴のデータをパソコンに移し履歴はもとより、発信元まで調べてみるつもりらしい。

俺はといえば突っ込んだ部分は田神に任せ、それとは別に、別の視点から調べてみるつもりだった。田神には田神なりに、調べなくてはならない理由もあるだろう。

何より俺が気になったのは、メモ帳のほうだった。メモ帳はいわゆるビジネス手帳というやつで、そいつをパラパラとページをめくり、宮部の表向きの予定を眺める。宮部はビルの経営と管理する仕事に就いているというのは、すでに田神からの情報で知っているのでそれと照らし合わせてみれば、それとは違うものもあるかもしれない。奴はその筋の道の人間としては模範ともいうべき人生を歩んでいて、伴侶や家族はおらず、家族サービスといった行事はないはずだ。

つまり、仕事以外で何か予定があったとすれば、それこそが裏の

顔、宮部の本業における予定ではないかと考えたのである。その考えで、過去の予定表を見たときだった。七月の予定表にそれらしいものが書かれてあったのがわかった。

七月の一〇日の欄に奴は、N市へとただ一言だけ書いていたのだ。どう考えてもこれは、例の病院へ訪れたに違いない。まず、島津となんらかのやり取りをしたと考えるのが妥当だろう。島津のスケジュールなどは田神が調べるといっていたので、これは向こうのほうで確認もできるはずなので、今は置いておく。

他にも時折、明らかに表向きの用事とは別の用事と考えられるものがあったのだ。そこでどんな密約がなされたのかは知ることはできないけども、それと同様のものが明日の欄に書かれている。つまり、宮部のいった次の仕事というのが、これのことを指しているのは明白だ。しかも、その相手の名前を見て驚いた。

「松下薫……」

宮部が会うつもりだった人物はなんと、あの松下薫だというのだ。松下薫といえば、島津研究所の壊滅の際、その混乱に乗じて島津を辞め、どこか別の地に移ったという話を田神から聞いて以来、どうなったのかは知らない。わかれる前に、松下には母の病気の肩代わりをさせていた分と、今後数年間、働かなくともなんとかなるだけの金を渡したというところまでだった。

その松下薫の名が、どうしてこんなところに出てくるのか……。もしかすると、全くの同姓同名というのもありえなくもない。しかし、島津と深く関わり合いを持った人物が、とても別人とは考えにくい。

一体どういうことなのか。K市のホテルで会った際口にしていたことに、嘘偽りはないように思われた。もし、あのときの一挙一動が全て演技だったとすれば、大した女優だとも思うがとてもそんな風にも思えない。いや、しかし……。

考えれば考え込むほど、一体どういうことなのかと深みに嵌ってしまいそうなので、俺は再び小さくかぶりを振り、考えるのを止め

た。とりあえず、松下薫とはもう一度会う必要があるというのだけは、確実なことであるのは間違いない。

とりあえず、明日以降の予定は全て表向きのものばかりだったので、そこでメモ帳を閉じた。ともかく、松下薫が俺の知る人間であるかどうかは会えばわかることだ。問題は、宮部がどこで松下と落ち合うことにしていたのかだ。他の部分でもそうだったが、メモ帳には肝心の部分は書かれていないところを見ると、重要な部分は全て頭の中だけに書き留められていたらしい。

これからどうすべきか考えながら汗を吸った服を脱ぎ、シャワーの蛇口をひねってノズルを手にとった。冷たかった水がだんだんと湯気を帯び始め、バスタブの底に飛沫を散らしながら叩きつけられていった。

少々熱すぎるともいっていい温度の流体を頭からかぶると、いとも簡単に全身に張りついた汗を洗い流されていく。部屋に備え付けてあるシャンプーを手にして、どろりと流れ出る分を適当に泡立てると、一気に頭につけて脂分や汚れを落とすように掻きたてた。

頭にシャワーの湯をかけ流したままのため、頭につけたシャンプーの泡は即座に水流にのって流れていった。本来ならもう少しじっくりと洗うところだけれど、今はこの程度で十分だ。

適当にシャンプーを洗い落としながら、適当にその泡でもって垢も落とすと、シャワーを止めて備え付けてあるバスタオルを取り、身体の水滴を拭いていった。身体を拭き終わるとバスタオルを腰に巻き、少しばかし伸びた髭を、やはり備え付けの髭剃りで軽く剃り落とす。

「あっ……」

バスルームから出てきた俺の恰好を見た綾子ちゃんの口から、小さな驚きの声が漏れる。

「こんな恰好ですまないが、服を乾かしてるんだ」

「あ、そ、そうですよね」

少し焦ったように言い繕う綾子ちゃんの顔は、林檎のように赤く

染まっていて今にも憤死しかねないほどになっていた。
彼女のそんな表情を見て、俺はつい吹き出していた。まるで、漫画か何かに出てくるような初々しい反応を目の当たりにし、あまりに出来過ぎてこんなことが本当にあるのかと笑ってしまったのだ。
「わ、笑わないでください」
耳まで真っ赤にした彼女は、さらに必死になって抗議し、慌てふためいている。彼女のそんな表情を見たのは随分と久しぶりで、俺も無意識に頬を緩めていた。
そのうちに綾子ちゃんの顔から赤みがとれ表情が沈んでいくと、こちらの笑い声もだんだんとなくなっていった。わずかな沈黙のあとに、彼女が切り出した。
「さっき、ニュースで見ました。N市で男性の死体が見つかったって。九鬼さんと何か関係があるんじゃないですか……？」
「なぜそう思う」
思いもかけない言葉に驚きながらも、心のどこかでは、なんとなく言われそうな予感があったのか、すぐにそう切り返した。
「いえ……なんとなくです。九鬼さんの、その、お仕事が……」
口にするのが嫌なのか、綾子ちゃんは口ごもる。俺の仕事について、薄々とはいわず、ほぼ間違いなく身の危険が生じる職業だと気付いているんだろう。もしかしたら、ミスター・ベーアの屋敷で、真紀のやつからいらぬことを吹聴されている可能性も十二分に考えられるが……。
それはそれとしても、綾子ちゃんがすでに俺の素性を知っていると見ていい。だからこそ、何か意味深なことをいったに違いない。
「もう隠しても仕方ないみたいだな。そうさ、俺が関わったのは確かだ。だけど、俺がそいつを殺したわけじゃぁない。そいつは誓って、俺ではないといっていい」
彼女の瞳を見据えていった俺に対し、綾子ちゃんは何かいいかけようとして、すぐに口をつぐんで眉をひそめながら目を伏せる。まるで、何か言い訳をいおうとしてやめた、子供みたいな仕種だ。

「……探偵みたいなものだといってましたよね。あれは」
なんとか言葉を探していったらしい彼女に、俺はまくし立てるように告げる。
「決して嘘をいったつもりはない。職業柄、探偵の真似事みたいなことはしないといけないからな。探偵よりも、はるかにダーティーな仕事だっていいたいのなら、そいつも否定する気はないけどな」
「つまり、それは九鬼さんが、ひ、人殺しをしたっていうのを認める……ということですか」
人を試すかのようなニュアンスを含んだ控えめな声で尋ねる綾子ちゃんに、胸がかすかに痛むと同時にどういうべきか、しばし考える。
彼女の物言いからは俺が探偵ではなく、汚れ仕事をしているというのは間違いなく知っているようだけども、殺し屋なんてやっているということまでは知らないようにも思えるのだ。知らないと隠し通し続けるのは、言葉でいうほど簡単なことではない。
こんなことをいうのもなんだが自身の性格上、それは難しいように思われるのだ。仮に今隠したとして、彼女をいつまでも危険に曝してしまうことになるような気がしてならない。いや、俺と関わり続けていれば、いずれ、将来どこかの時点で必ず危険になることは目に見えていることだと、何度も自答していることではないか。
「そうだ。今さら隠し立てしても意味がなさそうだから、はっきり言おう。俺は人殺しだよ。君の思っているような人間じゃぁないんだ」
幾分、荒げるような声になった気もするが仕方ない。もう彼女がこちらのことを知っていようがいまいが、いい加減はっきりとさせておくべきだ。俺は自分をそう言い聞かせながら続ける。
「成り行きでこんなところにまで連れてきてしまったが、もう帰れ。明日、朝一番に新幹線のチケットをやるから、もう帰ってくれ。そして、もう二度と俺とは関わるな」
つっけんどんにいったつもりがどこかぎこちなくも思える台詞に、

演技が下手だと内心呆れてしまう。けれども、下手な演技にも本気というのがこもっていることを、鋭い綾子ちゃんがわからないはずはない。ましてや、ホテルでヘリによる襲撃を体験したということもあって、俺のいっていることが満更でもないと理解できているはずではないか。

「……私がいたら、重荷になりますもんね」

目を伏せたまま彼女は、自虐気味にぽつりとつぶやいた。いつもなら、そこまでされるとつい甘い顔をしてしまうところだがここは一つ、心を鬼にしておかなくてはならない。

「そういうことだ。とにかく君は、これまでの全てのことを忘れた方がいい。俺は君のことをもう忘れたいと思う」

俺がそう告げたときだった。

「なんでそんな勝手なことというんですか」

伏し目になっていた綾子ちゃんの瞳が真っすぐにこちらを捉え、彼女は詰め寄る。

「全てを忘れた方がいいだなんて、そんなの無理って決まってるのになんでそんなことというんですか。今までずっと九鬼さんのこと想ってきたことを無しになんて、できない……できるわけない」

綾子ちゃんは、はだけている俺の胸に手をやり、額をもつけた。その瞬間、女特有の甘い香りが鼻腔をくすぐり、肌理（きめ）の細かい肌が触れた個所が心地よく感じた。

「九鬼さんは私のことなんて、少しも想うことなんてなかったの……ねぇ」

切なげな言葉を前に気持ちをぐっとこらえ、俺はわずかのあいだ、瞼を閉じる。

「……そうだ。俺は君のことを忘れるために、君の前から姿を消したんだ。だから今さらそんなことを言われたって、迷惑なだけなんだよ」

いい終えるが早いか、俺はここぞとばかりに密着してきた彼女の両肩を、掴んで離した。驚きに綾子ちゃんが、こちらに顔を向けて

いる。

「もう俺に構わないでくれ」

明日も早いから君も寝ろと短く告げ、ベッドの中へ背中を向けて潜り込む。たまたまツインベッドの部屋だったこともあって、綾子ちゃんのほうを向かずにベッドに寝転がれるのは幸いだった。もしこれでダブルなんかだったら、とんでもなく気まずい思いで夜を過ごさねばならないところだ。現在も似たようなものだが、ベッドが別々なだけでもいくらかはマシだろう。

しばらくして、衣服の擦れる音のあとに、ベッドへと潜り込む音がしたと同時に、部屋から灯りが消える。訪れた暗闇に静寂が紛れ込み、俺はようやく一息つくことができた。その証拠に、ふと、ため息をもらしていたのだ。

このため息が安堵からくるものなのか、今ある憂いからなのか、あるいはどちらとも違う別の何かからのためなのか、俺に理解できるはずもなかった。

カチャリというドアの閉められる音に、俺は目を覚ました。その音が部屋にいたもう一人が出ていった音だと気付くのに、幾ばくもなかったろう。

すぐに眠りこけていたベッドから跳ね起き備え付けのデジタル時計に目をやると、時刻はまだ朝の七時にもなっていない。すぐさま隣に視線を移せば、案の定ベッドにいたはずの綾子ちゃんの姿はなく、白いシーツと枕のふくらみがあるだけだった。

跳ね起きた俺は、即座にシャワールームにかけていた服をひっぺがし素早く着こむと、隠しておいた金と身の回りの物を掴んで部屋を飛び出る。足早にエレベーターへ向かうと運悪くエレベーターは動いており、すでに一階へと到着しているようだった。忙しなく二度三度と下降ボタンを押しはするが、一階についたばかりらしいエレベーターはすぐには上昇するはずもなく、俺はつま先で地団太を踏む。

ようやく上昇が始まったと思うと、階上でも同じくして上昇ボタンを押したやつがいたのか、エレベーターはこの階を通り過ぎ、四階も上までいって、ようやく降りてきた。全く、急いでいるときに限ってどうしてこうも変に邪魔がはいるのか、不思議でならない。

ようやく乗り込んだエレベーターから降りたときには、すでに時遅しといった感が漂っていた。フロントにはチェックアウトするらしい何組かの客の姿があったけれど、その中に綾子ちゃんの姿が見えないのだ。こうも早くホテルから出たのかという思いもありはしたが、姿がないということは、やはり外に出た後だということだろう。

「すまないが、今ここから女の子が一人出ていかなかっただろうか」

なかば駆け足でフロントにやってきた俺は、トーンを抑えて尋ねる。すると、フロントマンはついさっきチェックしていったといい、さらに正面玄関付近に停まっていたタクシーに乗ったという。内心、舌打ちしながら努めて冷静に礼を告げたあと、正面玄関を出た。

外は昨晩から続く雨のため、蒸し暑い。ホテルから出た途端、シャツの下に着た薄手のインナーが湿気によるものか、汗なのかわからない水分を吸水し始め、肌にへばりつくような感覚があった。この状態で外を出歩こうものなら、あっという間に汗でシャツまで染み込んできそうな勢いだ。

しかし、そこでふと我に返った。

(俺は一体なにをしてるんだ)

自分でつき放しておきながら、なんだって未練がましく追い出した彼女を追わなければならないのか。自分で選択したこととまるで矛盾していて、行動がちぐはぐではないか。寝起きで頭がどうにかしていたのか。いや、そうだとしても、ここまで行動を起こせるはずもないのでそれはない。やはり、未練があるとしか今はいいようがない。

俺はもっと冷静になるよう自分に言い聞かせ、踵を返した。こんなときは、いつかの自分の選択を思い出す。綾子ちゃんと別れを告

げる意味も含めて、真紀に誘われるままに薄汚く血に濡れた世界に足を踏み入れた、あのときを。

第一、綾子ちゃんを巻きこまないという決意もあってのことだったはずなのに、こうして今まで彼女と共にいたことのほうが、むしろおかしいことなのだ。

……まぁいい。こうなったことは仕方ない。俺ともう二度と会うこともなければ、彼女に危害が及ぶことはないだろう。昨晩のはっきりとした拒絶に、綾子ちゃんもこちらの意思がわかったろうから、彼女から俺に会いたいと思うこともないはずだ。あとは時間が解決してくれる。彼女のとった行動にもそれが現れているはずだ。きっとそうに違いない。

それでも後ろ髪ひかれる思いをかぶりを振って断ち切ると、ホテルの中へと舞い戻る。いつまでも未練がましく彼女の後を追うわけにはいかないし、こちらにはまだやることがいくつもある。今日にも早速、田神が依頼したという人物に会ってみるつもりなのだ。事が済み次第、田神と合流することにもなるだろう。

やらなければならないことがある以上、綾子ちゃんを追うことは絶対にしてはいけない。

ホテルを引き払った俺は、繁華街外れにある田神が拠点にしている雑居ビルに移った。ドッグであった宮部を見つけた、あのビルだ。田神の姿はなかったけども、あらかじめこちらに移ることは伝えてあるので、荷物があったとしても驚きはしないだろう。とはいっても、荷物らしい荷物もないのだが。

荷物を置くと、すぐにもビルを出て早速、田神が分析を依頼した人物に会いにいった。田神はどうかは知らないが、俺にはどうしても気になることがあったのだ。

最寄りの駅まで地下鉄を乗り継ぎ、教えられた道すじにそって目

的の場所を目指す。地下鉄の出口から歩いて一〇分ほどの場所にあるらしいビルは、その通り、一〇分とかからない、やや寂れた感のある街の一角に建っていた。

分析を依頼するような場所だから、なんとなく先入観から大学の研究施設か何かかと思っていたが、実際には目新しいものは当然、特別目立つようなものも何もない昭和の街並みの中に、うっそりと埋もれているような小さなビルだった。

ビルの外壁には所々ひび割れができて、そこに汚れが入りこむように黒くなっていた。そこに割って入る形で、東洋テクニカルというカルプ文字の立体看板がとりつけられてある。夜になれば、中の電灯がともって、文字を浮き立たせることができるのだろう。正面玄関にやってくると、硬質で磨き上げられた鉄枠のに分厚そうなガラス戸になっていて、なるほど、確かに研究施設といった趣があった。

自動ドアにはなっているみたいだったが、センサーが反応しているにも関わらず、一向に開く気配はない。横に設置されてあるインターフォンで呼び出さなくてはいけない作りになっているのも、聞いた通りだ。

「すみません。面会のため、奥田さんをお願いします」

インターフォンを押すと、受付嬢らしい女の声とともに自動ドアが開かれ、案内された部屋へ向かって正面の階段をあがる。薄いグレーがかった壁と床が、どこか懐かしさを感じさせる。

「失礼します」

奥田とだけ書かれた表札のかかった部屋の前にきた俺は、ノックし中へと入った。部屋の中は白塗りになった鉄製の棚が所狭しと並べられ、そこに何十とも何百とも知れない数の本と、それ以上にファイルされている資料らしいクリアファイルが置かれてあった。他にも何に使うのか知れたものではないような物があったりはするが、研究室という趣のある部屋だった。

「ああ、待ってましたよ。本田さんからお話は窺っていました。後

で一人、男性の方が見えるだろうと」

本田というのは、どうやら田神の偽名らしい。やつとて裏側世界の住人なのだから、偽名を使っていたとしてもなんの不思議はない。それにしても、俺がここをくることになることまで予見していたなんて、そちらのほうが驚きだ。まぁ、田神に限っていえば、それもあり得るなと妙な納得もできてしまうところなのだが。

少し冷房がかかりすぎた部屋にいたのは夏用のベストに、白い長袖のシャツを着た四〇前後の眼鏡をかけた優男だった。頭のてっぺんがうっすらと禿げかかってはいるが、知的に鋭い瞳は、男の内側からあふれる自信の表れのように見える。

「早速ですが話を窺いたい」

簡単な挨拶をすませ、前置きもなしに切り出した。

「本田がここに配列の再構築を依頼したと思うのですが、まずそれについて。あれは一体」

「ええ、私どもは以前より、長年に渡って配列について研究を行ってきているのですが、これに伴い、遺伝子との関係性も研究してきたのです」

「遺伝子？」

思わぬ言葉に俺はつい聞き返していた。田神は入手したコピーにあった配列はプログラムのソースだといっていたけれども、奥田の話を詳しく聞くと、あれは遺伝子の配列をコードへ置き換えたもののようであるということだった。遺伝暗号と呼ばれるものをコンピュータのコードとかけて、ソースという形に置き換えたものではないかというのが奥田の見解らしい。

「なぜそう思ったんです」

「いえね、これと同じものを以前にも依頼されたことがありまして、もしかすると遺伝子に、なにか関係するものかもしれないと聞かされたんですよ。それで私自身も興味を持ったというのが一つ。もう一つは、あれが……」

「あれが？」

いうべきことではないことだったのか、奥田は失言だったとやや慌てる動作を隠すようにかぶりを振る。
「いえ、なんでもありませんよ」
「そういうわけにはいかない。どんなことでもいい。話してもらえないか」
思わせぶりな態度はごめんだ。俺は少しばかし語気を強めていったところ、奥田が恐縮げに驚いて目を泳がせる。いっていいものか、明らかに迷っているといった様子だ。
「……いえ、まだ確信、といいますか、なんといいますか……断言できる段階まで研究が進んでいないことなので……。できれば、これは完全なオフレコにしてほしい。もしかすると、あの配列の意味するものは、全く私たちが想像できない、未知なる領域に踏み込んでしまうものなのではないかという懸念があるんですよ」
しどろもどろになってしまって、言葉を濁すようにいう奥田に俺は、内心苛立ちを覚えながらも冷静に落ち着き払い、それでもかまわないと告げる。島津での一件以来、沙弥佳のことが気がかりということもあって、とにかくあれがどんなものなのか、俺には少しでも知る必要がある。
そんな俺の心情を察したわけでもないのだろうが、奥田は仕方なしといった具合に語りだした。
「信じられないことかもしれませんが、あれはもしかすると、人間の遺伝子を暗に配列化させたものかもしれないということです」
「そいつのどこが未知の領域だっていうんだ」
「人間の遺伝子、つまりヒトゲノムと呼ばれるものなのですが、これを基礎に、いくつかのパターンを作ることができるよう、配列を組み合わせてあるように思われるんです」
よくわからない顔をしていたはずの俺に、奥田は噛み砕いて説明した。人間の遺伝子を塩基配列と呼ばれる化学構造を、ある特殊なコンピュータプログラムの配列に置き換え、ここに様々な命令文、式を当てはめていくことで、それに合ったカスタマイズをすること

ができるようになっているのだという。
「人体改造……といってもいいのか、それは」
「ええ。そういい換えても良いかも知れません。それも、遺伝子レベルでの。
しかし、そのようなものは当然ながら机上の空論にすぎないと思います。あくまで、変換していくパズルゲームとでもいうのか、少なくとも現時点での実現は不可能といってもいい」
素人目にはそもそも遺伝子の塩基配列を、コンピュータのプログラムに置き換えるという時点でどうかしているようにも思えるものだけども、そこには徹底かつ、膨大な数学的知識も詰め込まれているという話だから、それを作った奴は間違いなく天才といっても過言ではないだろう。馬鹿と天才紙一重とはよくぞいったものだ。
しかも、様々な命令文は式というのも、やはりながら他の生物の塩基配列をプログラムに置き換えてあるものなので、それを組み込むことでなにをしようとしていたのかは、今の俺には漠然とではあるが理解できなくもないことだった。
この話を聞いてまず最初に思いついたのが、あのゴメルのことだったのだ。そして、同様に地下施設で奇形化していた、なんらかの動物をベースにした化け物たち……。これには、ミスター・ベーアの屋敷で見た映像にもあった、あの影にしても同じことがいえる。もちろん、田神が手に入れた写真に写っていた正体不明のものにしても。
さらに奥田は、これらのコードがきちんとフォーマットできるようプログラムされているという点も指摘した。これはすなわち、ある一定条件下において、量産を可能にしているということを示唆していることに他ならない。つまりこれは……。
「生物兵器か……」
「え？」
「いや、こっちの話だ。続けてくれ」
思わず口にしていた不吉な言葉に、奥田は目を丸くする。田神の

告げていた、ロシア国境近辺であったという謎の火災が生物兵器投入によるものだとするなら、あながちあり得ないことでもないかもしれない。

文字通り、化け物じみた生命力と頑強な肉体は、そんじょそこらの銃では傷つけることなどできないし、奴らを倒すのに何ヘクタールとも知れない大火災を引き起こしてでも化け物を倒そうとしたというのなら、頷けないことではない。少なくともゴメルとやり合った俺なら、それで命が助かり、かつ化け物も倒せるというのなら安いものだと思う。

しかし奥田は、最後に気になることを告げた。

「ですが、どうしてもわからないこともあるんです。もちろん、なぜこんなものを作ったのかというのは当然なのですけれど、どうにも判断の迷うところもあります」

「というと？」

「あなたは、最初の人類が女性であったという話を聞いたことがありますか」

問いに頷いた。アフリカで見つかった最初の人類が女だったというのは、昔本で読んだ覚えがある。あまり詳しくないが女、つまり母親からしか受け継がれないＤＮＡで、ミトコンドリアと呼ばれるＤＮＡだ。これと最初の人類が女であるということと、おなじみの聖書に出てくる最初の女であるイヴにちなんで、ミトコンドリア・イヴと呼ばれることになったものだ。

ミトコンドリアは最も原始的なＤＮＡだそうで、全ての生物に組み込まれているらしいが、人類に当てはめて考えた場合、現在の人類が一人の女によって全てが生まれたとされるわけでもない。また、当然男にもミトコンドリアは含まれてはいるが、母親から受け継いだものしか残らないため、父方からのミトコンドリアは生き残れずに、消滅してしまうという。

これはつまり、はるか悠久の時代において別の女から派生したミトコンドリアがあった場合、その女の遺伝子を受け継いだ者たちの

一派から男しか生まれなかったとすると、その時点で、この女のミトコンドリアは絶滅するということだ。現在六〇億とも七〇億ともいわれる人類は、数十万年前に生きた女のミトコンドリアを受け継いでいることになり、キリスト教ではないが人類みな兄弟というのは、あながち嘘でもないのだ。

「解析を依頼されたあの配列には、どうもその塩基配列にはない、全く別の遺伝配列がなされているんです。それこそ、今現在の人類のもつミトコンドリアとは別の……」

なにか異常なことに気がついてしまったといわんばかりに、男が口をつぐんだ。太古に生きた女とは違う、また別の女の遺伝子が見つかったとするなら、それは確かに常軌を逸しているのかもしれない。少なくとも、これまでに見つからなかったのがおかしいとも思えるものだ。

しかし、俺にはそれがなんであるのか、なかばわかっていた。元々、依頼したものの出所が、島津研究所であったことからも、全く別のものだという正体がＮＥＡＢ－２であるということに。そして元を辿っていけば、ロシアに落ちたという隕石の中に含まれていた、新たな元素こそがそれなんではないかと……。

田神が解析を依頼した研究所を訪れてからというもの、すでに二日が過ぎた。俺は近くの古いアパートの空き室から、研究所を監視していた。宮部が死んだことにより手がかりが途絶えた以上、奴の手帳にあった松下薫の正体を突き止めるしか手立てがなくなってしまったのだ。

二日前に研究所を訪れたときに、帰り際に以前にも例の配列図の解析をしてきた人間がいなかったかどうか、それとなく聞いてみたところ、田神の情報通り、女が一人、何週間かほど前に訪ねてきたという。どんな女だったのか聞いてみると、ボブカットのやや身長の高い女だったということで、名乗りはしなかったというけども件の女が松下薫であるという可能性が高まった。

問題はこの松下がいつ現れるかということで、俺はまた借りができることを憂いながら田神に、道具を調達してもらえるよう指示を出し今に至る。もっとも田神にしても、今回の一連の流れがあながち自分の追う男に関係していないわけでもないというので、すぐにこれを了承し、必要なものを調達してくれた。

研究所に裏口はあるけれど、周りは普通の住居が三方を囲んでいるため、わざわざ他人の家の敷地から入って裏口にいくことはないだろう。よって、監視すべきは正面玄関だけということで、監視が建物の立地条件のおかげで楽だということには感謝すべきところかもしれない。

「そろそろ交代の時間だ」

双眼鏡を覗きこんでいた俺に、背後から田神が告げた。

「今のところ、まだ変化はないぜ」

そういいながら双眼鏡を田神に手渡した。田神はいうまでもなくわかっているだろうが、小さく頷くと俺と位置を交代し見張りにつく。とりあえず交代は六時間ごとに決め、こうして張り付くようになってからもう丸っと四八時間が経過している。さすがになんの動きもないところを見張りでついているのも楽ではない。

おまけに、長く続く雨は四日のあいだとめどなく降り続け、今日も空はどんよりと灰色に染まっている。幸運なのは、昨日までの叩きつけるような雨とは違い、いくらか降雨量は減っていることだった。

ラジオのニュースでは、この数日間のゲリラ豪雨により土砂災害や河川の氾濫が起こり、ただならぬ災害が発生しているという。実際、近くの河川が溢れてしまったり、少し低くなっている個所においてはすでに浸水しているという話もあった。

さらにはO市の地下街では大量の雨水が流れ込んできたことでテナントの従業員が逃げられなくなってしまい、溺死するというケースすら起こった。以前あった、九州や東海で起こった集中ゲリラ豪雨が今度はここ、関西に訪れたということなのだろう。

日本にいれば起こり得る現象だというのは重々承知だとしても、仕事の都合上、いい加減止んでもらいたいところだ。それでも幸いにして、ここらはその影響をあまり受けていないのが幸運だった。

「どうやら、おいでなすったようだ」

監視している田神が短くいって、双眼鏡を差し出す。俺は素早く取り上げると、研究所の正面玄関のほうを覗きこんだ。いる……そこに映っているのは確かにあの松下薫で、俺たちが監視していることも知らずに研究所に姿を現したのだ。そのまま松下は正面玄関に備え付けのインターフォンを押すと、わずかな時間をおいて開かれた自動ドアの向こうへと姿を消した。

「多分、そう時間をかけずにまた出てくるはずだ」

田神の言葉に頷いた。そうだろう。松下がここに用があったとすれば、例の解析を依頼した配列図を受け取りにきた以外、なにもない。彼女がどうしたわけでこんなところに現れたのか……いや違う。なぜあの宮部と会うことになっていたのか、それをきっちりと問い詰めなくてはならない。俺はそのために、こんな辛気臭いところで二日も待っていたのだ。

「そろそろ準備しておく」

とはいっても大した準備もないが、俺はすぐにでも出かけることができるようにしておく。研究所から出た松下が元来た道に出て、このアパートの前にある道とぶつかるのは歩きであっても、ほんの二分か三分というところだろう。もしかすると、反対方向へと歩いていくことも充分に考えられる。

部屋の玄関へきたとき田神の、出てきた、という声を合図に廊下へと出て音を鳴り響かせないよう注意しながら、足早に階段を降りて道に出た。ビニール傘で顔を隠すように低く差し、歩きだす。その際に部屋からまだ監視を続けているだろう、田神のほうをちらりと見やると、やつが指で松下が向かった方向を指し示して見せた。

外はこの数日の降りしきる雨のために、さすがに真夏の暑さは息をひそめ空気は冷たく、長袖の上着が一枚ほしいと思える肌寒さだ

った。しかし今は贅沢などいってはいられない。俺は足元が水に濡れることはお構いなしに、普段と変わらぬ足どりで歩き研究所前の道との十字路にぶつかった。

田神の指し示した方向によれば、松下は予想通り、来た道とは反対方向へと歩いていった。だが俺が研究所前についたときにはすでに遅く、松下の姿ははあっという間に途上から消えていたのだ。

俺は舌打ちしながら足早に道なりに進むと、最初の路地にきたところで左右を確認し、さらに真っすぐ進んだ。研究所のほうは、田神がいくことになっているので放っておいていいとしても、松下の姿を見失うわけにはいかなかった。ようやく掴んだ、かすかな足どりをみすみす失うことなど、愚の骨頂である。

二本目の路地にきたとき、左手に松下らしい女の傘をさして歩く後ろ姿が、はるか先に映る。その後ろ姿を追い、十字路を曲がった。厄介なことに、この道はこのまま真っすぐいくと大きな通りにぶつかっており、松下がそこでタクシーを拾いかねない。もしタクシーに乗り込もうものなら、完全に撒かれてしまう。そうした焦りからか、雨の中だというのに自然と足が速くなっていった。

幸い、信号らしい信号もない道であることが俺に味方した。ひたすらに真っすぐ歩き続ける松下から、ほんの十数メートルほど後ろのところにまで追いつくことができたのだ。ここからなら、仮に松下がタクシーに乗ろうとしても、なんとか対処できる。しかも、傘に降りつける雨音で、足音がかき消されるのも有利な点といっていい。

案の定松下は、大通りにぶつかったところでやや拓けた街のほうへ向かって、右に折れた。こちらもそれに続いて右に曲がる。女の目的地がどこなのかはっきりとはしないけれども、いい所でとっ捕まえてやるつもりだった。

その際には、どれから尋問すべきか頭をめぐっていた時だ。十数メートル先をいっていた松下の姿が忽然と消えたのだ。

俺は眉をひそめ、半ば小走りに消えたあたりへ急ぐ。そこに移動

したところで、姿の消えた理由がすぐに解けた。右手には大人向けといった具合の雰囲気があるレストランが、道沿いに並ぶ建物からは少し窪むように佇んでおり、窪み具合からてっきり道かと思っていたが、そうではなかったらしい。

ここ以外にすぐに入れそうな場所はないことからも、このレストランに入っていったとみてまず間違いない。蔦などの蔓にびっしりと覆われ壁の色など判別はつかず、一階には二つ、二階には四つずつそれぞれ窓が仕切られてあるレストランは、出入り口のところに『ｐｅｃｔｏｐａｈ』と書かれた控えめな看板が掲げられている。

ペクトパー……俺の拙い外国語知識の中にも、この単語はあった。確かロシア語で、日本語にするのならばそのまま食事処、つまりレストランを意味する言葉だったはずで、以前任務でロシアに赴いた際に、この単語を何度となく目にした記憶があった。俺は小さくため息をはき、レストランへと入っていった。

「いらっしゃいませ」

「すまない。今きた女性の連れなんだが」

すると接客した店員は、すぐにも松下のことだと気付きを案内しはじめた。

店内の様子は、とても日本とは思えない本格的な作りとなっていて暖炉から椅子、テーブル、それに壁にかけられているインテリアの数々が、本場ロシアからの輸入品ばかりのせいもあるからか、ロシアの寒々しさの中に温かみも感じる、そんな雰囲気になっている。

そんな中を店のやや中央に設置された木の階段で二階へとあがり、奥まったところにある個室へと案内される。

「お客様、お連れの方がお見えになりました」

接客態度はそこらのレストランとは比べ物にならないくらい上品であるらしく、とてもこんなラフな格好でこれるような場所ではなかったのかもしれない。少なくとも、この店員の態度からはそういう雰囲気がどことなく漂っている気がする。まぁ、自分を卑下し過

ぎであることも確かではあるが。
「そう。ありがとう」
では、と軽く会釈をして去った店員を尻目に、俺はビジネスライクな態度で個室へと入り、松下の前に座った。
「……あなた」
「久しぶりだな」
まさか待ち人が俺とは思いもしなかったろう、驚愕に目を見開いた女を前に、こちらの声もどことなく低くなっている。まさか自分が尾行されているなんて考えは、なかったに違いない。
俺は再び、どれから尋問すべきか思案させながら、薄く笑みを浮かべた。

第９０章

店内に小さく流れるロシア語のＢＧＭが、二人のあいだに訪れた沈黙を埋めていた。三月の終わり頃を最後に別った二人が、こんな形で再会するとは互いに夢にも思わなかったろう。

驚愕の表情を見せていた目の前の女は、落ち着きを取り戻したのか、その驚きの表情から普段の冷静なものへと変える。

「そっか……まさか、自分が尾行されてるなんて思わなかったわ」

「だろうさ」

落ち着きを見せる女から諦めの言葉が漏れ、それに相槌をうつ。実際にこちらが尾行していたのは、研究所からここまでのあいだ、時間にして二〇分と経っていない。しかし松下のこの態度からはもしかすると、随分と前から尾行されていたとでも思っているのかもしれない。

「私を尾行してきたってことは、何か聞きたいことがあるということ？　それとも人質かしら」

「あるいはその両方」

こう返すと、それもあるかと笑い、松下が眼前に置かれてあるメニューに手をやり、おもむろにそれを開いた。

「せっかく来たんだから、食事くらい一緒にしましょう。多分、待ち人はもうこないのでしょう？」

松下のいうところの待ち人とは、宮部のことを指しているのだろう。それに頷いて、こちらも同様にメニューを開いて適当に注文をとることにした。食事もすれば、向こうも色々と有益な情報を話すようになるはずだ。

「それにしても、あなたっていつも突然よね。初めて会ったときも、いきなりホテルに押し入ってきたわよね、聡一郎さんの死を伝えにきたときよ」

「いわれてみれば、そんなこともあったな」
俺は相槌をうって肩をすくめた。松下にいわれて記憶を辿っていくと、伊達の死を盾に女に情報を吐かせようと予約されていたホテルに、伊達の名前で成りすまして押し入ったのが随分昔のような気になる。
遅いランチというより、どちらかといえば早めのディナーといったほうが良い時間帯であるせいか、吹き抜けの階段からは一階よりざわめきが聞こえてきて、密談するには都合の良いノイズとなっている。
「さて、単刀直入にいうぜ。あんたの待ち人ってのは、宮部という男だろう。違うか？」
「ええ、そうよ」
淀みなく答える松下に、首を縦にする。
「だが、わからないな。あんたは、難病をかかえた母親のために島津で働いていたんだろう。そのために仕方なくな。それが嫌でとんずらできる下地を整えてやったっていうのに、なんだってあんな男と関わりをもったんだ。それとも、この自体が創作だったのか」
「いいえ、その話は本当。あなたのいう通り、あのあと私は母を連れて新天地としてN市の外れに逃げてきたんだけど、三ヶ月ほど前だったかしらね、宮部と名乗る男から新しい携帯に電話がきたのよ。前の携帯は、島津と関わりを持った他のものと一緒に捨ててきたっていうのにね」
自虐的にいう松下に俺は、どこまでが本当なのか疑わしいと訝しんでいたのか、女が、いっても信じてもらえないかと諦めるようにいった。人間、手を引いたはずの人間がそれに関わってきたとなると、何かしら意図があったと考えるのが普通だ。ましてや、こんな業界となるとなおさらだ。
松下がいうには、N市に移り住んだ三月の終わりからの二ヶ月ほどのあいだは、至って穏やかなものだったという。島津の汚い仕事から解放されたという清々しさからだったのは考えるまでもないの

だろう。だが、その安息の日々に翳りを落したのが六月に入ってすぐのことだったという。突然、宮部を名乗る男が現れ島津での一件を餌に、ある人物からの依頼を受けるよう強要されたというのだ。

「ある人物ってのは」

「私もよくは知らない。だけど、女性だということは間違いないと思うんだけど」

宮部に連れられてやってきたのは、廃棄されたような工場か倉庫かといった具合の場所で、その間目隠しされていたそうなので詳細は不明だ。周辺から漂ってくる寒々しい空気と、金属の錆くさい臭いにそう思ったらしい。そこで松下は、例の研究所に解析を依頼したデータをの入ったディスクを渡されたのである。

この際に松下は目隠しされている自分の前に、一切喋ることなく一人の人物がいることがわかったそうで、少し甘い女ものの香水の匂いがしたことからも、女であることは間違いないといったわけだ。

香水は同じ香りのものでも、人それぞれの体臭に合わせてつけたあとは、多少変化していくものだ。事実、最近は男でも香水をつけるやつがいるけれども、そんな中にはやはり自分に合うからと、女ものの香水をつけているやつもいると聞く。よって、これが女ものの香水を好んでつける男だったという可能性もないわけじゃない。それを指摘すると女は、苦笑いを浮かべながらいった。

「確かにそうかもしれないけど……でも、あれは女性だと思うわ。こんなことといって信じないかもしれないけど、女の勘ってやつ」

「女の勘ね」

こういわれては、こちらも苦笑するしかない。しかし俺は、この女の勘というのを侮るつもりはなかった。これまでの経験上、こういうときに発揮される女の勘というものは、どういうわけか非常に鋭く、当たっている場合が多いのだ。本能的に見分けることができるという説や、原始の時代から家事などの事細かなことをしていたことで、取分け、脳のそうした部分を司る箇所が刺激され続けた結果だとか、まぁ、色々と説はあるが。

なんにしても、同性同士となると良くも悪くもそれらを発揮しやすくなる女の勘とやらを、ここは信じておいたほうがいい。なにより、宮部の相棒が女だという田神の情報とも合致する。このことからも宮部の会わせた人物が、相棒である女だったとしてもなんら不思議ではない。

同時に、宮部が女の手足であり、女こそドッグのブレインであったとする説も濃厚になるというものだ。やはり、俺はどのみちこの女と会う必要がある。

「母親は」

「母は今のところ問題ないわ。その辺りはあなたたちのおかげね」

少し申し訳なさそうな笑みを浮かべながらいう松下に肩をすくめて見せ、次の質問に移る。

「それであんたは、宮部から渡されたディスクのデータを研究所に解析するようにいわれた。そしてその中身は」

「言わなくても、あなたならもうわかってるんじゃない？」

ごまかすためにはにかんで笑う俺に、松下は呆れ半分仕方なさ半分に語った。もちろん、中身は予想通り、例のプログラムのコードに変換された遺伝コードだった。それの説明にしても奥田が話した内容と同じで、収められているデータの出所は、元々同じものであると考えるのが自然だろう。いくら汎用性の高いものであるにしても、そんなものがいくらも出回っているはずがない。

「そういえば宮部は、それをある人物のところから奪ってきたものであるといっていたわ」

「ある人物……。それはいつ頃の話かわかるかな」

「ええ。いつ頃なのかは知らないけれど、依頼主がそれを渡してきて、わざわざ私にこれを託したというわけね」

そういうと松下は、ハンドバッグから宮部から渡されたというディスクを取り出して、俺に見せた。

「これは、元々別の研究機関で保管されていたデータを、コピーしたものらしいわ。それ以上は教えてくれなかったけれど、なにか他

の名前で呼んでいたのが印象的だった」
「なんて名前だ」
「変な名前よ。マウスって宮部は呼んでたわ」
それを聞いて俺は思わず驚愕に眉をひそめ、聞き返してしまっていた。マウス……忘れもしない。N市のTビルにて俺、田神、真紀の三人で手に入れた代物だ。初めてエリナと出会った場所でもあり、政界の大物議員であった真田の権力の象徴ともいっていい場所でもある、あのTビルでだ。あのとき真紀のやつがこのデータのことを、確かにマウスと呼んでいた。そんな物が、一体どうして宮部が持っていたのか。そして、これを宮部が奪ってきた人物というのはまさか……。
俺の脳裏に一人の女の姿が思い浮かんだ。今までどうせいつものことだと見逃していたが、真紀があのあとマウスをどうしたのか、それを知ろうなどとは思っていなかった。まさか、N市のホテルで別れた直後に宮部に奪われたとでもいうのか。さすがに考え過ぎだろう。さすがの真紀もそこまで間抜けではあるまい。
そもそも真紀のことだから、ミスター・ベーアとの繋がりから、あの男から命令されたことだと考えるのが当然であり、マウスがミスター・ベーアの欲しいものであったことは考えるまでもない。つまり、ミスター・ベーアの手に渡ってからその後、どこかの時点で宮部に奪われたと見るのが妥当だ。仮にもしミスター・ベーアの手に渡る前に奪われていたとしたら、とっくの昔に、なんらかの形で動きがあったに違いないはずだからだ。
ならば、どこで紛失することになったのか。疑い深い自身の性格からか、真紀のやつがミスター・ベーアに渡しひとまず満足させたあとに盗んで、宮部に売ったという仮説はどうだろう。あの女狐なら、そんな可能性も決してなくはない。信頼している部下が実はスパイだった、こんな話は現実にあるものなのだ。
けれども、真紀のやつがずっとミスター・ベーアを騙し続けていれるほどの、浅い付き合いかどうかは甚だ疑問ではある。真紀のか

つて語ったプロフィールによれば、幼少の頃から組織よりその筋の訓練を受け続けていたとのことで、思想すら覆すほどの人格形成もなされていない時期から育った環境を、簡単に脱却できるものかというものが心理的に作用していないとはいい切れない。ましてや、その中で組織の中枢にまで出世したようなやつなのだ。

だとすると、真紀がマウスを奪われたり、あるいは横流ししたという可能性はかなり低い。やはり誰か別の人間が、どうにかしてマウスを盗み出したと考えるべきのようだ。そして、それを行ったのが宮部だという可能性も、おそらくないといっていい。もし宮部が盗み出した張本人なら、わざわざ松下を目隠しして連れ出し、解析の依頼などしようはずがない。

裏を返せば、ドッグの片割れであるらしい女は自分が直接動きながらも、あまり目立って行動のできない人間、ということになる。そうでもなければ、いちいち面倒な宮部や松下といった人間を介するはずがない。

組織の人間をどんな手か欺いてマウスを奪ったらしい事実から、この人物が確かな技術をもったプロであることは間違いない。しかし全てを行うには、自分では目立ち過ぎてしまい、動くのになんらかの制限がかけられているのだ。これなら、それなりに辻褄も合う。問題はその制限がなんなのか、この一点だ。

「そういえば……」

「なんだ」

松下が唐突に何か思い出したらしく、瞳を泳がせながら口元に手をやった。そのしぐさがどうしようもなく女らしさを感じ、いやに魅力的だ。

「宮部がいってたのよ。本当なら一昨日会うことになっていたのだけど、もし連絡がなければ明後日の今日、研究所にいってこれを取りにいけって。そのときに、他の人間が受け取りにくるって」

「どういうことだ」

「わからないわ。ただ、まるで自分が昨日現れないことを、あらか

じめ告げていたみたいにも思える。それで、あなたがそんな日に限って現れるでしょう？　だから、宮部のいっていたのってあなたのことかと思ったのよ」

そう告げた松下に、俺は怪訝にうわずり気味の声を出していた。一体どういうことだ。その言い方ではまるで、俺が俺が宮部の使いでもあるかのようではないか。しかし、松下がなぜ尾行されていたという事実を知っても落ち着きを取り戻すのが早かったのか、その理由も解けた。今日、受取人と会うことになっていたためだったのだ。

これ以上に幸運なことはない。松下にはそいつと会ってもらい、俺はその受取人をとっ捕まえればいいのだ。辛気臭いボロアパートに二日ものあいだ張り詰めていただけの甲斐はあったわけだ。

「いつその人物と会うんだ」

「わからないの。向こうから受け取りにくるといっていただけで、それ以上はなにも。普通に過ごしていればいい、でかけたいのならでかけてもいいっていっていたけれど……」

松下がいい終えるが早いか、俺は舌打ちした。それはつまるところ、松下をマークしているという事実に他ならないではないか。今こうしている瞬間にも、その受取人が松下を監視していると考えた方がいい。そうとはつゆとも知らず、松下のあとをつける俺に受取人が気付かなかったはずがない。向こうとて、プロであることは間違いないのだ。

そんなこちらの態度に、松下は少しばかし申し訳なさげにしている。そして俺は、彼女の様子に小さくため息をついて、眉を動かしつつ肩をすくめた。いまさら尾行されたされないなど、後の祭りなのだ。いっそのこと、向こうがどう出るか高みの見物といこうではないか。焦っても仕方ないのだから、ここはひとつ、松下と行動をともにするのも手だ。

俺はそれをやや抑えた声でいうと、松下もやはり思うところがあるのか即座に頷いた。となると、いくらか気を抜いて楽にするに限

る。いつまでも気を抜かずにいるほうが、かえって挙動不審に陥ってしまうことがないともいえない。

ようやく雨もあがってきた午後八時。ロシア料理店を出た俺と松下薫は、街の中を二人ぶらりと、あてもなく気のおもむくままに歩いて回った。数日に渡って降り続いた雨に嫌気がさしていた人が多かったのか、ここぞとばかりに出回っている人の数は週半ばにしては多く、夜の街はいくらか活気づいている。

歓楽街へと入っていったところで、俺は不意に足をとめた。一緒にいる松下もつられて足を止め、見上げる看板に視線をやった。

「ここ、どうだ」

「そうね、構わないわ。こういうところ、久しぶり」

目がとまったのは出入り口がおおっぴろけになっている外国人向けのバーで、いわゆる安酒場というにふさわしい店であった。日本人向けの小奇麗かつ洒落た外観をしているわけでなく、黒塗りの丸太と木板で作られたオープンスペースはどことなく無骨で、やや小汚い感のする店だ。それでも俺からすれば十二分に満足のいく作りになっているのだが、女はといえば、必ずしもこういった空間が好きではないので、少しばかし松下に気を利かせたのだ。

女の了承を得て、俺たちはテーブルや椅子が置かれたオープンスペースを、身を横にしながら進んで店内へと入る。威勢の良い店員の出迎えの声は、周りのざわつきを通り過ぎた怒声ではないのかと思ってしまうほどの音量にかき消されてしまい、俺たちにいったのかそうでないのか、それすらも判別がつかないほどの喧騒に包まれていた。

カウンターでメニューを見てドリンクを頼むと、適当に空いていたやや奥まったところにある席を、松下を出入り口側の椅子に座らせると、俺は反対側に椅子に座った。

松下は他愛もない話を含め、ここにくるまでの間にこれまでの経緯なんかも語っており、いい加減話題も尽きてきているところだった。もっとも、必要な時にのみ相槌と質問を投げかけるだけで、元々口下手なうえに大した話題を取り上げることもない俺は、もっぱら話を聞くだけにとどまっている。

一方の松下はといえば、仕事を辞めあまり喋る機会を得られていないということもあるのか、やけに饒舌だった。女は喋ることも一つのストレス解消法だということを聞いた覚えがあるが、松下の様子を察するに、それも確かなのかもしれないなどと考えていた。まぁ、女の他愛もない世間話に付き合うこと自体は決して嫌いなわけでもないので、これはこれで悪い気はしない。

しかし俺は、ただの気まぐれでこの店を選んだわけではなかった。二、三時間ほど前から、尾行されていることに気付いたのだ。それも一人ではなく、複数の人間によるものだということも、すぐにわかった。あるときは無難に背後から、あるときは通りを挟んで反対側の歩道から、またあるときは大胆にも俺たちのすぐそばにまで近寄ってきたこともある。

歩幅もそれぞれゆったりしていたり、やや早歩きであったりなどといった緩急をつけることで不自然さをなくしてはいたが、こちらも同じプロとしてそれがわざとであり、全体を通して俺たちの歩くペースに合わせていたことを見逃しはしなかった。前後の都合から、例の受取人とみていいだろう。いや、この場合は受取人の集団というほうが正確か。

「そのまま動かないで聞くんだ。今、俺たちに監視がついてる。なにもない風を気取っちゃぁいるが、すでに、さりげなく店の中に入ってきている」

それだけ口にすると、松下は口を真一文時につぐんで首を縦にした。それに返すように笑顔を作って頷く。真表情の顔を作ったままでは、連中に怪しまれてしまうための対策だ。

「少ししたら席をはずすつもりだ。多分、それを合図に向こうも動

くに違いないだろうから、うまくやってくれ。あとはこっちでなんとかするから、うまくやり過ごしてくれ」

「わかった」

再度頷いた松下に頷き返すと、頼んでおいたドリンクが届けられる。頼んだのは俺にしては珍しく、ウィスキー・ベースのカクテルを注文し、松下はパッション系のカラフルな色合いをしたものが運ばれた。それらを、しばらくのあいだ今後のことを談笑を交えて話し合いながら飲み、一段落したところで席を立った。

「ちょいとばかし席をはずすぜ」

「わかったわ。後はまかせてちょうだい」

わかったと目で告げた俺は、すぐに席を離れトイレのほうへと向かった。俺の予想では、間をおかずに行動するに違いないはずで、こちらも急ぐ必要がある。俺がこの店を選んだ理由の一つに、ここがビルの一階テナントになっているということが挙げられる。この手の構造を持つビルは大抵裏口があり、この店は直接そこに繋がっているはずだと、そこを使って店を出て連中を出し抜こうというのが魂胆だった。

裏口は、スタッフのみ立ち入れるドアの向こうにあることは一目瞭然で、俺は驚いて怪訝な表情になった店員に肩をすくめて見せながら、悠々と外へと出た。すれ違った店員はあまりに自然な動きであった俺に、どう対応していいのかわからなかったに違いない。

店の裏側は店で出たゴミなどの廃棄物や空調のファンが所狭しと置かれていて、フェンスの端にはスタッフの出退勤するための出入り口があった。そこを強引に押しのけて開け、その勢いのまま駆けだすと、すぐにビルとビルの間の路地に身を滑り込ませて店の表側へと躍り出る。

歓楽街の中を走る通りはお世辞に大きい通りとはいえず、幅の狭い、片道一車線の道路と両側面に赤のアスファルトレンガが敷き詰められた歩道、といった具合だ。歩道の至るところにある店の前には、邪魔な自転車が何十台といわずに放置されてある。

そんな反対側の歩道にやはり、俺たちを尾行していたメンバーの一人が待つのに疲れたといった様子で、壁を背に店のほうを眺めている。店内に入ってきたのは二人だったので、俺の計算ではこいつ以外に尾行者の存在はいないはずで、事実それらしい他の人間も確認できない。

間抜け面を晒しながら店のオープンテラスを眺めているそいつは、都合のよいことに路地に身を潜ませている。おまけにそこはここら一帯では近代的なビル二つの間ということもあって、少し路地の奥へいけば、それこそ袋の鼠にするのには最適な空間があったりする。あまりに持ってこいといった状態に、一瞬罠ではないのかと勘繰ってしまったほどだ。

そいつに見つからぬよう、俺はあえて大外回りで道路を迂回する形で近づいた。野郎はまだ気づいていない。そしてあと少しというところで、一気に詰め寄り、すかさず男の鳩尾に拳を突いた。声にもならない低いうめき声をもらす男の口を手で押さえ、そのまま路地へと引きずりこむ。

「いよう、さっきから蠅みたいにしつこいから、挨拶だぜ」

「お、おまえは……」

「おっと。勘違いするなよ、質問していいのは俺だ。あんたじゃぁない」

鳩尾に突きを入れられたというのに、男は案外元気そうで、不規則な呼吸を繰り返しながらも憎まれ口を叩いている。のろのろと手を地に伏せているところを、足で踏みつける。再び男の口からうめき声が漏れ出した。思い切り踏みつけられた挙句、今度は踏み続けられることによる持続しっぱなしの痛苦に悲鳴をあげたのだ。

「さて、あんたらが俺たちを尾行していたのはもうわかってる。いや、もっといえば松下薫に用があるってところかな」

いい当てられても男がとぼけたり、あるいは口を閉ざすことは予想できることなので、俺は返事の有無にかかわらず、踏みつけている足に体重をかけて男の右手を踏みにじる。雨模様の今日は、靴の

底に付着した砂が水分を吸収し泥になっている。そんな靴の底に踏みにじられたら、相手もたまったものではないだろう。男の手の甲から、かすかながら血が滲みだしていた。

「喋るつもりがないというならそれはそれで構わないけどな、いっておくが俺は容赦しないぜ。その分、痛みを味わう時間が増えるだけなんだからな」

淡々と眉ひとつ動かさずに見下ろして告げる俺に、男は本気であることを悟ったらしい。すぐに口を割った。なんとも情けない野郎だが、なるほど、合理的な判断でもある。結果は同じであるなら、少しでもそれらを軽減し、次につなげるべく可能性を模索しようというわけだ。一瞬の考えに目をそらした男は、すぐにそう判断したのだろう。なかなかのプロ根性だ。

「わかった、いうよ。だから足をどけてくれ。骨が折れちまう」

「駄目だね。万一あんたに反撃のチャンスを与えようものなら、こちらのほうが不利になる。足はこのままだ。さぁ、さっさと話しな。このままだと将来、腕が不自由になっちまうぜ」

「くっ……おまえのいう通り、確かに俺たちは松下を尾行していた。そいつは間違いない」

「松下の持ってる、解析したデータを受け取るためだろう。違うか」

「ああ、そうだ……」

やはり、連中が例の受取人であったのだ。俺のいなくなったあとをすぐにでも接触できるよう、連中のうちの二人が中に入っていったわけだ。もっとも、松下から聞いた内容の要所はきっちりと頭の中に叩き込んであるので、問題はない。仮に駄目でも、それを解析した研究所のほうを田神が押さえておくという保険もある。小さく頷いた俺は、目で続きを促す。

「あの二人はそうだが……俺は違うんだ」

「なにが」

突然違うといいだした男に、初めて感情らしい感情を見せていた。男は苦悶にうったえながら、どういうわけか俺のほうを見上げてき

たのだ。
「おれのターゲットは女じゃない。おまえのほうだ」
俺がターゲットとはどういうことなのか。そういいかけて口にすることはできなかった。男がいい終えるかどうかという瞬間に、突然背後から風を切った音がして俺の後頭部に衝撃が走る。
「うっ」
そんな呻き声が漏れて、今度はこちらが地べたにのめり込む。だが、そのせいで手にさらなる加重がかかったためか、男の情けない悲鳴もあがる。
「全く、何があるかわからんという彼女の言葉が、本当になるとはな」
地べたに跪くように伏せた俺は後頭部を抑えながら、背後からしたどこかで聞き覚えのある声に、ほとんど無意識で踏みつけていた足を後ろにせり出し蹴りをはなっていた。しかし蹴りは当たらない。背後の野郎との距離は考える以上にあったらしい。
「おっと。そんな蹴り、当たらないぜ」
「お前は……」
それでも蹴りが放たれた瞬間に、少し距離をおいた野郎のほうへ、地べたに転げて回りながら顔を向けた。すると、そこには声と同様に、確かに見覚えのある顔をした男が下碑た笑みを浮かべていた。
「久しぶりだなぁ、九鬼」
野太い低音の声でそういった男を、見据える。そこにいたのは、何カ月も前に出会った、あのデブの髑髏野郎だったのだ。初めて出会ったのは確かN市の古びた住宅街で、女を追っていたときのことではなかったか。
その時はとても同業者とは思えない、ダサいヒップホップ系のファッションで現れるという、ある意味衝撃的な出で立ちだったが今回も前回と同様、全く似合っていないぶかぶかの黒い服を着ていた。
「……いきなりご挨拶だな。まさか、おまえと会うことになるなんて思わなかったぜ。それと、タコ踊りの練習はちゃんとしてきたか」

後頭部からはまだズキズキと痛みを訴えてくるが、俺は構わずタコ野郎を挑発する。野郎の横には仲間であるらしい尾行していた男が、形成逆転だと情けない薄ら笑いを浮かべている。

「本当ならここでいけ好かないてめえのその面、無茶苦茶にしてやりたいところだが今日は仕事だ。そんな安い挑発になんか乗らねえよ、九鬼」

どうやらタコ助も、少しは人間に近づいてきているのか知能を持ちはじめているらしい。だが所詮はタコ助だ。自分から仕事だといった時点で、追跡を命令したのが武田であるというのがすぐに俺にばれてしまったのだ。

松下とのやり取りで、それらしい存在が脳裏にちらついていたが、やはり、というのが本音であった。武田の奴は、それこそ三月にあったTビル襲撃の際、見事にマウスを俺に掠め取られていったのだ。

そこからどういうルートでかマウスの中身が出回ったことで、奴はそれをどんな理由からなのか松下に目をつけて解析の依頼をした。ここまではいい。俺がわからないのは、武田がわざわざ人目を避けて、わざわざ他人に機密事項といってもいいものを解析させるかどうかという点だ。

俺ならまずそんなことはしない。自分のことは自分で、というのがモットーである自身の性格上の問題かもしれないが、第三者にそんな重要なものを託すはずがない。やらせるにしても、自分にとってよほど信頼を置けるような者でない限り、そのような真似はしない。

まだある。武田にとってマウスを手に入れたいという思惑があるのはわかるとしても、なんだって俺を尾行しなければならないのか。それも今、このタイミングでだ。タコ野郎が殺す気でいるのは知っているはずなのに、殺さないことを厳命している様子であることから、何か緊急を要する事態が起こっていると考えるべきなのかもしれない。

「だけどなあ、九鬼。本当は、おまえが俺に逆らって襲ってきてく

れることを願ってるんだぜ？　もし俺を襲おうというのなら、今すぐにでも殺してやるからよ」

タコ野郎は、特になにかしたわけでもないのに、よほど俺のことが気に入らないらしい。業界人としては、どちらかといえばお人よしな俺とはいえ、ここまでくると感情に波が立つというものだ。もちろん、おちょくってやりたい感情も。

なんだって俺を目の敵にするのか、理由などわからない。あるとすれば、生理的に受け付けない、なんとなく……せいぜいこんなところなんではないのか。少なくとも俺の知るところでは、ここまでいわれるようなことなど何も覚えがないのだ。

俺は殴られた後頭部を軽くさすると、ゆっくりと立ち上がって相手に迎え撃つかのように、足を肩幅に素立ちした。向こうがその気なら、こちらも手を抜く必要はない。いつかの落し前もつけなくてはならないので、こちらとしても好都合だ。奴に業界の一先輩として、そいつを判らせる必要がある。

前に会ったときよりも短く刈った髪は、丸い頭の形をより強調していて、ますますタコっぽく見えるようになった。このデブを俺は、哀れみと軽蔑の混ざった目で見据える。

「なんだ、その目は。ぶちのめすぞ」

全く、やれやれだ……少しは人間に近くなったのかと認めてやったのに、そうでもなかったらしい。プロがそんな情けない台詞を吐くものではない。プロなら言葉ではなく、態度や行動、それに視線だけで表すべきだ。そんな素人じみた台詞を吐くなんて、このデブにはプロとしての自意識が全くなっていない。

「なぁに。お前の願いとやらを叶えさせてやろうと思ってね」

片眉を吊り上げながらニヤリとする俺に、タコ野郎は頬の筋肉をぴくぴくと震わせる。しかしおかしなもので、ぷくぷくと膨れたりするように見えるのがなんとも滑稽だ。

「どうした、おちょぼ口がさらに小さくなってるぜ」

思い切り見下していった俺の言葉に、デブは頭に血が昇り、我慢

の限界が近付いているようだった。あと一息だ。自制心のきかない相手など簡単過ぎて、逆に面倒なくらいだが、こいつは別だ。おちょくるだけおちょくって逆上させ、そこを俺が足腰が立たなくなるまでぶちのめしてやる。そうすることで、心理的に俺にはかなわないという恐怖心を植え付けさせるのだ。この手のタイプの人間は、そうでもしないと埒が明かないタイプだというのは、今までの経験からもよくわかっている。

「そこまでだ」

あともう少しというところで、デブの背後から制止する声が響く。はっと我に返ったデブと傍によった尾行者の男が、同時に後ろを振り返る。この場で戦闘態勢に入ったままの俺は、この隙を見逃さず、一気にデブまで跳躍し距離をつめると顔面目がけて拳を突き出した。

一瞬の判断でデブはそれを察知し避けようとしたがもう遅い。俺の拳がデブの鼻っ面に叩き込まれる。鈍く、こりこりという音が耳触りだ。

デブは呻き声すら発することなく後方へと投げだされるように倒れ込み、すかさず隣の男の腹に渾身の蹴りをくれてやる。その衝撃で、間違いなく男の肋骨がぶち折れたはずだ。

突破口を開いた俺は、勢いそのままに唯一の逃げ口となる場所に突っ立つ男へと駆けだすが、駆けだすために前にした足の着地へとずらし、横へと転げこんだ。二人の背後から現れた男は、仲間が二人も一瞬のうちにやられる事態になったにも関わらず、冷静にその手に銃口を向けていたのだ。

「なかなかの手際だな。私が現れたと同時に、二人のプロをなぎ倒すとはな」

「プロ？　この二人がか。冗談はよせよ。素人がプロ気取ってるだけの間違いだろう」

「違いない」

仲間への侮辱をこめていった皮肉に、男は考えるまでもなく即答した。銃口と同様、冷たい瞳は仲間であるはずのデブと尾行者に向

けられることはなく、こちらを一点に見つめている。銃の腕も確実に一級品であることが窺える男は日本人のわりに、小洒落た薄い光沢の放つライトグレーのスーツに身を包んでいる。雰囲気からも明らかにぶち倒した男二人とは別格で、本物の殺人機械であることは明白だ。

「……あんたら、一体俺になんの用なんだ」

「なんの用、か。知らんね」

肩をすくめていう男は銃口こそ向けているが、本気で俺を殺そうとはおもってないのかもしれない。だが、場合によっては死なない程度の重傷を負わせる気ではいるのだ。

「知らないのに俺を尾行してたってのか」

「それが仕事なのだから仕方ない。私にとってはどうでもいいが、上はそうとは思ってないらしい」

「上……待ちな。あんたのいう上ってのは、武田のことだろう」

「そうだ」

短く答える男は、俺の質問に隠すこともなく答えた。武田の奴が俺に用がある。そのためにわざわざ尾行者をつける……これは矛盾している行動ではないのか。

「用っていうのは」

「詳しくは聞かされていない。私は、おまえを殺さずに連れてこいといわれただけさ」

一体どういうことなのだ。デブが現れたことで尾行したのが武田の勢力であることはわかっていたが、だとしても、わざわざ俺を尾行しなくてはならない理由というのがわからない。もちろん、俺を殺そうというのなら十二分に理解できる。それだけのことをやったし、ホテルでの暗殺の依頼を蹴ろうとしたことが読まれ、別動隊がいたことからも武田は俺が裏切ることを始めからわかっていたに違いない。それもヘリを使うというおまけ付きでだ。

どうも武田のとる行動には矛盾を感じる。悪い意味で特別待遇であるらしい俺を、だんだんと追いつめ死に至らしめようとしている

のは、まぁわからなくもない。どうも俺と関わり合いをもっている人物を消していっているという話だから、それは理解できる。だというなら、なんだって俺を尾行するのか。それだけがいかんせん理解できない。襲ってくるわけでもなく、ただ監視するという行動に、俺はなんとも不気味さを覚えてならない。

「まぁ、いい。さっさとついてきてもらおう」

「嫌だといったら」

「おまえに危害を加えないようにいわれているから、こういうことになるな」

男は横に身をやると、その後ろからはさらに男が二人、女を後ろ手にその喉元にナイフを突き付けて現れた。男の言い回しから嫌な予感がしたが、予感は的中しナイフを突き付けられている女は松下薫であった。

「女を盾にするなんて、見下げたもんだ」

「どうとでもいうがいい。私とて、できることならやりたくない。だがおまえが我々の意に反する行動をとったら、それは彼女に返ることになるのだから、おまえの責任、ということになる」

俺はこの状況に舌打ちし、男を思いきり睨みつける。しかし、こんなことで動じるような奴ではないだろう。男のいうことはもっともで、俺に危害を加えるつもりはないというのがまず前提にあるのなら、なるべくそうならないよう選択肢を増やしておくのが常套だ。だとすれば、女を盾にすれば少しは俺に危害を加える可能性は低くなるというものだ。

「やれやれ。こんな展開になるなんて思いもしなかったぜ。俺があんたらについていけば、女は解放しろ。いいな」

「残念だがそれは無理な相談だ」

「なんだと」

「これだけのことになったのに、女だけみすみす解放するわけにはいかない。それにおまえが従順になったつもりで、いつ反撃する機会を窺っているのか知れたものではない。今しがた見せた、その二

人を一瞬で倒した強さと機転は、我々として手に余るかもしれないからな。だが、我々に従っているあいだは、女に指一本触れないことを約束しよう」

今回の作戦のチーフは、間違いなくこの男だろう。男は確かに暴力のプロだが、そこに倒れているデブや尾行者の男に比べると、まだ話が通りそうではある。だが、チームを任されるという立場の奴だけに、どんな腹積もりをしているのかは計り知れない。言葉の通り、俺がこいつらのアジトに着くまでのあいだ、松下に危害を加えはしないだろう。だが、それもその時までだ。俺を連れていこうとしているということは、なにか俺に用があってのことだというのは間違いないだろう。男の言い分では、それから先は松下の命がない、とも暗に示唆している。

ナイフを突き付けられた松下は恐怖に脅え、表情をこわばらせている。よく見ると、その身を少し震わせているのもわかった。まさか、こんなことに巻き込まれることになるなんて、さすがに考え付かなかったろう。あくまで受取人に解析したデータを渡すまでが、彼女に与えられた仕事だったはずのだ。

「さぁ、どうする。できればこちらとしても、これ以上事を大きくはしたくない」

「……」

仕方ない。俺としてもまさかこうなるとは思わなかったので、松下にとっては不運としかいいようがない。巻き込まれたのを見捨てて、一人逃げ出すというのもなんとなく気が引ける。それに武田の陰湿で、蛇みたいな冷たさを持ち合わせた野郎が相手とわかった以上、今後松下に危険が迫らないという保証もない。俺は臨戦態勢になっていた身を解いて、肩をすくませる。

「わかった。ついていってやる。その代わり、松下には絶対に指一本触れるんじゃない。いいな」

「安心しろ。約束は守る」

そんな保障のない約束など、信じられるわけがない。男はニヤリ

と口を歪め、俺についてくるよう命じつつ銃をさっと巻いて隠すが、その銃口は相変わらずこちらを向けている。どこまでも隙のない野郎だ。

男たちに連れられて黒いバンに乗せられた俺と松下は、互いに言葉を交わすことはなく、じっと沈黙を保ったままだった。不安そうに時折こちらを見つめてくる松下に、俺は目で大丈夫だと合図しては、窓から流れていく夜の街並みへ視線を移す行為を繰り返していた。すると松下も顔を伏せ、ぎゅっと手を硬く握りこむ。隣同士に座らされたことがせめてもの救いかもしれない。

南北に伸びる国道を速度指定に合わせて走ること、すでに二〇分ほどが過ぎている。俺はいい加減沈黙にも飽きて、どこに向かっているんだと前に助手席に座る男にまくし立てたが、この手の人間がとる行動はいつも同じで、そのうちだと告げるだけですぐに沈黙するのだ。

できることなら後部座席に座っていることを利用し、運転手なんかを背後から襲撃してやりたいところだが、それも叶わない。バンは大きな俺たちの後ろにも席があり、そこから俺を用心深く銃を突きつけているのだ。さすがにこんな狭い空間では、いくら一流といわれる殺人機械の俺でも運転手に触れることなく撃ち抜かれてしまうだろう。もしかしたら、助手席の男も早抜きができないともいえない。

しかし、それももう終わりのようだった。国道を走っていたバンは左へ折れ、少し古びた感のする街並みが哀愁を漂わせる一画に入る。けれども、奥に見えた商店街などから、昼間時はそれなりに活気だっているかもしれない。

そんな錆つきはじめている街に降ろされるのかと思いきや、そうではなかったらしい。バンは素通りし、また少しスピードを上げて直進していく。フロントガラスから映るのは、前方に見えるちょっとした大きさのあるビル群で、どうやら古びた街も例にもれず、都

市再開発に力を入れているらしい。
どことなく見覚えのある錆つきだしている街並みを抜け一本大きな通りを横切ると、一気に都会の街並みらしい近代的なビルや舗装のされた路地なんかが目立つ一画に入ったのも束の間、バンはすぐにこの地区でも目立つ、大きなビルの中へと乗り込んだのだ。地下駐車場へ下りたところで、ようやくバンが止まる。
「降りるんだ」
まず最後部座席の男たちが降りた。そこで助手席の男が威圧的に告げる。
「しかしいいのか。目隠しもせずに」
「かまわんさ。ここは仮のアジトにすぎん」
そう、こういう場合は目隠しをするものだというのが定石のはずだが、男たちは目隠しなどする気もないようだったのが、引っかかっていた。なるほど、O市にはあくまで作戦上滞在しているにすぎないというわけか。あるいは、もっと別の場所にちゃんとしたアジトがあるのかもしれない。
「さぁ、歩くんだ」
いわれなくともそうする。毒つきながら男たちに前後を挟まれてビル内へと進む。薄暗いビルの地下駐車場には、不気味なことにこの黒のバン以外は同様の黒いバンが一台あるだけで、他に一切の車が止まっていなかった。そのことが妙な焦慮感を生み、なにか悪い予感がしてならない。もちろん、隣の松下に至っては俺以上だろう。
地下駐車場に設置されているエレベーターに乗り込む。リーダーの男が一五階のボタンを押すと、すぐに上昇し始める。動き出したエレベーターの中で、一分の隙もない男たちに四隅を囲まれエレベーター中央部に立たされるという気分は、どうにも嫌な気分しかしない。
建てられてまだ数年といった目新しいビルだけあって、エレベーターの上昇するスピードは速く、あっという間に一五階へとついた。背中を後ろの男に銃で小突かれ促されるままにエレベーターを降り

るとそこは、一企業がテナントとしてはいったフロアで、簡易の仕切りがデスクごとに仕切られたオフィス、それに役員たちの個別室や会議室といった部屋がある。今は日本の数少ない大型連休の真っ最中ということもあって、当然誰ひとりとして働いているものはおらず、非常灯の明かりだけが薄気味悪くともっているだけだ。

「ここで待て」

男にいわれた瞬間、背中を思いきり押され転がるようにオフィスの一室に閉じ込められた。

「待て。松下はどうするつもりだ」

「安心しろ。おまえがいう通りにするなら殺しはしない」

「待て、待つんだ」

一室に閉じ込められたのはどうやら俺だけで、松下はまた別に閉じ込めておくつもりらしい。くそ、こんなことになるのであれば、やはり大暴れしておくべきだったかと後悔した。どうにも俺は後手に回ってしまうことが多い。これでよくもまぁ今まで生き残ってこれたものだと自分でも感心するが、今は相手がどういうつもりでこんな場所に連れてきたのか、考えなくてはならない。

仮にしろなんにしろ、こんなまだ使われているのが一目瞭然のオフィスに連れてくる必要性がわからないのだ。アジトにするにしても、もっと相応しい場所があったのではないか。少なくとも、俺だったらこんな目立ち過ぎる場所にアジトなど設置はしない。となると、ここは連中にとってなにか都合がいい場所なのか、もしくは元々アジトとして使えるだけの理由があったかのどちらかだ。

それに、連中が尾行していたことからも、どこからか俺の存在がバレていたことになる。もちろん、武田の野郎のことだから、実は四六時中、俺を監視していたなんてこともあるかもしれない。だが、これは少々考えにくい。俺を監視するにしろ、ホテルの事件前後から慌ただしく移動し続けている俺に、連中が尾行できたのかというのは、少々考えものだ。なにより、もしそれだけの日数を監視し尾行していたのなら、この俺がとうの昔に気付いていないはずがない。

俺がO市に入ってから、というのが妥当な線だろう。
　ならばどこでからなのか。つい何時間か前から妙な視線があったのには気付いたので、ここからなのは確実だ。しかし、これでは少々説明がつかない。仮に突発的に俺を発見し尾行することになったとして、こんなチームを組んでまで動員するというのは明らかにおかしい。チームを組んでいるということは、あらかじめそれ相応の作戦として立案されていたはずだ。あのデブが現れたのもそれを物語っているし、なによりデブ自身がそういっていた。
　こちらが尾行者に気付いたのは、尾行し始めたのが作戦を発動させたということでしかない。O市に入ったところからであるというのはほぼ間違いないだろう。追跡を逃れるために、田神が別ルートで開拓しておいた車の解体業者から違法車両を買ったので、そのルートからというのも考えられなくもないが、違法業者が車から簡単に足がつくようなヘマをするとも思えない。少なくとも拝借してきたミスター・ベーアの一味からの尾行というのならともかくだ。
　では、O市内に入っていつ頃からなのか。一番考え得る可能性は、松下に尾行をついたときに、というのが最もあり得ることだろう。少なくとも数時間はあったので、チームを編成できなくもない時間だ。けれども、そのためにこんなおおっぴろけな場所にアジトを構えるというのは、いささかおかしな話だ。どうしても、ここで壁にぶつかってしまう。
　最大の焦点は、なぜ俺をつけたのかという点だ。つけるだけなら、松下への尾行を始めた時点で同時に俺も捕まえるなりすればいいわけだから、問題はない。松下の尾行とは別に、明らかに別動隊がいたのが問題なのだ。俺にデータの中身を渡されたかもしれないからか、あるいは少し締めあげてやろうとしたからなのか……これらも、やはり個別に俺をつける理由にはならないだろう。俺と松下がわかれたところで、二手に分ければいいのだ。
　そして、冷静になって考えてみると今回の拉致は、ドッグによる事件からが引き金となっているのだ。片割れだという女スパイと、

武田の勢力との関係はなんなのか。これも気になるところで、武田の勢力にミスター・ベーア、それとは別に新たな勢力が現れたとでもいうのか……。

ここらの事実関係と背後の繋がりを調べる必要性があると頷いた俺は、早速脱出のためのルートはないかと部屋の中を見回した。俺を放り込んだ連中は、三人分の足音とともに部屋の前から移動していったのはわかっている。そのうちの一人は松下と考えていいから、今部屋の前に間抜け面で出張っているのは、二人だろう。さすがに二人のプロ相手に正面突破は容易くない。

他にあるのは、人の頭の高さよりもさらに高い場所に備え付けてある天窓だ。しかし、なんのための天窓なのか隣はビルになっていて、日を差し込ませるための機能はまるで意味をなしていない。だが、今の俺にはここが脱出ルートになる可能性もなくはない。一八〇を少し超える身長と広めの肩幅の俺でも充分にすり抜けられそうな天窓で、ものは試しと、部屋の中の折りたたみ式になったテーブルを音を立てぬようゆっくりと持ち上げる。筋肉が必要以上に怒張するのがわかる。

天窓のある壁際にそっとテーブルを置き、上に昇って天窓を外側に押してみる。すると考えている以上にあっさりと窓が開いた。窓はテーブルにのった俺の顔の位置にあるため、外を眺めるくらいは充分で、本当に身体を外にやれるのか試しに上体を窓枠にやる。ぎりぎりだが、外に出られなくもなさそうだ。

しかし大変残念なことに、ビルの外壁には窓から抜け出したあとに降り立てることができそうな足場が、全くない。エレベーターのボタンからここが地上一五階であることはわかっていたが、一五階ともなると、高さはざっと考えても八〇メートルかそこらはある。足場もない外壁に抜け出そうものなら、すり抜けたと同時に地面に真っ逆さまだ。

小さく舌打ちする俺に、先ほどの男の嘲笑が聞こえてきそうだった。連中も馬鹿ではない。閉じ込めておける場所をしっかりと把握

しているのだ。やはりアジトにしているこのオフィスは、あらかじめ、きちんとした下調べがされていることがこのことからも窺える。

仕方ない。ここは断念し、別の脱出ルートを考える必要がある。とはいっても、後考えられるのは正面突破しかないわけで、拳銃一丁でもあればまだなんとかできたかもしれないが、丸腰ではどうすることもできない。なんとかだまくらかして、間抜けな連中を一人ずつ始末していくしかない。では、どうやってそんな状態へもっていくか……。

そう考えたとき、ドアの向こうから足音がして話し声が聞こえた。もちろん、例の男ともう一人の配下の二人だろう。しかし、奇妙だったのは足音が同じく三人だったことだった。俺がそのことに訝しみながら眉をよせてテーブルから降りたところで、ドアが開かれる。

「ふふふ、予想通り、脱出するための算段をつけようとしていたところだったらしい」

窓際に動かしたテーブルを見て、リーダーの男がニヤリと唇をゆがめた。ドアの前にいたらしい二人の男が、きちんと部屋のドアを開けながら銃口を向けてきていたのが流石にプロといったところか。こちらに少しも隙を与えさせない徹底した、いいチームのようだ。

「ああ。こんなところに押し込まれておくのは趣味じゃぁないんでね」

「まぁいい。君に客人だ」

「客人？」

いうが早いか、男たちの後ろから、一人の小柄なやつが音もなく現れ、俺の前に姿を見せた。こんな動作一つから見てもこいつがプロであることは考えるまでもなく、それ以上に気になったことがあった。プロであることは間違いないが、どことなく華奢で、線の細い印象を与える目の前の人物には、見覚えがあったのだ。

「あんたは……」

そうだ。廃工場でナイフ一本でやり合い、その後、島津の研究所で出会った、あの女だ。こんな薄暗いオフィスの中だというのに、

相変わらず顔が見えないように黒いフードとマスクをつけている。女らしい人物は、顔を横に背後の男たちに頷くと、男たちがやけに機敏な動作で頷き返し、部屋の外へ出ていった。それも、全員が部屋の前から遠ざかっていく。

「もしかして、あんたが俺を尾行するようにいったのか」

「……」

「あんたの目的は」

なにも答えようとしない女に、怪訝さと苛立ちさを覚えながらさらにまくし立てるように問いかける。やはり反応は同じで、俺としてもこれ以上は何かいうつもりもなかった。

こちらの質問には何一つ答えずじまいの女がようやく動きを見せ、身につけているフードとマスクに手をやったのだ。それらが順番に取り払われていったあとに現れた顔は、逆光になっていてよく見えない。

「……沙弥佳」

それでも俺は、そうつぶやかずにはいられなかった。長いストレートの髪がはらりと顔のあたりに落ち、それを頭を振って背中のほうへと流す。ふわりと甘い香りが漂ってきて、俺の鼻腔をくすぐった。

「久しぶりね」

ややかすれ気味になっているけれども、はっきりとした口調。そして、聞き間違えることなどない、その声。

表情を窺えなくとも、たったこれだけでも十分理解させられるものだった。そこに俺の求めてやまない妹の姿があるということを。今こうして、妹が確かに俺の前に現れたのだということを……。

第９１章

二台の軍用トラックが闇夜にむかって、ライトを突き刺すように悪路を猛スピードで進んでいた。荷台には、民間人の救出と銘打って出動した兵士たちが肩身を寄せて引き締めあっている。本当ならばヘリで現地まで行き下降するという手段があるはずだったが、不幸なことに彼らにはそんな上等なものなど実装されることはなかった。

ほとんどの兵士がこれからの実戦に向け緊張した面持ちで、一言も発することはない。が、そんな中でもベテランらしい幾人かは、他愛もない世間話に花を咲かせている。彼らは、どうすれば実戦で普段の訓練の成果を発揮させ、かつ冷静、臨機応変に対応できるのかを知っているのだ。そうでなければ、まだ戦闘経験の浅い兵士たちを纏めることなどできはしないということも。

先行するトラックの最後部に、珍しく一人の女兵士が座っていた。もちろん、実戦に出る女兵士がけして多くないのは当然だが、それ以上に珍しいのは、彼女が東洋系の顔立ちをしていたということが最も大きな理由だ。

彼女は上官や先輩兵士たちの言葉などに耳を傾けることなく、じっと、流れる雑木林の闇をの奥へこともなげに見つめている。トラックの荷台の上にある、兵たちを覆い隠すように張り巡らされたシートによって外が見えなくなっているはずなのに、くくりつけが悪かったのか、最後部の出入り口のシートは風にはためいて、わずかな隙間を作っていたのだ。

「君、今日が初めての実戦なんだよな」

ここまで一言も言葉を発さなかった、彼女の目の前にいる兵士が話しかけた。まだ若い兵士ではあるが、歳は二〇代後半というところで、いくらかの実戦経験があるのは間違いないようだった。もっ

とも西洋人である彼は、鼻が高く掘りも深い顔立ちから東洋人からすれば少し老けて見えるだけで、実際にはもう何歳か若いかもしれない。彼女はチラリと眼を相手に向けるだけで、なにもいうことはない。

「わかるんだ。初めての実戦に出る人間とそうでない人間って、雰囲気が違うからな」

「……そう」

彼女もほとんどといっていいほど言葉を発さなかったが、これが緊張によるものではなく、もっと深い部分で意識的に言葉を発していないということを、目の前の兵士は気付いていない。その後も時折話しかけてくる彼に、彼女は小さく頷くだけで、会話らしい会話などほとんどなかった。これから戦地に赴こうというのに気軽に話すという行為が彼女にとって、煩わしいということもあるがそれだけではなかった。

そろそろ太陽が昇ってこようかという頃だ。二台のトラックは雑木林を抜けてようやく目的の場所に着き、すぐに荷台の兵士たちは飛び降りる。彼女もそれに混じって戦地の泥を踏みしめると、すぐに全員の表情が張り詰めた緊張感に強張った。

「敵はどこに潜んでいるのかわからない。気を引き締めていけ」

上官の男がチームの兵士たちに鋭く叫ぶ。戦場の舞台となるのは、街からは遠く離れ、車で少なくとも五時間はかかる山間の寂れた村だ。この国に限らず、東欧方面の国々によくみられる白っぽい壁と赤茶色の屋根、そんな伝統的な作りの家屋がところどころに点在し多くの家々に庭というには広すぎる小さな牧場をもっていた。それらを示すように、家々の脇には小さな飼育小屋らしい建屋も見える。

とりわけ産業と呼べるようなものがない村の住民たちの多くは、静かに放牧などの農業で生計を立てているのがそれらから窺えた。そんな村も通常、昼間の時間帯であれば住民同士の往来もあるはずだが、今は朝早くということもあって人の往来はない。

しかし、人気が感じられないのはそれだけが理由ではない。いや、

正確にはそれが理由ではなかった。老若男女、全ての住民たちがこの村から消えていることが最大の要因だったのだ。そう、この兵士たちは一夜にして消えた住民たちとその原因の調査という名目で、この地に送り込まれたのである。

「思っている以上に酷い。何があったんだ」

「わからない……」

ベテランの兵士も、そうでない兵士も想像以上のひどい有様に、誰しもが怪訝に眉をひそめる。どう見てもこれらは、戦場となった村や町が戦闘の嵐の後に見せる状況そのものなのだ。けれども、たとえそれらが戦闘によるものだとしても、この村のようにこんな不可解な状況に陥るはずがない。長年戦場の最前線に立ち続けてきた上官の男でさえ、こんな状態の戦場など見たことがなかった。

家々の壁や屋根は砲撃でもうけたのか、四方一メートル以上はある大きな穴が無数にある。たまたまそこが脆かったのかは不明だが、酷いものいたっては三メートルはあろうかという巨大な穴ができているのだ。だが、どう考えてもこれが砲撃によるものでないことくらいは、新米の兵士にでも理解できるものだった。壁に火薬や摩擦でできるはずの黒ずんだ跡が見られないうえ、なにより爆撃を受けたというのなら、周辺にもっと火の跡があるはずなのに、この現場には一切そういったものが見られないのだ。

それだけではない。兵士たちを冷静にさせ、かつ得体のしれない不気味な恐怖感にとらわれることになったのは、家畜の動物たちすらいなくなってしまっているためだった。本来なら日の出の頃になろうものなら、鳥たちの囀り声が聞こえてくるはずだ。なのに、それすらも聞こえてこない。聞こえてくるのは、ただ自分たちの歩む足音だけで、本当に廃村になってしまったらしい雰囲気の村に、兵士たちの心の奥底に理屈ではないどうしようもない恐怖心を呼び起こさせる。

上官の指揮する声のもと、彼らは波状に展開しつつ、壁にできた穴から中を覗きこむ。漠然と予想していた通り、中には争った様子

はなく、ここが突然”何か”によって見舞われ、彼らが消えたということを直感的に思わせるものだった。誰も口にはしないが、ここで異常な事態が起こったということだけは間違いないと思いながら、着実に歩を進めていく。

この中でただ一人、終始冷静でい続けたのは女ひとりだけであった。彼女には、この村に起きた異常事態の原因がわかっていたのだ。むしろ、彼女はこれから先、この部隊の待つ運命を内心で憂いているほどだった。

部隊が家屋のある村の拓けた中央部を抜けた先は、深い森になっていた。彼らはごくりと喉を動かし、森の中へと足を踏み入れた。そこで、兵士の一人が森の地面を踏みしめたとき、妙に地面がぬかるんでいることに気がついた。拓けたところに、たまたま農場や牧場ができただけで、元はやや湿り気を帯びた地域であるのかとも思った。このあたりの地域であれば、そうした場所も少なくないからだ。

しかし違った。周りに落ちている木の葉は、踏みしめるたびにぱりぱりと乾いた音がしているのだ。腐葉土に混じって、変にぬかるんだ場所とそうでない場所があることに気付いた彼は、踏み進めるごとにだんだんとぬかるんできたのが不自然に感じられた。そしてそれらのほとんどが腐葉土とは明らかに違うと感じたのだ。

そしてそれは彼に限らず、他の兵士たちも否応なくその違和感に気付きだした頃、それら腐葉土だと思っていた地面が赤黒く見えることに気がついた。どう考えても異様だった。しかも、森の中でも日の出の前後であったことから、森にも少しずつ陽光が差し込み始めたとき、それがなんであるのか、ようやく兵士たちにもわかったのだ。

血だ。腐葉土に混じっていたのはただの水分などではない。血なのだ。踏みしめた足を上げブーツのつま先部分と底に目をやれば、赤いものがべっとりとこびりついているではないか。新米の兵士がそれに気付いたとき、彼の口から一瞬の間があったあとに短い悲鳴

があがった。その様子を見ていた兵士たちも、自分の踏みしめている足場に視線をやって悲鳴をあげはしなかったものの、驚愕に表情を歪めた。

誰もが脳裏に思い浮かばせた疑問。これはなんなのだ、この赤いものは……。血だ、血でしかない。では誰のものなのか……。消えた数百人の村人たち、彼らに従えられていったかのように消えた家畜……。つまり、この血は……。森の中には完全に日が昇った太陽の光が照らし出し、部隊の目と鼻の先に、異様な光景を浮かび上がらせた。

「う、うわあああああっ」

戦場になれていない新兵がそれを目の当たりにして、ついに悲鳴の叫び声をあげた。もっとも、それはベテランにしても同じで、悲鳴こそ噛みしめはしたが心境としては同じだった。目の前には、何十という数の人間の死体が折り重なって山のようになっているのだ。山のような死体ではなく字のごとく、死体の山になっているのだ。

大型の肉食獣に食い散らかされたのか、死体の多くは体の肉付きの良い部分が粗方喰われている。腕や足がなくなっているもの、頭がどこかに消えてしまっているもの、死体の状態は様々だが女の死体は男のものよりも無残で、女の象徴ともいうべき二つの乳房が食いちぎられていて、太ももや尻、男であったなら誰もがそこにむしゃぶりつきたいと考える部分が、喰われてなくなっているのだ。そして誰もが苦悶や恐怖に満ちた表情のままで、部隊の兵士たちを眺めているのだ。

ところが、死体の山はそれだけではない。山の影になった向こうにも、また同様の山が二つも三つも築かれていた。さすがに、この光景にはベテランであろうとなかろうと、吐き気を催し、幾人かの兵士がその場に蹲って吐瀉物を吐き散らした。

誰もが思考停止した中、彼らの背後で何かが動く気配があった。部隊の後方にいた兵士たちは異常にいち早く気付き、携帯している銃を背後へ向ける。彼らはここに、自分たちの想像ではとても追い

つけないものがあることを知った。目の前に現れた”それ”は、どう見ても自分たちの知る生物の様相をしていないのだ。

誰もが息を飲む。なんなのだ、こいつは……。誰かがそう口にしていた。だが、その疑問に答えられる者などこの場に一人もいないだろう、彼女以外の誰一人として。

全身に酷くただれた瘤らしいものがいくつもできでいる”それ”は、どことなくゴリラを思わせる形をしていた。しかし、大きさはゴリラのそれとは比較にならないほど大きく、軽く二倍以上、三倍近くあるかもしれない。手足のバランスは悪く、手だけが異様なほどに長くなっていて、身の丈を超えるほどのリーチを持っている。指は五本だが、体と同様に、それぞれの関節ごとに瘤ができて握ることなど不可能なのではないかと思えるほどに太い。

それだけでも異様なものだとわかるのに、兵士たちにさらなる悍ましさを与えたのは顔らしい部分だ。目や鼻はただれたみたいに不鮮明な位置にあり、額に片目があるかと思えば、左の頬とこめかみの中間あたりにもう一方の目が存在している。口も右に向かって大きく裂けていて、真ん中あたりからは縦に避けておりT字だ。しかし、それらは、もごもごと咀嚼している様子があり、きちんと口としての役割を果たしている様子なのだ。

次の瞬間に、部隊の一人がとっさに構えていた銃を発砲した。これを合図に兵士たちは無我夢中で目の前に現れた化け物に向かって、銃による一斉掃射を開始し、同時に後ずさりながらの後退をはじめる。上官やベテランたちの怒声に、新米の兵士たちは喝をいれられて現実に引き戻される。苦しんでいる暇があるなら応戦しろというわけだ。

誰かが叫ぶ。だが銃などこの化け物には効かなかった。どうも当たったはずの銃弾は、化け物の体を滑るように跳ね返り、間通していくどころか、まるで喰いこんでいく様子がない。それだけじゃない。化け物は部隊の動きに合わせて、ゆっくりとそちらにむかって一歩一歩前進してきているのだ。

そのうちに弾倉から弾がなくなり、新たに弾倉をこめ直そうとした者が現れたときだ。化け物は地響きをさせながらその兵士のところにまで詰め寄ると、自身の背丈をも超えるリーチの持つ腕でもってこの兵士の胴体を鷲掴みにした。

「ひぃっ!?」

恐怖の悲鳴をもらした口から、大量の血が吐きだされる。化け物は掴んだ兵士の胴体をリンゴを潰すみたいに簡単に握り潰したのだ。兵士から吐きだされる血の量は半端ではなく、口からだけでなく、鼻や耳、目からも赤い涙となって流れている。もはや胴体の骨という骨は、内臓のあらゆる個所にこなごなになって砕け散って突き刺さり、同時に内臓は圧迫されて潰れてしまったに違いない。

化け物が握りつぶした兵士を他の兵に向かって思い切り投げつける。何十キロもの重さがある死体が、時速何十キロという速さで投げこまれてぶち当たった兵士は、もはや鉄の塊がぶち当たったような感覚があったろう。勢いそのままに死体の山まで投げだされ、圧迫死したのか、ピクリとも動かなくなった。

その後は一方的な殺戮の嵐であった。銃など効かない化け物に、兵士たちはただ逃げまどうばかりで、戦おうなどとは毛頭あるはずもなかった。いかにして化け物から生き延びるか、その手段を考えることだけが唯一の逃走手段となる。

部隊の兵士たちが悲鳴をあげて抵抗する手段も失い、無残にも死んでいった中、一人の兵士が森の中をさまよっていた。もう部隊のことなど頭にはなく、たとえ敵前逃亡という烙印をおされ軍法会議にかけられようとも、あんな化け物相手に殺されるよりは遥かにマシだと考えながら道なき道を走っている。

彼にはもう装備などない。支給されている銃などの武器は、とっくの昔に手から離れ森の中に捨ててきた。仮にあったとしても全弾撃ちつくし、兵器として使いものにならない武器など意味はない。それでも、支給品のアーミーナイフとは別のサバイバルナイフだけ

が、彼の気持ちをかすかに安心させる。もう一つ、情報員としての勤務経験もある彼がとっさに撮った、あの化け物の写真も一緒だ。

どれほどの間森のなかをさ迷っているのか、もう感覚がない。まだ日が高いから、正午前後だろうか。だとすれば、ざっと考えても七時間か八時間はさ迷っていることになる。携帯食すら持たない彼には、空腹もまた敵だ。作戦前にいくらか胃に収めてはいたがそれも少量で、ほんの何時間かしかもちはしない。

何時間も人気のない森の中を方角もわからずさ迷うというのは、想像以上に疲労が蓄積され、精神的にも肉体的にも負担が大きい。おまけに彼には後方から、あの得体のしれない化け物が迫りくるかもしれないという恐怖もある。いってしまえば常に緊張している状態であるため、彼の体力はとっくに限界など過ぎている。日のあるうちに人里に下りていけなければ、遭難は確実、死んでもおかしくない。

それでも彼が動き続けることができたのは、恐怖からだけではない。彼は意識的に逃げることを選択し、目の前に迫った恐怖を上層部に伝える義務があると判断したのだ。知らずにあんな化け物と出会えば、いくら部隊の何倍もの人員がいたとしても、結果は変わらない。すぐにでも知らせ、軍を総動員してでもあの未知の恐怖を排除する必要があると、彼は考えたのだ。

数百人の部隊を相手でも、あの化け物なら一体だけでも十分に対抗できるかもしれないが、それでもこの事実を知らせなくては、現場に混乱が招かれては対抗し得る兵力があったとしてもまるで意味をなさないのだ。だから彼は、部隊から離脱することを考えた。部隊の幾人かは自分同様逃げ出していったのを確認したが、あの化け物に捕まらなかったともいえない。

おそらく部隊は全滅だろう。逃げのびた者が他にいないともいいきれないが、とにかく状況的に見てそう考えたほうが自然だ。しかし部隊に与えられた任務は、住民がいなくなった原因を掴むためだ。それがわかった以上、上に伝える義務がある。なにがなんでも自分

だけは逃げのびる以外に、状況を報告できるものはいない。彼はそう判断して、この人気のない鬱蒼とした森の中を一人さ迷っているのだ。

隆起した岩の上に腐葉土が堆積してできた地面からは、見渡す限り濃いこげ茶色の肌をした樹木とその蒼々とした葉ばかりで、今どこにいるのか彼には見当もつかない。そんな状況にうんざりした彼は、その場にへたり込んだ。地面に腰をつけては、もう立ち上がる気力もなくなろうというものだが、この数時間は小休止すらしていないことを思い出して、五分だけと心中つぶやいた。

大きな樹を背もたれにすると、背中が想像以上にべっとりと汗に濡れているのがわかる。どうしようもない恐怖にとらわれた証拠なのだ。そのために起こした戦略的撤退。冷静になると、自分が最後に待ち受けているかもしれない運命に想像を巡らせて、先ほどまでとはまた違う嫌な汗が背中から伝っていくのが感覚としてあった。

五分だけと決めたものの、彼は一向に動く気配がない。五分どころか、すでに一五分以上が経過している。疲労困憊している彼に、五分という時間は実際にはその何倍もの時間に感じられるのだ。あと二分……あと一分……そう心に刻むうちに、五分という時間はあっというまに二〇分を超えた。

そろそろだ……。閉じていた目を開けて、のろのろと立ちあがったところ、近くでガサリという音がして、彼は反射的にナイフを構えてそちらの方を振り向いた。

「お、おまえは……」

「あなた……生きてたの」

彼の目の前に現れたのは、意外なことに部隊の紅一点である、東洋人の女だった。彼女もまた装備は途中で捨ててきたのか、銃など持ってはいない。

「どうやってここに……？」

「これ」

彼のところにまで歩み寄って見せたのは、支給されたものとは違

うＧＰＳだった。彼女の私物であるらしいそれを見て、漠然と逃げまどっていた彼の顔がいくらか安堵に緩んだ。ＧＰＳが指し示す方角にはどうも、人里があるということがわかったのだ。つまりここまでの逃走経路は、間違っていなかったことになる。

「部隊は、部隊はどうなったかわかるか」

答えなどわかりきったものだったけれど、彼はそう聞かざるを得なかった。女は無表情に首を振ったことで、答えはやはり全滅したということなのだろう。

聞けば彼女は、死体の山に身を隠し化け物をやり過ごしたのだという。死臭にまみれた女を嗅ぎ分けることなど、さすがの化け物にも無理だったらしい。部隊の血肉を粗方喰い終えた化け物は、その場からこちらとは反対方向へ去っていった。それを見計らって彼女も自分と同じ方向へ逃げた、そういうことなのだろうと彼は思った。

他に逃げた者がいたはずだと聞く彼に、女は再び首を振った。そこまではわからないという意味らしい。あるいは化け物が逃走者らを追っていったのかもしれないと思えば、まだ危険がないとはいわないがここまでは距離がある。さしあたり、進む方向さえ間違わなければ問題はないという判断を、無意識にしていたということなのだ。

その後も二人は三時間ほどかけ、ゴツゴツとした大きな岩を登り下りしながら進んでいくうちに、少しばかり拓けた場所に出た。二人は、どこか人の気配のする雰囲気を悟った。辺りで最も大きな岩に登った彼が見下ろすと、気配のした通り、眼下に人里が見えたのだ。間にはまだ森があり、村までは三〇分ほどの道のりがあるように思われたが、早朝に到着した村に比べるとまだ活気があり、大きい街であることが窺える。

「村だ。あそこで電話を貸してもらおう。ＧＰＳに接続してしまえば、軍に情報が送れるはずだ」

「……あそこにはいかないほうがいいわ」

何を考えているのか、女は男の提案に否定的だった。初めて訪れ

る場所であるはずなのに、まるであの村のことを知っている風な口ぶりなのだ。怪訝に思いつつも男のほうはそれでも行くべきだとして、彼女を連れていこうとするが女は頑なにそれを拒んだ。同じ部隊の生き残りとして、男として女である彼女を守りたいという無意識の欲求が、彼に拒む彼女を無理やりにでも連れていこうとする決心をつけさせた。

彼は女の手を掴んで、眼下の村へと引き連れて行くことにしたのだ。普段であれば奥手の彼をそうさせたのが、目の前の女が東洋の神秘を思わせる美女であることが、少なからず行動させた理由かもしれない。同じ恐怖の体験をして、吊り橋効果があった感は否めないだろう。もっとも、今の彼にそれを説明したとしても冷静でない彼は、否定していかもしれないが。

思った通り、三〇分足らずの行程を一気に突き進んで村に入った彼らは、村の中央部分に建てられた村の建物としては目立つ村役場まで、一目散に駆けこんでいく。途中、黒い戦闘服を身につけた男女二人を目にした村の人々が何事かと目を向けていることなど、今の二人にはどうでも良かった。いや、そう思っているのは彼だけだった。

「すまないが、インターネットを使えないか。あるいは電話だ」

駆けこんだ彼が受付の窓口にいる初老の男に、まくし立てるように尋ねる。しかし、初老の男は一体なんなのかと茫然としている。

「止めたほうがいいわ」

「さっきから、なんだってそんなに止めるんだ」

彼女が答えない代わりに、村役場の出入り口のほうから男が答えた。

「それは、私が君たちをテストしたからだ」

「誰だ」

突然背後からした声に、彼が振り向く。

「そして、おめでとう。君はテストに合格したよ」

目の前に突然現れた男。口と顎の周りに髭をたくわえた男は、ど

この国のものとも知れない軍服を着こんでいて、女と同様に東洋人らしい雰囲気を持っている。だが、それでいて顔目立ちの掘りは深く、どこか白人に見えなくもない不思議な雰囲気だった。

「手駒としては、君でもう十分だな」

男は一人納得して頷く。彼は一体なんのことだとわめくが、男は全て流して背を向けた。それを合図として、小さな村役場にいた人間たちが不意に彼を取り押さえる。

「お、おいっ、なんなんだ、放せっ」

気付けば外にいた住人たちも彼を一歩のここから出すつもりはないと、入口を人垣を作ってふさいでいる。異様な光景だった。みな夢遊病者か何かのように歩く足がおぼつかず、目は意思というものを感じさせないのだ。

「な、なんとかしてくれ」

四肢を何人もの住人たちに押さえつけられている彼は女に向かって叫ぶが、彼女は前と同じ無表情のままでそこからは一切の感情が感じられない。まさか……。彼は今になってようやく気付いた。まさか彼女は、スパイだったというのか……。

「お前はスパイだったのかっ」

それに答えず女が一歩踏み出して、装備の手袋を外してナイフを取りだした。夢中になって気付かなかったが、ナイフは彼がいつの間にか落していたもので、それを彼女が手に持っている。ナイフを露出した指の表面にそっと立てる。どうやら彼女は自身の指の皮膚を切ろうとしているらしい。

すっと躊躇うことなくナイフをひいた。きめ細かそうな肌をもった彼女の人差し指に、一筋の赤い線が入って、ぷつぷつと血が溢れだしてくる。女が血の溢れる人差し指を彼に向ける。今の彼には戦場で見なれたはずの鮮血が、どういうわけか妙にグロテスクに感じられて仕方がなかった。

「だから、いったのに……ここには来ないほうがいいって」

女の口から、まるで憐れみを含んでいるかのような言葉がもれた。

人差し指を向けたまま、ゆっくりと彼の前にまで歩み寄ると、指を目と鼻の先まで突き出した。
「な、何をするつもりだ。テストってなんなんだ、手駒とはどういう意味なんだ」
まだわめきたい一心だった彼の言葉が途中で途切れる。目の前にむけられた指から溢れ出る血が、目の錯覚か、血は止まっているどころか、もう傷口がふさがりつつあるのだ。
「そ、そんな、こんなに早く……」
彼のつぶやきに女の目が細まる。そして血に染まった指を、静かに彼の口へと押しつけた。

バラバラとローター音がうるさく響いている。輸送用のヘリから見える空の景色から、機体が低空飛行になりつつあるのがわかる。どうやら目的地へ着こうというところらしい。今俺は、どこから手に入れたのか自衛隊では採用されていないはずの輸送用ヘリコプターの中に、物資という形で乗り込んでいた。いや、物資なのだから、詰め込まれているといったほうが正確かもしれないが。
ともあれだ。俺はそんな決して広いとはいえないヘリの中で、他に詰め込まれている大きな物資を背に、操縦席のほうに視線をやっていた。やることなど何もないというのもあるが、それ以上に何かやりたいという気にならないというのが一番の理由だ。まぁ、連中も俺を殺そうとしているわけでもないから、今のあいだはゆっくりさせてもらうに限る。そのうち時が経てば動かなくてはならなくなる。
「そろそろだぜ」
操縦席にの男が叫ぶ。いわれるまでもなく、機体は着陸する地点へ向けて降下していくのが体感としてわかる。ホバリングする機体がわずかに揺れ、ヘリの中で地べたに座り込んでいた俺に着陸する

衝撃が伝わった。
　間入れずに機体の後部が開き、輸送物資を運びだそうとして戦闘服を着込んだ連中がヘリの中へとなだれこんでくる。いくら物資として輸送された身でも、連中に運んでもらう趣味などない。数時間もの飛行で疲れた身体をならすため、背伸びしながら運びだし連中に混じって機体から降りた。
　降り立った先は、簡易の基地といった雰囲気のある場所で、視界に映るだけでも何十人といわずに人員がうごめいている。ここにいる連中全員がたった一人の人間のもとに、自ら志願して集まった者しかいないというのはなかなかに驚きだ。武田が持つ人望の一端を窺い知れるというものだが、この場で唯一、武田の敵といわざるを得ない俺にとっては、一言、全くご苦労なことだとしか思えない。
　自分のために生きることを望む俺が、その力を誰かのために使うというのはどうにも腹立たしく感じて仕方ないのだ。誰かのために行動する。この言葉がどうにも偽善でしか思えない。見知らぬ人間のために何かしたいというのは、自己満足ですらなく、傲慢といったほうが正しいのではないか。だってそうだろう。人間、自身の行動の根底になにがあるのかと突き詰めて考えたとき、結局は自分のためというところに突き当たる。
　自身の都合のために計算したり、誰かと誰かを天秤にかけたり、もしくは自身の望むべきものを手に入れたいと考えたとき。もちろん、他にもいくらだってあるだろうが、結果は同じだ。何年も前から叫ばれている地球のために、などという地球温暖化対策として空気中の二酸化炭素を減らそうだとか、これらに至っては、馬鹿馬鹿しくなるくらいに自分の、自分たち人間のための最たるだろう。
　別に、人間が自分たちの吐きだしてきたもののツケを払って絶滅することになったとしても、地球が滅ぶわけではない。世界中にある核兵器を同時に爆発させて地球が死の星になったとしても、他の生物は残念ながら人間と道連れになるが、地球がなくなるわけではないのだ。

そう、地球のためだなんていうのは、ただの詭弁だ。もちろん、俺とて地球の破壊をしたいわけでもなければ、この世から全ての人間を排除したいと思っているわけでもないので、やりたいと思うのであれば勝手にすればいいというのが本音だ。自分たちの都合をすり替えていることに、俺はどうしようもない苛立ちを感じるのだ。

単純に考えれば、地球が滅ぶ前に、人間などとうの昔に滅びていることだろう。これと同じで、俺にとっては自分の力を無償で誰かのために使うなど、最も唾棄すべき行為の一つだといっていい。成り行き上仕方なかったことはあれど、自身の行動になんのおまけもつかないなど、毛の先ほども動かす気にはなれないのだ。そんなわけで今ここにいる連中を、随分と暇なものなのだなと冷めた目で眺めていた。

それ以上に気になったのはこの連中がここに集まった経緯などではなく、どういう理由で集められたか、だ。連中の動きを見ると、どう見ても素人であるとは思えず、着ている服とその着こなしから歩き方一つとっても、明らかになんらかの訓練を受けていることが窺えるのだ。もちろん、この場に置かれた、あらゆる備品も自衛隊のものらしいものは当然、日本にはない外国製ものまで様々なのだから、そう思うのは当然だろう。

武田という男はどうも、田神とある意味で似ている気がしてならない。どこか得体が知れないという点では、間違いなく共通しているといっていいだろう。もっとも、武田の奴は必ずこの手で地獄に突き落としてやるつもりではあるが。

俺はそのことを改めて心に、一歩踏み出した。武田のことはいずれ始末をつけるにしても、それは今ではない。今はどうにかして、奴に付け入る隙を与えなくてはならないのだ。

真正面に見えるのはもっとも大きな天幕で、連中のボスである武田がなりを潜めているらしい。天幕の入口には普通であれば見張り人員が配置されているはずなのだが、どうしたことなのか、全くもってそれらしい人員の姿はない。こうするのが当たり前とでもいわ

んばかりだ。ともあれ、誰も張っていないというのならわざわざ気にする必要もない。

俺はさっさと天幕の中へと入った。ごちゃごちゃと必要物資が置かれているかと思っていた天幕は、予想に反して思いのほかすっきりとした印象だった。それでも、必要とする電気を確保するための発電機のコードから、なにかを映すためかと思われるスライド式映写機などが置かれた机といった、作戦上必要最低限のものだけはある。

「きたか」

「ああ、きてやったぜ」

俺が入ったというのに見向きもしない男は、間をおいてそういった。こちらも腕組みをし、すかさずそう言い放つと目を落している机から顔をあげた男……武田だ。簡易の組み立て式の机のうえには数冊の本が置かれていて、その中の一冊を手に、読みふけっていたということらしい。

「君にはしてやられそうになったな。まさか、我々を裏切るとは」

「けっ、そいつを始めから読んでいて別動隊を用意しているような、手際の良さを発揮しているあんたほどじゃぁないがな」

ああいえばこういう。まさしくそんな言葉が当てはまるやりとりに終止符を打ったのは、武田のほうだった。まだ言いたげではあるのがかすかに滲んでいるのが雰囲気からわかるが、それ以上に気にかかることがある様子だ。

「……まず聞こう。なぜ命令に逆らって、ターゲットを始末しなかった」

「そんなの聞くまでもないんじゃないのか。どうせ、始末をつけた後で俺を始末する算段があったんだろう？　そんな簡単なことを見抜けないほど、俺も馬鹿じゃぁないんでね」

さらに俺はたたみかけるように、周囲の人間を始末しているというこの男の行動についてもまくし立てた。なぜ、そんな野郎が俺を仲間に引き込もうとしたのか、あの廃工場での入団試験とはなんだ

ったのか、この男の行動にはどうにも矛盾がありすぎる。
「そうだな。一言でいってしまえば、私としては君という男を手元に置いておくのは少々危険だと考えている。できうることなら、排除しておくに限るとね」
　にべもなくそう告げた武田は、俺に落ち着いた表情を向けた。俺がくることを考えて用意していた台詞なんだろうが、本気でそう考えているに違いない、そんな表情だ。
「君は、ミスター・ベーアの組織の一員であるにも関わらず、組織への忠誠など微塵も感じられない。もちろん、上から出された命令にこそ従ってはいるが、命令もされていないのに勝手に動く。島津研究所やその前の鳳凰館、さらには泡金のために行ったヤクザ同士の……佐竹という殺し屋についても同じだ。あるいは、イギリスにいたときのマフィア抗争にすら勝手に首を突っ込んでは場をかき乱している」
「それがどうした」
「君という人間は組織は当然、誰かに仕えようとする気など一切ない。つまり、そんな人間はいつ裏切るかも判らないと上の人間は判断する。末端の現場工作員が上の人間が引く手綱をも食いちぎって脱走したときほど、厄介なことはないのだ。それくらいは君だってわかるだろう」
　要するに武田がいいたいのは、組織や国家の忠誠など持たない殺人機械の俺に、自我を持って行動してもらうのは困るといいたいわけだ。俺はため息混じりに、眉を吊り上げていった。
「別にあのときは、始末つけるにはあまりにも目立つと思ったからやめただけさ。やるにしても、もっと別の形でやりたい。だからやらなかった。それだけだ」
　全く都合よくいってくれるものだがこいつは、俺が失敗し警察に捕まるかもしれないということを想定していたに違いない。存在自体がいるかいないかもあやふやな連中のことを俺が吐いたところで、連中にはなんの実害もないのだ。成功するもよし、失敗するもよし。

どう転んでも自分たちにはなんの実害がないからこそ、あんな人目のつく場所をわざわざ選んだに決まっているのだ。まぁ、そのくせ、それよりも目立つやり方で始末をつけたものだとも思うが。

「それに、あんた今、命令といったがな。そいつは勘違いもいいところだと思う。あんたは俺を殺し屋として雇った。それもなかば脅す形でな。だってのに命令だというあんたの言葉には語弊があるというものだぜ。そもそもの俺の立場はあんたの手下ではないぜ。あんたの入団試験とやらにも勝手に参加させられてたんだ。それを忘れてもらっちゃぁ困る」

腕組みしている俺に、武田は無表情を貫き通している。以前あったときはどこかの密僧とでもいった雰囲気の装いをしていたが、今はきっちりと戦闘服に着替えている。

「まぁいい。それであんたが俺を、わざわざこんなところに連れてきた理由ってのをいい加減教えてもらいたいね」

そうなのだ。俺はあのあと、ただ着いてきてという、沙弥佳の言葉に従ってここまできたにすぎないのだ。なぜ、そういったのか、俺には今一つ理解に苦しむ謎めいた言葉も付け足して……。

思わず息を飲んで、目の前にいる妹の姿を眺めていた。なんと言葉にしていいのか、わからなかった。向こうも俺と同じ心境なのか、一言、久しぶりねといっただけでなにを告げるまでもなくじっとこちらを見つめている。

「沙弥佳……だよな」

「そう」

情けなくもそんな言葉しかいえなかった俺に、沙弥佳は無感動にいう。目が慣れてきたこともあって、暗がりにいる沙弥佳の表情がうっすらと窺える。言葉と同じく全くの無表情で、切れ長の瞳がこちらを見据えているのがかすかに見分けることができた。

「どうしてこんなところにいるんだ」

考えなしにいったあとに、何をいっているのかと不快に小さく眉

をひそめ、目をそらした。ここでの台詞はこうではないだろう。大丈夫だったか。これは違う。今までどうしてたんだ……これが一番しっくりくる気がしたけども、そんなことをいうにもなにか心に引っかかる。

「いわなくてもわかるでしょ？　これが私の仕事だから」

「そうじゃない。そいつはわかっちゃぁいる。俺がいいたいのは……」

「どうして私がこんなことしているのか、そういいたいわけ」

ほとんど無感動といっていい声は、もはや過去のことなどどうでも良いといった風に思える。けれども、ほとんど、というのはかすかに、かすかにだが感情があるという意味でもある。それもその感情というのは怒りだった。そう、沙弥佳が俺に向ける感情は、怒りなのだ。それも炎のような憤怒の感情ではなく、冷たい……凍えるような冷たさをもった怒りだ。

思えば沙弥佳が本気で怒ったときというのは冷めた表情をしていたのが思い出されるけども、それにも増してここまでの冷めた感情を見せたことがない。だけに、俺はどうにも困惑してしまっていた。

「それもある。それもあるが……」

「じゃあなに」

即座に返されて押し黙る。それもあるだって？　それ以外になにがあるというんだ。冷たく言い放つ沙弥佳に俺は考えを纏めることができず、いう必要もないことばかり口をついてばかりだ。仕事のときならもっと冷静になれるのに、どうしてこんなときに限って冷静になれないのだ、俺は。

「ここは、ここはどこなんだ。どう見てもオフィスみたいだが……」

冷静になれずにいる俺は、そんなどうでも良いことを口にした。なにをいっているのだ……そう後悔しても、もう後の祭りだ。

「ここは宮部が所有しているビルの一室。そして彼の経営していた会社」

簡潔に告げる沙弥佳に、俺は困惑しながらも納得もした。さきほ

ど、ここに連れてこられる際に見た街の風景がどことなく見覚えがあると思ったのは、ここが数日前までドッグについて調べるために張り込んでいた雑居ビルから見ていた風景に似ていたためなのだ。いや、そのものだったのだ。あのときもここに潜入したのが夜だったうえに、階数も違ったために思い出せなかったということなのだろう。

「俺は……俺は、てっきりおまえが死んだかもしれないと思っていたんだ。島津の研究所にいったときに、坂上という男の研究記録にあったんだ。そいつを見つけてな」

絞りだすように島津で見つけた沙弥佳に関するデータにあったものを、順序もおざなりに口走っていた。客観的に見れば、まるで恋人に言い訳している情けない男のようであったかもしれない。けれども、なにかを口にしていなければ自分の感情を落ち着けることなどできそうになく、果てには関係もないことすら次から次へと口に出していた。

「……そう。だけど、そんなの私には関係ないわ」

黙って俺の話を聞いていた沙弥佳は、こともなげにそういった。

「私はあなたがどうしていたかなんて興味ない。それよりも、これからは私たちの元で動いてもらうから、そのつもりでいて」

「どういう意味だ、それは。いや、その前に今……」

告げる俺の言葉を手をあげて遮り、沙弥佳は続ける。

「今はここから移動してもらうわ。アジトの一つとはいえ、ここは仮だから。あとは追って連絡する」

それだけいうと沙弥佳はすぐにも踵を返し、部屋を出ようと一歩二歩と歩み出す。俺は間抜けにもそれを見逃そうとして我に返ると、歩み出した沙弥佳の手首を掴む。

「待て、待てよ。それはどういう意味なんだ。いや、そんなのはどうでもいい。なんで何もいわないんだっ」

沙弥佳の手を掴んだ俺は早口にまくし立てる。いう必要もないことまで口走ったあたり、相当気が動転しているのかもしれない。

「……触らないで」
振り返ることなく、低い声でそう告げる沙弥佳。その声には、かすかにあった怒りの感情が強く滲み出ている。
「沙弥佳」
俺がそう口にしたとき、掴んでいた手を思い切り振り払われた。
「その名前で呼ばないでっ」
ネオン街から漏れる光が暗闇のビルの中にかすかに差しこみ、その光が鋭くいった沙弥佳の表情を照らし出していた。眼を細くして俺を射抜いている。
「私、もう沙弥佳じゃないわ。あなたの妹じゃない」
続けざまに沙弥佳は、こちらが口を開く前に、二度とその名前で呼ばないでと釘刺すと、ぷいっとドアのほうへ向かって歩き出した。なんで、そんなことをいうんだ……。唐突に投げつけられた言葉に衝撃を受けながら、ドアに消えていく妹の後ろ姿を俺は、茫然と見つめていることしかできずにいた。

第９２章

砂埃にまみれた道が照り付ける太陽の熱をじりじりと照り返し、往来をいく人々の足取りを重くさせている。いくら慣れているとはいえ、浅黒い膚をした現地の人々にとってもこの暑さが平気というわけではないのだろう。

しかし、こちらからしてみれば、うだるような暑さもいいところで、まるで灼熱地獄の中に放りこまれた気になるほどの暑さだった。いや、この表現は適切とはいえない。灼熱地獄ならば、こんなにまで湿気を感じることなど有り得ない。

いい加減、大して面白みもない周辺の景色に飽きてきた俺は、顔をあげて店の様子を眺めた。特別なにかあるというわけでもないが、先進国家にはない、これでも十分綺麗にしてるんだと暗に自己主張している雰囲気を感じられる薄汚い店内は、いくらか物珍しさを覚えるのだ。

店内は、日本の都市部なんかでは今どき見ることができないほどの古さを誇っていて、剥き出しのコンクリートの壁と床になんとなく無造作っぽくもあるが等間隔に置かれたテーブルと椅子。当然それらも年代物で、あちこちにガタがきているものばかりだ。

今座るこの椅子にしても例外ではなく、上体を少し動かすだけでギシギシと今にも壊れそうな錆び付いた音を響かせて、座る人間を落ち着かせることはない。

もしかしたらこれらの椅子やテーブルも、何十年前にはそれこそ日本の大衆食堂なんかで活躍していたのかもしれない。この国には、先進国家、地域的にとりわけ日本から送られてきた、お古の輸入品なんかが当たり前として庶民の間では流用されているためだ。

俺は目の前に出されているウイスキーコークを取り、けだるげにそいつを口にした。普段ならストレートで飲むところをカクテルで

飲まなければ、どうかなってしまうほどに暑苦しい。
「それにしても暑いな」
向かって右斜め前のカウンターに居座った男が、誰にでもなくそう口にした。
「全くだ。だが、これがこの国の普通らしい」
相槌を打って俺がいうと、男は顔をしかめて見せながら肩をすくめる。このうだるような暑さが普通であれ異常であれどうにもできないのだから、そんなリアクションをとる以外にない。
けれども男のいう通り、頭がどうにかなってしまうほどクソ暑いこの国の夏を体感してみると、そんなぼやきの一つや二つ出るのも当然というものだ。男の前では口にしてはいないが、俺も何度といわずつぶやいている。それほどまでに、ここは暑かった。この暑さは日本の暑さと同質のタイプだが、湿度は日本のそれとは比べ物にならない。
そろそろ時間的にスコールがきてもおかしくないが、開放されたテラスから空を様子を見る限りではそれらしい雰囲気はしない。スコールがきたときは涼しいけれども、終わると強い湿気が残るせいで、べたつく強烈な暑さがあとを引くので一概に嬉しいものともいえないが。もっとも、旅行者である俺の意識と地元民の意識との差はある。彼らにとってはやはり、この暑さは普通なのだろう。
「以前、日本に住んでいたことがあったからあの国の暑さも知っているが、ここらの暑さはそれ以上だな。アメリカが戦争に負けたのも頷ける」
くつくつと、額にじんわりと汗をにじませ皮肉気に笑う青年に、かもな、と唇の端を吊り上げながら肩をすくめ返した。青年のいう戦争とは、ベトナム戦争のことだろう。あの戦争に勝ち負けもあったものではないのだろうが、勝ちにこどわるアメリカが勝てなかったという歴史的事実は間違いなく、撤退せざるをえなくなったことは向こうの歴史書にすら敗北という二文字が記されているのだ。
同じ国と戦争をしたにも関わらず、本土決戦を叫びながら、いざ

上陸されるや、たった一発の銃弾だって浴びせることなく敗北した日本と、国際世論の批難という追い風があったこともあるが、撤退を余儀なくさせるだけでなく民間人も総出となって戦い、事実上の勝利を得たベトナム。

しかし戦後、大きな経済発展で世界の経済大国にまでのし上がった日本と、アメリカを退けたけれども、いまだ発展途上国であるベトナム。俺は青年と会話をしながら、そんな国の人々を尊敬と畏敬の念を抱きつつ、どこか複雑な気持ちで眺めていた。

「ところで、君はいつもここでだらだらと過ごしているけど、仕事はいいのかい？」

「ああ、別に構わないんだ。仕事とはいったが、別になにかするわけでもない……体のいい左遷みたいなものかな」

自嘲気味に笑う俺に、再び青年が肩をすくめた。当然だろう。どこの国でも、左遷されるなどよほどのことに違いなく、彼も心中で察したのだ。もっとも、左遷など嘘っぱちもいいところで、実際には違う。仕事をしようにも下地がそろわない中では、動きたいにも動けないというのが本当のところだった。けれども、いい加減なんらかのアクションがあってもいいはずなのだが……。

「しかし考えようによっては、このベトナムという国は多くの可能性を秘めている。もしかすると、なにかビジネスチャンスがあるかもしれない」

青年の言葉を受け流すように頷く。確かに発展途上国というのは先進国にはないものをもっているので、そいつをうまく見極めることができれば大きなビジネスに繋がらないともいえない。だが残念なことに、俺にはどうしても一生かけても使い切れないほどの金になど、これっぽっちも興味が持てない。金なんてものは必要な分だけ稼ぎ、必要な分を使う……これで十分なのだ。

ましてや、自分の職業がどうしようもない糞みたいなものであれば、なおのことだ。なにより、たかだか紙でできた印刷物なんかのためだけに生きるなんて、どうにも我慢ならなかった。それだけが

人生の取柄になるだなんて、人間としての価値がないように思えて仕方ない。俺には名声や名誉、富だとかといった類のものには、なんら価値を見いだせない。

まぁ、これは俺の持論なんであって、金を稼ぎまくりたいという奴は好きにすればいい。どう理屈をこねようが今現在、この世界で金というものは生きていく上で必需品であることは疑いえないものなのだから、ビジネスをものにするという奴は、今の世の法則的には正しいこととも言い換えることができる。

「そういう君こそ仕事はいいのか」

「うーん、そうしたいのは山々なんだが交渉の余地がなくてね、なかなか交渉がうまくいかない。なにかうまい交渉の手段はないかと探してはいるんだが……」

俺に反問され、目の前のカナダ人青年は言葉を濁した。言う通り、昨日も俺がこのカフェでだらだらと過ごしているときも、街の中をさ迷っていたのを見かけた。このジョージ・ルイスと名乗ったカナダ人青年は、フリーのカメラマンを生業としていて取材のため、カナダからわざわざこんな糞暑い時期に東南アジアはベトナムまでやってきたという。

それだけならまだしも、このジョージは飛び級で院にまでいき、おまけに博士号まで取得しておきながらフリーのカメラマンなどという、決して身入りの良くない職業を選んだ変わり種だった。暇つぶしに取材というのがどんなものなのか好奇心からそれとなく訊ねてはみたものの、適当にはぐらかされてしまった。まぁ、こちらとしてもそれらしい嘘を並べ立てているのでお互い様であるが、いまひとつ釈然としない。

あるいは、フリーのカメラマンということでつい騙されやすいが、中にはそれを適当な理由に、実際には冒険することを生きがいにするようなタイプがいると聞いたことがあるので、ジョージはもしかするとこういったタイプのカメラマンなのかもしれない。人にいってしまうと、頭のおかしいやつだと思われることもあるようなこと

を追っている連中だったりもして、あまり口外にはしたくないという可能性もある。

まだ三〇にもなっていないジョージとは、ほんの二日前に知り合ったばかりだがどこかウマが合うのか、お互い程良い距離感を保てるのも好感がもてる。けれども、この街……村といったほうが正確な表現であろうここに、なんの目的があって訪れているのか気にならないわけでもなかった。

特に目を引くような建造物などないし、都市部には必ずといっていいほどにある繁華街や歓楽街があるわけでもない。先進国の人間の欲望を満たしてくれそうな娯楽など、この村には存在していないのだ。

まず遊ぶための店を開設するための資金、なんていう考えがまずなく、電気自体がまだ高級な”商品”なのだ。近年になってようやく電気を村中に通すことができたらしいが、それもあくまで生活のためといった感じで、テレビなんて高価な物はここらにはほとんど流通していない。日本ではボロもいいところのテレビも、ここでは何百万もする高級車と同等の価値がするほどで、住民のほとんどが一日一ドル未満の生活を強いられているのでは、それも致し方ない。

住民の収入も海に面しているというだけあって、家族を支える父親の職業は漁師らしい。漁師ともなると当然朝は早く、夜遅くまでテレビなど見ることの必要性はもちろん、遊ぶという通念がないのは当たり前ということになっても驚くことはないだろう。なんせ、遊ぶことを断ち切って働いているにも関わらず、家族みんなが一日一ドル未満の生活をしているというのだから。

こんな古めかしく、寂れた感のする南ベトナムの田舎町にやってきたのは、一〇日ほど前のことだった。はじめは南シナ海に面したベトナムの田舎町ということで、少しは何か気を紛らわすことができそうなものもあるかと思ったのに、期待は見事に裏切られた。それどころか夜も九時を過ぎる頃には人通りがほとんどなくなってしまうのだ。当然街灯なんてものはほとんど未整備で、集落があつま

っている場所に裸電球の街灯が数本備え付けられている程度だ。
俺は小さなため息をついて、手にしたグラスに入ったウィスキーコークを一気に喉の奥に流し込む。暑さに氷は溶けてしまい、味は薄っぺらくなっている。そのせいか、後味も中途半端に味気なくなっていた。
グラスをカウンターテーブルに置き、考える。いい加減、こんな片田舎にこもるのも飽きている。今晩まで待ってなんのアクションもないようであれば、さすがに自分から動くつもりだった。いくら仕事で相手の反応を待つといえど、限度があるというものだ。こうしている間にも、事態は刻一刻と変化しているかもしれない。
二週間ほど前のことだ。ドッグと名づけられた二人組のスパイの片割れと出会いから、自身を取り巻く状況が急激に変化した。もっといえば、武田を追うべく行動していたところ、結果としてそうなったにすぎないが。
中でも一番の変化は俺を驚愕させるにふさわしいもので、スパイの女というのがあろうことか、俺が捜し続けていた妹である沙弥佳だったのだ。それも、とても俺の知る沙弥佳とは同一人物と思えないほどの変化をしていたという、おまけつきでだ。
俺は話すことがなくなり黙り込んだ青年を尻目に、この二週間ばかしのことを苦々しく思い出していた。
「まぁいい。それであんたが俺を、わざわざこんなところに連れてきた理由ってのをいい加減教えてもらいたいね。あんたのことだ、単にそれだけの理由でこんなところに連れてきたわけじゃぁないだろう」
俺はぶっきらぼうに言いそうになるのを抑え、なるべく冷静にそういった。武田は俺にとって敵といって間違いないが、だからといって、ここで敵意丸出しで噛み付くわけにもいかない。こいつの目的がなんなのか、それくらいは知っておくべきだ。
「本来なら君に任せるべきではない仕事だ。この点では不本意だが……君の今の立場は、ミスター・ベーアとその組織の一員であると

同時に、私が雇った殺し屋でもある。そんな君だからこそ、今回は話をするつもりはなかったんだがね」

「御託はいいから、さっさといいな」

俺に話はあるがしたくはない。そんな心情を強調する武田の言葉を、これ以上聞きたくはないと制しつつ先を促した。俺の態度にため息をつきながら、武田は仕方なくといった具合に語りだした。

「ここのところ、ミスター・ベーアの尖兵が東南アジアに出没しているという情報をキャッチした」

「東南アジア？」

「そうだ。東南アジアといったのは、国家も関係なしに活動しているらしいという意味合いだ。どこが拠点なのか、私には今のところ見当はついていない。

しかしだ。これに伴って、すでに現地の情報員にそれとなく探らせてある。そこでわかったのは、今現在その尖兵はシンガポールと南ベトナムを中心に活動しているということだった。この情報員は部下の一人が現地での活動のために雇った人員であるため、さほどの実戦訓練を受けていない。本格的な諜報活動を行うためには、その筋の人間でなくては駄目なのだ。

それで今回白羽の矢が立ったのが、再び君だったというわけだな」

「なるほどな。だが、諜報活動のプロが欲しいんであれば、わざわざ俺をこんなところにまで連れてくる必要はないはずだぜ。あんたのところには、そんな連中がごろごろいるだろう。なんだって俺なんだ」

「もちろん、君がミスター・ベーアの組織の一員であるというのが理由だよ。そして、組織というものにあまり捉われることなく、動き続けているような君がね」

含みのある口調で、ニヤリと気に入らない笑みを浮かべる武田。つまり俺に、雇われの殺し屋ではなく本格的なスパイになれということらしい。

全く、本当に気に食わない野郎だ。筋書きから、まずミスター・

ベーアの情報員にうまく接触し、そいつから活動の理由をを聞き出せということなのだ。もしこれがミスター・ベーアの耳に入ろうものなら、やっこさんは目の色を変えて俺に殺し屋を差し向けるに違いない。武田はどうしたって、俺を窮地に追い込もうとしていることが見え見えではないか。

俺は遠慮することなくそういうと、そんなことはお見通しだといわんばかりに続ける。

「ふふ、君ならそういうと思ったよ。ところで、君は渡邉綾子という女性を知っているね」

武田の口から、予想だにしない人物の名が飛び出した。もちろん知っている。むしろ知り過ぎているともいっていい。俺の周りの人間をどういう理由か始末をつけていった武田のことだから、最悪、彼女のことを知らないとはいえないにしても、どうして今ここで彼女の名前が出るのか……。とんでもなく嫌な予感がする。

「彼女の父、渡邉政志という人物も知っているはずだ。この渡邉政志が現在、シンガポールにいる」

武田の説明によれば、相も変わらず仕事で世界中を駆け巡っているようだが今回の仕事は、少しばかし特別な事情があるという。

渡辺産業株式会社の社長で綾子ちゃんの父親でもある渡邉政志は、昔綾子ちゃんがいっていたように渡邉の家に婿という形で、綾子ちゃんの母親にあたる麻里子と結婚、自身の興した渡辺産業を麻里子の父を大株主として迎え入れた。麻里子の父は当時、すでに財界では黒幕の一人といっていいほどの人物で、まだ若く野心をもった政志に対して優秀なビジネスパートナーとして見ており、政志もまた、義父のことを同じように見ていたという。

もともとは工作機やその部品を作る一メーカーにすぎなかった渡辺産業は、二人の結婚の前からかなりの成長を示していたがこの頃から急激な成長を遂げ、ついには海外進出を果たせるほどの企業となった。当然バックには、義父の存在があったことは確実で、この頃から新しい事業としてエネルギー産業界への参入も果たし、今と

なっては主な取引先は世界に名だたる企業や機関もあるというのだから、政志の手腕は確かなものといっていいだろう。

エネルギー産業界は石油に代わる次世代のエネルギーの開発と供給を主な事業として行っているわけで、赴くということは、その土地に何かしらのエネルギー資源があるのは疑いない。問題はそれがなんなのかだ。武田が続ける。

「シンガポールという国にとって一番の死活問題は、常に水だ。これはシンガポールに限ったことではないが、高低差のない地域ではよほど大きな河川でもない限り、水の確保は難しい。生活用であればまだなんとかできるにしても、飲用水ともなると、時にそれをめぐって小競り合いが起きることすらあるほどだ。

マレーシアとの国境にあるジョホール海峡には、マレーシアから原水を引くことのできる超大型のパイプを建設し、国内の水を確保している。もちろん、これだけでは足りないから他国からも水を輸入しているわけだな。あの国が世界でも有数の港街であることが、それを可能にしてるのだ」

「……つまりあんたは、渡邉政志がシンガポールでは枯渇問題である、水という必要不可欠の資源をどうやって独占しようとしているのかを探らせようってわけか。そして、なぜそこにミスター・ベーアの組織が絡んでくるのか……あんたはそいつを探らせたいんだ。そうだろう」

「話が早くて助かるよ。ただ、少しばかり違う。彼がやろうとしていることはわかっているのだ。君にはそれを阻止してもらいたいんだ」

「阻止だって」

「そうだ。そのためにまず、桜井義人（さくらいよしと）という人物に会え。今回の任務の是非に関わってくる人物だ。詳しくは現地の情報員から聞いた方がいいだろう」

どうやらこの桜井義人は仕事で世界中を飛び回っている人物だということと、その中でなにか重要なものを掴んでいるらしいことしか

今のところはわかっていない。

重々しく頷いた武田はさらなる説明を続けた。どうもミスター・ベーアはシンガポールを経由して、ある実験の下準備をしているという。実験というのは考えるまでもなく、例のタイムワープの実験だ。

真田によって行われていたTビルでの実験を引き継ぎ、さらなる飛躍をさせつつあるミスター・ベーアは実験場として、どういうわけかシンガポールに定めたらしい。つまり今回俺が選ばれた理由は、Tビルでの実験を阻止したことのある俺の仕事を評価しつの抜擢といったところか。たとえそいつが、意図したものであったわけではなくとも。

だが俺は、ただそんな理由だけで武田の作戦に手を貸したわけではない。というのも今回の作戦に参加するのが、なんの因果か、マリア……妹である沙弥佳だというのだ。俺としては、これだけで今回の作戦に手を貸すには十分な理由だ。つい何時間か前に顔を合わせて以来あっていないし、おまけにまともな会話すらしていない。自分の中に、どうしようもないわだかまりがあって仕方なかったのだ。

もう一度、きちんとあいつと会って話をしたい。ただ一つ、こんな理由だけが俺をつき動かした。漠然としているけども、この機を逃してしまえば、もう二度とあいつとは会えなくなるような、そんな予感もあった。昔から変に予感が当たってきたように思う俺にとって、そう感じたのであればそれに従わざるを得ない。そんな理由だけで俺はこのベトナムにまでやってきたのである。

作戦には、現地にいる情報員からの指示で動けという武田の言葉を鵜呑みにしてからというもの、早二週間日ほどが過ぎていた。日本から香港、香港からハノイを経由する形でベトナムに潜入した。そこからは若いビジネスマンを装い、この南ベトナムの田舎町まで陸路で三日かけてここまでたどり着いたのである。それから一週間以上も無駄に滞在している計算になる。

「そういえば、今日は村の漁業祭らしい」
なんとなく重い空気になったのを察してか、ジョージがそう切り出した。よほど暇を持て余しているのかもしれない。
「漁業祭」
「ああ。大漁を願って、海の神に祈りを捧げる土着の信仰みたいなものだろう。君の国は当然、僕の国やヨーロッパにも、そうした儀式はどこにでもある」
いわれてみれば、住民たちの活動も夏祭りかなにかを前にした、なんともいいえぬワクワクさせる躍動に似たものを感じなくもない。こんな娯楽もない寂れた漁村であれば、なおさらだろう。
「あんたにはうってつけのお祭りじゃぁないのか」
「それはそうなんだが……」
再び言葉を濁した青年から視線を外すと、遠く海のかなたに太陽が沈もうとしているところだった。今日も夕立のくる気配がないことを悟ると、ジョージはおもむろに椅子から立ち上がり、軽く背伸びし語りかける。
「ここにこうして蹲っているのにももう飽きたから、なんだったらどうだい。少しいってみないか」
そう促された俺は少し考えたあとに頷き、立ち上がる。現地の情報員とやらも日本人の工作員が訪れるということは知らされているはずだ。こんな小さな田舎街にある宿はここ一軒しかないうえ、日本人も俺一人だけとあれば見間違うこともあるまい。もし何かあったとしても、すぐに見つけることが可能だろう。俺はこう考えて、青年の提案にのることにした。
「いいぜ。確かにこんなとこに何日もいたら気が狂っちまいそうだ」
「決まりだな」
ジョージの提案で街に繰り出した俺は、大して何かあるというわけでもない小さな村の目抜き通りを案内されるままに移動していった。
「なにかあるわけでもないが、この手の雰囲気は悪くないだろ」

「ああ。祭りなんていつ以来かな」

ジョージの説明では、祭りは前夜祭となる今日から明日、明後日の真夜中まで行われ、日の出をもって終了ということになるらしい。お世辞に洗練されているとは言い難い文化圏では、祭りとは一日もしくは長くて二日といったところが普通だというが、その点では丸二日、足掛け三日になる祭というのはやや特異な例だという。

いわれてみれば、日本の祭りも大半が一日か二日で終わることを考えれば、なるほど、確かに長丁場といってもおかしくはない。特にヨーロッパでは、キリスト教という宗教に合わせていることから、日本ほど盛んに祭りは行われないため、そうした観点からも、ジョージにとってはこういった祭りは興味の対象なのかもしれない。

「見ろよ、櫓が建ってる。昨日まではなかったんだが」

村の中央にあたる広場には、日本の祭りでもよく見る櫓とおぼしきものが建てられていた。高さは一〇メートル近くになるだろう櫓は、四方四隅から太い丸太が組まれ、その上には音頭をとるためのものなのか、民族楽器が置かれてある。もしあの民族楽器が太鼓であれば、まさしく日本の祭りそのものといってもいいほどだ。

しかし日本における祭りの文化は遡れば、中国は当然、古代インドから古代東南アジアのそれから影響受けているといわれているらしいので、似ているのも当たり前といえば当たり前だ。日本が奈良や京都に都だなんだとやっていた頃、この東南アジアにはすでにきちんとした王権制による国家が存在しており、国力という点においても当時の日本、大和の国よりも強大だった。

むしろ、そういった文化が中国を経由して日本列島にも入ってきたといったほうが正確だろう。当然、こうした祭りの文化が似通っていたとしても、なんら不自然なことはない。

案内するとはいいながらジョージは、早速、自国では拝めることのできない櫓を写真に収め始め、だんだんと熱が入ってきたのか俺のことはお構いなしに人込みの中へ、シャッターを切りながら紛れ込んでいった。

俺も特に気にすることなく、祭り特有の雰囲気にあてられて集まってくる住民たちと雑踏の中を適当に進んだ。地元の小売店の店主なんかが店から引っ張りだしてきたテントを乱雑に張り、臨時の天幕を作って商売に精をだしている。なるほど。ますます祭りという雰囲気が強いというものだ。

あまり広いとはいえない広場は、一〇分とかからずに一巡りすることができた。ジョージはそんな広場の中でも見つけることはできなかったが、代わりにおかしな屋台を見つけた。

「これ、日本製か」

「そうだよ」

発展途上国の田舎や裏通りなんかでも見られる、どこから集めてきたのか定かでない中古の輸入雑貨屋といってもいい趣のある屋台で、日本製らしい壊れかけのオーディオ機器や携帯、誰が買うのか、まともに電気すら通ってない村には似つかわしくないノートパソコンすら陳列されてある。

「これ安いよ」

そういって店主が差し出してきたのは、ボロボロの携帯電話だった。いらないという俺の意思など知ったことではないといわんばかりの勢いで、店主が携帯の電池は最新だというニュアンスのジェスチャーで早口にまくし立てる。

それでも買わない俺に業を煮やしたのか、ついにはタダでもいいといっておんぼろの携帯を押し付けてきた。そこまでされては仕方なく携帯を受け取る。

見るものもなくなったところで、俺は一人、宿に戻って部屋の木編み椅子に腰かける。勢い良く腰かけたため、先ほどもらってズボンに押し込めていたおんぼろ携帯が、床に落ちて乾いた音を立てた。

落ちたことで電池を保護するカバーが外れ、同時に電池も外れて落ちていた。全く、どこから拾ってきたのか知らないが、よくこんなものを商品として売る気になったものだと、つくづく感心してしまう。

どうせ使わないのだから、そのままにしておいても良かったのだけども、なんとなく手持ち無沙汰になっていたこともあり、携帯と電池をけだるげに取り上げたときだった。

「……気づかなかったぜ」

電池の裏側には、小さく折り畳まれた白い紙切れが挟まっていたのだ。先ほど店主がわざわざ電池を見せてくれた際にはこんな紙はなかったことから、はめ直すときに紙を仕込んだということだろう。つまり、あの店主こそが武田のいっていた現地の情報員ということになる。

俺は紙を広げ、中に書かれてある文章を読んだ。それは、間違いなく武田の野郎が紛れ込ませた情報員からの指令書だった。

『午前零時、漁港外れの廃屋にて』

紙には短く、そう書かれていた。どうにも武田の野郎は、俺にたいして警戒心を抱いており、詳しくはその場になるまで知らせたくないような、そんな気がしてならない。それほどにこの文面からは簡潔にしか書かれておらず、これではまるで学生同士の集合をかけるメールのそれと同じではないか。

それはともかく、漁港の廃屋といえば村の西はずれにあたる場所に、朽ちかけた船着き小屋があったのを確認している。初見で、なんとなく秘密の隠れ家にはもってこいといった感じの建屋だったので覚えがあった。

俺は、部屋に置かれた動いてはいるが正確に時を刻んでいるのかわからない時計に目をやり、時刻を確認する。午後の八時になろうという頃で、指定された時刻まで、あと四時間といったところだ。

そうなると話は早い。時間までのあいだ、しばし睡眠をとることにする。それと食事もとっておいたほうがいいだろう。大味で雑味な料理は、お世辞にうまいとは言い難く、普段なら無理に食べる気にもならないが今後きちんと食事をできるとはいえない。体力の温存は絶対に必要だ。

俺は頷くとすぐに椅子を立ち、むっすり顔をしたバーテン兼シェ

フの待つカウンターへ下りていった。

遠くで悲鳴のような声があがった気がして目が覚める。寝起きにぼんやりと古ぼけた時計に目をやると時刻は二三時半、指定された時刻まで残り三〇分だ。なんとなく外から気ぜわしい気配を感じて窓のほうへ顔を向けた俺は、怪訝に眉をひそめた。

（なにかおかしい）

直感した俺は寝そべるベッドから跳ね起き、窓を押し開ける。

「なんだ、あれは」

東の村はずれの辺りが濛々と煙をあげ、赤く不気味に森の木々が燃え盛っているのだ。困惑気味に下の土と砂だらけの目抜き通りを向くと、何人もの村人たちが恐怖に満ちた顔で叫び声をあげながら、村の西のほうへと逃げるように走り去っていく。表情や悲鳴のあがる声、それに指差す方向から、恐慌の原因が森の火災であることは明白だ。

しかし、それだけなら俺もさほど気にはしなかった。妙だと思ったのは、彼らが舞い上がる炎を放って反対方向へ逃げているということだ。普通、自分の村で火災が起きたならば、自分たちでなんとかしようとするものではないのか……ここから見ても森全体に拡がりつつある火の手を恐れ逃げ惑うのも理解できるが、誰ひとりとして森のほうへは行かないのが気になった。

すると部屋のドアが突然、勢いよく開け放たれる。

「九鬼っ、やばいぞ、海賊だ」

勢いよく部屋に入ってきたジョージが、蒼白な表情で叫ぶ。

「海賊」

俺は瞬時に現状と村人たちの行動や表情の意味を理解した。どう考えても普段、まるで火の気のない場所から火があがるのは不自然だった。となると当然、人為的それらが行われたと考える。村人が

故意に危険なことをするはずもないので、別の第三者がなんらかの理由で火を放ったのが妥当だ。

そしてそれが海賊だというなら、すぐにそれらの答えが導き出される。東南アジアは海賊がいまだに現役で存在する地域の一つで、東南アジアの国々にとっては、慢性的な問題として度々取り上げられている。近年は別ルートを確保されたという理由で鳴りを潜めてはいたそうだが、こんな時に限って連中は活動を始めたらしい。

それにしても、カンボジアにもほど近いこんな場所に、よくもまあ姿を見せられたものだ。大抵はシンガポールやマレーシア、それにインドネシアの国境付近の海峡を主な活動域にしているはずの海賊なのに、どうしてこんなところまできたのか。しかも今夜、俺が活動を起こそうという日に限ってだ。

これはなにか仕組まれているのではないか……そんな気になってくる。武田の先兵が重要な任務を知らせることなく接触を図ってきたことからも、そう思っても仕方ないというものだろう。偶然にしたって、これからの行動に面倒な存在になることは目に見えている。

俺は必要最低限の道具を掴んで身につけると、早くしろと急かすジョージの背中を追って部屋を飛び出た。階段を駆け下り、人気のないカフェテラスを抜けて表に出る。人家に遮られてはいるが、東の空が黒い夜空に濃い橙色が溶け込んでいっている。想像以上に火の回りが速いのかもしれない。

逃げまどう人々に混じって俺たちも村の西のほうへ向かって駆ける。ジョージの話では西にちょっとした丘があり、住民たちはそこへ逃げているはずだという。俺の前をいくジョージも、そこへ行くつもりなのだ。西へ向かうという点は、むしろ好都合だ。このまま連中に紛れて途中まで逃げつつ、誤った判断をしたふりをして廃屋まで向かえばいい。

そう頭で思い浮かべて走る俺の前方から、悲鳴があがる。ジョージが声を聞いてすぐに立ち止まった。その視線の先に、なにやら不穏な人影を見つけたのだ。

「なんてこった」
舌打ちするジョージのつぶやきはごもっともで、俺たちの前を走っていた村人の前には前時代的なサーベルや槍、それにもう製造されていない何十年も前に生産中止になった骨董銃なんかを手にした男たちが現れたのだ。闇夜に紛れ込みやすい工夫をするつもりがあってしているわけでもないのだろうが、汚い身なりをしている三人の男は、黒ずんだボロを何枚も身につけて耳障りな下卑た笑い声をあげている。間違いない。連中は海賊だ。
三人がじりじりと前方の村人たちへにじみ寄ると、一気に飛びかかるように村人たちへと襲いかかる。振り下ろされる凶器に、逃げようとした村人が短い悲鳴と呻き声を漏らしながら崩れ落ちる。よくよく見ると、その何メートルか先にも村人らしい人間が転がっていた。当然、もう息はしていないだろう。
「なんだぁ？　こんなところに外国人がいるぜ」
「白人と……もう一人は日本人か」
「こいつは運がいい。殺すなよ、こいつらはいい金になる」
勝手なことをいってくれる。品のない会話で、肌の色からてっきり東南アジア現地の人間で、民族の言葉しか喋れないかと思ったが英語をしゃべった。どうやら、俺たちを捕えて金づるにするつもりらしい。捕まえて脅せば、もしかしたらそれぞれの国に身代金を要求できるかもしれないと踏んだのだろう。国がたとえ脅しに乗らなかったとしても、被害者の家族が要求を飲まないともいえない。海賊やなんかにとっては、おいしい思いをすることができる算段である。
「どうするんだ九鬼」
ジョージがやや不安げにこちらに振った。もっと脅えていると思いきや、表情を見る限りではさほどでもない。世界を渡り歩くフリーのカメラマンという職業も伊達ではないということなのか、なかなかに根性が座っているようで逆にこちらも冷静にさせられる。
「力づくで切り抜けるしかないな」

連中はマフィアなんかと違って、決して理論なんかでは動かない。全ては自分の感情のおもむくままに行動している輩なのだ。これが船長クラスになればまた少しは事情が違ってくるものだが、こんな下っ端連中にこちらの道理が通用するはずがない。努めて冷静にいう俺の態度を察したからでもないのだろうが、ジョージもそれを理解して小さく頷く。

こちらのそんな態度が伝わって、連中から品のない笑みが消えた。両者のあいだを一発触発の空気が流れる。

俺の二歩ほど前方に位置するジョージがかすかに足を後ろに動かした。海賊の一人がそれを合図に一気にジョージへと襲いかかる。しかし合図にしたのは奴だけでなく、俺にしても同じだった。向こうが飛びかかろうとしてきた瞬間とほぼ同時に、俺の身体もそれに反応したのだ。

襲いかかる海賊がジョージの目前にやってきたとき、俺はすでに奴めがけて蹴りを放っていた。足の裏に鈍くめり込む感触があった。

「げっ」

当たったのは敵の脇腹で、蹴られた男は体をくの字に曲げながら横に吹っ飛ぶ。すかさず、目の前に迫っていた次の男の振り下ろされるサーベルから身をかわし、ついでに相手の太ももへ掌底を喰らわした。痛みに一瞬ひるんだのを見逃さず、二撃目を顔面に思い切り叩き込む。鼻の軟骨と前歯の折れる感覚がなんともいえない感触の悪さを掌に伝える。

仲間二人がほんのわずかな時間のうちにやられるのを見た最後の男は、奇声を発しながら襲いかかる。突き出してくる前時代的な銃の先に小剣が取り付けられているのを見て、本能的に身を横の投げだしていた。いくら夜目がきくからといっても、まさか小剣が取り付けられているなどとは思わなかった。もしかしたら仲間がやられていくのを尻目に、素早く取り付けたとも限らない。

転げた俺はすぐに立ちあがろうとするも、立ちあがろうとした目と鼻の先には小剣の穂先が向けられていた。あまりにも無駄のない

相手の行動は、転げた先を見計らっていたのかもしれない。だとすれば、この最後の男はなかなかに戦い慣れているとみて間違いない。

危険を察知して横に転げたのはいいが、それを計算してか、目の前に突き付けられた小剣の穂先を前にした俺にはどうしようもなかった。男の動きを見れば、とても隙をついて小剣銃を蹴りあげるなどの行動を取ることはできそうにない。銃にこちらのつま先が当たる前に、小剣が俺の顔面につきたてられているのは目に見えている。

「なかなかにいい動きをする奴だが、こっちのほうが上手だったな。覚悟しな」

そういった男が突然妙な呻き声をあげて、その場に崩れ落ちそうになった。前のめりに崩れそうになった男の腹を蹴りつける。これがとどめになったことは確実だった。

だが一体どうして前のめりに崩れたのかと見上げた先には、ジョージが背後から男めがけて思い切り叩きのめしたためだというのが判った。その手には最初の男が持っていた槍があり、柄でもって男の後頭部あたりをぶつけたのだろう。こうした暴力に慣れているのかはわからないけれども、どさくさに紛れてよくぞまぁやってくれたものだ。

「悪いな。助かった」

「いや……それにしても、たった一瞬で荒くれ者二人を叩きのめすなんて……。なにか武道をやってるのか。いや、今のは武道というよりもっと……実戦武術に近い、のか」

他人のとった行動のほうに意識がいっていて、自分のとった行動もなかなかできないものなのに冷静になりきれてないらしい。俺は立ちあがり、茫然気味に尋ねるジョージに肩をすくめて見せた。基本的なものとそれに付随する形で応用的なものをいくつかやっている程度だが、鬼教官からは筋がよく見込みがあるといわれたものだ。

適当に受け答えながら連中がやってきた道の方向に目をやり、襲ってくる敵はいないか確認する。走ってきた村のほうからは時折悲鳴や罵声が風にのって聞こえてくるが、目的の漁港からはそれらし

い声や物音はしてこない。今のところは大丈夫なようだ。多分、この連中は村を襲う本体とは別に住民たちを挟みうちにする形で動いた別動隊といったところだろう。たった三人しかいないところをみると、本体の数もそう多くはないかもしれない。

「とりあえず、あんたはひとまず村の住民たちと一緒に逃げて避難した方がいい」

「君はどうするんだ」

「逃げたいのはやまやまなんだが、仕事の都合もあってね。一度確認だけはしておきたいんだ。なに、目的の場所はそこだから、すぐに追いつくさ」

海沿いの暗い雑木林の中をつっきるようにできた道の先に視線をやりながら答えると、ジョージはそれを渋って一緒に逃げようといってきた。しかし、そんなわけにもいかない。海賊の急襲なんて思いもよらないアクシデントがあったとしても、工作員が予定を狂わせるはずがない。可能性がある限り、やるだけのことはやっておかないと余計に危険なことに巻き込まれかねないともいえないのだ。

まだなにか言いたげにしているジョージを尻目に俺は、海賊の男が持っていた小剣銃を手に漁港へ向かって走り出した。走る背中にジョージの視線を感じながら雑木林の中へと踏み入り、あっという間に雑木林の抜けた先にある漁港の外れにまで躍り出る。件の廃屋は抜けたところより左手にあり、暗い中であっても木材で組まれた屋根や壁が朽ちて、ところどころ穴が開いているのがわかる、みすぼらしい建屋だった。

素早く廃屋の戸口に背をつけるようやってくると、中の様子を窺う。すでに中では二人、こちらに背を向けてなにか作業している様が見えた。闇夜に紛れるために黒い衣服を身につけている。廃屋に行くよう指示されたのだから、当然連中がその関係者で間違いない。俺は音を立てないよう静かに中へと入る。

「きたぜ」

突然背後から話しかけられたにも関わらず、二人組はあまり驚く

様子もなくこちらを振り向いた。一人はご丁寧に片手に銃をつきつけている。これだけで二人組がこの手の道のプロであることは疑いえない。影しか見えない連中だが、浮かび上がったシルエットからは二人が男だということくらいはわかる。

「きたところ早速だが、あんたには今からこいつに乗って海にでてもらう」

そういって銃を持った男が銃口をはずしながら、今しがたまで用意していたらしい木製の舟のほうと、さらには戸口の反対側の壁が吹き抜けてそのまま海になっている、そちらも同時に促した。今、地元の漁師が乗るような小さな舟に乗って海に出るなど自殺行為も甚だしいのに、こいつらはそれを任務だからと急かした。

「あんたはこれから海に出て、海賊船に潜入してもらう。そこで、桜井義人（さくらいよしと）に会うんだ」

「桜井義人……一体どういう意味だ」

手短に説明されたことを整理すると、この桜井義人という人物は綾子ちゃんの父親である、渡邉政志の側近中の側近という人物らしい。確か武田の野郎はこの桜井が世界中を巡っているといっていたが、政志の側近だというのならそれも頷ける。そして二週間前、なぜ唐突に政志のことを口にしたのかもだ。

また、なぜこうも連絡が遅れたのかも同時に判明した。本来なら南ベトナムから情報員からの情報を経由し、そこからすぐにシンガポールに渡るはずだったのに、どうも渡邉政志の仕事に付き添ってシンガポールにいた桜井はそこで海賊に襲われたという。

これだけなら組織や武田の配下たちが気にも留めるようなことではないのだが、桜井は政志の仕事について管理しているというのだ。重要なデータかなにかも同時に奪われたからこそ、こんなにも連絡が遅れたわけだ。

政志は今現在、側近が急襲されたこともあってシンガポールの大使館にすがるように逃げ、そこで滞在しているという。大使館を通じて、事件を明るみにしないよう指示を出し、桜井の救出をミスタ

ー・ベーアに要請したわけだ。あのホテルでの関係から、政志がミスター・ベーア側の人間であることは間違いないだろう。そうでもなければ、日本人の拉致に世間に一切情報がないというのはおかしい。

「桜井の持つ資料を手に入れるためってわけだな」

「もう一つ。ミスター・ベーア側からのエージェントがもう一人、現地に向かったという情報がある。だが、すでに送られたエージェントとは面識がない可能性が高い」

みなまで言わせることなく頷いた。つまり、送られたエージェントよりも早く桜井義人を救出し、ミスター・ベーア側のエージェントになりすませということなのだ。渡邉政志とは一度顔を合わせてはいるが真紀との関係から、俺が目の前に現れたとしてもなんの疑問も抱かないはずだ。エージェント同士の面識がないのであれば、もってこいではないか。

なるほど、だからこそ武田は俺に任務を与えたというわけか。感情と仕事はきっちりと使い分けているのかもしれない。だからといって俺が奴に気を許すこともないが。

説明を受けているうちに、村のほうから聞こえてくる音が大きくなってきていた。海賊の奴らは、大したものがあるわけでもないこの村から、根こそぎ物品を奪っていくつもりなのだ。

「準備は整ってる。さあ」

促されるまでもなく素早く舟に身をおろし準備してあったオールを手にすると、遠くから爆音が響く。林や壁に遮られて衝撃こそないが、かなり大きい。連中、こんな田舎の村めがけて砲撃したのではあるまいか……そう考えたところで男二人が舟を蹴って海へと押し流す。この勢いを利用して、オールを持って静かにこぎ出した。全く、こんな状態で海のチンピラどもの巣窟に潜入させようだなんて、大した作戦ではないか。

第一、沙弥佳がこの作戦に参加すると聞いて受けることになったはずなのに、その肝心の沙弥佳とはなんの音沙汰もない。一体全体

どういうことなんだ。
　ぼやきたくて仕方ないところだけども仕方ない。とにかく俺は、上手く海賊船に潜入し、そこで桜井義人を救出したうえで重要なデータか資料だかを手に入れる。そしてシンガポールにいる政志と会うまでに、組織から新たに送られたというエージェントを始末する。それが今回、当面の任務ということになる。
　ミスター・ベーアの実験だとか武田の思惑だとかは実際のところどうでもいいが、こちらの将来のためには二人ともご退場願わなくてはならない。両者の思惑がぶつかるであろう今回の任務は、そんな両者を出し抜くにはもってこいといってもいい。
　大小の疑問渦巻く胸中、俺は一人、小舟を夜の海原へ大きく漕ぎ出した。この任務に沙弥佳が参加するという武田の発言が本当なら、どこかで必ず出会えるに違いない。とにかく、そのためにも海賊に拉致されたという桜井義人とうまく接触することを最優先するとしよう。

第９３章（前書き）

今回は二本立てになります。

第９３章

朽ちかけた船着き小屋を出て海原に漕ぎ出してからというもの、何十分経ったろう。二〇分か三〇分か……あるいは緊張の最中でアドレナリンが分泌されたことで、勝手にそう感じるだけで実際には一〇分と経っていないかもしれない。なんにしても、水をはねる音しかしない真っ暗な世界は不気味で、自分がむしろ異様に思えるほどだった。

先ほどまで聞こえた村を襲った悲劇を伝える悲鳴や襲撃音も、今は聞こえてこない。まだ村の東側で起きた森林の火災による煙が、遠く陸を靄でかすませている。地元には医者は当然、消防などの組織だったものはないため、あれほどの火を消し止めるには一日や二日では不可能かもしれない。

遠くの靄を眺めながら、オールで水面を叩く。一体どれだけ進めば目的の海賊船に突き当たるのか見当もつかない中、必死に漕ぐ必要もない。

なにより俺をが陰鬱にさせたのが霧だった。この辺りは気候が湿り気を帯びた温暖な地域なため、海面の低い温度との温度さによって空気中の水分が温められて一帯に霧を発生させる。このため日が沈むと水面が一気に冷やされ、結果、水上の温暖で湿った空気との温度摩擦により、すぐに霧が発生することになる。

これがこの辺りの海域を海賊がいまだに現役で活動させるに至る、一つの要因になっている。さらに、東南アジアというのは地域柄、まともに名前すらついていない島や無人島も数多く存在していることも、大きな理由に挙げられる。そのうちのどれかに、連中のアジトになる島があるだろうと推測されているのが現状だ。

いくらも進まないうちに、さらに深い霧があたりを覆うように出てきた。もはやこんな貧弱な小舟での航行は不能といって間違いな

く、地元の漁師ならば絶対に海に出ることはないレベルの濃さだ。こんな霧の中を航行できるのは、最新鋭のＧＰＳをつけた船でもない限り不可能だろう。

けれども、そのＧＰＳを持ってはいるがまともに海へ漕ぎ出したことのない人間では、無理な航行はやはり不可能だ。海上というのは陸と違い、想像以上に危険なものだと思って行動しなければ、進むのは当然、戻ることすら不可能になってしまうことすらあるのだ。それだけは絶対に勘弁願いたいので、ここはしばらくのあいだ様子見で、そこから進む方向を決めようというのが俺の思惑だった。

そうか。だから連中はこれに乗じて、あんな片田舎の村を襲ったのか。連中としても、わざわざ得るものの少ない村よりも、もうちょっと大きな漁港のある街を襲ったほうがいいに決まっている。しかし連中も、船を襲うにしろ街を襲うにしろ、急襲するタイミングというのはある。それがこの霧なのだ。

連中にも当然、航海士はいる。そいつが空気や風の状態を読み、そのうえでターゲットを決める。考えるまでもなく決めるのは船長だが。

こうなってくると、あまり動かないほうがいいという判断は間違っていないかもしれない。波の、風の動きに任せたほうが連中の船にぶち当たる確率が高い。奴らも、こんな霧深い夜の海を一人小舟に乗った外国人を目の当たりにすれば、好奇心で引き揚げようとするに違いない。どうすれば連中の船に乗り込めることができるか定かでない今、とにかくこれに賭けてみる以外に手はなさそうだ。

そう考えてオールを置いたところ、突如背後からゴンゴンと不気味な音をあげながらなにかが近づいてくるものがあった。こんな海上を今動いているものなど、前後の事情から考えても海賊どもの船くらいしかない。

「ようやくおでまし、というわけか」

霧のカーテンを切り裂くように現れたのは、俺の予想した船とはまるで違う鉄製の船で、矮小な小舟にそのでかい図体を誇示するか

のような巨大船だった。ここからでは甲板の上を見通すことはできず、連中が陸にあがるため、ないしは脱出用のボートが何隻か船の横っ腹にくくりつけてある。

こちらは波に流されるままに動いているだけにすぎないが、見たところ向こうも動いているようには見えず、また、動く気配もなさそうだ。捕まることを想定していたがもしかすると、うまく船内に入れるかもしれない。

とはいうものの、タラップは降りていないので船内に気付かれることなく潜入するのは至難の業だ。いや、そもそも潜入することそのものが難しい。なんとかならないものかと思案していると、向かって陸の方角からやかましい馬鹿騒ぎのする声が響いてくる。どうやら得物をしたがえ、海賊たちが戻ってきたらしい。

俺は手探りに、舟の中になにか使えそうなものはないかと探った。先ほどの二人がプロなら潜入するにいたって、最低限必要な道具を揃えていても不思議はない。むしろ、それらを揃えていないほうがおかしな話だ。

案の定、舟の中には鉤縄がおかれており、こいつを使えばなんとか船内への潜入ができそうだ。鉤縄など忍者でもない俺は使ったことないけども、似たよう道具は使ったことがあるのでなんとかなりそうではある。が、わざわざこいつをセレクトした理由は俺が日本人だからなのかと、思わず苦笑せざるをえなかった。

しかし鉤縄の長さはざっと七、八メートルといったところか、こいつが長いのか短いのかわからないけれども、どうやっても海上からでは甲板にまでは届きそうにない。どう見ても甲板までは一二、三メートルの高さはある。おまけに舟に乗っているとはいえ、こんな足場の悪い場所ではどれほどの長さがあったにしても、うまくかかるかわからない。

せめて、あと五、六メートル稼げれば……そう考えたとき、陸から戻ってきた連中が甲板のほうに向かって、舟を引き上げるよう叫ぶ。俺はこいつがチャンスだと思い、舟に転がっている防水袋を背

負い鉤縄を肩にかけると、ひっそりと海の中へと身を沈めた。海の水は思っているよりも冷たさがあるが夏の海とあって、どこか生温さもあった。

平泳ぎで連中の舟に近づいていき、あと数メートルというところで身を完全に海中に浸して進んだ。水の中は想像以上に真っ暗で、水を掻きわける自分の腕すらまともに見ることはできない。しかし、すぐに連中の早くしろという悲鳴にもにた怒声がして、真上に連中の乗る舟があるのだと気づいた。

水面から、そっと目の下まで頭を出すと案の定、すぐ目の前に舟の中腹があった。声から男が四人乗っていることが確認できる。真上に気がいっていて、誰一人としてこちらのほうに気づいている様子はない。俺は左肩にかけた鉤縄の先端を静かに舟の左右の中腹にかけると、直後に、舟が真上に引き上げられ始めた。

俺は舟底のでっぱりに右手で掴み、左手で縄をしっかりと持って海賊どもの乗った舟が引き上げられていくのと一緒に、真上へとあがっていった。舟の真下に宙ぶらりんのままという苦しい態勢だが、今は少しでも早く連中が船に上がるのを祈るしかない。舟の前と後ろの両方にかけられたロープが甲高く軋む摩擦音をさせるのを耳にすると、連中に変な重みに気づかれるのではないかと焦りはしたものの、男たちは今日の戦利品の話題にそんな様子は一切感じられない。

ようやく頭上に甲板の縁が見え始めた。思わず舟にかかった鉤縄をもつ左手に力をこめて体を安定させようとしてしまいたいところを必死に抑え、あと少しだといい聞かれながら目線の位置まで縁がくるのを待って右手を船の縁にかけた。すぐに、左肩にかかった縄の先端を横にある手すりの支柱に絡みつけ、縄に掴まる。足を船の横っ腹にやって態勢を安定させるとようやく一息つくことができた。

引き上げられていく舟にかかった鉤縄をうまく取り外し、そのまま下に放り投げる。これでいい。重労働にはなったが、まさか自分たちが引き上げられたのに混じって、俺が一緒に引き上げられたと

は気付く奴はいまい。あとは、連中が船の中に入っていったのを見計らって上にあがればいい。

しかし、こちらに気づくことがなかったのはよかったが、連中はいつまで経っても甲板の上で奪った戦利品の講釈を垂れているばかりで、一向に船内にはいる気配がない。いくら体力に自信のある俺でも、このままロープにぶら下がったままではあっという間に体力を消耗してしまう。早く消えろ……忌々しげにそう思ったところ、ようやく現場のリーダーらしき男の怒声が響いて、連中が船内へと引き揚げていった。

もう声がしなくなったのを確認してから、俺はロープを伝い甲板に出た。戦利品も全て船内に持っていったのが一目瞭然で、甲板にはそれらしいものは一切転がっていない。海の荒くれ者たちの船とあって、もっと汚いものだという先入観があったのだが、あがってみるとどうだ。それどころかほとんど汚れてはおらず、思っている以上に小奇麗にされているのが窺える。

想像とは違う船上の様子になにか疑わしい気持ちになりつつも、辺りを見て探る。声は当然、人の気配などこれっぽちもしない。俺は素早く船内への出入口へ移動すると、潮風にやられてからだろう、所々錆び付いて黒っぽくなった鉄扉のノブに手をかけゆっくりと開けた。

ギシギシと嫌な音を立てて開いた鉄扉の中は薄暗く、下に向かって階段が伸びている、ぼんやりとしてはいるが照明があり、それらが黒い配線のチューブで繋げられる形で等間隔に取り付けられてある。俺はするりと中に身体をやりこめ鉄扉を閉めると、音を立てないよう階段を降り始めた。面倒なことに、階段は金属製なのだ。

二〇段ほどの階段を下ったところで、一階フロアの廊下にぶちあたる。海賊船とは思えない白い壁に、左右に伸びる緑色をした廊下の先には、それぞれ出入口と同じ鉄扉があることが確認できた。意外な構造をした船は、もしかしたら船そのものが強奪品であるかもしれない。

はっきりといえるのは、この船がかつて日本密出国の際に乗り合わせたときの船なんかより、はるかに新しいということだ。そのうえ、あのときの船は世界でも最大級の巨大なタンカーであったけども、今回の船はそのときと比べるほどの大きさもなく探索はしやすい。

さて……とりあえず、どちらからいくか。構造上、おそらくはどちらにいっても先になにかしら部屋ないし、それに繋がる通路かなにかがあるのは間違いない。問題は、どこに桜井義人が囚われているかだ。それ次第で、今回の難易度は大きく変わるといっていい。

多分、一番下の階に囚われているはずだ。ここは海賊船、連中の現場におけるアジトといっても過言じゃない。日本人で自分たちよりも裕福であるのが確実そうな見なりをした桜井に対し、連中が抱くのはただの金づる程度の認識しかないだろう。

となると、自分たちよりの居住スペースよりも待遇のいい部屋に押し込めるだろうか。よほどの賓客であり、それを認識することのできる程度の教養があるならまだしも、そんなものはそこらの畜生にすら劣るような連中にあるはずがなく、桜井にそんな待遇を用意するはずもないだろう。

経緯がどうあれ、ここにきた以上は自分たちより下の身分である桜井を、同等の場所に押し込めることはしないに違いない。もっと劣悪な環境に身をおかせ、心理的に劣等感を満足させようとするのではないか。俺はこうした結論から、連中のいる場所よりも劣悪ないしは下の層にいると踏んだ。

俺はそう結論づけると向かって左、船の後方へと走り出した。後方部分には船の動力部となる機械や装置が置かれている。行動が限られる船内において劣悪な環境に該当するエリアといえば、これくらいしかない。動力部は推進力を与えるために取り付けられるスクリューの力を少しでも伝えやすくするよう、後方の下部にあるのが普通だ。

船後方へ通じる鉄扉を静かに開けると、扉の向こうは再び同じ

ような構造になった通路が続いていた。もし事故があったときのことを想定して少しでも水の侵入を防ぐため、フロアをいくつかのブロックに分けてある。脱出には少しばかし面倒ではあるが裏を返せば、連中の足止めにもなるかもしれないのだ。

ブロック分けされた通路を二つ三つと進んだところで、それまでとは違うブロックに出た。通路の半分あたりで、下のフロアへおりた階段が確認できたのである。その階段を降りた下のフロアは、どこかざわめきさを感じさせるフロアだった。間違いない。連中の簡易居住スペースとなるフロアだ。

金属製の吹き抜け式の階段では、同じフロアにいれば確実に音が響くのは確実だろうから、俺はここぞとばかりに慎重になって階段をおりる。ここで連中の居住スペースがあるとすれば、おそらく桜井が囚われているのはここの一つ下のフロアになるだろう。船の大きさからいっても、さらにそこから二つも三つもフロアがあるとは思えない。

細心の注意を払い階段を降り切ったとき、向こうから奴らが数人、馬鹿でかい声に下卑た言葉を口にして近づいてきている人影が確認できた。手近な物陰に隠れたところを、連中が気付かずに通り過ぎていく。物陰の隙間から、奴らの手に誰かが食べたあとの食器らしい器をもっているのを見逃さない。

そいつを見た瞬間、思わず唇を吊り上げていた。連中の休むスペースは上の階なので、わざわざこんな薄暗く小汚い場所で食事をとることはないだろう。では、誰の食べたあとなのか。考えるまでもない。こんなところにわざわざ食事をもっていかなければならない人物は、桜井義人以外にはいない。このことから俺の進んできたルートは、ほとんど間違っていないかったということになる。

連中が降りてきた階段をあがっていったのを見計らい、即座に奴らのやってきたほうへ向かって移動する。通路は大小の細々としたものが多く置かれてあるせいで、今のようにいざとなれば隠れる場所に困らないのはいいが移動には少々手がかかる。乱雑に置かれて

あるため、場合によっては通路を半ば塞ぐように置かれてあったりするのだ。

真っすぐに伸びた通路の先に、薄く汚れた白い鉄扉が見えた。中心線上に人の目線の高さに合わせた、丸い覗き穴もある。扉の向こうが部屋だとすれば、これほどに人を閉じ込めておくのに相応しい場所もあるまい。鉄扉の前にきて俺は、そっと覗き穴から向こうの様子を覗き見ると、思った通り一人の男が壁を背もたれに蹲って、うなだれている様子が見えた。何日も着替えていない薄汚れたYシャツの男、桜井義人に違いない。

一刻も早く、救出し船から脱出したい俺は、鉄扉をどうすれば開くかざっと確認する。メッキが剥がれ下地の灰色が見えるノブの上に、ゴツゴツとしたロックがあった。決められた数字を設定して解錠できるダイヤル式で、おまけにその数は六桁と、とても簡単には開けることはできそうにない。それだけならまだしも、忌々しいことにロックには専用の鍵穴が横についていて、ダイヤルの数字を合わせて初めてキーを差し込める仕様になっているのだ。

単純な解錠ならお手のものな俺だけども、ここまでのものはさすがに対応できない。専用の道具でもあれば別だが、武田の部下の二人が用意した道具にはそんな大層なものなどなく、連中の持つ鍵を入手する以外に方法はないだろう。他にもなにかないかと鉄扉とその周辺を探っていたところ、扉の向こうから声がした。

「誰だ……誰かいるのか」

思わぬ声に扉の下のあたりに視線をやれば、完全に密閉されていると思っていた鉄扉が、床からほんの二センチと満たない隙間を作っていた。この隙間から、鉄扉を探るこちらの気配を感じたのだろう。ここだけがどうしてこんな作りになっているのかはわからないが、これは好都合だ。

「あんたが桜井義人だな」

「日本人……なのか？　お願いだ、ここから出してくれ」

扉に手をやりながら屈みこんでいった俺の言葉に驚いたのか、桜

井は体を這いつくばせて懇願した。どうして自分の名前が知られているのか疑問に思わなかったのか、それこそ疑問にすべきところだけども、それほど必死だということだ。

「いわれなくても助けてやるさ。依頼主の頼みだしな」

「依頼主だって？　もしかして、社長……渡邉さんが……？」

そういう桜井の言葉じりには感極まったのか、涙ぐむ様子がうかがえる。

「ま、そういうことだ。彼からの依頼で助けにきたってわけさ。さて、ここから助けてやるのはいいとして、問題はここをどうやって開けるかだ。つい今しがた、ここを海賊どもがきたはずだ。連中はあんたの食事係なのか」

「あ、ああ。毎回運んでくる人間は違うが、一応一日三食だしてくれてる。食器を取りにくる係と、運んでくる係と分業しているのかはわからないけど食器を取りにきたから、多分あと十五分か二〇分もすればまた食事を運んでくると思う……」

最後は自信なさげにいう桜井には、もはや時間の感覚などないのだろう。閉じ込められて時間の感覚を失っている人間にとって、唯一そいつをなんとか確認できそうなことといえば、連中の運んでくる三度の飯だけ。精神的に参ってきている男の口から、政志にとって必要らしい重要な情報を得ることはさほど難しいことではない。

鉄扉の閉じている状態からでは、とても食器を桜井に受け渡すことはできない。状況と桜井の言葉とを当てはめて考えれば、連中がここのロックを解錠して桜井に手渡していることは明白だ。いや連中のことだから手渡すというよりも、桜井の前に乱雑に突き出すか置いているかのどちらかだろう。

ともかく、ここで網を張っておきさえすれば、あとは自動的に連中がここにやってきてこの煩わしい鉄扉を開けてくれるというのだ。こいつを利用しない手はない。俺は桜井に黙っておくようにいい、その場を離れて隠れることのできそうな物陰を見つけて隠れた。桜井の言葉が真実ならば、そう長い時間待つ必要はないのだ。

さあ、早くこい……そう心の内で何度もつぶやいていると、鉄扉を離れ時間にして七、八分といったところで桜井の証言通り、男が三人、ざわめき立てる足音を立てながら鉄扉のほうへ向かってきた。狭い通路を海の荒れくれ者三人が一列に並んで歩いているのは、どこか滑稽な感じがする。

「おら、今日の晩飯だ」

物陰に潜む俺という侵入者に気付くこともなく、先頭の男がダイヤル式のロックを開け、真ん中の男が嘲りながら中へ入ると、最後の男が乱暴に桜井の前に投げ捨てるように食器を置く。同時に、金属の耳障りな音が狭い通路に響いた。最初の男はここでは見張り役になるという、中々に徹底した役割分担を行なっているように見える。

だが、所詮は付け焼き刃程度の行動でしかないことは一目瞭然で、こんな状況で見張りなど必要ないと信じきっているからだろう、その役など大して果たしてはいなかった。むしろ、あとの二人とともに鉄扉の前から桜井を蔑んで愉しんでいる様子だ。

俺は、今がチャンスだと踏んで素早く行動に出る。まずは最初にロックを開け、今は見張り役になっている男が標的だ。あらかじめサイレンサーを取り付けておいたため、銃声が響くことはない。俺は通路に出たと同時に銃口を向け、躊躇うことなく引き金を引く。

着弾のショックで一瞬上体を揺らし、壁に体をぶつけながら最初の男が倒れる。後頭部からは少量の血が辺りに飛び散る。中に入った男の一人が、外の様子がおかしいと顔をのぞかせた瞬間に、その顔面めがけてさらにもう一度引き金を引き二人目の男が身をのけぞらせた。

勢い良く開け放たれた鉄扉を押して中へとなだれ込むと、待ち構えていたのか三人目の男がタメの効いた声を漏らしながら襲いかかってくる。

しかし奇襲も虚しく、次の瞬間には俺の鉄拳が男の鼻っ面にめり込んでいた。男が激しく倒れ込み、呻き声をあげる。拳が叩き込ま

れる直前に男の動きが一瞬止まったように思われた結果だ。
男が倒れ込んだところを見ると、それも氷解した。どうやら、桜井が男の足を引っ張っていたらしい。足を掴んだ手が震えながら開かれる。
「なかなかに根性があるじゃないか」
男の奇襲など予想していた俺に手助けなど必要はなかったが、まぁ悪い働きではあるまい。そういって俺は驚く引き笑いを浮かべている桜井に手を差し延べ、震えさせながらも、のろのろと掴んできた手を引いて立ち上がらせる。
「あ、ありがとう」
「こいつも仕事だ」
おもむろに、床に転がっている男をつま先で小突いて正面を向けさせる。その表情は鼻の軟骨が叩き折られた痛みに苦しみ、ダラダラと大量の鼻血が溢れている。この男だけ始末しなかったのは、こいつに桜井の身代わりになってもらうつもりでいたからだ。
俺は桜井に男の身ぐるみを剥いで、着るように命じた。明らかに、汚らしい服を着込むことに嫌悪感を滲ませる表情を見せたが、俺が率先して服の上から始末した男の服を被っていく様子をみて、仕方なしにそれを受け入れる。助けにきた俺がそういうのだから、従うべきだと判断したのだろう。もっとも、嫌でも強制的に着込ませることになんの躊躇いもないが。
饐えた臭いのする小汚いボロを着た俺たちは三人を狭い部屋にほうり込み、ダイヤルの数字を適当にいじくり回して閉じ込めた。連中の持ってきていたキーでもってロックをかければ、合鍵でもない限り外には出られない。鍵がなければ、一生この部屋に閉じ込められっぱなしということになるが、そんなのは知ったことではない。
桜井を連れて来た道を戻り、階段を駆け上がる。とりあえず、連中の行き先ぐらいは知っておきたい。今ここがどこに向かっているのか知っておくのと知らないのとでは、これから先の行動に大きく影響する。なんせ、そいつを知る前に海原に放り出されたのだ。

途中、幾度か船内をうろつく海賊どもに出くわしそうになっては、物陰に隠れてやり過ごす。幸いなことに、連中は村の襲撃に成功したからか祝杯をあげているらしく、かなり泥酔している様子だった。実際、船のいたるところで騒がしい声が聞こえ、先ほどの三人もどことなく酒臭かった。もしかすると日がなアルコール漬けなためにそう思ったけども、今回に限っていえばそうではなかったらしい。

もっとも、一応連中の仲間のお古を着込んでいるので、遠目からならパッと見は見分けることはできないと思われる。実際に一度は通路の反対側から酔っ払いに声をかけられたけれども、適当に相槌を打つだけでなんなく切り抜けられたということも俺たちに自信をつけさせるという結果もあったためだ。

「さっきからどこに向かってるんだい？　逃げるんじゃないのか」

桜井が不安そうに聞いてきた。救出にきたといわれた手前、さっさとこんな場所から逃げ出したいと思うのも仕方ないかもしれない。ましてや拉致された身となれば、なおのことだろう。

「いや、その前に会っておかなきゃぁならない奴がいる」

俺はそう告げ、村に訪れていた武田の部下二人のいっていた行動をとるべく、船長を探して階段を駆け上がる。船長ともなれば行き先くらい知っているはずだ。決めていないにしても、脅して手玉に取れば自分の都合のいい状況にまで持ち込めるかもしれないのだ。

嫌そうな顔を見せつつも素直についてくる桜井は、駆け上がる階段に息をあがらせ、休憩を求める。連中に見つかれば、ただではおかない状況で休憩などとてもできるものではないが、まともに体力やスタミナを作ったことのない桜井を相手にしては仕方ない。俺は三分だけを条件に、階段を昇りきった先にある通路の壁に背をつけて小休止することにした。

「はあ、はあ……あ、あんた、一体なにものなんだ。社長が助けに出したといってたが」

桜井の疑問はもっともといっても差し支えないが、かといっていちいち自分の立場を明かす必要もない。俺は黙って肩をすくめると、

あんたが気にする必要はないとだけ告げて先を促した。
「ま、待ってくれ」
慌ててついてこようとする桜井をなかば無視して、さらに階段をあがる。取り付けられた丸い小窓からは真っ暗な海と空しか見ることはできないけれど、以前の経験から、そろそろ操舵室のある階層にきていてもおかしくない。
そう思っていた矢先、階段をのぼりきった床を踏みしめたところでそれまでとは違う構造になったフロアに出た。目と鼻の先には、立派な鉄扉が薄汚れて、俺たちを迎える。
桜井に、人差し指を口元に立てるしぐさをして見せた俺は、そっと扉の前にまでやってきて聞き耳を立てた。中からは男が三人、なにか話し合っている囁き声が聞こえてくる。無論、こんな今までとは明らかに違う階にいる海賊となれば、船長と幹部連中くらいなものだろう。
俺はボロの裾にしのばせておいたワルサーを取り、緊張で乾いた唇を舐めた。この扉を勢いよく開けて奇襲をかけるのはさほど難しいことではないが、連中の親玉の額をぶち抜くのはよろしくない。判断を誤れば、ここまでの行動が全て水の泡になってしまう。
「いいか。今から俺がここを突破するが、あんたは俺がいいというまで扉の影に隠れておくんだ」
俺にならって、背後にやってきていた桜井に顔を向け小声でいうと、桜井は緊張した面持ちで弱々しく頷いた。ごくりと喉が上下したのも、それを裏付けている。俺がかすかな緊張をほぐすために一呼吸するのを見計らって、桜井は扉の端によって身を細める。
目で頷いた直後、俺は一気に扉を蹴り上げて開く。何事かと思わせる間もなく手前にいた男の胸あたりに弾丸をぶちこむ。向かって奥に位置した男が、すぐにその場を立ち上がって近くの物陰に身を滑らせる。
素早い動きをみせた男こそ、連中の親玉である船長だろう。どことなく他の連中よりは上等に思える恰好をしているのを、一瞬目の

端で追っていた。
　同時に右側にいる人物の動きにも気を配っていた俺は、躊躇うことなく銃口を向けて引き金を引いていた。残念ながらその弾道はずれ、相手の太ももにぶち当たる。だがこれで相手の動きを封じた。そして立て続けにそいつの腕と肩に弾を食い込ませ黙らせる。
　これら一連の行動を一呼吸足らずですませた俺に対して、呻き声すら漏らすこともなく倒れこんだ男は、自分の身に起きたことがまだ把握できずにいるに違いない。問題は最後の男、船長らしい身なりをした男に絞られる。
「さぁ、そこから出てきな。抵抗しないというなら命までは取らない」
　俺はあえて無言を貫き相手の出方を待つが、しかし相手の反応はない。
　馬鹿な野郎だ。見たところ操舵室は、置いてあるのか放っただけなのかわからない物が、ごちゃごちゃと所狭しにある。そんな中を器用に、一瞬で事態を判断し素早く動いた野郎の行動はなかなかに侮れないものはある。ここは野郎にとってテリトリーといっても過言ではないが、それを差し引いても、かなり危機感の予測能力に長けたやつであることに変わりはない。
　いくら待っても逃げ込んだ物陰から出てくる気配のない男を訝しんだ俺は、意を決してゆっくりと移動する。
「糞が。してやられた」
　するとどうだ。奴が飛び込んだ先は、あろうことか抜け道が出来ていたのだ。一人が通り抜けられるかどうかの小さなもので、暗がりの中階段が下に向かって伸びているのが見える。
　俺は思わず舌打ちしていた。馬鹿は俺のほうだ。ここは奴にとってのテリトリーなのだから、こうしたものがあったってなんの不思議もない。阿呆なことにそんな初歩的なことを考えもせず、勝手に相手は袋のネズミだと思い込んでいたのだ。
　しかし幸か不幸か、思わぬ保険もいる。俺は足早に弾丸をぶち込

まれて動けずに倒れている男のところまで歩み寄ると、強引に胸倉をつかみ問い詰める。
「お前らの次の行き先はどこだ」
「し、知らねえよ、俺は、俺は知らねえ」
「あの抜け道はどこに繋がってる」
「し、知らない」
言い切る前に、掴んでいる胸倉を締め上げてやるとすぐに口を開いた。
「本当だ。し、知らないが……」
「知らないが、なんだ」
「多分、ド、ドッグに繋がってると思う……」
まだ何かいおうとした男が声を発する前に、今までなりを潜めていた桜井が顔をのぞかせて叫んだ。その表情は青ざめている。
「大変だ。下から連中が騒ぎながらこっちに向かってきてる」
思わずそちらのほうに目をやると、確かに騒がしくなっている。きっと捕虜である桜井の姿がないことが発覚したのだ。それを聞いて目の前の男が気に入らない薄笑いをあげた。
「これでお前たちは終わりだ。この船には一〇〇人からの船員がいるんだ。どう考えたってお前らに逃げ道なんてあるわけねえぜ」
思わぬ増援に気が強くなったのか、男が憎たらしい嘲りを含んだ口調でいった。俺は舌打ちする代わりに、男の鼻っ面を思い切り殴りつける。
男は呻き声すらあげることなく、潰れた鼻から大量の血を流しながらぐったりとなって頭を垂れる。掴んでいた胸倉を放り出し、桜井に早く来るようにいいつけ、男の逃走経路となった抜け道を使って男を追う。
いや追うというよりも、追わされるといったほうが近いかもしれない。忌々しいが男のいうとおり、確かに今この戦力ではとてもではないが一〇〇人からの海賊を相手になどできない。一刻も早く船から脱出しなくては、こちらが危ないのだ。

桜井を引き連れ、身を細めるように暗い階段を降りていく。階段は足元がよく見えないうえ、思っている以上に勾配がきつくなっているほか、一段一段が高い。しかも、その高さは均等になっていないように感じる。これでは、もし踏み外そうものなら冗談抜きに階段を転げ落ちてしまわないともいい切れないほど、いい加減な作りになっていた。

野郎はその中をいとも簡単に潜り抜けていったということになるが、となるとこちらとしても音を上げるわけにはいかないというものだ。

そんな階段を慎重かつ急いで降りつつも、俺は頭をフル回転させていた。男の話を信じるならこの先はドッグになっているということだけども、なぜ野郎が侵入者である俺のことを何も知ろうとせずに一目散に逃げ出したのか、それだけが妙に気がかりだったのだ。

考えすぎといわれればそれまでかもしれないが奴の動きはまるで、こちらの襲来を予め知っていたかのように思えるのだ。……まさか。そんなことはありえない。そう言い聞かせはするのに、どうしても疑念が晴れずにいる。

なにか俺の知らないところで、別の思惑が動いている気がしてならなかった。理由はわからないが、もしそうだとすれば、この纏わりつくような嫌な感覚の理由にも頷ける。ましてや、元はといえば武田からの任務ということを思えば、それを前提に行動したほうがいざというときのためにもなるだろう。

暗く狭苦しい場所の移動というのは、割合息苦しさを感じるもので、大した時間は経っていないはずでも時間の経過が遅く感じる。実際にこの階段を移動していたのは時間にして、ほんの二、三分といったところがせいぜいだろう。あるいは、もっと短いかもしれない。しかし、追いながら追われるという焦燥感から、その何倍もの時間が経過したように思えてならなかった。

果たして本当にドッグになど繋がっているのか疑問に思い始めたところ、開けた場所にでた。開けたといっても、実際にはただの通

路だが、これまでの道のりを考えれば、はるかに広く感じられる通路だ。通路のずっと先、おそらく出口と思われるドッグから、うっすらと灯りが漏れている。

俺の後ろを桜井が声を出すこともなく、黙って着いてきている気配と音を感じながら通路の向こうへと出た。締め上げてやった男の証言通り、確かにそこはドッグになっているのが薄暗い中でもすぐにわかった。

「一足、遅かったか」

ドッグはもぬけの殻だった。目の前は大口をあけて開け放たれた先は、真っ暗なのに白ずんで見える大海原が広がり、生暖かさを持った潮の風と香りが肌をくすぐっていく。野郎は俺の追跡を逃れ、すでに船から脱出していた後だったのだ。

第９４章（前書き）

二本立て後半です。

第９４章

大海原へと開かれたドッグの扉がかすかな風にさらされ、ぎしぎしと軋ませている。霧の白ずんだ色にドッグ内の空気もなじみ、明かりなど一つもないのに妙に明るく感じて見えた。

しかし、おかげでドッグの全体の様子をおぼろげながらに確認することもできた。この点、夜目の利く俺としては十分すぎるというものではあるが、ドッグというわりに中に船や潜水艇などといった乗り物は一切なかった。開け放たれているドッグの大扉を見れば、船長と思しき男がこれを開けて、自分専用の脱出艇でここから逃げた……状況としてそんなところだろう。

「ど、どういうことだ。船なんて全然ないじゃないか」

暗さに慣れたらしい桜井が、ドッグ内の様子を見て声を震わせる。奴としてはここからの脱出を考えていたのかもしれない。もっとも、そいつは俺も同じだ。だが桜井と違うのは、男が脱出用の乗り物を男そのものの拘束と一緒に奪うことである。似たようなものだと思えるかもしれないが、全くの別だ。男から色々と聞きたいことができた以上、やすやすと脱出だけ、というのはこちらの沽券にかかわる問題なのだ。

けれども桜井の言うとおり、この状況はまずい。乗り物がないだけでなく、それに乗って男そのものも逃げたというこの状況は、今回の作戦について、失敗という二文字がどうにも脳裏にちらついて仕方なかった。もちろん、ただでは失敗しないというのがプロだから、俺も決して最後まで諦めるつもりはないが……。

俺はまだ連中がまだ追ってこないことを幸いとして、一度冷静になって頭を再びフル回転させる。

まず今回の任務について、武田の部下を名乗る二人の男から突然、こんな半ばお粗末といってもいい作戦を伝えられた。政志の情報を

管理しているらしい右腕的存在である、桜井義人に接触を図るためだ。ここまではいい。問題は次だ。俺が作戦のためにベトナムに向かう前後に、都合よく桜井が、都合よく活動を始めた海賊に、都合よく捕まった、ということだ。

もちろん普通に考えれば、俺のような現場工作員に言い渡された任務なのだから、こうした事態が起きないとはいわない。だが今回にいたっては、どうにも不自然な点があるのだ。指定されたベトナムの田舎にまでやってきたところで、何日もの間足止めを食らわされたことからが、まず気になる。

あの二人は桜井が予期せぬ海賊の拉致によって、大幅に予定が変わったというニュアンスの説明をしたが、それがもし狂言だったらどうだ。桜井の拉致は、もしかしたら始めから今回の任務のためにあしらえられた、計画の一部だったのではないのか……そんな考えが浮かんできた。

馬鹿げた話でもあるがこう考えると、これまでの不自然な点がたちどころに解けていくのだ。ベトナムの片田舎で何日も足止めを食らった理由、そんな片田舎の村を急襲した海賊、さらに直前になって接触を図ってきた組織の現地情報員。そう、まるで俺をこの海賊船におびき寄せ、この船に乗せたいがために思えるのだ。

それだけじゃない。先ほどの船長と思しき男の行動にすら納得ができてしまうのだ。もしかしたら、あの男にだけは始めから今回の任務に俺という侵入者が訪れるということを、事前に知らされている可能性すらある。そして、その可能性は大いにある。

これまでの海賊たちは皆、反逆する俺に向かってきたというのに奴だけは、そんな気概すら見せることなく逃げ出した。情けないともとれる行動ではあるが奴が知らされていたなら、この行動の裏づけになるのではないか。証拠も何もあったものではないが。

しかし、この抜本的なところに武田の野郎が絡んでいる以上、むしろこの考えのほうがしっくりくる。理由は知らないが、奴は俺のことを目の敵にしている節がある。もしかすると単に気に食わない

だけなのかもしれないが、ともかく俺に冷戦をしかけてきていることだけは理解している。

（だが……）

それでも解けない点があるのだ。任務自体はこれで納得がいくが、だとすればどうしてわざわざこんな手の込んだ舞台を用意する必要があったのか、この点は決して納得いくものではない。そもそも、ミスター・ベーアとの確執と競争のために俺という駒を用意したはずの武田が、こんな舞台をあつらえる必要などこれっぽっちも必要ないではないのか。

奴はミスター・ベーアの思惑を情報として握っているといってはいたので、単純に俺を始末したいからなどという理由が選択肢から消えたわけではないが、だとしても筋の通っていないことが多すぎる。日本で俺を消すのが面倒だとも考えたがそれはないだろう。警察になんらかの圧力をかけて無罪放免にした奴の権力は確かで、そんな野郎が面倒だからなんて理由で海外で始末をつけようなどと、それこそ面倒なことを実行に移すはずがない。

あるいは、ミスター・ベーアの狙いなんて本当はわからないなんて間抜けでもないだろう。だとすれば狙いを知るために、ますます俺の始末をつけるには時期尚早というもので、今度のようなことを考えるはずがない。

何も知らない一般人なら、証拠がないとこんな陰謀説など鼻で笑うところなのかもしれない。だが、ほんのわずかな違和感を証拠がないなどと馬鹿なことをいっていれば、こんな業界では生き残れない。俺の考えは状況証拠しかなかろうと、ほぼ間違いはないと見るべきだろう。これまでも、状況証拠からも動かぬ証拠が出てきた例などいくらもある。

武田の野郎は俺からしてもなかなかにポーカーフェイスのうまい奴なので、裏を全て読み取ることまではできないかもしれない。それでも、奴が全てを把握しきれているわけでもないというのも、また確かなことだ。つまり、武田とは違う、別の誰かの思惑が見え隠

れしているように思えなくもないのだ。
武田ともミスター・ベーアとも違う、全く別の誰か。これまでのところ、その人物の正体を掴むことはできない。だが、これは一応頭の片隅に留めておいたほうがいい。もしそうだとすれば、これまで武田の仕業ともとれなかった、いくつかの点への理由になるかもしれない。となると……。
「何がなんでも、今ここで死ぬわけにはいかなくなったな」
自然とそう口をついていた。どうにかして今、ここを切り抜けなくてはならなくなった。もちろん、これまでだってただでは死ぬつもりもなければ、そもそも死ぬ気すらなかった俺だ。どうしてこんな場所で死ななくてはならないのか、理由などないだろう。俺は一人力強く頷く。
「言葉の通り、乗りかかった船だ。あんたは必ず助けよう。だが、あらためて俺のいうことには従ってもらうぜ、いいな」
「助かる方法があるのか。ここには船なんて一隻だってないんだぞ」
必死な桜井とは対照的に俺は冷静で、なにもいうことなくニヤリと口を歪める。
「まぁ、脱出用の乗り物についてはあとで考えよう。とりあえず今は俺たちのことを探しているだろう、連中から姿をくらますことだ」
そう告げた俺に桜井は動揺を隠しきれていない様子だ。できることなら俺もここをすぐにでも脱出したいが残念ながら、その手段がない以上、ひとまず姿を消すことが最優先だ。そこでまずドッグ内を改めて見回し、何か使えそうなものがないかを探った。仮にもドッグということで、それらしい道具の一つや二つあるはずだ。
薄暗くはあるが、幸いにも白ずんでいることで目さえ慣れれば、どこに何があるのかくらいはすぐに見分けることができる。そんな折に見つけたのは、おそらくドッグに収められていたと思われる船を固定するためか何かで使われていたらしいロープだった。こいつで何かできることはないか、考えをめぐらしつつ、背負ってきた袋からこのロープに見合った道具はないかどうかも確認する。

袋から出てきたのはおなじみのＧＰＳに、透明なプラスチックのケースに入った鉤が一つ、それにいざというときのためなのかボウガンなんかも出てきた。それらに加え脱出用の予備か、ロープとナイフが三本。これらの道具を見て、すぐにひらめいた。むしろ、これくらいしか使い道がないといってもいい。

ドッグで見つけたロープはざっと見て二〇メートルかそこらの長さがある。まずロープの三分の一あたりで切り、長いほうのロープを鉤の先端とは反対側にある輪になった部分に通して結んだ。それから切り口から一・五メートルほどのあたりに切り落としたロープを力の限り結びつけ、さらに袋に入っていたロープも同様に結んだ。

次にボウガンを手に取ると、セットされてある矢の鏃を取り外し、代わりに今しがた作った簡易の鉤縄を取り付けて固定する。余っているロープはボウガンに絡まないよう流しておく。これで準備はいいだろう。あとは袋からぶちまけた道具を身につけて、結んでおいたロープを手にする。

「こいつはあんたのだ。こうして身体に結ぶんだ」

俺の行動をなにもいわずに黙って見ていた桜井に、持っていたロープのうちの一本を投げてよこす。怪訝に表情をひそめる桜井は、こいつでどうするんだという胸の内の声が聞こえてきそうな顔つきだ。いや、実際にはおおよその予想はついているのだろう。そして、それは当たっていて、俺はボウガンを使って開け放たれた大扉から船の甲板に向かって打ち込むつもりでいるのだ。

桜井に肩をすくめて見せた俺は、もう一本のロープを自分の腹に巻きつけて結んだ。桜井も俺に倣ってロープを身体に巻いて結ぶ。実際のところ、これだけでは少々不安にはなるが贅沢なことはいっていられない。それに桜井に渡したロープは細めではあるが、仮にも船を繋ぐためのものとして機能していたものなのだから、人間の一人や二人くらいの重さには耐えられるはずだ。俺の持ってきていたロープに関しては、すでに実証済みなので問題ない。

さすがに俺たちの通ってきた抜け道に気づいて、海賊どもも後を

追ってきたらしい。ぐずぐずはしていられない。俺は素早く外へと繋がる扉のほうへと移動し、頭を外へ出して真上を向いた。真夜中だというのに、白い霧のせいでやけに色づいて見える空へ向かって手にしているボウガンを向ける。

ボウガンなど訓練のときに使用したとき以来のことなので、まともに扱えるかは神のみぞ知るといった具合だが大丈夫だろう。それに今はそんなことをいっていられる状況でもない。

「やるぜ」

鉤は四股になったもので、うまくいけば甲板の手すりあたりに引っかかるはずだ。そうではなくとも、それなりの場所に引っかかるはず……自分でも行き当たりばったりもいいところだと思うところだが、なんとかなるはずだ。

「ま、待ってくれ。まだ心の――」

準備ができてない。そういおうとした桜井の訴えなど意にせず、ボウガンの引き金を引いた。拳銃などと違い、考えていた以上に重い引き金は、硬さと強さをもった衝撃音を響かせて甲板に向かって飛ぶ。

鉤縄の鏃が甲板に落ちる手応えを感じて、すぐにもロープを大急ぎで引っ張る。すると、あるところでロープがピンと張った。それもグラつきもしない感触から思うに、うまい具合に手すりに引っかかったらしい。

「あんたが先に行け」

「なにを……」

いい終える前に、桜井を引っ張って外へ投げる。情けない悲鳴をあげて桜井が結んでおいたロープにすがるように抱え込むのを見届け、俺も外へ飛び出した。

ロープを巻いてある腹の辺りに引っ張られるような、締めつけられるような強烈な衝撃が襲う。一瞬息が止まったのをこらえ、あらかじめ掴んでおいたロープに力をこめて揺れを和らげていく。

まだ揺れていても、ある程度揺れが収まったところでロープをじ

りじりと昇っていく。しかし、俺一人だけならまだいいが今回は一本のロープに、二本のロープとそれぞれに人間が一人ずつ繋がっている。構造上、二人が息を合わせて昇っていかなければ、巻きつけてあるロープの長さの分までしか昇ることができない。

桜井に着いて昇ってくるよう命じ、甲板を目指してロープを引っ張るようにあがる。細めのロープは掴みやすいというメリットがあるものの、不安定なこの状況では、たったそれだけでは身体にかかる負担はとんでもなく大きい。

確実に甲板にのぼっていた俺の身体が、不意に下に向かって引っ張られる感覚があって下に視線をやった。心配していたことに、桜井が途中でロープを掴んだまま宙を蓑虫よろしく揺れているのが見える。ここから判断するに真下を見てしまい、途端に足がすくんでしまって動けなくなったのかもしれない。高所にいる人間が陥りがちな現象だ。

「下を見るんじゃないっ。上を見るんだっ、上を見ろっ」

檄を飛ばす俺にも反応しないところを見ると、やはりそうだった。耳に入ってきてはいても、それを脳がうまく処理できていないのだ。俺は激しく舌打ちし、せっかく昇ったロープを滑るように降りる。素人には、少しばかしきつい洗礼だったのかもしれない。

桜井のところにまで降りた俺は、こちらがそばまでやってきたというのに放心し気付いてもいない桜井の頬を二度三度はたいて気を保たせた。

「しっかりしろ。下を見るんじゃない。上だけを見るんだ」

「ぇ、あ……」

少しは意識を戻しつつある桜井に、もう一度頬を張って完全に意識を戻してやる。ようやく完全に意識を取り戻した桜井を先にいかせ、俺は後から再度ロープをよじ登っていく。すると、ようやく下を男どもが騒がしくドッグ内に押し寄せてきた声が聞こえた。

その声に反応して一瞬下を見た桜井に、顔を歪めて早く昇れとジェスチャーして見せる。小さく何度も頷く桜井が昇っていくと、桜

井の手が甲板についた。あと少しだ。そう安堵しかけたとき、下から小汚い怒声が響いてきた。最悪なことに連中に見つかってしまったのだ。

「早くあがれっ」

のろのろと甲板の手すりに手をかけて上がろうとしている桜井に叫び、スパートをかけてロープをあがる。先に甲板にあがった桜井は、俺が甲板に手をやったところで引っ張り上げようと腕を掴んで持ち上げる。それに呼応して俺は、全身に渾身の力を籠めて身体を甲板まで押し上げた。

「さぁ、後はここから脱出するんだ」

甲板に腰を落ち着ける間もなく、男を促し結び付けてあるロープをナイフで切ると、船にのぼったところを目指して駆け出した。ここにはほどなくして海賊どもが大挙して押し寄せてくるに決まっているのだ。

脱出艇には、一仕事終えて戻ってきた連中が使っていた小船を使うことに、甲板へ逃げようとしたときに決めていた。こんな海賊船で追ってこられようものなら一たまりもないが幸いにして、今夜は濃霧が出ている。どこまで可能かは知る由もないが、多少の時間稼ぎくらいはできるはずだ。

「こいつだ。こいつに乗って逃げるぞ」

船に上船したときと同じ場所にやってきた俺たちは、奴らが村の襲撃の際に海岸までやってくるのに使ったボートの一つを、機械を使って外へとせり出す。それなりの装備をもっているこの船のことだから、舟を降ろすのに完全に手動というわけではないと踏んでいた俺の予想通り、すぐ脇にクレーンの上下降させるためのボタンがあった。

考える必要もなくそのボタンを押すと、甲板の外へせり出しているボートが徐々に下降し始めた。素早く手すりを乗り越えて、ボートへと飛び移る。俺に続いて桜井も悲鳴を噛み殺しながら飛び移り、ボートが大きく揺れる。続けてボートの後方へと移動し、すぐにで

もエンジンをかけられるようにしておく。
　確実に下降するボートは、上船の際には助かったその下降スピードは心憎いくらいに遅く、水面まであと三、四メートルというところで痺れを切らした俺はモーターのエンジンをつけた。辺りにエンジンがかかって空回りするスクリューの音が響く。同時に、またもや上からその音に気付いたらしい連中の怒声が聞こえた。
　まずい。このまま上昇ボタンを押されようものなら、後一歩というところにまできたのに全てが水の泡になってしまう。俺は瞬時に思いついたことに躊躇いを覚えたものの、ここで奴らに捕まってしまうことほどあってはならないことだと判断し、携帯していたワルサーを抜いてボートの前方と後方にかかっているクレーンのロープに銃口を向ける。
　横にいる桜井はそれこそ何をしているのかと眉をひそめたが俺は、振り落とされないようしっかりとボートを掴んでおけと叫んだ直後、クレーンの吊り縄目がけて弾丸をぶちこむ。
　ボート前方の吊り縄が弾け、真下に向かって船体が九〇度に傾こうとする瞬間に、続けざまに後方の吊り縄を吹き飛ばした。急激に傾いた船体が物理法則に従って大きく揺れながらも、水面へ斜めに落下する。その運動によって身体も同時に落ちて、着水した舟の床に打ちつけてしまう。
　打ちつけた痛みに苦悶の呻き声を噛み殺し、すぐにボートを操縦すべくモーターのところに身を滑らせる。桜井は強く身を打ちつけたのか、背中を押さえて身悶えしている。
　しかし危険を冒した甲斐があったというもので、舟はうまく着水したらしい。低いうねりをあげて水面を進みだしていた。俺はポケットにしまいこんでいたＧＰＳを取り出して、南南西がどちらかを素早く確認する。武田の部下二人は、脱出後は南南西を目指して進めという話をしていたのでそれに従うつもりだ。
　おそらくは、仲間が救出しにくるという算段なのだ。そうでもなければ、こんな海のど真ん中で進むべき方向すらもわからずにさ迷

うことになってしまう。それでは本末転倒というものだろう。

身をかがめつつ船のほうを伺う。数人の怒声が響いた直後、ボートの横に鋭く水面を着弾した音がして焦る。どうやら、事態を早くに察した奴が銃をぶっ放してきたのだ。できることなら、こちらからも応戦したいところだがそれは無理な話で、なんの装備もなしにこんな真夜中の濃霧の中から索敵し倒すことなど不可能だ。

それよりも今は少しでも早くこの水域から離れ、連中から行方をくらますことが先決だろう。逃げ切るチャンスなど、この濃霧が出ている間に限られているのだ。

俺はそう思い、ＧＰＳを頼りにエンジンを横目で流し見る。このモーターでは決して早く進むことはできない。それがどうにも恨めしい気持ちになったのだ。けれども、こちらの有利な点といえば小回りが利くということがあるので、なんとかできないともいえないというのが俺の考えだった。

かすかな期待に応えてくれと心で念じ、再び後ろを振り返ってまだ船が動いていないかを確認する。よし。まだ動いていない。そんなこちらの気持ちに応えたわけでもないのだろうが、ボートはだんだんとスピードをあげ始め、ついには視界から連中の船の姿が消えた。うっすらと、船体の影が見える程度でしかない。

連中も統率がきちんと執れていれば、もっと早く船を動かすこともできたろうが今は、その統率を執るべき人間が不在なのだ。これも少しは時間稼ぎになる。一分一秒でも長く連中を動かさず自分たちが早く移動すること。それに全てがかかっているのである。

背後からしていた海賊たちのざわめく声は、もう聞こえなくなっていた。少しでも時間を稼げればという思惑がかなったのなら、これ以上の功績は望まない。桜井を救出し、船から脱出した後は南南西へ向かって逃れること。たったこれだけの任務を確かに遂行したのだから、ひとまずは良しとすべきだろう。

それに焦燥感に仰がれつつも反面で、俺はなんとかなるような気

もしていたのだ。アバウトなメッセージの裏を返せば、この脱出劇の片棒を担うべく任務を帯びた奴がいてもおかしくはない。船に潜入するために用意された小船などでは、とても連中からの追撃をかわすなどできないことくらい、武田のエージェントたちにだってわかるはずだ。

武田にしても、今回の渡邉政志の背後関係にしても何かを知りたがっている様子だった。となれば、救出に関してあまりにおざなりといわざるを得ない今回の任務に、なんの保険をかけていないはずがない。政志の重要な何かを握っているらしい桜井に死なれては困るはずだから、別の脱出経路があって然るべきだというのが俺の目論見だった。

濃霧の海原にトントンと頼りなげなモーター音が響く。桜井は体をどんもり打ってからというもの、船底に仰向けになったまま両の目元を左手で覆っている。騒がれないだけマシだとは思うが、ここまでただの一言も口を開いていないことを考えると死んでいないだろうかと、つい声をかけていた。

「おい。生きてるかい、桜井」

「ああ、なんとか」

互いに顔を向けることもなくそう口にしていた。桜井の声は、やけに無気力といっていい弱々しいもので、どこか苦しげだった。もしかしたら、先ほどの強制着水で体を打ったとき、どこか打撲ないし骨折したのかもしれない。しかしながら、こちらには今それを心配するつもりなどなく、むしろ好都合だった。

「ところであんた、なぜ海賊なんぞに捕まったんだ」

「知るもんか。シンガポールの港で社長を待っていたら、突然連中に羽おい締めにされて、ボートに乗せられたかと思えば、海の上であんな船の中に閉じ込められたんだ。私のほうこそ理由が知りたいよ」

感情のままに言葉をぶつける桜井の様子からは、状況に嘘をついているようには思えない。つまり、桜井は意図せずそれらを知るこ

とになったと考えるべきなのかもしれない。だとすれば、こちらもやりやすい。

「あんたが社長に間違われたという可能性は」

「ない……と、思う」

「なぜそう思う」

「私を誘拐したのは三人だったんだが、ボートには一人、他にも乗っていて流暢な日本語で連れて行くよう命じた人物がいた。だからそいつに訴えたよ。私は社長じゃないって。それも何度もね」

しかし結果はもうご存知の通りだ。他の連中はスラングがひどくはあったが、確かに英語を喋っていた。流暢な日本語を喋ったというその人物が、取り逃した例の船長である可能性が高い。当然、桜井の叫んだ意味もわかるだろう。

はじめは単なる誘拐かとも思っていた今回の拉致事件だけども、これでますますそれだけではないという疑惑が強くなり、もはや疑惑は確信になりつつある。十中八九、連中は桜井を狙っていたと見ていいだろう。俺が続けた。

「連中は、はじめからあんたを狙っていた、こう考えるのが筋というわけだ」

「はじめからって……私がなにをしたっていうんだよ」

桜井がそう叫んだのを聞き、つい唇の端が吊りあがるのを我慢できなかった。

「単純な話だよ。連中は、社長がシンガポールでなにをしたのか、なにをするためにシンガポールを訪れたのかが知りたいのさ」

俺がそう告げると、同時に桜井はどういう意味だと身を起こした。

「その通りの意味さ。はじめから狙われていたというのなら、それくらいしか理由はないだろうよ、違うか。あんたの社長が行った契約に理由があり、内容を知った連中がそいつ欲しさに狙いやすそうな秘書であるあんたを狙った、どこにでもあるような話じゃぁないか」

くつくつと皮肉げに笑って俺はさらに続けようとしたところ、薄

暗い夜の景色に浮かぶ桜井の訝しむ表情に、声を止め、見つめる先へと視線を向ける。視線の先には、ここにあってはおかしいものがあったのだ。俺はそれを見て、つい言葉を発していた。

「一体どういうことなんだ」

「わ、わからないよ、私に……」

どういうことなのだ。前方に濃霧にうっすらとそのシルエットを浮かばせている船があるのだ。進むにつれ、その全容がわかると、それが嫌な予感のした通り、先ほど脱出したはずの海賊船であることが否応なしに理解することができた。この事実がますます俺を混乱させる。つい、それもほんの一〇分も経っていない時間で、俺たちの後ろにいたはずの船がどうしたって今目の前にいるのか。

下唇を噛みしめる。きっと連中は俺たちが見えなくなった直後に、この海域に先回りした。考えられにくいがそれしか考えられない。考えてみれば不可能な話でもないのだ。この辺りは奴らにとってみれば庭も同然、テリトリーなのだ。こんな濃霧の夜だって、なんらもの珍しいでもない。

急いでモーターを操作し進行方向を変えようと試みるも、無駄だった。さすがの連中も馬鹿ではない。こちらの動きを監視している役の人間がそれを的確に指示し、徐々に船が旋回し始めて進むのを遮ってくる。

（これでは打つ手がない）

こうなってしまえば後はもう海に飛び込むしか手はない。

しかし、それは躊躇われた。俺一人なら問題ないが、桜井も一緒というのがどうにもその気を削いで仕方ない。こいつが真夜中の海で遠泳ができるのか、仮にできたとして海賊連中にとっ捕まりはしないか……そうした様々な思考をめぐらせるだけで、海に飛び込むという選択はすぐに消えた。

かといって、このまま連中に捕まるのも癪だった。どうするか……俺は、ここまで思いの外散発していたワルサーのグリップを握り、最後の手に出るつもりだった。もはや、それくらいしか手は浮かば

なかった。
　今回の任務は失敗……そんな考えたくない言葉が脳裏をよぎる。いや、違う。はじめからこれは仕組まれたものなのだ。武田の奴は俺を危険視していることから、沙弥佳が絡んでいるなどと体のいい餌で釣って、俺を始末しようとしたのだ。きっとそうだ。そうに違いない。
　そのためにわざわざこんな大掛かりな舞台を作ったのも、俺を怪しませないため。性格のひん曲がったあの野郎ならそうしたシナリオもなんのそのだろう。俺を嵌めるためなら、そんなことなどお安い御用なのかもしれない。
「こうなったらもう奴らとやり合うしかないが、ぎりぎりまでは逃げ込めるだけ逃げ込むことにする。あんたはボートの操縦を頼むぜ」
「私は舟の操縦なんてしたことないぞ」
「だったら連中に蜂の巣にされて死ねばいい。俺はそんなのごめんだ。したことあるかないかの問題じゃぁない。やるかやらないかの問題だ」
　顔をぐっと寄せて強くいった俺に、桜井はごくりと生唾を嚥下させ何度も弱々しく頷くと、いそいそと俺から操縦を引き継ぐ。
　近づいた船の上から、先ほども憎たらしい罵声をあげていた奴が再び顔を覗かせていた。うっすらとだがその雰囲気から、勝ち誇った笑みを浮かべているような気がしてならない。
　まずは奴からだと、握ったグリップを今一度握り直して感覚を掴む。銃の飛距離と性能を考えると、ここから上への射撃は、奴の薄汚い面への被弾はせいぜい五分五分といったところだろう。それでも失敗は許されない。
　見たところやつが連中の一応のリーダーとなっているようだから、ここで奴を片付けることができれば、再び逃走の時間がかせげるかもしれない。それだけでも、やってみる価値はあるのだ。
　両者の船体がぶつかる。当然、向こうの船はびくともしない。こちらが横に大きく傾き、動いていたモーターが一瞬中空に持ち上が

って空回りする音がしてすぐにまた水中へ沈む。これにより舟の操縦は困難になり、その場をいたらぬ方向へ進行しようとし始め、それをなんとか制しようとした桜井が操縦幹を掴むが、努力も虚しく結局その場を一回転しただけだ。

奴がこちらの様子を見て嘲りを含んだ口調で周りにいる他の連中にも指示し、捕獲するよう叫ぶ。奴がこちらから視線を外した瞬間、奴の頭部めがけて引き金を引いた。

奴の顔が甲板の向こうに引っ込む。やったか……手応えも今ひとつであることから、奴が頭に風穴をあけて倒れたのか感覚では判断できない。この間にも桜井は舟を立て直そうと必死だ。しかし、その都度、船体のどこかが連中の船にぶち当たり大きく揺れる。

当たっていてくれ。この俺が神頼みにも近い祈りをこめたにも関わらず、野郎は薄汚い面をこちらに現した。なんということだ。弾は奴の頬を掠めただけで、息の根を止めることはかなわなかったらしい。

こうなったらもう自棄だ。再び銃口を向けようとした時、にわかに連中の動きが慌しくなった。野郎もそれに気付いて覗かせていた顔を引っ込める。どうやら、巨大な船を挟んだ反対側で何か起きたようだった。

すると、再び連中がこちらに顔を出して今度は、卑怯だなんだと騒ぎ出した。なんの話だと叫ぶ前に、俺は反射的に銃口を奴の顔面にぴたりと向けて、次の瞬間には引き金を引いていた。薄暗い闇夜の中でも、ぱっと黒いものが散ったのが見えた。今度こそ、確実に奴の息の根を止めることができたはずだ。

それはそれとして、やつらが突然騒ぎ出したのはなんなのか。不思議に思って甲板のほうを見上げたところ、一瞬の静けさの直後に船上が爆発したのだ。

「ひぃ」

俺に釣られて上を見上げていた桜井が反射的に頭を守ろうと、両手を真上にかざす。俺も似たようなものだが、それでも体は正直で、

すでに桜井を押しのけて操縦幹を握ろうと動いていた。爆発によって連中の船が揺れている。その振動がこちらにも伝わってくる。

とにかくこれはチャンスだ。俺はなかなか言うことを聞かない操縦幹に喚きちらすと、意を受けてか、ボートはようやく思うように水面を滑り出した。まだ連中は動き出していない。

先端へ向かって船底を沿うようにボートは動き、先端を過ぎたところで一気に旋回させ反対側へと出る。一体なにがあったのか、どうしても知っておきたかったのだ。袋小路になっていた状況を破った”それ”を見ずにはいられない、野次馬根性もあったかもしれないが。

目測で、およそ四、五〇メートルといったところだろうか。そこに、なにか水中作業船らしい影があり、そこから火花を散らして何かが発射される。

発射されたものが巨大な船の横っ面にぶち当たって弾け、黄色や橙の炎を巻き上げる。ロケットランチャーだ。そう思ってその様子を見つめていたところ、再び作業船からランチャーの弾が発射され、今度は連中の操舵室の辺りにぶち当たり、再び爆音をあげる。

何者かは知らないが、間違いなく俺たちを助けてくれている。それだけは信じてもよさそうだ。急ぎボートを作業船へ向かわせる。頼りないエンジン音が馬力いっぱいいっぱいに、少しでも俺たちを届けようと踏ん張る。その間も、二発三発とロケットランチャーの弾が発射され、次々に爆音をあげながら炸裂し船を炎上させていく。

これではもう連中も反撃のしようもないだろう。見れば、船体の横っ面に開いた穴から海水が流れていっているのも確認できた。生き延びることができるとすれば、連中も反対側の海へ逃げ出すしかない。もう俺たちを追うことなどできないだろう。

ようやく作業船の横にボートをつけることができた。すると、そこで発射され炸裂していた爆発音も消え、すぐに中から思いがけもしない人物の顔が現れる。俺は現れた人物の顔を見て、思わず凝視した。女だ。しかし薄暗かろうが、その女の顔を間違うはずがない。

「お、お前……なんでここに」
「それよりも早くこっちにきなさい。逃げるわ」
――藤原真紀。窮地を救ってくれたのは、相も変わらず憎たらしい口の利き方をした小生意気な女、あの藤原真紀だったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0910h/

いつか見た夢

2011年10月29日21時18分発行